

ロビーの冒険

ゼルダ・エルリッチ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファンタジー世界アークランドを舞台とした、おおかみ種族のロビーとひつじ種族のライアンの友情をメインとした物語です。

世界の救世主であることを告げられたロビーが旅に出発し、2つの大国の大戦をからめながら、悪の魔法使いアーズと対決するまでの冒険を描きます。

全30章、単行本サイズで1800ページに渡る長編ですので、様子を見ながら1章ずつ掲載していきたいと思います。

子供たちに、人としての在り方と、成長を促すための物語です。ぜひ、多くの人に読んでもらいたいと思います。

まずは第1章、「かなしみの森のおおかみ」から。
ゆっくりと、少しずつ、聞いていってくださいね。

目次

1、	かなしみの森のおおかみ	1
2、	騎乗の旅立ち	37
3、	セイレン大橋	69
4、	あらしの夜の出会い	114
5、	シープロンド	150
6、	進むべき道	178
7、	オーリンたちのむかしのなごり	223
8、	はぐくみの森の子ぎつね	257
9、	夜の底	295
10、	ゆうれい都市モーグ	339
11、	おぼけのまちでおるすばん	383
12、	カルモトさがし	425
13、	木の塔とブリキの塔	464
14、	たましいかいほうボタン	507
15、	ベーカーランドへいつちよくせん	553
16、	エリル・シャンディーン	592
17、	明かされたしんじつ	639
18、	ノランベつどう隊まいる	681
19、	リズのおうちへいつちよくせん	734
20、	黒の軍勢きたる	774
21、	アップルキントのラググリーン	825
22、	それぞれのむかうさき	870
23、	精霊王のふしぎのくに	923
24、	ほんとうの強さ	974

25、背中に乗ってもういちど

26、なまり色の空の下

27、人の心

28、戦いのゆくえ

29、けっちやくのとき

30、つづくみらいへ

1、かなしみの森のおおかみ

あなたたちの世界から、どのくらいねん月と場所が、はなれているのか？ 著者のわたしにもわかりませんが、おとぎのくにというものは、たしかにそんざいしているのです。

そこでは、わたしたちの見たこともない木々がしげり、ふしぎな実がえだいっぱいにみのり、住人である動物たちは、それぞれすばらしい社会をきずいています。かれらは、おたがいにささえあい、助けあいながら、人間も犬もねこも、鳥もうさぎも、きつねもくまも、みんな、自由な暮らしを送っていたのです。

ですが、動物の種族の住人たち、それは、おとぎのくにに住んでいるさまざまな生きものたちの、ほんの一部にすぎませんでした。住人の中には、(そしてこれが、おとぎのくにのすばらしいところなのです) こちらの世界に住んでいるわたしたちにとって、とてもきみようにうつるすがたかたちをしている者たちも、たくさんいたのです。

どんな住人たちが住んでいるのか？ そうぞう力ゆたかな読者のみなさんでしたら、わたしなんかよりも、もっとたくさん、ふしぎで、みりよく的で、おかしな住人たちを思い浮かべることができるとしようが、とにかく、その一部をあげてみるだけでも、全身が色とりどりのもみじの葉っぱでできた、森のため。身長が一フィートほどしかない、小人の種族。つめもののされた、生きているぬいぐるみ。空飛ぶねこの種族。岩でできた、巨大な顔だけの種族。などなど、じつにたくさんで、にぎやかな種族の者たちが、このおとぎのくにには住んでいました。

さてさて、物語は、そんな世界からはじまるのです。

このおとぎのくにの、ずっと北の果てに、かなしみの森とよばれる暗い森がありました。そこに住んでいる生きものたちは、みんな、かなしげな顔をいつもしていたのです。かなしみを持った者たちがこの森に集まってきたのか？ この森にきたからかなしくなったのか

？ 今ではぜんぜんわかりません。じつさい、この森に住んでいる者たちでさえ、なぜ、自分がこんなにもかなしいのかは、説明できないことでしょう。しかし、いくらかなしいといっても、それは、朝からばんまで、ずっと、なげき、かなしんでいたほどの、強いかなしみではなくて（もしそんなだったら、だれもこの森には住んでいないでしょう！）、ほかのくにの人々と同じように、森の住人たちは、それなりに、へいわな暮らしを送っていたのです（もちろん、歌っておどつてというぐあいにはいかないでしょうけど）。

そんなかなしみの森に、ひとりのおおかみが住んでいました。おおかみは、このかなしみの森の中でもいちばんとっていいくらいに、かなしげな目をしていました。いつもひとりぼっちで、森のはずれにあつてすみかにしているほらあなから、めつたに出かけることもありませんでした。ですから、森の住人たちも、めつたに、このおおかみのすがたを見ることはなかったのです。ただひとり、森でゆいいつの、「ぎっか屋および食りよう品店」の店主、あなぐまのスネイル・ミンドマンだけが、文ぼうぐや食りよう品など（お茶や砂糖やコーンビーフなどでした）をときどき買いにくるおおかみと、会話をしたことがありました。それでも、しはらいのときにおこなう、すこしばかりのあいさつでしかありませんでした。

そんなふうでしたから、住人たちは、このおおかみについて、さまざまなうわさ話を立てたのです。このおとぎのくにはちがう世界からまよいこんできた、旅人なのだとか、遠い南のやばんなくにからついでほうされた、けものの軍隊のうちのひとりなのだとか、あることないこと、つぎつぎに、うわさが飛び出していききました。けれども、住人たちにとっての問題はただひとつ。このおおかみが、敵か味方か？ ということにつきたのです。

なにしろ、このかなしみの森には、おおかみがいい、強くてこわそうな住人は住んでいませんでした。うさぎやたぬき、あなぐま、しかし、りす、ビーバーに、あらいくま、そのほか。とにかくかれらは、ひっそりとおだやかに暮らすことを好む者たちでした。ですから、もし、おおかみが悪いやつであったとしたら、自分たちのせいかがあやぶ

まれるのです。今は、なんのひがいもほうこくされていませんでしたが、いつなんどき、さいしよのぎせい者があらわれても、おかしくな
いわけでした。

ですけど、だからとはいえ、森の住人たちは、このおおかみを森から追いはらったりするようなことは、しませんでした。悪いやつだときまったわけではなかったし、今のだんかいでは、森の住人のひとりとして、受け入れるほかはなかったのです。それに、もし追い出した
りなんかしたら、おおかみがかわいそうだという意見も、すくなくからず
ありました（こわがりなばかりに、おおかみのことを遠ざけてしまっ
てはいたものの、住人たちは、ほんとうは、心やさしい人たちばかり
だったのです）。

さて、おおかみ自身はといいますと、これは、多くの住人たちのおくそくとはうらはらに、とてももの静かで、おちついた、しんしであつたのです。加えて、とてもやさしく、だれよりもへいわを好むおだやかな心を持っていて、そのうえ、けんきよでした。おおかみがあまり出
かけなかつたのも、じつは、自分のせいでみんなをこわがらせてしま
うことを、おそれてのことからだったのです。

このおおかみの生い立ちについては、これからの物語の中で、すこ
しずつ語られていくことになります。だいじなことは、このおおかみが、
まだずつと小さかつたころに仲間のもとからはなれ、そしてあるとき
から、ひとり、この森で暮らしはじめたということでした。

とはいえ、おおかみは、そんなにとしを取っていたというわけでは
ありませんでした。からだも大きく、するどいきばも生えておりまし
たので、としより大人に見えてしまうこともありましたが、みなさん
の世界のねんれいでいえば、まだ十五さいくらいの、少年だったの
で（ちよつと、いがいですわね！）。

はつきりとしたねんれいは、かれにしかわからないでしょうし、ひ
よつとすると、かれ自身、わからないのかもしれない。ただひとつ
いえることは、かれがまだまだ、弱さやもろさをその心の内がわに
持っている、子どもなのだということでした。かなしみの森のはずれ
の、暗くてさびしいほらあなの中で、かれは、なんともなんとも、ひ

とりぼつちのかなしみにうちひしがれていたのです。

これは、かれくらのねんれいの少年には、どんなにかつらかったことでしょうか。ですけど住人たちは、みな、おおかみがそんなところあるとは、ぜんぜん知りませんでしたし、そもそも、おおかみという種族のことも、よく知らなかったのです。ですから住人たちは、おおかみの、大きなからだや、するどいきば、そんなところばかりを見て、とても強くてこわいという、イメージを作り上げてしまっていました（そのうえおおかみは、いつも、黒のズボンに黒のシャツを着て、黒のマフラーまでしておりましたから、なおさらこわそうに見えたのです。ほんとうは、黒い服しか持っていなかっただけなのですが……）。

ところで、いつまでもおおかみのまんまじや、みなさんも、そっけなく感じると思いますので、このあたりで、かれを、その名まえでよんであげたいと思います。かれの名まえは、ロビーといいました。小さかったころのかれのきおくは、ほとんど残っていませんでしたが、この自分のロビーという名まえだけは、はつきりとおぼえていたのです。ロビーは、この自分の名まえを、とても気にいつていました。そして、とても、ほこりに思っていたのです。しかし、かなしみの森には、かれの名まえを知る者は、ただのひとりもいませんでした。それもそのはず。かれは、人とおしゃべりをするどころか、めったに人とさえ会わなかったんですから、とうぜんのことなのです（なにしろ、自分の家のほらあなにさえ、ひようさつを出していませんでした。すから。これはつまり、だれもかれの家をおとずれてくる者が、いなかったからなのです。ぎつか屋のスネイルだって、このお客さんの名まえは知りませんでした）。

だれにも、名まえすら知ってもらえていない。それは、ロビーにとつて、とてもつらいことでした。とてもかなしいことでした。ロビーは、できることなら、みんなとお話して、なかよくしたいといつも思っていました。自分のせいで、森のへいわがみだれるようなことがあってはならないと、ぐっところえていたのです。だれもたずねてくることのない、森のはずれの暗いほらあなに、いつもひとりでしたとき。ロビーはさびしくなりました。

このほらあなに、たくさんの友だちをよんで、パーティーができた
ら、どんなにかすてきだろうな。ロビーはいつも、そう思っていました。
そしてそれが、かなえられない願いだとわかっておりましたか
ら、かなしみは、よけいに、大きなものとなったのです。

しかしロビーは、いつもかなしんでばかりで日々をすごしていたわ
けでは、ありませんでした（そんな毎日じゃ、ぜんぜん楽しくありま
せんもの）。ロビーには、とても大きな、のぞみがあったのです。

そののぞみとは、「姓」を受けつぐことでした（せいとは、みょうじ
のことです）。ロビーは、こののぞみをぜったいに果たしてやろうと、
ちかいを立てていたのです。みなさんは、まだ、ごぞんじないことか
と思われませんが、この世界のおおかみ種族の者たちは、みょうじをと
ても、ほこりに思うのでした。どんなおおかみの家にも、りっぱな
みょうじがあつて、それは代々、受けつがれてゆくものだったのです。
もしもだれかに、自分の家のみょうじをぶじよくされれば、おおかみ
たちは、いのちをかけてでも、みずからのほこりと、そのそんげんを、
守ろうとします。そのくらい、それは、だいじなものでした（わたし
たちの世界でいえば、ちょうど、きぞくのほこりのようなものでし
た）。

さきほど申しました通り、ロビーは、おさなくして、家族とはなれ
ばなれになつてしまつておりましたので、自分のみょうじをおぼえて
いませんでした。ゆいいつ、ロビーという名まえだけを、おぼえてい
たのです。もちろん、このロビーという名まえだつて、じゅうぶんに、
りっぱでほこらしいものだと、かれは思っていました。やはり、自
分の血すじをあからしめる、姓というものは、それ以上に重要なもの
でした。ですからロビーにとって、これは、たいへんな問題だったの
です。成人になつたおおかみは、成人しきのおいわいの日に、はじめ
て、自分の家の姓を正式に受けつぎます。これは、いちにんまえに
なつて、血すじを守るべき者としてふさわしいとみとめられた、あか
しでもあるのでした。それが、自分には、かなわなかつたのです。

ロビーは、そのことをいつも、かなしんでいました。ロビーは、お
おかみ種族の者の中でも、とくに、ほこりをそんちようする人でした

から、その気持ちは、痛いほど、かれの心をしめつけたのです。ロビーにとつて、こののぞみは、ぜったいに果たしてやろうとちかうのに、じゅうぶんなのぞみでした。

そしてロビーは、もう、待つことはできなくなっていました。ひそかにこの森を去り、みずからのそののぞみを、たつするため(たとえば、せいこうののぞみがわずかであったとしても)、旅に出ることをけっしんしていたのです。

旅に出る。旅に！ 思いこがれ、あこがれつづけた旅です。自分を取りもどす、自分を自分とするための旅なのです。

かれは、ずいぶん成長しました。はじめてこの森にやってきたときのかれは、今ほど、からだがじょうぶでもなかったし、大きくもなかったのです。ロビーにとつて森のそとは、危険な未知の世界であるといえました。まだ小さかったころ、自分がどうやって、このそとの世界を越えてきたものか？ ロビーにはけんとうもつきませんでした。きおくはつぎはぎにしか残ってなく、はつきりと思い出せるものは、ほとんどありません。河がありました。大きな河が。そして、高くてけわしい山々。それがどこなのか？ まったくわかりません。そしてロビーは、そのときは、ひとりではなかったように思うのです。自分のそばには、自分と同じ、おおかみ種族の者たちがいたように思います。なんんくらいいたのかまでは、わかりません。二、三人でしょうか？ それとも、もっとたくさんいたのかもしれない。みんな、馬に乗って……。そう、馬です。ロビーはそのとき、馬に乗っていました。大きな広い背中にゆられながら、どこか遠くのくにを、進んでいたようなのです。自分のうしろには、大きな男の人がひとり、自分のことを守るように乗っていました。そして、その男の人が、自分のことを、こうよんだのです。ロビーと。

その人は、ロビーのお父さんなのでしょうか？ しんせきかもしれない。それとも、ただの知りあいなのでしょうか？ そのすがたも、もはや、影のようなえいぞうにしか、ロビーのきおくの中にはうつりませんでした。

こうしてロビーは、それらのわずかな思いでのことをたよりに、こ

の森を出ていこうとしていたのです。それらは、旅の手がかりとしては、まったくぼしいものでした。ですから、ロビーにとつてこの旅は、大きな冒険であったのです。なにが待ち受けているのかも、まったくわかりません。そして、じつさいこのころ。このおとぎのくには、未知なるきょうふに、おびやかされていました。なにかがくらくらやみの中を動いているのが、このかなしみの森の中にまで、伝わってくるのが感じられました。それがなんであるのかは、住人たちにも、ロビーにも、まったくわかりませんでした。しかし、それは、たしかにそんざいしているのです。なにか、よからぬことが、このくにに起こりはじめているということでした。もしかしたら、もうすでに、ひどいことになっているのかもしれない。ですからロビーは、自分の目で、そのしよたいをつきとめたいとも思っていました。そしてその中で、自分にも、みんなのために、なにかできることがあるかもしれない。ロビーは、このかなしみの森の、暗いほらあなの中で、日に日に、その思いをつのらせていったのです。

そしてついに、その日は、やってきました。それは、冬も近い、ある秋の日のことでした。ロビーが、旅への出発にむけて、さいごのあとかたづけをはじめていたころです。夕方でした。かなしみの森のかなしみの力が、もっとも強くはたらく時間でした。

ロビーが自分のほらあなの入り口で、わきに作られたそこから、だんろに使う、まきを、はごぼうとしていたときのことです。つめたい北風が吹きすさび、なにかのさけび声のようなひびきが、空の上高くから、きこえてきたように思えました。ロビーは、まきをかかえながら、空を見上げました。夕暮れにそまった空が、あるだけでした。それは、とてもきれいで、そしてまた、おそろしげでもありません。

ふたたび、しせんを森の中にむけてみますと、ずっとむこうの方から、なにか、地面がゆれているかのような音がきこえてきました。そしてそれは、だんだんと、こちらの方へ、むかってきているようだったのです！ ロビーは、背すじがぶるつとしました。寒さと、そして、すくなくからずのきょうふのためでした。

そうしているうちにも、音はますます近づいてきて、やがてあるときから、それは、馬のひづめの音なのだ、わかったのです！ ロビーはびっくりしました。遠いきおくの中の、馬の思いでが、よみがえってきたのです。まさか、この森の中で、ふたたびそれをきくことになろうとは、まったくもって、思ってもいませんでした。住人のだれひとりとして、これまでいちどだって、この森の中で、馬のかける音をきいたことなんて、なかったはずなのです。

ロビーは大あわてで、自分のほらあなにかけこみました。とつぜん、思いもよらないものがこちらへせまってくるかわかったら、だれだって、身をかくそうとするはずです。ロビーもそうしました。入り口の古びた木のとびらをびったりとしめて、ロビーは、こうしのはまったげんかんわきのまどから、そーっと、そとをのぞいてみました。うすくもったガラスまどのむこうに、三頭の馬たちが立ちつくしていました！ みな、荒々しい息使いをしていて、つかれているようです。ずっと遠くから、休みなしにかけてきたような感じでした。馬たちのうちの二頭は、はい色で、もう一頭は白い馬でした。これらの馬たちは、とてもりっぱなかぎりのついた、くらを乗せていました。そして、それらすべてのことよりも、まっさきに注意のそそがれるものが、そのくらの上にまたがっていたのです。

おおかみです！ おおかみがふたり、それぞれのはい色の馬の背に乗っていたのです！

かれらは、かれらの馬と同じくらい、りっぱな服そうをしています。美しいししゅうのされた、はい色のジャケットを着ていて、腰には、ぴかぴかかがやく、銀色のベルトをまいてあります。白いマントをなびかせて、そしてそのマントの下に、ちらちらと、腰におびた剣が見えかくれしていました。さらに、ジャケットの下には、これまたみごとな、銀色のくさりかたびらを着こんでいたのです。

かれらが、どこかのくにのゆうかな騎士たちであるのだということは、ロビーにもすぐにわかりました。顔立ちもりっぱで、どうどう

としています。ですがその顔は、なにか、深い心配ごとがあるかのよう
うに、くもつても見えませんでした。そしてこれは、重要なことですが、か
れらのかみの毛としっぽの毛の色は、ロビーのような黒ではなくて、
はい色でした。それは、はい色といっても、暗いはい色ではなくて、全
体に光を放っているかのような、つやつやとした、明るいはい色だっ
たのです。

そして、もう一頭の白い馬には、白く美しい服を着て、白のマント
をひらめかせた、ひつじの種族の者がひとり、乗っていました。ロ
ビーは、ひつじというものを本などで読んで知っていました。ロ
ビーは、ほんものを見たのは、これがはじめてでした(すくなくとも、か
れのきおくの中でははじめてでした)。そのひつじは、おおかみたち
にくらべたら、だいぶ小がらで、はだの色はすき通るように白く、か
みの毛は、ふわふわさらりん。風にそよぐ、美しい銀色のかみでした。
腰にまいた茶色のベルトには、おおかみたちのものにくらべれば、こ
れまただいぶ小がらでしたが、小さな短剣がさしてあります。見たと
ころ、男のようでしたが、とても美しい顔立ちをしているため、はっ
きりしません。ですが、ねんれいは、ほかのふたりよりも、ずっと若
いようでした。

こういったものを、ロビーは、自分のほらあなの、その小さなまど
から見たのです(見れば、ぱっとすぐにわかることを、文章で書く
というのは、けっこうたいへんです)。そしてかれらは、馬をせいしてお
となしくさせると、さっと身をひるがえして、馬の背から地面におり
立ちました。それから、なんてこと！ このほらあなの入り口に、
やってくるようだったのです！ ロビーはなんだか、こわくなつてし
まいました。今までだれひとりとして、この自分のほらあなにやって
くる者などなかったのです。そのうえそれが、馬に乗ってやってき
た、よろいや剣に身をかためた、おおかみの騎士たち(とひつじ)だ
なんて、いったいだれが、よきできたことでしょう。

ですがロビーは、こわがるのと同時に、強いこうき心をもおぼえた
のです。自分と同じおおかみ！ 自分を知ることを知る、ぜっこうのきか
いであるかもしれせん。しかしながら、そんなことに気をまわすよ

ゆうは、今のロビーにはありませんでした。ひよつとしたらかれらは、自分に害をなすためにやってきた、悪者たちであるかもしれないなかつたのです。ちょうど、かなしみの森の住人たちが、ほかならぬロビーに対して、そう感じていたのと同じように。ロビーはおそれました。

なに者なんだろう？ なにをしに、このぼくのところまでやってきたんだろう？ ロビーはとてもきんちようしてきました。手には、あせがにじんでおります。ほらあなの中は、そんなロビーの胸の中とはたいしように、しんと静まりかえっていました。自分のしんぞうの音だけが、大おんきよこのだまとなって、ロビーのからだの中にならずんとひびき渡っていました。

そしてついに、かれらが、げんかんのそのとびらの前までやってきたのです。

どん！ どん！ どん！

とびらがたたかれました。おおかみのうちのひとり、とびらをノックしたのです。ロビーはすっかりこわくなって、床にちぢこまってしまいました。げんかんのとびらが、まるでおそろしいかいぶつであるかのように、ロビーには感じられたのです。

どん！ どん！ どん！

ふたたび、とびらがたたかれます。ロビーは勇気を出して、それにこたえるべく、とびらに近づきました。

そのとき。とびらのそこから、よくひびくたくましい声が、ロビーのことをよばわたたのです。

「北のくにおおかみどの！ お目通り願いたい！ われらは、南のくにのおおかみです！ あなたにぜひにも、お願いがあつてまいつたのです！」

ロビーはとてもおどろきました！ なんとかかれらは、自分のことを

知っているようだったのです（そしてどうやら、かれらが悪い人たちではなさそうだったので、ロビーはすこしだけ、ほっとしました）。

そうしているうちに、ふたたび同じ声がひびき渡りました。

「お目通り願いたい！ いらっしやることはぞんじております。われらに力を、ぜひにも、お分け与えください！」

それから、すこしあいだをおいて、さらに大きく声がひびきました。

「お目通りをー！」

そしてついに、ロビーは意をけっして、そのげんかんとびらに手をかけたのです。大きな木のとびらが、ゆつくりと内がわにひらきまします。そして、そのすぐそとに。さきほどロビーが目になりました、ふたりのおおかみたちと、もうひとり、白いひつじの種族の者が立っていました。さきほどは、はつきりと顔を見られませんが、近くで見ると、やはり、このひつじの種族の者が美しく気品のある顔立ちをしていたということが、よくわかりました。そしてやっぱり、このひつじは男せいです。それでやっぱりとしては若く、まだロビーと同じくらいのおねんれいであるかのようにでした。

おおかみの騎士たちが、ロビーに深々とおじぎをしました。右手が胸にあわされ、ロビーはあとで知ったことですが、これは南のくにおおかみたちの、敬礼にあたるものでした（ふたりのうしろでは、ひつじの少年が同じようにおじぎをしておりましたが、これはひかえめでした）。

まず、さいしよのおおかみの騎士が口をひらきました（この騎士は、もうひとりの騎士よりも年上で、この三人のうちのまとめやくといった感じでした）。

「おはつにお目にかかります、北のくにのおおかみどの。そして、お目通り、心よりかんしゃいたしますぞ。」

ふたり目のおおかみも、同じくかんしゃの気持ちをあらわしながらいいました。

「お目通りかんしゃいたします、北の同ほうよ。お会いできてなによりでした。」（どうほうというのは、祖国を同じくする、家族のような仲間のことをさす言葉です。）

そして、さいしよのおおかみが、ふたたび口をひらきました。

「われらは、南の地、ベーカールランドよりの使者であります。わたくしは、王の騎兵師団にぞくしております、ベルグエルムと申す者。メルサル家です。」

ふたり目も同じく、じこしようかいをします。

「同じく、フェリアルと申します。ムーブランド家の長子です。」
(ちようしとは長男のことです。)

そして、ベルグエルムがうしろをさししめし、残るひつじの少年のことをしようかいしました。

「これなるは、ひつじのくに、シープロンドよりつかわされました、ライアン・スタツカートであります。」

おおかみたちのうしろから、ひつじの少年が進み出て、ちよこんとおじぎをしました。

「やっとお会いできました。ぼくはライアンといいます。このかなしみの森から南東にくだった地。うつしみ谷のすその白きひつじたちのくに、シープロンドより、あなたをおむかえにあがるべく、やってきたしだいです。ぼくらはあなたを、ずっとさがしていたのです。つまり、北の地にたったひとりだけの、黒のウルファを。そして、いい伝えはほんとうでした。ついにぼくらは、あなたを見つけることができましたんだもの。」

いい伝え？ たったひとりの黒のウルファ？ このおかしならい客たちのことを前にして、ロビーはすっかり、こんらんしてしまいました。それで、わけもわからず、話の内ようもつかめなままに、この三人のことを、自分のほらあなの中へとまねきいれてしまったのです。思わず、気がどうてんして、騎士たちの言葉使いのいりまじった、おかしなへんじまでしてしまつて。

「こていねいなるじこしようかい、きようしゆくのいたりにございます。ぼくは、ロビーと申しました。さあ、長旅で、さぞやおつかれのことでしょうから、こんなきたないほらあなで、たいへん失礼かとぞんじますですが、どうぞ、お上がりくださればとぞんじます。」

ベルグエルムがいちれいをして、そのロビーの言葉にこたえまし

た。

「これは、まことにかたじけない！」

それから、ライアンを先頭に、ベルグエルム、フェリアルとつづいて、げんかんにつながっていた居間の、木の長テーブルに、三人は腰をおろしたのです（この長テーブルは、ロビーが住みついたこのほらあなに、もともとあったものでした。ロビーひとりで使うのには大きすぎましたが、これでようやく、ほんらいのやくめを果たしてくれたわけです）。いつぼうロビーはといいますと、とつぜんのらい客にすっかりあたふたして、だいどころをかけまわっていました。なにしろ、お茶のじゅんびをしようにも、まったくなんの用意もしていなかったのです。大急ぎでお湯をわかし（居間のだんろの火に鉄のやかんをかけ、さつきそとから持ってきたまきを全部くべました）、お茶をそそぐカップをさがしましたが、ティーカップはふたつしか、だいどころにはありませんでした。あとは、大きな木せいのジョッキがひとつあるだけで（これは、ロビーがいつも自分用に使っているものでした）、そのほかでなんとか、かわりになりそうなものはいえ、底のわりと深い、スープ用のおわんしか、ここにはなかったのです。

ですけど、ほかにしようがありませんでしたので、ロビーはライアンとフェリアルにはティーカップを、ベルグエルムには木のジョッキを、そして自分用には、（いちばんみっともない）スープ用のおわんを、使いました。そしてなにか、お茶菓子をさがしましたが、これもまったく、まともなものはなく、なんとか食べ残して取ってあった、はちみつがけのポップコーンをすこしと、かんそうしたくだもの（ほしぶどうとほしたプラムでした）を、ほんのわずか、お皿に取って出すことができたのです。

こうしてじゅんびがすすみますと、ロビーは自分もテーブルについて、三人とならびましたが、とたんにとても、はずかしくなってしまうました。それもそのはずです。テーブルについている三人を見てみますと、三人ともみんな、りっぱないで立ちで、とても品かくのあるお客さんでありましたのに、そのテーブルに乗っているものときた

ら、カップはぼらぼら、お菓子はさんざん。しかも、なんのかざり気もありません。ロビーはすっかり赤くなって、いすにちぢこまってしまいました。

「ほんとうにはずかしいです。こんなものしか用意できずに……。みなさん、どうかゆるしてください。」

ですが、ベルグエルムはまったく気にもしていないようすで、与えられた木のジョッキから、おいしそうにお茶を飲み、お菓子をいただきました（見れば、みんな同じく、よろこんでお茶をごちそうになっているようでした。ライアンなどは、あつというまにお茶を飲んでしまつて、「すいませんが、おかわりを。」といったくらいです）。

「なにをおっしゃいますかロビーどの。どうか、お気づかいなさらないでください。とつぜんにおしかけたわれらこそ、あなたにおゆるしを願わなければならぬ方です。お心くばり、まことにきょうしゆくです。われら一同、心よりかんしゃいたします。」

ベルグエルムは、そういつて、右手を胸においていちれいしました。フェリアルとライアンも、それにならいます。

こうして、このおかしなお茶会は進んでいきました。

しばらくのあいだ、一同はおしだまつてお茶を飲み、お菓子をつついでいましたが、それも、わずかばかりの時間でしかありませんでした。つまり、お皿のお菓子は、もうすっかり底をついてしまいましたし、お茶の葉っぱも、そんなに多くは残っていないなかつたのです。しかし、そんな問題よりも、もうひとつのべつの問題の方が、このお茶会にひとまずのまくをおろすために、がんばっていました。その問題とは、つまり、ロビーのきょうみとぎもん、その気持ち、どんとんと、大きくなつていったということ。ほくをさがしていただつて？ いったいなんのために？ それに、さつきいつていた、いい伝えつて？ それらのぎもんは、まだ、なにひとつ、あきらかにされていませんでしたから。

そして、がまんができずに、ロビーが口をひらこうとした、まさにそのとき。ベルグエルムが、この静けさにつつまれた空気を、ふいに

破りました。

「ロビーどのが気にかけていらつしやることは、まったくとうぜんのことです。話を切り出せずにおりましたことを、どうぞおゆるしください。あまりに長く、しんごくな話のゆえ、どこからお話ししてよいものか？ そのことを考えておりました。ロビーどのがおゆるしくくださるのであれば、そろそろ、わたくしどものことを、語らせていただきたくぞんじます。」

もちろんのこと、ロビーはその申しいを、よろこんで受け入れたのです。

「もちろんですとも！ ぜひ教えてください！ ぼくは、あなたたちのことが、気になってしかたありません。どうして、こんなぼくのところまで、はるばるやってきたんですか？ いい伝えって？ 黒のウルファって？ 教えてください！」

ロビーはすっかりこうふんして、さつきまでの話し方（この南のくにのりっぱな騎士たちのような、ていねいでおちついた話し方です）から、うって変わったいい方で、いっきに胸のつかえをはき出してしまいました。するとベルグエルムは、フェリアルとライアンの方を見やって小さくうなずくと、ロビーにあらためてむきなおり、両手を前にくんでから、ゆっくりと話しはじめたのです。

「われらがこの地をおとずれたのは、ロビーどの、あなたにお会いするためです。」

ベルグエルムの話しぶりは、ゆっくりかつていねいでした。そしてその声には、なにか人の心をおちつかせる、ふしぎなところがあるように感じられました。これから、かれのその話を、できるだけくわしく、語っていききたいと思いますが、ちよつと長くて、むずかしい話になるかと思えます。でも、すぐくだいじな話ですから、ゆっくりとすこしずつ、きいていってくださいね。

「われらは、あなたをさがしております。それもすべて、南のくにに伝わる、ひとつのいい伝えによるものなのです。それは、われらがおかみたちのくに、レドンホールの、古きいい伝えです。」

そういつて、ベルグエルムは、とあるひとつのうたを口にしました。それは、とてもみじかいうたでしたが、きく者の心にしみいる、ふしぎな力のあるうたでした。

西の白き王、かぞえて第四の治世のさなか、

世界はやみにおおわれた。

はらうはだれぞ、光はどこぞ、

それは北の地ゆいいつの、われらが黒き同ほう。

自分がだれかもわからぬ者が、南の地へとくだりゆく。

黒き同ほうつばさにゆられ、

深きやみへとはいりゆく。

すべては古き、おのが運命のみちびきのままに。

そして光はよみがえる。空に、山に、みずうみに、河に。

とうときぎせいを乗り越えて、わかれたものはひとつにもどる。

よろこびは心に、人々は家に、

あるべき場所へと帰りゆく。

自分がだれかを知り得た今は、

黒き同ほうかれもまた、

あるべき場所へと帰りゆく。

おしまいまでいうと、ベルグエルムは静かに目をとじました。そして、「ほうっ。」と大きく息をつくと、目をあけて、ふたたび、話をづけたのです。

「そして今、まさしくこのいい伝えの通り、このアークランド世界をやみがおおいつくそうとしています。われらが祖国レドンドンホールは、今や敵の手中に落ち、王はやみにとらわれております。それもすべて、かの山の魔法使いめのためなのです。」

魔法使いという言葉に、ロビーはとてもきょうみをひかれました。いぜん読んだことのある本の中に、魔法使いのことが書いてあったのです。魔法使い、まじゆつし、魔女、けんじゃ、いろいろなよび名が

ありましたが、かれらの中には、よい者もいれば、悪い者もいるのだと。遠い遠いくには、おそろしいかいぶつや、悪い魔法使いがいて、人々のことをこまらせているのだ、とも。今、話に出てきた魔法使いは、とびきり悪いやつのようなだとロビーは思いました。

「今よりさかのぼること七年前のこと。このアークランドの北東の果て、なにもをもよせつけぬ、怒りの山脈。そこにひそむ魔法使いめが、レドンホールの北のくに、ワットの王に取り行って、かれらと手をくみました。ワット国は、がんらい、よくの強い人間たちによっておさめられておりましたが、かの魔法使いめは、そこにつけこみました。人間たちの心のすきをうまくりようして、魔法使いめのとくいとする、たぶらかしのじゅつをもちいて、かれらを意のままにあやつりはじめたのです。ワットの王、黒の王アルファズレドは、今や、このアークランドでもいちばんのぼうくんとして知られるようになり、配下の強力な軍勢をひきいて、れっこくをつぎつぎとしんりやくくしております。

「ですが、そんな黒の軍勢に、たいこうする勢力があらわれました。それは、レドンホールの西のくに、アークランドにおいては南のくににあたる、ベーカーランドの白き勢力です。ベーカーランド国の王、白き王、アルマーク王は、ワットの悪ぎようにたえかね、せいえいぞろいの騎兵師団をけっせいして、ワットのしんりやくをおしとどめようとしました。そして、たび重なる戦いののち、ベーカーランドの白き勢力を相手にして、ワットの黒の軍勢は、しだいにその力を弱め、うばい取った土地も、もとにもどされるようになったのです。こうして、ときを重ねるにつれ、いくつもの小国が、ワットのしんりやくからかいほうされることとなりました。

「しかし、ワット国は、それだけでは終わらなかったのです。かの魔法使いめと、黒の王アルファズレドは、なおいつそう、よこしまないんぼうをくわだてました。魔法使いめは……、ああ、なんたることか！　ワットの南に位置するわれらが祖国、ぜんりようなるおおかみたちのかくに、レドンホールにまで、その悪しきやみの力をはたらかせたのです！

「魔法使いとアルファズレドは、レドンホールの王、われらが王、ムンドベルク・アルエンス・ラインハットへいかにつめより、へいかによこしまなるけがれた魔法をかけ、へいかを黒のやみに落としこんでしまいました。それまで、せいなる山々のごとくほこり高く、大河の流れのごとくゆうだいであつたへいかの心は、やみにむしばまれ、へいかは、そのけがれなきおん目から、ちつじよの光を失われてしまつたのです。」

ベルグエルムは思わず、目頭をあつくしてうなだれました。

「なんとというひげきでありましょう！」フエアリアルががまんできずに、声を張り上げました。ライアンはただだまつたまま、うつむいて、かなしげな表じようをしていました。

ベルグエルムが深く息をついて、さらに話をつづけます。

「へいかを失つたレドンホールは、なすすべもなくワツトの手に落ち、くには、晴れることのないやみにおおわれました。かつての美しかったフレイムロンドの王城は、今や、見る影もありません。くにたみはみな、ワツトのしはい下におかれ、兵士たちは、ワツトのほりよとしてつれていかれました。」

「しかし、そのよこしまなるやみの力から、からくものがれ、レドンホールから西へ、のぞみをつないだ者たちがあつたのです。それが、われら、はい色のウルファたちでした。ウルファというのは、われらのおおかみ種族の者たちのことをさす、種族のよび名です。」

「レドンホール国には、ふたつのしゆるいのおおかみたちがいます。ムンドベルクへいかをふくめる、黒のウルファたち。そしてわれら、はい色のウルファたちです。われらはい色のウルファたちは、まつたくのぐうぜんにより、魔法使いのやみの力からのがれ、レドンホールとかねて親しくむすばれていた、ベーカーランドへと、すくいをもとめてうつりゆきました。そして、ベーカーランド王アルマーク王は、われらをこころよく、受け入れてくださったのです。」

「われらは、ことのしだいをアルマーク王に伝え、じたいのしんこくさを伝えました。レドンホールは今や、よこしまなるやみにおおわれ、ムンドベルクへいかもまた、やみにとらえられ、魔法使いの手に

落ちてしまったということ。そしてなにより、レドンホールの土地を手に入れた黒の軍勢が、急そくにその力をたくわえ、今では、おそろしい魔物の軍隊までむかえいれて、いぜんにもまして、強力な勢力になってしまっているということ……。

「かのじゃあくなる魔法使いめが、そのすべてのはいごに立ち、黒の軍勢をしいしているといえます。しかし、魔法使いめのしんのもくてきは、ここからだったのです。

「ベーカーランドの力のみなもとたる、青き宝玉。これこそが、魔法使いめのほんとうのねらいでした。宝玉は、このアークランド世界の力のバランスをもち、ぜんなる者たちに、大いなる力をさずけてくれるもの。その力を、かの魔法使いめはほっしているのです。なんと、ばちあたりなことでしょうか！

「ベーカーランドは代々、この大いなる宝を守りついでゆくべき国家として、このアークランド世界のことをささえてきました。宝玉は、ベーカーランドの王城にあってかたく守られ、そしてその力によつて、ベーカーランドのくに自体も、あつく守られていたのです。「しかし、魔法使いめのさくりやくによつて、今、アークランドの力のバランスは破られつつあります。そして、宝玉のかがやきも、じよに失われつつあります。魔法使いめは、宝玉の守りのうすれつつある今をねらい、ベーカーランドをほろぼし、宝玉の力をわがものにとせんたくらんでいるのです。宝玉が魔法使いの手に落ちれば、そのときこそ、このアークランド世界のすべては、よこしまなるやみにおおわれてしまうことでしょう。それですべては、終わつてしまいます。すべてののぞみは、ついでてしまいます。

「それを防ぐためにも、われらは力をけつそくさせ、黒の軍勢に立ちむかわなければなりません。げんざいわれらは、ベーカーランドの兵とはい色のウルファたちとでけつせいした、白の騎兵師団を作り上げておりますが、このアルマーク王の白の騎兵師団の力をもつてしても、せまりくる黒の連合軍をうちはらうことは、かなわぬでしょう。ですからわれらは、われらのすくいとなる、新たなる力をもとめていなのです。この世界をおおいつつあるやみを、うちはらう力を。

「そしてわれらは、祖国レドンホールに古くから伝わる、ひとつのいい伝えにのぞみを見い出したのです。くにを追われて逃げおおせたわれらは、この古いいい伝えのことも、アルマーク王に伝えました。そしてアルマーク王は、このいい伝えが、まことに正しいものであるということ、かくしんされたのです。」

「それもそのはず。いい伝えのさいしよのいつせつである、西の白き王、かぞえて第四の治世とは、ほかならぬ、アルマーク王ほんにんのことを、さししめしていたのですから。」

「ベーカールランドの治世がはじまっていらい、白き王とうたわれ、人々のそんけいをその身に受けるようになったさいしよの王は、今より三だいむかしの世の、しよだいの白き王、イエヒユリー王です。そして、げんざいの白き王。それこそが、第四の治世をおこなう、アルマーク王なのです。」

「いい伝えの内ようは、このやみにおおわれはじめた今のアークランド世界のことを、まさに、さししめしております。そしてアルマーク王は、わたくしに大いなるやくめを与えられました。それは、いい伝えのしめすところの、『北の地ゆいいつの黒き同ほう』をさがし出すことであります。黒き同ほうとは、われらが祖国、レドンホールの黒き同ほう。すなわち、黒のウルファのことを、まさしくさししめしていたのです。」

なんだった！ ロビーは心の中でさげびました。ひよつとして、ぼくがその、黒き同ほうだっというんじやないだろうか？ いやいや、そんなことはない。きつとなにかの、まちがいだ。

ベルグエルムがロビーの顔を見つめました。ロビーは、どきつとして、思わず下をむいてしまいました。

さらに、ベルグエルムの話はつづきます。

「われらはひそかに、この大いなるやくめを果たすため、かぎられたわずかな者たちばかりをひきつれて、いい伝えのしめすところである北の地をめざすべく、出発しました。ベーカールランドから東へ。大河ティーンディーンをさかのぼり、切り分け山脈のふもとを通り、そして、長い道のりのすえ、われらは、うつしみ谷のふもとにある、ぜん

なるひつじたちのくに、シープロンドへと、たどりついたのです。ここでわれらは、ことの一部しじゅうを、ひつじの種族たるシープロンの王、メリアン王に伝え、力を貸していただけるよう願いました。そしてメリアン王は、われらに進んで、協力してくださいましたのです。」

「すばらしき王です。わがシープロンのほこりであります。」ライアン・スタツカートが、ほこらしげに、そして、ひかえめにいいました。

「そうです、メリアン・スタツカート王は、すばらしい人物でありました。その通り、これなるライアン王子の、父上でいらっしやいます。メリアン王は、北の地のそうさくを、一手にひき受けてくださいました。そしてついに、いや果ての北の森、土地の者からは、かなしみの森とよばれているこの森に、ひとりの黒ウルフアが住んでいるとのほうこくを受けたのです。」

やっぱり！ ロビーのよかんはてきちゅうしました。こまったぞ、この人たちは、とんでもないかんちがいをしているんだ！ ぼくが、そんないい伝えに、かんけいあるわけがないもの（ところでライアンは、ひつじのくにシープロンドの、王子さまだったんですね。どうりで、気品にみちた顔立ちと、たたずまいをしているはずです）。

ロビーはおろおろしてしまいました。ベルグエルムはそれにおかまいなしでした。

「われらはよろこびいさんで、これなる武勇すぐれまするフェリアルト、そして、シープロンドをだいひょうして、ライアン王子に、この旅のさいしゅうもくてき地へのともをお願いしたしだいではありません。そうしてわれらは、ついにここに！ いい伝えの黒のウルフアを見つけることができましたのです！」

「ロビーどの！ ロビーどの！ ぜひにわれらに、力をお貸し与えただきたい！ このアーランドを、やみからすくっていただきたい！ それができるのは、あなただけなのです。われらに残された光は、もはやほとんど消えかけております。ロビーどのの助けが、ふかけつなのです。ぜひに、われらとともにお越し願いたい。ベーカールンド国のアルマーク王のもとまで、お越し願いたいのです。どうか、お願いであります！」

「お願いでありますロビーどの！　どうか、世界をすくっていただきたい！」

ベルグエルムとフェリアルは、そろっていすから立ち上がり、ロビーの横にひざまずいてお願いしました（そしてライアンもまた、そのうしろについてひざまずきました）。

ですけど、すっかりこまってしまったのはロビーです。なにしろ自分は、ただの少年でありましたし、そんなごたいそうな力など、持ちあわせているはずありません。ロビーはあわてふためきながら、いすから立ち上がって、三人にむかつて、なんとかとりつくろおうと努力しました。

「ちよつと待って！　待ってください！」ロビーは、なかばひめいのように、声を張り上げました。

「お願いです！　お願いです！　どうかそんなに、かしこまらないでほしいんです！」

「あなた方のお話は、よくわかりました！　いや、ほんとうは、むずかしくて、全部はりかいできなかつただけど……、でも、南の地でおそろしいことが起こっているんだっていうことだけは、よくわかつたつもりです。このくにが、そんなたいへんなことになっていたなんてこと、ぼくはぜんぜん、思ってもいませんでした。」ロビーは、むがむちゆうになつて、三人につめよりました。

「とても重大で、しんこくで、たいへんな問題だつて思います。でも、ですけど！　あなた方は、大きなかんちがいをしているんです！」

なにかのまちがいですよ！　ぼくには、そんなりっぱな力なんてありません。ただの、ふつうのおおかみです。たとえばぼくが、つるぎを持って敵の前におり立ったとしたつて、あつというまに、うち負かされてしまうことでしょう。そんなぼくに、いったいどんな力があるつていうんですか！」

このくにに起こっているという、おそろしいわざわい。おそろしい軍隊に、やみの魔法使い。それらのものが、自分の前に、とつぜん、みんなまとめてつきつけられたのです。ロビーの心は、まるで、しなびたりんごのようにちぢこまってしまいました。すっかりおそろしく

なっていました。ですけど、だれにロビーのことを、せめることができないでしょうか？ あらそいや戦いなどは、むえんのせいかつをしてきた、まだ十五さいほどの少年が、とつぜん、世界のきゆうせいしゆだなんていわれたって、ぴんとくるはずありません。おそろしい話におびえて、身をちぢこませてしまうのが、ふつうのことなのです。

三人のほうもん者たちにも、それはよくわかっていました。よくわかっていましたが、かれらもここで、ひき下がるわけにはいかなかったのです。

「ロビーどのがそうおっしゃるのも、むりはありません。しかし、まちがいではないのです。北の地には、あなたいがい、黒のウルファはひとりもいないのですから。」

ベルグエルムがいいましたが、ロビーには、まだぜんぜん、それを受けいれるだけの気持ちのせいりがついていませんでした。なにがなんだか？ わけがわからなくなって、頭の中がごちゃごちゃになってしまっていたのです。

そんなロビーに、もうひとりのおおかみの騎士であるフェリアルが、さらにつめよってきました。じつはこれは、あんまり正しいはんだんではありませんでしたが、ロビーになんとか、いつしよにきてもらいたいと、かれもやつきになっていたのでした。

「お願いですロビーどの！ ロビーどのの身は、われらがいのちにかえても、お守りいたしますゆえ！」

この「いのちにかえても」という言葉が、ロビーの心に、ぐさつとつきささってしまいました。どうしたって、いのちの危険はさけられないと、いつているようなものでしたから。ロビーはさらに、こわくなっていました。

そんなロビーのことをさっして、ベルグエルムがいいました。

「ロビーどの、われらはあなたを、いくさの場に投げ出そうとしているわけではありません。すくいのは力は、武力だけであるとはかぎらないのです。あなたには、その力があるのです！」

ベルグエルムのいうことは、ロビーにはよくわかりました。まった

く正しいことをいつているのだということも、よくわかったのです。ぼくにできることがあるのなら、立ち上がらなくてはいけません。みんなのやくに立てるのなら、前に進まなくてははいけません。それもよくわかっていました。ですけど！ からだがどうにも、ついていきませんでした。ロビーは、自分のからだがぶるぶるとふるえているというときに、気がつきました。いったいどうすれば、このふるえがおさまるのか？ ロビーは自分でもわかりませんでした。ロビーは、とてもなさない気持ちになりました。でも、どうしたらいいのか？ わからなかったのです。

それからしばらく、ふたりのおおかみの騎士たちは、なんとかロビーのことを説得しようがんばりましたが、しだいにかれらも、言葉を失ってしまいました。いやがる者をむりにつれ出していくことが、はたしてほんとうに正しいことなのか？ 自信がなくなってきたしまったのです。これが運命なら、われらはその運命に、したがうしかないのか？ と。

ベルグエルムはなにもいえず、うつむいたままでした。さまざまに思いが、その胸の中にうずまいていくようでした。

フェリアルもまた、大きく首をうなだれて、力を落としてしまいました。

われらはつとめを果たせないのか……？ かれらの頭の中に、そんな思いが生まれはじめていたころでした。

ちがいます！ あきらめるのは早すぎです！

ロビーはそんな、弱虫なんかじゃありません！

ただ、あまりにもとつぜんに、あまりにも多くの問題におそわれたがために、心が一時的に、ペちゃんこになりかけてしまったというだけなのです！ ロビーは、ほこり高きおおかみの種族です。ロビーのことを、信じてあげてほしいのです。

ロビーのばかばか！ なにをやっているんだ！ おまえはそんなに弱虫なのか？ さあ、立ち上がれ！ おまえのあこがれた、旅に出

るんじゃないか！

ロビーはずっと、心の中で、自分にそういいきかせていたのです。こわさと戦っていたのです。きょうふに負けているときなんかじゃないぞ。そんなことじゃ、ぼくはこのさき、ずっと、ただの負けおおかみだ。しつかりしろ！

そしてロビーが、かれの心をぐるぐるまきにしていた、そのきょうふに、あとちよつとで、うち勝とうかというそのとき。

みなさんは、さきほどからひとりの人物が、ロビーの説得に加わっていないということに、お気づきでしょうか？ それは、そう、ライアン・スタツカートです。かれは、ふたりのウルフアたちがけんめいになってロビーの説得にあたっているのを、じつと見守っていました。ですが、ただ見ていたというだけではありません。かれには、考えがあったのです。ここにきてライアンは、その考えを、じつこうにうつしました。というより、ここしかないと思ったのです。

ライアンは、そつと、ふたりのウルフアたちの耳になにかをささやきました。それをきいて、ウルフアの騎士たちは、とてもびつくりしたようですが、やがて小さくうなずくと、そのまま、ライアンのうしろについて、したがうことにしたのです。

ライアンが静かに、ロビーに歩みよりました。そしてかれは、こんな、いがないことを口にしたのです。

「おじやしました。わたしたちは、これで失礼します。あなたは、わたしたちがさがしている人ではなかったようです。ごきげんよう。」

そういうと、ライアンは、ふたりのウルフアたちのことをしたがえて、げんかんのとびらから出ていってしまいました。そして、とびらがばたんととじられると、あとにはただ、ロビーひとりだけが残されたのです。ロビーには、もう、わけもわかりませんでした。ほうもん者たちは、帰ってしまったのです！

ひとりになると、部屋の中は、まったく、もとのがらんとしたほらあなにもどってしまいました。ロビーは、テーブルの上を見ました。

四人ぶんのカップやお皿が乗っていました。ロビーはなんとも、やるせない気持ちになってきました。

そのとき、げんかんのとびらのそとで、馬のいなく声がひびきました。かれらが、馬たちに乗ったのでしよう。つぎは、馬たちのかける足音が、遠くに去っていくはずです。

帰ってしまう！ ロビーは心の中でさげびました。

「だめだ！ 帰らないで！」

ロビーは、そうさげんで、大あわてでとびらに走りよりました。そしてむがむちゆうで、そのとびらをあげ放つと、ぜんそくりよくで、そとにかけ出たのです。

馬たちが三頭、そのまま木につながれて待っていました。だれも乗っておりません。ええっ？ ロビーはあつけに取られてしまいました。そして、げんかんのわきを見てみますと……、そこに、三人のほうもん者たちが、きれいにならんで立っていたのです。きよとーんとするロビーのことを見て、ライアンが、くすりと笑いました。ベルグエルムとフェリアルは、なんとも申しわけなさそうな感じで、気をつけのしせいを取っております（まるで、先生に怒られているせいとのように）。

「こんばんは。お会いするのは、これで二ど目ですね、ロビーさん。」ライアンが、にこにこしながらロビーにいいました。ロビーはそこで、ようやく気がついたのです。自分はライアンに、はかられたのだと。

そうです、つまりライアンは、しりごみしていたロビーの背中をたいたわけでした。もうすぐロビーさんは、自分から「いつしよにいきます」といつてくるだろう。でも、そのほんのちよつと前に、こちらからそういわせるようにしむければ、ロビーさんのけっしんは、よりいっそう、強いものとなる。それに、ロビーさんはまだ、こわがっている。ロビーさんの心は、今、ほぐが、ほぐしてあげなくちやいないな。

ライアンは、このみじかい時間の中で、ロビーという人物のことを、すっかりかんきつしてしまいました。このロビーという人は、ほんとうは、しんの強い、せいぎ感にあふれた人物であると。ライアンの目には、このロビーこそが、いい伝えのきゆうせいしゆにまちがいないとうつつたのです（ただ、ちよつとおくびようで、ぶきようなどころがあるみたいだな、とも思っていたのですが）。ですから、ほこりとそんげんを失ったままで、ひっこんでいられるはずがない。きつと、自分の作戦に乗ってしまうことだろうと。けっかは、みなさんに見ていただいた通りです。

「あなたなら、ぜつたいに出てくるだろうと思いました。ぼくにはわかっていました。」ライアンが、自信まんまん、とくいげにいいました。ですが、すこしもいやみなどころはありません。かえってロビーは、そんなライアンのことが、いつぺんに好きになりましたし、また、とても、すがすがしい気持ちにもなれたのです。

「申しわけありません、ロビーどの。こんなまねは、したくはなかったのですが……」

ベルグエルムとフェリアルは、すっかりきようしゆくして、ロビーに頭を下げ通しでした。かれらは、王さまにつかえる騎士でしたので、目上の人には、とても気を使うのです。この場合では、もちろん、ロビーがその、目上の人でした（ですから、もしほうもん者たちがかれらふたりだけなら、こんな作戦は、ぜつたいに思いつかないことでしょう。かれらは、しようしよう、まじめすぎるところがありましたから。こんなまねをしたことが、あとで王さまに知れたら、きつと怒られるだろうと、かれらはひやひやしていたのです。いつぼうライアンは、王子という身分にあるわりには、ずいぶんと、自由なせいかなようですね）。

さて、ロビーはもう、すっかりしてやられてしまったわけです。こんな手に乗ってしまったからには、もう、笑うしかありません。ロビーはとてもおかしくなって、「あはははー！」と、大声で笑ってしまいました（どうやら、ロビーの心をほぐそうとしたライアンの作戦は、すばらしく、ききめまんでんだったみたいですね。よかった）。そして

それから、ようやく、口をひらいたのです。

「すみませんでした、みなさん。みっともないたいどを取ってしまつて。ぼくは、自分がはずかしい。まったく、なさけないです。ぼくに、あなた方のそのりっぱさの、半分でもあつたらいいのと思います。」

ロビーはまず、ぺこりと頭を下げて、みんなにおわびをしました。それが、今の自分のすなおな気持ちだったのです。そして、自分の気持ちがようやくおちつくと、ロビーは、そのあとにすぐ、みんなにむかつてこういいました。

「それはそうと。そとは寒いですよ！ さあ、中にはいつて下さい。お願いしますから。」

その言葉をきいて、ベルグエルムとフェリアルは、ここぞとばかりにロビーにつめよりました。

「おお！ それではロビーどの。われらとともに、お越しくだされますのか？」

ですが、ロビーがそれにこたえる前に。ライアンが口をはさんだのです。

「あたりまえじゃない。もうかれは、こたえをしめしているよ。かれは、いい伝えのきゆうせいしゅ。ウルファの中でも、とびきりにほこり高い人なんだから。ね？ ロビーさん？」

ライアンが、いたずらっぽいまなざしをして、ロビーのことを見上げてきました（ひつじの種族のライアンは、おおかみ種族のロビーよりも、一フィート以上も背がちっちゃかつたのです）。ロビーはちよつと、こまつてしまいました。出かけるけつしんはついている。ライアンのそのはじめの言葉は、たしかにあたりでしたが、あとの半分（ロビーがほこり高ききゆうせいしゅなのだということ）は、ロビーが自分できめられることでは、ありませんでしたので（「そう、ぼくはとびきりにほこり高い、きゆうせいしゅなんです。」なんて、けんきよなロビーが、自分からいいっこありませんもの）。

ですからロビーは、しんちように言葉をえらんで、つぎのようにこたえるのでせいっぱいだつたのです。

「ええと、その、みなさん。ぼくは、みなさんのきたいしているような力を、なにも持っていないかもしれないかもしれません。それどころか、ぎやくに、とんでもないごめいわくをかけてしまうかも……。ですから、あんまりかつぎ上げられては、こまるんです。」

ロビーはそこで、おそろおそろ、みんなの顔を見渡しました。ですが、みんなはいたってしんけん、ロビーの話をきいてくれているようでした。

「でも、ぼくがその、きゆうせいしゆであるかどうかは、べつのこととして。それでも、ぼくがいくことで、なにか、みなさんのおやくに立ることがあるのなら。このくにに、ぼくが、なんらかの助けをもたらすことのできる、かのうせいがあるというのであれば。ぼくは、よろこんで、みなさんとともにいきたいと思います。いえ、ぜひとも、おともさせてください。」そういつて、ロビーは、また、ぺこりと頭を下げました。

これをきいたふたりの騎士たちの、よろこびようたらありませんでした。

「おお！ ありがたい！」ベルグエルムが声を張り上げていいました。

「光がおりた！ きぼうの光だ！」フェリアルもたまらずに、全身でよろこびをあらわにしました。

さて、ライアンはどうでしょうか？

「やった！ やった！」

その声にみんながふりかえると、ライアンは、うしろの方で、ぴよんぴよんとびはねながらよろこんでいました。どうやら、このライアンという少年は、思っていた以上に、むじやきなようですね。さきほどまでは、ちよつと、大人びてみせていたようですが、うれしいときには、すなおに、そのままのライアンにもどってしまいうようです（おかげで、あんまりはしやぎすぎて、石につまづいて、地面に、べちーん！ フェリアルに手を貸してもらって、ようやく、起き上がりまし

たが)。

「さあみなさん。中にはいつてくさい。お話しをつづきは、それからにしましょう。」

ロビーが、げんかんのとびらの横に立って、みんなのことをまねきました。そしてみんなは、ロビーにおじぎをして、ふたたび、しきりなおし。「かたじけない。」とか、「きょうしゆくです。」とか、「おじやましまーす。」とかいいながら、それぞれの席へともどっていったのです(ちなみに、さいしよのせりふはベルグエルム。二番目がフェリアル。そしてさいごは、いわなくてもおわかりですよ。ライアンでした)。

さて、ふたたびみんなが、居間の木の長テーブルにつきますと、こんどはそこは、かいぎの席となりました。つまり、これからみんながどうするのかを、ロビーにちゃんと、説明しておく必要がありますから。

しかし、それは、長くはかかりませんでした。たんじゅんめいかい。みんなの取るべき行動は、かいつまんでいえば、つぎのようなものだけだったのです。

われらはこれより、ベーカールランド国へとむかう(ただしとりあえずは、ここからいちばん近いつか点である、シープロンドへとむかうことになる)。

ベーカールランドへついたなら、ただちにアルマーク王に会い、王からの新しいしじをおおぐことになる。その内ようは、そのときになつてはじめてあきらかにされる。

はつきりいつてしまえば、これだけでした。つまり、ベーカールランドについてみなければ、そのあとになにをするのか? ということまでは、ベルグエルムたちにもわからなかったのです。かれらのにんむは、いい伝えのきゆうせいしゆのことを、ぶじに、ベーカールランドまでつれて帰るといふものでしたから。

しかし、これだけはいえました。いくら、もくてきはたんじゅんだ

としても、ベーカーランドまでの道のりは、そんなにかんたんなものではないと。このアークランド世界のじょうきようは、今このしゅんかんにも、こくいつこくと変わっているのです。やみがどんどん、広がっているのです。アルマーク王が、こんかいのにんむにベルグエルムたちをえらんだのは、正しいはんだんでした。かれらは、白の騎兵師団の中でも、ぴかいちの勇士たちでありましたから。

説明がすむと、白の騎兵師団の長、ベルグエルムが、話しをつづけました（ベルグエルムは、白の騎兵師団の中の隊長だったのです）。

「ロビーどの、われらはすぐに、旅立たねばなりません。出発には、だいぶおそい時間ではありませんが、いたしかたありません。たとえば、夜がふけようとも、進めるかぎりは進まなくては。もちろん、安全にはじゅうぶんに気をくばってまいります。どうぞわれらを、お信じください。」そういって、ベルグエルムはフェリアルの方を見ました。フェリアルは、それにこたえ、右手でこぶしを作って、胸の前にあわせてみせました（これは、「おまかせください。」という意味でした）。ベルグエルムがつづけます。

「われらはこれより、ひつじの種族たるシープロンのくに、シープロンドへとむかいます。じゅんちようにゆければ、馬の足で三時間ほどの道のり。シルフのこくげんのころまでには、たどりつけることでしよう。」（シルフのこくげんとは、この世界の時間をあらわす言葉で、だいたい、午後の九時ころをさしています。）

「われらのけいかくは、このようなものですが、ロビーどののお考えはいかがででしょうか？」

ベルグエルムがたずねました。そしてロビーは、ここにきてひとつだけ。ですが、いたってまとをいた、しつもんをしたのです。

「あの、そんなに急がないといけないんでしょうか？　もう、夜になつていますし、みなさん、だいぶ、おつかれのようすです。朝になつてからの方が、いいんじゃないでしょうか？　こんなほらあなで、すいませんが、ぜひとも、とまっていつてくだされば……」ロビーはそこまでいいましたが、ベルグエルムの表じようは、かたいままでした。どうやらなにか、じじようがあるようだったのです。

「ロビーどののお心は、よくわかります。このような時こくに旅立とうなどと、まこと、じょうしきにはずれているということも、しようちしております。しかし……」ベルグエルムは、そこでいったん、言葉をごしましたが、やがて、けっしんしたかのように、話をつづけました。

「ロビーどのに、これ以上いらぬ心配を与えるべきではないと思いましたが、やはり、お話ししておかなくては。じつのところ、われらにはもう、時間がないのです。じつは、さきほどわたくしが話しました中では、あえてふれずに、ふせておいたことがあるのです。申しわけありません。」

ベルグエルムが頭を下げ、ロビーにあやまりました。そしてかれは、こんな、おそろしい話をつづけたのです。

「われらがベーカールランドを出発する、ほんのすこし前のこと。ワットのくにより、使者がまいったのです。それは、ベーカールランドがこうふくに応じなければ、近く、ベーカールランドに全軍をもつて、せめいるとのたっしでありました。もちろん、そんなこうふくになど、応じられるはずありません。今ごろワットの使者は、そのへんじをたずさえて、黒の王、アルファズレドのもとへと、帰りつくころであります。かれらはすぐにも、行動を起こしてくるはずです。黒の連合軍がせまりくるのです。」

「そしてさらには、使者のいうことには、そのさいこの戦いにおいて、かのよこしまなる魔法使いめが、われらのさいこのきぼうをもうちくたくべく、そのいちばんのまがまがしきやみの力を、くだしてくるということでありました。それがどんなものであるのか？　そこまでは、使者の口からも語られることはありませんでしたが、おそろしいきょういであることに、ちがいはありません。」

「ですからわれらは、手おくれになる前に、いつこくも早くベーカールランドへともどり、それらの悪の力にたいこうするすべを、ととのえなくては。このアークランド世界のそんぼうは、われらの手に、かかっているのです。」

なんてことでしょう！　ロビーのそうぞう以上に、じたいはしんこ

くをきわめていたのです。ロビーはこんなにひどい話は、ほかにないと思いました。今までに読んだ、たくさんの旅の物語。それらはみんな、ふしぎで、楽しくて、心おどって、はらはらして。そしてさいごは、かならず、ハッピーエンド。ですからロビーは、旅というものには、心からあこがれるようになったのです。でも、それらはみんな、本の中だけのお話にすぎないのだということを、ロビーはここで、あらためて、思い知らされました。今、ロビーがげんじつにきかされた、この話は、そんなロビーの、りそあの物語たちとは、ほど遠いものだったのですから（あなたの住んでいるくにが、とつぜん、おそろしい敵にこうげきされるときかされたら、あなたはどう思いますか？ 戦おうとするか、逃げたくなるか？ どっちにせよ、こんなにおそろしい話はないはずです。今のロビーも、同じ気持ちでした）。

「じたいのしんこくさはよくわかりました。そして、旅の重要さも。ぼくたちは、すぐに、旅立たなくちゃならないんですね。だいじょうぶ。もう、ぼくは、かくごをきめています。」

ほんとうは、ロビーはまだまだ、こわい気持ちでいっぱいでした。ですけどロビーは、もう逃げません。みずからのしめいのため、そして、ちかいのために、ロビーは旅立つのです。

ロビーはここで、自分のことを話しておくべきだと思いました。旅立ちの前、今が、そのときだと思ったのです。かれらには、すべてを話しておきたいと思いました。

「みなさんは、とてもりっぱな人たちです。みなさんのような方々と、ともにゆけることを、ぼくは、とてもこうえいに思います。」ロビーはそういって、右手を胸にあわせ、かれらのまねをして敬礼のしぐさを取りました。みんながそれにこたえて、ロビーがつづけけます。

「旅立つ前に、みなさんには、ぼくのことを、みんな話しておくべきだと思う。ぼくには、やりとげなければならぬとちかかった、しめいがあるのです。みなさんもお気づきのことでしょうが、ぼくには、みょうじがありません。ただ、ロビーという名まえだけを、おぼえていただけなんです。ぼくは、まだ小さかったときに、どこか遠いところから、このかなしみの森にやってきたようなんです。それからたつ

たひとり、この森に住むようになっていました。どこからきたのか？ なんのためにきたのか？ ぼくにはまったくわかりません。きおくもほとんど、残っていません。」

それからロビーは、すこし考えてからつづけました。

「だからぼくは、自分がなに者であるのか？ 知りたいんです。なぜ、こんなことになっているのか？ 知りたいんです。そして、ちゃんと、姓を受けつぎたい。ぼくは、おおかみ種族です。ぼくにだって、ほこりはあります。」

「この願いを果たすこと。それが、ぼくのちかいであり、しめいなのです。どうあっても、たとえ、この身をほろぼすことになろうとしてもです。みなさんにくらべれば、ちっぽけなしめいかもしれません。ですが、ぼくにとっては、これもまた、大きなしめいなんです。みなさんにならわかってもらえると、お話ししました。旅ゆく前に、知っておいてもらいたくて。」

話し終えると、ロビーはみんなの顔を見まわしました。世界のいちだいじの前に、つまらないことをいつてしまったんじゃないか？ ロビーは、そう心配したのです。

ですが、みんなはいたってしんげんに、ロビーの話を受け入れてくれました。ベルグエルムがその先頭を切って、こうふんぎみにこたえます。

「ロビーどのの、高きおこころざし、われら一同、深く感じいりました。われらはみな、あなたのほこり高きちかいをうやまい、ささえ、おともいたします。そのちかいの果たされるときまで、われらは力のかぎり、お助けいたしますぞ。そしてきつと、ちかいは果たされましよう！」

ベルグエルムもまた、ほこり高きウルファ種族の者。ですからかれもまた、ロビーのちかいを、心からうやまいました。ほんとうに、ウルファという種族は、ほこりをだいじにする種族でした。仲間がなかったことならば、まるで、自分のちかいのように思ってくれるのです。それはフェリアルも、そして、種族はちがっても、ライアンとて同じことでした。

「まこと、ベルグエルム隊長のいう通りです！ ロビーどののちかいは、かならずや、果たされることでありましょう。どんなくちやみのときであっても、光は、かならずおとずれます。のぞみは、いつでも、みずからのそばにあるのですから！」

フェリアルルという言葉は、とてもたのもしく、きぼうを感じさせてくれるものでした。

ですが、今のロビーにとって、いちばんうれしかったのは、つづくライアンの言葉だったのです。

「だいじょうぶ！ きつとうまくいくから。ぼくたちがついてるじゃない。みんなでがんばればさ、なんだってできるよ。もう、ロビーひとりじゃないんだから。ぼくも、ベルグも、フェリーもいるよ。もう、ぼくたちは、仲間なんだから。」

ロビーは、このライアンの言葉に、心の底から助けられました。ずっとひとりで、ひとりぼっちで、くる日もくる日もすごしてきたロビーにとって、こんなにも心あたたまる、すてきな言葉もなかったことでしょう。ロビーは胸があつくなくて、こみ上げてくるものをおさえることも、できませんでした（ちなみに、ライアンはなかよくなつた相手のことを、ニツクネームでよんでしまうようですね。ベルグエルムならベルグ、フェリアルルならフェリーといったように。でも、ロビーはもともとロビーでしたので、それは、そのままなのでした。それにライアンは、親しい相手に対しては、とつてもくだけた話し方をするみたいです。はじめにこのほらあなにきたときのライアンとは、ぜんぜん感じがちがってしまいましたので、ロビーはちよつと、びっくりしてしまったものでした）。

「ありがとう、みなさん、ありがとう。」ロビーは、感きわまつていました。

「みなさんの気持ちは、ぼくはけっして忘れません。このさき、どんな危険が待ちかまえていようとも、ぼくは、みなさんとともに乗り越えてゆけます。立ちむかってゆけます。」

それが、出発のあいずとなりました。そして、ベルグエルム、フェリアルル、ライアンの三人は、ロビーのその言葉にあわせて、高らかに、

せんげんしたのです。

「南へ！」ベルグエルム、フェリアルがいました。

「しゅっぱくっ！」ライアンが、右手を天につき出してつづけました。

そしてロビーは、それに負けなくらい高らかに、力強くこたえましました。

「南へ！　ともにゆきましよう！」

こうして、ここ、かなしみの森の、暗くてさびしいほらあなの中で、かれらの同めいはむすばれたのです。それは、せまりくるやみの敵に立ちむかうための、大きな同めいでした。

しかし、かれらがそうしているあいだにも。南の地では、新しいやみが、広がりつつあるところだったのです。

2、騎乗の旅立ち

かなしみの森の中に、大きな馬のいななき声がひびき渡りました。日は、もうとつぷりと暮れてしまつて、空はいちめん、黒のカーテンをしきつめたかのようにまっ黒でした。それというのも、急にわき起こつてきた暗い雲が、かすかに光を放つていた星々をも、そのえじきにして飲みこんでしまつたからなのです。つめたい風が、びゅうびゅうとかなしげな音を立てて、森の黒い木々のあいだを通りすぎていきます。木々の葉っぱはざわざわとゆれ、まるで、すがたの見えないう客をむかえいれているかのように、くらやみの中で、すぎてゆく風の声にこたえました。

そんな、ふきつとも思える夜の空の下に、今、三頭の騎馬たちが、その主人たちとともにたたずんでいました。それらの馬たちは、このうす暗さの中でもはつきりとわかる、美しい毛なみを持っていました。二頭は、銀のような美しさの白い色。もう一頭は、おひさまの下にかがやく白い花のようなようにいんしよ的な、白い馬でした。そして、それらの馬たちの背には、あわせて四人の人物たちが、馬たちと同じくらい美しい、りっぱなくらにまたがっていたのです。

二頭のはい色の馬たちには、それぞれひとりずつ、きらびやかな衣のように身をつつんだはい色のおおかみの者たちが乗っていました。そしてもう一頭の白い馬には、この馬と同じくらいに白くて美しいすがたをした、白のひつじの種族の者がひとりと、そして、それとはとても対しよ的な、全身まっ黒の衣服に身をつつんだ、黒のおおかみ種族の者がひとり、乗っていたのです。この黒のおおかみのかっこうは、ほかのふたりのおおかみたちにくらべて、やや見おとりする感じで、着ているものにもなんのそうしよくもありません。黒のジャケツトに黒のズボン、黒のマフラーをしていて、そしてその上から、全身をおおうようなかたちで、大きなぼろのような黒のマントをはおっていました（これはもう、なん年もたんすのおくにおしこんであつたものを、あわててひつぱり出してきたものでした）。そのほかには、肩からくたびれたかばんをひとつ下げているだけで、これも、とてもき

ちよな品であるとは、とうていいいがたいものだったのです。

ですが、だからといって、この黒のおおかみのことをかんとんに「みすぼらしいおおかみ」ときめつけてしまうのは、まちがったことだといえるでしょう（いいかえれば、ほかの三人の者たちの身なりがりはすぎるのです）。すくなくとも、おおかみらしいじよぶなからだを持つているという点では、ここにいる三人のおおかみたちは、それぞれおんなじくらいりっぱでした。でもやっぱり、じゃっかんではありましたが、黒のおおかみの方がほかのふたりのおおかみたちよりも、ひとまわりくらい、小がらであるといえると思います（せいぜい二インチでいでしょうけど）。ですが、そんなことをくらべっこしてもしかたありませんし、意味のないことだといえることでしょう。だって、もうひとりひつじの種族の者は、この大きなおおかみ種族の者たちとくらべて、ふたつもみつつも、小がらでしたから（白い馬一頭にふたりが乗れるのも、そのためでした）。

さて、この騎乗の者たちがだれであるのか？ みなさんはすでにごぞんじでしょうから、このあたりでかれらを、かれらの持つ、ほこり高き名まえでよんでいきたいと思えます。

「ロビーどの、旅立ちのじゅんびは、すっかりおすみになられたでしようか？」

口をひらいたのは、はるか南の地、ベーカーランド国の白の騎兵師団の長、ベルグエルムでした（ベルグエルムは、そういいながらも、はやりたつ馬をせいするので手いっぱいでした。ベルグエルムの乗る美しいはい色の騎馬は、「早くいこうよ」といった感じで、主人であるベルグエルムのことをせかし立てつづけていたのです）。そしてロビーは今、出発の前に、かばんの中にもつをもういちどかくにんしているところだったのです。

「なにもかもすみしました。このほらあなの中にあつた、ぼくのたいせつな品物は、すべて、このかばんの中にはいっています。着るものと、食べるもの。インクに、まんねんひつ。本が二さつに、ペンダントがひとつ。このペンダントだけは、ぼくの首にかけてありますけ

ど。みんな持ってきました。もう、このほらあなの中には、持っているようなものは、なにも残されていません。それがいは、ただ、くらやみばかりがつまっているだけです。」

ロビーはそういつて、長い時間をすごした自分のほらあなのことをながめやりました。今は、とぎされた重い木のどびらが、なに者であろうと、その中へまねきいれることをこぼんでいるのです。そのとびらのわきには、すすけてうすよごれたガラスのはまった、小さなまどがありました。中はまつくらでした。ついさきほどまでは、ロビー自身が、そのまどの内がわにいたのです。それが今では、このほらあなは、もうなん年もうちすてられていたかのように、まったく人のけはいを感じさせないものになっていました。

「もう、なにも残っていません……」

ロビーはもういちど、だれにいうともなくつぶやきました。なぜだかはわかりませんが、ロビーはふいに、なにかいちばんたいせつなものを中においてきてしまったのではないか？ という気持ちになったのです。ですがそれは、品物ではありませんでした。しいていうのであれば、それは、このほらあなそのものでした。ひとりぼっちで毎日をすごしてきた、自分のほらあな。自分がいなくなれば、あとはただ、くち果て、荒れていくだけでありましょう。ロビーはなんだか、とてもかなしくなってきました。かなしみの森の、かなしみの力のせいかもしれせん。思いもかけず、なみだがあふれ出てきました。ロビーは自分にとって、とてもたいせつな人が去っていつてしまふときのような、そんな気持ちになったのです。ほらあなの気持ちになつたのです。

いつか、もどれるときがくるだろうか……。ロビーは心の中で思いました。

でも、たぶん、もどれることはないだろうな……。

いちどもだれもおとずれることのなかった、自分の家（今日きたみんなのことはべつとして）。そして、さいごのひとり、自分自身が去ろうとしている家でした。ですがそれは、ロビーにとっての、大いなるしめいのためなのです。ほこりとそんげんのためなのです。そのた

めならば、きつと、この暗くてさびしげなほらあなも、やさしく、主人を送ってくれることでしょう。旅立ちとは、そういうものなのです。そして、人が旅立つことは、だれにもとめられないのですから……。

ロビーはげんきを出して、わが家にさいごのおわかれのまなぎしを送ると、ゆつくりと、前にむきなおつていいました。

「さあ、いきましよう。」

そして、三頭の馬たちはかけ出していきました。もうすつかり、夜のどばりにおおわれてしまった暗い森の中を、まようことなく、はつきりと、かれらは進んでいったのです（ベルグエルムを先頭に、ライアンとロビーの白馬がすぐうしろにつづき、フェリアルがさいごにつきました。これは、守るべきたいせつな人をまん中にするので、前とうしろの守りをかためることができるためなのです）。

ロビーにとって、馬に乗ったのは、これがはじめてとあっていいものでした。せいかくには、小さかったころの遠いむかしに、乗ったきおくがあるわけですが、それは、ただのきおくでしかなく、馬に乗ったけいけんおよびのには、ほど遠かったのです。ですからロビーは、まったく馬というものになれていませんでした。とうぜん、馬をあやつるなんてことはできっこありませんでしたし、じつさい、この馬にまたがるときにだって、そうとうくろうしたのです（みんなの手をかりて、よいしょよいしょ！ひとしごとでした）。

ですから、これまたとうぜんのことながら、たづなを持って馬を走らせているのは、前にすわっているライアンで、ロビーはライアンの中からだにしがみついて、うしろにまたがっていました。そのおっかなびつくりにしがみついているすがたは、ちよつとおかしくも見えましたが、ロビーにとっては、そんなことにかまっているよゆうなどはありませんでした。つまり、なんとかふり落とされないようにがんばることだけで、せいっぱいだったのです（ライアンの方は、大きなおおかみのロビーにしがみつかれて、うゝん、といった感じでしたけど）。

こうして一行は、夜の森の中を進んでいきました。いくつものしげみをぬけ、急な坂道をのぼり、おり、たくさんの広場を越えました。森の住人たちは、もう自分のすみかにもどって夕ごはんのしたくに取がかかっているころあいでしたので、森の中には、だれも出歩いている者はおりません。もつとも、馬のかける大きな音にびっくりして、みんなどこかに、ひっこんでしまっているのかもしれませんが。ロビーはそのことも考えて、なるべく人の家のそばはかけていかないようにとお願ひしていました（かれのやさしさと気づかいが、よくあらわれていますね）。

しばらく進んでいくと、やがて、ひとつのあけた広場に出ました。ここは、森の街道が重なりあうところで、住人たちが集会をひらいたりおしやべりをしたりするのに使っているところでした。切りかぶりをりようしたベンチがいくつもならんでいましたが、そこに腰かけている者は、今の時間ではだれひとりとしていません。そして、すぐにわかるこの広場のとくちようが、ひとつありました。この広場の地面は、ほかの広場とちがって、すみずみまで草がきれいにかり取られていて、手いれがよくゆきとどいていたのです（これまでも広場はいくつも越えましたが、どれもみんな、草がぼうぼうに生えておりましたから。そのちがいは、この暗い森の中でもすぐにわかったのです）。さて、それはなぜかといいますと、この広場のすみには、ほかの広場にはない、あるとくべつなものがあつたからでした。それは、いっけんの家でした。そしてそれは、ただの家ではなかつたのです。お店でした。そう、それは、かなしみの森の中でゆい一つのお店。「ぎつか屋および食りよう品店」である、スネイル・ミンドマンのお店だったのです。店のまわりには、手いれのよくゆきとどいた大きな花だんがあつて、花だんは色とりどりの花々でかざられていました（ざんねんながら、今は暗くてよくわかりませんが）。そしてその手いれによさが、店のまわりのみならず、この広場全体にまでゆきとどいていたのです。

この広場がよく手いれがされてぴかぴかなわけ。それはつまり、店主であるあなぐまのスネイル・ミンドマンの、人のよさと、草木に対

する深いじょうねつのためでした（なにしろかれのお店には、ありとあらゆる庭いじりの道具や、なえどころが、そろっているくらいでした。おかげで、一部の気心の知れた住人たちからは、「スネイルのえんげい用品店」という店の名まえに変えたらどうだ？ とからかわれていたのです）。

そしておりしも、ロビーたちがこの広場にやってきたちようどそのとき。このスネイルのぎつか屋および食りよう品店は、店じまいの時間をむかえたところだったのです。つまり、野うさぎのこくげん（みなさんの世界でいえば午後の六時くらいでしょうか？）にあたりました。そのため、店のまわりにあかりはなく（暗くなつてから店がしまるまでは、店のまわりにランプのあかりがともされています）、入り口からみられる店内のしようめいだけが、ぼんやりと、広場をうすくつらしていたのです。空はまつくらでした。暗い雲はほとんど立ちこめていって、ほんらい星空のあるべき場所にじんどつて、あつくたれこめていました。そして、そんな暗い空の下。店のそとでは、ちようど、店主であるスネイルほんにんがいて、店じまいのしたくにあたつてるところだったのです。

スネイルが馬のかける音に気づいてこちらをふりかえり、ロビーたち一行とはちあわせたのは、ロビーたちがこの広場にはいったのと、ほとんどいつしよのときでした。ですから、もしロビーがスネイルのことに気がつかなかつたのなら、ロビーは馬の背に乗ったまま、自分がこの広場を通つたということにすら気づかないうちに、この場所を通りすぎてしまつていたことでしょう。それほど、一行の馬ははやくかけていたのです。

「すいません！ どうか馬をとめてください！ すこしのあいだけ、とめてください！」

ロビーは大声を上げて、みんなに馬をとめてくれるようにたのみました。ロビーの声にこたえて、三頭の騎馬たちは、それぞれ「ひひん！」と大きくいなないて、そのかけ足をとめます（といっても、あまりにはやかつたので、とまったころにはこの広場を大きく越えてしまつて、それからひきかえしてきたのですが）。

ロビーは、この森を去ってゆく前に、どうしても、そのことを森のだれかに伝えておかなければならないと思いました。それは、自分のためにみんなにこわい思いをさせてしまったという、つぐないの気持ちからでした。どういうかたちによせよ、自分が森から出ていけば、森の人たちは、このさき、安心して暮らしていくことができるでしょう。ロビーはそのことを、だれかに伝えておいてもらいたいと思ったのです（いずれしぜんとうわさが広まるとは思いますが、今いっておけば、もっと早く安心できるでしょうから）。

それには、このあなぐまのスネイル・ミンドマンにたのむのが、いちばんだと思われました。なにしろここは、森でゆいいつのお店でしたので、森中からお客さんがやってくるのです。ですから、まっさきとうわさ話が広がるのも、この場所からでした（そのうえ、スネイルはロビーと話しをしたことのあるゆいいつの森の住人でしたので、ロビー自身もかれに対して、話しがしやすいということもありました）。ですが、とうのスネイル自身は、これはもう、おどろきときょうふでいっぱいになってしまっていて、とてもれいせいには、ロビーたち一行に対してせつすることができずにいきました。それはつまり、スネイルが明るい店の前にいたのに対して、ロビーたち一行は、ほんたいに、その暗がりの中にいたからでした。それってどういうこと？

これは、じつさいにたいけんしてみればよくわかるのですが、暗い場所から明るいところにいる人は、よく見えるのですが、明るいところにいる人からは、その暗がりの中のようにすは、はつきり見て取ることができないのです。ですからスネイルには、とつぜんにやってきたこのしつ黒の騎乗の者たちが、どういう者たちであるのか？ ぜんぜんわかりませんでした。とうぜんそれが、森はずれのほらあなに住んでいるおおかみだなんてことは、このときのスネイルには、まったくわからなかつたのです。スネイルにとっては、なにかとつともなくおそろしげな魔王の使いかなにかが、自分に害をなさんとして、とつぜん、このくらやみの中からあらわれたかのように思えました（はじめ、ロビーが自分のところにやってきたベルグエルムたちに対して、おそれをいだいたときのことを、思い出してみてください。ちょうど、あ

んな感じだったのです)。

「みなさん、すこしの時間だけ、かれにおわかれのあいさつをして、
ことをゆるしてください。」ロビーは、みんなにことわって馬からお
りると、スネイルの方に静かに歩みよっていきました。しかし、これ
できようふがさいこうちようにたつしてしまつたのは、スネイルだつ
たのです。なにしろ、顔の見えないまつ黒で大きななにかが、同じく
しようたいのわからない仲間たちのことをしたがえて、自分のもとへ
と近づいてこようとしていたのですから、それもそのはずでした。

スネイルは、思わず身がまえて、えんげいの道具るいを見やつてい
ちばん「武器」になりそうなものをえらんでひつつかむと(さきの分
かれた長いすきでした)、きようふにかられてさけんでしまつたの
です。

「そこでとまれ! とまるんだ!」スネイルは、あらんかぎりの声で
さけびました。ロビーは思わず、びくつとして、その場に立ちすくん
でしまいます。

しばらくおいて、スネイルがふたたびどなりました。

「おまえたちがなに者であろうと、わしの家をきずつけるようなま
ねは、だんじてさせんぞ! だんじてだ! 今すぐ帰れ! さもない
と、このすきのいちげきをくらわせてやるぞ!」

スネイルは、自分の持つ勇氣のそのさいごの一てきまでふりしぼつ
て、このしようたいふめいのやみの者に立ちむかいましたが、そうい
いながらも、からだ中ががくがくふるえて、顔はあせでびっしよりに
なつてしまつていました。

このスネイルの反応には、ロビーだけでなく、うしろにいるベルグ
エルムたちも、とてもびくつきりしてしまいました。じっさい、ベルグ
エルムとフェリアルは、ロビーのことを守ろうと、もうすこしで腰の
剣に手をかけて、ふたりのあいだにわつてはいろいろかとしたほどで
す。しかしそれも、ロビーが口をひらいたつぎのしゅんかんまでの、
ほんのつかのまのことにすぎませんでした。ロビーは、さいしよは
びくつきりして、思わずしりごみしそうになつてしまいました。すぐ
に、相手の気持ちを考えてものごとをおこなおうとする、自身のその

思いやりの気持ちをはたらかせたのです。つまり、スネイルの気持ちをおしはかつて、かれをこわがらせないように、すぐにごかいをどうとつとめました(これには、ベルグエルムたちのごかいをとくともふくまれていました)。

「待って！ 待ってくださいスネイルさん！」ロビーは両手を大きくかかげて、けんめいになっていいました。「ぼくは、森はずれのほらあなの、おおかみです！ ぼくは、あなたをきずつけようとしているではありません。あなたにお話ししておきたいことがあって、こうして、やってきたわけなんです。どうか、ごかいなさらなくてください！」

これをきいて、スネイルはさいしょ、いぶかしげな、うたがわしげな顔をして、この声のもととなる人物のことを、じろじろながめやっていますでしたが、やがて、どうにかなつとくしたかのように、こわごわ口をひらきました。

「森はずれの、おおかみさんですって？ これはこれは、いったい、どういったわけなんです？ 近ごろじゃ、めつたに、買ひものになだってお見えにならないというのに。それも、こんなおそくに。」

そういつて、スネイルは持つていたすきをおろしました(それでもすこしだけ、まだ用心しながら、そのすきをにぎりしめていました)。

ロビーは、やつとのことで胸をなでおろして、スネイルのそばに歩みよりました(ねんのため、両手は頭の上に高くかかげたまま、ゆつくりと近づいていきました)。近づいていくにつれ、スネイルの顔からはきようふの色が消え、もとの人のいい、あなぐまのスネイル・ミンドマンにもどっていきます。そしてかれは、ロビーのことを見上げると(ロビーの背だけは自分の二ばいほどもありましたから)、それがまぎれもなく、自分の見知っている森はずれのおおかみであるとかくにんして、大きく肩で息をつきました。

「ふうー！ わたしはまた、なにか、どこかの魔王の手さきかなにかがやってきたのかと思いましたよ。ほんとうに、きもをひやしましたぞ。もうちよつとで、わしは、あんたと、さしちがえるかもしれない

ところだった。」

スネイルは、なかば怒ったような口ちようでいいましたが、じつさに怒っていたというわけではありませんでした。ですが、言葉の身はほんとうのことで、スネイルは、それがごかいだということがわかって、今、心の底からほつとしていたのです。そしてロビーはといいますと、これは、思いもかけず、スネイルのことをこわがらせてしまったことで、すっかり申しわけない気持ちになってしまっていました。ですけどどうにか、ごかいもといってもらえたようなので、その点にかんしては、ロビーはスネイル以上に、ほつとしていたのです。

「ほんとうに申しわけありませんでした、スネイルさん。あなたをこわがらせるつもりは、ぜんぜんなかったんです。ほんとうにすみませんでした。」ロビーはペこペこ頭を下げて、スネイルにあやまりました（それでもスネイルの背がちっちゃいので、ロビーの頭はまだ、スネイルのずつと上にありましたが）。

「ぼくがここにきたのは、スネイルさん、あなたにぜひとも、しらせしておきたいことがあったからなんです。つまりぼくは、もう、この森を去らなくてははいけません。去らなくてはいけないときが、やってきたんです。南の地へむかうときが、やってきたんです。」

これをきいて、スネイルはとてもびつくりして、目をまるくしてしまいました。そしてかれは、たじろぐような、ひるむような、そぶりを見せながら、しばらくぼうぜんとしていましたが、やがて、すべてになつとくがいったかのように、なんども小さくうなずいて、ロビーの手を取っていいました。

「お、お、なんということだ……。なんということです。やはり、そうでしたか。旅立つときが、やってこられたのか。」

スネイルはロビーの手をにぎりしめながら、すっかり感きわまつてしまっていました。ですが、この反応にすっかりおどろいてしまったのは、ロビーです。なにしろ、自分が旅に出ようとしていたことなんて、もちろん、だれにも話しておりませんでしたから、それもそのはずでした（もちろん、ベルグエルムたちが前もって、スネイルに話したわけでもありません。どうしてスネイルが、そのことを知っていた

ののでしょうか?)。

「さあさあ、中へおはいり。火のそばへ。あたって、話しをしよう。」スネイルはロビーのことをひっぱって、店の中へあんないしようとしましたが、ロビーには、それにこたえることはできませんでした。ロビーはふりかえって、ベルグエルムたちのことを見ました。かれらはただだまって、こちらのようすを見守っておりました(ですが、ロビーとスネイルの話は、すべてかれらの耳にもとどいていました)。

ロビーは、この旅がさきを急ぐ旅であるということをし、じゅうぶんにしようちしていました。ですからここで、あんまりぐずぐずしているわけにはいかなかったのです(今もむりをいって、時間をもらっているのですから)。ロビーはスネイルのさそいをていちようにことわって、「さきを急がなくてはならない」ということを伝えました。

「申しわけありません、スネイルさん。ぼくは、さきを急がなくてはなりません。あそこにおります、ゆうかんなる旅の友人たちといっしよに、南の地へとむかうんです。ですから、スネイルさん、どうか森のみんなに、よろしくお伝えくださるようお願いしたいんです。」これをきいて、スネイルはとてぎんねんそうに、ロビーの手を放しました。

「そうか……、ぎんねんだ。もうすこし、あんたの話をききたかったのだけど。」

しかし、そこでスネイルは、急にとてもだいじなことを思い出したらしく、手をぱん! と大きくたたいていったのです。

「そうだった! そうそう! あんたに、ぜひ、渡したいものがあるんだ。ちよつと、待っててくれよ。そのくらいならよかろう?」スネイルは、そういって、店のわきにあるものおき小屋の中にかけていきましました。

小屋の床にはとこせましと、じやがいものふくろや、とうもろこし、らつかせいのおくろなどがつまれていました(そのため、なんととなく、スネイルはふくろに足をひっかけて、ころびそうになっていました)。そして、たくさんのなえどこや若木のたばを乗り越えた、そのさき。いちばんおくのたなの上に、大きくて長いがんじようそう

な鉄のはこがひとつおかれていて、それには、これまたがんじょうそうな、大きなじょうまえがひとつかけられていたのです。

「ほい、かぎは？と。どこいった？」

スネイルはあちこち飛びまわって、いつたりきたりをしていましたが、やがて、かぎをかくしておいたえんとつのすきまのことを思い出すと、その場所から、まるでこわれものでもあつかうかのようにしんちようになって、そのかぎを取り出しました。それは、すすけてほこりだらけになってはいたものの、美しいししゅうのはいった青いぬのにくるまれていて、だいにじにしまつてあつたようでした。スネイルは、そのぬのの中から銀色にかがやく大きなかぎをひとつ取り出すと、その手ざわりをしばらくたしかめたあと、それをはこのじょうまえにさしこみました。かぎがまわり、はこがひらきます。それからスネイルは、大きく「ほおーっ。」とため息をついてから、その中にだいにじにしまつてあつたものを取り出しました。

それは、ひとつりの剣でした。そうしよくはひかえめでしたが、にぶくふしぎながかき方をするさやにおさめられていました。スネイルは両手でそれをかかえ（その剣は小さなスネイルにとつては大きすぎました）、そしてそれといっしょに、肩にはじょうぶそうなりユツクサクク（これまたかれには大きすぎるものでした）をひとつしよつて（というよりも、ほとんど地面にひきずつて）、ようやく小屋の中から出てきたのです。そして、ロビーのところへひよこひよこやってきますと、かかえた剣をロビーにむかつてさし出しました。

「ほら、こいつだ。」

ロビーはびつくりしながら、おそろおそろ、その剣を手に取りました。長すぎもせず、重すぎもしません。それは、ロビーにびつたりをつくりになっていました。ロビーはつかをにぎって、その剣をすこしだけぬいてみましたが、そのやいばはとても美しく、そしてすこしだけ黒っぽく、かがやいていました。まるで、やいば全体が、つめたいきよらかないずみの水にひたっているかのように、にぶく、そして、ことうごうしく、光っていたのです。

「どうだね？ りっぱなもんだらう？ じつは、こいつをおまえさ

んに渡すようなのまれて、わしは、もう、なん年ものあいだ、ずっとあずかっていたんだよ。おまえさんが南の地へ旅立つという、そのときに、渡してほしいとな。もし、これを渡すそのきかいがなければ、こいつはこのさき、ずっと、このわしの家に眠らせておいてもかまわないうことだったんだがね。だが、とうとう今日、ついに、そのきかいがおとずれよった。」

剣を手にしたロビーのことを見て、スネイルはすっかり、こうふんしてしまっていました。それにくらべて、ロビーの方は、なんとも、きまりが悪そうです。

「これはいつたい、どういうことなんでしょう？　なぜ、ぼくにこんなものを？　いつたいだが、なんのために、おいていったんではないか？」

剣をもてあましながら、ロビーがたずねました。するとスネイルは、ちよつとのあいだ、頭をひねっていました。やがて、やっと思ひ出したようで、こんなふしぎな話をはじめたのです。

「あれは、今から三年前の、冬の日のことだったと思うが。それとも、四年前だったかな？　そう、こんな、暗い夜のことだったよ。わしが、店のかたづけをはじめたころだ。だからやっぱり、野うさぎのこくげんだったんだな。ふいに、くらやみのむこうから、なにか、地面をたたくような音がきこえてきた。すぐにそれは、馬のかける音だとわかったんだが、その音は、まばらな感じだった。わかるかね？　まばらなんだ。地面をかけたか、とびあがったりしているかのようには、まばらだった。そしてすぐに、それは、わしの店の前までやってきた。まっ黒な馬と、まっ黒な騎士だったよ。わしはもう、おそろしさに、ふるえ上がったもんだ。それらは、まるで影のように、ゆらゆらと、やみの中でゆれておった。わかるかね？　まるで、だんろにかかったやかんの湯気みたいに、ゆれてるんだ。わしは、もしかしたら、まぼろしか夢でも見てるんじゃないかと思ったんだが、すぐに、そうじゃないということが知れた。そいつが、口をひらいてしゃべったからだ。」

「そいつは、からだ中をまっ黒なマントでおおっていて、顔もまっ

く、見えなかったが、しゃべっている、その口もただけは、見て取れたんだ。ひげがあったように思ったかな？ そうじゃなかったかもしれんが。とにかくそいつが、わしに話しかけてきた。それは、思っていたよりもずっとおだやかな口ちょうで、わしはびっくりしたもんだった。こういったんだと思うよ。

『わたしは、南のくにの者です。あなたに、ぜひ、たのみたいことがある。』そういうと、そいつは、ゆっくりと、マントのすそを広げた。マントの中には、ひとふりの剣があった。そいつの腰にさしてあったんだ。そいつは、静かにその剣をはずすと、わしにさし出して、こういうんだ。

『この剣を、あずかってほしいのです。わたしのくにの剣です。見つかからないように、どこかにしまっておいてくださればけっこう。』そして、おまえさんが今持っている、その剣を、わしにあずけていったんだ。わしは、ひと目で、それがひじょうにすぐれた、かちのあるものだど、わかったよ。だから、いつてやったんだ。『こんなだいなものを、見ず知らずのわしに、たくしてしまつていいのかね？ わしは、これを、お金にかえてしまふかもしれんぞ。』つてな。するとそいつは、ひるみもせず、こうこたえたんだ。

『あなたがそうされたいのなら、そうしてくださいさつてけっこう。すべて、あなたにおまかせしよう。それは、あなたにたくしたものだから、売ってしまおうと、すててしまおうと、あなたしだいです。それと、わたしはあなたに、もうひとつ、たのみたいことがある。』

『この森のはずれに、ひとりのおおかみが住んでいる。かれは、今はまだ子どもだが、いずれ、このくにをになう者となるだろう。そして、かれが南の地へ旅立つときが、きつとやってくる。そのとき、かれに、その剣を渡してやってほしい。きつと、助けになるだろうから。ぜひ、そうしてやってほしい。』

「そのあいだ、わしは、だまつてきいておつたが、なんともいえない、ふしぎな感かくにおそわれたもんだった。まるで、わしの心が、そいつのからだの中に、すっぽりすいこまれてしまったかのような、からっぽな気分になったんだ。そいつはつづけた。

『だが、もし、あなたにそうする気持ちがないのなら、それはそれでよい。剣は、あなたのものだ。売ってしまうのもよいだろう。それに、かれが旅立つ、そのきかいに、あなたが出会えなければ、それもまた、さだめというものだ。そのきかいがなければ、剣は、どこしえに、あなたの家のそうこに、眠らせておいてもかまわない。すべては、運命のみちびくところによるものだから。』

「それだけいうと、そいつは、ふっと、音もなく馬をあやつって、もときたぐらがりの中へと消えていった。あとに残ったわしは、ただ、ぽかんとして、その場につつ立っておった。すべて、夢の中できこどだったんじゃないかと思ったよ。だが、自分が手にしている剣の重みが、夢じゃなかったということを、ゆうべんに語っておった。わしは、その剣を手にしているうち、これは、わしにたくされた、しめいであるにちがいない、と思うようになった。これは、だいにしまっておかなければならない。手放すわけにはいかない、とな。なぜ、そう思ったのかは、わしにもわからん。しいていうならば、剣がそれをのぞんでおった、とでもいうほかない。だからわしは、この剣を長年に渡って、だいにしまいつづけた。いつとうがんじょうなはこにいて、いつとうねだんの張るとつべつなじょうまえをかけた。このじょうまえには、ふしぎな力があつて、対になるかぎをもちいないかぎりには、はこはぜつたいにひらかんようになつとるんだ。

「これが、わしとこの剣との、いきさつだよ。そして、剣はあなたのものだ。ぜひ、受け取ってくれ。剣もそれを、のぞんでいるはずだ。」そのころには、ベルグエルムたち三人もロビーのそばへやってきて、その場にいたぜんいんが、ねっしんに、スネイルの話にききいつていました。そして、スネイルの話が終わると、ロビーはともおちついて、ゆつくりと、スネイルにむかっていったのです。

「この剣は……、きつと、ぼくを助けてくれるものと思います。大きな危険の中で、きつと、やくに立ってくれると思う。スネイルさん、あなたはともりっぱな方だ。あなたのような方に、この森で出会えて、ぼくはともしあわせでした。」

ロビーは、自分でも知らず知らずのうちに、ウルファの敬礼のしぐ

さを取っていました。そのすがたはいげんにみちており、その場におりましたベルグエルムたちみんなにくらべても、なんら、見おとりすることはありませんでした。

「わしはただ、自分が正しいと思ったことをしたまで。わしのかつてでしたことだよ。こんなきかいがなければ、おまえさんに、さいごのわかれをいうこともできなかつただろうね。それはそうと、もうひとつ。これは、わしから、あんたにおくりたい。持ってつてくれんか。」

スネイルはそういうと、肩にしよつていたリュックをおろして、ロビーに手渡しました。

「旅に出るのなら、こういったものがいり用だろうからね。」

リュックの中には、旅に必要な品々が、いろいろつまっていました。ロープや、くさびや、火を起こすための小ばこ。ランプに、油に、せんめん用具。ナイフに、はさみに、紙にペン。ばんそうこう、ほうた、きずぐすり、などなど。ふわふわであたたかそうなもうふも、ひとつはいつていました。しかも、どれもねんいりに手いれがなされてあつて、それもいちばん上どうなものを、えらんであつたようでした。

「いつかおまえさんが、あの騎士のいうように、旅に出ていこうというのなら、なにかわし自身としても、手助けしてやれることがないかと思つていたんだが、あいにくこんなものしか、わしにはおくつてやれん。だが、これでも、わしの店でいちばんの品ばかりを集めたつもりだよ。」

ロビーは感げきのあまり、言葉も出ませんでした。まさかこの森で、自分のことをこんなにも気づかってくれている者がいようとは思つてもいませんでしたから。

「わしはいつも、おまえさんのことを心配しとつたよ。みなは、おまえさんのことをごかいして、こわがつておるが、わしにはどうしても、そんなような者には見えんかつたな。いつも、さびしそうな目をしたつたからね。こんな目をした者が悪いやつだとは、どうてい思えんよ。だからといって、わしがどうこうできることでもなかつたから、なにもいえずにいたんだが、今日、こうして、おまえさんと話しがで

きて、うれしいよ。

「だが、もう、いかなきやらんようだな。これ以上、ひきとめるわけにもいかん。さあ、ゆきなされ。おまえさんの旅の安全を、わしは願っておるよ。」

ロビーはもう、胸がいつぱいになって、声も出せませんでした。ただだ、このあなぐまのスネイル・ミンドマンに対しての、かんしやの気持ちで、いつぱいになっていたのです。ひとみをまっ赤にはらして、ロビーはしゃくり上げて、泣いてしまいました。

「ありがとう……、スネイルさん。ありがとう……」ただ、それだけ、そういうので、せいっぱいでした。

そしてロビーは、スネイルからのおくりものをしっかりと身につけて、ライアンの乗る白馬にまたがったのです（やつぱり手伝つてもらつて）。それからロビーは、ふたたび、スネイルにむきなおつて、深くおじぎをしました。

「さいごに、「スネイルがいました。「あなたの名まえをきいたときたいんだが。」

ロビーは、馬上からせいっぱいの敬意をあらわしながらこたえました。

「ロビーです。」

「ロビー、たっしやでいけよ。わしは、おまえさんのことを、忘れはしないよ。げんきで、そして、できることなら、ふたたび、ここへもどってきておくれ。そのときには、わしは、おまえさんのことをみなにふれてまわつて、おまえさんかんげいできるようにしておくよ。」
ロビーは出発しました。そしてスネイルは、あとを見送つて、さいごにひとこと、大きな声でよばわたのです。

「ロビーー！ おまえさんは、ひとりじゃないんだ。ひとりだと思つてはいかんぞ。それを、忘れんようになあ！」

ロビーはふりかえつてさけびました。

「ありがとう！」

そして、三頭の騎馬たちは、ふたたび、夜の森の中をかけていきました。

しばらくのあいだ、四人はだまつてかけていきました。森の街道はまつくらで、人っこひとり見あたりません。道はぼはせまく、そのため、馬はいちれつになつて進んでいきました。やみはますますたれこめるばかりで、十ヤードさきのようにすらすら見通せません。ですが、先頭をゆくベルグエルムの騎馬は、まるで道をすべておぼえているかのように、まがりかどのひとつひとつを、すいすいとかけぬけていきました。

かどをまがるたびに、ロビーは、腰におびた剣のそんざいを感じました。今ではすっかり、剣は、そこになじんでいるかのようでした。まるで、あるべきところにもどつたかのように、剣もロビーも、そこにそれがあつたことだといふように、おちついていたのです。これは、ロビーにとつてもふしぎなことでしたが、「この剣に守られている」という気持ちと同時に、「この剣を守らなければならぬ」という気持ちも、心の中で、しだいに、大きさをましてきていました。剣は、ロビーの腰にあつて重すぎず、かといって、かるすぎずに、新しい主人であるロビーに、そのそんざいをうったえかけているかのようでした。

ロビーはもういちど、やみの中で、腰の剣にさわつてみました。ひんやりとした、つかの感じよくが伝わってきます。そしてそれは、同時に、まるで生きていくかのように、ロビーの手の中でふしぎないのちの力を感じさせました。

「その剣には、「ふいに、前にいるライオンが口をひらきました。「なにか、ふしぎな力があるような気がするね。」」
見ると、ライオンは、静かにさきを見つめたまま、まじめな顔をしているのです。

「ぼくも、そんな気がする。まるで、わたしを手放してはならないと、剣がぼくに、語りかけてきているかのようなんです。ふしぎな感かくです。」ロビーが、剣のことに目をむけながらこたえました。

「シープロンドについたら、ぼくの父に、その剣を見せるといいよ。父はもの知りだから、その剣について、なにかわかることがあるかも

しれない。」

ライアンの言葉に、ロビーはうつむいて、旅のことを考えました。どこまでいって、なにが待ち受けているのか？　ロビーには、まだ、なにもわからなかったのです。

「ぜひ、お願いします。ぼくも、それを知りたいから。」

ロビーは、そう言ってまた、ライアンのことを見やりました。白いマントのむこうに、とどのつた顔立ちが見て取れます。しかし、その表じようは、つねになにか考えごとをしているかのように、くもつて見えました（さきほど、ロビーのほらあなでは、あんなにもむじやきでしたのに）。ロビーは、そんなライアンのことを見て、すこし、心がさみしくなってきました。

「スネイルさんという人は、しんせつな人だね。」ライアンが、そんなロビーの心をさつしたかのように、やさしくほほ笑んでいました。ロビーはまた、スネイルのことを思いました。胸にあついものが、ふたたび、こみ上げてきました。

「ぼくは、また、この森にもどつてこられるだろうか？　気がかりです。いつか、また、かれにもういちど、ちゃんとしたおれがいいたいのだけれど。」ロビーがいました。

ライアンはだまっただまま、こんどはなにもいいませんでした。ロビーは、ライアンがだまっていることの意味を、りかいしていました。この旅には、このさき、安全の保しようなど、どこにもないということだったのです。ロビーがそうぞうできることの、きつと、なんばいも、ライアンはさまざまなことを知っているのでしょう。遠いくにこのことや、旅の道のりのこと。そして、たくさんの危険のことも。

だいぶたつてから、ライアンはようやく、口をひらきました。

「なんともいえない。ぼくたちは、さきの見えない道を進もうとしているんだから。じたいはますます、しんこくになつていくばかりなもの。きのうまでの道が、今日は安全だという保しようも、どこにもないんだ。」

ロビーはうつむいてしまいました。気持ちがしずみかけていきそうでした。そんな気持ちをふりはらうかのように、ロビーはまっす

ぐ、前を見すえました。そこにはただ、やみがあるばかりで、さきのようなすはまったく見えませんでした。

そのときには、すでに、ベルグエルムやフェリアル騎馬たちでさえ、はつきりとすがたを見て取ることができなくなっていました。ただ、たしかにそこにいるのだということをしらせる馬のひづめの音だけが、くらやみの中に、ひびいているばかりだったのです。

「でも、きぼうはいつも、ぼくたちとともにある。フェリーもいつたね。うん、そんなに深く考えこむのは、よくないね。ぼくも、すこし、悪いふうに考えすぎちゃった。ごめんねロビー。」

そういうとライアンは、また、ロビーのほらあなで見たような、むじやきな笑顔を見せました。それは、ロビーのしずみかけていた心を、やさしくいやしてくれる笑顔でした。ロビーはかんしゃしました。そしてそれと同時に、ライアンも自分と同じに、おそれや不安を感じているのだということを知ったのです。ロビーは、自分がライアンにたよりすぎたということ、はずかしく思いました。

「ごめん。ぼくの方こそ、しっかりしなくちゃいけない。ありがとうライアンさん。おかげで、げんきが出ました。きみがいつしよにいてくれて、ぼくはうれしい。みんなでがんばりましょう。」

ロビーの言葉に、こんどはライアンがはげまされた番でした。

「どういたしました。こつちこそ、ロビーみたいな仲間がいてくれてうれしいよ。いい伝えのきゆうせいしゆが、こんなにもやさしい、ふつうの少年だったなんておもしろいね。でも、だからこそ、世界をすくう力があるのかもしれない。」ライアンは、そこで思わず、「ふふふ。」と笑いました。「悪い意味じゃないよ。ほんきでそう、思ってるんだから。ロビーなら、きつとやってくれと、信じてる。」

ロビーは、ふくぎつな気持ちになりました。自分にそんな力があるとは、まだ、どうしたって、思えませんでしたから。でも、なにごともし、やってみるまではわからないですね。はじめからあきらめていては、なんにもできないのですから。ロビーはあらためて、気持ちを強くかためました。

「ぼくは、さきへ進みたい。そしてこの目で、さまざまなくちを見て

まわりたい。こまっている人たちを助けたい。」ロビーは、そつと、ですが力強く、自分のすなおな気持ちをいいました。おおかみたちのくに。人間たちのくに。きつと、自分のことを知る手がかりも、そこにあるはずです。

「ぼくも、同じ気持ちだよ。ぼくの力は小さいけれど、やれるところまではやってみよう。」ライアンも同じく、力をこめていいました。

「ロビーなら、うまくやれるさ。気持ちの強い人だもの。」

そしてふたりは、ふたたび、やみの中へとむかって馬を走らせていききました。

かなしみの森は、もうすつかり、夜になっていました。かなしみの力がはたらくのか？ それとも、もともとなのか？ だれにもわかりませんが、この森の夜は、ほかの森の夜にくらべて、ことさらに暗いように思えます。そのうえ、今日はとくに、それに追いつくかをはかるかのように暗く見えました。暗い雲はどんとどんとひきよせられるいつぽうで、まつたく、吹きちつていくそぶりを見せません。風がぴゅうぴゅうと吹いていました。北の、名まえも知らない山々から吹きおろされるつめたい風が、馬上にいる四人には、ますますきびしいものとなってとどきました。

それからまた、どのくらいいきよりを走ったでしょうか？ 一行は、ふいに、水音のひびき渡る川の流れのふちにたどりつきました。足もとは、もう、水ぎわにまでたっして、あやういところで、馬はそのまま、川の深みの中にまで飛びこんでいってしまうところだったのです。

みんなはあわてて馬の足をとめると、流れのふちに立ちつくしました。水ぎわは、このまつくらな森の中でもぴかぴかとかがやいて見える、きれいな小石やじやりに、おおわれております。そのため、馬が足をふみしめるたびに、ざくざくという、ここちのよい音を立てました。

さきに立つベルグエルムとフェリアルは、しばらく、ふたりでよりあつて言葉をかわしあつていましたが、やがて、ロビーとライアンの

白馬に歩みよっていいました。

「この場所は、よそうがいです。わたしたちがはじめにここにきたときには、ここは、あさせであったのに、今ではすっかり、水かさがましてしまっている。これでは、馬で渡ることはむりです。なにか、ほかの手を考えなくては。ロビーどの、なにか、よいお考えはないものでしょうか？」

ベルグエルムは、すっかりこまって、川の流れを見渡しました。水音は、ごうごうとはげしく、水の流れは、まるで、おしよせるたきのようにでした。そのうえ、川の上流も下流も、くらやみの中へと消えているばかりで、まったく見通すことができなかつたのです。まわり道をしようにも、いったいどこに、この川を渡れるようなところがあるものか？ まったくけんとうもつきませんでした。

ですが、この川のことをよく知っている者が、かれらの中にはひとりいたのです。それはロビーでした。知っているというよりは、ロビーはこの場所のことを、よく「おぼえて」いたのです。なぜかといえますと、ロビーはいぜんに、この川にきたことがあつたからでした。去年とおとしの夏のことでしたが、ロビーはこの川に、魚つりに出かけてきたことがあつたのです。あまりつれなかつたものですから、くやしくて、よくおぼえていました（ですから、今年の夏はほかの川へいきました。ちなみにロビーは、自分のほらあなからずつと歩いてここまでやってきましたので、ずいぶん遠くに感じていましたが、その川にもう、ついてしまったということを知って、今、いささか、おどろいていました。あらためて、馬という生きものの足がはやいのを、思い知らされたものだったのです）。

さて、ロビーはこの川のことについて、森の住人たちがうわさ話をしてるのをきいたことがありました（それはもちろん、スネイルのお店ででしたが）。つまり、この川は森の精霊たちのしはいしているところなのであつて、川の水の流れは、その精霊たちの力によって、さまざまに表じようを変えらうというこらしいのです。このあたりに住んでいる精霊たちは、水をなによりもあいする、水の精霊たちであり、とくに、この川のきよらかな流れを好んでいました。まいばん、自

分たちの力のもつとも強くはたらく時間には、精霊たちはより集ま
て、はるか上流にあるというみずうみから、かがやく水のしずくをは
こんでくるといいます。そのため、夜の川の流ればいきおいをまし、
水かさは、ひるまとはうって変わって、ふえるのだそうでした。そし
て精霊たちは、その流れのエネルギーを、みずからの力としてたくわ
えるのだということです（あくまでもうわき話でしたので、ほんとか
どうかはわかりませんが。それにロビーは、そんなにしっかりと話を
きけたわけでもありませんでしたし。それはつまり、ロビーがそばに
よつたら、住人たちはこわがって、逃げてしまったからなのです）。

「この川の流れは、この森に住む精霊たちの力によって、いきおいを
ましているそうです。たぶん、ですけど……。夜のあいだには、この
流れがおさまることはないと思う。でも、ここで朝を待つわけにはい
かないから、やつぱり、ほかの方法を考えなきゃならないと思いま
す。」ロビーは、せいっぱいの言葉をえらんで、そうこたえました。

ロビーの言葉をきいて、それからみんなは、しばらく、じつと水の
流れに目をこらして考えこんでいました。なにか、川を渡るうまい手
は、ないものでしょうか？（みなさんならどうしますか？）

そんなみんなの目に、川の水しづきがいたずらっぽく、きらきらと
かがやいてうつりました。ふしぎなことに、その水しづきは、このか
なしみの森の、このまっくらな夜のやみの中でも、はつきりと見て取
ることができたのです。まるで、水そのものが、いのちを得ているか
のように、空中で、はねとび、まいおどり、あちらこちらへとちつて
いきました。

そのようすをもつともねっしんに見つづけていたのは、白きシープ
ロンの王子、ライアン・スタッカートでした。ライアンは、まるでそ
こになにかがいるかのように、水しづきのひとつひとつを目で追いや
りながら、ながめていました。ふいになにかを思いついたかのよう
に、馬の背から、水ぎわの美しいじやりの上へとおり立ったのです（残
されたロビーも、あわてて、馬の背から地面に飛びおりました。ひと
りで馬に乗っていたら、落っこちるかもしれないからです。ライ
アンは思わず、「あ、ごめん。」といいました）。

水ぎわの美しいじやりの地面と、負けなくらいに美しく気品のあ
る、ライアンの白馬。そして、白の衣服に身をつつんだ、美しいライ
アンほんにん。その光景は夢のようにげんそう的で、まるでそこだ
け、夜のやみ取りのぞかれてしまったかのようでした（これぞまさ
に、ファンタジーの光景！ポスターにしてかざっておきたいくらい
です）。

その中に立って、ライアンは、その美しい白いきぬの衣服のポケッ
トから、なにかのふくろを取り出しました。それは、見たこともない
ような、ふしぎな生きものの羽から作られた、白くふわふわとしたふ
くろでした。そしてライアンは、ふくろの口をあけて、中のものを取
り出しながらいいました。

「ロビーのいったことは、まったく正しいね。この川の流れば、精霊
たちの力によるものだよ。精霊の力には、ぼくたちの力ではかなわな
いんだ。たとえ、いちばんゆうかなな兵士が、たばになってかかった
としてもね。精霊たちの力を、けがしてはいけない。」

ライアンはそういって、仲間たちの方をふりかえりました。

「つまり、精霊たちの力は、強さだけじゃ、はかれないってことだよ。
だから、ぼくらのやることはひとつ。精霊たちの言葉に耳をかたむ
け、かれらに話しかけて、この川を渡らせてください、って、心から
お願いすることだね。」

そしてライアンは、ふくろの中身をかかげたのです。それは、美し
くかがやくすいしようの小びんでした。びんの中には、さまざまな色
に変わって見える、とうめいなえきたいがおさめられております。ラ
イアンは、それを頭の上に高くかかげると、川の流れの前にさし出し
ました。

「このびんの中には、シープロンドの聖地、タドウーリ連山の源流か
らくまれた、わき水がはいってる。ぼくたちは、これを、土地の精霊
たちとの交流のために使ってるんだ。水の精霊に対しては、ききめが
あると思うよ。この水の力をかりて、この川にいる精霊たちと話しが
できるか？ やってみる。」

ライアンはそういって、川の流れに近づきました。白いブーツのつ

まさきが水についてぬれるくらい、水ぎわのすぐそばにまで歩いていきます。みんなは、そのようすをうしろからじっと見守っていました。が、ふしぎなことに、ライアンのいるそのまわりだけ、なにか、かげろうが立っているかのように、ゆらめいたり、ぼやけたりして見えませんでした。その中でライアンは、手にしたすいしよのびんを流れの中にむけてかかげ、なにかをてらし出しているかのように、その位置や、むきを、なんども変えていたのです。

しばらくすると、もつとふしぎなことが起こりはじめました。びんの中の水が、きらきらとした青いかがやきを放つようになつたのです。そしてそのかがやきは、やがて、びん全体をつつんでいくほどに強くなりました。びんを持つライアンのまわりには、青と白にかがやく、たくさんの光がまいちっています。その光は、まるでダイアモンドのこなをちらしたかのように、きらきら、ぴかぴかと、またたいていました。

そして、よく見てください。その光の中を美しいかがやきにつつまれながら飛びまわっているのは、まさしく、この森に住むという、水の精霊たちではありませんか！（そのすがたはとても小さなもので、ひとりひとりの精霊の大きさは、ほんの一インチにもみたないのでした。）かれらは、びんの中のきよらかな水の力にひきつけられて、ついには、ロビーたち旅の一行の前に、そのすがたをあらわせるほどまでに、その力を大きくさせていたのです。それほど、ライアンの持つ、このせいなる源流のわき水の力は、たぐいまれなる、「くらい」の高いものでした（みなさんは精霊というものを見たことがないかと思いますが、それはとうぜんのことでした。精霊というものは、空気の中にひっそりとかくれ住んでいる者たちなのであって、わたしたちの目には、見えなかつたのですから。よつほど、その精霊が力にあふれていないかぎりは見えません。ここで、ロビーたちの目に精霊たちが見えたのは、この精霊たちの力が、ライアンの持つせいなるわき水の力によって、それほどまでに強くなっていたからでした。）

精霊たちは、ライアンのまわりにより集まって、その手もとからあふれる水の光を、からだいっぱいにあびようと、あっちへすいすい、

こつちへふわりと、その小さな美しい青い羽をはばたかせていきます。

りる、る、る、りる、きれいだな。

らり、ら、ら、らり、ら、いいきもち。

りる、る、る、りる、いいよいよ。

らり、ら、ら、らり、みずをおくれ。

光の中から、小さな小さな歌声がきこえてきました。それは、とてもかすかな、ささやきのような歌声でしたが、その声はとても美しく、まるで、心の中にちよくせつひびいてくるかのようにでした。そしてその歌声は、ひとつまたひとつと、あちらこちらからさそわれて、つぎつぎとわき起こっていったのです。

いいよいよ、みずをおくれ。

きれいな、そのみずをおくれ。

今や、あたりはたくさん美しい光と、その中を飛びまわる水の精霊たちのすがたで、あふれかえってしましました。青白くかがやくその光は、どこまでもすみきったきよらかさを、放っております。そしてその光は、ただしんしんと、目にうつす者の心の中にしみこんできました。

ベルグエルムもフェアリアルも、もうとつくに馬からおりて、この美しい光景に見いつてしまっていました（たとえだめだといわれても、とてもがまんがでしなかつたでしょう）。かれらは精霊というものを、今までいちども見たことがなかつたのです。それは、この森に長らく住んでおりましたロビーであったも、同じことでした。しかも、こんなにかくさんの精霊たちをまのあたりにすることができるなんて、思ってもいないことだったので。さらに、さきほどまでは水のしづきにしか見えませんでした。川の水めんではねまわっているものが、すべて、精霊たちのまいおどっているすがたなのだということ

を知ったときの、三人のおどろきようつたらありませんでした。

かれらはただ、口をぽかんとあけたまま、なにもいうことができませんでした。それにひきかえ、とうの精霊たちは、そんなかれらにはまったくおかまいなしに、歌っておどつて、まるでせいだいなダンスパーティーでもひらいているかのように、にぎやかに楽しくやっていたのです（かなしみの森のかなしみの力なんて、この精霊たちにはまったくききめがないみたいですね）。

そして、さあ、それではいいよ、ライアンとかれらの話しあいのはじまるようです（じつのところ、精霊たちとの交流にはなれているはずのライアンでさえ、こんなにもはつきりと、しかも、たくさんの精霊たちに出会えるなんて、思っています。ですから、かれもまた、ほかの三人のウルファたちと同じに、感じきとおどろきの気持ちでいっぱいになってしまっていて、精霊たちのことを、ただ、ぼーとながめてしまっていたのです。ほんとうなら、もうとつくに、かれらに話しかけてもいいころあいでしたのに、なかなか話しあいがはじめられなかったのは、こういうわけがあつたからでした。もちろんライアンは、みんなにそのことを気づかれぬように、いたつてれいせいなようすをよそおっていました）。

ライアンは、自分にきたいしている三人のウルファたちのあついでに、目くばせしてこたえると、まずは、「おほん。」と小さくせきばらいをしました（これはまあ、「ぎしき」みたいなものですから）。そしてライアンは、すいしょうの小びんを両手でしっかりと持ち、それを自分の胸の前にさし出してから、ゆつくりと語りはじめたのです。

「せいなるタドウーリの名において、かなしみの森の、水の精霊たちよ。このきよらかなる流れの守り手たる、水の住人たちよ。われの語りかけに、耳をかたむけたまえ。この声をききたまえ。」

ライアンは、いげんにみちたいいい方で、おごそかに精霊たちに話しかけました（まるで、今までのライアンとはべつじんのようだど、口ビーは思ったものです）。すると、あたりの空気が、いっしゅん、波が立ったかのようにざわめきました。さきほどまで、あつちへふらふら、こつちへふわふわと、ただまいちつているだけであつた精霊たち

が、あきらかに、ライアン自身に対して、心をかたむけはじめたので
す。歌声のようにきこえていたささやきが、はつととまりました。そ
れからすぐに、そのささやきは、なんともきき分けることのできない
ふしぎな言葉による話し声に、取ってかわっていったのです。

いくつかの精霊たちのグループが、かたまりとなつて集まり、ひそ
ひそという話し声が、あちらこちらからきこえはじめてきました。そ
の中でライアンは、精霊たちのグループの中で、いちばん大きく、い
ちばん強い光を放っていた者たちに、目星をつけると、いしきを集中
させ、さらに言葉をつづけていったのです。

「水の精霊たちよ、わたしたちは旅の者です。そして、わけあって、
さきを急がなければなりません。そのためには、あなた方のこの川
を、どうしても今、渡らなければならぬのです。わたしたちには、こ
こで朝まで、あなたの方といつしよにすぎず時間がないのです。すぐ
でもこの森をぬけ、南の地へとむかわなければなりません。ですから
どうぞ、お願いです。わたしたちにこの川を、渡らせてください。」

ライアンは、せいっぱいの気持ちをごめて（そして、すつごくわ
かりやすく）、精霊たちにお願ひしました。

さあ、精霊たちのこたえは？

精霊たちはライアンの言葉を受けて、しばらくのあいだ、ざわざわ
とゆれ動いていました。それが、そうだんなのかなんなのか？ そこ
までは、ライアンでさえもわからないことでした。そして、そうする
うちに、ついに、精霊たちからのへんじがあつたのです。はじめはや
はり、小さなささやきでしたが、そのうちそれは、はつきりと耳にき
こえるようになりました。かれらのその歌声のような声は、つぎのよ
うな言葉にきき取ることができるようでした。

いいよいいよ、きれいなみずよ。

きれいなみず、みんなこのむ。

みんなこのむ、みんなこのむ。

そして、それにひきつづいて。まるでせきを切ったかのように、ま

わりの精霊たちがいつせいにしやべりはじめたのです。

いいよいいよ、きれいなみずよ。

きれいなみずを、くれるんならね。

とおしてあげる、とおしてあげる。

みんなこのむ、そのみずをおくれ。

きれいなみずを、おくれ、おくれ。

もう、あたりは精霊たちのおまつりさわぎでした。かれらのめざすものはただひとつ。ライアンの持つているすいしょうの小びんです。せいかくには、その中にはいつている、せいなるわき水の力をもとめているのです。ライアンのまわりは、われさきにと水をもとめる、なん百なん千といった数の精霊たちで、あふれかえっていました（そのせいで三人のウルファたちから、ライアンのすがたがほとんど見えなくなってしまうほどのでした）。そしてライアンは、そのまっただ中で、手にしたすいしょうのびんの口をあけたのです。

とたんに、びんの中から、まるでスノーボールの中の雪のように、さらさら、きらきらと、小さな水のつぶが空中にまいちつていきました。そしてそれは、あつというまにあたりいちめん広がっていつて、ライアンのまわりを、すつかり、おおいつくしてしまつたのです。そしてさらに、その中をよくながめてみますと、まいちる水の子ぶの、そのひとつひとつを、精霊たちがしつかりと両手にかかえながら飛んでいるということが、わかりました。

「ここに、われらシープロンをだいひょうして、かなしみの森のきよき水の精霊たちに、敬意をひょうし、このせいなるわき水をおくります。この水の力は、あなた方を助け、この川の流れを、ますます、きよらかなるものとしてくれることでしょう。あなた方がこの川を守ることを、やめないかぎり。」

ライアンはそういつて、びんのふたをしめました。びんの中にはもう、いつてきの水も残っていません。せいなるわき水は、すべて、空中をまう精霊たちの手によって、はこばれていつたのです。そして精

霊たちは、ひとりまたひとりと、いずこともなくすがたを消していきましました。おしまいには、ほんのすこしの精霊たちだけが、ちらちらとただようだけとなり、やがてそれも、どこかへと消えていつてしまつたのです。

それとときを同じくして。

目の前の川におどろくべきことが起こりました。

ライアンの立つその水ぎわから、むごうのきしにかけて、どうどうと流れる水のいきおいが弱まっていき、まるでそこだけ、いつぽんの橋がかかったみたいに、道がひらけていったのです！ みんな（ここでいうみんなとは、ライアンをのぞく三人のことです）はただただびつくりして、口をぽかんとあけたまま、目の前の光景に心をうばわれるばかりでした。なにしろ、道がひらけたその場所「だけ」が、わずか一インチほどの深さのあさせになっていて、その上流と下流には、いぜんとして、いきおいをました水の流れが、そのままごうごうと流れていたのですから！ こんなにふしぎなことって、ほかにあるでしょうか？

「さあ、今のうちだよ。みんな、早く馬に乗って。出発しよう。ここを越えれば、森の終わりまでは、すぐそこだから。」

ライアンがみんなによびかけると、みんなははっとわれにかえつて、あわてて、それぞれの騎馬たちにふたたびまたがりました（あまりのできごとに、みんな気もそぞろになってしまって、ロビーだけでなく、ベルグエルムやフェリアルでさえ、じょうずに馬にまたがることのできないくらいでした）。そして、みんなの騎馬たちは、そろそろと、おっかなびつくり、この新しくひらけたあさせの橋の上を渡っていったのです。

馬の足のふむ場所からは、かたい地面の上を歩いているかのように、しつかりとした感じよくが伝わってきます。そして、さらにびつくり。見れば、ひづめのいっぽいっぽの落ちる、ちようどその部分だけ、まるで待っていたかのようにぽっかりとまるく水がひいて、川底のきれいなじやりが、そのすがたをあらわしていききました！（つまり、

馬の足はまったくぬれていませんでした！」

「こんなことははじめてだ！ わたしは、なんてすばらしいたいけんをしているんでしょう！」声を上げたのはフェリアルでした。

「このことは、長くのちの世まで、守り語りついでいかなくては。この川も精霊たちも、すばらしい、しぜんのおくりものです。こんなにすばらしいものは、だれにもけがさせるわけにはいきません！」

そして、フェリアルのいう通り、このたいけんは、長くかれの子やまごのだいにいたるまで、語りつがれていくこととなったのです。そしてそれは、人々の心に、しぜんのすばらしさ、しぜんを守ることのたいせつさを、いつまでも伝えていくこととなりました（ほんとうにすばらしいことです。ところでフェリアルは、けっこういろんなものごとに、はげしく心が動かされやすいみたいです。ベルグエルムのおちついたもの腰とは、ちよつと、たいしよう的などころがあるみたいです）。

しばらくののち、三頭の騎馬たちと四人の仲間たちは、ぶじに、この川の流れを渡ることができました。するとどうでしょう！ 今さつきまで水がなくなつて、あさせの橋になつてくれていた場所が、あつというまに、また水に飲みこまれてしまったではありませんか！ 今ではいぜんと変わらなくらい、いえ、シープロンドのせいなるわき水の力をさらに得たぶん、水の流れはますます強く、そしてますます美しく、なっているかのようでした。

川を渡り終わったところで、ライアンはふりかえつて、もういちど、精霊たちにさいごのおれいの言葉をのべました。

「水の精霊たちよ、ありがとう！」

すると、川の中ほどに、ひとつの青い光が上がったかのように見えました。それはしばらくゆらめいたあと、ふつと、水の流れの中に、そのすがたを消していったかのようにでした。

きれいなみずを、ありがとう。

ライアンには、そうきこえたように思えました。

そして、三頭の騎馬たちは、今ふたたび、つづく森の街道にそって進んでいったのです。あたりに生きもののすがたはまったくなく、やみはたれこめつづけ、つめたい風はますます、そのいきおいをましていつているかのようにでした。森の黒い木々たちのざわめきが、すぎてゆく景色の中にあられては、消えてゆきます。その中を四人は、ただひとつのものにむかって、気持ちも新たにまっすぐかけていききました。そして、ちょうどそのころ。かれらの頭の上から、しんしんとしたつめたいものが、落ちはじめてきたのです。それは、くらやみをかける四人にとっては、なにか、ふきつなしらせであるかのように感じられました。道のゆく手をはばみ、からだのねつをうばい、つかれを大きくさせる、やつかいな相手でした。

雨がふり出しました。いやな雨でした。

3、セイレン大橋

アークランドというくにの北のはずれ。ものさびしい荒れ野が広がる土地の、さらに北に、まっくらでうすきみ悪く見える森が広がっていました。東は、はるかむこうのゆうだいでかわしい山々にまでとどき、西は、果てしなく光のとどかないかなたまでつづいているかのような、とても大きな森でした。その森は、日の落ちた今では、まったく光を受けいれることをこぼんでいるかのようにでした。そして、まるで森全体が、そこからの生きものの立ちいりをこぼんでいるかのように、中にはいろいろとする者の気持ちをしずませるのです。

このなんともさみしげな森を、みなさんの感じようであらわすのなら、どんな言葉がぴつたりくるのでしょうか？ ぜつぼう？ そこまではいきません。きょうふ？ これもちがいます。そんなにおそろしげなものでもないのです。もっとささやかなもの。おおげさすぎることもなく、小さすぎることもないもの。そう、「かなしみ」です。この森には、かなしみという言葉がぴつたりでした。雨にぬれて立ちつくしている森の木々も、水をあびて生き生きとというよりは、つめたい雨にうたれて、しよんぼりしているように見えます。まるで、よくないしらせにかなしみ、しずんでいる者たちが、より集まって肩を落としていくかのように。そんなかなしみに、この森はつねに、つつまれています。

さて、物語は、そんな森の南の終わり。そして北へむかうのならば、森の入り口でもありました、ものさびしい岩だらけの荒れ野からつついてゆくのです。

雨はいぜんとして、さあさあとふりつづけていました。寒すぎるといっほどではありませんでしたが、このつめたい雨のせいで、気温はじつさいよりもだいぶひくく、感じられたのです。そしてさらに、はらかな山々から吹き下ろされるつめたい風が、雨に味方して、あたりのいごこちをますます悪いものにしていました。

そんなさびしい荒れ野に、いっぽんの古い街道が走っていました。南北にずうっとのびていて、南ははるか切り立った岩山の中へと消え

ていき、北は暗くしずんだかなしみの森の、そのせまい入り口の中のやみへと消えている、そんな道でした。

この道は、街道といつても、馬車のいきかうようなかつきのあるものではなくて、石やでこぼこのまじりあう、すたれた道でした。もう、なん年もだれも通つたことがないかののように荒れ果てていて、馬車のあとはおろか、ひとつの足あとすらも見受けられなかったのです（もつとも、この道をもしだれかが通っていたとしても、その足あとはいくつ、この雨によつてあらい流されてしまっているでしょうけど）。それほどこの道は、だれからも忘れられてしまったかのように、ただひっそりと、消えかかりながらのびていました。

しかし、じつは、この道をごくさいきんになって通つた者がいたのです。せいかくにいえば、「通つた者」ではなくて、「通つた者たち」はつきりいつてしまえば、三頭の騎馬たちと、三人の騎乗の者たちでした。かれらは南の方からこの街道にそつてやってきて、そして、まよいなく、このかなしみの森の中へと進んでいったのです。それは、今からすこし前のこと。日のしずむ前。かなしみの森のかなしみの力が、今よりもつとうすかつた時間。雨のふり出す前のことでした。そして今、その森の中から、かれらはふたたび、この荒れ野へともどつてきたのです。いぜんと変わらぬ、まよいのない心をいだいたままです。ただひとつ変わったところはといえば、かれらが今では、三人ではなく、四人になっているところでした。

かれらは、どこにむかうのでしょうか？ なんのもくてきがあつて？ 読者のみなさんには、もうおわかりですよ。かれらは、この古い街道を越え、丘を越え、山を越え、南の地へと旅ゆくところなのです。世界のやみを、晴らすために。

ロビーたち旅の者たちは、騎馬をとめ、目の前の景色を見やりました。まったく森の中から出てきた四人には、そこはまるで、ひるまのような明るさに思えたことでしょう。そしてロビーにとっては、ひさしぶりの、ほんとうにひさしぶりの、森のそこの世界でした。これが、こんなにしんこくな旅のとちゆうでなかつたのだとしたら、ロ

ビーは、このそこの世界を、どんなにかかんげいしたことでしょう。ですが、ぎんねんながら、今はとても、そんな気持ちにはなれません。この寒空の下、つづくこの道のさきには、どんな危険が待ち受けているのか？ それはまったく、わかりませんでしたから。

空はあいかわらず真っ黒で、つめたい雨はあいかわらずふりつづけていました。四人は、マントのフードを深くかぶって、このいやな雨をさけていましたが、それも、ほんの気休めにしかありませんでした。つまり、もうぜんいんが、からだじゅう耳の中までぐっしよりになっ。てしまっていたからです（動物の種族であるかれらは、耳の中がぬれるのが、いちばんきらいだったのです）。かれらはいったん、耳をぴんぴんとふるわせて水てきを飛ばし、しっぽをぎゅつとしぼって水を切ると、馬をよせて、まるく輪になりました。

「あの丘のむこうまで、これから進んでいきます。丘を越えると、そのさきには、大きな河が流れています。セイレン河とよばれる河です。いや、むしろ今では、そうよばれていたといった方がいいでしょう。かつての美しいセイレン河は、今やすっかり変わり果て、いやなにおいのする、どろの河になり下がってしまったのです。」ベルグエルムがそういって、くやしそうにこぶしをにぎりしめました。

「それもすべて、かの魔法使いのしわざなのです。セイレン河のはるかな上流は、魔法使いのすみかとなっている、怒りの山脈にまでたっしているのです。魔法使いは、そこで、よこしまなじっけんや、悪さをおこなっていて、セイレン河の水をでたらめによごしているのだ。なんたる、おうぼうだろうか！」

ベルグエルムが、感じようもあらわにいました。しぜんのはかい。美しいもののはかい。このアークランド世界の中で、今それがおこなわれているのです。この世界をあいする者たちにとって、それは、たえがたいくるしみでした（ベルグエルムも、フェアリアルも、ライアンも、みんな同じ気持ちでいました。そしてロビーも、これを読んでいるあなたも、今のアークランドのそのじょうきょうのことを知れば、もちろん同じ気持ちになることでしょう）。

「この世界は、いつこくも早くすくわなければなりません。」フェアリ

アルがつづけていいました。「その思いは、日を追うぐことに、ましていいくいつぽうだ。わたしたちは、とにかく、急がなければなりません。」ベルグエルムがこたえます。

「その通り、われらは、急ぐ上にも急がなければならぬ。そのためには、すくなくならずの危険も、かくごしてゆかなければならぬ。うしろ。」

ベルグエルムはそういって、みんなの顔を見ました。みんなは、「それはじゆうぶんにしようちしている」といったふうに、ただだまって、うなずいてみせました（ほんとうは、ちよつとだけ、ベルグエルムの言葉に、ロビーはびくつとしたのですけど）。

ベルグエルムが前方の岩山のことを見つめます。それは、ごつごつとした、いやな感じの岩山でした。

「ロビーどの、このさきは、岩だらけの危険な道となります。じゅんちように進めればよいのですが、なにが起るのかはわからない道のり。気を張ってゆかねばならない道のりです。ロビーどののぜんなる光の力が、われらとともにありますように。」

ベルグエルムがそういって、右手を胸においていちれいしました。しかしロビーは、またしてもこまり顔です。しめいのために、世界をすくうために、大いなるこころざしを持って出発したのはたしかでしたが、まだまだ、きゆうせいしゆだとか、光の力だとかいわれても、どう受けこたえしたらいいものか？ わかりませんでしたから。ですからロビーは、ただ、自分のすなおな気持ちをもって、それにこたえることにしたのです。

「ぼくはまだ、自分になにができるのか？ ぜんぜんわかりませんが、でも、ぼくで、みなさんの助けになれることがあるのなら、よろこんで、力になりたいと思うから。」

ロビーの言葉に、ベルグエルムはやさしく、にこやかにこたえました。

「そのお心づかいが助けとなるのです。あなたには、ご自分が思っでらつしやるよりも、はるかに大きな力がおありだ。その力は、遠くならず、かならずこの世界の助けとなることでしょう。今はただ、いつ

も通りのロビーどののままでいてくださればけっこう。それでわれらには、じゆうぶんな力となりましょう。」(そのあとライオンが、「ま、かたく考えなくていいんじゃない?」といって、ロビーの腰をぽんとたたきました。「きちろくにいこうよ、きちろくに。そのまんまでさ。」)

そうして、旅の仲間たちはふたたび騎馬を走らせ、このものさびしい荒れ野の、忘れられた街道の上を、急ぎ進んでいったのです。そのとき、すこしはなれた岩山の上に、そんなかれらのことを見つめる、なにかの影がよぎったかのように思えました。それは、鳥のような、馬のような、まっ黒なもののすがたと、まっ黒な人影のようでした。そしてそれらの影は、旅の仲間たちが走り去ってゆくと、そのあとを追うかのように、くらがりの中へとすがたを消していったのです。

そこからの道のりは、とてもさびしいものとなりました(今までの森の道のりも、じゆうぶんさびしかったんですけど、それよりさらにさびしくなりました)。まわりはごごつごつとした岩だらけで、街道は、その岩のあいだをぬうように、くねくねとうねりながらつづいていたのです。そのため旅の仲間たちには、ことさらにの注意と、安全への気くばりが必要となりました。 magariかどのそのひとつひとつのさきから、なにがとつぜんにあらわれるか? わかりませんでしたから(それが、仲のいい友だちだったのなら問題はないうんですけど)。

先頭のベルグエルムをはじめ、うしろのフェリアル、そしてライオンも、危険をいつでもむかえうてるようにと、けいかいをおこたりませんでした。ベルグエルムとフェリアルは、腰の剣に手をかけつけ、ライオンも、あたりをきよきよ、ゆだんなく見張りつづけていたのです。そしてロビーも、そんなかれらにならって、あたりにぴりぴりと気をくばりながら、スネイルにもらったおくりものの剣のつかをにぎりしめました。

そして、しばらくじゆうんちように歩を進めていったときのこと。まったくとうとつに、先頭のベルグエルムが手をかざして、みんなに「とまれ」のあいずを送ったのです。三頭の騎馬たちは、ひっそりと、なるたけ音を立てないように、岩かべの影に身をよせて集まりまし

た。そして、みんなが小さくなつて集まったところで、ベルグエルムが小さな声で、仲間たちにささやいたのです。

「なにか物音がきこえる。敵かもしれない。」

みんなの顔に、きんちようが走りまわりました。ロビーは思わず、背すじをふるわせませす。

「それだと、やっかいなことになる。わたしはここから馬をおりて、さきのようすをしらべてくる。わたしがもどつてくるまで、みんなは、ここで待っていてほしい。音を立てないように。ロビーどのも、どうか、ここでお待ちを。」

そういって、ベルグエルムは馬をおりました。その手は、ゆだんなく、腰の剣のつかにかけられております。ベルグエルムのその身のこなしには、まったく「すき」がありませんでした。このベルグエルムという騎士が、ひじょうにすぐれた勇士なのだということは、戦いにはしろうとのロビーの目から見ても、あきらかでした。

「お気をつけて、隊長。」ベルグエルムの馬のたづなをあずかりながら、フェリアルが小さくささやきます。ベルグエルムは、それにうなずいてこたえると、さいごにひとこと、ロビーの方を見ていいました。

「なに、すぐにもどつてきましょう。」

ベルグエルムがいつてしまうと、あたりはますますものさびしくなりました。三頭の騎馬たちと自分たちの、息使い。そして、ふりしきる雨の音がいには、なんの物音もしません。フェリアルもライアンも、それいがいの音になんて気がつかなかつたようでした。ほんとうに、なにかきこえたのでしょうか？　ですがみんなは、ベルグエルムのことをともしんらいしておりましたので、かれの耳を信じ、言葉を信じて、待つたのです（ロビーはじめ、「ベルグエルムさんは耳がいいんですね。」とふつうの大きさの声でしゃべってしまい、フェリアルに「しーっ、お静かに。」と注意されてしまいました）。

それから、どのくらいの時間がたつたのでしょうか？　ロビーには、ベルグエルムがもう、なんマイルもさきにまでいってしまったかのように思えてきました。じっさいには、それほど時間はたつていませんでしたが（せいぜい十分くらいでしょう）、つめたい雨のふりしき

る、この荒れ野の岩影にかくれて、じつとして居るのは、とてもこたえることだったのです。そして、ロビーにとってはもう、なん時間もたったかのように思えて、ベルグエルの身が心配でならなくなつたころのこと。さきの岩の影から、ようやくかれがもどつてきました。ベルグエルのからだには、どうやらなににごともないようでしたので、みんなはとりあえず、ほつとしたものだったのです。ですが、じたいはそんなに、安心のできるようなものではありませんでした。もどつてきたベルグエルの表じようはかたく、また心配げでした。そしてベルグエルは、みんなのそばまでそつとやつてくると、大きくこきゆうをととのえてから、ようやく口をひらいたのです。

「このさきの岩場のしやめんに、動くものがある。ガイラルロックだと思う。」

「ガイラルロック！」フェリアルがさげびました（もちろんみんなから、「しーっ！」と注意されてしまいました。フェリアルは気まずそうにせきばらいをしました）。

「かれらはとてもきょうぼうで、戦いを好むかいぶつだときいておりますが。」（フェリアルがこんどは、小さな声でそつといいました。）フェリアルのように、ベルグエルがこたえます。

「そういわれている。だが、それがすべてとはかぎらない。しかし、そうであっても、かれらとの交戦は、きよくりよくさげなければ。今は、とくにだ。かれらにかかわっているよゆうなど、われらにはまったくくないのだから。」

ふたりの会話をきいて、ロビーは思わず、背すじをふるわせました。ロビーにとって、この冒険での、さいしよの大きな危険のときがせまっていたのです。ロビーはそんなかいぶつのことなんて、ぜんぜん知りませんでした。ですから、まったくしぜんに、こんなしつもんをしたのです。

「そのガイラルロックというのは、どういう人たちなんですか？ 悪者なんでしょうか？」

ベルグエルとフェリアルの会話をすこしきいただけでも、このガイラルロックというのが、かなり危険で、きょうぼうなかいぶつであ

るということが知れましたが、それでもロビーは、そんなかれらのことを、すべて悪いやつだときめつけることはできませんでした。これは、長年ひとりぼっちだったロビーの生い立ちが、大きくかわっていました。かれもまた、自分の見た目のすがただけで、おそろしくてこわい者というあつかいを受けてきたのです。ですからロビーは、だれかがそんなあつかいを受けるといことが、なによりつらいのです。たとえそれが、おそろしいかいぶつであったとしてもです。

このロビーのといに、ふたりの騎士たちはすこし、めんくらってしまいました。そんなふたりのかわりにこたえたのは、ライアンでした。

「このあたりの岩山に、むかしから住んでる、岩のかいぶつなんだ。からだはなくなつて、おつきな岩の頭だけのすがたで、ちゆうにぶかぶか、浮きながらいどうするんだよ。それで、岩をまるで、りんごみたいに、ばりばりかじつて食べるんだ。」

ロビーはぎょうてんしました。そんな生きものがいたなんて！

ロビーはあらためて、そこの世界の大きさを感じたものだったのです。

ライアンがつづけます。

「日の落ちる前、ロビーをたずねにいくときにも、ここは通つたんだけど、かれらのすがたは見られなかった。だから、このあたりには、かれらはこないんじゃないかと思つただけど、あまかつたみたいね？ ベルグ。」

「かれらは、夜ごうせいなのです。」ベルグエルムがこたえていました。「ひるに動きまわることもあるが、それは夜にくらべたら、もの数ではない。だから、わたしはできれば、ここは通りたくなかったのだが、ここをうかいしていけば、シープロンドまではなん日もかかつてしまう。それは、さけなければならぬ。たしよの危険をおかすことにはなるが、われらは、どうしても、この道をゆかねば。」

どうやらかれらは、このあたりの道が、ガイラルロックたちに出会うかのうせいの高い、危険な場所であるということを、しようちしていたみたいでした（フェリアルは知らなかつたみたいですけど。「さ

きにいつてくださいよー！」とフェリアルは、ちよつとベそをかいていました。ベルグエルムは本などを読んで、ガイラルロックたちのことをよく知っておりましたし、ライアンにいたっては、じっさいに、かれらに会ったことさえあったのです（ととっても、遠くからそつとながめただけでしたが。すぐ逃げましたから）。

さて、みんなはどうするのでしょうか？　しかし、みんなの気持ちはすでにかたまっていました。かれらは急いで、さきへ進まなければなりません。となれば、やることはひとつ。ベルグエルムのいった通り、たとえ危険な道だとわかっていても、みんなはここを、通つていくしかなかったのです。

ですけど、ただやみくもに進んでいくというのは、あまりにも危険でした。こんななんに対しては、それにうちかつたためのそなえが、なによりたいせつです。そのこたえを出したのは、ライアンでした。かれは、さきほどから空を見上げて、ふりしきる雨をながめていましたが、ふいに、なにかを思いついたかのように、にっこり笑つて、空をゆびさしていったのです。

「こういうときは、この雨を、味方につけちゃうことだね。」

みんなはびっくりしました。雨を味方につけるとは、どういうことなのでしょう？

みんながそのしつもんをする前に、ライアンがふたたび口をひらきました。

「かれらは、鼻がいいんだって。こんな雨の中でもね。それに、夜でもよく、目が見えるらしい。このままうまくかくれて進んでいけたとしても、かれらに見つからずにこの岩場を通りぬけることは、むずかしいと思う。」

かれらのことをよく知っているベルグエルムが、静かにうなずきま

す。

ライアンがつづけました。

「だから、この雨の力をかりて、ぼくたちのおいとすがたを、わかりにくくさせるんだ。いい？　見ててね。」

ライアンはそういうと、右手を目の前にさし出して、ひとつつふたつ、

空中になにかのもようをえがいていきました。するとどうでしょう。その空中に、水色にかがやく毛糸のような光の線があらわれて、それがライアンのまわりを、くるくると、まわりはじめたではありませんか！　そして、見てください。その光の線にさそわれるかのように、ライアンのまわりにふりしきっていた雨が集まって、ライアンのからだをすっぽりと、おおいかくしてしまったのです！　それはまるで、中を見ることのできない、水のバリアーのようでした。近づいてよくよく見れば、それが作りものなのだとわかってしまいました。ちよつとはなれて見るのであれば、そこにライアンがいることすらも、ぜんぜんわからないほどだったのです。これはすごい！（それにこのバリアーは、おいがそともれることも防いでくれるのです。鼻のよくきく相手に対しては、まさにうってつけだったのです。）

「ぼくには、しぜんの力をかりるわざがあるんだ。しぜん、ほんらいの力をかりるんだよ。」水のバリアー（とりあえずこうよぶことにします）の中から、ライアンの声だけがきこえてきました。

「だからその力は、しぜんのそれ以上でも以下でもない。もらうわけでもしはいするわけでもない。ただ、かりるんだ。

「みんなのことともつつんであげる。近くによって。あんまりはなれらと消えちゃうから。」

そしてライアンは、さらにいしきを集中させて、三人の仲間たちと三頭の騎馬たちをも、そのすがたを消せる水のバリアーでつつんでくれたのです（それぞれひとりずつ、一頭ずつを、バリアーでつつんでいきました。その方が、みんなまとめてつつむよりも、バリアーの大きさをさいしうげんにおさえることができ、敵の目からものがれやすかったのです）。

中にはいった三人が、まずおどろいたことは、そとからは中のようすがぜんぜん見えないのに対し、中からは、そとのようすがよく見えるということでした（これにはみんな、とてもほっとしました）。そしてさらに、このバリアーの中からは、ほかのバリアーの中にいるみんなのことも、よく見えたのです。じつに、ふしぎな力です（それから、もうひとつのとくちよう。これはあんまりうれしくないものでした

が、このバリアーは、雨そのものを防いでくれるというわけではありませんでした。だって、このバリアーの中にも、しっかりと、雨はふりつづけていましたから。みんなは、バリアーの中にはいればこれ以上ぬれずにはすむかと思っておりましたので、ちよつと、がっかりきみでした。そんな三人に対して、ライアンは、「ぜいたくいわないのー」とぶんぶんいいいました。

ちなみに、このバリアーのききめはみじかくて、一日にせいぜい三十分がげんかいだということでした。このバリアーを張りつづけるのは、とても集中を必要とするさぎょうなのだそう、ライアンのいうことには、「こんなのずつと張ってたら、ぼくはつかれてたおれちゃうよー！」とのことだそうです。

「さあ、これでもう、できることはみんなやったから、あとは、こううんをいのるだけだね。」

ライアンがそういうと、みんなはもういちど(バリアーの中から)顔を見あわせて、出発の意志をたしかめました。

「なに、いざとなったら、わたしの剣がやくに立つてくれることだろう。」ベルグエルムがじょうだんぎみにそういって、ここにきてはじめて、笑顔を見せました。それは、みんなを勇気づけ、気持ちをおちつかせてくれる、たよれる笑顔でした。

そして一行は、ゆつくりとしんちように。それでいて、いつぽいっぽをかくじつに。この危険へとつづく岩の道を、進んでいったのです。

しばらくいきますと、一行はなだらかなしやめんのある丘の前にやってきました。ここが、ベルグエルムのいつていたその場所のようです。みんながベルグエルムの顔を見ますと、ベルグエルムは、だまって小さくうなずきました。そして、しやめんの方を見てみますと、そのまん中あたりに、ごつごつとした岩のかたまりがふたつ、よりそっているのが見えたのです。そしてやっぱり！ それらの岩は、ただの岩ではありませんでした。動いているのです！ あつちの岩からこつちの岩へ。空中をすべるように、すすいと進み、その大き

くてがんじょうそうなあごを動かして、岩の山に、がぶり！ おいし
そうにかぶりついていました（それも、とつてもおぎようぎ悪く、食
べこぼしの岩をぼろぼろとこぼして）。これはまさしく、さきほどの
話に出てきました、ガイラルロックというかいぶつたちにまちがいあ
りません。

みんなは、ここでいったん足をとめ、あたりのようすをもういちど
うかがいました。ベルグエルムは、ガイラルロックたちに気づかれず
に通りぬけられそうな道を、もういちどさがしましたが、やっぱりだ
めでした。どうしても、岩のかいぶつたちからよく見えてしまう、こ
の目の前の道を進んでいくほかは、なかったのです（頭の上にあるが
けの上の場所まで、三頭の騎馬たちといっしょに、びよん！ 四十
フィートほどジャンプできれば、かれらをやりすごすこともできるの
ですが）。

「さいぐまで身をかくしながらゆける道は、ざんねんながらここには
ない。」ベルグエルムが小さな声で、みんなにいいました。「みんな
かたまつて、ひそかに通りぬけるほかはないだろう。かれらが立ち去
るのを待っている時間は、われらにはないのだ。ライアンのおかげ
で、われらのすがたとにおいは感づかれにくくなってはいるが、それ
でも、かれらに見つかるかのおうせいは大きい。もし見つかつたなら、
かれららうむをいわさず、おそいかかってくるだろう。かれらは、か
らだを持った生きものたちのことを、にくんでいるのだ。しかし、そ
うなつても、かれらと戦うのはさいしやうげんにとどめなければなら
ない。むだな戦いは、できるだけ、さけなければ。」

岩から岩へ。一行は、かくれながら地面をほうようにして、進んで
いきました。道のりのいっぽいっぽが、重く長いものに感じられま
す。たづなをひいてつれていている騎馬たちが、とつともなく大きなもの
に思えました（じつさい、かくれて進むのにいちばんやかいなのは、
この騎馬たちでした。からだの大きさはみんなのなんばいもありま
したし、そのうえ、旅の者たちがどんなに静かにしんちように歩いた
としても、馬のひづめの音だけは、かんぜんにはかくしようがなかつ
たのです。ライアンがバリアーでつつんでくれたあと、馬の足音を消

すために、それぞれの馬たちのひづめには、ベルグエルムが、持っていたぬのを破ってまきつけていましたが、それでも、まったく音がしないというわけではありませんでしたから。ひづめが小石をふんで、がりっ！ という音を立てるたびに、みんなはきもをひやしました。そうして一行は、いよいよ、岩のかいぶつたちのそのすぐ近くにまでやってきたのです。かれらが岩をばりばりかじる音が、おそろしげにひびいてきました。そしてその音にまじって。かれらがなにやら、ぶつぶつと話しあっているのがきこえてきたのです。それはどうやら、ふたりの（人とよべるかどうかはわかりませんが）ガイラルロツクたちが、岩の味についていいあらそいをしている声のようでした。「やい、ねぼすけ！ うそばっかりいいやがって。こここの岩はさいこうにうまいときいたから、おれははるばる、東の岩山からやってきたんだぞ。これなら、おれたちの岩山の岩の方が、よっぽど美味だつてもんよ！」

「でこぼこー！ おめえの舌がどうかしてんじやねえのか？ この岩場は、どこの岩山にも負けはしねえぞ。アーランドでだっていちばんだ。このぜつみような鉄のまじりぐあいが、東のばかもんにはわからねえってのかい？」

「いいや、ちがうね。鉄は、もつと多い方がうまいんだ。おめえは知らねえのか？ 鉄つてのは、多ければ多いほどいい。おれはよ、鉄だけつてのを食ったことがある。考えられるかよ？ そのもの、鉄だけだぜ？ あのまろやかな舌ざわりと、うつとりするほどのかぐわしかおり！ こたえられねえや。」

ねぼすけとでこぼこというのは、このふたりのガイラルロツクたちの名まえのようです。そして、かれらの声はひくくぐもっていて、まるで地面の底からひびいてくるかのような、なんともおそろしげなものでした（それに、そのかなりらんぼうで品のない言葉使いも、そのおそろしさに、ひとやく買っていたのです）。

かれらの会話はつづきます。

「信じられねえな。おめえの作り話じゃねえのか？ でこぼこ。いくらよくできた岩だつて、鉄だけなんてぐあいにや、いかねえぞ。」

「こたえはな、ねぼすけ。『人』よ。あいつらは、鉄を道具として使うって話よ。それも、いろんなものに、かたちを変えちまつてよ。剣だのよろいだの、つてすんぼうよ。やつらはむかし、おれたちのからだをうばっていった。おれたちに手足がねえのもよ、みんなあいつらのせいよ。あいつらはゆるせねえれんちゆうよ。そしてこんどは、おれたちのもんだつた鉄まで、うばおうつてのよ。しかも自分たちは、そのよく動く手足を使つてよ、その鉄を好きほうだいに変えちまつてるのよ。こんなことはゆるせねえ。だからおれは、れんちゆうの持っている剣やよろいやらつてもんをよ、残らず食らいつくしてやるのよ。」

かれらのからだを、ほんとうに人がうばつたのかどうか？ それを知るためには、遠い遠い、神話のじだいにまでさかのぼらなければならぬことでしょう。今となつては、だれにもわからないことです。いちばん長生きの種族の、いちばん長生きの長老でも、知らないでしょう。いちばんちえのあるけんじやの持つ、いちばん古い書物をひもといてみても、そのことはのつていないでしょう。それは、それほどこに古い、はるか大むかしのできごとだったのです。

ですけど、鉄をかれらから人がうばつていったというのは、たしかに、じじつであるといえなくもありません。ですが、それもまた、遠いむかしのことです。それに人々だつて、「うばつた」などとは思つていないことでしょう。文明が進めば、いろんなものがなくなってゆくのです。ガイラルロックたちの暮らしから、鉄が失われていったように。

こんなふうないいあいをききながら、一行はさらに進んでいきましたが、その道のりは、じゅんちようなものではありませんでした。しばらくゆくと、道はどんどんとたいらなものになってしまつて、おしまいには、身をかくせるような岩影が、まったくなくなつてしまつたのです（ですが、それははじめから、わかっていたことでした。さきのようなすは、ちゃんと見えていましたから）。このさきに進むためには、どうしたつて、岩のかいぶつたちのその目と鼻のさきを、そのまま通りすぎるほかありませんでした。

一行は、さいごの岩の影にかくれて、身をよせあいました。おそろしい岩のかいぶつたちは、かれらのすぐさきのしゃめんから、ぜんぜんはなれそうにありません（かれらはなん時間でも食事をつづけるのです）。あいかわらず岩をかじりながら、岩の味と人のことについて、ぎろんをかわしつづけていました。

「進みやすいたいらな道が、これほどとましく思えたことはない。今では、岩だらけのでこぼこ道の方が、よっぽど、われらに必要とされているのだから。」身をかくすところのない、目の前のたいらな道をにらみつけて、フェリアルが思わずいいました（とつても小さな声で）。

「きみのいう通り、ひにくなものだな。」ベルグエルムがこたえてそういいます（とつても小さな声で）。「だが、これも野の道のさだめ。しかたのないことだ。のぞみのままにことが進むとはかぎらない。すべてが、しぜんのなりゆきのままに動くのだから。」

フェリアルは、ゆうもうかかな騎士でしたが、野山をゆくことにはなれていませんでした。かれはほんらい、騎士をひきいて戦う騎兵師団のしよぞくでしたから、とうそつやきりつといったものを、もつとも重んじるのです。そのはんめん。きてんをきかせたり、野山の中に分けいたりするというようなことは、ちよつとにがてなようでした。

それとは対しように、ベルグエルムの方は野山のことにとでもくわしいようでした。ここまでの道のりにおいても、かれのあんなにくくしては、そうかんたんにはさきに進めなかつたことでしょう。かれは、この旅の仲間たちの、よきみちびき手であり、よきそうだん相手であるといえました。ですからみんなは、ベルグエルムのことを、とてもしんらいしておりましたし、今もかれが、どのようなはんだんをくださすのか？ そのけつだんを待っているところだったので。

「かれらは、とうぶん、立ち去ってくれそうにないだろう。ここまできたのなら、あとはこのまま、乗りきるほかはない。進むべき道は、ほかにないのだ。」

ベルグエルムのこたえは、たんじゆんめいかいなものでした。です

が、今のこのじょうきょうでは、もつともれいせいで、それでいて、もつともよいはんだんであると思われました。

「雨が強くなってきた。ぼくのバリアーも、力をましてくれと思うよ。」ライアンが、空を見上げていいました。

「もし見つかつたら、すぐに馬に乗ってかけるのだ。戦いは、のぞむものではない。うまくいけば、ついげきをかわして、丘のむこうまでのがれられるかもしれない。そうすれば、あとはまっすぐ、セイレン河まで、道はつづいてくれることだろう。」ベルグエルムがさいごにいいました。

そして一行は、とうとう、この危険なつな渡りのような道へと、ふみこんでいったのです。すぐそこにまで、岩のかいぶつたちがせまつていました。みんなは、このふりしきる雨を、どんなにありがたく思ったことでしょう。ライアンの水のバリアーがなかったなら、とても、こんなところを歩いてなどはいられませんでしたから（あなたが、ひるねしているライオンの目の前を、そうつと通りぬけようとしているところを、そうぞうしてみてください。今がまさに、そんな感じだったので）。

みんなは、ガイラルロックたちがこのまま食事にむちゆうになつていてくれることを、願いました。こつちを見ないでくれよ、という気持ちだが、声になって出そうなくらい、大きなものとなっていました。

「ゆるせねえれんちゆうよ……。生かしておけねえれんちゆうよ……。」

おそろしい話し声が、旅の者たちの耳にひびいてきます。さいわいなことに、岩のかいぶつたちは、ずっとぎろんをつづけ、食べることをつづけていました。

雨のバリアーは、すばらしいこうかをはつきしていました。どうやら岩のかいぶつたちには、ロビーたち一行のすがたやにおいは、とどいていないみたいです（いちどかにど、ガイラルロックのひとり、ちらつとこちらを見たように思えて、仲間たちは、ひやつとさせられましたが、かれらには、こちらのすがたが見えていないようでした）。

そしてそのまま、ときは過ぎていき……。

このままなら、ぶじにむこうの岩場までたどりつけそうだ。危険な道のりも、あとちよつとで終わりというころ。もうだけれが、このまま安全な岩場までたどりつけると、そう思ったころのことでした。

ベルグエルムはゆだんなく、あたりのようすをうかがっていました。フェリアルも、ベルグエルムのはんたいがわを受け持って、気をくばりつづけていました。ライアンはずっと集中して、水のバリアーの力をたもちつづけていました。

そしてロビーは……、ロビーはどうしているのでしょうか？

安全な岩場を前にして。早くたどりつきたいと心の底から願っていた、その岩場を前にして。ロビーはなんと、岩のかいぶつたちのすぐそばで、立ちどまってしまったではありませんか！ みんなはびつくりぎょうてんして、あわてて、ロビーのそばに近よりました。

「どうされたのです！　すぐにでも身をかくさねば。危険すぎますぞ！」ベルグエルムもフェリアルも、小さな声でささやいて、ロビーのことをせかしました。しかしロビーは、いっこうに、動くそぶりを見せません。

そして、ロビーがついに、口をひらいてこんなことをいったのです。

「ここはいけない……。あの岩場へいってはいけない。みなさん、馬に乗って、あのしゃめんにかけるんです。すぐに！　助かる道は、それしかない！」

ガイラルロックたちのいるしゃめんへむかって、かけるですって？　みんなはもう、なにがなんだか？　わかりませんでした。かいぶつたちの、そのまった中につっこんでいくだなんて、それこそ、危険きわまりないことでしたから。ですが、ああ、なんたること！　みんなはつぎのしゅんかんには、ロビーの言葉がまことに正しいものであるということを知ることとなったのです。

それは、おどろきの光景でした。一行がまさにたどりつこうとしていた、岩場の岩が。たくさんの、安全に身をかくせたはずの、その岩のすべてが。一行の目の前で、ぐらぐらと、動きはじめたのです！

そして、それらの岩のすべてが、地面から空中へ、ゆつくりと浮き上

がっていききました！

両方の目がぱつちりとひらき、大きな口が、がばつとひらきました！そしてそれと同時に、なん十ものおそろしいうなり声が、あたりいちめんにはびき渡ったのです。

そう、旅人たちがめざしていた岩場。その岩場の岩は、すべて、ガイラルロックたちのかたまりだったのです！

これでは、いくらゆうかんなる騎士たちといえども、とても、たちうちできるものではありません。みんなはすぐさま、それぞれの騎馬たちに飛び乗りました。

「全力でかけるんだ！あのしやめんへ！」ベルグエルムがただ、それだけ、いうのでせいっぱいでした。

それからあとのことは、もう、なにがなんだか？わかりませんでした。丘のしやめんでも、追いかけてきたガイラルロックたちが、たくさん、一行の前に立ちふさがったのです。ベルグエルムは馬でかけながら、なん回も、岩のかいぶつたちに剣をふりおろしました。フェリアルも休みなく剣をふりつづけました。ライアンとロビーの白い騎馬は、なんどもなんどもかいぶつたちのあいだをすりぬけ、身をかわしつつけました。そして、三頭の騎馬たちは、丘のしやめんをかけるのぼり、さいごに立ちふさがったガイラルロックの一体をふりきると、いちもくさんに、セイレン河へとつづく街道へとむかってかけていったのです。

この戦いで、たくさんの者たちがひがいをこうむりました。ベルグエルムは、左肩にけがを負いました。せまりくるかいぶつたちのこうげきを、防ぎきることができなかつたのです。ですが、急所をはずれていたのがさいわいでした。動かせないほどではなかつたのです。フェリアルはなんとか、かすりきずでいどですみましたが、自分の剣をおつてしまいました。ガイラルロックたちのかたいからだに切りつけたときに、剣のまん中ほどから、ぽつきりおれてしまったのです。

(おれた剣のやいばは、ガイラルロックのひとりが飛びついて、あつというまに食べてしまいました)。

ライアンとロビーは、こううんにも、むきずでなんをのがれることができましたが、かれらの白い騎馬が、かいぶつのはき出した岩のつぶてを受けて、大きなきずを負ってしまいました。首のつけねのあたりに痛々しいきずを負って、白く美しいその毛なみを、赤い血でよごしてしまったのです。

敵の方にも多くのひがいが出ました。あのねぼすけとでこぼことよばれていた、ふたりのガイラルロックたちは、まつさきに旅人たちにおそいかかり、そして、ゆうかんなる騎士たち、ベルグエルムとフェリアル、その剣の前に、やぶれ去ることとなったのです。ねぼすけはその目をつかれ、こんごその岩の人生を、ずっと片目のままですごすはめになりました。そしてでこぼこは、なんども切りつけられて、でこぼこしたその顔をもつとでこぼこにしたのち、にどと起き上がることはなかったのです。

そのほかのガイラルロックたちも、ふたりのゆうかんなる騎士たちを相手にして、たくさんの方が切られ、つつかれ、いのちを落としました。あちらにもこちらにも、今ではもはや動き出すことのなくなつた、岩のかたまりが、ばらばらになつてちらばつていました。ですから、この丘のしやめんは、このち長くに渡つて、ふしぜんなまでに岩だらけのふしぎな場所として、知られるようになったのです。ですが、その中の岩のひとつが、かつて、でこぼこという名まえの岩のかいぶつだったなんてことは、このさきにおいても、だれも知る者はないでしょう。こうして、四人の旅の者たちは、くるしい戦いののちに、このたいへん危険なさいしょのこんなんを、乗り越えることができました。

雨がどんどんと強くなってきました。風もぴゅうぴゅう、吹きつけています。旅の一行は、セイレン河へとつづく古い街道をひた走っていました。このあたりの道は、道はばも広く、三頭の騎馬たちがならんで走つても、まだあまるほどでした。ですからみんなは、横にな

らんで、ともにおたがいのことをたしかめあいながら、かけていったのです。

とくに今では、またべつの、新たな問題も生まれてしまっていました。それは、ライアンの白い騎馬のことです。ライアンの騎馬は、さきほどの戦いで、ひどくきずついてしまっていました。ライアンが自分の服のかえを使つて、すぐにきず口をしりましたが、それでも血がとまりませんでした。ですからライアンが、しぜんの風の力をかりて、きずのまわりを空気のまくでおおうことで、ようやく血がとまって、ゆつくり走れるくらいにおちつけることができたのです（このわざは、いつてみれば「ばんそうこう」みたいなものでした。そしてそれは、ベルグエルムの肩にもほどこされたのです。べつに、ついでというわけではありませんよ、もちろん。

ちなみに、水のバリアーはもう消えています。こんな戦いのあとでしたので、バリアーがあつた方が、このさきもちろん、安全ではありましたが、ライアンもつかれてしまつて、今日はもう、バリアーを張れるようなじょうたいではありませんでしたので。

しかしそれでも、あまり長く走らせるわけにはいきません。むりをすれば、ゆつくり走ることさえできなくなってしまうことでしょう。ライアンは、この馬をメルと名づけ、小さいときからずっとかわいがつてきました。ですからかれにとつて、この馬を失うなんていうことは、とても考えられないことだったので。

とにかく今は、メルのためにも、いつこくも早くシープロンドまでたどりつかなければならぬときでした。シープロンドには、鳥や動物たちのための、せんもんのお医者さんたちもいたのです。ゆうしゅうなお医者さんたちに見せれば、メルもきつと、げんきになってくれることでしょう。

「あまり、むりをさせてはならないだろう。」ベルグエルムが心配して、ライアンに話しかけました。「このさきは、なだらかな走りやすい道だから、ふたんはすくなくてすむだろうが、それでも、そくどは、もつと落としてゆかなくては。」

そんなベルグエルムの言葉に、ライアンはにっこり笑つてこたえま

す。

「ありがとう。でも、シープロンドにつくまでならだいじょうぶ。強い馬なんだ。ぼくといっしょに、もうなんども、こんなんを乗り越えてきたんだから。」ライアンはそういって、メルを首をなでてやりました。

しかし、そうはいつでも。ライアンがメルのことをとて心配しているのだということは、だれの目にもあきらかでした。とくにロビーには、ライアンの気持ち、痛いほどよくわかったのです。長年つれそつてきた友人を、失ってしまったとしたら……、こんなにかなしことはありません。ですがロビーには、なにもしてやれることがありませんでした。ですからロビーは、よけいに、つらかったのです。早くシープロンドにたどりついてほしい。そう願うほかはありませんでした（さいしょロビーは、けがをしたメルに乗るのをことわりましたが、ライアンに「だいじょうぶだから。」といわれて、しぶしぶ乗っていったのです。メルは、ライアンがいの者にはたづなをにぎらせようとはしませんでしたし、かといって、ほかの二頭の馬たちの一頭に、大きなウルファがふたり乗っていくと、重すぎて、走ることができなくなってしまうました。ライアンはそのことを、よくわかっていたのです）。

「このままもうしばらく進めば、じきにセイレン河に出る。河を渡ることができれば、シープロンドまでは、すぐそこだ。旅のつかれも、そこでいやされることだろう。」

ベルグエルムがそういって、みんなに笑顔を見せました。しかしかれもまた、メルと同じく、かなりのがまんをしていたのです。ガイラルロツクたちにおそわれたきずが、ずいぶん痛むようでした。ライアンの手あてによって、だいぶ、痛みはおさえられてはいましたが、騎馬がときどき大きくゆれるたびに、大きな痛みが走るのか？ 声をおさえて、くつうに顔をゆがませたのです。

「だいじょうぶですか？ ベルグエルムさん。むりはしないでください。ぼくにはとても、見ていられない。」ロビーが心配して声をかけました。ロビーは、さきほどからずっと、仲間たちのからだのことを

気づかっていたのです。自分にけががないぶん、その気持ちはさらに、強いものとなりました。仲間のくるしむすがたを見るのは、ロビーにとつて、なによりもたえがたい、くつうだったのです。できることなら、自分がかわつてやりたい。それがロビーでした。

ベルグエルムは、そんなロビーの心配にかんしゃして、静かにほほ笑みかけると、心をこめてこたえました。

「心配にはおよびません。このていどのきずは、わたしはなれておりますので。いくさではたくさんの方が、もつと重いきずを負うことも、しばしばあるのです。ありがとうございます。」

ベルグエルムは大きく息をついて、こきゆうをととのえました。まことに、このベルグエルムという騎士は、勇士とよぶのにふさわしい人物でした。痛みやくつうにたえる、強いせいしん力と、肉体を、かねそなえていたのです。

「ロビーどの。」こんどはベルグエルムが、ロビーにたずねました。それはだれもが、ふしぎに思っていたことでした（きつと、読者のみなさんもそう思っていたらうことです）。

「さきほどの戦い、あのときどうして、あの岩場が危険であるとわかったのでしょうか？ わたしもみなも、あの岩場を注意深く見張っておりましたが、なんの物音も、生きもののけはいすらも感じられなかった。よもやあの岩場が、ガイラルロックたちのかたまりであるなどということは、夢にも思っていなかったことです。」

「つまりかれらは、われわれのことに、さいしよから気がついていたので。かれらは思った以上に、頭が切れるらしい。それで、ただの岩のふりをして、われわれが近づいてくるのを待っていたのです。おそらく、しゃめんにいたあの二体のガイラルロックたちも、われわれのことをさそい出すための、おとりだったのでしょう。うかつなことでした。ロビーどのがとめてくれなければ、われらはそのまま、かれらの中に飛びこんでいって、ひとたまりもなくやられてしまっていたはずです。ほんとうに、あやういところでした。」

（ベルグエルムのいう通り、じつはあのガイラルロックたちは、旅の者たちがあのしゃめんにやってきた、そのずっと前から、一行のこと

に気がついていました。それは、ガイラルロックたちの、あるとくべつなのうりよくのためでした。ガイラルロックたちは、地面にひびくかすかな「ゆれ」を、まるでリーダーのように、空中で感じ取ることでできたのです。その力は強力なもので、ふりしきる雨の中、たとえば百ヤードはなれたところをりすが歩いていたとしても、わかっとうほどでした！

ですから、ベルグエルムがどんなに静かに歩いたとしても。ライアンがどんなにじょうずにすがたをかくしてくれたとしても。みんなのことは、ガイラルロックたちには、つつぬけだったのです。そして、その力のことを知っていた者は、このアークランドに住む者の中では、ほとんどいませんでした。かれらのことにくわしいベルグエルムも、ライアンも、知らないことだったのです。もちろん、フェリアルとロビーも。

目もいいし鼻もいい。そのうえ、地面のほんのわずかなゆれまでも感じ取ることができる。ほんとうにガイラルロックというのは、おそろしい生きものです。」

ベルグエルムの言葉に、ロビーは深く思いをめぐらせました。

あのとき……。

ロビーはたしかに、ふしぎなものを感じ取りました。しかし、せいいつぱい考えましたが、それは自分でも、説明のできないことだったのです。あのときはただ、こわくて、とてもれいせいな気持ちなどではいられませんでしたから。ですからなぜ、危険が知れたのか？ それはロビーにもわからないことでした。

「ごめんなさい。ぼくにもわからないんです。ただ、あの岩場には、ほかとちがう感じがあったということしかいえません。まるでそこだけ、まっくらなやみにおおわれているかのような、そんな感じがしたんです。ぼくの中で、だれかがさげんしているような気がしたんです。あそこへいってはならないと。それ以上のことは、ぼくにもわかりません。りかいすることもできないんです。」

みんなは、マントのフードから耳だけをぴんとのばして、ロビーの言葉にききいていました。みんな、ロビーのふしぎな力のことには、

あれこれ考えをめぐらせているようです。でも、けつきよくこたえは出さじまい。ロビーほんにんにもわからないのですから、むりもありません（ちなみに、さきを急がなければならぬみんなは、そのしつもんをロビーにするのをシープロンドにつくまでは待とうかと思っていました、やっぱりだめでした。それでベルグエルムが、いちばんにロビーにたずねてしまったのです）。

「とにかく、」ベルグエルムがいました。「わたしたちはロビーどのおかげで、いのちびろいをすることができたのです。このていどのけがですんだのが、きせきというほかありません。ロビーどのがいなかったのなら、この旅も、あの場であつてしまつていたことでしょう。まことに、かんしゃの言葉もありません。」

ベルグエルムはそういつて、ロビーに深くいちれいしました。フェリアルもそれにつづき、そしてライアンも、「助かつたよ。いいしごとしたね。」とロビーのからだをぼんとたたきました。

「そんな、やめてください。ぼくは、なにもしていません。危険を乗り越えることができたのは、ゆうかなみなさんのおかげなのです。あら。あんなおそろしい相手になんて、ぼくではとても、たちうちできませんもの。ぼくの方こそ、おれいをいわなければならぬです。」

ロビーはそういつて、頭を下げましたが、みんなはすでに、ロビーのそのけんきよなせいかくのことをりかいしていました。ロビーは今まで、ずっとひとりぼっちでおりましたから、だれかにほめられたり、みとめられたりすることなどに、なれていなかったのです。みんなはいい伝えのことをぬきにしても、そんなロビーのことを、とても好きになつていました。

「ロビーどの、われらは仲間です。」ベルグエルムのとつぜんの言葉。その言葉に、ロビーは思わず、どきんとしてしまいました。

「われらには、それぞれに力があるのです。わたしとフェリアルには剣が。ライアンにはしぜんの力をかりるわざが。そしてロビーどには、そのやさしさと、この世界のきゆうせいしゆたる、大いなる力がある。それぞれが助けあつて、はじめて、われらは仲間としてなり立つのです。ロビーどの、あなたはもつと、ご自分を信じていいの

ですよ。」

ベルグエルムの言葉は、ロビーの心に大きくひびき渡りました。自分の力を知り、自分を信じ、それぞれが助けあうことで、はじめてみんな仲間となり得る。

みんなのために、ぼくはなにをすべきなんだろうか？　ロビーは考えました。

そしてロビーは、このさき、このことをずっと、心の中に持ちつづけることとなったのです。

「もう、すぐにあたりは、もっと暗くなってしまおうことだろう。」ベルグエルムがいました。

「だいぶ、時間をくってしまった。夜がこくなれば、それだけ危険も増えます。これからは、今まで以上に気をくばってゆかねば。」

それから、しばらくの時間がすぎていきました。雨はずつとふりつづけ、風もますます、強くなっていくいっぼうです。そしていつからか、それらに加え、もうひとつのものまでもがあらわれはじめるようになっていました。いなくさきです。遠くの空がぴかぴか光り、ごろごろといういなすまの音が、なんととなく、頭の上になりひびいていました。

みんなは、またいくつかの岩場や丘を通りすぎましたが、さいわいそれらの場所では、一行はなにごともなくさきへ進んでいくことができました。そこからまたしばらくゆくと、道は大きな岩にはさまれた、せまい道に変わりました。そのため一行は、いちれつになって進んでいきましたが、ロビーはどうしても、この道が好きになれませんでした。岩かべの上から、だれかにのぞかれているような気がしてならなかったのです。ロビーはなんととなく、上を見上げました。ですが、そこにはまっ黒な空があるばかりで、だれもいるはずもなかったのです。

道はなんどもおれまがつて、えんえんとつづいております。ですか

らこの道は、じつさいのきよりよりも、はるかに長く感じられました。そしてロビーが、早くこの道をぬけてしまいたいと、心の底から思いはじめたころ。岩かべにはさまれたこのまがりくねった古い街道は、とつぜんに、その終わりをむかえることとなったのです。

それは、まったくとうとつにあらわれました。まるで、暗くてせまいトンネルの中から、急にそとの大平原の中へと飛び出していったかのように、あたりはいっしゅんにして、ひらけた場所へと変わったのです。

一行の目の前にあらわれたもの。それは、大きな河でした。

そう、みんなは、ベルグエルムの言葉に出てきた、そのセイレン河のほとりへとやってきたのです。

みんなはいったん立ちどまって、あたりのようすをうかがいました。ざぶんざぶんと、水の流れる音がきこえております。ふりしきるこの雨のせいで、河の水はだいぶふえているようでした。

道はまっすぐ、いっぼんの巨大な石づくりの橋へとむかっています。セイレン大橋とよばれる橋でした。まず思ったことは、あたりが変に明るいということでした。もう夜もだいぶすぎているかというのに、おひさまがまだしずみきつていないんじゃないか？というくらいに明るかったです。そしてそのこたえは、すぐに知れました。橋が光っているのです。それはまるで、ほたるの光のように、ぼんやりとあわい光でした。そしてせいかくというと、橋がというより、この橋に使われている石が光っていたのです。それは、こがね色がかつたみどり色の石で、その光が、河の流れやあたりの道を、ぼうつとてらし出していました。

右と左には、セイレン河の流れにそって、どこまでもつづくかと思われるじやりの道が、果てしなくのびていました。河の上流も下流も、そのさきはまっくらなやみの中に消えていて、いったいこの河がどこまでつづいているのか？ まったくそうぞうすることさえできないくらいでした。

ベルグエルムが馬を進め、橋のそばまで近づいていきます。河の流れはおそろしいほどに、そのいきおいをましています。もしこの流れにまきこまれれば、どんなにおよぎのじょうずな者であったとしても、ひとたまりもなくおぼれてしまうことでしょう（とくに、ロビーはおよげませんでしたので、なおのことおそろしく感じたのです）。

「これこそが、かつてのきよらかなるめぐみの河、セイレン河なのです。ところが、まさにごらんの通り。今やすっかり、その流れはけがれてしまった。ごみや、へどろや、そのほかのよごれたものすべてが、この美しき流れをだいなしにしてしまったのです。」

まさしく、ベルグエルムのいう通りでした。ロビーは、こんなにもよごれている河は、今までに見たことがありませんでした。水の流れというよりも、「きたならしいへどろがより集まって、それがうねりをなして進んでいる」といった方があてはまると思います。見れば、その中のあちらこちらには、さまざまなものまじって流されていました。ガラスのびんや、たるのこわれたもの。かわでできたよろいや、かぶとや、われたたて。くさったくだものや、食べ残しのパンや肉。そんなものは、まだましな方です。なんだかわけのわからない、ぶきみな色をしたかたまり。人の手の骨。そして、もとがなんであるのか？ わからないほどにくずれた、大きな生きもののなきがらが流されてきたのを見たとき、ロビーは思わず、言葉を失ってしまいました。

「だれがこんなことを……。とても、見ていられない……。これじゃ、あんまりです。」

ロビーは、ふりしぼるようにつぶやきました。この河を見れば、あなたも、ほかのだれもが、ロビーと同じ気持ちをいだくことでしょう。そして、はげしい雨のふりしきる中でもわかる、この河のひどさをけっていづける、あるものが、ここにはあったのです。

それは、においでした。この河からのぼるひどいにおいが、あたりいちめんに立ちこめていたのです。そのにおいは、まるで、へどろがくさったかのような、それはそれはひどいにおいでした（みなさんは、ひあがったどぶ川のおいをかいだけいけんがありますでしょうか？ それに、生ごみのつまったバケツの中のおいを足してみれば、

この河のにおいに近づくと思いますが。それほどひどいにおいだったのです。

「これがげんじつなんだよ、ロビー。ひどいでしょ？」目の前のことがとても信じられないといったようすのロビーに対して、ライアンが静かに声をかけました。

「この河のことには、みんなが心を痛めてる。ぼくたちシープロンたちは、とくに。ほんの数年前までは、この河はとても美しかった。すみきった流れを通して、川底のきれいな石が、おひさまの光をあびてきらきらかがやいてた。」

ライアンの声は、とてもさびしげでした。思わずロビーは、ライアンの顔を見ました。ライアンはじっと、セイレン河の流れを見つめていました。雨に流されてわかりませんでした。ライアンのそのひとみからは、きつと、なみだがこぼれていたことでしょう。ロビーはなにもいえませんでした。

「ぼくとメルは、よくこの河にまで、水あびにきていたよ。だからメルも、この河のことは、よく知ってる。かつてはたくさん動物たちが、この河にきていたんだ。河べりには、色とりどりの花がさいいて、たくさんさんのちょうもやってきていた。それがどうして、こんなことになっちゃったんだろ。」

ライアンはそういって、メルの首をやさしくなでました。メルは首をうなだれたまま、河の方を見ようとしません。変わり果ててしまったセイレン河のことは見るのが、メルにはつらかったでしょう。ロビーはなんとも、やるせない気持ちになりました。

ロビーにとって、これは、このアークランド世界に広がりがつつあるやみの力を、自分の目で見た、さいしょのたいけんでした。ですが、ライアンは、ベルグエルムは、フェリアルは、きつと、もうなんどもなんども、こんなたいけんをしてきたのでしょうか。見たくないものを、たくさん見てきたのでしょうか。ロビーは、なにも知らずにいた自分を、はずかしく思いました。

「つらいことですが、今はどうすることもできません。今のわれらにできることは、のぞみを信じて、さきへ進んでいくことだけなので

す。「ベルグエルムがいました。ロビーの心をさっしての言葉でした。」

ロビーは思いをかためました。早く、さきに進まなくては。いっくも早く、こんなことは、やめさせなければならぬんだ。

「いきましよう、みなさん。」ロビーは静かにいいました。しかし、その言葉は力強く、そして、とても重たいものだったのです。みんなは、このときのロビーの顔を、ずっと忘れることはありませんでした。

それからみんなはいちれつになって、セイレン河にゆいいつかけられた石の橋、セイレン大橋のもとへと、その歩を進めていったのです。橋は石づくりのがんじょうなもので、また、とほうもなく大きなものでした。全体が光っているせいで、その橋はまるで、はるかなやみの中へとびる、光のかいだんのようにも見えました。橋の石だたみは、やみのむこう、ずうつとさきにまでのびております。もし橋の石が光っていなかったのなら、橋の終わりはやみにつつまれたまま、とても見通すことなどできないことでしょう。それほどに、この橋は大きいのでした（さすが、大橋というだけのことではありませんね）。

こんなに大きくてりっぱな橋を、いつたいつ、だれがつくったのか？　じつはそれはまだ、わかっていませんでした。ですが、この橋が気も遠くなるほどの大むかしにつくられたのだということだけは、たしかなことです。東の地から人々がこの地にうつり住んで、さいしよの街道がつくられたころには、もうすでにこの橋は、この河にかかっていました（それが今から二千年ほど前のことです）。そのうち、ひつじの種族であるシープロンたちが、この地に王国をまとめ上げ、シープロンドというみやこをうつしみ谷の中にきずき上げたとき。この橋もかれらのくにの一部となりました。きよらかで美しいセイレン河の流れ。その流れにみごとにとけこんでいるこの美しい石の橋は、まことに、かれらのほこりそのものだったのです（ですから、シープロンであるライアンにとって、この河に起こったひげきは、ことさらにつらいものだったのです）。

セイレン河がけがされてしまった今。ですが今でも、この橋の美し

さだけは失われていませんでした。とくに、その石にほどこされて
るちようこくは、かんたんには、ほかのものはくらべることもでき
ないくらいに、じつにみごとなものだったのです。まるで、ほんもの
の木のみきかと思われるほど、木そっくりにほられたはしらが立ちな
らび、そしてそれぞれのはしらには、今にもはらはらとまいちりそう
なくらいによくできた、いちまいいちまいの葉っぱがほりこまれてい
ました。橋のらんかん(らんかんとは橋の手すりのことです)には、つ
たのつるがまきつき、さまざまな花がきそつてさきほこつておりま
す。そして、そういつたもののすべてが、こがね色がかつたふしぎな
みどり色の石からほり出されていました。

今がおひさまの光のふりそそぐ、気持ちのいいひるさがりだとし
たら、この橋の美しさが、もつとよくわかることでしょう(河のよこれ
はまたべつの問題として)。ですが今は、この橋をながめるのには、い
ちばん悪いときであるといえました。なにしろ、ざあざあぶりの雨の
ふる夜なのですから。しかし今は、そんなことをいつている場合では
ありませんでした。旅の者たちは、この橋の美しさにもろくすつぽ気
をまわさず、まわしているよゆうもなく、ただ一点、橋のむこうがわ
の地をめざして、かけていかなければならなかったのです。

石の橋の上に、馬のひづめの音がひびき渡つていきます。ふりしき
る雨のせいで、あたりにははつきりとは見えませんでした。ロビーは橋
の終わりの方を見ましたが、むこうぎしは、はるかかなたにあるかの
ように思えました。じっさいには、いくら大きな橋とはいえ、橋がそ
んなに長くつづくものではありません。ですがロビーには、この橋
が、深いならくの底にまで、どこまでもつづいているかのように見え
てなりませんでした。

ふりしきる雨はようしやなく、一行のことをうちつけてきます。強
い風は騎馬たちをあおつて、そのまっすぐな走りをさまたげつづけて
いました。ごろごろといういなずまの音は、いつしか、旅の者たちの
そのすぐそばにまでやってきていました。そしてそのうなり声は、ま
るで、せまりくるかいぶつのなき声であるかのように、この場所のす
みずみにまで、おそろしげにひびき渡つていくのです。

水かさをましたセイレン河のだくりゆうが、橋げたにあたって、ばしやんばしやんと大きな音を立てて、くだけちつていきました。らんかんのあいだを通りぬける風は、ひゆうひゆうと、すすり泣きのような音を立てていきます。ロビーにはそれらのものが、なにか、大きなひとつの生きものであるかのように感じられました。悪意を持った巨大なかいぶつが、セイレン河の水の中から、自分のことをつかまえにやってきているのではないか？ そんなふうになんか、ロビーには感じられたのです。

ロビーは、セイレン河のだくりゆうの中を見ました。もちろん、そんなかいぶつがいるはずありません。しかしロビーは、この場所に、なにかほかの、もっとべつの大きな危険があるような気がして、なりませんでした。

ロビーはふいに、空を見上げました。雨のつぶが、たくさんのはずくの矢となって、自分の顔にふりかかっています。空はまっ黒でした。なにも見えるはずがありませんでした。ですがロビーには、そこに、たしかに、おかしなところがあるように感じられたのです。さきほどガイラルロックたちと戦った丘でも感じた、やみが動いているかのような、いやな感じ……。それも、ひとつだけじゃなくて、いくつか。

前にいるライアンも、さきをゆくベルグエルムも、なにも感じてはいないようでした。ロビーはうしろをふりかえりました。フェリアル騎馬がついてきていました。フェリアルにもなにも、おかしなところはあります。ロビーはなんだか、いてもたってもいられなくなってきました。暗く不安な気持ちは、ますます広がっていくばかりです。そしてとうとう、ロビーはたえきれなくなつて、ライアンにその思いをうちあけました。

「ライアンさん、なにかがくる。なにかがきます。空が、空が動いている。やみが動いている。ここにやってくる。おそろしいです。くらやみの中からぼくにむかって、ほのおのようにゆれる赤い光が、むかってくるような感じですよ。目には見えないけど、たしかに感じるんです。」

ロビーはおそろしきあまり、小さなライアンにしがみついてしまいました。ライアンはびっくりして、ロビーのいった空を見上げましたが、それらしいものはなにも見えませんでした。

「どしたの？ ロビー。なにも見えないよ？ なにがくるの？」

ロビーはもう、空を見ることができませんでした。マントのフードを深くかぶって、ライアンにしがみついているのが、やっとだったのです。

「わかりません。わかりません。早く、ここを渡ってしまいたい。とてもたえられない。」

ベルグエルムもフェリアルも、ロビーのいへんに気がつきました。それでふたりとも、橋のまわりや河の上流下流にいたるまで、注意深く目をこらしましたが、なにもおかしいところを見つけないことはできなかったのです。

すくなくとも、目には。

そのとき、いへんは耳に感じられました。それも、空の上の方から。

さいしよはなにか、鳥のはばたきのような音がきこえてきました。ですが、こんなざあざあぶりの雨の中を、しかも、こんな夜のやみの中を、飛びまわる鳥がいるでしょうか？ もし「夜こうせい」の鳥かなにかがいたとしても、この雨風の中をかくぐつてきこえるほどのはばたきならば、そうとうの大きさがなければならぬことになりま。人間くらい、いや、この騎馬たちくらいの大きさがなければ……。

「みんな、馬をとめるんだ！」

さけんだのはベルグエルムでした。それと同時に、三頭の騎馬たちは前足立って大きくいななき、セイレン大橋のその石だたみの上に、歩みをとめたのです。そして……。

ふりしきる雨の中。四人の旅の者たちは、そのやみの中にそいつを見ました。そいつは大きくゆっくりとはばたいて、橋のまん中ほどに静かにおり立ちました。

それは、これまでにだれも見なかったことのないような生きものでした。まっ黒なからだに、まっ黒な羽を持っておりま。その羽は鳥のよう

でもあり、こうもりのようでもありました。からだは馬のようでもあり、大きなとかげのようでもありました。長い首を持ち、そのさきについているぶかっような頭には、大きな赤い目と、もつと大きな口があつて、その口には、おそろしいきばがたくさんならんで生えていました。

それはまるで、悪夢そのものが、あらしの空からまいおりてきたかのようにでした。しかも、その生きものは、いっぴきだけではなかったのです。一行のゆく手をふさぐようになり立つたさいよのかいぶつにつづいて、二ひき目のかいぶつが、こんどは、一行のはいごをふさぐようになり立つてきました。そしてさらにもういっぴき。そいつが、さいしよのかいぶつのとおり立つたのです。

今や旅の者たちは、三びきのこの悪夢のようなかいぶつたちに、すつかり取りかこまれてしまいました！ 橋の上では、まったく逃げ道はありません。どうしたって、戦つて切りぬけるほかはなかったのです（相手が敵でないのであればべつですが、どう見てもそうは見えません）。

四人はみな、あわてふためいて、かいぶつたちのことを見渡ししました。ベルグエルムもフェリアルも、すでに腰の剣をぬき放つていました（剣のおれてしまったフェリアルは、「よび」としてしまつてあつたみじかい剣をぬきました）。ライアンも、よらばうたんと、しぜんの力をかりるそのわざを使うじゅんびをしております（どんなわざを使うのかは、まだわかりませんでした）。そしてロビーも、もういちどもとの勇気をふるい起こして、スネイルにもらつたそのおくりものの剣に手をかけて、いつでもそれをぬけるようにと、身がまえしました（剣で戦つたことなんて、いちどもありませんでしたけど）。

かいぶつたちが、ゆつくりとすこしずつ、一行の方へ近づいてきます。そしてよく見れば、それは、そのかいぶつたちだけではありませんでした。まるで、馬にまたがる騎士たちのように、かいぶつたちの背中には、かいぶつたちと同じくらいにまっ黒なすがたをした、人間たちが乗っていたのです。それぞれのかいぶつたちの背中に、ひとりずつ。

かれらは、まっ黒なよろいを着て、まっ黒なかぶとをかぶり、まっ黒なマントをはおっていました。ですから、旅の者たちはさいしょ、かれらがこのやみの中からあらわれた、悪霊かなにかなのではないか？ とさえ思ったのです。それほどに、かれらのすがたはおそろいものでした。ですが、たしかにかれらは、生身のからだを持った人間たちだったのです（かといって、かれらが悪霊よりおそろしくないとはいいきれませんでした）。

かいぶつたちに乗ったこの黒の騎士たちは、旅の者たちのそばまでやってくると、そこでいつせいに、腰の剣をぬき放ちました（かれらが敵であるということはこれできまりでした）。そして、かれらのうちひとり、旅の者たちにむかって、大声でこうよばわったのです。「しよくん！ ざんねんながら、しよくんらの旅もここでついでなこととなるう。なぜなら、このセイレン大橋の上が、しよくんらのふみしめる、さいごの場所となるのだから。すくなくとも、生きてはな！」

黒騎士はそこで、ぶきみな笑い声を上げました。

「われら、ワットのデイルバグ黒騎士隊が、じきじきに、しよくんらをほうむり去ってくれよう。あとはたつぷりと、あの世での旅をつづけるがいい。」

まことに、一行の前に立ちふさがったこの黒の騎士たちは、かの悪名高き、ワット国の者たちであったのです！ かれらは、かなしみの森から出てきた旅の者たちのことを、空の上から見つけると、そのあとをずっと、つけねらってきていました。そして、逃げ場のないこのセイレン大橋の上まで、一行がたどりつくのを見はからってから、ついに、そのすがたをあらわしたというわけだったのです（さきほどのガイラルロックたちとの戦いするときも、かれらは遠くから、高見のけんぶつをしていたのです。なんていやらしいれんちゆうなのですよ！）。

黒騎士のひとりが、ふたたび大声を張り上げていいました。

「はい色ウルファどもが、こんな北の地でなにをしていた？ こたえろ！」

しかしもちろん、こんなといかけに、われらが仲間たちが応じるはずがありません。ベルグエルムは、その手ににぎったせいぎの剣を、その黒騎士につきつけていいました。

「こたえるぎりはなし！ われらはせいぎ。おまえたちは悪だ！

悪がさかえることなど、いつの世にもあり得ぬ！ そうそうに立ち去るがいい！」

これをきいて、黒騎士たちはみんなそろって大笑いしました（ほんとうにいやなれんちゆうです）。

「まあいい。おまえたちがなに者であろうと、知ったことではない。だれであろうと、われらが主君、アルファズレドへいかにはむかう者は、われらデイルバグ黒騎士隊が、うち果たしてやるのみだ。ベーカーランドの負け犬どもめ！ かくごするがいい！」

その言葉が、戦いのあいざとなりました。黒騎士たちは、いつせいにふわっと空にまい上がると、ベルグエルムとフェリアル騎馬たちにむかって、まっしぐらにむかってきたのです。かれらの乗るデイルバグとよばれるかいぶつが、その大きな口をいっばいにひらいて、ぎやあぎやあというきみの悪いさけび声を上げました。そのおそろしいことといったら！ どんなにきものすわった者であったとしても、腰をぬかしてしまいそうなくらいです。ですが、ここにいるのは、ただの者たちではありません。ベーカーランドの白の騎兵師団の長をつとめる、ベルグエルム・メルサル。そして、そのもつともしんらいのおける友、フェリアル・ムーブランドの、兩名なのですから。

「われら、アルマーク王あずかり、白の騎兵師団！ 祖国レドンホルの名にかけて、悪しきやみをうちはらわん！ メルサルの力、思い知るがよい！」

ベルグエルムが大声でさけびました。そして、むかってくるかいぶつのしゅうげきをひらりとかわし、つづく黒騎士の剣を、その自身の剣で受けとめたのです。あらしの夜に、はげしいきんぞく音がひびき渡りました。そしてはんたいがわでは、同じくフェリアルが、みじかい剣ではありながらも、じつにみごとな戦いぶりをくり広げていたのです。

「いやしきワットのしんりやく者どもめ！ おまえたちのよこしまなる剣などに、ムーブランドの血はけがされぬ！」

フェリアルもなんとなく、せまりくるかいぶつの前足をかわし、するどいきばをかわし、悪意にみちた黒騎士の剣をふりはらいました。

まことに、この両名の勇士たちの戦いぶりは、すさまじいほどのものでした。そのあまりのいきおいには、さすがの黒騎士たちもおじけづき、ひるみを見せたのです。かれらの乗るデイルバグというかいぶつたちも、なんととなく切りつけられました。このかいぶつはひじょうに生命力が高く、あまりこたえてはいないようでした。そしてじっさい、いちばんやっかいなのは、このデイルバグたちだったのです。

剣と剣の戦いだけであるのなら、ベルグエルムとフェリアルのうでまえには、ワットの黒騎士たちも、とうていかなわないことでしょう。それほどに、このふたりの勇士たちは、剣のたつじんたちであったのです。ですが、かれらが黒騎士たちのうちかかろうとする、そのすんでのところで、このデイルバグというかいぶつがじやまをして、ちゆう高くまい逃げてしまいました。そして黒騎士たちも、まっこうからの勝負に出てはかなわないと知ると、これまたずるがしこく、きよりを取りつつ、相手をつかれさせるといふ作戦に出たのです。

これには、さすがのベルグエルムとフェリアルの両名も、くるしめられました。敵は空から、なんとなく、すきをうかがってうちかかってきます。これに対するには頭上を見上げながら戦わねばならず、さらにはふりしきる雨が、そのしかいをさえぎってじやまをしました。

「このワットのひきよう者どもめ！ せいせいどうどうとかかってくるがよい！」

たえかねて、フェリアルがさげびました。しかし、黒騎士たちは大声であざ笑うばかりです。

「これは心外。みずからの持つゆうりなじょうけんを、さいだいげんにいかして戦うことこそ、いくさのならわしではないのかね？ わ

れらに急ぐりゆうはない。おまえたちをほうむり去れば、それでいいのだからな。」

かれらは、手出しのできない者たちをじわじわ痛めつけるのが、大好きでした。なんてひれつな！　しかし今は、まさに、れんちゅうの思うつぼだったのです。手出しもできず、逃げられもせず。旅の者たちはまるで、かごとじこめられて出られない、小鳥のようでした。

そのとき！　ライアンがこんしんの力をこめて、しぜんの力のエネルギーを黒騎士たちにむかってぶつけました！　そのエネルギーは、ぐいんぐいんとうずをまいてのぼっていつて……、ぼしゅーん！　黒騎士たちの乗るディルバグのかいぶつのからだにあたって、くだけちります！　ですが……。

ディルバグはまったくこたえていません。からだがすこしよろけたばかりで、ほとんどききめがなかったようでした（黒騎士は「ふん！」と鼻をならして相手にしません）。

ですがそれは、ライアンが弱いからというわけではありませんでした。ライアンのわざは、あやつろうとしているしぜんの力が、その場所の力の大部分をしめている場合に、そのいちばんの力をはつきするというものだったのです。さらにいえば、あやつろうとする力ではない、べつのしぜんの力が、その場所の力の大部分をしめている場合、あやつった力はその大部分のほかのエネルギーに消費されてしまつて、ものすごく弱い力になってしまうというものでした（ちよつと、ややこしいんですけど……）。

そして、この場所にあるあつとう的なまでに「大部分」の力。それは雨、つまり、水の力だったのです。

ライアンは、バリアーを張るなどの水の力による「ぼうぎよの力」なら使うことができましたが、それをこうげきのためにあやつるということはできませんでした（いくらライアンでも、なんでもできるスーパーマンというわけではありませんでしたから）。風ならば、あやつつてこうげきに使うことができましたが、さきほど説明いたしました通り、これほどたくさん雨がふついているところでは、いくら風の力が強かったとしても、あつというまに大部分の雨の力にその力がか

き消されてしまつて、その半分もいりよくが出せなかつたのです。

ですから、ライアンの放つた風のうずのこうげきは、デイルバグのからだにとどく前に、すっかり弱まつてしまつて、かいぶつにダメージを与えることができませんでした（はじめから半分以下の力でしたが、デイルバグのもとへとどくまでに、その力はさらに弱いものとなつてしまいました。なんと、もとの力の百ぶんの一くらいにまで弱まつてしまつていたのです！ ライアンははじめから、そのことをよくわかつていました。ですけど、なにもしないよりはましだと思つて、だめもとで、この力を使つたのです。ライアンのくやしきは大きかつたことでしょう）。

フェリアルは、剣をぎりぎりとにぎりしめてくやしがりました。ベルグエルムも歯をくいしばつて、頭上の敵たちをにらみつけることしかできませんでした。

そして、そんなかれらに見切りをつけたかのように、黒騎士たちは、こんどは、ライアンとロビーの騎馬の方にねらいをつけてきたのです。

黒騎士のひとりが、ライアンとロビーの方に近よつてきました。その黒騎士は、この三人の黒騎士たちの中でも、いちばんいかめしいよろいを着ていて、いちばんおそろしげなかぶとをかぶつていました。その手には、黒いやいばを赤でふち取つた、なんともおそろしげな見た目の剣をにぎつております。どうやらこの男が、この黒騎士たちの隊長であるかのようにでした。そしてその男が、ライアンとロビーの頭上から、ふたりにいったのです。

「おかしなお客がいるとは思つていたが。なぜ黒ウルファが、こんなところにいる？ 黒のウルファはひとり残らず、わが軍のしはいを受けているはずだぞ。もちろん、おまえたちのあるじ、ムンドベルクもな。同めいなどといえばきこえはいいが、しよせん、かれらはすべて、ワツトのしもべにすぎん。ムンドベルクなど、アルファズレドへいかのあやつり人形もどうぜんの、あわれな男よ。」

これをきいて、われらが仲間たちはげきどしました。

「へいかをぶじよくする者はゆるさぬ！ われらはかならずや、へ

いかを悪のじゅばくからとき放つ！ そうなれば、きさまたちなど、われらせいぎの敵ではないぞ！」

ベルグエルムがさげびましたが、黒騎士の隊長はひるむそぶりも見せず、ますますいきおいづいて、旅の者たちにあくたいをつくばかりだったのです。

「せいぜいほえることだ。おまえたちがいくらあがこうとも、もうどうすることもできまい。おまえたちのむかうべき道はただひとつ。ほろびの道のみよ！」

そういうと、黒騎士はライアンの騎馬にむかつてつき進んできました！

「ベーカーランドにかたんとはふとどきなやつめ！ まずはおまえから、ほうむり去ってくれよう！」

黒騎士は、黒のウルファであるロビーのことをねらってきたのです！ ロビーに、けつだんのとかがやってきました。ベルグエルムもフェリアルも、助けにくるのにはまにあわないきよりにおりました（ほかのふたりの黒騎士たちが、助けにいかせまいと、ずるがしくそのじやまをしてきたからでした）。ライアンも、このじょうきようでは、そのほんらいの力をはつきできないままです（この雨さえふつていなければ！）。

しかし、いつまでもかれらにたよりつばなしでいるわけにはいきません。このままでは、前にいるライアンまでをも、まきぞえにしてみまうのです。

ライアンもメルも、これ以上きずつけさせるわけにはいかない！
ぼくが、守らなくては！

ロビーはけつだんしました。そして白馬の上から、セイレン大橋のそのかがやく石だたみの上へと飛びおると、ロビーは、せまりくる黒騎士にむかつて走ったのです。

「ぼくはいいんだ！ おまえなんかに負けるもんか！」

そして、黒騎士とかいぶつがせまりくる、まさにそのとき。ロビー

は、腰におびたその剣をぬき放ちました。

すると、どうしたことでしょう！ 剣からなんともまばゆい光が飛び出して、いっしゅんのうちに、あたりいちめんを青白くてらし上げてしまったではありませんか！

黒い空も、橋も、河の流れも。木々も、岩も、はるかむこうのやみまでも。すべての色が、青と白のかがやきにつつまこまれていつてしまいました。そのまん中。ロビーのいる場所などは、もう、目をむけることもできないくらいまぶしきです。そこにいるぜんいんが、なにが起こっているのか？ 見きわめようと努力しましたが、すべてはあつというまのできごとで、正しくりかいのできた者はだれもいませんでした。

ロビーが剣をさやからぬいた、そのしゅんかん。あふれる光とともに、もうひとつのものが、その剣のさきから飛び出したのです。それは、えものにもかかっておそいかかる、もうじゅうのごとくのいきおいで飛び出した、青白い光のいかずちでした。そしてそれは、まさしくでんこうせつかのはやさで、せまりくるデイルバグのかいぶつのからだを、まっすぐにつらぬいたのです。

デイルバグは、あつというまに、青白いほのおにつつまれたかたまりとなつて、セイレン河へむかつて落ちていきました。そして、その背に乗っていた黒騎士の隊長も、全身を青白いほのおにやかれ、さいごのひめいをわめきながら、まっさかさまに、セイレン河のそのだくりゅうの中へと落ちこんでいったのです。

これを見て、残つたふたりの黒騎士たちは、大こんらんとまりました。なにが起こったのか？ それすらもわからないまま、あわてふためいて、ほうがくもさだめることもできず、ほうぼうのやみの中へと、いのちからがら逃げ出していったのです。

夜のあらしはいぜんとして、はげしくつづいていました。空にいなずまが走るたびに、逃げてゆくデイルバグのすがたがやみの中に浮かび上がりましたが、やがてそれも、見えなくなっていきました。

ロビーはわけもわからないまま、ただぼうぜんと、ふりしきる雨の

中に立ちつくしていました。あたりはすつかり、もとのようすにもどっておりません。ロビーの手には、剣がにぎられたままでした。そのやいばは、まだかすかに、青白い光をやどしていました。

ベルグエルムとフェリアルが、ロビーのもとにかけよってきます。ライアンもやってきて、三人は急いで馬の上からおり立つと、ロビーのそばにかけよりました。

「ロビーどの！ ごぶじか！」ベルグエルムがまっさきに声をかけました。しかしロビーは、なにがなんだか？ わからないといったふうにその場に立ちつくしているだけで、仲間たちがやってきたことにすら、まったく気がついていないようすだったのです。

「ロビーどの！」

ふたたびよばれるベルグエルムの声。ロビーはそこでようやく、はつとわれにかえり、仲間たちの方にむきなおりましたが、その顔はおそろしきでいっぱいになっていて、からだはがたがたとふるえていました。

ロビーはふりしぼるように、おそろおそろ口をひらきました。

「なにが……、なにが起きたのか？ わかりません……。ぼくは、あの黒騎士とさしちがえるくらいのかくごで、この剣をぬきました。みんなを守るのなら、たとえいちげきでも、むくいてやろうと思った。だけど、まさか、こんなことになるなんて……」

ロビーは、自分の手ににぎられている剣のこを見つめました。剣の光は、もうほとんど消えかかっていました。

「この剣は、いったいどんなものなんでしょう？ こんなものは、とてもぼくにはあつかえない。どこかへやってしまいたい。」

ロビーはそういうと、ふるえる手で、剣をゆつくりとしんちょうに、もとのさやの中へとおさめました。しかし、剣をもどしてしまっても、ロビーの気持ちまではもどりません。自分がひき起こしたことが、まだ信じられないといったようすでした。

そんなロビーに、ベルグエルムがいました。

「その剣にどんな力がひめられているのか？ それはわたしにもわかりませんが、これだけはいえます。その剣は、あなたを助けるため

にたくされたものだということですよ。それは、あなたが持っていないく
ては。げんにこうして、その剣は、われらのことを助けてくれたでは
ありませんか。その剣をおくってくれたスネイルどののことをお考
えください。どうしてその剣が、じゃあくなものでありましょう。」

ロビーはスネイルのことを思い出しました。やさしくて、どこまで
も人のいい、えんげい好きの、あのスネイル・ミンドマンです。この
剣は、そのかれが、なん年もたいせつに守ってくれていたものでした。
それが、自分や仲間たちに害を与えるようなものであるとは、ロビー
にはやっぱり思えませんでした。この剣は、ぼくたちのことを守つて
くれるものなんだ。ロビーはここで、あらためてそう思ったのです。

「ありがとうベルグエルムさん。あなたのいう通りです。」ロビーは
そういって、ペこりと頭を下げました。しかしそうはいっても、ロ
ビーの気持ちは、まだかんぜんには晴れたわけではなかったのです。
こんなできごとのあとですもの、いきなりげんきを出せといっても、
むりな話というものでした。

そんなロビーのことを、仲間たちはせいっぱいの気持ちで、はげ
ましてくれたのです。

「ロビーどの。ロビーどのの勇氣、このフェリアル、しかと見とどけ
させていただきました。まこと、あなたのゆうかんさは、われら白の
騎兵師団にも、まったくおとるものではありません。」フェリアルはそ
ういって、ウルファのあつき敬礼をロビーにおくりました。

「あんなすごいわざを持つてるなんて、ずるいよ！ ぼくの出番ま
で取っちやうなんて。ぼくにもあとで、やり方教えてよね。」ライアン
がそういって、ロビーのわきばらをつつきました（これはライアン
が、だれかをげんきづけようとするときによくやることでした。ライ
アンは、むじやきな子どものようにふるまいますが、おちこんでいる
仲間に対しては、いつにもまして、心をくばってくれます。もつ
とも、わきばらをつつつかれるのは、あまりかんげいできませんでし
たが……）。

「隊長、かれらのことが気がかりです。」フェリアルが、こんどはベ
ルグエルムの方にむきなおっていました。「われらの旅のもくてき

に、かれらは気づいていたのでしょうか？」

もつかのところ、敵、つまりワットの黒の軍勢の者たちに、自分たちの旅のもくてきと、いい伝えのきゆうせいしゆたるロビーのそんざいが知られてしまうことは、もつともさげなければならぬことでした。フェリアルは、そのことを心配していたのです。

ベルグエルムはしばらく、黒騎士たちが去っていったかなたの空の方をながめながら考えこんでいましたが、やがてゆっくりと口をひらきました。

「いや、かれらのようすを見たかぎり、それはないだろう。かれらはたんなる、ワットのいきつ隊にすぎない。今やこのアーランドには、いたるところにかれらのようないきつ隊がいて、人々の動きをさぐっているのだ。もつとも、こんな北のはずれの地にまで、かれらがいるとは思っていなかったが。

「しかし……」ベルグエルムは、そこでいったん言葉を切って、ロビーの方を見つめました（ライアンがまだしつこく、ロビーのわきばらをつつついておりましたが）。

「逃げていったあのふたり。かれらを逃がしたのは、われらにとつて大きな痛手となってしまった。ロビーどのが、敵に知られてしまったのだ。ずるがしこいかれらのことだ、黒のウルファがこの地にいたことを、あやしむことだろう。もしかしたら、レドンホールの古きいい伝えにまで、たどりつくかもしれない。そうなれば、けっかとしては同じことになる。もし、ロビーどのがいい伝えのきゆうせいしゆであると、知られてしまったのなら、敵はひつしになって、われらのことをさがしにかかることだろう。そうなれば、われらはますます、ぐずぐずしてはいられなくなる。もつとも、そこまで考えるのは、いささか、考えすぎであるのかもしれないが。そうだと願うばかりだ。」

北の地にいた、黒のウルファであるロビー。そのロビーのことが、レドンホールに伝わる古きいい伝えのきゆうせいしゆであるのだと、敵に知られてしまったのではないか？　これが、こんなひじょうじたいのときでなかったとしたら、ベルグエルムのその心配も、ただの考

えすぎであるといえるのですが、いかんせん、相手はあの、ずるがしこくてひきようなワットの者たちなのです。とくに、「そうだしよ」であるアルファズレドのおそろしきといったら、なみたいていのものではありません。そしてもちろん、その影にひそむ、魔法使いのそんざいも。ですから、ベルグエルムが心配しすぎるのも、むりもないことでした（それに、いい伝えのことはぬきにしても、自分たちにはむかったふとどき者たちのことを、かれらがこのまま、放っておくはずありません）。南の地をめざす旅の者たちにとって、ここでワットの者たちに出会ってしまったことは、それほどまでに、やつかしいなことだったのです。

ベルグエルムは話しを終えると、ロビーの方をもういちど見やりました。ロビーはじつと、雨の中に立ちつくしているままでした（そして、つつつかれているままでした）。

「ロビーどの、だいじょうぶですか？」ベルグエルムが心配になって、もういちど声をかけました。ロビーはうつむいたまま、腰の剣のことをにぎりしめております。剣はまったく、重さも長さも、なにひとつ変わってはいませんでした。そしてロビーは、ベルグエルムにというよりも、まるで自分自身にいつているかのように、静かに口をひらいたのです。

「この剣は、これからはけっして、あんいにもちいることはしません。みんなを助けるために、ほんとうに必要なになったときにだけ、ぼくはこの剣を使うようにします。この剣は、ぼくのことを助けてくれる。でも、けっして、かるがるしくあつかってはいけないものなんだ。」

ひとだんらくがついてみると、旅の者たちは急に、げんじつの中にひきもどされてしまいました。あたりはいぜんとして、ぎあざあぶりの雨。いなくまのなりひびく夜のあらしの、そのただ中であることに、変わりはありませんでしたから。

そのうえ、メルをふくめる三頭の騎馬たちは、さきほどの戦いのショックで、とてもおちつきを取りもどせるようなじょうたいではな

くなつてしまつていました(とくにメルは、とりわけこうふんしてしまつていて、ライアンがいくらなだめてもおとなしくなりませんでした)。さきを急ぐ旅であるということは、みんなじゆうぶんにしようちしてしました。しかし、安全をあまりにおろそかにしてしまつては、旅をつづけるどころの話ではありません。そのことをよくわかつていたのは、旅のけいけんほうふな騎士、ベルグエルムと、このあたりの土地のことにくわしい、シープロンドの王子、ライアンでした。

「ねえ、このあらしでは、このさきの道はとても危険だよ。このさきはがけの道だし、あらしがすぎるまで、どこかで雨やどりをしていた方がいいと思う。」ライアンがベルグエルムにいいました。

ベルグエルムは橋のむこうぎしをながめながら、しばらく考えこんでいましたが、やがて、みんなのことを見渡していいました。

「ライアンのいう通りだ。やむを得ないが、今は進むべきときではないだろう。」

そしてベルグエルムは、それからまた、あたりのようすをうかがつていましたが、やがて考えがまとまつたようで、みんなにつきぎのようなていあんをしたのです。

「この橋の下には、広いかせんじきがある。そこへ身をかくして、休むのがいいだろう。あらしからも身を守るし、空からでも見つかることもない。さっきの黒騎士たちなら、だいじょうぶ。しばらくは、もどつてくることもないだろうから。どっちにせよ、今日はもう、さきに進むのはやめておいた方がいい。この雨でぬかるんだがけの道を夜にいくのは、危険が大きすぎる。橋の下で朝を待ち、日の出とともに、シープロンドへとむかうべきだろう。」

そしてみんなは、ベルグエルムのこのていあんにさんせいしました(このさい、このひどいにおいはがまんするしかありませんでした)。それから、三頭の騎馬たちと四人の旅の者たちは、セイレン大橋のむこうぎしへと渡り、そこから、橋の下のその広いかせんじきの中へと、ひそかにおり立ってゆくこととなつたのです。

空がぴかぴか光つて、いなくすが大きな音とともに、どこかに落ちたときのことでした。

4、あらしの夜の出会い

その夜、アークランドの北の地は、はげしい雷雨に見まわられていました。もう夜のやみも、すっかりこくなつてしまつたころのことです。さいしよしとすとふり出した雨が、しだいにそのいきおいをまして、そのころにはもう、いなくすまをともなつたぎあざあぶりの雨へと、変わつてしまつていました。それはまさしく、あらしでした。そのときのあらしのことをおぼえている数すくない住人たちのうちのなんんか、わたしはいぜん、話をきくことができましたが、かれらはみな、いちように口をそろえて、同じようなことをいつたものです。

「あんなあらしは見たことなかつたね。おれはもう、なん十年この土地に住んでいるけど、あんなのははじめてだよ。どしやぶりの雨に、おそろしいかみなり。あのきせつにあんなあらしもめずらしいんだが、それだけじゃあない。あれは、ただのあらしじゃあなかつた。うまく口では説明できないんだが、おれはこう思つたんだ。あれはだれかが、よからぬもくてきのためにひき起こした、よくないあらしなんだつて。」かれはそこで、ぶるつとからだをふるわせるしぐさをしてみせました。

「そして、おれは見たんだ。そのあらしのただ中を、おそろしいばけものが飛びまわつていたのを。つばさを持つた、ばかでかいやつらだ。なんびきいたのかまではわからなかつたけど、いなくすまの光が空をてらすたび、そいつらのすがたがやみにうつつた。もう、おそろしいつたらなかつたよ。そいつらは、しだいに空のかなたのやみの中へと消えていつたんだが、ことはそれで、おしまいじゃあなかつた。

「光だ。あらしの夜のまつくらな空を、ふかしぎな光がつつみこんだんだ。いなくすまの光じゃあない。もつとしんぴ的で、ふしぎな光だ。青白くて、力にあふれてて……。それから、おそろしいかいぶつたのさけび声。どこからひびいてくるとも知れない、おそろしいさけび声だつた。たぶん、ほうこうからいつて、セイレン河のあたりだつたんじゃないかな？ それとももつと、さきの方だつたかもしれない。今となつては、もうはつきりしないね。」

そこまで話すと、かれはわたしにほほ笑みかけて、さいごにこういったものです。

「もつとも、そんなことはおれにはかんけないし、知りたいとも思わないけどね。悪いれんちゆうは、みんなどこかへいつちまったんだから。今は、なにごともないおだやかなこの暮らしに、とてもまんぞくしているよ。」

かれはそういって、口にくわえたパイプを大きくふかすと、わたしにお茶のおかわりをそそいでくれました。

旅の者たちは、そのあらしのただ中にいました。そして今、一行は、セイレン河にゆいいつかかる石の橋であります、セイレン大橋のたもとへと、ひそかにおりていくところだったのです。そんなかれらを背中から見送るものは、おつかないなびかりと、それにつづくいなずまの音ばかりでした（どちらもまるで、かんげいできない相手ですけれど）。

橋の下につづく小道は雨がどんどん流れこんで、まるで川のようにした。しかも、道はばはせまく、急で、馬をつれている一行にとって、おりののはひとくろうだったのです。そのうえようやくおり立ってみますと、橋の下ではセイレン河のそのひどいにおいが、輪をかいてひどく感じられました（これにはみんなうんざりしてしまって、けつきよくライアンが、みんなの鼻と馬たちの鼻に、空気でこしらえたまくをかぶせてくれました。全身をおおうバリアーとちがって、このくらいだったら、つかれているライアンにも新たに作り出すことができなのです。すでに、メルとベルグエルの肩にも、このまくを作っていましたので、ライアンのふたんはけっこう大きかったんですけど。でも、こんなひどいにおいのところにそのままずっといるのは、もつとふたんが大きかったですから）。

旅の者たちは、ぜんいんすでに、へとへとにつかれきっていました。それもそのはずです。とちゆうの岩場で、ガイラルロックたちとのたいへんな戦いを、やつとのことできぐりぬけてきたばかりだというのに、そこへ加えて、おそろしいかいぶつたちに乗ったワットの黒騎士

たちの、しゅうげきを受けたのですから。こんなことは、めったに起こり得ることではありません。いくらかれらが、つわものぞろいの勇士たちであったとしても、こんかいばかりはみんな、へとへとにつかれきってしまったのも、むりもないことだったのです（とくにロビーは、はじめての旅に出たばかりで、こんな目にあつたのです。みなさんが同じ目にあつたとしたら、やつぱりロビーと同じく、へとへとな気持ちになってしまうと思いますよ）。もう旅の者たちはみんな、すぐにでもあたたかいもうふにくるまつて、眠りたい気分でした。

橋の下にはベルグエルムのいう通り、一行が休むのにじゅうぶんなだけの広さがありました。そこで四人はまず、たおれている石のはしらを見つけますと、それぞれの騎馬たちをそこにロープでつないで、急ぎ、野宿のじゅんびに取りかかったのです。大きな石のはしらが、うまいぐあいには、このあらしの風をかなり防いでくれました（けがをしているメルは、いちばん風のあたらないいちばんいい場所につながれておりますので、安心してください。ライアンがにんじんをいっぱい、自分のかばんから取り出して、メルにあげました。ほかの騎馬たちにもいっぱい）。しかし、それでもなお、橋のあいだを吹きぬけていく風は、おそろしいうなり声を上げて、みんなの心をいたずらにおびやかしていくばかりだったのです。

そしてみんなが、たき火のじゅんびをし、ぬれた服をしぼり、にもつのかくにんやら、耳やしっぽの手いれやらに、いそいでいたときのこと。ロビーがふいに、なにかを見つけたのです。それは、橋げたの影になつて、こちらがわからずには、さいしよは見えませんでした。ですが、あるものがそこに生まれたおかげで、はじめてみんなは、そのそんざいに気づくことができたのです。

それは小さなあかりでした。ランプのあかりのようなのです。橋げたのその影によりそうようにして、いつけんの小さな木の小屋がたっていました。それは風でがたとゆれ、今にもくずれてしまいうまくらいにぼろぼろの小屋でしたが、今の旅の者たちにとって、願ってもないほどにありがたい、かいてきそうな寝床に見えました（おながすきすぎているところに、チョコレートのはこを見つけ

たときみたいに)。そしてたしかに、その小屋の中から、あかりの光がもれていたのです。

かいぎをひらくまでもありませんでした。みんなはもう、「まんじょういっち」で、その小屋をたずねることにさんせいしたのです。もしかしたら、とつてもこわい人が中にいるのかもしれないという心配はありましたが、そんなことにかまっているよゆうもありません。それに、相手がどんな者であったとしたり、あんなにおそろしいワットの黒騎士たちよりかは、ましなはずです（たとえ、もつとこわいのがいたとしても、みんなはそこへいったでしょう。かれらの頭はもう、あたたかい寝床のことではいっぱいでしたから）。みんなはつかれ果てておりましたが、それでも用心だけは忘れないようにして、その小屋にゆつくりと近づいていきました。

小屋の前までやってきますと、かれらは入り口のとびらのわきに、木の板をぶつきらぼうに張りつけただけのひょうさつがかかっているのを見つけました。どうやらここは、だれかの家のようです。そしてそのひょうさつには、ナイフでらんぼうにけずつてきざんだ文字で、こう書いてありました。

「ただのカピバラの家」

みなさんは、カピバラという動物をごぞんじでしょうか？ 河のほとりのひらけた草原などにむれをなして住んでいる、草食動物のことです。ぼーつとした顔をしていて、どこを見ているのか？ わからなような切れ長の目を持っていて、とてもおよぎがじょうずですが、水の中で暮らしているわけではありません。そんな動物です。そしてもちろん、このおとぎのくにアーケランド世界のカピバラ種族の者たちは、みなさんの知っているカピバラたちとは、ちがっていました（見た目はだいぶ、にているところが多いのですが）。

アーケランド世界のカピバラたちは、手さきがとつてもきょうなことで、知られていたのです。こまかいさいくものや、そうしよく品などを作るぎじゅつは、このアーケランド世界の中でもぴかいちといわ

れるほどのものでした。それだけでもすごいのですが、じつはかれらは、それよりもつとすごいわざを持つていたのです。それは、家やたてものをつくる、けんちくのぎじゆつでした。じっさい、このアーランドにたっているたてものほとんどすべてに、かれらのぎじゆつが使われているほどだったのです。

ですが、そんなにすごいわざを持つているかれら自身のことは、あんまり、いえ、じつはほとんど、知られていませんでした。それはなぜか？　といいますと、かれらはいあんまり、よその種族の者たちとつきあうのが、好きではなかったからなのです。かれらは仲間をとつてもだいじにするのですが（なにしろ、よその家の赤ちゃんであっても、わけへだてなく子育てしてしまうくらいなのです。それほど、仲間いしきが強いのでした）、そこからはいつてくる人やものを、好ましく思いませんでした。ですから、アーランドの住人たちはみな、カピバラ種族の者たちのことは、名まえだけはよく知っているものの、どこでどんなせいかつを送っているのか？　じっさいには、ほとんど知らなかったのです（そのため、カピバラというのは、とつてもがんで、へんくつのわからずやで、近づこうとすれば石を投げつけてくるなんていう、あらぬうわささえ流れているくらいだったのです）。

さて、旅の者たちが目にしたそのひようさつには、そんなさまさまなことを思い起こさせる、カピバラという文字がきざまれていました。どうやら、そのカピバラ種族の者たちのうちのだれかが、この小屋には住んでいるようなのです。

旅の者たちは、ここでいったん集まって、話しあいました。ただ今わたしがみなさんに説明いたしました、カピバラ種族の者たちのことを、かれらはいつたい、どのくらいまで知っているのでしょうか？　かれらの言葉に耳をかたむけてみましょう。

「カピバルたちのことについては、わたしも耳にしたことがある。」ベルグエルムがいいました。カピバルというのは、カピバラ種族の者たちのことをあらわすよび名です。ロビーたちおおかみ種族の者たちのことをウルファ、ライアンたちひつじの種族の者たちのことをシープロンとよぶように。

「かれらは、たてものをつくるぎじゅつにひじょうにたけているときく。じつさい、いくつかのくにでは、かれらの手によって城がぎずかれたともきいている。それがほんとうなのかどうかはわからないが。しかし、かれら自身のことについては、うわさで大きく以上のことはわたしも知らない。かれらが、はるか遠い東のくからこのアーケランドにうつり住んできたとか、ほかの種族の者たちのことを毛ぎらいしているとかいううわさもあるが、それもどこまで、ほんとうのことなのかどうか。」

「どうやら、旅の仲間たちの中でもとくにもの知りである、ベルグエルムをもつてしても、カピバルたちのことについてわかるのはこのくらいのものでした。では、ほかの仲間たちはどうでしょう？」

「カピバルたちのことについては、わたしもほとんど知りません。たてものをつくるぎじゅつにすぐれているそうですが、はたしてほんとうにそうなのでしょうか……？」これはフェリアルでした。フェリアルはそういって、目の前の小屋のことを見たのです。なるほど、こんなにもみすぼらしいぼろぼろの小屋を見れば、「たてものをつくるぎじゅつがすぐれている」というひょうかを、うたがいたくもなるはずです。

フェリアルがつづけます。

「でも今は、かれらのぎじゅつがどうだとか、カピバルというのがどんな者たちであるのかなどということよりも、この小屋に住んでいる者にかぎっての話をすべきです。つまり、この小屋に住んでいるだろうカピバラ種族の者が、われらに寝床をいきようしてくれるものかどうか？ そっちの方が問題です。」

これはまったく、げんざいの一行のじょうきょうについて、じつにまどをいた言葉でした。ですから、仲間のひとりであり、かれのいちばんの友人でもあるベルグエルムも、フェリアルの肩に手をおいて、こういうばかりだったのです。

「まったくきみのいう通りだ。わたしも早く、だんろの火にあたりたくてしかたがないよ。」

あれこれ話しあってみてもむだなことでした。もうこのさい、かん

げいをきたいするのはやめにしなければなりません。中にいるのがどんな者であれ、すなおにお願いして、とめてもらわないと。それでみんなは心をきめて、小屋のとびらをノックすることにしたのです。それは、さいごにロビーのいった言葉に、だいぶ勇気づけられてのことでもありました。

「ぼくは、このカピバラの人はいい人だと思う。カピバラ種族の人たちのことはぜんぜん知らないけれど、すくなくとも、この小屋に住んでいる人はいい人です。ぼくは、ずっとひとりですごしてきたから、気持ちがよくわかるんです。こんなさびしい場所に住んでいるのも、なにかのじじようがあつてのことだと思う。それに、このひょうさつにはこう書いてあります。ただのカピバラつて。ただのだなんてひょうさつに書くくらいなんだから、悪い人だとは思えません。とてもけんきよで、さみしい気持ちがあるからこそ、こう書いたんだと思います。だれか、気持ちをわかってくれる人がたずねてきてくれるのを、待っているのかもしれない。」

とびらをノックするのはだれがいいか？ 顔を見あわせたけっか、ライアンがいいだろうということになりました。それはつまり、中にいるだろうカピバラ種族の者の身長にあわせてのことだったのです。とびらをあけて、いきなり目の前に大きなおおかみ種族の者が立っていたら、相手もびつくりして、たいどを強めてしまうかもしれないでしたから（カピバラの種族カピバルの身長は、みんなせいぜい、四フィートというところでした。そしてライアンたちシープロンの身長は、だいたいみんな、五フィートもないというところだったのです。とくにライアンは、まだ少年でしたので、それよりもっと小さいのでした。ですから、とびらをノックするには、相手をこわがらせてしまっておそれのすくないライアンが、まさにうってつけだったというわけなのです。

ちなみに、ロビーたちウルフアの身長は、へいきんでも六フィートほどもありました。ロビーはまだ、それほど大きくはありませんでしたが、それでもライアンにくらべたら、大人と子どもほどもちがいがあつたのです。ライアンは、小さいといわれて、「そんなに小さくない

よ!」とすこしむくれておりましたが。けつこう気にしていたみたいですね。

そうして、ライアンは静かに、それでいてはつきりと、とびらを二回ノックしました。

とん! とん!

みんなはしばらく、そのまま待つていたのですが、家の中からはなんの反応もありません。雨つぶのまじった強い風が、みんなの顔に吹きつけてきます。ランプのあたりはあいかわらず、ちらちらとまどのむこうでゆれていました(まどはまっ黒けによごれていて、中のようにはずんぜん見えませんでした)。

ライアンはもういちどとびらをノックして、こんどは声をかけてみることにしました。

「あのーう、すいません。ごめんください。どなたかいませんかー?」

ですが、まだへんじがありません。それでライアンは、こんどはもっと大きな声で、さけんでみることにしました(この場所なら、ごきんじよめいわくになることもありませんからね)。

「あのーう! すいませーん! だれかいませんかー!」
すると……。

小屋のおくの方で、なにか、がちやがちやという物音がきこえはじめたかと思うと、それは、しだいにすごく大きな音となって、入り口のとびらのそのすぐむこうにまで、せまってきたのです!

がらん! がらん! がちやん! がちやん!

それは、このあらしのいなずまの音にも負けないくらいのもので、そうぞうしい「きんぞく音」でした。仲間たちはとっさに、腰の剣に手をかけて身がまえたほどです。ぼろぼろの木の小屋から、こんなに大きなきんぞく音がきこえてくるなんて、いったいだれがよそうできたこと

でしょうか？

そして、一行がおどろいているそのあいだに、ついに、小屋の中の住人からへんじがかえってきました。へんじがかえってきたというよりも、とびらの方がいきおいよく、ばーん！ とひらかれましたが（ライアンはびつくりして、そのまましりもちをついてしまいそうになりました。うしろにいたフェリアルがとっさにかかえたので、ころばずにすんだのです）。

小屋の中に立っていたのは、全身ぼろぼろの衣服に身をつつんだ、ひとりのカピバラ種族の者でした（ぼろぼろのみどり色のチョッキを着ていて、同じくはい色のズボンをはいていました）。せいべつは男せいです。顔はぼうぼうのはい色のひげにおおわれていて、そのひげは、顔の半分くらいをおおいかくしてしまっているほどでした。そのうえ、そのもじやもじやのまゆ毛のせいでも、目もほとんど、かくれてしまっていたのです（カピバラ種族の者たちは切れ長の目がとくちようでしたので、もとからあんまり、その目をはつきりと見ることはできませんでしたが……）。

そして、これはいったいなんなのでしょう？ そのカピバラ種族の者とおんなじくらいにいんしょう的な、あるものが、入り口のとびらのわきに立っていました。

それは、このうす暗い小屋の中でもぴかぴかとかがやいて見える、ふしぎなきんぞくでできた、一頭の馬でした。その馬はとてもよくできていて、さまざま部品がふくざつにくみあわさってできているみたいだったので（さまざまなかざりがついていいるうえに、上にまたがるためのくらまでついていました）。大きさは子馬ほどでしたが、この小さな小屋の中で見ると、それはとても大きなもののように見えました（そのカピバラ種族の者がとても小がらでしたから、くらべられてよけいに大きく見えました）。

そのきんぞくの馬は、今は静かに立っているだけでしたが、どうやらさつきのがちゃがちゃという音は、この馬が立っていた音にまちがないようです。けれど、はじめてそれを見た一行には、この馬がいったいどうやってあんな音を立てていたのか？ ぜんぜんわかり

ませんでした。なにか、ぜんまいでもまくと、がちやがちや動くので
しょうか？　しかし、そんなことを考えている時間は、みんなには
まったくありませんでした。だって、入り口のとびらがひらいてから
みんながそのカピバラと馬のことを見て、そしてそのカピバラの男せ
いが口をひらくまでのあいだは、じつさいには、ほんのいつしゆんの
あいだのできごとだったのですから（文章に書くといろんな説明が加
わってしまいますので、あいだが長く感じられてしまいますが、それ
はごかんべん願います。では、説明はこのくらいにして、さきをつづ
けましょう）。

カピバラの男せいが、大きな声でいいました。

「なんと！　おまえさん方！　ひつじに、おおかみまでいっしょと
は、なんて取りあわせなんじやい！　それも、ひい、ふう、みい、よ、
全部で四人も！」

どうやら、こっちがおどろいている以上に、このカピバラの方が
びっくりしているみたいでした。さしずめ、目をまるくしてといった
ところでしょうか？（でも、どんなに目をまるくしても、その切れ長
の目はあいかわらずそのまんまでしたが。）

カピバラの男せいがつづけけます。

「いったいぜんたい、こんなあらしの夜に、おまえさん方はこんなと
ころでなにをしとるんじや？　見たとこ、そっちのふたりは騎士のよ
うなかつこうじやな？　じゃが、それにしてもひどいありさまじゃわ
い。それに、あんたはけがまでしているようじやな？」

カピバラ種族の男せいは、ベルグエルムの肩をゆびさしていいまし
た。肩のけがの当てのようすを見て、そういったのです。

さて、みなさんにはもうおわかりになったかと思いますが、このカ
ピバラの男せいは、若くはありませんでした。はつきりいつてしまえ
ば、かれらの種族の者の中でも、かなりのおとしよりだったのです（お
まけにちよつと、耳も遠いようでした。それでさいしよは、ライアン
のよびかけにも、すぐには気がつかなかったのです）。そして、ロビー
の思った通りでした。このカピバラの老人は、旅の者たちをむげに追
いかえしたりするほど、気むずかし屋ではなかったのです。

カピバラ老人の言葉に対して、ベルグエルムがせいっぱいの敬意をこめて、とてもれいぎ正しいどを取っていいました（かれらのような騎士たちは、目上の人のほかに、自分より年上の人をとてもうやまうのです。それがおとしよりなら、なおのことでした。みなさんも、おとしよりはたいせつにしてますよね）。

「このような夜ふけに、まことにきようしゆくです、ご老人。わたくしたちは、わけあって、ここから南東にくだりました地、うつしみ谷のシープロンドまでの道のりを急ぐ、旅の者です。ですが、このあらしでは、どうにも、山道をゆくことはままなりません。それで、このセイレン大橋の下へと、なんをのがれて、やってまいったしだいなのです。」

ベルグエルムはそこまでいって、カピバラ老人のようすをうかがいました。老人はベルグエルムの顔をじろじろと見つめ、そしてそれから、ほかのぜんいんの顔をじゅんばんにながめやっております。ひとりひとりをじっくりと、まるでその心の中を品さだめているかのようには、じろじろ見ているのです。そのため、しようじきなところ、みんなはあんまりいい気持ちにはなれません（とくにロビーは、こんなふうには長いあいだ、まつしょうめんから人にじろじろ見つめられるなんてことは、はじめてでしたから、かなりはずかしかったです）。ですが、今はただ、このカピバラ老人のへんじを待つしかありませんでしたから、みんなはなにもいえず、じつとがまんをしていました。

そして、しばらくのち。カピバラの老人がとつぜん口をひらいたのです。

「うむっ！ ほんとうのようじゃなっ！」

それはとんでもないほどの大声で、じつとだまって立ちつくしていたみんなは、飛び上がってしまいそうなくらいびびくりしてしまいました（急にだれかにうしろから、「わっ！」と声をかけられたときみたいに）。

そんなみんなにはおかまいなしに、カピバラの老人がつづけけます。

「おまえさんたちの顔からは、悪だくみのけはいは感じられん。ほ

んとうに、なんぎをしているだけの旅の者たちに、ちがいないようじゃ。こんなところに住んでおれば、すこしは人をうたがうこともせんと、自分の身があぶないでな。悪く思わんでくれ。じゃが、そうときまれば、さあさ！ 中へおはいり！ ぬれた服をかわかして、からだもあたためんと。ごこえ死んでしまごぞい。」

これはほんとうに、旅の者たちにとってありがたい言葉となりました。冬も近いこのあらしの夜に、橋の下のたおれた石のはしらの影で、ちちこまってひとばんを明かそうとしていたのですから、みんながよろこんだのもむりはありません。

「ありがたい！ お申し出、われら一同、心よりかんしゃいたします！」ふたりの騎士たちはよろこびのあまり、頭で考えるよりもさきに頭を下げ、心からのかんしゃの言葉を老人におくつていました。ロビーとライアンも、あわてて深々と頭を下げて、それにならいます。そして、ベルグエルムがもういちど口をひらいて、つぎの言葉を伝えたとのことでした。このカピバラの老人に、思いもかけないへんかが起こったのです。

「カピバルのあつきごこうい。われら、ベーカーランド国にかわりまして、あつくおんれいを申し上げます。」

この言葉をきいたとたん、カピバラ老人はなにかにとりつかれたかのように、わなわなとふるえはじめました。そして、その切れ長のはつきりしない目を大きく見ひらいて、老人はベルグエルムのことを、くいいるように見つめてきたのです。

「ベーカーランドじゃと……！ おまえさん、今、ベーカーランドといったか？」

カピバラ老人はそういって、ベルグエルムにつめよりました。そして、そのふるえる両手で、ベルグエルムのおなかのあたりをがっしりとつかんだのです（ほんとうは肩をつかみたかったのですが、背だけがたりなかったのです）。

ベルグエルムはびっくりして、この老人の変わりようを心配しながらこたえました。

「は、はい。いかにも、わたくしとこの者の両名は、ベーカーランド

王、アルマーク王につかえし者です。白の騎兵師団にぞくしております。」

これをきいて、カピバラ老人はとてもシヨックを受けたようでした。すっかり取り組みだしてしまつて、ベルグエルムをつかむうでに力をこめて、はげしくゆさぶつたのです。

「おお……い！ あなたたちが、白の騎兵師団なのですか！ それがおんとうならば、このわしには、つらすぎるしんじつです。もう、今となつてはおそすぎました。もつと早く、あなたたちの助けがほしかつた！」

そういうと、カピバラ老人は、声を張り上げて泣き出してしまいました。地面にぺったりとくずれ落ちて、両の手で顔をおおつて、わあわあ泣きさけんでしまつたのです。

これを見て、みんなはとてもびっくりして、カピバラ老人のそばに集まりました。そして、ベルグエルムがカピバラ老人のうでを取つて、その泣いているわけをたずねたのです。

「いかがなされました、ご老人！ わたくしたちに、いったいなにかあるというのですか？」

カピバラ老人は、ベルグエルムのうでにだき起こされると、ようやくおちつきを取りもどして立ち上がることができました。そして、それからまたようやくのことで、ふたたび口をひらくことができたのです。

「……なんとも、めんぼくのないことです。つい、取りみだしてしまつて……。さあ、とにかくまずは中へ。それからみんな、あなた方にもきかせてあげよう。わしのこと。わしたちのくにに起こつたこと。なにもかもすべてじゃ。」

小屋の中はじつにそつけないもので、なんのかざり気もありませんでした（ゆいいつ、きんぞくでできた馬のつくりものはべつです。なんでこんなものがあるのか？ あとで老人にきいてみましょう）。小屋のまん中には、むき出しの木のはしらがまがつたまま立っていて、かべにはところどころに、板のつきはぎがしてありました。家具らし

い家具もほとんどなく、木をらんぼうによせ集めて作ったぼろぼろのテーブルと、がたのきたベッド（のよなもの）がひとつずつあるだけです。てんじょうはやねの板がそのままむき出しになっていて、今にも風で飛んでいってしまいそうに見えました。

ですが、ふしぎなことに、小屋の中はそとがあらしであるということも忘れてしまいそうなくらいに、静かだったのです。やねからも、雨もりのしずくのいってきさえ、落ちてきません。かべにうちつけてある木の板も、見るからにらんぼうに張りつけてあるだけのように見えるましたが、すきま風のひと吹きさえも感じられませんでした（これはじつは、カピバルたちのその名声の通り。一見ぼろぼろに見えるこの小屋にも、かれらのすぐれたわざが使われていたからなのです。いかげんにくみあわせてあるだけのように見えるかべやてんじょうの木の板も、水や風を通さないように、たくみに計算されてくみあわされていました。さすがはカピバル。そのわざは、やっぱりすごかったのです。フェリアルも、これならなっとくですね。びっくり）。

そのため小屋の中は、そのようないやなにおいがありませんでした。これはほんとうに大助かりで、ライアンはみんなの鼻に作った空気のまくを、はずすことができました（さすがにせますぎでしたので、馬たちを中にいれることはできませんでしたが）。

ですが、旅の者たちにとつてそれらのことよりもなによりも、まずまっさきに心ひかれるものが、そこにはありました。それはだんろでした。もう火がほとんどもえておらず、わずかな残り火がくすぶっているだけでしたが、このひどい天気のとからやってきた旅の者たちにとつて、それはほんとうにすてきで、みりよく的なものに見えたのです。

「わしはちょうど、このだんろの火を起こしなおそうとしていたところだな。そこで、あなた方の声に気がついたんじやよ。」カピバラ老人はそういって、みんなのために、たっぷりのまきをだんろにくべてくれました（ライアンが「お手伝いします。」といって火の力をかりて、その力をまきに伝えてくれたおかげで、火のいきおいはたちまち大きくなりました。しぜんの力をかりるわざというのは、ほんとうにべん

りです)。

「みんな、つかれきつているようすじゃからな。ミルクをあたためてあげよう。そのあいだに、ぬれた服をぬいで、火にあてるといい。もうふならいくつかあるから、それを使っておくれ。」

そして老人は、テーブルの上のランプを手に取ると(このランプはロビーにこの小屋のそんざいを気づかせてくれた、きつかけとなったものでした)、部屋のおくに張り出してつくられていたものおきから、もうふを四まい持つてきてくれたのです(おせじにもきれいなもうふではありませんでしたが、まさかもんくはいえませんが)。四まいあつただけでも、ありがたいことなのですから)。

さて、旅の者たちはぬれた服にもつを火にあてて、カピバラ老人が貸してくれたもうふにくるまると、やつとこのことできゆうそくを取ることができました。もうみんな、話すこともおつくうなくらいにつかれておりましたので、かべを背にして、床にちよくせつすわりこんでいたのです(この小屋の中には、ほかにすわれるようなところもありませんでしたから)。そして、だんろにかけたミルクがあたたまる、カピバラ老人はそれをカップにそそいで、(砂糖をたつぷりいれて)みんなにくばつてくれました。それはもう、ほんとうにおいしくて、あつたかで、旅の者たちにこのうえないやすらぎを与えてくれるものとなりました(ちよつと本において、あなたもあたたかいミルクを作つてみてはいかがでしょうか? それを飲みながらつづきを読めば、みんなの気持ち、さらによくわかるんじゃないかと思えます。お砂糖多めを忘れずに)。

みんなはミルクを飲みながら、カピバラ老人の方を見やりました。すつかりおちつくことができ、老人の話に耳をかたむけるころあいになったからです。カピバラ老人はそれにうなずいてこたえると、自分のベッドのはしに、ゆつくりと腰を下ろしました。そして、「ふう。」と大きなため息をひとつついてから、静かに話しはじめたのです。

「わしはもともと、このセイレン河のはるかな上流、セイレンのみずべとよばれる土地にきずかれた、カピバラのくにの住人じゃ。」

老人は、まどのそとをぼんやりとながめながらいいました。遠いふ

るさとのことを、思い出していたのでしよう。

「カピバラのくには、名まえなどない。ただ、ゆたかなしげんと作物のみのり、そして、われらくにたみ。仲間たちがおれば、それだけでじゅうぶんじやった。その点からいえば、わたしたちのくには、まさにそうきようじやった。みな日々を楽しみ、おだやかな時間の流れを楽しみ、それにまんぞくして、人生を送っておった。

「そんなわしらのくには、このアークランドでもいちばんといていいほどの、あるとくべつなわざがあった。あなた方もぞんじておるかと思うが、そう、ものづくりのわざと、けんちくのぎじゆつじやよ。わしらカピバルの一族は、代々、その家に伝わるひでんのわざを受けついできた。そのわざは、それぞれのカピバルの家によってさまざまじゃ。ぜったいにくずれることのないれんがのかべをつくれる者や、たおれることのないはしらをたてられる者もおった。しげんのならわしにさからった家をたてることのできる者もおったし、光を自分で生み出せるまどやてんじようをつくれる者もおった。それらはすべて、その一族の者たちがいには、そうそうまねのできるようなものではなかった。わしの一族のわざはといえば、ほれ、そいっじゃ。」

老人はそういつて、入り口のわきにずっと立ちつくしていた、あのきんぞくせい馬の馬をゆびさしてみせました。さあ、それではいよいよ、このなぞの馬のしょうたいがわかるときがきたようです（みなさんも気になっていたことでしょうか、旅のみなもみなさんに負けないくらい、この馬のことを知りたがっていました。とくにライアンとロビーは、つかれも忘れて、思わず身を乗り出してしまっただけだったのです）。

老人はそれから、四本のゆびをひよいひよいと動かして、「おいでおいで」のしぐさをしてみせました。すると……。

がらん！ がらん！ がちゃん！ がちゃん！

これはすごい！ きんぞくでできていたはずの作りものの馬が、老

人のあいずにこたえて、まるでほんものの馬であるかのように、なめらかに、そしてゆうがに、四本の足をがちやがちやと動かして、老人のそばまでかけよっていったのです！（ちよつと音はうるさいのですが、それはきんぞくだからしかたありませんね。そしてやっぱり、あのがちやがちやという音は、この馬が出していたのです。）

旅の者たちはほんとうにびっくりして（あのれいせいなベルグエルムでさえ、思わず、口にしたミルクをぶっ！と吹き出してしまいそうになったほどです）、そのあととはただだ、へえ！と感心するばかりでした。こんなみごとなさいくものは、もちろんだれも、今まで見たこともありませんでしたから。

「こいつはな、ただの鉄ではない。生きている鉄なのじゃよ。」老人はそういって、馬の首のあたりをなでました。すると馬は、頭を老人にすりよせて、あまえるのです。

さてさて、みんなはこれだけでもじゆうぶんすぎるほどにおどろきました。が、じつはこの馬のひみつは、これだけではありませんでした。いえ、むしろそつちの方が、旅の者たちにとっては（そしてみなさんにとつても、たぶん）、さらなるおどろきのひみつだったのです。

「おどろいとるな？　そうじゃろう。これは、わしらカピバルたちしか知らんことじゃからな。あなた方を心からしんようしとるから、わしはこのひみつを見せたんじゃよ。ではもうひとつ、とつておきのひみつを見せてあげよう。じゃが、このわざは、ぜったいのひみつじゃ。人にはもらさんでにおいてほしいんじゃが、やくそくできるかね？」

もちろん！　旅の者たちは首をおもいつきり、なんどもたてにふりました。こんないい方をされたら、だれだって、きかずにはいられませんもの。

「よろしい。では……」老人はそういうと、馬の顔の前に手をかざして、それから、ぱちん！とゆびをならしてみせました。すると、とつぜん！

がらがらがらがら、がっちやーん！

なんとなんと！ 馬はみんなの目の前で、とたんにばらばらになって、床にくずれ落ちてしまったではありませんか！

大きな部品に小さな部品。鉄のぼうがなん本も。はぐるまの大小がいつぱい。そして、小さなねじのいつぱんいつぱんにいたるまで。馬はかんぜんに、ばらばらになってしまったのです。

今やこの小さな小屋の床は、すみずみまで鉄の部品がちらばって、いつぱいになってしまいました。これをもと通りにもどすことは、どうやってもむりでしょう。なにがどこにくつついていたのかも、もはやまったく、わからないのですから（そうじするだけでもたいへんなはずです）。ですが、老人はまったく、心配するそぶりも見せませんでした。自分のだいいじな馬がこんなことになってしまったというのに、なぜなのでしょう。でも、そのこたえは、このあとすぐにわかりますよ。

「おどかして、すまなんだな。この馬は、わしのめいれいひとつで、すみずみまでばらばらにすることができるんじや。じやが、ばらばらにするだけだと思うかね？ そう、こいつのほんとうのひみつは、ここからなんじやよ。」

そしてカピバラの老人は、にこりと笑うと、床にちらばった鉄の部品たちにむかってひとこと、こういったのです。

「起きろー！」

みんなは、目の前で起こっていることをとても信じられませんでした。ですがこれは、かくじつに、自分の目でじっさいに見ている、げんじつのできごとなのです（ライアンはあんまりおどろいたので、これは夢じゃないか？ と思いました。ですからかれは、フェリアルのはほをつねって、これが夢じゃないということをしめしたのです。もちろんフェリアルは、「自分のほほをつねってくださいよ！」とぶんぶんいいました）。

そうです、みなさんもそうぞうされたことと思いますが、その通り。ばらばらにちらかっていた鉄の部品のひとつひとつが、老人の言葉に反応して、がらがらと音を立てて、もとの馬のかたちにもどっていつ

たのです！

はぐるまが空中にまい飛び、鉄のぼうがかしんかしん！ とそれにくつついていきました。ねじがいっぱい集まって、空中を波のようにぎざあつ！ と流れていきました。そしてそれらのねじはどんどんと、もともとはまつていたねじあなに、くるくるまわつてとじられていったのです。みんなはあんまりおどろいたので、口をあんぐりとあけたまま、なんにもいうことができませんでした（人って、あんまりおどろいたときって、ぎやくになんの反応も取れなくなってしまうものですよ。まさに今、みんなはそんなぐあいでした）。

それらは、ほんの十数びようほどのあいだのできごとでした。さいごに、馬の頭をかざっていた部品がくるくるとちゆうをまいおどつてから、かしん！ くつつくと、これでもと通り。さつき見たあの鉄の馬が、ふたたびみんなの前にすがたをあらわして、がちやがちやいながら、小屋の中をげんきよく歩きはじめたのです。

みんなの反応を見て、カピバラの老人はまんぞくげに、「ほつほ。」と笑いました。してやったりといった感じですよ。ですが、ちよつとくやしいですけど、みんなは老人の思い通りの反応を取ることしかできませんでした（みなさんもじっさいに見てみれば、かれらと同じ反応をすることと思いません。お見せできないのが、わたしもひじょうにざんねんです）。

「こいつはな、作り手であるわしのめいれいひとつで、ばらばらにしたり、くみあわせたりすることができるといふんじやよ。それもすべて、この生きていく鉄と、一族のわざがあつてこそじや。この馬に使われている鉄はな、それをくみあわせて作ったものを、生きもののように動かすことができるばかりではなく、いちどくみあわせてそのくつつき方をおぼえさせると、あとはこんなふうには、好きなようにばらばらにしたり、もともにもどしたりすることができるようになるんじやよ。まさに、生きていく鉄じやろう？ そのくつつき方までも、ずつとおぼえているんじやからな。」老人はそういって、こんどは馬の背中をぽんとたたいてみせました。すると馬は、頭のいい犬がそうするみたいに、足をおりたたんで、床にぺたつとふせてみせるのです。

「わしらのくには、このわぎをけんちくにもくみあわせて、毎回好きないようにかたちを変えられる部屋や、かいだんななんかをつくっておった。わしらのくにはこんなふうには、それぞれの一族がそれぞれのわぎを、おたがいのためにおしみなく分けあっておったのじゃ。だれやかれやとかまうことはない。必要とされれば、よろこんで、自分たちのわぎをみなにていきようした。それが、わしたちのくにのすばらしきところであつたし、同時にそれは、われら仲間うちの、けつそくのあかしてもあつたのじゃ。」

老人はそこまでいうと、とつぜん顔をくもらせました。なにか、とてもいやなことを思い出しているかのようでした。そしてその通り。かれの話はここから、とても暗くて、とてもおそろしい、いやなお話の中へと進んでいくことになるのです……。

「あるときからじゃ。」老人がふいにいいました。「わしたちのくの中で、動きが起こつた。それまでは、かたくなに、そのすばらしきわぎの数々を自分たちのくからそとにもらさないように、つとめてきたのじゃが、だんだん、そうもいかないしだいになつてきた。それはつまり、わしたちのくにが、さかえすぎたということなんじゃ。くになが大きくなって、それまであちこちにちらばっていた仲間たちが、どんどんと集まるようになってきた。もちろん、はじめのうちは大かんげいじゃつた。仲間がふえるのは、うれしいものじゃからな。じゃが、仲間がふえればふえるほど、しだいに自分たちの力だけでは、くにをささえきれなくなっていくものじゃ。じつさい、心配した通りそうなつた。もはや、みなをやしなつていくだけの力を自分たちのくの中だけで生み出すことは、ふかのうになつておつた。」

「わしたちは話しあつたけつか、いくつかのぎじゆつをほかのくにもたらすけつだんをした。それはけつして、のぞんだことではなかつた。じゃが、いたしかたなかつたのじゃ。わしたちはきびしいきまりごとを作つて、それにしたがつて、かぎられた中でのみ、ほかのくにと取りひきをおこなうことにした。じゃが、それでも、それはわしたちにとって大きなまちがいであつたのじゃ。たしかに、取りひきによつて、わしたちのくには一時的にはとてもゆたかになつた。たく

さんの品物やお金が、どんどんとはいってきた。くに中の人々がみんな金持ちになって、せいかつはうるおいにうるおった。じゃが、わたしたちは、それにおぼれてしまった。目さきのよくにおぼれたのじゃ。そんなことになったらどんなときだって、ろくなことにはならないというのに。わしらはそのことを、すっかり忘れてしまっていたのじやよ。そして、そんな中のことじや。あのいまわしきできごとが起こったのは……。

「忘れもせん。その日、わしらセイレンのみずべのくにに、めずらしくあらしがおとずれた。ちようど、今夜のような、強くてふきつでおそろしげなあらしじやった。こんな日にこんな話をするのも、きつとなにかのいんがじやろうな。ひるまじやというのに、空はまるで夜のように暗く、いくどとないなずまが、わしらのくの中をおびやかしておった。そして、そんな中じや。やつらが……、やつらがあらわれたんじやよ。」

カピバラ老人はそういって、かたく目をつむりました。おそろしい思いでが、頭の中いつぱいによみがえってきたのです。老人はそれにあらがおうとして頭をふりましたが、ききめはまったくありませんでした。

「それはな……、それは大地をうめつくさんばかりの、大部隊じやった。まっ黒なよろいを着こんだ、おそろしげな兵士たちじや。頭にはみな、見た者をふるえ上がらせるのにじゆうぶんなほどのおそろしげなかぶとをかぶり、手には、長いやりをかまえておった。そしてそれつらは、わしらのほこる美しいくの中に、ぶさほうきわまりない方法ではいりこんできた。美しい庭えんも、小川のせせらぎも、花ばたけさえも、やつらはおかまいなしにふみ荒らしてきたのじや。それをとめようとしたひとりのカピバルの青年が、騎馬に乗った黒い騎士の手にかかって殺された。」

なんてことを……！ 旅の者たちは言葉もありませんでした。おどろきと、怒りと、かなしみと……、さまざまな思いがあふれかえってきて、胸が今にも張りさけそうなくらいでした。

そんな旅の者たちのことを、カピバラ老人は、手をかぎしてせいし

ました。ほんとうなら、このカピバラ老人の方がよっぽどつらかったでしょうに。老人のたいどは、とてもりっぱでした。

「……そしてついにそいつらは、わしらのくにの長である、しっせいどののいるたてものにまでやってきたのじゃ。そのときその場には、大勢のぎかんたちがおった。その日はちようどそこで、くにのゆくすえをきめるための、だいじな話しあいがおこなわれていたからじゃ。かくいうわしも、そこにおった。わしは、しっせいどののそうだんやくとして、かれにおつかえしていたんじゃよ。」

しっせいという言葉は、あまりききなれないことかと思いますが、これはつまり、くにのせいじをとりおこなう、いちばんのせきにん者のことをいうのです（いつてみれば、そうりだいじんみたいなものです）。カピバラのくにでは、いちばんえらいだいひよう者のことを、しっせい。そのほかのいっばんのせいじ家たちのことを、ぎかんとよんでいました。このカピバラの老人はその中でも、くにのいちばんのだいひよう者で

あるしっせいさんのことを、助けるしごとをしていたのです（ですから、かなりえらい身分にあつたはずです）。それがなぜ今は、セイレン大橋の下、こんなそまつな小屋に住んでいるのか？ それはこれから語られることになります。

「やつらはあらしの中、わしらのいるたてものを取りかこむようにじんどつた。それはまさに、悪夢のような光景じゃった。じゃが、中にいるわしたちには、どうすることもできん。ただもう、おそろしさにがくがくふるえるばかりじゃ。そしてしばらくすると、その兵士たちのあいだから、六人の黒ずくめの騎士たちが進み出て、わしらのもとへとやってきた。そいつらの、おそろしげだったことといたら！ 思い出したくもないわい！ じゃが、むりなんじゃ。どうやっても、この頭からはなれん。そして、その黒騎士たちの中でも、もつともおそろしげだった男が、しっせいどのをよばわって、こういう放ちよつたのじゃ。」

『ごきげんうるわしゆう、カピバラのしっせいどの。それにみなさん方も、おげんきそうでなにより。』そいつはそこで、きぞくがやるよ

うな、大げさな身ぶりのおじぎをしてみせよつた。もちろんそんなものは、たて前だけのことじゃ。そいつは、こうつづけた。『ほんじつはみなさんに、すてきなおくりものをさし上げたいとぞんじましてな。よろしいか？ おこたえしだいでは、みなさん方にとって、とても得となるお話をさせていただこう。しかし、もしいうことをきかないのであれば……、そのときは、このくにの、こんごのほしよはできんがね。』

「そういつて、その男は笑い声を上げたのじゃ。それは胸につかえるような、むなくその悪い笑いじやつた。そいつの言葉は、おもてむきでは上品さをよそおつてはおつたが、その心のおく底たるや！ まさに悪そのものじゃ！ 悪がよりかたまって、あいつを作り上げたのにちがいないわい。そしてそいつは、ますますちようしに乗つて、こうつづけたのじゃ。」

『われらはワットの者だ。アルファズレド王、ちよくぞくのしんえい隊である。王はもちろん、このアーランドのじっけんをにぎるお方だ。それはわかつておろうな？』

それをきもにめいじて、おききあれ。』

「そいつは、その場をわがもの顔に歩きまわり、わしらひとりひとりの顔をじろじろながめやりながらいつた。『わがくには、今やこのアーランドでも、いちばんの強国である。だが、ぎんねんながら、それでもまだかんぜんではない。わがくにの力をかんぜんなものとするために、われらはこうして、はたらいているわけだ。そして、きくところによると……』」

「そいつはそこで、しつせいどのの、のどもとに、手にした剣のつかをおしつけよつた。そんなことに、なんの意味がある？ ただの悪意じゃ！ そしてそんなことをしでかしておきながら、そいつはいけしやあしやあと、こんなことをいい放ちよつたのじゃ。」

『みなさん方は、ひじょうにすぐれたわざの数々をお持ちとか。せひわれらに、そのわざをお教えいただきたく、こうしてまいつたらしいというわけだ。アルファズレド王も、みなさん方のわざのすばらしさには、たいへんなかんしんをよせていらつしやる。ワットの力とな

れるのだ。カピバルの名も、いちだんと上がるというもの。めいよなことだぞ。どうだ？ アークランドに、こうけんしたくはないかね？』

「もちろん、こんな悪のさそいに乗るほど、わしたちはばかではない。こんなやつらのいいなりになれば、どんなひどいけつかを生むか？ 火を見るよりあきらめかじや。しつせいどのはもちろん、こんな悪のおどしなどにはくっしなかつた。かれはだれよりもゆうかんで、そうめいなお方じやつた。しつせいどのは劍のつかをはらいのけて、おくすることなくいつたのじや。」

『あきらめて帰ることだ。おまえたちなどには、われらのわざはなにひとつあつかえん。われらのわざは、われらのようなきよい心に対してのみはたらくものだ。おまえたちのような、どす黒いくさつた心を持つようなやからには、まったくやくには立たん。』とな。

「これをきいた黒騎士のたいどは、いがいなものじやつた。申し出をことわられて、ひるむなり怒るなりするかと思いきや、そうではなかつた。しつせいどのもそのこたえを待っていたかのように、せいっはおもしろがつて、高らかな笑い声を上げよつたのじや。そしてせいっは、こういいよつた。」

『じつにゆかい！ それならば、話は手っ取り早い。もう、おまえたちなどに用はないというものだ。どこまでもおろかなれんちゆうよ。われらがせつかく、きかいを与えてやつたというのに。おまえたちはみずから進んで、めつぼうの道をえらんだわけだ。じつをいえばな、しつせいどのよ。われらにとつてこんな小国などは、どうでもいいそんざいなのだ。いくらかけんちくのわざがあるようだが、そんなものは、わがワットにとつては、あつてもなくても同じこと。おまえたちはさいきん、やたらといきがつて金をもうけているようだが、だれのきよかを得ているのかね？ われらのほんとうのもくてきはそれなのだ。ようするに、おまえたちのそんざいがじやまなのだよ！ ワットになんのあいさつもなしにいい気になっているようなれんちゆうを、われらが主君、アルファズレド王が、おゆるしになるとでも思っているのか？ 王はたいへんにごりつぶくだ！ それでわれ

らが、こうしてやってきたというわけなのだよ。だがまあ、安心したまえ。くにたみのうちのいくらかは、ワットのためにはたらかせてやる。この土地は水もほうふだから、あとの心配もしなくてよいぞ。黒の軍勢のために使つてやるよ。』

「わしらの怒りは、そこでちようてんにたつした。ぎかんたちのうちのなんんかが、われを忘れて黒騎士にいどみかかった。じゃが、それはむぼうじやった。ぎかんたちはわしの目の前で、黒騎士に切りつけられて、むざんなさいごをとげた。そして黒騎士は、さいごにこういった。それが、話しあいのさいごの言葉となつたのじゃ。

『おまえたちをワットのはんぎやく者としてしよばつする！ かくごしろ！』

夜のあらしはそのとき、セイレン大橋のそのまうえを通りすぎてゆくところでした。まどやとびらに、風で飛ばされてきた木のえだがうちあたつて、ばしんばしん！ と大きな音を立てていきます。ふりしきる雨のすごさは、橋の下のこのカピバルのわぎによつてたてられた小屋の中にも、はつきりと感じられるようになっていました（ですから、よつぽど強くふつています）。たえまなく起こるいなずまの光と音が、それに力を貸して、みんなの心を深くしずみこませました。

カピバラ老人は、ほそい切れ長の目をもつとほそくして、まどのそとをぼんやりとながめていました。その目からは、いつからか、大つぶのなみだがあふれていました。

「……それからあとは、もう、目もあてられんようなありさまじゃ。黒騎士のごうれいっか。配下の兵士たちがわつとなだれこんできて、わしらにおそいかかった。ていこうはむなしものじゃった。ぎかんたちはつぎつぎといのちを落とし、そしてさいごまでゆうかんに戦つた、しつせいどのも、ついには、やつらのそのよこしまなるやいばの前にたおれたのじゃ。」

老人は、みどり色のチョッキのすそで、そのあふれるなみだをぬぐいました。気がつけば、旅の者たちもみな、目を赤くはらしていたの

です。

「わしは、さいごにひとり残された。もう、ていこうするすべはなにもなかった。しきをとっていたあの黒騎士がみずからやってきて、じやあくな笑みをいっぱいに浮かべながら、わしに剣の切つききをむけた。わしは部屋のいちばんはしまで追いつめられた。もう、あともない。黒騎士は、そうしたければいつでもわしを殺せた。だがやつは、わしをいたぶるのを楽しんでおったのじゃ。

「それからやつは、わしにこういったのじゃよ。あなたたちには、つらいことかもしれんがの。」

『おまえがさいごのひとりだ。おろか者め。おとなしくしたがっていけば、殺されずにすんだものを。せいぜい、いのちごいでもしてみるのがいい。だが、われらはそれほどあまくはないぞ。黒の軍勢になう者など、このアーケランドにはいないのだ。今やわれらにたてつくものは、ベーカーランドの白の騎兵師団とやらのみ。腰ぬけのアルマーク王なぞにつきしたがっている、むりよくなれんちゆうよ。どうだ？ 白の騎兵師団に、助けてくれと願ってみろ。その声がやつらにとどくかどうか？ ためしてみるがいい。やつらなど、しよせんはそのていどだ。かわいそうに、おまえがこうして死に、このくにがほろびるのが、いいしようではないか。』

「ふざけるな！」フェリアルが立ち上がった。たまらずにさげびました。かれはまだ、若くけつきさかんなところがありましたので、もう、いてもたってもいられないくらいに、こうふんしてしまっただけです。ベルグエルムがとめなければ、フェリアルは今すぐにでも、このあらしの中をワットにむかつて飛び出してしまったことでしょう。しかし、そういうベルグエルムにしても、こんな話をきかされては、とてもれいせいであることなどはできませんでした。なんとか、かれのけいけんと、しりよの深さが、かれ自身のことをおしとどめていたのです。

「あなたたちのせいではない！ どうか、おちついてください！」カピバラの老人はそういって、ふたりの騎士たちのことをなだめました。「これも、運命というものじゃ。世の中には、どうにもならんこと

もあるのじゃよ。それがどんなに、りふじんなことでもな。」

騎士たちは老人の言葉にペコりと頭を下げて、そしてふたたび、床にすわりこみました。ロビーとライアンは、かれらの肩を手でさすつてあげました。ふたりとも、こんなにこうふんしたフェリアルとベルグエルムのことを見るのは、はじめてのことでした。

騎士たちがようやくおちつきを取りもどしてきたころ。カピバラ老人がさいごの話をしてくれました。それは、そう、カピバラ老人のそのごのことです。どうしてカピバラ老人が助かったのか？ そしてどうしてこの場所にいるのか？ そのことについてでした。

「追いつめられたわしは、ただひとつきぼうが残されていたことを思い出した。そいつじゃよ。」老人はそういって、部屋のすみに立っているあの鉄の馬をゆびさしました。「そいつが文字通り、わしの助け馬となったのじゃ。そのとき、わしのいた部屋の近くには、わしの作ったこの鉄の馬がしまつてあつた。この馬はほんらい、まつりのときなどに使うもので、ふだんから出しておくようなものではない。それがたまたま、わしのいた部屋のすぐそばにしまつてあつたわけじゃ。わしはそのことを思い出すと、すぐにこいつをよびよせた。もちろん、れんちゆうにはわからん方法でな。そしてわしは、やつらにいったのじゃ。」

『すべておまえたちの思い通りにはならんということ、教えてやろう。せいぎはけつしてほろびたりはせん。悪がはびこる世界などには、けつしてせん。けつしてな！』

「わしは、かけこんでくるこの馬に飛び乗つた。そして、わき目もふらずに走つた。むかつたさきは、たてものの二かいじゃ。たてもの入り口はワットの兵士どもによって、すっかりふさがれてしまつておつたからな。そしてわしは、広間のかいだんをかけのぼると、大声でさげんだ。『かいだんよ、とじろ！』」

「そう、そのかいだんはカピバルのわざによつてつくられておつたのじゃ。あい言葉をいうことによつて、おりたんでしまえるようになってきていたんじゃよ。」

「『逃がすな！ とらえろ！』はいごから黒騎士のさげぶ声がきこえ

た。わしはふりかえることもせず、そのままむがむちゆうでひた走った。そして二かいのバルコニーにまで出ると、そこから、みずうみの上につくられた空中どうろの上へとむかつて、かけ出していったのじゃ。」

カピバラのくには、セイレンのみずべとよばれる土地にきずかれていて、そこには、みずうみや川やいずみなどが、たくさんありました。そしてカピバルたちは、その水の上にもでも、たくさんのもや、庭えんや、広場などといったものを、つくっていたのです（もちろんそれは、カピバルたちのすばらしきわざがあつてこそのものでした。そうそうまねのできることはありません）。

その中でもとくにすばらしいものが、空をうめつくす「空中どうろ」でした。カピバラのくには、すくない土地をゆうこうに使うための空の道が、たくさん走っていたのです。それらの道は、とうめいなガラスでつくられていて、見た目にもとても美しいものでした。その空中どうろが、カピバラ老人のいたたてものの二かいから、みずうみの上へとむかつてのびていたのです（みずうみの上をじゆうおうむじんに走る、美しいガラスでできた空の道。そうぞうできますでしょうか？ わたしもいちどでいいから、そこを歩いてみたかったものです）。

「わしは、そのままみずうみの上をかけぬけて、むこうぎしへと渡っていた。ワットのれんちゆうも、さすがにそこまでは追つてこれなかつたようじゃ。じゃが、そのとちゆうで見た光景を、わしはけつして忘れないじやろう。ワットのれんちゆうは、あろうことか、なんのつみもない人々の家にまでつきつきと火を放ちよつたのじゃ！ それはおそろしいほのおじやつた。ただの火ではない。血のような色の、ばけもののようにゆれ動く、まがまがしい火じゃ。その火は、あらゆるものともせずにもえさかり、カピバルのすばらしきわざのけんちくぶつをどんどんともやしていった。じゃが、わしにはどうすることもできなかつた。わしは、逃げなくてはならなかつた。カピバルのわざを、これでたやすわけにはいかなかつた。わしがやらなくてはならなかつたのじゃ。わしはそのとき、なみだで前も見えないほどじやつた。

「そしてわしは、みずうみから流れ出るいっぽんの川にそって、逃げ落ちていった。その川こそが、そう、このセイレン河のみなもとなのじゃよ。わしは、なん日もなん日も走りつづけた。そうして身も心も果てたころ、わしは、この巨大な石の橋にまでたどりついたのじゃ。セイレン大橋という名まえを知ったのは、それからだいぶあとになつてからのことじゃった。

「わしは、動きまわった。なんとかわれらの助けとなつてくれる者たちがおらぬかと、力のかぎりさがしてまわった。じゃが、みなワツトの名まえをきいただけでふるえ上がり、手を貸してくれる者はだれもおらんかった。わしはしだいに、すいじやくしていった。やまいにたおれることもあった。気力はどんどん、失われていくばかりじゃ。わしももう、としじゃでな。それ以上動きまわることは、むりじゃった。」

「シープロンドにきてくれればよかつたんです！」

たまらずにそういったのは、ライアンでした。ライアンはセイレン河をだれよりもあいしていました。ですから、セイレン河の上流、このカピバラ種族の者たちのくにに、そんなできごとが起こっていたのだということを知って、もう、いてもたってもいられないくらいになつてしまつていたのです。

「ありがとうございます、ひつじの少年よ。」そんなライアンに、カピバラ老人は静かにこたえました。「じゃが、その気持ちだけでじゆうぶんじゃ。わしもはじめは、くにのことをすくおうと思つた。じゃが、それはかなわぬことじゃと、わしにはさいしよからわかつておつたんじゃよ。やつらのいうことは、ぎんねんながらじじつじゃ。黒の軍勢には、とうてい手出しができません。かえりうちにあうのは目に見えておる。これ以上のぎせいを出すわけにはいかんよ。きみのくににまでそんなふこうをしよわせることが、どうしてわしにできようか？ きみも知っておるじやろう？ このセイレン河の上流が、今どうなつているのかを。」

ライアンは言葉につまつてしまいました。セイレン河の上流、そこで今、なにがおこなわれているのか？ ライアンは、よく知つていた

からです（その地がまさか、かつて、このカピバラ種族の者たちのくにだったなんて！）。

「そう、わしはあれからいちど、セイレンのみずべへと、ひそかにもどって見たことがある。そこでわしが見たものは、なんともみにくいありさまじゃった。かつてのくにの美しさは、見る影もなくなっておった。やつらはあの地を、よこしまなもくてきのための、工場やじっけん場に変えてしまったのじゃよ。」

「でも……！」

ライアンの気持ちはおさまりませんでした。なにもできない自分が、くやしくてならなかったのです。セイレン河の上流でおこなわれていること。それはもうずいぶん前から、ライアンは知っていました。ですが、くやしいかな、カピバラ老人のいう通りです。シープロンドのひつじの者たちが、たばになってかかったとしても、黒の軍勢の者たちのやっていることをとめることはできないでしょう。いくら、しぜんの力をかりるわざがあるとはいえ、かれらはもともと、戦いにはむいていない種族だったのです（かれらのわざは、ほんらい、身を守ったり、だれかを助けたり、しごとのやくに立てたりすることなどに使われているものでした。ですからライアンのように、しぜんの力をこうげきに使えるというような者は、シープロンドにも、数えるほどにしかいなかったのです）。それは、シープロンドの王子であるライアンにも、よくわかっていたことでした。ですから、よけいにくやしかったのです（そしてカピバラ老人も、シープロンの者たちが戦いにむいていない種族なのだということとは、よくりかいしていました。ですからなおのこと、かれらのことを、あらそいごとにはまきこみたくなかつたのです）。

「わしらのくにはほろんだ。それはもう、じじつじゃ。じゃが、安心してくだされ。カピバルのたましいまでは、ほろんではおらん。それだけは、やつらにもうぼううことはできなかつたのじゃ。」

老人はそこで、チョツキのえりの中からあるものを取り出して、みんなに見せました。それは、かわのひものさきにむすばれた、ほんのりと水色にかがやく、小さなひとつのすいしょうのかげらでした

(ネックレスになって、老人の首にかかっていたのです)。

「これが、わしらカピバルのたましいじゃ。」そういって老人は、そのすいしよのかけらをつまんで、目の前にかざしてみせました。すると……！」

すいしよの中からたくさん光があふれ出て、その光が、空中にさまざまな絵がらやずけいをえがき出していったではありませんか！ それはなにかの、せつけいずのようでした。そしてそれは、つぎからつぎへと、あらわれては消えてをくりかえしていったのです。

「このすいしよの中にきろくされているもの。これこそが、わしらカピバルのたましいなのじゃよ。カピバラのくにの、わざのすべてが、ここにつまっておる。わしはいつも、はだ身はなきず、これを持っておった。それが、さいわいしたんじゃ。わしはどうしても、これを守らなければならなかった。じゃからこそ、やつらにつかまるわけには、ぜったいにいかなかったんじゃよ。」

そう、老人の持っているこのすいしよのかけらこそが、カピバラのくにの、そのいのちともよべる、いちばんの宝物でした。このすいしよの中には、カピバラのくにの、ぶんか、れきし、わざ、それらすべてがきろくされていたのです(その中身はびっくりするくらいたくさんで、小さなとしゃかんだつたら、まるまるいっけんぶんくらの本のじようほうがつまってしまふほどだったのです!)。

カピバラのくにの人々は、自分たちのわざがいたずらにそとにもれてしまうことを防ぐために、そのわざのきろくを本に書くことはしませんでした。ですから、もしあなたが、カピバラのくにの中をすみずみまでしらべ上げていたとしても、かれらのことをきろくした、本や書きつけなどといったものは、ただのひとつも見つけられないことでしょう。それらはすべて、そのままでは見ることのできない、とくべつなすいしよの中にかくされていたのですから。

老人の見せてくれたそのすいしよは、カピバラのくににいくつがあつたすいしよの中でも、とくに重要なものでした。その中にはいつているきろくは、カピバラのくにの中の人々から、長いねん月をかけて、すこしずつ集められたものだったのです。もし、お金を出して

買おうとしたって、とてもねだんのつけられるようなものではありません。こんなにだいで重要なひみつを教えてくださいましたのも、カピバラ老人が旅の者たちのことを、心からしんようしているからこそのことだったのです（読者のみなさんも、しーっ！ どうかみんなには、ないしょにしてくださいね。これは、かれらカピバルたちの、いちばんのひみつなのですから）。そして、このすいししょうを守り、つぎの代へと受けついでゆかせること。それこそが、カピバラのしっせいにかえていた、老人のやくわりでした。

老人は、そのすいししょうを静かににぎりしめました。すると、空中に広がっていたたくさんのずけいや文字なども、ふつと静かに消えていったのです。

「さいごにわしができることは……」カピバラの老人は、手にしたすいししょうをいつくしむように両の手でつつんで、いいました。

「このすいししょうを守りぬぎ、このセイレン河を、静かに見守ることだけじゃ。」

老人はそういって、まどのそとに流れるセイレン河のことを見やりました。黒くすすけたまどからは、その流れをはつきりと見て取ることはできませんでした。しかし今は、それでよかったのかもしれない。きつと老人の目には、かつての美しい、きよらかな流れのセイレン河が、見えていたはずなのですから……。

そのとき、部屋のすみにいたあのきんぞくでできた馬が、老人のそばに歩みよりました。老人が、自分でよびよせたのでしようか？ しかし、旅の者たちには、馬が心を持って、みずからの意志で老人のことをなぐさめにきたように、思えてなりませんでした。たとえそれが、きんぞくでできた作りものの馬であると、わかっていたとしても。

老人は、そんな馬の頭をだきよせて、たくさんなでてやりました。老人の表じようは、今はとても、おだやかなものになっていました。

「わしは、このセイレン大橋の下に小屋をたてて、ここをついのすみかとすることをきめた。かつての美しい、河の思いでとともに。この河はもう、セイレン河ではなくなってしまうたかもしれない。じゃが、わしにとつては、この河がセイレン河であることに、ちがいはな

いのじや。わしのふるさと、あの美しいくにのみずうみから流れ出る、きよらかなるセイレン河にな。わしは、この河とともに、このしゅうがいをとじるつもりじやよ。」

そうして、カピバラ老人の話は終わったのです。

あらしはしだいに、セイレン大橋の上から通りすぎていくようでした。いくぶんか、雨の音も弱まっているように思えました。

旅の者たちは、しばらくは言葉を口にするのができませんでした。なんといいのいいのか？ どうにもすぐには、口をひらくことができなかったのです。

そして、さいしよに口をひらいたのは、旅の者たちのみちびき手であり、白の騎兵師団の長でもある、ベルグエルムでした。そんなかれでさえ、ようやくのことで、言葉をしぼり出すことができたのです。

「なんといいいいものか……、言葉ありません……。あなた方のくにに、そんなぼうきよがなされていたなどは……。わたしは、自分がはずかしい。われらの力が、およばなかった。おわびのしゅうありません……」

ベルグエルムは、こぶしをかたくにぎりしめました。そのこぶしは、怒りと、かなしみと、くやしきで、ふるえていました。かれの心の中を、そのこぶしが、ゆうべんに語っていました。きっと、百の言葉で語るよりも、はつきりと。

そして、ベルグエルムは、いったのです。

「あなたのお気持ち。カピバルのほこりとたましいを、われら白の騎兵師団、しかと受けとめました。よこしまなる悪のおこないは、われらがかならずや、うち破ってみせます。剣にちかう！」

ベルグエルムはみずからの剣をかたくにぎりしめ、それを胸の上にあわせました。これは、かれらのような騎士たちが、いのちをとんでもみずからのちかいを守るといふ、そのけついをあらわすときに、おこなうことでした。そして、その気持ちはもちろん、その場にいる旅の者たちぜんいんも、同じだったので。フェリアルもベルグエルムと同じく、剣を胸にあわせてちかいました。そして、ロビーもライ

アンも、こぶしを胸にあわせて、思いをかたくちかつたのです。

「そのお気持ち、わしにはなによりのすくいですじゃ。」カピバラ老人はそういうと、旅の者たちにむかって深々と頭を下げました。「わしらのような運命をたどる者が、これ以上ふえることのないように、わしは心から願っております。」

老人の言葉に、みんなも深々とおじぎをして、せいっぱいの気持ちでこたえました。

そしてさいごに、ベルグエルムがいました。

「この世界は変わってしまいました。力いっぱい正しく生きている者たちが、ひどい目にあい、よこしまなる悪のやからどもが、大きな顔をしてのさばっているのです。わたしたちは、ともに協力しあつて、みんながびようどうで安心して暮らしてゆける世界を、取りもどさなければなりません。種族のちがいなど、そんなものはかんけいなし。みんなが、このアークランドの住人なので。アークランドのぜんなるたみたちが、力をけっそくさせなければならぬときは、まさに今なのです。」

ベルグエルムはそういって、みんなの方を見渡しました。ですが、みんなの気持ちはもはや、いうまでもないことだったのです。かれらは大きくなずいて、それからそれぞれが、おたがいの手を取りあつて、その心をかたくたしかめあいました。

「われらはかならずや、この世界をすくってみせます。この剣と、そして、カピバラ

のくににちかつて！」

カピバラ老人の心は、今とてもおだやかでした。あとをたくすことのできる、すばらしき者たちに、出会うことができましたのですから。そして、みずからの、くにを思うこの気持ち、けっしてむだではなかったということ、あらためて知ることができたのです。

「わしは、今日あなたたちと出会うために、このいのちを長らえさせてきたといえるじやろう。でなければ、あのとときわし自身も、くにとともにほろんでおったはずじゃ。わしは、まんぞくじやよ。あなたたちになら、安心して、この世界をたくすことができる。白の騎兵師団

と、くいを思う者たち。この世界のきぼうじや。」

カピバラ老人は、そういつて静かに立ち上がると、だんろにまきをいくらかくべなおし、ランプのあかりを消しました。あとには、だんろにもえるげんそう的なほのおの光だけが、小屋の中をゆらゆらと、てらし上げているばかりでした。

「さあ、夜もふけた。ゆつくり休んで、明日にそなえなされ。戦う者には、きゆうそくが必要じゃ。」カピバラ老人がそういつて、だんろのすみにおいてあつた鉄のなべのふたをあけました。

「なにか食べるのなら、わしの作ったシチューがありますでな。よかつたら……」

「いただきますー！」

じつは、みんなはすつごくはらぺこで、しかたがなかったのです。ミルクだけではちよつと、たりませんでしたから（ライアンだけは老人の話をききながら、こつそりバターキャンデーをなめていました）。

みんなはそのあと、がつがつ食べました（老人の作ったシチューなどは、あつというまにからっぽになってしまったくらいです）。パンのかたまりをまるごとに、バターをたっぷりつけて。ミルクのおかわりをたくさん。チーズをなんかけらも。こんなぐあいでした。ウルファの三人などは、持ってきていた食べものの八わりくらいを、いつきに食べてしまったのです（もしものときにそなえてとっておいた、ほし肉やコーンビーフのかんづめまでも、みんな食べてしまいました。もともとかれらウルファたちは、いっぱい食べるのでゆうめいでしたが、こんなに食べちゃつたら、あとあとこまることにならなければいいんですけど……）。ライアンは、「いくらなんでも食べすぎだよ！」といいましたが、そんなかれでさえ、クツキーのふくろを三つもあけてしまいました。それほどみんな、今日の旅がこたえていたので（ちなみに、ライアンはあまいものが大好きでしたので、かれのかばんの中には、お菓子ばかり、ぎつしりはいつていたのです。ほかのものがほとんどはいつていないくらいに……）。

みんなはすつかり食べ終わると、そのままどろのように横になりま

した（ちよつとおぎようぎが悪いですけど、かんべんしてあげてくださいね）。だれもなにもいわず、もの思いにふけていたようでした。そしていつしか、いちにちのつかれがからだをしいしていつて、そのまま夢も見ないほどの深い眠りの中へと、かれらのことをひきこんでいったのです。

ロビーはさいごまで起きていました。かれがさいごに見たのは、ベッドで身を起こしたまま、まどのそとをながめている、カピバラ老人のすがたでした。ふるさとのくにのことを、老人はこうして、まいばん思っていたのでしよう。

ぼくは早く、前に進まなければ。こんなやさしい人が、これ以上、つらい目にあわなくてすむように。

ロビーは、うすれていくいききの中で思いました。そしてそのまま、かれもまた、深い眠りの中へと静かにさそわれていったのです。

もうぜんいんが眠りについてしまったころ。ロビーの持つ剣のさやのすきまから、かすかに青い光がもれ出しました。そしてその光は、なにかをうったえかけるかのようにしばらくその場をてらしたあと、ゆつくりとふたたび、もとのやみの中へと消えていったのです。だれもそのことには、気がつきませんでした。

5、シープロンド

あざやかな朝やけが、静まりかえった空にはえていました。その中にふっと一羽二羽、小さな点のような鳥たちが、どこかをめざして飛び立っていききました。木々は雨のしずくをはらうのにいそがしく、大地はよろこびいさんで、ふりそそがれる光をからだいっぱいにあびようと、その身を大きく広げております。木、岩、土、すべてのものが、長いやみの果てによりやくおとずれたその光をかんげいして、新しいいちにちの新たなきゆうを、はじめているところでした。

アークランドに朝がやってきたのです。きのうのあらしが、まるでうそであるかのような、それはそれは美しい朝でした。風はそよ風ほどこに吹いていました。ですがそれは、すこしもつめたくなく、こころよく、この朝をむかえた者たちすべてに対してのおくりものであるかのように、吹いていたのです。空には、すじのようにほそい雲が流れていました。それは朝やけの光にてらされて、赤とこがね色のががやきに美しくつつまれていました。そしてその雲は、まるで遠いくにへとむかう旅人たちの一行であるかのように、ゆっくりと、南の方へと進んでゆくのです。

それは、まったくのへいわそのものでした。このまますべてが、ありのままに変わることなくつづいてゆくのだと、うたがうよちもないくらいに。ですが今、このおとぎのくには、すこしずつ、そしてかくじつに、むしばまれていつているのです。悪意にみちたやみに、おおわれていこうとしていのです（まるで、虫歯のあなが気づかないうちに、すこしずつ大きくなっていくみたいに）。南の方から、ゆっくりと。

旅の者たちは今、すっかりじゅんびをととのえて、みずからの騎馬たちをひいて、この美しきセイレン大橋のもとをあとにしようとしていたところでした。衣服にもつも、すっかりかわかすことができました（それはもちろん、カピバラ老人の家のだんろのおかげでした）。そして、えいようときゆうそくも、まったくじゅうぶんとはいかない

までも、必要なぶんはとることができたのです（床にちよくせつもうふをしいて寝ましたので、しようじきなところ、あんまり寝ごこちはよくなかったのです。でも、やねの下で眠れただけありがたいと思わなくっちゃ！）。

かれらの騎馬たちもまた、長旅で走り通しのからだを休めることができただけ、げんきを取りもどしたようでした（ぎんねんながら、橋の下にはかれらの食べものである草があんまり生えておりませんでしたので、そのぶんおなかはへっているようでしたが。ですから、またライアンが、かれらににんじんをいっぽんずつあげました。そしてにんじんは、それでおしまいでした。ライアンもそんなにたくさんは、にんじんを持ってきていなかったのです。お菓子はどっさりあつたんですけど。でも、馬のよろこぶようなものではありませんでしたので）。ライアンのたいせつな白馬メルも、いくぶんか、けがのぐあいがよくなったみたいです。しかしもちろん、このけがは長くは放っておけません。いっこくも早いちりようが必要なことには、いぜんとして、変わりはありませんでした（ライアンは朝起きてすぐに、メルのようすを見にいったくらいでした）。

旅の者たちは出発にあたり、さいごに、カピバラ老人におわかれのあいさつをおくろうとしているところでした。ベルグエルムとフェリアルが深々とおじぎをして、あらためて、そのけついを老人に伝えます（ちなみに、ライアンとロビーはゆうべ歯もみがかないで寝てしまいましたので、今そのことを思い出して、大急ぎで歯をみがいてるところでした。ライアンが、「みがき終わるまで、ちよつと待っていて！」と騎士たちにはお願いしておいたのですが、どうやらかれらは、さきにあいさつをはじめてしまったようですね。ベルグエルムとフェリアルは、ライアンとロビーが起き出してくる前に、すでに朝いちばんで歯をみがいていたのです）。

「ほこり高きカピバルのたまよ。われらは今ふたたび、ここにちかいます。あなたの思いを、けつしてむだにはさせません。かならずや、この世界のやみを晴らしてみせます。すべてのくにのたまがひとつとなって暮らしていけるように。そのために、われらはさきへ進み

ます。」

カピバラ老人の表じようは、晴れやかなものでした。長年の思いが、ついにみたされたのですから。かれはもう、ひとりではありません。あとをたくすことのできる者たちを、きぼうそのものを、かれは得たのです。かれの思いはここから飛び立って、さまざまな者たちの心にひびいていくことでありましよう。ですから、もうかれは、ひとりではないのです。

老人は静かに大きくうなずいて、このほこり高きふたりの騎士たちに、カピバルの敬礼をおくりました（ひたいに手をあて、それから胸に手をあてるといふものでした）。

「このくにをたのみます。あなたたちに、のぞみはかかっておりますのじや。わしは信じておりますぞ。あなたたちのほまれ高き心が、きつと、悪をうち破ることじやろう。」

そして、旅の者たちはそれぞれの騎馬にまたがりました（おくれてやってきたライアンとロビーも、ここでいっしょになりました。「待つてつていったのにー!」とライアンはぶんぶんいって、ふたりの騎士たちのことをぼかぼかたいておりましたが）。

「ベーカーランドへついたらならば、ことのだいをすべて、アルマーク王にお伝えます。あとはわれらに、おまかせください。」ベルグエルムが騎馬の上からそういって、ペこりと頭を下げました。

「たのみましたぞ。それとひとつ。南の地にわれらカピバルの者を見かけることがもしもあつたら、わしのことを話してやってくださらんか。くにのほこりは、守られているということも。」（カピバラ老人の持つカピバルのほこりであるすいしょうのかけらについては、いざれときを見て、ふさわしい場所にうつすのがよいだろうということになりました。それまでは、やはりこのすいしょうは、カピバラ老人の首にあるのがいちばんふさわしいということになったのです。）

カピバラ老人がさいごにいうと、ベルグエルムは大きくうなずいてこたえました。

「しようちしました。かならず伝えます。どうぞご安心ください。」そして三頭の騎馬たちは、いせいもよく、つづく新たな道のりへと

むかつてかけ出していったのです。

さあ、旅のさいかいです。きぼうへとつづく、新しい道のりへとむかつて。

セイレン大橋からシープロンドへ。つづく街道をかけながら、ロビーはさいごにうしろをふりかえりました。朝の美しい光の中に、すぎ去ってゆくセイレン大橋のすがたが見て取れます。こがね色がかつた橋の石が、光をあびて、ぴかぴかとかがやいていました（やっぱりこの橋を見るのは、明るいときにかぎります）。ですがそれも、あつというまに小さくなって、ロビーのしかいからそのすがたを消していきました。ロビーはなんともいいようのないさみしさをおぼえました。このセイレン河でのたいけんを、かれはしようがい、忘れることはないでしょう。セイレンのみずべのようなひげきは、あとにもさきにも、にどとあつてほしくはないと、ロビーは強く思いました。

ロビーはそれから、まつすぐ前を見すえました。ここからさきへ進んでいけば、ロビーの見たこともきいたこともないだろう土地が、広がっているのです。すべてがよき力に守られているとは、かぎりません。きつと、危険な場所も、悪しき力のしはいする土地も、たくさんあるのでしよう。ですがロビーは、そんな場所でさえ、残らず自分の目で見てまわりたいと今は思うようになっていました。この世界をすくいたい。そのためには、目をそむけてはならないことがあるのだと。ロビーは、このはるか大むかしから受けつがれた、美しいセイレン大橋のかかるいにしえの地で、それを学んだのです。

広い街道が、ゆるやかにのぼりながらつづいていきました。まわりは、いちめんの森です。とちゆうたびたび、木々でさえずっていた鳥たちが、馬の足の音にびつくりして、ばさばさと大空へ飛び去っていききました。そのたびに、みんなは用心して空を見上げました。もしかしたら、きのう出会ったあのおそろしいデイルバグのかいぶつが、またやってくるんじゃないかと思ったのです。ですが、おだやかに晴れ渡ったこの朝の空は、あいかわらず、美しくかがやいているばかりで

した。

しばらく進んだころ。森のずっとむこうに、そのいただきを雪におおわれた青くかがやく山が、見えはじめてきました。その山はとてもこうごうしく、りんとしてそびえていたのです。そして、その山のふもとのあたり。その場所こそが、ほかならぬ、うつしみ谷とよばれる谷でした。

遠目に見るだけでも、すばらしいところだということがはっきりとわかりました。冬も近い今ごろのきせつであるにもかかわらず、その場所だけ、まるで春らんまんといった感じに、みどりがあふれているのです（ですから、よほどのへそまがりでもないかぎり、いいところだとだれもが思うはずです）。そして、ライアンのふるさとシープロンドも、そのうつしみ谷の中にありました（ですからこれまた、すばらしいくににきまっています）。

ロビーはそのみどりの谷を見て、すこし、気持ち晴れやかになりました。こんなにも美しい場所が、この世界にはまだまだあるのだと、自分の目でたしかめることができたのですから。

「とつてもきれいれひよ、うつしみ谷つて。」

ライアンが、そんなロビーの心を読み取ったかのようにいいました。きのうもそうでしたが、ライアンつて、人の心をさつするのがとくいみたいです（ちなみに、かれは今また、バターキャンディーをなめています。さつき歯みがきしたばかりですの！言葉が舌たらずなのは、そのためなんです）。

「もうじきらよ。早くロビーにも、見せてあげたいな。」ライアンが、にこにこしながらつづけます。

「楽しみです。はじめておとずれるくにかライアンさんのくにで、ぼくはうれしい。きつと、すばらしいところなんでしょうね。」ロビーはそういつて、メルの中をなでました。

「メルも、もうすぐ自分のくににつくんだってわかってるみたい。早くついて、けがをなおしてあげたいね。」

ロビーのその言葉をきいて、ライアンはちよつと、どきつとしてしまいました。ライアンは、じつはやつぱり、メルのけがのことが気が

かりでならなかったのです。ロビーによけいな心配をかけさせないようにと、かれはあえて、気楽な感じをよそおっていました。が、ロビーはもうとつくに、そのことに気づいていたというわけでした。

ライアンは、ロビーに対しては、もつとすなおになった方がいいと思いました。出会ってまだ、いちにちさえたつておりませんでした。が、なんだかもうロビーのことが、ずつと前からの友だちであるかのように、ライアンには思えたのです。ライアンは、そんなロビーのことをごまかそうとしていた自分が、ちよつとはずかしくなりました。

「ありがとう。」ライアンは前をむいたまま、それだけいいました。それは、多くを語るよりも、もつと気持ちのこもつたひとことでした。「きつと、すぐげんきになるよ。」

ロビーの言葉に、ライアンはだまつて、こくんとうなずきました。

それからすこしたつて、あたりはまた、岩にかこまれた山道へと変わっていきました。ですがこの山道は、きのうまでの岩の道とはあきらかにちがつていました。このあたりの岩は、ガイラルロックたちがいた場所のような、からからのかわいた岩とはちがつて、色あいもくつきりあざやかで、水もたくさんふくんでいたのです。それは、このあたりの土地が、うつしみ谷から流れ出るきよらかなわき水によつて、大いにうるおっているからでした。このあたりの土地の感じを、もし言葉でいいあらわすとしたら、なんといいたらいいのでしょうか？　いつてみれば、「今を生きるエネルギーにみちているところ」といった感じだと思います（わたしのつたない表げんできようしゆくなのです）。この場所に立っているだけで、足のさきから、そしてからだ全体から、力がいりこんでくるかのような、そんな感じをおぼえるところでした。

そして今までの道のりとはちがう、いちばんはつきりとしているところがあります。それは、その岩場やあちこちの地面に、たくさんの花やみどりが生いしげっているところでした。なにしろ、ガイラルロックたちが集まっていたあのおそろしい岩場では、花などはおろか、かれ草のいっぽんでさえ、見つけるのがむずかしいほどだった

のです。ですからこのちがいは、だれの目にもあきらかでした。道のまわりをかこむ岩には、たくさんのおすきまがあつて、そのひとつひとつから、たくさんのお葉をつけたつたのような植物がのびております。そしてそのつるには、とてもあざやかな、赤やむらさきやもも色の花々が、きそつてさきほこつていました。

「ルインビスの花だよ。とつてもいいにおいでしょ。」ライアンがいました。なるほどかれのいう通り、さきほどから、あたりはとてもいいにおいでみちていたのです。それは、この岩場に生えている、このルインビスとよばれているらしい植物の花のせいでした(とところでライアンは、今はキャンディーをなめるのをひとまずやめていました。著者のわたしにとつては助かります。ライアンの言葉がずっと舌たらずのまんまじや、書きづらくてしかたありませんから！ それに読者のみなさんだつて、きき取りづらいですよね)。

「シープロンドでは、この花から、こう水や絵の具なんかを作るんだよ。一年中さいてるから、あちこちで手にはいるしね。それにね、食べてもとつてもおいしいんだよ。」

ライアンの言葉に、ロビーはびつくりしてしまいました。花を食べるなんて、ちよつと変わつておりましたから。

ライアンはそういうと、メルをかべぎわによせて走らせながら、手をのばして、さいている花をひとつかみ、ぱしつともぎ取りました(ちよつとかわいいそうでしたけど)。花のひとつをかるくはらつて、口にはごびます。

「あまずつぱくておいしいよ。ロビーもどうぞ。」ライアンは花をみつつばかり、ロビーに渡していいました。

「ありがとう。」ロビーはおれいをいって、その花をひとつ、口にいられたのですが……、そのときのロビーの表じようといつたら！ 思い出しただけでもおかしいです。つまり、ひつじの種族であるライアンにとつては、その花はとてもおいしいものでしたが、おおかみ種族であるロビーにとつては、まったくそうではないということでした(ようするに、まづいってことです)。

「おいしいでしょ。もつと食べるっ。」ライアンがたずねてきました。

かれはまったく、ウルファの味の好みのことなんて、このときは知りませんでしたから、ただじゅんすいに、しんせつ心からそういつてくれたのです。ですけど、ロビーにとってはもうたまりません。

「いやっ、もういいです！　これでじゅうぶん！」ロビーは「ははは……」と笑ってうまくごまかしましたが、ライアンに気づかれないうに、花をぺっぺっとはき出すのにくろうしたのです……。

「楽しみにしててね。シープロンドにいたら、みんなのぶんも山ほどあるから。」

ライアンの言葉に、ロビーはひきつって笑うばかりでした。

さて、そんな（楽しい）やりとりをしつつ、一行の騎馬たちはさらに進んでいきました。こんなふうにはのぼのと進めるのも、この場所がへいわで安全な土地だからこそなのです（あんなにこわかったきのうの道のりのあとですもの、ちよつとくらいこんな道のりがあってもいいですよ）。

道はそれから、切り立つがけにそつたゆるやかなのぼりの道へとつづき、谷のおくへおくへとどんどんはいつていきます（ここは第三章の終わりに、セイレン大橋の上でライアンがいつていた、そのがけの道でした。今は明るくおてんきもよかつたので、この道も安全に通ることができていましたが、やつぱりライアンのいう通り、あらしの夜にこのがけの道を通るのは、とても危険なことでしょう）。

しばらくいったころから、道のわきやまわりの岩のすきまから、たくさん小さな水の流れがわき出しているのが目につくようになりました。それらはあちこちに小さないずみを作っていて、すみきつた水をたたえております。そしてその水を飲み、りすや、岩うさぎや、そのほか白くてふかふかした変わった生きものたち（これはユピユピとよばれている、まるっこくておくびょうな生きものたちでした）などが、やってきていました。

「もう、シープロンドはすぐそこだよ。ここをのぼりきれば、シープロンドの北の入り口につくからね。」

そしてライアンのいう通り、そこから半マイルもいかないくらいの

ところ。さいごの坂を越えたところで、一行の目の前に、白いれんがづくりのりっぱな門が、とつぜんにあらわれたのです。

旅の者たちは、ついにシープロンドへとやってきました（せいかくにいえば、シープロンドのくにの中にはすではいっていましたが、ここでいうシープロンドとは、シープロンドのそのみやこのことをさしているのです。くにの名まえとみやこの名まえがおんなじでしたので、ちよつとややこしいんですけど）。みんなが今いるところは、北の土地からやってきた者たちにとっての、シープロンドのみやこの中へとはいる、ゆいいつの谷の門だったのです。

この場所は、シープロンドのくにの中でも、いちばん高いところにあたりました。ずっとゆるやかにのぼってききましたので、あんまりよくわかりませんでした。ここはもう、うつしみ谷の、そのてっぺんだったのです（もつとも、シープロンたちがせいなる山とあがめているタドウーリ連山は、ここからでもさらにそのすがたを見上げなければならぬほど、はるかな高きをほこっていました）。

そのうつしみ谷のてっぺんに、街道のはしからはしまでをつなぐようなかたちで、シープロンドのみやこの北門がつくられていました。ですから、門のそのここからでは、まだそのみやこの中を見ることができなかつたのです。シープロンドのみやこは、この門のむこうにあるのですから。ですが、この門を見た者には、ただそれだけで、シープロンドというくにのみやこのすばらしさがわかってしまうことでしょう（じつさいロビーがそうだったのです）。それほどに、その門は美しいのです。

まずまつさきに目をひかれるもの。それは、この門をつくるのに使われていた、白いれんがでした。いや、れんがといえるのでしょうか？ それは、ガラスのような、こおりのちようくのような、すいしよのような、なんともいえない美しさを持つ、半とうめいのふしぎなしろものだったのです（おどろいているロビーにむかって、ライアンが「この門はね、こおり砂糖できてるんだよ。」といったので、ロビーはすっかり信じて、「へえええ！」と感心してしまいました。もちろんそれは、ライアンのじようだんでしたが、ロビーはしばらく、信じきつ

てしまっていたのです。あとでうそだとわかったので、ちゃんと怒りましたけど)。

そのふしぎな白いれんが(とりあえず白いれんがとよばせてもらいます)でできた、とりでのような門のまん中に、同じく白い、ふしぎな木でつくられた大きなとびらがひとつ、つけられていました(ペンキがぬってあるわけではなく、この木はもともと白いのでした)。そしてそのとびらの上に、とんがりやねの小さな見張り台がふたつあって、そこにはなんんかかしのシープロンの者たちが、見張りに立っていたのです。

かれらは、ライアンと同じような白くて美しい衣服をまとっていて、そして同じく、ふしぎなかがやき方をする白いマントをはおっていました。手には、流れるようなデザインのもの、こまかいさいくのなされたやりのようなものを持っていましたが、これは戦いにもちいるというよりも、かれらの見た目を美しくさせるために持っているものだったのです(じっさいかれらは兵士ではありません。シープロンの王、メリアン王につかえる者たちなのであって、だれかや自分の身を守るためのがいには、武器をふるおうとはしないのです)。そしてかれらは、もどつてきた旅の者たちのすがたを見て取ると、大よろこびでさげびました。

「王子たちがもどられた！　ライアン王子がもどられた！　みな、ごぶじだ！」

かれらは、手にしたかざりやりを天高くかかげ、口々によるこびの声を上げました。そしてそれと同時に、旅の者たちをみやこの中へとむかえ入れるその白い門が、ゆっくりと内がわにひらかれていったのです。

大きくて重いとびらの、きしむ音が、こだまとなってあたりの山々にひびき渡っていきます。そして旅の者たちが門に進んでいくと、シープロンたちのよろこびの声は、いってん、おどろきの声へとかわっていききました。

今かれらが見ていたのは、ライアンの白馬メルに乗っている人物でした。ですが、ライアンではありません。かれらは、そのうしろに乗っている人物。いい伝えのきゆうせいしゅであり、黒のおおかみ種族の者である、ロビーのことを見ていたのです。かれらは口々に、となりの者たちと言葉をかわしあっていました。「ほんとうだった。」とか、「すくいのぬしだ。」とか。中には、シープロンのでんとう的な言葉で話す者もいて、その場にいる三人のウルフアたちには、なんと知っているのか？ わからないものまでありました。

ロビーはなんとも、いごちの悪い気持ちになりました。まるで、めずらしい生きものでも見ているかのように、たくさんの目が自分のことを、じろじろかんさつしていたのですから（ちゅうもくをあびたいと思う人は多いでしょうが、こんなふうにじろじろ見られるのは、ロビーでなくなつていやなものだと思います）。ロビーは思わず、うつむいてしまいました。

そんなロビーのことを気づかなくて助け船を出してくれたのは、やっぱり、シープロンの王子であるライアンでした。ライアンは、シープロンドでは衛士とよばれているその見張りのシープロンたちにむかって、大きく右手をふり上げると、びっくりするくらいの大声でどなったのです（こんな小さなからだの、どこから出るんだというくらいに）。

「気をつけーえー！ れいっつー！」

どなられた衛士たちの、あわてふためいたことといったら！ かれらは大あわてでからだをぴーん！ とのぼすと、そのままちよくりつぶどうのしせいになりました。それから、みんないっせいにぺこりと頭を下げて、れいをしたのです（さすがはシープロンドの王子さまです。ちよつとライアンのことを、見なおしてしまいましたね）。

「みんなー！ ここにいるのは、わがくにのだいじなお客さんなんだよ！ こまらせたりなんかしたら、あとでおしおきなんだからね！」
ライアンの言葉をきいて、衛士たちの顔はまつ青になりました。か

れらは、ライアンのいう「おしおき」のことを、よく知っていたので
す（どんなものなのかですって？ それはとりあえず、読者のみなさ
んのごそうぞうにおまかせすることにしませう。わがままな王子
さまの考えつきそうなことだということだけ、お伝えしておきます）。
それから大急ぎで、あたりに高らかなラツパの音色がひびき渡りま
した。これは重要な人物がきたということをしらせるためのもので、
とてもかくしきの高いものでした。そしてその音色にひきつづいて、
シープロンドのみやこの中から、同じラツパの音色がかえってきたの
です（これで旅の者たちが帰ってきたということが、いち早くみやこ
の中へと伝わりました）。

それから一行は、白い木の門をくぐりぬけ、ついにそのシープロ
ンドのみやこの中へとはいりました（といっても、ここはまだシープロ
ンドのみやこのそのはしつこで、たてもものなどほとんどありません
でしたが。人々が暮らしているせいかつの場は、ここからもうすこし
はいった、みやこのまん中にあつたのです）。門をぬけると、そこは石
だたみの広場になっていました。しきつめられているのは門のかべ
に使われていたものと同じ、すき通るようなあの白いれんがです。そ
のうえ石だたみの下にも白い砂がしいてあるらしく、半とうめいのれ
んがを通して、その美しい地面を見通すことができるようになってい
ました（ですからはじめてここをおとずれたロビーは、はじめ、雲の
上を歩いているんじゃないかと思つたほどなのです。さすがはシー
プロンド。「白きひつじたちのくに」といわれるだけのことはありま
すね）。

その広場からみやこのまん中へとつづく、いつぽんの道があつて
（この道も広場と同じく、白い石のれんががしきつめられていますし
た）、その両がわにはふたりの衛士たちが見張りに立っていました。
そして今、その道から二頭の白馬たちに乗つた者たちが、こちらへと
むかつてやってきたのです。

白馬たちに乗っていたのは、シープロンドの衛士たちよりももっと
いんしよ的な衣服（ごうかな衣服といった方がわかりやすいかもし
れませんが）に身をつつんだ、ふたりのシープロンたちでした。ひとめ

で、かれらがとても身分が高く、とても品のよい者たちであるということがわかりました。りっぱな身なりとゆうがで上品な立ちふるまいは、もちろんのこと。その高いちせいを感じさせる美しい顔立ちも、かれらのいんしょうを大きく高めていたのです（ほんとうはライアンだって、だまっていればそんな感じなのです。なにせライアンは、このくにの王子さまなんですから。ただし、おとなしくしていることが、かれにできればの話なんですけど）。

かれらは旅の者たちの前にさっそうとやってくると、みごとな身のこなしで馬からおり立ちました。そして、とてもれいぎ正しくおじぎをしてから、まずはライアンにむかって、いったのです。

「王子、ごぶじでなによりです。みな、心配いたしておりました。さく夜のうちに、もどられるはずだということでしたから。」

それを受けて、ライアンがこたえました。

「ありがとう、ルース、ホロ。ちよつと、よそうがいのことばかり起こったものだから、おそくなつちやつた。でも、ぼくならだいじょうぶ。」

ライアンの言葉に、かれらはひとまずほつとして、胸をなでおろしました。かれらはメリアン王のそっきんとして、シープロンドの王宮につかえている者たちだったので（そっきんとは王さまのそばにひかえて、王さまの手助けをしたり、いろんなちえを出したりする者たちのことです）。かれらは王宮の中でも、とくに身分の高い者たちでした。ちなみに、ルースとホロというのはかれらのニックネームで、ほんとうの名まえはルースアンにホロウノースといました。ニックネームでよんでいるのは、ライアンだけなんですけど。

「それより、メルがたいへんなんだ。けがしちやつて。早く、ホーシアンのしんりようじよにつれてつてあげて。」ライアンはそういうと、メルの背から地面におり立ちました（あわててロビーもおりたのは、いうまでもありません。それを見て、ベルグエルムとフェリアルのおたりも、かれらにあわせて馬からおりました）。

ライアンの言葉に、ルースアンとホロウノースのおたりは、すぐにもつともてきせつな行動を取ってくれました（ふたりはライアン王子

がほんとうにこまっているときの顔を、よく知っていたのです。そして今、ライアンの表じようはまさにそれでした。ルースアンは衛士のふたりをよぶと、かれらにメルのことをたくしていいました。

「王子の馬をたのむ。ホーシアンにつれて行って、すぐにみてもらうように。」

そして衛士たちは、きびきびと動いて、メルをつれて、つづくみやこのおくへと去っていったのです（ホーシアンというのは、動物せんもんのお医者さんがいるところなのです。このシープロンドのお医者さんたちは、アークランドの中でも、いちばんのいりようぎじゅつをほこっていました。ですからライアンも、メルのことを安心して、送り出すことができたというわけだったのです。ほんとうならメルといっしよに、自分もいきたかったのですが、今はなによりもまず、きゆうせいしゆであるロビーといっしよに、お城へともどらなければなりませんでしたから。

それはともかくとして……、よかった！ これでメルも、ひと安心というものです。わたしもメルがけがをしてからというもの、早くこの場面をお伝えしたくてならなかったんです。

メルが足早に去っていくのをすっかり見とどけると、ルースアンとホロウノースのふたりは、ふたたび旅の者たちにむかつていいました。

「らいひんの方々。ベルグエルムどの、フェリアルどの。たいへんな道中であつたとお見受けいたします。王子の身をお守りいただき、どうもありがとうございます。」

かれらの言葉に、ベルグエルムとフェリアルどのふたりは、ぺこりと頭を下げてこたえます。

「そして……」

ルースアンとホロウノースのふたりは、そこでようやく、ライアンのとなりに立っている人物のことを見やりました。おおかみ種族の者たちのくに、レドンホール。そこで起こったふこうなできごとのことや、みらいにのぞみをつなぐ、ひとつのいい伝えのこと。それらのことは、すでにかれらもよく知っていました。そして今まさに、目の

前にいるこの人物こそが、そのいい伝えのきゆうせいしゅほんにんにほかならなかつたのです。

かれらはとてもおちついたもののいい方をする者たちでしたが、そんなかれらでさえ、すくなからずのこうふんをおさえることができま
せんでした。かれらが話しかけた人物。それはもちろん、この物語の
主人公である、ロビーだったのです。

「ごらいほうを心よりかんげいいたします。ようこそシープロンド
へ。われらは、できるかぎりの協力をおしませせん。」

その言葉はひかえめなものでしたが、とても気持ちのこもつたもの
でした。かれらはとても頭がよく、そして、場をわきまえることので
きる者たちでした。かれらはロビーのようすを見て、この人物にはひ
かえめにせつするのがいちばんよいと、すぐにさとつたのです（それ
ができなかつた見張りの衛士たちは、おかげでライアンに、どやされ
るはめになったわけですが）。そんなふたりの気づかいかんしやし
て、ロビーはせいっぱいの心をこめていいました。

「お心づかい、ありがとうございます。ルースさんに、ホロさん。ぼ
くはロビーといます。あなた方のくににこられて、ぼくはともう
れしいです。よろしくお願いします。」ロビーはそういつて、まずはペ
こりとおじぎをしました（ちなみに、ロビーはかれらのほんとうの名
まえを知りませんでしたので、ライアンがよんだニツクネームのこ
とを、かれらのほんとうの名まえだと思ってしまいました）。

「できれば、ずっといたいくらいなんですけど……」

ロビーはそこで言葉をにぐしましたが、ルースアンとホロウノース
のふたりには、その意味がよくわかっていました。かれらは、旅の者
たちのじじょうをよくりかいしていたのです。ロビーたちがあまり、
ゆつくりしているわけにはいかないということ。

「心得ております。ですが、すこしばかりのきゆうそくは、今のあな
た方にはふかけつでしょう。とくに、ベルグエルムどの。その肩のき
ずは、すぐに医者にみせなくては。どうぞご安心を。わがくには、
うでのよい医者がおりますので。すぐによくありませんよう。」

ルースアンはそういうと、旅の者たちをひきつれて、みやこのおく

へとつづく白い小道にかれらのことをあんないしていききました。

「ごあんないいたします。どうぞこちらへ。」

それから、かれらのことを乗せたたくさんの騎馬たちが、広場からつづくその白い小道の上を、シープロンドの王宮へとむかつてこうしんしていったのです（この小道はとちゅうでふたつに分かれていて、ひとつはみやこのまん中へ、もうひとつはシープロンドの王宮へとつづいていました。そしてかれらが進んでいくのは、その王宮への道なのです）。れんがの道をふみならず馬のひづめの音が、かろやかに、そして高らかに、シープロンドのくの中へとひびいていきました（ちなみに、メルがいつてしまったので、ライアンは今ルースアンの騎馬に乗っていました。どっちが前に乗るかで、ひともんちやくあつたのですが、けつきよくライアンの方がうしろにまたがりました。そしてロビーは、ホロウノースの騎馬に乗っていったのです）。

みどりにかこまれた小道をゆくと、やがてまたべつの広場に出ました。そこはさきほどの広場よりも小さい広場でしたが、すみには白い石でつくられたベンチとテーブルがいくつかならんでいて、ひと休みができるようになっていました。そしてここにきゆうけいじよをつくった、いちばんのりゆうがありました。そのりゆうはだれの目にもあきらかだったのです。

ここはこのシープロンドのくの中を見通すことのできる、てんぼう台でした。そして、その景色のすばらしいことといたら！ じつさいにその景色を見ることのできた人は、ほんとうにしあわせな人だといえることでしょう。そしてだれもが思うはずです。ここは、らくえんにちがいないと（この景色をいいあらわす言葉は、なかなか見つからないと思います。ですけど、それでは読者のみなさんに申しわけが立ちませんので、なんとか、わたしのつたない言葉できようしゆくなのです。説明させていただきたいと思います。できるかぎり、きおくと頭をふりしぼりますので、どうぞごかんべんください）。

広がっている景色は、まさにしぜんの美しさそのものでした。木々は、目もくらまん

ばかりのあざやかなみどりの葉にみちていました。あちらにもこちらにも、まんかいの花々がきそつてさきほこつていました。そのあいだを、さまざまな宝石の色をしたちようや小鳥が、楽しそうに飛びかっけております。美しい水の流れが、あみの目のようにせせらいでいるのが見えました。かがやく銀のしぶきを上げる、たくさんのたき。そしていずみ。みどりの草原では動物たちがのんびりと草をはみ、あそび、くつろいでいました。

それは、だれもが頭の中だけに思っているだろう、らくえんのすがたそのものでした。それが今、そのままのかたちとなって、目の前に広がっていたのです。そしてその中に、それらのものにまったくとけこむようなかたちで、白いれんがづくりの家々がたちならんでいました。それらの家々は、木々の生えるのをさまたげず、水の流れるのをさえぎらず、ただしぜんのありのままのすがたにあわせて、たてられていました。まるで、すべてがあるべきところにあるといったように、それらのものは、そこにあったのです。

みやこの中で大きくいんしょう的なのは、あちこちにたてられている、とんがりやねの大きな白い塔でした。これらの塔は、このシープロンドのみやこを（てっぺんからふもとまでじゅんばんに）おうぎじょうに大きく四つの部分に分けている、四つの白いじょうへきの上になつていたのです。このじょうへきはもともと、そこからの敵のこうげきを防ぐための、守りのかべとしてつくられたものでしたが、ただのいちどでさえ、そのほんらいのやくめを果たしたことはありませんでした。つまりそれは、この美しいひつじたちのくにシープロンドを、こうげきしようなんて考えた者が、今までだれひとりとしていなかったからなのです（これはじつによるこぼしいことです）。

しかし今では、このへいわで美しいシープロンドの中でさえ、けつして安全だというわけではありません。黒の軍勢のおそろしき、ひれつき、ひきようさは、まこと、われわれのそうぞうからかけはなれていたのですから。

ですけど、今はただ、このシープロンドのくにの美しきに見とれることにしましょう。守りのためにつくられたはずの白いじょうへき

は、今ではこのシープロンドの美しさをいつそうひき立てるためのかざりものとして、その新たなやくめを果たしていました。白い塔にはすべて、銀色の地に水色のししゅうのなされた、きれいなはたがつけられていました。それらのはたは、そよ風を受けてひらひらとたなびき、ふりそそぐ朝日を受けて、きらきらとかがやいております。じょうへきの上にたちならんだ、それらのはたのついた白い塔を、しんじゆにたとえるのなら。白いじょうへきは、まるで、それらのしんじゆのついた首かざりのようでした。そしてシープロンドのみやこには、こんなにも美しい白い首かざりが、四つもかかっていたのです。

これらのものが、うつしみ谷のてっぺんであるこのてんぼう台の、はるか下にまでむかって、ゆるやかなだんだんになってつづいていました。そして、いちばん下のじょうへきのむこうには（つまり四番目の首かざりのむこうには）、見渡すかざりのはたけやまきばが広がっていたのです。たくさん風車がゆうゆうとまわり、へいわでのどかなシープロンドのいんしょうを、ことさらに強めていました。

この場にいる者たちの中ではじめてこの景色を見たのは、ロビーただひとりでした。ライアンはもちろん、ここの生まれなのですから、ほとんど毎日（たまのお出かけのときはべつとして）この景色を見て育ったのです。そしてベルグエルムとフェアアルも、すでにこのシープロンドにしばらくたいざいしているあいだに（つまりロビーが見つかるまでのあいだです）、この美しい景色をじっくりとながめることができていました（うらやましいかぎりです）。

このシープロンドのすばらしい景色は、きつとなん時間見ていたって見たりないくらいに思うことでしょう。ですけど、このてんぼう台に夕方までゆつくりと、お茶とケーキをいただきながらとどまっているわけにもいきません（それができたらさいこうなんですけど）。ですからみんなは、なごりおしみながらも、このみりよくなる景色の広がる高台の小さな広場を、しぶしぶあとにしました（じっさいここにいたのは、時間にしてせいぜい一分くらいでした。なんてかわいそうなロビー！ かれには、あとでまたゆつくりと、この景色を楽しんでもらいたいものです）。

てんぼう台のある広場をすぎると、白いれんがの小道は、生いしげる木々の中へとつづいていきました。道の両わきには、はじけるようなみどりの葉をつけた大きな木が、すきまなくならんでおります。それらの木々ののぼしたえだが、道の上にもまで大きくせり出して、みんなはさながら、森の中に切りひらかれたみどりのトンネルの中を進んでいるかのようにでした。えだには、たくさん鳥たちがとまっているのが見て取れました。朝の美しい光が木もれ日となって、そのえだのすきまからふりそそいできます。それらはまるで、おうごんの光のシャワーのようでした。その光のシャワーをあびながら進む一行のことを今、鳥たちのさえざる美しい音楽が、やさしくかんげいしてくれていたのです。

「ずいぶんと、人になれているんですね。ぼくのいた森にも鳥はいたけど、ぼくのことをこわがって、ただの一羽だって、こんなそばにまでよってこなかったのに。」ロビーがそういって、にが笑いを浮かべました。ロビーのいう通り、このシープロンドの鳥たちは、こんなにたくさん騎馬たちがすぐそばにまでこうしんしてくるといいうのに、まったく飛び去ってしまうそぶりすら見せなかったのです。馬の背から手をのばせば、すぐ手がとどいてしまいそうでした。

「シープロンドの鳥たちは、ほかの生きものをこわがらないんだよ。かれらをおそう敵もないから。みんな、仲間だと思ってるみたいだね。」ライアンがそういって、右手の人さしゆびを、頭の上のあたりにすつとさし出しました。するとそのゆびに、ぱたぱたと一羽の小さな水色の鳥が飛んできて、とまったのです。小鳥はそこで、のんびりと毛づくろいをはじめましたが、ライアンがそつとゆびさきを上げると、ふたたびもとの木のえだの上へともどっていきました（ためしにロビーも同じことをしてみたのですが、飛んできた鳥はロビーの頭の上にとまってしまいました。しかも、いちどに五羽も！ あわてて首をふったロビーのことを見て、みんなは思わず笑ってしまいました）。

まこと、このシープロンドにいるかぎり、危険はまったくかやのそとといった感じでした。きのうのおそろしいけんも、セイレン河のあの変わり果てたすがたも、みんな夢だったんじゃないかと思える

くらい、ここはへいわそのものに見えたのです。

そしてみんなの心が、げんじつのおそろしさを忘れてしまいうようになっていたころのこと。不安やきようふからかいほうされて、つかのまのへいわにひたりきっていた、そんなおりもあり。かれらのなごやかなこうしんを、とうとつにうち破るものが、道のゆく手からあらわれました。

それは二頭のはい色の騎馬たちでした。乗っているのはそれぞれにひとりずつ、われらが騎士たちと同じ服そうをした、おおかみ種族の者たちです（かみの毛もしつぽも、もちろんはい色です）。かれらはこの白いれんが道を大急ぎでかけてきたらしく、ロビーたち一行にはちあわせしたときにも、すぐにはとまれず、いったん大きく通りすぎてしまつてから、あわててひきかえしてきたほどでした。そしてみんなの騎馬たちは、この二頭の騎馬たちがあんまりとつぜんにかけてきたものですから、すつかりおどろいてしまつて、そのためあたりはひととき、大きわぎとなつたのです。騎馬たちは大きくいなないて、じたばたとあばれました。乗馬のけいけんゆたかな者たちがたづなをひいていなかったのなら、みんなはたまらずに、ふり落とされてしまつていたことでしょう（じつさいロビーはあわやのところで、馬から落つこちずにすんだのです。そのぶん、しがみつかれたホロウノースは、馬をあやつるのにだいぶくろうしました）。そのくらいいきおいで、この新たな二頭の騎馬たちはあらわれました。

それからようやく、ぜんいんの騎馬たちがおちつきを取りもどすことができたころ。新たにとうじょうしたその二名のウルファの騎士たち（これはもうどう見たつて、ベーカークランドの白の騎兵師団の騎士たちだったのです）にむかつて、口をひらく者がありました。それは、かれらのみちびき手である白の騎兵師団の長、ベルグエルムだったのです。

「ハミール！ キエリフ！ これはなにごとだ！ この美しい友人たちのくにを、かくも荒々しく馬でかけまわるとは！」

ベルグエルムの（おしかりの）言葉に、ハミールとキエリフとよばれたふたりの若き騎士たちは、うやうやしく頭を下げて、失礼のだん

をおわびしました。

「申しわけありません！ よんどころなきじじょうのゆえ、どうかごぶれいをおゆるしく下さい！」

いつもとてもれいぎ正しいはずのかれらのような騎士たちが、ここまであわてて、荒つぽくやってくるなんて、なにかよほどのじじょうがあつてのことのようです。いったいどうしたというのでしょうか？ かれらの言葉に耳をかたむけてみましょう。

「よくぞごぶじでもどられました。ライアン王子も、よくぞごぶじで。それと……、おお！ そちらのお方が、われらがきゆうせいしゆであられますか！」

ふたりの騎士たちはまずあいさつをかわし、それから、ロビーのことを見ておどろきました。かれらのよく知っているあのいい伝えの黒き同ぼうが、今こうして、目の前にいるのですから、それもとうぜんのことだったのです。ですがかれらには今、そんなロビーのことでさえ、じつくりかんさつしているようすらありませんでした。それは、ここへきたほんらいのもくてき。この美しいシープロンドのくの中を、ひじょうしきにも全力で馬を走らせるはめになった、そのわけが、今のかれらの心を、すっかりみだしてしまつていたためだったのです。

「ベルグエルム隊長、フェリアル副長。わたくしどもにとつての、いちだいじたるできごとが起りました。北門にあなた方がとうちやくされたとのほうこくを受け、われらはいっこくも早くそのことを伝えるべく、はせさんじたしだいなのです。」

かれらはベルグエルムとフェリアルの旅のともとして、ベーカールンドからいっしょにやつてきた、騎士たちでした（つまり、かれらは四人でベーカールンドを出発したのです。ちなみに、フェリアルは隊長のつぎにえらい、副長だったんですね。どうりで、剣のうでも立つはずです）。

この若き騎士たちのことをかんたんにごしよいかいしますと、ハミールはナシユガー家の長男で、なかなかの好青年です。そしてキエリフは、同じくアートハーグ家の長男で、これも負けないくらいの好

青年でした。剣のうでも、隊長と副長にまではおよばないとしてもなかなかでしたし、頭もよかったのです。つまりひとことではいえば、ふたりとも、「りっぱな騎士」たちでした。ですから、こんかいのこの重要なにんむの旅に、かれらがえらばれたのも、しごくとうぜんのことだったのです。そしてそんなふたりの騎士たちが今、みんなが思いもよらない、たいへんなできごとのことを語りはじめました。

「ついでさきほどのこと。せいかくには、今から一時間ほど前のことです。メリアン王の王宮に、一羽のたかが飛んできたのです。それはまさしく、われらベーカーランドの者たちのもちいる、でんれい用のたかでした。そしてその足には、おそれていたことに、まっ赤なはたぬののしるしがくりつけられていたのです。」

若き騎士たちの言葉に、ベルグエルムとフェリアルのみは大きく表しようをくもらせました。それはあきらかに、なにか悪いことが起こったということであらわしているものでした。じつは、騎士たちの言葉にあつたまっ赤なはたぬのというのは、かれらベーカーランドの者たちがもちいている、れんらく用のあいずのひとつだったのです。そしてそのあいずは、ごそうぞうの通り、とてもよくないことが起こったという悪いしらせをあらかわすためのものでした（もしこれが青いはたぬのであったのなら、はんたいによいことが起こったということであらわします。そのほか白やきいろなど、さまざまなものがありました。こんかいはその中でももっとも悪い、もっとも見たくない、赤いはたぬののしるしが、そのたかの足にくりつけられていたというわけでした）。

ベルグエルムの表じようはこわばり、こわいくらいでした。ロビーは不安げに、そんなかれらの顔を見まわすばかりです。いったいなにが起きたのか？ それは、騎士たちのつぎの言葉によってあきらかとなりました。

「そのはたぬのには、手紙がついておりました。さし出しもとは、ベゼロインのとりです。それによれば、われらのふたつのとりでのうちのひとつ、リュインのとりでが、敵のこうげきによって落ち、うばわれたというのです。」

「そんなばかなー!」フェリアルが思わずさげびました。「われらはついでこのあいだ、そのとりでを通つてここへきたんだぞ!」とても信じられない。それはほんとうなのか?」

フェリアルのいう通り、かれらはベーカーランドを出発してから、ティーンデインの大河にそつてつくられた、それらふたつのとりでを通つて、この北の地へとやってきたのです。それらのとりでとは、ひとつはベゼロインのとりで。そしてもうひとつが、リュインのとりででした。これらのとりでは、ワットの黒の軍勢のしんりやくをおしとどめるためにベーカーランドがぎずいた、大いなるとりででした。ふたつとも、このアークランドでもほかにるいを見ないほど、大きくてりっぱなとりでだったのです。もしこれらのとりでがなかったのなら、ベーカーランドの人たちはいちにちだつて、安心して眠ることなどはできないでしょう。それほどに、これらのとりではかれらにとつてだいじなものでした。

そして、それらのとりでのうちのひとつであるリュインのとりでが、敵の手によつて落ち、うばわれたというのです。ですからこれは、ベーカーランドだけでなく、このアークランド世界に住むすべてのぜんなるたみたちにとつての、いちだいじでした。フェリアルがうたがつかかつたのも、むりもないことだったのです。とても、そんなことは信じられませんでしたし、信じたくありませんでしたから。

ですがこれは、まぎれもないじじつでした。それは、つづく若きウルファの騎士、ハミール・ナシユガールの言葉によつて、たしかなものとしてされたのです。

「わたしも、信じたくはありませんでした。フェリアル副長のいう通り、まちがいであると信じたかった。しかしこれは、まちがいのないじじつなのです。それは、しらせを受けてリュインにかけつけたベゼロインの者たちによつて、たしかなものだとかくにんされました。そして、そのベゼロインのとりでへと、リュインのひほうをしらせるべく、手紙を送つたのは……」ハミールはそこで、言葉をつまらせました。となりにいるキエリフが、かれの肩に手をおいてはげまします。

「でんれいのたかによつてベゼロインへと手紙を送つた者は、わた

しのよく知っている人物であったのです。それは、レイミール・ナシユガー。わたしの、じつのおとうとです。」

ハミールの言葉に、その場にいるぜんいんがおどろきの声を上げました。レイミールはハミールの若きおとうとで、ねんれいはまだ十二さいほどでした。レイミールは兄のハミールによくなついていて、くにの力になりたいとむりをいって、リユインとりでの見ならい兵士としてはたらいっていたのです（ほんとうならまだ兵士になれるねんれいではありませんでしたが、ハミールがお願いして、とくべつに見ならいとしてきよかしてもらっていました）。

レイミールのことはベルグエルムやフェリアルもよく知っていて、ずいぶんとかわいがっていました。じつさいここにくる前（せいかくには三日と半日前のことでしたが）、かれらはリユインとりでで、レイミールに会ったばかりだったのです。ですからかれらは、ことさらに心を痛め、心配しました。

「レイミール！　かれは、かれの身は？　ぶじでいるのか？」ベルグエルムがまつさきにたずねました。そしてその思いは、ベルグエルムのみならず、その場にいるみんなが同じだったのです。

そんなみんなの心配に、キエリフ・アートハーグがこたえました。ハミールはもう、おとうとのレイミールのことで胸がいつぱいで、とてもまともには、ものを話せるじょうたいではなくなってしまうていたのです。

「それは……、なんとも申し上げることができません。かれが手紙を書いたときには、もうあたりはすっかり、敵にかこまれてしまっていたそうです。かれをふくむわずかな兵士たちのみが、さいごのふんとうをつづけるべく追いつめられ、そしてそのきぼうを、一羽のでんれいたかにたくしたとありました。ベゼロインに送られたその手紙には、リユインがもしこのまま落ちるようなことがあったなら、そのことと、そして南への危機をただちにしらせるべく、兄のハミールがいるこのシープロンドへと、でんれいのたかを送るようにとのしじがなされていたのです。」

ベルグエルムもフェリアルも、深くうなだれて思いをめぐらせてい

ました。そして、自分たちのためにいちはやく大きな危険をしらせてくれたレイミールに、ふたりは深くかんしゃしたのです。

キエリフがつづけます。

「レイミールたち、残された兵士たちがどうなったのか？ この手紙からだけではわかりません。ですがわたしには、かれらの身にまちがいが起こったなどは、どうしても思えない！ レイミールは兄ににて、とてもゆうかんで頭もいいのだから、きつとぶじでいてくれるにちがいありません。わたしは信じます。」

（のちに語られることになりましたが、このような戦いには、さまざまなきまりごとがきめられていたのです。追いつめたすくない数の者たちを必要以上におびやかすということは、そんなたくさんのきまりごとのうちのひとつとして、はつきりときんじられていることでした。ですが、ひれつなワットが、それをきちんと守るかどうか？ 仲間たちにはかくしようが持てなかったのです。あのカピバラのくにでのぼうきよを思い起こしてみてください。あれほどひどいことは、いくらワットといえども、そうそう起こし得ないことだと信じたいですが、ワットのことです。それに近いことでも、へいきでやりかねません。相手がたとえ、おさない者であったとしても……。ですから仲間たちは、残された兵士たちのことをあんじ、レイミールの身のぶじをあんじました。）

キエリフの言葉に、その場にいる者たちぜんいんも、大きくうなずいてこたえました。それでハミールも、ようやく顔を上げて、みんなの方をむくことができたのです。レイミールのぶじをいちばん信じたかったのは、かれでしたから。そう、レイミールはぶじにちがいありません！ 自分が信じてあげなくて、どうするのでしょうか？ ハミールは気持ち強く持ちました。みんなのおかげで、もういちど、きぼうを取りもどすことができたのです。ハミールは頭を下げ、みんなに心からかんしゃしました。

「ありがとうございます、みなさん。おとうとは、ぶじでいる。わたしも信じます。なにより、ぶじでいると感ずることができると。ハミールはそこで、はじめて笑顔を見せました。」

「もちろん、ぶじにきまつてるよー!」これはライアンでした。

「近いうちに、しようかいしてよ。ハミーのおとうとさんなら、ぼくもきつと、いい友だちになれると思うから。なんてよぼうかな? レイミールくんだから……、うん! レミってよぼう!」

ライアンはそういつて、につこり笑つてみせました。かれはひつじの種族でしたが、ロビーをふくめ、このみじかいあいだにはじめて出会ったおおかみ種族のかれらのことを、すっかり好きになっていたのです。ですからライアンは、かれらのために、自分のできるかぎりのことをしてあげたいと考えるようになっていました。この場でかれが、持ち前の明るさと心くばりでこんなふうにおどけてみせたのも、友であるおおかみ種族のみんなのことを、すこしでも、げんきづけてあげようと思つてのことからだつたのです(ライアンはほんとうにいい子です)。

「ありがとう(ぎ)います、ライアンどの。」

ハミールは、そんなライアンの心づかいかんしやして、深々と頭を下げました。ですがライアンは、さもいごちが悪いといつたふうに、手をふつていつたのです。

「やめてよハミー。そんなのいいからさ。ぼくのは、ライアンでいいよ。キーフも、気をつかわなくていいからね。」

ライアンはハミールとキエリフのふたりにいいましたが、そんなライアンの言葉に、れいぎさほうやけいしきを教えられてきた騎士であるふたりは、にが笑いしながら、おたがいの顔を見あわせました(ベルグエルムとフェリアルのふたりも、さいしよはライアンの立ちふるまいと自由ほんぼうさにとまどつて、なれるまでには時間がかつたのです。騎士である自分が、はじめて出会つたちびつこ王子さまに、まさかいきなりニックネームでよばれるなんて、思つてもいませんでしたから。)

ちなみに、ハミーとキーフというのは、もちろん、ライアンがハミールとキエリフにつけたニックネームです)。

こんなふうには、ハミールのことを思うたくさんの友人たちのおかげで、しずんでいたその場もふたたび、明るさを取りもどすことができ

ました。ですが、リュインとりでが敵の手に落ちたということは、しんこくなじじつとして、いぜん残されたままであったのです。ですから、みんながつきにやるべきことは、おのずとときまってきました。

「われらは急いで、これから取るべきおこないを話しあわなくてはならないな。」ベルグエルムがいました。「もとより、そのつもりであったのだが、じたいはさらにしんこくさをましてしまった。これではふたたび、もとのようには、南の地におもむくことはできないだろう。リュインとりでが落ちたとなれば、敵はわがもの顔で、あたりの土地を歩きまわることができてしまう。」

「それに、きのう出会った黒騎士たちのことも、やはり気がかりではありません。」ベルグエルムの言葉に、フェリアルも心配げにこたえました。

「わたしも、かれらのことが心配だ。」ベルグエルムがうなずいてつづけます。「われらのすがたをおおやけにさらすことは、どうしてもさげなければならぬだろう。もしかれらにとらえられでもしたら、われらのにんむもおしまいだ。」

ベルグエルムの言葉は、なんとも正しいものでした。敵につかまること。それはすなわち、われらがきゆうせいしゆであるロビーの身が、敵の手に渡ってしまうということを意味していたのです。ベルグエルムという通り、それだけは、なんとしてもさげなければなりません。ロビーのそんざいは、かれらにとって、さいごのきぼうだったのですから。

「じゃあ、早くみんな、お城にいかなきゃいけないね。」ライアンがいました。「父にそうだんして、みんなで話しあおう。みんなで話しあえば、いいこたえが出るはずだよ。」

「かんしゃします、ライアンどの、いや……、ライアン。」ハミールが、深々と頭を下げようとしたのをとちゆうでやめて、かるいおじぎにとどめながらこたえました(さつきライアンにいわれたばかりですものね。えらい身分の相手のことを名まえだけでよぶのには、まだちよつと、ていこうがありました)。

「くへのゆくすえにかかわる、だいじな話しあいです。」さいごに、ベ

ルグエルムがいました。

「われらの進むべき道を、みんなで考えよう。」

そして、シープロンドにつどったこのせいぎの者たちは、いちろ、メリアン王の待つシープロンドの王宮へとつづく、白い小道を、足早にたどっていったのです。朝日はもう、すっかりのぼりきって、このおだやかな白きひつじたちのくの中を、やさしくてらし上げていました。その美しさはいぜんと同じく、なにひとつ変わってはいませんでした。

6、進むべき道

ある朝のこと。十羽ほどの渡り鳥のむれが、青くかがやく山のいただきのむこうから飛んできました。新しくのぼったばかりのおひさまの光が、すべてのものを、きらきらとかがやかせていました。そして鳥たちは、その光の中、みずからのその身を美しいこがね色にかがやかせながら、山のすそのに広がるその谷の上を、いちろ、はるかな南へとむかつて進んでいったのです。

その谷は、見るもあざやかなものでした。谷中がみどりにあふれかえり、花々にみちあふれていたのです。それはおよそ、この世のらくえんとよぶのにふさわしいところでした。なんともいんしよ的な、白いふしぎなれんがでつくられたじょうへきが、その谷を美しくかざり立てていました。そして、そこにそびえたつたくさんの白い塔が、その谷の美しさをかんぺきなものにしていました。それらは人がつくったものであるはずでした。ですがそれらはまるで、はるかなしぜんのいとなみの中に、もともとそんざいしているものであるかのよう、ありのままに、なんのふしぎもなく、この景色の中にとけこんでいたのです。

谷は今、たくさんの水のしずくによつて、きよらかにあらわれていました。夜明けまでに、かなりの量の雨がふったようです。木々の葉にかがやく宝石のような水の玉と、あちこちにできた水たまりの数が、そのことをよくあらわしていました。しかし、この谷に流れる水は、いぜんとしてやわらかく、やさしく、ここに住む人々の暮らしをうるおすばかりでした。これだけの量の雨がふったのにもかかわらず、せせらぎの水はあふれることもなく、にごることもなく、ただ変わらずに、きよらかな流れのままだったのです。

そのひみつは、この谷のてっぺんにそびえる青くかがやく山にありました。つまりその山は、この地に住む人たちがせいなる山とたたえる、タドウーリ連山だったのです。

なぜ谷に流れる水のせせらぎが、いつでもおだやかなままなのか？
この山の名まえをきけば、このおとぎのくにアーケランドに住んで

いる者であれば、すぐにそのこたえがわかることでしょう。つまりそれは、この谷が、そのタドウーリ連山に住むたくさんの精霊たちの力によって、強く守られているからでした。

タドウーリ連山に住む精霊たちは、このアー克兰ドの中でもとくべつな、とても大きな力を持っていました。水の精霊、風の精霊、土の精霊に、火の精霊まで。この山にはじつにたくさんのしゅるいの精霊たちが、大勢住んでいたのです（ちよつとおそろしげなやみの精霊という者たちまで、そこには住んでいるほどだったのです）。ですが、じつさいにそのすがたを見ることのできるきかいは、山のふもとのこの谷に住んでいる者たちであつても、めつたにあることではありませんでした（読者のみなさんは、そのりゆうをすでにごんじですよね。かれらのような精霊たちは、ひっそりとかくれ住んでいる者たちなのであつて、われわれの目の前にはほとんどそのすがたを見せないのですから）。しかし目で見ることはできなくとも、この谷に住んでいる者たちは、精霊たちのその大いなる力を、しっかりとほだで感じるこゝとができたのです。

そのため、谷の者たちは精霊たちのことをことさらにうやまい、これらの住む山をせいなる山とたたえて、たいせつに守ってきました。そして谷の者たちのその心は、精霊たちの方にも、しっかりとどいていたのです。この谷のせせらぎが大雨でもあふれることなくおだやかなままなのは、この谷を守ってくれている、そんな精霊たちのおかげでした（ぐたい的にいますと、水の精霊たちが谷に水のひがいを出さないように、あふれた水をひとしずくずつ、遠くのみずうみにまではこんでくれていたからでした。そのほか、風の精霊は強すぎる風で木々がいたまないうようにと風を弱めてくれましたし、火の精霊はかじで森がやけないようにと、気をくばってくれていたのです。精霊たちがこの谷をどんなにだいじにしてくれているのか？ よくわかりでしょう。この谷の住人たちは、ほんとうにしあわせ者です）。

暮らしの中に、まったくあたりまえのように、しぜんの美しさと精霊たちの力がとけこんでいる。それがこの谷のすばらしさであり、ほこりでありました。そして、この谷にあるなんともすばらしいそのく

にの名まえを、みなさんはもうよく知っていますよね。そう、そこは美しき、白きひつじたちのくに。名まえは、シープロンド。

渡り鳥の一羽が、シープロンドのくにの上空で、大きくばさつ！

とつばさをはばたかせました。なんまいかの羽がふわりとまい上がって、それらはゆつくりと、地上へとむかつて落ちていきます。やがていちまいの羽が、白くかがやく美しいれんがのしきつめられたその小道の上に、ふわっとおり立ちました。そして今、その道を全部で六頭の騎馬たちに乗ったおおかみとひつじの種族の者たちが、足早に、こちらへとむかつてやってくる場所だったのです。

一行は、小道のつづくさきにある、ひとつのたてものをめざして進んでいるところでした。それは、このひつじのくにシープロンドの中でも、もつとも重要なたてものでした。それもそのはず。なにしろそのたてものあるじは、このくにの中でいちばんえらい人。王さまなのですから。つまりそのたてものは、このシープロンドの王宮でした。王さまとその家族が住んでいるところであり、くにのせいじをとりおこなうところであり、そこからのたいせつなお客さまが、たいざいするところであったのです（ベルグエルムたちウルファの騎士たちは、今そのたいせつなお客さまとして、王宮にとどまっていたのです）。そしてみんなは今、その王宮でとてもだいな話しあいをおこなうべく、急ぎ、その小道を進んでいるところでした。

白い小道はゆるやかな下り坂となって、くねくねとまがりながらのびていました。とちゆういくつかの小さなたてものがあったて、そこにはかざりやりを持ったシープロンの衛士たちが、それぞれなんんかずつ、見張りに立っていました。これらのたてものは、北門から王宮までの道を守るためのその見張りをおこなう、衛士たちがいるところでした。この白い小道は文字通りの小さな道でしたが、じつはおまつりするときなどに王さまが通ったりするための、とてもたいせつな道であったのです（もとよりこの道を通らないことには王宮へといけませんでしたので、はじめからたいせつな道であることに、変わりはありませんかっただけです）。そのため、見張りの衛士たちがいつもいて、たえ

ず道の安全を守っていました（ですけどこの道はいつも安全で、危険なことなんて今までいちどもなかったんですけど。かれらがいるのは、まあ、かたちだけみたいなものだったのです。

ところで、ルースアンとホロウノースのふたりは、ここのせきにん者として、北門にいちばん近いたてもものにきのうからとまりこんでいました。それは旅の一行を、いちはやく出むかえるためでもありませんでした。かれらがまつさきに北門に出むかえにあらわれたのは、そのためだったのです。

ちなみに、ハミールとキエリフのふたりも、一時間ほど前、でんれいのたかのしらせを受けてからというもの、「衛士たちといっしょに北門のそばでみんなのことを待っていたい」といいましたが、かれらはたいせつなお客さま。「どうか王宮にてお待ちください。」とシープロンたちにお願ひされ、しゅぶぶ、お城で待っていました。ですがやっぱり、旅の者たちが北門にとうちやくしたとのしらせを受けて、かれらはいてもたつてもいられず、騎馬たちに乗って飛び出してしまったというわけなのです。

六頭の騎馬たちは、さらにいくつかの広場と門を越え、木々のトンネルをぬけていきました。そして白い小道はついに、メリアン王のいるシープロンドの王宮の、その入り口へとつながったのです。

入り口のりっぱな門をぬけると、そこは王宮の中庭になっていました。あざやかなしばふがしきつめられていて、ところどころに、みずみずしい実をつけた木が立っております。そしてなんとも色とりどりの花々。それに集まるたくさんのおちようたち。まん中にはかがやく水をふき出す、みごとなふんすいもありました。

それはため息をついてしまいたいそうなくらいの、美しい庭でした（ガーデニングの好きな人なら、あんまりすばらしい庭なので、ちよつとくやしいくらいに思うことでしょう。ロビーはこの庭のことを見て、すぐに、えんげい好きのスネイルのことを思い出してしまいました）。そしてその庭のむこうに。シープロンドの王宮がたっていたのです。王宮もシープロンドのほかのたてもものと同じく、あの白くかがやくれんがでつくられていました。あちこちに白い塔がつき出てい

て（これはだんろのえんとつなのです）、たくさんのバルコニーがつくられております。ですが、たてももの大きさ自体は、けっして大きなものではありませんでした。これは、かれらのひかえめなせいかくをよくあらわしていました。たとえ王さまの住む王宮であっても、必要以上になりっぱにするのは好ましくないというのが、かれらの考え方だったのです（これはほかのすべてのことにもいえることでしたが、ものごとには「ちようどよいところ」というものがあるのです。シープロンドの人たちは、そのことをよく心得ていました）。

一行はそのまま、美しい中庭を通って、王宮のたてもものその入り口の前へと騎馬たちを進ませました（しばふをよごさないように、中庭にはちゃんと、馬や人の通る小道もつくられていました）。入り口の前には王宮つきの衛士たちが、きちんとれつをなして、一行のことを出むかえております。そしてそのいちばん前には、ルースアンとホロウノースのふたりと同じ服そうをした、王のそっきんの者たちがふたり、立っていました。

このふたりの者たちの名まえは、ルーベルアンにフォルテールといいました（ちなみに、ルーベルアンはルースアンのおとうとです）。ふたりはまずライアンにあいさつをしてから、旅の者たち、とくにロビーにむかっていいました。

「ようこそ、シープロンドの王宮へ。どうぞ、よきごたいぎいを。」
そしてかれらは、ていねいに心のこもったおじぎをしてから、つづけたのです。

「じょうきようは、よく心得ております。さあ、どうぞ中へ。メリアン王がお待ちです。」

王宮の中は、これまた白の世界でした。かべや床はもちろん、テーブルやいすや、かかっている絵のがくぶちまで、みんな白いのです。もしどこかに、どろのはねたのがいつてきでも落ちていたのなら、ものすごく目立って見えるにちがありません。それほど王宮の中は、どこもかしこもぴかぴかにみがき立てられていました（ですからロビーは、自分のかみやしつぽが黒いのが、なんだかとてもくすぐった

く思えました。そんなロビーのことを見て、ライアンは、「ここにいたら、ロビーのかみもしつぽも、今よりもつときれいに見えるじゃない。いいことだよ。」と喋ってあげました。

中にはいつてすぐのところ、王宮の二かいへとつづく大かいだんがひとつあつて、そのおどり場のかべに、ひとときわ目をひく大きな絵がいちまいかかっていました。えがかれていたのは、ひとりのシープロンの女の人は、ねんれいはまだ若く、二十だいの前半くらいのようでした。その女の人はすき通るような美しいはだと、銀色にかがやくかみをしていて、さらさらと流れるような白いドレスをまといました。青い宝石のようなひとみをしていて、そしてそのひとみは、絵を見る者におだやかにむけられていたのです。

ロビーはひとめで、この絵にみいられてしまいました。心がすうつと、すいこまれていくような感じがします。そのうえはじめて見た人なのに、ロビーはこの人のことを、すでにどこかで見たことがあるように思いました。

「きれいな人でしょ?」

ライアンの声に、ロビーははつとわれにかえりました。そしてライアンの顔を見たとき、ロビーのきもんは晴れたのです。そう、この女の人は、ライアンにそっくりだったのです!

「そう、ぼくのお母さんだよ。ぼくが小さいときに、なくなつたんだ。」

ライアンの表じようは、ちよつとかなしげでした。そんなライアンの気持ちを思つて、ロビーも同じく、心がしくしくと痛んできます(ちなみに、絵にえがかれていたのは、ライアンのお母さんが二十三さいのときのすがたでした。そしてこの絵がえがかれてから二年ごの二十五さいのときに、ライアンが生まれたのです)。

それからロビーは、自分のことも考えました。自分にも、お父さんやお母さんがいるはずなのです。生きているのだろうか? そうだとしたら、今どこで、なにをしているんだろう? もうなんとも思ひえがいてきたことでしたが、ロビーは今また、そのことに思いをめぐらせていました。

そのとき、かいだんのわきのろうかから、ひとりのシープロンの少女がやってきました。ねんれいはまだ十二ほどです。ロビーにはすぐに、その少女がライアンの身内の者であるとわかりました。だって、今見ていた絵の中の女の人が、そのまま小さくなったみたいなのに、そっくりだったのですから。

「シープロンドへようこそ。新しいウルファのお客さま。」少女はとてもれいぎ正しくおちついた言葉使いでロビーにあいさつをすると、すつと静かにおじぎをしました(ライアンとは、だいぶせいかくがちがうみたいです)。

「みなさん、たいへんな道のりであつたとおさつしいたします。まずはごゆつくり、旅のつかれをおいやしく下さい。」

「ありがとうございます。」少女の言葉に、ロビーはぺこりと頭を下げてこたえました。ベルグエルムたち、ウルファの騎士たちもそれにつづきます。

騎士たちはこの少女のことを、すでにライアンにしようかいされて知っていました。ですからロビーと読者のみなさんのために、ここでもういちど、ライアンにかのじよのことをしようかいしてもらうことにしましょう。

「この子はエレナ。みんな、エルってよんでるけどね。ぼくのいもうとだよ。」ライアンがロビーにいました。なるほど、ライアンのいもうとだったんですね。見た目がそっくりなもの、うなずけます(せいかくは、だいぶちがうようでしたが)。

「エル、かれはロビー。いい伝えのきゆうせいしゆなんだよ。でも、あんまりはしやぎたてないようにね。かれは、そういうのいやがるから。」

ライアンの言葉に、エレナはくすりと笑っていました。

「兄さまじゃないんですから、はしやいだりなんかしませんわ。」

思わず「う……」とたじろぐライアンに、その場にいる者たちは、みんな思わず、くすくすと笑ってしまいます(すかさずライアンは、「なにがおかしいの!」とそっきんたちをぎろりとにらみつけました。そっきんたちは、「いえ、なにも!」といつてごまかしましたが)。

それからライアンは、エレナに今までのことのしだいを手早く伝えました。これからみんなは、ライアン（とエレナ）のお父さんでもあるメリアン王に急いでじじょうを話して、できるだけ早く、これからの道のりのことをきめるための話しあいを、作ってもらわなければならなかったのです。ですが、エレナの言葉は、よそうがいのものでした。

「父さまはもう、みんな知ってますわよ。兄さまにけががないということはもちろん。リュインとりでのことも、そのたいさくのことも。今ごろはもう、話しあいのための場が作られているはずです。」
リュインとりでのことは、でんれいのたかがシープロンドにいたことによつて、もちろんメリアン王のもとにも伝わっていたのです。そしてみんながもどつてくれば、これからの旅のことを話しあう必要があるというところまで、王さまはすでによきしていました（さすがはメリアン王です）。

もうひとつの、「ライアンにけががない」ということは、ふたつのりゆうがあつて、王さまはもうすでに知っていました。ひとつは、ラツパの音色です。旅の者たちがシープロンドにもどつてきたときに吹きならされた、あのラツパの音色は、旅の者たちのようす（とくにライアンのぶじ）をあらわす音色で吹きならされていました（ベルグエルムにかんしては、「肩をけがしている」ということまで、あのラツパの音色はあらわしていました。ちよつとすごいですね）。

ふたつ目のりゆうについては、ちよつと今ここで、すぐに説明することはむずかしいのですが……、それはこのあと、数ページのうちにあきらかになります。そのためにライアンが怒ることになりましたが、それはなぜなのでしょう？　そうぞうしておいてみてください。

「それならば、話は早い。さすがはメリアン王です。さつそく、王にお会いして……」

ベルグエルムがそういいかけた、そのとき。

ばだーん！　だんたん、たんたん！　だんたん、たんたん！　た

たーん！

かいだんの上から、なにかとんでもなくそうぞうしい物音がきこえてきました。そしてよくきけば、それはだれかがかけ足でこちらへとやってくる、足音のようだったのです。底のあつくてひらべったいくつをはいているために、白い石の床にそれがひびいて、すごく大きな音を立てていたようです（ちなみに、さいしよの、ぼだーん！ というのは、とびらがいきおいよくひらかれた音のようでした）。それにしても、こんなにおごそかでりっぱな王宮の中を、そんなぶさほうに、ばたばた走りまわるなんて！ いったいだれなのでしょう？ もしメリアン王に知れたら、大目玉をくうにちがいありません！

そして、その音を立てていたぬしが、みんなの見守るその大かいだんの上までやってきました。その人物は、そのまま大急ぎでかいだんをかけおりてきます。シープロンの男の人で、ねんれいは四十だいのなかばくらいでしょうか？ りっぱな口ひげを生やしておりましたが、かみの毛はぼさぼさで、寝起きのまんまといった感じ。くしもいれておりません。かつこうは、王さまのそっきんたちに負けないくらい、りっぱな服そうをしておりましたので、身分の高い人であることにはまちがいないようでした。ですが、いかんせん、なんだか大あわてで着がえをしたみたいのに、その服はくちやくちやにみだれていて、ボタンの位置までずれているありさまだったのです。

その人はかいだんをおりきると、そのままいちもくさんにこちらにとっしんしてきました（まるで赤いぬのにむかっていく、とうぎゅうの牛みたいに）。そしてかれは、その場にいる者たちの中からただひとりを与えらんで、その人物をがばっ！ と両手で大きくだきしめたのです（その人物のとなりにいるエレナなど、目にははいらないうつたようです。ですからエレナは、いきおいあまって、はじき飛ばされそうになってしまったくらいだったのです）。

そして……、その人物は、こうさげびました。

「ライちゃん！ お父さん、心配したよー！」

ええーっ！ その場にいる者たちは、みんな、口をぽかーんとあけてかたまっけてしまいました。とくに、ウルファの騎士たちの顔といったら！ ロビーがルインビスの花を食べたときの表じょうの、十ばいくらいおかしかつたものです。

なんとなんと！ その人物は、メリアン王ほんにんでした！ そして、メリアン王がだきしめていたのは……、そう、ライアンだったのです！

この（よそうがいの）出むかえに、いちばんあわてふためいたのは、もちろん、ほかならぬライアン自身でした。ですからライアンは、じただたとあばれて、思わずさげんだのです。

「わわーっ！ ちよつと！ やめてよ父さん！ お客さんの前で、なにやってんのさー！」

ライアンがいやがるのもむりはありません。力づくで王さまのことをひきはがすと、そのまま、両手でどんっ！ とつき飛ばしてしまいました。はずみで、メリアン王は、どつてん！ 床にしりもちをついてしまいます。それからメリアン王は、「いたたたた……」とおしりをさすって、なんともなさげない声でいいました。

「だって、きのう帰ってくるっていつてたじゃないか。父さん、寝ないで待ってたのにー。とちゅうで二回も危険な目にあつてたし、すつごく心配だったんだよー。」

メリアン王はそういつて（ほとんどいじけてしまって）、自分の両手の人さしゆびをおたがいにつつんとつつつきあわせました。なるほど、わが子を思う、親の心というものでしょうか？ たとえ一国の王さまであるとしても、その気持ちはやはり、同じのようです。それはよくわかるのですが……、ちよつと、王さまの場合は、やりすぎとといった感じですね……（ちなみに、メリアン王は自身のその言葉の通り、寝ないですつとライアンのことを待っていましたがついに力つきて、明け方に眠ってしまいました。そうしてついさきほど、エレナとルーベルアンのふたりに起こされたのです。これはメリアン王があんまりぐつすりと眠っていたために、エレナたちが、王さまを起こ

すのをぎりぎりまで待つてあげていたからなのですが。そしてメリアン王はそれから、リュインのことや、ライアンたちがぶじにとうちやくしたということなどを、もろもろしらされて、寝起きの頭をふりしぼって、あれこれのしじをみんなに与えたというわけでした。

そのあと、「もうじき王宮にもどられますので、わたくしは出むかえにいつてまいります。」というルーベルアンの言葉に、メリアン王は「わー、待つてー！ わたしもいくー！」といましたが、エレナに、「そんな寝起きのかっこうで出られますか！ ちゃんとしたくをしてからですよ！」とさとされて、大急ぎで、身じたくをはじめたというわけだったので。でもやっぱりメリアン王は、したくもそこそこに、大あわてで飛び出してしまったというわけでした。そのけつまつは……、今みなさんに見ていただいた通りです。

そんなメリアン王の言葉をきいて、ライアンは、はつとなにかに気づいたようでした（するどい読者のみなさんでしたら、きつと同じように気がついたことと思います）。

「ちよつと待つてー！ 二回も危険な目にあつたつて、なんで父さんがそこまで知ってるのさ？ 旅の中のできごとのことは、まだ、だれにも話していないのに。もしかして……、父さん、またぼくに、なにかしかけをしたんでしょ！」

ライアンがそういうと、メリアン王はぎくつ！ とした顔になりました。そう、じつはこれこそが、ライアンがぶじであるということ。王さまが知ることのできた、ふたつ目のりゆうだったので。

メリアン王はライアンの身を心配して、ライアンの衣服のうらがわに、こつそりとあるものをぬいつけておきました。それは、とても小さな、星がたのブローチでした（ちよつと上からさわったくらいでは、ぜんぜんわからないほど小さいのです）。このブローチにはふしぎな力があつて、それを身につけている人物が危険な目にあうと、もうひとつの対になるブローチがぴーぴー音を立てて赤く光るのです。もうひとつのブローチはもちろんメリアン王が持つていて、王さまはこれで、ライアンがとちゆうで二回危険な目にあつていたというところを知ることができたというわけでした（その二回とは、ガイラ

ルロックたちと戦ったときと、黒騎士たちにおそわれたときの、二回のことです)。

そもしてもうひとつ。このブローチの持ちぬしがけがをした場合、対になるブローチはそのけがのていどにあわせて、ずっと赤く光りつづけるのです。つまりこのためにメリアン王は、「ライアンにけががない」ということまでをも、あわせて知ることができていたというわけでした(ずいぶんと、べんりでふしぎな品物があるものですね。王さまはどこから、こんなものを手にいれたんでしょうか？ なぞです)。

さて、王さまがライアンを心配する気持ちはよくわかるのですが、その方法がいけませんでした。せめてひとこと、ちゃんとライアンにことわっていればよかったです……。どうもライアンは、メリアン王のその(ゆきすぎるまでの)心配しようには、ちよつとうんざりきみだったようです(そして王さまも、そのことをわかっておりましたので、ライアンに気づかれないように、こつそりと魔法のブローチをぬいつけておいたというわけでした。うっかり口がすべって、けつきよくばれてしまいましたけど)。

「まーた、ぼくにだまってそんなことしてたの！ やめてよって、いつもいってるじゃない！ こないだだつて、ちよつとピクニックに出かけただけなのに、こつそりあとから、見張りにつけさせてたでしょ。ぼく、知ってるんだからね。ぼくの部屋にもだまってはいるし。こんどかってにそんなことしたら、もう、口きいてあげないから！」

さあたいへん。王子さまはすっかり、ごきげんななめのごようすです。王さまはなんどもあやまって、なんとかきげんをなおしてもらおうとがんばりましたが、ライアンはなかなかゆるしてくれません。

そんなとき。ライアンにそつと近づいて、その手をぎゅつとにぎる者がひとりいました。それはいったいだれでしょう？ それは、ほかでもありません。われらがロビーだったのです。

「ライアン。」

ロビーははじめて、ライアンを名まえだけでよびました(これはとてもいいなことでしたので、かれのことをよく知っているベルグエラムとフェリアルふたりは、とてもびつくりしたものだだったので

す)。

「もう、ゆるしてあげて。お父さんは、きみのことを思ってしまったんだから。きみがだいじでなければ、こんなことはしないんだから。」

ロビーのいう通りでした。親やたいせつな人たちに心配されるということ。それはとても、めぐまれていることなのです。こんなにしあわせなことはないのです。ライアンはロビーにいわれて、はっとそのことを思いかえました。それと同時に、ライアンはロビーがほんとうにじゅんすいな心を持っているのだということを、あらためて知らされたのです。ほんとうはライアンだって、王さまのことをほんきで怒っているというわけではありませんでした。ですから、じゅんすいなロビーにこういわれてしまっただけは、もう、王さまのことをゆるしてあげるしかなかったのです。

「ロビーには、かなわないや。」ライアンが「ふう。」と大きな息をついていいました。

「父さん、じゃあ、こんかいだけだからね。ロビーにめんじて、ゆるしてあげる。でも、これからは、ちゃんとぼくにいつてよね。」

これをきいたメリアン王の、うれしそうな顔といたら！

「おお！ ほんとかい？」メリアン王は大よろこびで立ち上がると、ふたたびライアンにだきついてきけんだのです。「ありがとう、ライちゃん！」

「ごらっ！ ちょうしに乗らないの！」ライアンがもういっぺん、王さまをひきはがしながらいいました。「これもみんな、ロビーのおかげなんだからね。ロビーがいなかったら、まだ、ゆるしてあげなかったんだから。父さん、ロビーにちゃんと、おれいをいいなよ。」

そこで、メリアン王ははじめて、ロビーの方を見ました(今までは、ライアンのことしか見えていないといった感じでしたから)。シープランドをたずねてきた、ベーカーランドの四人のウルフアの騎士たちが、血まなこになってきがしもとめていた人物。それこそが、今ここにいる、ロビーという名の黒のウルフアの少年だったのです。

メリアン王は急にまじめな顔つきになって、ロビーのことをまつすぐに見つめました。そして王さまは、背すじをしやきつとのぼしてし

せいを正すと、ロビーにかかるいえしやくをおくってから、いったのです。

「よくぞまいられた、きゆうせいしゅどのよ。」

その声は、いげんにみちていました。さつきまでのメリアン王とはまるでべつじんでしたので、ロビーはちよつと、びつくりしてしまつたものだったので（ほんとうなら王さまというのは、ほんらい、これでふつうのはずなのですが……。かみの毛はぼさぼさでしたし、服のボタンもずれておりましたので、ちよつと、さまにはなつていませんでしたけど）。

「ライアン王子と親しくしていただいて、れいをいうぞ。」王さまはそういって、深々と頭を下げました。ロビーは、えらい王さまにこんなに頭を下げてもらつて、すつかりきようしゆくしてしまいます。ですからロビーは、王さまよりもっとひくく頭を下げるのに、とてもくろうしました（なにしろ相手はひつじの種族の者でしたので、おおかみ種族の自分よりも、はるかに背がひくかったです）。

メリアン王がつづけけます。

「そうぞうよりも、はるかにお若いな。だが、ねんれいはかんけいな。たいせつなのは、そなたがなにを考え、なにをおこなうのかなのだ。」

王さまの言葉に、ロビーはちよつと考えこんでしまいました。自分にはなにをするべきなのか？　ちゃんと正しいことをおこなえるのだろうか？　それはまだ、ロビーにもはつきりとは、わかりませんでしたから。

「心配することはない。」そんなロビーの気持ちをさつしたかのよう

に、メリアン王が心をこめていいました。

「そなたは、自分の信じたことをすればよい。きゆうせいしゅとは、そういうものなのだからな。」

メリアン王の言葉は、ロビーの心の中に深くはいりこんできました。さすがは王さまだと、ロビーは思ったものです。その言葉には、くにおさめる者としてのひんかくと、ちせいが、そなわつていました（さつきまでの王さまは、そんな感じじゃありませんでしたけど

……)。ひとことひとことが、深く重く、きく者の心に伝わってくるのです。

「そなたたちの気持ちは、よくわかっている。」そしてメリアン王は、こんどは、その場にいる四人のウルファの騎士たちにむかって、同じく心をこめていいました。

「リュインとりでのかんらくは、とてもふこうなできごとであった。世界は大きく、変わっていくことになるうな。だが、それも、よきしっていたうちのこと。みなが力をあわせ、乗り越えるのだ。」

王さまの言葉に、ウルファの騎士たちもシープロンの者たちも、大きくうなずいてこたえました。

「午後早くにみなで話しあいの場を持てるよう、てはいしておいた。そなたたちも、つかれておろう。それまでしばし、休まれよ。」

「父さま、わたくしがみなさんをごあんないします。」メリアン王の言葉に、エレナが前に出ていいました。そしてそのエレナを見たメリアン王は、あれっ？ といった顔をして、こういったのです。

「ん？ なんだエル。おまえ、いつからいたんだ？」

王さま、それはひどい！ せつかく、いい感じでいげんを出しておりましたのに……。エレナはすっかりかんかんになって、メリアン王のことをぎろりとらみつけて、いいました。

「はじめからいます！ ほんとうに、兄さまのことしか見えてないんだから！ かほごにもほどがありますよ！ みつともないからやめなさいって、いつもいつているでしょう！ どうやらまだ、しつげがたりないみたいですよわね！」

エレナのそのはくりよくには、さすがのメリアン王もたじたじです。王さまは思わず逃げ出して、ひっしでエレナにべんかいしました。

「わー！ ごめん！ うそ！ うそだよエル！ じょうだんだつてばー！」

それから王さまは、大かいだんをかけのぼって二かいのはしらの影にかくれると、下にいるライアンにむかってさげんだのです。

「ライちゃん！ エルにいつてよー！ じょうだんなだからさー！ 助けてくれー！」

「あの……、さっきのりっぱな感じの王さまと、今の王さまと、どっちがほんとうのメリアン王なんでしょうか……？」ロビーが思わず、となりにいるベルグエルムとフェリアルふたりに、たずねてしまいました。

「いえ、あの……、わたしが知っているメリアン王は、こんな方ではなかったはずなのですが……」ベルグエルムがとまどいながら、こたえます。

「わたしの知っているメリアン王も、とてもりっぱな方だったはずですけど……」フェリアルも、すっかりこんわくしてしまっていました。

そのころ。かいだんの上ではエレナに見つかった王さまが、「ひええ！」はしらの影から飛び出して、ふたたび、ろうかのおくの方へと逃げていくところでした。

「ごめんなさい！ もうしませんから！ ゆるしてくれー！」
ライアンははずかしさのあまり、顔をまっ赤にそめて、そのままなにもいうことができませんでした。

それから旅の者たちは、午後いちばんの話しあいむけて、ひとまのきゆうそくを取ることができたのです。まずはライアンのていあんで、みんなはつかれたからだをいやすため、おふろにはいることにしました。

「シープロンドには、しぜんのおんせんがあるんだよ！ みんなでいろいろよー！」

そういわれて、みんなはお城からちよつとはなれたたてものの中につくられた、りっぱなおふろ場へとむかいました。みんなでおふろにはいるなんて、もちろんロビーは、はじめてのことでした。ですからロビーは、そのときのことを、このさきずっと、なつかしく思い出すこととなったのです（ほんとうはちよつと、人前ではだかになるのは

はずかしかつたのですが。そんなロビーのことをしり目に、ライアンはぜんぜん気にしないで、はだかでぴゅんぴゅん、おふろ場を走りまわっていました。

お湯はとつてもここちよく、旅でつかれたからだをぎゅんぎゅんいやしてくれました（このお湯にはけがをなおすとかべつな力がありましたので、とくにベルグエルムの肩のきずには、ききめまんてんだったのです）。そしてそのあとはごはんです。旅の者たちはきのうの夜、カピバラ老人の小屋でしこたまごはんを食べていましたが、まだ今日は朝ごはんをいただいていますでした（ライアンだけは、道のとちゅうでバターキャンディーをなめていましたが。それとルインビスの花も）。ですからみんな、もうすっかり、はらぺこになってしまっていたのです（とくに、前にもいいましたが、ロビーたちのおかみ種族の者たちはとつてもよく食べますので、輪をかいとおなかへっっていました）。

エレナのあんないで、みんなは食堂に集まりました。出された食べものは、ごうかけんらん！ ひつじの種族であるシープロンたちは、肉を食べることがありませんでしたので、それらはすべて、植物の根や、実や、くき、葉、たね、そういったもので作られていましたが、とてもそうは思えないくらい、じつにぜいたくな料理ばかりでした（もちろんかれらシープロンの者たちは、ふだんからこんなにぜいたくな食事をしているわけではありません。かれらのひかえめなせいはいか、食たくにもよくあらわれていたのです。こんなにごうかな食事を用意したのは、つまり、たいせつなお客さまであるロビーとウルフアの騎士たち、みんなのためでした）。

「うわあ、すごい！」ロビーは思わず、そういつてしまいました。目の前にならんでいたのは、自分が今までに見たこともきいたこともない料理ばかりだったのです。こなをこねて作った、スパゲッティやラビオリにいた料理があり、色とりどりのやさいのうつつわにとろりとしたスープをつめこんだ料理があり。中にはおおかみ種族のかれらのために、やさいをねりあわせてステーキみたいなかたちに作った料理までありました（そしてこれはじっさい、ほんとうのステーキみた

いな味がするのです。ロビーはとてもびっくりしたものでした。

「どうぞみなさん、めし上がってください。おかわりもたくさんありますので。」

「はいっ！ いただきますー！」

エレナの言葉に、ウルファのみんなはがつがつ食べました（ほんとうにかれらのおかみ種族の者たちは、よく食べるものです。こんかいはとくべつですからしかたないとしても、これではしばらく、ダイエットの必要がありそうですね）。

「あつ、そうだ。」とここでライアンがいました（かれはごはんもそこそこにすませると、さっさとデザートのケーキを食べていました。しかもホールケーキをまるごと！ ライアンにとってはこっちの方が、メインの食事のようですね）。

「ねえ、ロビーにあれを出してあげてよ。さっきいったやつ。」

ライアンが、そばにいるはいぜんがかりのシープロンの女の人に、いいました。いったいなんだろう？ そう思っていたロビーの前に出された、そのお皿に乗っていたものは……（読者のみなさんには、もうおわかりですよね）、そう、山もりにもりつけられた、ルインビスの花だったのです！

「まだまだいっぱいあるからね。たっぷり食べてよ。」ライアンはそういって、ケーキの大きなかたまりをばくり！ 口にはごびました。

「は、はは……。ありがと、ライアンさん。」ロビーはもう、かくごをきめて、にが笑いするしかありませんでした。

さてさて、みんなはこんなふうな時間をすごし、そしてあつというまに、午後の話しあいの時間となったのです（せいにかくには午後一時。子ぎつねのこくげんのころでした）。

みんなが集まったのは王宮の二かいのおくにある、ごぢんまりとした部屋でした。ここはもっぱら、かいぎなどの話しあいをおこなうために使われている部屋で、とびらをしめてしまえば、そこには中の話し声などは、ぜんぜんもれなかったのです（もつとも今までおこなわれたかいぎで、そこにもれてはこまるような話しあいなどは、ほとん

どありませんでしたけど。ライアンのたんじょう日になにをプレゼントするか？ 毎年ひみつのかいぎがおこなわれるくらいでした。もちろん、そのかいぎのしゅさい者はメリアン王です。

部屋には大きなテーブルがひとつとたくさんのいすがおかれていて、部屋の中はそれでほとんどいっぱいでした。ロビーのためにとくべついい席が用意されていましたが、ロビーはそれをことわって、旅のみんなと同じならびの席にしてみました。

やがて席はどんどんとうまっていききました（ロビーたちはとくべつに早くきていたのです）。シープロンの四人のそつきんたち。そしてそれにつづいて、なんんかの新しいシープロンの人たちもやってきました。その中でとくにいんしょう的な人がいました。きれいなはちみつ色の服を着た、ひとりの美しいシープロンの女の人です。ねんれいは、二十だいの前半くらいでしょうか？ すらりとしたからだに、ととのった顔立ち。ふちのないすてきなデザインのめがねをかけていて、とても知的な感じのする人でした。

「わっ！」その女の人が部屋にはいつてくるなり、ライアンの表じょうが変わりました。いったいどうしたというのでしょうか？ そうしているあいだに、その女の人がライアンのもとへとやってきました。そしてかいこういちばん。その人はきついものいいで、ライアンにいったのです。

「王子、またお菓子を食べすぎていますね！ いつもいつているでしょう！ ケーキを食べすぎなのもわかってますからね。また虫歯になっても、知りませんよ！」

ロビーはその人のあつとう的なまでのほくりよくに、思わずちぢこまってしまいました。見た目はとってもきれいでしたのに、どうやらかなり、きびしい人のようです。

「わかってるつてば！ ちゃんと歯みがきしてるから、へいきだよ！」ライアンがあわてて、いいかえしました。そしてそのあと、ライアンは顔をそむけて、小声でそつとつぶやいたのです。

「……あいかかわらず、口うるさいなあ。」

「今、なにかいいましたか！」すかさずついきゆうするかのじよに対

して、ライアンは背すじをぴん！ とのぼして、いいました。

「いえっ！ なにも！」

そして（話をそらせるために）ライアンは、ロビーのことを、その人にしようかいしたのです。

「リア先生、この人がさがしてた人なんだ。名まえはロビー。」

とつぜん話をふられたロビーは、あわてていすから立ち上がって、ぺこりと頭を下げました（そそうをしたら、怒られそうでしたから）。

「ロビー、この人はリア先生。ぼくのかていきょうしなんだよ。」ライアンがつづいて、ロビーに説明します（なるほど、この人は先生だったんですね。どうりで、知的な感じがすると思っただんです）。

「まあ、あなたがきゆうせいしゆなのですね？ こうえいですわ。わたしは、レシリア・クレツシエンドと申します。どうぞよろしく。」

リア先生というのは、もちろん、ライアンがかのじよのことをよんでいるニックネームでした。レシリアはライアンのせんぞくのかていきょうしとして、ライアンがまだ小さかったころから、ずっとかれのbenきょうを見てきたのです。もつとも、benきょうだけならまだよかったです、かのじよはいわば、ライアンの「しつけやく」としてのやくわりが大きいのでした。そのしごとぶりはみなさんに見ていただいた通り、とてもきびしいものでしたので、ライアンはすっかり、レシリアのことががてになっていたので（メリアン王ですら、かのじよには頭が上がらないほどでした。ほんとうは王さまは、今よりもつと、ライアンのことをあまやかしたかったのですが。レシリアとエレナの、ふたりのとつてもこわしい「かんしやく」に見張られていては、なかなかそうもいきませんでした。それでもじゆうぶん、あまやかしていたんですけど。そのため今日もエレナに、こつびどくしかられてしまいましたよね）。

「リア先生も、話しあいにはさんかするの？ めずらしいね。今日は先生、お休みの日じゃなかったの？」

ライアンがいました。ライアンのいう通り、レシリアはふだんは、お城からほど近い自分の家に住んでいて、ライアンのbenきょう

(そのほか)を見るために、お城まで出かけてくるのです。わざわざお休みの日にまでかのじよがやってきたのは、それほどのりゆうがあったことでした。

「メリアン王によばれたのです。たいせつな話しあいがあるから、ぜひきてほしいと。もうあらかじめ、話の内ようはききましたけど。」レシリアはそういうと、急にとてもしんけんな顔になって、こうつぶやきました。

「王子、今日の話しあいは、王子が思っている以上に重要なものになりますよ。わたしは、わたしのするべきことをするつもりです。」

レシリアの言葉には、なにか深い意味がこもっているようでした。そしてかのじよのいう通り、この話しあいがすっかりかたづくころには、かのじよにはとても重大なやくわりが、まかされることとなるのです。

さあ、それでは話しあいのはじまりです。読者のみなさんも、じゅんびはよろしいですか？(トイレにいくのなら今のうちですよ。)席について、話しあいの場に加わりましょう。

小さめの部屋の中は、人でいっぱいになりました(せいにかくにはウルフアの騎士たちが四人、ロビーとライアン、シープロンのそつきんたちが四人、レシリア先生、ほかにシープロンの人たちがあわせて三人の、ごうけい十四人の人たちでした)。そしてほどなくして、さいごのひとり。この話しあいのしゅきい者である、メリアン王ほんにんがやってきたのです(王さまは、こんどはきちんとしたかつこうをしていて、かみもきれいととのえられていました。ですからロビーはさいしょ、だれかほかの人がはいつてきたのかと思ったほどです)。

メリアン王の表じようは、とてもけわしいものでした。それはこの話しあいが、けつして楽しいものになるはずがないと、わかっていたからでした。そして王さまは、テーブルの正面の、みんなからいちばんよく見えるいちばんいい席につくと、ついにその重い口をひらいたのです。

「じたいはきわめてしんこくなものである。」

メリアン王はよけいな前おきもなしに、そう切り出しました。このようないじな話しあいときには、かえって、かくしんの部分から話しはじめの方がよかったです。

「まずは、ベーカーランドからの客人であるベルグエルムどのに、これまでの旅のことについて、くわしくきかせてもらうことにする。」

ベルグエルムが立ち上がり、みなにいちれいしました。そしてベルグエルムは、これまでにみなさんにお伝えしてまいりました旅のできごとのこともふくめ、今までの道のりのことを、みんなにすっかり話してきかせたのです。シープロンドを出発してからロビーのほらあなにいたるまでの道のりにはじまって、かなしみの森の精霊の川のこと。ガイラルロックたちとの戦いのこと。セイレン大橋の上での黒騎士たちによるしゅうげきの場面では、みんなはとてもおどろき、部屋の中はどよめきにつつまれました。そしてカピバラ老人のこと。セイレンのみずべでのひげきの場面では、たくさんの者たちの目になみだがあふれました。そしてさいごに、リュインとりでのできごとのことです。ここではベルグエルムのかわりに、ハミールが、そのあつき胸のうちを語ってきかせました。

ふたたびベルグエルムがつづけます。

「みなさんもごしようちの通り、リュインとりでがうばわれたということには、とても重大な意味があるのです。たんに、とりでがひとつ落ちたというだけの話ではありません。リュインのとりでは、南の地のそのあたりいったいを見張るための、大きな目のやくわりを果たしていたのです。そのとりでがうばわれた今となっては、かの地はもう、ワットの黒の軍勢の者たちによって、すっかりはいされてしまったと考えるべきでしょう。それほどに、このとりではたいせつなものであったのです。」

ベルグエルムの言葉に、みんなはそろってとなりの者と言葉をかわしあいました。話しあいのさいしょにメリアン王がいった通りでした。じたいはみんなが思っている以上に、しんこくなものとなっていたのです。

メリアン王が、そんなみんなのざわめきをせいするように手をかざ

して、ふたたび、かいぎのしきをとっていいました。

「ベルグエルムどののいう通りである。今や黒の軍勢は、数の力で、このアークランドの多くの地をすっかりしはいつてしまった。リュインとりでの力は、南の地だけにとどまるものではない。南の地から、ここ北の地にいたるまでの道のり。その安全をも、かのとりでは守っていたのだ。」

四人のウルファの騎士たちは、みな、いちように顔をくもらせました。かれらが通ってきたのは、リュインのとりでからこのシープロンドへとつながる、南の街道でした。その街道を安全に通ってこられたのも、リュインとりでをきよてんとするベーカーランドの者たちが、黒の軍勢に対して、にらみをきかせつづけてくれているおかげだったのです（げんかんにとつてもこわそうな番犬がいて、こちらをにらみつけていたら、だれだつてその家に近づこうとはしませんよね。それと同じことなのです）。

メリアン王がつづけます。

「こうなればこのあたりの土地とて、けつして安心していられるというものではない。げんに、ベルグエルムどのの話にもあつた黒騎士たちのしゅうげきは、われらシープロンドの者たちにとつても、大きな意味を持つてきごととなつた。」

メリアン王の言葉の意味を、ベルグエルムはすぐにかいしました。かれはきのうからずっと、あの黒騎士たちのしゅうげきのことについて、考えをめぐらせていたのです。そしてメリアン王もまた、そのことを深く受けとめていました。黒騎士たちと戦つたのはだれでしょう？ ベーカーランドの白の騎兵師団であるベルグエルムとフェリアル。黒のウルファであるロビー。そして……、そう、白きシープロンであるライアンでした。とにかく、黒の軍勢のおそろしさ、いやらしさとききたら、それこそ、なみたいていのものではないのです。かれらにすこしでもはむかうようなことをすれば、かれらは大勢で、そのしかえしにやってくるのでした（ひきようきわまりありません）。

メリアン王の思いは、そこにありました。つまり、ワットの者たち

が白きシープロンの者たちのことを、「自分たちにはむかつた敵」と見なして、シープロンのみやこであるこの地を、こうげきしにやってくるかもしれないということなのです（このあたりにいる白きシープロンであれば、シープロンドの住人であることは、いわれるまでもなくわかることでしたから）。

ベルグエルムはライアンの方をむいて、ぐっとくちびるをかみしめました。とんでもないことをしてしまった……。今はとにかく、ライアンとすべてのシープロンのみなさんに対しての、おわびの気持ちで、心がいっぱいになってしまっていました。

「わたくしの考えがいたりませんでした……」ベルグエルムはそういっているから立ち上がり、その場にいるみんなに深く頭を下げて、あやまりました。かれは、騎士の中でもとりわけまじめなせいにかくでしたので、そのせきにんを重く感じて、心は今にも、おしつぶされそうなくらいだったのです。

「なにいつてるの。ベルグのせいじゃないよ！」ライアンが、そんなベルグエルムのことをかばっていました。

「運が悪かったんです。だれのせいでもありません。ぼくたちはみんな、さいぜんをつくして戦ったんです。ぶじでいられたのが、ふしぎなくらいでした。」

ライアンも立ち上がって、それから、その場にいるみんなにせいっぱいの気持ちをこめて、そうつぶやきました。そしてみんなも、そんなライアンの気持ちをよくわかっていたのです。もちろん、ベルグエルムの気持ちも。ライアンのいう通りです。これは、だれのせきになんでもありません。ワットの者たちに見つかってしまったことが、ただただ、不運だったのですから。

「気になされるな、ベルグエルムどの。」メリアン王が、ベルグエルムの気持ちをくんでいいました。

「ライアン王子のいう通りだ。これは、だれのせいでもない。それに、そのことにかんしてなら、もとより、心配にはおよばぬ。」

メリアン王はそういって、（ふたつとなりの席の）ひとりのシープロンの男せいに目をむけました。その人はもう、かなりのねんぱいで、

八十さいくらいでしょうか？ とてもかくしきの高い、それでいてそれほどよく見える、ゆつたりとしたガウンをまとって、肩からは、大きなうすい水色のたすきをかけていました。そして頭には、ほそい金色の糸をいくつもたばねた、きれいなかんむりをまいていたのです。

このような服そうをした人たちのことを、みなさんもよく知っていることと思います。それぞれのくによつてそのかつこうはさまざまですが、かれらにきょうつうしていること。それは、神さまにつかえる人であるということでした。つまりこの人は、教会のしきようさまだったのです（しんぷさま、ぼくしさま、おぼうさま。いろいろな人たちがおりますが、しきようさまというのは、その中でもとくにえらい人たちなのです）。その教会はシープロンドの北門からさらに高くのぼった場所、タドウーリ連山の入り口のところにあって、そこはシープロンドの人たちにとつて、とてもたいせつなところでした。その教会のしきようさまが、このだいじな話しあいのために、とくべつにやってくるというわけだったので（もつともロビーにはいわれるまで、そんなにえらい人だつたなんて、ぜんぜんわかりませんでしたけど。あ、おじいちゃんもいるんだ、くらいにしか思っていないかつたのです。ちよつと、ばちあたり？）。

「その通りです、王さま。」しきようさまが、王さまの目くばせにこたえていいました。

「わがくには、神さまによつて守られております。手出しなどしようなものなら、たちまち、かえりうちにあうだけでございます。」

そしてじつさい、そのしきようさまの言葉がまことに正しいものであるということ、のちにワットの者たちは、身をもつて知ることになったのです。かれらはみな、いちように口をそろえて、こういったものでした。

「シープロンド？ やめてくれ！ もう、あそこだけはこりごりだ！ かりに、どんな宝の山があつたとしても、おれはもうあのくにはいれないぞ！ いくらアルファズレドへいかのごめいれいだとしたつて、できないことだつてあるんだ！」

かれらがシープロンドに齒が立たなかつたわけ。それはこの物語

のおしまいに近い方で、語られることになります。さきにひとつだけ、読者のみなさんを安心させておきたいので、あらかじめしゃべってしまいますが……、シープロンドはまったくのむきずのまま、その美しさをとわにたもちつづけることになりました。そのわけはいずれわかりますのであせらずに。今はゆつくりと、物語のつづきを楽しんでください（まだ、話しあいのとちゆうですから）。

「ルエルしきよのいう通り。われらのことは心配せずともよい。」メリアン王がいました。ルエルというのが、しきよさまの名まえのようです（ちなみに、ルエル・フェルマートというのがしきよさまの正しい名まえでした。かれはこのあたりいつたいの土地の中でもっとも名高い、フェルマート家の出身で、このシープロンドではかれのことを知らない者は、ひとりとしていなかったのです。そしてかれは、若いころさまざまな冒険の旅に出たことでも知られていました。きかいがあつたら、そのうちのひとつかふたつの物語のことを、いつかみなさんにもごしようにできればと思います）。

「そなたたちは、まこと、ゆうかんであつた。このアークランドの、ほこりだ。あらためて、れいをいうぞ。」王さまはそういって、旅の者たちに頭を下げてくださいました。

ふさぎこんでいたベルグエルムは、この王さまのたいどをとともりつぱだと思いました。そしてそれと同時に、かれはメリアン王に、心からかんしゃしたのです。

「とくに、ライチャ……、ごほんっ！ ライアン王子。」おつとあぶない！ うっかり地のままのメリアン王の方が、顔を出してしまうところでしたね（せつかく、ベルグエルムが感動しているところでしたのに）。

「そなたもじつに、よくやってくれた。こうしてぶじに、ウルファのきゆうせいしゆどのをつれ帰ってきてくれたのだからな。ほんとうにすばらしいはたらきであつた。まこと、言葉でいいあらわすことができないくらい、りつぱであつた。みなも、そう思うであらう？」

王さまはそういって、シープロンのそつきんたちを「ん？ ん？」と見まわしました（王さまはもう、ライアンのことをほめてあげたくて

しかたなかったのです)。ですけどそつきんたちは、半分あきれ顔のまま、「王さま、それはよろしいですから、早くお話のつづきを……」といって受け流すばかりでした(かれらもこんなときの王さまのあつかいには、もう、なれっこになっておりましたので)。

王さまは「ごほん。」とせきばらいをしてごまかしてから、ふたたび話をつづけました。

「さきの話の通り、南への道はワットの者たちにはいさされてしまった。きゆうせいしゆどのをぶじにベーカーランドへと送りどけるのに、もはやこの道は使えぬ。」王さまはそういって、レシリアの方を見ました。レシリアはそれにこたえて、静かにうなずきます(どいう意味があるのでしょうか?)。

「すなわち、旅の者たちはべつの道をゆかねばならない。それは、西への道だ。」

「西の道……」

王さまの言葉に、ウルファの騎士たちはみんなそろってさげびました。かれらはその言葉の意味を、よくりかいしていたのです。西への道。それは、とぎされた道、または魔女の道などとよばれている、とてもおそろしい道でした(そのほか、死者の道だとか、帰らずの道だとか、とにかくふきつな名まえばかりがついていたのです)。

しかし、ここ北の地で西の道のことをよく知っている者は、ほとんどといっていいくらいいませんでした。それはつまり、北の地に住んでいる者たちは、よほどのようじがないかぎり、南の地へと出かけていくようなことはありませんでしたし、南へゆくにしても、かならず、同じ安全な道を通っていくからなのです。それがすなわち、南の街道でした。その安全な南の街道が、今やワットの手に落ち、とても危険な道へと変わってしまったのです。

敵の手に落ちたその街道をそのまま進んでいくということは、ひみつの旅の中にあるロビーたちにとって、まずいこときわまりありませんでした。かくじつに自分たちに害をなさんとしている者たちが大勢でじろじろ見張っているだろう道を通って、なん十マイルも進んでいくということ、考えてみてください。とても危険なことであると

いうことが、わかっていたただけかと思えます（ガイラルロックたちの岩場をこつそり通りぬけようとするのとは、こんどはわけがちがうのです）。

ですがそれと同じくらい、西の道も危険であると思われました。なにしろこの道は、もうなん十年と、だれにも使われていないような道だったのですから。そのりゆうは今となつては、なにが正しくてなにがまちがっているのか？ よくわからなくなっていました。いちばんたしからしいと思われるうわさのひとつが、その地に住むという、おそろしい魔女のうわさです。もうなん千年と西の土地に住んでいるということでしたが、そのすがたを見たという者は、北の地にも南の地にも、だれもいませんでした。ですから、「ぬまの中の巨大な塔に住んでいる」だとか、「ぬまに住むおそろしいかえるの種族の者たちのことをしたがえて、さまざま悪さはたらいっている」だとかいううわさも、どこまでがほんとうのことなのか？ だれにもわからなかったのです。

とにかくひとつだけいえることは、その道をゆくことは、まったくのかけだということでした。もしかしたらすんなり通りぬけられて、ベーカールランドまでたどりつけるかもしれない。それとも南の街道をゆくよりも、もつと危険な目にあつてしまうかもしれない。それはだれにも、わからないことでした。

このようなことを、ウルファの騎士たちは知っていたのです。そしてもちろん、西の道のことを口にしたメリアン王も、そのことはよくわかっていました。

「そなたたちの心配はむりもない。西への道は、まさに大きなかけといえよう。」メリアン王がウルファの騎士たちにいいました。「だが、きゆうせいしゆどのの身が黒の軍勢の手に落ちれば、そのときこそ、このアークランドのきぼうの光は、かんぜんについでしてしまうことであろう。それこそ、われらをもつともさけなければならぬことだ。」

メリアン王のいう通り、西への道は、たしかに大きなかけでした。しかし、南への道がひじょうにあやういものとなつてしまった今。口

ビーの身を守るためには、それにかけるよりほかはなかったのです。そしてメリアン王の考えは、それだけではありませんでした。

「旅の者たちよ、そなたたちは、ここに四人でやってきた。」メリアン王がつづけます。ここでの四人とは、ウルフアの四人の騎士たちのことをさしていたのです（つまり、ベーカーランドを出発したときの、ベルグエルム、フェリアル、ハミール、キエリフの四人です）。

「だが、帰りの道は、そなたたちは、四人ではともにゆけぬ。」

メリアン王の言葉は、いがいなものでした。四人いっしょでは帰れない？ それはどういふことなのでしょう？ ウルフアの騎士たちは、そろって顔を見あわせました。

「つまり、きゆうせいしゆどのを送りとどける者たちと、きゆうせいしゆどのを敵の目から遠ざけるための者たち。ふたつに分かれて、そなたたちはベーカーランドへとむかわなければならぬ。」

なるほど！ つまり旅の者たちをふたつに分けて、そのうちのひとつのグループを、敵の目をひきつけるためのおとりにしようということなのです。これはよい考えだと、みんなは思いました。ですが、このけいかくには、大きな問題もあつたのです。それは、おとりとなる者たちの身を、とても大きな危険にさらしてしまうということでした。

「まこと、こんかいの旅の中でワットの者たちに出会ってしまったことは、不運なできごとであつた。」メリアン王がふたたびつづけます。「しかしわれらは、それをわれらにとってよいほうこうに、りようすることができよう。きゆうせいしゆどののそんざいには、かれらもまだ気づいてはいないと思うが、北のこの地にベーカーランドの白の騎兵師団の者たちと黒のウルフアがいたということは、かれらに大きなきようみを与えたはずである。かれらはそなたたちのことを、さがしてまわることであろう。われらはそれを、さか手に取るのだ。」

「つまり、きゆうせいしゆたるロビーどのは、敵の目からのがれるために西の道へ。そして敵の目をひきつけるための者たちは、南への道をゆくということなのですな？」

そうたずねたのは、ウルフアの若き騎士、ハミールでした。ハミール

ルのといかけに、メリアン王は静かにうなずいてこたえます。

「さよう。かれらに、旅の者たちは南へ進んだのだと思わせるのだ。ウルファの者たちと、ひとりのシープロンとでな。だが、南へ進む者たちには、そうおうの危険がついてまわることとなる。敵の目をあざむくためには、いちどそのすがたを、わざと、敵に見せつける必要すらあるのだ。」

メリアン王の言葉に、部屋の中にまたどよめきが起こりました。南への道は、みんなが思っている以上に危険なものであったのです。そんな中で、若きハミールとその友キエリフのふたりだけが、あたりのざわめきをよそに、とてもおちついていました。そしてふたりは、おたがいに顔を見あわせて、その大きなけついをともにたしかめあうと、力強く、メリアン王にいったのです。

「王さま。われらはもとより、かくごをきめております。南への道のりをゆくそのおやくめ、このハミールとキエリフにおまかせください。」

ハミールとキエリフは、自分たちのみちびき手であるベルグエルムとフェリアルのために力をつくし、その手助けをするという、みずからその騎士としてのやくわりのことを、よく心得ていました。そしてもちろん、きゆうせいしゆのことをぶじにベーカーランドまで送りどけるといふ、そのにんむの重要さも。ですからかれらは、南への道をゆくこの大いなるやくめは、まさに自分たちにこそふさわしいものであると、すぐりにかいたのです（さらに、南への道のりをゆけば、そのさきにあるリュインとりでのようすもわかるかもしれません。レイミールのことも、なにかわかるかもしれないませんでした）。危険をおそれぬ、その強いかくご。そして、友やくにのことを思う、その気高きせいしん。南への道をゆくそのにんむに、かれらほどてきした者たちもないことでしょう。

ハミールとキエリフは、そろってベルグエルムとフェリアルのことを見ました。そして同じく、かれらベルグエルムとフェリアルのみならず、この若き騎士たちのことをしんらいし、りかいている者たちもいなかったのです。たのむぞ。ベルグエルムとフェリアルのみならず、

たりは、ただだまって、ふたりの若き騎士たちにうなずいてみせました。

そんなウルファの騎士たちのかたいけつそくに、メリアン王はとても感心して、心からの敬意をこめていいました。

「そなたたちの思い、このメリアン、しかと受けとめた。そなたたちは、まことの勇者だ。」

メリアン王はそういって、ウルファの騎士たちにふたたび、深々と頭を下げました（そしてそれにつづいて、その場にいるシープロンの者たちも、みんなそろって騎士たちに頭を下げました）。

「だが、そなたたちだけを危険な目にあわすわけにはゆかぬ。」

そして王さまは、ここである人物に、席から立ち上がるようにと伝えました。それにこたえて立ち上がったのは……、あのレシリア・クレツシエンドだったのです。

「みなに、レシリア・クレツシエンドをしようかいする。よく知っている者もいるだろうが、レシリアはライアン王子のかていきようしであり、そしてなにより、しぜんの力をかりるそのわざでは、わがくにもいちばんとっていいほどのうでを持っているのだ。」

しぜんの力をかりるわざのことについては、読者のみなさんもすでによくごぞんじですよ。これまでの旅の中でもライアンがたびたび使った、あのわざのことです。雨の力をかりてすがたを見えにくくしたり、空気の力をかりてきずぐちをおおったり（それから風のたつまきのこうげきも）。ライアンが使ったのは、そのほんの一部分にすぎませんでした（もつともライアンも、そんなに多くのわざを使えるわけではありませんでした）。そのわざをレシリアは、もつとじょうずに、しかもたくさん、あつかうことができるというのです（そしてじっさい、あつかえました）。

「南へと進むその道のりには、かのじよのうでが大いにやくに立つことであろう。わがくにのだいひょうとして、このたいせつな旅をまかせるのに、レシリアほどふさわしい者もおるまい。」

話しあいの前にレシリアのいっていた、「わたしはわたしのするべきことをするつもり」という意味深い言葉は、こういうわけからでし

た。レシリアはこの話しあいのはじまる前に、王さまからあらかじめ、そのとくべつな旅の内ようのことをきかされていたのです。そしてレシリアもまた、このアークランドのみらいを思う、ぜんなる住人たちのうちのひとりでした。

「南のくにのみなさん。この旅にはまさに、このアークランドのみらいがかかっております。アークランドに住む者のひとりとして、そしてこのシープロンドのだいひょうとして、みなさんとともにゆけることを、わたしはひじょうにこうえいに思います。」

レシリアは力強く、はつきりとしたくちようでいいました。そしてもちろん、この思わぬ心強き仲間とうじようを、われらがウルフアの騎士たちは、大いにかんげいしてむかえたのです。

「こんなにありがたい話もあります。」ともに南への道をゆくハミールが、こうふんぎみにいいました。

「こちらこそ、ぜひともよろしくお願いいたします。」キエリフもまた、ペこりと頭を下げてこたえました。

「きゆうせいしゆどのとレシリアをいれて、これでそなたたちは六人。」メリアン王がいました。「四人のウルフアの騎士たちは、それぞれふたりずつに分かれて進むのであるから、西への道と南への道、今はそれぞれ、三人ずつとなるな。」

これはすなわち、西へのひみつの道をゆく、ベルグエルム、フェリアル、ロビーの三人と、南への道をゆく、ハミール、キエリフ、レシリアの三人、それぞれのことをさしていたのです（西への道にベルグエルムとフェリアルふたりがそろってむかうことにしたのは、たいせつなきゆうせいしゆであるロビーの身を守るためには、やはり、白の騎兵師団の隊長と副長であるベルグエルムとフェリアルふたりが、そろっていった方がよいだろうという考えからのことでもありません）。

「ひそかな旅をゆくには、これでちょうどよい人数かもしれないが、安全のためには、それぞれもうひとりずつ、ともに加える方がよからう。」メリアン王がつづけます。

「もとより、敵の目をあざむくためには、南へ進む者たちは、きたと

きと同じく、四人で進む必要がある。さいわいにして、わがくには、ゆうしゆうなる者たちが大勢いる。みな、このアーケランドをあいする者たちばかりだ。進んで、協力してくれることだろう。」

それから王さまは、四人のシープロンのそっきんたちの顔を、じゅんばんに見まわしながらいいました。

「ともにゆく者として、ふたり。だれか、名のり出る者はないか？ そなたはどうだ？ ルースアン。」

「わたしでよろしければ、いつでも出発する用意はできております。」王さまにいわれて、ルースアンはほこらしげにこたえました。そしてその気持ちは、ほかのシープロンの者たちとても、みな同じであつたのです。この旅はとても危険なものでしたが、それと同時に、とてもめいよな旅でもありました。それにさんかできることは、めいよとほこりをとくにたいせつにするウルファでなくとも、だれにとつても、ほこらしいことであつたのです。

さて、そんな話をしていたおりもあり。王さまとそっきんたちとのそんなやりとりを、まったくとうとつに、しかもまつぶたつに、うち破るものがありました。王さまもそっきんたちも、そのあまりのいきおいに、そのまま部屋のかべにまで、吹き飛ばされそうになつてしまつたくらいだつたのです。

「ちよーつと、待ってえーつ！」

部屋のかべをびりびりとゆらすほどの大声！ いったい、声のぬしはだれでしょう？（読者のみなさんには、だいたいおわかりかと思いますが……）

それは、この物語のはじめからこんかいの旅に加わっている人物。このシープロンドからウルファの騎士たちとともに、ロビーのことをむかえにいった、そのたつたひとりのとくべつな人物。そう、それはつまり、このシープロンドの王子さま、ライアンだつたのです。

「なにをかつてにきめてんのさ！ なんてぼくが、人数の中にはいつてないの！」

そうなのです、メリアン王ははじめ、旅の者たちは六人といいました。ロビーと四人のウルフアの騎士たち、それにレシリアです。たしかに、全部たしたら六人でした。ということはライアンのいう通り、ライアンのことが、はじめのその人数の中に数えられていないのです。しかも今またふたり、新たに加えようとしているのは、シープロンのそっきんたち。自分ではありません。ですからライアンは、こんなにも怒りました（それに王さまは、シープロンドのだいひょうとしてレシリアのことをしようかいました。このこともライアンのごきげんをそこねた、りゆうのひとつだったのです。なんとたつてライアンは、シープロンドの王子さまなのですから。その自分がだいひょうにえらばれなかったことが、ライアンには、ふまんでなりませんでした。うーん、なんてわがままな……）。

さて、わが子のごきげんを（またしても）すつかりそこねてしまったメリアン王。王さまはおたおたしながら、いっしょうけんめいべんかいしようとしてめしました。

「だ、だつて！ ライちゃんはかなしみの森まで、きゆうせいしゆどのをむかえにいくだけ、つてやくそくだったじゃないか！ それならそんなにあぶなくないと思ったから、父さんもおれてあげたのに。こんどの旅は、それよりもつと危険なんだよ？ これ以上、ライちゃんを危険な目にあわせることなんて、父さんにはできないよー！」

ああ、せつかくりつばな王さまとして、話しあいのしきをとつていたメリアン王でしたのに……。とうとうみんなの前で、なさない方のすがたをあらわしてしまいましたね。しかし、話がライアンのこととなつてはしかたありません。だいじな人を危険な目にあわせたくないと心配する気持ちは、わたしたちにも、よくわかりますから。ですけど、こんかいばかりは、王さまにもライアンのことをとめることなどは、できそうにありませんでした。

「危険なのは、みんなだつて同じでしょ！ ぼくだつて、みんなの力になりたいんだ。ウルフアの騎士さんたちのことも、考えてあげてよ！」

ライアンはそういって、ウルフアの騎士たちのことをゆびさしまし

た。さて、われらが騎士たちは、いったいどうしたらいいのでしょうか？ ベルグエルムがこまり顔で、みんなにいいました。

「あの……、わたくしどもにとつては、心強い仲間がともなつてくれることは、まことにありがたいのですが……、しかし、シープロンのみなさんのうち、だれを仲間として加えるのか？ それは、わたくしどもがきめられることではありませんので……」

ウルファの騎士たちはみな、とてもまじめでしたから、こんなときにどう受けこたえしたらよいものか？ わからずに、すっかりとまどつてしまつていたのです。こうなつては、もうだれが、この場をまとめたらよいのでしょうか？（メリアン王もたじたじでしたし、シープロンのそつき人たちも、頭をかかえているばかりでしたから。レシアでもルエルしきようさまでも、ほかのシープロンのみなさんでも、このせんさいな問題をかいけつすることは、むずかしいみたいです。うーん。）

たよりとなるのは、やつぱりかれました。きつとかれの言葉なら、だれもがなつとくするはずです。なにせかれは、この物語の主人公で、このアークランドのきゆうせいしゆなのですから。そう、それはもちろん、ロビーでした。

「あの……、ぼくがこういつては、なんなんですけど……」ロビーがおそろおそろ、口をひらきました。「ライアンさんには、人の心をまとめ上げる、ふしぎな力があると思います。ぼくたちは、ここにくるまでの道のりの中でも、なんども、ライアンさんに助けられました。それは、ベルグエルムさんも、フェリアルさんも、同じに感じていらつしやると思います。だから、その、うまくいえないんですけど、ぼくたちには、ライアンさんが必要なんです。これからの道のりの中で、かれの力は、きつと、ぼくたちの大きな力になつてくれると思う。」

ロビーの言葉をきいて、みんなはただただ、だまつてしまいました。ロビーはだんだん、不安な気持ちになつていきます。よけいなことをいつてしまったのだろうか？ ロビーはみんなの顔をおそろおそろ見渡しながら、いすの上で小さくちぢこまつてしまいました。そしてそんなとき。この部屋のちんもくを破つたのは、この部屋の中でいち

ばん年上の、あの人だったのです。

「ほっほっほ！　どうやら、王さまの負けのようすな。」

声のぬしは、このくにの中でも王さまとならぶくらいにえらい、ルエルしきようさまでした。そしてしきようさまは、その場の空気を大きな笑い声で吹き飛ばすと、みんなにむかっていったのです。

「ただ今のお言葉は、きゆうせいしゆどののお言葉です。だれに、はんたいすることができましよう？　じつにすなおで、まごころのこもったお言葉ではありませんか。」

しきようさまの言葉に、ライアンも大きな声でさんせいしました。

「しきようさまのいう通りです！　だれか、もんくのある人いる？」
ライアンはそういって、みんなの顔をぎろぎろにらみつけます。

こうなつてはもう、口をはさめる者などは、だれもいませんでした。みんなはただだまって、首をぶんぶん、横にふるばかりだったのです（レシリアだけは頭をかかえておりましたが）。

そんなみんなのようすを見て、しきようさまがふたたび、メリアン王にいいました。

「王さま、ライアンさまのご意志はかたいようすな。もはや運命は、だれにもとめられないのです。それにむかしから、『かわいい子には旅をさせよ』と申します。ライアンさまも、鳥かごの中の暮らしから飛び出して、ご自分の足で、歩きたくなってきたということでございますな。」

しきようさまにこういわれては、メリアン王ももう、なにもいいかえすことなどはできませんでした。王さまはただただ、「ぐむむむむ……！」と言葉を飲みこんで、その両のこぶしを、ぎりぎりのにぎりしめるばかりだったのです。

「だいじょうぶだよ、父さん！」ライアンが、そんな王さまにむかっ
ていいました。

「危険なことはしないから。それに、みんながいつしよだよ。白の騎兵師団つて、とつても強いんだから！　ねっ？」

ライアンはそういって、ベルグエルムとフェリアルをあいだにわつてはいつて、三人でなかよく肩をくんでみせました（騎士たちはちよつと、反応にこまっておりますが）。

ライアンは、みんなといっしょにまた旅に出られることが、うれしくてならなかったのです（思わずそのあと、ロビーに「やったねー」といつてぎゅつとだきついてしまったほどです）。いつぼう。ぴよんぴよんとびはねてよろこぶそんなライアンのことをしり目に、メリアン王はがっかりして、さいごにただひとこと、こうつぶやくばかりでした。

「なんてこつた……」

それからふたたび（もういちどしきりなおして）、さまざまなことが話しあわれました。まずさいしよにきまつた大きなけつていごとは、南への道をゆく四人目のともとして、ルースアンがえらばれたということでした（ライアンはもちろん、ロビーたちとともに西への道をめぐらすことになりました。もつとも、ライアンが自分でかつてにきめちやつたんですけど）。ルースアンもまた、レシリアやライアンと同じように、しぜんの力をかりるそのわざを使うことができたのです（そして精霊のあつかいにもなれていました）。

それに、ひつじの種族の者にしてはなかなか背たけが高かつたということも、かれがえらばれたりゆうのひとつでした（それでもせいぜい、五フィートとすこしでしたけど）。それはつまり、ルースアンにロビーの身がわりをしてもらうためだったのです。セイレン大橋の上で出会った黒騎士たちには、旅の者たちが四人で、しかもその中に、なぞの黒ウルファがひとりいるということが知られてしまつていました。ですから、遠まきに見たのではわからないように、ルースアンに、黒のウルファのへんそうをしてもらおうというわけだったのです。そのためには、背かつこうがあんまり小さすぎでは、こまりました（レシリアは小がらなじよせいでしたから、ウルファのへんそうはぜんぜんむりです。ハミールかキエリフがへんそうすると、こんどは白の騎兵師団の数がちがつてきてしまいます。けつきよく、ルースアンにた

のむのがいちばんよいということにきまったわけでした。

そして、西への道をゆく者たちのその道すじのことです。ひみつの道をゆく者たちは、まずシープロンドの西の山がく地をぬけ、そのさきに広がるはぐくみの森という森を通って、西の地をめぎすということになりました。そしてそのはぐくみの森の終わり。そこには、ひとつの大きなまちがあったのです。ですがそのまちは、ただのまちではありませんでした。そのまちがさかえたのは、もうずっとむかしのこと。今ではそのまちは、まったくのはいきよのまちへと変わり果ててしまっていたのです。

そのまちは遠いむかし、ロザムンディアという名まえでよばれていました。ばら色の石でできずかれた、花々のさきみだれる、それはそれは美しいみやこであったのです。ですがそれもはや、今から二千年ほどむかしのこと（ちようど、あのセイレン大橋のことが人々に知られるようになったころと、同じころでした）。そのころとほとんどときを同じくして、このまちはとつぜんに、なんの前ぶれもなくうちすてられ、人々はいずこともなくすがたを消していったのです。人々が去り、せわをする者のいなくなった花々は、はかなくかれていきましました。

なぜこのまちから人々がいなくなってしまったのか？ 今となつては、それを正しく知る者はだれもいません。ですが、このはいきよのまちのひようばんは、今でもむかしと変わらないくらい、高いものでした。

ただひとつむかしとちがう点は、そのひようばんが、今ではまったくぎやくのものになっているところでした。このまちのげんざいのよび名は、モーグ。「暗き墓場」という意味の、とてもおそろしげなものだったのです。

「ぎやあー」

小さな部屋の中に、とつぜんだれかのさけび声がひびきました！

それはちようど、話しあいの中で、モーグの名まえが出たときのこと

だったのです。いったいだれでしょう？　みんなは「だれだだれだ？」とさわぎ出して、まわりを見渡しました。そしてその声のぬしがわかったとき。みんなはともびっくりしたのです。それは、いがいやいがい。白の騎兵師団の副長、フェリアルでした！

「ちよつとフェリー、どうしたの？」ライアンが思わず声をかけました。ですが、ライアンはすぐに、ぴんとひらめいたのです。

「……さてはフェリー。ひよつとして……、おぼけがこわいんでしょ？」

ライアンの言葉に、フェリアルはあわてていいかえしました。

「なつ、なにをばかな！　ウルファの騎士に、こわいものなどありませんっ！」

ですが、フェリアルはなかばむきになっていて、その言葉にはぜんぜん、せつとく力がなかったのです。

「なにも、はじめることはない。人にはだれだって、にがてなものがあるのだからな。」ベルグエルムがフェリアルの肩にそつと手をおいて、いいました。

「なにをいうんです、隊長まで！　ちがいますつたらー！」

とまあこんなことがあったのですが、それはつまり、「モーグにはおぼけが出る」という、もっぱらのうわさがあったからでした。じつはフェリアルは小さいころ、お城でゆうれいを見たということ、それいらい、おぼけのたぐいが大のにがてになってしまっていたのです。今でもそのときのことを思い出してしまって、夜ひとりトイレにいけなくなってしまうくらいなのだそうでした（りっぱな騎士さんにも、いがいないちめんがあるものですね）。

ちなみに、セイレン大橋の上でさいしょに黒騎士たちのことを見たとき、その悪霊のようなすがたにフェリアルはいっしゅん、おぼけかと思つてどきつとしてしまいました。すぐに人間だということがわかつて気を取りなおしていました）。

そんな（とつてもこわい）モーグを、これから通つていかななくてはならないわけでしたが、そこを通らなければならぬそのわけは、とてもたんじゅんなものでした。つまりこのまちは、西の道の「北の終

わり」にあたるどころだったのです。西の道にはいるためには、どうしたって、その入り口であるこのまちを通っていくがいりませんでした（ほかにまわり道ができるようなところも、ありませんでしたから）。

そして、モーグをぬけてからの道のりのことについては、メリアン王にもルエルしきょうさまにも、だれにもわからないことでした。お伝えしました通り、この西の道は、もうなん十年とだれにも使われていないような道だったのです。魔女がいるといううわさも、どこまでがほんとうのことなのか？ わかりません。こればかりは、じつさいにいつてみるまでは、わかりませんでした。

南へ進む者たちのことも、長い時間をかけて、ねんいりに話しあわれました。どんな道を通って、どんな行動を取るべきなのか？ 旅のこまかなところまで、さまざま意見が出て、ぎろんがかわされたのです。そしてさいしゅう的には、四人でそろって、そのままベーカールンドのアルマーク王のもとまで、むかうのがよいだろうということになりました（さいごの戦いにむけてはひとりでも多くの力が必要となりますから、やはりハミールとキエリフのふたりの騎士たちは、さいしよのよてい通り、ベーカールンドへともどらなくてはなりません。それにもなつて、レシリアとルースアンのふたりも、騎士たちのともとして、いつしよにベーカールンドへむかうのがよいだろうということになりました。もとより、敵の手に落ちたりユインの地をぬけてベーカールンドの地へむかうことは、シープロンたちのしぜんの力をかりるわががなくては、とてもむりなことでしたから、シープロンであるかれらがベーカールンドにむかうことは、しごくとうぜんのことだったのです。

そしてそのあと、危険な地をふたたびふたりだけでもどるよりは、ベーカールンドの王城まで、そのままかれらも、ともにむかった方がよいだろうということになったわけでした）。

話しあいは、午後おそくまでつづきました。そして、おひさまがすっかり西の地にかたむいていつてしまったころ。このアー克蘭ドの運命にかかわる、なんとも重要な話しあいは、ついにその終わ

をむかえることとなったのです。時間にして四時間近くにも渡る、長い長い話しあいでした。

「眠れないの？」

はいごから、声がしました。床にすわりこんでいたロビーがふりむくと、そこには、(パジャマすがたの)ライオンが立っていました。

時こくは午後の十一時。黒やぎのこくげんのころでした。空にはうすい雲がかかっている、その雲の切れまからは、きれいな月が顔をのぞかせております。ロビーはシープロンドの王宮のバルコニーで、その空をながめていました(旅の者たちが出発するのは、やはり朝を待った方がよいだろうということになりました。シープロンドから西に広がる山がく地は、切り立ったがけの道で、夜に進んでいくにはあまりにも危険が大きすぎると思われたためでした。日のあるうちにそこをぬけて、はぐくみの森まで、たどりつくのがよいだろうということになったというわけなのです。そして、南への道のりについても、敵の目をあざむくためには、やはり日のあるうちに動いた方が、つごうがよいのでした)。

あたりはしんと静まりかえっております。そよそよとした風が吹いておりましたが、ここはそんなに、寒くはありませんでした。

「ごめんなさい。かってにお城の中を歩いちゃって。」

ロビーが、ペこりと頭を下げていました。ライオンはただだまつて、ロビーの方へ歩みよると、ロビーとならんで、床にちよこんとすわりこみます。

「きれいだね。」ライオンが、空にかかったお月さまを見ていいました。それからライオンは、ロビーの方を見て、いったのです。

「けつきよく、わかんなかったね。その剣のこと。」

ロビーは、スネイルからもらったあのおくりものの剣のことを、かかえていました。ロビーは自分でもよくわかりませんでした。今はなんだか、この剣を手に使いたいと思ったのです。

「いいんです。すくなくとも、悪いものじゃないってことがわかったし。ぼくにとっては、だいじなものであることに、変わりはないか

ら。」

話しあいのあと。ロビーはメリアン王にお願いして、スネイルにもらったこのふしぎな剣のを見てもらいました。メリアン王はとももの知りで、とくに、ふしぎな力を持った武器や、防具や、道具のことなどについて、くわしかつたのです（思えばライアンの服にこっそりつけていたブローチも、そんなふしぎな道具のうちのひとつでしたね）。しかしそんなメリアン王でさえ、ロビーのこの剣のことについては、ほとんどといっていいくらい、たしかなことはわかりませんでした。

「魔法の剣については、わたしもさまざまなものを見てきたが、「メリアン王がいました。」この剣は、わたしが今まで見てきたものの、どれともちがう。なんともふしぎな剣だ。」

「ふつう、魔法のかかった剣というものは、なにかしらのしるしを持っていてるものだ。火をあらわすしるしであったり、風をあらわすしるしであったり。だが、この剣にはそれがない。それでいて、この剣が、自身のその内がわに、おそろしいほどの力をひめているのだということがわかる。もしこれが悪用されでもしたら、とんでもないわざわいをひき起こすかもしれぬ。」

メリアン王はそういつて、剣をロビーにかえしました。

「だが、これだけはいえよう。この剣は、悪しきものなどでは、けつしてないとな。正しき者が、正しきもくてきのためにこの剣を使えば、かならずや、この世界をすくう力となるであろう。きゆうせいしゆどのよ、これはまさしく、そなたのためにある剣だ。手放さず、だいにじにするとよい。」

それから数時間がたつて、ロビーは寢床につきましたが、なんだか目がさえてしまって、ぜんぜん眠れませんでした。それでロビーは、ひとり、このバルコニーへとやってきたのです。

ロビーとライアンは、しばらくだまっただまま、空をながめていました。

それからだいぶたつて。ロビーがライアンにいったのです。

「ライアンさんは、げんきでいいね。」

ロビーにいわれて、ライアンはにっこり笑ってみせました。

「笑ってても、かなしんでも、今日は今日だもん。だったら、げんきな方がいいじゃない。」

ライアンの言葉に、ロビーも静かにほほ笑んでかえします。

「ライアンさんは、すごいな。ぼくと同じくらいのとしなのに、ぼくなんかより、ずっと強くて。」

「そんなことないよ。」ライアンがつづけていいました。「ぼくだつて、ロビーと同じさ。とくべつなことなんてなにもないよ。みんながいるからげんきになれるし、みんながいるから、げんきになりたいと思うんだ。ぼくは、ぼくにできることを考えて、いっしょうけんめい、それをしてるだけなんだから。」

ロビーははつとしました。そうだ、ライアンさんだつてがんばつてるんだ。とくべつなことでもなくてもいい。自分のできることでいいから、みんなのために、できるだけのことをすること。それが人にとって、いちばん、たいせつなことであるはずなんだから（ロビーは、セイレン河にむかうとちゆうの道の中でベルグエルムにいわれた、その言葉のことを思いかえしていました。自分の力を知り、自分を信じ、それぞれが助けあうことで、はじめてみんなは仲間となり得る。ですがロビーは、これまでそのことを、深くいしきしすぎてしまつていたのです。

自分の力を知り得たけれど、ぼくの力はまだまだ小さい。だからぼくは、すこしでも多くみんなの力になれるように、もつとしつかりしなくつちや。

ロビーはそんな気持ちばかりを、自分の中からまわりさせてしまつていました。自分の力を大きくさせようという気持ちは、もちろんたいせつなことです。人はそうやって、すこしずつ、成長していくのですから。ですがロビーは、自分が背のびばかりしようとしていたということに気がつきました。むりをして自分の力以上のことをしようとしたとしても、うまくいきつこありません。ぎやくに、みんなによけいなめいわくをかけてしまうかもしれないのです。

ライアンの言葉をきいて、ロビーは今、心の中のもやもやとしたものが、急に晴れていったかのような感じがしました。

自分をかざらず、自分にできることをせいっぱいやること。そのうえで、みんなのことを心からしんらいして、助けあうこと。それが、ぼくのやるべきことであり、進むべき道なんだ。

ロビーはライアンにむきなおって、もういちどいいました。

「やっぱり、ライアンさんはすごい。強くて、やさしくて。ぼくも、ライアンさんみたいに、強くなりたい。守りたいもののためにも。みんなのためにも。」

そんなロビーに、ライアンはおどけていいました。

「やめてよ、はずかしいからさ。それに、ぼくのは、ライアンでいいってば。ベルグにも、フェリーにも、そうたのんでるんだ。」

ロビーはもうすつかり、ライアンのことが好きになっていました。種族も背かっこうも、かみやしっぽの色まで、ぜんぜんちがいましたが、友だちになるのに、そんなことはなんの問題でもないのです。ロビーはこの夜のバルコニーで、ライアンにすつかり、心をひらいていました。そしてかれはこれくらい、ライアンのことを、名まえだけでよぶようになったのです。

「ありがとうライアン。ぼくも、げんきになれそうだよ。」

そのとき、ふたりのうしろから、小さな声でよぶだれかの声がきこえました。ふたりがふりむくと、うしろのはしらの影から、だれかがライアンのことをよんでいたのです。そしてよく見ると、それはフェリアルでした。ライアンが立ち上がって、フェリアルの方に歩みよります。そしてふたりはしばらく、はしらの影でなにやらぼそぼそと話しあっていました。やがてライアンが、バルコニーに残っていたロビーにむかっていたいました。

「ロビー、フェリーがトイレについてきてほしいんだって。」

いわれて、フェリアルは大あわてです。

「わわっ！ ちよつとー！ ロビーどにはいわないでって、いったのにー！」

そう、フェリアルはモーグの話が出てきてからというもの、すつか

り、むかし見たおぼけのことを思い出してしまっていました。

そんなフェリアルに、ロビーは「あはは。」と笑ってこたえます。

「なんだか、ぼくもいきたくなくてきちゃいました。みんなでいきましよう。」

つれ立って歩いていくとちゆう、フェリアルがふたりに、ねんをおしていいました。

「ベルグエルム隊長には、ぜったいにいわないでくださいよ！」

フェリアルのそのしんけんなどには、ロビーとライアンのふたりは、顔を見あわせて、声を上げて笑いました。

月あかりが、シープロンドのみやこを銀色にそめた夜でした。

7、オーリンたちのむかしのなごり

そのろうかは、まっくらでした。そしてしゅーしゅーという、湯気のような、生きもののこきゆうのような、なにやらおそろしげな音がそこにはひびいていました。空気はとてもべたついていて、あつく、じつとりとしています。それはとても、まともな生きものたちのすうような空気ではありませんでした。

いったいここはどこなのでしょう？ しかし、この場所がどこであつたにせよ、ここにくるだれもがこう思うはずです。こんなところには、一分だつていたくはない！ と。

今そのろうかをひとり、だれかがむこうから歩いてきました。ふしぎなことに、その人物が歩いていくその場所にあわせて、まつ黒なかべにうめこまれていたつるつるとした石が、ぼんやりとした赤いかがやきを放つて、道をてらし上げていくのです。

やがてその人物は、ひとつの広間にやってきました。この広間のかべにも、さきほどのろうかにあつたのと同じ、赤く光る石がたくさんうめこまれていて、広間全体をぼんやりてらし上げていたのです。ですが、この場所でまつさきに目をひくものは、そんなものではありませんでした。まずさいしよに目に飛びこんでくるもの。それは広間のまん中におかれた、赤い光を放つ、大きな四かく形の石だったのです。

その石はなんともふしぎなことに、空中に浮かんでいて、ゆっくりとかいてんしていました。そしてにぶく光ったその赤いかがやきは、それを見る者に、血や、ぼうりよくや、はかいなどといった、おそろしげなものを思い起こさせるのです。

その石のそばにひとり、こちらに背をむけるかつこうで、だれかが立っていました。その人は、全身をおおう黒いガウンのようなものを、頭からすっぽりかぶっております。ですから、どんな人なのか？ 顔はおろか、手足のさきすらも、見て取ることはできませんでした。

「ついにあらわれたの？」

とつぜん、そのなぞの人物が口をひらきました。それは、さつきろ

うかを歩いてきた人がこの広間にはいつてきたのと、ほとんど同じときでした。ですけど、口をひらいたそのなぞの人物は、あいかわらず赤い石の方をむいたまま、広間にはいつてきた人の方には、まったく目をむけていなかったのです（まるでうしろに目がついていて、はいつてきた人のことが、すっかり見えていたかのように）。

この言葉に、広間にはいつてきた人の方が、かしこまってこたえませんでした。

「……あなたさまのよきなされていた通りでした。かの者です。まちがいありません……」

それをきいて、なぞの人物は「くっくっく。」といううすきみの悪い笑い方をしてみせます。

「あなたも、かれを待ちのぞんでいたんでしょ？　じつに、よろこばしいかぎりだね。むこうの方から、わざわざ、すがたをあらわしてくれたんだから。」

広間にはいつてきた方の方が、ふたたびそれにこたえました。

「……わたしは、自分のつとめを果たすまで。もはやかれは、わたしには、なんのかんけいもありません……」

「だったらいいんだけどね。」なぞの人物がまた、「くっくっく。」ときみ悪く笑います。

「しばらくは、およがせておけばいい。近いうちにならならず、むこうの方からやってくるから。それまでじつくりと、けんぶつさせてもらおうよ。」

それから赤い石の前のそのなぞの人物は、なにやらごによごと、口の中でつぶやきました。すると、それにこたえるかのように、ちゆうに浮かんでいた石が、みずからのそのぶきみながやきを、なおいつそうのこと強くさせたのです。そしてその石のかがやきを見て、なぞの人物は、なんともまんぞくげに、うれしそうに、いいました。

「さて、どう出るのかな？　おもしろくなってきたぞ。」

「朝のたいそう、はじめ！」

みどりのしばふの上に、みんなが集まっています。みんなは今、そのかけ声にあわせて、いち、に！　さん、し！　手足をまげて、たいそうをはじめたところだったのです。

かがやく朝の光が、あたりいちめんをつつみこんでいました。ここは、シープロンドの王宮の中庭です。のぼったばかりのおひさまの光をからだいっぱいにあびながら、旅の者たちは今、お城のほかの人たちといっしょに、朝のたいそうをおこなっているところでした（シープロンドではみんな、けんこうのために、朝のたいそうをよくおこなうのです。ちなみに、みんなのお手本となってかけ声をかけているのは、シープロンドの王子さま、ライアンでした）。

今日はとてもだいじな日でした。みんなそれぞれに、心にひめた思いをかかえていました。そのきんちようをすこしでもやわらげようと、みんなはこの、朝のたいそうにさんかしていたのです（いい出しっぺはやっぱりライアンです。ライアンはみんながまだねぼけまなこのところにいきなりおしかけていって、なかば強せいの的に、このたいそうにひっぱってきました。ですけどそれも、みんなの気持ちをはぐしてあげようという、かれの思いやりからのことだったのです。もつとも、みんながそれをかんげいしたかどうかは、わかりませんが……。とにかく、眠かったのです）。

つまり今日は、新たな旅立ちの日でした。ほんとうなら、もつともつと、このシープロンドにとどまっていたかったですけど、ざんねんながら、もうかれらには、そんな時間はなかったのです。西への道を進む者たちが敵の目からのがれるということもふくめて、旅の者たちはいつこくも早く、この地をはなれる必要がありました。

旅立ちの時間は、あつというまにやってきました。じこくは午前六時。羽うさぎのこくげんのころです。王宮の入り口の前には、旅立つ者たちのことを見送るための、たくさんの人だかりができていました（ほんとうはもつと静かに出発したかったですけど、そうもいきませんでしたのです）。そして、メリアン王の乗るりっぱな白馬を先頭に、旅の者たちの騎馬たちと、見送りの者たちの乗るたくさんの騎馬たちが、王宮の入り口の門から、ついに出発したのです。かれらがめざす

のは、シープロンドのいちばん下にあたる場所、南門でした。この南門から、旅の者たちは西への道と南への道、それぞれの道を進んでいくのです（ところで、ライアンの白馬メルは、もうすっかりげんきになっていました。こんなにみじかい時間でけががおったのも、シープロンドのお医者さんたちがみな、すばらしくゆうしゆうだったからなのです。げんきになってほんとうによかった！ それと、ベルグエルの肩もすっかりよくなりましたので、ご安心を。べつに、ついでのほうがこのうわけではありませんよ、もちろん）。

一行は、白いれんがの道をゆつくりと進んでいきました。道の両がわには、たくさんのシープロンの人たちが、旅立つ者たちのことを見送りに出てきております。出発のことはひみつになっているはずでしたのに、どこでうわさが広まったものか？ かれらにかくしごとをしておくことは、むりなようです。

「こんなにはで見送られたんじゃ、こまっちゃやうよね。黒騎士たちがまた、空から見張ってなければいいんだけど。」そんなかれらに手をふりながら、ライアンがじょうだんまじりにいいました。

そして一行は、ほどなく、シープロンドのみやこのその南門へととちやくしたのです（南門はほかのくにぐにからシープロンドへ、さまざまな人や品物がはいつてくるところで、そのため門も、ほかの門よりもだいたい大きなものとなっていました）。

門の前は大きな広場になっていて、そこはまさに、人であふれかえっていました。それらの人たちも、またみんな、だいじなだいじな旅へとむかうわれらが仲間たちの出発を、ぜひとも見送ってあげたいと集まった、心やさしき住人たちであったのです。

一行が広場にはいると、人々のこうふんはいつきに高まりました。みな口ぐちに、

「きゆうせいしゅばんぎーいー！」だとか、「ライアン王子ばんぎーいー！」だとか、さけんでいたのです。しかし、みんなが心より見送ってくれるのはうれしかぎりでしたが、これはやっぱり、ひみつの旅なのであって、あんまりさわがれてしまつてはこまるのです（よけいなうわさまで、広がってしまいかねませんから）。そんなみんなのことを静

めたのは、またしてもライアン……、ではなくて、こんかいはメリアン王でした。せっかく、いちばんえらい王さまがいるんですから、この場はやつぱり、王さまにおまかせすることにしましょう。

「みなの方ー！ 見送りを心よりかんしゃいたす！」メリアン王が大声でいきました。とたんにあちこちから、「メリアン王ばんざーいー！」という声が、われんばかりにわき起こります（これではみんなを静めるどころか、ぎゃくこうかでしたね）。

メリアン王は、「う……」と気まずい顔をしたあとで（こんどは大きく手をかかげて、いいました）。

「せいしゅくに！ これは、王の言葉である！」

こんどは、こうかはぼつちりでした。人々はとたんに静まりかえって、王さまのつぎの言葉を待ったのです。さすがは王さま。みんなからそんなけいさされているんですね（もうひとつの方の王さまのすがたをみんなが知ったら、どう思うかはわかりませんが……）。

メリアン王は「ごほん。」とせきばらいをしてから、つづけました。「みなのおいが、旅の者たちのはげみとなろう。これはひじょうにたいせつな、ひみつの旅である。このアーランドのみらいがかかっているのだ。この旅のせいこうには、そなたたち、みなの方が必要だ。この旅のことは、このくにのそとには、けっしてはならぬ。みなでひみつを分かちあい、守りぬくのだ。

わたしは、そなたたちのことを信じておるぞ。そなたたちは、わがあいすべき、シープロンドのくににたみ。わたしのほこりだ。」

王さまの言葉に、人々からおしみないはくしゆがおくられました（さすがはメリアン王。すばらしいえんぜつでしたね。これなら、ひみつがもれたり、よけいなうわさが広がったりするようなこともないでしょう）。そしてそのはくしゆに送られながら、旅の者たちと見送りの騎馬の者たちは、大きくひらかれたその南門から、このシープロンドのみやこのそとの土地へとむかって、歩を進ませていったのです（といってもまだそこは、シープロンドのくにの中。そこから、はたけやまきばが、ずっと広がっていたのですが）。

門のそと。はたけやまきばの広がる土地の、そのむこうは、見渡す

かぎりの大平原でした。ここをはるか進めば、南のくにやりユインと
りでのある土地へと、たどりつくことができるのです。ロビーたちの
進む西の方を見ると、はるかに、赤茶けたはだを持つごつごつとした
山々がつらなっているのが、見て取れました。あの山を越えたさき
に、はぐくみの森という大きな森が広がっているのです。そしてひみ
つの道は、さらにそのおくにありました。

門をぬけると、メリアン王は門をいったん、とじるようにいいまし
た（人々のあついしせんがあつては、ちよつといいづらいことがあり
ましたから。それはやつぱり、ライアンへの見送りの言葉でしたけ
ど）。そして門がとじられると。みんなは騎馬からおりて、それぞれ
に、さいごの見送りの言葉をかわしあつたのです（ちなみに、旅の者
たちの騎馬たちは、西をゆく者たちと南をゆく者たち、それぞれ同じ
く三頭ずつでした。一頭が白馬で、ほかの二頭がはい色というところ
も同じです。これはもちろん、敵の目をあざむくために、同じ馬の数
と色にしてありました。ウルファの騎士たちは、ひとりにはい色の騎
馬が一頭ずつ。ライアンとロビーが、けがのなかつたメル。そしてレ
シリアとルースアンが、同じ一頭の白馬に乗っていくのです）。

「ぜつたいに！ ぜつたいにあぶないことはしないでね！ やくそ
くだよ！」

なんどもなんども、ライアンの手をにぎってくりかえしそういつて
いるのは（読者のみなさんには、もういわなくてもおわかりですよ
ね）、メリアン王でした。王さまはさいごまで、ライアンのことが心配
でならなかつたのです。

「わかつてるって。あぶなくなつたら、すぐ逃げるから。」

ライアンの言葉は、メリアン王がライアンにしつこくいったことで
した。あぶなくなつたらすぐに逃げる。これはなにも、おくびような
ことだというわけではありません。むしろそのぎやくです。ひみつ
の旅にある者たちがその旅をなしとげるためには、まずは自分の身を
守ることが、なによりもだいじなことでしたから（そのためには、危
険なことからはできるかぎり、遠ざかつていなければならなかつたの
です。メリアン王はそのことにもじゅうぶん、考えをめぐらせていた

というわけでした。もつとも王さまの場合は、ライアンの身の安全の方を、いちばんに考えていたようでしたけど……)。

「それにさ、「ライアンがつづけて、メリアン王にいいました。「こんなにお守りがついてるんだもん。これじゃ、危険な目にあう方がむずかしいよ。」

ライアンはそういって、ま新しいマントのすそを広げてみせました。そこを見てびっくり！ マントのうらから、服のポケットからズボンにベルトに、ブーツにいたるまで。あらゆるところにじやらじやらと、ライアンの身を守るためのお守りがついていたので！

もちろんこれは、メリアン王がライアンのためにつけさせたものでした。メリアン王はライアンが旅に出ることをゆるすかわりに、自分の持っているありとあらゆる安全のお守りを、持たせたのです(もう、前みたいにこっさりつける必要もありませんでしたから。メリアン王の、ほんりようはつきといったところですね)。

そしてこれらのお守りは、やつぱり、ただのお守りではありませんでした。さいしよの旅で王さまがこっさりつけた、星がたのブローチはもちろん(これは今は、ほそいくさりにつけられて、ライアンの首にかかっていました)。危険から身を守るお守りや(これだけで二十こくらいもありました)、早く走ることのできるお守り。ピンチになったらほのおを吹き出して、敵をやっつけるもの。水の中でも息ができるもの。さらに、ライアンが今だいたいどのあたりにおいて、どんな景色を見ているのか? など、そんなことまでわかってしまう、すごいものまであったのです(そのほか、たいおんやみやくはくがわかるものとか、おながかへつていないかどうか? わかるものとか、そんなものまでありました。ちよつとそこまでいったら、やつぱり、やりすぎですね。ですから王さまは、ライアンにはそこまでの説明はしないで、「ただのお守りだよ。」とごまかしていました。いったらたぶん、また怒られそうでしたから……)。

もつともライアンの方も、王さまのすがたが見えなくなったら、首のブローチはともかくとして、ほかのは全部、かばんにしまっってしまうつもりでしたけど。だってこれじゃ、旅をゆくのに、じやまでしか

たありませんでしたから!」。

そんなライアンのもとに、ひとりの少女が近づいてきました。それはライアンのいもうとの、エレナでした(もちろんエレナもまた、メリアン王とともに、ライアンのことを見送りにきていました)。エレナはだまってそつと、その手に持っていたものをライアンにさし出すと、とつても小さな声でいいました。

「兄さま、これ……」

ライアンが受け取ったもの。それは、小さなビーズをあんでひつじのかたちにした、手作りの小さなお守りでした(このお守りはライアンにせて作られていました)。それは旅立つ兄のために、エレナが心をこめて作ったものでした。このお守りには、王さまが持たせたもののようなとくべつにふしぎな力などは、なにもありませんでした。ですがときとして、そういうふつうの品物の方が、それを持つ者に、とても大きな力を与えてくれるものなのです。

ライアンは、なにもいえませんでした。いつものライアンでしたら、笑ったりおどけたり、してみせたものでしたが、こんかいばかりは、すなおに、いもうとのその気持ちを受け取ったのです。ライアンはそのお守りをにぎりしめて、ただ小さく、エレナにいいました。

「ありがとうございます。だいじにする。」

ライアンはそして、エレナのことをだきしめました。ふたりの目には、うつすらと、なみだが光っていました(それを見て王さまは、「ああっ! エル、ずるい!」といって、ふたりのあいだにわりこんで、ライアンにまただきついてしまいました。ですがライアンも、こんかいばかりは「しようがないなあ。」といって、王さまのことをつき飛ばしたりはしなかったのです。やっぱりライアンも、家族とはなれるのは、さみしかったんです)。

そんなライアンのむこうでは、ウルファの四人の騎士たちが集まって、言葉をかわしあっていました(ちなみに、ロビーもいっしょにその場にいました)。

「けっして、むちやをするなよ。おまえたちはまだ、若すぎるところがあるからな。たいせつな力は、ここぞというときまで取っておくこ

とだ。」

ベルグエルムがこうはいの若き騎士たち、ハミールとキエリフのふたりの肩をたたいて、じょうだんまじりにいました。若き騎士たちに力がいりすぎているのを見て、ベルグエルムは、そのきんちようをときほぐしてやろうとしたのです。

「はい。隊長の教えをきみにめいじます。どうぞお気をつけて。」ハミールとキエリフはそういって、ウルファの敬礼のしぐさを取ってみせました。

それからハミールとキエリフのふたりは、こんどは、フェリアルにむかっていったのです。

「フェリアル副長も、どうかごぶじで。こんどの旅では、わたしたちの方がらくな道でよかった。わたしはこわがりですから、とてもモーグなんかにはいけません。」

「うぐっ……いー」

そういつて顔をしかめるフェリアルに、ベルグエルムも声を上げて笑いました。

「じつはわたしも、おぼけが大きらいなんだ。たのしいフェリアルがいつしよで、ほんとうによかったよ。」

このような旅の前に、こんなふうに笑ってじょうだんをいいあえるのも、かれらがまことに、おたがいのことをうやまい、したい、しんらいしあっているからこそなのです。ふつうだったら、待ち受ける大きな危険や、そのせきにんに、心がおしつぶされてしまったとしても、おかしくはないくらいでしょう。もしかれらが、ひとりきりだったのなら。こんかいの旅は、まこと、おぼつかないものになってしまったにちがいありません。ですが、かれらはひとりではないのです。仲間が、家族が、たくさんの人々の思いが、かれらの心をささえていたのですから。

「王子、しばらくは、べんきようは自習にしておきますよ。」ライアンにそう声をかけたのは、レシリアでした。「ほんとうなら、わたしがいつしよについていつて、べんきようを見てあげたいところなのですが……」

「うわっ！ それだけはかんべんしてよ！」きびしい先生の言葉に、ライアンは思わず両手をふって、そうこたえます。

「もどつたらすぐ、算数とれきしのテストがありますからね。おくれはしつかり、取りもどしてもらいますよ。」

そういうとレシリアは、急に、顔をくもらせました。そしてレシリアは、ライアンから顔をそむけると、ひとり、自分の騎馬の方にゆっくりと歩いていったのです。

「どうしたの？ リア先生。」ライアンがそういって、レシリアのことを追いかけました。レシリアに追いついたライアンが見たもの。それはかのじよの、泣いている顔でした。ひとみをまっ赤にはらし、レシリアは、ひっくひっくと、しゃくり上げて泣いていたのです。

「リア先生……」

ライアンはそんなレシリアのことを見て、言葉をなくしてしまいました。それははじめて見る、リア先生の泣き顔でした。気が強くて、とつてもこわくて、おせっかいやきのリア先生。そんな先生が、ライアンとのわかれのつらさに、なみだを流して泣いていたのです。

ライアンはなにもいえず、ただレシリアに、ぎゅつとだきついていました。うでに力をこめて、それからただひとこと、こうつぶやいたのです。

「大好きだよ……」

しぜんと、ライアンのひとみにも大つぶのなみだがあふれてきました。そしてレシリアは、そんなライアンのことをしつかりとだきしめかえして、こたえたのです。

「ライアン……、ぜったい、ぶじに帰ってきて……」

ライアンはレシリアのうでの中で、こっくりとうなずいてみせました。もう、顔はなみだで、ぐしゃぐしゃになっていました。ライアンは、それを先生に見られるのがいやだったのです。ふたりは長いあいだずっと、そのまま動きませんでした。

そしてしばらくたったころ。レシリアはひとみをぬぐって、なんとかもとの顔をとりつくろうと、ふたたび、げんきな声でいったのです。

「ほらっ、王子。もうみんな、待っていますよ。そろそろ、いかない

と。」

レシリアの言葉に、ライアンもひとみをございごとこすつて、いいました。

「うん。」

それからライアンは、レシリアに手をふつて、ロビーたちの方にはたばたとかけていったのです。

「どつちがさききにベーカールランドにつくか、きょうそうだよー！」

ライアンがふりむきざまに、レシリアにむかつてさげびます。そしてレシリアは、またいつも通りのレシリア先生にもどつて、げんきにそれにこたえました。

「わたしがさきについたら、たくさんしゆくだいを用意しておきますよ。それがいやなら、おくれなさいこと！ おそくなつたら、どんどん、しゆくだいがふえていきますからね！」

「ええーっ！ かんべんしてよー！」

こうして。旅の者たちはふたたび、それぞれのむかうべき運命の道の中へと、ふみ出していくこととなったのです。それはもうすぐ冬をむかえようという、秋深いある日のこと。おだやかに晴れた、ある朝のことでした。

シープロンドを出発して、西へ。みどりの平原は、やがて、なだらかなのぼりのつづく岩の道となりました。この道はガイラルロックたちのいた場所ほどごつごつしてはいませんでした。かといつて、ぜんぜんうるわしいというわけでもありませんでした。それはつまりこの場所が、もううつしみ谷からは、ずいぶんとはなれてしまつていたからなのです。ちらほらと、しげみや、ひくい木や、つるくさの葉っぱなどが、岩のすきまから顔をのぞかせておりましたが、うつしみ谷のあのみどりあふれるすばらしい場所にくらべたら、この場所はまるつきり、からからにひからびた、さびしいところでした（それでも今のきせつを考えたら、これがふつうでした。うつしみ谷とくらべるのが、そもそもいけないのです）。

ロビーたち、西への道をゆく旅の者たちは今、馬の背にゆられなが

ら、その岩の道をぱかぽこと進んでいるところでした。もうなん時間も、景色はまったく変わらないように思えます。あいかわらず、なだらかなのぼりの道が、あつちやこつちにまがりながら、どこまでもつづいていました。そして、もうすっかりおひさまものぼりきつてしまつて、旅の者たちがそろそろおひるごはんにしようかと思いはじめたところ。一行はとつぜん、景色のひらけたがけの上につくられた、石づくりの見張り台のあるその場所へと、たどりついたのです。

この見張り台は大むかし、このあたりの山に住んでいたオーリンとよばれるふくろうの種族の者たちが、つくつたものでした。ですがかれらは今や、どこか遠くの地にうつり住んでしまつて、今ではこのあたりの土地には、だれも住む者はなかつたのです。ですから、オーリンたちのつくつたこの石づくりの見張り台だけが、おとずれる者もなく、さびしうに、このがけの上の広場にぽつんとたっているばかりでした（そしてその半分くらいは、すでにむぎんにも、くずれ落ちてしまつていました）。

「オーリンの見張り台か。わたしも、見るのははじめてだ。」ベルグエルムが、くずれた見張り台をしらべながらいきました。「かれらはもう、百年もむかしに、この地をはなれたとき。そのわけも、かれらがどこにいったのかも、南の地ではさだかではない。」

「このあたりはがけばつかりであぶないし、シープロンドの人たちも、みんなこつちへは、ほとんどきたことがないんだ。」ライアンも、がけのふちに立つておっかなびつくり下をのぞきこみながら、いきました（ねんのため、ロビーの服のすそをがちりつかんでいましたけど）。「だから、オーリンたちのことは、シープロンドの中にもほとんど伝わってないんだよ。それにかれらは、人づきあいが好きじゃなかつたんだつて。だから、よけいにみんな、知らないんだ。」

「そしてどうやら、オーリンたちのかわりに、この地に住みはじめた者たちがいるようだな。」ベルグエルムが、くずれた石のひとつを持ち上げて、つづけます。「この石は、しぜんにくずれたものではない。なにか、とてつもなく大きな力で、こわされている。それも、ハンマーのような道具を使つて。」

ベルグエルムの言葉に、みんなはとてもおどろきました。

「こんながんばりような石のたてものを、こわしちゃう生きものなんて、いったいどんなやつなんですか？」ロビーがたずねます。

そしてロビーのその言葉に、ベルグエルムはれいせいに、地面をゆびさしていいました。

「これを見てください。」

ベルグエルムのゆびさしたところには、なにかたくさんのあなのようなものができていました。そしてよく見ると、それはどうやら、なにかの生きものの足あとのようなのです。ですが、それが足あとなのであるのだとしたら、ひとつどうにも、信じがたいことがありました。大きすぎるのです。ひかく的たいかくのよいウルファの者たちでさえ、足の大きさは十一インチほどでした。ですがその足あとは、どう見ても、十五インチほどはあつたのです！（ぞうの足あとをちよつと思いつかべてみてください。この足あとの大きさは、たぶんそれに近いと思います。）

「この足あとには、もうひとつ、大きなとくちようがある。」ベルグエルムがさらにつづけました。「それは、くつをはいていないということです。これは、はだしの足あとだ。たぶんこれは、岩山に好んで住むという、岩の巨人たちのものだろう。」

「巨人がいるの！」思わずさけんだのは、ライアンでした。「ここはシープロンドから、そんなにはなれていないのに。いやだなあ。」

かれらはいぜん、ガイラルロックたちにおそわれておりましたから、ライアンのその気持ちは、みんなにもよくわかりました。だつて岩の巨人つていうのは、あのガイラルロックたちに、からだと手足がそろっているんですから！ しかもその手には、石のハンマーやら、こんぼうやらといったものまで、にぎられているのです。おまけにせいかくもきようぼうで、あばれるのが大好きとあつては、とてもかんげいできないのも、むりもないことでした。

「もちろん、かれらに出会わないことを願っている。まともによりあつて、かなう相手でもないからな。」ベルグエルムがいました。

「会つたつて、うれしくないしね。」ライアンも、じょうだんまじり

につづけました。「ぜったい、かわいくないと思うよ。」

「わたしはもう、剣をおられるのだけはこりごりですよ。」さいごにフェリアルが、頭を横にふりながらいいました。かれはついせんじつ、ガイラルロックたちとの戦いの中で、じまんの剣をおってしまっておりましたから（ちなみに、その剣のかわりはシープロンドで見つけることができました。シープロンの人たちには大きすぎて、フェリアルにはちようどよい剣が、いっぽんだけお城のそうこにあったのです）。

それと、せつかくいい景色でしたので、出発の前にみんなはここで、おひるごはんをすませることにしました。時間がないので、急いででしたけど。それともちろん、あたりへのけいかいも忘れずに）。

それから三頭の騎馬たちは、がけにそってのびている、そのいっぽんの道を、そろそろとしんちように進んでいきました。なぜかというところ、この道ははばもせまく、しかもそのすぐわきは、ならくの底にまで落ちこんでいるという、まさにだんがいぜつべきの道だったからなのです！ ですからどうしたって、ゆつくりゆつくり進んでいくほかありませんでした（そのため一行は、この山道でずいぶんと、時間を取られてしまいました）。

しばらく進んでいったところ、雲ゆきが急にあやしくなってきました。そしてそれにもなつて、あたりもだんだんと暗くなつていったのです。

「あのシープロンドでの時間が、うそみたいだ。」いちばんうしろを進んでいるフェリアルが、思わずそうもらしました。そしてみんなも、口には出しませんが、思いはまったくフェリアルと同じだったのです。

まず、この寒さがこたえました。もうだいたい山道をのぼってきておりましたので、きおんはよけいに、ひくくなつていたのです。ことに、シープロンドからやってきたばかりのかれらにとっては、その思いがなおのこと、強く感じられました（シープロンドでは一年中おだやかなきおんがたもたれていて、たとえ冬のまっさかりでも、寒すぎるということはないのです。それはもちろん、シープロンドのことを守つ

ている、精霊たちのおかげでした)。

「雨がふってないだけ、まだましだよ、フェリー。」ライアンが、うしろをふりかえっていいました。たしかにライアンのいう通りでした。これでまた雨でもふられたら、それこそみんな、ここへ死んでしまいかねませんでしたから。

道はずっと、くねくねとうねりながらつづいていました。あたりはどんどんと、暗くなっていくばかりです。空にはいつのまにか、いちめに、あつい雲がたれこめていました。そして雨ほどではありませんでした。それと同じくらい旅の者たちの心をくじかせる、あるやっかいなものが、このころからあたりにはあらわれるようになっていたのです。

それは風でした。それも、ただのそよ風ではありません。びゅうびゅうと耳もとで泣きさけぶ、強い強い、山の風だったのです。

かどをまがるたびに、旅の者たちはとつぷうにおそわれました。風は道のむこうから、うしろから、上から、下から、まるでめちやくちやに吹いてくるのです。ですからみんなはなんとどとなく、がけの道のかべに張りついて、風がおさまるのを待つはめになりました。

「もうっ！ かみの毛ぐしゃぐしゃになっちゃうよー！」ライアンが頭をおさえて、吹き荒れる風にむかってもんくをいいました。みんなはマントのフードを深くかぶって、ひもでむすんでいましたが、それでもこの強風は、どンドン、すきまからはいりこんでくるのです(おかげで、ライアンのじまんのきれいな銀色のかみも、くしゃくしゃになっちゃいました)。

「これでは弱ったな。」ベルグエルムもそういって、空を見上げました(もちろん、かみの毛がぐしゃぐしゃになってしまふことを心配していたのではありませんよ)。

「もう、じきにすつかり暗くなってしまう。山の夜は、よけいに早い。なんとか、はぐくみの森まではたどりつけるかと思っていただけのだが、こんなちようしでは、今日中に、たどりつけるかどうか……」

「ひとばん明かすにしても、どこか、よいところがあればいいんですが。」フェリアルが心配げに、つづけます。

「とにかく、まだ明るいうちに、なんとかしなきゃね。」これはライアンでした。

「こんながけの道で野宿なんて、まっぴらだから。」

とにかく。今はなんとか、前に進まなければなりません。それでも歩みはあいかわらず、いつこうにはかどりませんでした。風の弱まるのを待ち、進んで、そしてまた待つ。そのくりかえしだったので。

それからまただいぶ進みましたが、がけの道はまったく変わらず、果てしなく、どこまでもつづいているかのようでした（このままベーカーランドまでつづいてくれるのなら、だれももんくはありませんでしたけど）。そしてこのころになると、一行はたびたび、がけの下へとむかう分かれ道に出くわすようになりました。ためしにいちど、みんなはがけの下へとつづくその道を進んでみましたが、道はなんとも暗くて、いんきな感じのものでしたのです。そしてがけの下は、それよりもっとおそろしげな感じでした（はいきよのまちモーグじゃありませんでしたが、いかにもおぼけが出そうなふんいきでした。ですからフェリアルはすぐさま、「早くもどりましょう！」といって、みんなをせかしましたが）。

そのうえ、がけの底ではたくさんほらあなが口をひらいていて、それはまるで、そのほらあなが悪意を持って、えもののことをそこにおびきよせようとしているかのようでした。ひとりぼっちだったほくのほらあなだって、あそこまではひどくないぞ。ロビーがそう思ったのも、とうぜんのことだったので。

みんなはのぼったりおいたり、かべに張りついたりしながら、それでもすこしずつかくじつに、前へと進んでいきました。そしてこのいやながけの道も、そろそろ終わりへと近づいてきたころ。がけの上から、とりあえずのもくてき地であるはぐくみの森の木々が、ちらちらと見えはじめてきたころのことでした。

「あそこが、はぐくみの森です。やれやれ。もう今日はむりかと思っていたが、これなら日が落ちきってしまう前に、なんとかたどりつけそうだ。」ベルグエルムががけの上から、遠くに広がる森をゆびさしながらいいました。

「よかった！ ぼくもう、こんなところは早くぬけたいよ。」ライアンもそういって、(かみの毛をなおしながら)ほっと胸をなでおろしました。

しかし……、これが旅の道の、そのいじわるなところ。うまくいきそうだと思っただけでも、ふたたび、こんなな問題の前にひきもどされてしまうことだって、しばしばあるのです。

みんなの心が、もう半分くらい、このがけの道からぬけ出してしまっていたころ。 magariかどをまがった一行の前に、それはとつぜん、あらわれました。いよいよ、岩の巨人のとうじょうでしょうか？ いえ、かれらの前にあらわれたのは……、それよりもっと大きくて、しかももつとやっかいな、なんともんでもないしろものだったのです。

ぎし……、ぎし……、ひゅうう……、ぎし……。

がけの道は、このでたらめな強風にあおられて、ぶきみな音を立てながら、ぐらぐら、ぐらぐら、波のようにゆれ動く、いつぽんのつり橋へとむかってつづいていたのです！

「じょうだんじやないぞ……」ふだんはれいせいなベルグエルムでさえ、思わずそうもらしてしまったほど、それはまったくひどい光景でした。もしこれが、あの石づくりのセイレン大橋みたいに、がんばりょうでしっかりしている橋ならよかったです、そんなうまいぐあいには、どうしたっていきつこありません。このつり橋は、もうひとめで、とつても古くてがたのきた、危険きわまりない橋だとわかったのです。

ベルグエルムをはじめ、旅の者たちはみんな、とほうにくれてしまいました。ほかにべつの道がないものかと、あたりの山はだをくまなく見渡してみましたが、そんな道は、どこにも見つかるはずありませんでした。つまり、はぐくみの森へとつづくがけの上の道は、このつり橋がいいには、ひとつもなかったのです。

「もう、道はひとつしかないみたいだね。」ライアンがいました。

さて、旅の者たちは、いったいどうするのでしょうか？ もちろんかれらは、前に進まなければなりません。こんなところで足どめされている場合では、ぜんぜんないのですから。

そう、われらがゆうかんなる旅の者たちは、意をけっして、この危険きわまりないつり橋の上へと、ふみ出していったのです……。なんてことは、かんぜんにあり得ません！

そんなの、むりにきまっていたのです！

このつり橋は、とてもとても、騎馬たちをひきつれた旅の一行が通れるような、そんなしろものではありませんでした。ふみ板はどこどころぬけ落ちていましたし、手すりも長い長い時間雨風にさらされていたおかげで、もうぼろぼろです。それもみじかい橋ならまだしも、そんなじょうたいのその橋が、えんえん百ヤードはあろうかというくらいに、つづいていました。

つまり、ぎろんのよちなし！ このつり橋をゆけば、旅の者たちはもう、旅をつづけることはできません。ならくの底にまっさかさま！ フェリアルの大きらいな、おぼけの仲間いりです（ヒーローたちが橋から落つちてそれでおしまいなんて、そんなの、物語としてゆるされるわけありませんよね）。

では、さきほどライアンがいった「道はひとつしかない」という言葉は、どういうことなのでしょう？ これはもちろん、つり橋をゆくということをしてしているわけではありません。わたしはさきほど、「はぐくみの森へとつづくがけの上の道は、このつり橋がいには、ひとつもなかったのです」といいました。この中の、「がけの上の道」という部分にちゆうもくしてください。そう、はぐくみの森へとつづく道は、がけの上だけではなかったのです。つまり、がけの下。ちよつと前に、かれらがためしにしらべにおいてみた、あのおそろしげながけの下の場所がありましたよね。じつは、あの場所のさきにも、つづく道はありました（だったら、さいしよからそういつてよ！ と怒られてしまいそうですが……。まあこれも、物語を盛り上げるための、えんしゅつということ。ごかんべんください）。

もちろんみんなは、そんな道をいきたいわけでは、けっしてありま

せんでした(だって、見るからにこわそうでしたもの)。ですけど、道はもうそこしかないのです。ライアンはそのことをよくりかいたうえで、道はひとつしかないといいました(かれだって、好きでそういったわけじゃないんです)。

「さっきのところまでもどつて、下におりていくしかないよ。」ライアンがつづけます。

そしてライアンのその言葉に、ベルグエルムもうなずいてこたえませんでした。

「それしかないな。気のりはしないが、しかたない。今日中にはぐくみの森までたどりつくのは、もうあきらめるしかないだろう。」

(これはつまり、いくら強い風が吹き荒れていたとしても、がけの上からもくてき地へ、まっすぐむかうことができるのと、がけの下までもどつて、そのあとさきのわからない暗く危険と思われる道を、さぐりさぐり進んでいくのでは、かかる時間も大ちがいだと思われるためなのです。まっくらな夜になってから進むのはあまりにも危険でしたし、それまでにはぐくみの森までたどりつくのは、とてもむりだと思われたための言葉でした。)

「つまり、それって……」フェリアルがたずねます。「あのがけの下で、ひとばんを明かすつてことですか?」

そんなフェリアルのことを見て、ベルグエルムが大まじめな顔をしていました。

「強風の吹き荒れるこんながけの上で、寝るわけにもいかないからな。がけの下には、見たとこ、かいてきそうなほらあなも、たくさんあつたじゃないか。」

これは半分、じょうだんもはいつていましたが、ベルグエルムのいったことは、まったく正しいことでした。がけの上の道は、みんな道はばもせまく、とても三頭の騎馬たちをつれた旅の者たちが野宿できるような場所などは、なかったのです(それに、へたをしたら、寝ているあいだに風に飛ばされて、がけから落っこちてしまいかねませんもの!)。

「なに、モーグにくらべたら、なんてことはない。いいようれん

しゆうになるじゃないか、フェリーくん。」ベルグエルムがライアンのよび方をまねして、にこにこしながらいいました。

「ああ、それと。すまないがフェリアル。がけの下では、きみが先頭をつとめてくれ。たまには、前後の守りをいれかえないとな。」

もちろんこれは、ベルグエルムのじょうだんでした。こわがりのフェリアルをいちばん先頭で歩かせて、からかってみたいという、かれの（ささやかな）いじわるだったのです（もつとも、ほんとうにそんなことをさせるつもりは、たぶんなかったんでしょうけど……。あんがい、ほんきかも？）。

「だってさ。フェリー。」ライアンが、フェリアルの腰をぼんとたたいてそういいます。「よろしくね。」

「そ、そんなー！」なんともなさけない声でさげぶそんなフェリアルのことをしり目に、みんなはさっさと、馬を進ませはじめてしまいました。

「ほら、早くしないと、夜になっちゃうよー！」

いい放つライアンの言葉に、フェリアルは泣く泣く、そのあとを追いかけてました。

ベルグエルムさんって、けっこう、じょうだんきつい……。そんなみんなのやりとりをずっと見守っていたロビーが、心の中でそつとつぶやきました。

風がびゅうびゅうと、岩のあいだからおそいかかってきました。それはまるで、目には見えない大きなへびのむれが、つぎつぎとこちらへ飛びかかってくるかのようにでした。ここは、がけの下。みんながくのをいやがっていた、あのおそろしいがけの下の道だったのです。がけの下ならいくらか風が弱まるかもと、きたいしていたみんなでしたが、それは大きくうらぎられました。がけの上みたいにあちこちからめちやくちやに吹いてくるということはありませんでしたが、そのぶん風は、前とうしろにそのゆくさきをしばらく、ますますその力をまして、一行のことをはさみうちにしたのです（ライアンだけは、これ以上かみの毛がくちやくちやになるのをいやがって、みんなには

ないしよで、空気のバリアーで風を防いでいましたが……。

ですけどこのさい、そんな風なんかにかまっている場合ではありませんでした。みんなはどんどん、さきに進まなくてはなりません。すこしでも多くさきに進んでしまわないことには、あたりはじきに、ほんとうにまっくらになってしまふのですから（このがけの下には、光もほとんどとどきませんでしたから）。

「これじゃまるつきり、墓場と同じだ。」フェリアルがたまらずにいきました。フェリアルという通り、がけの下のこの道は、ぶきみに暗く、なんともうすきみ悪い感じの場所だったので。

ところでフェリアルは、ベルグエルの言葉のように、ほんとうに先頭を進まされてはいなくて、いつもみたいにいちばんうしろにいていきましたが、いちばんうしろというのも、これはこれでこわいということに、気づいてしまいました（いきなりうしろからなにかがやってきたとしたら、それはたしかに、こわいですがものね）。フェリアルはなんどもなんども、ちらちらと、うしろをふりかえっていましたが、そのたびに、くらやみの中になにかがいるんじゃないか？ と胸をどきどきさせていたのです。

はたしてそれは、そんなかれの心が作り出した、まぼろしだったのでしようか？ フェリアルがふたたび、うしろをふりかえったとき。かれは岩の影のくらやみの中に、なにかを見たような気がしました。そして三回目、そんな感じをおぼえたときのこと。かれはたしかに、そのくらやみの中に浮かび上がる、青白いふたつの目を見てしまったのです！

「た、た、た、た、た、たいちよ……！」

もうフェリアルは、しんぞうが口から飛び出してしまわんばかりでした。ひめいを上げることすらできなかつたのです。こんなじょうたいでまともに言葉をしゃべれといったって、とてもむりというものでした。ですから、フェリアルの前にいるロビーとライアンのふたりには、フェリアルがなにをいつているのか？ さっぱりわからなかつ

たのです。

「ど、どうかしましたか？ フェリアルさん。」ロビーがメルの上から、フェリアルにたずねました。

「ちようちよがどうかしたの？」ライアンもわけがわからず、つづけてたずねました。

そしてフェリアルは、まっ青な顔をして、ようやくのことで、言葉をふりしぼっていったのです。

「ち、ちがう。隊長……、隊長をよんで。おばけ……、おばけがいた！」

「ええっ?」

ライアンとロビーはびっくりして、あたりを見まわしました。そしてそんなかれらのことに気づいて、ベルグエルムも騎馬をもどして、みんなのもとへとやってきたのです(ベルグエルムはつづく道のようすをたしかめるため、ちよつとさきの方までしらべに出ていました)。

「どうした? なにかあったのか?」

ベルグエルムがフェリアルにいいました。そしてフェリアルは、なんとか気持ちをおちつけようとひっしになりながら、それにこたえたのです。

「み、見たんです! あそこ……、あそここの暗がりには、はつきりとおばけの目を!」

ベルグエルムもさすがに、これにはびっくりしました。ですが、フェリアルはこんなときにうそやじょうだんをいうようなやつではないということを、ベルグエルムはよくりかいしていたのです。ですからベルグエルムは、馬からおりて、じゅうぶんに用心しながら、フェリアルのゆびさしたその暗がりの方へと、すぐさましらべにむかいました。

「待ってベルグ、ぼくもいくよ。」ライアンがメルからおりて、いいました。とうぜん、ロビーもいっしょにメルからおりましたので、ついていくことにします。

それからみんなは、フェリアルがおぼけを見たという、その暗がりの中の岩場を、くまなくしらべてまわりました。そしてフェリアルは、ぶるぶるふるえながら、すこしはなれたところで、そんなみんなのようすのを見守っていたのです。

しばらくしてみんながもどつてくると、フェリアルはくいつくようにたずねました。

「ど、どうでした？」

しかしみんなは、浮かない顔をしたままで、フェリアルそのしつもんにとえたのです。

「ぎんねんだが、おかしなところはなにもなかった。」

ベルグエルムの言葉に、フェリアルはおどろいた顔をしていいました。

「そんな！ たしかに、見たんですよ！ まちがいありません！」

もちろんみんな、フェリアルのことをうたがっているわけではありません。信じているからこそ、みんなは今自分たちがおかれているじょうきょうのことを、正しく見きわめる必要があつたのです（ふだんだつたら、じょうだんまじりにフェリアルのことをからかったりもするんですけど、こういうまじめなところではべつだったのです）。

「きみが見たものがなんだったのか？ わたしにもわからないが、」ベルグエルムがつづけました。「じつさい、あの場所にはなにもいなかったし、足あとなども見つけられなかった。それに、もしなにかがいたのだとしても、わたしたちに気づかれずにあの場所から立ち去ることができるとは、考えにくい。それこそ、ゆうれいみたいに、消えてしまったのでなければ。」

「じゃあ、やっぱり、おぼけだったってこと？」ライアンが両手を下にたらし、おぼけのまねをしてみせながらいいました。「うらめしやー。」

「ちよ、ちよっと！ やめてくださいよライアン！」けらけら笑うライアンに、フェリアルがやつきになっていいました。

さて、こうなったら、けつろんを出すのはこの人しかいません。それはもちろん、ロビーでした。前にも同じようなことがありました

が、こういうときのロビーの意見って、じつにたよりになるんです。

「ロビーどの。」ベルグエルムがロビーにむかっていいました。「ガイルロックの岩場でも、セイレン大橋の上でも、われらはロビーどのに助けられました。フェリアルが見たもの。ロビーどのは、どう思われますでしょうか？」（これはつまり、「ロビーのふしぎな力で、なにか感じる場所がないか？」という意味あいもふくめて、たずねていたのです。）

「そうだよ、ロビーならわかるよね。」ライアンもつづけて、いいました。

ですけど、そういわれてもやっぱりまだ、ロビーもこまってしまいました。たしかに、ガイルロックの岩場やセイレン大橋の上では、なにか、せまりくるもやもやとした危険を感じ取ることができましたが、ここではロビーはなにも、感じることはできなかつたのです（それは、やろうと思ってできることではありませんでしたから）。

「はい、ええと、すいませんけど……」ロビーがこたえます。「たしかにここは、いやな場所だとは思いますが、ぼくにはなにも、感じることはできません。でも、フェリアルさんがなにかを見たのは、たしかなんですから、それはそのまま、受けとめるべきだと思います。ここには、なにかがいるってことです。」

今のロビーにいえることは、それでせいっぱいでした。でも、むりに背のびをしてみたって、よくありませんよね。それはロビーももう、学んでいたことなのですから。ですからロビーは、自分なりに、自分のできることをよく考えて、そういったのです（ですけどロビーの言葉って、あまり多くは語らないことはたしかなんですけど、いつもよく、まどをいているんですね。これはやつぱり、きゆうせいしゆとしての、かれのさいのうなんだと思います）。

「まったく、その通りだ。」そんなロビーの言葉にこたえて、ベルグエルムがいました（ロビーの言葉はまたしても、みんなのことをみちびく助けとなつたのです）。

「目の前のことこそしんじつ。わたしは、それを見あやまつてしまふところでした。」ベルグエルムはそういって、ロビーにぺこりと頭を

下げました。

「ロビーどののいう通り、しんじつを正しく受けとめれば、フェリアルの見たそいつは、なにかしらのりゆうで、われらの目をあざむいているということになる。ここには、そんなれんちゆうがいるということだ。」

ベルグエルムの言葉に、みんなはごくりとつばを飲みこみました。信じたくはありませんでしたが、ベルグエルムの言葉、ロビーの言葉は、まことに正しいことをいいあてているようだったのです。つまりここには、すがたの見えない、なにかがいるってことでした（なんとも、おそろしい話ですが）。

みんなは、あたりをきよろきよろと見まわしてみました。ですが今は、なんのけはいも感じられません。しかしかえってその方が、よけいにぶきみな感じがしました。出てくるんだったらいつそひと思いに、いつきに出てきてくれた方が、まだ気持ちが悪くなことでしょう。いつ出てくるか？ わからないというのは、ほんとうに胸にこたえるものだったのです。

「とにかく今は、さきに進むしかない。進めるうちに、もうすこし進んでおこう。見えない敵からも、うまくのがれられるかもしれない。できればこのさきも、会いたくはないからな。」

「わたしももう、にどと会いたくありません！」ベルグエルムの言葉に、フェリアルも、ぶるる！ とからだをふるわせながらいいました。

「見えない敵か。それじゃほんとうに、おぼけだね。」さいごにライアンがいいました。

「早く、このきもだめしの道が終わるといいんだけど。」

それからみんなは、ふたたび、このおそろしいがけの下の道を進んでいったのです（フェリアルはもうずっと、あつちやこつちをきよろきよろしつぱなしです。こんなことのアトでは、むりもありませんでしたけど）。そしてあるとき。先頭を進んでいたベルグエルムがいったこの言葉で、みんなはついに、今日いちにちのつらい旅の道のりを、終えることにしました。

「ここまでにしよう。これ以上進むのは危険だ。もう、じきにまっくらになる。さきほど、いくつかの安全そうなほらあなを見つけたから、今日はそこで休むとしよう。もちろん、用心はおこたらないようにしなければな。」

みんながほらあなに身をよせたのは、もう、ほとんど夜になってしまったころのことでした。ほんとうは、そんなにはおそい時間ではありませんでしたが、ここは、ひるまでもなおうす暗い、がけの下。まさに、まっくらというひょうげんが、ぴったりだったのです（せいかくには午後六時。野うさぎのこくげんのころでした。ちょうど、スネイルのぎつか屋および食りよう品店が、へい店する時間です。旅の者たちは朝の六時に出発しましたから、思えばこの山道だけで、十一時間以上の時間をついやしてしまったことになるわけでした。このがけの道が、どんなにやつかない道のりであったのか？ よくおわかりでしょう）。

そんな場所でしたから、ほらあなの中はそれよりもっと、まっくらだったのです（これじゃ、フェリアルでなくたってこわいと思うはずです！）。ですからどうしたって、あかりは必要でした（ほんとうなら、危険なものをよびよせてしまうかのうせいがありましたので、あんまりあかりをつけるのはよくなかったのです。ですけど、こんなに暗いんじやしかたありませんし、それにこの寒さです！ 火を起こさないわけにもいきませんでした）。

みんなはまず、小さなランプに火をつけて、ほらあなの中をしらべてまわりました。ベルグエルムが見つけたこのほらあなは、大きすぎず、かといって小さすぎることありません。四人の旅の者たちがひとばんを明かすのには、まさにうってつけといった感じでした（さすがはベルグエルム。お目が高い。これでもうすこしきみの悪い感じでなければ、なおよかったのですが……、まあ、それは、ぜいたくすぎというものでしょう）。

ちなみに、かれらの騎馬たちは、ほらあなのそとの岩かべのあいだに、かくすようなかたちでつないであるのです。さすがに騎馬たちをみんな中にいれられるほどには、このほらあなも、大きくはありません

んでしたから。そして、騎馬たちをみんな中にいれてもなおあまるほどの大きさを持ったほらあなは、ここにはひとつもありませんでした。

ほらあなはおくの方にまで、ほそくまっすぐつづいていましたが、そこはまもなく、いきどまりになっていました。ですけどみんなは、そこでちよつと、おかしなものを見つけたのです。このほらあなはしぜんにできたふうのほらあなでしたが、そのおくの部分の地面に、人がつくったような、れんがやはしらのなごりのようなものが、ちらばっていました。みんなはそれらをひろってしらべてみましたが、とても古いものであるということがい、たしかなことはよくわからなかったのです。

「これらの石は、」ベルグエルムがいました。「あのオーリンの見張り台、あれに使われていた石に、よくにている。ひよつとしたら、むかしオーリンたちが、このほらあなを使っていたのかもしれないな。」
「オーリンたちなら、まだいいけどさ、」ライオンがつづけていいました。「まさか、岩の巨人たちが、ここをねぐらにしてるってことはないよね？」

「いや、それはない。」ベルグエルムがこたえます。「わたしは、ほらあなのまわりや、ここの地面もよくしらべたが、なんの生きものの足あともなかった。それに、巨人だったら、こんなせまいほらあなには、きゆうくつではいれないよ。」

「それならよかった。」ライオンがほつとしていいました。「ガイラルロックの親玉みたいなのが出てきたら、どうしようかと思つてたんだ。」

そういつてライオンは、手足をがおーっ！ とのぼして、おそろしい巨人のまねをしてみせました（ですけどどう見ても、巨人というよりは、いたずら好きの子ぐまといった感じでしたけど……）。

それからみんなは、ようやくといった感じで、野宿のじゅんびに取りかかったのです。ベルグエルムがうまく火を起こしてくれたので、みんなはとつてもありがたい、たき火の火にあたることができました（ライオンがすぐに、その火を大きくしてくれたのは、いうまでもあり

ません)。そしてみんなは、持つてきていた食べものをその火であぶりつつ、まごじにかんたんではありましたが、ささやかな夕食を楽しむことにしたのです(このときばかりはみんな、こわいのを忘れてしまいました。ウルファたちは、肉のはいつたパンや塩づけのベーコンなどをあたたためて食べ、ライアンは、やさいとこなをねりあわせて作った、ドーナツのようなほぞん食をあたたためて食べたのです。ライアンの場合は、それでもやつぱり、メインはお菓子でしたけど……)。そのあとみんなは、菌みがきをして、これからの旅のことをすこし話しあいました。そして、それからほどなくして。旅の者たちぜんいんに、びょうどうに、今日いちにちのつかれがおとずれたのです(つまり、眠くなっただけです)。

「みなの方！ よは、シープロンの王子なるぞ！ 早く、あたたかいベッドを用意せい！」ライアンがふざけていいましたが、みんなはさっさと自分のもうふを取り出して、すこしでもかいてきに寝られるようにと、寝床をととのえてるばかりでした(「ちよつとー！ ほつたらかしのしないでよー！」相手にしてもらえなかったライアンが、ひとりでぶんぶんいってましたけど)。

そして旅の者たちは、そのまま朝までぐっすり、眠ることができました……、といえたらよかったですけど。やつぱり、そううまくあいいにはいかなかったのです(読者のみなさんもそう思いました？ たぶんこれから、みなさんのごそうごうに近いできごとが起こると思います。それはつまり、おぼけ……、おほん！ さてさて、いったいなにが起こるのか！ では、つづきをどうぞ)。

それから、どのくらいの時間がたったのでしょうか？ たき火のほのおはもうすっかり小さくなって、わずかにちらちらと、ほらあなの中をてらしているばかりでした。ほのおの立てる、ごく小さなぱちぱちという音と、みんなの立てる、かすかな寝息。それと、風の泣く、ひゅうひゅうという音。ほらあなの中できこえるのは、そんな音たちでした。そして今、そんな音たちのひとつひとつにびんかんになって注意をこらしながら、耳をすませている人物がひとり、いたのです。

それはだれかといいますと、おぼけぎらいのあの人。そう、フェリアルでした。かれの頭からは、さつきそとの岩場の暗がりの中で見た、あのおそろしいふたつの目のことが、ぜんぜんはなれなかったのです。

フェリアルはなんども、眠ろうとして目をきつ！ とむすびましたが、どうしてもあたりのことが気になってしまって、眠ることができませんでした（すぐ近くで、ぐーすかいて、だらしない寝ぞうで寝ているライアンのことを、ひっぱたいてやろうかと思っただくらいでした）。しっかり寝ておかないと、明日の旅がつらくなるということとは、よくわかっていましたが、どうにも目がさえてしまって、しかたがなかったのです。

フェリアルは横になったまま、ほらあなの中を見まわしました。（寝ぞうのとっても悪い）となりのライアンのむこうでは、ロビーがもうふをきちんとかけて、すやすやとした寝息を立てております。そしてほらあなの入り口では、その見張りやくを買って出たベルグエルムが、岩に背をもたれかけさせたまま、こつくりこつくりやつていました。

それらのようすを見るかぎり、問題はなにもないかのように思えました。しかしフェリアルはそこで、みょうな胸さわぎをおぼえたのです。なんだかだれかに、見られているような……、そんな気がしました。まさかまさか、また、さつきのおぼけなんじゃないだろうか……！ フェリアルのしんぞうは、ばくばくなりひびきました（しんぞうの音で、みんなが起きてしまうんじゃないか？ というくらいに）。

そしてフェリアルは、なんとなく、ほらあなのおくの方に目をむけたのです。そこはこのほらあなにはいったとき、さいしよにみんなが、むかしのれんがやはしらのなごりを見つけたところでした。そこは、ただのいきどまりでした。そんなところに、なにかがあるはずもありませんでした。

しかしそのとき。そこでかれが見たものは……。

くらやみの中で光る、たくさんの、目、目、目！ さつきそとの岩

場で見た、あの目とおんなじやつが、こんどはもう、いちダースくらいも集まって、こつちをじーつと見つめていたのです！

「ぎ、ぎ、ぎ……」もうフェリアルは、おどろいたなんてものじゃありません。のどのおくから声をふりしぼって、こんどこそ、やつとの思いで、ひめいを上げることができたのです。

「ぎやあああー！」

とたんにみんなは、なにごとかと飛び起きました！（ベルグエルムは、とつさに剣をつかみ、ライアンはねぼけて、とつさに、寝る前に食べていたパウンドケーキのはいったふくろをひつつかみました。）そしてそして、みんなもすぐに、フェリアルの上げたそのひめいのわけを、知ることとなったのです。

ひめいを上げるフェリアルのむこう。ほらあなのいちばんおくのくらのやみに光る、それらのたくさん青白い目のことを、みんなもここで、はつきりと見ました。こうなったら、もうこれは、おぼけなんかではありません。それらの目は、たしかに、なにかの生きものたちの目でした。それもあきらかに、話しあいの通じる相手ではないみたいです。そいつらはのどをぐるぐるならして、今にも飛びかかると、旅の者たちのことをしきりにいかくしていました。

「みんなー！ 気をつけろー！」

入り口の方からベルグエルムが、こちらに走ってきていいました。その手にはしつかりと、剣がにぎられております。

「ほのおよー！ はじけろー！」ライアンがとつさに、たき火に残っていたほのおにむかって手をかざしながら、さげびました。とたんにほのおは、ごおーつ！ といきおいよくもえ上がり、ほらあなの中をたちまち、オレンジ色の光でてらし上げてしまいます。そしてその明かりのおかげで、みんなは、このあやしげなたくさん目のしよたいを、知ることができました。

ほのおのあかりにてらし出されたのは、身長が四フィートほどの、

小がらなからだをした生きものたちでした。からだに毛は生えていなくて、木のかわみたいなの、ごわごわしたはだをしております（衣服は身につけていませんでしたので、動物のような生きものなんだと思います）。手足がやたらに長くて、そのためひどく、ぶかっこうに見えるました。ですがもつともいんしよ的なのは、なんといつても、その大きな青白い目だったのです。まぶたがなくて、半分くらいつき出ているその目は、なんともうすきみが悪く、なるほど、おぼけに見まちがえてしまうのも、むりもないことでした。こんな生きものたちが、ほらあなのおくに五、六ぴきかたまつて、旅の者たちのことを、ぐるぐるとおどかしていたのです。

「グブリハッグだー！」

さけんだのはベルグエルムでした。どうやらこの生きものたちの名まえは、グブリハッグというらしいです。

「そいつの目には気をつけろ！ 光の矢を飛ばしてくるぞ！」

目から光の矢！ ひええ、おそろしい！ そして、ベルグエルムがみんなにそう注意した、つぎのしゅんかん。そのグブリハッグという生きものたちが、まさに、そのおそるべきこうげきのための力を、旅の者たちにむかって放ちました。

びゅんっ！ びゅんっ！ 青白い目から、それと同じ色をした青白い光の矢が飛び出して、みんなにおそいかかります！

「うわっ！」そしてその矢は、ほのおのそばにいるライアンのすぐわきをかすめて、ほらあなのかべにあたってはじけました！（ライアンにあたらなくて、ほんとうによかった！）

これですっかり怒ったのは、ライアンです（まあ、とうぜんです）。「このやろー！」ライアンは（ちよつと品が悪かったです）そうさけんで、ふたたび、たき火のほのおにむかって手をかざしました。

「ほのおよ！ かかれ！」

ライアンがそういうやいなや。ほのおがふたたび、ごおーっ！ と音を立てて、まっすぐ矢のようになかたちとなって、グブリハッグたちにむかって飛んでいきました！（矢には矢を、といったところでしょうか？）そしてライアンが放った、そのほのおの矢は……、おみごと

！ 先頭にいるグブリハッグのからだにめいちゅうして、かいぶつをほのおのうずに、つつみこんでしまったのです！（それにしても、ほのおの矢だなんて、いぜんに使った風のたつまきのほかに、ライアンもかなり、おそろしいわざを持っているんですね。しぜんの方のじょうけんがそろえば、こんなにも強いこうげきの力だって、出せるみたいです。やっぱりライアンって、いろいろすごい。）

「やったー！ どんなもんだいー！」

とくいになってはしやぐライアンでしたが、これで相手は、なおいつそう、怒りをばくはつさせてしまいました。こうなつてはもう、たまりません。グブリハッグたちはその長い手足で、ぴよんぴよん、ほらあなのかべをとびはねながら、つぎつぎに光の矢を飛ばしてきたのです。

びゅんっ！ びゅんっ！ びゅんっ！

「だめだ！ みんな早く、このほらあなから逃げろ！」ベルグエルムが、せまりくる光の矢を剣でふりはらいながら、みんなにさげびました。

「ひええーっ！ やっぱり、こうなつちやうのー！」ライアンが、こんどはほのおのかべを作つて、それで矢をはじきかえしながら、いいました。

「フェリアルさん！ 早くー！」ロビーが、半分腰をぬかしたままのフェリアルの手を取つて、さげびます（フェリアルは、あまりのショックに、まだぜんぜん戦えるようになりたいではなかったのです）。

「ひええー！ みんな、待ってくれー！」フェリアルは地面にはいくばつたまま（なかばロビーにひきずられながら）、ほうほうのていで、ほらあなの入り口へとむかいました。

そしてみんなは、（にもつともうふは、逃げる前にあらかじめひつかんできていたうえで）そのまま大あわてで、ほらあなのそとへとむかってかけ出していったのです。

さいごにほらあなをふりかえったみんなが見たものは、追いかけてくるグブリハッグたちと、ほらあなのおくの、地面の中につづいていくかいだんの下からのぼってくる、新たなグブリハッグたちのすがたでした。これでみんなは、この生きものたちが、なぜとつぜん、ほらあなの中にあられたのか？ そのわけを知ることができたのです。つまりこのほらあなは、かれらの住むかくされた地下都市への、入り口だったのです！ その地下都市へとつづいているかいだんが、ほらあなのおくの地面に、(じつにたくみに)かくされていたというわけでした(この地下都市は大むかし、ふくろうの種族であるオーリンたちがつくったもので、今ではすでに、はいきよとなってしまうているものでした。ですが、こんなにすてきな地下都市を、このままほったらかしにしてしまつてはもつたいたい。そう考えたのが、今旅の者たちが出会った、このグブリハッグという生きものたちだったのです。もつともかれらにとつては、そこは都市というよりも、たんなる大きなほらあなにすぎませんでしたけど。かれらはほとんど、けものなみのちのうしか、持ちあわせておりませんでしたから)。

ほらあなのそとに出たみんなを待つていたのは、これまた、グブリハッグたちでした！ かれらは岩の影のやみから、つぎつぎとはい出てきたのです。そしてよく見れば、かいぶつたちは、岩影にかくされていた地下都市へとつづくとびらから、出てきていました。こんなところ、とびらがかくされていたんですね！ これではおぼけのように、あらわれたり消えたり、できるはずです！(そしてこのとびらは、ほんとうにみごとに岩にかくされていて、近くで見てもまったくわからないほどでした。ですからさすがのベルグエルムでも、このとびらのそんざいには、気がつくことができなかったのです。しかもかれらは、その長い手足を使って、岩から岩へ、ぴよんぴよんとびはねていどうするのです。そのため、地面に足あとも残らないのです。まさに、ベルグエルム泣かせ！ なんともやつかない相手だったのです。)しかし、今さらなぞのこたえがわかつたとしても、どうにもなりません。とにかく、ここから早く逃げなくては！ みんなは、岩かべのあいだにかくしてつないでおいたそれぞれの騎馬たちに、あわてて飛

び乗ると（騎馬たちがぶじで、ほんとうによかった！

じつはグブリハツグたちには、動物よりもちせいのある生きものたちのことを、好んでおそうというしゅうせいがあったのです。なんとおそろしい！）、そのまま、まっくらなやみの中へと、矢のようにかげ出していきました。

グブリハツグたちが待て待てと、旅の者たちのことを追いかけて、なんととなく光の矢をあびせかけてきます。ですがかれらの足も、旅の者たちのゆうしゅうなる騎馬たちの足のはやさには、とうていかわいませんでした。いつしか、騎馬たちのあとを追うものは、あいかわらずにびゅうびゅう吹きつづける、谷間の風だけとなったのです。

8、はぐくみの森の子ぎつね

むかし、どこまでも広がっているのかと思うほどの大ききさを持ったその森は、大いにさかえていました。その森をおとずれる者たちは、みな、森のもたらすおしみないめぐみにかんしゃしながら、大いにくつろぎ、食べて、飲んで、楽しんだのです。そのため、ここをおとずれる人たちは、みな、旅のよていがすっかりくるってしまいました。いちにちすすただけのつもりが、三日になり、四日になり。ついには、ふた月をまるまる、この森ですすすことになってしまったほどだったのです。

それには、この森に住んでいる住人たちのせいかくも、深くかわわっていました。とにかくこの森に住む人たちといったら、明るくようきで、はじめて会った人であつても自分の家にいっしゆうかんくらい、わけなくとめてしまうのです。ですがそんなことは、この森の人たちにとつては、ごくあたりまえのことでした。それはつまり、この森が住人たちに対して、じゆうぶんすぎるほどのめぐみを、与えてくれていたからなのです。住人たちはあくせくはたらかなくても、いつでも食べものや飲みものを手にいれることができましたし、そのほか、お金にかえることのできるたくさんのお宝のような品物たち（ぐたい的にいえば、めずらしい花のみつであつたり、宝石のつまつた木の実であつたり。ここにしか住んでいないという、ふわふわ森ペンギンの羽毛であつたり、すばらしいかおりを放つ、森サンゴのえだであつたり。そういう品物たちでした）も、この森の中では、かんたんに手にいれることができました。

ですから、この森に住んでいる人たちはとても心が広く、毎日をするときに、とつても楽しくすすすしていたのです（じつにうらやましいかぎりです）。そしてこの森の住人たちのすばらしいところは、それらのめぐみをだれかれかまわず、みんなで分けあおうとするところでした。とかくせちがらい世の中では、お金でもなんでも、きちょうな品物を手にいれればいれるほど、それらを自分ひとりのところばかりにためこもうとするものです。しかし、この森の人たちにかぎっては、

そんなこととはむえんでした。お金とか宝物とか、そういったものはひとしく、みんなのものであるのだと、かれらは考えていたのです(じつにすばらしいかぎりです)。

みんなをだいにじにするそんなかれらが、とくにたいせつにもてなしたのが、ほかのくにかからやつてくる旅人たちでした。この森がもつともさかえていたところ、西のくにぐにかからはたくさん旅人たちが、この地をめざしてやつてきていたのです。そういつた旅人たちのことを、この森の人たちは、まるで家族どうぜんのようにあつかいました。旅人たちに、かれらの見たこともきいたこともないような食べものや飲みものをふるまい、そして旅のきねんとして、自分たちのたくわえたきちような品物たちを、おしみなく分け与えたのです(ある旅人などは、全部あわせたら家いつけんをまるごと買えてしまうくらいのおねだんになる、山のようにたくさんのおみやげをもらったほどでした。おかげでその旅人は、旅をつづけるのをやめて、この森に住んでしまうことにきめてしまったくらいなのです)。

これで、この森をおとずれる人たちが旅のよていをくるわせてまで、ここにとどまつてしまったりゆうが、よくおわかりいただけかと思いますが。そしていつしか、だれもがこの森のことを、こうよぶようになりました。人々の暮らしをはぐくみ、心をはぐくむ。まさしくここは、はぐくみの森だと。しかし、今ではそれもむかしのこと。この森のはんえいは、思わぬところから、終わりをむかえることとなるのです。

今、三頭の騎馬たちをつれた四人の旅の者たちが、その森のいちばん東の果てで眠りこけているところでした。かれらはもう、なかばなげやりといった感じで、地面の上にてんでんばらばらにちらばったまま、もうふをかぶつてぐーぐー寝ていたのです。

じこくはすでに、海つばめのこくげん。午前十時に近いころになっていました。かれらはいったい、なぜこんなところで、しかもこんな時間に眠っているのでしょうか？ そのりゆうを説明するためには、ちよつと話の時間を、きのうの夜にまでもどさなければなりません。

きのうの夜。すでにべつの場所で寝床についていたかれらは、夜ふけに、あるおそろしいかいぶつたちのしゅうげきを受けました。そのかいぶつたちの名まえを、みなさんはもうごぞんじですよ。そう、グブリハツグです。かれらは、このおぼけみたいな見た目のおそろしいかいぶつたちに、へいわな寝床を追い出され、夜のやみの中をやむなく、逃げのびるはめになりました。

あれから。旅の者たちは、夜のやみの中を走りに走りました（危険なのはもちろん、しようちのうちうえでした）。ですがなにしろ、がけの下はまつくらなうえにも輪をかいてまつくらでしたから、そうかんたんには、正しい道をえらんで進むことは、できなかつたのです。一行はなんととなく、いきどまりの道や、べつのほらあなの中へとつづいていく道に、出くわしてしまいました。しかしそのたびに、みんなは力をあわせて、そのおそろしいがけの下の道からだっしゅつするべく、がんばったのです（いつまたそのへんの岩影から、新たなグブリハツグたちがあらわれないともかぎりませんでしたから！）。

やがて、おそろしいがけの下の道もついに終わりをむかえ、一行が岩かべのあいだのほそいさけ目のようなすきまから、その森のはずれの中へと飛びこんだのは、もう空が明るくなつてしまつたころのことでした。かれらが、立ちのびるたくさんの木々を、どんなにかんげいしてむかえたか？　ごそごそうにたやすいことかと思ひます。それからかれらが取つた行動は、ひじょうにたんじゆんめいかいなものでした。かれらは今、かれらがいちばんやりたかつたことを、頭で考えるよりもさきに、すぐさまおこなつたのです。それはつまり……、さまたげられたすいみんのつづきを、もういちどこで取るということでした！　かれらは頭のさきから、つまさきまで、もうぼろぼろにつかれ果ててしまつておりましたので、森の中にはいったとたん、騎馬たちをつなぐのもそこそこに、もうふにくるまつて、そのままどろのように眠つてしまつたのです（だれだつて、へいわに寝ているところをむりやり起こされて、そのまま夜のやみの中をかいぶつたちにおびえながら、なん時間も走らされるはめにあわされたのなら、心身ともにまいってしまはずです）。

つまりそういったわけで、旅の者たちは（もちろんこれは、ロビーたち、われらが旅の者たちのことをいつているのです。いうまでもないことですね）こんなところで、こんな時間に、眠りこけているというわけでした。でも、もうそろそろ、かれらに旅のつづきを、おこなってもらわなくてはなりませんね。なにしろかれらは、この物語の正しいなだいなしゆやくたち。かれらがこのまま、ぐーぐー寝ているままでは、物語がさきに進みませんもの！ さあ、旅のさいかいです！

「クルッポー！ クルッポー！ 起キロー！ 起キロー！」

とつぜん、あたりにかん高い、なんともおかしなさけび声がひびき渡りました。いったいこれは、なんの声なのでしょう？（どうやら、人の声ではなさそうな感じですが。）その声は、旅の者たちのどまん中。かれらの中でもいちばんからだの小さな、ひつじの種族の者である、ライオンのいるあたりからきこえてくるようでした。

「クルッポー！ クルッポー！ 起キロツタラ、起キロ！ イイカゲン、起キロツ！ コノヤロー！」

だんだんと大きく（そして言葉使いもきたなく）なつていくその声が出てるのは、ライオンのそばの地面におかれた、あるひとつの小さなはこからのようでした。そしてよく見てみると、その声を出しているのは、時計のはりのついているそのはこの中から飛び出して、羽をばたつかせながらわめく、小さな小さな、白いはとのおもちやだったのです。

「うーん……、あと五分……」ライオンはねぼけてそういいながら、はと時計のかたちをした小さな目ざまし時計にむけて、手をのばしました（なるほど、これはライオンがシープロンドから持ってきていた、目ざまし時計だったんですね。それにしても、ずいぶんおかしなものを持ってきたものです）。ですがこの時計は、どんなおねぼうさんでもぜったいに目がさめるように、ひじょうにきびしく作られていたの

です。

「起キナイヤツニハ、オシオキ！ オシオキ！ クルツポー！」

時計のとはそうさげぶと、羽をばたつかせて、ライアンのほほにむかつて、(まるでラグビーのせんしゅみたいに)全身で体あたりをくらわせました！ そしてそのあとは、するどいくちばしこうげきです！ さんざんつつつかれて、こうなつてはもう、起きないでいられる者などはいませんでした。

「わわ、わかったよ！ もう起きてるだろー！ライアンがそうさげぶと、時計のとはつつつくのをやめて、さいごにひとこと、こういつて、すばこのかたちをした時計の中にひっこみました。

「オハヨーー！」(うーん、にくたらしい！)

こうして旅の者たちはここに、(さわやかな目ざめとはいえませんが)新しい旅のいちにちはじまりを、ふたたびむかえることとなったのです。みんなは、まずは三頭の騎馬たちがちゃんといること、ということをおぼえて、ほつとしました(きのうは見張りも立てず、あたりを気にかけることもなく、眠ってしまったので、騎馬たちがちゃんとぶじでいるかどうかと、かれらはまつさきに心配したのです。

もつとも、かれらの騎馬たちはメルをはじめ、みんな強くてかしこい馬たちばかりでしたので、すこしくらいの相手であれば、わけなくやっつけてしまうほどの力は持っていました。それからみんなは、あわただしくにもつをまとめると、地図を広げて今いる場所のことをかくにんしあい、今日いちばんの話しあいを、ここにおこなうことにしたのです。

「よていより、ずいぶんとおそくなつてしまつたが、ようやくついな。まさか、こんなところで野宿することになるとは、夢にも思つていなかったが。」ベルグエルムが、やれやれといった感じでいいました。

「どんなところだつて、あんなおそろしいところで寝るよりはましですよ。」フェリアルが、ぼーつとしてひきつった顔をしたままで、こたえました(フェリアルはずつと、おぼけの夢にうなされて、しつか

り眠ることもできずにいました。おかげで目の下にはぼつちり、くまができていたのです。

「まだまだ、これからがほんばんなんらから、しっかりしてよ、フェリー。ほら、あーん。キャンリーあげるから。」ライアンがそういつて、フェリアルルの口の中に、ぼうつきのいちごキャンディーをいっぽん、つつこみます（もちろん自分も、同じものをなめていました。それは、かれの話し方でもわかりますよね）。

「めざすモーグっていうまちは、ここからどのくらいあるんでしょうか？」ロビーがベルグエルムにたずねました（ロビーの口にもまた、ライアンからももらったキャンディーがはいっていましたが、かれはなるべく舌たらずにならないように、気をつけてしゃべっていました）。

「このはぐくみの森は、とほうもなく大きな森なのです。」ベルグエルムがロビーに地図をしめしながら、こたえます。「そして、今わたしたちがいるのは、その東のはずれ。モーグはこの森をつきつた、西のはずれに位置しています。きよりにして、およそ十五マイルはあるでしょう。しかし、じゅんちように進めたとしても、この森の中では、やはり、なにが起きるか？ わかりません。そのこともじゅうぶん、考えにいれておかなければ。」

ベルグエルムはそれから、このはぐくみの森のむかしと今のようすのことに、みんなに説明してきかせました。さいしよにお話ししました通り、このはぐくみの森というところは、かつて大いにさかえ、文字通り、あらゆる人たちの暮らしをはぐくんでしたのです。しかし今では、西の街道を使う者もいなくなり、モーグのおそろしいわさも広まって、このはぐくみの森まで足をはこぶ者たちは、ほとんどいなくなってしまうました。ここからいちばん近いみやこであるシープロンドに住む、シープロンたちでさえ、この森の今のことについては、ほとんどなにも知らなかったのです。

「この森の中が、今どうなっているのか？ どんな人たちが、今住んでいるのか？ それはだれにも知られていない。むかしのように、この森が今でも、人々の暮らしをはぐくんできればよいのだが。そう考え……、うぷつ！」そこまで話したところで、ベルグエルムの口にな

にかがつつこまれました。それは、そう、やっぱり、ライアンのぼうつきのいちごキャンデーだったのです（これで、四人ぜんいんの口にキャンデーがはいったわけです）。

「あんまり深く考えたって、しようがらいよ。いってみれば、わかることなんらから。どのみちぼくらは、この森を通っていかなくちや、もくてき地までいけないらからさ。そうれしょ？」

みんなはライアンにはかなわないなと思いつつ、かれの意見もまた、もつともだと思いました。たしかに、あれこれここで話しあっていたとしたって、旅がさきに進むというわけでもありません。

「う、うむ。では、みんな、じゅんびをととのえて、さっそく出発することにしよう。」ベルグエルムがいました。

そしてみんなは、（口にはいったキャンデーをなめながら）手早く出発のじゅんびをととのえと、この果ての見えないほどの大きな森、はぐくみの森の中へとむかって、ふみこんでいったのです。

「いら、ひゅっぱくつ！」ライアンがひとこと、大きくかけ声をかけました（ちなみに、「いぎ、しゅっぱくつ」といいましたが）。天気はうすぐもり。ひゅうひゅうと風の吹く、ある朝のことでした。

「ねえ、こいつってほんとに、はぐくみの森なの？」

森の中のものさみしい道の中を、馬ではかぼこ進みながら、ライアンがつぶやきました。かれのいう通り、森の中にすこしはいつていただけで、あたりのようすはまるつきり、変わっていつてしまったのです。

まず、いくらもいかないうちに、道はばが急にせまくなりました。それも、ただせまいだけならどうってことはありませんでしたが、その道を横切るかたちで、たくさん木の根っこが、うねうねとからまりながら張り出していたのです。ですから、馬に乗っている者たちは、かけ足でびゅんびゅん！ というわけにはいきませんでした。しんちように進んでいかなければ、根っこに馬の足を取られて、馬といつしよにすってんころりん！ 地面に投げ出されてしまうのです。

変わったのは道だけではありません（そしてそっちの方が、この森

をゆく旅の者たちにとっては、かんげいのできないものでした。まだ午前十時。海つばめのこくげんをせいぜいまわったころだというのに、森の中にはろくに光もとどかず、あたりはぶきみにうす暗かったのです（せっかく、あのうすきみの悪いがけの下の道からのがれられて、よろこんでいたところでしたのに）。しかも、木々のみきはふしくれ立っていて、

まるでいぼがえるのはだみにごわごわしていました。そしてそこからのびるえだといったら、てんでんばらばらに、あちらこちらへと、のびほうだいにのびていたのです。

そんな場所でしたから、とてもまともな植物が育っているわけがありません。みどりあざやかな葉っぱのかわりに、かれかけたつる草のたばが、えだにぐるぐるからみついております。かわいらしいきれいな色のお花のかわりに、なんともどくどくしい色をしたきのこのむれが、地面にびっしり生えていました（ぜったいに食べてはいけません！どくきのこにきまっていますから！）。

これでは、ほんとうにここがはぐくみの森なのか？ とライオンがぼやくのも、むりありませんでした。だってどう見ても、この森が人々の暮らしをはぐくんでくれるようには、見えませんでしたから。

「西の街道がとざされてからひさしいが、そのえいきようは、この森にまですつかり、およんでしまったようだな。かつてのはんえいのおもかげは、もうここにはないようだ。」先頭をゆくベルグエルムが、道をふさぐようにせり出している木のえだを、手ではらいのけながら、いいました。

「はぐくみの森のことは、名まえくらいしか知らなかったんだけど、これじゃもう、名まえを変えた方がいいみたいだね。『おぼけ大集合の森』、なんてのはどう？」ライオンが、フェリアルの方をふりかえりながら、けらけら笑ってつづけました。

「やめてくださいよ！ えんぎでもない！」フェリアルがむきになって、ライオンに手をふりかざしながら、いいかえしました（仲のいいこと）。

「ぼくのいたかなしみの森も、そんなに明るい森じゃなかったけ

ど、「そうつぶやいたのは、ロビーでした。「この森は、ひどいです。こんな森だったら、ぼくはたぶん、いっしゅうかんでひっこしますよ。」ロビーはそう言って、顔のまわりによつてくる小さな羽虫のむれを、手でぱたぱたとはらいのけました（みんなさつきから、この虫が顔のまわりをぶんぶん飛びまわるのが、気になってしかたなかったのです!）。

「ぼくは、二日でギブアップだね。」ライアンが、ロビーにむかってそういいます。「だって、こんなさびしい森においしいお菓子屋さんがあるとは、とても思えないもの。」（ライアンのかいてきさのきじゆんって、おいしいお菓子があるかないかによるところが、大きいみたいですね……）

「あ、そういえば。」ライアンの言葉に、ロビーが急にあることを思い出していいました。

「スネイルさんのお店には、きんじよのおばあさんがやいた、おいしいホワイトケーキと、チョコクッキーがあるんです。そんなにお菓子が好きなら、あるとき、買ってあげばよかったですかな?」

これをきいて、ライアンの目つきが変わります。

「ええーっ! それをさいしょに買ってよー! ホワイトケーキに、チョコクッキー! 食べたい!」

ライアンはよだれをたらしながら、ロビーのことをぼかぼかたたいていいました（なんとか、今からもどって買いにいこうとするのだけは、やめさせましたが……）。

こんな感じで（ライアンの場合はあまいお菓子へのげんそうをいだきつつけたまま）、旅の者たちはしばらくのあいだ、このささくれ立った森の中の道を進んでいったのです。道はあいかわらずせまく、木の根はあいかわらずうねうねと、地面をはっていました。そのうえしばらくいくと、道はあつくつもった落ち葉の中に、しばしばうもれてしまっているようになっていました。そのたびにみんなは、正しい道のほうがくをさ

がしあてるのに、くろうしたのです。

さらにこのあたりになると、見上げる空のほとんどいちめん

を、まがりくねったえだのたばや、黒っぽい葉っぱのかたまりが、おおいつくしてしまっているようになっていました。ですから一行は、森のおく深くにはいつてからというもの、ひさしく、おひさまのすがたを見ていなかったのです。たまにちらちらと、黒い葉のあいだから、そのの光を見るのができましたが、そのほかの大部分の時間は、みんなは暗くぶきみなこの森の中の道を、とぼとぼと、進んでいかなければなりませんでした。

それでもなんとか、一行はめざすモーグのある西のほうがかへとむかつて、すこしずつですが、きよりをちぢめていくことができました。しかし、やっぱりこれが、旅の道のいじわるなところ。そのさきの道は、今よりもっと、ひどいありさまとなってしまうたのです。

地面はどこもかしこも落ち葉にあつくおわれ、どこに道があるのか？ いやいよまったくわからなくなってしまいました。なんとかほうがくだけでも見さだめようと、ベルグエルムがほそい木を切つて、そのねりんをしらべてみました。なにせここは、日もろくにあたらない、うす暗い森の中。ほうがくはぜんぜん、わからなかったのです（これはボーイスカウトなどがおこなう、ほうがくをしらべるためのわざなのですが、みなさんはごぞんじでしょうか？ 木にはねりんというものがあつて、それは日のよくあたるほうこうだけ、よく育っているものなのです。ベルグエルムはそのねりんを見て、ほうがくを知ろうとしたのです）。

「まいったな。この森は、よそう以上にやっかいだ。」ベルグエルムが、とほうに暮れながらいいました。「せめて光のむきだけでもわかれば、ほうがくがわかるかもしれないのだが、このあたりでは、どこにも、ひとすじの光さえさしていない。」

「もうすぐ、おひるなんだけど、」ライアンが、にもつの中からあのはどの時計をひっぱり出して、つづけました。「これじゃまるつきり、夕ごはんの時間だね。どっちにせよ、ちよつとひと休みして、なにか食べようよ。今日はまだ、いちごキャンデーしか食べてないんだもん。」

そうして、旅の者たちはしかたなしに、手ごろな岩の上にすわりこ

んで、とりあえずのおひるごはんをとることにしたのです（張り出している木の根の上の方がすわりやすかったのですが、木の根の上にすわったら根っこをいためてしまうことになりますので、あえてみんなは、岩の上をえらんですわっていたのです）。みんなは食べながら、このさきの道のことについて話しあいました。正しい道を見つかるためのうまい方法は、ざんねんながら、なにも思い浮かびませんでした（ライアンのしぜんの力をかりるわざも、道さがしにかんしては、あまりやくには立ちませんでした。風の力をかりてみても、てんじょうにあつくしげったえだや葉っぱをまとめて吹き飛ばすまでのいりよくは、ありませんでしたし、ほのおの力では、なおさらだったのです。

同じところになんどもくりかえしてわざをぶちこめば、あなをあけられないこともありませんでしたが、そんなことをそのつどしていたら、ライアンもつかれてしまって、旅をつづけるどころではなくなってしまうでしょう。そのうえ、そもそもそんなことをしたら森をはかいつることになってしまいますから、しぜんをあいつるライアンにとつても、できればそんなまねは、したくはありませんでした）。せめて木にのぼって、

黒くおおわれたてんじょうの葉っぱの上に、顔を出すことができればよかったです。木の高さはみな三十フィートほどでもあったうえ、しかもねじまがったそのみきは、上の方にいくほどほそくなって、そとにむかってそりかえっていたのです（いわゆる、ねずみがえしというやつです）。これではどんなに木のぼりのじょうずな名人だつて、てんじょうの上に顔をのぞかせるなんてまねは、とてもできそうにありませんでした（じつさい、みんなの中でいちばん身のかるライアンが、とちゅうまでのぼってみましたが、かれはそこで、こうけつろんを出したのです。「むりー」）。

さて、旅の者たちはどうするのでしょうか？　かれらのむかうべき道のさき。それはロビーのこの言葉によって、きまったのです（いつも通り、またみんなから、意見をもとめられてのことでした）。

「道がわからない以上は、ぼくたちの力ではどうしようもないと思います。だれか、この森に住んでいる人をさがして、力を貸してもら

うのがいいと思う。」

ロビーの言葉は、正しいものでした。自分たちの力をこえる問題には、人の助けをすなおにもとめることも、またたいせつだったのです。

「たしかに、それがいちばんいいようです。」フェリアルが、ロビーの言葉にこたえていいました。「むかしのなごりがまだ残っているのなら、森のまん中までいけば、まちがあるはず。今でも人が住んでいるのかどうかは、わかりませんが。」

そのフェリアルの言葉に、ベルグエルムもうなずいてつづけます。

「はんえいはかこのこととはいえ、これだけの大きさの森だ。だれも住んでいないとは思えない。とにかく、そのまちまでいってみよう。住人がいることを、願うばかりだ。」

「でもさ、そのまちまではどうやっていくの?」さいごにライアンが、もつともなしつもんをしました。そしてそのしつもんに対して、ベルグエルムはいたってまじめな顔をして、こうこたえるばかりだったのです。

「かんをたよりにいくしかないな。運がよければ、道あんないのかばんのひとつも、立っているかもしれない。」

うくん、さいごは、かんがたよりですか……。しかし、ほかに手立てがない以上、ベルグエルムのそのかみを、たよりにしてみるほかはありません。やはりベルグエルムは、みんなのいちばんの、みちびき手でしたから。

ふたたび出発というところで、ロビーがフェリアルに、そつとたずねました。

「ベルグエルムさんって、しんちょうなのか? だいたんなのか? どっちなんでしょう……?」

するとフェリアルは、にが笑いを浮かべながら、小さな声で、そつと、ロビーに耳うちしたのです。

「ときと場合によるんです。わたしにも、いまだに全部はわからないんですよ。」

それからしばらくして。道がとつぜんひらけて、騎馬たちがその広

場に飛び出したとき。みんなはとてもおどろいたものでした。まさに、どんぴしゃり！ 一行は、はぐくみの森のどまん中。むかしのはんえいのなごりの残る、そのまちの広場へとやってきたのです！（思わずライアンとロビーは、おたがいの手のひらをぱちん！ ともにあわせてよろこびあいました。ベルグエルムのかんが、みごとてきちゆうです！）

広場にはたくさんのお家々がたちならんでいました。しつくいのおぬられた白いかべに、茶色い木のはしらがとてもきれいとけこんでおります。それらの家はみんな二かいだてで、二かいのまどのそとには、色とりどりのペンキでぬられた、かわいらしいバルコニーもついています。

お店もたくさんありました。森のめずらしい食べものをあつかったレストランや、おしやれなカフェテラス。パン屋さんに、本屋さんに、洋服屋さんに、おみやげ屋さん。そしてライアンの大好きなお菓子をとりそろえたお店まで。じつにさまざまなしゅるいのお店が、ところせましと、この広場のまわりにはならんでいたので。

よかった。旅の者たちはさぞかし、よろこんでいるにちがいない。読者のみなさんの

中には、そう思った方も多いことかと思えます。ですが、こう思った方も、同じく多いのではないのでしょうか？ なにか変だな？ と（こんなに暗くてさびしいところに、急にこんなにはなやかな場所があらわれるなんて、よく考えたら、やっぱりおかしいですね）。

そうなのです、わたしもできれば、旅のみんなのことをよろこばせてあげたかったです。さんねんながら、やっぱりまた、そううまくいぐあいにはいきませんでした。

この広場で旅の者たちが見たもの。家々に、お店に、さまざまなかざりものに、広場ちゆうおうの大きなふんすいにいたるまで。それらはすべて、とうのむかしにうちすてられ、荒れほうだいになったままの、むぎんないきよだったのです！（せっかく、ライアンとロビーが、ハイタッチしてまでよろこんでいたというのに……）

旅の者たちはがくぜんとしました。やっぱりこの森には、もうだれ

も住んでいないのか……。みんなの気持ちは、重くふさいでしまいました。

しかし、いつまでもおちこんでいるわけにもいきません。みんなは気持ちを強く持ちなおすと、まずはそれらの家々やお店を、しらべてまわることにしたのです。

かれらはまず、いちばん大きくて、いちばんしつかりしたままのたてものの中に、はいつてみることにしました。それでも入り口のとびらはなかばくずれてしまっていて、さびついたちようつがい、かろうじてくつついていただけだったので（とびらがくつついてはいるだけでも、まだましな方です。ほかのたてものでは、とびらはみんなくずれきってしまっていて、地面に落っこちてしまっていましたから）。

たてものの中は、もうなん年も（あるいは、なん十年？）吹きさらしになっているままのようで、床にはたくさん植物やきのこまで、生えているありさまでした（旅の者たちにびっくりして、小さないたちのような野生の生きものが、あわてて逃げていったくらいでした）。そしてはいつてすぐのところ、大きな木のカウンターがひとつあって、そこにはいつさつの本が、おきっぱなしになっていたのです。

「どうやら、やどちようのようだな。」ベルグエルムがその本を手にとって、いいました。「ここはかつての、やど屋のようだ。たくさんの旅人たちが、ここにとまっていったのだろう。」

ベルグエルムはそういつて、そのやどちようをばらばらとめくつてみました（そうしたら本のページがばらばらになってこぼれ落ちてしまったので、ベルグエルムはあわててそれらのページを集め、こんどはしんちように、そつと取りあつかうことにしました）。

そこにはたくさんのお客さんたちの名まえや、そのかれらからのおれいの言葉などが、びっしりと書いてありました。どうやらかつてこのやど屋は、森でいちばんはんじようしていた、ゆうめいなやど屋であったようなのです（もつとも、このやどの主人は、お客さんからはとんど、やどだいをもらうことはありませんでした。前にもいいました通り、この森ではどこの家だつて、みんなをわけなくとめてしまうのです。ですからこのやどの主人は、もつぱら自分のしゅみで、この

やど屋をけいえいしていました。

この主人のお目あては、やどだいのかわりに、旅人たちがもたらしてくれるものでした。それはつまり、旅人たちの話してくれる、胸おどるような冒険のお話だったのです。さぞかし、たくさんの冒険の話をきくことができたんでしょね。冒険好きなわたしにとっては、うらやましいかぎりです。

ですが、そんな大きなやど屋の中でさえ、旅の者たちにとってやくに立ちそうなじょうほうは、なにも見つけることはできませんでした。それからみんなは、さらになんけんかの家やお店をしらべてまわって見ましたが、やはり新しい住人につながるような手がかりなどは、なにも見つけることができなかったのです。

「見て見て、ロビー！ はちみついり、ルインビスの花のアイスクリームだつて！ すごーい！」ライアンが、今はからっぽになっているアイスクリーム屋さんの店さきで、残ったメニューの絵をながめながら、いいました。「こっちの、モンブランナッツいりのココア・アイスクリームも、おいしそー！ なんでみんな、いなくなっちゃったのさ！ 食べたかったのにー！」

(じだんだをふんでくやしがるライアンをロビーがなだめていた) そんなときのことです。ロビーはふいに、だれかの声をきいたような気がしました。ベルグエルムとフェリアルは、ずっとむこうの本屋さんの中をしらべているところでしたし、話し声がここまできこえるはずもありません。それにその声は、あきららかに、かれらの声とはちがつていました(もちろん、ライアンの声でもありません)。

ロビーはあたりを見まわしてみましたが、自分たちがい、この広場にはだれもいるはずもなさそうでした。家々のまどや、てんじょうの木々のえだや、葉っぱにいたるまで、すみずみまで目をこらしてみましたが、やつぱりだれもおりません。ですが、そこでロビーはまたしても、その声をきいたのです。それはだれかが、二、三人で話しあっているような声でした。

「騎士みたいだぞ、ほんとうにいいのか？」男の人の声がきこえまし

た。

「だれだろうがかんけいない。おきてを忘れたか。」もうひとりの男の人がつづけました。

「むりだよ、やめようよ。」こんどは、それよりおさない感じの声をしました。どうやら、子どもの声。小さな男の子のようです。

「だめだ。いいか、さつきいった通りだ。おまえがいけ。うまくやるんだぞ。」

声はロビーの頭の中に、ちよくせつひびいてくるかのようでした。その声はとぎれとぎれな感じで、話している内ようもくわしくはきき取れませんでした。ロビーはなんだか、いやな感じをおぼえたのです。どうもなにかの悪いそうだんをしているように、きこえたからでした。そして話し声は、それっきり、ぱったりときこえなくなってしまうのです。

ロビーはこのことをライアンに伝えようとしたが、ライアンはあいかわらず、こんどはべつのお菓子屋さんのかんばんメニューである、「クリームいりの、森ペンギンのかたちをしたやき菓子」にむちゆうになっいて、とても話を切り出せるような感じではありませんでした。ですからロビーは、ベルグエルムたちにそうだんしてみようと、ひとり、かれらのいるむこうの本屋さんにまで、てくてく歩いていくことにしたのです（とりあえず、ライアンのことはそっとしておくしかありませんでした）。

「どうしました？　ロビーどの。」ベルグエルムとフェリアルが、本屋さんで地図をしらべながら、はいつてきたロビーにむかつていいました。

「だれかの声を、きいたような気がしたんです。どこで話していたのか？　それはわからないですけど……。三人くらいで、ぼくたちのことについて、話しあっていたみたいなんです。この近くに、いるのかも。」

ロビーは半分、自信なさげにいましたが、ベルグエルムたちの反応は大きなものでした。

「それはありがたい！ この森にはまだ、住人がいるんですね！」
フェリアルが思わず喜びました。

「うむ、これは思いがけないことだ。さっそく、かれらをさがしにいこう。」ベルグエルムも、うれしそうにつづけました。

しかし、ロビーの気持ちは、まだもよもよとしたままでした。いやな感じはあいかわらずつづいておりましたし、声のぬしであるかれらが、はたしてほんとうに自分たちを助けてくれるものなのかどうか？

ロビーにはなんとも、はんだんがつかなかったのです。

そんな、おりもおりのこと。その声はそのたてものの入り口の方から、とつぜんきこえてきました。

「あなたたち、旅の人？」

騎士たちはとつさに、腰の剣に手をかけてけいこいしました！ ですがすぐに、その手をひっこめることとなったのです。それはつまり、入り口のそとに立っていたのは、いがいにも、小さな十さいくらのとのしの、ひとりのかわいらしい男の子だったからでした。

その子はきいろいろいセーターに茶色のズボンすがたの、きつねの種族の男の子でした。肩くらいまでのびた長めのかみを、頭のうしろでむすんでおります（かみの色はきいろがかつた茶色。まさにきつね色です）。頭の上にはきつねの耳。おしりからは大きなきつねのしっぽ。小さな茶色いかばんを肩からたすきがけにかけていて、そのかばんには白くてふわふわしたまるいかざりがひとつ、つけられています（これは森ペンギンの羽毛から作られています）。

「きみは、どこからきたんだ？ この森の住人かい？」ベルグエルムが男の子にたずねました。

それに対して、きつねの男の子はずつとにこにこした顔のまま、こうこたえたのです。

「そうだよ。ここからすこしいったところに、ぼくたちフォクシモンたちの村があるんだ。あなたたちはだれ？ なにかこまつてるの？」

こんどはこの男の子の方が、旅の者たちにしつもんをしました。ちなみに、フオクシモンというのは、かれらきつねの種族の者たちのことをさす、よび名です（ウルファ、シープロン、カピバル、オーリン、そしてフオクシモン。種族のよび名も、けっこう出ましたね）。

「わたしたちは、東の地から、わけあって、旅をしている者だよ。モーグまでいきたいんだが、道がわからないんだ。だれか、力になってくれる人はいないかな？」ベルグエルムがこたえました。もちろん、旅のもくてきことは、かんたんにはしゃべるわけにはいきません。ただの旅人のふりをするのが、ここではいちばんいいのでした。

「それなら、ぼくの村においでよ。みんな、いい人ばかりだよ。村長さんにたのめば、ロザムンディアのいせきまで、あんないしてくれると思うから。」きつねの男の子が、あいかわらずにこにこした顔のまま、そういいます（ところで、きつねの種族のかれらは、モーグのことをロザムンディアのいせきとよんでいるようですね。モーグというよび名は、もともと南のくにで作られたよび名でしたから、かれらはそのよび名のことを、知りませんでした。ですから、「モーグってなに？」という男の子に、ベルグエルムが「かつてロザムンディアとよばれていた、まちのことだよ。」と説明したことで、「なあんだ、ロザムンディアのいせきのことかあ。」ということになったというわけなのです）。

もちろん、旅の者たちは、その申し出をよろこんで受けることにしました。ですがロビーだけは、やっぱりいまだに、しつくりこなかったのです。それにこの子の声は、さつき頭の中にきこえてきた、あの男の子の声にておりましたから。それでロビーは、ために、こうきいてみたのです。

「ねえ、きみはさつき、だれかといっしょにいた？　ぼくたちのことを、話していなかったかな？」

これをきいて、きつねの男の子はいっしゅん、どきつとしたように見えました。しかしあいかわらず、にこにこした顔に変わりはありません。男の子はロビーにむかって、こうこたえるばかりでした。

「やだなあ、ぼくはひとりだよ。この広場は、ぼくのかっこうのあそ

び場だからね。大人たちはあぶないからきちやだめだっていうけど、そんなことないよ。そんなことより、さっ、あんないするから、早くぼくについてきて。」

こうして、旅の者たちはこの新しく出会ったきつねの男の子といっしょに、かれらフォクシモンたちの住む村へと、むかうことになったのです。

「ぼくは、チップリンク・エストルっていうの。チップでいいよ。よろしくね！」

ところで、だれかをひとり忘れているような……、あつ！ そういえば、ライアン！ みんながライアンのことをさがしに、お店のならんでいる場所までもどると……、かれは今、さまざまなフルーツキャンデーをあつかったせんもん店の前で、ショーウィンドーの中の見本をうっとりしながら、ながめているところでした。

フォクシモンたちの村は、広場からいくらかもいかなないところに、ひっそりとかくれるようにしてありました。村のまわりは木でつくられたかべにぐるりとかこわれていて、そのさまはまるで、とりでのようでした（なにかりゆうがあるのでしょうか？）。入り口の門のまわりには、たくさんきつねの種族の者たちの見張りが立っていて、その手にはみな、大きな弓矢がかまえられております。そのようすをひとめ見たみんなには、なんだかこの村が、とてもぶっそうな感じに思えました。ですが近くによってみると、その見張りの人たちはみな、きつねの男の子チップと同じようににこにこ笑っていて、とてもあいそよく、旅の者たちのことを出むかえてくれたのです。

「ようこそ、フォクシモンたちの村へ！ さあ、どうぞゆつくりしていつてください！ 食べ物、飲みもの、なんでもありますよー！」

そのあまりのかんげいぶりに、旅の者たちはちよつと、びつくりしてしまいました。ですが、そんなみんなのことをうしろからぐいぐいおしながら、チップはこういって、みんなのことを、村の中へとまねきいれるばかりだったのです。

「みんな、お客さんがめずらしいんだ。ちかごろじゃ、だれもこの森

にはやってきてくれないからね。さあ、はいってはいって。ゆっくりして行ってよ。みんな、いい人ばかりだよ。」

こうしてみんなは村の中へとあんなにきれいでしたが、人々の明るさとはうらはらに、村の中はなんだかさびれていて、暗い感じがしました（てんじようはやっぱり、木々のえだと黒い葉であつくおおわれておりましたので、ふつうに暗かったのですが）。木とわらで作られた家々は、みんなもうずいぶんとくたびれている感じで、中にはだれも住まなくなったまま、ぼろぼろにうちすてられている家まであったのです。

そんな中でたくさんのフォクシモンの人たちが、みんな笑顔で、旅の者たちのことを出むかえてくれましたが、その笑顔はなんだかぎこちなくて、心から笑っているようには見えませんでした。そしてなによりふしぎに思ったことは、みんな旅の者たちが今日ここにやってくるのだということを、はじめから知っていたかのように、じゅんびばんたん、かんげいの用意がととのえられているということだったので（小さなはたをばたばたとふつて、出むかえに出ている人たちの、頭の上には、「ようこそフォクシモンの村へ!」と書かれた、大きなまくが張りめぐらされておりましたし、そのまわりには色とりどりの、きれいなはたやかざりものまで、たくさんかざりつけられていました）。

その場ちがいな、はなやかさからいっても、それらはどう見ても、ふだんからこの村にいつもかざってあるものなのだとは、とうてい思えませんでした。チップにきいてみても、「たまたま旅人かんげいまつりのおまつりのときに、みんながやってきた」というわけでもないそうですし、「ほかにべつのお客さんがきていた」というわけでも、なかったのです。これはやっぱり、旅の者たちみんなのためだけに、じゅんびされたものなのだということでした。いったいいつのまに、じゅんびしたのでしようか?」。

そんな大かんげいのまつただ中を、旅の者たちは（ちよつといごこちが悪そうに）歩いていきました（ライオンだけは大手をふつて、にこやかに、出むかえの人たちのかんげいにこたえておりましたが）。そしてみんなは、村のまん中にあるいっけんの大きな家の前に、あん

ないされたのです。その家はほかの家とはちがって、すべてまるたでつくられていて、つくりもがっちりとしていました（いわゆるログハウスを思い浮かべてもらえれば、それに近いと思います）。そしてその家の入り口の前に、旅の者たちのことを出むかえるかたちで、三人のきつねの種族の者たちが立っていたのです。

「みんな、こちらがこの村の村長さんだよ。」チップがみんなに、村長さんのことをしようかいました。村長さんは、もうかなりのおとしよりで、手にはよくみがかれた、きれいな木のつえを持っております。うっすらときいろを残した白い毛の色をしていて（これはとしを取って、毛の色が白くなってしまったのです）、さまざまなしゅうのなされた、りっぱなチョッキを着ていました。

「村長さん、この人たちは、旅の人たちなんですよ。道にまよっていたみたいだから、つれてきました。力を貸してあげてくれますか？」

チップの言葉に、旅の者たちはみんなぺこりと頭を下げて、それぞれがまず、じこしようかいをおこないました（これはお客さんとしての、れいぎでした）。そして村長さんは、そんなみんなのあいさつをにこにこしながらきいたあと、自分もまた、あいさつをしてかえしたのです。

「うむむむ。よく、きなさつたな。わしは、この村の村長をつとめております、ランドン・ホップという者ですよ。こっちは、そうだんやくの、ティッドローとロラじや。」村長さんはそういって、そばについているふたりのことをしようかいました。ふたりともかなりたくましい感じの男の人で、きつねの種族ではあるものの、背だけはウルファの騎士たちに、ひけを取らないくらいだったのです。

「ここにきたからには、どうぞご安心ください。なんでも、あなたたちのぞみ通りにいたしましょう。」そうだんやくのふたりがいてねいにおじぎをして、旅の者たちにいいました。

そしてさいごに、村長さんがみんなの手を取りつつ、こういって、旅の者たちをその家の中へとまねきいれたのです。

「ささ、どうぞ中へ。かんげいのうたげの席ならば、もうすつかり、

とどのえられておりますでな。もちろん、あなた方だけのために、とくべつに用意させましたのじや。お酒などはいかがです？ わが村じまんの宝石の実から作ったくだもの酒が、たつぷり用意してありますでな。おなががおすきなら、でき立ての肉の料理も、きのこの料理も、たくさん用意してありますぞ。」

こうしてみんなは、家の中へとあんないされましたが、ロビーも騎士たちも、なんだかしっくりこない感じでした。今ここについたばかりだというのに、自分たちのためのかんげいのうたげの席が、すでにとのえられているとは、いくらなんでも話ができすぎています(だって、みんながこの村の近くにやってきてからここまで、時間にしたら、ものの五分もたつていませんでしたから。村のはなやかなかざりつけのこともふくめて、そのあいだにうたげの席をととのえて、でき立ての料理まで用意してしまうなんて、やっぱりおかしいですもの。えんかいの場だけなら、ふだんからいつもじゅんびしてあったとも、いえなくもないのですが、お料理はむりですよ。だれかのたんじようパーティーが、きゆうきよとりやめになったので、その席や料理をさいりようしているというわけでもなさそうでしたし)。

「なんだか、変だと思いませんか？」

ロビーが村長さんたちにきこえないように、そつと、前をゆくベルグエルムとフェリアルの方なりにいいました。さきほどの広場でのあのふしぎな声をきいてからというもの、ロビーの頭の中には、もやもやとしたいやな感じが、ずっと消えずに残っていたのです。

「わたしもそう思います。なにか、おかしい感じがです。」ベルグエルムが同じく、ロビーにそつといいました。「ですが、今はかれらにたよるしかないのも、また、じじつです。しばらくは、ようすをうかがってみるほかはないでしょう。」

「かれらはどうも、しんようできません。」フェリアルもまた、ふたりと同じ気持ちのようでした。「みんななにかを、かくしているみたいだ。」

「用心しておくに、越したことはないな。」フェリアルの言葉に、ベ

ルグエルムもうなずいてこたえます。「かれらの行動には、気をくばっていかなくては。」

そんな中、みんなのあいだにわってはいったのは、ライアンでした。「とりあえず、用心はしておくことでさ、」ライアンは、みんなの顔をのぞきこむと、にこつと笑っていいました。「かんげいしてくるっていうんだから、ここは、ありがたく受けようよ。」

それからライアンは、前を歩いていく村長さんたちの方に向けよると、そうだんやくのふたりにむかって、にこやかに話しかけたのです。

「ね、あれはあるのかな？ 広場で見た、森ペンギンのクリームいりやき菓子。ぜひ食べてみたいなあ。」（なにか考えがあるのかと思いきや、けつきよくライアンのもくてきは、これだったみたいですね……）

そのあとみんなは、お客さんをまねくための大広間にあんないされました。テーブルはなくて、床にちよくせつ、まるいクッションがならべられていたのです（これはかれらフォクシモンたちのしゅうかんで、かれらは食事をするときにも、テーブルを使わないのです）。そして旅の者たちは、その中でももつともえらい人たちがすわる、いちばんいい席に通されました（まん中がランドン・ホップ村長で、その両がわにふたりずつ、かれらはすわっていました）。

かれらがすわってまもなく。たくさんの人たちがやってきて、まるいクッションはすぐにいっぱいになりました。みんな、フォクシモンのでんとう的な衣服に、着がえております。赤、青、きいろ、さまざまな色のおりこまれたチョッキが、なんともはなやかでした。

席がいっぱいになったところで、こんどはごちそうのとうじょうです。みんなの席の前に、あたたかいごちそうがもりつけられた大きなお皿が、つぎからつぎへとごばれてきて、もう床の上は、お皿とカツプと飲みもののびんなどで、いっぱいになってしまいました。ごうか、ルンルン鳥のまるやきにはじまって、とく大のたまごやきに、ゆでたまご。うずらの肉のからあげに、ぱりぱりジューシーなとくせいフライドチキンがどっさり。ぴりりとからいソースをかけた、チキンステーキのフォクシモン風まで（鳥のお料理ばかりですが、きつね

の種族であるかれらフオクシモンたちは、鳥とたまごが大好物だったのです。

さらに、肉を食べないライアンのためにも、たつぷりのマカロンスきのこのいためものや、森キャベツのにこみ料理。ポテトパイのジュエリーソースがけ、などなど。とてもしようかいしきれないくらいのみごとな料理たちが、目の前にならべられていました（ライアンのきぼうの、森ペンギンのかたちをしたお菓子も、山もりになって出されました。もつとも、まさかこんなリクエストがあるなどは、村の人たちもよそうしておりませんでしたから、これらのお菓子は、きゆうきよ、大あわてで作られたのです。そのため、中のクリームがはみ出しているものも、けっこうあったんですけど……）。

「旅のみなさん方のけんこうと、旅の安全を願って。」ランドン村長が、手にしたカップをにかけて、かんぱいのおんどをとりました。そのカップには、さつき村長さんがいっていた、宝石の実のくだもの酒がはいっていたのです（まだ旅のとちゅうでしたし、旅の者たちはできればお酒はえんりよしたかったのですが、まずはいっぱい、お酒でかんぱいするのが、旅人をもてなすフオクシモンたちのならわしなのだといわれて、ことわることができませんでした。さすがにライアンとロビーは、まだお酒を飲めるねんれいではありませんでしたから、同じ宝石の実から作ったジュースで、かんべんしてもらいましたが）。

かんぱいがすむと、それからもう、飲めや歌えの大きわぎです。さまざまながつきを持ったきつねの音楽隊がやってきて、部屋の中を樂しげな音楽でいっぱいにしました。それにあわせて、はなやかな衣のように身をつつんだおどり手たちが、フオクシモンのでんとう的なダンスをおどりはじめたのです。

えんかいの席はほんとうに明るく楽しく、人々もみんな、笑ってしゃべって、じつに楽しそうでした。しかし、ロビーをはじめとする旅の者たちは、それでもなお、いぜん、しつくりこない気持ちのままだったのです（ライアンだけは、まんめんの笑顔で、両手に持ったお菓子においしそうにかぶりついておりましたけど）。こんなにたくさんの料理が、みんなが席についたのとほとんど同時に出てきたのも、

やっぱりどうにもおかしなことでした。だってそれらのお料理は、どれもたいへんなてまがかかっているようなものばかりで、えんかいがはじまるのを前もって知ってでもいらないかぎり、すぐに用意できるようなものでもありませんでしたから（たまたま料理コンテストがひらかれていて、その料理を使っているというわけでもなさそうでしたし。もっとも、森ペンギンのお菓子だけは、前もって用意してなかったわけですけど）。

それに旅の者たちは、ランドン村長をはじめ、みんなからまったく、身の上のことなどについてきかれませんでした。ふつうだったら、「どこからきて、どこへいくのか?」とか、「旅のもくてきは?」とか、いろいろきかれてもおかしくありません。ですがフォクシモンたちは、旅の者たちのことについてはまったくかんしんがないといったふうに、みんなにはいつさい、しつもんをしてこなかったのです（これも、かれらフォクシモンたちのしゅうかんなのでしょうか?）。ぎやうくに旅の者たちの方から、自分たちのことについてかれらに説明しようとしたくらいでしたが、かれらは「まあ、そんなことはいいじやありませんか。さあさあ、とにかく、ゆつくりしていつてくださいな。」といって、とりあつてくれませんでした。

しかし、手あつくもてなしてくるのはありがたいのですが、旅の者たちも、そんなにゆつくりしているわけにもいかないのです。なにしろ、さきを急がなければならぬ旅です。早くモーグまであんないしてもらおうようにたのまなければ、いつまでたっても、この村に足どめされてしまうことにもなりかねません。

「あの、ランドン村長。」うたげのもり上がりがいつこうにおさまらないのを見て、ベルグエルムがたまらずに、ランドン村長に話を切り出しました。

「かんげいを心よりかんしやいたしますが、われらはわけあつて、さきを急がなければならぬ身。まことにきようしゆくではありませんが、われらはもう、出かけなくては。モーグ、ロザムンディアのいせきまで、どなたかにあんないをお願いしたいのです。」

これをきいて、ランドン村長はにこにこした顔をひっこめて、急に

まじめな顔になりました。それからランドン村長は、そうだんやくのティツドーとロラの方をむいて、小さくうなずいたのです。

「申しわけないが、」ランドン村長が前をむいたまま、ベルグエルムにいいました。「これは、われら、はぐくみの森に住むフオクシモンたちの、おきてなのですじゃ。このおきてを破れば、この村も、われらフオクシモンたちのでんとうも、みな、風の中に消えてしまうことになるじゃろう。われらははるかなむかしから、この森に住みつづけてきた。あのかいぶつがあらわれる、そのずっと前から、われらはこの森に住んでいたのじゃよ。森はすたれ、人々はみな、あのかいぶつのことをおそれて逃げていった。残ったのは、われら、フオクシモンたちだけじゃ。じゃが、われらには、この土地を見すてることなどはできん。この森には、われらのせんその、たましいが眠っておるのじゃ。」

ランドン村長がなんのことを話しているのか？　ベルグエルムにはよくわかりませんでした。あのかいぶつとは、なんのことなのでしょう？　そしてベルグエルムがそう思っていたときのことです。ベルグエルムはあたりのようすが、だんだんおかしくなってきたということに気がつきました。景色がぼんやりとしてきて、人々のすがたも、ゆがんで見えはじめてきたのです。いったいこれはどうしたことでしょう？　しかしベルグエルムには、すぐにそのわけがわかりました。これは、まわりのもののせいではありません。自分自身の目が、かすんできていたのです！　ベルグエルムは目をごしごしとこすつて、なんとか景色をもとにもどそうとしましたが、むだな努力でした。しだいしだいに、目の前がぐるぐるとまわりはじめました。音楽の音色が、頭の中にちよくせつ、がんがんなりひびいてくるかのようでした。おどっている人たちのすがたが、まるで夢の中のできごとであるかのよう、ゆらゆらと、かげろうのようにつつていました。

「この運命にしたがわなければ、わしらは生きてはゆけないのじゃ。あなた方には申しわけないが、これも運が悪かったと、あきらめてくだされ。」

しまった……！　ベルグエルムはなにかもに気がついて、なんと

か立ち上がろうとしましたが、すでに手おくれでした。手足にまったく、力はいりませんでした。そして、うすれていくいきしきの中で、かれがさいごに見たものは、同じように床にたおれこんでいく、ロビー、フェリアル、ライアン、三人の仲間たちのすがただったのです。

どこからか、ひゅうひゅうとすきま風がはいりこんできていました。そのつめたい風がほほにあたって、ロビーは思わず、「くしゃん！」とくしゃみを飛ばしました。

ロビーが目をさますと、あたりはまっくらでした。なにも見えません。からだを起こすと、ロビーには自分が、つめたい石の床の上になんかちよくせつ横たわっているのだということがわかりました。いったいここは、どこなのでしょう？　ロビーは目をこらして、なんとかあたりのようすをうかがおうとしましたが、だめでした。ここはほんとうのくらやみで、まったくなんにも、見えなかったのです。

「だれか、いませんかー。みんなー。ライアン、ベルグエルムさん、フェリアルさん。」ロビーはくらやみにむかってよびかけましたが、なんのへんじもありませんでした。

ロビーは急に、心ぼそくなってきました。目がさめたら、とつぜんこんなまっくらな場所で、しかも、石の床の上に寝ていたんですから、まったくむりもありません。どうしてこんなことになっているのでしょうか？

ロビーはすこし前のことを思い出そうとしました。たしか……、きつねさんたちの村で、かんげいのえんかいの席にまねかれていたはず……。たくさんのごちそうが出て、ジュースを飲んで……。ロビーはそこで、あることを思い出しました。そうだ、村長さんとベルグエルムさんが、なにかを話していたんだ。そこで……。ロビーはそのとき、ついに、自分が今こんなじょうきようにおちいつているそのわけのことを、思い出したのです。

そうだ！　ぼくはあのとき、なんだか気分が悪くなって、目の前がぐらぐらゆれて、そのまま気を失ってしまったんだ！　そしてベルグエルムさんも、同じようにふらふらしていた。思い出したぞ。

そこから考えられるこたえは、(ふつうに考えれば)ひとつだけでした。食べすぎて気分が悪くなったので、きつねの種族の人たちが、この場所に寝かせてくれた……、わけではありません。つまり、だまされたんです！　どんなねらいがあって、自分のことをこんなくらやみに放り出していったのか？　それは今のだんかいではぜんぜんわかりませんが、よいもくてきのためであるはずありません(それにおそらく、ほかのみんなも同じような目にあわされているはずだと、ロビーは思いました。この近くにいるのでしょうか？)。そして、そのよからぬもくてきのために、かれらははじめから、ロビーたち旅の者たちのことをだますつもりで、自分たちの村にさそいこんだというわけだったのです。

ロビーははじめから、なんだかいやな感じを持っていました。そしてそのいやな感じが、このようなかたちで、げんじつのもとなってしまったのです。思えば、ロビーが広場できいたあの頭の中にひびいてきた会話は、かれらの悪だくみのそうだんでした。あのきつねの男の子、チップリンク・エストルも、そんなかれらの仲間うちのひとりだったのです(そしてやっぱり、あのときの男の子の声はチップだったのです)。

ですが、それがわかったとしても、今のこのじょうきようが変わるというわけでもありませんでした。あいかわらず自分のからだは、まっくらなこの夜の底のような場所に、投げ出されているままなのですから。

ロビーは泣きたくなくなってきました。ですが、べそをかいていてもしかたありません。とにかく今は、(どこにいてもかもしれないみんなのために)このじょうきようをまず、なんとかしなければならなかったのです。

ロビーは自分のからだを、ぱたぱたと手でさぐってみました。今までと変わらないように思えます。けがもしていません。こんどは、あたりの床を手さぐりですらべてみました。つめたい石の床のかんしよくが、ゆびさきに伝わってきます。するとすぐに、ロビーは自分の寝ていた場所のとなりになにかがあるのを見つけました。それは

どうやら、ぬのでできたかたまりと、ひとふりの剣のようであったのです。それらをさぐっているうち、ロビーにはそれらのものが、自分の持ちものであるのだということがわかりました。ぬののかたまりは、ロビーのかばんと、スネイルにおくられたあのたいせつなりユツクでしたし、剣はもちろん、同じくスネイルからおくられた、あのだいな剣だったのです（にもつの中身もちゃんとおくられた、あのだもしつかりと、さやにおさまっていました。これはたいした発見です！）。

ロビーはとりあえずほつとして、剣を腰につけ、かばんとリュツクを身につけました。そしてそれから、あたりのようすをしらべるために、ゆつくりと手さぐりをしながら歩きはじめたのです。なにしろ自分がどんな場所にいるのか？　ここが部屋の中なのか、ろうかなのかさえも、まったくわかりませんでしたから、そうするほかはありませんでした。

そのとき、ロビーはふと、自分のリュツクの中にあかりがあったのだということ思い出したのです（それはもちろん、スネイルにおくられたたくさんの品物のうちのひとつだったのです）。もつと早く気づけばよかった！　ロビーはほつと息をついて、くらやみの中でリュツクの中に両手をいれました。手さぐりで、はいつているものの品さだめをおこないます。ロープに……、せんめん用具のセット……。これは……、きゆうきゆう用具のはこです。ですが、いくらさぐっても、かんじんのあかりであるランプと油と火を起すための小ばこだけが、どうしても見つかりませんでした。ロビーはあせって、リュツクの底まで手をいれて、すみからすみまでかきまわしてみましたが、けっかは同じことでした。あかりをとすために必要な道具が、すべてなくなっていたのです！

これはつまり、ロビーのことをここに放り出していった、フォクシモンたちのしわざにちがいありませんでした。かれらはくらやみを消すために必要な道具を、すべてロビーのにもつの中から、持ち去っていったのです（それにしても、なぜあかりだけを持っていたのでしょうか？　ロビーのことをこまらせるためならば、ほかのにもつも

全部、持って行ってしまえばいいことですの。武器である剣やほかの品物は、みんな残したままなのには、なにか意味があるのででしょうか?。」

「ひどい、どうしよう……」

ロビーはこまり果てました。もうこうなったら、このなにも見えないくらやみの中を、手さぐりのままで進んでいくほかはないのです。

ロビーはかくごをきめて、リュックを背おいなおしました。そしてそれからロビーは、一フイートさきも見えないこのくらやみの中へとむかつて、ゆつくりと歩き出していったのです。

そのとき……! ロビーは自分の腰のあたりがぼんやりと光っているということに、気がつきました。見ると、剣のねもとのあたりが、青白く光っていたのです! ロビーはびっくりして、剣のつかに手をかけて、そのやいばをすしだけぬいてみました。それと同時に、ロビーの目に飛びこんできたものは……。

青白くかがやく、明るい光! なんと、剣のやいば全体が、なんともしんぴ的な、青白いかがやきを放っていたのです!

「この光は、黒騎士たちと戦ったときの、あの光と同じだ!」

ロビーはその光を見て、セイレン大橋の上でのあのおそろしいけんのことを、思いかえしていました。そしてロビーは、そのときに仲間たちがいつてくれた言葉のことを、ここでふたたび、思いかえしていたのです。

その剣は、われらのことを助けてくれたではありませんか……。

ロビーの中に、急に大きな力がわいてきました。それはまさしく、くらやみの中に光るきぼうの光、そのものだったのです。

「この剣は、ぼくたちのことを守ってくれる!」

そしてロビーはついに、その剣のやいばをすべてぬき放ちました。剣は、ぼおーつとした青白いかがやきを放っておりま。それはセイレン大橋の上で黒騎士をやっつけたときのような、目もくらむような明るさではありませんでしたが、それでも、このくらやみをてらし上げるのには、じゅうぶんなだけの光でした(あかりを持ち去ったフォクシモンたちも、まさか剣が光るなんて、思っていなかったこと

でしょう。剣のいい使い方、発見です！。

ですが、それにしてもいったいなぜ、この剣は光っているのでしょうか？ ロビーがあかりをのぞんだからでしょうか？ それともつとべつの、なにかのりゆうがあるのでしょうか？ なんにせよ、今はこの光はロビーにとって、このくらやみをてらすためのあかりとして、このうえなくありがたいものとなってくれたのです。

ロビーは剣を頭の上に高くかざして、あたりをてらしてみました。そしてその剣の光にてらし出されて、ロビーはようやく、自分が今、どんな場所にいるのか？ かくにんすることができたのです。

そこはただっ広い、石づくりの大広間でした。てんじようはずつと上にあつて、その高さは四十フィートほどもあるように見えました。まわりはぐるりと、石のかべにかこまれております。広間のかたちは長方形で、ロビーはそのちょうどまん中の場所に立っていました。

その大広間のひとつのかべに、大きなさいだんが作られています（さいだんとは教会などにある、おいのりをするための場所のことです）。しかしロビーは剣をかざして、そのさいだんをしらべてみましたが、それはなんともいやな感じのものでした。そのわけはさいだんのちゆうおうにかざられている、ひとつの大きな木ぼりのちゆうこくのせいだったのです。それはロビーが今までに見たこともない、黒くてぶきみな生きもののちゆうこくでした。黒いぶかつこうなかたまりから四本のみじかい手足がのびていて、大きな口と小さなしっぽがついております。目はありません。おたまじやくしを思い浮かべてもらえれば、それに近いと思います。ですが、おたまじやくしのようなかわいらしきなどは、そのちゆうこくからは（つまりこの生きものからは）、ぜんぜん感じられませんでした。

ロビーは背すじがぶるつとしました。こんなものは、長くは見たくはありません。ロビーはいやな気持ちでそのさいだんをはなれると、こんどはまわりのかべを、ぐるりとしらべて歩いていきました。そしてほどなくして。ロビーはついに、ねんがんの出口、ここから出る石のアーチがひとつだけ、むこうのかべにぽっかりとあいているのを、見つけたのです！

「出口だー」ロビーは思わず走り出して、そのアーチにむかいました。ロビーはとにかく、この場所からそとに出たくてしかたなかったのです。

アーチをくぐるとすぐ、石のろうかが右にまがっていました。どうかそとへ出られますように！ ロビーはそう願って、そのろうかを右にまがりました。しかし、そこでロビーのことを待っていたものは……、まっくらなやみの中へとどこまでもつづく、果てしないほどに思われる、つめたい石のトンネルだったのです。

「こんなに広いなんて……」

ロビーは自分が今おかれているじょうきようが、思った以上にしんこくであるということを知りました。いったいどこまで進めばそとへ出られるのか？ それもぜんぜんわからなかつたのです。終わりが見えないというのは、せいしん的にもつらいものです。まして出口だと思っていたものが、果てしないトンネルの入り口だったとわかつたときなどは、なおさらでした。

ロビーは仲間たちのことを思いました。今どこにいるんだろう？ みんなもまた、このトンネルの中のどこかにいるんだろうか？ ロビーは胸がきゅんとしめつけられました。ベルグエルムさん、フェリアルさん、ライアン。みんな、ぶじでいるんだろうか？ ロビーはかれらのぶじを早くたしかめたくて、たまりませんでした（今のロビーの気持ちは、ここまでいっしょに旅をつづけてきてくれたみなさんになら、痛いほどよくわかってもらえることと思います）。

かれらのためにも、ロビーはくじけるわけにはいきません。ぜったいに出口を見つげるんだ。

こうしてロビーは気持ちを強く持ちなおすと、剣のあかりをかざしながら、自分の目の前に待ちかまえているそのまっくらでつめたいぶきみな石のトンネルの中へと、ひとりふみこんでいったのです。

すこしいったところで、ロビーはおかしなものを見つけました。右がわの石のかべに白いペンキで、ふち取りだけの四かくいかたがえがかれていて、その中にこんな、なんともおかしな言葉が書いてあったのです。

「肉料理の部屋」

いつたいこれは、なんのことなのでしょう？ ロビーは首をかしげてしまいました。そしてさらにその言葉のあとには、同じく白いペンキでえがかれた矢じるしがひっばってあつて、その矢じるしのむきは、さつき自分がやってきたあの大広間の方をさしていたのです。

ひよつとして、ぼくのいたあの広間が、肉料理の部屋なのかな？

ロビーはそう思つて、ちよつといやでした。ろうかをひきかえして、さつきの広間の入り口までしらべにもどつてみることにしました。そしてさつきはすぐにトンネルにむかつたので気がつきませんでした。だが、広間の入り口のアーチの上に、（ろうかの方から見ただけに）やつぱり白ペンキで、小さく「肉料理の部屋」と書いてあるのを、ロビーは見つけたのです。

ですけど、ここが肉料理の部屋だといわれても、ロビーにはさつぱりでした。それらしいものはまったくありませんでしたし、ごはんを食べるためのテーブルやいす（フォクシモンのりゆうぎならば床におかれたクツション）なども、ぜんぜんありませんでしたから（まさか、あのきみの悪いさいだんでごはんを食べるわけありませんよね）。

けつきよくロビーは、ぎもんには思いながらも、さきに進むことにしました。とにかく今は、こんなものにかまつている場合ではありません。早くそとに出なければ。ロビーはやる気持ちをおさえながら、ひとり、トンネルの中を進んでいきました。

やがてロビーは、道がふたつに分かれているところにたどりつきました。道は右と左に、それぞれまっすぐのびていたのです。どちらの道もくらやみに通じていて、さきのようなすはぜんぜん見通せません。そしてここにもまた、さきほど見たのと同じ、なぞの白いペンキの文字が書いてあるのを、ロビーは見つけました。

まずロビーが今歩いてきたつうろの右がわのかべに、うしろのトンネルの方をさして、「肉料理の部屋」という文字が書いてありました。これはさつきの部屋のことですから、今までと変わりありません。そ

してそれとはちがう新しい文字が、こんどは、分かれ道のつきあたりのかべに書いてあったのです。

「デザートの部屋」

肉料理のつきは、デザート？ これじゃまるで、レストランかなにかです。そして文字のあとにはやっぱり、白い矢じるしがひっばってあって、それは右のほうこうをさしていました。ロビーは右のトンネルに剣のあかりをかざして、さきのようにすを見ようとしましたが、くらやみはどこまでもつづいているばかりで、やっぱりなんにも見えませんでした。ですがロビーはなんだかそこに、とてもだいじなものがあるような気がしたのです。なぜだかはわかりませんが、ロビーの心の中で、なにかがさわぎました（こんなときには、なにかがあるにきまっています！）。

ロビーはその気持ちにしたがつて、右のトンネルを進んでいくことにしました。このさきにだいじなものがあるという気持ちは、どんどん大きくなっていくばかりです。やっぱりこのさきに、なにかがあるにちがいない。ロビーはそうかくしんして、この暗いトンネルの中を足早に進んでいきました。

それからあまりいかないうちに、つうろは右にまがっていました。ロビーがおそろおそろ、まがりかどのさきにちよこんと顔だけを出してのぞいてみますと、そこからすぐのところひとつの石のアーチがあつて、どこかの部屋の中へと通じているようでした。そしてロビーはそのアーチの上に、思った通り、白いペンキの文字で「デザートの部屋」と書いてあるのを、見たのです。

この部屋からだ。中に、だれかがいる！ ロビーはとつきにそう思いました。さきほどから感じている、だいじななにか。それは物ではなくて、自分にとっての「だいじなだれか」にちがいないと、このときロビーは、はつきりと感じ取っていたのです。

ロビーは剣をかざして、部屋の中をのぞきこみました。ロビーがたおれていたあの肉料理の部屋ほどは、大きくはないようです（やっぱ

り肉料理はいちばんのごちそうでしたから、部屋も大きいのでしょうか？)。そして部屋のすみには、さっきの部屋にあったのと同じようなさいだんが、作られていました。

そしてそして、そんなものはどうでもいいのです！ そんなものに、かまっている場合ではありません！

部屋をのぞきこんだロビーがまっさきに見たもの。それは部屋のまん中の床にあおむけにたおれている、ひとりのある人物。白くてきれいな服を着て、お菓子のたっぷりつまったかばんを、いつも肩からかけている人物。そう、それはまさしく、ライアンだったのです！

「ライアン！」

ロビーはもう、むがむちゆうで、ライアンにかけよりました（思わず、あかりのともった剣をそこらへんに放り出してしまったくらいです。この剣もとつてもだいじでしたが、やっぱりライアンにくらべたら、かれの方がだいじですもの）。

「ライアン、しっかりして！ だいじようぶ？」ロビーはライアンのからだをつかんで、ゆさゆさとゆさぶりました。はたしてライアンは、ぶじなのでしょう？ まさか、死んで……、はいませんから、ご安心を！ じっさいかれはただ寝ているだけで、けがひとつしていませんでした。

「うくん……、あと五分……」

ロビーのひっしのよびかけにかえってきたのは、なんともまのぬけたへんじでした（ついさいきん、どこかできいたようなせりふですけど……）。ですが、そんなライアンの言葉に、ロビーは心の底からほつとしたのです。はじめ、ライアンが床にたおれているのを見たときには、ロビーは、しんぞうがこわれてしまわんばかりでしたから。

「よかった！ ほんとうによかった！」ロビーはライアンがぶじであるということを知って、これ以上はないというくらいによるこびましました。ほんとうにロビーは、ライアンの身のことを、いちばんに心配していたのです（ベルグエルムとフェリアルのこと、もちろん心配していましたけど）。ロビーは思わず、ライアンのことをぎゅつとだきしめてしまいました（それでも、からだの大きさがちがいましたか

ら、あんまり力をいれすぎないようにがんばりましたけど。

「ライアン、起きて。早く、ここから出よう。」

ロビーがそういって、ライアンのことをもういちどゆさぶります。するとライアンは、ようやく目をさまして、あたりをきよろきよろと見渡してからいいました。

「あれ……、ロビー、おはよー。まだ、朝じゃないみたいだけど、どうしたの？　ここ、どこ？」

どうやらライアンは、まだ自分のおかれているじょうきようが、ぜんぜんわかっていないみたいです（まあ、寝起きですぐじゃ、むりもありませんけど）。眠そうな目をぐりぐりとこすって、「ふああ。」と小さなあくびをしました。

それから。ロビーは今自分たちのいる場所のことや、これまでのことなどを、ライアンにみんな話してきかせたのです。もちろんロビー自身も、今のじょうきようのことについては、わからないことばかりでした。ですがそれでも、自分たちがきつねの種族であるフォクシモンたちにだまされて、今こんな目にあっているのだということだけは、まぎれもないじじつだったのです。

ロビーの話をきいているうちに、だんだんライアンも、目がさめてきたようでした。そしてしだいに、今のじょうきようのことをりかいすることができていって、いちばんおしまいのころには、かれはもう、すっかり頭にきてしまっていたのです。

「あいつら……よくもだましたなー！」ライアンはフォクシモンたちにだまされたということを知って、ぶんぶん怒りました（もしも今、そばにたき火のほのおがあつたのなら、あたりいちめんにはのおうずがまき起こっていたかもしれませぬ。こういうときのライアンって、とつてもこわいんですー）。

「ライアン、おちついて。とにかく今は、そんなこといつてる場合じゃないよ。」そんなライアンのことをなだめて、ロビーがおちついていいました（さすがはきゆうせいしゅです）。「早く、出口をさがさないで。それにたぶん、ベルグエルムさんとフェリアルさんも、このトンネルの中のどこかにいるんだと思う。みんなでいっしょに、ここを

ぬけ出すんだ。」

「……うん、そうだね。」ロビーの言葉に、ライアンもおちつきを取りもどしてこたえます。

「ふたりを、助けなきや。それができるのは、ぼくとロビーだけだもの。」

そしてライアンは、自分のにもつ(ほとんどお菓子でしたが)をしつかりとかかえなおすと(そしてやつぱり、あかりはすべて持ち去られていました)、ロビーのうでにぎゅっとしがみつきました(これは暗いトンネルの中でまいごにならないようにするためです。べつに、デパートにいくわけじゃありませんよ)。

「けつきよく、ベルグもフェリーも、ぼくたちがいなくちゃだめなんだから。まったく、せわがやけるよね。」ライアンがそういつて、「ふう。」と深いため息をつきました(さつきまではライアンも、かれらふたりと同じ立場でしたけど……)。

「ライアン・スタツカート部隊、いぎ、しゅっぱーっ！ 今からぼくたちは、白の騎兵師団の騎士たちのことを助ける、ゆうかんなるきゆうしゅつ隊だ！ ふたりには、あとでたくさん、おれいしてもらわなきや。お馬さんになってもらって、背中に乗せてもらおっかな。それとも、肩ぐるまで、お城を三回まわって……」

うーん、なんだかさいごに、ぶつそうなことをいつているようですが……、まあ、とにかくこうして、ロビーとライアンのふたりによるこの小さなきゆうしゅつ隊は、さきの見えない、このまっくらなトンネルの中へとむかつて、気持ちも新たにふみ出していくこととなったのです。

「あつ、それから。」ライアンが急に、ロビーにむかっていいました。「ぼくが隊長で、ロビーが隊員つてことでもいいよね？」

むじやきに笑つてしがみついてくる、そんなライアンのことを見ながら、ロビーはちよつぱり(というより、たくさん)、不安な気持ちになりました。

だいじょうぶかなあ……。

さてさて、このあといったい、旅の者たちはどうなってしまうのでしょうか？

そして物語は、この夜の底のような暗い暗いトンネルの中での冒険の、もつともかくしんの部分へとむかって、つづいてゆくことになるのです。

9、夜の底

いったいいつのころから、このいせきはこの場所にあるのでしょうか？ はぐくみの森のおく深く。そのからみあう木々の根と、深い深い葉っぱのむれのおくに、ひとつのいせきがひっそりとかくれるようにしてたたずんでいました。もう見るからに、ひとめで、とても古いものだということがわかりました。石づくりのはしらにびっしりとこけがちがくずれ落ちてしまっていて、たおれたはしらにびっしりとこけが生えて、たくさんのきのこまで生えているようなありさまだったのです（ですからもしここに住みたいと思うのなら、かなりのリフォームが必要になることでしょう）。

じつさいこのいせきは、はるかむかし、まだモーグがロザムンディアとよばれるかっきのあるみなとまちであったころから、この場所にありました。ですからもう、二千年ほどもむかしのことです。この森の中にあるいちばん古いおじいさんの木だって、このいせきよりも若いのでした（なるほど、古くてぼろぼろなものも、うなずけますね）。

このいせきがどんな人々によってつくられたのか？ それがわかる人は、もうこのアーケランドには、ぜんぜんいないことでしょう。モーグをふくめ、このあたりの土地のれきしや物語などをきろくした本などは、もうまったく、残されてはいなかったのです（これはむかし、ロザムンディアから人々が去っていったときに、かれらが自分たちのことを書いた本やしよるいなどを、すべていつしよに持って行ってしまったからなのです）。ですからこのいせきは、そのきちょうなれきしのおきみやげでした。れきしのせんもん家がこのいせきのことをいろいろとしらべれば、このあたりの土地のことについて、なにか新しい発見があるかもしれません。しかし……。

ここでみなさんに、はつきり申し上げてしまいます。ほんとうのところ、このいせきはこのアーケランドにおいて、べつにまったく、人々のきょうみをひくようなものでもなかったし、だいににされているものでもなかったのです（もしそうだとしたら、こんなにきたないままで、ほったらかしにされているはずありませんよ

ね)。とくに目をひく美しいちようこくがあるわけでも、金銀宝石がちりばめられているわけでもありません。

ではなぜ、このとくにたいせつにもされていないような古びたいせきのことについて、わたしが今、こんなにも長々と説明をしているのかというところ……、読者のみなさんには、もうおわかりですよね。

問題は、このいせきそのものではありません。重要なのは、今このいせきの中にいる人たちだったのです。

それは、読者のみなさんのよく知っている人物たち。そう、われらが旅の仲間たち。ロビーにライアン。ベルグエルムにフェリアル。この四人の仲間たちが、今まさに、このいせきのおく深く、やみの世界のおく深くに、とじこめられていたのです！（おっと、ベルグエルムとフェリアルについては、まだこのいせきの中には、とうじょうしていませんでしたね。でもまあ、みなさんもすでによそうされていることでしょうか、もうさきにいつてしましましょう。やはりかれらもまた、ロビーやライアンと同じく、このいせきの中のどこかに放り出されていたのです。さあ、早くみんなで、助け出さなくっちゃ！）

剣のあかりが、暗いろうかをぼおーつとてらし上げました。ここは、はぐくみの森のおく深く。木々にうもれた古びたいせきのそのまたおく深くの、とある石だたみのろうかの上。そのろうかの上を今、ふたりの者たちが歩いているところでした。それはもちろん、われらがロビーとライアンの、ふたりだったのです。

剣をかざしてトンネルをてらしているのは、ロビーでした。そして、おおかみ種族の大きなロビーの服のすそをにぎって、そのわきをちよこちよこついでいつているのは、白いひつじの種族の少年の、小がらなライアンです（はじめはロビーのうでにしがみついていたが、やつぱり動きづらいということ、今は服のすそをにぎっていたのです）。じじょうを知らずにそのようなすを見た人であれば、「まるでおばけやしきの中の親子みたい」って笑ってしまうかもしれません。ですが、わけを知ったら、とてもかれらのことを笑うことなどはできなくなるでしょう。かれらがいるのは、こわいこわい、ほんとう

にこわい、まっくらな夜の底。出口もわからない、どこにいるのかもわからない、悪夢のような、夜のやみの世界なのですから！

「ねえロビー、みんなでそとに出たら、まず、どうしよつか？」

そう声をかけたのは、ライアンでした。ライアンはロビーにぴったりとよりそって、トンネルのさきにつづく深いくらやみのことを見すえながら、ロビーに話しかけていたのです。

「ぼくねえ、いいこと考えちゃった。おぼけのかっこうをして、フォクシモンたちの村に、ばけて出るってのはどうかな？ ふふふ、みんな、びつくりするよー。まさかかれらも、ぼくらがまた、ここからぬけ出して、しかえしにやってくるだなんて、思っていないだろうから。」ライアンはそういって、にこにこ笑いました。

「そうだ、火の力をかりて、火の玉も作ってやろう。それで、あいつらのしつぽを、ちりちりにこがしてやるんだ。それから……」

なにかまたもやライアンは、すごくこわいことを考えているようですが……。しかし、こんな暗くてこわいところにいるんですもの、ライアンの気持ちも、わかつていただけたかと思えます。ちよつと前までは、ライアンもとっても強気でいましたが（それは前の章の終わりを見ていただければよくわかると思います）、れいせいになって今のげんじつをまのあたりしてみると、やっぱりライアンだって、ちよつぱりこわいのでした（ですからこんないたずらのことを考えて、気持ちをおちつかせようとしていました。もっともライアンの場合は、ふだんからいつも、そんなことを考えているようでしたが……）。

いっぽうロビーの方は、もとよりあんまりおしやべりなせいかくではありませんでしたので、それで気持ちをまぎらわすというようなことも、できませんでした。小さなライアンによりそわれて、なんとかたよりのあるところを見せたかったのですが、やっぱりなかなか、そううまくあいにもいきません。ロビーだって、やっぱりライアンと同じに、こわかったのです。

ですがふたりは、こわがっているばかりでもいられませんでした。とにかく今は、ベルグエルムとフェリアルのかつたりを見つけること

が、なによりもだいじなことでしたから。

「ぼくたちがいたのは、肉料理の部屋とデザートの部屋だった。だから、まだ同じような名まえの部屋があつて、ふたりもきつと、そこにいるんだと思うんだ。」ろうかを進んでいきながら、ロビーがライオンにいいました。

「たぶん、魚料理の部屋とか、サラダの部屋とかじゃない？」ライオンが、じょうだんまじりにそうこたえました。

「きつと、このへんてこな部屋の名まえは、レストランのメニューになぞらえてつけられてるんだと思うよ。もしそうだとしたら、ぼくたちが、そのごちそうつてことになる。」ライオンがそういつて、ロビーの顔を見上げます。

「じゃ、じゃあ、そのごちそうを、食べにくるやつがいるつてこと？」ロビーがあわてて、つづけました。「たいへんだ！ 早くみんなを見つけないと！ 食べられちゃったらどうしよう！」

さあ、ここにきて、この暗いトンネルの中にまた、新しいきょうぶが生まれてしまいました！ そのためロビーとライオンは、このさき、自分たちが考えついてしまったその未知なるかいぶつにおびえながら、トンネルを進んでいくことになってしまったのです。ですが、それがかえつて、ふたりの気持ちを強くさせました。もうここまできたら、こわがつている場合ではありません。もとより、逃げることも、ひきかえすことだつて、できませんでしたから。

もしかれらがふたりではなくて、ひとりきりだったのなら。もう心はとつくに、おれまがつてしまつていたことでしょう。かれらは今、仲間がそばにいてくれることを、心からかんしゃしました。そしてふたりは、仲間を助けるそのけついを胸に、ロビーは剣をにぎる手に力をこめて、ライオンはロビーの服をつかむ手に力をこめて、このさきの見えない暗い暗いやみのトンネルの中を、ふたたびつき進んでいったのです。

しばらくいくと、暗いろうかはようやく、右におれまがつていました（ライオンのいたデザート部屋には、ほかの出口はありませんで

した。ですからふたりは、そこからまっすぐひきかえして、肉料理の部屋へとつづく左への分かれ道をそのまま通りすぎて、つづくトンネルをまっすぐ進んでいったのです。そこからここまでやってくるのに、ずいぶんとまっすぐに歩きつづけでしたが、ようやくここで、その道が右におれまがつたというところだったのです。はやる気持ちをおさえながら、ふたりはろうかのかどからそれぞれの顔だけをちよこんと出して、さきのようなすのぞきこみます。ろうかはそこからまた、まっすぐにのびていました。ですがそのすこしさきで、このろうかは、いくつかの分かれ道へとえだ分かれしていたのです。

「分かれ道だ。」

剣を手にしたロビーが、つぶやきました。

「どつちにいったらいいんだろうっ？」

ふたりは分かれ道のまん中までやってきました。道は星のようなかたちに分かれています、自分たちがやってきた道をいれると、全部で五つに分かれています。しかもその全部が、さきを見通すこともできない、まっくらなやみの中へとぶきみにつづいていました。

さて、こまりました。ふたりはいつたい、どうするのでしょうか？（剣をたおして、たおれた方に進む……、というのでは、いくらなんでもあてずっぽうすぎますし。）さあ、ここはロビーとライアン、ふたりのちえと力をあわせるときでしょう。

「ロビーのふしぎな力を使えば、正しい道がわかると思うよ。」ライアンが、ロビーの服をちよいちよいとひっぱりながら、いいました。「ぼくを見つけたときも、そうだったんでしょ？ ベルグとフェリーがどつちにいるか？ なにか感じない？」

ロビーはちよつとこまりましたが、なんとかがんばってみようと思えました。ほんとうは、自分からやろうと思っただけでできるようなことでもありませんでしたが、そんなこともいつていられません。ロビーはベルグエルムとフェリアルのことを思いながら、じつと、ふたりのいる場所のを感じ取ろうとがんばりました。

「はつきりしないんだけど、」しばらくして、ロビーがいいました。「こつちみたいない気がする。」

ロビーはそういつて、道のひとつをゆびさします。

「ほかの道は、なんだかみんな、さきにおぼけが待っているみたいだもの。こっちの道からは、ふたりのいるような感じがする。こっちも、こわい道であることに、ちがいはないんだけど……」

「さすがロビーだね。ぼくもまったく、同じ意見だよ。」ロビーの言葉に、ライアンはにっこり笑って、ロビーの腰をぽんとたたいていいました。っていうか、ライアンも同じ意見？　なぜかライアンははじめから、ロビーのしめしたその道が、正しい道だと思っていたみたいです。いったいなぜ？

「ぼくも、その道がいいと思うよ。風の流れにきいてみても、上からの風が、そっちから吹いてきているし、ぼくの持つてる親クルツポ―も、そっちの方をさしているしね。」

さて、この夜のやみにつつまれたくらやみの中の世界は、どうやら地面の下の世界であると思われました。こんなに広くてまっくらな、夜の底のような場所ですもの、ふつうに考えれば、地面の下だと思えますよね。そしてじつさい、地面の下だったのです。

ですから、そとに出る出口は上にあるはずです。そしてこれで、ライアンの言葉にもなっとくがいくわけでした。出口のことをさがしているのであれば、地面の上から吹いてくる風のことを読んで、追っかけていけば、しぜんとそこに近づいていけるといわけだったので。さすがはライアン（ちなみに、ここが地面の下だということは、ロビーとライアンのふたりにも、もうわかっていました。ロビーはちよつかん的にわかったみたいですけど、ライアンの場合は風の精霊の助けをかりて、風の流れを読んで、ここが地面の下だとわかったみたいです。さすがはロビーとライアン）。

っていうか、親クルツポ―？　それってなに？

「親クルツポ―？　それってなに？」

ロビーもまったく、みなさんと同じ言葉をかえました。それに対してライアンは、にこにこしながら、いつものいたずらっぽいやべり方でこたえたのです。

「いつ、発表しようかと思ってたんだけど、じゃあ、いよいよおひろ

めだね。」ライアンはそういって、胸のポケットにはいつている小さななにかをロビーに見せました。

「じゃーん！…これだよ。」

ロビーがのぞきこむと、ライアンの胸ポケットから、ちよこんなにかが顔を出していました。そしてよく見てみると、それは小さな、白いはとのおもちやの頭だったのです。

「これは、親クルツポー。ぼくの目ざまし時計についてたやつだよ。」

あのやかましい、はとの目ざまし時計！ そう、これははぐくみの森の入り口で野宿をしたときに、ライアンのことを起こしていた、あの目ざましはと時計についていた、(口も悪くてにくたらしい)はとのおもちやだったのです。

「これはねえ、目ざましのほかに、べつの使い道があるんだ。こいつは、これについてる子どものはと、子クルツポーのいるほうこうを、頭のむきで教えてくれるんだよ。ちよつと、やってみせようか？ たとえばね、」ライアンはそういって、はとのからだの横についている小さなねじを、ちよつとだけ動かしてみせます。

「このねじを、さがしたい子クルツポーの番号にあわせると、親クルツポーの頭が、その子クルツポーのいる方をむくってわけ。ほんとはこれ、子どもがかくれんぼあそびのときなんかを使う、おもちやなんだけど。」

ライアンがはとのおもちや(親クルツポーです)を手に取ってかぎすと、はとの首の部分がかぐるりとまわって、ロビーの方をむきました。「今は、一番の番号にあわせたんだ。全部で五番まであるんだけどね。」ライアンはそういうと、ロビーの服のポケットの中に手をつっこんで、その中からなにかを取り出してみせます。そしてポケットの中から出てきたのは……、そう、ライアンの言葉にあった、その子クルツポーでした！

なんとライアンは、みんながばらばらになってしまいう前、あのフォクシモンたちの村で、あらかじめ、みんなの服のポケットの中に、この子クルツポーのことをこっそりいれておいたのです！ ロビーの

服のポケットにも、そしてベルグエルムとフェリアルルの服のポケットにも。ですから今ライアンは、ベルグエルムとフェリアルルのいるほうのことを、自分の胸ポケットにしのばせていた親クルツポールのことを使って、知ることができていました。なんて、ねまわしのいいこと！

「こんなのが、ポケットにはいつてたんだ！ ぜんぜんわからなかった！」ロビーはすぐくびっくりして、その子クルツポールのことをながめ渡しました。それはピーナッツのつぶひとつほどの大きさで、なるほど、こんなのがポケットにはいつていたとしても、ちよつとさわったくらいではぜんぜん気がつかないのも、むりはありません。そしてその子クルツポールのおなかには、ライアンのいう通り、一番という番号がついていました（ところで、ポケットにこっそりこんなものをいれておくなんて、まるでだれかみたいじゃありませんか？ そう、ライアンのお父さんのメリアン王に、そっくりです！ やっぱり、親子なんですわね）。

「じゃあライアンははじめから、フォクシモンの人たちがぼくたちのことをだまして、ぼくたちをこんな目にあわせるつもりだったんじゃないか？ って思ってたの？」

ロビーがたずねました。このロビーの言葉は、半分だけあたりでした。ライアンはフォクシモンたちが自分たちのことをだまして、なにかの悪だくみをしようとしているんじゃないか？ というよそうはしていましたが、まさかこんなところにばらばらにして放り出しているなんて、考えてもいないことだったのです（もつとも、そんなことはだれにだって、わかるはずありませんでした）。ライアンはあくまでも、なにかのやくに立つんじゃないかと思って、この子クルツポールのことをみんなのポケットにいれておいたのです。それが今、自分でもびつくりするくらい、やくに立っていました。

「そ、そうだね、うん。そう思っていたよ。」ライアンはロビーのといかけに対して、そうこたえてみせました。もちろんこれは、ライアンの強がりです。だって、そういった方が、かっこよく思われますもんね。ほんとうはライアンは、あのときは森ペンギンのかたちをした

クリームいりやき菓子のことで、頭がいっぱいでしたけど……。まあ、このじじつのことについては、ふせておきましょう。

「ライアン、すごいー！」ロビーはとても感心して、思わずそういいました。「こんなにさきのことまで考えてるなんて！ ぼくはてっきり、あのときはお菓子のことばかり考えていたのかと思ってたんだけど、やっぱりライアンは、頭がいいな！」

ライアンは思わず、ぎくつ！ としましたが、ここはもう、さいごまでおし通すしかありません。

「そ、そうかな。はは、は。」ライアンはそういって、ひきつった笑みを浮かべながら、なんとかごまかしました。

さて、それはさておき。みんなを見つげるための心強い隊員（ほとこのクルツポー）が、これで正式に、このきゆうしゆつ隊の仲間に加わったわけです（隊員といえるかどうかはわかりませんが）。ライアンはベルグエルムのポケットには二番の子クルツポー、フェリアルルのポケットには三番の子クルツポーのことをいれておきました（残りのふたつは「よび」としてライアンが持っていました）。そのためロビーとライアンのふたりは、親クルツポーのねじを二番と三番にこうたいにあわせることをくりかえしながら、つづくトンネルの中を、さらに進んでいったのです。

「ここが、どれだけ深いところなのか？ わかんないけど、「トンネルを歩きながら、ライアンがいました。「ベルグとフェリーがいるのは、上でも下でもないよ。ここのトンネルのさきの、どこかにいるみたいだね。」

ライアンという通り、はとの頭はたしかに、上でも下でもなく、すいへいをむいています（このはとの首は、上下左右、どのほうこうにもぐるぐる動くのです）。これは二番と三番、両方とも同じでした。そして首のむきも、これまた同じほうこうをむいていたのです。つまりベルグエルムとフェリアルルのふたりは、同じ高さのトンネルの、同じほうこうにいるってことでした。

「よかった。それなら思ったより早く、ふたりを見つげられるかも

しれないね。」ロビーはひとまずほっとして、ライアンにそういいます。

「ふたりでなかよく、手をつないで寝ていてくれたなら、さがすてまがはぶけるんだけど。まったく、せわがやけるよね、あのふたりは。」ライアンはクルッポアのむきをたしかめながら、ぶつぶつといいたないで寝ているところをそうぞうして、なんともふくぎつな気持ちになりましたが……。

しばらくいったところで、つづく道がまた、三つに分かれています（自分たちがやってきた道をいれば、全部で四つでした。それにしても、なんてふくぎつなめいろなんでしょうー）。そしてふたりはここでも、おたがいの力（とクルッポアの力）をあわせて、進むべき道をえらび出したのです。それから、どれほど進んだでしょうか？

道をゆくにつれて、ロビーの心がまたしてもさわぎはじめました。そしてこの気持ちは、さきほどライアンを見つけたときに感じたのと、同じ気持ちであったのです。このさきに、とてもだいいじななにかがあるという感じでした。さあ、こうなったらばんばんぎいです。ベルグエルムかフェリアルのとどちらかが、近くににいるにちがいありません！（さて、どっちでしょう？ ひよっとしたら、ふたりいつしよかも。）

「このさきだ！ ふたりのうちのどちらかか？ それともふたりともか？ わからないけど、きつとこのさきにいる！」ロビーがさげびました。

「ほんと？ やった！」ライアンもうれしそうにいいました。

「ほんとうに、魚料理の部屋だったりしてね。」

ライアンがじょうだんっぽくいった、そのおりもおり。ろうかのかべのまん中に目をやったふたりは、そこに、こんな文字が書いてあるのを見つけたのです。

「魚料理の部屋」

ついにきました、魚料理の部屋！ さいしよはじょうだんでそう
いっただけでしたのに、まさかほんとうに、出てきてしまうとは！（そ
してその言葉のあとには、やつぱり白いペンキの矢じるしがひっばっ
てあって、つづくろうかのさきをしめしていました。）

「ロビーー！ ほんとうに魚料理だよー！」ライアンがびつくりして、さ
げびました。「やつぱりこのさきに、ベルグかフェリーがいるんだー！」
ふたりはもう、走り出していました。そしてそこからすぐのところ
で。石のろうかはひとつの石のアーチへと、つながっていたのです。
そしてそのアーチの上には、やつぱり白いペンキで、お待ちかねの言
葉、「魚料理の部屋」と書いてありました。

「ここだー！」ロビーは剣のあかりをかざして、その部屋の中をのぞき
こみました。そしてロビーはまさきに、その部屋のまん中におおむ
けにたおれているひとりのその人物のことを、見たのです。

「ベルグエルムさんだー！」ロビーがさけんで、かけよりました。

「ベルグー！」ロビーに負けなくらいはやく、ライアンもかけよりま
した。

「しっかりとください！ だいじょうぶですか！」

ロビーはベルグエルムの肩をつかんで、けんめいにゆさぶりました
（もし起きている人にこれをやったら、目まいを起こしてしまいそう
なくらいに）。

「う……、うむ……」ベルグエルムが、寝ながらうめきます。よかつ
た！ どうやら自分たちと同じに、ぶじであるみたいです。

ですが、ベルグエルムはなかなか、目をさましてくれません。これ
はじつは、フォクシモンたちの村で飲んだ、あの宝石の実のくだもの
酒のせいでした。みんながいしきを失ってしまったのは、あのお酒に
はいつていた、眠りぐすりのせいだったのです！

このくすりはお酒といっしょに飲むと、とてもよくきくのです
（ですからフォクシモンたちは、旅の者たちにもりにお酒をすすめま
した）。いっぽうロビーとライアンは、お酒ではなくてジューズでし
たので、ベルグエルムとフェリアルほどには、くすりはきいていな
かったというわけなのです（もつともライアンの場合は、くすりいり

のジュースをがぶがぶ飲んでおりましたので、やっぱりそうとうにくすりがきいていたのですが。

いっぽうロビーの方は、さいしょからずっとおかしな感じを受けつづけておりましたので、とても飲み食いをするような気分ではなかったのです。そのためロビーは、ジュースもあんまり、飲んでいませんでした。つまりこういうわけでした。ロビーがだれよりもいちばん早くに、目がさめたというわけだったので。ほんとうはくすりがしつかりきいていれば、いちにちたっても、とても目がさめるようなものではないかもしれませんが、ロビーが目をさますことができたのは、ほんとうに運のいいことでした。まさかフォクシモンたちも、ロビーが目をさまして歩きまわり、ほかの者たちのことを起こしてまわるなんてことになるなどは、思っていなかったことでしょう。

ちなみに、このくすりは飲んだ量にかかわらず、いしきを失うまでに、ひとしく十数分くらいかかるものでした。そのためフォクシモンたちは、かんぱいのあと、しばらくえんかいをつづけてごまかす必要があったのです。

「う、む……、すみません、父上……。もう、おねしょはしませんから……」

なんだかベルグエルムは、むかしの夢を見ているようですが……、とにかく早く、起こしてやらないと。

「しようがないな。よし、ここはすこし、荒っぽくいくしかないね。」
そういったのはライアンでした。いったい、どうするつもりなのでしょう？（なんだかとおつても、いやなよかんがするのですが……）

それからライアンが取り出したのは、あのはとの目ざまし時計だったのです。なるほど、人を起こすのには、目ざまし時計がぴったりですものね。もつとも、それがふつうの起こし方であるのなら、問題はないんですけど……（ライアンのせいからといって、ふつうに起こすとは思えませんから）。

そしてやっぱり、みなさん（とわたし）のよそう通り。このあとベルグエルムは、とつてもたいへんな目にあうことになってしまいます。

ライアンは目ざまし時計のはとのおうちに、親クルツポーのことを取りつけました。ここまでは、前に使ったときと同じです。しかしライアンはそれから、親クルツポーのくちばしを、きんぞくでできた、なんともおそろしくちばしと取りかえました！（いったいどこから、こんなものが出てきたのでしょうか？）そしてぜんまいをまけるだけめいっぱいまいて、さらに時計のうらについているダイヤルを、「さい強」にあわせたのです（これが動いたら、いったいどうなってしまうのか？ うーん、考えただけでもおそろしい）。

「これで、ためしてみよう。前に一回、おしおきでためしたことがあるんだけど、また、うまくいかなあ。うふふ、楽しみ。」

そういつて、ライアンは一分ごとに目ざましの時間をあわせて、それをベルグエルムの顔の横におきました。そして、一分ごと……。ああ、さいなんなベルグエルム！ あとは、みなさんのごそうごそうの通りです。

「ぎやあああー！」

こめかみをものすごいいきおいでつつつきまわされたベルグエルムは、もう、てんじようまでとどくかというくらいに飛び上がってしまいました。いくらりっぱなウルファの騎士であるベルグエルムだとしても、これではたまりません。

「なんだなんだ！ なにごとだ！」

ベルグエルムはわけもわからず、手をふりまわして、じたばたとあたりを走りまわってしまいました。そしてそれからようやくのことで、かれはロビーとライアンのふたりが自分のそばに立っているということに、気がついたのです。

「おはよう、ベルグ。いい朝だね。」ライアンがベルグエルムに手をふって、まんめんの笑顔でいいました。

「ライアン！ それに、ロビーどのも！ よかった！ ふたりとも、ぶじで。」ベルグエルムがロビーとライアンのふたりの方に近よって、そういいます（その足はもう、ふらふらになっていましたけど）。

「ベルグエルムさんこそ、ぶじでよかった！ 今は、ぶじじゃないみたいですけど……、とにかくよかった！」ロビーがちよつとごまかし

つつも、ベルグエルムの手を取ってよろこびました。

「なんだかとおつぜん、かみなりにうたれたような感じがしたのですが……」ベルグエルムがずきずきと痛む頭をおさえながら、つづけます（どうやらかれはまだ、自分がなにをされたのか？ 気づいていないみたいです。とりあえずここは、いわないでだまっておいた方がよさそうですね。読者のみなさんも、どうかだまっていてください。あとで怒られそうですから）。

「ここはどこです？ なぜわたしたちは、こんなところにいるのでしょうか？」ベルグエルムがあたりのようすをきよろきよるとながめ渡しながら、たずねました。

「ぼくたちは、フォクシモンの人たちにだまされたんです。ここがどこなのかは、ぼくたちにもわかりません。でも、ひとつだけいえるのは、ここがよくない、危険な場所だったことです。とにかく早く、そこに逃げ出さないと。でも、まだフェリアルさんが、見つかっていないんです。」

「フェリアルが！」ロビーの言葉に、ベルグエルムはびっくりしていました。「まだ、ここはどこかにいるのですか？」

「たぶん、もう近くまでできていると思うんですけど……、どこにいるのかまでは、まだわからないんです。早く、見つけてあげないと。」それからロビーとライアンのふたりは、今のじょうきょうのことをできるだけくわしく、そして手早く、ベルグエルムに説明してきたのです。剣のあかりのこと。ライアンの、みんなのいるほうこうのことを教えるクルッポーの力のこと。へんてこな名まえのそれぞれの部屋のこと。それにこれはまだ、そうぞうのはんでしかありませんでしたが、ここにはおそろしい、かいぶつがいるかもしれないというこども。

「このベルグエルム、一生のふかく！ ロビーどののこをお守りすると、かたくちかったというのに！」

ベルグエルムはそういって、床にひざまずいて、深々と頭を下げてしまいました。かれらのような騎士というものは、めいよをたいせつにするのと同じくらい、みずからのしっぱいを心からくやむのです。

とくにベルグエルムは、騎士の中でもことさらにほこり高く、まじめなせいにかくでしたので、なおさらでした。自分がぶざまにも、フオクシモンたちにあざむかれてしまったということが、ゆるせなかったのです。

「このベルグエルム、どんなばつでも受けるかくごであります。さあ、ロビーどの。なんなりとお申しつけを！」

「そんなことはいいですから。ぼくは、だいじょうぶです。」ロビーはそんなベルグエルムのことをなだめながら、あたふたとこたえしました。「こうしてぶじにいられたことだけで、もう、じゅうぶんじやないですか。ベルグエルムさんのせいじゃありませんよ。」

ベルグエルムはロビーの言葉と心づかいに、深くかんしゃしました。

「しっばいは、だれだつてするからね。しっばいをこわがってたら、なんにもできないよ、ベルグ。たいせつなのは、そこからなにを学ぶか？　ってことだぞ。」ライアンも、ベルグエルムの肩をぽんとたたいて、そういいます（まるで、せいとのことをさとす先生みたいに）。

「それはそうと……」さいごにライアンが、にこにこした顔でいきました。「ぼくでよかったら、いろんなばつを考えてあげられるけど、どう？」

ライアンの言葉に、ベルグエルムはあわてて手をふつてこたえました。

「いや、けつこう！　もうじゅうぶん、はんせいしたよー！」

とにもかくにも、これで三人の仲間たちのことが集まったわけです。残るはフェリアルただひとり。いったいどこにいたのでしょうか？

ロビーの感かくでは、もうそんなに遠くではないと思われました。ライアンの親クルツポーターがむいているのは、この部屋のさらにむこうがわの、やみの中です。そこには今までのふたつの部屋（肉料理の部屋とデザートの部屋のことです）には、なかつたものがありました。それはそのさきにつづく、もうひとつのろうかへとつながっている、

べつの入り口だったのです。

「あの入り口の、むこうだ。」ライアンが親クルツポーのむきをたしかめながら、いいました。「ロビーのよそうだと、フェリーのいるところまでは、もう、すぐみたいだね。早く、助けにいったあげよう。」

ライアンはそういういながら、親クルツポーに取りつけるきんぞくせいのくちばしを、服のすそで、きゅつきゅつとみがき上げました（どうやらそろそろ、ふたり目のぎせい者があらわれそうな感じですが……）。

「あの道のむこうに、フェリアルさんがいる。そう思う。」ロビーが、まっくらなろうかへとつづくその石のアーチの入り口のことをながめながら、つづけました。「でも、あそこはすぐく、いやな感じもする。さっきの分かれ道でも感じたけど、ほんとうに、さきにおぼけが待っているみたいな感じなんだ。でも、いかなきゃ。」

そういつてロビーは、剣のあかりをかざして、そのまっくらなろうかのさきのことをしてらし出そうとしましたが、このろうかはことさらに暗く、この剣のあかりくらいでは、さきはまったく、見通すことができなかつたのです。

「まさかほんとうに、ぼくらの考えたかいぶつがいるのかな？」ライアンがさらにつづけます。「でも、まあ、フェリーを放つてはおけないし、いざとなつたら、今はベルグがいるからね。なんとかしてくれらんじやない？」

いわれてベルグエルムは、ちょっとたじろぎましたが、すぐに氣を取りなおして、剣のつかをにぎりしめていいました。

「どんなかいぶつがあらわれようと、わたしにおまかせを。もうにどと、しくじりません。」（ちなみに、かれの剣をふくめて、ベルグエルムのものにもつともみんな、かれのすぐそばにおいてありました。やっぱりあかりをとすための道具だけは、持ち去られておりましたが。）
そしてベルグエルムがそういった、そのときのこと。

「ぐおおお……」

ひくく、くぐもった、なんともおそろしげなうなり声！ その声がまさに、その石のアーチのむこうがわから、きこえてきたのです！
「な、なんだ？」みんなはびっくりして、思わず身がまえました。そしてそうするうちに。またしても、そのおそろしいうなり声はひびき渡ったのです。

「ぐおおお……、がああ、ぐおおお……」

その声は、なにかとんでもなく大きな生きものの口から、出されているかのようでした。いったい、どんなやつなのでしょう？ ですがみんなの心は、そんなことなどにはむけられなかったのです。どんなかいぶつがこのさきにいるのか？ そんなことは今のかれらには、このさいたいした問題ではありませんでした。つまり、そのかいぶつにおそわれているかもしれない人物。そう、フェリアルルのごとで、かれらの頭はもう、いっぱいになってしまっていたのです！

「フェリアルルさん！」「フェリアルル！」「フェリーー！」

みんなはいっせいにさけぶと、いちもくさんに、そのろうかにむかって走り出しました！ フェリアルルが食べられちゃったら、たいへんです！ 急がないと！

あかりを持つロビーがいちばんになって、みんなはその暗いろうかの中を、あらんかぎりのはやさでかけぬけていきました。心配とあせりで、しんぞうはばくばくとなりひびいております。逃げ逃げ！ みんなはただひとつの思いだけで、このくらやみの中をかけていきました。ろうかはしばらくまっすぐいって、そこから左にまがっております。

「ぐおおお……」

かいぶつの声が、だんだん近くからきこえはじめてきました。もうすぐそばにまできているみたいです。ベルグエルムが腰の剣をぬき放ちます。ベルグエルムはかいぶつがその目にうつったしゅんかん

に、ひとたちあびせてやろうと、心にきめていたのです。

そしてついに、そのろうかはひとつの石のアーチにつながりました。そしてそのアーチの上には、こんどはこんな言葉が、書いてあったのです。

「オードブルの部屋」

オードブルとはレストランなどでメインの料理がはじまる前に出される、さいしよのお料理のことです。つまり(そのルールにしたがうのなら)ここが、いちばんさいしよの部屋ということになるようでした。どうやらロビーたちは、この部屋からじゅんばんに、ひとりずつおいていかれたみたいなのです(オードブル、魚料理、肉料理、そしてさいごは、デザートというわけです)。

「ここだー! フェリアルさんは、ここにいるー!」ロビーがさけんで、まっさきに部屋の中にふみこみました。そこでロビーが見たものは……。

で、出たー!

部屋の中にいたのは、てんじょうに頭をこすりつけんばかりに巨大な、まっ黒でまんまるの、いっぴきのおたまじゃくしのようなかいぶつだったのです! そしてそのかいぶつが、今まさに! 部屋のまん中の床の上にあおむけにたおれているフェリアルにむかって、おそいかかろうとしているところでした!

「この、ばけものめ!」ベルグエルムがでんこうせっか! まさにいなくまのごとくのいきおいで走りこみ、かいぶつに剣をふりおろしました。しかし!

「うわっ!」ベルグエルムのからだは、すってんころりん! かいぶつのからだをすりぬけて、そのままバランスをくずして、むこうがわの床にころげてしまったのです!

かいぶつはなにをされたかも気づいていないようすで、その頭を口

ビーたちのいる方にむけました。

「なんだあー？　ぐおおお……、ひかりー、光だあー！」かいぶつが、ロビーの持っている剣の光のを見て、うめきます。

「目が、目がいたーい！　おまえらあー、ささげものだなー？　な、なんでささげものが、光を持っているー？　さてはー、き、きつねたちめー、うらぎったなー！」

かいぶつはごによごによとした声でそういうと、水かきのある小さな手で、しきりに目のあたりをこすりました（もつとも、小さな手といても、それはかいぶつのその巨大なからだとくらべたら話です。じっさいは手だけでも、ロビーのからだよりもずっと大きいのでした。このかいぶつがどんなに大きいか？　よくおわかりでしょう）。

どうやらこのかいぶつは、光がにがてのようです（ですからこんな、まっくらな地下の世界にいるのでしょうか）。それとやっぱり、このかいぶつはきつねの種族であるフォクシモンたちのことを、よく知っているようでした。そしてフォクシモンたちが、ロビーたちのにもつからあたりをとすための道具をみんな持ち去っていったわけが、これでわかりました。かれらはこのかいぶつと手をくんでいて、それで、このかいぶつのきらう光を出すための道具を、持っていったというわけなのです。

さらに、かいぶつのいったささげものとは、ほかならぬロビーたちのことでした。そう、ロビーたちはこのかいぶつに「ささげられる」ために、この場所に放り出されていったのです！

「せ、せっかくこれから、ひさしぶりのフルコースー、た、食べようつとときにー、じゃー、まーを、するなあー！」

かいぶつはそういって、ぶんぶん怒りました。そしてかいぶつは、そのからだのうしろに生えているちよこんとした小さなしっぽをふりふり動かしながら、ロビーとライアンのふたりの方にむかって、まっすぐつき進んできたのです。どうやらロビーの持っている剣のあたりが、かいぶつには、目ざわりでしかたがないようでした。

「そんなものー、このおれさまがー、びったんばったんにしてやる

ぞー！」

かいぶつの口が、がばっ！ と大きくひらかれました！ なんて大きな口！ ほとんど、顔の大きさといっしょです。その口の中は真っ黒で、なんにも見えませんでした。歯もなければ、舌もないのです。いったい中は、どうなっているんでしょうか？

でも、そんなことにきょうみを持っているわけではありません！

このかいぶつはとても足がおそかったのですが、それでもロビーたちからかいぶつまでのきよりは、わずかでしかありませんでしたから。早く、なんとかしなければ！

「なにがフルコースだ、こいつめ！ そっちこそ、おたまじやくしのまるやきにしてやる！」

ライアンが怒ってそういつて、その両手をかいぶつにむかってかざしました。すると……。

ごおおお！ ライアンのまわりの空気がうずをまきながら動き出し、そしてそのうずは、ライアンの手のひらから、いっきに、かいぶつへとむかって放たれたのです！

しゅごごごおー！

もうライアンは怒りまんたんでしたから、そのすさまじいこと！

いぜんセイレン大橋の上で黒騎士たちにむかって、同じわざを使ったことがありましたが、あときは雨にじやまされて、ほんらいの力の十ぶんの一ほどの力も出ていなかったのです（せいかくには、百分の一くらいの力しか出ていなかったわけです）。それはこのおそろしいほどのいりよくの風のうずまきのことを見れば、いちもくりようぜんでした（ほんとうにライアンは、見た目とちがっておっかない……。ほんとうは、いい子なんですけどね。とりあえず、ライアンが敵でなくて、ほんとうによかった！）。

空気のうずはたつまきとなり、ごおごおというおそろしいうなり声とともに、まっすぐかいぶつにむかっておそいかかりました！ これではいくら、このかいぶつが巨大であるとしても、ただですむはずが

ありません。しかし……。

かいぶつは、まったくもつてどこ吹く風！ たつまきはかいぶつの中からだをすりぬけて、そのむこうがわのてんじょうにあたって、どこおくん！ はじめてしまいました！（おかげで、かいぶつのはんたいがわにいるベルグエルムが、ちよつととばつちりを受けましたが。）

「うそー！ なんてー！」ライアンはもう、びっくりぎょうてんです。それもそのはず。このわざはかれのとおっておきのわざのうちの、ひとつでしたから。今までどんな相手にだって、きかないためしなどはなかったのです。それがぜんぜんきかないのですから、ライアンがおどろいたのも、むりはありません（ちなみに、かこにこのわざを受けた相手は、それつきりにどと、ライアンの前にすがたをあらわそうとはしませんでした。そのくらい、こわかったのです）。

「ごんなー、そよ風ー、おれさまには、きかないぞー！」

かいぶつはそういって、ライアンにむかって手をふりかざしました！

「うわっー！」

かいぶつの手が、ライアンの腰にあたります！ ライアンはそのはずみで、部屋のすみっこにまではじき飛ばされてしまいました！

こつちのこうげきはすりぬけてしまうのに、相手のこうげきはあたるなんて！ そんなのずるい！

ですけど、そんなもんくをいっている場合ではありません。かいぶつはそのまま、こんどはロビーの方にむかっておそいかかってきたのです！

「ライアン！ だいじょうぶ？」ロビーがさげびました。

ライアンは腰をさすりながらなんとか起き上がると、ロビーにむかってさけんでかえします。

「ロビーー！ かいぶつがむかってくるよー！ ぼくのごとはいいいから、逃げてー！」

ロビーはあわてて、かいぶつの方にむきなおりました。もう目の前にまで、かいぶつの巨大な、まっ黒いあなのような口がせまってきております！

「こいつめ！ よくもライオンに、ひどいことを！」

ロビーはそういって、その手に持ったあかりのともった剣のことを、かいぶつの顔にむけてつきつけました。しかし、いったいどうやったら、このかいぶつをやっつけられることができるのか？ それはロビーにも、ぜんぜんわからないことだったのです。ひとつだけたしかなことは、このかいぶつが、光をとともきらっているということでした。ですから、考えられるしゅだんはただひとつ。このかいぶつに剣の強い光をあびせて、そのすきに、みんなといっしょに逃げるのです。でも、そんなにもうまくいくのでしょうか？

剣をかいぶつにむけながら、ロビーはセイレン大橋の上でのことを思いかえしていました。あのとぎのような強い光が、なんとか出てくれば。ロビーは強く、そう願いました。お願いだ！ 光つてくれ！ しかし、いつもいつも、そううまくあいにくというわけではなかったのです。

剣はあいかわらずぼおーとかがやいているばかりで、強く光ってくれません。もうかいぶつの方も、このていどの光などにはなれてきてしまったようです。かいぶつはひるまずに、ロビーの方にむかってきて……、そのみじかい手で、ロビーの剣にいちげき！

剣は、ばしーん！ とはじき飛ばされて、部屋のむこうの床に、からーん！ 大きな音を立てて落っこちてしまいました！

「ロビーどのー！」「ロビーー！」

さあたいへん！ 剣がなくなってしまったては、もうロビーに身を守るすべはありません。もうかいぶつの口は、すぐそこなのです！ ロビーはぎゅっと目をつぶってしまいました。このまま食べられちゃう！ ロビーはそう思いました。

しかしつぎのしゅんかん。ロビーは思わぬ声をきいたのです。それはかいぶつの口から出た、いがいな言葉でした。

「ぎゃああー！ い、いたーい！ いたーい！」

なんと！ かいぶつがその手をおさえて、その大きなからだのことをよじらせて、わあわあくるしがっているではありませんか！ これはいったい！ どういうことなのでしょう？

ロビーはふしぎに思いました。ですがこれは、大きなチャンスです！今のうちに、みんなといっしょに逃げなくちゃ！ロビーはすばやくけつだんしました。

「ライアン！ベルグエルムさん！」ロビーはせいっぱいの声でさげびました。

「今のうちに、逃げるんです！フェリアルさんをつれて！」

ロビーはそういって、ライアンのもとにかけよりました。ロビーはなによりもまず、ライアンがけがをしていないかどうか？たしかめたかったのです。

「ライアン、けがは？」ロビーが心配して、ライアンのからだをささえながらいきました。

ライアンはかいぶつの手にうたれ、床に腰をうちつけていましたが、さいわいたいしたことはなかったようです。

「だいじょうぶ、歩けるよ。」

「よかったー！」ライアンの言葉に、ロビーはとりあえずほっとしました。

「ありがと、ロビー。でも、今はそれより、早く逃げないと！あのかいぶつが、またむかってこないうちに！ベルグ！フェリーをたのんだよ！」

さあこれ以上、こんなかいぶつのことを相手にしているわけにはいきません。とにかく、かいぶつがひるんでいる今のうちに、ここから早くはなれなければ！みんなは部屋のむこうにもうひとつの出口があるのを見つけると、床に飛ばされた剣をひろって、そこからいちもくさんにかけていきました（眠ったままのフェリアルはどうにも起きませんでしたので、ベルグエルムが急いでおんぶしていききました）。

みんながろうかに走り出たところで、うしろの部屋からかいぶつのおそろしいなり声がきこえてきました。

「ぐるー！おーのーれー！よーくーも、やったなー！」

そして、なんてことでしよう！ かいぶつはその巨大なからだをへびのようにほそくのばして、せまい石のアーチのむこうから、ロビーたちのことを追いかけてきたのです！

「うわっ！ 追っかけてくるよ！」ライアンがうしろをふりかえりながら、さげびました。

「まずい！ どこか、かくれられるようなところはないか！」ベルグエルムがあたりをすばやく見渡しながら、つづけました。

かいぶつはそのからだをよじらせながら、どんどん追いかけてきます（さっきのおたまじやくしみたいなときとはちがつて、こんどはとつても動きがはやいのです）。みんなはとちゅうでいくつかの分かれ道をまがって、かいぶつのことをまこうとしましたが、かいぶつはそのたびに、みんなのいる方の道をたしかめながら、追いかけてきました。どうやらこのかいぶつは、目ではなくにおいで、みんなのことをたしかめているようなのです（このかいぶつに鼻があるのかどうかは、わかりませんでした）。

みんながまがりかどをまがるたびに、かいぶつはくんくんとおいをかいで道をたしかめながら、あとをついてきました。そしてとうとう。みんなはまっすぐなろうかのとちゅうで、かいぶつに追いつかれてしまったのです！

ばんじきゆうす！ もうどこにも逃げ場はありません！ まさかここまで、しつこいなんて！

ベルグエルムがフェリアルのことをかかえながら、かいぶつの前に立ちふさがりました。剣がすりぬけてしまうことはわかっていましたが、それでも、仲間のことを守ろうという気持ちと、騎士としての気高い心が、そうさせたのです。

「もとの暗がりへ帰るがいい！ わたしは白の騎兵師団の長、ベルグエルム・メルサルだ！ 仲間たちには、もう、ゆびいっぽんとて、ふれさせはせんぞー！」

ベルグエルムはかた手で剣をつきつけ、かいぶつにさげびました。しかしかいぶつは、まったく耳を貸しません。かいぶつはぶきみな笑い声を上げると、あざけるようにいいました。

「そんなー、ちやちな道具で、おれさまがたおせるとでも、思ってるのかー、笑わせるーなー!」

ベルグエルムはかいぶつの顔にむかって、剣をつきさしました! ですがやっぱり、剣はすりぬけてしまって、かいぶつをさすことができせん。もはや、どうすることもできませんでした。みんなはここで、このかいぶつに食べられちゃうんでしようか……?

もちろん、そんなわけがありません! だってまだまだ、この物語はつづくんですから! (ここでみんなが食べられちゃったら、あとに書くことがなくなっちゃいますから。)

そして、このさいだいのピンチのときからみんなのことをすくったのは……、やはり、ロビーだったのです。

仲間の危険を前にして、ロビーの心はめらめらと、まるでほのおのようにさわぎ立ちました。なんとかしなければ、みんながやられてしまう! ロビーの思いが今ふたたび、手にしたそのふしぎな力を持つ剣へと、ひびき渡ったのです。

剣はロビーの心をうつしたかのように、さらに明るく光りかがやき出しました。その光はまるで、ほのおがもえているかのように、ゆらゆらとゆらめいていました。ロビーは剣を強くにぎりしめました。そして自分でもむがむちゆうのままその剣をかまえると、ロビーは、このおそろしいやみのかいぶつのもとへとむかって、走り出していたのです。

かいぶつが、ロビーに手をのばします! ロビーのことをつかまえて、びったんばったんにしてしまうつもりです! あぶない! ロビーはかいぶつのその手にむかって、力のかぎり剣をふりおろしました。ですがやっぱり、その剣はすりぬけてしまい……、いえ、ちがいます! ロビーのふりおろした剣は、かいぶつのからだをすりぬけなかつたのです!

かいぶつの手は、剣に切られてまっぷたつ! 床に落ちて、しゅうしゅうとまっ黒いきりになって、とけてしまいました! そして切られたところからも、黒いけむりがしゅうしゅうと、吹き出していたのです。

「ぎ、ぎ、ギヤああー！」

手を切られて、かいぶつはあらんかぎりの声でさげびました。そう、ロビーのこの剣は、このかいぶつのことを切ることのできる、ゆいいつの剣だったのです！　そしてさきほど、このかいぶつがわあわあいつて痛がったわけも、このためでした。ロビーの持つこの剣を手ではじき飛ばしたときに、かいぶつは剣のやいばで手を切って、けがをしたのです。

かいぶつはへびのようなからだをくねらせて、あばれまわりました。そのからだは、ロビーの方にむかつてきます！　ロビーははんしや的に、身を守るかたちで剣をふるいました。そしてこんどは、かいぶつのそのからだに、剣がめいちゆうです！　ぶしゆううー！　かいつつのからだからまつ黒いけむりがもくもくとあふれ出し、あたりはいちめん、けむりだらけになりました。

「早く、ここからはなれましょうー！」　ロビーがみんなにさげびました。もう、これでじゆうぶんでした。

かいぶつはまつ黒なけむりをもうもうと上げながら、その場へたりこんでしまいました。みんなのあとを追いかけることも、もうできないでしょう。そのからだからはどんどんけむりが吹き出していて、それにあわせて、かいぶつはどんどん小さくなっていききました。そしてみんなは、力のぬけたそのかいぶつのことをあとにして、そのまままっくらなろうかの中を、まっしぐらにかけていったのです。さいごにふりかえったみんなが見たものは、ちりぢりになって消えてゆく、かいぶつのそのさいごのすがた、そればかりでした（ここで読者のみなさんにだけ、お伝えしておきましょう。この「夜のかいぶつ」は、じつはまだ、死んではいかなかったのです。ですがかれはもう、もとのかいぶつとしては、にどと悪さのできないからだになってしまいました。

かれのからだは、やみとたましいのエネルギーによって作られていました。それらのものがみんな、かれのからだからぬけ出したのです。そのけっか、かれはまつ黒な小さないっぴきのかえるになって、どこかの暗がりの中へと、ぴよんぴよん、はねていくこととなりました。

た。

今でも、このかつての巨大なかいぶつは、このいせきの地下のどこかにいるのです。ですが、もうにどと、かれのすがたを見る者もないことでしょう。

「ここまですれば、もうだいじょうぶだ。」ベルグエルムが、みんなにむかっていいました。

さきほどの戦いのあと。みんなは暗いろうかの中をまっしぐらにかけつづけ、そしてようやくこの場にたどりつくことができる、両方のひぎに手をつけて、はあはあと息をととのえることができているのです。

「なんだか、つきからつきへと、いろんなできごとがめじろおしだったね。」ライアンも「ふう。」と大きなため息をついて、つづけました。

「ベルグにフェリー。ふたりが見つかってよかったと思うひまなく、あのかいぶつだもん。これじゃ、キャンディーをなめてるひまもない。」

ライアンはそういって、かばんの中からキャンディーのはいったふくろを取り出しました。ですが……。

「あああーっ！」

ライアンがとんでもなく大きなさけび声を上げました！ いったいどうしたというのでしょうか？ まさかまた、べつのかいぶつがいた？ それともなにか、しんこくな問題でも起きたのでしょうか？

「ど、どうしたの？ ライアン。」

「なにかあったのか？」

ロビーもベルグエルムも、びっくりしてライアンにたずねます。そして、ライアンの口から出た言葉は……。

「キャンディーが、われちやつてるー！」

そ、そんなことですか……。

じつはさつきかいぶつにはじき飛ばされたときに、かばんが床にうちつけられて、中のお菓子がみんなこわれてしまっていたのです（さすがにライアンも、さきほどはひじょうにピンチのときでしたので、

お菓子のことを気にかけているよゆうすらありませんでした。それにライアンもあのていどのいちげきくらいでは、ぜんぜんかばんもだいたいじょうぶだと思っていましたが、どうやらライアンの見こみとはちがって、かばんのうちどころは、かなり悪かったようです。

「クツキーまで、こなごなだー!」

お菓子がなによりも好きなライアンですから、そのかなしみはたいへんなもののように感じた（自分の腰のけがのことなんか、どうでもいよいよでした）。みなさんも、自分がたいせつにしているものがこわれちゃったとしたら、かなしいですよ。フットボールの大会でもらったトロフィーだったり、たんじょうびのプレゼントでもらったしやしん立てだったり。ライアンの場合は、それがお菓子なのです。

ライアンは半分ベそをかきながら、こなごなになったキャンディーのかけらを集めると、それらをやけになって、全部まとめて、口の中に放りこみました。そしてライアンは、それらのキャンディーのかけらをばりばりとかじりながら、ぶんぶん怒って、こうさげんだのです。

「こうなったのも、みんな、フォクヒモンたちのせい! このかたひは、ひっと、取ってやる!」

（ライアンの問題についてはべつのこととして）とにかくみんなは、これで大きなこんなんのときを乗り越えることができたわけでした。ほんとうに、あやういところでした。ライアンが腰をうったただけですんだのは、まこと、運がよかったというほかありません（それと、ベルグエルムがころげたうえ、ライアンのわざのとぼちりをちよつと受けたということも、いちおういれておきます）。そしてこのけつかをもたらしたのは、まったくもって、ロビーと、ロビーの持つ剣のおかげでした（もちろんベルグエルムやライアンもゆうかんでしたけど、こんかいばかりは相手が悪すぎでしたね。こうげきを通じないんじゃない、どうすることもできませんもの）。

ですがじつさいのところ、どうやったら剣の力をのぞみ通りにひき出すことができるのか？ それはロビーにもわからないことでした（いつまたセイレン大橋の上でのときみたいに、ロビーののぞむ以上

の強力な力を、生み出してしまわないともかぎりません)。みんなはロビーのこの剣のことについて、もういちどそれぞれの考えを話しあいましたが、けつきよくこんかいのように、ほんとうに剣の力が必要などきにかぎって、その力をためしてみるほかはないという、けつろんしか出なかつたのです(ですが今は、これ以上のけつろんはないものと思われました)。

「じゃあこれからは、おぼけのたぐいはロビーのたんとうでお願いね。」さいごにライアンが、ロビーのからだをつつきながらちやかししました。「それがいの相手は、ベルグとフェリーが、きれいにやつつけてくれるから。」

さて、このふしぎな剣のことについては、これでひとまずおしまいにしておきましょう。となればもつかのところ、みんながまずやらなければならぬことは、ひとつでした。出口をさがす……、のはもちろんなのですが、その前に。

フェリアルくんを起こさなくっちゃ!

フェリアルはあのかいぶつとのたいへんな戦いのさなかにも、ぐーいって、眠ったままだったのです(よつぽどお酒がきいていたんですね。飲みすぎたんでしょうか?)。ここでどうしようしたのが……、そう、(みなさんお待ちかねの)ライアンのあの、はどの目ざまし時計でした!

ライアンはクツキーのかけらをばりばりかじりながら、かばんからその目ざまし時計をそつと取り出すと(この時計はとてもがんじようでしたので、こわれていなかつたのです)、そこに、よくみがかれたきんぞくせいのくちばしをつけた、親クルツポーのことを取りつけました(おそろしい……)。そしてそれからライアンは、またべつのあるものを取り出しましたが、それがいったいなんなのか? 著者のわたしにもわかりません。ですがロビーだけは、それがなんなのか? もくげきしたようでした。

「ちよつとベルグは、むこうむいててくれる?」ライアンが、にこにこしながらいきました。ですけどほんとうはお菓子のごとで、まだライアンはとつても、きげんが悪かつたのです(ロビーにはすぐに、そ

れがわかりましたが)。ですからライオンは、このチャンスにちよつと、フェリアルにやつあたりしてやろうと考えていました(フェリアル、かわいそうに……)。さて、こんどはどんなに、おそろしいことになるのでしょうか？ フェリアルがただではすまないということだけは、はつきりしていましたが……。

「ぎゃあああぁー!」

ああ、かわいそうに……。このトンネルのすみずみにまでとどくかというくらいにフェリアルのひめいが、こだましました。このときにライオンがなにをしたのか？ それはみなさんのごそうぞうにおまかせします(わたしはこのときのことを、のちにロビーほんにんにたずねることができましたが、ロビーは「そ、そんなこと、いえません!」といってぶるぶるふるえるばかりで、ライオンがなにを取り出してなにをしたのか？ 教えてもらうことはできなかつたのです。たぶんライオンに強く、口どめされていたんだと思います)。

フェリアルのひめいに、うしろをむかされていたベルグエルムが、びっくりしてふりかえりました。

「なっ、なんだ?」

見ると、フェリアルがぱんぱんにはれ上がったおしりをかかえて、あたりを飛びまわっているところだったので。

「なにをしたんだ?」ベルグエルムがライオンにたずねました。ですがライオンは、これ以上ないほど気分さつぱり! といった顔をして、こうこたえるばかりだったので。

「ひ、み、っ。」

ロビーはなににもいえず、ただその場に立ちつくして、見ていることしかできませんでした。

とにかく。これでもういちど、四人の仲間たちがせいぞろいしたのです! やったー!

え? ばらばらになってから四人がそろうまで、やけに早いじゃない

いかって？ それはつまり、レストランの料理になぞらえられた部屋が、それぞれじゅんばんにならんでいたからなんです（もつともいせきの部屋も、そんなにつごうよくは四つならんでいませんでしたから、部屋と部屋のあいだには、それなりにきよりはありました）。そしてこれは、「それぞれの部屋に用意したごちそうをレストランのフルコースみたいに、一品ずつじゅんばんに食べてまわりたい」という、かいぶつのきぼうからのことでした（あのおかしな部屋の名まえは、このかいぶつのきぼうにそって、つけられていたというわけでした。

ちなみに、あとでフォクシモンたちにきいたところによりますと、「ただふつうに食べるより、レストランのフルコースみたい、すこしずつじゅんばんに食べた方が楽しいだろーがー！」とかいぶつにいわれたことが、こんなことをおこなった、そのそもそのきっかけだったそうです。あのかいぶつは、食べることがなにより、楽しみだったみたいですね。もつとも、食べられる方は、たまったものではありませんが）。

これはほんとうに、運がよかったといえることでしょう。だって、もし、「宝さがし気分を味わいたいから、さがして楽しめるように、ばらばらにあつちこつちに放り出していけ」だとか、「じっくり食事したいから、いつしゅうかんにひとりずつ食べさせろ」なんてことを、かいぶつがいつてきていたら、ふたたびみんながめぐり会えるまではない、たいへんな時間がかかったにちがいないでしょうから（もつとも、かいぶつが「ごはんをみんなまとめていちどに食べたいから、みんなまとめてひとつの場所においていけ」といつてくれていたのなら、すぐに四人そろわうわけですから、みんなはもつと助かりましたが。まあそれは、ぜいたくすぎというものでしょう）。

こういつたわけで、みんなはこの、かいぶつのわがままなきぼうのおかげもあつて、こんなにも早く、ふたたびせいぞろいすることができたというわけだったので（けっして、「みんなを早くそろえた方が、物語を早くさきに進めることができるから」だとか、わたしが話をつごうよく、まげて作っているわけではありませんよ。ごかいしないでくださいね）。

さて、四人がそろいましたから、みんなはもう、あとはわき目もふらずに、地上をめざすばかりでした。もたもたしていたら、また新たなかいぶつが、あらわれないともかぎりません（ほんとうはもう、ここにはほかにかいぶつはいませんが、みんながそれを知っているはずもありませんでしたから）。ここでいちばんのたよりとなったのは……、ライアンの風の力をかりる、そのわざだったのです。

「上からの風は……」ライオンが目をとじて、いしきを集中させました。

「こつちだ。こつちの道から吹いてるよ。」

みんなはライアンのしめしたその道を、ひとかたまりになって進んでいきます。道はあいかわらずのまっくらで、もしライアンの助けがなかったとしたら、このさきには出口があるなんてことは、ぜんぜんそうどうもできないくらいでした（ちなみに、ロビーのふしぎな感かくは、仲間を見つけようとしているときにはたらくものだったようです。ですから出口については、ロビーはなにも感じることはできませんでした。ざんねん）。

道はそこから、くねくねとまがりくねってつづいていました。こんな道は、今までになかったものです。やっぱり出口が近いから、道も変わってきたのでしょうか？

やがてあるときから、ろうかの石だたみの上に砂がちらばっているようになりました。ベルグエルムがしゃがみこんで、その砂をしらべます。そしてかれは立ち上がって、仲間たちにごうつげました。

「この砂は、この地下世界のものではない。われらがめざす、地上の世界から飛んできたものだ。となれば、出口は近いぞ。」

ベルグエルムの言葉に、みんなは声を上げてよろこびました。出口が近い！ それはこの地下世界にとじこめられているみんなにとって、これ以上はないというほどのきぼうの言葉となりました。

しばらくすると、それにさらなるよろこびが加わりました。風です。みんなのほほに、はつきりとわかるくらい風の風が感じられるようになったのです。その風は冬も近いこのきせつでは、こおりのように

つめたい風でしたが、仲間たちにとっては、春のいぶきのそよ風そのものに感じられました。

「上からの風だよ！ もうすぐだ！」ライオンがうれしそうにいいました。

そしてそこから、いくらもいかないところでのこと。道のとちゅうの左のかべに、また石のアーチがひとつ、つくられていました。ロビーが剣をかざして、みんなが中をのぞきこんでみます。すると……、そこには、思いもかけなかった、なんともおかしな光景が広がっていたのです。

「な、なんだ、これは？」

みんなはびつくりぎょうてんして、いつせいにおどろきの声を上げました。

みんなの見た、アーチのむこうのその部屋の床の上。そこにたくさんの人たちが、あおむけにされて寝かされていたのです！

みんなはすぐさま、部屋にはいつてそれらの人たちのことをしらべてみました。全部で、十、二十、三十、四十……。五十七人もいます（すごい数です）。かれらはみな、手を胸の上にくまされていて、石の床の上にきれいにならべて、寝かされていました（どう見ても、自分たちから進んでそのようなじょうたいになって寝ているようには、見えませんでしたから。これはやっぱり、だれかによって、この場所にこのように寝かされていたのです）。ほとんどの人たちは人間で（五十一人が人間でした）、あとは人間ににている種族の人たちでした。

「みんな、死んじゃってるの？」ライオンが心配げに、そういいました。たしかにかれらは、みな目をしていて、ぴくりとも動いていませんでした。そのうえ、そのはだも血の気がなくて、まっ青だったのです。見た感じ、息をしているようにも見えません。これではライオンのいう通り、かれらがみな、死んでしまっているのだと思っただとしても、とうぜんのことだといえることでしょう。ですが、それらのことにもかわらず、これらの人たちはただのひとりも、死んではいませんでし

た。さあ、それっていったい、どういうこと？

「ここにいるのは、ほとんどが、西のハーレイ国の人たちのようだ。」ベルグエルムが、人々のその服そののを見ていいました。「おそらく、かこにこの地にやってきた、旅人たちだろう。それに、こつちには、ルルムたちもいる。」

ルルムというのは人間ににいましたが、人間よりも耳が長くて、はんしやしんけいにもすぐれている、ふしぎな種族の人たちのことでした。大むかしには南の地に大きな王国をきずいていたそうですが、今ではすっかり数もへって、人間たちの社会の中で、ひっそりとわずかな人数が暮らしているばかりだったのです。

「はるかなくにの旅人たちが、こんなところに、こんなにたくさんいるなんて。これも、フォクシモンたちのしわざなのでしようか？」フェリアルが、ベルグエルムにたずねました（フェリアルのちゃんとしたせりふも、ひさしぶりな感じですね。ちよつと前に「ぎゃああー！」というさけび声なら、ききましたか……）。

「おそらく、そうだろう。」ベルグエルムが深く考えをめぐらせながら、こたえました。

「これは、じつに深いじじつだ。はぐくみの森がすたれたわけが、これで見えてきたぞ。」

ベルグエルムが、人々の口をしらべてみます。見た目と同じく、やっぱりこの人たちは、こきゆうをしていませんでした。ですが、人々の胸に手をあててみたベルグエルムは、そこでとても、びっくりしたのです。しんぞうが動いていました！

この人たちのからだには、まだ血がめぐっていたのです。かれらのからだも、やわらかいままでした。ですがそれにもかかわらず、かれらのからだはまっ青で、死人のようにつめたかったです。これでは生きているのか死んでいるのかも、わかりません。いったいこの人たちの身に、なにが起こったというのでしょうか？

「この人たちが、なぜこんな目にあわされているのか？ それもフォクシモンたちが、すべて知っていることだ。今は、どうすることもできない。ここからだつしゅつして、フォクシモンたちに会うこと

の方が、さきだろう。」ベルグエルムがいました。

「それなら、すぐに会いにいこう。」ライアンがそういって、さきほどはいつてきた（この部屋にひとつだけの出入り口である）石のアーチへとむかいました。「早く、お菓子のかたきも取らなくっちゃ！」そしてみんなもそろって、その部屋の入り口にむかおうとしたときのこと……。

「うわっ！」

どすんっ！

いちばんはじめに、いさんで部屋をかけたライアンが、アーチをくぐったそのところでふいになにかとぶつかりました！ ライアンははずみで、床にころがって、べっちん！ しりもちをついてしまいます（今日はよく腰をうちますね）。そしておどろいたことに、しりもちをついたのはライアンひとりではありませんでした。

「いたたた……！」

そういっておしりをさすりながら、ライアンのはんたいがわにたおれていたのは……、なんとなんと！ あのきつねの種族の男の子、チップリンク・エストルくんじゃありませんか！

「ああーっ！ おまえ！」

みんなはもう、大きわぎでした。それもそうでしょう。自分たちがこんな目にあわされている、そのおおもとを作ったいちばんのちようほんにんが、今日の前にいましたから。

みんなはかけよって、あつというまにチップのことを取りかこんでしまいました。どうしたって、逃がすわけにはいきません。いろいろききたいことが、山ほどあるのです！

「こいつ！ よくもだましたな！」ライアンが、チップの胸ぐらをぐいっつつかんでいいました（背たけがいつしよくらいでしたので、まるで子どもどうしのけんかみたいでした）。ベルグエルムもフェリアルも、さすがにこのときばかりは、チップにぐいぐいとせまりよったのです。

「ご、ごめんよ！ めいれいされて、しかたなかったんだ！」

こうなってしまったのなら、もうなすすべもありませんでした。チツプはその場にべったりとすわりこむと、大ベそをかいいて、わんわん泣き出してしまったのです。

これには仲間たちも、さすがに気持ちをやわらげるほかありませんでした（いつだって、子どものなみだにはかなわないのです）。それにチツプはもう、じゅうぶんすぎるほどはんせいしているみたいです。これ以上強くせまったところで、なんにもならないでしょう。

「この人たちは、かこにきみたちが、あのかいぶつにさし出した人たちだな？」チツプがおちつくのを待ってから、ベルグエルムがチツプにいいました。

チツプはベそをかきながら、小さくうなずきます。

「そうです……」

ベルグエルムは、すべてになつとくがいったかのようでした。自分たちがここに放り出されていたりゆう。はぐくみの森になが起こったのか？ ということ。それらもすべて、あのみつ黒なおたまじやくしのようなかいぶつ、夜のかいぶつのせいだったということなのです。

「さあ、全部話すんだ。きみたちの森、はぐくみの森に起こったことの、すべてを。」

それからチツプは、自分たちの森に起こったこと、村のおきてのこと、それらのすべてをみんなに話してきかせました。それは、かいつまんでいえば、こんなような話だったのです。

今から三十年くらいむかしのこと。はぐくみの森にとつぜんおそろしいかいぶつがあらわれて、森の人々のことをおそうようになりました。人々は森からどんどん逃げていって、三年もすると、はぐくみの森はすっかり荒れ果て、人のよりつかないなんともさびしい森へと変わり果ててしまいました。

それでもかいぶつは、この森からはなれようとはしませんでした。

かいぶつは森のまん中にある大むかしのいせきをすつかり気にいつて、そこに住みついてしまったのです（そのいせきが、みんなが今いるこのいせきです）。

いせきに住みついたかいぶつは、フオクシモンたちの村にやってきて、自分の食べものであるたましいのエネルギー、つまり生きている人を、さし出せと行ってくるようになりまし。はじめは村の人たちが、みずからその身をぎせいにささげました。しかしそれではすぐに、村はほろんでしまいます。フオクシモンたちに、せんぞからの土地であるこの森をすてることなどは、できませんでした。かれらが生き残るために取った道は、ただひとつ。そこからやってくる旅人たちを、かいぶつのもとにささげるということだったのです。

それくらい、かいぶつは森のいせきに住みつづけ、フオクシモンたちもかいぶつにしたがいつづけてきました。どうしたって、あの夜のかいぶつをやっつけるなんてことは、かないませんでしたから。旅人たちがこの森にやってきたら、その者たちをうまくだまして、かいぶつにささげること。このことは村のおきてとなり、きびしく守られるようになったのです。このおきては自分たちの土地とでんとうを守るための、くるしいけつだんでした。これが、はぐくみの森に起こったそのひげきのできごとの、すべてです。

「でも、ぼくにはもう、こんなことはたえられないんです！ なんのつみもない人たちのことをぎせいにして守るものに、いったいなんのちががあるんですか！ そんなの、まちがってます！」

チップは床にへたりこんだまま、なみだながらにうったえかけました。かわいそうに。まだ十さいばかりのこんな小さな子が、こんなにもつらい目にあい、くるしんできたのです。仲間たちはチップのこと、とてもかわいそうに思えてきました。かれらのおこなったことは、けつしてゆるされるようなことではありません。ですがもし、自分が同じ立場になったとしたら、どうでしょう？ だれにもチップのことを、これ以上悪くいうことなどはできませんでした。

「だからぼくは、村のみんなにないしよ、あなたたちを助けようと

思って、ここへきたんです。」チップはそう言って、みんなにランプや油などの道具を渡します（これはもともと、みんなの持ちものだったものです）。

「夜のかいぶつは、光をとでもきらうんです。だから、みなさんのあかりも、ぼくたちが取りました。あいつには、剣も矢もききませんから、それがいのにもつは、そのままみなさんといっしょににおいていきました。でも、まさか、その剣からあかりが出るなんて。」チップはロビーの持つ、そのふしぎな剣のことをしめしながらいきました。

「でも、光があつても、せいぜいすこしの足どめくらいにしかありません。みなさんは、いったいどうやって、ここまでやってきたんですか？　ぼくは、夜のかいぶつが起きてくる前に、みなさんのことを助けようと思ってたんですけど、村のみんなのすきについて、ここまでやってくるのが、すっかりおそくなってしまいました。だからもう、だめかと思っていたんです。夜のかいぶつからのがれて、レストランの部屋をぬけて、ここまでやってくるなんて、さうとう運がよかったとしか思えません。あのかいぶつから、いったいどうやって、逃げてきたんです？」

これに対して、ライオンがとくいげにこうこたえました。

「ああ、あのおたまじやくしなら、ぼくたちがかるーくやつつけちやったよ。」（ほんとうはかなりあぶなかつたのですが。まあこれは、ライオンのいつもの強がりですから。）

ですけどチップは、とても信じられないといったふうに、こうこたえるばかりだったのです。

「まさかそんな。うそでしょう？　あいつをたおしたなんて。」

チップが信じられないのもむりはありません。チップのいう通り、あの夜のかいぶつは、ほんとうに、剣でも矢でも、ほのおでもたつきでも、たおせませんでしたから（なにせあのかいぶつのからだは、全部、夜のやみそのものでできていましたから、それもそのはずだったのです。やみになにをしたって、かなうはずもありませんよね。それこそ、とくべつにふしぎな剣でも使わないかぎりは）。そのかいぶつをたおしたといわれても、とてもわかには信じられるはずもありま

せんでした（それに「たおした」といつているのが、自分と同じくらいに小さなからだのライアンでしたから、信じるという方がむりというものだったのです）。

「ほんんとだつてばー！ ロビーがこの剣で、やつつけたんだよ！ あいつはけむりになって、ちぢんで、みんな消えちやつたんだから。」さて、このあたりになってくると、チップもだんだん、ライアンの言葉がうそではないようだと思うようになってきました。ベルグエルムとフェリアルがまじめな顔をして、「信じられないかもしれないが、ほんとうだよ。」といったので、ようやくチップは、かいぶつがたおされたということを、信じることとなったのです（やつぱり大きくてりっぱな騎士にいわれた方が、しんじつ味があるというものですよね。ライアンは「だから、ほんとうだつていつたじゃないかー」といつて、怒ってましたけど）。

「すごい、やったやった！ これで、みんながすぐわれる！」チップは大きなしつぽをふりふりふつて、ぴよんぴよんはねて、よろこびました。ですが、仲間たちの心は、いまだ晴れやかなものではなかったのです。それはつまり、この場所に寝かされている人たち。このかいぶつのかこのぎせいとなった人たちが、まだ、助かってはいないからでした。

「よろこぶのは早いぞ。」ベルグエルムがきびしい顔をして、チップにいいました。「村を守るためとはいえ、きみたちは、とてもゆるされないことをしてきたんだ。そのつぐないは、けっしてかんたんなものではない。」

「そうだよー！ ぼくのお菓子のごとも、うんとつぐなってもらわないとー！ さあさあ、どうしてくれるんだー！」ライアンもそういつて、チップにぐいぐいとつめよります。

チップはまた、しゅんとした顔にもどつて、しおらしくなつてしまいました（お菓子のことつてなに？ って、ちよつと思いましたがど）。

「わかっています……。これから村のみんなと話しあつて、ぼくたちのするべきことを、しっかりと果たしていくつもりです。で、でも、こ

の人たちなら、もうじき助かるはずなんです！　かいぶつが、たおされたんだから！」

そういつてチップは、部屋の中の方をむきました。そしてちようどそのとき。みんながうしろの部屋の方をふりかえろうとした、まさにそのときのこと。旅の者たちはそこで、思いもかけない、たくさんのいがいな声たちのことをきくこととなったのです。

「はーつくしよん！　うう、寒い！」

「うーん、やけにかたいベッドだな……」

「ええつと、顔をあらう、お湯はどこだ……？」

なんてことでしよう！　みんながふりかえると、部屋の中に寝かされていたあのたくさんの人たちが、みんな手足をぐいんとのばして、それぞれ思い思いのかっこうで、起き出しているじゃありませんか！　かれらはねぼけまなこのままで、あくびをしたり、目をこすったり、あたりをきよるきよる、見渡したりしていたのです。そしてかれらは、それからこぞつて、ひとつの同じ言葉を口にしました。

「ここは、どこだ？」

今や五十七人の人たち、そのすべてが、もとの通りに起き出していました！（顔色はまだだいが、悪いようでしたが。）これはいったい、どういうことなのか？　さあチップ、説明して！

「この人たちは、夜のかいぶつにたましいを食べられてしまったんです。でも、たましいを食べられても、かんぜんに死ぬわけじゃありません。からだはまだ、生きてまます。」

チップのいうことには、夜のかいぶつ（これはフォクシモンたちが、あのかいぶつのことをよび名だったのです）が食べるのは、人のたましいのエネルギーなのであって、人のからだそのものではないということでした。そしてたましいを食べられた人は、半分死んだようになつて、ずっととしも取らずに生きつづけるというのです。

さらに、かれらのたましいは夜のかいぶつのおなかの中に、ずっとたくわえられるということでしたが、たましいがからだからあんまりはなれてしまうと、もうもとにもどることができなくなって、からだはほんとうに死んでしまうのだそうでした（このことはいちばんはじめのころに、フオクシモンたちがかいぶつにたましいを食べられたときのそのけいけんによつて、考えられるようになったことでした。はじめたましいを食べられた人たちは、同じように半分死んだようなじょうたいになったままでしたが、かれらのもとからかいぶつが遠くはなれて去つていったときに、かわいそうに、かれらのいのちはそのからだから、ほんとうに消えてしまったのです。

つぎにたましいを食べられた人たちは、かいぶつがその場にしばらくとどまつているあいだは、生きていました。ですがやっぱり、かいぶつが遠くはなれていつてしまうと、同じくそのいのちは、からだから失われていってしまったのです。

ひよつとしたらこれは、かいぶつの中からだの中に取りこまれてしまったたましいのせいなのではないかと、フオクシモンたちは考えるようになりました。つまり、食べられてしまったみんなのたましいは、かいぶつのおなかの中にずっと残っていて、そのたましいからからだがあんまりはなれてしまうと、そのからだはほんとうに死んでしまふのではないかと思つたのです。

そしてこのことは、三回目たましいを食べられた人たちのからだによつて、正しいものだとしようめいされることになりました。つまり、かいぶつの住みついているこのいせきの中にそのからだをおいたままにしておけば、かれらの中からだはたましいからはなれすぎることもなく、そのいのちもずっと、たもたれるのだということがわかつたのです。

ちなみに、この三回目のささげものをおこなつたときに、はじめ村のおきてがじつこうされました。つまり、三回目からささげられたのは、フオクシモンたちではなくて、旅の人たちだつたということです。一回目と二回目のささげものにより、フオクシモンたちはすでに、八人の仲間たちのことを失つていました。もうこれ以上、仲間た

ちのことを失うわけには、かれらもいかなかったのです。

つまりこういったわけで、フォクシモンたちは夜のかいぶつが住みついてはなれることのない（つまりたましいが遠くに去ってしまってしまうことのない）この地下いせきの中に、旅人たちのからだを、ずっと寝かせたままにしておいたというわけでした（それと同時に、かいぶつがこのいせきからはなれることのないように、このいせきの中で年にふたりずつほど、ささげものを与えつつけるということをやくそくしてもいました）。いつの日か、夜のかいぶつがやつつけられて、かれらのたましいがもとのからだへともどる、そのときまで……。

そしてついに今日、ロビーの手によつて、そのかいぶつがたおされたのです！ ロビーがかいぶつのからだに切りつけたとき、かいぶつのからだからは、やみと、けむりと、そして今までに食べたたくさんの人たちのたましいが、いつしよにぬけ出していました。そしてそれらのたましいは、自分のからだのもへと、今こうして、もどつてきたというわけだったのです！（心から「お帰りなさい！」といたいのですよね！

ところで、かいぶつがたおされても、はたしてほんとうにそのたましいがもとのからだにもどるのかどうか？ それはフォクシモンたちにも、はつきりとはわからないことでした。たましいがずっと残っているのだから、そのたましいがかいほうされればもとのからだにもどつてくれるだろうという、よそうでしかなかったのです。もつとも、そんなことはだれにだって、わかるはずもないのですが。ですから今、たましいがほんとうにもとの人たちのからだにもどつたことは、かれらフォクシモンたちにとつても、とてもよろこばしいことでした。やっぱり、たましいと人のからだのあいだには、目には見えないう、ふしぎなつながりがあるみたいですね。

ちなみに。フォクシモンたちが旅の者たちのもつをみんなのからだのすぐそばにおいていったのは、どのにもつがだれのものなのか？ わからなくなってしまうことを防ぐためでした。寝かされていた五十七人の者たちのそばにも、やっぱりかれらのもつが、しつかりとおいてあったのです。フォクシモンたちはみんなのからだがふ

たたびもとの通りにもどることを信じて、そのときに、にもつもしつかりと、みんなにかえすことができるようにしていたというわけでした。どこかにひとつにまとめておいたら、思わぬことで、にもつがごっつちやになってしまわないともかぎりませんでしたから。

もつとも、あかりをつけるための道具だけには、その心配がありませんでしたけど。それらの道具はフォクシモンたちの村のそうこに、まとめておいてありましたから。）

もう、あたりはまさに、おまつりさわぎといった感じでした。なにしろさいしょにかいぶつにたましいを食べられた人などは、もう二十年以上も、ずっと眠ったままであつたのです。それがとつぜん、こうして目がさめたわけですから、みんなわけがわからないのも、とうぜんのことでした。

かれらをまとめてじじようを説明するのは、たいへんなしごとになりました。自分たちがフォクシモンたちにだまされたのだということを知ったときには、みんなものすごく怒って、口々にもんくをいつたものだったのです（なにしろ五十七人もいましたから、かれらをなだめるのはひとくろうだったのです）。ですけどどうにか、かれらをおちつかせることができる、旅の仲間たちはいよいよ、つぎにやるべきことをおこなうことができました。それはつまり、このいまわしい地下世界に、今すぐわかれをつげるということだったのです。

さあ、ついに！　そとに出るそのときがやってきました！

「出口だ！」

チップのあんないで、仲間たちは出口へとつづくそのかいだんのもへと、急いでかけ出していきました。もうロビーもライアンも、ベルグエルムもフェリアルも、大よろこびでした。地面の上に出ることが、こんなにもうれしいと思つたことはありません。そしてかいだんをのぼりきると、そこには待ちに待つたおひさまの光が……！　というわけにはいかず、じっさいには今の時間は、黒りすのこくげん。午後の七時ころでしたが、それでも仲間たちには、ふみしめる土の感

しよくだけでも、じゆうぶんにうれしいのでした（もうあんな地下の世界なんか、みんなまつびらごめんでしたから！）。

「さあ、みなさん！」ランプをかかげたライアンが、大声を上げてみんなによびかけました。

「これからいっしょに、きつねたちの村まで、かたきをうちにまいりましょう！」

とまあ、これはじょうだんでしたが、それでもフォクシモンたちには、それなりのつぐないをしてもらわなければなりません（それにライアンは、お菓子のこともきつちりべんしようしてもらおうつもりでした）。こうしてみんなは、それぞれの思いを胸に、今ふたたび、もとのフォクシモンたちの村へともどっていくことになったのです。

ある者たちは、さきへの旅を急ぐため。

ある者たちは、失われたそのときを、取りもどすために。

そのぼん、はぐくみの森にはめずらしく、月のあかりがてんじょうにあつくしげった木々の葉のすきまから、静かにもれ出しました。その光が、地面にひっそりとさいいた小さな白いエリニエルの花の花びらを、人知れずてらし、かがやかせていました。

10、ゆうれい都市モーク

今から二千年ほどむかしのこと。西の大陸からひとりの船乗りが、この地にたどりつきました。かれの乗ってきた小さな船は、見まわれたおそろしいあらしによって、もうぼろぼろになってしまっていました。かれははじめからこの地に、やってきたくてきたのではありません。ただ、かじのとれなくなった船のゆくまま、あらしの風の吹くままに、この地へとはこぼれてきたのです。かれいがいのほかの人たちは、みんなあらしの海に飲みこまれてしまいました。かれだけが助かって、ぼろぼろになったその船に、ひっしにしがみついていたのです。そう、かれはこの海のあらしのそうなん者として、ぐうぜんに、この地にたどりつきました。

かれの名まえはロザムンド・シンクレアといました。もう船は、使いものになりません。自分のくにに帰りたくとも、船がなくてはどうにもなりませんでした。とほうにくれたロザムンドは、船の木ぎいを使って小さな小屋をたて、その土地に住みはじめました。ここから、西の大陸に帰るための方法を見つけ出そうとしたのです。そしてそんなかれのもとに、やがてすこしずつ、土地の人々がおとずれるようになってきました。

ロザムンドの船乗りとしてのほうふなちしきと、まだ知れぬ西の大陸の話に、人々はむちゆうになって耳をかたむけました。それからだんだんと、かれの住む小屋のまわりにも、新しい住人たちが住みつくようになったのです。ロザムンドのことを助け、かれが西の大陸に帰るその手助けをしようと、集まってくれた人たちでした。

ロザムンドは人々の助けをかりて、まずはうみべに、船をとめるためのりっぱなさんばしをつくりました。そしてかれのぎじゆつと人々の力があわさったことよって、そこについて、いつそのすばらしい船ができ上がったのです。

しかしロザムンドは、それで西の大陸に帰ることはしませんでした。かれはすでに、この地ですばらしい仲間たちのことを得ていたのです。かれらのために、自分をもつと力をつくしたい。こうしてロザ

ムンドとその仲間たちは、ともに力をあわせて、この地をさらにはつてんさせていこうとがんばりました。

そうしてついには、まわりをりっぱなじょうへきでかこんだ巨大な都市ができ上がるまでに、この地はさかえていったのです。それから人々は長きに渡って、この新しい都市でへいわに暮らしていきました。ロザムンド・シンクレアはこの都市のしよだいの長として長く人々にあいされ、そして人々はかれの名まえをとって、この都市を「いだいなるロザムンド」という意味である、「ロザムンディア」と名づけたのです。

この名まえをきけば、この都市がどこのことをいっているのか？ みなさんにはもうおわかりですよ。そう、このロザムンディアとは、まさに、げんぎいのモーグのことなのです。このなんともりっぱな都市が、なぜ、かつてとつぜんに、うちすてられたのか？ シープロンドのかいぎの場でも、それはすこしだけ説明されましたが、はっきりとしたことは、だれにもわかりませんでした。けつきよくのころ、この都市がなぜうちすてられたのか？ どうじの人々がいつたいどこにいったのか？ それらのことについては、いぜん変わらぬなぞとして、残されたままであったのです（ここで著者のわたしから、新しいじょうほうをちよつとだけみなさんにお伝えしますと、かつてのロザムンディアのまちがうちすてられたのは、しぜんのさいがいがかわっているらしいということでした。これはあくまでも、そうぞうでしかないのですが、おそらく、あらしや、つなみといったことが、あったのではないでしょうか？

もつとも、わたしの得たこの新たなじょうほうも、どこまでがほんとうのことなのか？ ぜんぜんわかりません。わたしはこのじょうほうのことを、はぐくみの森からかなり北西にいった地に住んでいる、うさぎの種族のおじいさんの学者からきいたのです。しかも、とつてもうさんくさい感じの。

「ああ、あれは、しぜんのわざわいのせいじゃよ！ うむ、まちがない！ あれは、ひどかったわい！ わっはっは！」

かれはまるで見てきたみたいに、大げさに話していましたが、わた

しがおみやげに持っていったうずまきにんじんのことをかじるのにむちゆうで、なんだかてきとうに、話を作っていたみたいでした。ですからぜんぜん、しんようできなかつたのです。

そしてじだいは流れ、ときは今。はいきよとなったその都市から、東にすこしいったところ。はぐくみの森に住むきつねの種族、フオクシモンたちの村に、われらが仲間たちは集まっているところでした。たましいを取りもどし、ようやく今の時間を生きることとなった、たくさんの人たちのことをしたがえて。

かれらの旅が、ふたたびはじまるのです。

「それではこれより、さいばんをとりおこなう！　さいばん長、どうぞ前へ。」

高らかに(そして声の高さも高く)そうせんげんした声のぬしは、われらがライアンでした。そしてその声につづいて、みんなの中からちよつときようしゆくそうに前に進み出たのは、ベルグエルムだったのです。そう、旅の者たちは今、フオクシモンたちの村で、きつねたちのおかしたこれまでのつみに対してのつぐないのための話しあい(さいばん)を、おこなおうとしているところでした(そしてこういった話しあいの場では、いつもれいせいなベルグエルムが、だいひょうであるさいばん長をつとめるのがよいだろうということになりました。もっとも、さいばん長だなんてかってに名づけてよんでいるのは、ライアンだけでしたけど)。

ここは旅の者たちがえんかいの席にまねかれた、あのログハウスみたいなたてももの前でした。たてももの前の広場には、村のフオクシモンたちぜんいんが、地面にせいぎしてすわっていたのです(これはライアンが、「みんな、せいぎー」といって怒ったので、それにしたがっていたのです。さすがにライアンも、足の悪いランドン村長だけは、クッションの上にすわることだけでゆるしてあげましたが)。そしてたてももの入り口のデッキのところに、旅の者たちと五十七人のむかしの旅人たちみんなが、集まっていました(人数が多すぎですので、ぎゆうぎゆうでしたけど)。

前に出たベルグエルムは、「おほん。」と小さくせきばらいをしてから、村のフォクシモンたちみんなにむかって話しはじめました。

「みなさん。みなさんはもう、自由です。夜のかいぶつは、たおされました。」

これをきいて、フォクシモンたちはかんせいを上げて、手をたたいてよろこびあいました。かいぶつがたおされたということは、もうすでに、みんなのもとにもあつというまに伝わりましたが、それでもなんどよろこんでも、すぎるといふことはありませんでしたから。

「ですが！」ベルグエルムが、よろこぶフォクシモンたちに手をかざしていいました。

「みなさんももう、よくわかつていることと思います。あなたたちは、つみをつぐなわなければなりません。われら旅の者たち四名は、運よく助かることができましたが、ここにいる五十七名の者たちに、あなたたちは、失われた時間をかえさなければなりません。それはけっして、かんたんに考えてはならないことです。」

「ぼくの失われたお菓子も、かえしてもらおうからね！」ライアンがつけました。

フォクシモンたちはみな、うなだれて、深くはんせいをしていました。ランドン・ホップ村長をはじめ、チップもティッドーもロラも、村の人たちみんなが口々につぐないの言葉をのべて、頭を下げたのです。

ベルグエルムがつづけます。

「あなたたちのつぐないが終わったとき。そのときこそ、このはぐくみの森は生まれ変わるときなのです。ぜひとも、この森に、かつての美しいかがやきを取りもどしていただきたい。それは、このアーケランドに住む者みんなの願いであり、あなたたちのしめいでもあるのです。フォクシモンの新たなるでんとうを作っていくときが、今こそやってきたのです。」

「おいしいお菓子のでんとうもねー！」

ふたたび、人々の口からかんせいが上がりました（さいごのライアの言葉は、そのせいで、ほとんどみんなにきこえていませんでし

た)。みんな手を高くつき上げて、はぐくみの森の新しいみらいへとむかつて進んでいくことを、ここにちかいあったのです。

しはいされていた時間はあまりにも長く、暗いものでした。ですがいつだって、それがえいえんにつづくということなどは、あり得ないのです。人々の心から、気高いほこりが失われなにかぎり、みらいはそのさきに待っているのです。フォクシモンたちのみらい、はぐくみの森のみらいも、これでだいじょうぶでしょう。

さて、それではここで、五十七人のむかしの旅人たちのそれからのことについても、お話しておかなければなりませんね。かれらはこのあと、フォクシモンたちからじゅうぶんなだけのつぐないを受けました。フォクシモンたちの村には、かつてのはんえいのころに集められて、たくわえられていた、さまざまなきちような品々が、まだ残っていたのです。かつての森のめぐみは、今ではすっかり失われてしまっていました。かつての森の品物をたくわえていたおかげで、村人たちは、ほそぼそとでしたが、なんとかこの森で暮らしていくことができていました。

これらの品物が、五十七人の旅人たちにじゅうぶんだけくばられました(そのけっか、村のたくわえはすっかりなくなってしまうましたが、それはいたしかたのないことでしょう)。とくに、眠っていた年数の多い人たちには、それだけ多い品物が渡されたのです。旅人たちはこのおくりものを、大いによろこびました。それでフォクシモンたちに、「にどと人をあぎむかないこと」、「この森をむかし以上にすばらしい森に変えていくこと」、「このふたつを守るとかたくちかわせることで、かれらのおこないをすっかり、ゆるしてあげたのです(ところで、旅人たちは眠っているあいだ、ぜんぜんとしを取っておりませんでしたので、かれらの中にはかえって新しい世界が見られてよかったです、よろこぶ者さえいたのです。人それぞれで、いろんな考え方があるものですね)。

そしてかれらは、おくりものとたっぷりの食べものをつめこんだ、みずからのリュックをしょって、まだ見ぬ未知なる世界へとむかつて、新しい旅のいつぽをふみ出していきました。かれらがめざしたの

は、ヴィモール。このアークランドよりもずっと大きくて、もつとごちやごちやとした、北の果てのくにでした（かれらはもともと、西のハーレイ国からこのヴィモール国をめざして、旅をつづけていたのです。そしてそのとちゅうで立ちよったはぐくみの森で、思わぬ足どめを受けてしまったというわけでした）。

ちなみに、かれらの中には、「はぐくみの森でなにが起きているのか？」それをしらべにやってきた者たちも、わずかにいました。これではやく、かれらははぐくみの森でのちようさを終えて、こきようであるハーレイ国へと帰ることになったのです）。

ところで、これはつけたしになるのですが、じつはかれらの中には、のちに大冒険家としてその名をはせることになった人物がひとりいました。それはルルム種族の冒険家、シェイデー・リルリアンという人物でした。かれのことは今では、「ほうろうのルルム」とか、「赤毛のシェイデー」などといった名まえで人々に語りつがれていて、このあとかれは、たくさんのかくに渡って、たくさんのかいたいした冒険をおこなうこととなるのです。ですがそれは、このロビーの冒険の物語とは、またちがう時間、ちがうぶたいでのお話。いつかきかいたあったら、このシェイデー・リルリアンの物語のことも、みなさんにお伝えすることができればと思います（雲の上までのびる木の上の王国での冒険とか、七ひきのりゆうがしはいするくにの物語とか、いろいろありましたけど）。

ちよつと話がそれてしまいました。さあ、われらが仲間たちの冒険にもどりましょう！

あくる日の朝。

われらが仲間たちは今、旅のしたくをすつかりととのえて、これくらいよいよはぐくみの森の西の果て、めざすモーグへとむかつて出発しようとしているところでした（朝を待ったのは、モーグに夜にいくのはやっぱり危険だとはんだんしたためです。それに夜のかいぶつとの戦いなどで、みんなつかれきってしまったておりましたから、ひとばんくらいしつかりと休んでおく必要もありました。フェリアルが

ほっと胸をなでおろしたのは、いうまでもありません。夜のモーグにはいりこむなんてことは、かれはぜったいに、したくはありませんでしたから！。

かれらの前には、なつかしや！　かれらのよき友である三頭の騎馬たちが、せいぞろいしております（かれらの騎馬たちはみんながいせきにとじこめられているあいだ、フォクシモンたちの村でかわれていました。まあ、メルのおぼれたこと！　メルはとてもかしこい馬でしたから、自分の主人をひどい目にあわせた者たちのことをするどく感じ取って、フォクシモンたちのいうことなんか、ぜんぜんきかなかったのです。さすがは、ライアンゆずりの馬といったところでしょうか？　もつともほかの二頭の馬たちも、だいぶおぼれましたけどね）。そしてその騎馬たちの中には、フォクシモンたちからおくられた、たくさんの旅の品物のはいったふくろがぐくりつけられていました。

おくられた品物の中でもとくに旅の者たちにとってありがたかったのは、ふわふわ森ペンギンの羽毛から作られた、とつてもあたたかいマフラーとマントでした。これらはおどろくほどかるく、しかも水を通さないのです。この寒いきせつに旅をゆく者たちにとって、これ以上はないというほどのおくりものでした。

ほかにかれらがもらったものは、おもに食べものと飲みものでした。パンやチーズをはじめ、日持ちがするように作られたルンルン鳥のくんせいや、お湯につければ食べられる、きのこのひもの。それと宝石の実際のジュースなどです。旅人たちにおくられたような値うちのある宝物は、かれらは受け取りませんでした。そんなものはかれらには必要ありませんでしたし、だいじな旅をゆくのにじやまになるだけでしかありませんでしたから。ですからかれらは、かれらのぶんとして分けられた宝物も、全部旅人たちに分けてあげるようにといたので（さすが、りっぱですね。でもちよつと、ライアンとフェリアルのふたりだけは、宝物にもきょうみがあったようでしたが。ベルグエルムに「だめ！」といわれて、しぶしぶあきらめたのです）。

「さあ、みんなつみこんだら、いよいよ出発だ！」ライアンが右手を

大きくつき上げていました（ところで、出発のときにさいしよにうれしいをかけるのって、いつもライアンですよね。やっぱりこれは、リーダーになりたがりの、かれのせいかくからみたいです）。みんなにかけ声をかけて、ふりかえったライアンでしたが、まあ、そのにもつの多いこと！　かれの肩からは、ぱんぱんにふくれ上がった大きなかばんが、三つもかけられていたのです。そのうえメルの中からだにも、（新しくもらった旅の品物のはいったふくろとはべつに）たくさんのおふくろが、ところせましとくくりつけられていました（おかげでロビーの乗るところがすくせまくなってしまうって、ロビーはかわいそうに、その大きなからだをきゆうくつそうにちぢめて、なんとかメルの背中にまたがっていました）。

さらにそれは、メルだけではおさまりきりませんでした。ベルグエラムとフェリアルルの二頭のはい色の騎馬たちにも、おさまりきらなかったライアンのおふくろが、たくさんくくりつけられていたのです。いったいこんなにもたくさんのもつって、なんなのでしょう？

それは読者のみなさんには、もうおわかりですよ。そう、これらのかばんやおふくろの中身。それはぜんぶ、お菓子でした！　ライアンお気に入りの森ペンギンのクリームいりやき菓子にはじまって、ミルクの実のパウンドケーキに、クッキーにビスケット。宝石の実のぼうつきキャンディーが山ほど。そのほか、チョコにマシユマロに……、およそ考えつくことのできるありとあらゆるお菓子たちが、ぎゆうぎゆうにつめこまれていたのです。そう、ライアンはねんがんの「お菓子のかたき」を、じゆうぶんすぎるほどに取ったというわけでした（そしてもちろん、こんなにもたくさんのお菓子がフォクシモンたちの村に用意されていたわけではありませんでしたから、これらのお菓子はライアンが村人みんなに、てつやさせて作らせました。さぞかし、たいへんだったでしょうね……。かれらもライアンを怒らせたらしいへんな目にあうと、これで身をもって知ることができたことでしょう）。

おかげでライアンは、もうにつこにごでした（こんなにうれしそうなお笑顔を見たことはありません！）。かれがはじめに持ってきていた

お菓子もそうとうな量のものでしたが、今はその五ばいほどの量もあつたのです。もう旅の者たちにもつのその半分以上が、お菓子だといつてもいいくらいでした（ベルグエルムとフェリアルも、もうあきらめておりましたので、口を出すことすらできなかつたのです。もつとも、ことがお菓子のことだけに、かれらが口をはさんだとしても、ライアンはいうことをきかないでしょうけど）。

「みんなー！　せわになつたねー！　じゃあ、げんきでねー！」

さいごにライアンはまんめんの笑顔でそうさげぶと、見送りのフォクシモンたちにむかつて、大きく手をふつてみせました。そしてランドン村長をはじめ、それにこたえる村人たちは、みんなげつそりとやつれかえりながら、ひきつった笑顔で、力なく手をふつてかえすばかりだったので（かれらがこのあと、みんなそれぞれの寢床にもぐつて夕方まで寝てしまったことは、いうまでもありません……）。

「ロザムンディアのいせきまでは、そんなに遠くはないんですけど……」

そう声をかけたのは、きつねの種族フォクシモンの男の子、チップでした。かれはせめてものつみほろぼしにと、旅の者たちのモーグまでの道のりの、そのあんないやくのことを買って出してくれたのです（かれもてつやお菓子作りにつきあわされていましたが、とちゅうで力つきて、寝てしまいました。ですからほかの村人たちほどには、つかれきつてはいなかつたのです。それでもだいぶ、眠かつたんですけど）。それはかれが、村の人たちにはないしよで、今までになんどもロザムンディアのいせき、つまりモーグの近くにまで、たんけんに出かけたことがあつたからでした。ほんとうはロザムンディアのいせきに近づくことは、村ではかたくきんしされていましたが、こうきしんおうせいな十さいの男の子には、それもむりというものです。ですからモーグまでの道のりのことなら、チップがだれよりもよく、知っているというわけでした。

「あそこには、じつはぼくでも、はいつたことはないんです。村の私たちは、あそこにはいつた者はにと出られないぞ、つていうんです

けど、じつさいぼくたちの村の人で、あそこにはいった人は、ひとりもいません。だって、ほんとうのことをいうと、入り口がしまつてはいれないんです。」

チップがフェリアルルの騎馬の上から、いいました。からだの小さなチップはフェリアルルの騎馬の上、フェリアルルの前に乗っていたのです（ロビーと同じく、チップは馬に乗ったことがありませんでしたので、フェリアルルにささえてもらおうことで、なんとか乗っていたのです）。

「えっ？ 入り口がしまつてるの？」前の騎馬から、ライオンがふりむいてたずねました。

チップがそれにこたえます。

「は、はい。いせきの入り口には、大きな木の門があつて、その門はかたく、とぎされているんです。そこまでなら、ぼくにもあんないできるけど、ほかに入り口らしいものもないし、いせきの中には、どうやってはいつたらいいのか？ ぼくにもわからないんです。」

さて、それはこまつたじょうほうです。ここまできてモーグにはいれないんじゃない、どうしようもなくなつてしまいましたから（フェリアルルにとつてはいいことかもしれませんが、どこかほかに、べつの道があればの話ですけど）。

「うーむ、とりあえずは、モーグにたどりついて、そのようすを見てから考えるしかないだろう。どこか、かべをのぼれるようなところがあるかもしれない。」先頭をゆくベルグエルムも、チップの話にふりかえつていいました。

「ふーん、木の門か……」ライオンが、なにやら考えをめぐらせながら素晴らしいです。

「なにか、いい方法があるの？」うしろに乗っているロビーが、ライオンにたずねました。

「いや、わかんないけどさ。木の門だったら、なんかなるんじゃないかな、つて思つて。」

ライオンはそういつて、まただまつてしまいました。ロビーはライオンが、またなにかよからぬことを考えているのではないかと、心配したのです……。

それからしばらく、暗い森の道がつづきました。もはやこの森をはいしていたおそろしいかいぶつがたおされたとはいえ、森のひねくれきった木々やでこぼこ道が、とたんにきれいに変わるといふわけはなかったのです（いずれこの森も、もとの美しさを取りもどすでしょうけど、今はまだそのままでした）。

チップのあんないは、じつに助かりました。じもとのことならじもとの者にきけとは、よくいったものです。とくにチップは、その小さなからだでこの森のすみずみまで、あっちこっち飛びまわっていたのですから、はぐくみの森のことならほとんどなんでもというくらい、よく知っていました。「あつ、ここを右にいつてください！ このまままっすぐいくと、どくのちようちよの巣につっこんじやいますよ！」とか、「その木のつるに、さわつてはいけません！ そのつるはまるで、おばけとかげの舌みたいに、生きものものをからめ取つてしまふんです！」とか。さまざま危険な場所に出会うたびに、チップがそのつど、旅の者たちのことをさきへとみちびいていつてくれたのです（もしチップがいなかったのなら、わたしはもうすこし多くのページを使つて、旅の者たちがくろうする場面のことをえがかなければならなかったことでしょう。それはそれで、冒険のお話としてはもり上がるかもしれないませんが、じつさいに旅をする者たちにとつては、やつぱりたまつたものではありませんよね）。

こうしてチップのあんないのおかげで、旅の者たちはこの進みづらく危険でこんなな森の道のりを、じゅんちように進んでいくことができました。それでも、めざすモーグにたどりつくまでには、かなりの時間がかつたのです。もうモーグまではそんなにきよりはありませんが、このあたりははぐくみの森の中でももつとも危険がいっぱいのところで、道もごちゃごちゃしていました。それに一行は馬に乗っておりましたから、この馬が通れるくらいの道をゆくのは、かなり遠まわりをしていかなければならなかったのです（この森にかぎつては、からだひとつで木々のあいだを通りぬけていった方が、早く進むことができるようでした。もしチップひとりだけだったなら、フオクシモンたちの村からモーグまで、ものの三十分もしない

うちにたどりつくことができることでしよう。

それからまたしばらくたつたころ。一行はついに、モーグへとつづくそのさいごのいっぽん道の上へと出ることができました(ここまできるとのくに、時間にして二時間ほどかかりました)。

「あそこが、はぐくみの森のさかい目です。ちょうど、あの大きな木のところですよ。ほら、木の上の葉っぱの中に、見張り台がかくれているでしょう?」チツプが、さきに見えてきた大きな木の上をゆびさしながらいいました。

「見張り台? なにを見張るんだ?」うしろに乗っているフェリアルが、たずねてそういいます。いわれてチツプは、あつ、しまった、というような顔になりましたが、もう手おくれでした。

じつははぐくみの森のあちらこちらには、フォクシモンたちが張りめぐらせたひみつの見張り台が、木の上などの目立たないところにひっそりと作られていたのです。これらの見張り台にはいつも、当番のフォクシモンたちが見張りについていて、かれらは森にはいつてくる旅人たちのことを、そこからまつさきにかくにんしていました。ロビーたち旅の一行がはぐくみの森の中にはいりこんできたときにも、かれらはこうして、みんなのことを見張っていたというわけだったのです。村についたとき、すでにかんげいのじゅんびがばつちりとのつていたのは、見張りのフォクシモンたちがロビーたちがやってきたということを、いち早く村へと伝えていたためでした(ようやく、なぞがとけましたね)。

ちなみに、フォクシモンたちがいち早く旅の者たちのかんげいのじゅんびを進めておこうとしたのには、わけがありました。それは旅の者たちが村にとうちやくしたときに、すでにかんげいのじゅんびをばつちりとのえておいて、旅の者たちになんかへのかんげいのじゅんびをわらせないようにするためだったのです。そのためフォクシモンたちは、旅の者たちのすがたをかくにんしたあと、かんげいのじゅんびがすっかりとのうまでのあいだ、旅の者たちのことをつかずはなれず、見張りつづけていました。

もうひとつ説明をつけたいとすると、フォクシモンたちがロビーたち

のことをかくにんしたのは、ロビーたちがはいつていつた森のはしつこから、しばらく中にはいつたところにある見張り台からでした。ですからロビーたちが森にはいつてすぐのところまで寝てしまっていたときには、まだフォクシモンたちも、ロビーたちのことに気がついていなかったのです。ロビーたちがやってきたのは、グブリハツグたちから逃げてきた、ほそい岩のさけめから。そこはふつうだったら、人がやってくるようなところでは、ぜんぜんありませんでした。そのためそのあたりには、フォクシモンたちの見張り台も、ぜんぜん作られていなかったのです。まさかフォクシモンたちも、そんなところから人がやってくるだなんて、思っていなかったことでしょう。ライアンのクルツポアのさけび声だって、かれらのもとにはとどいていなかったのです。こまかい説明、終わり)。

このひみつの見張り台のことは、人にいうことはもちろん、きんしされていました。ですからうっかり口にしてしまったチップは、しまったと思っただのです(でもよく考えてみれば、もうそんなことをひみつにしておく必要もありませんし、こんな見張り台そのものも必要ありませんよね。すくなくとも、今までのもくてきのためには使うことはないはずです。もしこんごも使うのであれば、これからは旅人たちのことをいち早く、ほんとうの意味でかんげいするために使ってもらいたいものです)。

「あつ、それよりほら！ もう、いせきのかべが見えてきましたよ！」チップはなんとかごまかしつつ、道のさきをゆびさしました。そしてチップのいう通り、木々のあいだからちらちらと、ロザムンディアのいせき、モーグのそのまわりのことを取りかこむ、巨大なじょうへきのすがたが見えはじめてきたのです。

それはあつとうされるほどの、なんともりっぱなじょうへきでした。そのかべは、もも色にきいろがிரまじった、いんしよ的なぼら色の石をつみ重ねてつくられていました。高さは七十フィートほどもあって、しかもその上には、しんにゆう者のことを防ぐための、とげのついたかぎづめのかたちをしたかざりものまでもが、そなえつけられていたのです(これではとても、のぼっていくことなんてできそ

うもありません)。ところどころに見張りの塔がつくられていて、そのまどからは今にも、見張りの兵士たちの矢が飛んできそうな感じでした。

巨大さはもちろん、そのがんじょうさにみんなはびつくりしました。もう二千年ほどもたっているのにもかかわらず、じょうへきの石はびつちりとあわさっていて、かけているところもぜんぜんなかったのです。これならなん百人といった兵士たちがせめてこようと、びくともしないことでしょう(じつさいこのかべは、あつさが十フィートもあつたのです！ これだけのじょうへきをかまえていたなんて、モーグがいかにりっぱな都市であつたのか？ そうぞうできますよね)。

ですけどここはもう、ずいぶんとほつたらかしのままにされてきましたので、じょうへきのがんじょうさはともかく、まちそのものはやっぱりずいぶんと荒れ果てているようでした。それはこのじょうへきにからみついた、なんともぶきみな感じの植物のことを見れば、わかりました。いえ、植物というよりも、それはかびといった方がいいかもしれません(チーズに生やすかびならチーズをおいしくするのにやくに立ってくれますが、これはもう見るからに、どくの強そうなこわーいかびだったのです)。うすみどり色の糸のようなものがいちめんにとわりついていて、それにはところどころに、つぼみのようなまるいものがあります。そしてそのまるいものが、ときどきぶしゅー！ というにぶい音を立ててつぶれて、中からもやのようなみどり色のこなを、吹き出していました。

「このさきに、入り口の門があります。いせきの北がわには、それいがいに入り口はありません。あとの門は、はんたいがわの南がわの出口だけだという話です。」じょうへきを前に、チップがみんなに説明しました。

「まちの東と西は、どうなっているんだ？」ベルグエルムがチップにたずねます。しかしチップは首を横にふって、ざんねんそうにこういうばかりでした。

「だめです。いせきの両がわは、切り立ったがけと岩場になってい

て、とても通りぬけられません。そういったしぜんの地形をりようして、このいせきのまちはつくられたんですって。まさに、かんぺきな守りなんです。」

みんながやってきたこの場所からは、じょうへきが西とはるかな南へとむかっつてのびていました。そしてチップのいう通り、南へのかべはしばらくいったさきで、おそろしいほどのだんがいぜつべきの中へとつづいていたのです。これではからだひとつだけでも、とてもさきへと進むことなどはできないでしょう（ましてやみんなは、騎馬たちをつれていましたもの、進めるわけありませんでした）。そしてこれは、西がわのじょうへきでも同じことでした（しかも西がわのじょうへきのさきは、そこからさらに、海へとつづいておりましたので、なおのことむりだったのです）。

「南へいききたいのなら、モーグをぬけよということか……」ベルグエルムが、じょうへきにからみついたかびのような植物を、ゆびでつつん、つつついてみながらいいました（そうしたらゆびにどくどくしいこながついてしまったので、あわててズボンでふき取りましたが）。モーグを通らなければさきへは進めない。それはさいしよからわかっておりましたが、やはりなんとか、ほかに道がないものかと、みんなはわずかなきたいもいだいていたのです。しかしそんなわずかなきたいでさえも、こうしてかんぜんに、うちくだかれてしまいました。

「こうときまれば、門を越えていくいがい、道はないようだ。門までいってみよう。」ベルグエルムがそういって、騎馬のむきを変えました。

「それしかないね。フェリー、心のじゅんびはいい？」ライアンがフェリアルの方をむいて、いたずらっぽくつづけけます。

「わ、わたしは、もとより、へいきですってば！」フェリアルが、よつきになっつていいました。

こうして一行は、ついにモーグの入り口までやってきたのです。そしてこのあと、フェリアルの身にかっつてないほどのたいへんなできごとが起こっつてしまうのですが、それはもうすこしあとで。今は、モー

グにはいるその方法を、考えなければなりませんでしたから。

入り口の門は、チップの説明の通りでした。がんじょうそうな木でできた大きくて重そうなとびらが、かたくとぎされていて、もう見るからにひらきそうになかったのです（ホテルのドアマンみたいに、両がわから「いらつしやいませー」とあけてくれる人たちがいたのなら、なんとも助かるんですけど）。じつは長いねん月がたっているのにもかかわらず、この門がいまだにがんじょうだったのは、この門にあるとくべつなペンキがぬられていたためでした。このペンキには雨風から木を守る強い力があって、そのため門は、いつまでたってもがんじょうなままで残ったのです。そしてこのペンキは、カピバルのわざによって作られたものでした（ですが、「さすがはカピバル。」って感心している場合ではありませんでした。今は、「こんなの、ぬってくれなくたっていいのに！」とみんな思ってることでしょうから）。

「うわっ！　が、がいこつ！」門のそばにきたとたん、フェリアルがさげびました。なるほど、見ると門の両わきのかべに、よろいを着て剣とやりのことを持ったがいこつたちが、それぞれ一体ずつ、もたれかかっていたのです。かつてのまちを守っていた、兵士たちなのではないでしょうか？

「だいじょうぶだよフェリー。ただの、ほねほねじゃない。ひよつとしたら、動き出すかもしれないけどね……、うふふ。」ライアンがからかって、フェリアルにいいました（まったく、いじが悪いんだから）。「これはずいぶん、やつかいになりそうだ。」ベルグエルムが、とびらの表めんをなでながらさういいます（カピバルのペンキのおかげで、門にはあのかびのような植物がぜんぜん生えていなかったのです）。

「これはおそろく、モーグのうら口の門だろう。それでも、これだけ大きいとは。」

ベルグエルムのいう通り、この門はモーグのうら門にあたるものでした。いちばん大きなおもて門は、モーグのはんたいがわ、南がわの方につくられていたのです。うら門はそれのおもて門にくらべれば、ず

いぶん小さくできておりましたが、それでもとびらのほばは、およそ十五フィートほど。高さはおよそ二十フィートほどもありました。

「それに、これはどういうことだ？」とびらをしらべていたベルグエルムでしたが、ふとなにかに気づいたようでした。

「このとびらは、内がわから木がうちつけられている。渡し木ではない。中にはいれないように、だれかが中から、この門をとぎしたのだ。」

ベルグエルムのいう通り、たしかによく見ると、とびらのわずかなあわせ目のすきまから、たくさん木の板が横にうちつけられているのが見えました。ふつうとびらをしめきるときには、渡し木といって、かんぬきがわりのじょうぶな木の板をまん中に取りつけるものですが、このとびらはそれだけではなかつたのです。いったいだれがどうして、これほどまでにねっしんに、この門をとぎしたのでしょうか？

「そこからはいるのを防ぐためか、あるいは……」ベルグエルムがいました。

「中からなにかがそとに出るのを、防ぐためかもね。」ライオンがベルグエルムの言葉をつづけて、いいました。

「いったい、中になーにがあるんだろうね？　楽しみだなあ。ねえ、フェリー？」ライオンがフェリアルの方を見て、またいたずらっぽくそういいます。

「わたしは、なにがきたってへっちやらですってば！」フェリアルがまた、むきになってこたえました（そんなライオンとフェリアルやりとりのことを見て、チップが「なんのこと？」とたずねましたが、ライオンが「うふふ。じつは、このフェリーさんはね、」といいかけたところで、フェリアルが「な、なんでもないから！　気にしなくていいよ！」とわってはいりました。もういいかげんにフェリアルのことをからかうのは、このへんにしておいた方がいいですね。ずっと見守っていたロビーも、「もう。からかつちやだめだよ、ライオン。」といって、ライオンのことをしかりました）。

「それより、どうやってはいるのか？　早く考えないと。」

みんなをまとめる、まさにごもつともものひとこと。それはロビーの言葉でした。みんなのこと（とくにライアンのこと）をまとめるときには、いつも、ロビーのするどいひとことが助けてくれるのです（ふだんあんまりおしゃべりでないぶん、それはよけいに感じられますよね）。

「ロビーどののいう通りです！」フェリアルがライアンのことをはねかえさんばかりに、いいました。「早くはいつて、早く出ないと！とちゅうで夜になっちゃいますよ！」

やっぱりフェリアルがのぞんでいることは、ただひとつ。モーグをさっさと通りぬけるといふことなのでしょうね。たしかにもたもたしていたら、モーグの中で夜になってしまいかねませんから、それはやっぱり、みんなだつていやなはずです。

「フェリアル、手を貸してくれ。ちよつと、ふたりでためしてみよう。」ベルグエルムがそういつて、門に手をかけました。フェリアルも加わつて、ふたりでいつしよに、えいえい！とおしてみます。ですけど門は、びくともしません。それからかれらは、ふたりでそろつて、力まかせに体あたりをしてみることにしました。

どしーん！ どしーん！ もうひとつ、「せえのー！」どしーん！

「ぼくもやります。」ロビーが加わつて、こんどは三人でためしてみます。

「いくぞ、せえのー！」どしーん！ どしーん！

全身の力をこめて、もういちど、どしーん！

「だ、だめだ……！」

もうロビーもフェリアルも、ベルグエルムまでへとへとになつて、門の前の地面にたおれこんでしまいました。これだけりっぱなたいかくのおおかみ種族の者たちが、三人がかりでかかつて、この門をうち破ることはできなかつたのです（ちよつとひびがはいつたくらいでした）。

「こんなにかんじょうな門は、はじめてです。ベーカールランドのお城の門だつて、こんなにかたくはないですよ。」フェリアルが、ぜいぜ

息を切らしながらいいました（かれがじつさいにそのかたさをためすために、ベーカーランドのお城の門に体あたりしたことがあったかどうかはわかりませんが）。でもそんなことをしたら、かくじつに怒られますけどね）。

「体あたりでは、らちがあかない。フェリアル、手おのを持っていただろう？ あれですこしずつ、こわしていくしかなさそうだ。かなりの時間がかかるが、やむを得ない。」ベルグエルムが、今のこのじょうきょうにとっていちばんと思われる方法のことをいいました。ですがそれは、あくまでもふつうの旅人たちにとつての話。われらが旅の仲間たちの中には、こんなときにすばらしい（おそろしい？）までの力をはつきしてくれる、たよれる人物がひとりいたのです。

大きな三人のウルファたちの前に、進み出たのはだれでしょう？ チップじやありません。となれば……、それはもう、ひとりしかいませんよね。そう、それはからだの小さな、でもとっても大きな力をその内にひめている、ひつじの少年ライアンでした。

「しようがないなあ。まったくみんな、だらしがないんだから。」ライアンは「ふう。」とため息をついてからそういうと、かばんの中からなにかの品物をひとつ、取り出しました（お菓子じゃありませんよ）。こんどはいつたい、なにを出したのでしょうか？

「こんかいは、とくべつだよ。ほんとはこれ、やったら怒られちゃうんだからね。」

ライアンが取り出したのは、火を起こすために使う、ほくちばことよばれる小さなほこでした。こんなもの、いつたいどうするのでしょうか？ いくら木でできているとはいえ、こんなに大きな門をもやしてしまふなんてことは、むりだと思えますけど……（時間をかければもやせるでしょうが、それだったらベルグエルムのいう通り、手おのでこわしていった方が、まだ早くあけられそうです）。でもライアンのことです。みんなが考えつきもしないようなことを、考えているのかもしれないね。そしてじつさい、考えていたのです！

ライアンは森からかれ木のえだを集めてくると、門の前にそれらをおいて、ちよつと油をたらして、火を起こしました。ですけどこの大

きな門にくらべたら、それは文字通りの、ほんの小さなたき火にすぎません。どうやらライアンは、この火の力をかりて、おとくいのしぜんんの力をかりるあのわざをひろうするつもりのようなのです。でも火の力を使ってこの門をあけるなんてことが、ほんとうにできるのでしょうか？（火の力をかりるわざは、あのオーリンたちのむかしの谷で、グブリハツグのかいぶつたちのことを相手に使ったことがありましたが、こんどは相手がちがいました。グブリハツグたちよりもなん十ばいも大きな、がんじょうな門なのですから。まあ、あのほのおの矢のこうげきをなん百回もぶちこめば、この門を弱らせることもできるでしょうけど……。

ちなみに、ライアンのとっておきの風のうずのこうげきも、やっぱりこの門にがたをきかせるのには、ふじゆうぶんでしよう。それほどこの門は大きく、がんじょうだったのです）

「ちよつと、あぶないから、そこどいて。まきこまれても知らないよ。」

そういつてライアンは、たき火をはさんで門からすこしはなれたところに立つと、小さな言葉を口にしはじめました。

「風の精霊よ、ほのおのたみよ。」ライアンの静かで美しい声が、その場にひびき渡ります。

「われのとしかけに、こたえたまえ。ともに力をなして、今こそわれに、その力の貸し与えられんことを……」

ロビーたちウルファの三人は、すなおにしたがって、門からはなれました（ライアンの言葉には、すなおにしたがっておいた方がいいですものね）。いったいなにがはじまるんだろう？ 三人はライアンのうしろの方に下がって、じつとそのようすを見守ることにします（そこにチツプが加わって、四人になりました）。みんなはこんなに静かな表じょうのライアンのことを、ひさしぶりに見た感じがしました。それはかなしみの森の小川で水の精霊たちに出会った、あのとき以来的のことだったのです。

ライアンはおだやかな顔をして、ほのおにむきあっております。きれいな顔立ちとあいまって、ライアンのすがたはともしんぴ的で、

美しく見えました（いつもこうだったら、もつとりっぱに見えるんですけどね……）。

そうするうちに、ほのおがぱちぱちと音を立てはじめ、やがてそれは、ごうごうという、大きなうなり声へと変わっていったのです。

「ほのおよ、風よ、ひとつとなりて、さらなる力を！」

とたんにほのおがはげしくもえさかり、大きなはしらに変わりました！ あたりの空気がぐるぐるとうずをまいて、そのほのおのことを取りかこんでいきます。なんて力強い、風とほのおのたつまきなのでしょう！ それは今までにみんなが見た、風やほのおの力とは、まったくべつものといっていいほどの力強さでした。

「いっけえー！」

ライアンが大きくさげびました！ するとどうでしょう！ その強力なほのおのたつまきが、いっしゅんバスケットボールくらいの大さきのまるいかたちになったかと思うと、そこからおそろしいけものすがたをしたほのおと風のエネルギーが、ごう音とともに、門にむかって飛び出していったのです！

そして！

ががががあーん！

なんてすさまじい、はかい力！ なんとなんと、目の前の巨大な木のとびらが、モーグのまちはるかむごうの通りにまで、どんがらがんがらがっしやーん！ ばらばらになって吹き飛んでいってしまいました！

まあ、みんなのびつくりぎょうてんしたこと！ もうロビーもベルグエルムも、フェリアルもチップも、口をあんぐりとあけっぱなしにして、なんにもいうことができませんでした。

ずずーん……。

門のぎんがいが、遠くでさいごの地ひびきを立てていきます。その門がもともとあったところなどには、もう、けむりと、ぱらぱらとちらばる火のついた木のはへんだけが、残っているばかりでした。

「みんな、門、あいたけど？」

ライアンが木のはへのちらばる中に立って、みんなのことをふりかえっていいました。その顔にはいつものライアンの、いたずらっぽい笑みが浮かんでおります。いっぽうみんなは、あいかかわらず口をあけたまま、動くことすらできませんでした。ようやくベルグエルムがわれにかえって、ライアンにむかって声をかけたのは、それからだいぶたってからのことだったのです。

「お、おどろいた……。いったいどこから、そんな力が……！」

まったくベルグエルムのいう通りです。いくらしぜんの力をかりることが出来るわざとはいえ、まさかこんなに大きな門を吹き飛ばすまでの力があるなんて、きいていませんでしたもの。

これに対して、ライアンはつとめてれいせいなふうをよそおいながら、「ききたいの？　しょうがないなあ」といった感じで、みんなにいました（ほんとうは早く話したくて、うずうずしていましたけど）。

「これはねえ、リア先生に教わったんだけど、ほんとうは使っちゃいけない、きんしされているわざなんだ。」ライアンはそういって、木のえだをひろって、地面になにやら絵のようなしるしをいくつか書きつらねていきます。

「これが、ぼくたちの世界を作っている、精霊たちの力ね。」そういつてライアンは、地面に書いた、火、水、風、土、やみ、そのほかのしるしのことを、みんなに見せていきました（といっても、みんなにはそのしるしがなにをあらわしたもののなのか？　よくわかりませんが）。ライアンの絵はまるつきり、子どものらくがきみたいにへただったのです……）。

「この精霊の力っていうのは、それぞれがひとつひとつに分かれて、そんざいしているんだよ。そうじゃないと、力のバランスがおかしくなっちゃうんだって。だから、風の力は風の力。火の力は火の力だけ

で、かりなくちやいけないんだ。」

ライアンはそれから、リア先生に教わった話をみんなに説明してきかせましたが、みんなにはライアンのいつていることが、よくわかりませんでした。せんもんようごぼっかりなうえに、ライアンはちしきを知っていることをじまんしたくて、わざとわかりづらいいまわしばっかりしておりましたから（「これはねえ、つまりはレビレンタスのさいせいのりろんにしたがって、精霊と人とが、ともにユールロントしちやってるってことなんだよね。だから力のバランスをリロールするためには、ホワールウインドの中になくちやだめってことなんだ。」意味がわかりません……）。ですがようするに、「しぜんの力をかりるときには、ひとつのしゆるい力だけをかりて使わなくてはいけない」という、きまりがあるということらしいのです。そうしないとしぜんの力のバランスが、くるってしまふのだということでした（ですからもしこのわざを使ったということが知れると、ライアンはものすごく怒られてしまうことになるのだそうでした。リア先生に）。

そして今ライアンが使ったこのわざは、（そのかたいきまりごこのことをむしした）風の力と火の力、このふたつをまとめて、いつきにばくはつさせるといふものだったのです（風と火。ふたつの力のあわせわざなのですから、たんじゆんに考えても、ふつうにひとつの力だけをかりるときよりも、ばいの力が出るわけなのです。そしてじつさいは、ばいどころか、きつと百ばいくらいは強い力が出ていました！ふたつの力がともにあわさったときに出る力というものは、たんじゆんな算数だけでは、とてもはかりきれないものであったのです。このわざがきんしきされているというのも、うなずける気がしますよね。こんなに強力な力をかんとんに使ってしまったとしたら、それこそ、たいへんなことになってしまいかねませんもの）。ですからあれほどまでに強力な力が、はつきされたというわけでした（そのかわり、しぜんの力のバランスを、だいぶこわしてしまうことになりましたけど……）。

「ヤつきもいったけど、こんかいは、ほんとうにとくべつだよ。リア先生には、ないしよだからね。怒られちゃうから。もし、しやべつた

ら……」ライアンはそこで、みんなの顔をじーつと見渡しました。みんなは、ぜつたいにしゃべりません！ といった顔で、(いつしようけんめい)首をぶる、横にふりつづけまます(みんなまだ、いのちはおしかったですから……)。

「よかった。じゃ、やくそくは守ってね。」にこつと笑うライアンに、みんなは、守ります！ といった顔で、(いつしようけんめい)首をぶる、たてにふりつづけまました(みんなまだ、いのちはおしかったですから……)。

ちなみに、あの夜のかいぶつにライアンはほんとうは、このわざを使つてやりたいところでしたが、あのときは火がありませんでしたので、むりだったのです。ですからライアンは、ふつうに使うことのできる風のたつまきのわざを、使つたというわけでした。それでもじゆうぶん、おそろしいまでのいりよくだったのは、みなさんもごじょうちの通りです)。

「ふう。これやると、つかれちゃうんだよね。ケーキ食べようつと。うんつ、おいしー！」

ライアンはかばんから、フォクシモンたちにもらつたできたてのパウンドケーキを三つ取り出して、ぱくぱく、おいしそうにかぶりつきました。モーグへのとびらは、ここにこうして、ひらかれることとなつたのです(まさかライアンの力わざでひらかれるなんてことを、だれがそうぞうしたでしょうか?)。

こうしてみんなはいよいよ、モーグのそのまちの中へとふみこんでいくことになりました。ベルグエルムがみんなにもういちど、モーグでの行動の説明をします。とにかくここはもうなん十年と、だれもはいつたことがないわけでしたから、なにが起こつてもふしぎではなかつたのです(なにも起こらないことを願うばかりではありませんが)。ですが説明といつても、それはただひとつのたんじゆんなことを、あらためてかくにんするだけのことでした。それはつまり、「中にはいつたら、まっすぐ南の出口をめざす」という、ただひとつのことだけだったのです。

モーグを通ることはいたしかたがないというだけのことなのであつて、ほんとうならばみんな、こんなところは通りたくはなかつたのです（べつに、友だちの家があるわけでもありませんでしたし）。けっきよくのところ、「いつこくも早くモーグを通りぬけて、南の地へ出ること」。それだけがこのモーグでの、かれらのもくてきでした（フェリアルにとつては、こんなにすてきなもくてきもなかつたことでしょう。モーグでより道をするなんてことは、かれはぜったいにしたくはありませんでしたから！）。

「おまえには、せわになつたな。」モーグにはいる前に、ベルグエルムがいました。その相手は、そう、きつねの少年、チップリンク・エストルだったので。チップはとちゆうまでついてきたがりました、なにか起きるかもわからないこんな危険な場所に、かれをいっほでもふみこませるわけにはいきませんでした（これはほんとうに、ねんをおして、チップにやくそくさせました。ですからチップもしつかりと、このやくそくを守つたのです）。

「村にもどつたら、伝えてくれ。われらはふたたび、もとの美しさを取りもどしたはぐくみの森を、見にもどると。そのときにはまた、きみたちの村によらせてもらうよ。こんどは正式に、かんげいの席にまねいてくれよ。」

ベルグエルムはそういつて、チップの頭に手をおいて、そのかみをくしゃつとなでました。チップは目を赤くはらして、だまつてうつむいていました。チップはもう、みんなのことをとても好きになつておりましたから、みんなとわかれることが、とてもつらかつたのです。

「また、すぐに会えるさ。」フェリアルも、チップの肩に手をおいていました。

「そのときは、また、お菓子をどっさり、用意ひておいてね。」ライアンが、宝石の実のぼうつきキャンディーをなめながらそういつて、チップの口にも新しいキャンディーをいっぼん、いれてあげました。そしてロビーは、ただなにもいえずに、チップの手を取つて、その手をぎゅつとにぎりしめるばかりだったので。

「ありがとう……いませ……、みなさん……」チップが鼻をぐずぐず

いわせながら、いいました。「みなさんのごとは、忘れません。ぎつと、また、会いにきてくださいね。」

それからみんなはひとりずつ、チップのことをやさしくできしめてあげたのです。チップはもう、なみだをほろほろ流して、「うわーん！」と声を上げて泣いてしまいました。

こうしてみんなは、チップとわかれたのです。それから月日が流れて、このアーランドのすべてのものが、もとの美しさを取りもどすこととなったころ。チップリンク・エストルはすっかりつばな青年となつて、はぐくみの森のさらなるはんえいのために、かつやくしていくことになりました。かれははぐくみの森の安全を守る、森のしゅご隊を作り、そのしよだいの隊長になりました。わたしはいつかまた、みなさんにも、そのチップくんのかつやくの物語のことをごしよらかいできればと思っています。それまでみなさんかどうか、チップのことをおうえんしてあげてくださいね。また会う日まで、げんきでね、チップ！

「なんか、きつたないところだねー。」

門の中をのぞきこんでそうつぶやいたのは、ライアンでした。ライアンのいう通り、モーグの中はじょうへきにからみついていたのと同じ、あのぶきみなかびのような植物に、すっかりおわれてしまっていたのです。地面にはまるで雪がつもっているみたいに、わたのようなその植物の根がつみ重なっていました。その中のあちらこちらに、きのこのような植物がより集まって、まるい大きなかたまりを作っております。そしてそのかたまりからは、小さくくらげみたいなたまごが吹き出していて、それがふわふわと、空にむかってただよっていきましました。

「ぼく、きれい好きだから、あんまりきたないのはやなんだけどなあ……。虫とか出るのだけは、かんべんしてもらいたいんだけど。」ライアンがぶつぶつとつぶやきます。

「まあ、なん十年もそうじていないんじゃ、しかたないな。」そんなライアンに、ベルグエルムがいました。「いずれこども、すっかり

きれいになってくれるように、願いたいものだ。」

「おぼけのうわさも、すっかりきれいに消えてもらいたいものです。」フェリアルも、モーグの中をのぞきこみながらそういいます（さいしよは強がっていたフェリアルですが、いざモーグの中を見てみますと、やつぱりその足はすくんでしまっていたのです）。

「なんにも出なければいいんですけど……」さいごにロビーが、不安そうな顔をしていました。「ぼくはもう、この剣でなにかを切るなんてことは、したくはありませんから。」

こうしてみんなは、ついにその門をくぐって、ゆうれい都市とおそれられるモーグのまちの中へと、ふみこんでいったのです。

いちばんさいごに、フェリアルの騎馬が通りすぎたあとのことでした。門のわきにもたれかかっていた、あの兵士のがいこつたち。そのがいこつたちの目が、ぼうつと、赤くにぶい光を放ったのです。だれもそのことに、気づく者はありませんでした。

モーグのまちの中に、ひさしぶりに生きものの歩く足音がひびき渡りました。それは旅の者たちの乗る、三頭の騎馬たちの足音でした。しかし、ふつう馬の足音といえ、ばからんぱからんという、気持ちのよいはずむような足音を思い浮かべるものですが、ここではまったく、そうはいかなかったのです。なにしろこのモーグの地面は、さきほど申しました通り、いちめんにかびのような植物の根が張りめぐらされていたのです。そのため馬のひづめがその上をふみしめていくたびに、ぎゅぽつぎゅぽつという、およそこちよいとはとてもいえない、いやな音を立てていきました（しかもその根をふむたびに、それがねちやねちやと、騎馬たちの足にからみついてきました。これには馬たちもすっかりいやがって、上に乗っているみんなは、馬がいやがってあばれるのを、なんとかなだめながら進んでいくこととなったのです）。

道の両がわにはじょうへきと同じ、ばら色の石でつくられたりつばなたてものが、いくつもならんでいました。それらはすべて四かいだてで、やねの高さもみんな、きれいにそろえられております。そして

てっぺんのひさしの部分には、うみべのまちらしく、船ではこびこま
れるさまざまなにもつを持ち上げるための、クレーンが取りつけられ
ていました（これはみなさんの世界でも、うみべのまちなどではよく
見られるものです。どこの世界でも、同じようなことが考えられてい
たんですね）。

それらのたてももの一かいはといいますと、これはみな、たくさん
のしゅるいのお店になっていました。レストランに、きつき店に、お
酒の店。ハムとソーセージのお店に、チーズのせんもん店。服屋さ
ん、かばん屋さん、おもちゃ屋さん、おみやげ屋さん、などなど。ラ
イアンの大好きなお菓子を売るお店も、たくさんありました（そして
ここでもいちばんの人気メニューは、はぐくみの森から伝わった、森
ペンギンのクリームいりやき菓子だったみたいです。ペンギンのイ
ラストのはいったかんばんが、でかでかと、のきさきにかかっており
ましたから）。

ところで、これらのお店はもちろん、このまちができたころの大む
かしからあつたというものではありません。これらはすべて、このま
ちを通つてはぐくみの森やほかのくにへとむかう旅人たちのために、
このあたりの人たちがいせきをリフォームしてつくったものなので
す。そのころには、このまちにもたくさんさんの旅人たちが足をはこんで
いて、ここもなかなか、にぎわっておりましたから）。

え？ りっぱなたてもものがならんでいるうえに、こんなにたくさん
のお店まであるなんて、ちつともこわくなんかないじゃないかって？

だいじょうぶ、安心してください。これらのたてもものはもうとつく
のむかしにうちすてられて、今ではだれも手をつけることのない、文
字通りのゴーストタウンになっていたのですから！ かんばんはぼ
ろぼろ。店の中も荒れほうだい。のぼりばたはぐずぐずにくさり
きつていて、それがひらひらと、風にゆれていたのです。そしてそれ
に追いうちをかけるかのように、あのかびのような植物が店の中まで
をもすつかり、おおいつくしてしまっていました。ただ古いたてももの
があるというより、こんなふうに、かつての人のいとなみが感じられ
る場所が荒れ果てている方が、よりこわく感じるというものです（は

いきよの病院なんて、まさにそんな感じですよね！)。まるで今にも、店のおくからおぼけの店主が「いらっしやーい……」と出てきそうなふんいきじゃありませんか……。

さらにこのモーグにはもうひとつ、こわいふんいきをもり上げているものがありました。それはまちの空いちめんやあたりの道のことをおおいつくしている、白いきりだったのです。まだおひる前だというのに、おひさまの光はそのきりにみんなさえぎられて、まちの中はぶきみに暗いのです。しかもそのきりは、まるで生きているかのようにはゆるりゆらりと動いていて、それがなんども、人の手やおぼけの顔のようなかたちに見えたのです。きばをむいてせまりくるおぼけや、こつちへおいでーと手まねきするおぼけ……。もうフェリアルがなんど、ひめいを上げたことでしょうか？ そのおぼけのようなきりが、ひゆううーというすすり泣きのような声を立てて、みんなのまわりをするすると飛びまわっていました。おや？ あなたのうしろにも……。ふふふ……。

すいません。ちよつと、ライアンのいじの悪さがうつってしまったようです……。じゃあこれからは、おどかしっこなしということですね。

みんなはこんなふうに、モーグのまちなみをおそるおそる見てまわりながら進んでいきました。しかし、おそろしいまちであることにちがいはありませんでしたが、それでも今は、そんなことに気を取られている場合ではありません。いっこくも早くこのまちをぬけていくことを、みんなはいちばんに考えなければなりません（さすがのライアンでも、むかしのお菓子屋さんをのぞいてまわるようなことはしませんでした）。みんなはとりあえず、モーグのまちなみの中の方に見えているいっぽんの大きな塔をめざして、進むことにしました。モーグのまちをぬけるためには、まずまちのまん中にあるはずの広場をめざしていった方が、手っ取り早いからです（へたにうら道を進んでいくより、その方が安全ですし、道にまようようなこともないからでした）。

「あの塔はおそらく、大聖堂のものだろう。」先頭をゆくベルグエルムが、みんなにいいました。「このまちをおこしたのは、西の大陸から

渡った、ひとりの船乗りだときく。それからまちは、急そくにはつてんしていったらしいが、あの大聖堂も、そのなごりのひとつだろうな。」

「でも、大聖堂なら、なんで塔がいつぽんしかないのかな？ ふつう、二本じゃない？」ライアンもふしぎそうに、つづけました。

「このあたりは、海に近いからな。」ベルグエルムがこたえます。「きつと、地ばんが弱いのだろう。二本の塔をたてられるほどには、しつかりした土地ではなかったのだ。」

ベルグエルムのいう通り、このモーグの下の地面は水を多くふくんでいるため、高い塔を二本たててしまうと、たおれてしまう危険がありました。ですからかつての人々はしかたなく、塔をいつぽんだけたてたというわけだったのです。ですけどそれがかえってまちの名物となり、この大聖堂には毎日たくさんの人々が、おいのりにおとずれていました（ちなみに、この大聖堂の名まえはロザムンディア大聖堂といいました。ロザムンディアにある大聖堂だから、ロザムンディア大聖堂。うくん、わかりやすい）。

「このさきをまがれば、大聖堂のある広場にいけるようだ。急ごう。フェリアル、ちゃんと、ついてきているか？」

ベルグエルムがふりかえると、いちばんうしろからついてきていたフェリアルが、馬のたづなをとるのもそこそこに、手にしたお守りにぎりしめて、ぶつぶつと、おいのりの言葉を口にしていているところでした。

「神さま、女神さま、精霊さま。どうか、おばけからお守りください……………」

そしてみんなが、大聖堂へとむかうそのまがりかどを、まさにまがつたときのこと……。

その道のさきで、みんなは思わぬものに出くわしたのです。

「うわっー」

先頭をゆくベルグエルムが、あわててたづなをひきました！ かれの乗るはい色の騎馬が、ひひーん！ と大きな声を上げて、前足立っ

てとまります。そしておどろいたのは、ベルグエルムだけではありませんでした。

「うわっ！ びっくりした！」

「な、なんだ？」

「馬が、こんなところに！」

なんとなんと！ それらの声のぬしは、旅の者たちの前にとつぜんあらわれることとなった、三人の人間の男の人たちだったのです！

みんなはそろって、おどろきの声を上げました。ロビーたち旅の者たちにとつては、まさかまさか、モーグに人がいるなんてことは、思ってもいないことでしたから。ですがそれは、この人間の男の人たちにとつても、同じことのようにでした。

「あ、あなたたち、いったいこんなところで、なにをしているんです！ どうやって、このまちにはいったんですか！」

みんなが声をかけるまもなく、ひとりの男の人がしつもんしてきました。ねんれいは、三十さいくらいでしょうか？ 肩くらいまで黒のまつすぐなかみをのばしていて、クリーム色のシャツを着ております。かれのまわりにはことさらにこいきりがまとわりついていて、足もとをよく見えませんでした。かれの衣服はこのきせつにしては、うすすぎるように思えました。シャツの下にはなんにも着ていないようですし、ズボンのきじも、ずいぶんとうすいものだったのです。いったいこんなかつこうで、寒くないんでしょうか？ ですがそれいがいのところは、かれはいたってふつうの人のように見えました。人のよさそうな顔をしておりますし、いかにもおっとりとした、あらせいを好まない人といった感じだったのです。それはおおむねのところ、ほかのふたりとも同じようでした。

「おどろいた……い。まさかモーグで、人に会おうとは！」ベルグエルムがおどろきをかくせないままに、いいました。

そしてつづけてベルグエルムは、あたりさわりのない言葉をえらん

で、かれらに自分たちのことを説明したのです。

「わたしたちは、わけあって、南への道を急ぐ者です。東の街道がよこしまなる者たちの手に落ちてしまったがために、やむなく、このモーグ、ロザムンディアのまちを通って、南へとむかおうとしていたところなのです。」

そのとき。うしろからフェリアルがやってきて、かれらに話しかけました。

「よかった！ やっぱり、モーグはおばけのまちなんていううわさは、うそだったんですね！ 今でもちゃんど、人が住んでいたんだ！」かれらのすがたを見て、フェリアルは心の底からほっとしたのです。フェリアルは、今にもあたりの道からおばけのむれがやってくるんじゃないか？ とひやひやしておりましたので、こんなふうに生きている人たちに出会えたことが、うれしくてなりませんでした。

「わたしは、フェリアル・ムーブランドと申します。どうぞ、こんごともよろしく！」

フェリアルはうれしさのあまり、思わずじこしようかいまでして、手をのばして、かれらにあくしゆをもとめました。

これを見て、三人の男の人たちはちよつとびっくりしたようすでしたが、こんなふうにあくしゆをもとめられては、ことわるわけにもいきません。さきほど話しかけてきた黒かみの男の人が、だいひょうして、同じようにフェリアルに手をのばして、自分もじこしようかいをしてかえしました。

「これは、じこいねいにどうも。わたしは、ミリエム・オーストと申します。このまちで、ゆうれいをやっております。こんごともよろしく。」

フェリアルは、ミリエムと名のつたその人の手を、にぎろうとしました。って……、え？ 今、なんていいました？ ゆ、ゆうれい？

フェリアルが、あれ？ と思ったそのときのことでした。かれはたしかに、ミリエムさんの手をつかんだはずでした。ですがその手には、まったく手ごたえがなかったのです。

「え……？ う、うそ……」

フェリアルはなんども、ミリエムの手をつかもうとしました。しかししかし、フェリアルはその手はミリエムの手のあるその場所で、ひらひらと空を切るばかりだったのです。ま、まさか……!」

「あ、わたし、うれしいなんで、生きている人にはさわれませんでした。すいません。」

ミリエムがぺこりと頭を下げて、あやまりました。これをきいた、フェリアルはというと……。

「う……、うくん……!」

もう言葉にもなりません。かわいそうにフェリアルは、そのままきぜつして、騎馬の上から地面の上に、ぱったりとたおれ落ちてしまったのです! (さいわい、かびのような植物がクッションになってくれたおかげで、けがをすることはありませんでしたが。)

「フェリアル!」ベルグエルムが騎馬からおりて、かけつけました。ロビーもライアンも、フェリアルのもとに走りよります。よかった、どうやら気を失っているだけで、たいしたことはないみたいです。

「あの……、だいじょうぶですか? その人。」ミリエムが心配そうに、フェリアルのことを見つめました。

さあ、とんでもないことになってきました! みんなが出会ったこの人たちは、ふつうの人たちのように見えました。じつはじつは、ほんもののうれしいたちだったのです! それにしても、うれしいのくせに、なんてふつうに出てくるんでしょう! 出てくるんだったら、もつとそれらしく……、つて、そんなもんくをいつている場合ではありませんでしたね。

いわれてみれば、たしかにそれらしいところがひとつ、ありました。それはかれらのからだだが、ぼんやりとすけているところどころでした。はじめ出会ったときには、この深いきりがじやまをして、かれらのからだがよく見えませんでしたので、それがわからなかったのです (ちなみに、かれらがこの寒いきせつにうす着のままだったのは、かれらがゆうれいになったとき、きせつが夏だったからでした。ゆうれいでしたから着がえる必要ありませんでしたし、もとより、あつき寒

さも、かれらは感じなかったのです。これはゆうれいの、べんり(?) などころでした)。

「ゆ、ゆうれいって……! ほんとうにあなたたちは、ゆうれいなのか……?」

ベルグエルムが信じられないといったようすで、おぼけの人たちにいいました。ベルグエルムの気持ちもわかりますよね。だれだって、こんなにも「ふつう」のゆうれいなんて、信じられるとも思えませんもの。ですがそんなみんなの前で、ミリエムたちゆうれいの人たちは、自分たちがほんもののゆうれいであるのだということ、はつきりとしようめいしてみせたのです。

「まあ、信じられないのも、むりはないでしょうね。でも、ほら、ほんものですよ。」

そういうと、三人のゆうれいの人たちは、すうつと消えてしまいました! そして……。

みんなの見ている前で、なんともふしぎなことが起こりました。騎馬にくくりつけられているにもつのふくろの中から、お皿にフォーク、スプーンなどが、するするとぬけ出して、それがひとりでに、空中をすいすいと飛びまわりはじめたのです!(それらの品々は地面に近いところだけでなく、頭のはるか上の方にまで、ふわーつと飛んでいったりもしました。)もうみんなはとでもびっくりして、口をあんぐりどあげたまま、目の前の光景に見いつてしまいました。そして、しばらくたったころ……。

とつぜん、みんなの目の前に、ミリエムたち三人のゆうれいの人たちが、ふたたびすがたをあらわしたのです! しかもその足は地面からはなれていて、かれらは空中を、ゆらゆらとただよっていました(まさにゆうれいのように!)。そしてかれらの手には、お皿やフォーク、スプーンなど、さきほど空中を飛びまわっていたそれらの品々が、にぎられていたのです。そう、かれらはすがたを自由に消したり、空中をまるでゆうれいのように(ゆうれいですから)、ただよったりするこどができました! ひとりでに飛びまわっているように見えた品々は、かれらがすがたを消して、空を飛んであやつっていたというわけ

だったのです。

「これで、信じてもらえました?」ミリエムが、にこにこした顔でみんなにいいました(うれしいの笑顔というのもおかしなものです……。)。

「えーっと、それで、なんの話をしていたんですって?」

ひとだんらくがついたころ、ミリエムがゆびを口にあてながら、ほかのふたりと顔を見あわせて考えこみました。そしてとつぜん、かれは大きな声でさげんだのです。

「そうですよ! こんなこと、やってる場合じゃないんです! わたしたちがゆうれいになってしまったわけが、ここにはあるんですから! あなたたち、まさか、北門をこわしてきたんじゃないでしょうね?」

いわれてみんなは、ぎくつ! とになりました。とくにライアンは、北門をこわしたちようほんにんでしたから、よけいだったのです。

「だ、だって、しかたなかったんだもん! そうしなきや、中には、いれなかつたからさ。ねえ、ロビー? しょうがなかつたもんね?」ライアンがあたふたとこたえました。そして話をふられたロビーも、もつとあたふたになって、なんとかこの場をとりつくろおうと、がんばったのです。

「あ、う、うん。そ、そう、しかたなかったんです。それで、その、ちよつとだけ、門をこわしてきちやつたんですけど……。ごめんなさい。」

ほんとうは、こつぱみじんに吹き飛ばしてしまいました……。まあでも、どうしても中にはいらなければなりませんでしたから、なんとかゆるしてもらうしかありませんね。

「やつぱり! わたしたちは北門の方から、なにかものすごい音がしたから、こうしてしらべにやってきたところだったんです。」ミリエムがいました(ものすごい音のしようたいについては、いうまでもありませんよね)。

「あなたたちは、自分たちのしたことがわかっていないんだ! 問題は、門をこわしたなんてことじゃあないんです! 門を通して、こ

ここにはいつてきたことが、問題なんですよ！」

ミリエムもふたりのゆうれいさんたちも、そういつて、みんなそろってしんけんな顔をして、ロビーたちにくい下がりました。いったいどうしたというのでしょうか？ どうやら、門をこわしたからそれで怒っているというわけでは、ないみたいです。

「らんぼうな方法でここにはいつたことは、おわびいたします。ですが、いつたい、なにがあるというのです？ 門をぬけたことが、それほどまでに重大なことなのですか？」ベルグエルムがゆうれいさんたちにたずねました。

「ぼくたちは、すぐに、ここをぬけていくつもりなんです。みなさんに、これ以上のごめいわくは、かけませんから。」ロビーがかれらに説明します。

「そうだよ。こんなかびつばいとところにずっといたら、ぼくたちみんな、チーズになっちゃうもん。」ライアンも、フェリアルのかんびぶうをしながらいいました（ちなみに、フェリアルは地面の上でライアンにひざまくらをされながら、ずっときぜつしていました）。

「むりですよ！ あなたたちはもう、ここから出られなくなってしまうんです！」ミリエムが、なんともおそろしい言葉を口にしました。ここから出られないって？ それはほんとうの、いちだいじじやありませんか！

「ああっ！ だめだ！ もう、やつらがやってきた！ ほら、あの空のむこう。すごいはやさで、こっちにむかってきてきている！」

ミリエムが、空のむこうをゆびさしながらいいました。みんなはいつせいに、空の方を見やります。いつたいあれは、なんなのでしょう？ 見ると、まちのじょうへきのその上の方に、小さな黒い鳥のむれのようなものが、こっちへむかって飛んできていました。それも、すごいはやさで！

「あれはなんだ？ 鳥にしては、はやすぎる。それに、つばさがないぞ！」ベルグエルムがいいました。

みんなが見ているまに、それはどんどんこちらへと近づいてきます。やがてそのすがたがもつとはつきり見えるようになって、みんな

にはそれが、黒いぼろぼろのマントに身をつつんだ、なにかの黒いかたまりたちであるということが、わかりました。

「どこへ逃げてても、だめなんです！ あいつらは、生きている者からたましいをぬき取って、空のかなたに持って行ってしまおうんですよ！」

な、なんですって！ たましいを持っていつてしまおう？

「たましいを持っていくだって！ それはまずい！」ベルグエルムがすぐに考えをめぐらせて、さげびました。「たましいがからだから遠くはなれば、からだは、かんぜんに死んでしまおうときいたぞ！」

そう、かれら旅の者たちは、はぐくみの森の地下いせきにおいて、たましいをうばわれてしまった人たちのことを、見てきたばかりだったのです。そこで知り得たこと。それは「たましいがからだから遠くはなれてしまおうと、もうたましいはもとのからだにもどることができなくなつて、からだはほんとうに死んでしまおう」ということでした。あの地下いせきにいた旅人たちは、たましいをうばわれてはしまったものの、そのたましいがかいぶつのからだに残つてすぐそばにとどまっていたがために、ふたたび助かることができたのです（せいぜい四ぶんの一マイル以内の中に、たましいがありました）。ですがゆうれいさんたちの言葉をきいたかぎりでは、こんかいはとても、そんなにうまいぐあいにはいかないうででした。たましいが遠くかなたの空に持ち去られてしまつては、残つたからだは、ほんとうのほんとうに死んでしまおうのです！

これはいよいよたいへんなことになってきました！（ゆうれいに出会つたことよりも、こつちの方がたいへんです！）みんなはあわてふためいて、きたるべく戦いにそなえて身がまえしました。これは文字通り、いのちがけの戦いでした。しかし、こうなつてはもう、戦うほかに道はないのです。こんなところでこの旅がつづけられなくなつてしまつては、いったいこのアークランドは、どうなつてしまおうのでしょうか？ それだけは、なんとしてもさげなければ！

ベルグエルムとロビーはそれぞれの剣をかまえて、そしてライアンはいつでも（しぜんの力をかりて）相手をむかえうてるようにとじゆ

んびをして、せまりくる敵にむきあいました。そしてとうとう、黒いマントに身をつつんだそのおかしな相手たちが、みんなの目の前へとやってきたのです！

これはいったい、なんという相手なのでしょう！ 黒いマントの中には、ただまっ黒な影のようなものはいっているだけでした！ 顔は見えませんし、足もありません。かわりにマントの下から、小さなしっぽのようなものが、ちよこんとたれ下がっているだけだったので

す。

みんなは思わず身ぶるいしました。こんな相手に出会ったのは、ひやくせんれんまの騎士ベルグエルムでさえも、はじめてのことだったのです。

「おまえたちは、なに者だ！ ここは、おまえたちのくるようなところではない！ 立ち去れ！」ベルグエルムが剣をかまえて、さげびました。しかし相手には、それがきこえていないみたいです。全部で四つのそれらの影は、「けらけらけらー！」といううすきみの悪いかん高い笑い声を上げると、まるでみんなのことを値ぶみしているかのように、するするとそのまわりを飛びはじめました。

「おのれ！ 白の騎兵師団、一のたちを受けてみよ！」ベルグエルムがせんじんを切って、影のひとつに切りかかります！ しかし……！

「うわっ！」

黒いマントをまっぴたつにたち切ったものの、ベルグエルムの剣はその中の影そのものにはまったくききめがなく、そのやいばは影のからだをするりと通りぬけてしまいました！ 思わぬことに、ベルグエルムはそのままバランスをくずして、すつてんころりん！ ほんたいがわの地面にころげてしまいます（なんだかちよつと前に、これとすごーくにている場面を見たような気がします……。まあ、同じようなことは、よく起こるものですから）。

たおれたベルグエルムのことを見て、ミリエムたちがさげびました。

「だから、だめなんですよ！ そいつらに、剣はききません！ そいつらから身を守る方法なんて、ないんです！」

そうなのです、この影たちはあのはぐくみの森のいせきで出会った夜のかいぶつみたいなのに、剣で切ることができませんでした！

「こいつめー！ これならどうだ！」ライアンがいしきを集中させて、影にむかって空気のかたまりを飛ばします！ しかしやっぱり、それはマントを吹き飛ばすばかりで、影にはぜんぜんききめがありませんでした。「えーん、やっぱりだめー？」

こうなったら、たよりにできるのはただひとつの方法だけでした。ロビーのあのふしぎな剣なら、この影のおばけたちをたおすことができるはずです！

「みんなから、はなれろ！」

みんなが思うまもなく、ロビーが剣をにぎりしめて影に切りかかりました！ モーグにはいる前に、この剣でなにかを切るなんてことはもうしたくないと思ったばかりでしたのに、やっぱりこのモーグでは、そもいかないうでした（それにしても、こんなに早く、またこの剣を使うことになろうとは。このさきどれほどの危険が待っているのか？ 心配です）。

ロビーの戦いぶりは、なんともいさましいものでした。その剣さばきは、けっしてじょうずなものとはいえませんでした。せまりくる影をばったばったと切りたおし、そしてとうとう、あとひとつの影を残すまでとなったのです！（切られた影はしゅーっ！ という音を立てて、黒いけむりとなって消えてしまいました。ミリエムたちゆうれいのみなさんがびっくりぎょうてんしたのは、いうまでもありません。きかないと思っていた剣のこうげきが、こうしてきていましたから！）

「すごい、すごい！ やっちゃえロビーー！」ライアンはもう両手をふりかざして、むちゆうでロビーをおうえんしました。

「ロビーどの！ お気をつけて！」ベルグエルムも手にあせにぎつて、戦いのようすを見守っております（ところで、みなさんの中にはこう思った方もいるのではないでしょうか？ ロビーのこの剣をかりて、ベルグエルムが剣のうでまえをふるったらいじやないかって。それはごもつともなのですが、じつはこの剣は、ロビーいがいの

者には、そのとくべつな力をはつきすることができなかつたのです。ですからベルグエルムがこの剣で戦つても、それはふつうの剣としての力しか出せず、この影のおぼけたちを切ることはできませんでした。

このことは、あの夜のかいぶつのいた地下いせきの中で、わかつたことでした。ベルグエルムがこの剣を持ったとたん、あかりとなつてくれていた剣の光が消えて、あたりがすっかり、まっくらになつてしまつたのです。あわててロビーが剣を持ちなおしたら、ふたたび光がもどつたというわけでした。そこでみんなは、この剣の力はロビーいがいの者には使うことができないというけつろんに、たつしたのです。もとよりこの剣は、ロビーにたくされたものでしたし、みんなもままったく、それでなつとくしました。

それと……、こんなにだいじなことを今ごろお伝えしたのは、このことを、このモーグの戦いの場面で説明したかつたからなんです。説明するのを忘れていて、あわてて今、いったわけではありませんよ……、うん。

さあ、ロビーの戦いはどうなつたでしょうか！ ロビーは息を「はあはあ。」とついて、残るひとつの影にむかつていました（その手に持った剣はあの地下いせきの中でのように、ぼんやりと青白い光を放つようになつていました。これは剣の力がはつきさされているという、しようこでもあつたのです）。ところが、このあとひとつの影がやかいでした。この影はすでにたおしたほかの三つの影たちとはちがつて、とてもすばしっこかつたのです（さしずめ、この影たちのリーダーといつたところででしょうか？）。ロビーはなんども剣をふるいましたが、なかなかこの影のことをとらえることができません。影の方も、切られてはかなわぬと思つているのでしょうか？ ロビーの方になかなか、近よつてこようとしませんでした（いがいに頭のいい影みたいです。影にちえがあるのかどうかはわかりませんが）。

そしてついに、この影が大きな行動に出ました。影は空に大きくまいた上があると、そのままいつきに、ロビーの方にむかつてとつしんしてきたのです！

「あぶない！ 気をつけて！」 ミリエムが大声でさげびました。

「ロビーー！」 「ロビーーどの！」 ライアンもベルグエルムも、思わずさげんでしまいました。

さあ、いよいよ大いちばんです！ ロビーは剣をがっちりとにぎりしめて、影にむかいました。むかつてくる影をこの剣でくしぎしのバーベキューにしてやろうと、ロビーは心にきめていたのです。

影がロビーのすぐそばまで飛んできました！ ロビーは剣のさきを影にむけて、かけ出します。そして……、剣が影をまさにくしぎしにしようかという、そのとき。その影はロビーの目の前でするりとむきを変えて、そのままあるひとりの人物のもとへとむかつて、とっしんしていききました！

「ええっ？」

ロビーはびつくりして、影のことを目で追いました。もうとつぜんのことでしたから、ロビーもみんなも、わけがわかりませんでした。しかしみんなはつぎのしゅんかん、心の底からこう思うこととなったのです。しまった！

影のむかったさき。そこには、ひとりの人物が横たわっていました。ああ、なんてことでしょう！ それはおぼけにおどろいて、きぜつしてしまっていた人物。そう、そこに横たわっていたのは、白の騎兵師団のウルファの騎士である、フェリアル・ムーブランドだったのです！

「ああ、なんてことだ！ もう、まにあわない！」 ミリエムたちが頭をかかえてさげびました。そしてかれらのその言葉は、ついに、ほんとうのこととなってしまったのです。

影はきぜつしているフェリアルの中からだに、するりとはいりこんでしまいました！ そしてみんながかけつけるよりもさきに、影はフェリアルの中からだから、かがやくきいろい光のようなものをうばい取ったのです。それはまさしく、フェリアルのだましいにほかなりませんでした。

もうみんなには、なすすべもありませんでした。影はフェリアルからぬき取ったそのたましいを両手でがっちりとかかえこむと、そのま

まげらけらと笑いながら、空高くまい上がっていつてしまったのです。そして影は、もときたまちのそとのほうがくへとむかつて、飛び去っていつてしまいました。これはかれらが今までに出会ったどんな敵やこんなんよりも、おそろしいできごとでした。フェリアルのおかしいが、うばわれてしまったのです！

みんなはたましいをぬかれたフェリアルのもとに、かけよりました。フェリアルの中からだをだき起こして、ゆきゆさとゆきぶります。ですがフェリアルの中からだには、もうまったく、力がなくなつてしまつていました。

みんなはがくぜんとなりました。フェリアルのおかしいは、もうはるか空のむこうへと、飛び去つていつてしまつたのです……。こうなつてしまつたのなら、フェリアルの中からだにふたたびそのたましいがもどるなどということとは、とてもぞめないことでした……。

「うわーん！ フェリーが死んじやった！ ライオンが、なみだをこぼしていいました。」

「ぼくがずっとそばについていれば、こんなことにはならなかつたのに！」

ライオンはくやしそうにそういつて、フェリアルの手をぎゅつとにぎりしめました（ライオンは影が飛んできたときに、ひざまくらをしていたフェリアルのことを、地面に放り出してしまつたのです。戦いはじまろうととしていましたから、しかたありませんでしたが）。

「なんてことだ……。まさか、こんなことになろうとは……。」「ベルグエルムもすっかり力を落として、なげきます。」

「ぼくのせいです……。」「ロビーが、手にした剣を力なく地面に落として、いいました。」「ぼくが、ちゃんとやつつけてさえいれば、フェリアルさんは助かつたんだ！」

ロビーはすっかり力がぬけてしまつて、両のひぎを、地面にぺつたりとつけてしまいました。

「なにをおっしゃいますか！ ロビーどののせいであるはずもありません！」「ベルグエルムがロビーにそういつて、ロビーの手を取つて、そのからだを起こしてあげました。」

「これは、じつにふこうなできごとです。だれにも防ぐことはできなかつた。フェリアルはわが身をぎせいにして、ロビーどこのことをお守りしたのです。われらはそのことにかんしゃして、旅をつづけなくてはなりません。フェリアルのぎせいを、むだにしてはならないのです。」

ベルグエルムの言葉に、みんなは声も出せず、ただただその場に立ちつくしているばかりでした。みんなフェリアルのそのなきがらにむかって、深く頭を下げて、せいっぱいの敬意の気持ちをあらわしていました。ロビーもライアンも、なみだをぼろぼろこぼしてかたしみました。ベルグエルムはくちびるをきつ、とかみしめて、そのつらい気持ちをぐつとこらえていました。

「あの……、みんな、なにをやっているんですか？」

そのとき、うしろから急に、だれかの声がきこえました。ミリエムたちでしょうか？それにしても、みょうになじみのある声のような……？

みんながうしろをふりむくと、そこにはひとりの人物が立っていました。そしてその人物のことを見たしゆんかん。みんなはたましいが飛び出るほどに、おどろいたのです。

そこに立っていたのは、なんということでしょう！ フェリアルほんにんでした！

「え、ええーっ！」

みんながおどろいたことといったら！（たぶん今まででいちばんおどろいたことでしょう。）たましいを持っていかれて死んでしまったとぼつかり思っていたフェリアルが、こうして目の前にあらわれましたから、むりもありません。しかしおどろいたのは、みんなだけではありませんでした。

「ど、どうかしましたか？ そんなにおどろいて。それにしても

……、いったい、なにを見ているんです？」「フェリアルがひよいどのぞきこんだ、そのさき……、そこには、ほかでもありません。かれほんにんのからだだが、横たわっていたのです！

「え……？　ええーっ！　わたしがいるー！」「フェリアルは口をあぐりとあけて、もうたましいが飛び出るほどに、おどろくばかりでした。

さあ、これはいったいどういうことなのでしょう？　どうやらこのさき、まだまだ、とんでもないことになってしまいそうな感じですが（それにしても、ああやつぱり！　モーグをすんなりと通りぬけることなどはできませんでしたね。はじめから、いやなよかんはしていました……）。

これからの旅がどうなっていくってしまうのか？　そしてフェリアルの運命は……？　物語はこれから、思わぬほうこうへとむかって、進んでいくこととなるのです。

11、おばけのまちでおるすばん

今からなん十年と前のこと。このアークランドよりもずっと西の、海のむこうの大陸でのお話です。その大陸にはじつにさまざまなくにがあつて、じつにさまざまなぶんかがごつたがえしていました。住んでいる人たちもじつにさまざまでした。人間はもちろん、ありとあらゆる動物の種族の者たち。海の種族、山の種族、小人たち。動く木の種族。果ては、はつきりとしたからだを持たない、けむりのようないすがたの種族の者たちまで、じつにさまざまな種族の者たちがこの大陸には住んでいたのです（アークランドのウルファたちとはしゅるいがちがいましたが、おおかみ種族の者たちもすくなくならず住んでいました）。ですから人々はこの大陸のことを、しぜんとうよぶようになりました。いろんなものがまじりあつた大陸。こんごう大陸ガランタと。

そのガランタ大陸の東の果て、みなとの大都市ポート・ベルメルからほど近いヴァナントという小さなまちに、ひとつの魔法学校がありました。このヴァナントというまちは、魔法をあやつるために必要な力がほかの土地よりもたくさんあつたということ、数多くの魔法をこころざす者たちがしゅぎようにやってくるところだったので（でもわたしは魔法を使えませんので、力がたくさんあつたといわれても、よくわかりませんでした）。そしてこのまちの魔法学校は、ガランタ大陸の中でもいちばんとっていいほどの、けんいをほこつていました。

あるとし、その魔法学校に長くてきれいな黒かみを持った、すらりとほそい、ひとりの若く美しい女の人が入学してきました。かのじよの名まえはアルミラ・ロングワートといました。かのじよのさいのうは、はじめからずばぬけていました。そして一年ほどもたつと、かのじよはこの魔法学校のどんなゆうしゆうなせいとよりも、そして魔法を教える先生さえもかなわないほどの、すぐれた力を身につけたのです（この魔法学校のべんきようきかんは五年でしたから、かのじよがどんなにゆうしゆうか？ おわかりいただけるかと思えます）。

しだいにみんなは、かのじよのそのさいのうをおそれるようになりました。魔法の先生たちはかのじよをこのまま、この魔法学校にさせておいていいのだろうか？ とひそかにささやきはじめるようになりました。かのじよの力がこれ以上大きくなれば、もう自分たちの手にはおえなくなるということが、わかっていたからです。もしその力を悪いことにでも使われたら、たいへんなことになる。

そしてみんながそんな心配を始めたころのことでした。アルミラ・ロングワートはとつぜん、この魔法学校をやめてしまったのです！ いったいどういうことだろうか？ 学校はかのじよのうわさでもちきりとなりました。そしてそれからしばらくたったころ、じけんは起こったのです。

この魔法学校でもっともげんじゆうで、もっともひみつにされている魔法のほかん部屋に、ひとりのどろぼうがはいりました。そのどろぼうとは、ほかでもありません。あのアルミラ・ロングワートだったのです！ アルミラはそこから、使うことをかたくきんじされているある魔法のわざをぬすみ出しました。それはなんともおそろしく、なんともぞっとするわざでした。そのわざとは人のたましいをぬき取って、そのたましいの力で、おそろしい軍隊を作るといったものだったのです！

このおそろしいわざをうばい去ったアルミラのゆくえは、だれにもわかりませんでした。うわさではほかの大陸へ渡って、この魔法のわざのじっけんをおこなっているということでした。そしてそれからどれほどの時間がたったのでしょうか？ 人々はふたたび、このアルミラの名まえをきくこととなったのです。おそろしい、魔女の名まえとして。

そう、アルミラとは、このアークランドの西の地に住みついているという、そのおそろしい魔女のことでした！ アルミラは魔法学校から持ち出したその魔法のわざをたずさえて、ひとり、人目のつくことのないこのアークランドの西の地へと、そのときはじめてうつり住んできたのです。

あれ？ でも待つてください。たしか西の魔女というのは、もうな

ん千年もむかしから、その土地に住んでいるっていううわさじやなかったでしたっけ？　じつはそれはまったくのでたらめで、ほんとうはこの魔女が西の地にやってきたのは、お伝えしました通り、まだほんの数十年前のことだったのです（うわさっていうものはどんなところでも、話が大きくなつて広がるものですよ。ベルグエルムやフェリアルをはじめとする南のくにの人たちは、そのうわさをほんとうのことだと思いこんでしまっていたのです）。その数十年のあいだに、魔女アルミラのうわさはどんどん広がっていききました。そしてその魔女が西の土地にやってきてはじめに目をつけたのが、ほかでもない、ロザムンディアのいせきに住む人たちだったのです。

それから三十年あまり。ロザムンディアのいせきはすっかりもとのはいきよのまちとなり、モーグというふきつな名まえで人々におそれられるようになりました。このいせきがモーグとなつてしまったわけ。それはどうやら、この魔女がかんけいしているみたいですよ。いったいこのまちに、なにが起こったのか？　それはこのあとの物語の中で、語られることになるのです。

「ここが、ロザムンディア大聖堂ですよ。」旅の者たちにそうつげたのは、おぼけのミリエムでした。

「わたしたちは、ちようど、この大聖堂でミサをひらいていたところだったんです。みんな、中で待っていますよ。しさいさまもいらっしやいます。」

それはあつとうされるほどの、りっぱな大聖堂でした。モーグのほかのたてもものと同じ、ばら色の石を重ねてつくられていて、そのいたるところに、こまかなちようこくがほどこされていたのです。植物のつるや、葉っぱや、お花がたくさん。たくさん動物たち。天使のむれや、ころもをまとったそうりよたち。そのほか、よげん者、しどう者、などといった者たちのちようこくが、ところせましとほどこされていきました。

ちようこくの美しさもさることながら、みんなはまず、その大きさにおどろかされました。ここにくる前ベルグエルムとライアンが話

しておりましたように、大聖堂にはひとつの塔が突き出ていたが、その高いこと！ 高さはおよそ、四百フィート以上はあるでしょう！ みんなはただただ、「ふえーっ。」と息をついて、空を見上げるばかりでした（おかげでみんな、しばらく首が痛くなってしまういたが）。

大聖堂のりっぱさとはべつに、みんなが気づいたことがありました。それは大聖堂もふくめてそのまわりの地面だけには、あのかびのような植物が生えていないということでした。地面にはばら色の石だたみが見えていて、それではじめて、みんなはモーグのまちの地面の石だたみに、美しいモザイクもようがほどこされているということがわかったのです（このもようは船とロープをあしらったもので、船乗りのまちだったロザムンディアのまちのマークでした）。

「できたらみんな、そうじしたいんですがね、」ミリエムがいました。「広いまちですから、かびの生える早さに、そうじがとても追いつかなくて……。せめて大聖堂のまわりだけでもと、いつもきれいにそうじしているんですよ。」

ミリエムはそういうと、ふわふわと空に飛び立っていきます（ゆるいからです）。

「ほら、これなら、大聖堂の上の方までそうじができるでしょ？ はしごがいらないから、けっこうべんりなんですよ。」ミリエムが、（空中で）にこにこ笑っていました。

ですけどそんなミリエムのおしゃべりなどに、みんなはほとんどかまっていられませんでした。なにしろフェリアルが、いちだいじなんですから！（そうじのことなんか、はつきりいつて、どうでもよかったです！）

あれから……。 （フェリアルがみんなの前にひよっこりあらわれて、自分のからだを見て、「わたしがいるー！」とおどろいてからのことです）。みんなはミリエムたちに、これはいったいどういうことなのか？ とつめよりました（フェリアルはとくにつめよりました）。そしてみんなはあの影のおぼけのしょうたい、そしてフェリアルの身になにが起こったのか？ ということなどを、とりあえずかいつまんで

すが、知ることとなったのです。

あの影のおばけは、むかしモーグのまちにやってきた魔女の手下であり、魔女はあの影を使って、人々のからだからたましいをうばい去っていったということでした。そして重要なのは、影はたましいを半分だけしか持つていかないということでした。つまり残りの半分は、からだに残していくのです（そのりゆうはあとで説明されます）。

しかしたましいが半分だけでは、もう人としては生きていくことができなくなってしまふのだそうでした。からだに残された半分のたましいは、からだにとどまっていることができずからだからぬけ出してしまつて、あとはもう、ゆうれいとしてしか、かつどうすることができなくなつてしまふのだということです（これが、かんぜんにたましいをぬかれたときとの大きなちがいです。たましいが半分あれば、ゆうれいになつて、動きまわることができるとすね。そしてたましいをぬかれたからだの方も、自分のたましいが半分、自分のそばにまだ残っているんですから、死んでしまふということはありませんでした。見た目はぜんぜん、死んだようになつてしまふんですけれど）。ミリエムたちゆうれいのみなさんも、かつてあの影にたましいをうばい去られ、そのけつか、今のゆうれいのすがたになつてしまつていたというわけでした。

つまりこういつたわけで、フェリアルは半分のたましいをうばわれ、残りの半分のたましいだけを持ったゆうれいとして、みんなの前にあらわれたというわけでした（ちよつとややこしいんですけれど）。

ところで、こんなにだいじなことは、早く教えておいてほしかったですよ！ おかげでみんなはすつかり、フェリアルが死んでしまつたものとぼつかり思つてしまいましたから！ でもまだ、フェリアルがすつかりもと通りになるというほしうは、どこにもありませんでしたから、よろこんではかりもいられないわけです。それはこんごのてんかいに、きたいするしかありません）。

あの影が今、どうしてここにやってきたのか？ それはみんなが通つてきた北の門と、そこにいたあのがいこつたちが、かんけいしているそうでした（やつぱり、あのがいこつたちでした。ずいぶんあや

しかつたですもの)。さらに魔女がこのまちに目をつけたわけや、このまちでなにが起こったのか？ ということ。そして魔女そのものについてのことも、みんなはもっとくわしく知る必要があります(フェリアルの中のちがかったら)。それでみんなはミリエムたちにあんないされて、それらのことをくわしく話してくれらるというしささまのいる大聖堂へと、むかうことになったのです(そして今、みんなはその大聖堂についてたところでした)。

大聖堂の中は、ことさらにりっぱなものでした。てんじようははるかな上にあつて、そのまん中には大きなまるいドームがつくられております。かべにはたくさんのとうめいな石がはめこまれていて、その石があわく美しい、とうめいな光を放っていました。そしてあちこちにつくられた大きなまどには、これまたりっぱな、きれいなステンドグラスがはめこまれていたのです。

そとのおてんきが晴れ渡っていたのなら。この大聖堂の中は光にあふれ、それはそれは美しいものとなっていたことでしょう。ですがここは、ひるなお暗い、モーグの中。おぼけのきりがまい、ぶきみなかびが生いしげる、うれしいのまちであつたのです。ですからこんなにもすばらしい大聖堂も、(とってもぎんねながら)まるでおぼけのぬしの住むうれしいの城であるかのように、なんともうすきみ悪く思えてしまいました(いちどさういうふうに見えてしまうと、なんだかすべてこわく思えてしまうものです。かべのステンドグラスのかがやきも、とうめいな石の光も、まるでおぼけの目が光っているみたいに見えてしまいました)。

「な、なんだか、おぼけでも出そうな感じですよ……！」そういつてミリエムのうでにしがみついているのは、フェリアルでした(ちなみに、おぼけどうしになつてしまえば、ミリエムのからだにもふれることができたのです)。

「なにいつてるんですか。あなたも、おぼけでしょ。」そんなフェリアルに、ミリエムがこたえました。

「そ、それをいわないでください！ いっしょうけんめい、忘れようと努力しているんですから！ わたしはおぼけなんかじゃない、おぼ

けなんかじゃない……」

かわいそうなフェリアルは、さつきからなんども、自分にそういきかせていたのです。ですが、ときどきちらつと目にはいつてしまいたましいのぬけた方の自分のからだか、自分がゆうれいであるのだからということ、はつきりとかれに思い知らせてしまいました（フェリアルの中からベルグエルムがおんぶして、よいしょよいしょとはこんでいたのです）。

「ところで、そのしさいさまは、どちらに？」大聖堂のまん中ほどまで来たところで、ベルグエルムがいました。ベルグエルムのいう通り、大聖堂の中はぶきみなほどに静まりかえって、人のいるけはいなど、まったくなかったのです（といっても、ここはゆうれいのまぢでしたから、人のけはいなんてもとからどこにもありませんでしたけど。すくなくとも、生きている人のけはいは）。

「やだなあベルグ、なにいつてるの。ここは、おぼけしかいないんですよ？ そのしさいさまも、おぼけにきまつてるじゃない。」そういつて正面にあるしさいだんの方をゆびさしたのは、ライアンでした。「しさいさまなら、さつきからそこに、いるみたいだよ。」

え？ ほんとに？ みんなはそろって、ライアンのゆびさしたさいだんの方に目をむけました。そしてライアンのいう通り。みんなはそこに、あるひとりの人物（のようなもの）を見たのです。

はじめはまったく、気がつきませんでした。しかしよく見ると、そこになにか白いひらひらとしたものが、うつすらと見えはじめてきたのです。そしてそれは、やがて、はつきりとした人のかたちへと変わっていきました！（いわゆる、ゆうれいとうじょうの場面という感じですよ。うん、これなら、ゆうれいっぽくていいですね！ って、そういう場合でもありませんか……）

「あの方が、この大聖堂のしさいさまです。しさいさま、お客さまですよ。」ミリエムがそういつて、しさいさまにおじぎをしました。そしてそれにこたえて、しさいさまがゆっくりと音も立てずに、みんなのところにあわわーと歩いてきたのです（ゆうれいですから）。

「よくいらっしやいました、みなさん。たいへんな目にあわれたよ

うですね。」

しさいさまの声は、すき通るような、美しくもかほそい声でした。まるで女の人のような……、というより、女の人だったのです。大聖堂のしさいさまが女の人というのは、このアーケランドではめずらしいことでした。ですからみんなは、このいがいな出会いに、ちよつとびっくりしたのです。

「これは、しさいさま。わたくしは、ベルグエルム・メルサルと申します。こちらは、ロビーどの。そしてシープロンの、ライアン・スタツカート。それから、わたくしの肩におぶさっているのが、フェリアル・ムーブランドであります。」ベルグエルムがうやうやしく、(フェリアルを落つことさないうちに気をつけながら) 頭を下げていいました。

「わたしは、ティエリー・エルムリール。この大聖堂のしさいです。」しさいさまは若く小がらで、とてもからだかほそくて、そしてとても美しい女の人でした。こがね色のがやくような長いかみの毛をしていて、それを頭の上であんでおります。それはまるで、こがね色のかんむりをかぶっているかのようで、白くて美しいきぬの衣服とあわさつて、しさいさまのおごそかなふんいきをより強く感じさせていました(ミリエムはみんなに小声で、「きれいな人でしょう? 人気者なんですよ。」とじまんげにいつていました)。

「そちらの方。もう影はきませんから、どうぞこちらへおいでなさい。」

しさいさまがそういつてまねいたのは、木の長いすの影にかくれているフェリアル(のゆうれい)でした。フェリアルはしさいさま(のゆうれい)があらわれたとたんに、「ひいつ、おばけ!」といつていすの下にかくれて、がたがたふるえていたのです(やつぱりまだ、ゆうれいさんたちになれるのには、時間がかかりそうですね)。

「あなた方は、たいへんなしれんにあわれてしまったのです。これは、よいなことではありません。ですが、きぼうはまだ、残されております。あなたたちは、われらの大きなきぼうです。」しさいさまは両手を胸の前でくみながら、静かにいいました。

「あなたたちが、ゆうれいにならずに、ここにこうしてたどりついた

こと。それはまさに、神のおほしめし。きせきというほかありません。」

「神さまのおかげでもあるし、ここにいる、ロビーのおかげでもあるんです。」しきいさまの言葉に、ライアンがそういって、ロビーのうでを取ってみせました。

「この人のおかげで、あの影をやっつけることができたんです。ロビーがいなかったら、ぼくたちみんな、おぼけになっちゃったたもの。」

ライアンの言葉に、ティエリーしきいさまは静かな表じようのままこたえます。

「すでに、ぞんじております。あなたたちの戦いのようすなら、ここにいるみなさんから、もうきかされておりますから。」

ここにいるみなさん？ それはいつたい、だれのことなのでしょう？ ミリエムたち三人のうれしいさんたちは、まだしきいさまのところには、いつていなかっただはずですが……。

「あれ？ みなさん、気がついていなかったんですか？ この大聖堂にやってくる前から、もうわたしたちは、三人だけじゃなかったんですよ。」

ミリエムがそういったとたんでした。あたりが急に、ざわざわとどよめきはじめたのです！

「それにしても、りっぱな戦いぶりだった。」

「ほんとうに、あんなふしぎな剣が、この世にあるなんてねえ。」

「あのゆうれいになっちゃった人、ついてない人だなあ。」

あたりから、たくさんの人の話し声がひびいてきました！ いった

いこれは……？

「みんな、もう、出てきたらどうです？ 悪い人たちじゃなさそうだ。」

ミリエムがそういうのと同時に、ロビーたち旅の者たちは、とてもおどろくことになりました。あたりにつきつきと人のすがたがあら

われはじめ、そしてそれは、あつというまに、この場をうめつくしてしまつたのです！

いったいなんくらいいるのでしょうか？ あつちでざわざわ、こつちでどよどよ。男の人も女の人も、おとしよりも若い人も小さな子どもまで。さいだんの前はもうところせましと、人々の波であふれかえつてしまつていました！（そしてとうぜん、それらの人々はみんなゆうれいでした。）

おどろいているそんなロビーたちを見て、ミリエムが説明しました。

「みんな、このまちのゆうれいさんたちです。ちょうど、ミサのちゆうだつたつていったでしょう？ あのおそろしい影がふたたびやってきたものだから、みんな、あなたたちのそばまで、ようすを見にやってきていたんですよ。とうめいなままでしたから、みなさんには、見えていなかったみたいですけど。」

そうなのです、じつはあのロビーのいさましい戦いの場面のあたりから、みんなのまわりにはたくさんゆうれいさんたちが、すでに集まつていました！ そこでかれらゆうれいさんたちは、ロビーの戦いぶりを見守りながら、「がんばれー！」とか、「そこだー！」とか、あつせいえんを送つていたのです。ですけどゆうれいさんたちは、すがたと声を消しておりましたので、ロビーたちにはぜんぜん、わかりませんでした（どんな世界でもゆうれいというものは、まずはすがたと声を消しているものなのです。ロビーたちがミリエムたちにぼつたり出会つたのは、ミリエムたちがすがたを消していなかったからです。ミリエムたちもまさか生きている人に出会うなんて、思つていませんでしたから）。そのかくれていたゆるいさんたちが、さきに大聖堂へともどつて、しさいさまにことはいちぶしじゆうをつげていたというわけだったので。

「ぎゃあー！ おばけー！」フェリアルにとっては、なんともたまりません！すでに四人ものゆうれいさんたちに出会つてしまつたというのに、今や目の前は、おばけの海なのですから！ フェリアルは「うん……！」とうなつて、そのまままた、きぜつしてしまいました（ゆ

うれしいがきぜつするといふのも、おかしいものですが……。

「こまった人ですねえ、その人。」ミリエムがうでをくんで、あきれたようにいいました。

それからみんなは、この大聖堂の中でたくさんのお話をうたうことになったのです。いったいこれからどうすればよいものか？

しさいさまをはじめとするこのモーグのうれしいさんたちに話をきかないことには、はじまりません。こんなところでいつまでも、足どめをくつてしまうわけには、どうしたっていかないのです。

「しさいさま。さきほど、われらのことがきぼうであるとおっしゃいましたが、それはいったい、どういうことなのですか？」

ベルグエルムがしさいさまにたずねました。そしてしさいさまはしばらく考えこんだあと、ゆつくりとした静かない方で、こうこたえたのです。

「あなた方が、生きたからだのままここへやってきたということが、きぼうなのです。ほんらいここは、たましいをうばわれた、うれしいの者たちのまち。うれしいになってしまったら、もう、まちをはなれることすらかないません。ですが、あなたたちは生きている。生きているのなら、このまちをはなれることができます。」

旅の者たちは、おたがいに顔を見あわせました。うれしいになってしまったら、このまちから出られない？（はじめてミリエムたちに会ったときにも、ミリエムがそんなことをいっていました。）ですけど、よかった。どうやらうれしいではない自分たちになら、ここを出ることはかのうなようです。でもフェリアルは？ フェリアルはどうしたらよいのでしょうか？

「ぼくたちは出られても、フェリアルさんがいっしょじゃなきゃ。なんとか、フェリアルさんもいっしょに、まちを出ることはできないんですか？」ロビーがフェリアルのことを心配して、いいました。

「このままフェリーもうれしいのままつれていけるんなら、おぼけといっしょに旅をつづけるってことになって、おもしろいかもね。でも……、からだもいっしょにはこんでいかなきゃならないから、やつ

ば、めんどろかな。「ライアンが、長いすに寝かされているフェリアル
のからだど、そのとなりで気を失っているフェリアルはゆうれいのこ
とを見くらべながら、口をはさみます。

(ライアンの言葉には反応せずに)ロビーのといかけに、しさいさま
がこたえました。

「ざんねんですが、その方はここから出ることはできません。ゆう
れいになった者は、このまちからそとへ出たとたん、たましいがから
だからかんぜんにはなれていってしまつて、ほんとうに死んでしま
うのです。これは、かの魔女によるのろいなのです。」

「ですからわたしたちは、みんな、このまちから出られないんです
よ。」ミリエムがつづけて、口をはさみます。「ゆうれいですから、飲
み食ひする必要がないんで、その点では心配ないんですけどね。なに
せここじゃ、食べもの飲みもの、なんにもありませんから。かびやど
くきのこじゃあ、食べる気にもなりませんしねえ。」

(ミリエムのよけいなおしゃべりには反応せずに)ベルグエルムが
しさいさまにたずねました。

「その、魔女ののろいというのは、なんなのですか？ いったいこの
まちに、なにが起こつたというのですか？」

ベルグエルムの言葉に、しさいさまをはじめ、ゆうれいの人たちは
みんな静まりかえつてしまいました。みんなうつむいて、ふさぎこん
でしまつていたのです。たましいをうばわれてしまつたゆうれいの
人たちが、とじこめられてしまつたまち、モーグ。このまちにいつた
い、なにが起こつたというのでしょうか？

「それではそろそろ、はじめましょう。みなさん、したくをしてくだ
さい。」

しさいさまがとつぜん、ゆうれいの人たちにむかつていいました。
そしてしさいさまのその言葉を受けて、ゆうれいの人たちの中から二
十人ほどが、ふわふわと、さいだんのわきにあるひとつのアーチから
そとに出ていったのです。いったいなにがはじまるというのでしょ
う？ したくつて？

旅の者たちがしばらくようすをうかがつておりますと、やがてさき

ほど出ていった人たちがふたたび、さいだんのあるこの場所にはいつてきました。おかしいのはかれらがみな、さまざまな衣しようにころもがえをしているというところでした。剣を持った兵士のかっこうをしている人や、小さいさまと同じような白くて美しいころもをまとっている人。そしてなんんかの人たちには、頭からすつぽりと黒いぬのきれをかぶっていて、それで全身をおおっていたのです（ちようど目のところにあながあけてあつて、前が見えるようにしてありました）。

「いったいぜんたい、このへんてこなかつこうはなんなのでしょう？　まるでこれから、学びい会のえんげきでもはじめるといふように思っています。そして旅の者たちがあつてに取られてかれらのことを見つめていると、ミリエムがすつとさいだんの前のぶたいの場に出てきて、「こほん。」と小さくせきばらいをしてから、こんなことをいいました。「えー、それではこれから、わがロザムンディアうれいげきだん名物。ロザムンディア物語をかいえんいたしまーす。みんなー、はくしゅー！」

え？　みんながそう思ったとたん、まわりからたくさんのはくしゅがわき起こりました。

「いいぞー！」「待ってましたー！」「早くやれー！」

見ると、うれいさんたちがみんな、木の長いすにきれいなならんで腰かけて、ぱちぱちぱちぱち！　せいだいなはくしゅを送っていたのです（気がつくといエリーさいさままで、いちばん前のとくとう席にすわつて、笑顔ではくしゅを送っていました。いつのまに？）。「ときは、三十年あまり前……、これは、ロザムンディアとよばれるみなとまちに起こつた、とあるひげきの物語である……」

どこからか、だれかのナレーションの声が上がりました（これはとうめいになつたうれいさんが、ぶたいのすみで、台本を読み上げていたのです）。

「あーれー、お助けー！」「せりふとともに、ぶたいのすみからひとりこの女の人が走つてきました。

「ふっふっふ。逃げててもむだだよ。この影から逃げられる者なん

て、いないんだから。かくごおし！」こんどはべつのやくしやが、すみから出てきました。黒く長いドレスを着て、なんだかおつかない感じです。そしてそのあと。さきほど見た黒いぬのをかぶった人たちが三人。ぶたいのすみからばたばたと走ってきて、いいました。「待—て—、たまし—を、よ—こ—せ—！」

「ちよ—っと、待った—！」

とつぜんひびき渡った、耳もわれんばかりの大声！（おそらく今まで、このおごそかな大聖堂の中で、こんなに大きな声を出した者もないことでしょう。おかげでゆうれいさんたちはみんなびつくりしてしまつて、なんんかのゆうれいさんたちは思わず、てんじようまで飛び上がつていつてしまつたくらいでした。）

「いったい、その声のぬしは？」

それは、われらが仲間、ライアン・スタツカートくんだったので！（やつぱり。）

「さつきから、なにをかつてなことやつてんのさ！ ぼくたちには、時間がないんだつてば！ 早く、フェリーを助ける方法を教えてよ！」

まあ、こんかいばかりは、ライアンのいうことももつともですな……。たしかにみんなは、このまちに起こつたことを教えてもらうようをお願いしましたが、まさかこんな、えんげきのかたちで説明されるなんて、思つてもいけませんでしたもの。

「で、ですからこうして、げきを通して、みなさまにご説明しよう……」ミリエムがおたおたしながら、ライアンにいいました。

「そんなのいいから！ こんなの、ゆつくり見る場合じゃないよ！ ぼくたちは今すぐに、行動しなくちゃいけないんだから！」ライアンがつっぱねます。

「う、うむ。まことに申しわけないが、その通り。お気持ちはどうれしいが、われらには、あなた方のげきを見ている時間はないのです。」ライアンの言葉に、ベルグエルムもさすがにあとおしをしいま

た。

「えー。でも、すぐに終わるんですよ。せつかくれんしゅうしたのにー。」ミリエムがぶーぶーもんくをいいます。

「どのくらいで終わるんですか？」ロビーがミリエムたちにたずねました。

「このげきは、みじかい方のげきですから、第四まくのおしまいで、二時間半くらいかなあ。」

「長すぎだよー」ミリエムののんきな言葉に、ライアンがすっかりおかんむりになっていいました。

「えー。でも、長い方のげきは、四時間はかかるんですよ。わたしたちみんな、残らずしゅつえんするから。」

「じようだんじゃないよー」ミリエムののんきな言葉に、ライアンがすっかりおかんむりになっていいました（二回目ですが）。

そして見かねたロビーが、（ライアンを「まあまあ。」といってなだめてから）ミリエムにいったのです。

「ほんとうにぼくたちには、時間がないんです。すいませんけど。早くフェリアルさんを助けて、南のくににまでいかないと、たいへんなことになってしまふんです。」

ロビーはできるだけかんけつに、それでいて気持ちのこもったいい方でそういうと、ゆうれいさんたちのことを見渡しました。すると、はじめはげきをちゆうだんされてぶーぶーいつていたゆうれいさんたちでしたが、ロビーにそういうわれて、だんだんと、ロビーたちの気持ちもかれらに伝わっていったようでした。おたがいに顔を見あわせて、それぞれがとなりのゆうれいさんたちと、話しあっていたのです。

「わかりました。せつかちな人たちだなあ。でも、そんなにいいじな用があるのなら、しかたありませんね。じゃあ、かんけつにお話ししましょう。」しばらくして、ミリエムがロビーたちの気持ちにこたえていいました。

「では、われらをだいひょうして、テイエリーしさいさまに、お話をうかがいたいと思います。みんなー、はくしゅー！」

わーわー！ ぱちぱちぱちぱち！ ふたたび大聖堂の中に、われんばかりのせいえんとはくしゅがわき起こります。

「それでは、このロザムンディアに起こった、そのひげきの物語のことをお話しましょう。」

テイエリーしさいさまはみんなのあついせいえんにこたえてそういうと、さいだんの前のまん中に立って、静かなくちようで話しはじめました。

「ときは、三十年あまり前……、これは、ロザムンディアとよばれるみなとまちに起こった、とあるひげきの物語です……。その日、まちの通りに、ひとりの女の人が、助けをもとめて走ってまいりました。あーれー、お助けー。」

え……？ しさいさまのえんぎに、旅の者たちは口をあんどけてかたまってしまいました。

「ふっふっふ。逃げてもむだだよ。この影から逃げられる者なんて、いないんだから。かくごおし。」

「いぎありー！ いぎありー！」

またしてもちゆうだんです！（とめたのはやっぱり、ライアンでした。）

「それ、さつききいたよ！ おんなじじゃない！」

ライアンの言葉に、ベルグエルムもロビーもただだまって、うんうんと、首をたてにふるばかりでした……。

まあ、なんというか……、うれしいさんたちには時間がたつぷりありましたから、かれらはみんな、気がとくつても長いようなのです……。ですから数時間の時間でも、かれらにとっては、ものの数分みたいに感じられるようでした。それにしても、ちよつとまのぬけている感じのミリエムはともかくとして、しっかりした感じのしさいさままで……。人は見かけによらないものです（うれしいですけど）。

それはさておき。もういいかげんに、話を進めてもらわなくっちゃ！ 旅の者たちは心の底から、そう思いました！（さつきから、話がなんにも進んでいませんもの。）それでしさいさまにもようやくそれがわかってもらえたようでした、やつとのことです、「かいつまんで説明

してもらっただけ」というじょうけんのもとで、話をきくことができたのです。

ゆうれいさんたちにきいた、このまちに起こったできごと。それはつぎのようなものでした（いくつかの部分についてはすでにみなさんにお話ししたかと思いますが、もういちどおさらいとして、さいしよから説明しておきたいと思います。ライアンみたいに、「それ、きいたよ！」とはいわないでくださいね）。

今から三十年あまり前、このまちにアルミラと名のる魔女が、たくさんの手下の影たちをひきつれてやってきました。影たちはつぎつぎと、人々からたましいをうばい取っていきました。そのころ、このいせきのまちは西の街道の北の出入り口としてさかえ、まちには旅人たちやお店の人たち、べっそうをかまえてここに住んでいた人たちなど、たくさんいたのです（およそ二百人はいました）。とつぜんの魔女のしゅうげきに、人々はおそれ逃げまどいました。しかし魔女の手下の影たちは、それらの逃げまどう人たちからようしやなく、たましいをうばい取っていったのです。

たましいをうばわれた人たちは、おどろきました。自分のからだに地面にたおれていて、そしてみずからは半分とうめいなおぼけみたいになって、ふわふわとただよいながら、その自分のからだをながめていたのですから！（ちょうどフェアリアルがそうだったみたいに。もつともフェアリアルの場合は自分のからだの前にロビーたちみんなが集まっておりましたので、さいしよはそのからだが見えなかったのです。それでうしろから、かれらに声をかけました。）そしてそのあくじのちようほんにんである魔女は、まちのまん中の大聖堂の前に空からふわりとお立つと（アルミラは魔女のわざを使って、ちゆうをすいすい飛びまわることができたのです！）、大こんらんの人々の前で、いかに魔女といった口ぶりで、こんなことをいいました。

「こんなにたくさんのたましいが取れるなんて、ありがたいねえ。この半分でも、よかったんだけど。」

魔女アルミラはそれから、「ほほほ。」と上品ぶった笑い方をしてみせました（もちろんこれは、見せかけだけの上品さです）。

「いいまちが近くにあつて、ほんとうによかつたよ。おかげで、いい兵隊が作れそうだ。かんしゃしなきゃね。」

その言葉に、人々は心の底からアルミラのことをのしりました。「ふざけるな!」「なにがかんしゃだ!」「半分でいいなら、いらぬ半分をかえせ! いや、全部かえせ!」

しかしアルミラは、あざけるように笑っていました。

「だめだめ。もうたましいは、飛んでつちまったからね。今ごろはもう、あたしのけんきゆうしつまで、ついちまったころだよ。」

それから人々は、アルミラからさまざまなことをきき出しました。このアルミラという魔女は、人のたましいをうばい取り、そのたましいを使って、おそろしい軍隊を作ろうとしているのです(それはこの章のはじまりでも、みなさんにご説明しましたね。アルミラは魔法学校からぬすんだきんじられたわざのけんきゆうを、ちやくちやくと進めていたのです)。そのけんきゆうのために目をつけたのが、このロザムンディアのいせきのまちだったというわけでした。

ではなぜアルミラが、ほかの場所ではなく、このまちに目をつけたのか? といいますと……、じつはこれは、たんに魔女が住んでいるという場所からこのロザムンディアのまちが、いちばん近かつたからという、ただそれだけのりゆうだったのです! これでなぞのひとはとけたわけですが、それにしてもまちの人たちにとって、なんてめいわくなりゆうなのでしょう!(てつきりなにかとくべつなりゆうがあつて、このまちがねらわれたのだとばかり思っていました……)

(まちがおそわれたりゆうはともかくとして) 人々のいちばんのかんしんごとは、ゆうれいになつたらそのあとどうなるのか? ということでした(自分の身のことですから、とうぜんでした)。そして人々はアルミラから、そのおそろしいじじつをきかされてしまったのです。

「たましいを半分残してやっただけ、ありがたいと思いなよ。おかげでゆうれいとしてなら、これからも問題なく、生きていくことができるんだから。これは、あたしのおなさげだよ。全部もらつちや、かわいそうだからね。」

アルミラはそういって、またしても上品ぶって笑いました。そうです、たましいを半分だけ持っていくというのは、たんにアルミラの気まぐれからのことでした！ けっかとしてはその気まぐれによって、みんなはかんぜんには死なずにすんだわけですが、でも、そういうものでもありませんよね！ こんなに身がってで、はらの立つりゆうもないのですから。なにがおなさけなものですか！

「それと、ひとついっておくよ。このまちからは、そとへ出ない方がいい。ひみつをそとにもらされちゃあ、かなわないからね。このまちには、のろいのけっかいを張らせてもらったよ。ゆうれいのおまえたちがこのけっかいを越えたら、残りのたましいもみんな、飛んでつちまうからね。なに、このまちから出ないかぎり、そのまま楽しく暮らしていけるんだ。ほんとうの死人には、なりたくないだろう？」

これが、ティエリーしきさまのいっていた魔女ののろいでした（けっかいというのは、その場所全体のことをおおうバリアーのようなものです）。これはまちの人たちにとって、とてもおそろしいのろいでした。もう自分たちには、このまちでゆうれいとして生きていくのがいい、すべはないのです。これをきいて、なんんかの人たちが「じょうだんじやない！」といってじょうへきのそとへと飛び出してしまいましたでしたが、かれらは魔女の言葉の正しさを、身をもってみんなに伝えることになってしまいました。かれらは声も立てずに地面にたおれこみ、そのまま、かわいそうなきさいごとをとげたのです。

この魔女のけっかいについて、ひとつ重要なことがありました。それはこのけっかいは、ゆうれいになった者にしかききめがないということでした。ですから生きているロビーたちになら、このけっかいを越えて、まちのそとへと出ていくことができたのです（これはどうせそとには出られないからと、アルミラがべらべらしゃべって教えてくれたことのひとつです）。

そしてそれが正しいということは、ある日このまちにはいりこんでしまったひとりの旅人によって、しやうめいされました。かれはせまりくる影から逃げて、モーグのそとまで、そのまま飛び出していくことができました。ですから生きている人であれば、のろいのけっかい

のえいきょうを受けることなく、まちのそとへと出ることができると
いうことがたしかめられたのです。

ですがそとに出られても、せまりくる影からのがれることはかない
ませんでした。かれはまちのそとで影におそわれて、たましいを全
部、うばわれてしまったのです。そうです、モーグのそとでおそわれ
た者は、たましいを全部取られてしまいました！ これはひみつをそ
とにもらさないための、アルミラによるかんぜんな口ふうじでした
(そとに出た者は逃がさない。そしてまちの中にいる者はゆうれいと
してとじこめ、そとに出られないようにする。ほんとうにこのアルミ
ラという魔女は、なんてひれつで、いやらしいやつなのでしょう！
ワツトの黒騎士たちにもひけをとらない、悪者ぶりです！)。

こうしてモーグの人々は、それから三十年あまりの長きに渡り、こ
のまちでゆうれいとして暮らしつづけてきました。かれらは魔女の
ことを怒り、にくみ、うらみつづけてきました。あのかわいそうな旅
人のかたきを、そしてもどることのない仲間のかたきを、かならずや
取ってやらなければ！ かれらはいつも、そう思いつづけてきたので
す。これがこのまちに起こった、そのひげきのできごとでした。そし
て今日、かれらにまた、新しい仲間が加わってしまったのです。そう、
フェリアルでした。

「じょうへきのそとにいたがいこつの兵士たちのことを、お話しし
たでしょう？」ミリエムが、旅の者たちにいいました。それはフェリ
アルがこわがっていた、あのがいこつたちのことでした(さあ、よう
やくあのがいこつたちのなぞがわかるときが、やってきたようです)。
「あのがいこつたちは、魔女の残していった、おきみやげなんです。
あのがいこつたちは、門をくぐってまちにはいっていく者たちのこと
を感じ取って、魔女の手下の、影をよびよせるんですよ。新しくやつ
てきた者たちのことを、このまちにとじこめてしまうために。ですか
らわたしたちは、門をくぐってはいってきたあなたたちのことを、注
意したんです。」

これで、さいごのなぞもとけました。そしてモーグの門がげんじゆ

うにとぎされていたわけも。あの門をとぎしたのは、ほかでもありません。このモーグのうれしいさんたちだったのです。かれらは、ふたび門をくぐってここに新たなぎせい者がはいつてきてしまうのを、防いでいたというわけでした（でもけつきよく、ロビーたちははいつてきてしまいました……）。

ちなみに、あのがいこつたちは、むかしは門のまわりを、ずつとろろ歩きまわっていたそうです。そしてじつは、「モーグはおぼけのまち」といううわさが広まったのは、ほかでもありません。このがいこつたちのせいでした。モーグにやってきた旅人たちが、門の前でうろつくがいこつたちのことを見て「ひゃあ！ おぼけー！」といって逃げ帰ったのが、そもそものはじまりだったのです。それから三十年。さすがにがいこつたちもつかれたのでしょうか？ 今ではまじのじようへきにもたれかかって動くこともありませんでしたが、影をよびよせるそのろいの力が今でもけんざいなのは、みなさんもごしようちの通りです。それにしても、三十年もたっているのに、まだのろいの力がつづいてるなんて！ アルミラの力の大きさが、よくわかりますよね。

ところで……、モーグにはいる者のことをただ感じ取るだけなら、こんなあからさまながいこつなんかじゃなくても、なにかほかに、のろいの魔法かなにかを、門にしかけておけばいいんじゃないかと思うかもしれません、これはやっぱり、アルミラの気まぐれからのことでした。魔法のわざをしかけておくよりも、見た目におっかないがいこつたちをうろつかせておく方が、のろわれたまちっぽくていいんじゃないかという、ただそれだけの考えからのことだったのです。なんてたんじゅんなー！。

「みなさんに、見せたいものがあります。こちらへきてください。」とつぜん、テイエリーしさいさまがそういつて、みんなのことをまねきました。みんながついていくと、そこは地下へとくだるかいだんになっております。そのかいだんをおりていくと、ほそいろうかにながっていて、しばらくいくとそのろうかは、大きなとびらの前で終わっていました。

「この中です。どうぞ。」

しさいさまがとびらをあけると、そこはただっ広い石づくりの部屋でした。そしてその中を見たみんなは、そろって目をまるくして、おどろいたのです。

その部屋の床いちめん、たくさんの人たちのからだが見えきれいにならんで横たわっていました。その数はおよそ、二百人あまりはいるでしょうか？ それはちやうど、このモーグのまちでたましいをうばわれてしまったゆうれいさんたちの人数と、同じでした。そう、ここに寝かされているのは、まさに、このモーグのゆうれいさんたちの、そのものからだにほかならなかったのです。

「これが、わたしたちのからだです。」ティエリーしさいさまは、それらのまちの人たちのからだのことをしめしながらそういって、それからみんなを、あるひとりの人物のからだの前へとまねきました。そこに横たわっていたのは……、ほかでもありません。ティエリーしさいさま、ほんにんのからだだったのです。

「みなさんのこのからだは、みんなまだ生きているのです。このからだには、まだたましいが、わずかに残っているからです。たましいが残っているかぎり、人は死にません。わたしたちは、いつか、このものからだにもどれる日がくることを、ずっと待ちつづけているのです。」

ティエリーしさいさまは、かなしそうな目でそういいました（ところで、みなさんはこれとよく似た光景を、ついさいきん見たばかりですよね。そう、はぐくみの森の地下いせきの中に寝かされていた人たち。あの人たちのすがたにそっくりです！ 旅の者たちはすぐに、そのことを思い起こしました。思えばあの人たちもまた、たましいをうばわれてしまっていました。そしてこのモーグの人たちも、同じだったのです。これはなんだか、同じなぞがかくされているみたいですね？ ちよつとずるいのですが、著者のわたしはもう、そのなぞのこたえを知っています。今ここで、それをお伝えしてもよいのですが……、やっぱりそれは、これからのお話の中でお伝えしていくことにしましょう。ごめんね）。

「しさいさま。」ベルグエルムが、しさいさまにいいました。はぐくみの森の地下で自分たちがけいけんしたあのできごとのことを、ここでしさいさまに伝えておくべきだと思ったのです。

「われらはここにくる前、あなた方とよくにた者たちのことを見ました。かれらもまた、あるかいぶつによって、たましいをうばわれてしまっていたのです。ですがかれらは、助かりました。かいぶつがたおされ、かれらのたましいが、かれらのからだにもどったからです。」これをきいて、ティエリーしさいさまはすこしだけ声を大きくして、いいました（どうやら、びつくりしているみたいです。でも、表じようはそのままでした）。

「やはり、そうでしたか。そうであると思っていました。」

しさいさまはうばわれたたましいを取りもどせば、みんなはきつともとのからだにもどれるのだと、信じつづけていたのです。そしてその思いは、まちの人たちもみな、同じでした。しさいさまがいつも、みんなにそのことを話して、げんきづけてあげていたからです（いつもみんなのことを考えてくれている。ティエリーしさいさまがみんなにしたわれているわけも、わかりますよね。ただ美人だからというりゆうだけでしたわれているというわけでは、なかったのです）。

「たましいを取りかえせば、みんなはかならず助かるはず。わたしたちはそののぞみを忘れずに、このまちで暮らしてまいりました。ですが、のぞみは果たされなのまま、もう三十年です。みんなすくなくならず、あきらめかけておりました。」しさいさまは、うつむきながらいいました。

「ですが今日、ここにこうして、あなた方があらわれた。あなた方は、まさに神の使い。すくいぬしです。」しさいさまはねっしんに心をこめて、旅の者たちにいいました（それでもまだ、表じようはそのままでしたが）。

「あなた方なら、ここをぬけ出すことができる。魔女をしりぞけ、魔女のもとから、みなさんのたましいを取りもどすことができるかもしれません。お願いします。ぜひとも、みなさんのことを、すくつてあげてください。どうか、お願いします。」

さて、旅の者たちはどうするのでしょうか？

もちろん、こうまでいわれてはことわるわけにもいきませんし、もとより、フェリアルを助けてやらないわけにもいきません。しかしかれらは、かれらの旅の重要さを、じゅうぶんすぎるほどにわかっていました。ほんらいならば、そこに出られるとわかった以上、今すぐいでもこのまちを出て、南への道を急がなければならなかったのです。たとえフェリアルがぬけてしまっても。ベルグエルムやライアンが、ぬけてしまっても。

そんな中、ベルグエルムが深く考えをめぐらせながら、ゆうれいさんたちにいいました。

「われらは南の地、ベーカーランドへの道のりを急いでおります。これは、このアークランドのみらいをかけた、ひじょうに重要な旅なのです。あなたの方の中で、ベーカーランドまでの道のりに、くわしい者はおられるか？」

これに対し、名のりを上げたのはほかでもありません。ミリエムでした。

「ベーカーランドですか？ それなら、街道にそって、まっすぐいけばいいんです。わたしもむかしは、よく、その道を通っていったもんですよ。今の街道がどうなっているのか？ それはわたしにも、わかりませんが、まあ、むかしのけいけんは、今でもいきると思いますよ。」
どうやらミリエムはむかし、西の街道を通って、ベーカーランドまでいったことがよくあったようでした。ベルグエルムの頭の中には、まよいの気持ちがありました。ほんらいならばこんなところで、危険な冒険をおかすわけにはいけません。われらはロビーどのの身の安全を、いちばんに考えなければならぬのだから。

しかし、西の土地をはいしているという魔法のうわさのこともある。その地を通っていくには、もとよりその魔女と今、けつちやくをつける必要があるのではないか？ さらに、どんなこんな人が待ち受けているとも知れない西の街道をゆくのに、われらだけでは、力がおよばないかもしれない。このまま進めば、ぎやくにロビーどののことを、もつと危険な目にあわせてしまうかもしれない。よけいな時間

を、もつとついやしてしまうことになるかもしれない。それにはやはり、土地のことにくわしい者を、つれていくべきではないか？

そしてベルグエルムはさいごに、こう思いました。

フェリアル。かれの助けが、これから必要になることだろう。とくにさいごの戦いにおいて、しきかんであるかれがかけてしまつては、ワツトの力にたいこうするのはむずかしい。フェリアルをここにおいていくことは、このさきどれほどの力を、失うことになるのか？ それに……、わたしとしても、かれとはなれてしまうのは、なんともさみしい思いだ。

ベルグエルムはこのみじかい時間の中で、これだけ多くのことを考えていたのです（ライアンが、「つぎはなんのお菓子を食べようかな？」とちよつと思つたくらいのあいだにです）。まことに、このベルグエルムという騎士は、たぐいまれなる力とずのうをあわせ持った、ゆうしゆうなるしきかんでした（人の上に立つ者というのは、こうありたいものです。こんな人がしきかんだつたら、部下たちはみんな、「ベルグエルムさまー！」と心からほれこんで、ついていつてしまいますよね。さすがはベルグエルムさま！ ときおりちよつぴり、おちやめなどころも見せてくれるのですが、それはまあ、ごあいきょうということで）。

そしてついに、ベルグエルムがロビーにむかつて、その口をひらいたのです。

「ロビーどの、われらは、あなたを今すぐ、ぶじに、ベーカーランドまで送りとどけなければなりません。危険な冒険をおかすようなよゆうは、われらにはないのです。」ベルグエルムは重い表じようを浮かべながら、いいました。これはまったく、正しい言葉でした。

「ですが……」

そしてベルグエルムは、こうつづけたのです。

「旅の道すじは、ときと場合によつて、つねに変わっていくものです。この西の地は、われらの力のおよばぬ、未知の土地。どのせんたくが、さいりょうのものであるのか？ それはわたしにも、だんげんのできないことです。ですからこれは、われらがあるじたるロビーどののお

考えによつて、きめていただかなくてはなりません。ロビーどの、われらに道を、おしめしてください。」

ロビーはちよつととまどつてしまいました。すでにロビーの心は、ひとつだけでした。

ロビーはライアンの顔を見ました。ライアンはほほ笑んで、だまつてうなずいてくれました。ロビーのことをよくわかつてくれている、ライアン。そしてロビーにだまつて道をもとめてくれる、ベルグエルム。ロビーは気持ちをかためました。

「フェリアルさんを、まちのみなさんを、助けたいです。でも……、ぼくたちには、時間がない。とてもだいじな、旅のとちゆうなのだから。」

ロビーはそういつて、しさいさまの顔を見ました。やつぱり今ここで、みんなのことを助けるわけには、いかないのでしょうか……？でも、ロビーの言葉には、つづきがあつたのです。ロビーは仲間たちの方をふりかえると、静かに笑つて、こういいました。

「だから……、すぐにもどつてきましょう。このさき、魔女が見張つてる道をゆくことを考えれば、けつきよくは、同じことだと思ひます。道を切りひらくのなら、早い方がいいもの。」

やつぱりロビーは、ロビーでしたね！

「そうこなくつちや！ それでこそロビーだよ！」

「このベルグエルム、しかと、ロビーどのお守りいたします！」

ライアンもベルグエルムも、そんなロビーににっこり笑つてこたえました。そして、そのつぎのしゅんかん……。

わあああー！ ぱちぱちぱちぱち！

まわりからわき起こる、われんばかりの大かんせい！ みんながびっくりしてまわりを見渡すと、いつのまにかかれらのまわりには、たくさんのゆうれいさんたちが集まつて、はくしゅかつさいしていたのです（またすがたを消していたようですね。それにしても、とつぜん出てきておどろかすのが好きな人たちです。やつぱりこういうと

ころは、ゆうれいならではなのでしょうか?。

「やっぱり、さいしょ見たときから、ただの人たちじゃないと思ってたんだ!」

ゆうれいさんたちが口々に声を上げました。

「あの、につつき魔女のやつめに、ひとあわ吹かせてやってください!」

「やった! 人間にもどれたら、これで、大好きなお酒が飲めるぞ!」(ちよつと、もくてきがずれている人もいましたが……)

「ありがとう、みなさん。ありがとう。」しさいさまも小さい声ながらも、せいっぱいのかんしゃの気持ちをあらわしていました。

「でも、しさいさま。みんなを助けるためには、ぼくたちは、どうしたらいいんでしょう? 魔女をやっつけて、たましいを取りもどすといっても、ぼくたちには、どうしたらいいのか? わかりません。」

ロビーがもつともなしつもんをしました。そうです、もくてきがきまったのはいいのですが、まずはどうすればいいのか? それがわからないことには、どうにもできないのですから。ですからそれからすぐに、旅の者たちのこれからのぐたいな行動をきめるための、作戦かいぎがひらかれることになりました。作戦の名まえは……、その名もずばり、「魔女をやっつけてたましいを取りもどせ」大作戦! (なんてわかりやすい!)

さあ、これがさいごの話しあいです。みなさん、お集まりください。だいじようぶ、すぐにすみますから、安心していいですよ。とつてもとつても手みじかにしてもらうように、われらが仲間たちが、ゆうれいさんたちに、がっちりとくぎをさしておきましたから! (とつても気の長いゆうれいさんたちですから、うっかりしていたら、このかいぎだけで、いちにち終わってしまいそうですものね。)

「このまちを南にぬけると、そこは、だだっ広いしつちたいになつて

いるんです。」テーブルに広げられた地図の前で、ゆうれいさんたちが

旅の者たちに道をしめしました（しつちたいとはぬまや池の広がる、しめつぽくてじめじめした土地のことをいいます）。

「このしつちたいには、魔女の手下だといわれている、かえるの種族の者たち、フログルたちが住んでいるんです。かれらは、このしつちたいのぬしであり、ここではかれらに、かなう者はいません。かれらに見つからないように、くれぐれもお気をつけて……」

シープロンドのかいぎの場でもちよつとだけ名まえの出てきた、かえるの種族。それがいいよ、ごとうじょうのようです（もし出会えばの話ですが）。いったいフログルとは、どんな者たちなのでしょう？

南の地に住んでいる者たちは、かつてこの西の街道から、北の地へとむかって旅したわけですが、そのころでもこのかえるの種族の者たちのことについては、だれにもくわしくは知られていませんでした。それは旅をゆく者たちが、みな、安全な街道からはなれて歩くことをしなかったからなのです。

つまり、このかえるの種族の者たちが住んでいるしつちたいは、街道からすこし、はなれた土地に広がっていました。そのため旅をゆく者たちは、危険なしつちたいには近づこうとはせず、かえるの種族のかれらとも、ぜんぜん会うことはなかったというわけだったので（だれも会うことがありませんでしたから、みんながフログルたちのことについて、ほとんどなんにも知らなかったのも、とうぜんのことでした。また、そのころからすでによくないうわさを持たれていたかえるの種族の者たちとは、できれば出会いたくないと、みんなが思っていたのも、かれらのことがきちんと人々に伝わっていかなかった、大きなりゆうのひとつとなっていたのです。魔女の手下だとうわさされているのも、じつはこういったところが、大きくかわっているようでした。つまりまだじつさいに、かれらが魔女の手下だと、かくにんできたというわけではなかったのです。もつとも、「魔女の手下ですか？」なんてかれらにきくようなまねをする者は、だれもいませんでしたから、かくにんのしようもありませんでしたが……）。

そのしつちたいが、この三十年あまりのあいだに、まちのすぐ南が

わにまで広がってきていたというわけでした。

魔女が住んでいるという場所は、そのしつちたいの中だということでした（これは「魔女はぬまの中の巨大な塔に住んでいる」という南のくにのうわさとも、同じでした）。くわしい場所まではわからないのですが、とても大きな塔だというので、いけばたぶんわかるんじゃないか？ ということでした（うくん、なんだか大作戦というわりには、とつてもおおまかできてきとうな作戦のような気もしますが……。まあ、じつさいに魔女の塔を見たことのある者が、このゆうれいさんたちの中にはだれもいませんでしたので、しかたありませんけど。これらはほとんど、かれらが旅人たちからきいた話だったのです。

かといつて、旅人たちがこの魔女の塔のことを、じつさいに見たというわけでもありませんでしたけど。かれらはふつうの旅人たちであり、冒険者ではありませんでしたので、自分から進んで魔女の塔に近づこうとする者などは、ひとりもいませんでした。ですからかれらもまた、魔女の塔のことについては、塔のある場所のこともふくめて、うわさで大きく以上のことはなにも知らなかったのです。なんだよー、きたいはずれだなー、と思われる方もいるかもしれませんが、それはどうかごかんべん願います。かれらだって、魔女はこわかったのですから……）。

「あなたたちやわたしたちのことをおそった、あの影は、みんな、このしつちたいの中からやってきているようです。」ティエリーしさいさまがいました。「ですから、魔女のすみかだという塔も、そこにあると思います。」

「じゃあ、話は早いね。」ライアンがこたえていいました（ちなみに、ライアンは今、寶石の実のぼうつきキャンディーを三本、口にいられていました。モーグのかびだらけのまちの中では、とてもキャンディーをなめる気にはなれませんでしたので、ここでまとめてなめていたのです）。

「そこへ乗りこんでいって、『こらー！ 魔女めー！ このライアンさまが、じきじきに、たまひいをかえひてもらいにきたぞー、かくご

しろー!』って、大声でさげばいいんれしょ?」

ライアンはそういつて、にこにこした顔で、しさいさまのを見ました(これはもちろん、ライアンのじょうだんでした)。ですがしさいさまは、そんなライアンのじょうだんにぜんぜん表じようも変えずに、ライアンのことをちらりと見て、こうこたえるばかりだったのです。

「いえ、魔女の塔には、いきなり近づくべきではありません。そんなふうにさげれば、たちまち魔女に先手をうたれて、つかまってしまうことでしょう。」

「あ、えと……、じゃ、なにか、いい方法があるんでしょうか?」れいせいにへんじをかえされてしまいましたので、ライアンはちよつとひようしぬけしてしまつて、こんどはていねいないい方でたずねました(あんまりじようだんが通じない人みたい……。ライアンがそつと心の中でつぶやいたのは、いうまでもありません)。

「はい。魔女のことをよく知る人物がひとり、南の土地に住んでるはずです。あなた方は、まず、その人のところをたずねるべきでしょう。」しさいさまがこたえていいました。

「その人物とは、いったい、どういった者なのですか?」ベルグエルムがたずねます。

「名まえは、はつきりしてないんですよ。」しさいさまのかわりに、ミリエムがこたえました。「ほんとうは、カルディー……、なんとか、つて、いうらしいんですがね。ほんとうの名まえは、だれもおぼえていません。みんな、その人のことは、カルモトつてよんでるんです。」

「カルモト? へんてこな名まえらね。どこのくにの人なの?」ライアンがたずねます。

「それも、はつきりしてないんですよ。」また、ミリエムがこたえました。「うわさじや、西の大陸からやつてきたつていうんですがね。とにかく、すごい人なんです。」

なんだかこのカルモトという人物。ただ者ではないみたいです。なんでもこの人は学者だということでしたが、その力は魔女のアルミラをも、しのぐのだということでした。しつちたいからさらに南東に

くだった山のすそのにずっと住んでいて、なにかのけんきゆうにうちこんでいるということ。ですから人前にはめつたに、すがたをあらわさないそうでした（ちなみに、カルモトというよび名はかれの本名をみじかくしようりやくしたものでらしいのですが、ほんとうはどんな名まえなんでしょうか？ それは、もうすこしあとのお楽しみ）。

とにかくまずは、このカルモトという人のことをたずねて、力を貸してもらおうこと。それがいちばんはじめのことのようでした。このカルモトという人といっしよなら、魔女のアルミラをやっつけて、魔女のもとからたましいを取りもどすことができるかもしれません。

「しつちたいをさけて、山すそを進みなさい。そうすれば、いずれ、カルモトさんの住む家にたどりつくことができるでしょう。魔女にたいこうするすべや、魔女からたましいを取りもどす、そのぐたい的な方法については、カルモトさんが知っているはず。」「しさいさまがいました（うくん、なんだかやっぱり、大戦というわりには、ずいぶんとあいまいな部分が多いような気がします……。かんじんな部分については、まるつきり、カルモトさんしだいってことなのでしょう……。まあでも、どうすればよいのかは、カルモトさんに会えばわかることでしょう。とりあえず、よてい通りに話しあいがすんなり終わってくれて、よかつた！）。

「うまく、ことがはこびますように、心よりおいのりいたしております。あなた方に、神のごかごがありますように。」「さいごにしさいさまが、もういちど旅の者たちにいいました。

「それではみなさん。じゅんびができましたら、どうぞいっしよに、ついてきてください。」「

ミリエムがそういって、旅の者たちのことをみちびきました。みんなはこれから、いよいよこのまちを出て、そのカルモトというなぞの人物の住む家をめざすわけでしたが、まずはこのまちからそとに出るという、ただそれだけのことから、はじめなければなりません。それはつまり、まちの南門は北門と同じく、ゆうれいさんたちがかたく手をほどこしてとぎしておりまして、そこをあけるのはたいへ

んなことだったからなのです（またライアンが、吹っ飛ばすわけにもいきませんでしたし）。

それでみんなは、ゆうれいさんたちが教えてくれたひみつのぬけ道から、そとに出ることになりました。そのぬけ道までのあんないを、みんなは今、ミリエムたちにお願ひしたというわけだったのです（そのぬけ道はそとからのこうげきにそなえてつくられたもので、馬が通れるほどの広さがあるということでした。これは馬に乗った兵士たちが、そのままそとの敵を、ふいうちすることができるようにするためだったのです。じっさいにこのぬけ道が戦いのために使われたということはないそうですが、高くがんじょうなじょうへきといい、このまちがいかに守りのかたいまちであったのか？ よくわかりますよね）。

そのさなか。みんながゆうれいさんたちに送られて、大聖堂のことをあとにしようとしているときのことでした。ライアンがメルのからだにつけられたにもつをさいごにたしかめっていると、むこうのはしらの影で、だれかがひとり、自分のことを手まねきしているのが見えたのです。なんだろう？ と見てみると、それはティエリーしさいさまでした。なんであんなところにいるんだろ？ ライアンはふしぎに思いましたが、ここはとにかく、いつてみた方がいいようです。

「ちよつと待ってて。」ライアンはロビーにことわって、ひとり、そのはしらの影までいってみました。するとそこにティエリーしさいさまがひとりで立っていて、そしてしさいさまは、ライアンのことを前にすると、なんだかもじもじとしながら、ライアンにこんなことをいったのです。

「あの……、ライアンさんといいましたね。ひとつ、お願いがあるのですが……」

「なんででしょうか？」ライアンははいねいないい方で、そういいました（さつきいちど、しつぱいしてしまいましたから）。

それに対してしさいさまは、自分の両手の人さしゆびをおたがいにつつんとつつつきあわせながら、なんともいいにくそうに、こういったのです。

「もし、もとのからだにもどれたら、頭をなでさせてください。」
え？　なんですか、それ？　しさいさまのいがいな言葉に、ライアンはきよとーんとしてしまいました。

「あ、あの、それは、どういうことですか？」ライアンはわけがわからずに、たずねました。そしてつぎにしさいさまの口から出た言葉は、まったくもって、いがいなものだったのです。

「ライアンさん、とってもかわいいので。じつはわたし、かわいいものが大好きなんです。さっきのかいぎのときのじょうだんも、かわいかったです。」

ええーっ！　じつはしさいさまはかのじよの言葉の通り、かわいいものが大好きな、とってもメルヘンチックな女の子でした。ですけどロザムンディア大聖堂のことをとりしきるしさいさまとして、それをおもてに出すことを、ずっとがまんしていたのです。それがかわいい見た目のライアンのことを前にして、とうとう、がまんができなくなってしまうというわけでした。

まあ、気持ちはわかりますので、もとのからだにもどれたおいわいとしてなら、そのくらいはいいんじゃないでしょうか？　それでライアンも、はじめはちよつととまどっていました。そこは持ち前の明るさで気持ちを取りなおすと、しさいさまとやくそくをかわしてあげたのです。

「そーだったんだ。しょうがないよね。ぼく、かわいいもん。」ライアンはそういって、その場でくるん！　とかわいくまわってみせました（うーん、ライアンは自分で自分がかわいいと、みとめてしまっているみたいですね……。まあ、かれらしいといえば、かれらしいですけど）。

「じゃあ、とくべつですよ。からだかもどったら、頭、なでさせてあげる。」

これをきいたしさいさまの、うれしそうな顔といたら！　もうかんにんにしさいさまということは忘れてしまって、ただのひとりの、かわいいもの好きの女の子になってしまっていました（ちなみに、うれしいになったとき、しさいさまはまだ十七さいでした。うれしいは

としを取りませんでしたので、しさいさまはずっと、十七さいのままだったのです。なるほど、これなら女の子らしくふるまいたいのも、わかりますね。

「きつと、もどってきてくださいね。楽しみに待ってます。」しさいさまがいました。

それからライアンとティエリーしさいさまは、あくしゆをするしぐさをして、ひとまずのおわかれをしたのです。ライアンがしさいさまに手をふつてもどってききたときには、もうすっかり、出発のじゅんぴができていました。

「なにを話してたの？」ロビーが、もどってきたライアンにたずねました。

「うん、気をつけていつてきてね、って。うまくいくといいね。」ライアンはそういつて、(背のびをしながら)ロビーの頭をなでてあげました。

ロビーはなんだかくすぐったいといったようすで、ふしぎそうな顔をするばかりでした。

それから一行は、馬に乗って、モーグのまちの通りをばかぽこと(いや、かびが生えていましたので、ぎゅほぎゅほと)、めざすひみつのぬけ道へとむかって進んでいきました。かれらのまわりには大勢のうれしいさんたちが、足あともつけずに歩いたり、ふわふわ飛んだりしながら、ついてきていたのです(たぶん、すがたを消している人もいっぱいいたんだと思います)。

その中にひとり、みんなのよく知っている人物もまじっていました。それは、そう、うれしいになっちゃった、かわいそうなフェリアルくんでした。フェリアルは作戦かいぎのあいだ中、ずっとあわを吹いてきぜつしたままでしたが、出発するにあたり、うれしいさんたちに顔をぴしゃぴしゃとたたかれて、ようやく目をさましたのです(うれしいが目をさますというのも、おかしいのですけど)。

ちなみに、フェリアルがなかなか目をさましませんでしたので、うれしいさんたちはライアンに、「ほら、もつと強くなたいて！ 顔がく

ずれてもいいから！ 気持ちがいってないよ、気持ちが！」とめいれいされながら、しかたなくたたいていたのです。たぶんゆうれいでなかったのなら、またあのおそろしい、クルツポアのえじきになっていたことでしょう……）。

フェリアルはもう、自分がゆうれいになってしまったということ、みとめざるを得ませんでした。ですからかれは、いよいよかんねんしたという感じで、「はあ……」と深いため息をなんどもつきながら（みんなのあとをとぼとぼとついていっていたのです（そのまわりではなんんかの気さくなゆうれいさんたちが、「まあ、楽しくやろうぜ、きょうでえ！」といって、肩をくんできたりしていました））。

「あれが、まちの南門ですよ。」

やがて道のさきに、なんとも大きくて、なんともがんじようそうな門が見えてきました。そのりっぱなこと！ みんなは思わず、そろって「これはすごい！」とおどろきの声を上げてしまったものだったのです。この門にくらべたら、旅の者たちがくぐってきたあの北門などは、ほんとうに小さく思えました。門の高さはおよそ六十フィートほどもあって、はばもだいたい、そのくらいはありました（そのうえゆうれいさんたちいきいたところによりますと、そのあつきも、すごいものなのだということでした。だいたい、八フィート以上はあるということです！）。

こんなに大きな門は、みんな今までに見たことがありませんでした。ベーカーランドのお城の門だって、ここまで大きくはなかったのです（北門でさえいくら体あたりしても破れなかったというのに、この門などは体あたりなどしようものなら、からだがばらばらになってしまいそうです！ ライアンのひっさつのいちげきのわざでも、おそろくむりでしょう。こんどばかりはぶあつすぎでしたし、がんじようすぎでしたから！

もつとも、十回くらいあのわざをたたきこめば、人がひとり通れるくらいのあなを、あけることもできるかもしれません。でもそんなことをしたら、かくじつにシープロンドで大問題となるでしょうし、なによりその前に、ライアンがつかれてたおれてしまうことでしょう

けど)。

南門のとびらには北門のとびらと同じく、カピバルのわぎのペンキがぬられていて、そのためかびのような植物がぜんぜん生えていませんでした。表めんは、よくみがかれたアンティークの家具のようにぴかぴかと光っていて、まったくみすぼらしいところもありません。さらにとびらのふちには、ロザムンディアのまちのマークと同じ、船とロープをあしらった浮きぼりが、美しくほどこされていました。それはまったくもって、みごとのひとことにつきる、げいじゅつ品のような門だったのです。

ですがその門も、今となってはとびらがすっかりふさがれてしまっていて、人が通ることなどはとてもむりなじようたいになってしまっていました。それはそこから人がはいつてくるのを防ぐために、ゆうれいさんたちがみなで力をあわせて、この門をげんじゆうにとざしたからなのです。門にはいくえにもおよぶ渡し木がかけられていて、しかも門の前には、たくさんたんすやらつくえやらといった家具などが高くつみ上げられていて、道をふさいでいました。

「ね？ これじゃあとても、この門をすぐにあけるなんてこと、できないでしょう？」ミリエムが旅の者たちにむかって、とくいそうにいました(この南門は大聖堂とならんで、このまちの大きなほりでした)。「それに、この門のそとにも、がいこつの兵士たちがたくさんいるんです。ですから、ここから出るのは、やっぱりやめた方がいい。なにが起ころのかは、まだわたしたちにも、わかりませんからね。」

「それは、たしかにそうだ。」ミリエムの言葉に、ベルグエルムもこたえていいました。「あのがいこつたちが、また、影をよびよせないともかぎらない。そんな危険は、もうにどと、おかすわけにはいかなからな。」

「それはそうと、「ライアンがミリエムにいいました。「その、ひみつのぬけ道、つてのは、どこにあるの?」」

「ああ、そのぬけ道なら、」いわれて、ミリエムが思い出したようにこたえました。「もう、だいぶすぎましたよ。さつき、小さな塔のある、たてものがあったでしょう? あれは、兵士の家とよばれていて、

そとへのぬけ道は、その地下につくられているんです。」

「なんだったってー!」

旅の者たちはみんなそろって、さげんでしまいました。またしても、気の長くいゆうれいさんたちに、してやられてしまったわけです。

「ちよつと! なんでそれを、早くいわないのさ! そこにあんないしてくれてたんじゃ、なかつたの!」

ライアンが、ぶんぶん怒っていいました。

「いや、その前に、このりつばな門を、見せてあげたいな、と思つて……」ミリエムはたじたじになつていいましたが、もうすっかり、ライアンはおかんむりでした。

「そんなのいいつてば! 早く、ぬけ道まで、あんないしてよ!」

うくん、やつぱりモーグのゆうれいさんたちは、みんなどこか、のんびりしているみたいです……。すばらしい門を見せてあげたいというその気持ちは、ありがたいんですけどね……。 (こんかいばかりは、ロビーにもライアンをなだめることはできませんでした)。

それからみんなは大急ぎで (というよりゆうれいさんたちを急がせて)、ぬけ道のあるというそのたてもの前まで、もどつていきました (なにしろ広いまちですから、これだけでもずいぶんと、時間をむだにしてしまいました)。やれやれ、これでようやく、このモーグからそとに出ることができるといいたいです。ロビーがおそろしい影のおぼけたちと戦つてから、ここまで、一時間とすこしかたつていませんでしたが、なんだかみんなは、もうずいぶんと長いこと、このモーグに足どめされてしまったような気がしました (それはたぶん、気の長いゆうれいさんたちにつきあわされて、あれこれ時間をむだにしてしまつたからでしょう……)。

ミリエムが教えてくれたその兵士の家というのは、まちの小さな通りのとちゆうに、なんのかざりけもなくたつていました (小さないっぽんの塔が、ちよつとつき出ているくらいでした)。もしこの家のこ

とを知らされていなければ、ここにひみつのぬけ道がかくされているなんてことは、だれにもわかるはずもないでしょう。そのくらいその家は、ほかのたてもものにとけこむように、ごくふうにたてられていたのです（これはひみつのぬけ道のことを、かんたんには見つけられないようにするためでした。ぬけ道はここですよ、なんて、ひと目でわかるようになってたんじゃ、ひみつにしている意味がありませんものね）。

「ほんとに、ここなのー？」ライオンがとつてもうたがわしそうに、じつとりとした目つきで、ミリエムにつめよりました。「また、中にきれいな絵でもあつて、それを見せたいだけ、なんてんじゃないだろうね？」

ぐいぐいつめよつてくるライオンに、ミリエムはまたしてもたじたじになって、こたえました。

「いやっ、こんどは、ほんとうですつてば！ このまちには、こんなふうな兵士の家とよばれるたてもものが、いくつがあつて、それぞれが地下のトンネルで、つながっているんです。ここはまちのそとに通じているトンネルから、いちばん近い、入り口なんですよ。」

まあとにかく。中にはいつてみればわかることですから。それでみんなはそれぞれの騎馬たちをひいたまま、たてももの入り口のとびらから、中にはいつていつたのです。

家の中はがらんとしていて、いすひとつありません。床もかべも、あのかびのような植物にびっしりとおおわれていて、こんな場合じゃなかつたら、とても中にはいりたいとはだれも思わないことでしょう。

「なんにもないじゃん。さては、また、いいかげんなこといってんじゃないだろーね！」ライオンがまたもや、ゆうれいさんたちにつめよりました。その右手のさきには、いつでも飛ばせるように、風のうずがまき起こっております！（おそろしい！ もっともゆうれいさんたちには、風のうずのこうげきもきかないんですけど。でも、そのはくりよくだけは、じゅうぶんでした。）

「いえっ！ ぬけ道ですから、かくしてあるんですよ！ ほ、ほら、

ここに。」ミリエムはそういつてみんなの前に進み出ると、床の石だたみを手でさぐって、そこにかくされていた小さなわつかを手にしました。そのわつかを、えいとひっばると……。

「ぐん、ぐん、ぐん……。」

にぶい石のずれる音とともに、みんなの目の前の床が、どんどんとなくなっていきました！　そしてしばらくすると、それはなんとも大きな、地下へと通じるひみつのぬけ道へと、変わったのです！

「ふええ、すごいー！」みんなはびつくりして、目の前にあらわれたまっ黒なあなの中を、のぞきこみました。おくの方までゆるやかな坂がつついていて、さきのようにすはまったく見通せません。ですけど道はばはとても広く、馬が二頭、らくにならんで進めるくらいはありました。これなら馬に乗ったまま、まちのそとまでいけるといいう話も、ほんとうのようです。

「ね？　ほんとうだったでしょ？」ミリエムが、どうだといわんばかりに胸を張って、いました。これにはライアンもさすがに、「ぐぬぬぬ……！」とうなって、なにもいいかえすことができません。

そんなみんなのことをしり目に、ミリエムがなんともきんちょう感のないいい方で、いました。

「じゃ、みなさん、気をつけていつてきてくださいねー。道なりに進めば、じょうへきを越えて、まちのそとまで出られますから。いつてらっしゃーい。」

ミリエムの言葉に、ミリエムをふくむ見送りのゆうれいさんたちは、とつぜん、みんなそろって手をひらひらとふって、笑顔でみんなにおわかれをしました。

「え？　とちゆうまで、あんないしてくるんじゃないのか？」ゆうれいさんたちのとつぜんのおわかれに、ベルグエルムがびつくりしてたずねます。

「いえいえ。ぼくたちは、ここはごわくて、はいれないので。この道は、もうずっと、使われていない道なんです。この中には、むかしか

ら、おぼけが出るって、もっぱらのうわさでして……」

「なんだって!」

ゆうれいさんたちの言葉に、みんなはいっせいにさげんでしまいました。そんな話は、ぜんぜんきいていませんでしたもの!

「おぼけて! きみたちだって、おぼけじゃんか! にたようなもんでしょ!」ライアンがいましたが、ゆうれいさんたちはぶるぶるとふるえながら、こうこたえるばかりでした。

「いえいえ! ぜんぜんちがいますよ! こののは、もともとおぼけなんですから。わたしたちは、いわば、半分だけおぼけなんです。かんぜんなおぼけなんて、とてもこわくて……」

これはどうにも、なんといつていいものか……。とにかくここには(ほんもの)おぼけが出るということ、このぬけ道はまちの人たちから、とつてもこわがられている道だったようなのです(それならそうと、早くいってよ!)。

ですけど、そんなことにかまっていられる場合でもありません。とにかくここを通っていかないことには、なんにもはじまらないのですから。みんなはもうかくごをきめて、このおそろしげなぬけ道の中に、はいりこんでいくしかありませんでした(なにか出たら、そのときはそのときです!)。

「だいじょうぶ。そんなに長くはないはずですから、安心してください。うまく進めたら、まちのその山すその出口から、出られますから。いってらっしゃーい!」ゆうれいさんたちが、もういちど手をひらひらとふって、みんなを笑顔で見送りました(自分がいくんじやないものだから、まったくもってのんきなものです!)。

こうして旅の者たちは、この暗くてこわいひみつのぬけ道の中へと、ふみこんでいったのです。おっと、その前に、この人のことを忘れてはいけませんでしたね。みんなは、「ぬけ道の入り口のふちにかじりつきながら、わんわん泣いて見送っている」その人にむかって、しばしのおわかれの言葉をかけました。

「じゃあ、いつてくるからね。いい子でおるすばんしてるんだよ、フェリー。」ライアンがいました。

「かならずもどる。心配するな。」これはベルグエルムです。

「フェリアルさん、ちよつとのあいだだけ、がまんしてくださいね。」さいごにロビーがいました。

さて、うれしいのフェリアルとは、ここでしばらくのあいだおわかれです（フェリアルのファンのみなさんには、申しわけありません。しばらくのあいだだけ、がまんしてくださいね）。フェリアルは去っていくみんなのうしろすがたにむかつて、なんどもなんども、さげんでかえしました。

「ぜったい、もどってきてくださいよー！ やくそくですよー！ 早く、もどってきて！ こんなところにひとりぼっちは、ぜったい、いやー！ やだー！」

「ああ……、いつちやった……」

みんなのすがたがかんぜんに見えなくなって、かえってくるへんじもなくなってしまうと、フェリアルはがっくりと肩を落として、その場へあたりこんでしまいました。もうこれでかんぜんにおぼけのまちでおるすばん、けつていです。まさか自分が、こんなことになってしまおうとは……。

「さあさあ、げんきを出して！」そんなフェリアルの肩を、ミリエムがぼん！ とたたいてはげました。「みんな、すぐにもどってきますよ。」

ですがそんなミリエムのはげましも、フェリアルには遠く、べつの世界での言葉みたいにきこえるばかりでした。

「それはそうと……」ミリエムが急に、表じようを変えていいました。「あなたにはそのあいだに、せひ、やつてもらいたいことがあるんですよ。」

フェリアルが、え？ と思ったときには、かれはもうたくさんのおうれいさんたちに、取りかこまれてしまっていたのです。

「な、なんですか？ やつてもらいたいことって？」

フェリアルがおっかなびっくりそういうと、ゆうれいさんたちはみな、にっこり笑っていました。

「あなたたちがこわした、北の門。あなたにぜひとも、なおしてもらわなくっちゃ！ さあさあ、みなさんが帰ってくる前に、終わらせてもらいますよ！ わたしたちも手伝いますから。さあ、さっそく取りかかりますよ！」

ぐいぐいつめよってくるゆうれいさんたちに、フェリアルはもう、なすすべもありませんでした。

「そ、そんなー！」

はたしてみんなはぶじに、おそろしい魔女のことをしりぞけて、フェリアルとゆうれいさんたちのたましいを取りもどすことができるのでしようか？ かわいそうなフェリアルの、運命やいかに！（これ、前の章の終わりでもいいましたっけ？）モーグのまちではそんなみんなのことにはおかまいなしに、今日もあのかびのような植物が、げんきに、みどり色のこなをぶしゅー！ と吹き出していました。

12、カルモトさがし

今からなん十年と前のこと。このアークランドよりもずっと西の、海のむこうの大陸でのお話です。その大陸にはじつにさまざまなくにがあつて、じつにさまざまなぶんかがごつたがえしていました。住んでいる人たちもじつにさまざまでした。人間はもちろん、ありとあらゆる動物の種族の者たち。海の種族、山の種族、小人たち。動く木の種族。果ては、はつきりとしたからだを持たない、けむりのようなすがたの種族の者たちまで、じつにさまざまな種族の者たちがこの大陸には住んでいたのです（アークランドのウルファたちとはしゅるいがちがいましたが、おおかみ種族の者たちもすくなくならず住んでいました）。ですから人々はこの大陸のことを、しぜんとうよぶようになります。いろんなものがまじりあつた大陸。こんごう大陸ガランタと。

そのガランタ大陸の東の果て、みなとの大都市ポート・ベルメルからほど近いヴァナントという小さなまちに、ひとつの魔法学校がありました。その学校には大陸中から、数多くの魔法をこころざす人たちがやってきました……。つて、このへんくらいまでにしておきましょう。そう、みなさんの思つてらつしやる通り、これつて前の章のはじまりと、おんなじなんです！（ライアンみたいに、「おんなじじゃない！」つていわれた方もいるかもしれませんね。）

でもご安心を。ちゃんとわかっていますから（まちがえて前の章と同じ文を書いてしまったわけではないのです）。ここでいぜんと同じことをみなさんにお伝えしたのは、ここでしようかいするある人物が、魔女のアルミラと同じく、このヴァナントの魔法学校にいたからなんです。ですがその人はアルミラとはちがつて、とつても正しいおこないの人でしたし、しかもその人には、アルミラとはけつていちがうところが、ひとつありました。それはアルミラがこの魔法学校のせいとであつたのに対して、その人物は、せいとではなかつたというところでした。つまりこの人は、この魔法学校の先生だったので

いったいこの人物とは、どういう人物なのでしょう？　じつさいこの人のことについては、この魔法学校の先生だったころから、なぜだらけでした。まずこの人の正しい名まえを知っている人が、ぜんぜんいないというところからして、もうふしぎな人でした（校長のアルフリード・ルーマツト先生でさえ、この先生の名まえをおぼえてはいくらいいでした）。学校のけんきゆうしつのいっしつにとじこもつて、なん日もなにかのけんきゆうにのめりこんでいたかと思えば、とつぜん、「旅行にいつてきます！」といって、ふた月近くもいなくなつてしまったことさえありました（じつに自由きままな人です！）。

こんなふうでしたから、この先生はせいとたちのかつこうのうわさのまとなりました。「じつはあの先生は、悪魔の世界からやってきた、魔人なんだ」とか、「大むかしの魔法のじつけんによつて生まれた、魔法のエネルギーそのものなんだ」とか、あることないこと、さまざまなうわさが流れていったのです（「ピーマンが大きらい」といううわさも流れていたようです。ほんとかどうかはわかりませんが）。

それらのうわさも（ピーマンの話はべつとして）すべて、この先生の魔法の力が、ほかのすべての先生たちの力よりも強かったから、出てきたものでした（校長のアルフリード先生よりも、魔法の力の強さでは上でした）。ですがわたしはここで、このふう変わりな先生のこの魔法学校でのお話のことを、やめにしなければなりません。それはどういうことか？　といいますと、じつにたんじゆんなことなんです。この先生がある日きつぱりと、この魔法学校をやめてしまったからでした！

さてさていったい、どうしてしまったのでしょうか？　せいとたちや先生たちも、こぞつてこの先生のことをふたたびうわさのまるとしました。ほんとうのところは、とうのほんにんにしかわからなかったことでした。「けんきゆうのため、ほかの大陸に渡つたんだ」とか、「いやいや。悪魔の世界へ帰つたんだ」とか、さまざまなうわさが、あてもないまま飛びかっついていくばかりだったのです。

ここでひとつ、だいじなことをみなさんにお伝えしておきますと、この先生がこの魔法学校をやめたのは、魔女のアルミラがこの学校に

入学する、ちよくぜんだったということなのです。じつはほとんどいれかわりのようなかたちで、アルミラはこの学校に入学してきました。ですからアルミラがこの魔法学校にはいったときには、この先生はもう、この学校にはいなかったのです。

これはたんなる、ぐうぜんなのでしようか？　そうでないかもしれませんが。そしてこのことがどんな意味を持つのか？　ということについては、このあとの物語の中において語られることになるのです。

さて、それはさておき。いつまでも「この先生」のまんまじゃ、みなさんもじれったいことでしょう。もうそろそろ、この人物の名まえをみなさんにお伝えしておかなければなりませんね。

その魔法学校ではみんな、この先生のことをこうよんでいました。カルモト先生と。そうです、この人物こそ、旅の者たちが助けをもとめてたずねゆこうとしている、そのとうのほんにん、カルモトでした！

どこからか、ひゅうう……、というすきま風のもれるような音がひびいていました。ここはゆうれいのまちモーグの、そのまた下。まちのそとへとつながっているという、ひみつの地下トンネルの中。今このトンネルの中を、身をよせあうように、三頭の騎馬たちと三人の者たちが、おつかなびつくり進んでいるところでした。それらの者たちがだれであるのか？　とか、なんでこんなところにいるのか？　とか、そういったことはもう、説明する必要もありませんよね。

みんながこのトンネルにはいつてから、まだ三分もたっていないませんでした。道はずつとまっすぐに、南へとつづいております。地面は土がむき出しになっていて、ところどころに、ほり出されたままの大きな石がまじっていました。ですがみんながまずここにきて思ったことは、このトンネルの中が思っていたよりも、ずつときれいにたまたまれているということでした。水たまりがいくつもありましたが、いやなにおいもありませんでしたし、なによりモーグのまちの中をおおっていたあのかびのような植物も、ここにはほとんど生えていなかったのです（これはちよつといがいでした。みんなはモーグのそのまた地

下なんだから、さぞかしかびだらけなんだろうなあ、と思っておりましたから。ライアンなどはもしそんなにかびだらけだったのなら、ほのおの力をかりて、残らずやきつくしてやろうかと、ひそかに考えていたくらいだったのです。あいかわらず、かげきなことを考えているようですね……」。

「よかった。どんなにきつたないのかと、心配してたんだけど。これなら、虫とかも出ないよね。虫と違って、あり得ないもん！」

トンネルのかべをしげしげとながめながら、ライアンが安心していました（モーグにはいる前にもちよつといていたことですが、ライアンは虫が大きらいでした。ですからそとで野宿するときなどにも、かれは虫よけに人いちばい、気を使っていたのです。みんなにはないしよで、空気の虫よけバリアーを、自分だけこつそり張っているくらいでした。ずるい！）。トンネルのかべはモーグのまちの石と同じ、ばら色の石をつんでつくられていましたが、まちの中とはちがつて、そのかべはつるつるとしたかがやきを放っていて、かびのような植物もぜんぜんからみついてはいなくなつたのです。

「だが、これはすこし、みょうな気もするな。」先頭をゆくベルグエルムが、そのかべを手でふれてみながらいいました（ちなみに、ベルグエルムはフェリアル騎馬をいっしょにひきつれながら、進んできました。馬はゆうれいではありませんでしたから、ごはんも食べるし水も飲みます。すぐにもどつてくるよていでしたが、やはりなにか起こるのか？ わからない以上は、この馬もモーグのまちなかにおいていくわけにはいきませんでした。そのためちよつとたいへんでしたが、このさきの道はベルグエルムが、二頭の騎馬たちをあやつっていたことになったのです。ほんとうはロビーがその馬に乗っていただけ、いちばんいいんですけど、ロビーもまだ、ひとりで馬をあやつることなんて、できませんでしたから）。

「なぜ、かべがこんなにも、きれいにかがやいているのか？ それに、このトンネルには、水もしみ出しているし、空気にも、しめりけが多い。これなら、くらやみにも生える、かびや、こけなどが育つていても、おかしくはないのだが。」

ベルグエルムがそういって、その手のさきをみんなに見せました。そのゆびのさきには、なにかぬるぬるとした、いやな感じのものがくつついております。じつはこれが、かべがかがやいて見えているりゆうでした。このトンネルのかべいちめんをおおっているこのぬるぬるとしたゼリーみたいなものが、ランプのあかりにはんしやして、かがやいて見えていたのです（ところで、ベルグエルムってよく、いろんなものをさわってみますよね。やつぱりこれも、しらべたがりでまじめな、かれのせいかくからのことなのでしょうか？）。

「ここにはほんとうに、なにかあるのかもしれない。とにかく、早く、まちのそとに出てしまおう。」

そういって足早に進んでいくベルグエルムのことを、ライアンとロビーは騎上で身をよせあうようにしながら、あわてて追いかけてました。

「ここはなんだか、いやな感じがする。」ベルグエルムの騎馬につつきながら、不安そうにロビーがライアンにいいました。

「やつぱり、ほんもののおぼけがいるのかな？」ライアンがあたりをきよろきよろと見渡しながら、それにこたえました。

「よくわからないけど……」ロビーがつづけます。「はぐくみの森の地下で出会った、あのおたまじやくしのかいぶつみたいな、でっかくてこわいものがあるような気がするよ。」

「あんなの、にどとごめんだよ。」ライアンがふたたび、こたえていました。「でも、もし、なにか出てきたら、またロビーが、ぼくを守ってね。ぼく、かよわい、ひつじの子なんだもん。」

ライアンはそういってロビーの方をふりかえると、かわいくにこつと笑ってみせました（どちらかといえばライアンの方が、ロビーより強いような気がします……）。

しばらくみんなは、まっすぐに進むことができました。かべにはあいかかわらず、ぬるぬるとしたものがついていてかがやいていましたが、それがいにはべつに、おかしなところもあります。いくつか右や左へとつづくまっくらなわき道がありました。よけいなより道

もせず、みんなはほとんど、まちのそとへの出口をめざしてつき進んでいきました。

しばらくいくと、道のさきに今までとはちがうものがあらわれました。トンネルのてんじょうがすこしつき出ている、その部分だけまわりのかべも、ずいぶんがつしりとがんじょうそうな石で、かためられていたのです。先頭をゆくベルグエルムには、その場所がなんであるのか？　すぐにわかりました。ですからベルグエルムは、みんなのこゝとをふりかえって、こう声をかけたのです。

「ここが、じょうへきの下だ。いよいよ、まちのそとに出るぞ。」

ベルグエルムのいう通り、そこはまさしく、まちのじょうへきのそのまじりでした。あれだけぶあつくて大きなじょうへきでしたから、それをささえるためには、これだけがつしりとした石ぐみが必要というわけだったので（とりあえず、この石ぐみをしつかりとつくってくれた、むかしの人たちにかんしゃです。もしいいかげんなつくりだったのなら、石がくずれて、このトンネルもみんな、ふさがってしまっていたことでしょうから！）。

「やった！ やつと、モーグから出られる！　こんなかびだらけのこゝ、早く出たかったんだ。」ベルグエルムの言葉に、ライアンがうでのをのびして「うーん！」とのびをしながら、うれしそうにいました。

「そとに出たら、まずは、ケーキから食べるぞー！　それから、チョコと、クッキーと……」（どうやらライアンのお目あては、ずっとがまんをしていたお菓子を食することだったみたいです。やつぱりきれいな空気のところじゃないと、お菓子もおいしく食べられませんから、その気持ちもわかりますけど……）。

ちなみに、大聖堂の中にはかびは生えていませんでしたが、やつぱりそこでお菓子を食べる気になるほどには、きれいな空気ではなかったのです。ですからライアンは、せめてキャンディーだけでも、まとめてなめていました。）

ライアンがそういって、かばんの中のお菓子をかばんの上から、いとおしそうになでていたときのことでした。ロビーがなにげなくうしろをふりかえって、そこであるものを見たのです。

トンネルのうしろのくらがりの中に、ロビーはなにか、動くものを見たような気がしました。それは水めんを走る波のように、ふるふるとふるえるなにかでした。まさかいよいよ、ほんもののおぼけのごとうじょうでしょうか？

しかしそれは、おぼけという感じではなかったのです。(人のサイズのおぼけではなく)それよりももっと大きくて、なにか生きもののように動くもの……。ですが生きものにしては、おかしな動きでした。

そして、ロビーはつぎのしゅんかん。そのなぞの動くものがなんであるのか？ そのしようたいを知ることになってしまったのです。

「ベルグエルムさん！ ライアン！ 馬を走らせて！ 早く逃げて！」

ロビーはありったけの声で、ふたりにさげびました！ いわれてベルグエルムとライアンのふたりは、もうびつくりして、あわててロビーの方をふりむきます。

「どうしました！ なにか……」「どうしたの？ ロビ……」

ふたりがロビーのことをふりかえってそう声をかけた、そのときのことでした。

「な、なんだ……？ あれは……！」

ふたりは、ロビーの言葉はいつもできかくで正しいということ、ここであらためて知ることとなったのです。

「だめだ！ 逃げるしかない！ 逃げ！」

ベルグエルムのごうれいっか！ みんなを乗せた騎馬たちは、トンネルの中をいちもくさん！ そとへの出口へとむかって、大あわてでかけ出していきました。

ロビーが見たもの。ふりかえったふたりが見たもの。それはトンネルの道はばいっばいをうめつくしながら、ぶよぶよとこちらへむかってくる、いっぴき(?)のとんでもない生きものだったのです！ からだはゼリーみたいにぶよぶよで、その表めんはまるで波のよう

に、さざめいております。色はどうめで、これでは遠くから見たのではわかりません。こんなおそろしい生きものが、えさであるみんなと三頭の騎馬たちの方にめがけて、まっしぐらにむかってきていました！

これではいくらベルグエルムでもロビーの剣でも、かないませんでしたし、ライアンがこうげきしているひまありません！ できることはただひとつ、逃げること！ みんなはもうなすすべもなく、トンネルの中を逃げ急げと、逃げていくばかりでした（なんだか、こんな場面が多すぎるような気がします……）。

「こんなはずのいよー！ おぼけ、かんけないじゃーん！」ライアンがメルを大急ぎで走らせながら、泣く泣くさげびました。

そこからすこし、前のこと……。

ここはこのアークランドのどこかの、ぬま地のほと。背の高いみずべの草が生いしげる、ぬかるみの土地……。その草の葉の影から今、ふたりの人物たちがぴよこん！ と飛び出してきました。その人たちはよくみのった小麦のようなはだの色をしていて、くりくりとした目と、大きな口を持っていました。ひとりは茶色のかみの毛を長くのばしていて、もうひとりは同じ茶色のかみを、みじかくたばねております。そしてふたりとも、頭にはこがね色にかがやくつるつるとしたかぶとをかぶっていて、それらのかぶとの上にはまるい目のようなかざりがふたつ、ならべてちょこんと取りつけられていました（ですからちよつとこわそうに見えたこのふたりも、そのかざりのせいで、なんだかとてもかわいらしく見えてしまいました）。

このふたりはたぶん、兵士たちなのだと思います。それはかぶとだけでなく、ふたりのかっこうを見ればわかりました。動物のかわから作られた身動きのしやすそうなよろいを着こんでいて、手には、みじかいやりをにぎりしめていたのです（ですから、「かぶとがかわいー！」と喋っていきなり走りよっていくのは、あまりおすすめできません）。いったいこの人たちは、どこのくにの兵士たちなのでしょう？ そう思っているところで、このふたりがこんなことを話しはじ

めました。

「まちがないな。むかしと同じだ。あの塔は、まだ生きている。」
長いかみの兵士がいました。

「まさか、ほんとうだったなんて。てっきり、あの人がみんな、かたづけてくれたんだとばかり、思ってたんだけど。」みじかいかみの兵士が、それにこたえていました。

「おそらく、生き残りがいたんだ。これは、やっかいだぞ。ここもじきに、ねらわれるかもしれない。のろいはまだ、つづいているんだ。」
長いかみの兵士が、そうつぶやきます。

その言葉に、みじかいかみの兵士がぶるるっ！ とからだをふるわせてから、いいました。

「おつかないなあ。おれはもう、まぎぞいはごめんだよ。」

「あの塔に、まだ、どれだけの力が残っているのか？ それはわからない。」長いかみの兵士が、手をひたいにかざしてかなたの空をながめやりながら、つぶやきました。「いざとなったら、また、あの人がなんとかしてくれるかもしれない。でも、それまでは、おれたちの力で、この土地を守るんだ。ここは、おれたちの土地なんだからな。」

「あの人ってさあ……」みじかいかみの兵士が、思わずもらします。「強いんだけど、なんか、いいかげんな感じだからなあ。かんしゃはしてるけど、たぶん、あの人がもつとっしかり、あとしまつしてくれてたのなら、こんなことにはならなかったんだと思うよ。」

「そんなことをいっても、はじまらないよ。」長いかみの兵士が、こたえていいました。「この土地のことは、おれたちのせきにんだ。これ以上、ほかの種族の人たちに、めいわくはかけられない。さあ、いぐぞ。早くみんなに、このことをしらせないと。」

「めんどろなことになるなければいいんだけどな……」

不安げにそういうみじかいかみの兵士に、長いかみの兵士はさいごにこういって、友のことをうながしました。

「もう、めんどろなことになるよー。さあ、急げー！」

それはほんのつかのまのできごとでした。それからふたりは、ふたびびよこん！ と、もとの草むらの中へと消えていったのです。

「やったー！ そとだー！」

ライアンがいさんでメルをかけらせながら、トンネルのそとへとむかって飛び出していきました。

あれから……。

みんなはやつとの思いで、この危険なトンネルをぬけて、まちのそとへと出るその出口へとたどりつくことができたのです。もうみんな、全そくりよくでした。ゼリーみたいなあぶよぶよとしたかいぶつは、その大きなからだからはそうどうもつかないほどに、動きがはやかったのです！ ですからそとへの出口を見つけたときには、みんなはもうむちゆうになって、その出口へとむかってとっしんしていつてしまいました（そとに飛び出してからライアンがふりむきざまに、大あわてで空気の力をかりてあやつって、出口の木のとびらをしめました）。

とにもかくにも、ついにみんなはモーグのまちをぬけて、明るいおひさまの光のふりそそぐ空の下へと、たどりつくことができたのです！（とりあえず、ばんざーい！）みんなはたぶん、今まででいちばん、おひさまのありがたさを感じたことでしょう（はぐくみの森の地下いせきからそとに出られたときには、夜でしたから、みんなはおひさまのありがたさをはだで感じる事ができなかったのです。ですからよけいに、今みんなはここで、そのありがたさを感じていました）。じこくは、みつばちのこくげん。おひるちようどになる前のころでした（ですからおひさまもいちばん、げんきな時間でした）。

「どうやら、あぶよぶよは、そとには出てこないみたい。」ライアンが出口からすこしはなれたところまでひなんしてから、トンネルのとびらをしげしげとながめていいました。

「うん。それにしても、おっかなかったね。」ロビーも胸をどきどきさせながら、ライアンの言葉にこたえました。

「ところで、ベルグエルムさんは？」

ロビーがたずねると、ライアンがすこしはなれた木のところをゆびさして、こたえます。

「ベルグなら、ぼくたちのすぐ前に、出口を飛び出していったでしょ？ ほら、あそこにいるよ……、つて、あれー？ いない？」

ええっ？ ベルグエルムがいないですって？ ライアンとロビーはびっくりして、あわててあたりをきよろきよると見渡しました。

「うそー！ さっきまで、そこにいたんだよ！ いなくなるはずなんて、ないのに！」

なんでー？」

ライアンがそういつたときのことでした。トンネルの出口の木のとびらが、いきおいよく、ばーん！ とあけ放たれると、そこからフェリアルの騎馬をつれた、馬に乗ったベルグエルムが、大急ぎで飛び出してきたのです！ ええっ？ これはいつたい！

ベルグエルムは息もたえだえといった感じで、ぜいぜいいなながら、ライアンとロビーの方にやってきました。もう、からだを馬の首にもたれかけさせて、ぐったりといった感じだったので。

「し、死ぬかと思った……」やっどひとこと。ベルグエルムはふりしぼるようにそういいました。

「ちよつと、ベルグ！ いつたい、どうしたの！ さきにいつたんじゃないかったの？」

そしてそのライアンのといかけに、ベルグエルムははあはあ息を切らしながら、こんなことをいつたのです。

「ひ、ひどいぞライアン。きみが、出口は左だっていうから、わたしも左の道へいつたんだ。おかげで、たいへんな目にあつた！」

「ええっ？」ライアンもロビーもとてもびっくりして、おたがいの顔を見あわせました。

「そんなこと、ぼく、いつてないよ！ ぼくたちはずっと、ベルグの騎馬のあとを追っかけて、そのままそとへ出たんだよ！ ベルグがそとに出るところだつて、ちゃんと見たもん！」

「なんだつて！」ライアンの言葉に、こんどはベルグエルムの方がびっくりぎようてんです。どうやらおたがいに、話がずいぶんとくいちがつているみたいです。これはいつたい、どういふことなのでしよう？

「わたしはロビーどのお守りするために、かいぶつときみの馬の、あいだにいたんだぞ。そうしたら、きみが出口は左だといって、そっちにまがったので、わたしもあとを追いかけたんだ。」

「どうやらふたりの話をまとめてみますと、それぞれがおたがいに、そばをゆく騎馬のを見たようでした。そしてそれらの騎馬たちの背には、たしかにライアンやロビーやベルグエルムと思われる者たちが、乗っていたようだったのです（そしてベルグエルムは、その者の声までききました）。」

「ねえ、ライアン。ぼくはずっと、きみにひっしでしがみついていたから、よくわかんないんだけど……、前を走ってたのって、ほんとうに、ベルグエルムさんだった？」

ロビーのといかけに、ライアンは「え？」といって、ちよつと考えこみました。

「ちゃんと、フェリアルさんの騎馬も、つれていたのかな？」

ロビーの言葉に、ライアンはぎくつとなつて顔をくもらせます。

「そ、そういえば……、馬は、一頭しかいなかった……」

そしてライアンは顔を青くさせながら、ベルグエルムの方を見ました。

「わたしはずっと、二頭の騎馬とともに走っていた。」ベルグエルムがこたえます。

「まさか……、わたしたちとはべつの、騎馬に乗った者たちが、あの場にいたということか……？」

「そんなばかな！」ベルグエルムの言葉に、ライアンが大きな声でいきました。「あのトンネルには、ぼくたちしかいなかったじゃない！もしそんな、馬に乗った人たちがいたんなら、すぐにわかるよ。」

「たしかにそうだが……」ベルグエルムはそういうと、そこでなにかを思い出したかのように、顔色を変えてつづけました。「そ、そういえば、左にまがれといったきみの声も、なんだかいつもより、ひくかったような……」

「左にまがって！」ライアンがさげびます。「どう？　ぼくの声は、こんな感じだよ。ほんとうにこんなに、かわいい声だった？」

「ち、ちがうような気がする……。じゃあ、まさか……。ほんものゆうれいがいたのか！」

ここまで話しあつて、かれらはこれ以上このことを話すのは、やめにしてしまいました。だって、ほんとうのところなんてだれにもわかりませんでしたし、またあのトンネルの中にしらべにもどつて、「ほんものゆうれいさん、いますかー？」なんて、さがしてまわりたくもありませんでしたから！（それに、もしほんもののおぼけだったのだとしたら、かなりせいかくの悪いおぼけにちがいありません。ベルグエルクのことをだまして、ぶよぶよゼリーのかいぶつに食べさせようとしたから！）

というわけですから、この問題はここでおしまい！ 今はそれどころではありません。旅の者たちはこれから、ついにやってきたまちのそとのこの土地を、カルモトのことをさがして、急ぎ進んでいかなければならないのですから（ここで、著者のわたしからひとこと。読者のみなさんにはほんとうに申しわけないのですが、このなぞはほんとうに、なぞのまままで終わってしまうのです。あの馬に乗ったおぼけたちのことについて、知っている者などはどこにもいませんでしたし、わたし自身あのトンネルにふみこんでいって、しらべてまわるなんてことは、したくはありませんから！ そういったわけで……。ごめんなさい！）。

みんなはまず、今自分たちがいるところのかくにんから、はじめることになりました。トンネルの出口は山の中の木々にかこまれた小さな原っぱの、はしつこにつくられていたのです。ベルグエルクがおひさまの位置をかくにんしてから、みんなはとりあえず、モーグの南の土地を見渡すことのできるようなところまで、いつてみることにしました。

道はしばらくいって、なだらかな丘につづいていました。その丘のてっぺんまでのぼったところで、みんなは馬をとめてみます。そしてみんなのきたい通り。丘の上からはモーグの南に広がる土地のようすが、とつてもよく見えました（たぶんむかしの人たちも、敵のよう

すをよく見ることができから、この丘の近くにぬけ道の出口をつくったのでしよう。

「うわあ、すごいね。ここが、西の街道の土地なんだ。はじめて見た。」

ライアンが目をまるくして、しげしげとその景色をながめ渡しました。ライアンのいう通り、シープロンドをはじめとする北の地に住む人たちは、みんな、このすて去られた西の街道の地を、じっさいに見たことなどはなかったのです（もちろんロビーもです）。

まずみんなの目に飛びこんできたのは、たくさん岩山と、その右手につづくモーグのまちのじょうへきのすがたでした。高くりっぱなじょうへきが、右の方にずうつとさきしまで、つづいていたのです。目をまっすぐにむけると、そのずつとさきは、海へとつづいていました。はるかなむこうに、海の中の岩が突き出ているのが見て取れます（ちなみに、ライアンは四年ぶり、ロビーにとってはこれがはじめての、海を見たいけんでした。ですからふたりとも、「海だ海だ!」といって、はしゃいでしまったのです。ベルグエルムが「海水よくにきたんじゃないんだから。」といって、ようやくなだめました。ライアンをなだめるのは、ほんらい、ロビーのやくわりなんですけどね……。まあ、はじめての海でしたから、はしゃぐ気持ちもわかりますけど）。そして左の方を見ると、たくさん岩山につつまれるようなかたちで、ゆうれいさんたちが教えてくれたただっ広いしつちたいが広がっていました。

「あそこが、魔女のいるというしつちたいだな。」ベルグエルムがそのしつちたいをながめ渡しながら、いいました。「思っていたよりも、ずっと広いようだ。魔女の塔がどこにあるのか？ さがすのは、ひとくろうしそうだが……、ん？ おや？」

ベルグエルムが急に、言葉をつまらせました。なにか、あつたのでしようか？

「ねえ、あれって……、まさか……」ライアンもそれに気づいたようすで、そういいいます。

それからベルグエルムもライアンもロビーも、みんな声をそろえ

て、同じ言葉をさげびました。

「魔女の塔だ！」

ええーっ！ いきなり、魔女の塔ですかー！

みんなのいう通り、しつちたいの中のその岩山の影に、もう見るからにそれとわかる、おどろおどろしい塔がたっていました！（でこぼこで、てかてか光っていて、あちこちつぎはぎで……、こんなにしゆみの悪い塔は、どう見たって魔女の塔にきまっています！）みんなはこのいきなりのお出むかえに、しばらく言葉を失ってしまいました。ですから、「塔のまわりに水のはいった大きなおほりがつくられている」だとか、「塔にたくさんのおきなでつぱりみたいなものがついている」だとかいうそれらのことに気がついたのは、それからだいぶ、あとになってからのことだったのです（ところで、その塔は高い岩山の影にかくれるようにして、たっていました。ですからモーグのまちの方からでは、塔のすがたを見て取ることはできなかつたのです。そして丘の下の街道を通る者からも、木々や岩がじやまをして、塔を見ることができませんでした。まさにあの魔女の塔は、街道の東がわの山の中の、見通しのよいこの丘の上の場所だったからこそ、見ることができたのです。それにしても……、まさかモーグの人たちも、魔女の塔がこんなにも近くにあるだなんて、思っていなかつたことでしょうね）。

「おどろいたな……。まさか、こんなにもすぐに、もくてきの場所が見つかるとは……」ようやくのことで、ベルグエルムがまず口をひらきました。

「よかつた。これで、さがすてまがはぶけたね。「ライアンも、ロビーの手のひらに自分の手をぱちん！」とあわせて、いいました。

「あの塔についているでつぱりのようなものは、おそらく出入口だろうな。」ベルグエルムがひたいに手をかざして、目をほそめてながめながら、そっくりいいます。「モーグの人たちの話では、魔女のアルミラは空を飛ぶことができるらしいから、塔には空から、出入りしているの

だろう。しかし、そうなつてくると、こまったな。」

そしてベルグエルムは、こんどは塔の下の方に目をやって、いいました。

「あの塔は、まるで、みずうみに浮かぶ島のような。どうやって、あの塔までいけばいいのか?」

「船かなにかがあるかもよ。」ライアンが、いつものあつけらかなとしたい方でこたえます。

「もし、なかったら、そうだなあ……、まるでたかなにかに、ベルグとロビーをしぼりつけて、ぼくが風の力で、塔の下まで吹き飛ばす! ってのはどう?」ぼくは、おるすばんしてるから。」

にこにこ笑うライアンにも、もちろんふたりとも、「じょうだんじやない!」といつてことわりました。

「とにかく、」ベルグエルムがつづけけます。「今はまだ、あの塔には近づかない方がいい。われらのすべきことは、まず、カルモトどののものとをたずねることだ。」

「ええーっ。」ベルグエルムの言葉に、ライアンがぶーぶーいいました。「目の前にあるんだから、もう、いっちゃおうよ。その方が、手っ取り早くていいじゃない。」

「だめだよ、ライアン。」こんどはロビーが、ライアンをなだめてそっとういます(やつぱりライアンのことをなだめるやくめは、ロビーがぴったりですね)。「ベルグエルムさんのいう通りだ。いくら目の前にあつても、まずは、じゅんびが必要だよ。カルモトさんに会って、助けをかりてからじゃなきゃ、どんな目にあうか? わからないもの。」

ベルグエルムとロビーのふたりにいわれては、さすがにライアンも意見をひっこめるしかありませんでした(二対一ではライアンの負けです)。ですからそれからみんなどは、モーグのゆうれいさんたちの言葉にしたがつて、カルモトさがしへの道を、ふたたび進んでいくことにしたので(まだちよつとライアンは、しぶしぶしていましたが)。

「ごめんね。でも、きみをこれ以上、危険な目にあわせたくないよ。」ぐずつくライアンの気持ちさをさっして、ロビーがその声をかけました。そしてちよつとしたことのようにでしたが、ロビーのこの言葉は、

ライアンの心に大きくひびいたのです。

「うん。」ライアンはそれしかいみませんでした。ロビーの気持ちは、ライアンにはよく伝わっていました。

「さあ、いこう。」ベルグエルムがそんなふたりのことを見守りつつ、声をかけました。

道はなだらかにのびていました。ここは切り分け山脈とよばれる、アーケランドを大きくふたつに分けているゆうだいなる山の、すその。今みんなは、その山のすその西がわのふもとの地を、急ぎカラムトの住むという家をめざして、馬を進ませているのです。この場所はほんらいならば、人が通るようなところではありませんでした。それでも道の広さは馬を進ませるのにじゅうぶんすぎるほどでしたし、地面もまるで、だれかがきれいにととのえたかのように、馬を進ませやすく、たいらにならされていたのです。

木々はまるで、旅の者たちのことを「こちらへどうぞ！」と出して、出むかえてくれているかのようでした。ですからいくつかあつた分かれ道でも、みんなはまったくまようことなく、正しいと思われる方の道をえらんで進むことができたのです。これはなんともふしぎなことでした。いつもなら用心深く道をさがして進むベルグエルムでさえ、「こっちだ。」とあつさり、道をえらぶことができたのです。でもやっぱり、こんなにどんだん道がはかどるといいうのも、おかしな話です。なにか、りゆうがあるのでしょうか？

一行はそんなおかしな感じをいだきつつも、この山すその道をぐんぐん進んでいきました。道はあいかわらずなだらかに、変わりばえなくつつづいております。右手にはずうっと、ただっ広いしつちたいがつづいていました（もう魔女の塔からは、けっこうきています）。左手にはたくさんのおかしな木々。そしてその上には、そのはるかないただきを雲の中にいだいた切り分け山脈のゆうしが、りとそびえていました（ちなみに、このあたりは街道のほんすじからはだいぶはなれているより道の道で、ベーカーランドへむかうための道からも、魔女のしはいしているはずの土地からも、はなれているところでした。ですからみんな

なは、今はとりあえずですが、魔女のしはいの危険からはのがれて、それいがいの危険にのみ注意して道を進んでいたのです。

「これが、切り分け山脈……！ おっきいなあ。」

ロビーが山のいただきを見上げながら、思わずそうもらしました。ロビーは切り分け山脈のことを本で読んだことがありましたので、ものすごく大きくて高い山だということを知っていました。ですけど本のさし絵で見ただけでは、そのほんとうのすごさはわかりません。やっぱりこういうものは、じっさいに自分の目で見てみなくちゃ！

ロビーはそれを今、心の底から感じていました（ちなみに、切り分け山脈の名まえはロビーのほらあなでベルグエルムが語った話の中に、ひとことだけ出てきましたが、みなさんおぼえてますでしょうか？

ほんとうに、ほんのひとことだけでしたけど）。

「まあ、タドウーリ連山にくらべたら、上品さにかけるけどね。でも、なかなかの山だと思うよ。」

負けずぎらいのライアンが強がっていいいましたが、やっぱりこの山のすごさはたいしたものでした。このアークランドを南北にずつつらぬいていて、そのいただきは、えんえんとつづく切り立ったがけです（そのさまはまるで、りゅうの背びれのようにも見えました。ですから山脈の東のふもとのくに、リムルのあたりでは、この山のことには「りゅうの背」山とよばれていたのです）。ですからこの山を越えてはんたいがわにいくなんてことは、まったくもって、ふかのうなことでした（みなさんの住む世界みたいに、ひこうきや気きゆうがあるわけじゃないですから。それに魔女のアルミラやあのデイルバグのかいぶつだつて、ここを飛び越えてゆくのはむりでしょう。さすがに、高すぎですから！）。この山脈は文字通り、このアークランドをぼつさりど、ふたつに切り分けていたのです（ですから、ついた名まえが切り分け山脈。わかりやすいですね）。

「この山にはむかしから、さまざまない伝えがある。」ベルグエルムが騎馬をあやつりながら、いいました。「この山のいただきには、三人のけんじやたちが住んでいて、それぞれがことなる世界の力をしはいしているといわれている。その三つの力が、この山の力のバランス

をたもっているのだということだ。」

けんじやというのはいかしの人のことをさす言葉で、どんなところでもけんじやというものは、人々からあいされ、そんけいされているものなのです（ちなみに、ちよつとわかりにくいのですが、けんじやとまじゆつしとはちがいます。たいていのけんじやは魔法も使えるので、どちらがうのか？　といわれると、説明にこまるのですが……。まあ、ちしきをたくさん身につけることをいちばんに考えるのがけんじや。魔法のわざをみかくことをいちばんに考えるのがまじゆつし。と思ってもらえたらいいんじゃないかと思います。たぶん）。

「シープロンドの方じゃ、この切り分け山脈のてっぺんには、なん千年もむかしから、おそろしい黒いりゆうが眠ってる、っていわれてるよ。」ライアンがつづけていいました。「だから、この山のいただきには、だれも近づいちゃいけないだつて。でも、だいじょうぶみたい。こんなに、けわしい山なんだもん。のぼりたくたつて、のぼれないよね。」

「りゆう、か……」ロビーが思わずつぶやきます。「ほんものを見てみたい気もするけど、やつぱりりゆうは、本の中だけでいいや。おおかみのまるやきには、なりたくないもの。」

みなさんは、りゆうというものをよくごぞんじかと思えます。おとぎの世界の物語には、たいていとうじょうしますものね（さきほどもちよつと、山の名まえのことで、りゆうの名まえが出てきたばかりでしたが）。とつてもでつかくて、長い首と大きな羽、大きな口を持っている、おそろしいとかげみたいなあのかいぶつです（りゆうにくらべたら、デイルバグのかいぶつだつて、まるつきりかわいいものなのです）。そのりゆうのおそろしいイメージは、このアークランドでもやつぱり、おんなじでした。そしてりゆうのそのいちばんのとくちょうは？　といえば、やはりその口から吹き出される、ほのおの息なのです。ロビーはそのりゆうのことを本で読んで、よく知っていたというわけでした（その本のだいいいは、そのものずばり、「りゆう」というものでした。そしてこの本をはじめ、ロビーが今までに読んだ本は、すべて、かなしみの森のはずれにある、森のとしよかんでかりた

ものだったのです。このとしよかんは森に住んでいる者であれば、だれでもただで、本をかりることができました。ですからロビーは、そこでかりたくさんの本を読んで、いろいろなことを学んだのです。ちなみに、このとしよかんをかんりしているのは、りすの種族のしよさんで、リンクル・ルードピースといいました。この人はあなぐまのスネイル・ミンドマンと同じく、おおかみであるロビーにせつしたことのある、数すくない森の住人だったのです。やっぱりリンクルさんの方は、だいぶこわがっていたようでしたが……。

「ひつじのまるやきだつて、いやだよ。」ロビーの言葉に、ライアンもじようだんをいつてかえしました。「ぼくも、りゆうよりは、けんじやの方がいいや。けんじやだったら、まだ、話しが通じるからね。りゆうに『こんにちは！』つてあいさつしても、火の息のへんじがかえつてくるだけだもん。」

ライアンとロビーのふたりは、そういつて笑いあいました。「ところでさあ、」さいごに、ライアンがいました。「その、カルモトつて人だけど、ひよつとしたら、この山に住んでるつていう、いい伝えのけんじやだったりしてね。」

ライアンのじようだんに、ロビーも「まさかあ。」といつて笑いしましたが、著者であるわたしは笑うどころか、心の中でぎくつ！ としてしまったのです。ということは、やっぱり？ 読者のみなさんのそのしつもんには、ここではまだおこたえしないことにしておいて……、と、とにかく！ お話のつづきをどうぞ！（ライアンめ、よけいなことを！）

切り分け山脈のふもとに、いちじんの風が吹き渡りました。空はとつてもおだやかでした。旅の者たちはいつしか、山のすその道からすこし中にはいつた、おく深い山の中を進むようになっていました。木々の数がだいぶふえてきております。このあたりの木々は表めんがつるつるしていて、えだの数もまばら。葉っぱもほとんどついでいません（みなさんの世界の、しらかばの木によくにています）。大きな鳥がぎやーぎやーという大きなき声を上げて、飛んでいきまし

た。ですからみんなは、いつしゅんデイルバグかと思って、きもをひやしたのです。

あたりはどんどんと、さみしい感じの場所が変わっていききました。ですけど道はあいかわらず、なだらかにずうつとつづいていて、なんの問題もないように思えます。そしてあたりに立ちならんだつるつるとした木々も、ここにくるまでのほかの木々と同じように、「どうぞこちらの道へ!」と、一行のことを、そのえだをのぼしてみちびいているかのようでした。

「ここはどうも、気にいらぬ。」先頭をゆくベルグエルムが、とつぜんそう口をひらきました。

「まるで、たくさんの者たちに、見張られているような気がしてならない。しかし……」

ベルグエルムはそういつて、あたりのすみずみまでを注意深くさぐってみました。木々のえだのあいだから、しげみの中。地面の上から、空の雲の中まで、くまなくです。ですがやっぱり、なんにもおかしなところはありませんでした。

「やはり、思いすごしだろうか……?」

みなさんもすでにごぞんじの通り、ベルグエルムは野山をゆくことにかんして、だれにも負けないほどのすぐれたさいのうを持っていました(その力に、みんなは今までになんども助けられていますよね)。そのベルグエルムが目を皿のようにしてすみずみまで注意をはらっても、なにも見つけられなかったのです。ですからふつうに考えれば、やっぱりなにもないのでしょう。ただの思いすごしのはずです。ですけどこんかいのこの旅は、そんなふつうのことが通らない、とてもやつかいな旅でした。とくにこのアーケランドは、みなさんの世界とはちがう、おとぎのくに。ただでさえふつうが通らない、とくべつな場所なのですから。

ベルグエルムがふたたび、馬を急がせはじめたときのことでした。急にあたりが、ざわざわとざわめきはじめたのです。はじめは風が吹いて、木々のえだがゆれているのだろうとみんなは思いました。しかしそのとき、風は吹いていなかったのです!

「なにかくる！ 気をつけろ！」

ベルグエルムがそのことにまっさきに気がついて、うしろのライオンにむかってさげびました！ しかしベルグエルムがそうさげんだときには、すでにもうおそかったのです。

「だめだね。もう、おそいみたい。」

ライオンがそういって、手を上げて、こうさんのしぐさを取ってみせました。ロビーにも、その意味がすぐにわかりました。つまり、とてもたちうちできないほどの相手が、自分たちのその前にあらわれたということだったのです！

今やみんなは、どれだけいるのか？ 数えきれないほどたくさんの方に乗った兵士たちに、かこまれてしまっていました！ いったいどこからこんなに！ どうやって！ しかしそんなことをいつているよゆうも、みんなにはありませんでした。その兵士たちはあきらかに、旅の者たちのことを敵だと思っっているらしく、なん十という弓矢をみんなにむけていたのです！（これでライオンがすぐにこうさんしたりゆうが、おわかりでしょう。いくらライオンでも、これだけの弓矢をむけられていたのでは、とてもたちうちできませんでしたもの。

ちなみに、ここは魔女の土地からはなれたより道の道でしたので、この兵士たちが魔女アルミラの手下たちなのではないということ、旅の者たちにもわかっていました。そのたしかなしようこそ、ベルグエルムはまっさきに見つけましたが、それはこのあと二ページほどあとでおしらせします。）

ベルグエルムもロビーもライオンも、より集まって、兵士たちにかこまれたその小さな土地のまん中にちぢこまりました。手出しはどうしたって、するべきではありません。こんなときにするべきことは、ただひとつ。話しあうこと！ それいがいに、このじようきようから助かるすべはないのです（ただし、話しあいが通じればの話ですが……）。

「待たれよ！ 待たれよ！」ベルグエルムが大声で、かれらによびかけました。

「あなたたちは、ごかいをしておられる！ われらは、あなたたちの

敵ではない！ ただの旅の者だ！ 弓をおろされよ！」

「そうだよー！」ライアンも負けじといいました。「ただの、まいごのおおかみとひつじだよ！ こんなにかわいいぼくに、弓矢をむけるなんて、ひどいじゃない！ もっとよく見てよー！」

(ライアンの言葉はともかくとして……) ベルグエルムのいいぶんはもつともでした。かれらにはとつぜん、こんなふうに弓矢をむけられるりゆうは、ないはずです(たぶん)。

ベルグエルムとライアンが話しかけてから、しばらくたって。ようやくのことで、兵士たちのうちのひとりが口をひらきました。

「あのお方に、おしらせねば。われらはあのお方に、おしらせする。おまえたちは、あのお方のところに、つれていかねば。われらはおまえたちを、あのお方のところに、つれていく。」

するとほかの兵士たちも、みんなそろっておんなじことをいいました。

「そうだ。あのお方のところに、つれていかねば。われらはあのお方のところに、おまえたちをつれていく。そうだ。」

兵士たちはざわざわとゆれ動きながら、ずっと同じ言葉をくりかえしてあります。これはいったい、どういうことなのでしょう？

「なんなのいったい？ なんかおかしいよ、この人たち。」

ライアンが、首をかしげていいました。ライアンのいう通り、この兵士たちはなんだかとっても、おかしい感じだったので。みんな木で作られた全身をおおうよろいを着こんでいて、首まですっぽり、同じ木でできたかぶとをかぶっております(このかぶとは目のところにはわずかなすきまが空いているばかりで、中はぜんぜん見えなかったのです)。草をあんで作った服を着ていて、草のくつをはき、木のたてや、剣や、やりを持っている者もいました(剣や、やりのさきっぽにかんしては、木ではなくて、ちゃんと鉄でできたふつうのものでした)。そしてかれらの乗っている馬が、いちばんふしぎでした。その馬たちはどう見ても、木をけずって作った、木の馬たちだったので！(いぜんセイレン大橋の下のカピバラ老人の小屋で見たのは、鉄の馬でしたよね。あんなふうにこんどは木の馬たちが、ほんものの馬の

ようにしつぽをふったり、ひづめをばかばかならしたりしていたので
す！ いったいこんどは、どんなしくみになっているのでしようか
？)

「しっ！ だめだよ。怒らせちゃまずいよ。」ロビーがライアンにい
いました。ロビーのいう通り、兵士たちはあいかわらず旅の者たちに
弓矢をむけたまま、おろそうとしないのです。

「ロビーどののいう通り、どうやらここは、だまっていたがうほかな
さそうです。」ベルグエルムが、ロビーとライアンのふたりにいいいま
した。「わたしのけいけんから見ると、かれらはだれかに、やとわれてい
る者たちのようだ。魔法であやつられているのかもしれない。しか
し、じゃあくな者たちではない。」

「悪者じゃないって、なんでいえるのさ。」ライアンが、目の前につ
きつけられた弓矢を「ひええ……！」とよけながら、そういいいます。

「もうちょっとで、ぼくの顔にきずができちゃうところだったよ！

あとが残ったら、どうしてくれるの！ かわいい顔が、だいなし！」
「かれらのかぶとのもんしようだ。」ベルグエルムが兵士たちのか
ぶっているかぶとを見るようにうながしながら、つづけました。ベル
グエルムのいう通り、そこには白い木をあしらった、なんともしんぴ
的なもんしようがえがかれていたのです。

「あのもんしようは、植物をつかさどる、白の魔法のもんしようだ。
西の大陸では、広く伝わっているが、あのしるしは、悪い者が使うし
るしではない。」（これが、さきほどお伝えしました、この兵士たちが
万がいちにも魔女アルミラの手下たちなのではないのだという、しよ
うこでした。ベルグエルムはこのもんしようのことで見て、すぐにそ
れに気がついたというわけだったので。もっとも、魔女の手下では
ないとはいえ、危険な相手であることにはちがいないでしょうけど。）
「西の大陸のもんしよう、って、それじゃ、まさか……！」ベルグエ
ルムの言葉に、ライアンがおぼけのミリエムのいつていた言葉を思い
出しながら、いいました。たしか、めぎすカルモトという人は、西の
大陸からやってきたということでした。

「そのかのうせい、大いにあるな。」ベルグエルムが、それにこた

えてつづけました。「とにかくこれは、ただのごかいなのだ。それほどにけいかいする必要が、この地にはあるのかもしれない。ここは、かれらにしたがおう。カルモトどののところに、つれていってくれるかも。」

「どつちみち、それいがいに道はないでしょ。」

さいごにライアンが、せまりくる弓矢をぐいぐいとおしかえしながら、なかばやけになっていいました。

そこから旅の者たちは、その前後左右を木の馬に乗った木のよろいを着こんだ兵士たちにかこまれながら、つづくきゆうくつな道のりの中を進んでいくこととなったのです。これはまったく、思いもかけないことでしたが、どうにもしかたがありませんでした。兵士たちは旅の者たちのことをなわでしばったりするようなことはしませんでしたが、そのかわり、弓矢からこんどは剣をぬいて、旅の者たちにつねにつきつけながら進んでいたのです(ですから、「すきをつけて火の力でみんな黒こげにしてやろうか?」というライアンの考えも、かれらには通じませんでした。かれらにはぜんぜん、すきがなかったのです。すこしでもおかしな動きを見せたら、こんどこそくしぎしにされてしまいかねませんでした)。

「ぬけ目のないれんちゆうだ。」

ベルグエルムが、敵ながらあっぱれといった感じで、かれらのことをいいました。

「ほりよをつれていくことに、なれている者の動きだな。かれらのしぐさや、剣の持ち方を見れば、かれらがかなりのくんれんをつんだ、ゆうしゆうな兵士たちであるということがわかる。」

ベルグエルムのいう通り、兵士たちにはじつにまとまりがあつて、かれらはれつをみだすことなく、ずんずんと道を進んでいくのです。ですがかれらの顔はいぜんとして、かぶどのおくにかくれたままで、かれらがいったいなに者なのか? ということについては、まったくもってなぞのまま変わりませんでした。

それにかれらは旅の者たちのことをつれて出発してからというも

の、ただのひとことも、口をひらきませんでした。なんだかライアンが、「ねえ、」とか、「あのさ、」とか、かれらに声をかけましたが、兵士たちはまったくだまっただままで、あいかわらず剣のさきだけを、旅の者たちにむけているばかりだったのです。

「強いのかなんのか？ 知らないけどさー！」とうとうライアンが、しびれをきらしていいました。ライアンはこんなふうにもりやりつられていかれることよりも、自分が話しかけているのに相手にしてもらえないことの方が、はるかに気に入らなかつたのです（だってこんなことって、今までいちどだつてなかつたことでしたから。なにしろかれは、シープロンの王子さまなんですから。王子さまに口をきかないなんて、そんな人、ひとりもいませんでしたもの）。「口くらい、きいてよね！ へんじもしないなんて、そんなのあり？ うでは立つけど、頭はさつぱり！ だつたりして！」

「ライアン、口がすぎるぞ。よけいなことをいうんじゃない。ベルグエルムに怒られて、ライアンはほほをぶくーつとふくらませて、むくれてしまいました。もちろんライアンだつて、こんなことをいったら相手に失礼だということくらいは、じゅうぶんしようちしていました。ですけど、ライアンの気持ちもわかりますよね。いくら悪者ではないとはいえ、こんなふうに剣をむけられたままきゆうくつにつれていかれたうえ、相手にもしてもらえないなんて、やつぱりいい気持ちはしませんもの。

「しばらくは、がまんしよう。みんなを助けるためだよ。」ロビーがそういって、（また）ライアンのことをなだめました。

「わかったよ。」ライアンはしぶしぶといった感じで、それにこたえます。

「でも、もし、ほんとうにカルモトつて人の兵士だったのなら、このつぐないは、きつとしてもらうからね！」

ライアンはそれから、おとなしくだまっていました。ロビーにはライアンが今、頭の中でいろんなつぐないのさせ方を考えているところなのだということが、わかりました。

きつと、こわいことを考えているんだろうな……。

やがて、道がゆるやかなくだりになりました。あたりには前よりも
いっそう、あのとつるつるとした木々がしげっております(というより、
ほとんどその木しか生えていませんでした)。そして一行が、なだら
かなそのまがりかどを、左にまがつたときのこと。急にあたりのしか
いがひらけて、旅の者たちはそこで、なんともおどろきの光景をまの
あたりにしました。

「うっわー！ なにこれー！」ライオンが思わずさげびました。ベ
ルグエルムもロビーも、同じく目を見ひらいて、目の前の光景に見
いってしまいます。

そこには、なんとも信じられないほどに巨大ないっぽんの木が、で
でーん！ とそびえ立っていました！

いったい、どのくらいの高さがあるのでしょうか。天をつくとは、
まさにこのことです！ 旅の者たちはみんなこぞつて、首を空にむけ
ました(モーグの大聖堂でもみんなは空を見上げましたが、この木は
それよりもさらに、上までのびていました！)。はるかな上にえだが
たくさんつき出ている、そこにはまるでこのかさみたいに、みど
り色の葉っぱがあつくしげっていました。はんたいに木の下の方に
は、えだがぜんぜんありません。木の表めんはあちこちふしくれ立っ
ていて、この木がとんでもないほどのとしを取っているのだというこ
とが、わかりました。

その木をまん中にして、まわりには深いおほりがつくられていまし
た。そのおほりには水がはいっていませんでしたが、まわりはしっか
りとした木のさくでかこわれていました。かこいはひとつの場所だ
けがとぎれていて、そこには大きな木のはね橋がいつぽん、用意され
ております。そしてそのはね橋のところには、旅の者たちをつれてい
るこの木の兵士たちと同じかつこうをしたほかの兵士たちが、なんん
か見張りに立っていました。

旅の者たちがとうちやくすると、まわりをかこんでいる兵士たちの

うちからひとりの兵士が、そのはね橋の方へとむかっていきました。それがいの兵士たちは、きりつ正しくびしっ！ とれつをそろえたまま、旅の者たちのまわりにじん取っていたのです。そして進んでいったそのひとりの兵士が、はね橋のところにいるほかの兵士たちに敬礼をすると、はね橋のそばにたてられていたいつけんの小さな小屋のところから、ちりりん！ というベルの音がなりひびきました。

しばらくのあいだ、ベルの音がなっていました。ベルの音がやんでからは、さつぱりなにごとも起こりませんでした。まわりをかこんでいる兵士たちは、あいかわらず旅の者たちに剣をつきつけたまま、ぴくりとも動きませんでしたし、はね橋のところにいる兵士たちも、気をつけのしせいを取ったまま、それからぱったりと動かなくなっていました。そのうえ兵士たちの乗っている木の馬も、まったくおきものの馬のように、動かなくなっていました。

それから、五分くらいがたつたでしょう？ 旅の者たちはわけもわからずにこんなふうに待たされて、だんだんがまんができなくなってきました（とくにライアンは、さつきからずっと、いらいらしっぱなしでした）。

十分がたつと、さすがにみんな、どうしたことかと思いはじめました。気の長いモーグのゆうれいさんたちじゃあるまいし、こんなに意味もなく待たされつづけてしまったのは、たまったものではありません。それで二十分がたつたころ。とうとうライアンがたまらなくなつて、そのいらいらをばくはつさせてしまいました！（やつぱりかれには、だまって待っていることなんてできませんでしたね。）

「いいかげんにしろー！ いつまで、こうやってるのさー！」

ライアンは両手いっぱいなたつまきのうずを作り出しながら、その手を兵士たちにむけてしまいました！ すると今までまったく旅の者たちにむかんしんといった感じだった兵士たちが、いつせいに、手にしたその剣をかまえてみんなの方へとむかってきたのです！ これはまずい！ なにしろ相手は、なん十人という、騎乗の兵士たちなのですから！

やつぱりここは、おとなしく待つべきでした……！ ですが、もう

おそい！ 兵士たちは今にも、旅の者たちのことをその剣でくしぎしにしてしまいそうなんふんいきです！ ベルグエルムは、やってしまった……！ といった感じで、自分も剣をぬき放ちました。こうなったらもう、話しあうことなどはできません。戦って、なんとかこの場をきりぬけないと！

ライアンは自分のかるはずみなおこないのことを、心からこうかいしました。みんなのことを、危険にさらしてしまったのです。ですけど、かれをせめることはだれにもできませんでした（ロビーだってベルグエルムだって、がまんができなくなっていたことにちがいはありませんでしたから）。ロビーも剣をぬいて、小さなからだのライアンのことをかばいました。いよいよ戦いがはじまるのです。しかしライアンがそのしぜんの方のわざをくり出そうとする前に、敵はもう、かれらのもとへとつつこんできていました。ここから助かる見こみは、まったくもって、うすいものでした。

そのとき！

「うるさいぞ！ なにをやっているー！」

おほりのむこうのその巨大な木の方から、男の人の声がきこえてきたのです！

まさに、天の助け！ みんなはいっせいに、声のした方にむきなおりました。すると、そびえ立つ木のねもとのところ。そこに小さなかいだんがあつて、今そのかいだんを、ひとりの男の人がおりてくるどころだったのです！

「だれでもいいから、助けてー！」ライアンが、空気のバリアーでせまりくる剣をひっしでおしかえしながら、もう、すがる気持ちでさけびました（こんなにいいっぱいはいっぱいのじょうたいからでは、とてもよゆうがありませんでしたので、ライアンもさすがに、とくいの強力なこうげきのわざをくり出すことなんてできませんでした。敵のこうげきをなんとかおしかえすことだけで、せいっぱいだったのです。そしてふだんは強がつておりましたが、こんなときにはライアン

もやっぱり、まだまだほんらいのねんれいにふさわしい、男の子でした。

「お願いです！ この人たちを、とめて！」ロビーも、手にした剣で相手の剣をせいっぱいにはらいのけながら、ライアンにつづけてさげびました。

しかし、そんなみんなのひっしのさげびにも、その人はまるでなんでもないことだというように、顔色ひとつ変えないのです。ゆっくりとした足取りで、木でできたかいだんを、こつんこつんとおりてきました。

「おまえたち、ずいぶん多いな。こんなに、いたっけか？」

その人は旅の者たちのことを取りかこんでいる兵士たちのことを見て、そんな変なことをいいました。どうやらこの兵士たちは、この男の人につかえているようですが、ずいぶん多いとは、どういうことなのでしょう？

「われらは、あなたたちとあらそう気などない！ どうか、兵を下げてほしい！」ベルグエルムが、兵士たちのあるじと思われるその男の人にたのみこみました。すると男の人は、あいかわらずなんでもないことだというような顔をしたままで、ゆびをかるく、ぱちんとならしたのです。

するとどうでしょう！ みんなのことを取りかこんでいる兵士たちが、くるり！ むきを変えて、もときた道の方へ、ぎっぎっ！ きそく正しくこうしんしていきました！

「た、助かった……」

ライアンはもう全身の力がぬけてしまつて、ロビーのからだにぐつたりとへたりこんでしまいました。ベルグエルムもロビーも心の底からほつとして、剣を持つ手をそのままぶらりと、下にたらしめています。なにがなんだか？ まだわけがわからないことばかりでしたが、とにかくみんなは、助かったのです！

旅の者たちはしばらくのあいだ、もう動くこともできませんでした。しんぞうはまだ、ばくばくなくなったままです。いやなあせがぽろぽ

る吹き出してきて、地面にぽたぽた、たれました（もうだめかと思つたときには、だれでもこんなふうになってしまうものなのです）。

しばらくして、かいだんをおりてきた男の人が、旅の者たちとおほりをはさんでむかいあうところまでやってきました。それでは、さあ、説明してもらわないと！ いったいどうして、みんなのことを、こんな目にあわせたのか！

その人はむつつりとした顔のまま、立ちつくしていました。こちらの方をじつとながめたまま、動きません。旅の者たちはかたずを飲んで、その人が口をひらくのを待ちました。そしてついに。その人が口をひらいてこういったのです。

「うむ。やはり、今夜のディナーは、きのこのスパゲッティにきめた！」

そ、そんなことはどうでもいいですから……。

「あなたは、カルモトどのか？」ベルグエルムがさきに、その人に声をかけました（こちらから話をふらないと、さきに進めそうな感じではありませんでしたから）。

「カル……、なんだって？」その人がききかえます。この人が、さがしていたそのカルモトなのではないのでしょうか？

「カルモトどのです。われらはモーグのまちより、あなたをたずねるようにつかわされた者です。あなたの助けが、ぜひともほしいのです。」

ベルグエルムが、この人がカルモトなのにちがいないと思ってそういいました。しかしその人は、またしても、とんちんかんなことをいうばかりだったのです。

「モーガー？ モーグ？ なんだそれは？ ハンバーグみたいなものか？」

はたしてほんとうに、この人がカルモトなのでしょうか……？ 旅の者たちはなんだかとも、不安になってきました。ここまできてぜんぜんかんけいのない人だったのなら、がっかりもいいところですよ。

「モーグ。ロザムンディアのまちの、べつの名まえです。今では魔

女ののろいを受けて、すっかり、はいきよのまちになってしまったのです。」

ベルグエルムの言葉に、その人はこんどは手をぼん！ とたたいて、思い出したようにいいました。

「おお、そうか。ロザムンディアなら知っている。むかし、わたしがこの手で、すくってやったまちだ。今ではすっかり、もとの通りにさかえていることだろうな。みんな、げんきでやっとなるか？」

どうやらこの人って、あんまり人の話をきいていないみたいですが……。今、魔女にのろわれて、はいきよのまちになってしまったと、いったばかりですのに！ ですからそれからもういちど、ベルグエルムがていねいに(そしてこんきよく)説明して、ようやくロザムンディアのまちの今のようすのことなどについて、りかいしてもらうことができました(モーグのゆうれいさんたちもそうですけど、話がすんわりとさきに進まないことが多いですね……)。

「なんだとー」

話が終わると、その人ははじめて感じようをあらわにしていきました。

「まさか、そんな！ かれらのたましいは、すっかりもとの通りにもどったものとはばかり、思っていた。このわたしとしたことが、うっかりだった！」

なんだかこの人の場合なら、うっかりというのもうなずけるような気もしますが……。とにかくその口ぶりからさっするに、モーグのまちのできごとにこの人がかかわっているということは、どうやらまちがないようです。いったいこの人はほんとうに、なに者なんでしょうか？

「もうすっかり、かたがついたとばかり思っていたのだが。うーむ……」その人はそういつて手をあごにあてて、考えこみました。

ところで……。ちよつと説明がおそくなってしまいました。ここで読者のみなさんに、この人(たぶんカルモトさんですけど)の見た目のことを、きちんとお伝えしておかなければなりませんね。これまでは戦いの場面や話の流れなどで手がいっぱい、著者のわたしもこ

の人の見た目のことを、お伝えしているようがなかったのです。

まずぱつと見ただけで、なんともおかしな人でした。赤や青やきいろにみどり、それらの水玉やいろんなもようのはいった、とつてもうるさくてごちゃごちゃとした服を着ていて、おそろいのズボンをはいていたのです(ですからまるで、サーカスのピエロみたいですよ)。腰にはひらひらとした、バレエのスカートみたいな白いぬのかざりをまいていて、首のまわりにもそれと同じような、ぬのかざりをまいていました(しかもそれらのかざりには、よく見るとたくさん小さな星や、お花、ちょうちよ、くま、くだもの、などといった、かわいらしいブローチがちりばめられていました)。

顔がまた、とつてもいんしよう的でした。感じようのわからないむつつりとした顔をしていましたが、するどくつり上がった目といい、大きくとがったわし鼻といい、きつ、とむすばれた口といい、いかにもへんくつの学者とか、がんこな先生だとか、そんな感じの顔をしていたのです。からだはとつてもやせていて、背も高く、まるでひよろつとしたにんじんみたいです。ひげはありませんでしたが、かみは長くてぼうぼうで、しかもそのかみを、赤やもも色やきいろに、はでにそめていました!

ですからたいいていの人は、この人のことをひとめ見ただけで、こう思うんじゃないでしょうか?

しゅみが悪い!

旅の者たちもれいせいになってみると、あらためて今、そう思っていたのです(ですからベルグエルムをはじめは、「こ、この人、だいいじょうぶなんだらうか? うーむ……」と、かれに話しかけるのをためらってしまったほどだったのです)。でもとりあえずのところは、かれのおしやれのセンスのことについては、ふれないでおいた方がよさそうですね。いろんなしゅみの人がいますから。それよりも今は、もつとだいいじな話があるはずですよ。

「あなたが、カルモトなのでありませんか?」ベルグエルムがもういちど、たずねました(早くはつきりしてもらわないと、話がさきに進みませんもの!)。そしてそのベルグエルムの言葉に、ようやくその

人はあることを思い出したようで、こういったのです。

「そういえば、いぜん、そんな名まえでよばれていたことがあったような気がするな。だが、そのカルモトというのは、だれかがかかってつけた名まえだろう。ふだんはわたしは、わたしのほんとうの名まえをみじかくしよりやくした名を、使っているからな。」

そしてその人は、自分のみじかくしよりやくした名まえをいいましたが、それでもぜんぜん、だれもおぼえられないほどに、長いのでした！

「す、すみません。もういちどお願いできますか？」ベルグエルムが思わず、ききかえしてしまいました。するとその人は、しぶしぶといった感じで、もういちどだけくりかえしていつてくれたのです。

「しかたのないやつだな。これでさいごだぞ。わたしの名まえは、カルデインナンモントアウルクリストフフォン・デルハルゼントグナンファイアセルトス・ハウゼンという。もういわんぞ。ほんとうの名まえをいちいちいつていたらめんどうだから、こんなにみじかいよび名をつけたのだ。これでおぼえられないというのなら、もう知らん。」

なるほど、魔法学校のアルフリート校長先生でさえ、この人の名まえをおぼえていなかったのもむりはありません。長すぎですもの！

こんなわけでしたから、もっとかんとんに、だれかがカルモトというよび名をつけたのでしよう。ですからカルモトさんほんにんが（だれかがかかってつけた）そのカルモトというよび名をよくおぼえていなかったのも、むりもないことでした（もっともかれの場合は、もとかからおぼえる気がなかったようですが……）。

ちなみに。モーグのゆうれいさんたちは名まえのこともふくめて、このカルモトについてのうわさをすべて旅人たちからききました。いちばんはじめにカルモトのうわさをみんなに広めたのは、ほかでもない、ヴァナントの魔法学校からやってきた、とあるひとりのみならいのまじゅつし学生だったのです。この学生のかれは植物学がせんもんで、アーケランドの植物のひょうほんをとることがもくてきでこのアーケランドをおとずれましたが、その旅の中で、山の中に住むカルモトにぐうぜんに出会ったのでした。

「あなたは、カルモト先生じゃありませんか！」

こういったわけで、まちの人たちは「西の大陸からやってきた山の中に住んでいる学者で、まじゆつしで、とっても強くて、だれもほんとうの名まえを知らなくて、そして魔女のことにもくわしい」という、カルモトのうわさを知ることになったのです。なんだかずいぶん、ややこしいうわさでしたが……。

ところで、このうわさはベーカーランドには伝わらなかったのでしょうか？　じつは伝わったことは伝わりましたが、そのあと西の街道がとぎされたがために、西の街道の地のまじゆつしのうわさも、そのままとだえてしまいました。それがもう三十年以上も前のことでしたから、ベルグエルムたちがカルモトのことを知らなかったのも、とうぜんのことだったのです。カルモトのうわさをまだ知っていたのは、そのころから時間のとまったままの、モーグのゆうれいさんたちばかりでした。

さてさて、名まえ（とうわさ）のことはともかくとして。やっぱりこの人がモーグのゆうれいさんたちのいつていた、カルモトさんほんにんにまちがいありませんでした。とりあえずは、よかったよかった！　みんなこの人のことをたずねて、ここまでやってきましたから（カルモトさんが三十年以上もずっとここに住みつづけてくれていて、ほんとうによかった！）。すんなりとはいきませんが、それでもずいぶんと早く、カルモトさんのことが見つかったわけです（まだモーグのまちを出発してから、一時間くらいしかたっていないんですけどから！）。これなら魔女アルミラとのけつちやくについても、けつこう早くかたがつきそうですね。

でもまだ、かたがついていないことがありますよね。そう、いくら助けをたのみにきた相手とはいえ、こっちはもうすこしで、殺されるところでしたから！

「ちよつと待って！　名まえのことなんか、どうでもいいよー！」

さあ、いよいよライアンが、カルモトにせめよる番がやってきました。兵士たちを下げた助けてくれたのはカルモトでしたが、そもそもその兵士たちは、このカルモトの手下たちなのです！　とてもこのま

ま、だまったままできていることなどはできませんでした（ライオンが）。
「ごっちは、殺されるとこだったんだ！ どう、つぐなってくれるの
さ！ さあさあ！」

「どういうことなのか？ 説明してください。」さすがにロビーも、
ライオンにつづけていいました。

さて、カルモトはなんとこたえるのでしょうか？

カルモトはしばらく、むっつりとした顔のままだまっています
が、やがて、あっ！ といったように目を見ひらいて、いいました。
「そういえば、むかし、おかしなやつらがこのあたりをうろついで
たんで、わたしが木の兵士たちを、見張りに立たせておいたんだつた
！ うろついている者がいたら、わたしのもとまでつれてくるよう
に、めいれいしておいたような気がする。まだ、ずっとそのままだつ
たのか。わたしとしたことが、うっかりだった！」

やっぱり！ こんなことだと思っただけです！

カルモトは木から魔法で作りに出したというこの木の兵士たちに、土
地にはいりこんだ者を自分のもとまでつれてくるようにと、めいれい
していました。そしてもし相手がおかしな場合は、力づくでおとな
しくさせるようにと、カルモトはめいれいしていたのです。兵士た
ちはそのめいれいの通りにみんなのことをここへつれてきて、そして
はむかったみんなのことを、おとなしくさせようとしたというわけ
でした（じつにちゅうじつな兵士たちです！ そしてこの兵士たちは、
木から作られた木の兵士たちだったんですね。どうりでふつうの兵
士たちにくらべて、おかしな感じがすると思っただけです。

ちなみに。この兵士たちのかぶとの中には、ただ草をまるめたもの
がはいっているだけで、顔はありませんでした。この兵士たちは魔法
のエネルギーそのものを使って、かんたんなおしやべりをしていたと
いうわけだったのです。もともとこの兵士たちは戦いの方がせんも
んで、おしやべりをするのはにがてのようでしたけど。そのおかげ
で、へんじをかえしてもらえなかったライオンが、すっかり怒ってし
まいましたよね。

カルモトの話では、この兵士たちとかれらの乗る木の馬たちは、ふ

だんはずつと、木のすがたをしているとのことでした。土地にはいつてきた者を見つけると、ただの木から、兵士や馬のすがたにばけるといのです。どうりできすがのベルグエルムでも、かれらに気がつかなかったはずです！ だって、ただの木ですもの、わかるはずもありませんよね！ たくさん兵士たちにとつぜんまわりをかこまれてしまったのは、こういうわけがあつたからでした（そしてカルモトのいつていた「ずいぶん多いな」という言葉も、このためでした。カルモトは目の前にいる兵士たちが、「忘れてしまつていた、自分のところにもどつてきた兵士たち」なのだということに、気がついておりませんでしたので、もともと手もとにおいていた兵士たちとくらべて、「ずいぶん多いな」といつたのです。忘れられてたなんて、なんかかわいそうな兵士たちですね……）。

さらにもつとくわしく話をきいたところ、旅の者たちが通つてきたあの道には、もうひとつ魔法がかかつていたさうでした。カルモトは知りあいがたずねてくるというので、自分の家までの道がわかるようにと、つづく道の木々に道あんないの魔法をかけていたのです。みんなが道をゆくときに感じたおかしな感じは、そのためでした。木々が旅の者たちの心に、ちよくせつ「道はこつちですよ」と語りかけていたのです。それにしても……、かんげいの道あんないの魔法がかかつているところに、うむをいわさず相手をつかまえる兵士たちをおいておくなんて！ なんていいかげんな人なんでしょう！ 旅の者たちにとつてはなんともいいように、ふりまわされてしまつたわけでした。

「さうだつたのか。それは、ほんとうにすまないことをした。この通りだ。」話をきいて、カルモトは心からすまなそうに、頭を地面すれすれといつたところまで深々と下げました（からだのやわらかい人ですぬ！ でもちよつと、ほきほきつ！ というひびのはいるような音がしたのが心配でしたが……）。

さて、どうしたものでしょうか？ このカルモトのたいどはけつこういがないなことでしたので、みんなは思わず、おたがいに顔を見あわせてしまいました。どうやらこのカルモトという人は、そそつかしく

ていいかげんなだけで、ぜんぜん悪気はないようなのです。もちろん旅の者たちのことをきずつけるつもりも、ぜんぜんなかったのでしょう。

ですからこれ以上、かれをせめてもしかたありませんまい！ 旅の者たちにはそれよりもっと、たいせつなしごとがあるのですから（やっぱりライアンだけは、「なつとくいかないな。」とぶーぶーいっていましたが）。

「カルモトどの。」ひとだんらくがついたところで、ベルグエルムが話を切り出しました（やっぱりこの人のことをよぶには、手っ取り早い名まえである、カルモトというよび名でかんべんしてもらいました。カルモトさんの方は、だいぶふまんそうでしたが）。「さきほども申し上げました通り、われらには、あなたの助けが必要なのです。われらは、しつちたいの中にそびえる魔女の塔へとはいりこみ、そこに住むという魔女アルミラのことをしりぞけ、魔女のもとから、みなのためしいを取りもどさなければなりません。あなたは魔女のアルミラにたいこうする、とくべつな力をお持ちのはず。どうかわれらに、その力をお貸し願いたいです。」

こんどはみんなの方が、カルモトに頭を下げる番でした（やっぱりライアンだけは、まだしぶしぶしていました）。

さて、カルモトはどうこたえてくれるのでしょうか？

「なにやら、話がおかしなほうにかたむいているようだが……」カルモトは手をあごにあてて、なんだかふしぎそうな顔をしてそういいました（ちなみに、手をあごにあてて考えるのは、この人のくせみでした）。そしてそのあと。カルモトの口から出た言葉に、旅の者たちはなんともまったく、びっくりぎょうてんしてしまったのです。

「アルミラなら、もうとつくに、このくから出ていったぞ。わたしがこの手で、ついほうしてやったんだからな。これは、まちがいのないことだ。あのブリキの塔には、もうだれも住んどらん。」

ええーっ！

これはいつたい、どういうことなのでしょう！ 魔女のアルミラ

が、モーグのみんなのたましいを持っているんじゃないのでしょうか？

そしてさらにさらに！ つづくカルモトの言葉は、旅の者たちをそれよりももっと、びっくりぎょうてんさせてしまいました。

「今ごろアルミラは、ガラランタのわたしの家にも、もどってるんじゃないか？ なにしろあいつは、わたしのいもうとだからな。」

な、なんですってー！

なにやらほんとうに、話がずいぶんとおかしなほうこうにかたむいてしまいました！ さあさあ、旅の者たちの「魔女をやっつけてたましいを取りもどせ」大作戦は、いったいこのさき、どう進んでいってしまうのでしょうか？ みんなのたましいのゆくえは？。そして、フェリアル運命やいかに！（三回目ともなると、さすがにしつこかったですね。すいません。）

旅の者たちのそのはるかな上から、金のロープをたらしたような木もれ日がふりそそいで、地面にたくさん光の水たまりを作り出していました。この大むかしからの木にとって、その日もいつもとまったく変わらない、ただのふつうのいちにちでした。

13、木の塔とブリキの塔

空が、急にわき起こった暗い雲におおいつくされようとしていました。まだ午後も早い時間だというのに、地上をてらしていた光はあつというまにやみに飲みこまれ、やみはその地を、ふきつな夜のような場所へと変えてしまいました。

今、そのやみを待ちのぞんでいたかのように、上空から四ひきのまつ黒な鳥のような生きものたちが、ぎやあぎやあというおそろしげななき声を上げながら、その地に飛んできました。それらの生きものたちは、みなさんがすでに知っている生きものたちでした。そう、それらの生きものたちは、あのセイレン大橋の上でロビーたちが戦った黒騎士たちが、乗っていた生きもの。デイルバグという、かいぶつたちだったのです。

かいぶつたちはそのくにの空高くを、まつすぐに飛んでいきました。いったいここはどこなのでしょう？ 大地は荒れくれ立っていて、そのあちこちにはまつ黒にかがやくぶきみなたてものが、いくつもならんでおります。たくさん塔がたっていて、それらの塔にはきみの悪いはたやのぼりものが、いくつもかかげられていました。そしてそれらの塔のつぺんには、黒いよろいかぶとに身をつつんだ見るもおそろしげな兵士たちが、やりをかまえて見張りに立っていたのです。

よく見れば、兵士たちは塔のつぺんだけにいるわけではありませんでした。はるか下の道をこうしんしていく、豆つぶのようなもの。それらがすべて、同じかつこうをした、黒の兵士たちだったのです！ としてもつとよく見てみれば、そこには今までにだれも見たこともないような種族の者たちまで、まぎっていました。とかげみいたすがたの種族の者たちとか、ぜんぜんかわいくない、くまみいたすがたの種族の者たちとか。大きな目玉にたくさんの手足が生えているという、ぶきみなかいぶつたちのすがたさえも、そこにはまぎっていたのです（わたしは今でも、この目玉のかいぶつのことを思い出すとぞつとしてしまいます！）。

このなんともおそろしげな土地を、デイルバグのかいぶつたちはあるひとつの場所をめざして、飛んでいきました。その場所には、このおそろしげな土地の中でもひとときわおそろしげなたてものが、そびえていたのです。そのたてものは、やみを切り取ったかのような、光をはねかえさないまっ黒な石をつみ重ねて、つくられていました。そのあちこちからは、するどくどくがった塔が突き出ております。そしてその塔につくられたたくさんのもどからは、なんともおそろしげな大きな弓矢が、そのの相手へとむかつてにらみをきかせていました。

なによりそのたてももの大きさに、あつとうされました。てつぺんまではいったい、どれほどの高さがあるのでしょうか？ まさにそびえる山のごとく、あるいは巨大な黒いりゅうのごとく、そのたてものはそこにあつたのです。

「きたぞー！」

だれかのさけぶ声が、その場にひびき渡りました。ここはそのたてももの、てつぺんに近い場所。今そこに、ひとりの人物を乗せたあのデイルバグのかいぶつが一びき、おり立ったのです。

乗っていたのは、ひとりの黒ずくめの衣服に身をつつんだ男の人でした。その人はほかの兵士たちとはちがって、よろいやかぶとも身につけておりませんし、剣すらも持っておりません。かわりにそのうでに、エメラルド色の花のマークのはいった白いリボンをまいていました。

この人物がなに者なのか？ それはまだわかりませんが、ひとつだけいえることがあります。デイルバグのかいぶつに乗っている者が、せいぎの人物だとは思えません！ 黒騎士のひとりでしょうか？ それにしては武器も持っておりませんでしたし、なんともにつかわしくない、お花のリボンが気にかかります。

「急げ！ へいかがお待ちかねだぞー！」

同じような黒ずくめのかっこうをした者たちが出むかえて、やってきたその人物にいいました。リボンをつけたその人物は、なにもいわず、出むかえの者たちのあいだをこつこつと足早に歩き去っていきま

それからすぐに、残る三びきのデイルバグたちもその場にとうちやくしました。こちらに乗っていたのは黒のよろいかぶとに身をつつんだ、いわゆる黒の兵士たちです。兵士たちはデイルバグからおり立って重いかぶとをぬぐと、やれやれといった感じで「ふう。」と重い息をつきました。

「わざわざ、われらが出むくこともなかった。へいかもさぞや、およろこびになろう。」その中のひとり。こがね色のかみをした兵士がいました。

「では、いよいよでございませうか？」

かぶとをかかえた、身分の高いと思われるそのこがね色のかみの兵士の言葉に、出むかえの者たちがといかけます。

「いくさだ。われらが、このアークランドの、しはい者となるときがきた。」

こがね色のかみの兵士はそういって、その口もとに笑みを浮かべてみせました。

その谷はまわりをぐるりと、高い岩かべにかこまれていました。ですからそこから見たのでは、ここにこんな谷があるなんてことは、わからないでしょう。谷の入り口はひとつだけしかありませんでしたし、しかもその入り口は、人のよりつかない山の中の、とつてもさみしい場所のただ中に、ひっそりとそんざいしているだけであったのです。ですからふつうだったら、だれもこんなところにはくることはないでしょう。まよえる旅人か？ はたまたよつぼどの変わり者か？ それとも、この場所にくる、なにかのりゆうのある者たち、そんなとくべつな者たちがいはいは……。

今われらが旅の者たちがいるのは、まさにその谷の中でした。まん中にとほうもないほどの大きさのいっぽんの木が立っている、ひみつのかくれ谷。そして今みんなは、その谷の中のとあるひとつの場所に、まねかれていますところだったのです。

「だいぶちらかっているが、気にせんでくれ。今、お茶をいれてあげよう。」

声のぬしは、カルモトでした。さて、旅の者たちはいったい今、この谷のどこにいるのでしょうか？ それはともかくとして……、まずはみんなが今いるこの場所のようすのことを、さきにみなさんにお伝えしておかなければなりませんね。それはなぜか？ といいますと、この場所はカルモトの言葉の通り、じょうだんではすまされなくらいに、ちらかっていたからなのです！

まずここは木のかべにかこまれた、ひとつの部屋の中でした。しかし部屋といっても、そこはただの部屋ではなかったのです。まずこの場所のあちこちに、たんすや戸だな、ソファーやつくえ、いすなどといった家具が、とつてもいいかげんな場所に、てきとうにおかれてありました。てんじょうには木で作られた船や、鳥や、ひこうきのような乗りものなどのもけいが、たくさんつるされております。そしてなによりも、この部屋の中をうめつくしている、物、物、物！ もうなにがなんですか？ わからないくらいに、ありとあらゆる品物たちが、この部屋の床や、家具の上や、そのほかのすきまというすきまに、ちらばっていました！（おもちゃばこをひっくりかえしたようとは、まさにこのことです！ たぶん、いたずらざかりのしんせきの子どもたちが二十人くらいであそびにきたら、こんなふうになるんじゃないでしょうか？ それくらい、ちらかっていました。）

それらの物たちのすきまを、カルモトが歩いていきました。びつくりすることに、カルモトがゆびをかぎすと、床をうめつくしていた品物たちが、がらがらーっ！ という大きな音を立てて、ほかの場所へとどいていくのです！ ですからカルモトは、たくさん品物たちなどをはじめからそこになかったかのように、すたすたと床の上を歩いていくことができました（そのかわり品物がどいた方の場所では、もつとめちやくちやなことになってしまっていましたか……）。

よくもまあ、ここまでちらかしたもんだ……。旅の者たちはもはやなにもいえずに、その物にあふれた部屋の中でちぢこまっていました（むやみに動きまわったら、物のなだれにまきこまれてしまいかねませんでしたから）。もしこの部屋にまどがなかったのなら、たぶんみんな、息がつまってしまっていたことでしょう。大きなガラスのは

まったまどからさしこむ光が、なんとかこの部屋を、部屋らしくたもっていたのです。

「まるで、ひみつきちみたい。よくこんなところに、家をつくったもんだね。」ライアンが（しんちように物をがらりとかき分けてまどまでたどりついてから）、そのまどの前に立ってそとの景色をのぞきこみながらいました。まどのそこには、高い岩のかべがそびえております。まどの下の方には、ふとい木の根と、そのまわりをかこむ水のないおほりが見て取れました。そして上をのぞけば、はるかな上に、たくさん葉をつけた大きな木のえだが、いくつものびていたのです。そう、ここはあの巨大な木の、その内がわ。木のみきの中につくられた、カルモトの家の中でした！

あれから……。

「魔女のアルミラはわたしのいもうとだ」、など、カルモトがしょうげきのじじつを語った、そのあとのこと。旅の者たちはカルモトにもっとくわしい説明をもとめたのです（まあ、とうぜんですね）。そのうえ（カルモトはブリキの塔とよんでいる）魔女の塔のことや、みんなのたましいのことなどについても、みんなはカルモトにくわしく話をきく必要がありました。それにもなつてカルモトが、「わたしの家になさい。そこで話しをしよう。」といつてみんなのことを、この木の中につくられた、カルモトは木の塔とよんでいる自分の家の中へと、まねいてくれたというわけだったので（カルモトがさいしよにあらわれたとき、かいだんをおりてきましたよね。じつはあのかいだんは、この家のげんかんにつながっていたのです。そしてはね橋のところからきこえてきたベルの音。あれはこのカルモトの家の、よびりんです。木の兵士たちはとらえた者たちのことをつれてきたというのをカルモトにしらせるため、よびりんをならして、カルモトが出てくるのをじつと待っていたというわけだったので。カルモトがなかなか出てこないで、けつきよく旅の者たちは二十分以上も待たされ、そのあげくに、兵士たちと戦うはめになってしまいました（……）。

「そこになさい。お茶がはいったぞ。」

カルモトがそういって、ひとつのソファアのその上の物たちをがらがらとどかしました。旅の者たちはようやくのこととてそのソファアまでたどりつくと、やれやれといった感じで、そこに三人でならんですわります(すわったしゅんかん、ベルグエルムが「いたっ!」といって立ち上がりました。見ると、かれのすわったところにかたいからを持つたくるみのような木の実がひとつ、まだ残っていたのです。ベルグエルムはおしりをさすりながら木の実をひろって、もういちどすわりなおしました。ベルグエルム、ちよつと、ゆだんしちやいましたね。

ちなみに、魔女のアルミラがカルモトによつてすでについてほうされているということ、ベーカーランドへとつづく西の地の道のりに魔女のきょういはなくなつたはずでしたが、それでもこのさきの道のりは、なにが起きるか? わからない道のり。ベルグエルムをはじめ、みんなはやはり、このさきの道のことをよく知っているミリエムを、つれていくべきだとはんだんだのです。カルモトにきいたところでも、このあたりにベーカーランドまでの道のりにくわしい者などは、ひとりもないということでしたし、カルモトさんほんにんも、この道を通つてベーカーランドまでいったことなどは、いちどもないということでしたから。それに、ねんのためきいてみましたが、かえるの種族のフログルたちでも、西の道のりについては知るよしもないだろうということでした。そしてじつさい、しるよしもなかつたのです。かれらはこのあたりの土地にずっと住みついていて、まったくはなれようとはしませんでしたから。

そんなわけでしたから、みんなはやはりこれまでのけいかく通り、魔女の塔へとむかうことにしました。もつとも、ここでけいかくをへんこうして、まちのみんなとフェリアルのことをほつたらかしたままさきへ進んじやうなんて、そんなの物語のヒーローたちとしても、ゆるされませんしね……)。

「さて、アルミラのことだが。」みんながすわると、カルモトは自分もはんたいがわのソファアに腰をおろして、お茶をすすりながらいいました。

「あいつはむかしから、わたしによくちよつかいを出してきてな。

わたしの持つ力やちしきを、自分のものにしたいと思っていたようだ。だが、わたしはあいつには、なにひとつ教えてやらなかった。あいつがもとめていたのは、たんなる、強さとしての力だ。わたしの持つ力は、そんなことに使うためのものではない。わたしの力は、この世界にバランスをもたらすための、力なのだ。」

そのカルモトの言葉に、ベルグエルムがもしやと思つてたずねました。

「カルモトどの。あなたはもしや、この山に住むという三人のけんじやたちのうちの、ひとりではありませんか？」

「えっ！」ベルグエルムの言葉に、ロビーとライアンは顔を見あわせておどろきました。ここへくる前に山道でじょうだんでいつて笑つていたことが、ほんとうのことになるうとしていましたから、おどろくはずです。そして……、読者のみなさんの、「カルモトつて、いい伝えのけんじやなの？」というそのしつもんについても、ついにここで、こたえなければなりませんね。

はい、そうなんです。けんじやです。その通りです（ライアンにあつさり見ぬかれてしまいましたので、「ひみつにしておいて、あとで読者のみなさんのことをおどろかせてやろう」というわたしのけいかくも、あつさりだめになつてしまいました。ですからもう、なげやりです。すいません。ライアンめー！）。

もっともカルモトほんにんにとつては、自分が伝説的なけんじやちやのうちのひとりといわれていることについて、ぜんぜんきょうみがありませんでした。かれは生まれつき、すぐれた魔法の力と、この世界の力のバランスをたもつという、そのふしぎな力のことを持ちあわせていたのです（かれが持っているふしぎな力とは、「木々や植物の力をあやつる」というものでした。カルモトはこの力をじょうずに使うことで、この世界の力のバランスをたもつていたのです。ですがそういういわれでも……、じつさいになにをしているのか？ 今ひとつぴんときませんよね。これもまた、けんじやとまじゆつしのちがいを説明するくらいむずかしいのですが……、まあ、しぜんの世界と人の世界とがなかよくやっついていけるように、影のささえとしてがんばってい

る、といったくらいに思ってもらえたらいいんじゃないかと思えます。たぶん」。

ですからカルモトは、自分のさずかったその力を人々のやくに立つように使うということは、あたりまえのことなのであって、自分にとってはそのがしごとのようなものだ、といつも思っていました（変な見た目とはうらはらに、りっぱな人なんですよ、ほんとは）。

ところで……、カルモトがいい伝えの三人のけんじやたちのうちのひとりだというのなら、ほかのふたりは？　と思うのはどうぜんですよ。だいじょうぶ。残りのふたりのけんじやたちも、このアークランドのどこかにちゃんとそんぎいしているのです。え？この切り分け山脈のてっぺんにいるんじゃないの？　って？　たしかにベルグエルムは、そういつていましたよね。ですがそれは、だれかの広めたただのお話にすぎなかったのです。ほんとうはかれらけんじやたちは、このアークランドのどこかの、知っている者すらほとんどいない、人里はなれたひみつの場所にひっそりとかくれ住んでいました。そして……、それらの残るふたりのけんじやたちも、あの方になつて、この物語の中にしつかりと出てきますよ。ですからそれまで、お楽しみー」。

「けんじやだかなんじやだか、知らんが、」ベルグエルムのしつもんには、カルモトがこたえていいました。「わたしのことをそうよぶ者たちが、わたしのことを、世に知らしめたようだな。どうでもいいことだ。」

「やはり、そうでありましたか。」ベルグエルムがうやうやしく頭を下げて、つづけました。「はじめてお会いしたときから、そうではないかと思っていたのです。」（いや、それはうそでしょ？　たしか、「この人、だいじょうぶなんだろうか？　うーむ……」とか思っていたような……。まあここは、だまっておきましょう）。

ちなみに、モーグのゆうれいさんたちですが、かれらは切り分け山脈に住むといういい伝えのけんじやの伝説については知っていますが、それがカルモトのことをいつているのだということまではわかりませんでした。カルモトはもともと、切り分け山脈の南のはしに住

んでいましたが、その地でけんじやのうわさが広がったのち、あるときとつぜん、このルイーゾの木のところをひっこしてしまつたのです。そして南のくにの人々も、いい伝えのけんじやが切り分け山脈の地に住んでいるというわさのみを知っていただけで、カルモトの名まえやすがたかたちのことなどについては、ぜんぜん知りませんでした。このようなわけで、カルモトがそのいい伝えのけんじやなのだということは、旅人たちをはじめ、だれにも知られていなかったのです。ベルグエルムがカルモトのことを、そのいい伝えのけんじやだと見破つたのは、かれの持ち前のするどさからのことでした。」

「そんなことよりも、さきを急いでいるのではなかったのか？ 仲間が待っているのだろうか？」

カルモトの言葉に、みんなははっとしてしまいました。そうでした、伝説的なまでのけんじやにじっさいに会えたことで、すっかりそちらに気がいつてしまつていましたが、今はとにかく、みんなを助けることの方がさきなのです。

「は、はい。それでは、まず……」

「えーっ！」

ベルグエルムが話しはじめたそのとき。急にライアンがさげびました。いったいどうしたのでしょうか？

「なにこれー！ ロビー、このお茶、飲んでみて！」

ライアンの言葉に、ロビーもカルモトに渡されたそのお茶を、ここでようやく口にしてみます。すると……。

「えーっ！」ロビーもライアンとまったく同じく、さげんでしまいました。それからロビーとライアンが、そろって口にした言葉は……。

「おーいしー！」

思わずベルグエルムも、「し、失礼。」といつてお茶をすすりましたが、ロビーとライアンのいう通り、そのお茶はなんともすがすがしくさわやかで、ひとくち飲んだだけであたりにしあわせの花がばああっ！ と広がってしまいそうなほどに、おいしかったのです！

みんなはこんなにもおいしいお茶を、今まで飲んだことがありません

んでした。ですから思わず、カルモトにくだいいるようにたずねてしまったのです。

「こ、これ、なんですか？」ロビーがいました。

「こんなお茶は、はじめてです。なにかとくべつな……」ベルグエルムがいかけたとき……。

「おかわりー！」ライオンがあつというまにカップをからにして、カルモトにおかわりをもとめました。

そしてカルモトは、そんなみんなの反応にちよつとびっくりしたような顔をして、こたえたのです。

「この木にみえる実から作ったお茶だ。このルイズの木は、わたしのしごとを助け、わたしに大いなる力を与えてくれる。そのためわたしは、ここに住んでいるのだ。」

そう、このお茶はみんなが今いるこの巨大な木、ルイズの木にみのつた実をせんじて入れた、お茶でした（ちなみに、そのルイズの実はみなさんの世界の洋なしにた色とかたちをしています。そのままでも食べられますが、このようにせんじてお茶にしても、とつてもおいしいのでした）。

カルモトはそれから、みんなにお茶のおかわりをそそいでくれて、そのうえルイズの実そのものまでごちそうしてくれましたが、その実の方もまた、おいしかったこと！言葉でうまくいいあらわすのはむずかしいのですが、食べたあとまるで、からだ中の悪いところがみんなまとめてすっきりさわやか！といった感じで消えていくような……、そんな味だったのです（わかりづらくてすみません……）。

ちなみに、ライオンの言葉をかきると、「実ひとつとホールケーキひとつを取りかえつこしてもいいくらいのおいしさ」だそうです。わかるような、わからないような……。そのあとライオンに、「じゃあ、ルイズの実ひとつと、ホールケーキひとつ半なら、どちらをえらぶ？」とわたしがしつもんしたところ、だいぶたつてから、とつても小さな声で、「ケーキ……」というへんじがかえってきました）。

みんながむちゆうでルイズの実をかじって、お茶をがぶがぶ飲んでたとき。カルモトがいました。

「いくらでもごちそうしてかまわんが、だいじな用があるんじゃないのか？」

そうでした！ さつきからなにをやっているんですか、もう！

そしてそのあと（お茶と木の実はきりがないのでここまでにしておいて）、みんなは大急ぎで「魔女をやっつけてたましいを取りもどせ」大作戦のほんとうの作戦かいぎをここにひらいたのです（モーグのゆうれいさんたちの立てた作戦は、とつてもてきとうでしたから……）。

みんなはカルモトからたくさんのお話をききました。まずは魔女のアルミラのことです。アルミラは兄のカルモトから力を得ることをあきらめました、そのかわりにとんでもないことを考えました。それはカルモトのいた魔法学校からきんじられた魔法のわざをぬすみ出して、そのわざを使って、カルモトのことを力でねじふせてやろうというものだったのです！（その魔法のわざのことについては、みなさんはもうすでにごぞんじですよ。人のたましいから軍隊を作るといふ、あのわざです。）

そう、アルミラはそのわざで、力を教えてくれなかつた兄に対して、しかえしをしようとしていたというわけでした！ アルミラがヴァナントの魔法学校にはいったわけ。それはつまり、兄であるカルモトにしかえしをするための魔法の力を学び、そしてさいごに、このきんじられた魔法のわざをぬすみ出すためであつたのです。そのためアルミラは、カルモトが学校をやめてカルモトの目がとどかなくなったときをねらつて、この魔法学校に入学したというわけでした（なんとも魔女らしい、ひきょうで子どもっぽい考え方です！）。

そしてアルミラはそのわざを使って、モーグの人たちのたましいから、おそろしいブリキの兵士たちの軍隊を作ることにはせいこうしました。ひとりのたましいの力は、十体の兵士たちのことを動かす力となりました。アルミラはこうして、じつに二千体近くもの、ブリキの兵士たちによる軍隊を作り出していたのです！

そしてついに、その軍隊をカルモトのもとへとさしむけようとしたときのこと。アルミラにとつて、まったく思いもかけないことが起こりました。ブリキの兵士たちの前に、木の馬に乗つたなん百という数

の木の兵士たちが、立ちふさがったのです！ しかもそればかりではありません。こがね色のかぶとをかぶった、かえるの種族の者たち、フログルの兵士の者たちまでもが、アルミラのそのブリキの軍勢の前に立ちはだかりました！（ええっ？ フログルですって？ ここでかれらがとうじょうしてくるなんて、かれらが魔女アルミラの手下だなんていうふたしかなうわさは、やっぱりでたらめだったということになるのでしょうか？ うくん、やっぱりうわさとげんじつとは、ずいぶんと話にくいちがいがあるみたいです。）

いくら二千体ものブリキの軍勢とはいえ、かれらはすべて、歩きの兵士たちでした。木の馬に乗った木の兵士たちは、ブリキの兵士たちよりずっと数はすくなかったのですが、馬に乗った兵士と歩きの兵士とは、戦う力がぜんぜんちがうのです。そのうえ木の兵士たちは、ブリキの兵士たちよりも、ずっとずっと強いのでした（そのうでまえにかんしては、ベルグエルムもちゃんどみとめましたよね）。そこにフログルの兵士たちが加わりましたから、もう勝負はつききました。ブリキの兵士たちはつぎつぎとばらばらにこわされて、ただの鉄くずになってしまいました。もうアルミラはくやしいやら頭にくるやらで、なにが起こったのかもよくわからないありさまでした。ですけどこれはぜったいに、兄のカルモトのしわざなのだということは、アルミラにはよくわかっていたのです。

こうしてアルミラは、兵士たちも塔もすべてをすてて残して、このくにを去っていきました。

「くやしー！ いかぜったいに、しかえししてやるー！」アルミラはそれだけさけぶと、いのちからがら、西の空のかなたへと逃げていったのです。

アルミラのよそう通り、もちろんこれはカルモトのやったことでした。ですがそのもともとのきっかけは、フログルたちにあつたのです。フログルたちは自分たちの土地にかつてにはいりこんできたらしい塔をたてて住みついた魔女のことを、ひどくきらつていました。ですからかれらはなんとかして、魔女を追い出すことができないものか？

「いつも思っていたのです（やっぱりフログルは魔女の手下だなんていううわさは、ぜんぜんうそっぱちでしたね！ かれらもまた、魔女のことをきらっていたのです。まったく、うわさなんていうものは、かんたんに信じてしまうべきではありませんー」。

「ですけどかれらの力だけでは、おそろしいのろいの力をあやつる魔女にはかないません。そこでかれらは、あるひとりの人物のことを思い出しました。」

その人は切り分け山脈のふもとにかくれるようにして住んでいる、強力な力を持った、学者およびまじゆつしなのだということでした（ほんとうは伝説的なまでのけんじやとよばれている人でしたが、ずっと人とかかわらずにこの土地に住みつづけているフログルたちでしたから、そのこともやっぱり知りませんでした）。この人の力をかりることができれば、魔女を追いはらうことができるかもしれせん。

そんなあるとき。フログルたちは魔女がひそかにおそろしい軍隊を作っているのだということに、気がついてしまいました。フログルたちにとって、それはきようふそのものでした。早くなんとかしなければ、これはこの土地だけの問題ではなくなってしまう！ そしてフログルたちはようやくのことで、山のまじゆつしを見つけることができたのです。それはもちろん、カルモトのことでした。

フログルたちの話をきいて、カルモトはここでようやく、「アルミラが自分にしかえしをするためにこのアーランドにやってきている」ということや、かのじよが「人のたましいをうばっておそろしい軍隊を作っている」ということなどを、知りました（フログルたちはブリキの塔から飛び出していく黒くておそろしい影たちのことを、もくげきしていたのです。その影たちはロザムンディアのまちの中へと、飛び去っていききました。その影たちが人々からたましいをうばっていくおそろしい影たちなのだということを、かれらはのちに、カルモトから知らされることになるのです。カルモトはこうして、アルミラの軍勢に使われたたましいが、ロザムンディアのまちの人たちのたましいであるらしいということを知りました）。ですがカルモトは、ちっ

ともあわてませんでした。自分の力はアルミラの力よりもはるかに上なのだということを、知っていたからです（これはべつに、うぬぼれているというわけではありません。カルモトは、じじつはじじつとこういうことを、れいせいにはんだんでできる人だったのです）。

カルモトはそれから、たくさんの木の兵士たちのことを作り出しました（さすがのカルモトでも、数百の兵士たちのことを作り出すのはなん日もかかりました）。そして、いさつに出たフログルたちのほうこくを待つて、その日ついに、兵士たちをアルミラのもとへと送りこんだのです。これが、アルミラがこの地を去つていつたそのわけの、いちぶしじゅうでした。

このあとすべて、あとしまつしてくれていたらよかつたんですけど！　そこはやつぱり、いいかげんできとうなせいかくの、カルモトだったのです！

カルモトはアルミラが西の空に逃げていくところをかくにんすると、「うむ、これでよし。このブリキの兵士たちは、ロザムンディアの人たちのたましいから作られたようだが、これでたましいも、もとのからだにもどることだろう。よいことをした。」といって、それですべてかたがついたと思つてしまいました（そしてフログルたちも今の今まで、カルモトのその言葉をずっと信じていました）。しかしじつさいは魔女が逃げていったというだけで、まちのみんなのたましいもどつていませんでしたし、まちに張られたのろいのけっかいも、ぜんぜんそのままだったのです！（アルミラが全部、ほつたらかしていききましたから。アルミラのこういいういかげんなところは、やつぱりカルモトにしていますね。血すじなのでしようか？）

それから三十年あまりがたちました。そして今日。旅の者たちがカルモトのもとをおとずれたことによつて、ようやくのことで、カルモトはそれらのことに気がついたというわけだったのです（気づくまで、長すぎですつてば！）。

話を終えると、カルモトはもういちど旅の者たちに頭を下げている。

ました。

「まことに、すまなかつた。わたしがうつかりしていたばかりに、ロザムンディアのまちが、今、そんなことになっていようとは……、この通りだ。」カルモトはそういつてソファアールから立ち上がると、(足もとの物たちをがらがら一つ！ とどかしてから)また頭を地面すれすれまで下げてあやまりました(こんどはぼきんっ！ というあきらかになにかがおれた音がしたので、みんなは「だ、だいじょうぶですか？ 今の。」と心配しましたが、カルモトは「へいきへいき。」というばかりで、気にもしませんでした。ほんとうにだいじょうぶなんでしょうか……?)。

「まちの人たちのたましいは、どこにいったのでしょうか？ アルミラの兵士たちをたおしたときに、兵士たちの中から、たましいも、かいはうされたのではないのでしょうか？」ベルグエルムがカルモトに、もつとも重要なしつもんをしました。そうです、今いちばんの問題は？ といえ、みんなのたましいがいったい今、どこにあるのか？ ということでした(魔女そのものをやつつけるというもくてきについては、もう果たされておりましたから、あとはみんなのたましいを取りもどすことを、いちばんに考えればよかつたわけです)。

「まさか……、お空にのぼっていつちやつたんじゃ……！」ライアンが両手でほほをおさえながら、心配そうにつづけました。ライアンの言葉に、ロビーもベルグエルムも顔を青くさせて、カルモトのへんじを待ちます。まさかほんとうに、たましいは天にめされてしまったのでしょうか……！

「心配するな。だいじょうぶだ。」
よかつた！ これできりあえずは、ほつとしました。ですがほんとうに、どこにいったのでしょうか？

「まちの人たちがゆうれいとしてまだ生きているのなら、たましいもまだ、かならず生きている。」カルモトはそういうと、あごに手をあてて考えこみました。

「人のたましいから兵を作るといふ、そのいまわしきわざのことなら、わたしもよく知っている。ふつう、兵をたおせば、もとのあるじ

のもとへとたましいは帰ってゆくものなのだが、まだもどっていないとなると……。ふむ、アルミラは、うばったたましいに、なんらかのろいをかけているようだな。」

あのおそろしい、魔女ののろい！ それはたいへんなことです！（いったいどうすればいいんですか？ カルモトさん！）

「アルミラは、たましいの自由をうばうのろいを、かけているのだろう。みなのだましいは、まさに、とらわれの身ということだ。そうなると、兵からぬけたたましいは、もとのろうごくにもどっていったことになる。ブリキの塔の中にもどったと考えて、まず、まちがいないな。」

やっぱりあのブリキの塔！ あるじがいなくなったというのに、ずつとそのままぶきみにたちつづけているあのつきはぎだらけのおそろしい塔に、みんなのだましいが今も、とじこめられていたのです！

「やはり、あの塔か。」ベルグエルムがそういって、みんなと顔を見あわせて、うなずきました。

「カルモトどの。では、われらは今すぐ、あの塔へゆかねばなりません。みなのだましいを取りもどすために、ぜひ、あなたのお力をお貸しください。」（魔女がいなくなったとはいえ、まだどうすればみんなのだましいを取りもどすことができるのか？ やっぱりせんせん、わかりませんでしたから。）

みんなはカルモトに、心からお願いしました（こんどばかりはライアンも、しっかり頭を下げてお願いしました）。

さて、カルモトはどうこたえてくれるのでしょうか？

カルモトはソファアから急に立ち上がると、そばのぼうしかけにつるしてあった（しゅみの悪い）コートと（しゅみの悪い）ぼうしと（しゅみの悪い）ステッキをわしづかみにして、いいました。

「なにをのんびりすわっている！ さあ、出発だ！ このわたしがちよくせつ、あの塔をばらばらにうちこわしてくれようー！」

ちーたかたった！ ちーたかたった！ どん、どん、どんたか

たった！

ちーたかたった！　ちーたかたった！　どん、どん、どんたかたった！

つるつるとした木々の生えるさびれた山道の中に、なんともそうぞうしいたいこの音がひびき渡りました！　いったいぜんたい、これはなんのさわぎなのでしょう？

今そのさわがしいマーチングに乗って、たくさん馬たちが、道のむこうからやってきました。ですが、たくさん馬たちといいました。が、じつさいその中で生きたほんものの馬は三頭だけで、そのほかの馬はといえますと、これは生きた馬によくさせて作られた、木の馬たちだったのです。そしてそのたくさん木の馬たちには、これまた木や草ばかりのかっこうをした、なんともおかしなれんちゆうが乗っていました。

「ねえー　やっぱりそれ、やめてもらえない？　これじゃ、アークランド中の黒騎士たちに見つかっちゃうよ！」

メルの背からライアンが、さきをゆくカルモトにむかって大声でさげびました（うるさくて、大声を出さないと声がとどかないからでした）。

「だいいじな出発には、いきおいがたいせつだ！」前をゆくカルモトが、たいこのマーチの中から、こたえてかえします。「安心しろ！　わたしがついているー！」

ふたりの会話は、もちろん、このやかましいたいこの音についてのことでした。カルモトは自分の住んでいる木の塔を出発するにあたって、たくさんの木の音楽隊を、いっしょにつれてきたのです。その音楽隊が、カルモトと旅の者たちの方にむかって、やかましくたいこのマーチをうちならしていたというわけでした（この音楽隊もまた、木の兵士たちと同じ魔法で作られた、木でできた者たちでした。兵士たちとちがうのは、よろいやかぶとを身につけていないということです。そのからだはすべて、木のつると草をあんで作られていて、そのためまるで、かかしのようでした。この音楽隊が、木の兵士たち

の乗る木の馬のうしろに乗りこんで、兵士たちからだを木のつるで背中あわせにしぼりつけて、両手でたいこをうちならしていたのです。

カルモトのいうことには、「ぜったいに必要なのだ。」ということでしたが、そこまでして、かれらをつれてくる必要があったのでしょうか……？（ちなみに、カルモトはベルグエルムのつれてきたフェリアルフェリアルの騎馬に乗って、旅の者たちの前をあんないやくとして走っていました。馬に乗るのはお手のものということでしたから、フェリアルの騎馬が思わぬところで、やくに立ったわけです。そしていつもは先頭をゆくベルグエルムが、今はうしろの守りについていました。）

「カルモトさんだから心配なんだよ！ もう、どうなっても知らないから！」ライアンがそういって、なかばやけになってカルモトのあとを追いかけてきました。ロビーもベルグエルムも、「うーん。」とうなつて、それにつづくしかありませんでした。

やがてさびれた山道をぬけ、もとのみどりにかこまれた野の道を越えて、ついに一行は、あのおそろしげな魔女のブリキの塔の見えるところまでやってきました。はじめはじゅんびがたりなくて近づくことのできなかった、魔女の塔。その塔にこれからいよいよ、ふみこんでいくのです。旅の者たちは思わず、肩をぶるつとふるわせました（あるじがいなくなったとはいえ、まだまだ塔の中には、どんな危険が待ちかまえているものか？ わかりませんでしたから）。ですが、あんないやくであるカルモトは塔を前にしても、あいかわらず顔色ひとつ変えません。馬の足をろくに弱めることもなく、さつきと塔の方へと進んでいってしまいました。

「あの塔に近づくためには、きまった道を通っていかねばならん。さもなければ、馬ごとみんな、ぬまの底だぞ。わたしのあとに、しつかりついてこい。」

カルモトはそういって、ふたたび馬の足をはやめました……。今けっこう、重要なことをいいましたよね？ 道をあやまったら、ぬまの底？ ひええ！

「そんなこと、今ごろいわないですよー！」ライアンがぶんぶん怒って、カルモトにもんくをいいいました。ですけどもう、あとはカルモトを信じて、ついていくしかないのです（いっぽうライアンのうしろに乗っているロビーは、こちらはライアンをたよるしかありませんでしたから、「し、しつかりね！」といってライアンのその小さなからだにしがみつけばかりでした）。

丘をくだって下に広がる土地におりてから、すぐに。一行はほとんど消えかかったむかしの街道の上を横切ることになりました。それはまさに、人々からすて去られ、忘れ去られた、西の街道そのものにほかなりませんでした。ですが旅の者たちが「これが西の……」といかけたときには、カルモトがもう、さつさとさきへいつてしまいましたので、みんなはその街道を、じつくりながめているひまもなかったのです（まあ、あとでゆつくり見ればいいですけど）。

そこから四ぶんの一マイルもいかないうちに、あたりの景色は急に変わってしまいました。あちこちぬまだらけで、背の高いこがね色の草があたりいちめんに生えていたのです。そう、一行はついに、魔女の塔のあるしつちたいの中へとふみこみました。

ここではカルモトもさすがに、馬の足をゆるめました。道はどろどろのぬかるみ道ばかりで、かわいているところはごくわずかしかなかった。カルモトはそのわずかなかわいた道をさぐりあてながら、馬を進めていきました（ちなみに、ここからベーカーランドにむかう西の街道の方にも、魔女のしはいの土地であると思われるしつちたいが、ずっと広がっていました。ですけどそちらのしつちたいは、この目の前に広がる深いしつちたいにくらべたら、たとえ騎馬たちをつれていたとしても、まだまだ進みやすい、ふつう(?)のしつちたいだったのです。魔女の塔へとつづくこの深いしつちたいは、ふつうだったらぜんぜん、人が通るようなところではありませんでした）。

この道ははばもせまく、馬が一頭通りぬけるので、やっとでした。しかもあたりには、馬の背たけよりもなお背の高い草が、いちめんに生えていたのです。ですからあたりのようすも、まったくわかりません。ここでやくに立ったのが……、なんと、あのやかましい、木の音

楽隊だったのです！ この音楽隊のたいこの音で、みんなはさきをゆく仲間たちが今どこにいるのか？ 道がどこにのびていくのか？ それらのことを知る事ができました（カルモトはこのために、この音楽隊をつれてきたのでしょうか？ もしそうだとしたら、さすがです。でもカルモトのことでしたから、そこまで考えていたのかどうか？ ぎもんですが……）。

ばつちやーん！

そのとき。道のさきの方から、なにかが水に落ちる音がしました。見ると、さきを進んでいる木の兵士たちのうちのひとりが、馬の足をすべらせて、馬ごとぬまの中に、落っこちてしまっていたのです！ みんなは、たいへん、助けなきや！ と身を乗り出しましたが、カルモトはれいせいな顔のまま、みんなのことを手でせいして、こういっばかりでした。

「だめだ。もう、助けられん。へたをすれば、きみたちまで、ぬまの底だぞ。」

見るまに、木の馬と木の者たち（これは木の兵士とその背中の中の木の音楽隊のことです）は、ずぶずぶずんでいってしまいました。そしてそのまま、かれらはもとのただの木へと、もどっていつてしまったのです。そしてさいごのえだのいっぽんがしずみきってしまうと、ぬまはまた、なにごともなかったかのように、静かな水めんへともどりました。

「みんな！ おたがいのからだを、ロープでつなぐんだ！」ベルグエラムが思わず、さげびました。どうやら旅の者たちは、あんないやくのカルモトがいるからと、すこしゆだんしすぎていたみたいです。カルモトがいてもだめなときはだめなんだということが、これではつきりしました！ これからは、もつとしつかり、用心していかない！（というより、用心しようにもカルモトがさっさとさきに進んでいつてしまうので、旅の者たちもあわてて、ついていくしかなかったのです。ここでもうやく、なかばごういんに、「カルモトどの！ カルモト

どの！ ちよつとお待ちを！」といつてベルグエルムがカルモトの足をとめたので、かれらはおたがいのからだを、ロープでつなぐことができず。これからはなにかあったら、カルモトにえんりよしている場合ではありませぬ。自分たちでできることは、自分たちでやらないと！ 旅の者たちはここで大いに、はんせいをしました。」

そこからみんなは、前よりもなおいつそう、ゆつくりと、しんちように、道を進んでいきました。ですがしばらくたってからは、あんないやくのカルモトでさえも、安全な道を見つけないのがこんなになつてしまったのです。いぜんカルモトがこのしつちたいにきたのは、もう三十年近くも前のことでした。そのころにくらべて、このしつちたいはずいぶんと大きくなり、道もずいぶんと変わつてしまつていたのです。そして……。

「だめだ。」

カルモトが急にいいました。いったい、どうしたのでしよう？

「ここからさきへは、進めない。道がなくなつてしまつた。」

なんですつて！ みんなはびっくりして、カルモトにつめよります。

「道がないって、それじゃどうやって、あの塔までいくのさー！」ライアンがいいました。ですがカルモトは、またしてもなんでもないといった顔をして、こうこたえるばかりだったので。

「心配するな。だいじょうぶだ。」

しかしどう考えても、だいじょうぶとは思えませんけど……。みんなはさきのようにすをたしかめてみましたが、カルモトのいう通り、どこをさがしてもしつかりとした道らしきものは見つからず、どろどろのぬかるみと、底なしのおそろしいぬまたちが、待ちかまえているばかりでした（ところで、読者のみなさんの中にはこう思った方もいるかもしれませぬ。カルモトさんの魔法でアルミラみたいに、空をふわーっ！ と飛んでいったらいいじゃないかって。ですがさんねんながら、魔法とは、つねにばんのうだというわけではないのです。白魔法、黒魔法。魔法にはたくさん力のしゆるいがあつて、カルモトの使う魔法は、木と植物にかんけいの深いものでした。その魔法では

アルミラのように、空を飛んだり浮かんだりするということは、できなかつたのです。ですがそれはけつして、カルモトの持つ魔法の力が弱いからというわけではありません。カルモトはたぐいまれなる力を持った、すばらしいまじゆつしです。ですがその魔法の力は、空を飛ぶのに使うようなものではなかつたというだけのことでした。

「ついでに。もどるぞ。」

そういうやいなや。カルモトは馬の首をうしろにかえして、もときた道をひきかえしはじめてしまいました。いったいどこへゆくつもりなのでしょう？ もどつたとしても、どこにも塔へとつづくような道は、なかつたはずです（ライアンが、「ちよつと！ いったい、どこいくのさ？」と声をかけましたが、カルモトは「ついでにければわかる。」といつて、さつさとさきへいってしまいました）。

しばらく道をもどつたころ。カルモトが急にとまりました。

「うむ、ここだ。」

カルモトはそういって、そこに生えている背の高い、あのこがね色の草の葉をかきわけます。すると……、そこにそこから見たのではけつしてわからないような、ほそい、木で作られた道が、ぬまのむこうへとむかつてつづいていました！

「カルモトどの、この道はいったい……？」ベルグエルムが声をかけましたが、カルモトはいつもの通りに、さつさとその木の道を進んでいってしまいます。

「ここは、フログルたちの道だ。かれらに、協力をたのんでみよう。」馬を進ませながら、カルモトがいました。なるほど、（前にもいいましたが）じもとのことならじもとの者にきくのが、いちばんですものね。このぬまに住むというかえるの種族、フログルたちなら、塔へとつづくべつこの道を知っているかもしれません。

「でもさ、」ライアンが、カルモトの背中にむかつていいました。「フログルの人たちって、もうなん十年も、人とかかわろうとしないで、ぬま地のおくにかくれ住んでることなんですよ？ それって、ほかの種族の人たちのことが、きらいってことだよね？ いくらカルモトさんのたのみでも、今でもちやんと、力を貸してくれるのかな？ む

かしは、魔女と戦ってくれたそうだけど。」

そんなライアンの言葉に、カルモトは、ぱっ！と急にふりかえって、それからにこっ！とまんめんの笑顔を浮かべて、いいました（みんなははじめてカルモトの笑う顔を見ました。ですからみんな、ものすごくびびくりしてしまったのです）。

「問題ない！　じつに、気のいいれんちゆうだぞ。きみたちもきつと、気にいるはずだ！」

木でできたそのひみつの道をしばらく進んでいくと、あたりはだんだん、ぬま地から岩だらけの場所へと変わっていきました。もう魔女の塔からは、だいぶはなれてしまっております。やがて木の道が終わると、一行は土の地面にたどりつきました（みんなはかたい地面の上にとどりつくことができ、ちよつとほつとしてしまったものでした）。この場所は岩ばかりで、まわりはぐるりと高い岩山にかこまれております。草木もほとんど生えておらず、地面には大小さまざまな岩が、ごろごろとところがつているばかりでした（ぬまに落つこちる心配はもうありませんでしたが、ほんとうにこんなかわいた岩だらけのところ、みずべを好むかえるの種族であるフログルたちが、いるのでしょうか？）。

カルモトはあたりの岩場をくまなくしらべてまわりました。そしてやがて、なにかになつとくしたかのように「ふむ。」とつぶやくと、旅の者たちにむかっていったのです。

「ここですばらく、待つとしよう。たいこの音が、かれらをよんでくれる。」

カルモトはそういって、つれてきていた音楽隊にむかって、ゆびをばちんとならしました。すると木の音楽隊は前よりもなおいつそう、はげしいマーチング曲をうちならしはじめたのです！

「うるさーいー！　ライアンがあまりのうるささに、耳をふさいでさげびました。ロビーもベルグエルムも、たまらずに耳をふさいでしまいます。ほんとうにこんなことで、フログルたちがきてくれるのでしょうか？　しかしそれから、二分もたたないうちのこと……。」

「カルデインどの！ カルデインどのだ！」

急にみんなの頭の上から、だれかの声が入ってきました！ 見ると、高い岩山のでっぺんに、ふたつの小さな人影が見えたのです。フログルたちでしょうか？

「今、そちらにまいります！」

かれらはそういうと、つぎのしゅんかん！ なんとその高さからみんなのもとへとむかって、ぴよーん！ 飛びおりてきました！

あ、あぶないっ！ みんなは思わず、目をおおってしまいました。なにしろ岩山の上までは七十フィートほどもありましたから、とうぜんです！ しかし飛びおりてきたかれらは、つき出た岩をなんとか、ぴよーんぴよーんと足でけりながらおりてきて、それからまるでなんでもないことのように、そのままぴよーん！ と地面の上におり立ちました！（す、すごい！）

みんなの前に立っていたのは、ふたりの男の人たちでした（ねんれいはよくわかりません）。動物のかわでできたよろいを着ていて、つるつると光るこがね色のかぶとをかぶっております。腰には剣もさしてあって、どうやらこの人たちは、どこかの兵士たち
のようでした。

「カルデインどの、おひさしぶりにございます。」

ふたりの兵士たちはそういつて地面にひざをつけて、カルモトにうやうやしく頭を下げました（カルデインというのは、かれらがカルモトのことをよぶよび名でした。かれらはカルモトに教えてもらった「みじかくしよりやくした名まえ」をおぼえることができませんでしたので、そのはじめのカルデインというところだけを取って、カルデインのとよぶことにしたのです。やっぱりあれじゃ、だれにもおぼえてもらえませんよね……）。その人たちはとても大きな目と口をしていて、とてもあいきょうのある顔立ちをしております（ねこの顔

を思い浮かべてもらえれば、かれらの顔に近いと思います。しかも頭にかぶっているかぶとには、まるい目のようなかざりがふたつ、ちよこんと取りつけられていました(あれ? これってどこかで見たような気が……)。そのかざりのせいで、かれらは兵士であるのにもかかわらず、とつてもかわいらしく見えてしまうのです。

「おお、きみか、カルル。それと、きみは、クプルだな。なんというみじかい名まえだ。忘れようにも忘れられんぞ。ひさしぶりだが、げんきそうだな。」

カルモトがかれらにこたえて、いいました。そう、かれらはまさしく、この地に住むというかえるの種族、フログルたちにほかならなかつたのです。なるほど、あの高い岩山から飛びおりてぜんぜんへいきなのですから、やつぱりかれらは、かえるの種族でした。今でこそ見た目は人とあんまり変わりありませんでしたが、それでもまだ、これだけのうんどうのうりよくをかねそなえていたのです。

「おかげさまで!」カルルとクプルとよばれたそのフログルの兵士たちは、そういって、にこっ! とまんめんの笑顔を見せました。「やつぱり、カルデインどのはすごい! あすにもわれらは、あなたのもとを、たずねようとしていたところでしたのに! それも全部、お見通しでいらっしやったのですね? わざわざカルデインどの方からお越しくださるとは、きょうしゆくにございます!」

なんですって? なにやらずいふんと、話がくいちがつているみたいですが……。いったいこれは、どういうことなのでしょう?

ここでみなさん。物語のちよつと前のことを思い出してみてください。旅の者たちがモーグの地下のひみつのぬけ道の中で、ぶよぶよのとうめいおぼけ(ゼリーモンスターという名まえのかいぶつでした)に追われていたときのこと。ちようどそのころ、とある草むらで、ふたりの兵士たちがなにかの話をしていましたよね? じつはあのふたりの兵士たちこそが、まさに今、みんなの目の前にいるふたり、カルルとクプルという名まえの兵士たちでした(かみの長い方がカルル。かみがみじかく、そしてちよつと気弱なせいかくの方がクプルでした)。

そしてあのときかれらが話していたのは、まさに、魔女のブリキの塔についてのことだったのです(どんな話しだつたっけ? という方は、ここでちよつと本のページをもどして、かれらの出てきた場面をもういちど読んでみるのもいいでしょう。前の章の、さいしよに近いあたりです。このページにしおりをはさんでおくのを、忘れずに)。その魔女の塔へのたいさくのために、かれらはあすにも、カルモトのもとをたずねようとしていたというわけでした。

「カルデインどの。」カルルがカルモトにいいました(「カル」のつく名まえばかりでちよつとややこしいのですが、かんべんしてくださいね。カルモトとカルデインは同じ人。カルルはフログルの兵士です)。「あの塔にまた、影があらわれました。あの塔はまだ、生きています。カルデインどのの力をのがれた者たちが、いまだ生き長らえているに、ちがいません。」

カルルのいう影というのは、もちろんモーグのまちをおせいフェリアルのたましいまでうばっていった、あの影のおばけたちのことでした。やはりあの影たちは、魔女の塔からやってきていたのです。そして影たちは主人のアルミラがいなくなつてからも、「モーグにはいいこんだ者のたましいをうばう」というそのめいれいを、いまだに守りつづけていました(これはつまり、アルミラが手下の影たちのことを、与えためいれいもろとも、そのままほつたらかしにしていったからなのです。やつぱりこれも、木の兵士たちをほつたらかしにしておいたカルモトに、よくにていますよね)。

さて、これをきいて、カルモトはどうこたえるのでしょうか?

カルモトはしばらく、いつものむつつりとした顔をしたままだまりこくっていました(が、とつぜんまた、頭をぺこり! と下げていいました(こんどはあまりのいきおいに、頭を地面にごつん! とぶつけてしまったほどでした! それに加えてからだの方から、なにかがぐしやつ! とつぶれるような音がしたので、旅の者たちはまた心配しました(が……))。

「すまん。わたしはてつきり、あの塔はどうのむかしに死んだものだとはかり思っていたのだが、今日、この者たちにいわれて、それで

はじめて、あの塔の今のようすのことなどを知ったのだ。君たちにも、すまないことをした。じつに、うっかりだった。」

さて、フログルたちの反応は？

カルルとクプルはおたがいの顔を見あわせて、しばらくなにやら小声で耳うちをしていますが（クプルの「やっぱり知らなかったんじゃないか！」という声のあと、カルルの「わかってるよ！」という声が、ちよつときこえました……）、やがてふたりとも地面にひざまずいて、うやうやしくカルモトにいいました。

「なにをおっしゃいますか、カルディンどの。われらは、あなたにかんしゃこそすれ、あなたに頭を下げられることなど、なにひとつごさいません。これはもとより、われらの地に起こった、われらの問題なのです。あなたは、きらわれ者のわれら種族のことを、しんせつに助けてくださった。われらは、あなたの友。ともにささえ、助けあう、まことの友にございます。」

よかった、どうやら怒ってしまったというわけではないようです。それにこのフログルたちの、なんとれいぎ正しく、友だち思いなこと！ 南のくにやモーグの人たちがかってに思いこんでしまっている、「フログルたちはとつても危険でおそろしい者たちだ」なんていううわさは、かれらのことを見れば、ぜんぜんちがうということがわかるはずです。

お伝えしました通り、フログルたちもまた、魔女のことをきらい、にくんでいました。ですがかれらは、ただ魔女のすみかの近くに住んでいたということ、そしてほかの種族の者たちとかかわりあいを持たない、なぞめいた種族であるということ、そのふたつのりゆうだけで、魔女の手下だなんていう、あらぬうたがいをかけられていたのです（まったくもつて、ひどい話ですよね！）

ところで。かえるの種族のかれらが魔女の塔のすぐ近くに住んでいたのなら、なぜアルミラは、かれらのことをおそわなかったのでしょうか？ ロザムンディアのまちまでいなくても、すぐ近くに、必要なたましいがたくさんあったはずなのに。こたえはかんたん。アルミラはこんなにも近くにフログルという者たちが住んでいると

いうことを、知らなかったのです。フログルたちはしつちたいのおく
深くの地に、かくれるようにして住んでいました。ですからアルミラ
はかれらのことに気がつかず、もっと目立つ、ひとめでわかるロザム
ンディアのまちに、たましいをうばいにいったというわけだったので
す。

もともとフログルという種族は、ほかの種族の者たちとつきあいの
うすい種族でした。これは大むかし、このあたりで大きなあらしいご
とがあつて、かれらもそのあらしいにまきこまれ、さんざんな目に
あつたことがげんいんだつたのです(このあらしいは「海と山の戦い」
とよばれているもので、その名の通り、海のみと山のたみがつまら
ないあらしいを起こしたものでした。このときいらいフログルたち
は、ほかの種族の者たちとは、あまりかかわろうとはしなくなつたの
です)。かれらがしつちたいからはなれた岩山の中にかくれるように
して住んでいるのも、ほかの種族の者たちとあらしいが起きること
を、おそれてのことからでした。

ですがかれらは、けつしてたにんぎらいで、つきあいが悪いとい
う者たちではありません。カルモトとの友じょうのように、しんせつに
してくれる者に対しては、かれらはとつてもちゆうじつで、心をひら
いてくれたのです(カルモトがみんなに、「きつと氣にいるはずだ」と
いったのも、わかりますね)。

「まことにすまない。」カルモトはそういつて、また頭を下げました。
「こんどこそ、あの塔にきつちりとどめをさしてくれよう。そのた
めには、きみたちの助けがいるのだ。ぬまが思ったよりも広がつてい
て、塔に近づくことができない。きみたちのあの乗りものなら、ぬま
を越えて、塔までゆけると思うのだが、あれはまだ使えるのだろうか
？」

フログルの乗りもの？ カルモトの言葉に、旅の者たちはおたがいの
顔を見あわせました。ですがそんなみんなのぎもんをよそに、カル
ルとクプルのふたりは、またまんめんの笑顔を浮かべて、こうこたえ
るばかりだったのです。

「もちろん！ あれですね？ あれなら塔まで、すぐにいけますよ

！ さあ、わが家までごあんないします。みなさん、ごいっしょに！
うれしいな！ カルディンどのが、また助けてくれる！」

それから一行は、騎馬たちと木馬たちをぞろぞろとひきつれて、フログルたちが住んでいるというその場所まであんないされていきました（さいしょ、「さあ、こっちですよ！」といってカルルとクプルのふたりが、さつき飛びおりてきた岩山をびよんびよんのぼっていつてしまいました、むりですから！ そんなことができるのは、かえるの種族であるフログルたちくらいです！ すぐにかれらは、「あ、すいません。みなさんにはむりでしたね。」といってあやまりました。せまい岩のあいだをなんでもすりぬけていったので、もしフログルたちのあんないがないければ、一行はたちまち、道にまよってしまったことでしょう。そのうえこの場所はどこをむいても同じような岩山ばかりで、どちらのほうこうにむかっているのか？ それさえもよくわからなかったのです（さすがのベルグエルムでも、高い岩山の影にかくれたおひさまからほうがくをたしかめるのは、むりでした）。みんなはなんどもカルルとクプルのふたりのすがたを見失ってしまいました。だが、そのたびにフログルたちは、岩の影からびよこんと顔だけを出して、「こっちはですよ！」とにっこり笑っていました。

そしてそれから、しばらく進んでいったときのこと。つづく岩の道のそのさきから、カルルとクプルのふたりが、とてもうれしそうに一行のことをこんな言葉でむかえたのです。

「みなさん！ ようこそ、わが家へ！」

その岩山のすきまをぬけると……。

とつぜん、目の前にたくさんの木でできた家なみがあらわれました！ そこはなんとも気持ちのよいところでした。地面はいちめん、きれいな水をたたえたあさい池になっていて、その池の底には、青くかがやくふしぎな小石がしきつめられていたのです（この池はもともとこの場所にあったものではありません。水をあいするかれらフログ

ルたちが、なんとか水のそばで暮らしたいと思って、自分たちの手で作り上げたものなのです。池の水めんにはまるいかたちをした葉っぱがたくさん浮かんでいて、その葉からのびるくきのさきに、白い大きな花をさかせていました。

フログルたちの家は、その池の上にとっついていました。家と家のあいだには、木でできたらうかが張りめぐらされていて、自由にいききができるようになっております。それだけならふつうの人でも通れましたが、この場所にはかえるの種族であるかれらならではの道までつくられていました。

この場所はまわりをぐるりと高い岩山でかこまれていましたが、見上げてみると、たてものはその岩山の上の方まで、たくさんつくられていました。そしてそれらのたてものをつないでいるのは、いくつかの、木でできたふみ板だけだったのです！ かいだんもはしごもありません。つまりそれらのたてものにくいためには、それぞれの板のあいだを、ぴよーんぴよーん！ ととんでいくしかありませんでした！

さすが、フログルたちの家ですね！（ところで、かれらと出会った岩場からめいろのような道を進んでここまでやってくるのに、二十分ほどかかりましたが、フログルたちは岩の上をぴよんぴよん進めましたので、ここまでやってくるのに、一分もかからないそうです！）ですからカルルとクプルのふたりは、カルモトの木の音楽隊のマーチングをききつけて、すぐさま、みんなのところまでかけつけてきたというわけでした。それにしても、早いとうちやくでしたよね！）

「ここは、トーディア。フログルたちの家だ。」カルモトが旅の者たちにいいました。

「じつにひさしぶりだが、変わりが無い。じつによいところだ。どれ、」

そういうとカルモトは、コートとぼうしをぬいで「すん！」としんこきゆうをしてから、そのままなんと、池の水の中にじゃぼじゃぼとはいってしまいましたのです（まさかおよぐとか？ この寒いきせつなの？）。そしてカルモトはひざぐらいまで水につかると、ふしぎそうに見つめる旅の者たちのことをしり目に、両手を空にかかげて

目をつむりました。

すると……！

カルモトの足もとの水がゆらゆらとカルモトの方にむかって動いていったかと思うと、とつぜん、カルモトのその首のつけねのあたりから、たくさんの小さな水のはしらが、ぴゅーぴゅーとそとに吹き出したのです！　そしてそれは、かかげた両手のその手首のところからも、どんとどんと吹き出していきました！（よく見るとカルモトの衣服のところどころにも、まるくぬれたあとができていました。どうやら同じような水のはしらが、カルモトの衣服の下、からだのいたるところから吹き出しているようです。これはいったい……？）

ひと通り水を吹き出し終わると、カルモトはじつに気持ちよさそうに、「ふうー！」と息をつきました。その首のところからは、まだ水がすこし、吹き出ております。はでなデザインのはき物は吹き出た水でもうびっしりになっていて、カルモトはまるで犬みたいなのに、からだをぶるぶるっ！　とふるわせて、その表面の水をはらいました。

「じつにいい水だ。きみたちもやったらどうだ？」カルモトはそういって旅の者たちのことを見やりましたが、とつぜんのことに、旅の者たちはただただびっくりしてしまって、それどころではありません（いきなりこんなものを見せられたら、それはおどろきますよね）。

「な、なにそれ？　なにが起こったの？」ライオンが思わずたずねました。

そして旅の者たちはそれから、カルモトのそのおどろきのひみつを知ることもなかったのです。

カルモトは「そんなこともわからんのか。」といってはでなズボンのすそをめくって、旅の者たちに自分の足を見せました。すると、なんとそこには、ほんらいの生身の足のかわりに木のみきがいつぽん、よきつと生えていたのです！　しかもカルモトのいうことには、それは切った木のみきをあとからくっつけたというようなものではぜんぜんなくて、まさに今そこに生きて育っている、ほんものの木なのだということでした！（小さなつぼみがついているし、花までさいていました。）足首からさきはカルモトの生身のからだでしたが、その

足首のあたりで、その木がカルモトの生身のからだどまざりあうように、とけこんでつながっていたのです！ な、なんか、すごい……！ おどろくみんなのを見て、カルモトは「しかたない。」といってこんどははでな服をめくって、おなかの上まで見せてくれましたが、そこで旅の者たちが見たものは……。

「またもや木です！ なんとカルモトのからだは、首の下から手首足首のところまで、全部生きている木でできていました！ ええーっ！（つまり……、さきほどカルモトのからだから吹き出した水は、カルモトが足もとの水を、この木のからだを通してすい上げていたものでした！ カルモトはそうやって、まさに植物のように、からだ中に水をいき渡らせていたのです！）」

「わたしは、木の学者だ。」おどろくみんなのことをよそに、カルモトがれいせいな顔をしていました。「木には、たねから生まれて花をさかせるまで、なん百年とかかるものもある。木の前で、人などなんと、小さなものか。その木の心に近づくためには、木とひとつになることがいちばんなのだ。」（なるほど……、わかったような、わからないような……。とにかくすごい！）」

カルモトがこの木のからだになったのは、もう二百年以上も前のことだということでした。それいらいかれは、まさに木とひとつになって、しぜんの力のけんきゆうにうちこんできたのです。でも、ちよつと待って！ カルモトさん、いったい今、いくつなんですか？

「さあ、ゆくぞ。かれらが待っている。」カルモトはそういつてまたさつさといつてしまいましたが、のちにかくにんしてみましたところ、かれはこのとき、四百二十一さいだったそうです！ それでも木のねんれいでいったら、まだまだ若いそうでした。うくん、木つてすごい！（ところで、カルモトが頭をぺこりと下げたとき、ぼきっ！とか、ぐしやつ！とか、いやな音がなっていましたよね？ そのこたえはじつは、この木のからだにあつたのです。頭を下げたとき木のからだにむりな力がかかって、おれたりつぶれたりして、あんないやな音がなつていたというわけでした。カルモトのいうことには、放っておけばそのうちもともどるといふことでしたが……。うくん。）

それからみんなはあらためて、フログルたちの家であるトーディアの中へとあんなにいきましました（みんなの騎馬たちと木の馬たち、そして木の兵士たちと音楽隊は、ここでしばらくフログルたちのもとにあずけることになりました。塔までゆくための乗りものには、かぎられた人数しか乗っていけないということでしたから。それならしかたありませんけど……、いったいその乗りものって、どんなものなのでしょうか？ それはもうすこしあとのお楽しみ……）。このトーディアというところは大きさからいうと、小さな村ほどの大きさがありました。ですがフログルたちはこの場所を村とはいわず、わが家とよんでいたのです。フログルたちにとっては種族の者たちはすべて、ひとつの家族のようなものであって、かれらは自分たちの住んでいるところを村やまちななどといったように分けて考えたりはしませんでした（わたしたちもみんな、こんなふうに暮らせたらいいますけど）。

フログルたちの話では、このあたりの岩山には、このトーディアのようなところがいくつかあるそうでした。ですがそれらはすべて、かれらにしかわからない岩山のおくのひみつの場所に、ただひっそりとそんざいしているものだったのです。このトーディアをふくめて、これらの住む地はほんとうに、ふつうの旅人たちがけっして立ちいることのできない、かくされた場所でした。旅の者たちは今、そんなとくべつな場所にきていたのです。

「では、みなさん。」カルルがにっこり笑っていいました。「ボートのところまで、ごあんないします。ニヨキニヨキばたけのむこうですよ。さあ、ついてきてください。」

ボート？ ニヨキニヨキ？

みんなはカルルがなにをいっているのか？ よくわかりませんでしたので、ただぼかんとしてしまうばかりでした。ですがカルモトがやっぱりさつきさといってしまうましたので、あわててあとを追いかけたのです。

池の上に渡された木のろうかを歩いて行って、しばらくすると。みんなの前にいちめんの葉っぱの生いしげる、広いはたけがあらわれま

した。しかしはたけといっても、よく見ると葉っぱの下の方は水につかっていたのです(ですからたんぼといった方がぴったりくるかもしれません)。

「ニヨキニヨキですよ。」めずらしそうにそのはたけをながめている旅の者たちに、クプルがいました。「水の中に、いもが育つんです。おいしいですよ。」

どうやらこのニヨキニヨキという名のおいもが、かれらの主食のようでした。によきによきとよく育つから、その名がついたそうです。うくん、そのまんまですね。ほかにもこのあたりには、フワフワという名のちようちよがいっぱい飛んでいて、かれらはそのちようちよも食べてしまうのだということでした！ うくん、おいしいんでしょか……？(じつさいはたけのそばに飛んでいるフワフワを見つけたクプルが、大きな口をあけてそのままばくん！ と食べてしまいました！ なんでもカステラみたいな味がするそうなのですが、「みなさんもどうぞ！」というクプルの申し出には、さすがにみんな、「おかまいなく！」とこたえるばかりでした……。

ところで、やっぱりこのフワフワは、ふわふわ飛んでいるからその名がついたそうです。ほんとうにそのまんまですね。)

さて、ニヨキニヨキというのはわかりましたが、それではボートとは？

「ボートって、いったってき、」カルルたちのあとをついて歩きながら、ライアンがロビーにいました。「まさかほんとうに、水に浮かべるあのボートじゃないよね？」

「乗りものって、そのことかな？」ロビーがこたえていいました。「たしかに、水の上をゆくのなら、ボートがいちばんだけど……」
ライアンがつづけます。

「だって、ボートがあつたって、それで魔女の塔までいけるの？ ぬまどぬまのあいだには、なんでも飲みこんじゃうっていう、危険などろどろ道だっていっぱいあるんだよ？ そんなとこにでっかいボートなんか持ちこんだら、それこそみんな、いっぱいどろの底じゃない。」

「うーん、そうだね。どうするのかな……？」

ライアンのいう通り、たとえばあのぬま地にボートを持ちこんだとしても、さきに進むのはむりでしょう。底なしのぬまはひとつだけではなく、たくさんのぬまがどろどろのぬかるみ道によってあみの目のようにつながっていましたが、カルモトのいうことにはそのぬかるみ道は、人だろがボートだろうが、あつというまにずぶずぶと飲みこんでいってしまうという、じつにおそろしい道なのだということでした！（ですからカルモトは、「道がなくなってしまった」といったのです。そんなの、道とよべるはずありませんから！）

そんなところにはいりこんだら、ボートなどあってもなくても同じです。ぬまの上ならまだボートも浮かぶでしょうが、ぬまからぬまへ、ボートをはこぼうとしているあいだに、ボートもろともけつきよくみんな、どろの底ですもの！（ライアンのわざを使って、風の力で自分たちの乗ったボートを吹き飛ばして進める！ というのもむりがありました。たとえばひとりずつボートに乗るとしても、人の乗ったボートを吹き飛ばして進めようというのなら、かなりのいりよくの力が必要ですから、そんな力を加えれば、かくじつにボートがこわれてしまうことでしょう。それにもしボートを吹き飛ばせたとしても、ちゃんとまっすぐに飛ぶというほしうもありませんし、なによりもまず、自分たちの身があやういのです。安全のほしうもないままに、ライアンのおそろしいまでの風の力を、自分の乗っているボートにちよくせつぶつつけられるんですから！）

ではいったいどうやってカルモトは、そんなボートを使って、魔法の塔までいこうというのでしょうか？（そのボートに、なにかとくべつな魔法でもかけるとか？）ですが旅の者たちのそのぎもんは、それからすぐに晴れることになりました。なんとも思いもかけなかった、いがいなたんかいによつて。

「みんな！ カルティンどのがきたよ！ おつれの方もいっしょだよ！」

カルルが大きな声で、仲間たちによびかけます。そのよびかけのさきにはなんんかのプログルたちがいて、なにかみどり色をした大きな

ものを、手いれしているかのようでした。

「おおー」「カルディンどのだ!」「おげんきそうどうぞ!」「あ、フワフワだ! ぱくん!」

フログルたちはカルルとクプルのふたりと同じく、カルモトのことを見て大よろこびでした(ひとりだけ、べつの方に気がいつてしまった者がいましたが……)。そしてカルモトはそんなみんなにむかつていねいにあいさつをすると、こんどはその中のひとりに対して、うやうやしく頭を下げていったのです。

「モラニス、ひさしぶりだ。」

モラニスとよばれたその人は、うれしそうに、しかしひかえめな笑顔で、カルモトにこたえていました。

「やはり、あらわれたな。そんな気がしておったのだ。」

モラニス・レンブランド。かれは地面までたれるくらいの白くて長いひげを生やしている、フログルの長老でした。ねんれいはもう、二百さい近いそうです!(じっさいはカルモトの方がとしは上でしたが、見た目にはモラニスさんの方が、ぜんぜんおとしよりでした。)カルモトとは古くからのつきあいがあつて、なにかこまりごとがあるたびに、おたがいちえや力をかりあつている仲なのだそうでした。カルモトがフログルたちのことをよく知っているのも、じつはこのモラニス長老とのつきあいによるところが大きかったです(モラニスはカルモトのふるさとのガランタ大陸にいたこともあつて、カルモトとはそこで难道か、旅をともしたこともあるそうでした。どんな旅だったのでしょうか? ちよつと、きょうみがありますね)。

そしてフログルたちがカルモトのことをよく知っているのも、またこのモラニスのおかげでした。魔女のアルミラがあらわれたときには、カルモトのことをさがし出して力をもとめるようにていあんしたのは、ほかでもない、このモラニスだったのです(ちなみに、カルモトはルイーザの木のところをひっこしてきたときに、「近くに越してきたぞ。」といつてフログルたちのところにも顔を出していたのです。

そのときちやんと、新たな住所をかれらに伝えていたのなら、フログルたちはもつとかんたんにカルモトのことを見つけることができましたが、そこはやっぱり、いいかげんでせつかちなせいかくのカルモトでしたから、フログルたちが住所をたずねるひまもないうちに、「急用があつた!」と行ってすこしのでんごんを書いたメモ書きだけを残して、追いかけるフログルたちの声もとどかぬままに、さっさとかれらのもとを去ってしまいました。たいざい時間、わずか三十びょう! それからずっと、カルモトはフログルたちのもとをおとずれることはなかつたのです。そのためフログルたちは、カルモトのことを見つけるのに、だいぶくろうしました。

「だいたい、東の山の方にいるから。」

カルモトはフログルたちに、それしか書き残していなかつたのです……。これじゃ見つけるのに、くろうするはずですな……。

「ボートのじゅんびは、すっかりできておる。すぐに出発できるぞ。」モラニスはうしろの池の上に浮かんでいるあるものをしめしながら、そういいました。それは……。

「なにこれー! かわいいー!」ライオンが思わず、さげびました。そこにあつたのは、みどり色のペンキできれいに色がぬられた、二そうのボートだったので(やっぱりそのまま、ボートでしたね!)。そしてそのボートのさきつぽには、木で作られた、なんともかわいらしいかえるの頭をかた取ったでっかい船かざりが、取りつけられていました(ライオンが思わず、かわいい! とさげんでしまったのも、わかります。これではまるで、ゆうえんちにある子どもむけの乗りものみたいですよ)。

「ありがたい。」カルモトがモラニスにかんしゃして、いいました。「さすがだ、モラニス。きみはいつでも、わたしのぞむ通りのことをしてくれる。」

「おまえさんのことは、よくわかっておるからな。」モラニスが、それにこたえていいました。「うっかりなところも、あいかわらさなあっておらんようだ。こんどこそ、たのむぞ。あの塔のわざわいに、しつかりとけつちやくをつけてきてくれ。」

そしてみんなはカルモトを先頭に、そのみどり色のボートの中に乗りこんだのです。ひとつ目のボートには、カルモト、ベルグエルム、ロビー、ライアンが乗り、ふたつ目に、カルル、クプル、そしていっしょに塔にむかってくることになった、イルクーとレングという名のふたりのフログルの兵士たちが、乗っていました(そのようすを見たら、みなさんは思わず吹き出してしまうかもしれません。だって、子どもむけみたいなかわいらしいかえるのボートに、からだの大きな騎士やよろいかぶとの兵士たちが、なかよくちよこんと、ならんですわって乗っているんですもの！ ゆいいつひとりだけ、ライアンだけは、とつてもよくにあっていました(……)。

さて、いわれるままに乗りこんだのはいいのですが、このあとといったい、どうするのでしょうか？ この池が魔女の塔までつづいているわけもありますでしたし、それによく見ると、ボートをこぐためのオールもペダルも、この船にはついていなかったのです。ただひとつ、あのかえるの頭のかわいい船かぎりに馬のたづなのようなひもがひとつついていましたが、まさかこの船が、馬みたいに走り出すというわけじゃありませんよね？ (カピバルのわざじゃあるまいし。)

みんながそう思っていると、ふたりのへんてこなかつこうをしたフログルたちがやってきて、それぞれのボートにひとりずつ乗りこみました。かれらはまるで、じどう車レースのうんてんしゅみたいなの、からだにぴったりの服を着こんでいて、つるつるのかぶと(やつぱりまるい目のようなかぎりがふたつついていました)をあごでしぼり、目には大きなゴーグルまでつけていたのです。いったい、かれらはなに者？

「わたしは、このボートのうんてんしゅ、ネリルです。魔女の塔までは、七分をよていしております。」

旅の者たちのボートに乗ってきたフログルがいきなりそういうと、旅の者たちにペこりと頭を下げて、かえるの頭の船かぎりの上にまたがって、そのたづなをとりました。

「では、出発しまーす！ みなさん、ベルトをよく、おしめくたさいーい！」

え？　ちよ、ちよつと！　なに？

みんながそう思うやいなや。ネリルという名のそのフログルが、たづなをばしん！　とたたきました。すると……！！

みんなを乗せたボートが、ぴよつこくん！　浮かんでいたその池から、むこうのニヨキニヨキばたけのその中まで、大ジャンプしたのです！

「うわわっ！」「ひゃあ！」「ひええー！」

みんなのびっくりしたことといったら！　どぎもをぬかれるとは、まさにこのことです！

なんとなんと！　このボートは水の上を進むんじやなくて、まさしくかえるみたいに、大ジャンプをくりかえして進むという、とんでもない乗りものでした！　その名もずばり、ケロケロボート！（すごいですけど、名まえはやっぱりそのまんまでした！）

「つぎは、岩山までまいりまーす！　みなさん、ふんばってくださいよー！」

うんでんしゆのネリルの言葉に、みんなはただただ、ボートのふちにしがみついて、ひっしに泣きさけぶばかりでした。

「た、助けてくれ〜！」

そのみんなのひめいから、ときをさかのぼること六日ほど前のこと……。

つめたいだいら石の床に、おそろしいなずまの光がうつりこみました。ここはたくさんのはしらが立ちならぶ、ただっ広い石づくりの部屋の中。部屋の西がわはすべて、見晴らしのいいバルコニーになっております。ですがどんなに見晴らしがよくても、そこから見える景色をじっくりながめたいと思う者は、あんまりいないことでしょう。そこには美しいみどりも、山々も、みずうみもありませんでした。見えるものはいえ、おそろしげなまっ黒な塔やたてもの。そしてそれらのたてものあいだをねり歩いてゆく、黒いよろいの兵士やきみ

の悪いかいぶつたち。そんなものたちばかりだったのです。

今その部屋のバルコニーから、それらの景色をひとりの人間の男の人がながめていました。手には赤いお酒のはいった、銀色のカップを持っております。その男の人は、とてもごうかな衣しよを身にまとっていました。こつたししゅうのはいった黒いシルクのガウンをおつていて、肩からは金色にかがやく、ふしぎな生きものの毛がわをにかけております。そして首からは、おそろしいりゅうのもんしゅうのはいった、まっ黒なメダルをひとつ、下げていました。

いったいこの人物は、なに者なのでしょうか？ 黒いかみを肩までのぼしていて、ひげはありません。ねんれいは、四十だいのなかばくらいでしょうか？ からだはとてもがっしりとしていて、背たけも六フィート以上はありました（これは人間にしてはかなりの長身です）。そしてなにより、はなれたところからでもわかるほどの、そのひめたる力のおそろしさ……！ それはまるで、おそろしいもうじゅうがそこにいるかのような、そんな感じでした。近づく者の心をみんなぼろぼろに、くじかせてしまうかのような……、かれのまわりには、そんなおそろしい力がみちあふれていたのです。

かれがなに者なのか？ それはこの部屋がなんのための部屋なのか？ それをお伝えすればおのずとあきらかになることでしょう。この部屋のいちばん北がわには、いすがひとつおかれてありました。そのいすにはごうかけんらんなそうしよくがなされていて、金銀宝石があしらわれております。それはただのいすではありませんでした。そのいすにすわることができるとは、ただひとり、この城のあるじだけだったのです。そう、そのいすは王さまだけがすわることのできる、ぎよくざとよばれるいすでした。この部屋は、王さまのための部屋。王さまがらいきやくをむかえたりほうこくを受けたりするときなどに使う、えっけんの間とよばれる部屋だったのです。ということ……。

この背の高い黒いかみの男の人。かれはまさしく、この部屋のあるじである王さまでした。しかしこんなおそろしげなところにあるお城に住んでいる、王さまって……？

読者のみなさんにはもうこの場所がどこで、この王さまがだれだか？ おわかりになられたことでしょう。このおそろしげなくにの名まえは、ワット。そしてこの男の人は、ほかでもありません。あの悪名高き黒の王、ワットのアルファズレド王、その人だったのです！

「きたか……」

アルファズレドはバルコニーのそばに立って、暗い空をながめながらいました。そこにはかなたの雲の切れまからこちらへとむかつて飛んでくる、黒い生きものたちのすがたが見えました。それは、あのデイルバグのかいぶつたちでした。そのかいぶつたちはまさに今、アルファズレド王の待つこのワットの黒き王城へと、むかつてきていたのです。

「いわれずとも、けっかはわかっておるわ。」アルファズレドはそういって、赤いお酒のはいったカップを口にはこびました。

やがて部屋の入り口に、ひとりの男の人が通されました。その人のうでは、エメラルド色の花のマークのはいった、白いリボンがまかれております。そう、この男の人はこの章のはじめにデイルバグのかいぶつからおり立ってきた、あのリボンをつけた男の人でした。

リボンをつけた男の人は、やりを持った兵士たちと石のはしらが立ちならぶその長い部屋の中を、アルファズレド王のもとへとむかつて足早に歩いていきました。そしてかれはあるじの前までやってくると、うやうやしくひざをついて、ただひとこと、ほうこくを伝えたのです。

「戦いにございます、へいか。」

「はっ！」その言葉をきくやいなや、アルファズレドが大きな声を上げていました。

「とうぜんのけっかよー！ アルマークのことならば、このおれが、いちばんよくわかつているー！」

アルマーク……。それはまさしく、ベーカーランドの白き王、アルマーク王のことでした。

「やつが、こうふくになど応じるものか！ 使者など出しても、むだなこと！ やつには、このおれの力をちよくせつ見せつけてやるの

が、いちばんなのだ！」

こうふく……。使者……。それはかなしみの森を出るときにベルグエルムがロビーに伝えた、そのさいごの話の中に出てきた言葉でした。ベーカーランドにワットからの使者がやってきたということ。そしてこうふくに応じなければ、ワットは全軍をもって、ベーカーランドにせめいるとも。

そう、みなさんのごそうぞうの通り。アルファズレド王のもとに今ほうこくを伝えにきた、このリボンをつけた男の人。この人物こそが、まさにアルファズレドのめいれいにより、ベーカーランドにこうふくするように申し伝えにいった、その使者だったのです！　そしてその使者が、今ついに、アルファズレドのもとへと戦いのほうこくを伝えました！（この白いリボンは使者であるということであらわすためのものでした。もしこのリボンをつけた者に危害を加えた場合、そのくににいくさを申しこんだのと同じことになるのです。）

いよいよ、戦いははじまるのです。このアークランドの運命をかけた、さいごの戦いが……。

「全軍に伝えよ！」

アルファズレドの口から、おそろしいさいごのめいれいがくだされようとしていました。

「兵をしゅうけつさせるのだ！　ただちに、ベーカーランドへとむけて、進軍をかいしせよ！」

ああ、いよいよです！　いよいよ、黒の軍勢がせまりくるのです！　敵の兵士たちがみんな集まってベーカーランドまでたどりつくのに、あとのかなりの時間がかかるのでしょうか？（このアルファズレドのめいれいから、もうすでに六日ほどがたっていたのです。）今からいつしゅうかんごでしょうか？　それとも四日ご？　三日ごかもしれません。それまでにわれらが白き勢力の者たちは、なんとしても、それにたいこうするしゅだんを取らなくてはなりませんでした。それがどんな方法なのかはわかりませんが、アルマーク王が、それを知っているはずです。

そして……。

黒の軍勢にうちかつたためのきぼうをつなげる、そのもつとも重要なやくめを果たすことができるのは、いい伝えのきゆうせいしゅである、ロビーだけなのです。ああ、早く！ 急いでロビー！

「アルマークめ……」アルファズレドが胸に下げた黒いメダルをにぎりしめながら、はきすてるようにつぶやきました。

「これで、ついに、きさまも終わりだ。長かったいんねんに、けつちやくをつけようではないか……」

アルファズレドはそういって、部屋のそとへと歩き去っていきました。

バルコニーのそとでは、ごろごろといなずまのうなる音がひびき渡っていました。それはまるで、ついに出番をむかえたおそろしいりゆうの、うなる声のようにもきこえました。

14、たましいかいほうボタン

「いたかー」

なまり色の空の中に、大きな声がひびき渡りました。ここはこのアーランドをふたつに分ける切り分け山脈の、その東がわ。リムルという小さな王国のみやこ、リムリアから、ほど遠くない場所でした。今その土地のはるかな上空を、三びきのまっ黒なからだを持ったかいぶつたちが、ぐるぐるとえんをえがきながら飛びまわっていました。それは（みなさんももうすっかりごぞんじの）あのワットの黒騎士たちの乗る、デイルバグのかいぶつたちでした。ということは……？ その背に乗っているのは、やはりあのおそろしい、黒騎士たちだったのです。

「だめだ！ 見つからない！」仲間の黒騎士のといかけに、山のむこうからもどってきたひとりの黒騎士がこたえました。

「ええい！ くそー」その言葉をきいた黒騎士が、自分の足をたたいて、きたない言葉でののしります。「いったい、どういうことだ！ やつらを目の前におきながら、見失うとは！」

いったいかれらは、なにをしているのでしょうか？ どうやらだれかを、さがしているような感じですが、さすがそのこたえは、読者のみなさんにならすぐわかることでしょう。ここは切り分け山脈の東の地。リュインのとりでが敵の手によってうばわれていらい、ワットの者たちによってはいされてしまった、南の街道の土地でした。そう、この黒騎士たちは今、自分たちの仲間のことをひどい目にあわせて「とんでもないやつら」のことを、けんめいになってさがしているところだったのです！ それはもちろん、セイレン大橋の上でこの黒騎士たちの仲間たちと戦った、ロビーたち一行にほかなりませんでした。そのロビーたちは敵の目からのがれるために、今、切り分け山脈の西がわ、だれもそんなところにいるなどは夢にも思わないであろう、うちすてられた西の街道の地にいるのです。ではこの南の街道の地で、ワットの黒騎士たちが目の前にまでせまったという、その者たちとは……？

そう、それはわれらが白の騎兵師団の騎士たち、ハミール・ナシユガーとキエリフ・アートハーグ。そしてゆうかんなるシープロンの者たち、レシリア・クレツシエンドとルースアン・トーンヘオン。かれら四名の勇者たちでした！（ルースアンのみようじは、トーンヘオンというんですね。）

黒騎士たちは首から下げた遠めがねをなんともぞきこみながら、くやしそうにあたりいったいをぐるぐると飛びまわっていました。かれらはこのあたりの土地の空をまかされている、ていさつのたつじんたちでした。そのかれらが目を皿のようにしてこんなにもさがしまわっているというのに、われらが仲間たちを見つけることができなかったのです。さすがはわれらが仲間たち！ でもいったい、どういうわけがあるのでしようか？

「敵は、なにかのじゅつを使っているのに、ちがいない！」

なるほど！ われらが仲間たちはそのなにかのじゅつを使って、うまくかくれることができていたようでした。ではそのじゅつとは？ みなさんにはもうおわかりですよ。そう、白きシープロンたちが使う、あのわざのことです。

黒騎士たちはしばらくあたりにとどまっていたましたが、やがてあきらめたように、デイルバグのむきを変えていいました。

「しかたない。出なおした。ガランドーさまに、このことをほうこくせねば。はんぎやく者どもめ、つきこそは、かならず、その首根っこしめ上げてくれる！」

黒騎士たちはそのまま、はるか東の山の方へと消えていきました。

それからしばらくたってからのこと。

ここは切り分け山脈のふもとの、岩の道……。

「いったようだ……」

声のぬしは、われらがハミールでした。そしてその言葉のつぎのしゅんかん。かれらの上にかかっていたまぼろしのバリアーが、音もなくふうつと消えていったのです！ これはもちろん、シープロンの使うしぜんの力をかりるわざによって作られたものでした。黒騎士

たちの目をあざむくために、レシリアとルースアンのふたりが力をあわせて、このひじょうにすぐれた身をかくすためのバリアーを作り出してくれたのです。これは空気をゆがませて、まわりとまったく同じ風景をその場に作り出すというものでした。なるほど、これならいくらていさつのたつじんである黒騎士たちとはいえ、見つけることはむりでしょう。さすがはシープロンのベテランたちです！（ところで、たぶんライアンにこの話をしたら、「ぼくにだってそのくらいできるよ。」っていかと思いますが、やっぱりかれには、これだけすぐれたバリアーを作るのはむりだと思います。なにしろライアンの先生であるレシリアと、王さまのそっきんであるルースアンが、力をあわせて作りましたから、むりもないですよ。あ、でもみなさん！ わたしが「ライアンにはむりだ」なんていつたこと、かれにはだまっています。ありがとうございます！ あとがこわいですから……）」

「助かった。レシリアどの、ルースアンの。おふたりのおかげです。」ハミールとキエリフのふたりが、「ふう！」ときんちようのときたたため息をはいて、シープロンのふたりにおれいをいいました。そう、かれらは黒騎士たちに自分たちのすがたを見せつけて、ひみつの道をゆくロビーたちのもとから敵の目を遠ざけるといふ、そのやくめを、まさに今なすとげたところだったので！（かれらが敵の目をあざむくためのおとりだとばれてしまったのなら、ロビーたちのひみつの旅も、すべてだいなしになってしまいかねません。かれらの旅はほんとうに、重要かつたいへんなものだったので。）

「これで敵は、旅の者たちが南の街道に進んだのだと思うことでしょう。あとはこのまま、敵の目をひきつけつつ、ベーカールランドまでの道のりを急げばいいのです。われらのにんむも、これでおおむねのところは、果たし終えることができました。ひと安心です。」

キエリフがほっとした顔をして、シープロンのふたりにいいました。しかしレシリアとルースアンのふたりは、いぜんとして、重い表じょうを浮かべたままだったのです。

「まだ、安心のできるようなところではありません。」レシリアが、ウルフアの騎士たちにいいました。「これはまだ、はじまりのだんかい

にすぎません。わたしたちのしごとは、ここからさきが、ほんとうなのです。」

レシリアの言葉に、ウルファの騎士たちは思わず、顔を見あわせてしまいました。どうやらレシリアはまだまだ、このあとのずっとさきのことについてまでも、重く深く、考えをめぐらせているようなのです。

「かれらは、これからもしつように、わたしたちのことを追いかけてくることでしょう。」レシリアが若きふたりの騎士たちにむかって、つづけました。「おそろく、このまぼろしのバリアーも、つぎは見破られてしまうにちがいありません。かれらを、あまく見てはなりませんよ。かれらのうしろには、あのおそろしい、魔法使いがいるのですから。」

「アーザス！」ハミールとキエリフのふたりの騎士たちが、思わずさげびます（ルースアンに「しーっ、静かに！ 敵にきこえる。」としかられてしまいました）。

「あの魔法使いめ！ こんどはなにを、たくらんでいるんだ！」
ウルファの騎士たちはこぶしをにぎりしめて、怒りました。かれらの祖国レドンホールは、よこしまなる魔法使いアーザスによって、ほろぼされたのです。そしてかれらの主君ムンドベルク王も、今やアーザスのとりこでした。ですからかれらのアーザスに対するにくしみは、そうとうなものだったのです。

レシリアがつづけます。

「かれらのもくてきは、たんなる仲間のかたきうちだけではないように思えます。わたしにはどうしても、その影にあの魔法使いのすがたが見えて、なりません。」レシリアの言葉はとても深く、そして重たいものでした。「ひよつとしたら、アーザスはもう、ロビーさんがいい伝えのきゆうせいしゅであるということに、気がついているのかもしれません。そうだとすれば、わたしたちの旅は、いぜんにもまして、重要なものとなります。今はロビーさんたちの身を守るために、できるだけの時間をかせぐこと。それがわたしたちの、いちばんのしごとでしょう。」

「南の地に近づくとつれて、敵の目も多くなります。」ルースアンがつづけてそういいます。「つぎに黒騎士たちからのがれるためには、わたしたちは、もっとべつの方法も、考えなければ。」

ルースアンの言葉に、レシリアもうなずいていいました。

「とにかく、また黒騎士たちがやってくる前に、できるだけ道のりを進んでおくことです。わたしたちには、まだまだ、やるべきことがたくさんあるのですから。さあ、さきを急ぎましょう。ティーンデインの大河まで、いつきに進むのです。」

みんなはふたたび、馬にまたがりました。そしてかれらは、このおそろしい、見張りだらけの敵の地の中を、さらなる南へとむかって歩み出していったのです。

「まいど、ごりよう、ありがとうございます。しゆうてん、魔女の塔く、魔女の塔です。みなさん、おつかれさまでございました。」

なんともまのぬけたあいさつがすむと、ボートの底からのびている二本のかえるの足のようなものが、しゅううつ！ という空気のぬけるような音を出しておりたたまれていきました（これはちやく地のときにクツションのやくわりを果たしてくれるものでした。このためこのボートは水いがいのところでも、自由にちやく地することができたのです。そうでなかったら、あんなに大きなジャンプですもの、こんなボートなど地面にたたきつけられて、ばらばらにこわれてしまうはずです！

さらにこのボートは、空気の力をいつきに吹き出すことでジャンプすることができるといふものでした。ですからそのジャンプは、水の上からでもおこなうことができたのです。カルモトがこのボートにたよったのも、わかりますね。まさに、自由じざいといった感じでした。

「お忘れ物のなきよう、お願いいたします。」

うんでんしゆのネリルがびよこん！ とボートからおり立って、乗っている旅の者たちにむかって、つづけていいました。ですけど……、旅の者たちはみんな、それどころじゃなかったのです！ かれ

らはもう、ボートのふちにうつぶせになったまま、動くことさえできませんでした。それもそのはずです。みんなはあんなジャンプを四十回以上もくりかえして、ようやくのことで、ここまでたどりついたんですから！（船よいというか、ジャンプよいというか……、とにかくひどいありさまでした！）

そんなみんなのことをしり目に、カルモトはまったくなんでもないといいたようすで、ゆうゆうとボートのいちばん前からおり立つと、うんてんしゆのネリルとあくしゆをかわし、旅の者たちにむかっています。

「こら、なにをしている。そんなところで寝るとは、失礼だぞ。ゆうべ、きちんと寝ておかなかったのか？ さっさと起きんか。」（そ、そういうことじゃありませんったら……）

みんなはカルモトにせかさされて、ようやくのことで立ち上がって、ふらふらとボートからおり立ちましたが、すぐに地面に両手をついて、動けなくなってしまうたのです。

「お、おええ……」「し……、死ぬ……」「もう……、だめ……」

さて、（旅の者たちのけんこうじょうたいのことについてはともかくとして）これでようやく、もくてきの魔女の塔までたどりつくことができましたわけです！（こんな方法でくることになるうとは、みんな夢にも思っていないかったことでしょうけど……）みんなが今いるところは、魔女の塔のあるおほりにかこまれて島のようにになっている場所の、その中。よどんだ水のはいった、おほりのふちでした。そこから上を見上げると……、そこには遠くから見えているばかりだった、あのなんともおどろおどろしいブリキの塔が、目の前にどーん！ とそびえたっていたのです！（高さはおよそ、四百フィートほどもありそうでした！ カルモトの木の塔にも負けないくらいの大きさです！）遠くから見ただけでもあんなにもきみが悪くしゆみが悪いと思つた塔ですのに、それを目の前で見るのですから、なおのことでした。ありとあらゆるきたない色をしたきんぞくの板が文字通りつきはぎされていて、その上をさまざまなパイプやらでっぱりやらが、おおっ

ていたのです。しかもかべのぎいりようになっているのは、そればかりではありませんでした。よく見ると、お酒のあきびんや、せんめんき。スプーンにフォークにお皿。やかんになべに、果てはくまのぬいぐるみから、だれかのズボンまで！ とにかくなんでもかんでも、かべのぎいりようとしてくつつけられていたのです！（はじめこの塔をながめるときになにかおかしな感じを受けましたが、それはこのためでした。だって塔のかべにぬいぐるみやズボンがくつついているだなんて、だれも思いませんよね！ いったいアルミラは、なにを考えていたんでしょうか……？）

その塔を前にして、カルモトがあごに手をおいてうなりました。

「うゝむ……、なんてしゅみの悪いやつだ。わがいもうとながら、あきれかえるな。」（しゅみの悪さについては、カルモトさんにもたようなものだと思いますけど……。まあそこはやつぱり、ふれないでおきましょう……）

「それに、この塔のまわりの、なんというきたないこと。よくもまあ、こんなにかちらかしたものだな。あとで、そうじをしておかなければなるまい。」（その前にカルモトさんの家も、そうじした方がいいと思いますけど……。まあそこもやつぱり、ふれないでおきましょう。）

カルモトのいう通り、塔のまわりにはなんだかよくわからないものが、ごちやごちやとちらかつていました。なにかのそうちのようなものとか、作りかけの鉄のかぎりのようなものとか、いろいろです。ですがその中でひとつ、はつきりとわかるものがありました。それはむかしカルモトとフログルたちが戦った、ブリキの兵士たちのざんがいです！ それらの兵士たちはもうすでに動くこともなく、さびついで、なかば地面にうもれてしまっていました。かつてこの兵士たちの中にモーグの人たちのたましいがはいって、そのブリキのからだのこゝとを動かしていたのです。

ですけど今ではそれも、むかしの話。この兵士たちのことを動かしていたたましいは、今はこのぶきみな塔の中にとじこめられていて、みんなの助けをまさ待っているところでした（ちなみに、カルモトはこの塔のそばにこんなに近よったことは、今までいちどもありません）

んでした。ここでこのブリキの兵士たちとちよくせつ戦ったのは、カルモトの木の兵士たちとフログルたちであって、カルモトはすこしはなれたところからそのしきをとったり、進んでくるブリキの兵士たちをみずから魔法でやっつけたりしていたのです。その戦いのあと、ちやんとこの塔のことを中までしらべてくれていたのなら、今になって、こんなくろうをしなくてもすみましたけどね……。」

「さて、この塔は、どこが入り口だ？ ふむ、あそこか。」

カルモトが見上げたさきには、たしかに入り口らしいでっぱりがありました（このでっぴりは遠くから塔をながめたときにも見えていたものです。アルミラは空を飛んで、このでっぴりのさきから塔に出はりりしていたようでした）。岩をするどくけずったようなかたちのつき出たでっぴりのさきに、とびらのないまるいアーチの入り口がひとつ、あいていたのです。ですけど問題もひとつありました。どう考えても高すぎです！ みんなが今いる地面からその場所までは、ゆうに五十フィートはありました。いったいどうやって、中にはいったらいいのでしょうか？

ですがカルモトはいつもとまったく変わらずに、こまったそぶりさえ見せません。すたすたと塔の下まで歩いていくと、こちらをふりかえっていいました。

「フログルしょくん。あそこまで、とんでいけるか？」

なるほど！ かれらのことを忘れていましたね！ かえるの種族であるかれらフログルたちなら、五十フィートの高さくらい、わけなくのぼっていけそうです。ですがフログルたちはこまったような顔をして、カルモトにいいました。

「もちろん、いけることは、いけるんですが……、だめなんです。あの入り口には問題があつて、中にはいることができません。あの入り口には、魔女ののろいがかけられているんです。」

また魔女ののろいが！ いったいどれだけのろつたら気がすむんでしょうか！

「入り口に、のろいのけっかが張られていて、中にはいろいろとする者をかえるに変えてしまうんですよ！ いぜん、わたしたちの仲間が

中にはいろいろとして、かえるに変えられてしまったんです。さいわい、いちにちたつたらのろいがとけて、もとのからだにもどりましたけど。ですからあそこからは、中にはいれないんです。おお、こわい！」

フログルたちはそういって、ぶるぶるとからだをふるわせました。でも……、かれらつて、もとからかえるなんじゃ……、おつと、じょうだんをいつている場合ではありませんでしたね。とにかくそんなのろいがかかっているんじゃない、ほかの入り口を見つければかなさそうです。しかししかし、そんなフログルたちの言葉をきいても、やつぱりこの人はまったくもって、おちつきはらったままでした。それはもちろん、カルモトのことだったのです。

「のろいだと？ アルミラのかけた、のろいか。あいつののろいなど、ほんの子どもだましにすぎん。」

カルモトはそういって、頭の上にあるその入り口にむかって手をかざしました。そしてふたことみこと、なにかをつぶやいたかと思うと……。

「えいやー！」

どつぱくん！

とつぜん！ その入り口のところからもすごく大きな音がなりひびきました！ いったい、なにごとが起こったというのでしょうか？

見ると、そのどつぱりのさきつぽの部分、まるいアーチの入り口もろとも、吹き飛んでなくなっていました！ そしてもうもうとけむりを上げるその場所には、ぽっかりと、塔の中へとつづく大きなあながあいていたのです。

「これならわけなく、中へはいれるぞ。アルミラののろいなぞ、きれいさつぱり、消し飛ばしてやったわ。」

これを見て、フログルたちはもう大よろこびでした。カルモトはやつぱり、すごいでのまじゅつしなのです。アルミラののろいを消す

ことなど、かれにとつてはまさに、朝めし前のことでした（今はもう、おひるすぎですが……）。

「さすがは、カルディンどのだ！ やっぱりすごいやー！」フログルたちはそういって、びよんびよんとはねてよろこびました（かえるの種族ですから）。むかしブリキの兵士たちと戦ったときにも、かれらはカルモトのわざをじっさいにその目に行なうことができましたが、今またこうして、そのわざを見ることができて、それがうれしくてならなかったのです（ところで……、カルモトがアルミラの軍勢と戦ったのって、今から三十年ほどむかしのことですよ？ カルルやクプルたち、この場にいるフログルの者たちは、そのときからカルモトに協力していたようですが、ではいったいこのフログルの人たちって、なんさいなのでしょう？ 見た目はだいぶ、若く見えるのですが……）。

じつはカルルもクプルもそのほかのフログルさんたちも、みんなもう、八十さいはかるくこえていました！ フログルたちというのはとつても長生きの種族で、みんな百五十年くらいはふつうにすごすことができますのです。そういえば長老のモラニスさんも、二百さい近くのねんれいでしたよね。うくん、フログルって、やっぱりいろいろと、すごい）。

「今すぐに、はしごをかけてまいります！」

フログルたちはそういうと、ブリキのかべをびよんびよんのぼって行って、あつというまにカルモトのあけた入り口のあなの前にまでたどりついてしまいました。そしてそこに、持ってきていたなわばしごをかけて、これでついに、魔女の塔の中へとつづく道がかんせいしたのです！（このなわばしごは長老のモラニスがあらかじめ、ボートの中につんでおいてくれていたものでした。入り口までの長さもびつたりです。まあ、用意のいいこと！ さすがはモラニスさんです。カルモトのやることは、すべてお見通しなんですね）。

ちなみに、カルモトの魔法なら塔の入り口でなくても、塔のかべにちよくせつあなをあけて、そこから中にはいることもできるでしょうが、やっぱりカルモトは、きちんと塔の入り口からにはいることにしま

した。塔のかべにあなをあけたら、古くなっている塔が思わぬことでくずれてしまうかもしれないし、あなをあけてぶっこわしたその場所、なにかだいじなものがかくされていないともかぎりません。それがみんなのたましいだったら、おおごとです！　ですからカルモトはよけいな問題をふやすおそれをさけて、入り口の中をきちんとたしかめてそこにだいじなものがないということをかくにんしたうえで、入り口のアーチをぶっこわしてそこからはいることにしました。カルモトさんもいいかげんなようできて、こういうところはけっこうきちんと、考えているんですね。」

「ありがとう、しよくん。」カルモトが入り口の前にいるフログルたち、カルル、クプル、イルクー、レングの四人によびかけました（はしごをかけるくらいならひとりかふたりでじゅうぶんでしたが、かれらはもう、じっとしていることができませんでしたから、ぜんいんでのぼってしまいました）。

ちなみに、ロビーたちの乗ったボートのうんてんしゆであるネリルと、もういつそのボートのうんてんしゆであるグロツクという名のフログルのふたりは、ここに残ってボートの番をすることになりました。かれらもだいじ、塔の中にいきたかったようですけど）。

「それでは、中にふみこむとしよう。ん？　ところで、かれらはどうした？」

かれらとはもちろん、われらが旅の者たちのことでした。あれ？

そういえばさつきから、カルモトとフログルたちのやりとりばかりで、旅の者たちのことがぜんぜん出てきませんね？　いったい、どうしたのでしょうか？

「あの一、かれらなら、さつきからそこに寝ていますけど……」ボートのうんてんしゆ（ネリルとグロツクです）のふたりが、おほりのふちの方をゆびさしていいました。見ると、そこにわれらが旅の者たち、ロビー、ベルグエルム、ライアンの三人が、ひたいの上にぬらしたタオルを乗せて、うんうんうなつて寝ていたのです……。かれらが船よい（ジャンプよい？）からふつかつするのには、まだまだページ数がたりないみたいですね……。でも早く話を進めないと、このまま

この章が終わってしまいかねません！ わたしも心をおににして、かれらを起こさないと！ さあ、早く起きて！」。

「ごら、いいかげんにしないか。」カルモトがようしやなく、かれらをつきましました。「いくら寝ぶそくでも、今は、やらねばならんことがある。さつさと起きて、さつさといくぞ。仲間を助けたいのだろうか？」(やっぱりカルモトは、ちよつとごかいしたままのようですが……)

さて、もうわれらが旅の者たちも、起きないわけにはいきません。みんなはようやくのことでふらふらと起き上がると、そのままよろよろ、カルモトのあとにつづいていきました。

もうぜつたい、あのボートには乗らないぞ……！

みんなはそろって、心の中でさげびました。

そこはなんとも、うすきみの悪いところでした。そこから見たしゆみの悪さが、そのまま中にまで(全力で)つづいている感じですよ。かべや床はそれと同じ、きたない色のきんぞくの板でつぎはぎされていて、しかもそれらの板はまったくでたらめに、おおざっぱに、てきとうに取りつけられていました(このあたりはほんとうに、カルモトにそっくりです)。しかもかべや床のざいりようには、やっぱり、まな板やけいりようカップや、ポップコーンのはこにチョコレートのつつみ紙。スリッパにくつしたに、果てはだれかのパジャマまで！ でたらめきわまりないものたちが、ごちゃごちゃに使われていたのです(いったい、だれのパジャマ?)。

ここはもちろん、魔女のブリキの塔の、その中でした(せいかくには入り口から塔のまん中へとつづいていく、でっばりの中のつうろでした)。今さいこのベルグエルムがなわばしごをのぼって、塔の入り口からつづくこのつうろの中にまで、ようやくたどりついたところだったので(ふらふらのからだでなわばしごをのぼるのは、みんな、かなりしんどかったのですが……)。

いったいこの塔の中はどうなっているんだろう？ みんなのたましいはいったいどこに？(できれば早くかたをつけてベッドに横にな

りたい……)旅の者たちはそれらの思いを胸に、塔のまん中へとつづくそのきんぞくせいをつうろの上を、かつんかつんと音を立てて歩いていきました(ときどき、べりっ! とか、ぼりっ! とかいて、床の板がくずれてしまうこともありました。このきんぞくの床はさびついていて、だいぶいたんでいたのです。そのため旅の者たちは床をふみぬけてしまわないように、おそるおそる気をつけながら歩いていきました。そうでなくても今、みんなの足取りは、ふらふらでしたから……)。そしてまもなく、つうろは塔のまん中の部分へと通じる、ひとつのアーチへとつながったのです。そのアーチをくぐって、みんなが見たものは……。

「な、なんだこれは……?」

さきをゆくベルグエルムが、思わずそういいました(ついたのはいちばんさいごですが、旅の者たちの中でいちばん先頭をつとめたのは、やつぱりベルグエルムでしたから)。「なにになに?」とつづくライアンとロビーも、ベルグエルムのわきから顔をちよこんとつき出して、のぞきこみます(このつうろはとつてもせまかったからです)。そしてライアンとロビーのふたりも、その光景を見て思わず、「なんだこれー!」とさげんでしまいました。

塔の中は、「はるか上のてんじょうから底までつづく長くさり」がなん十本もたれ下がっているだけの、がらんどろだつたのです! かわりをぐるりと、せまいつうろが取りかこんでおりましたが、塔のまん中の部分はそれらのくさりがい、ほんとうになんにもありませんでした。上から下まで、全部吹きぬけの、まさにからつぽの塔だったのです!

旅の者たちは思いもよらない光景に、ただぼかーんとしてしまいました。いったいアルミラはなんのために、こんなからつぽの塔をたてたのでしょうか? どうやらこのてんじょうから下がっているくさりに、なにかひみつがあるようですが……?

「なんにもないじゃん。りつぱなのは、大きさだけ?」ライアンが、

塔の上と下をじゅんばんにのぞきこみながら、いいました。「これって、手ぬきだよな？ いいかげんな魔女だなあ。」

ですがさきに立つカルモトは、いつものおちつきはらったようすで、みんなにいいました。

「この塔は、ブリキの兵士たちのことをたくわえておく、かくのうこだったようだな。それを見てみなさい。」

カルモトのゆびさしたところには、たくさんのもるいボタンがついた、おかしい鉄のはこのようなものがひとつ、作りつけられています。

「これは、兵士たちを上げ下げするための、そうちのようだな。だいぶ古いけど、まだ、動かそうだ。どれ、ためしてみよう。」

カルモトはそういうと、そのはこに「えい。」とねんりきを送りこみます。すると……！ そのはこから、ぶいん！ というにぶい音がなり出して、まるいボタンのすべてが明るく光り出しました！ そしてカルモトが、その中のひとつをおしてみると……。

ぎゅるるるるんっ！

とつぜんものすごい音がして、てんじょうから下がっているくさりがすごいきおいで、動きはじめたのです！（思わずベルグエルムは、腰の剣に手をかけてしまったほです。）

「このくさは、兵士たちのことをひっかけて、しまっておくためのものだ。これなら、この広さをすべて使って、こうりつよく、たくさん兵をしまっておくことができる。なるほど、考えたものだな。」

そう、カルモトのいう通り、てんじょうから下がっているこれらのくさは、アルミラのブリキの兵士たちのことをひっかけて、しまっておくためのものでした！ これらのくさはたれ下がったそのいっぽんいっぽんが、それぞれ大きくなわつかになんて、それが塔のてっぺんにつけられたかっしやのところできさえられて、ぐるぐるまわるしくみになっていたのです。そしてくさにはたくさんフックがついていて、このフックにでき上がったブリキの兵士たちの

ことをひっかけて、つるしておけるようになっていました（つまりくさりがまわると、それにあわせて兵士たちも上がったり下がったりするというわけでした）。このようにしてかつてアルミラは、これらのくさりいっぱいにはちきれんばかりのブリキの兵士たちのことをつるして、ひそかに力をたくわえていたというわけだったのです（このくさりひとつには、百体の兵士たちをつるしておくことができませんでした。これが二十本ありましたから、全部で二千になります。つまりこれは、アルミラの作り上げた兵士たちの数と、ぴったりあいました。

ちなみに、この塔のいちばん底には、このブリキの兵士たちのことをそとに出動させるための、ひみつの出入り口がつくられていました。その出入り口は地下を通っておほりのそとへと通じていましたが、今ではすっかりふさがれてしまっていたのです。これはむかし、兵士たちとの戦いのさいに、「ブリキの兵士たちが出てくる、塔へとつながるひみつの出入り口がある」というほうこくを受けたカルモトが、戦いがすっかり終わったあとで、木の兵士たちにめいじてふさがせました。ですからカルモトはこの塔にはいるとき、べつの入り口をさがすことにしたのです）。

「ちよつと待ってー!」カルモトの言葉をきいて、ふいにライオンがいました。

「じゃ、じゃあさー! このくさりいっぱいにくつつけたブリキの兵士たちを、いっせいに、ぎゅいくん! ざざざざー! って、しゅつけきさせることができちゃうってこと?」

ライオンは両手を使つて、兵士たちがしゅつけきしていくようすのことを、小さなからだでけんめいにあらわしながらいいました。どうやらかなり、こうふんしているみたいですが、いったいどうしたの?

「うむ。むかし、わたしが戦ったときも、あれだけの数の兵士たちのことを、どのようにしてしまいいこんでいたのか? 気にはなっていたのだが、そういうしくみになっていたようだな。」カルモトがれいせいにこたえます。

それをきいたライオンは、両手をにぎりしめて、なんだか頭の中でいろいろそうぞうしているみたいでしたが、やがて目をきらきらとか

がやかせながら、ひとこといいました。

「か、かつこい〜！」

そ、そんなこと考えてたんですか……。たしかに、ロボット軍団出動！ といった感じでしたから、かつこいいかもしれませんが……。まあ、ライアンも男の子ですから、そういうったものが好きなんですネ（ちなみに、ライアンの頭の中ではそれらのロボット軍団には羽が生えていて、空を飛びまわってビームまで出していました……。でも今はそれどころじゃないんですから、おさえておさえて。

「こら、そういうことをいつている場合じゃないぞ、ライアン。まったく、ロビーどのからも、なにかいってやってください。」あきれたベルグエルムがそういってロビーの方を見ましたが、そういうロビーもまた、たくさんのロボット軍団がぎゅい〜くん！としゅつげきして巨大な剣で戦っているところをそうぞうして、かつこい〜！ と思っ

ているところでした……。

「ロ、ロビーどの〜！」

さて、ロボット軍団に思いをはせるのは、そのくらいにしてもらって……。そもそもこのアークランドはじゅんすいなファンタジーの世界なんですから、せいみつかがくのロボットなんて、はじめからいなんです！ アルミラが作ったのは、あくまでもブリキでできた人形をたましいの力であやつるといふものですので、みなさんはライアンやロビーみたいに、かんちがいしないでくださいね）、この塔の中にあるというみんなのたましいを、早く見つけにいかないと！ でもこんなにすかすかな塔の中の、いったいどこにあるのでしょうか？ どこかに、かくされた部屋でもあるのかも？

そんな思いをいだきながら、「たましいそうさく隊」のメンバーであるわれらが旅の者たちは、塔のかべにそつてのびているそのつうろの上を、ゆつくりとしんちように歩いていきました（ちなみに、たましいそうさく隊というのはフログルたちがつけた、みんなのチーム名でした。ほんとうにかれらの名まえのつけ方は、そのまんまですね……。それというのも、このつうろは目のあらい金あみでできてい

て、塔の底まですけて見えるという、とってもこわいつうろだったからなのです！ 高いところがにがてな人なら、足がすくんでしまつて、とてもこんなところは歩いてなどはいられないでしょう。ですから旅の者たち、ベルグエルム、ロビー、ライアンの三人は、みんな、「ひええ……」とおっかながりながら、そろそろと、このちゆうに浮いているかのような、危険なつり橋のようなつうろの上を、進んでいるというわけでした（ですけどやっぱり、カルモトと四人のフログルたちは、そんなことはまったく気にもとめていないようでした。とくにフログルたちにとっては、こんなところを歩くのはわけもないことでしたから、笑顔とじょうだんをまじえながら、じつに楽しそうに、わいわいと歩いたり、とびはねたりしていたのです。かれらがふざけてとびはねるたびに、金あみのつうろがぐらぐらとゆれるので、旅の者たちはみんな手すりやかべにしがみつきのながら、「や、やめてくれ〜！」とさげびました……）。

つうろは同じ金あみでつくられた、ほそ長いかいだんに通じていました。かいだんはおよそ五十フィート上の、同じ金あみでできたつうろにつながっております。どうやらこの塔は、まわりをぐるりとかこむつうろとこのかいだんとをくりかえして進むことによつて、てっぺんへとのぼつていくことができるつくりになっているようでした。

「てっぺんに、なにかあるようだな。なにかのそうちのようだが。」ふいに、カルモトがいました。なにかのそうち？ ひよつとしたら、みんなのたましいもそこにあるのかもしれない。旅の者たちは思わず、（こわいのも忘れて）手すりから身を乗り出して、くいているように塔のてっぺんを見上げてしまいました。しかし上の階の金あみのつうろがじやまをして、目をこらしてみても、よくわからなかったのです。なにかごちやごちやとしたくだのようなものがあるのが、わずかに見えるくらいでした。

「わたしたちが、ちよつと、ていさつにいつてきましよう！」

みんなが上を見ていると、イルクーとレングのふたりがとつぜんそういつて、つうろの手すりの上にぴよこん！ ととび乗りました。この手すりはとてもほそいもので、ふときはせいぜい二インチほどしか

ありません。ですからそこにとび乗るだけでも、たいしたものではありません！（しかもそのすぐわきは、塔の底までつづく、だんがいぜつべきなのですから！）しかしかれらのすごいところは、そこからでした。手すりをまるで鉄ぼうみたいに使って、からだをぐるん！とかいてんさせると、そのままかべをぴよんぴよん！とけって、いつきに上のつうろまでのぼって行ってしまったのです！そしてそれを二回三回とくりかえして、かれらはあつというまに、塔のてっぺんまで行ってしまいました！（それにしても、なんといううんどうしんけいなのでしょうか！この塔のおともにかれらがついてきてくれたのは、旅の者たちにとつて、とてもこううんなことでした。）

それから一分もしないうちに、かれらはふたたびかべをぴよんぴよん！とけって、みんなのところまでもどつてきました。いったい、てっぺんになにがあつたの？旅の者たちはわくわくとはやる気持ちをおさえながら、かれらの言葉を待ちます。しかし……。

「すいません。はつきりいって、よくわかりませんでした。」

ええ……。旅の者たちは、がくつと肩を落としてしまいました……。

「なにか、くだとか、はことか、へんてこなものがごちやごちやとぶくぎつにからみあつていて、それがかべの中へと、つづいているみたいでした。あと、とびらがひとつありましたよ。でも、かぎがかかっている、あきませんでした。」

とびらが！それはたいしたじょうほうです。ひよつとしたらその中に、みんなのたましいがとじこめられているのかもしれない。

「そのほかには、なにもなかったの？音とかはしなかった？」ライアンがたずねました。ライアンが心配しているのは、モーグのまちに飛んできた、あのおそろしい影のおばけたちのことでした。魔女の手下のあの影は、この塔の中のどこかに、今もひそんでいるはずなのです（それに影のおばけがいにも、なにかがひそんでいるのかもしれない）。

「なんにも。とびらの中も、静かなものでした。」フログルたちが、それにこたえていました。

どうやらこの塔の中には、だれもいないみたいです(すくなくとも、生きている人は)。でも音もなくしのびよるなにかとか、そんなものが出てきてもふしぎではありません。なにせここは、魔女の塔。どんなしかけやのろいのわざが、張りめぐらされているのかもわかりませんでしたから(それらのものに、カルモトがみんな気づいてくれたらいいんですけど……、てきとうでうっかりなカルモトのことです。あんまり、きたいしすぎないようにしなければいけませんね。すごいときには、すごいんですけど……)。

それから金あみのつうろとかいだんを、それぞれ三回ずつ、くりかえしてのぼっていったところのこと……。一行はそこで、思いもかけないものに出会いました。

「ひゃあつ！ で、出た！」

カルモトにつづいてさきを進んでいたカルルとクプルのふたりが、さげびました！ みんなはびつくりして、「どうした！」「どうしたの！」とあわててかれらのもとへかけよります。見るとそこには、(アイロンや虫とりあみやだれかのサンダルのみまじったかべの前に)アルミラの作り上げたあのブリキの兵士たちが、ずら〜つとならんで立っていました！

「生き残りか！」ベルグエルムがそういって、腰の剣に手をかけます！ しかしよく見ると、それらの兵士たちはまったく動いておらず、ただ石ぞうのようにそこに立っているだけでした。もうだいぶくたびれていて、ぼろぼろとくずれてしまっているところさえあったのです。

「どうやら、アルミラが残っていた、おもちゃのようだな。」カルモトがいました。「安心しろ。もう、動くことはない。ただの鉄くずにすぎん。」

カルモトのいう通り、それらの兵士たちからはたましいのエネルギーはまったく感じられませんでした。カルモトのいうことには、たましいのエネルギーのはいった兵士たちは、かぶとの中がきいろく

光っているそうなのです。しかしこの兵士たちのかぶとの中は、文字通りのからっぽでした。

「なんだよー！ おどろかせてー！」ライオンがぶんぶんいって、兵士のおしりをげんこつでごちん！ とたたきました（そうしたらさびついたおしりにぽっかりあながあいてしまったので、あわてて知らん顔をしてごまかしましたが）。こんな兵士たちがつぎのかいだんのところまで、なん十体もならんで立っていたのです（ちなみに、さきほどのていさつときにはイルクーとレングのふたりは、これらの兵士たちに気がつきませんでした。かれらはいつきにてっぺんまでいって、それでもどつてきましたので、そのあいだのところにまでは目をむけていなかったのです。もっともかれらははじめから、てっぺんのことしか頭になかったようですが……）。

カルモトは「もう動くことではない」といいましたが、それでもやっぱり、こんなところを歩いていくのはいい気持ちがありません。みんなは早くこのつうろをぬけてしまおうと、足をはやめました。

それからかつんかつんと、しばらく歩いていったときのこと……。

「ねえ、なにか、変じゃない？」ふいに、ライオンがとなりのロビーに声をかけました。

「じ、じつは、ぼくも、そう思ったところなんだ。」ロビーもこたえて、同じことをいいました。

さつきから、かつんかつんという金あみをふみしめるその足音が、みんなの人数よりも、なんだか多いような気がしたのです……。ま、まさか……！

ロビーとライオンのふたりはおたがいの顔を見あわせてから、「せーの、せー！」でうしろをふりかえりました。すると……！

「ひええ〜！ やっぱり〜！」

みなさんのごそうごうの通り！ みんなのうしろから、ならんできたブリキの兵士たちが、かつんかつんという足音をならしながら、くつついてきていたのです！

「カルモトさくん！ どういうこと〜！ 動かないって、いったじやくん！」ライアンが、先頭のカルモトにさげびました（みんなの足音にまざる兵士たちの小さな足音に気がつくことができたのは、れつのいちばんさいごを進んでいたロビーとライアンだけでしたから。カルモトにつづいてつづく道のようすに気をくばっていたベルグエラムも、さすがにそこまでは気づけませんでした。ぴよこぴよこ歩いていたフログルたちも同じです。そしてカルモトも、この兵士たちが動き出すとはまったく思っていませんでしたので、まったく気がついていませんでした……）。

もう兵士たちは見るまに数をふやして、今ではつうろに立っていた兵士たちが、みんなすつかり動きはじめていたのです！ しかもその手には、さびついてしまっただけのもの、剣がしつかりとにぎりしめられていました。やっぱり戦う気、まんまんみたいです！（いっしょにたましいをさがしてくれるというわけではありませんでした！）

「こいつはうつかり！」カルモトがそういって、兵士たちに手をかざしました。すると……、その手から目には見えない魔法のエネルギーが吹き出して、それが兵士たちにあたって、どっかくん！ 四、五体の兵士たちがあつというまに、ばらばらにこわれてしまったのです！（さすがカルモトさん！ 強い！）

「す、すごい！」みんなは思わずそういってしまいました。しかしそれでも、兵士たちはつぎからつぎへとこちらへむかって進んできていたのです！

「よーし！ ぼくだって！」ライアンも負けじと、兵士たちにむかっておとくいのたつまきこうげきです！ ぐるんぐるんとうずをまいた風が、兵士たちをなぎはらって、どつごくん！ 兵士たちはそのまま吹き飛ばされて、塔の底へとまつさかさま！ なすすべもなく落ちていってしまいました（さすがライアン！ 強い！）。

「やるではないか！ おみごとだ！」カルモトがそういって、ライアンのことをほめました。

「え？ そ、そう？ そういってもらえると、うれしいな。」思わず

ライアンは、ほほをそめててれてしまいました。

「ライアン！ ゆだんしちやだめ！」ロビーのさげぶ声！

「え？ うわっ！」

そのとき、兵士のひとりがライアンの目の前にまでせまってきていました！

「こいつめ！ ライアンからはなれろ！」ロビーがとつきにかけよって、自分の剣で切りかかります！ ばつきやん！ おみごと！

ブリキの兵士はロビーに切られてまっぶたっ！ 床にばったりとおれてしまいました（ロビーもなかなか、やるものですね！）。

「びっくりした。ありがとう、ロビー。」ライアンがほつと胸をなでおろして、ロビーにおれいをいいました。

「ふたりとも、気をつけて！ 敵はどんどんくるぞ！」ベルグエルムがさげびます。ベルグエルムはもうすでに三体の兵士たちのことをたおして、今は五体の兵士たちを相手に戦っているところでした（さすがベルグエルム！ とかいうまでもないですね。強い！）。

もうまわり中が敵だらけでした。兵士の数は、全部で八十体ほどもいたのです！（ひええ〜！）

フログルたちも持ち前のうんどうのうりよくで、兵士たちを相手によく戦っていました。「こつちだよ〜！ べろべろ〜！」とからかつて、左右からふたりの兵士たちがつつこんでくるしゆんかんに、ぴよこん！ ジャンプしてかわして、兵士たちはいきおいあまって、おたがいの頭をごつちくん！ というぐあいです。ですがそれでも、これだけの数の兵士たちのことを前にしては、まったくもつてこちらに分がありませんでした。すでにこのつうろは前もうしろも、このブリキの兵士たちによってかんぜんにふさがれてしまっていたのです！

さあ、大ピンチ！ みんなはこのぜつたいぜつめいの場を、いったいどう切りぬけるのでしょうか！

「しかたない。たしよう、荒っぽいが。」みんなをすくつたのはやっぱりこの人、カルモトでした（もともとカルモトが「兵士たちは動か

ない」といったから、みんな安心してこのつうろを渡っていったのです。ですからここはやっぱり、カルモトになんとかしてもらわなくっちゃー!」。

「ライアンくん! 協力してくれ!」

「え? ぼく?」

急にカルモトによばれて、ライアンはちよつとびつくりしてしまいました。どうやらカルモトには、なにかの作戦があるようなのです。

「あのかいだんのわきに、大きなねじがあるだろう? 見えるか?」

カルモトのいう通り、上へとつづくそのかいだんのわきには、大きなねじがいつぱん、しめられていました。あのねじを、いったいどうするのでしょうか?

「ありったけの力で、あのねじを吹き飛ばすんだ! わたしもいつしよにやる!」

とにかく今は、深く考えているよゆうはありません。ここは、カルモトのいう通りにやるしかないようです。

「わかった! まかせてよ!」

それから「いち、にの、さん!」で、カルモトとライアンのあわせわざがさくれつ!

どつごおおくん!

ねじはそのまわりの部分もろとも吹き飛んで、ばらばらと、塔の底へと落ちていってしまいました! それにしても、なんとはいかいか力! モーグの門を吹き飛ばしたあのきんしきされているひつさつのわざにも、負けなくらいのいりよくです。

さあ、カルモトのいう通りねじを吹き飛ばしましたが、いったいこれで、どうなるのでしょうか? しかし……、みんなはそのこたえを、すぐに知ることとなりました。身をもって。

「みんな、これにしっかり、つかまっておけ!」

カルモトはそういって、服の下から長いロープのようなものを投げました(これはじつは、カルモトのその木のからだをほそくのばした

ものでした！）。旅の者たちはいわれるままに、そのロープをにぎりしめましたが、すぐにそのわけを知って、顔を青ざめさせたのです。

「呣、まさか……、うそでしょ？」

そのまさか！ さきほどカルモトとライアンが吹き飛ばしたねじは、みんなが今まで歩いてきたつうろとかいだんをかべにとめてささえておくための、とつてもだいじなねじでした！

ばきっ、ばきばき、ばきー

みんなの足もとのつうろが、かべからはがれてどんどんとたれ下がっていききました！ブリキの兵士たちはがらがらと音を立てて、塔の底までつきつきに落っこちていきます！

「ぎゃああ〜！」

もうみんな、ひっしの思いでカルモトのロープにしがみつきました！ もうかんぜんに、金あみのつうろはつうろとしてのやくわりを果たせなくなってしまうていました。かべからぶらんとたれ下がっているだけの、ただの金あみになってしまったのです！ しかもそればかりではありません。あのねじは塔のそこから下の部分のつうろとかいだんを、すべてまとめてささえていたものでした。それ、それってつまり……？

ばりばりばりばり！ たれ下がるつうろのさいごの部分にひっぱられて、そのつうろにつながっている下につづくかいだんが、はがれてたれ下がっていききました！ そのかいだんのさいごの部分にひっぱられて、そのかいだんにつながっている下のつうろがまた、ばりばりばりばり！ どんどんたれ下がっていきます！ そしてまた、そのつうろのさいごの部分にひっぱられて、そのつうろにつながっているそのまた下につづくかいだんが、ばりばりばりばり！ さらにさらに、その下のつうろがそのかいだんにひっぱられて……。

早い話が、みんなが今いる場所から下の部分の足場が、まるでドミノたおしたいに、つきつきとひとつにつながりながら、はがれ落ちていってしまったというわけでした！（みなさんは、りんごのかわを

いちどもとぎれずに、さいごまできれいにむいてみたことがありますでしょうか？ たれ下がったつうろとかいだんは、まさに今、そんな感じにひとつにつながって、落っこちていつてしまったのです！こ、これって、かなりまずいんじゃない……」

もはやブリキの兵士たちは、一体も残っていませんでした。みんな落っこちてしまいましたから！ ですがわれらがたましいそうさく隊の一行（フログルたちはべつとして）も、このままではすぐに、その仲間になってしまいかねないのです。カルモトさん！ 早く、なんとかしてよ〜！

ここで四人のフログルたちが、またもや大かつやくです！ かれらは塔のかべをひよいひよいとのぼって上の階のつうろまでたどりつくくと、そこから、ちゆうづりになっているカルモトと旅の者たちのことを、上までひっぱり上げてくれました（カルモトは自分のロープのさきを、ずっと上にある、塔のかべからつき出ている風を通すためのふといパイプに、ひっかけていました。まずはそこまでよじのぼっていつて、そこからまたロープを上まで投げて、フログルたちにひっぱり上げてもらったというわけだったのです）。もう旅の者たちはみんな、むがむちゆうでした。そしてようやくの上のつうろまでたどりつくことができると、そのまま金あみの床の上に、ごろん！ あおむけにたおれこんでしまったのです。旅の者たちはそのあと、ぜいぜい荒い息をつきながら、口をそろえていいいました。

「し、死ぬかと思った……」

それから。みんなは塔のてっぺんへとむかってふたたび進み出したわけですが、旅の者たちはもちろんその前に、カルモトにたっぷりもんくをいっただのです。「あんなことするなら、さきにいつてよー」とか、「兵士たちは動かないから、安心しろっていつたじゃんー」とか、いろいろです（旅の者たちというより、ほとんどライアンがもんくをいつていましたけど……）。そのたびにカルモトは、また頭を地面すれすれまで下げて、「すまない。じつに、うっかりだった。」としきりにあやまりました（ちなみに、カルモトのからだをのばしたロープは、

またするすると、かれのからだにもどっていきました。じつにべんりなからだです!」。

ですがカルモトのことについては、もういいとしても……(かれも心からあやまっていますしね。それにみんなも、かれのいいかげんなせいかくのことについては、もうわかっておりましたので)、あのおんぼろ兵士たちがなぜとつぜん動き出したのか? それは読者のみなさんにも、きちんと説明しておく必要がありますよね。

カルモトのいうことには、あの兵士たちはアルミラの作ったブリキの兵士たちのしきく品なのだという事で、たましいの力ではなく、ぜんまいじかけで動いていたのだということでした(ですからかぶとの中身も、からっぽでした)。そしてあの兵士たちは、あをつうろを通る者を見さかいなくこうげきするようにと、めいれいされていたというのです。これはカルモトが自分の作った木の兵士たちにかけていためいれいの魔法と、同じものでした。アルミラもまた、カルモトと同じわざを使えたようです(めいれいの内ようは、アルミラの方がずっとひどかったですけど)。

「アルミラの力を、あまく見すぎていたようだ。」説明を終えると、カルモトは歩きながら、とつぜんみんなにむかつていいました。

「兵士になん十年もめいれいを守らせつづけるわざを、使いこなすのには、いつわりの力ではない、それなりのさいのうがいる。あいつには、そんなわざはむりだと思っていたのだが……、じつにうっかりだった。あいつも、わたしの知らないあいだに、ずいぶんと力をつけていたようだな。これからは、わたしもほんきで、アルミラにむきあうでしょう。」

カルモトはそういうと、ふいに立ちどまり、どこを見てもなく上を見上げました。いつもすたすと、どんどんさきにいつてしまうカルモトでしたのに、どうしたのでしょうか?

「どうしたの?」いつもとちがうカルモトのようすに、ライアンが心配になって声をかけました。ベルグエルムもロビーもフログルたちも、ふしぎそうにカルモトのことを見つめます。

「思えば、あいつが悪の道にそまってしまったのも、わたしにせきに

んがあるのかもしれない。わたしは兄として、あいつの心をくみ取つてやれなかった。」

みんなはこんなふうに話すカルモトのことを、はじめて見ました。

「カルモトさん……」

カルモトはいつもなんともないようにふるまってはおりますが、かれはかれなりに、いもうとのアルミラのことをずっと気にかけていたのです。カルモトはもうなん十年と、アルミラに会ってはいませんでした。カルモトとアルミラ。このきょうだいのあいだには、今となっては、とても深いみぞと、あつかいカベが、できてしまっていたのです。カルモトはみんなにはなにもいいませんが、心の底ではいつも、そのことを考えていました。

「わたしには、あいつにつぐないをさせるぎむがある。もう、おそいかもしれない。あいつはあまりにも多くの者たちのことをきずつけ、かれらから、たくさんものをうばってしまったのだから。だが、あいつのためにぎせいとなった者たちのためにも、わたしは、できるかぎりのことをしていくつもりだ。」

おたがいに同じかんきように生まれ育ちながら、まるでせいほんたいの道に進んでしまったふたり。それはけっして、かんたんには語ることでできないものでした。ライアンにも、いもうとのエレナがいます。お父さんのメリアン王、たくさんのお城の仲間たち、友だちがいます。ベルグエルムにもフェリアルにもフログルたちにも、みんな家族や仲間たちや友だちがいるのです。

そしてロビーにも。まだ知れぬ家族がいるはずです。すぐとなりに、仲間たちがいるのです。

カルモトにとってアルミラは、たとえどんなに悪いやつであったとしても、かけがえのない、じつのもうとででした。それがカルモトの心を、たまらなくしめつけていたのです。

でも……。ねじれてしまったものは、いつの日かかならず、もともどすことができるはずです。すこしずつでいいのですから。すこしずつ、すこしずつ、いつかまた、はじまりのスタート地点へともどれる、その日まで……。

「くだらないことをいつてしまった。さあ、いくぞ。てっぺんはすぐそこだ。」

カルモトはそういつて、またさっさと歩きはじめました。ですがみんなは、そのときカルモトの目にあふれていたそのなみだを、このさきもずっと忘れることはなかったのです。

「ついたぞー！ てっぺんだー！」

旅の者たちは思わず、声を張り上げました。ついにみんなは、塔のそのてっぺんにまでたどりついたのです！（とちゆうでとんでもない大冒険にまきこまれてしまいましたので、そのうれしさはひとしおでした。）ですが塔のてっぺんといつても、そのつくりはほかの金あみのつうろの階とまったく同じでした。しかしここには、ほかの場所とはあきらかにちがう、なんともおかしなものがあつたのです。

そう、それは下からもちよつとだけ見えていて、イルクーとレングが「よくわかりませんでした」といつていた、あれでした。旅の者たちもここでようやく、それらのものをまざまざとながめることができたわけですが、みんなにもイルクーとレングのいつたことが、よくわかつたのです。目の前に広がっているそれらのものは、やつぱりにながなんだか？ ぜんぜんわかりませんでしたから！

そこにあるのはたくさんのきんぞくのくだ、えんとつ、はぐるまのついた鉄のはこ、それに鳥や動物のはくせい、または骨、古いがつきがたくさん、ぶよぶよとした大きなねんどのかたまり、食べかけのパンケーキ、だれかのむぎわらぼうし、などなど、おかしな品物たちばかりでした。そしてフログルたちのいう通り、それらのものがまつたくでたらめに、かべやてんじょうや床でうねうねとへびのようになりあつていて、それがかべのむこうにまでつづいているようなのです。

「うわあ……、なにこれ……。気持ち悪い。」ライアンが思わず、そうもらしました。ですがまつたく、ライアンのいう通りです。どんなにひいき目に見ても、ここはまつたく、気持ちの悪いところでしたから。まさに魔女アルミラのしゅみの悪さ、ぜんかい！ といった感じ

だったのです（カルモトのしゅみの悪さとは、またべつのしゅみの悪さです）。

「これは、たましいのエネルギーを兵士たちに送りこむための、そうちだ。」カルモトがそれらのものをながめ渡しながら、いいました。なるほど、よく見てみると、てんじようから下がったくさりのひとつひとつにむかつて、きんぞくのくだがのびております。そしてくだのさきにはじようごのようなものがついていて、そこからたましいのエネルギーをブリキの兵士たちにむかつて、送りこめるようになっていたようでした（どんなしかけでこのそうちが動くのかは、まったくわかりませんでした）。

ということは……、めざすみんなのたましいは、やっぱりここにありません！ みんなはやる気持ちをおさえきれずに、どこだどこだ？ とあたりをさがしまわりました。

「おちつけ。みんなのたましいは、そのとびらのむこうだ。」

カルモトがそういって、ひとつのさびついた鉄のとびらのことをゆびさしました。そうでした、フログルたちがいていたこのとびらのことを、忘れていましたね！

「うむ。ここにも、なにかののろいがかかっているようだ。どれ……」

カルモトがとびらの前に手をかざして、なにかをつぶやきはじめます。そして……。

「えいやー」

ばたーん！

カルモトがさげぶのと同時に、そのとびらがいきおいよく内がわにひらきました！ さすがカルモトさん！（ちなみに、とびらのむこうになにがあるか？ まだわかりませんでしたので、もちろんカルモトもこのわなをとびらごと吹き飛ばすようなまねはしませんでした。すぐそこに、みんなのたましいがしまっているかもしれないからね。）

「ふむ、こののろいは、しょうしょうやかいだったぞ。これは、うろこ病ののろいだ。こののろいを受けると、その者はからだにへびの

ようならうろこができて、ひとつきもしないうちに、ほんとうのへびへと変わってしまうのだ。」

ひ、ひええ〜！　なんておそろしいんでしよう！　うかつにあけなくてよかった！　みんなは心の底からそう思いました！（とくにフログルたちにとってはなおさらでした。かえるの種族であるかれらは、みんなへびがいちばん大きらいだったのです。そのへびに自分になってしまっただなんて、考えただけでもおそろしい！　イルクーとレングのふたりは、さきほどこのとびらをむりにあけようとしなくて、ほんとうによかったと思いました。）

「アルミラめ、味なまねをしてくれる。では、いくぞ。もくてきのものは、この中だ。」

さあ、それではいよいよわれらがたましいそうさく隊のメンバーたちは、そのさいごのもくてきの場所の中へと、ふみこんでいくときをむかえたのです。みんなは意をけっしてごくりとつばを飲みこむと、じゅうぶんに用心しながら、その部屋の中へとゆつくりと歩みを進めていきました。

「ひええっ〜！　へび〜！」

とつぜん、前をゆくカルルとクプルがさげびました！　見ると、とびらのわきに大きなへびのはくせいがつとつ、でーん！　とかざられていたのです。これがカルモトのいつていた、うろこ病のろいを出すわなでした。しかしもうすでにカルモトがのろいをといてしまいましたので、このへびも、ただのはくせいにもどっていたのです（でも見た目のこわさはそのままでしたので、カルルとクプルは思わずさげんでしまったのです）。

ちなみに、そのへびの下の方には小さな名ふだがついていて、「バイパーちゃん」と書いてありましたが……）。

とびらのむこうは小さな部屋になっていました。ここは塔のてっぺんにつき出た、そのでっぱりの中です。アルミラはこのでっぱりを、自分の部屋として使っていたようでした。

部屋の中はござっぱりとかたづいていました（これはいがいでし

た。いかげんなアルミラのことですから、もつとごちやごちやとちらかっているものとばかり思っておりましたから)。暮らしに必要なさいていげんの家具と品物があるだけで、そのほかにはめぼしいものはなんにもありません(ゆいいつ魔女つぽさを感じさせるのは、とびらのわきのへびのはくせい(バイパーちゃん)だけでした。魔女の部屋なんですから、もつときみの悪い品物のつまつたたなだとか、なにかをにこむための大きなかまだとかが、いろいろあると思つていましたが、これもまつたくいがいでした)。ですが、部屋のおくにあつたもうひとつのとびらのむこうに、みんなはめざすもくてきのものを見つけたのです。

そこはとても小さな部屋で、正面のかべのまん中には塔のそとが見えるように、大きな四かくいガラスまどがいちまいはめこまれていました(このまどはガラスがはまつているだけで、ひらくことはできませんでした)。そしてそのまどの前に、なにやらたくさんボタンがならんだ大きな鉄でできたつくえがひとつ、作りつけられていたのです。そのつくえからのびる、ふといくだのさきにあつたのは……。

「あつたぞー！　これが、みんなのたましいだ！」

旅の者たちは思わずさげんでしまいました。そこにはまるいガラスのいれものがあつて、その中にきいろにかがやく光のようなものが、たくさんとじこめられていたのです！　そう、これこそみんながさがしもとめていた、そのたましいたちにほかなりませんでした！(フェリアルのたましいも、この中にとじこめられているはずです！) やつた！　これでみんなを助けることができます！　みんなはよろこびいさんで、そのガラスのいれものの前に集まりました。でもみんなはそこで、あるひとつのぎもんをいだいたのです。

「これ、どうやってそとに出すのかな？」

ロビーとライアンが、そのガラスのいれものをぺたぺたいじりながらいいました。そう、ふたりのいう通り、そのいれものには中のもので取り出す、ふたとかあなみたいなのが、なんにもなかつたのです。

(まあ、いざとなったら剣かなにかでたたいたらこわすことができるかもしれないが、できればそんならんぼうなまねは、したくはありませんが。それに中のたましいたちに、なにかまちがいでも起こったらいへんです。ガラスがささってけがをするとか)。ただひとつだけ、まどの前にあるつくえからのびているいつぽんのくだけだけが、このガラスのいれものにつながっているゆいいつの道でした。このくだから、たましいをそとに出すことができるのでしょうか？

「うわっ！ み、見て！ こっちの、これ！」ふいに、ライアンがさげびました。ライアンがそういつてゆびさしたさきには、同じようにのびるくだのさきにガラスのいれものがあった、その中にはもやもやとしたまっ黒いけむりのようなものが、ぎっしりとつまっていたのです。こ、これってまさか……？

「ひよっとして、これ、まちに飛んできた、あの影おばけじゃない？」
そうなのです！ ライアンのいう通り、これこそがモーグのまちに飛んできて人々からたましいをうばい取り、この場所にはこんできた、その影のおばけたちでした！

「つ、ついに出たな！」ベルグエルムとロビーは思わず腰の剣に手をかけて、身がまえてしまいました。しかし影たちは、ガラスのいれものの中でただゆらゆらとゆれているだけで、なんの反応も見せません。

じつはこの影たちは、このガラスのいれものの中にはいつているかぎり、まったく安全なものでした。この影たちはモーグにだれかがはいりこんだというれんらくを受けたときに、はじめてこのガラスのいれものの中から飛び出して、あの影のおばけのすがたになって、まちへと飛び立っていくようにとめいれいされていたのです。ですからあんなにおそろしかつたこの影のおばけたちも、今はただの、ゆらゆらゆれているだけの、黒いけむりにすぎませんでした(とりあえずは、ほっとしました。みんなはいつまた、あの影のおばけたちがおそいかかってくるものかと、ひやひやしておりますから)。

ちなみに、ひとつ説明をつけ加えますと、アルミラのめいれいはモーグにはいりこんだ「人」のたましいだけをうばうというものでし

た。ですから馬などの生きもの場合は、モーグにはいりこんでもだ
いじょうぶだったのです。これは旅の者たちにとって、とてもこうう
んなことでした。

これでこの影のおばけたちのひみつは、みんなあきらかになったわ
けです。けつきよくこの影たちもただ、アルミラにいいように使われ
ていただけでしたね。そう考えると、ちよつとかわいそうな気もして
きます。あとでカルモトにたのんで、この影たちもみんな、もとのふ
つうの影にもどしてあげましょう（もとから悪い影なんて、どこにも
ないのです）。

「え……？　ねえ、ちよつと、これ！　これ見て！」ふいにライアン
が、ロビーの服をひっぱりながらいいました（めざとく、よくいろん
なものを見つけますね）。そしてそれを見たロビーも、ライアンと同
じくさげんでしまったのです。

「ええーっ！　これって、まさか！」

「どうされました？」つくえをしらべていたベルグエルムも、あわて
てロビーとライアンのそばに近よりました。そしてベルグエルムも
また、かれらと同じ反応をかえしてしまったのです。

「な、なんと！　これは……！」

その影のおばけたちのはいったガラスのいれものの横に、いつさつ
のノートがおかれてありました。それはアルミラの残した、けんきゅ
うノートでした。そしてそのひらかれていたページの上に、みんなは
おどろきのものを見たのです。

「はぐくみの森の、あのかいぶつだ！」

ええっ！　なんですって！

そこにはたしかに、はぐくみの森の地下いせきの中でみんなにおそ
いかかった、あの夜のかいぶつのすがたがえがかれていました！　こ
れはいったい？

しかしみんながおどろいたのは、その絵を見たからだけではありま
せんでした。その絵の下に書いてあった言葉。その言葉を読んで、み

んなはこれほどまでにおどろいたのです。そこには、こう書いてありました。

「シャドーリッチ教本その二、『シャドーリッチをかいならそう』、二百二十三ページよりばつすい。」

「たましいを食べたシャドーリッチは放っておくとちえをつけて、この絵のようにどんどん大きくなってしまいます。うばったたましいはすぐにガラスのいれものの中になってしまうようにして、リッチに食べられないようにしましょう。それから、リッチはぜつたいに逃がさないこと。自分の意志を持ってあばれまわる、こわいかいぶつになってしまいます。」

「今までに逃げたりリッチ ↓ 一ぴき。ゆくえ知れず。」

そう、これはまさしく、はぐくみの森の地下にすみついていた、あのおたまじやくしのようなかいぶつのことをさしていました！ あのかいぶつは、ほかでもありません。アルミラが作り出したこのシャドーリッチという名まえの影のおぼけが逃げ出して、森の人たちのたましいを食べて、大きく育ってしまったものだったのです！（まさかこんなところで、あのかいぶつのしよたいを知ることになるうとは！ みんな夢にも思っていないませんでした。それにしても、アルミラのやつめ！ かいぬしだったら、ペットはちゃんと、しつけてくれないと！ おかげでこっちは、えらい目にあっただんですから！）

こんなおそろしいかいつがこれ以上生まれてしまうことがないようにするために、この部屋にあるまがましいそうちは、残らずきのうていしにしてしまわなくてはなりません！ でもその前に、みんなのたましいを早くこのガラスのおりの中から、助け出してやらなくてはならないのです。ですがそのためには、いったいどうすればいいのでしょうか？

そのために、この人がここへやってきました。

それはもちろん、カルモトのことなのです。

「アルミラの、おきみやげか。」カルモトが、影のはいつたガラスのいれものと、まどの前に作りつけられたボタンだらけのつくえのことを、じゅんばんに見渡しながらいいました。「これが、こんなに時間がすぎても、人々をこまらせつづけていたとは……、じつに、うっかりなことだったな。」

カルモトはそういつて、フログルたち、そして旅の者たちにむかつて、すまなそうにまた頭を下げました。

「今こそふたたび、カルデインどのの力の見せどころじゃありませんか。」そんなカルモトに、カルルがぴよこんとしせいをまつすぐに正して、いいました。クプルもイルクーもレングもそれにつづいて、それからかれらはそろって、カルモトに頭を下げたのです。

「さあ、お願いします！ カルデインどのの、ここいちばんのとつておきのわざで、このみなさんのたましいたちのことを、すくつてさし上げてください！」

フログルたちの言葉に、ロビーたち旅の者たちもかれらのとなりで手をにぎりしめて、カルモトのとつておきのわざを待ちました。なにせこれだけのふくぎつなボタンやらそうちやらが、つまっている部屋です。こんなものはけんじやであるカルモトでなかったのなら、とてもあつかえそうにありません。これらのものをあやつつて、みんなのたましいをぶじに助け出すためには、かなりたいへんなわざが必要になるだろうと思われました。

みんなは胸をどきどきさせて、カルモトがこれからなにをするのかをじつと見守っていました。しかしカルモトがつぎにいった言葉は、なんともいがないものだったのです。

「そこにある、きいろいボタン。それをおせばいいようだな。」

え？ ボタンをおすだけ？

みんながきよとーんとしてカルモトのゆびさしたところを見てみると……、まどの前に作られたそのつくえの上に、とうめいなカバーのついたひときわ大きなきいろいボタンがひとつあって、そのボタンの下には、はつきりとこんな言葉が書いてありました。

「たましいにかけたのろいをといて、もとのからだの中にもどしてあげるときにおすボタン。」

ええーっ！ な、なんてわかりやすい！

どうやらこのボタンをおせば、ただそれだけで、みんなのたましいにかけられているのろいがとけて、たましいはもとのからだのもとへともどっていくようだったのです！なんてかんたんな方法なのでしょう！ しかもそれをこんなにもわかりやすく、わざわざ書いておいてくれるなんて、アルミラはなんていいやつ……、じゃなかった、なんて、まがぬけているんでしよう！（やっぱりカルモトのいもうとだからでしょうか……？）

「すでにねんりきをこめて、このつくえを使えるようにしておいたぞ。あとは、このボタンをおすだけだ。では、おすとするか……」

「ちよーっと、待ってー！」

カルモトがボタンに手をのばしたしゅんかん。ライアンが大きな声でそれをとめました！ な、なに？ どうしたの？ みんながびつくりしていると……。

「ぼくがおすー！」

やっぱりそんなことですか……。どうやらライアンにとっては、このまどの前に作られたつくえは、巨大ロボットのそうじゅう席みたいに見えたようです。かれの頭の中ではまだずっと、ロボット軍団の大かつやくの場面がつづいていたみたいです……。まあ、だれがおしても同じことらしいので、ここはライアンにゆずってあげましょう（じつはロビーもちよっと、おしたかったそうですが……）。

つくえの前のいすにすわったライアンは、もうわくわくしっぱなしでした。足をぱたぱた、うでをぐるぐる。それからようやくライアンは、「ふうっ。」と大きくいきゆうをととのえると、右手を大きく上にかかげて、きあいをこめてさげんだのです。

「いくぞっ！ ころそくされし、たましいたちよ！ 今こそふたたび、みんなのもとへ！ たましいかいほうボタン、発動！」

ばちーん！

さあ、ついにたましいかいほうボタンがおされたのです！（こんなに長いきめぜりふをいいながらはでにおす必要は、ぜんぜんありませんでしたけど……）いったいこのあと、なにが起きるといいうのでしようか！（まあ、たましいがかいほうされるんですけどね。）

みんなが見守っていると、たましいのはいったそのガラスのいれものの中から、ぷしゅーという空気のぬけていくような音がり出しました。そして……。

わいわいがやがや！ 二百人ぶんほどのたましいたちが、いつせいに、思い思いの言葉でおしやべりをはじめたのです！（たましいって、しやべるんですね！ はじめて知りました！）「なんだなんだ？ なんだか明るいぞ。」とか、「うーん、ずいぶんと、よく寝たなあ。」とか、「せまいせまい。なんだここは？」とかいったぐあいです。でもそれからすぐに、それらのたましいたちはみんなおしやべりするのをやめて、つくえにのびるくだへとむかって、しゆるしゆるとすべりこんでいきました。そしてそのくだは、そのまま塔のそとへとのびていたのです。

「やったー！」「わーい！」「やったー！」

たましいたちはみんな口々によるこびの声を上げながら、空のむこうへと飛び去っていきました。かれらがむかったさきは、ただひとつ。モーグの、いえ、ロザムンディアのまちの、大聖堂の地下。自分のからだのある場所でした。ティエリーしさいさまのたましいも、ミリエムのたましいも、そしてフェリアルルのたましいも、みんな自分のからだのもとへと帰っていったのです！（「やったー！」「わーい！」「やったー！」思わずたましいそうさく隊のみんなも、たましいたちと同じ言葉でよろこんでしまいました。さいしよのせりふは旅の者たちで、あとのふたつはフログルたちの言葉でしたが。）

「これでみんな、もとにもどる。」カルモトが、まどのそとを飛んでいくたましいたちのことを見ながら、いいました。ですが、カルモトの顔は浮かないままです。

「しかし、そうでないものもある。」

カルモトのゆびさしたところには、ほかのたましいたちとはちがつて、ゆらゆらゆつくりと、その場からはなれようとしないうたましいたちがいました。それらのたましいたちは、この場をなごりおしむかのようにしばらくうろうろとただよったあと、やがて空の上の方へとむかって、のぼっていったのです。

「かれらは、たましいを全部うばい取られてしまった者たちだ。」カルモトは、のぼっていくそれらのたましいたちのことを、なんともふくぎつな思いで見つめていました。「かれらの帰る場所は、もうすではない。かれらのからだは、この世界から消えてしまったからだ。」

「そ、そんな……」

みんなはなんともやりきれない気持ちになって、のぼっていくそれらのたましいたちのことを見つめていました。そしてやがてそれらのたましいたちは、雲の中へと消えていき、そのきいろいろいかがやきも、ひとつまたひとつと、消えていったのです。

「かれらのたましいは、これからまた、べつのいのちとして生まれ変わる。」カルモトが、しゅんと肩を落とす旅の者たちにむかって、いいました。「たとえからださがほろびても、たましいはえいえんに生きるのだ。かれらのたましいが、つぎのいのちとしてさらにかがやくように、わたしはいのちはずにはいられない。」

「きつと、そうなるよ！」ライアンが、空の上へと消えてゆくそれらのたましいたちにむかって、さげびました。「またいつか、会えるといね！ それまで、げんきでねー！」

みんなは去ってゆくたましいたちのそのさいごのひとつが見えなくなるまで、ずっとその空を見つめつづけていました（ここで著者のわたしからひとつ、みなさんにお伝えしておきたいことがあります。これらの空にのぼっていったたましいの持ちぬしたちは、このあとしばらくの月日ののちに、ふたたび、もとの自分のままのいのちを取り

もどすことができました。つまり、べつのいのちに生まれ変わったというわけではなく、もとの自分のままとして、ふたたび生きかえることができたということなのです！ ですがかれらのからだは、すでにこの世界から失われてしまっているわけでしたから、まったくもとの通りというわけにはいきませんでした。つまりかれらのたましいは、ブリキでできた魔法の人形のからだの中へと、うつされることになったのです！

さてさて、ことのしだいはどういうことか？ といいますと、こういうことなんです。ヴァナントの魔法学校の魔法のせんもんかたちは、アルミラのぬすみ出したそのきんだんのわざのことを、よく知っていました。このわざの一部として作り出されたのが、あの影のおぼけのシャドーリッチと、まちをおおっていたのろいのけっかいでしたが、これらのものによってたましいをみんなうばわれてしまった者は、ほんとうに死んでしまうというわけではなかったそうなのです。このようにしてたましいを取られてしまった者は、たとえその肉体が失われたとしても、たましいはもとのきおくを持ちつづけていて、それを新しいからだにいれば、ふたたびもとのいのちのつづきを送ることができそうでした！

ですがもはや、そのたましいを生きた肉体に入れることはできないそうでした。そのかわりに用意されたのが、このブリキでできた、魔法の人形だったのです。この人形にたましいをもどすにはかなりたいへんなわざが必要になるとのことでしたが、それでもかれらのたましいたちは、ぶじに帰ってくることができました。かれらは変わってしまった自分のからだのことで、とうぜんのことながらだいぶおどろきました。しだいにそのからだにもなれ、ヴァナントの魔法学校の人たちに心からかんしゃすることになったのです。かれらはそのご、このアークランドの地を旅立って、ヴァナントのあるガラント大陸へとむかいました。そこでかれらは今、その新しい人生を、しあわせに送っているということです。

そしてもうひとつ。はぐくみの森のフォクシモンたちのことです。ヴァナントの人たちはフォクシモンたちもまた、アルミラのぎせいと

なった者たちであるということをつきとめました。そしてたましいをすべてうばわれてしまったその八人のフォクシモンたちのこと、かれらはぶじにすくい出してくれたのです。

たましいを取りもどしたその八人のフォクシモンたちは、今でもはぐくみの森に住んでいます。旅人たちや子どもたちから大人気の、ブリキのきつねたちとして。

ちなみに、カルモトは影やのろいのけっかいによってかんぜんにうばわれてしまったたましいのことを、このようにブリキのからだにうつしてすくい出すことができるということを知りませんでした。これはほんとうに、ヴァナントの魔法学校の中でもごく一部の者たちのみが知っている、ごくひのじょうほうでしたから。ですからカルモトは、空にのぼっていったたましいたちのことを見て、せめてつぎの人生でかがやいてくれるようにと、願ったのです。

「さて、これでもくてもきは、果たされたわけだ。」カルモトが、やれやれといった感じでみんなにいいました。

「あとはこの部屋を、にどと使えないようにしてしまわなくてはな。みんな、ちよつと、下がっておれ。」

カルモトはそういって、またなにか、ぶつぶつとつぶやきはじめます。そして……。

「えいやっー！」
ぼほんっ！

ふたたび、カルモトのねんりきがさくれつ！ つくえにならんだたくさんのボタンや、部屋の中にあつたガラスのいれもの。そして同じように張りめぐらされていたくだや鉄のほこといったものの、すべてが、大きなぼくはつの音を上げてこわれてしまいました！（同時に、ガラスのいれものの中にはいつていた影のおばけたちも、みんなちりになり消えてしまいました。これでようやく、影たちののろいもとけて、とらわれの身から晴れて自由の身になれたわけです。もう魔女につかまるなよ！）

今やそれらのものはすべて、カルモトのいう通り、にどと使えるこ

とのないただのがらくたになってしまいました。四人のフログルたちは、もう手をたたいて大よろこびです！ これでようやく、このブリキの塔も（こんどこそほんとうに）おしまいなのですから！ でもモーグのまちに張られたのろいのけっかいはどうなるの？ と思われる方もいるでしょうが、ご安心を。そのけっかいを生み出していたそうちも、カルモトがいつしよにこわしてくれましたから！ これでもちのみんなも自由に、まちのそとに出ることができるようです。そしてまちに影をよびよせていた、あのがいこつたち。のろいのけっかいがなくなつたことで、かれらもまた、よこしまなる力を失つて、ただのふつうのがいこつたちにもどりました（あとで、ちゃんとしたお墓を作つてあげましょう）。

これでほんとうに、ばんばんざいでした。

モーグのまちはふたたび、もとのロザムンディアのまちにもどつたのです！

「さあ、帰るとしよう。帰りは、きたときよりもずいぶんと、らくになることだろう。」カルモトが腰をぽんぽんとたたきながら、いいました。「フログルしょくん。塔の下まで、よろしくたのむ。」

「おまかせを！ さあ、みなさん、いきましようー！」

「え？ あ、は、はい。」

旅の者たち三人は、そういうフログルたちに背中をおされて、そのままぐいぐいと部屋のそとまでおし出されていきました。カルモトとフログルたちは、これからいったい、なにをする気なのでしょう？

さて、ふたたびつうろのところまでもどつてきましたが、ここでみんなは、ひとつのある重要なことを思い出したのです。

「あれ？ ちょっと待って。そういえばさ、下へおる道は、とちゆうでみんな、こわしちやつたじゃない。どうやって、下までいくの？」
「そうでした！ ライアンのいう通り、塔のまわりをぐるりとかこんでいた金あみのつうろは、ここへくるとちゆうのあのたいへんな戦い

の中で、みんな落つこととしてしまっていましたっけ！ それではカルモトとフログルたちは、いったいどうやって、下までおりるつもりなんでしょうか？

「まさか……、塔のそこからおりるつもりなんじゃ……」ロビーが顔をまっ青にして、ぶるぶるとふるえながらいいました。それもむりはありません。塔の下までは、金あみのつうろが残っているとちゅうの階からでも、まだ二百フィート以上はありましたから！（もちろんふつうだったら、ちゅうぶらりんの塔のそとがわをそんな高さから下におりていこうだなんて、だれも思わないことでしょう。ですがロビーたちといっしょにいるのは、ぜんぜんふつうじゃない、かえるの種族のフログルたち。そしてなにをするのか？ わからない、カルモトなのです！）

「やだなあ、わたしたちフログルたちならともかく、みなさんにはむりでしょう？ そのくらい、わたしたちにも、よくわかっていきますよ。安心してください。」カルルがそういって、けろけろと、いや、けらけらと笑いました。

「よ、よかった。ほっとしました。」ロビーが「ほうっ。」と息をついて、胸をなでおろしながらそういいます。

「しかし……、では、いったい、どうやっておりるのですか？」ベルグエルムがまじめな顔で、カルモトにいいました。じつにもっともなしつもんです。しかしカルモトはまたしてもなんでもないといった顔をして、いたってれいせい、こうこたえるばかりでした。

「道なら、きみたちの目の前にあるではないか。フログルしよくん、かれらをたのむぞ。わたしは、ひとりでだいじょうぶだ。」

え？ 目の前の道って？

「さあ、早くおぶさって！」旅の者たちが考えるひまもなく、フログルたちがみんなのことをせかしました。

「え？ は、はい。」

どういうことだか？ わかりませんでした、ここはいわれた通りにするほかなさそうです。みんなはひとりずつ、フログルのさし出したその背中につかまりました（ベルグエルムはカルルに、ロビーはク

ブルに、ライアンはレングにつかまりました。

「うわっ！」

フログルたちにつかまったとたん。かれらが急に、びよっこくんと大ジャンプしました！ みんなはもう、ひっしでその背中にしがみつきます！ そしてかれらがとびうつったさきは……、塔のてんじょうから下がっている、あの兵士たちのことをつるしておくためのくさりでした！

「うわわ！」「ひええ！」「ひゃあ！」

め、目の前の道って、このことなの〜！ 旅の者たちは下までなん百フィートもあるこの空中に、またしてもちゆうづりじょうたいです！ みんなはフログルたちにしたがったことを、心の底からこうかいしました！ やっぱりかれらは、ぜんぜんわかっていなかったのです！ もういや〜！（ちなみに、いきの道でもみんなはこのくさりにつかまって、それをぎゆるるん！ と動かして塔のてっぺんまでいくこともできましたが、カルモトとフログルたちはやっぱり、それをするのはやめておきました。まだこの塔の中にどんなしかけがあるのかもわかりませんでしたし、まずはじゅんばんに、塔の中をしらべていった方がいいと思ったのです（べつに、旅の者たちのことをちゆうづりにしたらかわいそうだから、というわけではなかったのです……）。そして今やこの塔にすっかりかたをつけ終えてしまいましたので、かれらは心おきなく、このくさりを使って下までおりていくことにしたというわけでした。

それと、ブリキの兵士たちとのたいへんな戦いのさなかでは、みんなはそれぞれたくさん兵士たちによつて道をふさがれてしまっていましたので、とてもフログルたちの背中につかまって、それでくさりまでとびうつって逃げる！ というようなよゆうもありませんでした。カルモトの投げた木のロープにつかまることだけで、せいっぱいだったのです。

「くさみますよー、そーれー！」

どこまでも広がる草の海を見下ろす小高い丘の上に、今ひとりのうさぎの種族の少年が立っていました（このうさぎの種族はラビニンとよばれていました。足がはやく、頭の上へのびる二本の長い耳がとくちようです。いぜんわたしの話の中にも、うさぎの種族のおじいさんの学者が出てきたことがありましたよね。あのおじいさんも、ラビニンでした）。

でもラビニンはみんなしんせつで、しんらいのできる人たちばかりです。かంచిがいしないでくださいね。あんなにうさぐさいラビニンは、たぶんあのおじいさんくらいのものだと思います……）。空はおだやかに晴れております。少年は近くのはたけを手伝っていて、今あいた時間をりようして、この丘の上におそめのおひるごはんを食べにやってきたところでした（はたけのさくもつは、やつぱりにんじんです。そしてかれのごはんも、にんじんのポタージュに、にんじんのスコーン。それから、まるごとのにんじんスティックでした。ほんとうにラビニンは、にんじんには目がないのです）。

ここはながめもよくて、かれのお氣にいりの場所でした。しかし今日、そこにはいつもとまったくちがう景色が広がっていたのです。

見下ろすその草の海の中に、ぶきみな黒い川のようなものが、いくすじもあらわれていました。しかしそれらは、川ではありませんでした。水の流れのようにならぬと動いておりましたが、よく見ればそれらはすべて、武器やよろいに身をかためた兵士たちだったのです！

その兵士たちは、人ではありませんでした。黒や、はい色や、青に、みどり。さまざまなのはだの色をした、ありとあらゆるすがたをした、おそろしいかいぶつたちだったのです！ 小さな背たけの者から、巨人のような大きさの者まで、かれらはじつにさまざまでした。手には、長く三日月のようなかたちにまがった剣や、おそろしい見た目のやりなどを持っております。頭にはみんな、おそろいのまつ黒くすみがぬられたぶきみなかぶとをかぶっていました。そしてそのかぶとのまん中には、おそろしい黒いりゅうのもんしょうがひとつ、えがかれていたのです。

そのもんしょうは、このアー克蘭ドに住む者ならば、だれでも

知っているものでした。たとえ知りたくなかったとしても、どうしても知ってしまうことになるのです。なぜならそれは、あのおそろしい黒のくに、ワットのくにのもんしようだったからでした！ これらのおそろしい兵士たちは、ワットのおよびかけによって集められた、その兵士たちだったのです。それはもちろん、アルファズレドのめいれいによるものでした。ということは、このおそろしい兵士たちがむかうさきは……？

そう、かれらがめざすのは、ただひとつの場所、ベーカーランドでした！ かれらは今、これからはじまるおそろしいそのさいこの戦いへとむかって、まっすぐに、その歩みを急いでいるところだったのです！

うさぎの少年ユーリ・リアンルーは、おべんとうのつつみを落とし、ぼうぜんと目の前の光景をながめていました。それからかれは、がくがくとふるえる足をおさえながら、はたけにいるみんなのところへとむかってびよんぴよん走っていったのです。

しばらくして、かいぶつの兵士たちがみんな通りすぎてしまうと。そこには美しかった草の海のかわりに、ふみ荒らされ、けがされた、むき出しの赤茶けた地面が広がっているばかりでした。

15、ベーカーランドへいつちよくせん

その森は、げんそう的なきりにつつまれていました。ここはこのアークランドからほど近い、深い深い森の中。ですがこの森がいったいどこにあるのか？ それは著者であるわたしにも、じつははつきりとはわからないのです。ですからここをおとずれることができた人は、ほんとうに運のいい人なのだといえることでしょうか。この森は、まったくもつて、いきたいと思つていけるようなところではありませんでした。

でもこの森にいけなくてこまっている、という人は、このアークランドには、たぶんひとりもないことかと思えます。なにしろこの森のそんざいそのものを知っている者が、このアークランドにはほとんどいませんでしたから。しかしこの森は、たとえ知っている者がほとんどいかなかったとしても、このアークランドにとつて、ひじょうに重要な森でした。それもそのはず。なにしろここは、精霊王の住む森でしたから！

精霊王。そのよび名を知らない者は、このアークランドにはひとりもないことでしょう。どんなに小さな子だって、精霊王のお話は知っていたのです。このアークランドで子どもがいちばんはじめにきかされるお話。それはきまつて、この精霊王のお話でした。

とつてもかしこく、どんなことでも知つていて、だれよりも強い。精霊王はそんな、伝説的なまでのそんざいでした。でもそれは、あくまでもお話の中でのこと。いくらこのアークランドがふしぎのあふれるファンタジーな世界であつたとしても、じつさいに精霊王のすがたを見たことのある者などは、ただのひとりもいなかったのです（これは、とうぜんといえはとうぜんのことでした。みなさんにもお伝えしておりますように、精霊というものは、ふだん目にするものなどはめつたにないのです。精霊でさえもそうだというのに、こんかいは精霊王なのですから、会うことなんてまずむり！ ということがよくわかりますでしょうか？）。ですからその精霊王が住んでいる森なんて、だれも知らなくてとうぜんです。というよりも、じつさいに精霊王が

いるなんてことをほんきで信じている者が、だれもいないといった方がいいかもしれません（小さな子はべつですけど）。精霊王というのは、このおとぎのくにアーケランドにおいてさえも、じっさいにいるのかどうかさえもわからない、お話の中だけにとうじょうする、とてもしんぴ的なそんざいでした。

ここがどんな森なのか？　これでよくわかっていただけたかと思えます。そう、ここはほんとうにとくべつな、ひみつのひみつの森。そんな森の中に、今みなさんは足をふみいれているのです。

今、いつぼんの大きな木のその影から、ひとりの男の人がふつとあらわれました。いえ、男の人といいましたが、せいべつははつきりしません（女の人のようにも見えましたから）。その人は美しくととのった顔立ちをしていて、からだはほそく、すらりとしていました。背だけは五フィート六くらいでしょうか？　みどりのきぬでおられた服を着ていて、かがやく銀色のベルトをしめております。その人が歩きたびに、長く美しいこがね色のかみが、風に乗ってさらさらと、ちゆうになびきました。

その人はなんとも、ふしぎな感じの人でした。うまく言葉でいうのはむずかしいのですが、そこにいるのに、そこにいないような、そんな、あわくはかない感じがするのです。からだはほんやりとした光につつまれ、今にもふつと消えてしまいそうでした。その人は地面につもった落ち葉の上を、音もなく、ふわふわとした足取りで歩いていきました。おどろいたことに、その人が乗っているのに落ち葉はまったく、しずみこんでいないのです！　かわりにその人が歩いたところは、まるで宝石のこなをちらしたかのような、さまざまな色をしたかがやく光のつぶが、ほわんふわりんときりまりました。

ふいにその人が、あるところできまりました。そこはこの森の中の、小さな小さなあき地でした。このあき地は、はしからはしまでが、せいぜい二十フィートほどしかありません。地面はふわふわとしたかがやくみどりのしばふにおおわれていて、そこには小さな白い花が、たくさんさいていました。そしてそのあき地をかこむように、ま

わりの木々にはうすいみどりのきぬでおられたカーテンがかかっている、森の木々のあいだをさわやかな風が通りぬけるたびに、さらさらど、ここちのよい音楽をかなでていたのです。

「とのぎみ。」そのあき地のはしに立ったその人が、口をひらきました（とのぎみというのは、自分がつかえている相手のことをうやまつてよぶいい方です）。

「やみの者たちが、動き出しております。」

「いったい、だれにむかって話しかけているのでしょうか？　しかしそのこたえは、すぐにわかりました。そのあき地のすみに人の腰ほどまでの岩がひとつあって、その岩の影から、へんじがかえってきたのです。」

「人間のしわざだ。」

その声は高くもあり、ひくくもあり、男でも女でもあるかのような、ふしぎな声でした。まるでさまざまな人の言葉をいくつもあわせたような、なんともとらえどころのない声だったのです。

「アルファズレドです。」こがね色のかみの人が、それにこたえしました。「あの者の、しはいへのあこがれは大きい。それが、悪の力をよんでしまいました。まじゆつしアーザスが、かれに力を貸しています。」

「力のバランスが、くずれているな。」岩の影から、ふたたび声がしました。「これはほんらい、人間たちの問題。だがもはや、これはかれらだけの問題ではない。われらにできることは、ごく、かぎられている。あとは、かの者に、のぞみをつないでもらうほかあるまい。」

しばらくのちんもくのあと。こがね色のかみの人がいきました。

「ロビーベルクですね？」

ロビーベルク？　いったいだれのことなのでしょう？　なんだかロビーに、名まえがにっています。

「西の地に、使いを出すとき。かの者に力を貸すよう、精霊たちに伝えるのだ。」岩の影から、声がひびきました。「かの者は、わたしのおくったネックレスを持っている。それを見れば、かの谷の者たちとて、力を貸すだろう。」

「しようちいたしました、とのぎみ。すぐに。」

こがね色のかみの人はそういつて、ふつと消えてしまいました（こんどはほんとうに消えてしまいました！）。そして岩の影からきこえていた声も、それっきり、ぱったりとだえてしまったのです。

「たっただいま〜！ みんな〜！ もどつたよ〜！」

ライアンの大声が、あたりいちめんにはびき渡りました。ここはどこかって？ それはもちろん、かれらの帰りを心待ちにしている、みんながいるところ。そう、ここはモーグでした！ いえ、もうモーグなんていうふきつな名まえは、なくしてしましましょう。ロザムンディア。今こそこのまちは、むかしのその名まえでよぶのにふさわしいのです！

あのあと（旅の者たちが「ぎやあああ〜！」というひめいを上げながら、魔女の塔の中をいつきにすべりおりていったあとのことです。

ちなみに……、そのときフログルたちはいきおいあまつて、塔の底につみ重なっていたブリキの兵士たちのざんがいの中に、どっしや〜ん！ と落っこちてしまいました。さいわい、ざんがいがクツションになってくれたおかげで、旅の者たちはけがをしないですみましたが……。フログルたちはそれを見て、舌をぺろつと出して、「あ、すみません。」とかる〜くいっただけで……。一行はすぐさま、ロザムンディアに帰ることにしましたが、その前にもうひとつ、たいへんな問題があつたということを忘れていました。それは……、そう、ケロケロボート！ かれらのいたブリキの塔は、おそろしい底なしのぬまに、すっかりまわりをかこまれていたのです。帰るためにはどうしたって、あのボートにもういちど、乗っていかないわけにはいきませんでした。

もうぜったいあのボートには乗らないぞ！ と心の中で強くさけんだみんなでしたが、こればかりはしかたがありませんでした。ですからかれらは、「ぬま地をぬけるそれまでのあいだけ」というぜったいのじょうけんのもとで、しゅしゅ、いやいや、泣く泣く、ケロケロボートに乗りこんだのです。それでもぬま地をぬけてボートがとまるまでに、旅の者たちはごうけい十二回もジャンプするはめになつてしまいました……（ほんとうは七回くらいでぬま地のそとまでたど

りついでいましたが、みんなが「とめてとめて！」とさげんでいるのに、ボートのうんてんしゆのネリルが、「え？　もう、とめるんですか？　まだ早いでしょ？」といって、それから五回くらいもジャンプさせてしまったのです……。やっぱりフログルたちって、どこかぬけているというか、人の話をきいていないというか……。そんなところがあるみたいですね。いかげんなせいかくのカルモトと気がぴったりあうのも、わかるような気がします……。)

ボートをおりてから、旅の者たちはよろよろとした足取りで、フログルたちの家であるトーディアへとむかって歩いていきました(ちなみに、カルモトは「さきにいつて待ってるぞ。」といって、道あんないのカルルとクプルのふたりだけを残して、そのままボートでとんでいつてしまいました。それにしてもなんでカルモトは、あのボートに乗っていてへいきなのでしょう？　ふしぎです。木だから？)。そしてようやくのことでトーディアへとたどりつくくと、みんなはそろって顔を見あわせて、かたいあくしゆをかわし、おたがいの気持ちを強くたしかめあつたのです。

「生きて帰れてよかった！　あのボートに乗るのは、ほんとうにこれつきりにしよう！」

それからみんなは急いで騎馬たちのじゅんびをととのえると、見送りのフログルたちにあつくおれいをいつて、ここロザムディアのまちへとむかって出発したというわけでした。まちについてまずすぐに気がついたことは、まちをおおっていた、あのふきつな白いぶきみなきりが、すっかり晴れているということでした。じつはあのきりは、アルミラがまちにかけたのろいのけっかいのせいで、まちの中に生まれていたものだったのです(ですからやっぱり、ただのきりではなかったのです。なんだかおぼけの顔のように見えたのも、やっぱり見まちがいではありませんでしたね)。

そしてけっかいが消えた今、まちの中によどんでいたよごれた空気が、かびのような植物のほうしなども、きれいさっぱり、ほかのところへと飛んでいつてしまっていました(それでも、まちの中に生えて

いるかびとか、あつくつもったほこりなどは、これからいっしょうけんめいそうじする必要があるかもしれませんけど。今ではまちの中にも、おひさまの光が明るくふりそいでいました。じこくは親ぎつねのこくげん。午後の三時くらいです（ちようど、ライアンのおやつ時間です。もつともライアンはどんな時間だってかんけいなく、おやつを食べていましたけど……）。まちを出発してカルモトのことを見つけ、魔女の塔からたましいを取りかえしてここへ帰ってくるまで、わずか三時間半ほどしかたっていません。出発の前にロビーがいった言葉の通り、みんなは「すぐに」帰ってきたのです！（ほんとうに、とつきゆうびんの早さでしたね！　すごい！）

それからもうひとつ、まちが大きく変わっているところがありました。そしてそれこそが、旅の者たちにとつても、まちの人たちにとつても、とても大きな意味を持つ、すばらしいへんかだったのです。それはかたくとぎされていたあの巨大なまちの南門、その門が今や大きく、ひらかれているというところでした！

それが意味していることは、ひとつでした。つまり、ついに自分のからだを取りもどすにいたったまちのみんなが、帰ってくる者たちのために、門をひらいて待っていてくれていたというわけなのです！（まちのみんなはあれから、この南門をとぎしていたたきさんの渡し木や、門の前の家具などを、いっしょうけんめい取りのぞいてくれていました。そしてすぐに門をあけられるじようたいにしておいて、旅の者たちのことをすぐに、出むかえられるようにしてくれていたのです。さぞかし、たいへんなさぎようだったでしょうね。おつかれさまでした！）

「たっだいま〜！　みんな〜！　もどったよ〜！」ライアンがよびかけたのは、まさに、その門の前にいるまちの人たちでした（みんなもう、まちのそとまで出てきていました。アルミラののろいのけっかいは、もう消えましたから！）。そう、かれらはみんなで二百人ほどの、「もと」ゆうれいさんたちだったのです！

「おかえりなさい〜！」

「われらが勇者たち！」

「待ってましたー！」

われんばかりの大かんせい！ 人々は両手を頭の上でぶんぶんふつて、帰ってきた勇者たちのことをむかえました（さっそく、お酒のびんをかかっている人もいましたが……。ねんだいもののお酒が、まちのそうこに眠っていたみたいですね）。その中からひとり、すごいはやさで飛び出してきたのは……。

「わあああ〜ん！ みんな〜ん！」

そう、それはわれらがたいせつな仲間のひとり、フェリアル・ムーブランドだったのです！（フェリアルくん、ひさしぶり！）もうフェリアルはなみだで顔をぐっしよりとぬらして、両手を広げて、みんなのところへとつつこんでできてしまいました（おるすばん、たいへんだったね！ 北門のしゅうりもおつかれさま！）。

「隊長〜！ ロビーどの〜！ ライア〜ン！ さみじがったよ〜！」
「フェリアルはそういって、そのまま先頭のライアンの騎馬、メルにつつこんでいって……。メルにひよいとかわされて、地面にべっち〜ん！ ころがってしまいました。」

「フェリー〜！ ぶじにもどれたんだね！ よかった。」
ライアンがメルからおりながら、地面にころがっているフェリアルの上から声をかけます。

「ライア〜ン！ 会いたかったよ〜！」
ふたたび両手を広げてつつこんでくるフェリアルのことを、ライアンが「わわっ！」とかわして、フェリアルはまたしても地面にべっち〜ん！ ころがってしまいました（う〜ん、かわいそうなフェリアル……。うつぶせにたおれたまま身動きひとつしないフェリアルの背中を、つんつんとつつつきながら、ライアンが申しわけなさそうにあやまりました）。

「ごめんね、フェリー〜。だって、なみだと鼻水で、顔、べしやべしやだったんだもん……。」

さあ、これでまた、四人の仲間たちがそろったのです！ ばんざー

い！（フェリアルはハンカチで顔をふいて、ちり紙で鼻をちーん！とかんでから、ようやくみんなに受けいれてもらえましたが……）まを出発してからまだ数時間ほどしかたっていませんでしたが、なんだかずいぶん、時間がたったように感じますよね！（ぶよぶよおぼけに追っかけられたり、木の兵士たちにつかまったり。ちゆうをとぶボートで船よいたり、ブリキの兵士たちにかこまれたり。ちゆうづりになったり、落っこちたり……。このみじかい時間の中でこれだけひどい目にあつたのですから、それもそのはずです！）まだベーカーランドへの道のりもなかばだというのに、われらが旅の者たちは、ほんとうにいろんな目にあつてしまうものです。

それでも、みんなはそのつど力をあわせて、それらのこんなんを乗り越えることができました。それもみんな、力をあわせる仲間がいたからこそなのです。かれらの力のどれかひとつがかけても、みんなはここまで、ぶじでいられることはできなかったでしょう（もつともこんかいの冒険では、フェリアルはおるすばんすることになってしまいました……）。

こんかいの、魔女の塔での大冒険。それは思いもよらない、いわばより道の冒険でした。ですがわれらが仲間たちのその冒険は、けっかとして、すばらしいけつまつを生むこととなつたのです。旅の者たちはフェリアルのことをすくい、まちの人たちのこともすくうことができました。そしてそれは同時に、もうひとつのあるすばらしいものを、生み出すことにつながつたのです。それはなんといっても、新しい、たくさんの、たのもしき仲間たちとの友じようでした！

まずは、かえるの種族であるフログルたち。今やみんなは、かれらと大きな友じようでむすばれることになりました。かれらはロザムンディアの人たちにとつて、ずっとこわいそんざいでした。ほかの種族の者たちとかかわりあいを持たないフログルたちのことを、まちの人たちは、魔女アルミラの手下なんじゃないか？ とずっとごかいしていましたから。ですがこんかいのできごとで、そのごかいもすつかりとけたのです。フログルたちは人づきあいこそなかったものの、明るくようきな種族で（それはみなさんもよくわかつたことと思いま

す)、ぜんぜん悪いれんちゅうなんかじゃありませんでした(いくつかの点では、しようしよう問題のある種族でしたが……)。

このときくらい、ロザムンディアの人たちとフログルたちは、おたがいに手を取りあつて、なんでも助けあうようになりました(まずはロザムンディアのまちの大そうじを、フログルたちみんなで手伝いました)。そしてロザムンディアのまちにも、トーディアをはじめとするフログルたちの家にも、おたがいの種族の者たちが自由にいききするようになったのです。

そして、ロザムンディアのまちの人々。やはりこれが、このさきの道のりをゆく旅の者たちにとって、ちよくせつ的にいちばんの助けとなりました。それはつまり……、ここからさきの道あんないをつとめてくれることになった、ミリエムのそんざいです！ ミリエムはみんなが出発する前にもいつておりました通り、この西の地を通つてベーカーランドまでなんでもいったことのある、ゆいいつのこの地での住人でした。なにが起きるかかわからないここからの危険な道のりをゆく者たちにとって、これほど心強い助けとなるものも、なかつたことでしょう(ミリエムのなんだかたよりないせいかくのことについては、べつとして)。やっぱり道を知っている者がいるのといないのでは、旅をゆくはやさもだんちがいです。いつこくをあらそう旅の者たちにとつて、この道あんのいのミリエムのそんざいは、多大な危険と冒険のだいしようをはらつてさえも、なおあまるほどのものでした(わたしもミリエムが、こんなにも大きなそんざいになろうとは、さいしよはぜんぜん思つていませんでしたが……)。

そして、なんとといっても。

それらすべてのことがうまくはこぶように手助けをしてくれた、もうひとりのすばらしき仲間、カルモトのそんざいだったのです(ここで……、ひとつみなさんにお伝えしておくことがあります。まちにもどる前、旅の者たちはカルモトにみずからの旅のもくてきのことや、このアークランドにせまるやみのこと、ロビーがいい伝えのきゆうせいしゆであるということなどを、すっかり話すべきだと思いました。伝説的なまでのけんじや。このアークランドにとって、こんなにも、

たのもしき力となってくれるものもないことでしょう。それでみんなはトーディアを出るときに、ようやくのことで、それらのことをカルモトに話しましたが……、カルモトはとつぜん、目を大きく見ひらいて、こういったのです。

「なんだと！　なぜ、それを早くいわない！」

いえ、話そうにも、いつもカルモトはさつきとさきにいつてしまうので、話すきかいてもなかったんですけど……。とにかくカルモトはしばらく考えてから、旅の者たちのことを見て、こうつづけました。

「うゝむ……、これは、ゆゆしき問題だな。よし、心得た。わたしにできることは、かならずするとやくそくしよう。だが今は、わたしは、みずからのつとめを果たさねばならん。すまないが、わたしに、しばしの時間をくれたまえ。なに、悪いようにはせん。」

やはり、みずからの運命にしたがい、そのせきにんを果たそうとしている今のカルモトのことをひきとめることなどは、旅の者たちにも、だれにも、できることではありませんでした。ですがそれはなにも、カルモトがこのアークランドのいちだいじのことを、かるく見ているというわけでは、けつしてありませんでした。カルモトはカルモトにしかできない方法をもって、このアークランドのために、力をつくしてくれるようなのです。どうやらかれには、なにか考えがあるみたいですが、それはいったい……？　それはいずれ、あきらかになることでしょう。

カルモトはみんながまちへもどるときに、いっしよについてきてくれました。それは（旅の者たちの見送りのほかに）かれがロザムンディアのまちの人たちに、いもうとのアルミラのかけためいわくのすべてに対して、きちんとおわびをしておかなければならないと思ったからでした（のちにカルモトは、アルミラの残したかいぶつによつて長いあいだくるしめられてきた、はぐくみの森のフォクシモンたちにも、きちんとおわびをしいったのです。ですが今は、さきにアルミラほんにんとのかつちやくをつけてしまわなければなりませんので、カルモトはまずは急ぎ、ロザムンディアのまちの人たちにお

わびをしておきたいと思いました)。そしてカルモトは、まちの人たちに、フログルたちのことやアルミラのことなどのすべてを、すっかり話してきかせたのです(アルミラがカルモトの、じつのいもうとだということもふくめて、すべてです。まちの人たちははじめはびっくりしてとまどっていました。カルモトのそのすなおな心にうたれて、それですっかり受けいれてくれました)。

「わたしには、これからすぐに、やらねばならないことがある。」カルモトが、まちの人たちにいいました。「アルミラは、みなに多くのくらしみを与えてきた。そのくるしみは、はかりしれない。わたしには、アルミラに対して、みずからのそのせきにんを果たすきむがある。そのためわたしは、しばし、ふるさとのガランタにもどる。そこでアルミラとの、さいごのけつちやくをつけるつもりだ。」

カルモトは、遠く空のむこうを見つめてつづけました。「わたしはアルミラの、魔女としてのすべての力をうばう。そして、今までのつみの、そのすべてのつぐないをさせる。それでもたららないと思うが、どうか、それでゆるしてはもらえまいか。」

カルモトは頭を地面すれすれまで下げて、まちの人たちに心からおわびをしました。ですがまちの人たちは、そんなカルモトに対して、ちつとも怒ってなんかいなかったのです。

「もう、いいんです。わたしたちのことなら。」まちの人たちはそういって、おたがいの顔を見あわせて、気持ちをたしかめました。「こうしてふたたび、もとのからだに、生きてもどれたんですもの。それもみんな、旅のみなさんと、そして、あなたのおかげなんです。あなたのその心が、わたしたちのことをすくってくれたんです。あなたが頭を下げることなんて、ぜんぜんありませんよ。」

そのとき、みんなの中からひとりの女の人が進み出ました。それはロザムンディア大聖堂の、ティエリーしさいさまだったのです。

「けんじやさま。」しさいさまがいいました(けんじやさまとは、もちろんカルモトのことです。カルモトがいい伝えのけんじやのうちのひとりであるということは、すでに旅の者たちが、まちの人たちにも伝えておりましたので)。

「われらは、もう、だれもうらんではおりません。ふこうにしているのをたたれた者たちも、同じ気持ちでありましょう。」

ティエリーしさいさまは静かに目をとじて、いのりをささげながらつぶやきました。

「たしかに、アルミラのしたことは、ゆるされるようなことではありません。ですが、それでも、つみをつぐない、正しい道にもどることは、だれにでも与えられている、けんり。神のもとで、人はすべて、びょうどうなのです。」

カルモトは、しさいさまの言葉に深く心をうたれました。あふれるなみだをおさえることも、もはやできませんでした。カルモトは深く深く頭を下げ、ただただティエリーしさいさまにかんじやし、そして、まちの人たちにかんじやしたのです。

「かのじよをすくえるのは、あなたしかいません。それは、あなたのしめいなのです。」ティエリーしさいさまがカルモトに手をかざして、おだやかにいいました。「おいきなさい、けんじやさま。そしてまた、この土地のふつこうに、力を貸してくださいますね？」

カルモトは頭を上げて、しさいさまにちかいました。

「おれいのしようもありません。わたしは、わたしの力の持てるかぎりをもって、あなたたちにそのごおんをおかえしする。わたしはかならず、もどつてきます。」

こうしてカルモトはひとり、かれのふるさとガラランタへとむかつて、旅立ったのです。西の海に、みずからの魔法で作りに出した、小さな木の船を浮かべて……（ちなみに、この木の船にはたくさんの木のスクリューがついていて、そのためこの船は、とんでもなくはやく進むことができただけです。それはまるで、みなさんの世界のモーターボートなみのスピードでした！「は、はやく……」旅の者たちは思わず、そうもらしてしまったものです。のんびりできないせいかくのカルモトには、まさにびつたりりの船ですよ！

ところで、このスクリューのついたボートをアルミラの塔のあるあのしつちたいで使っていたとしても、やはりすいへいに進む乗りも

のである以上、どろどろのぬかるみにつっこんで、はまってしまつて、さきへ進むことはできなかつたでしょう。あのぬかるみを越えていくことができる乗りものは、まうえにびよこん！ とジャンプすることのできる、フログルのケロケロボートくらいのものでしたのです。まあ、空を飛んでいける乗り物でもあれば、べつですけど。

旅立つ前。カルモトはさいごに、旅の者たちとあついあくしゅをかわしあい、さいかいをちかいあつてくれました。

「きみたちには、じつにせわになった。わたしはけっして、きみたちのことを忘れないだろう。ベルグエルムくん、ライアンくん、ロビーくん。なんというみじかい名まえだ。忘れようにも忘れられんぞ。そしてきみは、フェリアルくんだったな。いい仲間を持って、しあわせだぞ、きみは。わたしはかならず、もどつてくる。」

「いつちやつたね、カルモトさん。」ライアンが、両手を頭のうしろにくみながら、となりに立っているロビーにいました。ロビーはカルモトの去つていった西の海のことを見つめながら、小さく「うん。」とうなずきます。

「それ、そんなにすごいものなのかな？」ライアンが、ロビーのにぎっているそのネックレスのことを見ながら、つづけました。その青い石のついたネックレスは、ロビーの首に、ずっとかかっていたものだったので（これはかなしみの森を出発するとき、ロビーが自分にもつといっしょに持ってきたものでした。そんなの持ってたっけ？ という方は、第二章のはじまり、ロビーが自分のほらあなから去るとき、場面をかくにんしてみてください。ロビーが自分で、このネックレスのことをしゃべっています。ほんのちよつとだけですけど。

ちなみに、ロビーはペンダントとよんでいましたが、まあ、ペンダントとネックレスは、にたようなものですから。

じつはカルモトが去つていくとき、カルモトはとつぜん、ロビーのそのネックレス（ペンダント）のことを見て、こんなことをいいました。

「そのネックレスからは、とくべつな力を感じるな。ここにきて、その力が急にましたようだ。ロビーくん、そのネックレスは、だいじにしない。手放してはならん。きつと、きみを助けてくれるはずだ。」
ロビーは首から下げたネックレスの石を手のひらに乗せて、その重さをたしかめていました。きらきらとかがやく青い石が、かたむきはじめたおひさまの光をあびて、深い色あいをかなでておりました。

「これはずっと、ぼくの首にかかっていたんだ。」ロビーがその色を見つめながら、いいました。「かなしみの森にきたときから、もうぼくは、これを持っていた。だれがくれたものなのか？ わからないけど、ぼくの生い立ちにかんけいがあるものだと思う。いつか、このネックレスのことを知っている人に、出会うかもしれない。ぼくの家族に出会える、きつかけになるかも。だからぼくは、これをずっと、はだみはなさず持っていたんだ。」

「そうだったんだ。」ライアンが、しんけんな表じようをしてそういいます。「じゃあ、とつてもだいじなものなんだね。」

ロビーは「うん。」とうなずいて、そのネックレスのことをにぎりしめました。

「このネックレスにどんな力があるのかなんて、ぼくにはわからない。でも、そんな力にかんけいなく、これは、ぼくにとつて、すごくだいじなものなんだ。」

ロビーはそういって、またその青いネックレスのことを、首からきちんと下げました。

「いいなあ、ロビーは。」ライアンが、またもとのあつけらかんとした表じようにもどつて、いいました。

「ぼくのなんて、これ、見てよ。」そういってライアンは、自分のかばんのポケットの口をあけて、その中をロビーに見せます。そこに、はいつていたのは……、そう、メリアン王がライアンに（むりやりに）持たせた、たくさんのお守りたちでした！（そういえば、そんなのありましたね！ すっかり忘れてました。）

「ぜんぜん、やくに立たないものばかり。ロビーがうらやましいな。」

ロビーはしばらく、きよとーんとして、ライアンのかばんの中を見つめていました。それからロビーは思わず、「ふふっ。」と笑ってしまつたのです。

ロビーは顔を上げて、ライアンの顔を見ました。ライアンはにっこり、笑っていました。

そしてふたりは、「ぷーっ！」と吹き出して、「あははは！」と大きな声で笑いあいました。

こうして、ロザムンディアのまちにへいわがおとずれました。めでたしめでたし……、って、これでこの物語はおしまいじゃありません！ ロビーたちの旅は、まだまだこれからなのですからー！

なにが待ちかまえているのか？ ぜんぜんわからなかった、このひみつの西の道。その西の道のいちばんの心配ごとだった西の魔女のうわさは、これですっかり、かたづいたわけです（あとは西の大陸の地で、カルモトにさいごのけっちやくをつけてもらえばかりでした）。ですけどベーカーランドまでの道のりは、まだまだこれから。ここからの道のりは、やつぱりなにが起きるか？ わからない、危険な道のりであることに変わりはないのです。

「ベーカーランドへいくのには、この、よろこび平原を通っていくのがいいと思いますよ。ここなら街道も通っているし、危険もすくないと思いますけど。」

そうていあんしたのは、もとゆうれいであり、そして新たな旅の道あんないやくとして加わってくれたことになった、ミリエム・オーストでした（ミリエムさんも、おひさしぶり！）。ここはまちの南門の、その内がわ。旅の者たちは出発にあたり、これからの道のりのことについて、ミリエムをふくむまちの人たちと、そのさいごの作戦かいきをひらいているところだったのです。

「いや、それではずいぶんと、遠まわりになる。山にそって進み、この谷を越えていった方がいいのではないか？」

地面においたつくえの上に広げられた地図を見ながら、ベルグエルムがミリエムにいいました。ベルグエルムのいう通り、ベーカーラン

ドへゆくするには、そっちの道の方がずっと近かったのです。ミリエム
のいったよろこび平原というのは、山にそって、とちゅうで大きく海
の方にまがっていました。ですからそこを通っていくのは、（ベルグ
エルムのしめした谷のさきにある）ベーカーランドに行くためには、
ずいぶんと遠まわりになってしまふのです。しかしミリエムがその
道をすすめたのには、大きなりゆうがありました。

ベルグエルムの言葉に、まちの人たちはそろっておたがいの顔を見
あわせました。ミリエムもやっぱり、重い表じょうを浮かべたままで
す。

「たしかに、そこを通っていけるのなら、ベーカーランドまでいっ
ちよくせんにいけるんですが、でも……」ミリエムがいました。

「でも？」ライアンが口をはさんでたずねます。

「はい。その谷には、おそろしい精霊たちが住んでいるというわ
さんですよ。谷に、はいったがさいご。ふたたびもどってきた者
は、ひとりもいないということです。」

そういつてぶるる！ とふるえるミリエムに、ライアンがいつもの
あつけらかんとした顔をして、いいました。

「なーんだ、精霊の谷なんだ。それなら、そんなこわがることなんて
ないじゃない。みんな、精霊たちのことをよく知らないから、おつか
ながつてただけなんだよ。」

ライアンのいう通り、知らないから、こわがったり、ごかいしたり。
そういうことはよくあることなんです。じっさいフログルたちのこ
とについても、まちの人たちはかれらのことについてぜんぜん知りま
せんでしたから、あんなにこわがっていましたよね。でも……、こん
かいばかりは、そういうわけでもないようでした。それはいったい？
「ただの精霊なら、わたしたちも、こんなにこわがったりはしません
よ。その谷は、やみの精霊たちの住む谷なんです！」

「やみの精霊だつて！」ミリエムの言葉に、ウルファの騎士たち、ベ
ルグエルムとフェリアルふたりも、そろってさげびました。そう、
その谷には、ひやくせんれんまの騎士たちであるかれらでさえ、おそ
れさせてしまうような、やみの精霊という者たちが住んでいるという

のです。

「やみの精霊って、なんですか？ そんなにおそろしいの？」やみの精霊たちのことをぜんぜん知らなかったロビーが、きよとんとした顔をして、みんなにたずねました。ですが、ロビーがやみの精霊たちのことを知らなかったのも、まったくむりはなかったのです。

みなさんもすでにごぞんじのように、精霊たちにはいくつかのしゆるいがあります。かなしみの森の小川では、水の精霊たちに出会いましたよね。そしてすがたは見えませんでした。ライアンの使うしげんの力をかりるわざ。あのわざを使うときにも、かならず、水や、風や、ほのおといった力にかんけいする精霊たちが、その場にいたので（そのすがたはわざを使うライアンにさえ見えませんでした。たしかにいるのです）。

精霊のしゆるいについては、シープロンドのタドウリ連山のことをしようかいしたときに、わたしがすこしだけ説明したことがありましたが、その中でひとことだけふれたのが、やみの精霊です（ちなみに、第六章の頭のところですが）。このやみの精霊のことについては、このアークランドでは、話しをすることだけでもよくないことだといわれていました。ですからそのそんざいはみんな知っているものの、やみの精霊のことをくわしくしらべたり、本に書いたりするような者は、このアークランドにはぜんぜんいなかったのです。もちろんかなしみの森のとしよかんにも、やみの精霊について書かれた本などは、いっさつありませんでした。ですからロビーも、やみの精霊たちのことを、ぜんぜん知らなかったというわけなのです（ライアンもやみの精霊のことについては、ロビーにべらべら、しゃべったりはしていませんでしたから）。

「やみの精霊は、ただの精霊とはちがうのです。」ベルグエルムが、ロビーにいいました。「かれらがしはいするのは、文字通り、やみの力。やみの精霊とは、この世界に悪の力をもたらす、おそろしい精霊たちなのです。」

「そ、そうなんですか……」ベルグエルムにこわい顔でいわれて、ロビーは思わずぶるっ！ と背中をふるわせてしまいました。

「しかし、かれらがいなければ、この世界もなり立たないといわれております。ぜんなるものに力を与えるためには、悪の力もまた、必要なのだと。」ベルグエルムがつづけます。

「でも、われらが、たちうちでできる相手ではありません。」フェリアルもロビーと同じく、ぶるる！ とからだをふるわせて、いいました。「剣も魔法も、やみの精霊たちには通じない。かといって、話してわかる相手でもないでしょうし……」（かなしみの森の精霊たちのような、きよらかなる精霊たちとは、こんどはわけがちがうのです。）

「う〜ん……」

さて、どうしたものか？ ベルグエルムとフェリアルのふたりは、そろって首をひねって考えこんでしまいました。ですがそんなふたりの騎士たちに対して、われらがきゆうせいしゆであるロビーは、自信を持って、こうこたえるばかりだったのです。

「だいじょうぶ。ぼくたちには、心強い仲間がいます。精霊のことなら、ライアンにたのむのがいちばんですよね！」ロビーはにこっと笑って、ライアンの方をむきました。「ねっ？ ライアンなら、やみの精霊だって、だいじょうぶだよね？」

「えっ？」ライアンは思わず、言葉をつまらせてしまいます。「そ、そうね。まかせてよ。はは、はは。」

ライアンはいつものように強がっていいましたが、じつは心の中では、ええーっ！ とさげんでしまっていました。やみの精霊というのは、そんな「精霊のことならなんでもまかせて！」といいそうなライアンでさえ、しりごみしてしまうほどの、おそろしいそんざいであったのです（じつさいライアンほんにんも、やみの精霊には会ったことがありますでした。シープロンドのルエル・フェルマートしきようさまにも、「やみの精霊とは、ぜったいにかかわってはいけませんぞ。」とかたくいわれていたのです。そのやみの精霊が、このさきの地にいるといいました。さあ、ライアン、ピンチ！）。

「ここから、よろこび平原を通って、ベーカーランドまでいくのに、どのくらいの時間がかかる？」ベルグエルムがミリエムにたずねました。これがいちばん、だいじなしつもんでした。

「そうですねえ……、馬でいくなら、五日もあれば、ベーカーランドまでいけるんじゃないですか？ もちろん、なにごともしなければですが。」

「五日だって！」ベルグエルムもフェリアルも、思わずさげんでしまいました。「われらは、南の地からこの北の地まで、二日と半分で作ってきた。帰り道に、とても、そんな時間をかけてなどはいられない。」ミリエムのいうことには、よろこび平原をぬけたあと、ベーカーランドへとむかう道には、いりくんだ山道やまわり道が、とても多いのだということでした。ですからすすい進むことのできた南の街道にくらべて、ベーカーランドまでたどりつくのに、ばいの時間がかかってしまうとのことだったのです。もつともそれは、ミリエムのいった通り、安全だというよろこび平原を通つてまわり道をしていった場合のこと。今すぐにでもベーカーランドへ、きゆうせいしゆであるロビーを送りとどけなければならない旅の者たちにとって、その道をゆくことは、とてもむりなことでした。このおくれはこのアークランドにとって、かくじつにいのち取りとなつてしまうことでしょう。

ベルグエルム、フェリアル、ロビーの三人は、ここでそろつて、あゝひとり的人物のことを見やりました。その人物とは……？ そう、ライアンです！

「こうなれば、道はひとつだ。やみの精霊の地をぬけることに、かけよう。」ベルグエルムとフェリアルが、しんけんな顔をして、ライアンの顔を見ながらいきました。

「ライアンがいれば、こわいものなしですよね！」まだじょうきようがよくわかっていないロビーが、ライアンの肩に手をおいて、にこつと笑っていました（うゝん、知らないというのは、ときにおそろしいものです……）。

ライアンは心の中でまた、ええーっ！ というひめいを上げていましたが、もうこうなったら、やるしかありません。ライアンはひきつった笑顔でロビーの笑顔にこたえると、それからなかばやけになつて、両手を空につき上げて、さげびました。

「もう、なんでもこゝい！ 大精霊使い、ライアン・スタツカートさまの力を、見せてやる〜！」

こうして、みんなの旅はふたたびはじまったのです（ちなみに、ロビーもやみの精霊のこわさをあとであらためてよくきかされて、「ど、どうしょ……、ぼく、ライアンに、むりなこといっちゃったかな……」とはんせいしましたが、でももう、道はきまつちやいましたから）。ここからの旅は、ベーカーランドへとむかう、そのさいこの道のりでした。ここから切り分け山脈の西がわにそって、いちにちずつと南までくだり、そして話に出たやみの精霊の谷を越えれば、そのさきにすぐ、めぐすベーカーランドの地があるのです。うまくいけばそこまで、二日とかからずにいける道のりでした。ですがほんとうに、そんなにうまくいくのでしょうか……？（ここまでの道のりでも、ずいぶんと、よそうがいのことばかり起きちゃいましたからね。）

みんなはきたいと不安を胸に、出発しました。馬に乗って、切り分け山脈のふもとの道を、いちろ、南へ。

と、その前に……、ひとつ、忘れていたことがありましたね。ヒントは、テイエリーしさいさま。それに、ライアンです。そのこたえは……？ そう、たましいがもどったら頭をなでさせてあげるといふ、ひみつのやくそく。あのやくそくは、どうなったのでしょうか？ じつはライアンはのちのちまで、ずっと教えてくれませんでした。これはこの出発の前に、テイエリーしさいさまとのそのやくそくをしつかりと守ったのだそうでした。ですけどそれは、さいしょのやくそくよりも、ずいぶんとちがったものになってしまったようで……、ロビーにもあまりくわしくは、話していかなかったのです。そのロビーにきいた話が、こうでした。

「あの……、みんなが出発する前に、ライアンが『トイレにいつてくるから待って』っていつて、まちの方へむかったんです。それから十分くらいしてもどってきたんですけど、もう、ふらふらになって、かみの毛はぐしやぐしやだし、服もぼろぼろだったし……。どうしたの？ ってきいたんですけど、かれは『トイレにおぼけが出て……』と

しかいいませんでした。」

ライアンの身になにが起こったのか？ わたしはこの物語のげんこうをすっかりまとめ上げたあとで、ようやくそのときのことを、ライアンほんにんからきくことができたのです（そのためにわたしが、どれほどたくさんのお菓子を用意したことか！）。ですけどライアンのめいよのためにも、ここできいた話は、ほかのみんなにはだまっけてくださいね。あんまりみんなに話が広まってしまうと、わたしがライアンに、どんな目にあわされるか？ わかりませんから……（ほんとうはライアンからも、「しゃべったらどうなるか？ わかっているよね？」とねんをおされていたのです。わたしは今ほんとうに、自分のいのちをかけてこの文章を書いています）。

じつはティエリーしさいさまは、ライアンがかわいかったのと、もとのからだにもどれたそのうれしきで、ずいぶんとはしゃいでしまったようで……、ライアンの頭をなでたあと、がまんができなくなって、「ぎゃー！ かわいいー！」と力いっぱい、ライアンのことをだきしめてしまったそうでした。それだけならまだよかったです、よそうが良かったのは、ティエリーしさいさまの、だきしめるその力の強かったです！ ライアンはたまらず、「ぎゃああくー！」とひめいを上げましたが、しさいさまはもうかんぜんにかわいいもの（ライアン）にむちゆうになってしまっていて、声もときまませんでした。それでライアンは、なすすべもなく、ほおずりされたり、ほっぺにちゅーまでされて、ぼろぼろになって帰ってきたというわけだったのです……。うーん、さいんななライアン。ふだんおしとやかな女の人ほど、変わればこわいものですね……。

女の人（しかもしさいさま）に力でまったくかなわなかったライアンは、男として、かなりシヨックだったようで……。それでみんなには、このときの話、あまりしたがりがりませんでした。そしてこのときいらいライアンは、「かわいすぎるのも、考えものかも……。」と、ちよつと思ふようになったということです。

さて、話がずいぶんと、それてしまいましたが……。とにかく出発

なわけです！

ベーカーランドへとむかうここからの旅は、思いもかけず大人数となりました。まずはお伝えしておりますように、ロザムンディアをだいいびようして、道あんないのミリエムが加わっていたのです。そしてフログルをだいいびようして、カルルとクプルがもういちど、みんなのおともをしてくれることになりました（ほかのフログルたちもみんな、「わたしもわたしも！」といきたがりましたが、さすがにそれでは、ひみつの旅というわけにはいかなくなってしまいますので……）。

ところで。ここでちよつと、まじめな話をつけ加えておきます。フログルたちもまた、カルモトと同じように、このアークランドにせまるやみのことについては、なにも知ってはいませんでした。かれらはロザムンディアのまちの人たちと同じように、ずつと、そととのつながりを持つてはいなかったからです。旅の者たちはカルモトに伝えたように、フログルたちにも、それらのことを伝えました。そのけつかとして、かれらはこのアークランドのためになにかできることがないかと考えて、こんかいの旅の、そのおともをしてくれることになったのです。

さらに、フログルたちははじめ、かれらの持つおよそ四十人の兵士たちをみんな集めて、「わたしたちも、いくさの場におもむきます！」といつてくれましたが、はげしいいくさの場にかれらをつれていくようなことは、とてもできるようなことではありませんでした。かれらはたしかに、うんどうのうりよくにすぐれた、ゆうしゆうなる兵士たちです。しかしいくさの場で戦うためには、それに対しての、きちんとしたくんれんが必要とされました。ただ強いというだけでは、いくさの場では、じゆうぶんな力をはつきできなかつたのです。いくさの場でたいせつなのは、とうそつ力と、そして、はんだん力。しきかんのめいれいをきちんと受けとめ、それにふさわしい隊れつをくみ、てきかくな行動が取れるか？ という力が、もつとももめられるのです。そのためのくんれんを受けていないかれらをつれていけば、かれらをいたずらに、きずつけてしまうことにもなりかねません。そんなことは旅の者たちにとつても、とてもさせるわけにはいきませんでし

た。

そのかわり。フログルたちにはこれから、この西の地と北のはぐくみの森にいたるまでの土地のけいごを、受け持つてもらうことになったのです。これはひじょうにたいせつなしごとでした。この西の地をふたたび、旅人たちのいきかうもとの安全な土地にもどすことができるかどうかは、ひとえに、かれらフログルたちの、これからのかつやくにかかっていたのです。でもきつと、かれらならやりぬくことでしょう。

これで、旅をゆく者は七人です。ですがひみつの旅にはそれだけでも多いくらいでしたのに、このうえさらに、かれらとともにゆく者たちがいました。それは……、カルモトの木の兵士たちと、木の音楽隊の者たち！　じつはカルモトはかれらのことをすっかり忘れて、まちのそとにかれらをおきっぱなしにしたまま、旅立っていつてしまったのです！（それにしてもカルモトは、かれらのことをよく忘れますね……）

「ちよつとー！　これ、どうすんのさー！　思わぬことで木の者たちのことをおしつけられたライアンが、遠く海のむこうにさげびましたが、もちろんその声がカルモトにとどくはずありません……。みんなはしばらく話しあったうえ、この木の者たちはカルモトの家の近くまで送っていつてやるのが、いちばんよいというけつろんを出しました（ちようど道のとちゆうでしたし、そこからなら、自分で家までもどれるでしょうから）。木の兵士たちについては、剣のうでも立つ強い者たちです。ようじんぼうとしても、心強い味方になってくれることでしょう。

でも問題がひとつ。かれらは全部で、十二人もいたのです！（そのうち木の音楽隊が、半分の六人でした。もつとも、かれらのことを人と数えていいものかどうかは、ぎもんでしたけど。でももう、かれらは仲間なのですから、人数に数えてもいいですよね。）

こんなわけで、もう「これのどこがひみつの旅なんだ？」といったいくらいの人数で、旅の者たちは出発しました。その数、全部で十九人！（これじやまるで、山のぼりの遠足にむかう、小学校の子どもた

ちみたいですね……。さしずめベルグエルムが、みんなをひきいる先生といったところででしょうか？)

ところで、ロビーたち旅の者たちは、みんなそれぞれの騎馬たちに乗っているわけですし、木の兵士たちと音楽隊も、それぞれの木の馬たちに乗っていたのです。ですからもう、馬の背中はいっぱいでした。ではカルルとクプル、それにミリエム、の三人は、歩いていくのでしょうか？

いえいえ、その心配はありません。フログルたちはそれぞれ、トーディアからロザムンディアにくるときに、ビポナというへんてこな生きものに乗ってきたのです。ビポナはきいろいからだにみどり色の羽を持った、かぶと虫にそっくりな生きもので、フログルたちはこの生きものをかいならして、馬のかわりに、その背に乗っているというわけでした(木のみつをバケツいっぱいのために、それをがけの上においておくと、すぐに一ダース近いビポナたちが集まってくるということです。ビポナはたいへんにおとなしいせいかくでしたので、敵意さえ見せなければ、ものすごくかんたんにつかまえられるのだということでした)。つき出た大きなつのに、たづなをつけて乗るわけですが、おどろいたのは、その足のはやいこと！ 六本の足で馬よりもはやく、大地を駆けぬけていくのです！ ですからビポナに乗れるのは、乗りなれている(そしてうんどうしんけいのすぐれている)、フログルたちだけでした。つまりこういったわけで、ミリエムはクプルの背中に「ひええ〜！」としがみつきながら、この旅を進んでいくはめになったのです……。う〜ん、気のどくなミリエム。せっかく、もとのからだにもどれたばかりだというのに……)。

そんなおかしな一行の旅は、大人数にもかかわらず、思いのほかじゅんちように、なにごともなく進みました(それとも大人数のおかげでしょうか?)。しつちたいの広がる土地をぬけ、切り分け山脈のふもとの道を、山にそって南へ。みんなはあたりや空の上に乗まで、じゅうぶんに気をくばりながら進んでいきましたが、ワツトの黒騎士たちのすがたはおろか、けものいつびき、かれらの道をはばむものはあられませんでした(もつとも、野生のけものいつびきくらいでは、

この大人数のかれらの道をはばむことなんて、むりでしょうけど。山のようにでつかいけものがいつびき、とかいうのであれば、話はべつですが。

でも、とちゆうひとつだけ。クプルが「あっ！ フワフワだ！」と
いって、ビポナの背からびよこん！ ととびおりて、そのまま原っぱ
の中にとびこんでいってしまったのです（残されたミリエムが「ぎや
あー！」とさけんだのはいうまでもありません。「しようがないな。」
といつてつれもどしにいったカルルも、もどつてきません。しばらく
してふたりが（けろつとした顔をして）もどつてきましたが、ふたり
とも口いっばいにフワフワをほおばつていて、肩から下げたかばんの
中にも、フワフワがぎっしりはいつていました。

「フワフワの、たいぐんでしたよ！ むしやむしや。みなさんのぶ
んも、いっばいつかまえてきましたから、どうぞー！」

ど、どうぞといわれても……。みんなは手をかざして、「ご、ごめん。
今、おなかいっばいだから……。」といつてごまかしました（やつぱり
このふたりは、つれてこない方がよかつたかも……）。

それからみんなは、ぶじにカルモトの家へとつづくその道の前まで
たどりついて、そこで木の兵士たちと音楽隊に、おわかれをしたので
す。木の者たちはきりつ正しくこうしんしていつて、道のとちゆうに
こちらをむいて、きれいに、びっし！ とせいれつしました。それか
らかれらはくりとむきを変えて、ふたたびカルモトの家のある木の
塔へとむかつて、その山道の中をこうしんしていつたのです。

かれら木の者たちは、カルモトの家の前で、カルモトがもどつてく
るのをずっと待ちつづけるのでしよう。旅の者たちが手をふつても、
木の者たちがそれにこたえることはありませんでしたが、旅の者たち
にはかれらがさきほど、こちらをむいてきれいにせいれつをしたの
は、みんなにむかつて、さいごのおわかれをしていたのだと思えてな
りませんでした。

さて、これでようやく、ひみつの旅らしい人数にもどつたわけです
（といつても、まだ七人もいるわけですが）。ここからさきは、このう

ちすてられた土地の中でも、さらにおく深い、だれひとりとしてよりつかない土地。旅の者たちはこれから、その土地の中へとふみこんでゆくのです。ここでいちばん、たよりになったのは……、やはり、この旅のいちばんのみちびき手である、あの人（ベルグエルムではありません。ざんねんながら）。この土地のことをもつともよく知っている、ミリエム・オーストでした。

じつはミリエムはもともと、ベーカーランドよりもさらに南のくに、ブリスタットというくにの出身で、そのくからロザムンディアのまちの大聖堂のオルガンそうしやとしてやってきたのが、かれだったのです（オルガンがひけるなんて、いがないなきいのうですね！）

ちなみに、ミリエムの生まれたブリスタットですが、このくにはグラン河という美しくゆたかな大河に守られていて、その河のほとりに育つたくさんのくだものは、このアー克蘭ドの中でもとくに高いひょうばんを受けていました。とくにブリスタットベリーというくだものがゆうめいで、このくだものは見た目はプラムにいていましたが、とつてもあまくて、みずみずしくて、かおりがさわやかで……、とにかく、やみつきになっちゃうおいしさなんだそうです。そう、じつはわたしも、まだブリスタットベリーを食べたことがないんです！うくん、くやしい。こんどぜつたい、食べてみたい！）

そんなわけですから、ミリエムはこの西の街道を通つてブリスタットからベーカーランドまでのあいだ、そしてベーカーランドからロザムンディアまでのあいだを、なんどもいききしたことがありました。この土地の道あんないには、ミリエムはまさに、うつつつけだったというわけなのです（もつともミリエムはロザムンディアのまちですつとゆうれいになっておりましたから、かれがこの道を通つていたのは、もうなん十年もむかしのことでした。ですからちよつと、心配ではありませんが……）

ちなみに、ミリエムの中からだはゆうれいになったそのころのままでしたので、見た目はとつても若く見えました。じつさいには、ベルグエルムよりもずつと年上だったのです。うくん、なんだかちよつと、ふくぎつです（ね）。

そのミリエムのあるないで、一行はこの古びたむかしの道のりを、
どンドンと進んでいくことができました（やっぱり道を知っている者
がいるというのは、ちがいますね）。古い街道はもう、ほとんど消えて
しまっていて、道を見つけるのがとくいなベルグエルムでさえも、街
道をたどっていくのはこんなんになっていました。ですから正しい
道を進んでいくのには、むかしのけいけんを持っていくミリエムの、
そのきおくだけが、たよりとなつたのです（大きな木が立っていたり
とか、大きな岩があつたりだとか、そんなものが道の手がかりとなつ
たのです。でもときおりミリエムは、「あれ？ おかしいな、ここは、
どっちだったっけ？ うーん……。」となやんで、みんなをはらはらさ
せましたが……。まあ、だいぶ時間がたつて、景色もずいぶんと変
わつてしまつておりましたから、もんくはいえませんでしたけど。
もつともミリエムの場合は、たんに、きおくの問題であることが多
いようでしたが……）。

やがて日が落ちてしまつてからも、一行は夜のやみの中をずいぶん
と進みました。ですが、さすがにもう、これ以上は進めません。こう
して、長かつた今日いちにちの旅が終わつたのです。

みんなはもう、くたくたでした。今日はずいぶんと、いろんなこと
がありましたから。いえ、ありすぎましたから。はぐくみの森を出発
してからモーグにはいり、フェリアルがおぼけになつて、カルモトに
会つて……。それから、魔女の塔での大冒険です。これだけのことを
いちにちのうちに終えましたから、むりもありません（魔女の塔での
冒険についてはフェリアルはさんかしていませんでしたが、かれはそ
れと同じくらい、たいへんな目にあつてしまつていましたから、やつ
ぱりみんなと同じくらい、へとへとだったのです）。みんなは街道の
わきの原っぱに野宿のじゅんびをさつきとすませて、つめたいままの
ごはんをがつがつ食べると、すぐに、深い眠りに落ちていってしま
いました。ありがたいことに、つかれたからだの旅の者たちのために、
カルルとクプルがこうたいで、見張りに立つてくれるということでした。

た。ですからみんなはフログルたちにかんしゃして、心おきなく、ぐっすりと眠ることができたのです（ちなみに、ミリエムは旅の者たちよりもさきに、すぐにぐーぐーいびきをかいて寝てしまいました。まあ、ビポナに乗っているのも、たいへんなのでしよう）。

よく朝。みんなは生きかえたかのようにげんきになりました。こんなにくっすり寝てしまったのも、ひさしぶりな感じですよ。みんなは「うーん……！」と両手をのぼし、朝のすがすがしい空気を、おなかいっぱいにするこみました（でもひとつだけ問題が。みんなが朝起きたら、起きて番をしてくれているはずのカルルとクプルが、そろつてぐーすか、気持ちよさそうに寝ていたのです……。なにごともしなかったからよかったものの……。やっぱりフログルたちにまかせるのは考えものだと、みんなは心から思いました……）。

それからみんなはふたたび、街道をいっちょよくせんに進んでいきました（ライアンはまだ朝のおやつがすんでいないといって、はちみつをたっぷり乗せたマフィンを三こも、口にほおばりながら出発しましたが）。空はうすぐもり。風はそよ風。寒すぎることもなく、おだやかな朝でした。

「今日のうちに、なんとしても、ベーカーランドへとたどりつかねばならない。」ベルグエルムが、たづなをにぎる手に力をこめて、みんなにいいました。「進めるうちに、どんどん進んでおかなくては。われらに、休んでいるひまなどない。ライアン、今日は、おやつ時間はなしだぞ。」

「えーっ！ そんなー！」いわれて、ライアンがさげびました。

「しょうがないよ。」ロビーも、ベルグエルムの言葉にこたえてそういいます。「今日は、キャンデーだけでがまんしてね。」

ですが、ライアンがキャンデーだけでがまんできるはずもないということは、ロビーにもよく、わかっていました。

「いいもん！ メルに乗りながらおやつにするから！ ロビー、ぼくのお菓子、しっかり持っててよねー！」

やっぱり……。ロビーはライアンにおしつけられたお菓子のほいったかばんをかかえこみながら、「はあ……」と深いため息をつきま

した。

それからみんなの騎馬たち（とビポナたち）は、大地を走りに走りました。とちゆう、おひるごはんのきゆうけいをわずかにはさんだほかに、みんなはほんとうに、馬（もしくはビポナ）からおりることもせずに、南へ南へ、いつちよくせんに進んでいったのです（ところでライアンはほんとうに、走りながらおやつを食べました。ひとつお菓子を食べるたびに、「ロビー、チョコクッキー取って！」とか、「つぎは、ふにやふにやグミのキーズベリー味！」とか、うしろのロビーにいうのです。かわいそうなロビーは、さからうこともできず、ライアンのわがままに、だまってしたがうほかありませんでした……）。そしてもう日もかたむきはじめ、あたりがだんだんと、夜のしはいにつつまれてゆうこうかという、ちようどそのころ。

「あそこです。あそこが、分かれ道ですよ。」

つづく道のそのさきをゆびさして、とつぜんミリエムがいました。道はその場所で、大きく右へまがっています。ですがよく見ると、道はそれだけではありませんでした。小さなほそい道が、そのままつづく、南へとつづいていたのです。

その小道は、なんともおそろしげな道でした。草木がぼうぼうにのびていて、張り出したえだが、その道をふさぐようにいくつもたれ下がっていたのです。そのえだや葉が、山からの風にこたえて、さわさわ……、ひゆるひゆる……、となんともものさびしい声を上げていました。

「道にそって右へいけば、そのさきは、よろこび平原へとつながっています。このまままっすぐ、あの小道をいけば、道は、山のおく深くへとつながっていて、そのさきには……。」

「やみの精霊の谷があるというわけか。」ベルグエルムが、ミリエムのかわりにいいました。

「そ、そうです。」ミリエムが、おびえたようにこたえます。

「ねえ、ほんとうにいくんですか？ 今からでも、おそくありませんから、考えなおした方が……。」

ミリエムはそういって、不安そうに旅の者たちのことを見渡ししました。ですがミリエムになんといわれようと、みんなはここで、道をそれるわけにはいかなかったのです。

「われらは、なんとしても、この道をやかねばならない。ここでのおくれは、このアークランドの運命を変えてしまうことになるだろう。」ベルグエルムが、かたいけついで持っていました。

「ここからさきは、われらだけで進みます。ここをぬければ、ベーカーランドまでは、もう、目と鼻のさきだ。ミリエムどの、ごあんない、心よりかんしゃいたします。」ベルグエルムはそういって、ミリエムにウルファの敬礼をおくりました。

「なーんか、おぼけでも出そうなところだね。」ライアンが、ロビーといっしょにその小道をながめながら、いいました。「こんどこそ、ほんとうのおぼけが、うじゃうじゃいるかも。しっかりたのむよ、フェリー……、あれ？ フェリー？」

ライアンとロビーはまわりをきよろきよろ見渡しましたが、そこにはフェリアルル騎馬だけがぽつんといるばかりで、主人であるフェリアルルすがたが、どこにも見あたりません（ま、まさか、おぼけにさらわれちゃったんじゃない……！）。

「あー、フェリアルルさんなら、さつきから、わたしの背中にくっついてるんですが……」

そういったのはカルルでした。見ると、フェリアルルがカルルの背中にしがみついて、そこからびくびくと、つづく小道のようすのことをのぞきこんでいたのです（まったく人さわがせな）。なんだかフェリアルルは、自分がおぼけになってしまっただけというもの、前よりもっと、おぼけがいらいになってしまったようですね。この小道の「おぼけムードまんてん」なようすを見て、フェリアルルはすっかり、おじけづいてしまったというわけでした（でもフェリアルルのめいよのためにもいっておきますが、かれは相手が「おぼけかんけい」じゃなければ、とつてもゆうかんで、りっぱな強い騎士なのです。それはガイラルロックたちや黒騎士たちとの戦いの場面を見れば、よくわかりますよね。こんかいのこの西の地での冒険は、相手や場所が、あんまりよ

くない場合が多いみたいです。オーリンたちの谷では、おぼけの出そうな谷の底で、おぼけみたいに出たり消えたりするかいぶつに出会ってしまいました。それからこんどは、おぼけのまちそのものにふみこんでいって、そこで二百人ほどのゆうれいさんたちに出会ってしまったのです。そしておつきは、やみの精霊たちの住むという、おぼけの出そうなこわーい道……。フェリアルにとっては、だいぶ、かわいそうな旅になってしまいました。ですからみなさん、かれのことを見て、「なさけないなあ……」とか、あんまり思わないであげてくださいね。これからきつと、たくさん、かつやくしてくるはずですから。相手が「おぼけかんけい」じゃなければ。

「まったく……、なにやっつてんだか、もう。」ライアンが「はあ……」と深いため息をついて、あきれたようにいいました。「こらー！ それでも騎士なの！　しやきつとしなさい、しやきつとー！」

「は、はいっー！」ライアンに怒られて、フェリアルは思わず、しやん！　と背すじをのぼしてしまいます。

「騎士は、みんなを助けるのがごとくでしょ！　まったく、だらしない。」ライアンが、ぶんぶん怒っていいました。

「い、いや、わたしは、みんなの安全のために、道をよくしらべておこうと……。」

くるしい、いいわけをするそんなフェリアルの顔を、「ふくん。」とのぞきこみながら、ライアンがさらにこういって、フェリアルのことをつつつきました。

「そっか。じゃあ、みんなの安全のために、さきに、フェリーひとり、谷をしらべてきてもらおつかない。」

「ええーっ！　そ、そんなー！」フェリアルが泣きそうな顔をしていました。

「た、隊長ー！」

フェリアルはそういって、ベルグエルムに助けをもとめました。そんなベルグエルムもまた、いたってまじめな顔をして、こうこたえるばかりだったのです。

「うむ。それもいいな。もし、おぼけが出てきたら、すぐに、わたし

たちにしらせてくれたまえ。」

「た、隊長まで、そんな〜！」

とまあ、これも全部じようだんでしたが……、ちよつと、やりすぎちゃいましたね（フェリアルのことをからかうのはやめにしましょうと、前にもいいましたのに、もう）。ほんとうに泣いてしまったフェリアルに、ライアンもベルグエルムも、「ご、ごめんね、フェリー。」とあわててあやまりました。

「ロビーどの〜！」ロビーにしがみついてわんわん泣いているフェリアルでしたが、そんなロビーも、よしよしとフェリアルのことをなだめながら、心の中でちよつとだけ、こう思ったのです。

フェリアルさんって、けっこう、めんどくさい……。

こうして旅の者たちは、そのおそろしいやみの精霊の谷へと、ふみこんでいきました。はたしてみんなはぶじに、この谷をぬけて、そのさきにつづくめぎすべーカーランドの地へと、たどりつくことができるのでしょうか？（たどりつけないきやこまりますけど。）

みんなは見送るミリエムとフログルたちに、もういちど手をふつて、その暗い小道をばかほこと馬で進んでいきました（ミリエムをひとりで帰すわけにはいきませんでしたので、カルルとクプルのふたりとも、ここでおわかれでした。ちよつとさみしいですけど、また、げんきなすがたを見せてもらいたいものですね！

ところで……。ミリエムたちのその帰り道の中でのこと。かれらは道のとちゆう、思わぬできごとに出会ってしまったのです。かれらが野宿をしていると、そのむこう。西のほうがく、海のほうこうの荒れ野の地に、今までだれも見たこともないような、かがやくまちなみがありました！ ミリエムはなんともびっくりりぎようてんしてしまつて、「あんなものは、見たこともきいたこともない！ むやみに近づかない方がいいですよ！」といいましたが、こうきしんおうせいなフログルたちが、じつとしていられるはずありませんよね……。

こうしてかれら三人は、ビポナを走らせて、そのかがやくなぞのまちへとむかつたのです。そこでかれらが見たものは……？

ごめんなさい！ ミリエムたちのその冒険について、ここでくわしくお話しているわけにはいきません。それをみんな書いていたら、この本がもつと、ぶあつくなくなってしまいますから！ この物語は、あくまでも、「ロビーの冒険」なのです。ですからまことに申しわけないのですが、「ミリエムとフログルのふしぎな冒険」の物語については、またのきかいにお話することにしましょう。かいつまんで説明しちゃったら、もつたいたくないくらいのお話なので。ほんとにごめんね。小道を進むにつれて、あたりはどんどんと暗くなっていきます。まだ日も落ちきっていないというのに、この暗さはやっぱり、ふつうではありませんでした。ということとは……？

「やっぱりここは、やみの精霊たちがしはいしているんだ。」ライアンが、あたりのようすをきよろきよろと見渡しながら、いいました。「この暗さは、かれらの力によるものだよ。かれらの力には、どんな光だって、かなわない。かれらにおそわれたらさいご。人はみんな、かれらの力に、そのからだをくいつくされて、おぼけの仲間いりになっちゃうんだって。」

ライアンがそういうと、うしろからフェリアル「ひええ……！」という声がきこえてきます（おぼけムードまんてんの場所できいて、楽しいような話題でもありませんでしたから）。

「そ、そんなおそろしい精霊がおそってきたら、どうやって戦うの？」ロビーがライアンに、おそるおそるたずねました。

「うーん、そうだね。だれかひとりがおとりになって、そのすきに……」ライアンはそういって、うしろのフェリアルの方をふりむきま

す。
「じよ、じょうだんはやめてくださいよ！」フェリアルがライアンに、さげびました。

「うそだよ、フェリー。」ライアンはそういって、けらけら楽しそうに笑いました（ほんとにいじわるなんだから、もう）。

「かれらと戦おうとしたって、むだだよ、ロビー。前にもいったけど、精霊たちの力には、ぼくたち生身のからだの者たちには、とうてい、かないっこないんだ。だって相手は、この世界、そのものなんだ

から。」

そんなライアンの言葉に、ベルグエルムもつづけてロビーにいいました。

「ライアンのいう通りです。われらはけっして、かれらと戦ってはならない。かれらのきげんをそこねないように、なんとかか、かれらの谷を通らせてもらうのです。それがいに、道はありません。」

「そ、そうなんですか……」ロビーが不安げにこたえます。「でも、きつと、ライアンがいれば、だいじょうぶですよ。ライアンなら、かれらと話しができる。話しあえば、きつと、わかってもらえると思うから。」

「だと、いいんですけど……」フェリアルが、ロビーよりもっと不安げにいました。「わたしはもう、おぼけなんかになるのは、ごめんですよ。」

「いちどなったんだから、二どや三ど、なったって、おんなじじゃない?」ライアンがまた、いたずらっぽく笑ってフェリアルにそういいます。

「じよ、じょうだんじじゃない! もう、にどとごめんです!」フェリアルがむきになって、かえしました。

やがて道はどんどんせまくなり、ついに一行は、馬が一頭ようやく、くぐれるか? というくらいのも、そのなんともおそろしげな門の前までたどりつきました。いえ、門といいましたが、両がわにこげが生えた石のはしらが二本立っているだけで、とびらもやねもありません。ですがそのさきはあきらかに、この世界のものではありませんでした。くらやみの中にゆらゆらと動く葉のない木々が立ちならんでいて、地面にはまっ黒いねずみのような生きものたちが、ちよろちよろとはいまわっております。そしてときおり、影そのものがまるで生きているかのように、ぐによくによとそのかたちを変えて、動きまわっているのが見て取れました。

まさしくこの門のさきは、やみの精霊の谷。この世界の者たちが、むやみに立ちいつていいような場所ではなかったのです。

「きよ、今日は、精霊さんたちは、いそがしいみたいです。また、日をあらためて……」

「うらー！ 逃げるな！」

いかにもおばけが住んでいそうなそのおそろしいふんいきのことで見て、フェリアルがいそいそとひきかえそうとしましたが、そんなフェリアルのえり首をライアンがぐいっとつかまえて、ひきもどしました（やっぱりほんめいの場所は、これまでの小道よりもっと、おばけムードまんてんだたのです……。門の中はおばけのまちだつたころのロザムンディア、つまりモークよりもっと、おばけが出そうなふんいきでした。かわいそうなフェリアルくん……）。

「みんな。なにがむかってこようと、ぜったいに手出しをしてはならないぞ。」ベルグエルムがみんなにむかって、きつく注意をしました（とくにフェリアルには、ねんをおしていいました）。

「中にはいったら、いっちよくせんに前に進むんだ。よけいなことは考えてはいけない。うまくいけば、なにごともなく、この谷を通りぬけられるかもしれない。」

そういつてベルグエルムは、とうとう、その門をくぐって中にはいつていつたのです。

「なにごともなく、なんて、ありそうにないけどね。」ライアンが、やれやれといった感じで、そのあとにつづきました（とうぜん、うしろに乗っているロビーもいっしょに中にはいました）。

「フェリーー！ 早くこないと、おいてっちやうよー！」ライアンがうしろをふりかえつて、まだぐずぐずとためらっているフェリアルにむかって、さげびます。

「ま、待つてくださいいよー！」そしてフェリアルも泣く泣く、ライアンのことを追いかけて、そのあとにつづいていきました。

ここはいつたい、どんな場所なのでしょう？ 旅の者たちはその谷にはいったとたん、なんともぶきみな感かくにつつまれました。まるであたりからたぐさんの見えないやみの手が、自分のもとへのびてきていて、その手が自分のからだ中のエネルギーを、つかみ取ろうと

しているかのような……、そんな感じにおそわれたのです（なんともいやーな感かくです）。空気はしつとり、ぴりぴり、ひんやりとしていて、黒いきりのようなものが、あたりをゆらゆらとただよっておりまです。地面には黒いマシユマロのようなものがいくつも集まっています（ぜったい、やいて食べてみようとは思いませんけど）、その上や木々のみきなどには、黒いねずみや、りすや、そのほかのふわふわとした生きものたちが、たくさん動きまわっていました。

中でもみんなをいちばんびっくりさせたのは、まっ黒な人のかたちをした、影たちでした。その影たちは身長が七フィートほどもあり、目のあるところに小さな白いあながぼつかりとあいているばかりで、鼻も、口も、ゆびもありませんでした。その影たちが、あつちやこつちを、のそのそと歩きまわっていたのです。

はじめは、かれらがやみの精霊なのかと思いました。ですからみんなは馬をとめて、かれらにこの地を通してもらおうと、話しかけたのです（話しかけたのは、もちろんライアンです）。ですけどかれらはまったく耳を貸さず（というより、きこえていないみたいです）、あいかわらず、ただのそのそと、あてもなくあたりを歩きまわっているばかりでした。

「だめ。話を通じないみたい。」ライアンが手を上げて、ベルグエルムにいいました。「かれらは、やみの精霊じゃないみたいだね。でも、しぜんのエネルギーが、ものすごく強いよ。」

ライアンのいう通り、じつはこの人のかたちをした影たちは、この土地に集まっているやみのエネルギーそのものが、人のすがたになつて、動きまわっているものだったのです！かれらは言葉もわかりませんし、感じようもありませんでした。ですからかれらに話しかけても、むだだったのです。

ですが、それからしばらく進んだところで。旅の者たちはとうとう、この土地のほんとうの住人たちに出くわすことになってしまいました。

それは……、そう、やみの精霊です！

「ぎゃあー！で、出たー！」とつぜん、フェリアルが大声を上げてさ

けびました！

「どうした！」ベルグエルムが馬をとめて、あたりを見まわします。「だめだね、かこまれてるよ。なんか、こんなのばかりな気がするけど……」

まことにライアンのいう通り。旅の者たちは、すでにかれらに、すっかり取りかこまれてしまっていました！（ほんとうに、こんなのはびっくりですけど……）

フェリアルがひめいを上げたのも、むりはありません。かれらやみの精霊たちのすがたは、まるでじごくの底からはい上がってきた、うれしいたちの親玉、といった感じの、それはそれはおそろしいものだったのです！（これにはさすがのベルグエルムでさえ、おじけづいてしまったほどです。）

かれらのからだは人のかたちをした、もえさかるまつ黒なほのおでした。そのからだからはぴりぴりと、いなずまのようなエネルギーが吹き出しています。つり上がった、まつ赤なふたつの目！ その目はまるで、こおりのようなつめたさで、こちらをぎろりとにらみつけていました。そして大きく、さけた口！

それは精霊というよりも、ほんとうに、じごくのおぼけそのものといった感じでした。旅の者たちは今、そんなおそろしい者たちに、まわりをすっかりかこまれてしまっていたのです！（これなら木の兵士たちにかこまれたときの方が、ぜんぜんましです！）

いったいかれらは、なんんくらいいるのでしょうか？（精霊を人と数えるかどうかは、べつとして。）見渡してみれば、あつちもこつちも、赤い目、さけた口、赤い目、さけた口！ 旅の者たちはすっかりふるえ上がって、それぞれの騎馬たちをよせあい、肩をよせあいました。

「ラ、ライアーン！ は、早く、なんとかしてくださいよう！」フェリアルがたまらずに、ライアンにいました。

「かれらにいつて！ ぼくたちは、敵じゃないって！」ロビーもライアンにしがみつきのながら、おびえた声でいました。

さあ、それではいよいよ、大ほんめい！ ライアンくんの出番です！ このときばかりは、みんなライアンにたよりきるほかありません

でした（ベルグエルムでさえ、しつかり！ ライアン！ と心の中であついでいせいえんを送っていたほどでした）。大精霊使いライアンさまの力を、今こそぞんぶんに、はつきしてもらわなくっちゃ！（ついでうか、ほんとにお願い！ なんとかして〜！）

ですが、みんなに思いつききたいされちやつているライアンでしたが、そんなライアンだって、やみの精霊にむかいあうのは、これははじめてのことなのです。なんでもこ〜い！ などと、いきおいでいってしまったライアンでしたが、小さいころから精霊になれ親しんできていたかれでさえ、やみの精霊たちと、はたしてほんとうに話しあうことができるのかどうか？ それはぜんぜん、わからないことでした。でも、やらなければなりません！

ライアンは、ぐくりとつばを飲みこんで、「よ、よーし！」ときあいをこめました。そして手をまうえにかぎして、「自分たちは敵ではない」ということをしめしながら、かれらにいいよ、話しかけようとしたのです（ほんとうなら精霊に話しかけるとときには、その精霊の力にあわせた道具を使った方がいいのですが、やみの精霊にあわせた道具なんて、ライアンは持っていませんでしたから）。

ですが……。

そのつぎのしゅんかん。旅の者たちにとって、まったく思いもかけないできごとが起りました。そしてそれは、もう今まででいちばん！ といっているくらいなの、信じられないほどの、おどろきのできごとだったのです。

ライアンがやみの精霊たちに話しかけようとしていた、まさにそのとき。そのやみの精霊の中のひとりが、大きくさけた口をひらいて、こんなことをいいました。

「おまえたちを待っていた……。われらは、おまえたちに協力する……」

え……？ ええーっ！

これはいったい！ どういうことなのでしょう！

さあ、旅の者たちの冒険は、またしても、このさきよそくのできな
いほうこうに進んでいってしまうみたいです。それは、よい道なのか
？ 悪い道なのか？ 物語はさらにつづきます。

16、エリル・シャンデイーン

「花はいいね。気持ちをおちつかせてくれる。」
いすにすわって本を読んでいたその人物が、ふつとつぶやきました。

ここはこのアークランドのどこかの、テラスでした。てんじょうやかべはガラスでおおわれていて、部屋の中にはとろせましと、赤や、きいろや、もも色に、白。色とりどりの美しい花々がさきみだれております。とこれだけなら、ふつうのきれいなテラスでしたが……、どうやらここは、とてもそんな、おだやかでへいわな場所ではなさそうでした。

このテラスの中は、とてもへいわでした。ですが問題は、このテラスのそと。かいほう的なガラスのかべのむこうから、明るいおひさまの光がさんさん！ というのであれば、とつてもよかったのですが、テラスのそとにはおひさまどころか、くもりの空さえきたいできないような、じつにふきつで、ぶきみな世界が広がっていたのです。そこは赤茶けたごつごつとした岩があたりいちめんにかけている、荒れ果てた土地でした。生きもののすがたはおろか、草のいっぽんさえ生えていません。ですからここは、このくにの中の、とつても悪い場所にきまっています！ そしてそれをけつていづける、あるものが、そこにはありました。その人物がいるガラスづくりのテラス。そのテラスは、その人物がいるそのたてももの、ほんの一部にすぎなかったのです。

なんとというおそろしいたてもものなのでしょう！ あちこちに黒い塔がつき出っていて、その塔のさきつぽには、するどいはもののようなかざりが取りつけられていました。たくさんの目をかたどつたもようが、たてもものいたるところにえがかれていました。そしてこのたてもものが、ほかとけつて的にちがう、おそろしいところがあつたのです。それは……、このたてももの全体を、ぐにぐにと動く、ぶきみなゼリーののような生きている赤いかたまりが、つつみこんでいるというところでした！ そのおそろしげなことといつたら！ しかもそ

ればかりではありません。よく見れば、そこからつき出ているたくさんの黒い塔も、そしてこのたてもものかべそのものも、まるで生きているかのように、ぐにやぐにやと、まがったりのびたりして、そのかたちを変えていたのです！

こんなものは、ぜつたいに人の手で作り出せるようなものではありません！ かいぶつか、悪魔か、それよりもっとおそろしいものか……。そんな、はかりもしれないまがましいもので、このたてものはおおいつくされていました（いぜんアルファズレド王のいるワットのくにのようすを、みなさんは見たことと思います。ですがこの場所は、あれよりはるかに、おそろしいのでした。ですがワットよりもっと、おそろしい場所って……。？）。

「……じゅんびは、ととのつております……」

とつぜん。いすにすわっているその人物のうしろで、静かな声がひびきました。

「……もはやこれ以上、ドルーヴのやつめを、おさえつけておくことはできません……」

この声に、みなさんはききおぼえがあるはずです。それはいぜん、赤い石の浮かぶきみの悪い広間で、石の前に立っていた黒いガウンをかぶったなぞの人物に話しかけていた、あの声でした。

「あ、そう。」いすにすわっている人物が、なんともそっけなく、きょうみもなさそうにいました。

「……どうぞ、ごめいれいを……」

つづく声に、いすにすわっているその人物が、ぱつとうしろをふりかえりました。そしてその人物が見た、そのさき。部屋の入り口の前に立っていたのは……。

おおかみです！ まつ黒なかみとまつ黒なしっぽを持った、りっぱなからだのおおかみ種族の男の人がひとり、いすにすわっているその人物に話しかけていました！（黒いかみと、黒いしっぽですって？ ということはロビーと同じ、黒のウルファじゃありませんか！）いたいこの静かな声のウルファの男の人は、なに者なんでしょうか？

「いいよ。じゃ、そろそろ、でかけてもらおうか。」いすにすわって

いる人物がそういって、「くつくつく。」というすきみの悪い笑い方をしました。

この笑い方！ この笑い方にも、みなさんはききおぼえがあるはずです。そうです、いすにすわっているこの人物。かれはやっぱり、あの赤い石の広間にいた黒づくめのなぞの人物。あの人物にまちがいありませんでした。ですがあのととき、かれはまつ黒のガウンで全身をつつんでいました。それが今は、赤いうす手のセーターを着ているだけで、ガウンはまもっていませんでした。それが意味することは……？

そう、今はかれの顔もふくめて、そのなぞのすがたをみんな見て取ることができるといふことでした！（ですからわたしも「なぞの人物」ではなく、「かれ」とよぶことができるようになったのです。いすにすわっているその人物は、男でした。）

かれは人間の種族の者でした（すくなくともそう見えました）。そしていいがいなことに、ずっと若かったのです（まだ十五さいか十六さい、そのくらいのものでした）。やせていて、きゃしゃなからだつき。きみの悪い笑い方とはうらはらに、その顔立ちはきれいととのつていて、長くのばした赤いかみを、背中までたらしめていました。でも美しい顔立ちとはいえず、やっぱりそのむらさき色のひとみのおくには、なにか、じゃあくなものを感じさせずにはいられなかつたのです。

「好きなだけあばれちゃって、かまわないよ。ああ、でも、あの石だけは、こわさないでね。ぼくがもうんだから。」そういって、かれはまた「くつくつく。」と笑いました。そしてかれは、またむこうをむいて、手にしているその本を読みはじめたのです（ちなみに、本のだめいは「かわいいこねこ」というものでしたが）。

「楽しみだなー。早く、かれがきてくれないかなー。」そういってかれは、まるで小さな子どものように足をぱたぱたさせて、「ふんふん。」ときげんよく鼻をならしました。

「そのために、あなたにきてもらったんですから。ね？ ムンドベルクさん。」

ええっ！ ム、ムンドベルクですって？ ということは……。

このふたりの人物がだれだか？ 読者のみなさんにはもうおわかりでしょう。おおかみ種族の人物は、ほかでもありません。レドンホールの、すべてのウルファたちの王。ムンドベルク・アルエンス・ラインハット、その人だったのです！ そしてもうひとり……？ そう、いすにすわって本を読んでいる、この子どものようにむじやきな人物こそ、ほかでもありません。すべての悪だくみのうらに立つ、悪の魔法使い、アーザスほんにんでした！

「……はい……」ムンドベルクが、アーザスの言葉にこたえました。王さまはすっかり、アーザスに心をうばわれてしまっていたのです。

「……かれは、かならずや、ここへやってくることでしょう……。わたしには、わかります……」

ムンドベルクのその言葉に、アーザスは「くっくっく。」と笑うだけでした。

「じゃ、ドルーヴのことは、よろしくたのむよ。」アーザスはそういって、うしろむきのまま手をひらひらとふって、ムンドベルクのことを送ります。

「……失礼いたします……」

「ああ、それと。」おじぎをして立ち去ろうとするムンドベルクのことを、アーザスが急によびとめました。「ぼんごはんは、ハンバーグがいいな。ケチャップたつぷりのやつ。よろしくねー。」

ムンドベルクはふたたびおじぎをして、テラスから出ていきました。

ひとりになったアーザスは、ガラスのかべのむこうを見つめながら、その口もとを、にやりとぶきみにゆがませました。

「かれがここにくるまで、あと二、三日かな？ 楽しみ。」アーザスはそういって、いすの手すりの上においてあった、いっぽんの白い花を手に取りました。

「きみのかつやくに、きたいしているよ……」

アーザスがそういうと、その手に持っていた花が、まるでドライフラワーをつぶしたかのように、ぱりぱりと音を立ててくずれちってし

まいました。

かあー！ かあー！

一羽のからすが大きな声でなくて、夜のとばりにつつまれつつあるその空の中の高くを、飛んでいきました。その足には、ひとつの大きな木の実がにぎられていました。

ここはこのアークランドの、西の土地。岩がころがり、人々に忘れ去られた木々たちがさみしそうに立ちつくす、うちすてられた場所……。

とつぜん、びゅう！ という強い風が、その土地の空高くに吹きつけました。その風にびっくりしたからすは、つかんでいた木の実を放り出し、かあかあないて、かなたの空へと飛び去ってしまいました。木の実は風に乗って、その谷の中へとゆつくりと落ちこんでいきました。その谷は、星のあかりも受けられないほどの、まさにやみの谷……。そう、この谷こそが、今まさに、旅の者たちがふみこんでいる、そのやみの精霊の谷にほかならなかったのです！

さあ、ここから物語は、どう進んでいってしまうのか？ いったいみんなは、これからどうなっちゃうの？（お待たせしました。）それでは、つづきをどうぞ！

旅の者たちは、すっかりびっくりぎょうてんしてしまいました。なにが起こっているのか？ 正しくりかいすることなんて、まったくむりな話というものでした。

それもそのはずです。このアークランド中の人々におそれられ、近づく者をようしやなくやみにひきずりこんで、そのたましいをけものようにむさぼり食うとまでいわれているほどの（それはいいすぎですけど……）こわいこわいやみの精霊たちに取りかこまれたかと思つたら、いきなり自分たちに、協力するといってきましたから！ しかもやみの精霊たちは、自分たちのことを待っていたというのです。これでおどろくなという方が、むりというものでした。

「そ、それっていったい、どういうこと……」

ライアンがわけもわからず、すっかりこんらんしたじょうたいのまま、やみの精霊たちにたずねました（思わず、いつもの話し方で話しかけてしまいました。ほんとうなら精霊たちには、敬意をこめた、おごそかな話し方をしないといけませんでしたが、そんなよゆうもありませんでしたから）。これに対して、やみの精霊たちはいたつておちつきはらったようすで、顔色ひとつ変えずに、こうこたえたのです。

「精霊王からの、たのみだ……」

「精霊王！」思わずライアンが、さげんでしまいました。ベルグエルムもフェリアルも、もちろんその名をきいて、びっくりしないはずもありません（ただひとりロビーだけは、精霊王の名まえをきいても、ぽかーんとしたままでした。おさなかつたころのロビーのきおくの中には、精霊王についてのきおくはなく、ロビーは精霊王のことについても、森のとしよかんで読んだ本の内よういがい、なんにも知らなかつたのです。その森のとしよかんにあつた本は、小さな子むけの「精霊王のふしぎのくに」という絵本だけでしたので、ロビーは精霊王ときいても、絵本の王さまがどうかしたのかな？ と思つたばかりだつたのです）。

「まさか……！ ほんとうに精霊王さまがいるんですか！」

ライアンもベルグエルムもフェリアルも、やみの精霊たちにくいいるようにたずねてしまいました（もうやみの精霊のこわきなんて、どこかに吹き飛んでしまったみたいでした）。まさか、伝説の中だけにそんざいすると思われていたあの精霊王が、ほんとうにいるなんて、とても信じられないことでしたから。

そんなみんなのようすを見て、やみの精霊たちはしばらく、ただぎわざわとゆれているだけでした。そしてしばらくたつて。その中のとびきり大きくて、とびきりこわい顔をしたやみの精霊のひとりが、旅の者たちに話してきかせたのです（どうやらこの精霊が、この谷のやみの精霊たちのリーダーのようでした）。

「ほんらい……、この谷に、人のはいることゆるさぬ……」そういつて、その精霊がみんなのことをぎろつ！ とにらんだので、みんなは

思わず、「ひっ！」とふるえ上がってしまいました。

「王のたのみであるので、とくべつに、おまえたちをここへまねいた……」

「なぜ、王さまがぼくたちのことを？」ライアンが思わず、口をはさみます。するとその精霊がライアンにむけて、口を「しゃああっ！」とならしたので、ライアンは思わず、「すいませんっ！」とちぢこまってしまいました（さすがのライアンでも、相手が悪すぎですので）。

精霊がつづけます。

「アークランドのためだ……。王は、おろかな人間たちによって、このくにがほろびることを、あんじておる……。それを防ぐため、おまえたちにこの谷を通らせるよう、われらにたのんできたのだ……」

「精霊王さまが、ぼくたちのことを……！」ライアンが、ロビーの顔を見ていいました。

「精霊王は、すべてを知っているということか……」ベルグエルムとフェリアルも、おたがいの顔を見あわせて、ごくりとつばを飲みこみました。

そしてその精霊は、ロビーのことをぎろりとらみつけて、こんどはロビーひとりだけ対して、こういったのです。

「おまえが、ロビーベルクだな……？　王はおまえに、このくにの運命をたくした……。王のきたいに、こたえるがいい……」

「えっ？」思わずロビーが、びっくりしていいました。そしてあたりをきよろきよろと見まわして、まわりにほかにだれもいないということとをたしかめてから、つづけたのです。「ぼ、ぼく？」

ロビーベルク！　この名まえは！　いぜんみなさんがおとずれた精霊王の森で、なぞの者たちが話していたその会話の中に、出てきた名まえじゃありませんか！

そう、あの森でかみの長い男の人が話しかけていた、岩のむこうにいた人物。じつは、そのなぞの声だけだったあの人物こそが、ほかならぬ、精霊王ほんにんだったのです！　そしてその話しの中に出てきた、ロビーにいた名まえの人物、ロビーベルク。その名まえを今、目の前のやみの精霊が、ここでふたたび口にしたというわけでした！

「ロビーベルクって、だれですか？　ぼくは、ロビー……」そこまで
いって、ロビーは、はっと気がつきました。

「まさか……、ぼくの、ほんとうの名まえ……！」

ベルグエルムもフェリアルもライアンも、びっくりして、思わずロ
ビーの顔を見やっつてしまいました。まさかこんなところで、ロビー
のほんとうの名まえを知ることになるなんて、みんな、夢にも思っ
ていないことでしたから。

でもいちばんびっくりしたのは、やっぱりロビーです。小さかった
ころからの、長年の夢。そのために旅に出ることをけついで、あこが
れでさえあった、ひとつの思い……。自分のことを知り、ほんとうの
名まえ、「姓」を受けつぐこと。その夢に今、こんなにも、近づいてい
ましたから！

ロビーはすっかりこうふんして、メルの中からは飛びおけると、そ
のまま、そのやみの精霊につめよってしまいました。

「お願いです！　ぼくのことを教えてください！　ぼくは、なに者
なんですか！　ぼくの……、ぼくの家族は、今、どこにいるんですか
！」

やみの精霊はロビーのたいどに、すこしびっくりしたようでした。
ですが精霊は、あいかわらずおちつきはらったようすで、ただ、こう
こたえるばかりだったのです。

「われらはおまえたちを通すよう、たのまれたまで……。それ以上
のことは、われらは、おまえたちに、なにも与えない……！」

「そ、そんな……」ロビーはがっくりと、力を落としてしまいました。
あわててライアンがメルからおりて、ロビーにかけより、ロビーのう
でを取って心配そうにかかえます（そのあとほんとうならやみの精霊
にむかって、「けちーっ！　教えてくれたっていいじゃん！」って
いってやりたいところでしたが、こわいからやめておきました）。

「さあ、いけ……。出口は、このさきにある……！」

やみの精霊がそういって、道をすうっとあげました。そのさきには、まっ黒いやみで作られたトンネルがひとつ、その口をあけていた
のです。

「精霊よ。」とつぜん、ベルグエルムが意をけつしたように、やみの精霊にいました（このときにはベルグエルムもフェリアルも、馬からおりて、ロビーのそばに集まっていました）。「われらはこれから、さいごのしれんるときをむかえます。ロビーどのは、このアークランドのきゆうせいしゅ。われらのきぼうです。」

ベルグエルムはロビーの方を見てから、ふたたびやみの精霊にいいました。

「精霊王の名のもとに、お願いします。ロビーどのに、あなた方の力を！ かれについて知っていることがあるのなら、ぜひとも、それを教えていただきたい。どうかかれに、道をおしめしてください！」

ベルグエルムは頭を下げて、やみの精霊にお願いしました。これはもう、かけでしかありませんでした。やみの精霊にこんなことをたのむなんて、ふつうなら考えられないことでした。へたをしたら、いのちまで、うばわれてしまいかねないのです。ですがベルグエルムは、ロビーのその痛いほどの思いを、よくわかっていました。ですからこんな危険をおかしてまでも、ロビーのために、力になってやりたいと思っただけです。これはまったく、いつもれいせいちんちやくなベルグエルム、らしからぬことでした。ですがそれは、ほかの仲間たちだって、同じだったのです。

「そ、そうです！」フェリアルがつづけていいました。「これは、このアークランドのみらいにかかわる、だいじなことです！ 精霊王だって、このくにのことを、心配しているんでしょう？」

「そうだ！ フェリーのいう通り！」ライアンももう、やけくそになつてつづけました。「知っているんなら、教えてください！ ロビーのことについて！」

「みんな……」

ロビーは、おどろきとかんげきで、胸がいつぱいになってしまいました。みんながこんなにも、自分のことを気にかけてくれていたなんて……。ロビーにはもう、それだけでじゅうぶんすぎるほどでした。

さあ、やみの精霊たちは、どうこたえるのでしょうか？

やみの精霊たちはしばらく、なにもいいませんでした。めらめらと、黒いほのおのようなそのからだをゆらして、旅の者たちのことをじっと見つめているばかりでした。

旅の者たちには、とてつもなく長い時間がすぎたかのように思えました。自分のしんぞうのぼくぼくいう音だけが、ずっとなりひびいていました。そしてそれから、ようやくのことで。やみの精霊たちが、みんなのそのうったえにこたえたのです。

「人というのは、おかしなものだ……。なぜ、助けあたり、いがみあつたりするのか……？ われらには、とうてい、りかいができません……」

やみの精霊は、ぴりぴりと、いはずまのような火花をちらしていました。

「だが、おまえたちのその思いは、買ってやろう……。ロビーベルク、おまえはすぐに、おまえ自身のことを知ることになるだろう……。あとは、おまえしだいだ……」

そういうとやみの精霊たちは、ひとりまたひとりと、そのすがたを消していきました。

「待つてよー！ それだけ？」ライアンが思わずさげびましたが、精霊たちにまた、口を「しやああつー」とならされて、「すいませんっー」とちぢこまってしまいました。

こうして、あとには谷の出口へとつづく、まっ黒なトンネルだけが残されたのです。

旅の者たちはしばらく、その場にぼーっと立ちつくしているばかりでした。谷の中は、しんと静まりかえり、なんの音も、生きもののはいすらも感じられませんでした（地面をはつていた小さな生きものたちや、のそのそと動きまわっていた人のかたちをした影たちも、どこかへいってしまったようでした）。

とつぜん、やみの精霊たちとの出会い。よそうもしなかつたできごと。そして今では、目の前にベーカーランドへとつづくトンネルが

あらわれて、自分たちのことをむかえていたのです。これでは、いくらなんでも頭がこんらんして、ぼーっとなってしまうのもむりはありません。ですがここでこのまま、ぼーっとしているわけにもいきませんよね。とにかく、なにがなんだか？ わけがわかりませんでした。目の前にこうして、谷の出口が口をひらいているのですから。

さあ、馬に乗って！ 考えるのは、あとにしましょう！

「ロビーどの、今はとにかく、この谷をぬけてしましましょう。」ベルグエルムが、かれのはい色の騎馬に乗りこみながら、ロビーに声をかけました。「この出口がいつまでひらいているのかも、わかりません。」

「そ、そうだ！ とじちやったら、たいへんですよ！」フェリアルもそういって、「ひええ……！」とあわてて、自分の騎馬に乗りこみました。

「ロビー。」ライアンが、まだぼーっとなつたままのロビーに、よびかけます。「今は、前に進むしかないよ。ざんねんだけど……」

ロビーはそんなライアンの顔を見て、小さく「うん、ありがとう。」とこたえました。

「さあ、いくぞ。ここをぬければ、ベーカーランドだ！」

ベルグエルムが大きな声で、みんなにむかっていたいました。そしてみんなを乗せた騎馬たちは、そのまっくらなやみで作られたトンネルの中へとむかって、いちろ、飛びこんでいったのです。その出口のさきにつづく、旅のもくてき地。めざす、ベーカーランドへとむかつて（ちなみに、フェリアルだけはまた、「こんなに暗くて、だいじょうぶなんですか……？」 ひよっとして、中に、おぼけかなにかが……）」と行ってぐずりましたが、すぐにライアンに、「いいからさっさといきなよ！」と足でおしりをけっこう強くけられて、あわてて中にはいりました。

「うわわわーっ！ なんなの、いったいー！」

トンネルの中に、ライアンのひめいがごだましました！ いったいなにごとでしょう！ ですがひめいを上げたのは、ライオンだけではなかったのです。みんなでした！

「ぎゃああー！」「なんだなんだ！」「うわあーっ！」

そのトンネルをしばらく進んでいくと、やがてかなたのさきき、明るい光が見えました。ですが、「やったー！ 出口だ！」とみんながよろこんで馬の足をはやめようとした、そのとき……。とつぜん、足もとの地面が、ぐにやーり！ うねうね！ 動きはじめたのです！ これではいくらなんでも、たまったものではありません。みんなはひめいを上げながら、なんとか馬から落っこちないようにふんばるので、せいっぱいになってしまったというわけでした。

まずはじめから、このトンネルはおかしなトンネルでした。トンネルの中はまっくらでしたが、中にはいると、ふしぎと、つづく道のようすがみんなにはわかったのです。そしてなによりおかしかったのは、その道の感しよく。トンネルの地面はまるでかためのスポンジケーキみたいに、ぐにゆぐにゆ、ぽぽぽ、していたのです（ロザムンディアのまちのかびだらけの道も、こんな感じでしたが、このトンネルの道は、あれよりもつとぐにゆぐにゆでした）。ですからみんなは、はじめから、いやーなよかんがしていました。そしてやっぱり、そのいやなよかんがてきちゆうしてしまったのです。

「みんな、ふんばれ！ なんとか持ちこたえるんだ！」ベルグエルムがひっしになって、さげびました。

「ぞ、そんなこといったってー！ ひええー！」ライオンもそういつて、あわてふためいてメルをあやつりつづけます（うしろのロビーも、もうライオンにしがみつくのにひっしでした！）。

「うわわ！ た、助けてー！」フェリアルはすでに馬から落っこちて、地面にあおむけにころがって、手足をじたばたと動かしていません（地面がやわらかかったので、けがはしなくてすみましたけど）。

そのとき。うねうね動いていた地面が、また静かになりました！

これはチャンス！さあ、今のうちです！

「急げ、出口まで、かけるんだ！」

ベルグエルムがさげびましたが、みんなはもう、いわれるまでもありませんでした。急げ急げ！ 旅の者たちは、今まででいちばんかもというくらいひっしになって、さきに見えているその出口の光へとむかって、いちもくさんにかけていったのです（フェリアルも、あわてて馬にもどって、「おいてかないでー！」とひっしでみんなのあとを追いかけてました）。

「やったー！ ぬけたぞー！」

そしてみんなはついに、その光の出口をくぐってトンネルのそとへと飛び出しました。

そこは両がわを岩かべにはさまれた、山道でした。岩のまじったほそい道が、さきの方までつづいております。あたりは夕方ももう、おそかったころ。夜のとばりにつつまれつつあるころでした。空にはすでにきらきらと、いくつかの星がかがやいております。ですが今、旅の者たちには、ゆつくり星をながめているようなどはありませんでした。トンネルを飛び出したみんなは、まずまつさきに、とんでもないものを見てしまったのです。

トンネルを出て、みんなはすぐに、今出てきたトンネルの出口の方をふりむきました。そこでかれらが見たものは……！

まつ黒い、巨大ないっぴきのへびでした！ ですがへびといっても、頭も目も、なんにもありません。あるのはただ、たくさんのきばのなんだ、大きなまるい口だけ！ そのへびが今、その大きなからだをぐいん！ とよじらせながら、自分のすあなへともどろうとしているところだったのです！

みんなはすぐにかいしました。たった今、自分たちが飛び出してきたトンネル。それはトンネルなんかじゃなかったのです。そう、みんなはこのへびの「口の中」から、そとに飛び出してきました！（どろりで道がぐにやぐにやしていたはずです！ なにせ、へびのからだの中でしたから！）

「うわわわーっ！」みんなはいちもくさんに、つづく小道を走ってい

きました。そしてようやく、ぜいぜいと息を切らしながら、もういちど、へびのトンネルの方をふりかえったのです。

へびはさいごに、からだをぐるん！ とひるがえして、まっ黒なあなの中へと消えていくところでした。おどろいたのは、へびにはしっぽがなかったということでした。しっぽのかわりに、なんとそこにも、きばのならんだ大きな口があいていたのです！ つまりこのへびは、そのからだの両がわに口があるということでした。そのからだの中を通っていけば、これはまさしく、トンネルです！ やみの精霊の谷には、なんておつかない生きものがあるのでしよう！ みんなはぶじにそこからそとに出ることができて、今心の底からほっとしてしまいました。とにかく、さいごのさいごまで、はらはらどきどきしっぱなしでしたが、かれらはこうして、このおそろしいやみの精霊の谷をぬけることができたのです。

あたりはしんと静まりかえっていました。空気はぴんと張りつめていました。

ここはベーカーランドの北に広がる、くにぎかいの山の中。旅の者たちは今、その山の中の、どこかの山道にいるはずなのです。

「とにかく、道のひらけたところをさがそう。」ベルグエルムがいました。「ここがどこなのか？　まずは、それをたしかめなくては。」みんなはしばらく、岩かべにかこまれたそのせまい山道の中を進んでいきました。もうすぐおひさまも、かんぜんにしみきってしまいます。あたりがすっかり暗くなってしまいう前に、みんなはなんとか、ベーカーランドのくにのみやこまでたどりつきたいと思っていました。

「これは、どういうことだ？」ふいに、ベルグエルムが空をながめながら、ふしぎそうにいいました。

「やみの精霊の谷にはいったときも、星は同じ高さにあつた。そのときから、星がまったく動いていない。」

ベルグエルムのいう通り、空にかがやく星の高さは、みんながやみの精霊の谷にはいったときとまったく同じでした。ベルグエルムは

谷にはいるとき、その星の高さを見て、時間をきつちりとかくにんしていましたが、そのときも今も、同じ星の高さ、黒ユピユピのこくげん。夕方の五時ぴったりのころの時間だったのです（黒ユピユピとはシープロンドにむかうとちゆうにいた白いユピユピの仲間で、夕方の五時ころになると、ピーピーないて自分のすあなにもどつていくので、この時間の名まえとなりました）。

じつはこれは、なんともふしぎなことでしたが、やみの精霊の谷では時間がすぎませんでした！　つまり旅の者たちは、谷にはいったそのしゅんかんに、へびの口から、はんたいがわのこの山道の中へと飛び出してきたというわけなのです！（ですから星もまったく、動いていませんでした。）ですけどそんなこと、みんなにはわかるはずもありませんよね。まさか自分たちが、時間をすつ飛ばして、ここへやってきただなんて！（もつともそれは、ほんのすこしの時間だけでしたけど。せいぜい十分とか十五分とか、そのくらいです。ベルグエルムはそのわずかな時間のあいだに動く星のへんかにも、ゆだんなく注意をくばりつづけていました。さすがはベルグエルムです。）

やみの精霊の谷というところは、ほんとうにおかしなところでした。そこにはいつて出てきましたから、旅の者たちはじつに、きちょうなたいけんをしたのだといえることでしょう。ですけど……、やっぱりそれは、谷にはいつたことのない、ほかの人たちから見たときの話。じつさいに谷にはいつて出てきたかれらにとっては、とても「自分たちはきちょうなたいけんをしたのだ！」なんて、ほこらしげに思うことなどはできなかつたのです。このやみの精霊の谷をぶじにぬけることができた今。みんなはそろつて、こう、その思いをのべるばかりでした。

「こんなけいけんは、もう、これっきりでじゅうぶんだ！」

やがてまわりをかこんでいる岩かべが、前の方でとぎれているのがわかりました。そのさきは見晴らしのいい、高台になっているようです。旅の者たちは、よろこびいさんと、馬の足をはやめました。そこから見渡せば、自分たちが今どこにいるのか？　わかるはずです。

そしてその場所に立ったみんなは……。

「おお……い！」「すごい！」「あれが……」

「やったあー！」ライアンがさけびました。

そこは切り立ったがけの上でした。がけの下には、大きな森が広がっております。そして山道は、がけの上のこの場所から、西の海の方へとむかつておりていました。

ですが、そんなものよりもなによりも。みんなをよろこばせたそのいちばんのものが、森のむこうのかなたに、そびえていたのです。

「エリル・シャンディーン！」

ロビーをのぞく三人が、いつせいにさけびました。それは、ベーカールランドのみやこの名まえ。そしてその名まえのもととなった、美しいお城がそびえていたところ。

そう、みんなの目に飛びこんできた、そのみやここそ、この旅のもくてき地。アルマーク王のいるお城のある、ベーカールランドのみやこ、エリル・シャンディーンだったのです！（そして、よかった！ワットの黒の軍勢は、まだこのエリル・シャンディーンにまでは、せめこむことができていないみたいです。エリル・シャンディーンのみやちなみも、お城も、ベルグエルムたちがここを出発したときのままでした。これも旅の者たちが、すばらしく早く、ここにたどりつくことができたからこそでしょう。）

「すごい！ ショートカット作戦、大せいこうー！」ライアンが思わず、さけびました。

もうみんなは、びつくりするのとよろこぶので、大いそがしでした。ベルグエルムとフェリアルはおたがいのうでをがっしりとくみあつて、それぞれのけんとうをたたえあいます。ライアンとロビーは、もうだきあつて、わーわーよろこびあっていました。

海の方からまわっていけば、五日はかかるといわれていた、この西

の地の道のり。時間がなく、やむを得ないけつだんだんだったとはいえ、やみの精霊の谷をぬけることは、旅の者たちにとつて、ほんとうに危険なかけでした。その危険なかけに、旅の者たちは、みごと勝つてみせたのです。それも、大しより！　ここにやってくるまでに、ロザムンディアのまちから、二日とたつていませんでしたから！（ライアンのいう通り、まさにショートカットです！）

「ついにやりましたね！　ついにここまで、やってこられたー！」

ロビーがうれしそうに、ベルグエルムとフェリアルふたりにいいました。ですがふたりは、ロビーのその言葉にすぐにはこたえず、ただしんけんまなざしをして、ロビーのことを見つめるばかりだったのです（今までうれしいムードまんてんでしたのに、どうしたのでしょうか？）。

「ロビーどの。」ベルグエルムがまじめな顔をして、ロビーにいいました。「わたくしのかるはずみなおこないを、どうかおゆるしく下さい。へたをすれば、あなたのいのちまで、うばわれかねなかった。このベルグエルム、一生のふかくです。」

ベルグエルムはそういって、ロビーに深く頭を下げました。

ベルグエルムのかるはずみなおこないというのは、さきほどのやみの精霊たちに対する、かれの思いきつた行動のことでした。ほんらいなら、やみの精霊たちにあんなお願いなんて、ぜつたいにするべきではありませんでした。もしかれらを怒らせたりなどすれば、それこそほんとうに、いのちまでうばわれてしまいかねないのです。そんなことはベルグエルムは、だれよりもよくわかっていました。ですけど……。

ベルグエルムはあるとき、どうしても、自分の気持ちをおさえることができなかったのです。

ロビーのことを思いやるあまり、ロビーやみんなを危険な目にさらしてしまった、みずからのかるはずみなおこない。そのおこないのことを、ベルグエルムは今、しっかりと、ここでロビーにあやまらなくてはならないと思いました（すぐにいわなかったのは、自分たちが今どこにいるのか？　まずはそれをたしかめなくてはならなかったか

らでした)。

「隊長だけじゃありません！ わたしもです！」フェリアルがそう
いって、ベルグエルムとならんで、ロビーに頭を下げました。

「ぼくだって。ごめんね、ロビー。」ライアンもまた、ロビーにペコ
りと頭を下げます。

ですけどそんなの、ロビーが気にするはずがありません！ その
ぎやくです！

「や、やめてください！ とんでもないです！」ロビーは「あわわわ
……。」と手をまぐ(まぐ)させて、みんなに頭を上げてくれるようにたの
みました。

「ぼくのためにいってくれたこと、ぼくは、すごく、うれしかったで
す。ぼくなんかのために……。ぼくのことを、みんながそんなに、気
にかけてくれていたなんて……。ぼくは……。ぼくは……。」

ロビーは言葉につまってしまいました。もう、なにをいつたらしい
のか？ わかりませんでしたし、なにより、もう、なにも、言葉がい
えなくなってしまったのです。

「うわああん！」

ロビーは声を張り上げて、泣いてしまいました。えつく、えつく。
のどがもう、いっぱいにつまってしまって、言葉が出ませんでした。

ロビーはいっぱい泣きました。息もできないくらいでした。ずつ
とひとりですごしてきた、これまでの長い長い日々……。それらのこ
とが、みんなわき上がってきて、それがいつきに、かれの胸の中では
くはつしてしまったかのようにでした。

みんなの前で、げんきにふるまってきたロビー。ですがかれの心の
おく底には、いぜんとして、いいよのないさみしさが残っていたの
です。これまでの旅の中で、ロビーには、たくさんの友だちができま
した。大好きな仲間たちもいっしょです。ですけどロビーの心の中
には、まだひとつだけ、自分の手のとどかない、あこがれのような思
いが、いつまでもみたされることなくそんざいしつづけていました。

ひとりぼっちで、なん年もなん年もすごしてきたロビー。そんなロビーのことを心からだいじに思い、助けてくれる、みんな。りっぱでたよりになるベルグエルム。ちょっと不安なところもあるけれど、親しみの持てるフェリアル。そしておおかみ種族とひつじの種族、すがたや背かつこうもぜんぜんちがうのに、心から思いあえる、だいじなだいじな友だち、ライアン……。

ずっとしんらいしてきた仲間たちでしたが、ロビーはこのとき、きつと、心からのほんとうの意味で、かれらとかたいきずなでむすばれたのです。それこそが、ロビーの心の中に長年に渡ってそんざいしつづけてきていた、そのあこがれの思いにほかなりませんでした。

それはかれの、まだ知れぬ自分の家族に対する、思いだったのです。家族とのつながり。家族と同ようなつながり。ベルグエルム、フェリアル、ライアン、かれらはロビーの、ほんとうの家族ではありません。でもロビーにとって、かれらはロビーのほんとうの家族と同じくらしいの、とくべつなそんざいでしたから……。

「ごべんなざい……、うれしくて……、ぼくは、ずっと、ひとりだったから……、うれしくて……。ありがとうございませ……」

ロビーは息をつまらせながら、みんなに心からのかんしゃの気持ちをおぼわしました。ロビーはだれかに自分の気持ちを伝えることなんて、うまくありませんでした。今まで、そんなことのできる相手もいませんでしたから。ですけどロビーは今、せいっぱいの気持ちをもって、今までのことや、みんなの思いに対して、そのすなおな自分の心を伝えたのです。

「ロビーどの……」

ベルグエルムはただひとこと、そういいました。かれにはロビーの気持ちは、もうみんなわかっていました。ベルグエルムはロビーのそばによりそって、そして親しい友にするかのように、ロビーの肩に手をおいて、静かに自分の気持ちを伝えました。ロビーはいい伝えのきゆうせいしゅ。みずからのつかえるべき相手です。ですがかれらの心のあいだには、もうそんなかべなどは、なにもありませんでした。「なに泣いてんの、しょうがないなあ。よしよし。」ライアンは口

ビーの頭に手をのぼして、いいいいことなでてあげました。
とそのとき……。

「うええくん！ ロビーどの〜！」

「え？ なに？」ライアンがびっくりしてふりかえると、すっかり感
きわまつてもらい泣きしてしまったフェリアルが、ロビー以上に声を
張り上げて泣きながら、両手を上げて、こっちにつっこんでくるとこ
ろだったのです。

「わわっ！ ちょっとー！」ライアンがあわててメルをひっぱって、
ひよいとかわして、フェリアルは馬ごと、岩かべにどつちくん！ ぶ
つかって、地面に落っこちてしまいました（なんだか前にも、こんな
ことがあったような気がしますが……）。

「だ、だいじょうぶ？ フェリー。」ライアンが心配してたずねると、
フェリアルは地面にうつぶせにたおれたまま、「だ、だめ……。」とこた
えました（よかった。どうやら、だいじょうぶみたいです）。

そのすがたに、ロビーは思わずのどをつまらせながら、「えっく、あ
はは、えっく、あはは。」と泣いて笑ってしまいました。そしてライア
ンもベルグエルムも、やれやれといった感じで手を上げながら、ロ
ビーといっしょになって笑ったのです。

こうして。かたいきずなでむすばれあった仲間たちは、ここに、旅
の大きいなるもくてき地であるベーカーランドのみやこ、エリル・シャ
ンディーンへとむかって、ふみ出していったのです。エリル・シャ
ンディーンまでは、馬でいけば、もう一時間とかからないほどのきより
でした。

と、その前に……。旅の者たちはこの場所で、とある相手に出会っ
たのです。といっても、それは人ではありませんでした。鳥です。空
高く、一羽の白いかもめがゆうゆうと飛んでいたのです。そしてそれ
は、ただのかもめではありませんでした。そのかもめはベーカーラン
ドのみやこではたらいている、ゆうびん屋さんのかもめだったので
す。

「あれは、エリル・シャンディーンのゆうびんかもめだ。」ベルグエ

ルムが空を飛ぶそのかもめに気づいて、ぴいーつと口ぶえを吹きました。「わたしたちがもどつてきたということを、急ぎ、城へと伝えてもらおう。」

その口ぶえにこたえて、かもめがふわーつとこちらへやってきて、そしてみんなの足もとに、ばささつとおり立ちました。首からは手紙をいれる、黒いかわのかばんをかけております。そして足には、ゆうびん屋さんのマークがはいった、こがね色のわっかが取りつけられていました。

「マイド、ゴリヨウ、アリガトゴザマース！」

「うわっ！ 鳥がしゃべった！」

とつぜんの声に、ロビーがびっくりしていいました。ですけどみんなは、ぜんぜんおどろいていません。ライアンが「あはは。」と笑って、ロビーにいいました。

「鳥じゃなくて、これ。これがしゃべってるの。」ライアンがそういってゆびさしたさきには、かぼんの前にはめこまれていた、ひとつの青い宝石がありました。その宝石がぴかぴか光って、しゃべっていたのです。

「これは、魔法の石なんだ。かんたんな会話なら、この石としゃべることができるんだよ。」

ライアンの言葉に、ロビーは思わず「へええ！」と感心してしまいました。やっぱり自分の知らないところには、ふしぎなものがあるものです（ちなみに、ライアンは「おとぎのくにじやあるまいし、鳥や動物がしゃべるわけないじゃない。やだなあ、ロビーは。」といって「あははは。」と笑っていましたが、みなさんの世界の人たちからいったら、なんだかいろいろ、うくん……、といった感じですね……）。

ベルグエルムが紙とペンを取り出して、城への手紙を書き、かもめのかばんにしまいました。

「フツ、デスカ？ ソクタツ、デスカ？」青い宝石がしゃべります（そくたつというのは、早く手紙をとどけてほしいときに使うものです）。

「そくたつでたのむ。」ベルグエルムがそういうと、宝石がすかさず、
こういいました。

「ソクタツハ、五デニルデース！」

「た、高い……」

これはどういうことか？　といいますと……。デニルというのは、
アークランドで使われているお金のたんで、その下にリル、上にシ
リルというたんがあります。リルは銅貨（銅でできたコインのこと
です）で、銀貨であるデニルの百ぶんの一のかちです。シリルは金貨
で、デニルの十ばいのかちがあります（わかりやすくまとめると……。、
一シリル＝十デニル＝千リル、となります。思わぬところで、わたし
のきらいな算数のべんきようになってしまいました……。）。

そくたつのりょうきん五デニルというのは、銀貨が五まいのこと。
銀貨一まいでおいしいパンが十こ買えるくらいのかちがありますの
で、そくたつのりょうきんで、パンが五十こ買ってしまうわけな
のです。ですからみんな、こう思ったというわけでした。

「た、高い……」。

ですけどここは、しかたありませんね。ベルグエルムが（しぶしぶ）
お金をかめのかばんのポケットにいれると……。、かめめは、ばさ
さつとはばたいで、エリル・シャンティーンの方へとむかつて飛んで
いきました。思わぬしゅつぴでした。とにかくこれで、旅の者たち
がお城のすぐそばにまできているということ、みんなに知らせるこ
とができたわけです。

道をおりていくにつれて、たくさんの木々があたりにあらわれるよ
うになりました。それらはみんな、南のくにベーカーランドのあたり
によく見られる、ドリアード・パインとよばれる木でした。この木に
は、やしの木のような大きな葉っぱが育ち、そして夏になると、大き
なパイナップルのような実がみるので（それは、みずみずしくて
とてもおいしく、このあたりの人たちの大好きなものでした。

ちなみに、ごかいのないようにおきますが、ベーカーランド
は南のくにといっても、それはアークランドの南に位置しているとい

うだけのことなのであって、なにもほんとうに、トロピカルなイメージの南のくというわけではありません。やしの木みたいなこのドリアード・パインの木が、たくさん生えていましたので、そう見えないうこともないのですが……。大むかしには、山のむこうのよろこび平原のあたりには王国があつて、そこにはなんと、パイナップルのよくなすがたをした森のたみが暮らしていたそうでした。今ではかれらは、もつと南のあたたかい地へうつってしまったようですが、かれらが育てていたこのドリアード・パインという木々だけは、今でもこうして、この地に残っているというわけなのです。

「なつかしい。もうずっと、この地をはなれていたような気がする。」

海からのしお風をほほに受けながら、ベルグエルムが思わずそういいました。かれらがこの地を出発したのは、ほんとうに、ついこのあいだのことのはずでした。でも、ふたたびここへもどってきた今日のこのときまでに、ほんとうに、いろんなことがありましたから！

「ぼくは、もつとなつかしいよ。前にここへきたのは、四年も前のことだもん。」ライアンがつづけていきました。ライアンのいう通り、かれがはじめてこのベーカールランドの地をおとずれたのは、四年前、かれがまだ、十さいばかりのころのことだったのです。ベーカールランドとシープロンドはとても仲のよいくにどうして、なん年かにいちど、それぞれのくにの王さまを自分のくににまねき、大きなかんげいのもよおしをひらいていましたが、そのもよおしに、ライアンもそのときはじめて、ついていったというわけでした（ですがそのときのライアンは、かんげいの式でんなどそつちのけで、ベーカールランドのめずらしいお菓子にむちゅうでしたが……。しかもつぎの日からは、朝からばんまで、はじめて見る海であそびたおしておりましたので、くの中のようすのことについては、あんまりおぼえていなかったのです。うくん、やっぱライアンは、むかしから変わっていないみたいですね……）。

そしてもちろん、ロビーにとっては、ここはまったくもってはじめての土地でした。ベーカールランドのみやこだというエリル・シャン

デイーンのことでも知りませんでしたし、このくににどんな人たちが暮らしているのか？ ということについても知りません（かなしみの森のとしよかんで古い本を読んだり、みんなからもすこしだけ、このベーカーランドのことをきいたりしてはいましたが、やっぱり読んだりきいたりすると、じつさいにその場所にいつてみるのでは、ぜんぜんちがいますから）。ですけどロビーは、このくにのすばらしさをすでにじゆうぶん、りかいできていました。それはかれの心からの仲間、ベルグエルムとフェリアル、ふたりのおかげにほかならなかったのです。こんなすばらしい人たちがいるんですもの、かれらの今住んでいるところも、いいところにきまつています！（ライアンのくにシープランドが、すばらしいところであつたように。）

ロビーは心をはやせました。いったいこれから、なにが待ち受けているんだろう？ それはこのあと、王さまに会つてみないことにはわかりません。ですがロビーにはもう、まよいなどはありませんでした。自分の運命に、全力で立ちむかつていく。それがどんなにくるしく、つらい運命であろうとも。ロビーはだれよりも強いかくごを、その胸にいただいていたのです。

「さーこの丘だ。ここを越えれば、エリル・シャンディーンだぞ。」先頭をゆくベルグエルムが、みんなにいいました。そしてみんなはどうとう、その地へとたどりついたのでした。

「うわあ……いーす、すーいー」

ロビーは思わず、言葉をつまらせてしまいました。ライアンも、ひさしぶりに見るその光景にため息をもらして、あらためて感心してしまふばかりでした。

そこに広がっていたのは、まさしく、おとぎの世界そのものでした。白いつぱなじょうへきによつてかこまれた、エリル・シャンディーンのみち。そしてそのおくにそびえる、宝石のように美しいお城……。それはまるで、いだいな魔法によつて生み出された、ひとつのかがやく島のようにでした。まちそのものが、目に見えないしんぴ的な力によつて守られ、かがやいているかのようなのです。まさしくここ

は、せいなる場所。このアーケランドの中でも、もつともとくべつな場所のひとつ。このみやこを見た者は、だれでもそう思うはずです（たとえそれが、ワットの黒の者たちであつてもです）。

まずなによりもはじめに目に飛びこんでくるものは、やはり、その美しいお城でした。海の色のままじつたかがやく白い石でつくられていて、それらがまるで、水のように、ぴかぴかにみがき上げられているのです（シープロンドのたてものに使われている白いれんがもこんな感じでしたが、このエリル・シャンディーンの白い石は、まるで石そのものにいのちがやどっているかのような、そんなふしぎな感じがあるのです）。

お城はいくつもの階に分かれていて、それぞれの階のさかい目には、お城のまわりをぐるりとかこむようなかたちで、青いすいしようにつくられたたくさんのかんむりのかざりものが、取りつけられていました。それらのかざりものの、その輪のようにつながったすがたは、まるで王さまのかぶるかんむりのようでした。エリル・シャンディーンのお城は、上から下まで、大小全部で七つもある、このような青いすいしよのかんむりによつて、美しくかざられていたのです（ですからライアンは、はじめてこのお城を見たとき、「まるで七だん重ねのデコレーションケーキみたい！」と行って大はしやぎしたそうです）。

そのあちこちには、青いやねをいだいた塔が突き出ていました（ですからライアンは、はじめてそれらの塔を見たとき、「まるでケーキにさしたろうそくみたい！」と行って大はしやぎしたそうです）。そしてそれらの塔のてっぺんには、青いはたがつけられ、そこにはベーカーランドのくにもんしようである「青い宝玉をいだいた白い女神のすがた」がえがかれていたのです（このもんしようは、白の騎兵師団であるベルグエルムとフェリアルルを着ている服にも、ぬいつけられていました。それとはべつに、かれらの服には、かれらの祖国であるレドンホールのおおかみと剣をあしらったもんしようもぬいつけられていたのです）。

このお城の美しさもそうですが、おどろくのはそればかりではありません

ませんでした。ここにはそれと同じくらいに心をうばわれる、なんともおどろきのものがあつたのです。

お城の東がわには、エリル・シャンディーンのみやこまちがずっと広がっていました。そのまちの中には、たくさんのきよらかな水の流れが、あみの目のようにかよっていました。それだけなら、なにもふしぎではありませんでしたが……、よく見ると、その水の流れのうちいくつかが、とちゅうでとまっていて、なんと、水がそこから、空へとむかって流れているではありませんか！　そしてその水が流れついている、そのさきには……。

島です！　エリル・シャンディーンのみやこまちの上には、たくさんの小さな島が、ぷかぷかと浮かんでいました！

いったいこれは、どういうしくみになっているのでしょうか！　水はその島へとむかって流れ、その島のさらに上に、白い雲を作り出していました。そしてべつの島では、その雲から雨がふって、その雨はたきとなって、下の川へとふりそそいでいたのです。うくん、ファンタジー！　まさにこれは、魔法でした！

「エリル・シャンディーン。われらのまちです。」ベルグエルムが、おどろいているロビーにいいました。そしてベルグエルムは、つづけて、ロビーがふしぎに思っているだろうことについても、かんたんに説明してくれたのです（それは同時に、読者のみなさんに対しても説明になりますね）。

「このまちは、かの大けんじや、ノランどのの力をささずかっているのです。あの島が浮いているのも、ノランどのの魔法の力によるもの。その力が、たくさんの水の流れをあやつり、この地を水のひがいから守っているのです。」

へええ……！　そういうことなんですか！　って、わたしがロビーといっしょに感心している場合ではありませんでしたね。すいません、ちゃんと説明します。

大けんじやノラン。その名は精霊王と同じくらいゆうめいで、このアーランドに住んでいる者ならば、だれでも知っている名まえでした。はい色のおひげのおじいさんですが、そのほんとうのねんれいは

だれにもわかりません。見た目は人間ですが、ほんとうに人間であるのかどうかさえもはつきりしません。いつもどこかへ出かけていて、じっさいこのエリル・シャンディーンのまちにも、年になん回かもどつてくるだけで、ほとんどいないのです（うわさでは西の大陸ガラントの、そのまはずつとむこうのくにまで行って、たくさんのたいへんなしごとをこなしているということでしたが、だれもそれを、たしかめることもできませんでした。そんなに遠くちや、だれもついていけませんでしたから）。

ベルグエルムやフェリアルでさえ、ノランに会ったことは数えるほどしかありませんでした。きたとしても、王さまにあいさつだけしてすぐに帰ってしまうことがほとんどでしたので、会えないことの方が多いです。ですからノランというのは、すごい力を持ったいいなけんじやでしたが、こんなふうには、とてもなぞの多い、くわしいことはだれも知らない、なんともふしぎで、しんぴ的な人物でした（なにしろ大のつくけんじやなんですから、なぞが多いのもとうぜんですよ。ふつうのけんじやたちでさえ、とつてもなぞが多く、わかりづらい人たちなんです。から。カルモトみたいに……）。そのノランのかけ守りの魔法の力が、このエリル・シャンディーンのを、すっかりおっていたというわけだったのです。

「また、ノランどのが、力を貸してくださいといいますが……」
フェリアルが、ひとりごとのようにいいました。それはベーカーランドの人たちみんなが、思っていたことでした。ですけどノランには、いつもたくさんのたいへんなしごとがあつて、つねに力を貸してくれるとはかぎらないのです。

「われらにできることは、できるだけわれらでおこなう。ノランどのが、いつもおっしゃっていることだ。」ベルグエルムがエリル・シャンディーンのを、まちなみをながめたまま、フェリアルにいいました。フェリアルは心配そうな表じようをしたまま、ベルグエルムとならんで、まちのようすをながめております。

「だが、」ベルグエルムがこんどは、フェリアルの方をむいてつぶやきました。「われらの力をこえるとき、ノランどのは、いつも助けてくだ

さる。心配するな。」

その言葉に、フェリアルは顔を上げて、げんきを出してこたえました。

「そ、そうですよね！」

そしてベルグエルムは、フェリアルに静かにほほ笑んでみせると、馬のたづなをしっかりとにぎりしめ、みんなにむかっていったのです。

「さあ、ゆうびんかもめの手紙も、もう、とどいているはず。急ごう。」

しずみゆくおひさまの今日のさいごの光をあびて、白いまちは、まるでおうごんのようにかがやいていました。そして今、そのまちの門のそとに、同じようにこがね色の光をあびてきらきらとかがやく、三頭の騎馬たちに乗った四人の旅の者たちが、たどりついたところだったのです。そう、ついにみんなは、ベーカールンドのそのかがやけるみやこ、エリル・シヤンティーンへとやってきました！（今は、ましがほんとうにかがやいていました。）

みんながたどりついたのは、まちの北がわの門でした。めざすお城はそこからさらにさき、まちのいちばんおくの、小高い丘の上にあるのです（それならまちの門じゃなくて、はじめからお城の門までいけばいいじゃないか、って思われるかもしれませんが、これにはわけがありました。お城のあるその丘は、まちの広がる東がわの部分がいち、すべて切り立ったがけになっていたのです。ですからお城までいくためには、まずまちの門をぬけて、まちの中を通っていく必要があります。もしみんなが空を飛べる生きものに乗っていたのなら、がけを飛び越えて、ちよくせつお城のバルコニーにまでいけるんですけど）。

北門は、まちのいちばん大きな門である東門にくらべると、それほど大きくありませんでした（それでもロザムンディアのまちでライアンがぶっこわした門よりも、大きかったのですが）。白い石のきれいなアーチがかけられていて、美しい木目の木のとびらには、ベー

カーランドのくにのもんしようが大きく浮きぼりになっております。とそんなことをロビーとライアンが、しげしげとながめておりますと……。

ぐ、ぐ、ぐ、ぐ……。

そのとびらがとつぜん、重くてにぶい静かな音を立てながら、こちらがわへとむかつてひらきました。それはちようど、ベルグエルムとフェリアルルのふたりが、その門に近づいたときのことだったので（まさか自動ドア？ いえいえ、そうじゃありません。もつともこの魔法のまちなら、そんな門もありそうですけど）。

ひらいた門のむこうから、白いよろいに身をかためた、ふたりの人間の兵士たちがあらわれました（そしてもちろん、今しがたとびらをあけたのは、このかれらでした）。手にはかれらの背だけほどの長さの、白いやりを持っております。そしてその兵士たちは門の前にきちつとせいれつすると、ベルグエルムとフェリアルルのふたりにむかつて、ベーカーランドの敬礼をおくりました（ウルファのくにレドンホールの敬礼は、こぶしを胸の上にあわせるというものでしたが、ベーカーランドの敬礼は、手のひらを胸のちよつと上にあわせるというものでした。あまり変わらないような気もしますが、やっぱりそれぞれ、ちがいがあるのです）。

「よくぞ、ごぶじで……。われら一同、お帰りを心待ちにしております。」

兵士たちが、ベルグエルムとフェリアルルのふたりにいいました。その声はおだやかでしたが、とても気持ちのこもった、あつい言葉でした。そう、かれらは旅の者たちがもうすぐ帰ってくるとのしらせを受けて、門の上の見張り台で、今か今かと、みんなのことを待ちわびていたのです（みんなが帰ってくるというしらせは、あのゆうびんかめめによって、しつかりとお城まで伝えられていたのです。さすが、五デニルもはらっただけのことはありませんね）。

「お出むかえ、かたじけない。」ベルグエルムがそういって、兵士たちにベーカーランドの敬礼をかえしました（ベルグエルムたちウルファの騎士たちは、相手にあわせて、ふたつの敬礼を使い分けていた

のです)。

兵士たちが深くおじぎをしてから、その言葉にこたえます。

「われらすべて、心得ております。どうぞ城へ。みな、待ちわびておりますぞ。」

兵士たちはそういつて、みんなを門の中へとまねきいれました。そしてみんなが通つてしまうと、門はふたたび、ぐ、ぐ、ぐ……、と静かにしめられたのです。

「馬は、ここにをおあずかりします。城のうまやまで、おとどけしましょう。」

兵士たちはそういつて、みんなにさよならをつけて、騎馬をひいて去つていきました……。

え？ きゆうせいしゆであるロビーがはるばる北の地からこうしてやってきたというのに、ずいぶんあっさりした出むかえなんじやないかって？ たしかに、出むかえの兵士たちもふたりしかいませんでしたし、かれらの反応も、ずいぶんとあっさりしています(シープロンドでは出むかえの衛士たちに、「きゆうせいしゆだ、きゆうせいしゆだ」とロビーのいごちが悪くなつてしまつたくらい、さわがれてしまいましたよね。そのせいですっかり、ライアンのごきげんをそこねて、おしかりを受けてしまつたくらいです)。ふつうだったら、こんなに重要なにんむをこなして帰つてきたみんなですもの、きゆうせいしゆであるロビーといっしよに、もつとはでに出むかえて、パレードで城まで送つていったとしても、おかしくないくらいでした。ですけどこれには、ちゃんとりゆうがあつたのです。

じつは、ベルグエルムたち四人の騎士たちが北の地まできゆうせいしゆのことをむかえにいくという、こんかいの旅のにんむのことは、お城の人たちがいいには、まったくのひみつになっていました。つまりきゆうせいしゆがここにやってくるだなんていうことは、このエリル・シャンデーインのまちの人たちは、ぜんぜん知らなかったのです。

なぜ、ほかのくにの人たちにならまだしも、自分のくにのまちの人たちにまで、ロビーのことをひみつにしておかなければならなかったのか？ それはこのエリル・シャンデーインのまちが、とても大きな

まちだったからでした。大きなまちですから、このまちにはさまざまなくにから、たくさんの人たちがやってくるのです。その人たちがみんな、口のかたい、「ひみつはぜつたいに守る！」という人たちならいいのですが……、じつさいそうもいきませんよね（それにワツトのていさつの者たちが、すがたをいつわって、このまちにもぐりこんでいないともかぎりません）。きゆうせいしゆがあらわれた！ 北の地にいるらしい！ 白の騎兵師団の騎士たちがむかえにいった、このエリル・シャンディーンの地にまでつれてくるそうだ！ なんて、かれらがいろんなところにふれてまわったりなどしてしまつたら、それこそ、たいへんなことになってしまいますもの。

ロビーのそんざいが、敵であるワツトや、そのほかのあまり好ましくない者たちにまで、知られてしまつたらどうなるか？ かれらはあらゆる悪だくみを考えて、自分たちにとつてじやまなそんざいである（または自分たちのつごうのいいようにりようすることのできる）ロビーのことを、あの手この手でうばい取ろうとしてくることでしょう。そうなつていたとしたら、こんかいのこの旅も、まことに、おぼつかないものになってしまつていたはずです。ですからきゆうせいしゆであるロビーや、こんかいのこのひみつの旅のことについては、（きぼうを待ちのぞんでいる人々には、ほんとうに申しわけないのですが）ぜつたいのひみつにしておかなければなりませんでした。

つまりそんなわけで、出むかえの兵士たちもぜんぜんさわぎ立てることもせず、みんなを残して、静かに去つていつてしまつたというわけなのです（ほんとうはかれらだつて、もつとさわぎたかつたし、いろんなこともききたかつたのです。ですがかれらはみな、お城のえらい人たちから、「くれぐれも、さわいだり、よけいなことをきいたり、しないように。」ときつく、とがめられていました。そのうえ兵士たちといっしょにしていると目立ってしまうということで、みんなにつきそつていくことさえ、できなかつたのです。兵士さんたちも、たいへんなんです）。

と、その前に……。

みんなはエリル・シャンディーンのまちについたら、兵士たちにす

ぐに、きいておきたいことがありました。それはきつと読者のみなさんも、みんなと同じくらい、気がかりに思っていたことだと思えます。ベルグエルムが歩き去ってゆく兵士たちのことをよびとめて、そのだじなしつもんをしようと口をひらきました。

「われらの前に……」

「リア先生たちは、お城にいるの？」ライアンがすかさず、ベルグエルムの腰をぐいっとおしのけて、兵士たちにたずねました（おかげでベルグエルムは「うわわー」とよろめいて、あやうくころげそうになってしまいました。そして兵士たちも、ライアンが四年前にきたシープロンドのちびっこ王子さまだとは気づきませんでしたので、そろってあっけに取られた顔をして、こう思えばかりだったのです。

このひつじの子は、だれなんだろう……?)。

リア先生たち。そうです、ロビーたちといっしょにシープロンドを出発した、もうひとつの旅の仲間たち。かれらはロビーたちをこのベーカールンドの地にまでぶじに送りどけるために、敵の目をひきつけることのできる、危険な南への道のりを進んでいきました。じゅんちように進めれば、かれらの方がロビーたちよりもさきに、このエリル・シャンディーンのみやこまでたどりつけるはずでしたから（ロビーたちがシープロンドを出発してからこのエリル・シャンディーンにつくまで、三日と半分以上かかったわけですが、南の街道をじゅんちように進めれば、シープロンドからここまで、二日と半分でたどりつけるわけなのです。ですからふつうに考えれば、レシリアたちの方が、まるいちにち以上、さきにここへたどりついているはずでした。馬の足でまるいちにち以上というのは、けっこうな時間です）。

「白の騎兵師団の、ハミールさんと、キエリフさん。それと、ふたりのシープロンの人たちです。ぼくたちといっしょに、シープロンドを出発したんですけど……」ロビーがつけたして、説明しました（リア先生っていったって、ベーカールンドの人たちには、いったいだれのことだか？ わかりませんもの）。

さあ、兵士たちのへんじは？ 南の街道を進んでいった仲間たちは、もう、お城についているのでしょうか？

ですが、兵士たちからかえってきたへんじは、とてもぎんねんなものだったのです。

「いえ、もどってきたのは、あなた方だけです。れんらくも受けておられません。」

兵士たちはそういつて、ペこりと頭を下げて、騎馬とともに去っていききました。

残されたみんなの表じようは、なんともいいがたいものでした。仲間たちはまだ、きていない。みんなはだまって、おたがいの顔を見あわせました。

「やはり、敵の目がきびしいのでしょうか？」フェリアルが、ベルグエルムにいいました。その言葉を受けて、ベルグエルムはしばらく考えこんでいましたが、やがてその場のみんなにむかって、いいました。

「かれらには、シープロンのわざと、騎士のほこりがある。そうやすやすと、敵にやぶれたりなどはしない。なにかのりゆうで、おくられているだろう。」

ベルグエルムがそういうと、みんなの気持ちはすこしらくになりました。でもひとりだけ、まだぜんぜん、気持ちのせいりがついていない者がいたので。それはライアンでした。ライアンはリア先生ならぜつたいに、自分たちよりもさきに、このエリル・シャンデーオンにまでたどりついていると思っていたのです。それで「おそいですよ！」としかられるものとばかり、思っていました（それに、しゆくだいの山もかくごしていたのです）。

「きつと、思った以上に見張りが多かつたんだと思う。だからまだ、こつちまでこられないんだ。」ロビーが心配になって、ライアンにいいました。ライアンはしばらくだまっていましたが、やがて「うん。」とうなずいて、ロビーの方を見ていいました。

「そっか。リア先生たちも、たいへんだらうからね。しょうがないかな。」

ライアンはそういつて、両手を頭のうしろにくんで、なんでもないといいたようにぶらぶらと歩き出しました。ですがライアンは、こん

なふうへいきなようすをよそおってはいましたが、ほんとうはリア先生たちのことを、すごく心配していたのです。ロビーにはそのことが、すぐにわかりました。そしてこんなときのライアンのことをいちばんげんきづけてあげられるのは、自分なのだというこゝも、わかっていたのです。

ロビーはそつとライアンによりそつて、げんきな言葉でいいました。

「へいきだよ。だって、リア先生つて、こわそうだったもの。敵がいつぱいいたって、みんな、やつつけちゃうでしょ？」

ライアンは思わず、えっ？ といった顔をして、ロビーのことを見やりました。そしてそれからすぐに、「ふふっ。」と笑つて、いったのです。

「よく、わかつてるじゃない。先生のこわさつていったら、それはもう、シープロンドいちだからね。」

「こわいものなし？」ロビーがいました。

「こわいものなしだよ。」ライアンがこたえます。

ロビーとライアンはそういつて、「あはは。」と笑いあいました（そんなロビーとライアンのことを見て、ベルグエルムとフェリアルも、おたがいの顔を見あつて、静かにほほ笑みあいました）。

「かれらのことを、信じよう。」ベルグエルムが、みんなにいいました。

「仲間を信じて、今は、さきに進むべきとき。いこう。みんなが、われらを待っている。」

そのベルグエルムの言葉に、みんなはしつかりとうなずいてみせました。

こうしてかれらは、そのさきにつづくベーカールランドのお城の門をめざして、気持ちもたしかに、このエリル・シャンディーンのみやこまちの中へと歩み出していったのです。

なんとという美しいみやこなのでしょう！ このみやこをはじめておとずれた者は、みなロビーと同じように、ただただ「ふええ……！」

と感心してしまうばかりのはずです。みやこの中は、ほかのまちとはあきらかにちがう、ふしぎな美しさにあふれていました（やつぱりできるかぎり、その美しさをみなさんにお伝えできるようにがんばりますが、わたしの表げん力のたりなさを考えていただいて……。そのあたりは、ごかんべん願いたいと思います……。うまく言葉でいいあらわせないのが、わたしもくやしいのです！）。

まずたてものはすべて、お城と同じ、海の色まじった白い石でできていて、やねもお城のやねと同じ、青い石をくんでつくられていました（つまりまちのたてものはすべて、お城と同じざいりようからつくられた、同じ色のたてものでした）。それらのたてものが高さも同じくきれいにそろっていて、それだけでも美しいのですが、おひさまがしずみ、あたりがだんだんと暗くなっていくにしたがって、その石たちがみな、ほんわりとした、やさしい光を放ちはじめていったのです。

それはお城も同じでした。お城全体が、ろうそくの光のようなあわくほんのりとした光を放ち、まるで夢の中の世界であるかのような、げんそう的な光景を生み出していたのです（じっさいロビーは、その美しさに見とれるあまり、思わずぼーっとしてしまって、ライアンに「起きてるっ」といわれて腰をたたかれて、ようやくはっとわれにかえったくらいでした）。

石から生まれるその光は、まちを流れる水にも、美しくうつりこみました。そしてまちのそとから見た、あの空にむかって流れていく水です。ロビーはまだかでそれを見ましたが、もう言葉もありませんでした。空にむかつてすいこまれるようにさらさらとのぼっていく、すいしょうのつぶのような水の流れ。たてももの石から生まれる光が、それにすいこまれて、あわさつて、ひとつとなつて……。光、影、水、すべてのものが、まるで紅茶にまぎっていくミルクのように、ひとつとなつて、このまちに美しくとけこんでいたのです。これはしぜんのままの美しさをほこるシープロンドとは、またべつの美しさでした。エリル・シャンディーンの美しさは、人の手によるわざによって、作り出された美しさといえることでしょう。そしてその通り。このみ

やこの名まえ、エリル・シャンディーンというのは、このくにの古い言葉で、「人の手によってみがかれた、かがやけるすいしよう」という意味の言葉だったのです。まさに、このみやこの名まえに、ぴったりですよね（ライアンはやっぱり、「まあ、シープロンドの方がすてきだけだね。」とロビーにいつていました）。

そのほかにも、まちの中はたくさんのおふしぎでめずらしいもので、あふれていました。なにしろここは、このアーランドの中でもいちばんというくらい、大きなまちです。さまざまなくからたくさんの人や品物たちが、やってくる場所でもありました（お城の西がわには大きなみなどもあって、西の大陸ガランタからの船も、ここにはやってきました）。ですが今は、それらのおふしぎなものたちのことを、ひとつずつ見学しているわけにはいきません。ロビーたち旅の者たちは、いつこくも早く、お城へとむかわなければなりませんでしたから。

そういうわけですから、まちの中のようすのことについては、全部しよりりやくして……、というわけにも、やっぱりいかないですよね。せつかく、こんなにしてきなまちにきたんですもの、いろいろ見てまわってみたいのも、とうぜんでしょう。ですからここでちよつとだけ、読者のみなさんのために、このまちのおふしぎなものたちのようすのことをしよいかいしようかいておきたいと思えます。でもとても全部はしよいかいしきれませんから、ほんとうにちよつとだけですよ（ごめんね！）。

まずまちのまん中の通りには大きな川が流れていましたが、その川の上、十五フィートほどの高さのところ、大きさが三フィートほどしかない小島がいくつも浮かんでいました（まちの空に浮かぶ島の、まさにミニチュアといった感じでした）。それらの小島はふわふわぶかぷかと、あつちやこつちにただよっていて、そしてそれらの島から島へ、にじ色の水がぴゅんぴゅん、いったりきたりをくりかえしていたのです。ですがおふしぎなのは、それだけじゃありません。そのにじ色の水が島から島へとうつるとき、空中のキャンバスに、星や、花や、いちごや、わんちゃんなどのすがたを、つきつきにえがき出していき

ました！（ほんとうにふしぎです！　まるで魔法みたい！　魔法ですけど！）

川の両がわには、たくさんのお店がなっていました。それらのお店には、さまざまなくにのめずらしい品物が、ずらりとならんでおります。見たこともないような食べものや飲みもの。きれいな石のお守りに、アクセサリー。小さな魔法のくすりびん。魔法の本やまきもの。ふたりで戦ってあそぶカードゲームのカード（ちびっ子に大人気！）。モンスターどうしを戦わせてあそぶ、小さなモンスターが飛び出してくるコイン（ちびっ子に大人気！）。それに、しゃべって動く、三インチほどの小さな人形や、ぬいぐるみ、などなど。じつにさまざまな品物がなっていました（どんなところにもいっても、こういうお店を見てまわるのは楽しいものです。ですけどこれらのお店をみんな見てまわっていたら、時間がいくらあってもたりないことでしょう。わたしもそのうちまた、時間を作って、これらのお店をじっくりと見てまわりたいものです。わたしの好きな、古い物語をもとにしたゲームをあつかった店なんかも、ありましたけど……）。

ちなみに、ライアンは、「時間がないからだめ。」と試してみんながとめるのもきかずに、「これだけはゆずれない！」と試みて、ひとつのお店の中にはいつか試みてしまいました。そのお店とは……、そう、お菓子屋さん！　そこはエリル・シャンディーン名物の、白いやき菓子を売っているお店だったので。じつはライアンはこのまちへついたら、まずぜったいにこのお菓子を買う！　と心にきめていました。そのお菓子はエリル・シャンディーンのお城のかたちをかたどった、白いもちもちの生地のお菓子で、中にクリームがたっぷりはいっている、とってもおいしいお菓子だったので。その名もずばり、「エリル・シャンディーンやき」！（そのまんまですね。）ライアンはこのときのために持ってきていたお金をみんな使って、そのお菓子をかばんにどっさり、買いこみました（いくら使ったのか？　ということについては、みなさんのごそうぞうにおまかせします……。きつと、そくたつの手紙が、なん通も出せることでしょうね……）。

また、まちの中には、いろいろな（へんてこな）ものが飛びまわっ

ていました。ブリキでできたふくろうが、「明日ノ、オ天気ヲ、オシラセシマス！」といって浮かんでいるかと思えば、「タツキユウビン！タツキユウビン！」とさけぶにもつが、どこかの家をめざして急いで飛んでいくのです。がつきを持った三人ぐみのくまさんのぬいぐるみたちが、ゆうめいな音楽家の作った新しい曲を、じやかじやかならして、飛びまわっていました(かれらはミュージックベアーといって、どんなえんそうでもかれらにいちどきかせれば、そっくりそのまま、まねをしてえんそうすることができました(もっともかれらは、えんそうのまねをしているだけなのであって、じつさいは、そのからだの中にくみこまれた魔法のスピーカーから、音がなっていました(たけど)。エリル・シャンディーンの人たちは、こうして、遠くはなれたところにいる音楽家の新しい曲を、自分たちのまちで大きくことができたのです。やっぱりエリル・シャンディーンって、すごいまちですね！)。

そしてさきほど山道で出会った、あのゆうびんかもめたちも、まちの空をいそがしく飛びまわっていました。今日いちにちのさいごのびんの手紙を、だれかのところへとどけてまわっているのです(かもめさんたち、今日もいちにち、おつかれさま！)。

このほかに、いろいろなめずらしいものはつきませんでした(……、きりがありませんね。まことにざんねんではありますが、まちのしようかいは、このくらいにしておきましょう。さあ、物語のつづきです！)。

みんなはまちをぬけ、お城までの道のりを急ぎ進んでいきました(ライアンはさつそく、エリル・シャンディーンやきにしあわせそうにかぶりついておりましたが)。まちのいちばんはしっこを越えると、そこはいちめん、みどりのしばふになっていました。まちとお城のあいだには、このような、きれいなみどりのしばふがつくられていたのです。そのしばふにつくられた、こがね色のれんがの道が、アルマーク王のいるお城までつながっていました(ちなみに、エリル・シャンディーンというのは、ほんらいこのお城のよび名でした。それがいつしか、このみやこ全体の名まえとして広く知られるようになったので

す)。

こがね色のれんが道のわきには、いくつものあかりがともされてきました。白い石でつくられたとうろうの上に、とうめいなすいしようがおかれていて、そのすいしようが白くかがやく光を放って、道を透らしていたのです。みんなはその光にみちびかれて、そのれんが道をお城の入り口へとむかって進んでいきました。そして、お城の入り口が見えてきたころ……。

ぱぱぱー！　ぱぱらっぱー！

とつぜん、お城の入り口の方から高らかならっぱの音がひびいてきました。それは……、そう、旅の者たちのことを出むかえるための、かんげいのらっぱだったのです(あれ？　でも、さわがないようにするってはずじゃ……)。

入り口の前には、すでにたくさんの兵士たち(この中には白の騎兵師団の騎士たちもふくまれています)がならんでいて、旅の者たちのことを今か今かと待ちかまえていました(その数は、ざっと百人以上もおりました)。みんな、旅からもどった白の騎兵師団の者たち、そしてかれらのつれてきたきゆうせいしゆどののとうちやくを、ほんとうに心待ちにしていたのです(ライアンがいつしよだということとはみんな知りませんでしたので、かれらはライアンのことは待つてはいませんでした。その点では、ライアンにはごめんなさいです)。

ところで、出むかえの者たちはほんとうなら、まちの入り口の門までいって、帰ってくる者たちのことを出むかえたかったのですが、旅の者たちのことはひみつにしておかなければなりませんので、このお城の入り口の門で、静かに待つていました。でもやつぱり、これだけの人数です。だまって静かに出むかえるなんてことは、むりでしたね。みんなすつかりこうふんして、大よろこびでしたから、思わずらっぱまで吹いて、出むかえてしまったというわけでした。

ちなみに、らっぱを吹いた者は、あとでしつかり怒られたそうです(けど)。

「おおおー!」「ばんぎーい!」「きゆうせいしゆどのだー!」

「ベルグエルム隊長ー! フェリアル副長ー!」

もうみんな、わーわーきやーきやー、大はしやぎでした。きりつのとれたりつぱな兵士たちとはいえ、こんなときにはむりもありません。かれらはまるで子どものようによろこび、もどってきた者たち、そしてついにやってきたきゆうせいしゆのことを、心からかんげいしたのです(同時にみんなは、「あのひつじの子はだれなんだろう?」とも思っていました)。やっぱりみんな、ライアンが四年前にきたシープロンドの王子さまだとは、気がつかなかったのです。だって四年前は、ライアンはほんとうに、ちびっ子でしたから。

その中でもとくに大はしやぎだったのは、ウルファの騎士たちでした。白の騎兵師団には人間の隊とウルファの隊、ふたつの隊があるわけですが、こんかいのこの重要な旅をまかされたのは、ウルファであるベルグエルムたちでしたので、ウルファの隊の仲間たちにとって、この旅のせいこうのうれしさは、ひとしおだったのです。

ですけど。いくらうれしいとはいえ、これではやっぱり、さわぎすぎってしまったようで……。

「全隊! せいれーつ!」

とつぜん! まるでかみなりが落ちたかのような、とんでもない大声がひびき渡りました! いったい、なにごとでしょう!

その声をきいた兵士たちは、人間もウルファも、みんな「あわわわ……!」とあわてふためいて、その場にきれいに、れっになって、びしっ! とならびます。

「おまえたち! へらへらするんじゃない!」

「はっ!」

声のぬしにむかって、兵士たちはみんないつせいに、敬礼をしてこたえました。そしてかれらがどいた、その道のまん中を通って、こち

らへゆうゆうと歩いてきたのは……。

なんと、女の人ではありませんか！ それもまだ十六、七さいほどにしか見えない、かわいい女の子だったのです！

かのじよは、こがね色の美しいかみを、エメラルド色の大きなかみどめで、両方の耳の上でとめていました。エメラルド色のもようのはいった白く美しいよろいを着ていて、腰にはかのじよにはふつりあいなほどの、大きな剣がさしてありました。背中には、大きな白いマントをおっておりまます。そのマントでからだを大きく見せていましたが、それでもやつぱり、かのじよの小ささは、かくしておけるものではありませんでした。背の高さはライアンよりもひとまわり高いていど。五フィートちよつとといったところでしょうか？ かのじよは見た目には、ほんとうにかわいらしい女の子そのものでした。ですけど、さきほどのびつくりするくらいの大声と、きついおしかりの言葉。あれはまぎれもなく、この女の子によるものだったのです。(ほんとうにびつくりです！)。

りつぱでたくましいこれだけたくさんの兵士たちのことを、ぐうの音もいわせないほどにしたがわせるこの女の子は、いったいなに者なのでしょうか？ でもそれはこのあと、すぐにあきらかになるのです。

「よくもどられた、ベルグエルムどの。そして、フェリアル。」かのじよはそういって、ふたりの騎士たちにえしやくをしました。

「そして、そなたが……」つづけてかのじよは、ロビーの方を見ていました。

「われらがきゆうせいしゅどのに、ほかなりません。」ベルグエルムがかのじよにこたえて、そういいます(ちなみに、ライアンは「ねえ、ぼくは？ ぼくは？」といつて、ベルグエルムに自分をしようかいするようにつづいていました)。

「よく、まいられた。王はそなたのことを、心待ちにしているぞ。わたしは、ライラ。ライラ・アシュロイだ。よろしく。」

ライラと名のつたかのじよは、そのあんず色の美しいひとみでロビーのことを見すえながらそういって、ロビーにあくしゆをもとめま

した。ロビーはあわてて（手を服のわきでごしごしとこすってきれいにしてから）かのじよの手を取って、あくしゅをします。

「よ、よろしく願います。ぼくは、ロビーと申します。よ、よろしく願います。」

ロビーは思わずきょうしゅくして、同じことを二回もいつてしまいました（さっきのかのじよのこわさを見ておりましたので、怒らせないようになくちや……、と思ったのです）。

「ロビーどの。かのじよは、わたしと同じ、白の騎兵師団の隊長です。」ベルグエルムがいました。って……、ええっ！ た、隊長？

「ライラどの、人間の隊長なのです。」

これはびっくり！ なんと、このライラという女の子は、ほかでもありません。白の騎兵師団の、人間隊の方の隊長だったのです！（さきほどもちよつとふれましたが、ここでもういちど、白の騎兵師団のことについて説明しておきますね。白の騎兵師団は、もともとの人間の隊と、レドンホールからのがれてきたはい色ウルファたちによるウルファの隊、ふたつの隊があわさってできていたのです。そしてそれぞれの隊には隊長と副長がひとりずついて、ライラ・アシュロイは、その人間隊の方の隊長でした。そしてもちろん、ウルファ隊の方の隊長は、ベルグエルム・メルサルです。）

ライラが隊長であるということをきいて、ロビーは前よりももっと、きんちようしてしまいました。それにしても……、ベルグエルムなら見た目からしてもすぐに、りっぱでゆうかなんな騎士であるということがわかりますので、なつとくなのですが、こんなに小がらでかわいい女の子が、これだけ大きくなるのに、これだけりっぱな騎兵師団の隊長だなんて、いったいどういうりゆうがあるのでしょうか？

ですがロビーのそのぎもんは、すぐにあきらかになりました（フェリアルがうしろからそつと、耳うちしてくれましたから）。つまり見た目はまったく、かんけいがないということだったのです。これはいぜん、シープロンドのメリアン王の言葉の中にもありましたが、人の中身は見た目やねんれいなどは、まったくかんけいがないのです。ライラ・アシュロイが白の騎兵師団の隊長になった、そのいちばんの

わけ。それは、たんじゅんめいかい。かのじよがとんでもなく、強いからでした！

剣を持たせたら、だれもライラにかなう者などいませんでした。剣のたつじんのベルグエルムでさえ、じつはかのじよに勝ったことは、いちどもなかったのです！（ベルグエルムはそのことについて、じつはけっこう、気にしていましたか……）

もちろんライラは、ただ強いというだけではありません。かのじよは強さのほかにも、人なみはずれたはんだん力と、隊をまとめ上げる、すぐれたとうそつ力をもかねそなえていました。そのうえ、このきびしいせいかくと、負けん気の強さ！ かのじよにさからおうものなら……、ぶるるー！ 考えただけでもおそろしい！ ですから兵士たちがかのじよにしたがいっぱなしなのも、わかりますでしょう？（もつとわかりやすい例をあげましょう。たとえばフェリアルがライアンにさからったとしたら、どうでしょう？たいへんなことになる、すぐにわかりますよね。）

そういったわけでライラ・アシユロイは、まんじょういつちで、白の騎兵師団の隊長ににんめいされたというわけだったのです（もつともそれは、かのじよがこわいからというだけのりゆうでみんなしたがつているというわけでは、けっしてありませんでした（そのりゆうもかなり大きかったのですが……）。かのじよはたしかに、とつてもこわかったのですが、それと同時に、みんなにとつてもしたわれておりましたし、人気があつたのです。のうりよくがすぐれているということもありましたが、それ以上にやっぱり美人でしたから、それもむりはありませんでした。影でひそかに、ファンクラブまで作られているくらいでしたから。ライラに知られたら、たぶん怒られるでしょうけど……）。

「それから、こちらは……」

ここではじめて、ライラはライアンの方をむいてたずねました（「ライ」がかぶってしまって、ちよつとまぎらわしいのですが、ごかんべん願います）。その言葉に、なかなかしようかいしてもらえていなかったライアンは、やっと出番だ！ といわんばかりに、ぐいっと口

ビーのことをおしのかけて、ぴよこんと前に出ると、ライラにペこりとおじぎをします。

「こちらは、ライアン・スタツカート。めいゆう国、シープロンドの王子であります。われらとともに、この地まで、旅をつづけてもらいました。」

「シープロンドの……」ベルグエルムのしよかいをきいて、ライラはそうつぶやくと、ライアンにうやうやしくおじぎをしてからつづけました。

「よくぞまいられた。ご協力をかんじやいたす。」

「いえいえ、こちらこそ。ベーカーランドへふたたびこられて、かんげきです。」

はじめてよそのくにの王子さまとしてあつかってもらえたライアンが、うれしそうにその言葉にこたえます。

「かれの協力なくして、この旅は、せいこうなし得ませんでした。ほんとうに、かれには、かんじやしてもしきれません。」ベルグエルムがライラにいうと、ライアンは「いやー、それほどでも。」とにこにこ笑っていました（あんまりほめすぎると、あとがめんどろうですが……）。

「それと……」ライラがライアンからしせんをはずし、あたりを見まわしながらいいました（ライアンは、あれ……、も、もう終わり？

とめんくらってしまいました）。「二名の騎士たちが見あたらぬが、どうされたのだ？ たしか、ハミールと、キエリフだったな。」

ライラの言葉を受けて、みんなはおたがいの顔を見あわせました。ほんらいこの場にいるはずだった二名の若き騎士たち、ハミール・ナシユガーとキエリフ・アートハーグ。かれらがいないわけを、ライラにもしつかりと説明しておかなければなりません（ベルグエルムがゆうびんかもめに持たせた手紙の内ようは、取り急ぎ、「きゆうせいしゆどのをつれてあと一時間ほどで帰る」というだけのものだったので、みんなは二名の騎士たちがいないことについては、なにも知らなかったのです。ですから出むかえのみんなは、ベルグエルムたちがやって

きたとき、大はしやぎするのと同時に、「ハミールとキエリフはどこだろう?」とも思っていました。「あのひつじの子はだれ?」とも思っていました(けど)。

「かれらは、われらをこの地へとおもむかせるために、敵のおとりとなるやくめを買って出てくれたのです。ここまでの道のりは、ほんとうに、こんなんのれんぞくでした。思いもかけず、ワットの黒騎士たちにも出会ってしまったのです。」

「ワットの……」ベルグエルムの言葉に、ライラはきびしい顔をしていました。その表じようは、なにかそのおく底に、ふくぎつな思いをかかえているかのようにも見えました。

「まさか、ガランドーに……?」ライラがベルグエルムにたずねます。そのようすは今までのかのじよのようすとは、あきらかにちがっていました。いったい、どうしたというのでしょうか?(ガランドーって?)

「いえ、かれではありません。」ベルグエルムが、れいせいにこたえました。「ですが、おそらく、かれの配下の者たちでしょう。かれらは、デイルバグの黒騎士隊でした。」

ライラは、思いをめぐらせているようでした。いったいガランドーとは? それはみなさんにも、もうすこしあとでお話したいと思います。

「そうか……」ライラはそういって、深く息をつきました。「ふたりの騎士たちに、敬意をあらわす。ぶじであるとよいが。」

「ぶじにきまっていますよ!」ライアンが思わず、口をはさみました。「なんとたつて、ぼくの先生がいつしよなんですから。リア先生なら、どんな相手だつて、こてんぱんにしてくれれます! それだけじゃない。ルースつていう、強い精霊使いもいつしよなんです。」

ライラはちよつとびつくりして、ライアンの方を見ます。

「それは、心強い。」

ライラはそこでちよつとだけ、笑みを浮かべました。

「そうだな。わが、白の騎兵師団の騎士たちに、シープロンドの者たちがいつしよなら、あんずることもあるまい。近々、かれらからも、旅

の話を引きくことができよう。」

ライラの言葉に、ライアンはにっこり笑ってみせました。

「リュインとりでのことは、ほんとうに痛ましいことです。」ふたたびベルグエルムが、ライラにいいました。「これから、どう動くべきか？ われらはすぐに、こたえを出さなくてはなりません。」

ライラはベルグエルムにうなずいて、ふたたびきびしい顔にもどつてこたえます。

「王のおちえを、さずからなくてはなるまい。だが、それだけではない。きのうから、城には、心強い仲間がたいざいしている。ノランどのだ。」

「ノランどのが！ お越しなのですか！」

なんと！ さきほどエリル・シヤンディーンにくる前に話していた、あの大けんじやノランが、今ここにきているというのです！

「うむ。西の大しごとには、きりがついたということだな。こたびのいくさには、ノランどのも、力を貸してくださいとさるということだ。」

ライラの言葉に、ベルグエルムとフェリアルはおたがいの顔を見あつて、こぶしをにぎりしめてよろこびあいました。

「ありがたい！ きゆうせいしゅロビーなのに、ノランどのまで！」

われらは、百万の味方を得た！（そういうベルグエルムたちに、ライアンがまた、「ぼくは？ ぼくは？」とからんでいましたが。）

ですがライラの顔つきは、きびしいままでした。

「きゆうせいしゅどのよ。」ライラがロビーの方を見て、いいました。

「この戦いは、このアー克蘭ドのみらいをきめる戦い。そなたには、そのかくごがおりか？」

ロビーはいっしゅん、どきつとしてしまいました。ですがそんなしつもんは、もうロビーには、きくだけむだというものです。ロビーはだれよりも強いかくごと、しんねんを持っていましたから。

「はい。」

ロビーは力強く、それでいて静かに、心をこめたへんじをかえしました。そのひとことのへんじと、ロビーのかたいしんねんのこもった目。それだけでもう、じゆうぶんでした。

ライラは、静かな笑みを浮かべました。そしてお城の方をふりかえり、その歩みをふみ出しながら、さいごにいったのです。

「まいろう。王がお待ちだ。」

ついにこのときがやってきました。こんかいの旅の、たったひとつのもくてき。アルマーク王に会うということ。そのもくてきのために、みんなはこのつらく危険な道のりを、乗り越えてきたのです。ロビーの心は今、さまざまな思いでいっぱいでした。いよいよだ。その足取りは力強く、しっかりとしたものでした。

でもロビーのほんとうの旅は、ここからだったのです。これから伝えられるしんじつは、ロビーにとって、とてもつらく、重いものとなることでしょう。

ベルグエルムがロビーの顔を見て、うなずきました。ロビーもしっかりと、それにこたえて、うなずきました。

フェリアルが胸に手をおいて、ロビーにウルフアの敬礼をおくりました。ロビーも同じく、ウルフアの敬礼を、このすばらしき仲間へとおくりました。

ライアンがロビーの横へきて、ロビーの手を取りました。にこにこ笑うライアンに、ロビーはほっとした気持ちになって、ほほ笑みかえしました。

そしてロビーはみんなにむかって、心のこもった声で、ひとこと、いったのです。

「ごきまじょう。」

さあ。

アルマーク王のもとへ。

17、明かされたしんじつ

今ではもう伝説とまでうたわれた、遠い遠いはるかむかしのお話です。ある日のこと、ひとりの若者がこのアークランドの地にやってきました。もうずいぶんと長いこと、旅をつづけてきたのでしよう。身なりはぼろぼろ。くたびれたかばんを背おい、腰には使い古されたひとふりの剣がさしてありました。かれははるか遠くの南の地から、ここまでなん日もなん日も、なんしゅうかんもかけてやってきたのです。それはかれの見た、ひとつの夢のおつげのためでした。

かれは南の地で、それこそ数えきれないほどの冒険をこなしてきた、冒険者でした。剣のうちでは、かなりのものでした（ライラとくらべたらどうでしょうか？ むかしのことなので、今となってはくらべようがありませんが）。そのかれがあるときとつぜん、夢の中でこんなおつげをきいたのです。

その夢は、青と白の光につつまれていました。そしてその光の中から、青い光をいだいた、とても美しい女神がひとり、あらわれたのです（そのあまりの美しさに、かれは思わず、「これは夢か？」と思ってしまうほどです。夢でしたけど）。そしてその女神が、かれにこんなことをつげました。

「北に、そなたの運命の土地があります。そこは、アークランドとよばれるところ。そこへゆきなさい。そなたはそこで、おくりものを受け取ることになるでしょう。そしてそなたは、王になるのです。」

女神はそれだけいうと、光のむこうへと去っていききました。「待つて！」かれはさげびましたが、女神はそのまま、青白い光となって消えていってしまいました。

目がさめたとき。かれはもうふにつつまれて、小さなほらあなの中にいました。かれははじめ、自分がどこにいるのか？ わかりませんでした。そしてしばらくののち。きのうの夜、自分が冒険のちゆうで、このほらあなにひとり、野宿をしたということを思い出したのです（ちなみに、その冒険とは牛やひつじをぬすんで悪さをするという、いたずらようかいのすみかにふみこんでいって、こらしめるというも

のでした。ひがいにあった村から、冒険のいらいを受けたというわけだったのです。

かれはほらあなから、そとへ出ました。朝でした。鳥がちゅんちゅんないています。まぶしい光が、かれの顔にさんさんとふりそそいできました。

かれは丘の上に立って、かなたの景色をながめやりました。はるか北のほうかくくに、切り立ったたくさん山々が見えていました。あの山のむこうに。みずからの運命の場所、アークランドという地があるというのです。かれは思わず口もとをゆるませて、にやりと笑いました。

「アークランド……」

そしてかれはにもつをまとめ、北へとむかって歩きはじめたのです（いたずらようかいのことなんて、もうきれいさっぱり忘れてしまっているみたいでした。村人たちの、「そりやないよー！」という声がきこえてきそうですが……）。

かれの名は、イエヒュリー・ベーカー。この名まえをきけば、読者のみなさんもぴんときたことかと思えます。そう、かれはのちに、ベーカーランドのしよだいの白きいだいなる王とよばれることになる、伝説のイエヒュリー・ベーカー王、まさにその人でした！（このイエヒュリー王のことについては、ロビーのほらあなでベルグエルムの話の中に、いちどだけ名まえが出てきました。レドンホールのいい伝えのことについて、説明していたときのことです。）

イエヒュリーはアークランドのその地で、女神のおつげの通り、あるものを受け取りました。それがなんだか？　みなさんにはもうおわかりでしょう。それはベルグエルムの話の中に出てきた、このアーランドをまとめ上げることのできるという、力のみなもと。よこしまなる魔法使いアーザスが、ねっしんにほしがっている、とくべつな力。そう、それこそが、ベーカーランドの王城に代々受けつがれ、かたく守られつづけている、いちばんの宝物、青き宝玉だったのです。

イエヒュリーは宝玉を受け取った地に、自分のくにくをつくると心にきめていました。そしてそれこそが、このアーランドでいちばんの

みやこをかまえるまでにさかえることとなった、げんぎいのベーカーランドなのです（ベーカーさんがつくったから、ベーカーランド。なんてわかりやすい！ これは自分のくには自分の名まえをつけて、みずからのそんぎいを世の中の人たちに広く伝えたいという、イエヒュリーの強い思いがあったからでした。かれはなかなか、目立ちたがりなところがあつたみたいですね。

ちなみに、ほかにもくにの名まえを見てみますと……、シープロンたちのくにだから、シープロンド。これもとつてもわかりやすいですね。それからウルファたちのくに、レドンホール。この名まえには、「こがね色にかがやく思い」といった意味があるそうです。そしてワット。これは、「手を取りあつて力をあわせる者たち」という意味がありました。その通りに、みんなと力をあわせられたらよかつたんですけど）。

こうして、夢のおつげはすべてほんとうのことになりました。イエヒュリーは王となり、そしてそのすぐれた力をぞんぶんにはつきして、このアーklandをへいわにまとめ上げてきたのです。それから数世だいののち。このアーklandがおそろしいやみにつつまれることになるなどは、だれもよそうすらしていませんでした。

「ふええ……！」

ロビーは思わず、ため息をついてしまいました。ここは、エリル・シャンディーンのお城の中。仲間たちはアルマーク王に急ぎ会うために、お城の中を進んで、上の階へとつづく大かいだんのあるこの大広間まで、やってきたところだったのです。

そのかいだんの大きいこと！ そして美しいこと！

まずお城の門をぬけて中にはいったそのしゅんかんから、ロビーはずっと、ため息のれんぞくでした。地面やかべの白い石は、みんなオレンジ色のあわい光を放っていて、その石だたみの上を歩くと、足でふんだその部分から、ぱあっ！ とオレンジ色の光のこながまいちるのです（ロビーは思わず、オレンジ色の光の精霊がそこにいっぱい飛んでいるんじゃないかと思って、ライアンにそうきいてしまいました

が、これはあくまでも魔法の力なのであって、精霊とはやっぱりちがうそうでした。でもロビーにとっては、どっちもふしぎなことに、変わりはありませんでしたけど。

そんな白くてオレンジ色の石だたみの道をあんないさされて、さらに門をくぐり、かいだんをのぼり……、ようやくたどりついて中にはいったところが、この巨大な白い大広間。そしてそのおくにそびえる、あつとう的なまではくりよくをほこる、この大かいだんだったのです。

それはまるで、巨大な白いたきのようでした。そしてじつさい、この大広間は、水と海をイメージしてつくられていたのです。床はいちめん、白と海の色ของタイルでおおわれていました。そしてはるかなてんじょうまでのびる、たくさんの白いはしら。それぞれのはしらからは、すんだ水が伝い落ちていて、はしらの下に美しいいずみを作っていました。そしてあちこちにつくられた、たくさんのふんすい。それも、ただのふんすいではありません。ふんすいの上には、よくみがかれた石でつくられた、魚のちようこくが乗っていました。その魚のちようこくが、ふんすいの上から空中へとむかって、ゆらゆらとおよいでいって、その口からかがやく銀色の水を吹き出していたのです（そして水を全部吹き出してしまつと、またもとのふんすいにもどつて、新しい水をたくわえました）。

あちこちを流れる、やさしい水の音。それがこの広間全体に、美しくびびき渡っていました。もしこの広間のまん中に寝そべって、目をとじたとしたら、自分がまるで、海の中をただよっているかのように思えることでしょうか（そしてきつと、二分もたたないうちに寝てしまふはずです）。ここはそんな、美しくやさしい場所でした。ですが、やっぱりそれでも。この目の前の大かいだんのことを見てしまったら、この広間の美しさも、かすんでしまふというものです。

その横はばだけでも、ゆうに七十フィート以上はあることでしょう。そしてその高さといったら……！（ここでみなさん、けんじやカルモトの住んでいた、あの巨大なルイズの木のことを思い出してみてください。このかいだんはまさに、それと同じほどの大きさだった

のです！)

とうめいな石(石かどうかもわかりませんが)でつくられたかいだんが、らせんじょうになって、はるかな高みへとむかつてつづいていました。見上げると、ずうつと上の方に、かいだんのいちばん上がつづいているのが見て取れます。そしてかいだんのとちゅうにも、全部で五つの、張り出しろうかがつなっていました。これはエリル・シャンディーンのお城の階の数と、同じでした。今いる場所が、お城の一階部分。いちばん上が、王さまのいる(という)七階。そのあいだに、五つの階があるわけです。つまりこの大かいだんは、このエリル・シャンディーンそのまん中であって、お城のすべての階をひとつにむすんでいる、とつてもだいじなかいだんだというわけでした。「これで、七階のえっけんの間までいどうします。どうぞお乗りください。」

ベルグエルムとライラがさきにかいだんにのぼり、ベルグエルムがロビーをまねいていました。いわれてロビーが、「あ、はい。」といって、あわててそのかいだんをのぼります(さつきからずっとロビーは、このかいだんのりっぱさに気を取られっぱなしでしたので)。ライアンとフェリアル、そしておともの兵士たちがふたり、それにつづきました。

そしてロビーがさらに、かいだんをのぼっていこうとすると……、ベルグエルムが手でロビーのことをせいして、とめました。見ると、ベルグエルムもライラも、かいだんをすこしのぼったところで立ちどまっていて、それ以上のぼっていこうとしないのです。いったいなぜ？

「ロビーどの、このまま、ここでお待ちを。今、動かしますので。」

「えっ？」

ベルグエルムの言葉に、ロビーはきよとんととして、その場に立ちつくしてしまいました(動かすって?)。うしろを見ると、ライアンがここにこして立っております。フェリアルも、「びっくりしないでくださいよ。」とうれしそうにいうだけでした。

「アローイン、フェルク。」

ベルグエルムがかいだんの手すりに手をおいて、いいました。する
と……！

「うわわわっ！」

ロビーが乗っているその足もとのかいだんが、とつぜん、すごい
やさで動きはじめたのです！ いったいこれは！ どうなってるの
？

なんと、このかいだんは、じつは、あい言葉をいうことよって動
く、魔法のかいだんでした！ このかいだんを使う人は、自分のいき
たい階のあい言葉をいうことよって、その階まであつというまにい
くことができたのです。さすがエリル・シャンディーン！ すごいか
いだんがあるものですね！（ちなみに、上にいくときには「アローイ
ン」、下にいくときには「フローイン」といってから、いきたい階の番
号をいうと、このかいだんは動きました。ロビーたちがむかうさきは
七階でしたから、アークランドで七をあらわす「フェルク」という言
葉を、ベルグエルムはいったというわけだったのです。「アローイン、
フェルク」とは、つまり、「七階までのぼれ」という意味になりました。）
魔法のかいだんはぐいぐいと動き、ロビーたち一行は、らせんかい
だんをどんどのぼっていきました（ロビーのことをびくりさせ
ようとして、このかいだんのしかけのことをだまっていたライアン
が、「おどろいた？ おどろいた？」としきりにロビーにからんでいま
した。ですがそういうライアンも、四年前、はじめてこのかいだんに
乗ったとき、すごくおどろいたのです。ライアンのことをおどろかせ
ようとして、メリアン王もまた、このかいだんのひみつのことをライ
アンにだまっておりましたから）。そしてさつきまでいた広間が、
あつというまに、はるか下に見えるようになって……。

ちーん！

すんだ高いベルの音をならして、かいだんはふわつとした感じだと
まりました（乗っている人がころばないように、ふわつととまるので
す）。

ところで……、ベルの音は、どこからなっているのでしょうか？

じつはベルグエルムも知りませんでした。ロビーたちはこうして、

あつというまに、アルマーク王のいるお城の七階までやってきたのです。

かいだんをおりと、そこはまたしても大きな広間になっていました（このお城はどこへいっても大広間だらけでした）。その広間から、ぴかぴかにみがき上げられたはばの広い石のろうかが、ずうつとむこうの方にまでまつすぐのびていたのです。そのろうかの両がわには、同じくぴかぴかにみがかれた白いはしらが、二十ヤードおきくらいに、左右にいつぽんずつきれいにならんで立っていました。そしてはしらとはしらのあいだには、左右ともに、白いやりを持った兵士たちがひとりずつ、背すじをぴーん！ とのばして、きちつとならんで立ちつくしていました。それらの光景が、ろうかのつづくかぎり、はるかむこうの方にまで、ずらーつとえんえんとつづいていたのです（いつたい兵士たちは、なんんくらいいるのでしょうか？ はしらはさきが見えないほど、ずうつとむこうにまでのびていましたから、すくなくとも百人以上はいるはずす。うーん、ごくろうさまです）。

この場所が、なんなのか？ それははじめてここにきたロビーにも、すぐにわかりました。こんなふうにまつすぐのびるろうかのまわりに、立ちならんだ兵士たち。そうです、ここはまさしく、王さまに会うための、えっけんの間とよばれるところでした。ですからここをまつすぐ進めば、そのさきに、王さまのすわるぎよくざといういすがあつて、王さまがいるはずなのです。ですけど……。

なんて長いろうかなのでしよう！ お伝えしました通り、王さまがいるはずのろうかのはしは、さきが見えないほどの、はるかむこうでした。ですからここを歩いていくだけでも、じつにたいへんだつたのです！（じつさいこのろうかは、長さが半マイルもあつたのです！ いくら大きくてりつぱなお城とはいえ、これではやつぱり、長すぎですよね！ じつはこれは、王さまのえっけんの間は、アークランドいち大きくて、ごうかけんらんなものにしたいという、しよだいいエヒュリー王の願いがあらわされてきました。どうもイエヒュリー王という人物は、りつぱな人でしたけど、ちよつと、みえつぱりなところがあつたみたいすね……）

ですけどここは、歩いていくしかありません（この床は、魔法で動いてくれる床というわけではありませんでしたから）。一行はベルグエルムとライラを先頭に、ロビーとライアン、フェリアル、おとも人間の兵士がふたり（ルーリツク・レスネルとアランギル・ローシーという名まえのふたりでした。まあ、おぼえてもらう必要はないんですけど……）というじゅんばんで、このぴかぴかの石の床の上を、かつんかつんとくつ音をならしながら歩いていきました（ところで……、みなさんも「そんなの変じやない？」と思われたかもしれません、ここにはおかしなところがあつたのです。いくら大きなお城とはいえ、たてもものの中にこんな長いろうかがあるなんて、やつぱりおかしいですよ？ ふつうに考えたら、半マイルもあるろうかなんて、お城のそとにまで飛び出してしまはずです。じつはこのろうかは、魔法のろうかで……、といたいところでしたけど、そうではありません。このろうかは長いというだけで、ほかはまったく、ふつうのろうかでした。つまり……、このろうかは、じつさいに、お城のそとにまで飛び出していたのです！

それってどういうこと？ それは王さまのぎよくぎのある、その場所のせいでした。王さまのぎよくぎがあるのは、なんと、お城の中ではなくて、お城から半マイルもはなれた塔の上だったのです！ このろうかがこんなにも長いのは、そのためでした。このろうかはお城の七階からぎよくぎのある塔へといくための、長い長い、つり橋みたいな空中ろうかだったのです！ ひええ、こわい！ でもこのろうかには、まどはありましたが、やねもかべもついておりませんでしたので、じつさいに渡っているロビーには、まさか自分が、空中をつないでいるろうかの上を歩いているだなんて、ぜんぜんわかっていませんでした。まあ、知らない方がいいでしょうけど……）。

（そんなおつかない空中ろうかを）半分くらい進んでいったところ（そしてロビーが百人目の見張りの兵士さんにあいさつしたところあたりで）、ようやく道の終わりがかくにんできるようになりました。道の終わりとは、つまり王さまのぎよくぎのあるところですよ。ですがまだ、はるかむこうでしたので、ぎよくぎは豆つぶくらいにしか見え

ませんでした。そしてそれよりもなによりも、すぐにそれとわかるあるものが、そのぎよくぎのうしろに、ででーん！ とそびえているのを、ロビーは見たのです。

それはとてつもなく大きな、女神のぞうでした。すき通るようなミルク色の石をほってつくられていて、胸の前にさし出された両の手のひらからは、たくさんの光がこぼれ落ちていました。背中には、天使のような大きな羽がふたつ、つけられております。そしてなにより、その美しくおだやかな表じよう。それは見る者の心をしずめ、おちついた気持ちにさせてくれる、まさに女神のようなほほ笑みの表じようでした（女神ですけど）。

その女神のすがたに、ロビーはすっかり心をうばわれてしまいました。まだずいぶんとはなれているというのに、そのあつとう的なまでのそんざいの力が、ひしひしと胸に伝わってきたのです。

「女神リーナロッドのぞうです。」ベルグエルムが、ロビーの方をふりかえっていいました。「ベーカーランドけんこくの王、イエヒュリー・ベーカー王が、そのむかし、女神リーナロッドより青き宝玉をさずかり、このくにをつくったといわれています。」

「女神さまから……、すごいー！」

ベルグエルムの言葉に、ロビーはあらためてそのすごさを感じ取っていました。それはまるで、ロビーの心の中にちよくせつ、女神が話しかけてくるかのようでした。

「このくには、女神リーナロッドに守られている。」ライラも前をむいて歩いたまま、ロビーにいいました。

「そうやすやすと、敵の思い通りになどならぬ。」

そしてみんなは（それからまたずいぶん歩いてから）ついに、その女神リーナロッドのぞうの前、つまり王さまのぎよくぎの前まで、やってきたのです！（ちなみに、ライアンはひまつぶしに、はしらのあいだに立っている兵士の数を数えてきましたが、全部で二百二十六人いたそうです！）そしてその兵士たちを数えながらここまでやってくるのに、食べたエリル・シャンディーンやきの数は十七こでし

た。)

ぎよくぎは白い石とすき通つたすいしようでつくられていて、とてもこまかいちようこくがちりばめられていました(まさにごうかけんらんです)。ここはおうぎのかたちをした広間になっていて、はしらでささえられたやねはありましたが、かべはなく、まわりはすべて、それとを見おろせるバルコニーになっていました(七階ですから、その高いこと！ 高いところがだめな人なら、このバルコニーに近よることすらできないでしょう！)

ちなみに、雨の日や風の強い日などには、このバルコニーは魔法のカーテンによってしめられるそうです。うくん、さすがです)。そしてまちかで見える女神のぞうは、まさにすばらしいのひとこと。近くで見ると、じつにみごとなちようこくがなされていて、その衣服などは、まるでほんもののぬののようだったので(衣服のあつさは、十ぶんの一インチほどありませんでした。でもやっぱりこれは、石でつくられたちようこくなのです。すごいわざです！)。

ですがここにきてまず、はじめに目がいったのは、それらのものではありませんでした。ぎよくぎにはまだ、だれもすわっていませんでしたが、そのぎよくぎの前に、ひとりの男の人が立っていたのです。ロビーはライアンに「王さま？」とききました。が、「ちがうよ。」というへんじでした。ではいったいこの人物は、だれなのでしょう？

その人は、とてもいげんのある人でした(ですからもしこの人が王さまだといわれたら、王さまのことを知らない人なら、みんなそのまま信じてみましょう)。黒と金色のごうかな衣服に身をつつんでいて、剣はさしていませんでしたが、手にはさきにエメラルド色のすいしようのついた、みじかいつえを持っていました。つえ……、ひよつとして、魔法のつえ？ ということは……、この人が、大けんじやノランなのでしょう？

いえ、それもちがいました。ノランとこの人物がけつて的にちがう、あるりゆうがひとつ、あったのです。それはこの人物が、人間の種族の者ではなくて、おおかみ種族の者だということでした。この人物は、はい色ウルファの人だったのです(ですからロビーもさいしょ、

この人が王さまのはずがないと思いましたが、あんまりりっぱな身なりでしたので、いちおうライオンにたずねてみたというわけだったのです。

「よくもどられた、ベルグエルムよ。」みんながやってくると、その人物がまず、そう口をひらきました。

「はい、父上。」ベルグエルムがこたえます。

「って、ええっ！ 父上？」

そう、この人物は、ほかでもありません。ベルグエルムのお父さんだったのです！ それにしても、王さまのぎよくぎの前にいるなんて、ベルグエルムのお父さんって、いったいどんな人なの？

「いい伝えは、まことでありました。われらは文字通り、きゆうせいしゆを得たのです。ロビーどのです。」

ベルグエルムはそういつて、ロビーのことをうやうやしく、しようかいました。ロビーはあわてて、「ロ、ロビーと申します。よろしく願ひいたします。」ときんちようしながら、じこしようかいをおこないます。

そんなロビーのことを見て、ベルグエルムのお父さんは、なんともふくぎつな表じようを浮かべました。その胸の内に、なにかはかりもしれない、とくべつな思いをひめているかのようにでした（いったいどうしたのでしよう？）。ですがかれは、いたってれいせいなふうをよそおつて、とても静かに、ただ、こういったのです。

「はるばるのぐそくろう、かんしゃいたします。わたしは、デルンエルム・メルサル。このくにのしっせいをつとめております。」

へえ！ ベルグエルムのお父さんって、しっせいなんですか！ ベルグエルムがりっぱなものも、うなずけますね！（しっせいという言葉、みなさんおぼえていますでしょうか？ セイレン大橋の下で出会ったカピバラのおじいさんが、むかしカピバラのくにで、カピバラのしっせいさんにつかえていますよね。しっせいとはそうりだいじんみたいなもので、くにのせいじをとりおこなう、とつてもえらい人なのです。そのとつてもえらい人が、ベルグエルムのお父さん、デルンエルムでした。

ちなみに、デルンエルムは祖国レドンホールでも、しっせいをつとめていたのです。ベーカーランドでは四年ごとにしっせいがかわりますが、ちょうど前のしっせいがそのつとめを終えるところでしたので、そのひきつぎとして、アルマーク王からぜひにとたのまれて、デルンエルムがしっせいになったというわけでした。）

「王は、まもなくまいられます。今しばらくお待ちください。」
デルンエルムがそういつてから、しばらくすると……。

ちん、ろん、らん、ろん。

ちん、ろん、らん、ろん。

とつぜん、どこからかハンドベルのえんそうのような、なんともかわいらしい音楽がきこえてきました。そしてそれは、どうやら王さまのぎよくぎのうしろ、女神ぞうの中からなっているみたいなのです。いったいなにごと？　すると……。

ちーん！

またここへくる前、大かいだんがとまるときにきいたのと同じ、ベルの音です。ロビーが、なんだろう？　と思っていると、女神ぞうの足もとのあたりから、ぷしゅーという空気のもれるような音がして……。

女神ぞうの右足の横の部分が、とつぜん、とびらのように、横にしゅいいん！　とひらきました！　ロビーが、ええっ？　と思つていて、なんとそこから、数人の兵士たちが、つかつかと歩き出てきたのです！（そこ、入り口だったの？）

なんと、この女神ぞうはこのぎよくぎの間にやってくるための、出入口のやくめも果たしていました！　その出入り口のとびらが、女神の足もとのところにあつたというわけなのです（うくん、なんだか、ばちあたりなような気もしますが……）。そして兵士たちにひきつづいて、女神の足もとからあらわれたのは……。

美しい白いビロードの服を着て、同じく白いマントをはおった、ひとりのりっぱな、人間の男の人でした。ねんれいは、四十だいのなかばといったところですよ。背は高く、身長は六フィート近くもあるでしょうかと？ ひげはなく、なんともたくましいからだつき。しんじゆ色の美しいかみを、肩までのばしていました（ライアンのかみの色にておりましたが、ライアンのかみは銀色で、この人物のかみは白に近いしんじゆ色でした）。美しくととのった顔立ちは、きりつとひきしまっていて、じつにどうどうたるふんいきです。

りっぱなのはとうぜんでした。そう、この人物こそ、ロビーがはるばる会いにやってきた、このベーカークランドのあるじ、アルマーク・クリステイア・ベーカーク王、その人だったのです！（ロビーはライアンに、「お、王さままだよね？」とたずねました。そしてこんどこそ、「そうだよ。」というへんじだったのです。）

「ベルグエルム、フェリアル。ふたりとも、よくやってくれた。そなたたちは、わがくにのほこりだ。」

アルマーク王がまずそういつて頭を下げ、騎士たちのくろうをねぎらいました。ベルグエルムもフェリアルも、「ははっ。」といてってぺこりと頭を下げて、王さまの言葉にこたえます（たいへんな旅を乗り越えてきたかれらにとつて、この王さまの言葉はなによりもうれしく、心にひびきました。騎士たちはアルマーク王を心からそんけいしておりましたし、アルマーク王もまた、配下の者たちのことを、とてもだいに思ってくれたのです。旅からもどつた騎士たちに敬意をあらわし、すぐに、心からのねぎらいとかんしやの言葉をかけてくれる。アルマーク王はまことに、すばらしい王さまでした）。

アルマーク王はそのまま、ロビーたちの方へとやってきました。ふつうなら王さまはまず、ぎよくぎにすわつてから、自分に会いにきた者たちへとあいさつをしますが、こんかいばかりは、とくべつのもどくべつなお客さまです。王さまは手をかぎしながらかんげいの気持ちであらわして、ロビーの前までくると、とても心のこもつた言葉をただひとこと、おくりました。

「よく、まいられたな。」

アルマーク王はそういって、おだやかにほほ笑みました。

「は、はい。よく、まいられました。」

ロビーはすっかりきんちようしてしまつて、おかしなあいさつをかえしてしまいました。やはり、あれほどかたいけついとしんねんを持つて王さまに会いにいらしたとしていたロビーでしたが、これだけりっぱな王さまの前に出ては、きんちようしてこちこちになつてしまふのも、むりはないというものです(こういってはなんです……、メリアン王よりもざつと三ばいくらい、りっぱな感じでしたから。おつと、シープロンドの人たちにはないしよですよ!-)。

「ライアン王子も、ずいぶんと大きくなられたな。メリアン王は、げんきであられるか?」アルマーク王はこんどは、ライアンに声をかけました。ベーカーランドとシープロンドはとても親しいあいだがらでしたから、その王子さまはやはり、とくべつなお客さまだったので(ちなみに、さすがは王さまですね。四年ぶりでライアンもずいぶんと大きくなつていましたが、王さまにはすぐに、目の前のひつじの少年がライアンだとわかつたみたいです)。

もつとも……、じつは王さまは、ライアンがここにくるということをも、もうすでに知っていました。それはなぜか? ということについては、のちほど、つぎの章でお話します)。

「げんきすぎて、こまつていますよ。すこしはおちつくように、王さまから、よくいってやってください。」

ライアンがじょうだんまじりにさういうと、アルマーク王は「ははは。」と笑つていいました。

「むかしから、メリアンは変わつていないな。ライアン、きみを見ていると、まるで、むかしにまた、もどつたように感じてしまうよ。きみは、メリアンの若いころに、そっくりだ。」

「そんなになにてるの? なんか、やだなー。」ライアンもさういって、笑つてかえしました。

どうやらライアンのお父さんのメリアン王とアルマーク王とは、若いときからの知りあいのようなようでした。それも、ただの知りあいというわけでもなさそうだったので。それはメリアン王のことを話して

いるアルマーク王のことを見ていれば、わかりました。ぜんぜん王さまのようなじゃなくて、ごくふつうの人。それもまるで青年みたいなのに、じつにくだけた話し方をしていたのです。ですからロビーはちよつと、びつくりしてしまったものでした（なにせあのライアンと対とうに話していましたから、どんなにくだけた感じなのか？ よくおわかりでしょう？）。

ライアンとの話しがすむと、アルマーク王は急にまじめな顔にもどりました。そして王さまはとつぜん、ロビーにむかって、こういったのです。

「きみのお父さんのことも、わたしは、よく知っているよ、ロビーベルク。」

えっ……？

ロビーベルクって、あのやみの精霊が口にした、ぼくのほんとうの名まえ……。くわしく教えてくださってたのんだけど、教えてくれなかった。それはすぐに、知ることになるからって。

え……？ お父さん……？ ぼくの、お父さん……？

あまりにもとつぜんのことに、ロビーはなにがなんだか？ わからずに、すっかりこんらんしてしまいました。頭の中がぐるぐるまわって、今までのたくさんのおきおくが、そこにかけめぐっているかのようでした。子どもたちのころの、影のようなきおく……。馬に乗って、山道をかけていった……。大きな河が流れていた……。ぼくをだきかかえていた、大きな人……。ロビーという言葉……。。

お父さん！

ロビーは、はっとわれにかえりました。それは、いつしゅんのあいだのことでした。でもロビーにはこのしゅんかんに、もうなん年もなん年も、旅をつづけてきたかのように思えたのです。そしてその旅の

果てに、ロビーはようやく、この場所へたどりつくことができたかのように感じました。

「知っているんですか！ ぼくのお父さん……、家族のことを！ ぼくは、ロビーベルクっていう名まえなんですか！ お願いです！ 教えてください！ ぼくは、なに者なんですか！」

ロビーはひっしになって、うったえかけました。やみの精霊の地で、いちどはわかりかけた、自分自身のこと。家族のこと。そのひみつが今、ここでまた、わがらうとしていたのです。ロビーは相手が王さまであるということなど、すっかり忘れてしまっていました。アルマーク王にすぎり、なみだをぽろぽろこぼしながら、むがむちゅうでさげんだのです。

アルマーク王は、とてもいいせいでした。そしてロビーのうでを取り、その手をにぎって、静かに、こう伝えたのです。

「きみは、ロビーベルクだ。ロビーベルク・アルエンス・ラインハット。きみのお父さんは、レドンホルの王、ムンドベルクなんだよ。」

「ロビーどのが……！」

ベルグエルムもフェリアルも、飛び上がるほどびっくりしてしまいました。それもそのはずです。自分たちがきゆうせいしゅとしてつれてきた、北の地にただひとり黒のウルファの少年。それがなんと、われらがあるじ、ムンドベルクへいかのむすこ、つまりレドンホルの王子でしたから！

「ロビーが！ 王子さま！」

ライアンもまた、(じつさいに)飛び上がってびっくりしてしまいました。ここまでずつといっしょだった、いちばんの友だちのロビーが、まさか、自分と同じ王子さまだったなんて！(これはやっぱり、運命の出会いなのでしょう。王子さまと王子さまは、ひかれあうのか?)

ですがいちばんびっくりしたのは、やっぱりロビーほんにんです。ロビーはもうびっくりすぎて、声も出ませんでした。その場に立ちつくし、王さまの顔を見ることさえできなかったのです。

そんな中。さいしよに口をひらいたのは、デルンエルムでした。

「すまぬ……。おまえたちには、ひみつにしておったのだ……。きゆうせいしゆどのが、ムンドベルクへいかのむすこ、ロビーベルクどのであるということは、わかっておった。」

デルンエルムは、わがむすこベルグエルムと、そしてその友のフェリアルにむけて、そうつげたのです。

「いったい、どうして……？」

ベルグエルムもフェリアルも、そういつて、デルンエルムにわけをたずねました（そしてもちろん、読者のみなさんも、そのわけを知りたいことでしょう。どうしてロビーのことを、王さまやデルンエルムが、すでに知っていたのか？ そのわけを）。

「それは、わたしから話してきかせよう。」アルマーク王が、ベルグエルムたちにいいました。

「これは、そなたたちはい色のウルファたちが、くにを追われて、このベーカーランドの地へとやってきた、それよりずっと前からの話になる。」

アルマーク王はそういつて、ゆつくりと歩き出し、ぎよくぎへと腰をおろしました。そして「ふう。」と深く息をついて、長い長い、とてもだいたいなひみつの話を、みんなに話してきかせたのです。

それは今から、十数年もむかしのこと……。

「どうしたのだ！」

ろうかのむこうからやってきたひとりの人物が、たおれているふたりの兵士たちに向けより、その身を起こして声をかけました。兵士たちは、その部屋の見張りに立っていた兵士たちでした。その兵士たちが、部屋の前のろうかにたおれていたのです。でも、安心してください。兵士たちには、きずひとつありませんでした。ただ、眠っているだけだったのです。前のぼんに夜ふかしして、トランプをしていたから？ もちろんそうじゃありません。兵士たちはなに者かによって、眠らされていたのです。それがなにを意味するのか？ かけつけてきた人物には、すぐにわかりました。つまり見張りの兵士たちのことを眠らせた、そのふとどきななに者かが、この部屋の中にはいりこん

だということなのです。

たおれていた兵士たちを見つけたその人物は、まっ青な顔をして、部屋の中かけこみました。そしてそこで、かれが見たものは……。

その部屋のまん中には、ふしぎなものがひとつおかれてありました。それは台に乗った、ひとつのまるい、しんじゆのような色をした大きな石で、そのまわりをぐるぐると、銀色の光のうずが取りまいていました。石の大きさは十フィートほどもありました。そしてその石のまん中からは、青くぼんやりとした光が、もれ出していたのです。まるでその石の中に、なにか、とてもとくべつなものはいつているかのように。ですがその石はしんじゆ色にくもっていて、その中を見通すことはできませんでした。

これらのものは、その部屋にはいったその人物にとつては、めずらしいものではありませんでした。なぜならかれは、もうなん回も、この部屋にきたことがあったからでした。それよりもなによりも、かれはこの部屋にはいつてまっさきに、この部屋にふさわしくない、あるものを見たのです。

かれが見た、この部屋にふさわしくない、あるもの。それは物ではなく、ひとりの人でした。つまり見張りの兵士たちのことを眠らせ、この部屋にかつてにはいりこんだ、そのふとどきなしんにゆう者そのもののすがたを、かれはそこで目にしたのです！

「なに者だ！」かれは声を荒げてどなりました。手にした、エメラルド色のすいしよのついたつえをふりかざして、身がまえです（あれ？ このつえって、どこかで見たような……）。ですが相手は、部屋のまん中にある石の方をむいていて、こちらにはまったくきようみがないといった感じでした。

「きさま、ふざけるな！ こつちをむけ！」さらにどなりますが、相手はあいかわらず、つつ立ったままです。怒ったかれは、手にしたつえをふりかざし、そのしんにゆう者にうちかかろうとしました。ですが、そのときとつぜん……。

「ああー、ざんねんだなあ。まさか、こんなのができてるなんて。」

「な、なんだと？」

急にひょうしぬけするような言葉をきいて、つえをふりかざしたかれは、思わずその場に立ちつくしてしまいました。

「なんの話だ？」

そこではじめて、しんにゆう者がこちらをふりかえったのです。背中までのびた、ルビーのような赤いかみ。うす手の赤いセーター。その上から、いんしよ的な黒のガウンを身につけていました。切れ長の、するどい目。そのむらさき色のひとみにまっ正面から見つめられた者は、思わず背すじが、ぞくつととしてしまうはずです。

この人物……。みなさんなら、もうだれだか？ おわかりでしょう。しんにゆう者はまさしく、このアークランドのへいわをおびやかず、悪の魔法使い、アーザスでした！

「あなた……。ムンドベルクさんじゃないみたいだね。」アーザスが、自分にむかっている相手（つまり、つえを持って自分にうちかかってきた人物のことです）のことは見すえながら、いいました。

そのといかけに、相手がこたえます。

「王はおられぬ。東のレスネルにまねかれているところだ。わたしは、しっせいのデルンエルム。るすをまかされておる。」

そう、このつえを持った人物は、デルンエルムでした！（どうりでこのつえに、見おぼえがあるはずですね！ ちなみに、レスネルとは、アークランドの東のはずれにある、小さくこのことでした。）ここは、レドンホール。まだアーザスの手によってほろぼされる前の、レドンホールだったのです。

アーザスはそれをきいて、「ふう。」とため息をつきました。

「剣をもらいにきたんだけど……。あなたにたのんでも、むりみたいだね。ええつと……。デルルーンさんだっけ？ まあいいや。」

アーザスはそういって、ふたたび石の方をむきました。そしてその石を、人さしゆびのさきつぽで、つんとつつつくと……。

ばちちん！

石の表めんから、いなずまのような光がはじけちりました！ アー

ザスのゆびさきからも、ぷすぷすと白いけむりが上がっています（ふつうの人ならゆびがやけてしまうはずです！ でもアーザスは、なんともないようでした）。

「これじゃ、剣は出せないね。まったく、よけいなことをしてくれるよ。ぼくはまだ、起きたばかりで、力が出ないんだ。もう一回、やみの世界にもどるのも、ぜったいいやだしね。」

アーザスはそういうと、ゆびさきを空中にむけて、なにかをえがきはじめました。

「しようがない。また、出なおすよ。ムンドベルクさんには、よろしくいってね。この剣は、もともと、ぼくのものなんだから。ぼくがぜったい、もらうってね。ばいばーい。」

「ま、待てー！」デルンエルムがかけよりましたが、アーザスは空中にひらかれたとびらの中へ、すつと消えていってしまいました。そしてあとには、かすかな白いけむりのおいばかりが、残されているだけとなったのです。

デルンエルムからそのことをきかされたムンドベルクは、深く目をつむりました。そして長いちんもくのあと、ムンドベルクはデルンエルムにむかって、つけたのです。

「その者は、かの魔法使い、アーザスにちがいなかろう。」

「アーザス！ あの者が……！」デルンエルムがびっくりしていいました。

魔法使いアーザス。それはほとんど、伝説の中だけのそんざいでした。はるかなむかし、ここレドンホールからさらに南東にくだったウェステインというくにに、ひとりの若いまじゆつしがいました。かれはしだいにおそるべき力を身につけるようになり、そのために、力あるけんじやたちの手によって、やみの世界の中へといほうされたといえます。それがアーザスでした。

「アーザスは、この剣をほっしている。これがふたたび、かれの手に渡れば、かれの力は、かんぜんなものとなろう。そうなれば、こんどこそ、いかなるけんじやとて、かれをとめることはかなわぬ。この

アークランドは、ほろびることとなるだろう。「ムンドベルクが、デルンエルムにいました。

アーザスがおそるべき力を身につけることとなった、きつかけ。それは、いっぽんの剣でした。その剣は伝説のむかし、このアークランドのふたりの女神のうちのひとり、ライブラが、ウエステインの地におくったものだったのです。ふとしたりゆうから、アーザスがその剣を手にいれ、そしてしだいに、その力の中におぼれていったのだということでした。そしてその剣が、まさに今、このレドンホールのしんじゆ色の石の中に、ふういんされていたのです！（ですからアーザスは、みずから力を与えてくれるこの剣を、ふたたびその手の中におさめるために、ここへやってきました。このアークランドをほろぼすほどの力を、こんどこそ、その手の中におさめるために……）

なぜアーザスの持っていた女神の剣が、ここにふういんされているのか？ それはアーザスとウルファの、深いかんけいにありました。ですがそれは、とてもとても長くて、ふくぎつなお話になるのです。ですから今はただ、アーザスが持っていた剣をウルファの者が受けついでということだけ、知っておいてください（わたしはいずれ、このロビーの物語とはべつの本の中で、その物語のことをみなさんにお話ししたいと思っています）。こういったわけで、この剣の運命は、ウルファのくのであるこのレドンホールのもとへと、たくされることになりました（そしてこのレドンホールでその運命のときをむかえるまでのあいだ、剣は代々、守られつづけることになったのです）。

レドンホールの王であるムンドベルクは、アーザスと剣のかんけいをよく知っていました（この剣をアーザスがふたたび手にしたとき。そのときこそ、このアークランドはほろんでしまうのだということも）。アーザスがやみの世界からふたたび、このアークランドの世界へともどつてきたのなら、かれはかならずや、この剣を取りにやってくるのだらう。おそろしいことですが、今まさに、それがほんとうのこととして起こっていたのです。魔法使いアーザスのふっかつ。それは長年に渡り、レドンホールの王たちが、つねにおそれていたことでした。

「このふういんをといて、剣をどこかへ、かくしてしまえないでしょうか？」デルンエルムが、ムンドベルクにいいました。しかしムンドベルクは、重い表じょうを浮かべたまま、いったのです。

「このふういんは、破ることはできぬ。たとえば、げんぎいのさいこうのけんじや、ノランどのでもな。しかし、そなたの心配の通り、アーザスはかならずや、このふういんを破るであろう。かの者の、この剣への思いいれは、はかり知れない。」

「では、どうすれば……？」デルンエルムはおどろいたようにそういつて、王さまの方
を見ます。

「この剣を手にするための方法は、ひとつだけだ。」ムンドベルクがいいました。「剣は、影の世界にふういんされている。そのために、われら、この世界の者には、このふういんを破ることができない。だが、わたしが、影の世界の者となれば……」

「まさかそのような！ むちやにございます！」デルンエルムがすべてをさつしたかのように、ムンドベルクにいいました。

影の世界の者となる。それはもはや、人ではなくなるということでした。生きてはいましたが、半分死んだようになって、きおくも力もすべて失われてしまうのです。からだは肉体と影とのふたつに分かれ、その影の方は、しばらくはいしきをたもって行動することができましたが、そのそんざいはひじょうにか弱いものとなり、もはや剣を持って戦うことすらできなくなってしまいました。そしてやがては、かんぜんにやみの中へと消えていつてしまつて、さいごにはただ、自分がない者かもわからないうなじようたいたとなつた、ぬけがらのよなからだの方ばかりが残されるのみとなるのです（まさきに、たましいがぬけたようなじようたいたになるということです）。

影の世界の者となれば、同じ影の世界の中にあるこの剣を、ふういんの中から取ってくることができました。ですがお伝えしました通り、そのさいごには、おそろしいけっかが待っていたのです（ムンドベルクはそれでもかまわないという強いかくごを持って、デルンエルムに、影の世界の者になるといいました）。

「それしか、方法はないのだ。」ムンドベルクはそういって、剣がふういんされているしんじゆ色の石の前へと歩みよりました。そしてムンドベルクは、デルンエルムの方をふりかえり、こうつげたのです。「わたしはこれから、ノランどののところへゆく。ノランどのなら、影の世界の者となる、そのわざをさずけてくれることだろう。あんずるな。それは、さいごのしゆだんだ。わたしは、さいごのさいごのときまで、このくにを守る。だが、わたしがさいごのつとめを果たしたあとは、デルンエルムよ、そなたに、ばんじをまかせるぞ。」

「それならば、わたくしが影になります！」デルンエルムがいいました。「へいかには、いつまでも、くにたみの上にお立ちただかねばなりませんぬ！」

デルンエルムはそういって、ムンドベルクにつめよりました。しかしムンドベルクは、静かな言葉で、デルンエルムにいうばかりだったのです。

「デルンエルム、そなたの気持ちはわかる。だが、これは、このレドンホールの王のつとめ。レドンホールの王は、代々、この剣と運命をともにしてきたのだ。王か、そのちよくせつの子でなければ、この剣をこのふういんの中から持ち出すことは、かなわぬ。それは、そなたもわかっておろう。」

「へいか……」

デルンエルムはなみだをぼろぼろこぼして、その場にくずれこみました。そう、ムンドベルクのいう通り、剣はレドンホールの王か、その子がい、この運命の石の中（つまり影の世界の中）からそとに出すことができないようになっていたのです（これはこの剣がふういんされたとき、そのようにけつていづけられたことでした。そのりゆうはさきほどわたしがふれた、このロビーの物語とはべつの、アーザスとウルファの遠いむかしの物語の中で語られることになるはずです）。ですから、たとえ影の者になったとしても、自分に剣を持ち出すことは、かないませんでした。デルンエルムもほんとうは、そんなことはわかっていたので（いつの日か、アーザスがふたたびこの世界にあらわれたとき。影の世界の者となって、アーザスよりさきにこの

剣を手にいれ、しかるべき運命のときまでこの剣を守る。これがレドンホールの王に代々受けつがれてきた、しめいだったのです。ムンドベルクは、みずからにかせられたその重いしめいのことを、よくわかっていました。ふっかつしたばかりのアーザスに剣を取り出せないようにするためには、これほどまでに強力なふういんが必要でしたが、それもすべて、レドンホールの王の、その重いしめいがあったからこそだったのです。まさにこれは、とうとき、ぎせいでした。

そしてデルンエルムは、剣を取り出せるのはレドンホールの王か、その子のみであるということは知っていましたが、王のその重いしめいのことについては、ムンドベルクからも、あえてデルンエルムには知らされていなかったのです。それはデルンエルムによけいな心配をかけさせまいとする、ムンドベルクのはいりよからでした。

ムンドベルクはおだやかにほほ笑みながら、自分もその場にしゃがみこみました。そしてデルンエルムの手をしつかりとにぎって、こういったのです。

「わたしはまだ、ここにいるではないか。わたしを、そうかんたんに死なせるでない。さあ、したくだ。わたしには、まだまだ、しごとがあるのだからな。」

デルンエルムはこぶしをかたくにぎりしめ、胸の前におきました。そして頭を深々と下げて、このすばらしき主君に、心からの思いをおくったのです。

「へいか……。わたくしは、へいかにおつかえできたことを、ほこりに思います。まこと、わたくしは、しあわせ者にございます……」

「それが今より、十五年ほどもむかしのことだ。」

ぎよくぎに腰をおろしたアルマーク王が、静かにいいました。みんなはくいいるように、アルマーク王の話にききいていました。ベルグエルムもフェリアルも、はじめて耳にするレドンホールのできごとでした。このできごとのことは、ムンドベルク王からデルンエルムに、かたく口どめされていたのです。剣とアーザスのこと。自分の運命のこと。それをみんなに伝えたところで、いたずらに、不安をつの

らせてしまうだけだからと。ムンドベルクはいつも、くにの者たちのことを考えていました（ですからデルンエルムは、ムンドベルクのその意志をかたく守り、むすこのベルグエルムにさえもこのことは話さなかつたのです。ベルグエルムはそのとき、まだまだ剣のうでもみじゆくな、若者でした。もし、アーザスがムンドベルクの身をおびやかしているという、このじじつのことを話していれば、ベルグエルムは「アーザスのところへ乗りこむ！」などともいいかねなかつたことでしょう。むかしはベルグエルムも、むちやをるところがあつたのです。

そして同じく、きゆうせいしゆであるロビーがムンドベルクのむすこであるということも、こんかいのこのきわめてたいせつな旅のにんむをぶじに終えるまでは、ベルグエルムたちにも話しませんでした。今からむかえにいくきゆうせいしゆが、自分たちのあるじであるムンドベルク王のむすこ、ロビーベルク王子だと、かれらがさきに知つてしまえば。かれらはわれも忘れて、主君のことを守るために、むちやなことをしてしまうともかぎらなかつたでしょう。このだいな旅をゆく者には、あらゆるじたいに考えをめぐらせることのできる、れいせいちんちやくな心がつねにもとめられていたのです。よけいなことを考えさせて、はんだん力をにぶらせてしまうわけにはいきませんでした。ですからデルンエルムも、アルマーク王も、ベルグエルムたち四人の騎士たちには、ただ「いい伝えのきゆうせいしゆどのをつれて帰ってきてほしい」とだけ伝えたのです。

「それから、レドンホールにはさまざまのひげきがおそつた。さいしよのひげきは、ロビーベルクよ、そなたの身に起こつたのだ。」

アルマーク王の言葉に、ロビーはどきんとしました。ついに王さまの口から、自分のことが語られようとしていたのです。ベルグエルムもフェリアルも、ふくぎつな表じようを浮かべたまま、ロビーの方を見やっていました。ライアンも、ここにきてから数えて二十こめのエリル・シャンディーンやきに、ぱくつかぶりついて、しんけんまなぎしで、ロビーのことを見つめていました（あんまりそうは見えないかもしれないませんが、このときのライアンは、いたってまじめでし

た)。

「アーザスがレドンホールにあらわれた、そのとき。ムンドベルクのさいくん、マイアは、身ごもっていた。ムンドベルクは、そのわが子が、アーザスの手にかかることをおそれたのだ。生まれてくるわが子は、このレドンホールのあとつぎとなる。剣の運命をも、また、背おわなければならぬ身。アーザスは力をたくわえ、かならずや、レドンホールにもどってくる。そのとき、自分が影となり、剣を遠くへかくすことができたとしても、アーザスはその剣をさがすために、わが子をりようしようとするのだらう。レドンホールの王の子ならば、剣の力とも、深くつながっている。そのつながりの力をもつてすれば、剣のある場所も、アーザスにはわかってしまうからだ。そのためにもムンドベルクは、わが子のそんざいをかくしておかなければならなかった。いずれおとずれる、運命のときまでな。おうひマイアは、こうして、山里の人知れぬ場所にうつつた。そしてそこで、わが子をうんだのだ。それが、ロビーベルク、きみなんだよ。」

「マイア……。ぼくの、お母さん……」

ロビーは思わず、そう口にしました。自分のお母さん。それはレドンホールのおうひ、マイアという人だったのです。

「ぼくのお母さんは……。それから、どうなったんですか？ 今、どこにいるんです？」

ロビーは王さまに、くいいるようにたずねました。ロビーがいちばん知りたかったこと。それは自分の家族が今、どこでどうしているのか？ ということでした。

ですがアルマーク王は、けわしい顔をしたまま、ロビーのひとみを見すえて、こうつげたのです。

「ロビーベルク。そなたには、つらいことだ。マイアは、きみをうんでから、ほどなくして、この世を去った。びようきのためにな。さいごまで、そなたの名をよび、気にかけておられたそうだ。」

「そんな……」

ロビーは、がくぜんとしました。ひざの力がぬけ、がくりと、地面にくずれてしまいそうになりました。フェアリアルとライアンに両が

わからささえられて、ようやく、立っていることができていたのです。

「ロビーベルクさま……。マイアさまは、あなたさまのことを、とてもほこりに思われておりました。みずからのぶんまで、強く、生きてほしいと……。どうか、しあわせになつてほしいと……」

デルンエルムがロビーにいました。ですがデルンエルムは、さいごまで、いうこともできなかったのです。かれは顔をおおって、声を上げて泣いてしまいました。ベルグエルムが歩みより、その肩にそつと手をおいて、なぐさめました。

「マイアおうひについては、びょうきのちりょうのため、くにをはなれるときいておりました。」ベルグエルムがだれにいうともなく、つぶやきました。「そのような、深いりゆうがあたりだったとは……」

アルマーク王が、ベルグエルムにうなずいてから、つぶやきます。

「それからレドンホールにて、マイアおうひは手あつくほうむられた。だが、そのときも、うまれた子どものことについては、くにたみにもふせられたのだ。アーザスに子どものそんざいが知られてしまうことを、おそれてな。」

アルマーク王のいう通り、ムンドベルク王の子ども（男の子でしたので、王子です）がうまれたということは、レドンホールのくにたみ、そしてベルグエルムとフェリアルの子たりでさえ、知らないことでした。ただひとりそのことを知っていたのが、デルンエルムだったので。デルンエルムはたびたび、マイアおうひのもとをおとずれ、そのおせわをしていました。男の子がうまれたときも、ロビーベルクと名づけられたときも。そしてマイアおうひがなくなったときにも、デルンエルムは、そのそばについていたのです。おうひがなくなったとき……。デルンエルムがどんなにつらい思いでいたことか……。かれのなみだは、そのことをよく、みんなの心に伝えていました。

「それからときがたち、力をつけたアーザスの悪いうわさが、このアークランドのいたるところでささやかれるようになった。そしてそのころから、わがベーカールランドの宝、青き宝玉のかがやきも、じよじよにうすれていくようになったのだ。」

「よこしまなる、赤いキューブ……」ベルグエルムがこぶしをにぎり

しめて、そうつぶやきました。ロビーの横にいるフェリアルも、歯をぎりぎりとかみしめて、怒りをあらわにしていました。いったい赤いキューブとは？ なんのことなのでしょう？

「さよう。」アルマーク王がこたえて、いいました。「アーザスはついに、このアークランドの女神さえもぼうとくする、きんだんのおこなに出た。それが、赤いキューブだ。わがくにの宝、青き宝玉と同じ、もうひとつの宝玉を、アーザスは作り出そうとしている。それがかんぜんなものとなれば、そのときこそ、このアークランドは、しんのやみにつつまれてしまうことだろう。アーザスのねらいは、まさにそれなのだ。」

赤いキューブ……。キューブとは、さいころのようなかたちをした、四かくい石のことです。ベーカークランドの青き宝玉も、じつはそれと同じかたちをした、石でした（ちなみに、宝玉というのはほんらいまるい石のことをさしますが、ここでいう宝玉とは、たんじゅんに、宝物の石という意味で使われていたのです。ですから、四かくても宝玉でした）。宝玉の大きさは、一フィートくらい。そんなに大きいというものでもありません。その石はみずからのエネルギーで、空中に浮かんでいて……。そう、それと同じものを、みなさんは見たはずです。アーザスが、やみにとらわれるムンドベルクと話していた、あのぶきみな暗い広間。その広間のまん中に浮かんでいたあの赤い石こそ、アーザスが青き宝玉のことをまねして作り出した、きんだんの赤いキューブでした！（アーザスは、ことあるごとに、その赤いキューブのことを持ち出し、そのおそろしい力をアークランドのいたるところで見せつけていました。アーザスのほんとうのねらいはわかりませんが、これはどうやら、たんに自分の作ったキューブの力を、みんなにじまんだかかったからのようです。みなさんもごぞんじの通り、アーザスはほんとうに、子どもみたいなのです。ですからアーザスとその赤いキューブのことは、このアークランドの多くの者たちが、知っていることでした。

ちなみに、この赤いキューブはよこしまなるエネルギーをどんどんとたくわえて、大きくなっていたのです。みなさんが見たのは、もう

ずいぶん大きくなったあとのものでしたよね。ほんとうに、おそろしいかぎりです。」

「キューブの力をかんぜんなものとするために、必要なもの。それこそが、レドンホールに伝わる、いっぽんの剣なのだ。アーザスは、それがために、剣をほった。剣がアーザスの手に落ちれば、このアーランドは、ほろびる。ムンドベルクはそのために、わが身をぎせいにして、剣を守ったのだ。」

アルマーク王の言葉に、デルンエルムはまた、大つぶのなみだをこぼしました。アルマーク王のいう通り、ふたたびあらわれたアーザスから剣を守るために、ムンドベルクは、そのさいごのつとめを果たすこととなったのです……。

「アーザスがワットと手をくみ、レドンホールへせめいったのが、今から四年前のことだ。ムンドベルクは、ノランからさずかつたきんだんのじゅつをもちいて、わが身を影の世界の者とした。そして影となったムンドベルクは、剣のふういんの中へとはいりこみ、取り出したその剣を持って、北の地へとむかったのだ。その地に、その剣をかすすためにな。」

ロビーは、はっとしました。まさか……、その剣って……？

「そうだ、ロビーベルク。そなたのおびている、その剣。それこそが、ムンドベルクが北の地へとかくした、レドンホールのせいなる剣、アストラル・ブレードなんだよ。」

なんてことでしょう！ かなしみの森でスネイルからもらった、この剣。それがそんなにも重大なやくわりを持つ、宝物の剣だったなんて！

スネイルの話……、それが今、ロビーと仲間たちの心の中に、よぎっていました。

まっ黒な馬と、まっ黒な騎士だったよ……。

まるで、だんろにかかったやかんの湯気みたいに、ゆれてるんだ……。

そう、あのスネイルの見たなぞの騎士。それこそが、影の世界の者となり、かなしみの森まで剣をはこびにやってきた、ムンドベルクほんにんだったのです！（そのとき乗っていた馬は、ノランがムンドベルクにさずけていた、影の馬でした。ムンドベルクは「もし影の者になったのなら、この馬に乗って、剣をはこぶといい。」とノランにいわれていたのです。影になってしまったのなら、もうふつうの馬に乗ることは、できませんでしたから。この影の馬は、ふだんは黒いし、しようのかたちをしていて、ムンドベルクはそのすいしやうを、ずっとだいに持っていました。）

「その剣は、アーザスに力を与えるだけのものではない。それを持つ者に、悪を破る、大いなる力をさずけるのだ。」アルマーク王がつづけます。「その剣の力は、女神の力。そしてその剣をあつかえるのは、レドンホールの、王の血すじの者のみ。そう、ロビーベルク、そなたには、その剣をあつかうことのできる、力があるのだ。」

これまでの旅のさまざまなところで、ロビーと仲間たちのことを助けてくれた、剣の力。それらのなぞが、これでようやく、とけるのです。

この剣はアストラル・ブレードといって、そのむかし、アークランドのふたりの女神のうちのひとり、ライブラが、アークランドの人々に与えたものでした。この剣を持つ者は、剣からさまざまな力をさずかるのです。そしてこの剣の力をひき出すことができるのは、この剣と運命をともにしてきた、レドンホールの王の血すじの者のみだといいました（これで今まで、この剣の力をロビーだけしか使えなかったそのりゆうも、あきらかになりました。そしてこの、「剣の力を使えるのはレドンホールの王の血すじの者のみ」という運命についても、はるかなむかしに、この剣がふういんされたときに、そのようにけつていづけられたことだったのです。）

ちなみに、シープロンドのメリアン王も、もちろん女神のつるぎアストラル・ブレードのことは知っていましたが、その剣がどんな見た目であるのか？ ということなどについては、メリアン王もふくめ、

だれにも伝わっていないことでした。なにしろこの剣はもうずっと、レドンホールの石の中にふういんされつづけておりましたし、しかもこのひみつの剣のそんざいのうわさを、世の中に広めないようにするために、せいけくなスケツチなども、なにひとつ残されてはいませんでしたので、それもむりもないことだったのです。つまりこういったわけで、メリアン王はロビーの持つこの剣のしよたいのことに、気づくことができなかつたというわけでした。剣そのものにも、この剣が女神の宝物の剣なのだということをあらわすしるしなどは、どこにもありませんでしたから。

この剣の持つさまざまな力。まず悪い心を持った生きものが近づくと、それを感じ取って、剣は青く光ってその危険をしらせませす（ただし生きものにかぎりますので、相手がブリキの兵士やおぼけなどの場合は、光りません。さらに、ただ危険な相手だというだけでは、やっぱり剣は光りません。この剣は、ちのうを持った相手が悪だくみを考えている場合にだけ、光りました。ですから、いくら危険な相手であつたとしても、野生の動物などに対してはこうかがなかつたのです）。ふつうの剣では切れない、おぼけやけむりのようなかいぶつであつても、切ることができました（はぐくみの森の地下いせきで夜のかいぶつのことを切つたり、モーグだつたころのロザムンディアでは、アルミラの手下の影おぼけたちを切つたりしましたよね）。

さらにこの剣は、その持ちぬしの心にも、とくべつな力をはたらかせるのです。これまでの旅の中で、ロビーがあらかじめ、待ち受ける危険を感じ取ることができた場面がありました。岩のかいぶつガイラルロックたちが、わなを張って待ちかまえていたときや、セイレン大橋での黒騎士たちのしゅうげき。さらに、はぐくみの森で、チップとその仲間たちがロビーたちのことをわなにかけるべく、そうだんをしていたときなどです。これらの危険を感じ取ることができたのも、じつはみんな、この剣のおかげでした。この剣を持つ者は、自分に対して悪いことをしようとしている者の考えを感じ取り、あらかじめ、その危険を知ることができるようになるのです（ただしこれも、相手が生きものの場合にかぎりました。ですからアルミラのブリキの塔

で、立ちならんだブリキの兵士たちがおそつてくるということは、ロビーにも知ることができなかったのです。

そして剣は、持ちぬしの願いを感じて、あかりのかわりに光ったり、おそろしい敵に対しては、とんでもなく強力なはずまを放つて、こうげきしたりもしました。セイレン大橋の上でワツトの黒騎士をつらぬいた、あのおそろしいまでの剣の力。それは危険にさらされた仲間たちを心から助けたいという、ロビーのその強い強い気持ちにこたえたものだったのです（その力はとても強力なものでしたが、あのとキベルグエルムがロビーにいった言葉の通り、けつしてよこしまな力などではありませんでした）。

ですがこの剣の持つ、もつともたいせつな力。それはこの剣が、悪をうち破る、女神の光の守りの力を持っているということ。これはベーカーランドの青き宝玉の力と、同じ力でした。この剣の力を持つ者は、悪しきやみの力から守られ、アーザスのやみの力に対しても、たいこうすることができたのです。ですからアーザスほどの者であっても、この剣を持つ者には、かんたんには手出しをすることができません。おそろしいやみの力を持つアーザスに立ちむかうためには、この力はぜったいに、必要ふかけつなものでした。

そしてさいごに、もうひとつの重要な力。この剣は、青き宝玉、そして、赤いキューブ、そのどちらの石に対しても、力を与えることができるということ。それは悪い力などではありません。もともとこの力は、アー克蘭ドのふたりの女神たち、リーナロッドとライブラが、「宝玉と剣、ふたつの力をあわせて、くにをへいわにおさめてもらいたい」という願いを持って、人々に与えたものでした。ですがへいわのために使ってもらいたいと願われていたその剣の力が、今のアーザスにとっては、じつにみりよく的なものとなってしまっていたのです。

「剣の持つ力を使えば、アーザスは、みずからの作ったキューブに力を与え、かんぜんなものとすることができる。そしてアーザスは、その力をもって、わがベーカーランドの青き宝玉の力を、なきものにせんとしているのだ。」アルマーク王が、しんこくな顔をしていいまし

た。

「これが、アーザスの手に渡つたら……」ロビーが剣をにぎりしめて、つぶやきました。おそろしいそうぞうが頭の中をよぎり、ロビーは思わず、ぞくつと背中をふるわせてしまいました。

「これが、レドンホールに起こった、ひげきのできごとだ。わたしはこのことを、ムンドベルクほんにんからきいた。レドンホールがアーザスの手に落ちた、その日。影となったムンドベルクが、このわたしのところへとやってきたのだ。剣を持ってな。」

そう、ムンドベルクは、「影となり、剣をはこぶ」そのつとめの前に、ここエリル・シャンディーンの地をおとずれていたのです。ムンドベルクは自分のいしきがかんぜんにやみに飲みこまれてしまう前に、友であるアルマーク王に、すべてを話しておきたいと思いました。剣のこと、くにのこと。そしてむすこであるロビーのことを、くれぐれもよろしくたのみたいと。アルマークはムンドベルクにさいごのわかれをつけ、その身をだきしめようとなりました。ですがアルマークのその両手は、影となったムンドベルクのからだを、ただすりぬけるばかりだったのです（そしてムンドベルクはそのあと、シープロンドのメリアン王のところにも立ちよっていました。ムンドベルクとメリアンは、やはり、深い友じょうでむすばれておりましたから。ですけどムンドベルクは、メリアンにちよくせつ会って話すことは、しませんでした。このじじつを、ようきで明るいせいかくのメリアンにいうのは、とてもしのびないと思つたからです。ですからムンドベルクは、さいごに、遠くから友であるメリアンのげんきなすがたを見とどけると、そのまま、北の地へとむかいました）。

「城が落ちる、そのまぎわ。へいかは、影となるその前に、わたくしにさいごのごめいれいをくだされました。」デルンエルムがいいました。『もはや、これまで。レドンホールは、やみに落ちることとなろう。だが、すべてのきぼうが、ついでたわけではない。デルンエルムよ、そなたはひとりのがれて、すぐにレスネルへゆけ。えんせいしているベルグエルムたちとともに、そのまま、ベーカーランドまで、すくいをもとめにゆくのだ。そこで、ときを待て。わがむすこロビーベ

ルクが、いい伝えのきゆうせいしゅとして、ベーカーランドへとやってくる、その日までな』と。」

レドンホールに伝わる、ひとつのいい伝え。「世界がやみにつつまれるとき。きゆうせいしゅがあらわれる」。それがわがむすこ、ロビーベルクであるということ、ムンドベルクはそのとき、すでに知っていました（なぜ知っていたのか？ ということについては、つぎの章で、ある人物の口から語られることになります）。ですから剣は、ロビーがそのときかくれ住んでいた、かなしみの森の中へと、ひっそりとかくされたのです（それが、スネイルのところでした。そして、ロビーがなぜかなしみの森に住むようになったのか？ ということについても、つぎの章であきらかになるのです）。

ちなみに、ロビーの住んでいる森が、かなしみの森という名まえの森なのだということを、そのときのムンドベルクは知りませんでした。ロビーはあるりゆうがあつて、北の地にかくれ住むことになりましたが、それがぐたい的にどこなのか？ ということについてまでは、ムンドベルクも知らなかったのです。ですがだいたいの場所はわかっておりましたし、なにより自身の持つそのせいなる剣の力が、同じ剣の力を持つロビーのところまで、みちびいてくれました。ですからロビーのいどころを、ムンドベルクは北の地の住人のだれにきくまでもなく、すぐにつきとめることができましたのです。

ですがアルマーク王の方は、だいたいの場所しか知ることができていないままでしたので、ベルグエルムたちにロビーのいばしよをくわしく伝えることができず、ベルグエルムたちはシープロンドの人たちの協力のもとに、ロビーのことをさがしたというわけでした。ロビーのいどころを知っておくために、影の世界の者となったムンドベルクに同行してロビーのところまでいっておく、というようなことも、できませんでしたから。影の世界の者となったムンドベルクのからだは、この世界と影の世界のあいだとをゆらゆらめくようなそんざいとなり、そのためこの世界の者たちには、そのすがたを追っていくようなこともできなかつたのです。たとえいつしよについていこうとしても、すぐに、そのすがたを見失ってしまうことでしょう。ムン

ドベルクの声すらも、こちらの世界には、まんぞくにはとどきませんでしたから。

じゃあ、そのあとでロビーのいどころを、みんなであらかじめ、はっきりとしらべておけばよかったんじゃないの？　って思われる方もいるかもしれませんが、それにはりゆうがありました。

まず人をさがすようなときには、人さがしのための魔法の力が使われることが多いのですが、その魔法でロビーのことをさがすことは、むりでした（それについては、これまた、つぎの章で語られることになりますので、もうちよつとだけお待ちください！）。となれば、あとは人の手によってロビーのことをちよくせつさがすしかないわけですが、それもやっぱり、ベーカーランドの人たちは、あらかじめさがしておくようなことはしなかったのです。

それはつまり、北の地にただひとりだけのおおかみであるロビーに、人々の必要以上のよけいな目がむいてしまうことを、防ぐためでした。ただでさえ、からだが大きくて目立つおおかみです。よけいなことをして、ロビーにさらに人々の目が集まってしまうようなことは、なんとしてもさげなければなりませんでした。

ベーカーランドの人たちが、いくらただの旅人のふりをしてロビーのいどころをつきとめようとしたとしても、土地の住人たちのじょうほうなくしては、ロビーのことを見つけることは、とてもふかのうです。北の地の住人たちに、それとなくでもおおかみのいどころのことをきいてまわったりなどすれば、住人たちの目は、どうしても、その目立つおおかみの方へとむいてしまうことになるでしょう。どこでよけいなうわさが広がってしまうとも、わかりません。それをさけるためにも、アルマーク王たちはさいごのときがくるまでは、ロビーのことはかのうなかがり、そつとしておこうときめました。さいごのときがくれば、あるていど大きさがしたとしても、うわさが広まる前に、ロビーのことをベーカーランドまでつれてくることができましたから。もちろん、ワットの者たちにはぜつたいに見つからないように、注意してさがすことがだいじでしたけど。

もうひとつ。もしロビーが北の地からはなれて、どこかよその場所

にうつってしまったとしたら？　それもないとはいいきれませんが、しかし、もしそうだったとしても、わかるようにはなっていました。

じつはロビーが北の地にいるかぎり、たとえエリル・シャンディーンの青き宝玉の力をもってしてもそのくわしいどころを知ることにはできませんでしたが、剣の力、すなわち宝玉の力を持つロビーがその地をはなれるようなことがあった場合においては、その力を感じ取って、青き宝玉がそのことをしらせるようになっていたのです（じつにべんりな宝玉です）。ですからアルマーク王たちも、ロビーがずっと北の地に住みつづけているということを知ることができていたというわけでした（もしどこかへいってしまふようなことがあれば、魔法も人手も、そうどういんして、全力でつれもどす必要がありましたけど……）。

近いしうらい。わがむすこロビーベルクが、いい伝えのきゆうせいしゆとして、この剣を持って、ベーカールランドへとあらわれる……。そしてその通りに、今日ここに、ロビーがやってきたのです（ここでもうひとつ、説明を加えておきますと……、ロビーがきゆうせいしゆとしてベーカールランドへとやってくる、その「とき」というのは、ふたつのりゆうが重なってつけていづけられていたことでした。まずはロビーが、きゆうせいしゆとしての、そのたしかかな力を持つようになったということです。それはきゆうせいしゆとして、剣の持つその大いなる力を使いこなせるねんれいにまで、成長したということでした。剣の力を使うことは小さなころからできましたが、きゆうせいしゆとして剣の力をじゆうぶんに使いこなせるようになるためには、それにふさわしいねんれいになるまで、待つ必要があったのです。

そしてもうひとつのりゆう。それこそが、ロビーがきゆうせいしゆとしてのたしかかな力を得たという、そのちよくせつのしらせを、世にしらしめるものでした。それは、青き宝玉によるものでした。宝玉と剣は、ふたつでひとつ。ロビーがきゆうせいしゆとして剣の力を使いこなせるようになったとき、宝玉もまた、それにこたえたのです。青き宝玉は、今がまさにきゆうせいしゆのことを世に送り出すときなのだという、あいずをしめしました。それは宝玉の中に、たしかなる

しとしてうつし出されたのです（じつにべんりな宝玉です）。ノランからそのしるしのことを伝えられていたアルマーク王は、こうして、運命のときを知ることができました。そしてアルマーク王は、ベルグエルムたちに、ロビーのことをむかえにいくようにと伝えたのです。ところでこれはだいじなことです。が、デルンエルムの言葉にもありました通り、四年前、レドンホールがアーザスにせめほろぼされたとき、ベルグエルムとフェリアルはほかのはい色ウルファの仲間たちとともに、レドンホールより東のくに、レスネルまで出かけていました。そのころレスネルのくには、東のやばんなくにぐにからこうげきを受けていました。そのためレドンホールから、ベルグエルムたちははい色ウルファの兵士たちが、手助けしにいらっていたのです。そしてこれが、はい色ウルファの者たちと黒ウルファの者たちとの運命を、大きく変えてしまうことになりました。

黒のウルファの者たちはレドンホールの守りのために、くに残っていました。そしてそんなかれらのことを、思いもかけない、おそろしいひげきがおそったのです。悪の魔法使いアーザスのひきいる、黒の軍勢のしゅうげきでした。そのなきけようしゃのないこうげきに、レドンホールはかいめつ的なまでのひがいを受けました。黒のウルファの兵士たちは、まことけんめいに戦いましたが、アーザスとワットの連合軍は、その数で、レドンホールの兵力をはるかに上まわっていたのです（せいかくにいうと、レドンホールの軍勢は、その三ばいの数の敵の兵士たちを相手に戦わなければならなかったのです）。

こうして、レドンホールの王城、フレイムロンドは落ちました。ムンドベルクはアーザスの配下となり、黒のウルファの兵士たちはひとり残らず心をうばわれ、まるであやつり人形のようなじようたいとなりました。敵の手の中に落ちることとなったのです。ベルグエルムたち、はい色のウルファたちが助かったのは、ほんとうにぐうぜんのできごとでした。今ベルグエルムやフェリアルたちは、こうして、ベーカーランドの白の騎兵師団に加わってかつやくしてはおりますが、ひとつまちがえれば、ほかの黒ウルファの仲間たちとともに、やみにとらわれ、黒の軍勢のいちいんとして、取りこまれていたかもしれない

のです……。なんておそろしいことなのでしょう！ ベルグエルムたちが今、どれほどの思いでいるのか……。？ 読者のみなさんの心には、かれらのその痛いほどの思いが、とどいているはずですよ。

「教えてください、王さま。ぼくの、なすべきことを。」

ロビーは、しゅんと背すじをのぼして、王さまにたずねました。そのすがたには、いつさいのまよいも感じられませんでした。数々のしんじつ。自分のこと。自分の両親のこと。そして、おそろしいほどの運命……。それらのことを知ってなお、ロビーのかたいけついは、みじんもゆらぐことはなかったのです（いえ、むしろそのぎやくです。ロビーは自分にかせられた重すぎるほどの運命のことを知って、なおのこと、そのけついをたしかなものとなりました）。

アルマーク王はロビーのそのすがたを見て、たしかに思いました。まちがいようもない。わたしの目の前にいるこの少年こそが、まさしく、このアークランドのきゆうせいしゆなのだ。

「ロビーベルク。わたしは、そなたをほこりに思う。わたしだけではない。このアークランドの、ぜんなる者たち、みな、同じ思いを持つことだろう。」アルマーク王はそういつて、ぎよく立ち上がりました。そしてもういちどロビーのもとへ歩みより、これからのさいごの旅のことについて、ロビーにつげたのです。

「そなたはこれより、そなたの運命の中へとはいりこまなければなりません。そしてそれは、同時に、このアークランドの運命の中へ、はいることでもある。」

ロビーは王さまに、しつかりとうなずいてみせました。そんなロビーのことを、ライアンがちらりと見やります。

アルマーク王がつづけました。

「さいごの戦いにおいて、アーザスは、そのまがまがしき、さいごのやみの力をふるってくるといふ。かねてあんじていたおそれが、今、げんじつのものとなろうとしているのだ。その力が、どんなものであるのか？ まださだかではないが、われらのきぼうをうちくたく、おそるべき力となるのは、いうまでもないことであろう。今のわれらに、アーザスのその力にうちかつよゆうなどは、残されてはいない。

ざんねんなことだがな。もはや、このアーケランドをすくうためには、今のアーザスにそのすべての力を与えているとされる、赤いキューブを、はかいするいがいに道はないのだ。

「そのために、そなたはアーザスの住まう怒りの山脈へとゆき、そこで、アーザスの持つ赤いキューブを、はかいしなければならぬ。キューブの力は、アーザスのからだそのものに、深くつながっている。キューブをはかいすれば、そのとき、アーザス自身の身も、ついでることとなるだろう。」（このアーザスとキューブの力のかんけいのことについても、アーザスはすべて、みずからの口でみなにふれまわっていました。アーザスはほんとうに、子どものようにみずからの力のことをじまんし、そしてみずからのその力のひみつのことまでをも、みんなにべらべらとしやべっていたのです。これは、たとえそのことが知られたとしても、自分はだれにも負けない力を持っているのだという、自信のあらわれからのことでした。

「ぼくの力のひみつを知ったとしたって、きみたちには、ぼくのことをとめられないでしょ？ どうぞ好きなときに、ぼくをやっつけに、ぼくのところまできてよ。ぼくはいつでも、自分の家にいるから。」アーザスはそういって、いつも、みんなのことをあおり立てていたのです。

そして大けんじやノランほどの者であれば、アーザスのその力のひみつのことなどについては、アーザスの口から説明されなくとも、みずからつきとめることができました。アルマーク王たち、ベーカールンドの者たちは、こうして、アーザスと赤いキューブの力のかんけいのことなどについて、知ることができていたのです。）

怒りの山脈……。それはシープロンドのくにのふもとを流れるセイレン河の、そのはるかな上流につらなる、けわしい山々のことでした。

「怒りの山脈……」ロビーが思わず、つぶやきました。

「怒りの山脈ー」ライアンも思わず、いいました。

ライアンにとって怒りの山脈というのは、とくべつな名まえでした。かれのあいするセイレン河。その河をめちやめちなものにし

た、そのげんいんを作ったのが、怒りの山脈。そこに住む、アーザスだったのです。怒りの山脈でおこなわれている、よこしまなるじっけんや、数々の悪いおこない。それをかれらシープロンたちは、どうすることもできないでいました。そしてそれ以上に心を痛める、ひげきのできごと……。怒りの山脈のふもとの地、セイレン河の上流の地で、どんなひげきが起こったのか？ それは読者のみなさんも、よくごぞんじでしょう。カピバルたちのくにに起こった、あのおそろしいひげきのことを……。

王さまがさらにつづけます。

「その剣、アストラル・ブレードは、宝玉に力を与えることができる。だが、それと同時に、その剣には、もうひとつの、きんだんの力がある。それは……。宝玉をはかいする力だ。」

宝玉をこわす力！ この剣に、そんなおそろしい力が……！

「アーザスの持つ赤いキューブ。それをはかいてできるのは、剣の持つ、その力のみ。そしてその力をひき出せるのは、ロビーベルク、きみしかない。アーザスのやみの力にあらがい、キューブをはかいてきるのは、きみだけなのだ。」

これこそが、きゆうせいしゅロビーに与えられた、大いなる力でした。剣の力をひき出すことのできる力。それはロビーのお父さん、ムンドベルクも持っていました。この力は代々、レドンホルの王（あるいは女王）の血をひく者のみに、ひきつがれてゆく力だったのです。ムンドベルクが影となり、アーザスの手に落ちてしまった今、その力を持つ者は、もはやロビーだけでした（いえ、もうひとり、剣の力をひき出すことのできる人物がいます。アーザスです。この剣はむかし、アーザスの手にありました。アーザスはそのとき、剣のこゝろを使ひこなす、その力を得ていたのです）。

ロビーは、剣のつかをぎゅつとにぎりしめました。ぼくに与えられた力……。ロビーにとって、自分にどうしてそんな力があるのか？ ということなどは、もはやどうでもいいことでした。今はつきりしていることは、自分がやりとげなければならない、だいじなことがあるということなのです。

「わかりました。」

ロビーはアルマーク王の顔を見て、しっかりとこたえました。そしてアルマーク王もまた、しっかりとロビーにうなずくと、ロビーのその手を取っていったのです。

「とらわれの身になっているムンドベルクを、助けてやれるかもしれん。かれは、いつも、アーザスのそばにしている。怒りの山脈に
いるはずだ。」

「お父さん……」ロビーは口びるをかみしめて、いいました。

「影となった者は、もう、もとにもどすことはできない。だが、ロビーベルク、きみの声ならば、たしかに、かれの心にとどくはずだ。たとえ、もとのすがたにはもどれなくともな。かれのことをすぐえるのは、きみしかいない。これは、きみの、もうひとつの、だいじなつとめなのだ。」

ロビーは王さまのその言葉に、深くかんじやしました。ロビーの持つ、もうひとつのだいじなつとめ。それはとらわれの身となっている自分のお父さん、ムンドベルクを、助けるということだったのです。アルマーク王のいう通り、影となった者は、もう、もとにもどすことはできませんでした。ですがたとえからだをもとにもどせなくても、その心ならば、もとにもどすことができるかもしれない。お父さんのことを、助けてあげられるかもしれない。

いや、ぜったいに、ぼくがすくってみせなくては！

「ありがとうございます、王さま。」ロビーはアルマーク王に深々と頭を下げました。

「ぼくは……、お父さんの心を、助けない。いえ、ぼくがやらなくちや、だめなんだ。ぼくは、自分の運命にしたがいます。このくにを守るために、お父さんを助けるために、ぼくは、いきます。」

アルマーク王はなにもいわず、ただただ、ロビーのその手を強くにぎりしめました。デルンエルムは目をまっ赤にはらして、ロビーに深くかんじやしていました。ベルグエルムもフェリアルも、胸にこみ上

げてくるあついものを、おさえることができませんでした。ライラも兵士たちも、みな、心からの気持ちをこめた敬礼を、しぜんとロビーにおくっていました。

そんな中、ライアンがロビーのとなりにやってきて、なにかをロビーにさし出しました。

「食べる？」

それは、あのエリル・シャンディーンやきだったのです。

ロビーは「ふふっ。」と笑って、ライアンにおれいをいいました。

「ありがとうございます。」

王さまも、デルンエルムも、みんな思わず、笑みを浮かべてしまいました。

これからはじまる、ロビーのさいごの旅……。そこではどんなできごとが、ロビーのことを待ち受けているのでしょうか……？

バルコニーのむこうの大きな空には、星がまたたいていました。そのかがやきの下には、はるかなガランタ大陸へとつづく、大いなるブラックフォーンの海が、静かなさざなみを立てていました。

18、ノランベつどう隊まいる

「全兵、しゅつじんじゅんび、とどのいましてございますー！」
黒いよろいを着て、黒いかぶとをかぶったふたりの兵士たちが、ひざまずいていました。

こがね色のかみの男の人が、ひとり、そのさきでかなたの平原をながめていました。かれは、ほうこくにやってきた兵士たちと同じく、黒いよろいを着ております。ですが腰には、その黒いよろいとはなんともふつりあいな、こがね色のさやにおさまった、大きなおうごんのつるぎをさしていました。

どうやらこの人が、この兵士たちのしきかんのようでした。そしてその人は、ゆつくりと兵士たちの方をふりかえると、するどいまなぎしでこたえたのです。

「じきに、本軍がとうちやくする。それまで、たいきせよ。本軍がとうちやくしだい、ベゼロインへの進軍をかいしする。」

「はっ！」

しきかんのめいれいを受けて、ほうこくにきた兵士たちは深々と頭を下げて、下がっていききました。

あたりはいちめん、赤茶けた荒れ野が広がっていました。そのさびしい土地にあわせたかのように、空には同じく、さびしげな雲がどんよりと広がり、今にもひと雨きそうなふんいきでした。風が吹いていました。ひゅうひゅうと石かべのあいだを吹きぬけていくその風の音は、なんともせつなく、かなしげでした。もし、風に心があるのだとしたら……、なにをかなしみ、こんなにもせつない泣き声を上げているのでしょうか？ 去ってゆく者への思いか、あるいは手をのばしてももうとどかない、失ってしまった者へのかなしみか……。そんな風の心を受けとめたかのように。しかいの下に広がるおだやかな流れの大河のみなもには、小さな波が、つぎつぎと生まれては、消えていききました。

ここは大河ティーンティーンその大いなる流れが、ペーカーランドのくの中へとはいりこんでいくところ。そのたいせつな場所を

守るために、ここには、りっぱなとりでがきずかれています。ほんの数日前までは、この場所はベーカールンドのゆうかんなる兵士たちによって、かたく守られていました。ですが今は、かれらのすがたはありません。かわりにやってきた者たち。それが今、このとりでの上の見晴らし台で言葉をかわしていた、かれらだったのです。そう、ここはワットによってせめ落とされた、リュインのとりで。そしてここにいるかれらは……、もうおわかりの通り。そのワットの兵士たちでした。

こがね色のかみのしきかんは、重い表じょうを浮かべながら、かなたの空を見つめていました。そのさきには、もうひとつのベーカールンドのとりで、ベゼロイン。そしてさらにそのさきには、エリル・シャンドーのみやこがあるのです。

よこしまなるワットの、黒の軍勢。その兵士たち。それをたばねるしきかんなので、このこがね色のかみの男も、さぞかし悪いやつなのでしょう。ですが……、この人は、どこかほかのワットの兵士たちとは、ちがうような感じがしたのです。「なにがちがうの？」ときかれたら、はつきりとはこたえられないのですが、どこかその心のおく底に、深いなやみをかかえているかのような……、そんな感じがしました。

でもワットの黒騎士たちと同じようなおそろしい黒いよろいを着て、そばには同じく、こわいデザインをしたまっ黒なかぶともおいてあります。この人物が、おそろしいワットの軍勢のしきかんであるということに、ちがいはありませんでした。

こがね色のかみのしきかんは、ふたたびきびしい顔をして、見晴らし台からとりでの中へとはいっていききました。入り口の兵士が敬礼をして、かれのことをむかえます。

「本隊への、ほうこくじゅんびはできているか？」しきかんが兵士にいいました。

「はっ、うさぎの用意、とどのいましてございます。」兵士がこたえます。うさぎ……

「よし。だれも部屋にいれるな。重要なほうこくだ。」

こがね色のかみのしきかんは、そういつて石のろうかをひとり進み、そのおくのひとつの部屋の中へとはいっていききました。そこは石づくりの小さな部屋で、まども家具も、なんにもありませんでした。ほんとうに、からっぽの部屋だったのです。いえ、ひとつだけ、この部屋のまん中の床の上に、おかしなものがありました。それは木のつるをあんで作った、ひとつの鳥かごだったのです。ですが、その中にはいつていたのは……。

うさぎです！ さつき兵士がいつていたのは、このうさぎのことだったようです。見たところ、なんのへんてつもない、ふつうのいつびきの、はい色のうさぎのように見えましたが……、いつたいこのうさぎで、なにをしようというのでしょうか？

こがね色のかみのしきかんは、部屋のとびらに大きなかんぬきをかけて、だれもはいつてこられないようにしました。わきにかかえたかぶとを床の上におき、そしてかれは、なんと、鳥かごの中のうさぎにむかつて話しかけたのです！（え？ このうさぎつて、しゃべるうさぎなの？ いえ、このうさぎは、ほんとうに、ただのうさぎでした。じつところ、さきほどそのしげみの中で、兵士たちが見つつけてきたばかりだったのです。それじゃ、いつたい？）

「アーザス、わたしだ。」

アーザス！ ここで、あの魔法使いの名まえが出るなんて！

しかもそれ以上におどろいたのは、あのアーザスのことを、よびすてにしたということでした。ワットの軍の中でも、もつともえらいところにいるはずのアーザスのことを、よびすてにするなんて！ いつたいこの人物は、なに者なのでしょうか？（アーザスは黒の軍勢のさんぼうとして、ワットのアルファズレド王の仲間に加わっていました。このさんぼうというのは、軍の中でいちばんえらい王さまにちえや力を貸す者のことで、さんぼうはアルファズレド王とならぶくらい、えらかったのです。ですからそのアーザスのことをよびすてにできる人物なんて、ワットの者の中では、ほかには、王であるアルファズレドくらいのものでした。ですからおどろいたのです。）

しきかんが話しかけると、それまで鼻をひくひくさせて、鳥かごのにおいをくんくんかいているだけだったうさぎのようすが、変わりました。くりくりとかわいらしい大きな目が、急に、切れ長のおそろしい目つきに変わったのです！　そしてその口もとにぶきみな笑みを浮かべると、うしろの二本の足で、すつくと立ち上がりました！（こんなふうには、うさぎがふつうに立っているところなんて、めったに見られるものではありません！　うさぎの種族、ラビニンだったら立ちますけど！）

「ああ、ガランドーだね。げんき？」うさぎがしゃべりました！　そしてその声はまさしく、あのアーザスのものだったのです！

これは、アーザスの魔法でした。遠くはなれたところにいる者と、動物のからだを通して話しをすることができるといふ、おどろくべきわざだったのです！（げんきこのアークランドでこの魔法のわざを使えるのは、アーザスと、大けんじやノランくらいのものでした。それほど、この魔法はあやつるのがむずかしかったのです。

ちなみに、使う動物は小さな動物だったら、なんでもよかったです。たまたま兵士がうさぎを見つけたので、こんかいはうさぎでした。）

それはそうとして……、アーザスのいった、ガランドーという名まえ。この名まえを、みなさんはきいたことがあるはずですよ。それは第十六章の終わり、エリル・シャンティーンのお城の前で、ライラとベルグエルムが話していた、その話しの中に出てきた名まえ。ワットのおおそろしいデイルバグの黒騎士隊の、しきかんと思われる人物の名まえでした。そしてこのうさぎ（アーザス）と話していた、こがね色のかみのしきかんこそが、まさしく、そのガランドーだったのです！（じつはこのガランドーは、ここよりもっと前に、すでにみなさんの前にそのすがたをあらわしていたのです。え？　ほんと？　と思われるでしょうが、第十三章のはじめ。うでにリボンをまいたワットが、デイルバグに乗ってワットの王城にもどってきた場面のこととを、思いかえしてみてください（ちよつともどつて、読んでみるのもいいでしょう）。その使者につづいてやってきた、身分の高そう

だった、こがね色のかみの兵士がいましたよね。そう、じつはあの兵士こそが、このガランドーだったのです。」

「なにもかも、おまえの思い通りだ。まんぞくだろう。」

ガランドーが、怒りのこもった声でアーザスにいいました。それをきいたアーザス（うさぎ）は、「くつくつく。」という、いつもの笑い方をしてこたえます。

「きみの力には、いつも助けられるよ、ガランドー。ほんとうにきみは、よくやってくれる。でも、ここからが、ほんばんだからね。さいごの戦いでも、ぼくのきたいに、こたえてくれるかな？」

アーザスの言葉に、ガランドーは「くっ……！」という声を上げて、アーザス（うさぎ）のことをにらみつけました。そしてふりしぼるように、強い思いをこめて、いったのです。

「つとめは果たす。だが、いいか。おまえがやくそくを破ったら、わたしはおまえを、ぜったいにゆるさんぞ。」

「えー、こわいなあ。」アーザスはそういって、また「くつくつく。」と笑いました。「あんまり、おどかさないですよ。ぼくは、気が弱いんだから。」

！
よくいいます！ 今までたくさん、ひどいことをしておきながら

「でもねえ、やくそくのことをいったら、それは、ぼくだって同じだよ？ きみがやくそくをしつかり守ってくれれば、だーれもきずつかずに、すむんだから。あの子だって、ね。」

「きさま……！」

ガランドーは怒りにふるえ、こぶしをにぎりしめました。どうやらこのガランドーとアーザスとのあいだには、人知れない、ひみつのやくそくがあるみたいなのです。そしてそれこそが、ガランドーがアーザスにつきしたがって、このワットの軍のしきかんになっている、ほんとうのりゆうのようでした。

「わたしは、やくそくを守る。いもうとには……、ライラには、ぜったいに手を出すな！」

いもうと……！ ライラ……！

そうなのです……。このワットのこがね色のかみのしきかん。おそろしいデイルバグに乗った、黒騎士隊のしきかん、ガランドー・アシュロイは、あのベーカーランドの白の騎兵師団の隊長である、ライラ・アシュロイの、お兄さんでした……………！

いつぼうは、ベーカーランドの白の騎兵師団の隊長……………。いつぼうは、ワットの黒の軍勢のしきかん……………。まるでせいはんたいの立場にあるこのふたりの人物が、血のつながった、兄ともうと。なんて、つらくて、ざんこくで、重いじじつなのでしよう！

「ぼくだって、そんなことしたくないよ。だから、きみには、もつとがんばってもらわなきゃね。」アーザスが、あつけらかんとしたい方でした。

ガランドーは、自分の手を見つめました。どうしてもやらねばならない、みずからのつとめ……………。それをかれは、痛いほどにわかっていたのです。

「もうすぐ、本隊がつく。まずは、ベゼロインだ。」ガランドーがいました。

「ああ、そうだっけね。ベゾルインか。」アーザスがきょうみもなさそうに、いいました（アーザスはきょうみのない物や人物は、名まえをしつかりおぼえていないのです）。

「じゃ、よろしくたのむよ。ああ、そろそろおやつの間だから、切るね。いいほうこくがきけることを、楽しみにしてるから。ばいばーい。」

アーザスがそういうと、鳥かごの中のうさぎは、とたんにもとのうさぎにもどって、きよとんとした顔つきで、また鼻をひくひくさせはじめました。

ひとり残ったガランドーは、そのまま動かず、にぎったその自分の手を、じつと見つめていました。アーザスとのやくそく。それは、いもうとのライラの身の安全のほしうとひきかえに、みずからのその身を、アーザスのもとにささげるといふものだったのです……………。

ガランドー・アシュロイ。かれはもともと、白の騎兵師団の人間隊の副長でした（兄のガランドーでも、いもうとのライラには、剣のう

ででかないませんでしたから。白の騎兵師団の、副長。それが黒の軍勢のがわにつけば……、ワットにとって、ひじょうにやくに立つそんざいとまります。ベーカーランドのさまざまなじょうほう。白の騎兵師団のじょうほう。兵士の数。戦い方。とりでの中がどうなっているのか？ それらのことが、すべて、ワットの知るところとなるのですから。ワットにとって、そのりえきは、はかりしれないものでした。

アーザスはそれをねらって、ガランドーに目をつけたのです。アーザスは、ガランドーのじつのいもうとが、同じ白の騎兵師団の隊長であるライラであるということを知って、それをりようしました。それも、なんともじやあくきわまりない、方法でもって。

アーザスはガランドーにいうことをきかせるために、ガランドーのいもうとであるライラに、じやあくな魔法をかけました。アーザスはその魔法ののろいをとき放てば……、ライラは、やみの世界に取りこまれてしまうのです。自分にそんなのろいがかけられたなんてことは、ライラはまったく、気がついていません（この魔法はじつさいにそののろいがとき放たれるまでは、かけられた者のからだには、なんのへんかもありませんでしたから。じつにおそろしい魔法です）。ただひとりガランドーだけが、とつぜんに自分の前にあらわれたアーザスほんにんから、そのことをきかされました（アーザスはその気になれば、ガランドーほんにんにたぶらかしのじゅつをかけて、かれを思いのままにあやつって、味方にひきこむこともできました。ですがアーザスは、わざと、かれのいもうとをねらったのです。あやつり人形みたいにいうことをきかせるより、その方がおもしろそうだから。アーザスはそう思いました。ひどすぎます！。そしてアーザスがライラではなく、ガランドーに目をつけたわけも、そこにありました。兄であるガランドーの方が、年下のいもうとのことをかばう気持ちが強いはずだと、アーザスは思ったのです。その方がよりいうことをきかせやすいし、楽しいだろうと、アーザスは考えました。ほんとうにひどい！）。

やみの世界にとらわれていく、ライラのすがた……。アーザスはガ

ランドーに、そのみらいのえいぞうを見せつけました。こんなものを見せられて、兄であるガランドーに、どうしてさからうことができたでしょう……？　かれはアーザスに、ただただ、したかうほかはなかつたのです……。

こうしてガランドーはただひとり、ライラへの手紙だけを残して、ベーカーランドを去りました。手紙の中でガランドーは、アーザスのことも、ライラにかけられたのろいものことも、なにもいいませんでした。ただライラに、自分のしんねんにしたがって、強くしあわせに生きてほしいと、それだけをいい残したのです。ライラにこれ以上、よけいな心配をかけさせまいとして……。ガランドーはそれからすぐ、アーザスのめいれいにより、デイルバグの黒騎士隊のしきかんととなりました。

ガランドーはワットの者たちの前では、兵をひきいるしきかんとして、れいこくなすがたをよそおっています（第十三章のはじめに、はじめてガランドーがとうじょうしたとき、かれはベーカーランドといくさになることをよろこんでいるかのようふるまい、笑みさえ浮かべていました。じつはあれもすべて、ガランドーは、わざと、そのようにふるまっていたのです。ワットの者たちの前では、ベーカーランドのうらぎり者としての自分を、えんじつづけていなければなりませんでしたから）。ですが心の中では、いもうとのライラのことをかたときも忘れることなく、いつも心配し、くるしんでいました。かわいそうに……。

「アーザスめ……」

ガランドーは、はきすてるようにつぶやきました。そして床においたかぶとをわきにかかえると、とびらのかんぬきをはずして、ふたたびきびしい顔をして、ひとり、とりでの中へと消えていったのです。そのひとみのおくに、ライラのすがたをうつして……。

「さいごの旅のことについては、ノランから話されるであろう。ついてまいれ。」

アルマーク王がそういって、みんなのことをみちびきました。

ここはベーカーランドのお城、エリル・シヤンティーンのもの、てっぺん。そこからさらに半マイルほども空中ろうかを歩いて、ようやくたどりついた、王さまのぎよくぎのある塔の上。そして今、みんながむかったのは、そのぎよくぎのうしろ。女神リーナロッドのぞうの、その足もとだったのです（さきほど、ひみつの出入り口がひらいたところですよ。といっても、そこにはつきりと、出入り口が見えているというわけではありません。せいにかくには、「出入り口がかくされているところ」といった方がいいでしょう。この出入り口はほんとうに、近くでじっくりながめても、どこがとびらなのか？ ぜんぜんわかりませんでした。ですから、ひみつの出入り口なのです）。

ひとりの兵士が進み出て、女神の足もとのかべを手でさぐり、そこに、手に持っているなにかをかざしました（ちなみに、そこはさつきひらいた方とはべつの、左足の方でした。どうやらさつきとはちがうべつの出入り口が、そこにあるみたいです）。すると……。

ぷしゅー。

さきほどと同じ、空気のもれるような音がして、それまでまったくかべにしか見えなかった場所に、ふたたび、ひみつのとびらがひらいたのです！（ちなみに、兵士が手に持っていたのは、まん中に白い石がついた、きいろいリボンでした。このリボンはこのひみつのとびらをひらくための、とくべつな品物で、このリボンをとびらのある場所にかざすと、かくされているとびらがひらくというしくみになっていたのです。このリボンはしっかりとかなりきれいで、お城の戸じまりをまかされているとくべつな兵士たちにはしか、持つことはゆるされていませんでした。その兵士たちはリボンと同じく、きいろいものはいったかっこいいよろいを着ていて、うでには同じく、きいろいわんしょうをまいていました。かれらはその名も、「イエローリボンけいび隊」！ 名まえはともかくとして……、お城の中でも、もつとも重要な人たちだったのです。）

入り口をくぐって中にはいると、そこはなんともふしぎなところでした。そこは、はしからはしまでが二十フィートほどのまるい部屋で、かべも床も、まっ白にかがやいていたのです（ロビーはさいしょ、

そどのおひさまの光がさしこんでいるのかと思いましたが、すぐに、これはまわりのかべそのものが白い光を放っているのだということに気がつきました。だってそとは今、すっかり、おひさまがしずんでしまっている時間でしたから。まどはなくなつて、つるつるとした白いかべが、ずうつと上の方にまでのびていました。

「いったいここは、なんの部屋なのでしょう？　ですがロビーはすぐに、そのこたえを知ることになったのです。」

「この上だ。」

アルマーク王がそういつて、かべぎわの床の上においてあつた、まいる板のようなものの上に乗りました。それはちよっけいが三フィートほどで、あつさが二インチほどの、よくみがかれた、白いまんまるな石の板でした（見た目はまるで、ホワイトチョコみたいでした）。そしてよく見ると、その石の板は、このまるい部屋のかべにそつて、同じかんかくをあけて、全部で六つ、きれいにならべておかれていたのです。

「いつこ、たんないから、ロビーは、ぼくといっしょに乗ろうね。」ライアンがそういつて、ひとつの板の上に乗る、ロビーのことを手まねきします。あわててロビーも、わけもわからないまま、その板の上に乗りました（小さな板でしたから、いくらライアンが小さくても、ふたり乗つたらいっぱいでした）。

つづいて、デルンエルム、ベルグエルム、ライラ、フェリアルも、それぞれの板の上に乗ります（おともの兵士たちは部屋の入り口の見張りに残りました）。アルマーク王と、ロビーとライアンをあわせて、これで六つの板が全部うまったわけでした。

「落っこちないように、しっかり立っててね。」不安げにしているロビーに、ライアンがいました。え？　ま、まさか……、また？

「アローイン！」

ロビーの思つた通り！　ライアンのその言葉をあいずに、ふたりの乗つたその石の板が、床からふわーん！　ちゆうに浮かび上がったの

です！

「や、やっぱリー！」ロビーは思わずしゃがみこんで、「ひええ！」とライアンの足にしがみついでしまいました（おかげでライアンは、「わわ！」とよろけそうになってしまいました）。

つまり……、この部屋はみなさんの世界でいうところの、エレベーターだったのです！石の板に乗ってあい言葉をいうと、石の板が上がったり下がったりして、乗っている人をほかの階にまではこんでくれるというわけでした！（お城の七階にくるまでには、魔法のらせんかいだんに乗ってきたわけですが、いつてみれば、あれはエスカレーターですよ。そしてこんどは、エレベーターというわけなのです。うーん、エリル・シャンティーンって、ファンタジーなのにげんじつ的！

ところで、王さまもさいしょ、下の階から、このエレベーターに乗ってぎよぐぎの間までやってきました。それならなにも、わざわざあんなに長い空中ろうかを歩いていなくても、みんなもはじめから、このエレベーターに乗ってぎよぐぎまでいったらよかつたんじゃない……。でもまあ、正式に王さまに会うためには、長い空中ろうかを歩いてぎよぐぎまでいくというのが、きまりになっているようでしたので、ここは、そのでんとうの顔を立てることにしましょうか……。

ちなみに、王さまがきたときになっていた、ちん、ろん、らん、という音楽は、「もうすぐエレベーターがきますよ」ということを知らせるためのもので、「ちーん！」というベルの音は、「つきましたよ」ということを知らせるためのものだったのです。）

ちーん！

ほどなくして、ライアンと（そのライアンの足にしがみついている）ロビーを乗せた石の板が、てっぺんまでたどりつきました（でも……、王さまのぎよぐぎのある場所が、お城のてっぺんなんじゃないのでしょうか？ そこよりさらに上にある、この場所って……？）。

ちーん！　ちちちーん！　ちーん！

ほかのみんなを乗せた板も、じゅんばんんにてっぺんにとうちやくです（この石の板は、その上に乗った人のあい言葉だけに反応して動くというものだったのです。そのため、上につくのも、それぞれひとりずつでした。ひとりとうちやくするたびにベルの音がなるので、ちよつとうるさいのですが……）。

そこはぎよくぎのある広間から（そして女神ぞうのその頭の上よりも）さらに上につき出た、いっぽんの塔の中でした（なるほど、ぎよくぎの間のそのやねの上にも、小さな塔が突き出ていたんですね。これならお城のてっぺんであるはずのぎよくぎの間より、さらに上があっても、おかしくないわけです。そこにいくためのエレベーターが女神ぞうの中にあるというのは、やっぱり、ばちあたりのような気もしますが……）。そしてここは、お城の人たちでもふだんはいることのできない、とてもとても、とくべつなところだったのです。それはこの場所に、とてもだいいじなあるものが、おかれていたからでした。ベーカールンドのお城の、そのいちばんてっぺんにおかれている、だいいじなもの。それがなんだか？　みなさんにはもう、おわかりでしょう。そう、この場所には、ベーカールンドのくにのいちばんの宝物、青き宝玉がおかれていたのです！

風がびゅうびゅうと吹きつけていました。エレベーターの終わり、石の板がたどりついたその塔は、青いタイルのトンがりやねをなん本かの石のはしらがさきさえているだけの、かべのない、あずまやの塔だったのです（ちなみに、石の板がたどりついたこの場所は、まん中が下まで吹きぬけになっていて、石の板はその吹きぬけをぐるっとかこんだつうろのふちに、ぴたつととまりました。ですが、もしこの吹きぬけに落っこちてしまったら？　だいいじょうぶ。なんと、落ちた人には空中で魔法の力がはたらいて、そのままその人は、ふわふわと、下までおりていくことができましたのです！

ほかに、人と人がぶつからないように、板と板のあいだには

きよりが取ってあったり、危険を感じたら、板が自分でとまったり。安全たいさくもばつちりされていました。でもさすがに、ふわふわおりののが楽しいからというりゆうで、わざと吹きぬけに飛びこむ人はいないみたいです。そんなことをしたら、ぜったい怒られますから。ロビーはライアンに手をひっぱられながら、なんとか、石の板からその塔のつうろの上へと、おり立つことができました（しつかりとした足場にかんしゃですね！）

ちなみに、ライアンはいぜんエリル・シャンディーンにきたときに、この場所にもあんないさかれていました。ですからこのエレベーターのことも知っておりまし、乗るのもぜんぜんへいきだったのです。おもしろかったので、そのときライアンは、十回以上ものぼりおりしてしまっただけでした。そしてなん回か乗っているはずのフェリアルでしたが、じつはかれは、どうにもこのエレベーターがにがてで、ロビーと同じくらいおっかながっていました。かれのめいよのためにも、文章にしては、わたしもあえてお伝えしていませんでしたが……。そしてこの塔からのびるいつぽんの石の橋が、そのさきにあるもうひとつの青いとんがりやねの塔のもとへと、みんなのことをまねいていたのです。

この「もうひとつの塔」というのが、じつにおそろしいものでした。それはなぜか？といいますが、じつはその塔は、やねの上につき出た今いる塔から、西の海の方に空を十ヤードほど進んでいった、そのさき。つまり、まったくの空中に、ぽつんと浮かんでいたからなのです！（つまり、今いる塔からのびているいつぽんの石の橋だけが、空中のその塔へとむかう、ゆいいつの道だったというわけなのです。なんておそろしいところに塔をつくるんでしょうか！）

でも、ご安心を。この塔は魔法のわざによつて、しつかりとささえられていてということでしたから。でなければとても、こんなおそろしいところにある塔なんて、渡れるはずありません！）

みんなは（ロビーだけはおそろおそろ）その空中に浮かぶ塔へとむかって、石の橋を渡っていきました（そこがもくてき地だということでしたから）。そしてロビーは、その空中の塔の床のまん中に、りっぱ

なかぎりのついた白い石の台がひとつあるのを、見て取ったのです（その塔も、さいしよの塔と同じ、かべのないあずまやの塔でしたから）。そしてそのかぎり台の上、五フィートほどの空中に、それはありました。

さいころのようなかたちをした、ひとつのすき通った青い石。それが空中で、光をきらきらとはんしやさせながら、ゆつくりとまわっていました。そう、これこそ、ベーカーランドのしよだいの王、イエヒュリー・ベーカー王が、このアー克蘭ドの地で女神リーナロッドよりさずかったとされる、青き宝玉、そのものだったのです！

ひとめ見るなり、ロビーはその美しさに心をうばわれてしまいました。アーザスのたくらみによって、そのかがやきを失いつつあるという、青き宝玉。ですがそれでもなお、この宝玉はほかのどんなすばらしい宝石よりも美しく、どうどうと光りかがやいていたのです（ちなみに、この宝玉の光は、遠く西の地からやってくる船たちの、目じるしにもなっていました。つまりこの塔は、うみべのとう台のやくわりをも果たしていたのです。ですからこんな、お城のてつぺんにあるんですね）。

「おお、やってきたな。」

とつぜん、どこからか声がしました。その声に、ロビーは、はっとして、われにかえります。ロビーはすっかり、宝玉の美しさに見とれてしまっていて、そのわきの、石のはしらの影にいたそのひとりの人物のことに、ぜんぜん気がつきませんでした。

声とともに、その人物がペカペカとくつ音を石の床にひびかせながら、歩き出てきました。茶色のぼろぼろのマントをはおっていて、くたびれた衣服に、ペたんこのくつというかっこうです（ペたんこのくつですから、そのくつ音も、こつこつではなく、ペカペカだったので）。肩からは大きなかわのかばんをかけていて、そして手には、さきに白いすいしよのはまった、長い木のつえを持っていました。

肩までのびた茶色のかみが、風になびいてぱたぱたとゆれておりま

す。おかしなことに、かみの毛の色は茶色なのに、長くのばしたそのおひげは、はい色でした（ですから、茶色とはい色、どっちがほんとうの毛の色なのか？ わかりません）。見た目はもう、ずいぶんおとしよりでした。ですが、その力強い目。五フィート八ほどもある、しやんとした背かっこう。そして、しつかりとした足取り。どれを取っても、とてもおとしよりとは思えなかったのです。

「待たせてすまぬな、ノラン。」アルマーク王がいました。

ノラン！　そうです、この人物こそ、この世界でいちばんといわれる大けんじや、ノラン・エルセルファス・クーシー、その人でした！（けんじやにしてはずいぶんぼろぼろのかっこうをしておりますが、これはかれが一年中、あっちやこっちを飛びまわっているからでした。きれいな服を着ていても、あつというまにほこりにまみれ、ぼろぼろになってしまうのです。ですからノランは、いつも、ねだんの安い旅用の衣服とマントを身につけていました。同じけんじやのカルモトの、どはでなかつこうとは、えらいちがいですね。）

ノランは「はっはっは！」と大きな声で笑って、アルマーク王にこたえました。

「おかげで、また、でしに、こてんばんにやられてしまったわ。」

でし？　するとそのとき。同じくはしらの影から、もうひとりの人物があらわれたのです。

その人物は、はしらの影の石のベンチ（ベンチがあったんですね）からびよこんと飛びおると、ノランの横まですたすたと歩いてきました。背だけはライアンと同じくらい。りっぱなししゅうのはいったきれいな服を着ていて、金色のふち取りのされた白いケープをはおっております。そのケープについたフードをすっぽりかぶって、フードには金色の大きなリボンがふたつ、左右にかわいらしくかざられていました。ひざの上までの半ズボンをはいていて、このズボンもまた、小さなたくさん金色のリボンで、かわいくかざられていました。

ひとめで子どもだとわかりました。人間の種族の子で、ねんれいは十二さいか十三さい、そのくらいでしょうか？　フードからのぞいて

いるのは、とてもかわいらしい顔をした、女の子のようでした。かがやくように美しい、こがね色がかつた茶色のかみの毛で、まるっこい、かわいいかみがたをしております（フードをかぶっているので、全部は見えませんでした）。ひとみの色は、こごちよい海のしお風のような、やわらかなサファイア色。手には、さきにもも色のすいしゅうのはまった、きんぞくでできたつえを持っていました。

「おししようさまが、弱すぎるんです。まあ、でも、カードだったら、だれだって、ぼくにはかなわないでしょうけど。」

その子はかわいらしい声でそういつて、その場にいるみんなにペコりと頭を下げて、あいさつしました。やっぱり、女の子のようです。でもかわいい声のわりには、ちよつとなまいきな感じで、りくつつぽいしやべり方をする子のようですね。それに自分のことも「ぼく」つてよんでるみたいですし、やっぱりけんじやのでしだけあつて、すこし変わっているところがあるみたいです（ところで、かれらの話しのことですが、ノランとそのでしのこの子のふたりは、ロビーたちがやってくるまでのあいだ、この場所でカードゲームをしてあそんでいました。それはベーカードランドで子どもたちに人気の「デイルグレイド」というカードゲームでしたが、エリル・シャンディーンのまちなにお店がありましたよね。このゲームにおいては、ししyoungであるノランも、でしにまったくななかつたというわけなのです。

なにしろ、でしの持っている「エクセレンス・エンペラードラゴン」の強さといったら！ ししyoungノランの「魔法使い騎士団」は、でしの「さい強ドラゴン軍団」に、げんざい二百五十四れんぱい中！ この日もこてんぱんにやられてしまって、れんぱいきろくをさらに、のばしてしまったというわけでした。もつとも、こんなに強いカードがなくても、でしのこの子のいう通り、だれもこのゲームでは、この子にかんいませんでしたけど。それほどこの子は頭がよく、カードだけではなくて、あらゆるゲームに強かつたのです。

「おぬしが、ロビーベルクだな。うむ、ムンドベルクに、よくにておる。それから、きみは、シープロンドのライアン王子。ひさしぶりだのう。」ノランがいました。

「あ、はい、おひさしぶりです。」ライアンがあわててこたえました。が、ライアンはさっぱり、ノランのことをおぼえていませんでした。じつは四年前、メリアン王たちのことをまねいたそのかんげいのしきてんの席に、たまたまノランもやってきていて、メリアン王とライアンにあいさつをしていたのです。でもライアンは、テーブルの上のお菓子のことばかり見ておりましたから、ノランのことをぜんぜんおぼえていませんでした（世界さいこうのけんじやよりも、やっぱりライアンはお菓子でしたね）。

「わたしは、ノランだ。こっちは、でしのマリエル。」

ノランにしようかいされて、マリエルとよばれたその子が、またぺこりと頭を下げて、ロビーとライアンのふたりにあいさつしました。

「はじめまして。マリエル・ファイアンリーと申します。ノランおししょうさまのことで、このお城の、きゆうていまじゆつしをしております。」

きゆうていまじゆつしというのはお城につかえているゆうしゅうなまじゆつしのこと、さまざまなちえを出したり、いろいろな魔法を使ったりして、王さまやくにの人々のお手伝いをするのが、そのだいなやくめだったのです。そしてエリル・シャンディーンのお城には、四人のきゆうていまじゆつしたちがいましたが、ほかの三人はみんな、はたち以上のねんれいでした（いちばん若くても二十一さいでした）。きゆうていまじゆつしになるためには、人なみはずれた魔法のさいのうと、ゆうしゅうなるずのうが必要だったのです。いってみればエリート中のエリートといったところであつて、きゆうていまじゆつしというのは、ほんのひとにぎりの、ばつぐんにすぐれたまじゆつしだけなることをゆるされる、魔法をこころざす者であればだれもがあこがれる、せまき門でした。

ですからマリエルくらいのできゆうていまじゆつしにえらばれるということは、とてもすごいことなのです。しかもあの大けんじやノランのしなのですから、このマリエルという子は、そうとうな魔法のさいのうの持ちぬしであると考えていいでしょう。なにしろノランといえ、でしを取らないのでゆうめいでもありましたから

（あちこち飛びまわっているので、でしを育てているひまがないというりゆうが大きかったのですが……）

そして、ノランがマリエルのことをでしにしたわけは、じっさいのところ、ノランがいがい、だれも知りませんでした。ただあるとき、はるか西の地からもどってきたノランが、マリエルのことをつれてきたのです。そのときマリエルは、まだ五さいでした。みすばらしい服を着ていて、かみの毛もぐしゃぐしゃ。手には小さなお守りだけをひとつ、にぎりしめていたそうです。そしてその胸には、見たこともない、おそろしげなりゆうのもんしょうがきざまれていました。

マリエルの胸にりゆうのもんしょうがあるというこのことを知っているのは、ノランのほかは、アルマーク王と、ごく一部のお城の者たちだけです。そして、このおそろしいりゆうのもんしょうのひみつについては、ざんねんながら、このロビーの物語の中では語られませんが。マリエルの、そのひめられたひみつ……、遠く西の大陸の、エクセレンス・ドラゴニア帝国のめつぼうにまつわるその物語は、またいつか、べつのところでお話したいと思います。きっとそれだけで、本がいつきつ、できてしまうことでしょうから。

それからノランは、マリエルをアルマーク王にあずけ、こういいました。

「王よ、今からこの子は、わたしのでした。城で育ててやってくれ。いずれこの子は、わたしをこえる、けんじやとなることだろう。」

そしてマリエルは、わずか十一さいのときに、このエリル・シャンディーンの子ゆうていまじゆつしにえらばれたのです。手にしたつえは、そのおいわいに、ノランからおくられたものでした。

マリエルは、むかしのことをぜんぜんおぼえていません。ですがマリエルにとつて、かこはどうでもいいことでした。マリエルには、わかつていたのです。たいせつなものは、今、そしてみらいにこそ、あるのだということ。

マリエルは、こうして、ノランのことであるということ、エリル・シャンディーンの子ゆうていまじゆつしであるということをほごりに、魔法のしゆぎように日々、はげんでいました。

ところで……。ここでひとつ、けっこう重要な説明を加えておきます。それは、なぜ、かれらきゆうていまじゆつしたたちが、ロビーのことをむかえにいくこんかいの旅に、加わらなかつたのかということ。たしかに、まじゆつしであるかれらがいれば、これまでの冒険の中でも、かなり助けられたところがありましたよね。ですがかれらのようなまじゆつしたちは、いつもたいへんなしごとをこなしていて、なん日もお城をあけるような旅には、出ることができなかったのです。ましてや今は、ワットとの大いくさのじゆんびに追われておりましたので、ことさらたいへんなときでした。かれらきゆうていまじゆつしたちが、ひとりでもかければ、いくさへの対応は、大きくおくれましてしまうことでしょう。そのためアルマーク王は、それらのことをすべて考えにいれたうえでも、きゆうていまじゆつしたるかれらにひつてきするほどの力を持った、ベルグエルムたち四人の騎士たちを、この重要な旅に送り出したのです。

ワットとの大いくさがはじまるまでには、まだしばらくの時間があります。アルマーク王は、そのあいだにきゆうせいしゆであるロビーのことをお城までつれて帰ることのできる、ゆうしゆうなるベルグエルムたちに、そのにんむをたくしました。まだいくさまでには時間がありますので、かれらのるすのあいだは、もうひとりのゆうしゆうなるしきかんであるライラに、そのかわりをつとめてもうことができませんでしたから。アルマーク王は、すべての人の力がすべてうまくまわるようにと、ぎりぎりのせんたくをしていたのです。

「きゆうていまじゆつし！　すごいなあ、そんなに若いのに。」ライアンがそういって、マリエルのことをほめました。

「いえ、それほどでも。」マリエルはひかえめにいいましたが、ほめられてすごうれしそうでした。

「それに、女の子できゆうていまじゆつしっていうのも、めずらしいよね。男の人ばかりなのに。マリエルちゃんって、やっぱり、すごいなあ。」ライアンが、そういったとたん……。

「こらー！　女の子とはなんだー！」

とつぜん、マリエルが両手をふりかざしてどなりました！　ええっ

？ ど、どうしたの？

「ぼくは、男の子だ！ よく見ろ！」

ええっ！ お、男の子？ マリエルはそういって、フードをがぼっ！ とうしろへ下げました。こがね色がかつたきれいな茶色いかみが、ふわりとなびきます。フードをぬいだので、これでその顔を、はつきりと全部見ることができるようになったというわけでした。どこが女の子だ！ よく見ろ！ というわけでしたが……。

やっぱり、女の子みたいにかわいらしい顔なんですけど……。いわれなかったらまちがえてしまうのも、むりありません（かみがたも女の子みたいですし、そのうえ声まで、かわいらしい高い声でしたから）。

すっかり怒られてしまったライアンは、「ええっ！」とおどろいて、あわててとりつくろおうとします（ちなみに、ロビーもマリエルのことを女の子だと思っておりましたので、さきに女の子だといわなくてよかった……。と心の中でひそかに思っていました）。

「だ、だって、マリエルって、女の子の名まえじゃん！ ぼくのいとも、マリエルって名まえだよ。まちがえちゃうよ！」

じつはこれが、ライアン（とロビー）がマリエルのことを女の子だと思った、いちばんのりゆうでした。ライアンのいう通り、マリエルというのは、このアーケランドでは女の子にしかつけない名まえだったのです。ですからライアン（とロビー）は、マリエルのことを女の子だと、はじめからすっかりきめつけてうたがいませんでした。ですが……。

さあ、これがマリエルのきげんを、ますますそこねてしまったのです。

「ぼくのいちばん気にしてること、いったな——」

マリエルはもう、かんかんです！ 持っているつえのさきから、ばちばち！ ときいろいろ火花が！（ちよ、ちよっと、おししようさまー！ なんとかしてよー！）

そんなかれらのやりとりを見て、ノランは「はっはっは。」とのんきに笑って、ロビーとライアンのふたりにいいました。

「マリエルは、小さいときにこの城にきたのだが、むかしの名まえをおぼえてなくてな。それでアルマークが、女の子だと思って、マリエルと名づけたのだよ。わたしもすっかり、男だと伝えるのを、忘れておつてのう。アルマークはしばらく、マリエルを女だと思っておつたから、今さらほかの名まえに変えることも、できなくなつてしまったのだ。」

いわれて、こんどはアルマーク王が、どきっ！　としてしまいました。どうにも気まずい表じようです。

「ま、まあ、よいではないか。ようは、ほんにんの、気持ちの持ち方しだいだから……」アルマーク王はそういって、「はは、は。」とひきつって笑いました（ちなみに、マリエルのみようじのフィアンリーというのは、お城のべんきようの先生の家のみようじでした。マリエルはその先生のようにして育てられましたので、今はフィアンリーのみようじを名のつていたのです。べんきようの先生の家で育つたマリエルは、そのためちよつと、りくつっぽいところがありました。でも、まだまだ子どもっぽいところもあつたのは、みなさんも見ていただいた通りです）。

「しようがないですね。まあ、いいです。それほどぼくつて、かわいいんだから。」マリエルが、鼻を「ふん！」とならしていいました。

これに対して、こんどはライアンが頭にかちーん！　ときてしまったから、さあたいへんです！（お子さまどうしの戦いが、ぼつぱつ！）

「な、なにおーう！　かわいさなら、ぼくだつて！」ライアンはそういって、ロビーの方をむいて、両のごぶしをふたつ、ほつぺにつけて、かわいらしいしぐさをしてみせました。

「ね？　ぼくの方が、かわいいよね！　そうでしょ？　ロビー。」

「なにいつてるんです！　ぼくの方がかわいいに、きまつてるよー！」

な、なにやら、たいへんなさわぎになつてしまいました……。もうマリエルとライアンは、わーわーきゃーきゃー。おたがいの「かわいさ」について、いっぽもゆずらない、ぎろんのかわしあいです！　どうやらライアンもマリエルも、「これだけはゆずれない！」という部分に、おたがいふみこんでしまったようですね。それにしても……、

どっちも男の子なのに、どうせなら「かつこよさ」で、もめてほしい
ものです……。ロビーはふたりのお子さまのあいだにはさまれて、も
みくちやにされながら、うくん……。とにが笑いするしかありません
でした。

さて、話がだいぶ、でし（マリエル）の方にかたむいてしまいまし
たが……。、「かわいさ」についての戦いは、もうこのへんにしてもらっ
て……。それではそろそろ、ここへきたほんらいのもくてき、大けん
じやノランの話をきくことにしましょう（横ではマリエルとライアン
が、おたがいににらみをきかせあつて、まだばちばちと火花を飛ばし
あっているみたいですけど……）。

みんなは、宝玉の前に集まっていました。近くによると、宝玉から
は、ふいーんという、小さな音がなっているのがわかりました。ゆっ
くりとまわりながらかがやく、美しい宝玉。これが今、よこしまなる
魔法使いアーザスの手によってねらわれ、そしてそのために、その力
を失いつつあるというのです。はじめて見るロビーには、どこが悪く
なっているのか？ ぜんぜんわかりませんでした。しかし、いぜんの
力強い宝玉のかがやきを見たことがある者にとっては、今の宝玉の
かがやきは、ほんとうに弱々しいものを感じるはずです（なにしろいぜ
んの宝玉のかがやきは、じつと見ていたら、まぶしくて目が痛くなっ
てしまうほどでしたから）。それほどこの宝玉の力の弱まりは、はっ
きりと、痛いほどに感じられるようになっていました。

「これが、このアークランドの、大いなる力のみなもとだ。」宝玉に
見いつているロビーに、ノランがいました。「どうだ。その力を、お
ぬしも感じるか？」

ロビーはだまっとうなずくと、しばらくたつてからこたえました。
「はい。この石の中には、ものすごい力があるのだとわかります。
でも、変です。はじめて見るものなのに、とても、なつかしい感じが
する。」

ロビーの言葉に、ノランもうなずいてこたえます。

「それは、おぬしのその剣のせいだろう。その剣のやいばと、この石

は、同じものだ。そして、そのひめたる力もな。」

ロビーは腰の剣に手をあてました。心なしか、剣は宝玉の力にこたえているかのように、ロビーのその手に、ふしぎなぬくもりの力を感ぜさせました。

「おぬしは、この石を守らなければならん。それが、このくにを守ることになる。」ノランが宝玉の方をむいて、ロビーにいいました。「さigoの旅は、とてもかんたんなものだ。おぬしはまず、精霊王のもとへゆき、そしてそこから、アーザスのいる怒りの山脈までゆく。それだけのことだ。」

え？ ノランさん、今、なんて？

ロビーは思わず、自分の耳をうたがってしまいました。「アーザスのところにいく」。それはわかっておりましたから、そこではありません。その前です。ですがロビーがノランにたずねる前に、かれがノランにくいきました。

「精霊王のところ！ 精霊王に会えるの！ ほんとー！」

それはもちろん、ライアンでした。ごぞんじの通り、ライアンは精霊ととてもなじみの深い、シープロンドの者でしたから、精霊王なんていったら、それはもう、ぜひともお会いしたい相手だったのです（たとえば大人気スターの大ファンの子が、そのあこがれの人に、ちよくせつ会えるといわれたらどうでしょう？ まさに今のライアンが、それだったのです）。

しかしノランの言葉にびっくりしたのは、ライアンだけではありませんでした。というより、アルマーク王と、デルンエルム、マリエルの三人をのぞく、ぜんいんがびっくりしたのです（いつもれいせいなライラまでが、ベルグエルムやフェリアルといっしょになって、すぐくおどろいていました）。やみの精霊の谷で、そのそんぎいがあきらかとなった、伝説の精霊王。そしてこんどは、じっさいにその精霊王のもとに、会いにくくというのですから、みんながおどろいたのもむりはありません。

「精霊王のところへいくって……、ほんとうに、そんなすごいところにいけるんですか！」こんどはロビーが、ノランにくいいるようにた

ずねました(さきにくいついていたライアンのごとは、マリエルが「こちら！ おししようさまからはなれる！」と喋ってひきはがしました。もちろんそのあと、わーわーもめてましたが……)。

ノランはそんなロビーの言葉をきいて、また「はっはっは。」と笑っていました。

「いけるもなにも。ロビーベルク、おぬしは十さいになるまで、その精霊王のもとで暮らしてたのだ。」

えええーっ！

もう、びつくり！ ロビーが、精霊王のところでも暮らしてた？ これはいったい！ みんなももう、びつくりぎょうてんです！(いつもれいせいなライラまでが、ベルグエルムやフェリアルといっしょになって、すごくおどろいていました。)

「ちよつと！ ロビー！ それってどういうこと！ ぼくに、ないしよにしたの！」ライアンがもう、すっかりこうふんしてしまって、ロビーのことをゆさゆさゆさぶっていいました。ロビーは「あわわわ……」とぐらぐらゆれながら、もう、わけもわからなくなってしまうているありさまです。

「これこれ。かれにいつても、むだなことだ。ロビーベルクは精霊王のもとを去るとき、精霊王のごとや、そこにいたことすべてのきおくを、なくしておるからう。」ノランがつづけけます。

「え？」ライアンがロビーのからだから手をはなして、いいました(ロビーはかわいそうに、すっかり頭がふらふらになって、ペしやんとたおれてしまいました)。

「ロビーベルクのことを、守るためだ。」アルマーク王がこたえます。「精霊王のもとにいたということをおぼえているままでは、ロビーベルクに、思わぬさいなんがふりかからないともかぎらない。精霊王がほんとうにいるのだというひみつは、守られたままにしておくのが、ほんらい、だれにとつてもいちばんよいことなのだ。だから精霊王は、ロビーベルクのきおくを消したのだよ。」

「そんなー！ せっかく、精霊王のところに行ったのにー！」ライアンがアルマーク王の前に進み出て、ぶーぶーもんくをいいました(すぐ

にマリエルに、「こら！ 失礼だぞ！ もどれ！」といわれて、うしろにもどされました。もちろんそのあと、わーわーもめてましたが。

「精霊王のひみつは、守られつづけなくてはならん。」ノランがさらにつづけます。「だが、ロビーベルクがどうして精霊王のところに行ったのか？ そのわけくらいは、話してもかまわんだらう。」

そういつてノランは、ロビーのそのひみつのかこのことを明かしました。

それはロビーが、まだ五さいのとき……。

それまで山里でかくれるようにすごしてきたロビーの身に、大きな危険のときがおとずれました。それは、ロビーがそのときにはじめて手にいれることとなった、ある力のために生まれた危険でした。その力とは……、そう、レドンホールに代々伝わる、アストラル・ブレードとよばれる、せいなる剣。その剣の力をひき出すことができるという、そのとくべつな力のことにはかならなかつたのです（この力はほんらい、おさないときにはまだ生まれません。少年少女くらいに成長したときに、はじめて、レドンホールの王の子は、剣の力をひき出すその力を持つようになるのです。ですからロビーの五さいというのは、だいぶ早いねんれいでした。ムンドベルクの場合は十さいのときに、この力を持つようになったのです）。

この力を、ロビーベルクが持つようになる。それはムンドベルクには、はじめからわかっていたことでした。ですからムンドベルクは、それより前に、ロビーを山里にかくしたのです。ロビーのその力を、あのよこしまなる魔法使い、アーザスに悪用されないために。わが子、ロビーベルク。この子は、このアークランドのきゆうせいしゅけつして悪の手になど、渡してはならぬと。

ロビーを山里にかくしたことで。危険はさけられたかのように思われていました。

ですがそれは、大きなまちがいであつたのです。

アーザスの持つ、赤いキューブ。そしてなによりも、アーザスのそのおそろしすぎるほどの、じやあくなる魔法の力……。それらをあわせたまがましい力は、このアークランドのどんなに山深い場所にかくれようとも、さけられるというものではありませんでした。

ロビーが剣の力を持つようになった、そのとき。アーザスの持つ赤いキューブが、大きく、その力のバランスをくずしたのです。はかり知れないほどに強大な魔法のさいのうを持つアーザスにとって、それが意味することを知らるのは、たやすいことでした。キューブの力のバランスがくずれたのは、キューブに力を与えることのできる剣、アストラル・ブレードをあやつることのできる者が、新たにあらわれたということ。つまりそれは、レドンホールの王の子が、どこかにいるということ。はつきりとあらわすものであったのです……。 (しかもアーザスには、それが男の子、王子であるということさえわかりました。男と女では、その力のせいかくが、ちがったのです)。

ロビーが剣の力を持った、そのしゅんかん。ロビーのそんざいのことを知ってしまった……。アーザスのおそろしさとというのは、ほんとうに、みんなのそうぞうをはるかにこえるほどのものでした。

アーザスはすぐに、レドンホールに使者を送りました。頭がかぼちやで、手足がへちま、からだはたまねぎのよせ集めという、ふざけたやさしい人形を送りつけたのです。その使者はムンドベルクに対して、こんなことをいいました。

「ゴしそく、オタンじょう、オメでとうごぎイマス！ ツキましてハ、ゼビ、ワたくしどモの家デ、オいわいノぱーていーヲヒラキタイ。親子デ、ふるツテ、ゴさんかクダさいマセー！」

ムンドベルクはそれをきいて、全身がふるえました。ロビーベルクのこと、アーザスに知られてしまったのです！

なぜアーザスに、それがわかったのか？ ムンドベルクにはけんとうもつきませんでした。しかしアーザスに知られてしまった以上、ロビーのことを、もつとほかの、どこか安全な場所にかくさなければなりません。でも、いったいどこへ……？

「お料理ハ、オ肉とオ魚、ドツチガお好ミでシヨウ？ やっパリ、うるふあサンでシタラ、オ肉の方が……、アっ！」

ムンドベルクはぺちやくちやうるさいそのやさしい人形の使者を、腰の剣でまっぶたつにしてしまいました。使者のからだはとたんにはらばらになつて、たまねぎがあたりいちめんに、ころころところがつていきます（これらのおやさしいは、お城の料理人が、あとでおいしいシチューにしていまいました）。そしてムンドベルクはそのとき、あつことを思い出しました。それはひとつの、とある、青いネックレスのことだつたのです。

「ロビーベルク、おぬしが今首にかけている、そのネックレス。それはむかし、ムンドベルクが、精霊王ほんにんからもらつたものなのだ。」

ええっ！ またしてもノランの言葉に、ロビーもライアンも、みんながびっくりぎょうてんです！

ロビーがいつも身につけていた、ひとつのネックレス（またはペンダント）。ロビーと、どこにいるとも知れない自分の家族とをつなぐ、たつたひとつの手がかりとして、たいせつにしてきたこのネックレス。それがなんと、自分の父であるムンドベルクが、むかし、精霊王ほんにんからもらつたという、すごいネックレスなのだといいました！（カルモトも「そのネックレスからは、とくべつな力を感じる」といつていましたよね。たしかに、その通りでした。なにせ、精霊の力を持つた品物は、まだあるとしても、精霊王からもらつたネックレスなんて、だれも持つていないのはあたりまえでしたから！ それほどこれは、すごい品物だつたのです。

ちなみに、ライアンがすぐに、「ちよつと！ 見せて見せて！」とくいついてきました。）

「そのむかし、おぬしの父、ムンドベルクと、その友のアルファズレドは、怒りの山脈からの帰り道で、ぐうぜん、精霊王のトンネルに出くわした。そこでふたりは、精霊王から、りゆうたいじのほうびとして、そのネックレスをもらつたのだ。あとからおくれてきたアルマー

クとメリアンは、ネックレスをもらえなくて、ひどく、ざんねんがったそうだがのう。」

なるほど、そういうわけで、このネックレスをもらったんですか……、つて、ぜんぜんわかりません！ しかも、なんかすぐく気になることを、いろいろさらつといていましたけど！ 友のアルファズレド？ いったい、どういうことなんですか？ ノランさん！

「おや？ お前たち、なにも知らないようだの。三十年前の、赤りゆうたいじの旅のことだよ。ここにいるアルマーク、レドンホルのムンドベルク、シープロンドのメリアン、ワットのアルファズレド、この四人と、わたしとで、怒りの山脈にすむりゆうを、たいじしにいったというわけだ。なかなか、骨のおれるしごとだったわい。なあ？」ノランはそういって、アルマーク王の肩をばしつ！ とたたいて、「はっはっは！」と大声で笑いました（いわれてアルマーク王は、「そ、そうですね……。」とにが笑いしていましたが。なんだかいろいろ、あつたみたいですな）。

今からおよそ三十年前……。このアークランドに、とんでもないわざわいの力を持つ、赤いりゆうがやってきました。そのりゆうは、アークランド北東部の切り立った山の中にすみつき、そこからアークランド中を、荒らしてまわったのです。そのたいじにむかったのが、ノランひきいる、四人の若き王子たちでした。

四人はたいへんな冒険のすえ、りゆうをやっつけました。りゆうが火を吹き、怒りくるったその場所は、今でも、そのりゆうの「怒りのわざわい」とよばれる、あつい風が吹き荒れているそうです。そしていつしかその場所は、人々から、こうよばれるようになりました。怒りの山脈と。そう、まさに三十年前のその冒険のぶたいこそが、今アーザスのいるという、怒りの山脈、その場所だったのです！（このノランと四人の王子たちの冒険の物語については、わたしはぜひ、みなさんにも語りたいたいと思います。この本とはまたべつの本の中で、おきかせしたいと思っておりますので、それまでどうぞ、お楽しみ！）

と、その旅の中身のことについては、またべつのこととして……、や

はりひとつ、すぐく気になることがありますよね？　そう、アルファズレドのことです。ワットの黒き王。アークランドいち、れいこくで、なさけようしやのない悪者といわれている、あのアルファズレドが、かつてアルマーク王たちとともに、仲間として、友として、いっしょに戦ったといいました！　それがなぜ、今はこんなことに……？　その思いを感じてか、アルマーク王がロビーとライアンにいいました（ベルグエルムとフェリアルは、とうぜん、むかしのその旅のことをすでにきいて知っていました。ですがロビーはまだ、その旅のことを知りませんでしたし、そしてライアンも、まだ父のメリアンから、そのことをきかされていなかったのです（きいてたら、もつと、メリアン王のことをだいにじにしたかもしれないかもしれませんが……）。

メリアン王は、自分がかつて、このアークランドをすくうたいへんな冒険の旅に出たのだということを、ライアンにはあえてだまっていた。たぶん、いったらライアンは、「ぼくもいくー！」といい出すにきまっていましたので……。そのためメリアン王は、お城の者たちにも、シープロンドのまちの人たちにも、「ライアン王子の身の安全のために、かれにはこのことを、だまっているように」とねんをしてお守らせていたのです。

つまりこういったわけで、この場にいる者たちの中で、りゆうたいじの旅のことで、アルファズレドのむかしのことを知らなかったのは、ロビーとライアンのふたりだけでした。それと、すいません。読者のみなさんもでしたね。

ちなみに、ライアンは、自分にそんなだいな旅のことをずっとないしょにしていたメリアン王に、今めらめらと、怒りのほのおをもやしていました。そして、「シープロンドに帰ったら、いちばんにひっぱたいてやる！」ときめたのです。メリアン王、ピンチ！。

「アルファズレドは、しはいの道をえらんだのだ。」
アルマーク王はそういつてかなしみ、うなだれました。

「わたしたちがたいじしたりゆうは、ある品物を持っていた。それは、じゃあくなりゆうの、しはいの力をひめた、黒いおそろしいメダルだった。それを見つけたわたしとアルファズレドは、そこで、おた

がいの道をたがえることとなったのだ。わたしは、『そんなものはすてろ。』といった。だが、アルファズレドは、それを取った。そしてわたしに、こういったのだ。『おまえがのぞむのは、このアー克兰ドの、とういつ。だが、それは、夢物語だ。この世界では、そんなあまの考えなどは通じない。おれは、この力で、しはいの力で、このアー克兰ドのことをまとめ上げてみせる。』とな。」

それから、アルファズレドは、りゆうのそのおそろしい力で、このアー克兰ドのことをしはいしようとしてきました。それこそが、このアー克兰ドのことをまとめ上げ、あらそいのない世界を作って、人々のことをすくうための、ただひとつの方法だと信じたのです。

へいわにまとめ上げるのも、力でいうことをきかせるのも、同じ、とういつ。アルファズレドは、こうして、ほかの三人の仲間たちとはちがう道を進んでいきました。仲間たちにとって、それは、とてもかなしいことでした。

「アルファズレド。あの若者が今、さまざまな悪さをはたらいてるのは、ざんねんなことだ。だが、やつにはやつ、道があるでいう。」ノランが、アルマーク王の方をむいていました（いったいいくつなのか？ わからないほどのねんれいのノランにとっては、アルファズレドもまた、ただの「若者」にすぎなかつたのです）。ノランの言葉に、アルマーク王はふくぎつな思いで、小さくうなずきました。

「さて、ロビーベルク。かんじんなことは、そのネックレスが今、おぬしの首にあるということだ。」ノランが、ロビーの方をむいていました（そうでした。ちよつと、むかし話に話がそれてしまいました。今問題なのは、ロビーのこのネックレスのことでしたね）。

「精霊王は、それを渡すときに、こういったそうさだ。『このネックレスは、おまえたちの世界と、われらの世界とを、つなぐもの。おまえか、おまえのしそんか？ こんなんがおとずれたとき、このネックレスをもちいて、われらの助けをこうがよい。』とな。そしてムンドベルクは、おぬしを守るため、そのネックレスを使い、精霊王のもとにおぬしをあずけたのだ。』」

精霊王のネックレス。このネックレスのおかげで、ロビーは精霊王

のもとへゆき、そしてそこで、守られることとなったのです。このネックレスは、いわば精霊王のいるひみつの世界へのとびらをあけるための、かぎのようなものでした。

精霊王の住む世界。そこは絵本の中だけにそんざいするはずの、おとぎの世界でした(今いるこの場所、アークランドも、みなさんにとつてはかんぜんにおとぎの世界ですが……。精霊王の世界は、その中でも、さらにおとぎの世界でした。ややこしいですけど)。ロビーがかなしみの森のとしよかんで読んだ「精霊王のふしぎのくに」という絵本では、主人公の女の子が精霊王のトンネルを通って、ふしぎの世界へとまよいこむのです。そこはイーフリープとよばれる世界で、そこでは、きせつも、重さも、時間さえも、すべてが精霊王の思うがままに動きました。

ノランのいうことには、このネックレスはあるとくべつな場所での力を使うと、精霊王の住むイーフリープ世界への入り口がひらくそうでした。そのとくべつな場所というのが、精霊王のトンネルだったのです。

そのむかし、ムンドベルクとアルファズレドがぐうぜん見つけたという、精霊王のトンネル。それはふつうの人にはまったく見えませんが、どこにあるのかもまったくわかりません。ですがノランは、そのトンネルがどこにあるのか? 知っておりまし、そしてその場所を、ネックレスを受け取ったムンドベルクとアルファズレドにも、教えていたのです。いつかこのネックレスを使いたいときがやってきたのなら、そこへいけと(ところで、精霊王のトンネルはこのアークランドの中にも、いくつかそんざいしていたのです。ムンドベルクが教えてもらったのは、レドンホールからほど近い、山のたきの中でした。アルファズレドも、ワットの北東部、岩だらけの土地の中にあるトンネルを教えてくださいましたが、かれはこのネックレスを使う気などは、ぜんぜんありませんでした。アルファズレドは、精霊の力などにたよりません。かれの信じるものは、りゅうのメダルのしはいの力、そして、みずからの力のみだったのです。かれがもらったネックレスは、今でも、ワットの王城のどこかのひき出しの中に放つてある

はずです。なんてもったいない！ それを知ったらメリアン王は、きつとこういうことでしよう。「いらぬなら、ちようだい！」。

こうしてムンドベルクは、ロビーを精霊王のもとへとたくしました。アー克蘭ドを守るため。そのきゆうせいしゅを守るため。そしてなにより、わがあいするむすこ、ロビーベルクを、悪のその手から守るために……。

「それからぼくは、どうなったんですか？ なぜ、かなしみの森に……？」ロビーがノランにたずねました。ここがもつとも、大きなギモンでした。

「ぼくには……、ぜんぜんきおくがない。」

ロビーのといかけに、ノランは「ふむ。」とひげをなでおろしてから、こたえます。

「精霊王は、すべてを知っておるといふことだ。おぬしの、その運命のこともな。」

ノランはロビーの目を見すえながら、つづけました。

「このくにのゆくすえは、これからきまることだ。精霊王も、ゆれ動くみらいのことまでは、いいあてることはできん。それを知っていたからこそ、精霊王は、おぬしを、おぬしの運命の中へと送り出したのだ。」

「だからぼくは、かなしみの森に……」ロビーがいました。

「そうだ。」ノランがこたえます。「おぬしが十さいのとき、精霊王は、このアー克蘭ドのみらいを見た。それは、光とやみ。ふたつの世界だ。光が勝つか？ やみが勝つか？ それはまだ、だれにもわからん。光とやみは、つねに、ふたつでひとつだからのう。それにけつちやくをつけるために、精霊王は、ロビーベルク、おぬしをきゆうせいしゅとして、もとのアー克蘭ド世界の中へともどしたのだ。おぬしがレドンホールのいい伝えにあるきゆうせいしゅであるということとは、もちろん、精霊王も知っておったからな。そしてそのことは、精霊王の口から、ムンドベルクにも伝えられていた。だからこそムンドベルクは、なおのこと、おぬしのことを、ひつしに守ろうとしたのだ。」

そうです、ムンドベルクが「わがむすこロビーベルクこそが、いい

伝えのきゆうせいしゆなのだ」と知っていたのは、ほかでもない、精霊王ほんにんから、そうつげられたからでした。なんでも知っているという、伝説の精霊王。その精霊王から、ちよくせついわれましたから、こんなにしんらいのできることはありません。親が、子を守ろうとする気持ち。そしていい伝えのきゆうせいしゆのことを、守らなければならぬという気持ち。その両方をたくされたムンドベルクの思いは、どれほどのものだったのでしょうか……？

「おぬしは、イーフリープから、かなしみの森のあるアークランドの北の地へと、はこばれた。あの地には、いにしえのじだいから、守りの魔法の力がはたらいとったからだ。精霊王は、その魔法をさらに強いものとし、あの地をイーフリープ世界と同じほどの、守りの場とした。このアークランドでも、それができるのは、あの地を置いてほかにない。あの地の中にいるかぎり、いかに強力なまじゆつとして、おぬしのいばしよを見破ることは、かなわんだろう。いくら、アーザスとてもな。おぬしとその腰の剣は、こうして、悪の目からのがれつづけながら、運命のときを待つことができたのだ。そして、おぬしは今、ここにいるのだよ。」

これで、すべてのなぞがつながったのです。

ロビーのかこ、そして、今……。

ロビーはここから、みらいへと歩み出すのです。

このさきに待ち受ける、自分の運命の中へと……！

「出かけるじゆんびは、できています。」

ロビーが、しゃんと胸を張って、ノランにいました。ノランはそんなロビーのことをしつかりと見すえて、静かにほほ笑んでおりました。

「おぬしには、もう、わたしの助けは、なにもいらんようだの。」ノランがこたえていました。

「おぬしはこれから、精霊王のところへゆかねばならない。剣の、そのさいごの力をわがものとする、しれんを受けるためだ。それは、

アーザスをうち破るために、必要となるものだ。」

「精霊王の、しれん……」ロビーが思わずつぶやきます。

ノランがつづけました。

「ロビーベルク。剣の力をわがものとするためには、その剣の力の意味を、よくりかいしていなければならん。いかなれば、その剣をあつかうためには、それなりのしかくが必要なのだということだ。それをりかいするためには、やみくもに動いてもだめだ。もはや、時間もないでな。イーフリープで、精霊王のしれんを受けるのが、いちばんよいだろう。」

これまで、たくさんの場面でロビーと仲間たちのことを助けてくれた、剣の力。その剣の力をしっかりと使いこなすためには、精霊王のいるイーフリープでのしれんを受けるのが、いちばんだといいました。そのしれんを乗り越えたときにこそ、はじめてロビーは、剣をあつかうためのしんのしかくを得て、この剣の、そのさいごの力をひき出すことができるというのです（それがどんな力なのか？ ということについては、のちにあきらかとなるでしょう）。

そしてその力こそが、アーザスのことをうち破り、この世界にしんのすくいをもたらすために、必要な力なのだといいました（今までの剣の力は、まだまだ、剣の力のさいしょの部分にすぎないというのです。うくん、やつぱり、このアストラル・ブレードという剣。ただものではありません。そしてこの剣の、そのさいごの力を使いこなすためのしかくを、ロビーはこれから、身につけようとしていました。それも、精霊王の待つおとぎのくに、イーフリープでのしれんによって。なんだかとおつても、かつこいいじやありませんか！ まさに、きゆうせいしゆ。主人公って感じですよね！

そして……。このしれんを受けるためにも、ロビーははるばる、このベーカールランドの地にまでやってきたのです。イーフリープへいくためには、精霊王のトンネルを通っていかなくてはならないわけですが、そのトンネルにいくためには、ロビーの住んでいたかなしみの森からは、このベーカールランドの南東部に位置するトンネルが、いちばんてきしていました。ちよくせんきよりからいえば、ワットの北東

部にあるトンネルがいちばん近かったのですが、いくらなんでも敵地のどまん中をつつきつていくというのは、リスクが大きすぎます。もしロビーがつかまってしまったのなら、元も子もありません（精霊王のトンネルがあるのは、フェアリー・ベルトとよばれる、とくべつなちいきの中にかぎられています。そのちいきはベーカーランドの南の地から東に進み、そしてそのままレドンホールとワットの東を通って、はるか怒りの山脈のほうがくにまでのびていたのです。ですからロビーの住んでいたかなしみの森をふくむ北の地には、ぎんねんながら、この精霊王のトンネルはひとつもありませんでした）。

このようなわけで、ロビーはベルグエルムたちにひきいられて、（長い冒険のすえに）まずはこのエリル・シャンディーンへとやってきたのです。精霊王のトンネルに行くためには、まずはいちど、通ることもおふかのうな山がく地をうかいして、このエリル・シャンディーンの地を通っていくのが、いちばんの近道でしたから。それにこれはもうすこしあとで語られますが、エリル・シャンディーンで、必要な人員のちようせいをおこなう必要もありましたし）。

「わかりました。」ロビーがいました。

ノランはそのロビーの言葉にまんぞくしたように、ゆっくりとうなずいてみせました。

「そのあとのことは、精霊王が、おぬしをみちびいてくれることだろう。怒りの山脈への、いき方もな。さて、まずは、イーフリープへのいき方だが……」

ノランはそういつて、ちよつとむずかしい顔をしながら、ひげをととのえていました。なにか、問題でもあるのでしょうか？

「このエリル・シャンディーンから、さらに南東へくだった地に、精霊王のトンネルがある。まずは、そこへむかうのだ。だが今、そのトンネルも、力のバランスがくずれてしまつていてのう。あけるのは、ちと、とくべつな力が必要でな。」

とくべつな力？ それはいったい、どんな力なのでしょう？（まさかまた、ライアンみたいに、どつかくん！ って吹き飛ばすんじゃないのですよね……？）

「精霊王のトンネルは、精霊の力に守られておる。宝玉の力が弱まった今、その入り口は、精霊たちの力によつて、かたくとぎされてしまったのだ。かれらの世界が、よこしまなる力に、そまってしまわぬようにと。もはや、そのネックレスの力だけでは、精霊王のトンネルをひらくことは、できん。精霊がとぎしたトンネルをあげるためには、また、ほかの精霊の力が必要なのだよ。」

「なーんだ、そんなことか。」ノランの言葉に、ライアンが飛び出していいました。「だったら、ぼくにまかせてよ！ シープロンドいちの精霊使い、ライアンさまの手にかければ、そんな入り口の、ひとつやふたつ！」

そうです、精霊のことなら、ライアンにまかせるのがいちばんですよね！（ライアンの言葉には、だいぶ大げさなところがあるようですが……）ロビーも、「そうだ、ライアンならだいじょうぶ」と思っていました……。

「いや、精霊使いではだめなのだ。あの入り口は、精霊そのもの手によつてしか、あけることはできんので。中の世界とこちらの世界とは、かんぜんに切りはなされてしまつておるから、入り口をあげるためには、そこから、精霊の力によつてあけるしかないのだよ。」

ノランの言葉に、ライアンは「え？」といつて、ロビーと顔を見あわせてしまいました。ふたりとも、ノランのいつていることが、よくわからなかったのです（精霊使いがだめで、精霊ならよくて……はつきりいつて、わたしにもわかりません！）。

「ぼくが精霊にたのんであけてもらえば、おんなじことじゃない。」ライアンがいました。ノランは首を横にふつて、いいました。

「精霊王のトンネルをあけることができるのは、それだけの力を持った、精霊だけなのだ。水や、風や、火の精霊たちでは、たばになつてかかつて、だめだ。せめて、やみの精霊ほどの力がなくてはな。おぬしは、やみの精霊に、入り口をあけてくれとたのめるか？」

「う、うぐぐ……、それは……」

ノランの言葉に、ライアンはかえす言葉もありませんでした。なるほど、精霊使いではだめだといったノランの言葉には、こういうわけ

があつたんですね。あのおつかないやみの精霊たちに、そんなことをたのむなんてこと、それこそ、むりなそうだんというものですもの！（前にやみの精霊の谷をすんなり通してもらえたのは、精霊王がかれらに「通してやってくれ」とたのんでいたからなのであって、それはほんとうに、とくべつなことでした。精霊王ならまだしも、やみの精霊たちに「トンネルをあけてくれ」なんてたのんだとしても、いうことをきいてくれるはずありません。いくら精霊王に会いにくためだといつても、アークランドをすくうためだといつても、むりでしょう。人の住む世界のできごとは、かれらには、かわりのないことなのです。でも、けつしてかれらは、悪者なのだというわけではありません。光に力を与えるためには、また、やみの力も必要。かれらは人の世界にかかわることをせず、ただじゅんすいに、やみの世界を守りつづけているだけなのです。

ところで……、読者のみなさんの中には、こう思った方もいるかもしれませぬ。そんなめんどうくさいことしなくても、精霊王ほんんに、「トンネルをあけてくれ」ってたのめないの？ っ。もちろん、それができたら、いちばんかんたんなんですけど……、じつは精霊王は、みずからその力をおよばせて、その世界の者をイーフリープ世界の中にまねきいれるようなことをすることは、できませんでした。これはイーフリープ世界とアークランド世界とのあいだで、「取りきめ」として、はじめからさだめられていたことでした。イーフリープ世界の者は、その世界の者をみずからイーフリープ世界の中にまねきいれたり、その世界の者のおこなうことに、ちよくせつ手を出してあやつるようなことを、してはならないときめられていたのです。

いぜんムンドベルクとアルファズレドが精霊王のトンネルに行くわしたのは、ほんとうにぐうぜん、その場所にトンネルがひらいたからのことなのであって、精霊王がかれらを、まねいたというわけではありませんでした。精霊王というのは、ほんとうに、人の世界のことには、かんたんに力をおよばせていいそんざいではなかつたのです。精霊王が、むやみにその力をおよばせてしまえば、この世界のバランス

は、大きく変わってしまうことでしょう。そのため、こちらから力をつくして精霊王に会いに行くのであれば、問題はありませんでした。精霊王の方から、こちらのおこないに手を出してむかえいれるようなことをすることは、いくら世界のいちだいじのこのときであつても、できませんでした。トンネルの入り口をずっとあけたままにしておいてあげる、というのも、精霊王が自分でみんなをイーフリープにまねきいれているのと、おんなじことになつちやいますしね。なんだかずいぶん、ややこしいんですけど……。

ちなみに、たとえ精霊王でも、みずから自分のところへやつてきた人物に対しては、ネックレスなどの小さなおくりものや、じよげんを与えるくらいのは、できたのです。それはその者のおこないにちよくせつ手を出すわけではありませんし、それを受け取つた者が、それでなにをするのか？ ということについては、すべて相手に、ゆだねられているからでした。そして同じく、やみの精霊たちに「ロビーたちのことを通してやってくれ」とたのんだのも、ロビーたちはべつに、精霊王のおかげでやみの精霊の谷にはいつていくことができたというわけではなく、自分たちでみずから、谷にはいつていったのです。ですから精霊王がロビーたちのおこないに手を出して、かれらの動きをあやつつたというわけではありませんし、谷を通ることができるといふにしろ、そのあとそれを、どうかすのかは、すべてロビーたちにゆだねられていました。うくん……、やっぱりかなり、ややこしいですね……。

そしてライアンはまたマリエルに、「わかつたら、ひっこみなよー」といわれて、ひきもどされてしまいました。ですがこんかいばかりは、ライアンも、しゅんとして、おとなしくしていたのです。ですからマリエルも、「あれ？ ちよつと、いいすぎちやつたかな……。」と心配しました。

「それじゃ、どうすれば……」ロビーがノランにたずねました。「心配せずともよい。ちゃんと、入り口をあけられる男を、知っておるからの。」

ノランの言葉に、ロビーもライアンも、え？ という顔になりました。

た。精霊じゃなくちゃあけられないといったのに、あけられる男つて、どういうこと？

「かんとんなことだ。」そんなふたりにむかって、ノランがさらっといいました。「その男が、精霊なのだよ。」

ええっ？ 精霊の男？ なんだかますます、わけがわかりませんけど……。

「名を、リズ・クリスメイデインという。リズは、失われたシルフィア種族の、まつえいなのだ。シルフィアは、精霊の一族。すがたかたちは人間だが、中身は精霊、そのものなのだよ。」

なんと！ そんな種族の人がいるんですか！ このアークランドには、まだまだ、おどろきの種族の者たちがいるものです。つまりその人は精霊だから、その人にたのめば、イーフリープへの入り口をあけることができるということらしいのでした（しかも精霊王のトンネルをあけられるというのですから、かなり力のある精霊のようです。やみの精霊たちみたいに、おっかなくなければいいんですけど……）。

「リズ・クリスメイデイン。かれは、もともと、このエリル・シヤンデインの剣じゆつしなんやくでした。」ベルグエルムがロビーにいきました。

しなんやくというのは、人にそのわざを教える、先生のことです。リズは、剣じゆつ、つまり、剣のわざを教える先生だったのです。ということとは、かなりのうでまえのようですね。でも、精霊と剣。あんまりむずびつかないような気がします……（ちなみに、リズはライラとごかくに戦うことのできる、ただひとりの相手でした。ということとは、やっぱりただ者ではありません。なにせライラは、このベーカーランドでさい強でしたから！）。

「じゃあ、リズさんに入り口をあけてくれるように、たのめばいいんですね。そのリズさんは、今どこに？ 近くに住んでるんですか？」ロビーがたずねました。

「いや、それが……」ベルグエルムが、言葉をにごします。フェリアルとふたり、顔を見あわせて、なんだか変なようすでした。

「リズは、二年前、『おれは音楽にすべてをささげる！』といて、こ

の城を出ていってしましまして……。それらしい、ベーカールランド南東部の、けわしい山の中に、こもってしまっているんです。なんでも、静かなところじゃないと、作曲ができないそうで……」

な、なんと！ 剣じゅつしなんやくから、音楽家！ ずいぶんと、思いきりのいい人のようですね！ って、それはいいとして……。今は、リズさんの住んでいるところが問題です。けわしい山の中ですって？

「たいしたことではない。」ノランがいました。「ここからでも、歩いて二時間もすればつく。ほんとうなら、さいごまで馬でいきたいところだが、なにせ、やつの住んでいるところは、だんがいぜつべきの上でな。馬では、のぼれんだ。それに、馬がいると、はらをすかせたガウバウどもに、すぐにくわれてしまうからのう。」

ノランはそういって、ゆかいゆかいといったふうに、「はつはつは！」と大声で笑いました。って、かなりたいしたことあるじゃないですか！ ぜんぜんゆかいじゃないです！（ガウバウというのは、おおかみににたきようぼうなけものことで、このけものは十数ひきものむれをなして、えものにおそいかかるのです。こんなおつかないけものが、リズの住んでいる山には、たーくさん、いるらしいのです。やっぱり、ゆかいじゃないです！）

「あ、あの……。けつこう、たいへんなところみたいなんですけど……。どうすれば、リズさんのところまでいけるんでしょうか？」ロビーが（とつても）不安げにたずねました（とうぜんですね）。

「ん？」ノランがきよとんとした顔をして、こたえます。旅なれた大けんじやであるノランにとっては、だんがいぜつべきも、危険なガウバウというけものも、ぜんぜんふつうの、にちじょうの相手にすぎませんでしたから。

「おお、そうか。」ノランがすまんすまんといったふうに、手を上げていました。「おぬしは、魔法が使えんのだったのう。」

そのとき。

「ぼくに、おまかせください。」

そういつて前に進み出たのは、マリエルでした。ケープの両方のは

しっこを、両手のゆびさきでちよこんとつまみ上げて、かわいらしいかつこうをしてみせます(うしろではライアンが、「うわー! あざとい! あざとい!」とぶーぶーいつてましたが……)。

「そうだ。そのためにも、マリエルにたのんでおいた。」ノランがつげました。「こんかいの道のりについて、おぬしをあんないするようにと、たのんでおいたのだ。マリエルなら、まったく、安心して下さいようぶだぞ。なにしろ、わたしのでしだからのう。強いのかなの。」

ノランはそういつて、また「はっはっは!」と大声で笑いました(よく笑う人ですね……。そしてこのマリエルのそんざいこそが、さきほどわたしが申し上げました、このエリル・シャンデインでの必要な人員ちようせいでした。リズのところ、そして精霊王のトンネルのところへとロビーのことをみちびく、こんかいのこのとくべつなにんむについては、アルマーク王とノランは、ゆうしゅうなまじゅつであるマリエルに、たくすべきだとはんだんしていました。もはや、ベルグエルムたち白の騎兵師団の者たちも、ワットとの戦いにおもむかなければならないときでしたし、きゆうていまじゅつしがひとり、この場からしばらくはなれることにはなってしまうますが、この重要かつ危険なにんむをまかせるのには、まさにマリエルが、てきにんであるとはんだんしたのです(やはりこんかいもアルマーク王は、ぎりぎりのせんたくをしていたわけでした)。

それはそうとして……。こんかいの、リズのところへといくという、このにんむ。読者のみなさんの中には、こう思った方もいるのではないでしょうか? わざわざこちらからリズのところまでいかなくても、あらかじめリズのことを、お城までよんでおけばよかったじゃないかって。それもたしかに、ひとつの手でした。ですがそこには、ノランとそのでのマリエルによる、ひじょうにたくみにねられた計算があつたのです。

それはどういう計算か? といいますと……。説明するのがいやになるくらい、ひじょうに長くて、めんどろくさいものでしたが、やっぱり説明しておかないわけにはいきませんね。ここでわたしは、マリ

エルからきいたその計算の内ようについて、ノートにきろくしたことを、そのまま、ここに書きとめておきたいと思います。長いうえにややこしいですから、あらかじめ、そのつもりでかくごをお願いしておきます。

まず精霊王のトンネルにむかうまでの道のりは、ふたつあったということ。これはエリル・シヤンデーインの南にあるトンネルと、リズの家の南東にあるトンネルの、ふたつでしたが、じつはこれらのトンネルにいくまでのきよりと時間は、ほとんど同じでしたので、その点からいえば、どちらのトンネルをえらんでもいいわけでした（お城南のトンネルにいくためには、時間をせつやくするため、あらかじめリズをお城までよびよせておく必要がありました、それは問題のうちにははいりませんでしたので、取りのぞきます。よべばいいだけのことですから。

また、リズの家の南東のトンネルまでまっすぐいくルートと、リズの家立ちよつてからそのトンネルまでいくルートでも、地形的にはほとんど同じ時間でいけました。ですからやっぱり、その点からいっても、お城南のトンネルとリズの家南東にあるトンネルは、どちらをえらんでもよかつたわけです。

しかし、お城南への道のりには、それいがいの点で、わずかばかりの問題が。

この道のりは、けわしい山道でしたが、そこには「じきあらし」、つまりじしやくの力と同じ力を持ったしぜんのが、吹き荒れるかのうせいが、わずかにあるということでした。そのかくりつは、マリエルの計算によれば、八パーセント。このあらしにそうぐうしてしまふと、山道に足どめをくつて、マリエルほどの者が魔法をたくみに使いこなしたとしても、よけいな時間をついやしてしまふおそれがあるということだったので。

そして、リズの家南東にあるトンネルにいくための道のりにも、わずかばかりの問題が（ガウバウたちの問題は、ゆうしゆうなまじゅつであるマリエルなら、なんの問題でもなかつたので、取りのぞきます。なにしろマリエルは、ノランのでしでしたから）。

じつはガウバウたちのいるがけの道にたどりついてから、そのあと
の道のりには、なんの問題もありませんでしたが、問題があったのは、
そこにたどりつく前の道。その道にはあるエネルギーがそんざいし
ていて、そこをシルフィアであるリズほどの強力な精霊エネルギーを
持った者が通ると、その精霊エネルギーに道のエネルギーが反応し
て、精霊エネルギーのひずみが生まれてしまうかのうせいがあるのだ
ということでした。そのかくりつは、マリエルの計算によれば、十二
パーセント。このひずみが生まれると、どうなるのか？ というと、
そのエネルギーによって、あたりいちめんに空飛ぶくらげのような生
きものがあらわれて、道をすっきり、うめつくしてしまうのだそうで
す！ そうなると、マリエルほどの者が魔法をたくみに使いこなした
としても、まるで水の中を進んでいるかのように、動きがにぶくなっ
てしまつて、たいへんな時間のロスになってしまうのだそうでした
(この道をさけて通れば、それも時間のロスになりますしね)。

ですが、精霊エネルギーのひずみについてのこの問題は、あくまで
も、シルフィアほどの精霊エネルギーを持つている者にかんしての
話。ふつうの者であれば、この道は、なんの問題もなく通ることがで
きたのです。

つまり、こういつたわけで……、「八パーセントぶんリスクをすくな
くすることのできる、リズの家の南東のトンネルをめざすルートを進
み、そのためにリズには、自分の家で自分たちがいくまで待っている
ようにと、手紙でしじを出しておく」という、こんかいの、このけい
かくにいたつたというわけでした。まったく、なんとという計算のねり
ようなのでしょうか！ (どんな計算によつてパーセントの数字を出し
たのかは、さっぱりわかりませんが……) さすがはまじゅつし。頭が
よろしい。

それともうひとつ、だいじなこと……。精霊王のトンネルをあける
ためにリズの力が必要だという、こんかいのこのことについては、
きゆうきよ、エリル・シャンディーンにノランがやってきた、そのあ
とになってからわかつたことでした。ロビーがイーフリープで精霊
王のしれんを受ける必要があるのだということは、いぜんからしう

ちしていたことでしたが、今まではただ、ロビーの持つネットワークスの力さえあれば、イーフリープまで、問題なくいけるはずだったのです。ですが、ここにきて急に、そうていがいの問題が起こってしまいました。それは、そう、ノランもいつておりました通り、精霊王のトンネルが精霊の力によって、かたくとぎされてしまったということだったのです。

これはじつは、アークランドにやってきたノランが、ねんのためにしらべてみたことよって、はじめてわかったことでした（はなれたところからでもそれがわかるほどの魔法を使うためには、やはりノランほどの力が必要でした。ベーカーランドのきゆうていまじゆつしたちにも、マリエルにも、まだ、それほどのはきは使えなかつたのです）。それによれば、トンネルがとぎされたのは、ごくさいきん、つい数日ほど前のことだつたというのです。これでは、さすがのノランでも、マリエルでも、だれにだつて、よそくのできないことでした（まったくもつて、きんきゆうじたいでした）。

ですからリズのところへいくこんかいのこの道のりのことは、とつぜんにきまつたことなのであつて、そのためマリエルは、ノランに急ぎたのまれて、魔法の手紙をノランのやつてきたきのうの夜のうちに、リズのところへと送つたというわけなのです。以上、説明コーナーでした）。

「ノランさんは？ ノランさんがつれてつてあげたらいいじゃん。こんな、ちびっ子じゃなくてさ。」

うしろの方から、ライアンがいじの悪ーいい方でいいました。マリエルがロビーのあんないをするときいて、ライアンはぜんぜん、おもしろくなかつたのです（とうぜんマリエルがすかさず、「きみだつて、ちびっ子じゃなか！」といいかえしました。まつたく、これではふたりとも、まさにどんぐりのせいくらべですな……。ロビーがあわててふたりのあいだにはいつて、とめました。やれやれ……）。

「わたしはすぐに、出かけなくてはならん。」（ちびっ子たちのさわぎをよそに）ノランが急にいいました（あんまり急でしたので、みんな、とてもびっくりしてしまつたものでした）。

「もうだいぶ、時間がすぎてしまったからの。すまんが、ここからさきの道は、おぬしとマリエルの、ふたりでいってもらいたい。」

ノランはロビーにそういって、肩から下げたかばんをひよいとしよいなおします。どうやらほんとうに、今すぐ出かけてしまみたいでした。

「ノランどの、これからどちらへ？」ベルグエルムが、あわててたずねました。やっぱりこんども、ノランとゆっくり話しをすることは、できないみたいでしたから。

「うむ。」ノランがこたえます。「リュインとりでのことは、きいておるよ。痛ましいことだ。リストール・グラントは知っておるな？」

「そんなけいすべきしきかんです。」ベルグエルムがこたえました。

リストール・グラントというのは、リュインとりでのことをまかされていた、ベーカークランドのしきかんでした。もちろんベルグエルムもフェリアルも、かれのことはよく知っていたのです。アークランドの北の地へ、ロビーのことをむかえにいく、そのときにも、かれらはリュインとりででかれに会っていました。そして、とりでが落とされた今。リストール・グラントしきかんは、ほかの兵士たちやレイミールと同じく、ぶじでいるのかどうかさえも、わからなくなっていました。

「さいごの戦いでは、かれのそんざいが、大きな意味を持つこととなろう。わたしも、できるかぎりすることはさせてもらう。とにかく今は、時間がなによりもたいせつだ。」

ノランはそういって、ベルグエルム、フェリアルと、かたくあくしゆをしました。

「おぬしたちは、すばらしいはたらきをしてくれた。これほど早く、きゆうせいしゆをこの地に、みちびいてくれたのだからな。おぬしたちのはたらきは、このアークランドの運命を、大きく変えることになるだろう。」

ノランの言葉に、ベルグエルムとフェリアルは、すっかりきょうしゆくしてしまいました。大けんじやノランにこんなほめられるなんて、たいへんなめいよでしたから(それをかぎつけたライアンが、

うしろで「ちよつと！ ほくは？ ほくは？」とノランにもんくを
いつていました。

「これからの道のり、おぬしたちには、おぬしたちの、大きなやくめ
がある。だれにもかわりはつとまらん。ベーカーランドを、たのむ
ぞ。」

そしてノランは、さいごにロビーにいました。

「ロビーベルク。わたしができることは、ここまでだ。あとは、おぬ
しが、道を切りひらいていかねばならん。つらい旅になるやもしれ
ん。だが、おぬしなら、きつと、そのもくてきを果たすことだろう。」
こうしてノランは、その場にいる者たちにえしやくをして、での
マリエルの肩を手でぽんとたたいてから、去っていったのです（去っ
ていくノランを見ながら、フェリアルが「ああー、いっちゃった……」
とベソをかいて、ライラにおしりをたたかれ、「しつかりせんか！」と
しかられていましたが）。

大けんじやノランが旅立ちました。

残された者たちは、これから、どう動くのでしょうか？

風の吹きぬける小さな青いとんがりやねの下に、みんなは立ってい
ました。ノランが去った今、これからのことを、みんなは急ぎ、かく
にんしなければならなかったのです。

「ベゼロインからのほうこくでは、黒の軍勢の本隊は、すでに、リュ
インの東までやってきているそうだ。」ライラが、ベルグエルムにい
ました。「われらはすぐに、ベゼロインへはいらねばならぬ。」

「でも、ロビーどのは……」となりのフェリアルが、心配そうにたず
ねて、ロビーの方を見ます。

ライラのいう通り、ベゼロインとりでに黒の軍勢がせめこんでくる
のも、もう時間の問題でした。ベルグエルムや、フェリアル、ライラ
は、白の騎兵師団のしきかんです。ベゼロインとりでを守るため、ど
うしても、みんなのしきをとって戦わなければなりません。ひじょう
にぎんねんなことですが、ロビーのさいごの旅に、かれらがいつしよ

にいくことはできないのです……。それは北の地にロビーのことをむかえにいくという、そのにんむをはじめの前から、わかっていたことでした。でも、ベルグエルムとフェリアル。このふたりにとって、今ロビーだけをこのさいこの危険な旅に送り出すということは、とてもつらいことになっていたので。読者のみなさんには、もうそのりゆうをいうまでもないでしょう。かれらにとって、ロビーはもはや、きゆうせいしゆ、それ以上に、たいせつな仲間でしたから（とくにフェリアルは、とつても心配しようでしたので、ロビーのことが気がかりでなりませんでした）。

「ぼくは、だいじょうぶです。」ロビーが、にっこり笑っていいました。「マリエルくんもいるし、ちゃんとリズさんのところまで、いけますよ。」

フェリアルが、そのロビーの言葉にこたえる前に……。

「ぼくもいるよー！ ぼくも、いっしょにいく！ ロビーは、ぼくがないとだめなんだから。」ライアンがロビーのとなりにやってきて、そのうでを取っていいました（すぐにマリエルが、「ぼくひとりでへいきだよー！」とつつぱねたので、またふたりでなかよく、わーわーのはじまりです）。

「いや、待ちなさい。」そういったのは、アルマーク王でした。アルマーク王は、ロビーといっしょにいくといったライアンに対して、そういうたのです（ライアンはマリエルの服をひっぱりながら、「え？」といて王さまの方を見ました）。

「ライアン王子、そなたは、わがベーカーランドの、ひん客だ。」アルマーク王がていねいな方で、いいました（ひん客とは、たいせつなお客さまという意味です）。

「ベーカーランドとしても、めいゆう国シープロンドの王子を、これ以上、危険な目にあわせるわけにはいかぬ。そなたは、このエリル・シャインディーンに、とどまってほしい。」

アルマーク王はきわめておちつきはらって、そういいました（アルマーク王はなんととなく、友のメリアン王から、ライアン王子のことをきかされていたのです。かわいいけれど、わがままで、あつかいづ

らいということ。そして、かわいいけれど、きげんをそこねさせないように、じゆうぶんな注意が必要、などということでした……。ですからアルマーク王は、ライアンになつとくしてもらえるりゆうをよく考えて、しんちように言葉をえらんで、そういったのです。

アルマーク王のいったことは、まったくベーカーランドの王さまとして、正しい言葉でした。ほかのくにの王子さまを、わがくにが危険な目にあわせるわけにはいかない。とどまってほしいとたのんだそのりゆうも、じつにたんじゆんめいかい。だれでもなつとくのいく、わかりやすいりゆうです。ですが……。

ライアンに、それが通じるでしょうか？　ライアンが、「わかりました。ひっこみます。」とすなおにいうでしょうか？　みなさんなら、すぐにこたえは出ますよね。

王さまの言葉をきいて、ライアンは（マリエルから手をはなして）につこり、笑いました。

ぞぞぞぞー！　そのとたん、その場にいるロビー、フェリアル、ベルグエルの三人は、心の底からきようふしたのです！　ライアンがこの笑顔を見せたときは……。そう、きげんをそこねて、とんでもなくおそろしいことを考えているときでした！（相手が王さまだろうか、なんだろうか、ライアンならやりかねません！）

「王さま。」ライアンはアルマーク王に歩みよって、にこにこしながら、その顔を下からいたずらっぽくのぞきこみました（マリエルに負けじと、かわいらしいしぐさをつけ加えます）。

「王さまは、シープロンじゃないですよねー？　わがシープロンドでは、シープロンのことは、シープロンできめるっていう、すてきなでんとうがあるんです。知ってましたー？　ところでこれ、父からきいた話なんですけど……。うふふ、王さまってー……。」

そのときアルマーク王は、ライアンになにをいわれたのでしょうか？　はなれたところにいるロビーたち三人には、うしろすがたのライアンが、どんな表じようで、どんなことをいったのか？　わかりませんでした。この三人にはだいたい、そうぞうがついたのです……。アルマーク王の顔が、みるみる、まっ青になっていきましたから……。

ようするにライアンは、アルマーク王の弱みにつけこんで、王さまをおどしたのです！　なんてめちやくちやな子なんでしょう！　ベーカーランドの王さまをおどす王子なんて、ライアンがいい、ほかにいるはずありません！　うくん、さすがというか、なんというか……（このときライアンが、アルマーク王になにをいったのか？　それはこのふたりにしかわからないことでした。著者のわたしもさいごまで、このふたりの口からしんじつをきくことはできなかったのです。ライアンは「うふふ、ないしょ。」というばかりでしたし、アルマーク王は、ぶるる！　と肩をふるわせて、だめだめ！　といったふうに、手をふるばかりでしたから……。

ところで、じつはアルマーク王はロビーたちがエリル・シャンデインにやってくる前、シープロンドのメリアン王から、でんれいの鳥の手紙を受け取っていました。それにはハミールとキエリフのべつ行動のことなどに加え、こんなこともいっしょに書いてあったのです。

「むすこのライアンがそちらにいくらしいので、よろしく。手あつい、ほごをたのむ。けつして、危険なところへとむかわせないこと。やくそくを守れなかったら、どうなるか？　わかつてるよね？　ね？」

この手紙を読み終えたとき、アルマーク王はしばらく、頭をかかえて動けなかったそうです……。メリアン王の言葉。いいつけを守れなかったらどうなるのか？　それは読者のみなさんのごそうぞうにおまかせします……。どうやら、アルマーク王とメリアン王のあいだにも、なにかいろいろ、あるみたいですね。メリアン王、そしてそのむすこのライアンにまで、いいようにあつかわれてしまつて、うくん、かわいそうなアルマーク王……。

ちなみに、この手紙の内よりのことは、ごくひでしたので、アルマーク王はこのことを、デルンエルムがいい、兵士たちにも伝えていませんでした。ですから、ハミールやキエリフがべつ行動を取っていると、そしてシープロンドのライアン王子がきゆうせいしゅといっしょにやってくるということなども、みんなはまだ、知らなかつ

たというわけだったのです。やはり、たとえしんらいのおける兵士たちであるとはいえ、よけいなうわさが広まってしまいかねないようなことは、王さまとしても、さけなければなりませんでしたから。

「よかった。ありがとう、王さま。」

ライアンがそういつて、るんるん！ とこちらに歩いてきました。まんめんの笑顔です（こんどはほんとうの笑顔でした。フェリアルはまだ、おっかながって、ベルグエルムの背中にぶるぶると張りついていましたが……）。

「な、なにを話してたの……？」「ロビーがおそるおそる、たずねます。ライアンは「うん。」といて、にこにこしながら、こたえました。

「ロビーのことを、よろしくつて。ぜひ、助けてあげてほしいそうだよ。しょうがないなあ。まあ、そんなわけだから、ロビー、よろしくね。」

ライアンはそして、ロビーの腰をぼんとたたきます。

「ちよ、ちよつと！ なにをかってなことを！」とうぜんマリエルが、あわててあいだにはいつて、いいました。

「王さま、ほんとうなんですか！」

マリエルがアルマーク王をといつめました、王さまはただ、だまつて、こくこくとうなずくばかりでした……。

「そんなあー！」（マリエルは、がつくりと肩を落としてしまいました。せつかくノランおししようさまからも、「さいごの旅のことは、おまえにまかせるぞ」ときたいされておりましたに……。このときのために、ねんいりにきれいな服も用意して、つえもぴかぴかに手いれしていたのです。まさかこんな、よけいなおにもつ（ライアン）がふえちやうなんて！）

「ノランどのの思いを、つなぐ者たち。さしずめ、ノランべつどう隊といつたところか。」

小さなまじゆつしに、小さな精霊使い。ともに力のあるそんなふたりのちびっ子たちのことを見ながら、ライラがいました（べつどう隊というのは、にんむのために、本隊からはなれてべつに行動する者たちのことをいいます。この場合では、ノランが本隊、マリエルたち

がべつどう隊ということになるわけでした。

「うむ、いいではないか。ノランどののききたいに、こたえてくるがいい。」ライラはそういって、楽しそうにほほ笑みました。

「ノランべつどう隊！」ライアンが思わず、さげびます。「それ、もらった！ けつていね！ いくぞ、われら、ノランべつどう隊！ うん、かつこい！」

「きみがかってにきめないでよ！ おししようさまのでは、ぼくなんだからね！」マリエルが、ぶんぶん怒っていいました。

「どっちがロビーの助けになれるかだよ。まあ、ぼくにくらべたら、きみじゃ、まるでお話にならないのは、わかってるけど。なんとって、ぼくは、ロビーの親友なんだから。ねっ？ ロビー。」ライアンがそういってロビーのうでにだきついて、マリエルをさらに怒らせます。

「なにおーう！」

わーわーきゃーきゃー。もう、これじゃ出発前から、さきが思いやられますね……。ロビーはふたりのちびっ子たちに両方からひっぱられて、不安いっぱいに思いました。

だいじょうぶかなあ……。

かつん、こつん、かつん、こつん……。

うす暗い石のろうかをひとり、だれかが歩いてきました。やがてその人物は、ろうかのつきあたりまでやってくると、そこにある、ひとつの部屋の前に立ちどまりました。

その部屋には、ふつうのとびらはひとつもありませんでした。かわりにあったのは……。がんじょうそうな、鉄ごうし。そう、この部屋は、ろうやだったのです。

ろうやの中には、なんんかの人たちがいるようでした。その人たちは、すぐに、やってきたその人物のことに気がつきました。そしてそのうちのひとりが、怒りにあふれた声で、こういい放ったのです。

「ガランドー……この、うらぎり者め！」

ガランドー……。そう、黒いよろいを身にまとい、おうごんのつるぎをその腰におびた、こがね色のかみのしきかん。このろうやにやつ

てきたその人物とは、その言葉の通り、ワットの黒の軍勢のしきかん、ガランドー・アシユロイだったのです。では、かれのことを知っていた、ろうやの中の人物とは……？

ガランドーは、だまっただままでした。きびしい顔をして、ろうやの中の人たちのことを、じつと見つめているだけだったのです。

「なんとかいったらどうだ！」

ろうやの中の人物が、さらにこうふんしてどなります。ですが、かれのとなりにいる人物が、かれの肩に手をおいていいました。

「おちついて。ここでいいあらそったとしても、なにもはじまりませんよ。」

その人は、若い女の人でした。このものごとをれいせいにとらえた、おちついたしゃべり方。小さなからだに、白い服。ふちのない、すてきなデザインのめがねをかけていて、頭の上の両がわからは、ライアンと同じひつじの種族の者の耳が、ぴよこんと飛び出している……、ま、まさか、この人は……！

「レシリアどののいう通りだ。まずは、おちつけ、ハミール。」

レシリア！ ハミール！

そうです！ このつめたくうす暗いろうやの中にとらわれているのは、ほかでもありません。わたしたちのよく知っている、われらが旅の仲間たち。シープロンドのレシリア・クレツシエンド先生と、ルースアン・トーンヘオン。そしてウルファの騎士ハミール・ナシユガート、キエリフ・アートハーグ。そのかれらだったのです！（ハミールをなだめたのは、友のキエリフでした。）

「しきかん！」そのとき、ろうかのむこうからふたりのワットの兵士たちがやってきました。

「ただ今本隊が、丘のむこうへ、とうちやくしたとのことにございます！ しきゆう、ごじゆんびを！」

「よし。」ガランドーがれいせいな言葉で、こたえました。「ただちに、兵をむかえいれよ。リュインの二百名のほりよたちは、東のちゆうとん地へ送れ。」

「しようちいたしました！」兵士たちはガランドーのそのめいれい

を受け、急ぎ、去っていききました。

「かならず、痛い目にあうぞ。」ハミールがこんどは、ややれいせいになって、ガランドーにいました。「ベーカーランドをうらぎったことを、心からこうかいすることになる。」

ガランドーはだまったまま、ハミールのことを見ました。なにかいおうとして、その口をいっしゅんひらきかけましたが、ガランドーはそのまま、また、もときた暗いろうかの中へと、かつんこつんと歩き去っていききました。

風雲、急をつげる。今にもたいへんなできごとが起こりそうだという意味です。その言葉の通り、風も、雲も、このとらわれの者たちにいるうばわれたリユインとりでの空の上を、まるでからみあう二ひきのりゆうたちのように、うねり、さわいでいました。

ふきつなことが起ころうとしていました。

19、リズのおうちへいつちよくせん

失われゆく者たち……。このおとぎのくにアークランドでも、その運命は、すこしずつ、すこしずつ、広がっていたのです。

アークランドに住む、さまざまな種族の者たち。ぜんなる者も悪い者も、かわいい者も力強い者も、みんなそれぞれに、種族というものを持ちます。いちばんわかりやすいのが、みなさんと同じ、人間。このアークランドでも、人間はいちばんとっていいほどに、たくさんいる種族でした。そしてたくさん、動物の種族の者たち。この物語にもこれまで、じつにさまざまな動物の種族の者たちがとうじょうしてきました。物語の主人公ロビーは、おおかみ種族であるウルファの少年です。そしてかれのいちばんの友、ライアンは、ひつじの種族シープロンですよね。カピバラの老人。きつねの少年、チップ。かえるの種族フログル。あのおそろしいガイラルロックだって、このアークランドの、りっぱな種族のうちのひとつだったのです。

みなさんにはもう、今さらって感じですよ。ですが、このアークランドから失われつつある種族の者たちがいるといたら、どうでしょう？

かんきょうのへんか。住む場所がなくなつて。ほかの種族の者たちがふえたから。りゆうはさまざまなものでした。そしてそれらのりゆうは、どれを取っても、かんたんにはかいつつすることのできない、しんこくなものばかりだったのです。

もちろん、だれが悪いというわけでもありません。どこかがさかえれば、どこかがおとろえていくものなのです。それは、しぜんの運命ともいえるものでした。だれもさからえないし、だれもうらめないのです。かなしいことですが。

失われし種族、シルフィア。リズ・クリスメイデインは、その大むかしに失われたはずのシルフィアという種族の、まつえいでした（まつえいとは、しそのことです）。シルフィアは精霊から生まれた種族で、すがたかたちは人間そのものです（ちよつと耳がとんがっていますが）。すらりとはそく、美しいすがたをしていて、光かがやくその

きぬのようになめらかなかみの毛は、内なる精霊の力にあわせて、青や、みどりや、こがね色に変わりました。

シルフィアの、そのいちばんのとくちよう（とくぎといった方がいかもしれません）。それはそのすばらしい、精霊の力でした。シルフィアはそのむかし、まちがいでなく、このアーケランドでいちばんの精霊使いだったのです（精霊でしたから、精霊の力をかりるわざもいちばん強かったのです）。

今のアーケランドでいちばんの精霊使いは、やっぱりシープロンたちでしょう。ですがそのシープロンたちが、たばになってかかったとしても、むかしのシルフィア種族の者だったひとりに、かなうかどうか……（おっと、ライアンにはないですよー）。それほどにシルフィアというのは、精霊の力の強い、ほんとうにとくべつな種族だったのです（これはシルフィアが精霊から分かれて生まれたときに、もとの精霊の力をたくさん受け取ったためでした。もつとぐたい的というと、シルフィアひとりにつき、水や、風や、火の精霊たち、百万人ぶんくらいの力が、まとめてそのからだの中にそそぎこまれたのです！ ですからシルフィアが強いのも、とうぜんでした。なにせ百万人の精霊たちを、いちどに相手にしているようなものだから！）。そのシルフィアが、かんぜんはこのアーケランドからすがたを消したとされるのが、もうなん百年も前のことです。りゆうはやはり、さまざまなものでした。いちばんのりゆうは、このくにの精霊の力が弱まったということ。このアーケランドでも精霊はあまり、見かけられなくなってしまうのです。

大むかしには、精霊はあたりまえのように、そこかしこで見ることができました。精霊とふつうに、おしゃべりすることさえできていたのです。ですが今では、読者のみなさんも知っての通り、精霊はかれらの世界にかくれ住むようになり、そのすがたを見ることは、ひじょうにまれなことになってしまいました（かなしみの森の小川で、フェリアルも、たくさんの精霊たちのすがたにおどろき、感動していましたよね。ざんねんながら今のアーケランドでは、精霊を見たことのない人の方が多いのです）。

そんな中で、リズは失われたはずのシルフィア種族の、そのきちよ
うな生き残りでした。リズの一族はひっそりと、このアーケランドの
世界の中に、その血を残しつづけてきたのです。かれらは自分たちが
シルフィアであるとは、いいませんでした。ふつうの人間として暮ら
しつづけてきたのです（よけいなさわぎが起ることを防ぐためです
た）。ですからみんなも、かれらがシルフィアであるということに、気
が付きませんでした。ちよつと耳のとがった、きれいな人だな、くら
いにしか思っていなかったのです。

リズはそんなかんきょうの中で生まれ育ち、やがて、エリル・シャ
ンデーインの剣じゆつしなんやくになりました。生まれついでての剣
のさいのうが、リズを剣の道に進ませたのです（両親からは、かなり
のはんたいがあつたそうですが）。そしてエリル・シャンデーインで
のせいかつの中で、ふとリズがもらした、しようげきのひとこと。

「おれ、じつは、シルフィアなんだよね。どうでもいいことだけど。」
みんなさいしよは、ただのじようだんだと思つていました。ですが
大けんじやノランによつて、リズがたしかにシルフィアであるとい
うことがかくにんされると、お城はすっかり、大さわぎになつたのです
（まあ、とうぜんですよ）。

でも、シルフィアだろうがなんだろうが、リズはリズ。エリル・シャ
ンデーインの人たちは、アルマーク王をはじめ、リズをそのまま、今
まで通りのあつかいで、剣じゆつしなんやくとしてむかえいれていま
した（それにしても、そんなだいじなことを、とつぜんさらつという
なんて！ みんながじようだんだと思つたのも、むりもありません。
リズという人は、なんだかずいぶんと、大ざつぱというか、なんと
うか……、ものごとをあまり大きく考えない人のようですね。それが
みりよくといえ、みりよくなのでしようが……）。

リズ・クリスメイディン。この失われしシルフィア種族の者が、こ
れから、ロビーのこの物語の中にとうじようするのです。精霊王のト
ンネルをあけるといふ、そのだいじなやくめを持った、大いなる力の
持ちぬしとして。

ふたりの（強い）ちびつ子たちとゆく、これからのロビーの旅。こ

のアー克兰ドの運命をきめる、だいじなだいじな旅のはずでしたが、やつぱりなんだか、ひとすじなわではいきそうもありません。うん、いったい、どうなることやら……。

あたりはすつかり、夜でした。ロビーたちがエリル・シャンディーンのまちの門をくぐってから、二時間あまり。空のしゅやくは、おひさまから夜の星たちへと、もうすつかりいれかわっていました。塔の上に吹きつけていた風は、今ではすつかりやんでいました。雲の切れまから、夜のしゅやくの星たちが、きらきらとその顔をのぞかせておられます。だいぶひえこんできました。秋のなごりの虫たちが、りんりんといそがしそうに、その歌声をひびかせていました。

ロビーと旅の仲間たち、そしてお城の人たちが、エリル・シャンディーンのじょうへきのそとの、南へとつづく小道のはじまるその場所に、集まっていました。かれらはすぐに、出発しなくてはなりません。まだこの地についたばかりでしたが、旅の者たちには、お城でひとばん、ゆつくり休む時間さえなかつたのです。今は、旅ゆく者たち、そして見送る者たちが集まって、それぞれの言葉をかわしあっているところでした。まさに今、ここから、新しい旅が生まれようとしているところだったのです。

「じゅうぶんに気をつけるんだぞ。きゅうせいしゅどのを、しつかり守ってくれ。」

そういったのは、エリル・シャンディーンのきゆうていまじゅつしたちのうちひとり、ロクヒュー・テオストライクでした。ノランに送り出され、ロビーとともにさいごの旅をゆくことになった仲間のマリエルに、かれらは見送りの言葉をおくっているところだったのです。

「まあ、おまえなら、わたしたちが心配することもないだろうけどね。」

ロクヒューのとなりの、赤いめがねをかけたもつとしの若いひとりのまじゅつしが、そういつて笑い、マリエルの頭をぐしゃぐしゃとなでました。かれは、マレイン・クレイネルといました。ねんれい

はまだ、二十一さいです。マリエルにくらべたら年上ですが、それでもこのねんれいできゆうていまじゅつしにえらばれるのはすごいことで、かれもまた、すばらしい魔法のさいのうの持ちぬしでした（いかにも知的なエリートといった感じで、いつも自信たっぷりなところは、マリエルにそっくりです。でもそこはやっぱり年上ですから、かれはマリエルの、いいお兄さんやくでした。

そしてロクヒューもまた、マリエルのお兄さんやくであるのと同時に、たいした力のあるまじゅつしでした。ねんれいは、二十五さい。かれのとくちようは……、まじゅつし、らしからぬこと！ スリムなからだでしたが、そのきんにくはびつちりとひきしまっていて、魔法を使うまでもない相手だったら、みんなこぶしで、ぼかぼかやつつけてしまうのです！ うーん、いろんな意味で、すごい。

「ふふん、いわれるまでもないですよ。」マリエルが、おとくいの自信たっぷりいい方で、せんぱいまじゅつしたたちの言葉にこたえませんでした。

「あいかかわらず、なまいきなやつだ、こいつめー。」マレインがそういって、マリエルの頭をげんこつでぐりぐりします。口ではあくたいをついていましたが、みんなちびっ子のマリエルのことが、かわいくてしかたないといった感じでした（じっさい、かわいいのですが）。マリエルにもまた、すてきな仲間たちがいたようですね。

「これは、おまえのはじめての大しごとだぞ、マリエル。」さいごのひとり、ルクエール・フォートがまじめな顔をして、いいました（エリル・シャンディーンのきゆうていまじゅつしたちは、マリエルをいれて四人です）。ルクエールは、エリル・シャンディーンのきゆうていまじゅつしたちの長。魔法の力も、かれらの中でいちばんだったので（ねんれいはアルマーク王と同じくらい。背が高くやせていて、いかにもすごうでのまじゅつしといった感じでした。そしてルクエールは、王さまとも、とても深いつながりのある人物だったのです）。

「はい。」マリエルが、急にまじめな顔になってこたえました。マリエルにとってルクエールは、しししょうのノランと同じくらい、そんなけいしている人物だったのです（マレインも、ふざけてマリエルの頭を

ぐりぐりするのをやめました」。

「きもにめいじます。ぼくのはたらきが、このアークランドの運命をきめることになるんですから。この旅の重要さは、わかっているつもりです。」

マリエルの言葉に、ルクエールも「うむ。」とまんぞくげにうなずきました。

「このしごとは、おまえがだれよりもてきにんだ。わたしや、マレインに、ロクヒュー。われら三人のうち、だれにもかわりはつとまらん。ノランどのの目は、じつにたしかだな。がんばってくるんだぞ。」

マリエルはすっかり、顔を赤らめてしまいました。そんなけいするりっぱなまじゆつしせんぱいに、ここまでほめられることは、ふだん、あんまりないことでしたから（かわいいかわいといわれることは、または、またちがう意味で、うれしかったのです）。マリエルは、かえす言葉もなかなか見つからず、ただただペこりと頭を下げて、せんぱいたちにかんしゃの気持ちをあらわすばかりでした。

そしてもうひとつの、見送りの者たち。それは、これからそれぞれの地へと旅立とうとしている、われらが旅の者たちだったのです（ロビーとライアンは精霊王のもとへ。そしてベルグエルムとフェリアルは、エリル・シャンディーンの守りにそなえ、ベゼロインとりでへとむかうのです）。

ベルグエルムとフェリアルが、ロビーとかたいあくしゆをかわしました。これまでの旅の中で、かたいきずなでむすばれた、かれら。かれらが出会って、まだほんのすこしの日数しかたっていません。ですけど読者のみなさんには、もう説明の必要もありません。かれらのそのきずなは、強く強く、血のつながった家族のきずな、そのものでした。

かわしたその手をそのままに、かれらはしばらく、なにもいいませんでした。なにもいう必要もないくらいでした。目と目で、心と心で、かれらは多くのことを語りあっていたのです。

「きつと、もどってきます。」

長いちんもくを破って、ロビーが口をひらきました。ベルグエルム

が強いまなざしを、ロビーにおくつてかえしました。フェリアルはなみだをぼろぼろこぼし、顔をぐしゃぐしゃにして、ロビーのその手をかたくにぎりしめていました。

「しばらくは、おわかれです。」ベルグエルムがロビーにいました。「すべてすんだら、ふたたび、この地でお会いしましょう。」

ベルグエルムの、その気持ちのこもったあつい言葉……。そして三人は、それぞれに、かたくださいあったのです。たとえばなれたところにいようとも、かれらの心は、つねにいっしょでした。多くは語りませんでした。でもかれらは、おたがいに、そのことを強くたしかめあっていたのです。

ところで……。

読者のみなさんも、あれ？　と思われたことでしょうか。三人？　そう、ライアンは、どこにいったのでしょうか？

と思っていると……。

「お待ちせー！」

とつぜん、お城のじょうへきのそのむこうから、そのライアンが（手をふりながら）走ってきました。あれ？　でもなんだか、いつもとふんいきがちがうような……？

「えへへー、見て見て！　じゃじゃーん！　ニュー・ライアンだよー！」

ライアンはそういって、その場でぐるりとまわってみせました。なるほど、いつもとちがう感じがすると思ったら、いぜんと服そうがちがっていたんですね（ライアンはこの着がえのために、みんなの見送りの場におくれてやってきました。だいじな見送りだというのに、まったくもう）。

これまでのライアンは、白のシープロンの名にふさわしい、まっ白なきぬの衣服を身につけていました。それがライアンの白いはだと、きれいな銀色のかみに、よくはえて、とても気高いいんしょうを与えていたのです（いわゆる王子さまの着るような、りっぱな服でした。王子さまなんですから、とうぜんでしたが……）。ですが今、ライアンが着ているのは、今までとは大きくいんしょうのことなる服でした。

その服は、ひとことというところ……、かわいい服！　そうです、ライアンはマリエルにたいこうして、今までのりっぱな服から、とびきりかわいい服に着がえました！（なんて負けすぎらいなんでしょう！）

きいろいふち取りのされた、えんじ色のシャツに、たけのみじかい、こいめの色をしたはい色のジャケット（たけがおなかの上までしかないので、下のシャツをかわいく見せることができたのです）。ジャケットの前は、大きなきいろいリボンでとめられていました。きいろと茶色のもようベルトを腰にななめにまいていて、そしてジャケットとおそろいの、ひざの上までしかない、はい色の半ズボンをはいていたのです（この半ズボンは、あきらかにマリエルをいしきしてのことでした。ほんとうなら、旅をゆくのに半ズボンなんて、ふさわしいものではありません。はだが出ていては、けがをしてしまうかもしれないし、また、このきせつに半ズボンなんて、はつきりいって寒いです！　でもライアンは、それらのすべてのことよりも、見た目のかわいさをゆうせんさせました。

ちなみに、マリエルはさきほどと同じ服を着ていましたが、ズボンだけは、ふつうの長さのズボンにはきかえていました。旅をゆくのに半ズボンでは、いろいろとこまることが多いということを、マリエルはよく知っておりましたから。やれやれ、ライアンもこのさき、こまったことにならなければいいんですけど……）。

「かわいいでしょ！　お城のいしようながかりの人に、えらんでもらったんだよ！　こいめの色ジャケットにしてもらったんだけど、それがかえって、ぼくの新しいみりよくを生んでるよね。このシャツも、リボンも、みんなかわいいし、なにしろ中身がかわいいからねー。いやー、まいったまいった。」

そういつてライアンは、マリエルの方をちらりと見て、「ふふん！」と鼻をならしてみせました。さあ、もちろんマリエルも、だまっていられません。

「なにが、ニューだよ！　着がえただけじゃんかー！」マリエルがはんげきしましたが、ライアンはあいかわらず、からだをふりふり動かし、とくいげにいうばかりでした。

「わかってないね。こういうのは、気持ちがいせつなんだ。人はみな、気持ちの持ち方ひとつで、強くなれる！これは、ぼくの、人生ろんだよ。さあー、しんきいってん！かわいい服で、がんばるぞー！」

まったく、ライアンにはかきませんね。こんなに重大な旅の出発のときでも、おそろしい戦いがせまりこようとしているときでも、ライアンはいつでもライアンでした。でも、そんなライアンの前むきさ（のうてんきさ？）が、かえってこの場にいる者たちの気持ちを大いにほぐし、強めてくれたのです。それはライアンの、大きなさいのうでした。ロビーはこのエリル・シャンディーンで、さまざまなじじつをきかされました。しよげき的なこと。心を痛めること。たくさんなじじつです。それはロビーにとって、とてもつらいものにちがいませんでした。ですが今、目の前にいるライアンのことを見て、ロビーの心は一時的にでも、とてもおだやかなものとなったのです。ロビーは思わず、「ふふ。」と笑ってしまいました。そしてこの出発の前に。ロビーはあらためて、心からこう思ったのです。

ライアンと出会えて、よかった。

こうして、ロビーのさいごの旅がはじまったのです（ちゃんとライアンは、みんなの見送りもすませましたので、ご安心を。フェリアルはまた、ライアンとのわかれがさみしくて、なみだを流しながらライアンにだきついてしまいました。でもこのときばかりはライアンも、「しようがないなあ。」といって、フェリアルをなでてあげました）。じこくはおりしも、おおかみのこくげん。午後の八時ころでした（このだいな出発の時間がロビーの種族と同じ、おおかみのこくげんというのも、なにかの運命を感じます）。

空気はひんやりと、はだにまとわりついてきました。風は、やんています。ですからいくらかはへいきでしたが、やはり冬も近いこのきせつ。上にはおるものがなければ、寒くてたまりません。この新しい旅の仲間たちは、ひとりのをぞいで、寒さへのたいさくはばつちりし

ていました。はぐくみの森でフォクシモンたちにもらった、ふわふわ森ペンギンの羽毛から作られたマフラーとマントは、もちろんのこと。さらに、エリル・シャンディーンのお城で用意してくれた、あたたかいコートを、ばつちり着こんでいたのです（このコートの中には、西の海から渡ってくる「渡りがも」の羽毛が、ぎつしりつめられていました。そのあたたかさといったら、思わずにんまりと、笑顔がこぼれてしまうくらいだったのです。

ちなみに、この渡りがもの羽毛はほんのちよつとの量でも、すごくねだんが張りました。ですからこのコートは、びつくりするくらいねだんが高いのですが、まあそこは、かれらにはだまつておきましよう。そしてその「ひとりをのぞいて」とは、だれのことだか？ みなさんにはすぐにわかりますよね。そう、ライアンでした。

ライアンは、せつかく着がえたかわいい服がコートでかくれてしまふのをいやがって、コートを着るのをこぼんだのです。ロビーが「かぜひいちゃうから、これ着なよ。」といっても、ライアンはききいれません。いきようようと、上きげんでうでをふりながら、こういうばかりでした。

「だーいじょうぶ、だいじょうぶ！ このくらいの寒さ、へっちゃらだよ。ぼくのかわいさが、寒さも吹き飛ばしちゃうんだから！」

でもライアンは、だいじなことをひとつ、忘れていたのです……。

お城の兵士たちがふたり、馬たちをつれてやってきました。そのうちの一头は、白い馬でした。それはライアンの友だち、メルでした。メルはライアンのそばにすりよって、あまえます。そう、かれらはリズにいる山のふもとまでは、馬でゆくのです。時間がなによりもたいせつ。ノランの言葉です。すこしの時間でも、むだにできません。そのためかれらは、危険なガウバウというけものたちがいるその場所の前までは、馬でいくということになりました。

メルにはこれまでと同じくライアンとロビーが乗り、マリエルは茶色の馬に乗っていきます。そしてお城の兵士たちがふたり、それぞれの騎馬たちに乗って、おともをしていきました（山のふもとまでいったら、馬をひいて帰ってこなくてはなりませんでしたから）。

「さあみんな、いくぞ！ ノランベつどう隊、しゅっぱーっ！」

(やっぱり)ライアンが出発のあいずを出して、いよいよ出発です(出発のかけ声は、すっかりライアンのしごとでしたから。マリエルは「ちよつと！ きみがえらそうにいわないでよ！ ベつどう隊のしきをとるのは、おししようさまにたのまれた、ぼくなんだからねー」といいましたが、ライアンは「そんなの、きまつてないよー。」といって「んべー」と舌を出して、さっさと行ってしまいました。もちろんそのあと、しばらく馬の上で、おたがいわーわーやっておりましてが……)。

そしてもくてきの山へとむかって走りはじめて、十分もしないころのこと……。

「だからいったのに、もう。」

そういったのは、ロビーでした。ロビーはライアンのうしろに乗っておりましたから、ライアンのようすに、すぐに気がついたのです。つまり……。

この冬も近い夜の寒空に、うす着で馬を走らせたなら、どうなるか？ それはだれでもわかることですよ。もうライアンは寒さでがたがたふるえて、メルのとづなをにぎる手も、おぼつかなくなってしまうていました。馬に乗る前は「へいきへいき！」と強がっていました。だが、スピードを上げて、風を切つて進んでいくわけですから、そのことをライアンは、まったく忘れていたというわけだったので。

「ほら、これ着て。」ロビーがそういって、馬につけたかばんから一着のコートを取り出しました。それはライアンがもらうのを知った、そのコートでした。ロビーは、ぜったいこうなるんだから、と見こんで、ライアンのぶんのコートを、こっさり、馬のかばんにしまっておいたのです。さすがロビー。ライアンのことなら、いちばんよくわかっていますね。

ライアンは鼻をすすつとすすつて、とつても小さな声で、こうつぶやくばかりでした。

「ありがと……」

それからしばらく、一行は夜の空の下を走りつづけました。小道はやがてなだらかな丘につながり、そして道はそこから、赤茶けた色の地面の広がる山の道へと変わっていきました。

エリル・シヤンデーンを出発してから、まだ二十分もたっていない。ですがあたりの景色は、すっかりさま変わりしてしまっていました。赤茶けた岩のかべがまわりをかこんでいて、それがえんえん、つづいていたのです。ときおり、その岩かべの上からにぎりこぶしくらいの石がころころところがり落ちてきて、小石や土をまきこんですべり、ぱらぱらというかわいた音を立てていきました。はじめは口ビーもびくつとして、石の落ちてきたところをふりかえり、見上げましたが、そこにはなにもいなくて、赤茶けた色の岩のむれが、土のかべにぼこぼこつき出ているのが見えるばかりでした。

「このあたりのかべは、とても、もろいんです。」マリエルが、心配そうにしているロビーにむかっていいました。「でも、近づきすぎなければだいじょうぶ。ここからは、いちれつになって進みましょう。」そういつてマリエルが、自分の馬をかって、みんなのいちばん前に飛び出しました。それを見たライアンが、「ああっ！」といって、さすがそのあとを追いかけてます。

「隊長をさしおいて、かってに前を走らないでよ！」
うしろからどなるライアンのその言葉に、マリエルは、はあ？ と
いった顔をして、ふりかえっていいました。

「きみが隊長って、だれがきめたの！ この隊のせきにん者は、ぼくだっていったでしょ！」

いわれてこんどは、ライアンがいいかえします。

「せきにん者はきみかもしれないけど、隊長じゃないもんね。だから、隊長はぼくなの！」

な、なんてめちやくちやなりろんなのでしよう……。ふつうは隊のせきにん者が、隊長のはずなのですが……。とにかくライアンは、隊と名のつくものだったなら、なんでも隊長にならなくては気がすまなかったのです。ライアンのせいかくは、みなさんもよくわかっていませよ。ライアンのそのむちやくちやなりろんに、マリエルもぷん

ぶん怒っていました。

「わけのわからないことを！ いいからきみは、おとなしく、ぼくに ついてくればいいんです！ はじめから、おまけでついてきたくせに！」

「な、なにおーう！」

あーもう、またはじまった……。まだ旅ははじまったばかりだというのに、これではぜんぜん、話になりません。せっかく、ゆうしゅうな力を持ったふたりが、そろっているというのに……。うーん、ほんとなんとか、ならないものでしょうか？（著者のわたしも、このふたりのわーきゃーきゃーをそのつど書いていくのも、しんどいですから……）

こんなときは、このふたりの橋渡しをするやくわりの、ロビーをたよるしかありませんね。じつはロビーも、出発前からうすうす、自分がそのやくわりをするんだろうなあ、と思っていたのです（すいませんがロビーさん。わたしからもぜひ、お願いします！）。

さて、ロビーはどうするのでしょうか？

ふたりのいいあらそいは、先頭をめぐるはげしい馬のきようそうになつてしまいました。ふたりとも「ぼくが前！ ぼくが前！」といい張って、ゆずりません。ライアンのうしろに乗っているロビーは、そのつど前へうしろへと、ぐいぐいゆさぶられてしまいましたし、うしろからついてきているふたりの兵士さんたちも、もうついていくだけで、せいっぱいだったのです。なんどか、まわりのかべに馬のからだがつかって、そのしようげきで、大きな岩がごろごろと落ちてくることさえありました。危険きわまりありません！

さあ、とうとうロビーも、大きな声を張り上げてさげんだのです。

「ごらー！ ふたりとも、やめてやめて！」

思いがけず、ロビーが大きな声を出したので、あらそっていたふたりもびっくりして、ロビーの方をふりかえりました。そして、つづくロビーの言葉。

「ぼくたちは、仲間なんだよ！ あらそつてちやだめでしょ！ みんなが協力しあつて、ひとりひとりのときよりもっと大きな力を生み

出すために、ぼくたちはいつしよにいるんだから！　それが、仲間の力でしょ！　ライアンも、マリエルくんも、ちゃんと考えて！」

ロビーの言葉（おせっきょう）は、ふたりのちびっ子たちの心にてきめんに伝わりました。ライアンは「ロ、ロビー……」と言葉につまり、マリエルは怒られて、「す、すみません。」とあやまったあと、歯をぐぐぐとかみしめて、うつむいて、すっかりへこんでしまったのです（マリエルは、りくつつぽい子でしたから、自分があまりにも子どもっぽい行動を取ってしまったことが、はずかしく、ゆるせなかったのです）。

ふたりのちびっ子たちは、しばらくにもいえないまま、馬を走らせていました。どうやらロビーに怒られたことが、だいぶこたえたようです（めったにあることでもないですから）。そしてそんなふたりのことを見て。ロビーはこんどは、おちついた声で、こういいました。

「ノランベつどう隊をひっぱっていくのは、ノランさんのでのし、マリエルくん。きみだよ。」

ロビーの言葉に、おちこんでいたマリエルは「え……？？」と、ロビーの方を見ました。

「そして、みんなのことをまとめ上げるのは、ライアン。きみのしごと。」

こんどはライアンが、「えっ？」とロビーの方をふりかえります。

「みんなの気持ちをライアンがひとつにまとめて、マリエルくんが、けっだんをくだす。それが、ノランベつどう隊。ふたりとも、りっぱなやくわりだよ。だれが隊長か？」

なんて、そんなことはいいよ。みんなが隊長なんだ。」

すばらしい、ロビーの言葉でした（たぶんフェリアルがこの場になったら、感動して、また「ロビーどの〜！」と泣きついてくることでしょう）。もうライアンもマリエルも、ぐうのねも出ませんでした。それぞれに、おたがいに、やるべきやくわりがある。いくらライバル心からのこととはいえ、自分のことばかり見てしまっていたふたりは、そのことをここで、しっかりと考えさせられたのです。

ライアンとマリエルのふたりは、ようやくおたがいのことを、ちらりと見やりました。そこには新しくここから生まれた、仲間のすがたがありました。まだちよつと、ぎくしゃくしたところはもちろんありましたが、これから、この新しい仲間と、新しい旅がはじまるのです。しばらくたつて。ライアンがさきに、マリエルに口をひらきました。

「ま、まあ、ロビーがそこまでいうなら、しかたないね。それで、がまんしてあげるよ。」

あいかわらずのへらず口でしたが、そこにはさつきまでの、とげとげしたふんいきはありませんでした(ライアンもすつかり、はんせいしたようです)。

「ま、まあ、ぼくは、おししようさまのきたいにこたえなければなりませんから。きみが、よけいなことをしなければ、それでいいんです。」

こつち(マリエル)も負けないくらいの、へらず口です。まったくふたりとも、すなおじゃないんだから……。

旅をはじめたばかりの今このときに。みんなの気持ちがまとまったということは、すばらしくたいせつなことでした。もしあのまま、ふたりのちびっ子たちの気持ちがばらばらなまま旅をつづけていたとしたら、どんな危険な目にあつてしまうことか? わかりません。ロビーはこのふたりの心を、そしてこの新しいノランベつどう隊というひとつのチームを、みごとにつなぎあわせてみせたのです。それはロビーの人から、やさしさ、思いやり、それらのものによる、すばらしい力のあらわれでした。著者のわたしも、ここであらためて、こう思ったものです。やはりロビーは、主人公なんだと。

「このさきの道は、もっとけわしくなります。だから、道をよく知っているぼくが、先頭をつとめるのがいちばんいいでしょう。」マリエルがいました。みんなはここであらためて、このさきの旅の道のりのことについて、話しあっていたのです。そしてマリエルのいったことは、じつに理にかなっていました。マリエルはさつそく、隊のたいせつなけつだんをおこなったのです。

「きみも、それでいいね？」マリエルがライアンにたずねます。これも今までには、なかったことでした。

「まあ、それがいいだろうね。」ライアンも、すなおではありませんでしたが、よく考えてマリエルの言葉にさんせいしました。

「よし、では、いきましよう。」マリエルがそういつて、先頭に立って馬を走らせていきました。ライアンが、それにつづいていきます。そしてうしろの守りは、おともふたりの兵士さんたちで、しっかりとかためられていました。

やれやれ。旅をはじめたばかりでいきなり起こってしまった、このひとさうどう。一時はどうなることかと思いましたが、ロビーがすばらしい力で、まとめてくれましたね。この新しい、ノランベつどう隊という旅の仲間たち。この仲間たちなら、きつと、すばらしいかつやくをしてくれることでしょう。

ところで……。

すこし走ってから、ライアンが急にいい出しました。

「あのさ、ぼくのこと、いつまでも、きみつてよぶの、やめてくんない？」

そのとつぜんの言葉に、マリエルが「え？」と行ってふりかえりません。

「ま、まあ、いちおう、仲間になったことなんだし、名まえでよばせてあげても、いいかな、なんて。」

なるほど、そういうわけでしたか。はじめて会った相手でもニックネームでよんでしまうほど、ほんらいならば、人なつつこいライアンです。いつまでも「きみ」のままでは、ちよつと、さびしかったんですね（ほんとうに、すなおじゃないんだから）。

「わかったよ。」マリエルがライアンの気持ちを読み取って、こたえました。「名まえ、フルネームでなんていうの？」

「ライアン・スタッカート。」ライアンがこたえます。

「ふーん、スタッカートか。」マリエルがあごをなでながら、しばらく考えこみました（あごをなでながら考えるのは、ひげをなでながら考えるノランのまねをしていたのです）。そしてしばらく考えたあ

と。

「じゃあ、ライスタだな。これからは、ライスタってよぶからね。いくぞ、ライスタ。」

マリエルはそういって、さっさと行ってしまいました。

「ええーっ！　ちよ、ちよっと！」よそうがいのへんじに、ライアンはすっかりどうてんして、あわててマリエルのあとを追いかけます。

「なんだよ、ライスタって！　なに、そのセンス！　もうすこし、かわいいニツクネームにしてよー！　ちよ、ちよっと待てたらー！　マリーー！」

どうやらマリエルにとっては、名まえとみようじをすこしずつ取りあわせたニツクネームでよぶのが、親しい相手に対する気持ちのあらわし方のようでした。でも……、やっぱり、うくん、って感じですよ。ラ、ライスタですか……（ちなみに、マリエルはお城のせんぱいまじゆつしたたちのことも、名まえとみようじをもじったニツクネームでよんでいたのです。マレイン・クレイネルのことはマレック兄さん、ロクヒュー・テオストライクのこととはロックス兄さんとよんできました。でもさすがに、そんなけいする大せんぱいのルクエール・フォートのことだけは、ルクエールさんとよんできましたが）。

そしてこのとき。ライアンは自分でもむいしきのまま、マリエルのことをマリーというニツクネームでよんでいましたが、そのことにライアンが気づいたのは、もうすこしあとになってからのことだったのです。

そんなふたりのことを見て、ロビーは「ふふふ。」と笑ってしまいました。もう、心配はないみたいだ。ロビーはそう、心の中で思いました。

ライスタか……。

それと同時に、ロビーは心の中で、こっそり、このようにも思ったのです。

マリエルくんって、やっぱり、ちよっと変わった子……。

道はいよいよ、ほんとうの山道になりました。ここがリズの住んで

いる山の、そのふもとにあたるどころだったのです。エリル・シャン
デインから馬で走ること、およそ三十分ほど。きよりにして、十二
三マイルは走ったでしょうか？（ところで……、リズに住むこの山ま
で、ノランは歩いて二時間ほどでつくといいました。このきよりを
二時間で歩くのは、とてもむりでしょう。しかも道は、ただのたいら
な道というわけでもなく、まがったりのぼったり、でこぼこだった
していましたから、よけいに時間もかかるのです。急いで走りつづ
けていかなければ、とても二時間ではたどりつけないことでしょう。

じつはノランは、ここでもやつぱり、自分が力のあるまじゆつしだ
ということ、ぜんぜん考えにいれていませんでした。旅ばかりして
いるノランは、自分の足にいつも、とくべつな魔法をかけていたの
です。それは、うさぎあしのじゆつというもので、この魔法を使うと、ま
るでうさぎみたいに、ぴゅんぴゅんはやく歩くことができたのです。
歩いて二時間というのは、この魔法を使うことを計算にいれてのこと
でした。うくん、やつぱりけんじやという人たちは、計算ずくめで動
いているわりには、どこかうっかりしているところがあるみたいで
すね。うっかりばかりしていた、カルモトみたいに……)

あたりはぶきみに静まりかえっていました。木の上にも、しげみの
中にも、生きもののけはいはまったく感じられません。えだで羽を休
めるからすや、起き出したふくろうが、一羽くらいいてもおかしくあ
りませんでした。ほんとうになんにもいなかったのです。まっ黒な
立ち木が大きなおぼけみたいにあらわれては通りすぎるたびに、メル
の上にいるロビーは、とてもいやな気持ちになりました。それらの
木々が、まるであのワットの黒騎士たちの乗っていた、デイルバグと
いうまっ黒なかいぶつたちのように見えてきたのです。ひびわれた
木のかわのようですが、かいぶつの大きな口のように見えました。張り
出したえだは、かいぶつの大きなかぎづめのようにも見えました。腰
の剣は、ロビーになにも危険をさらせてはおりません。ですが、なん
だかロビーは、この場所がとてもいやな場所のように思えました。こ
の場所のことをよく知っているというマリエルも、きよろきよろと、
しきりにあたりのようすをうかがっております。ライアンはさつき

からずつと、木々やしげみに対して、「かわいくない！かわいくない！ともんくをいっていました（しげみにそんなことをいっても、しようがない気がします……）」。

そしてそこから、しばらくいったところで……。

「ここまでです。」

先頭のマリエルが、馬をせいしていいました。ライアンも兵士たちも、馬をとめて、あたりのようすをうかがいます。

「ここからさきは、ガウバウたちのすみかです。これ以上、馬で進むことはできません。」

お城できいた、あのおそろしいガウバウというけものたち。ついに、そのけものたちのすむというその場所まで、みんなはやってきたのです（わかっていましたが、やっぱりきんちようしますね）。

マリエルは目をとじて、あたりに耳をすましました。両手をうさぎの耳のように、頭の上にちよこんとつけて、なにかをささやいております。これはうさぎ耳のじゅつというもので、この魔法を使うと、遠くの物音でもよくきこえるようになります。さすがはまじゅつし。さつそく、魔法パワーのとうじょうですね（ところで、この魔法はかんたんな言葉をとなえれば、それだけで使うことができました。じつは手をうさぎの耳のようにして頭につける必要は、ぜんぜんありませんでした。それはマリエルが自分で考えたもので、そのりゆうはもちろん、その方が自分がかわいく見えるからだです。うくん……）。

しばらくしてから、マリエルが手をもどしていいました。

「どうやら、あたりにガウバウたちは、いないみたいです。でも、かれらはもう、ぼくたちがここへやってきたということは、知っています。かれらは、とても耳がいいですから。」

「えっ？ それじゃ、そのガウバウっていう生きものたちに見つからずに、進むのは……」

ロビーの言葉に、マリエルがれいせいにくたえました。

「すいませんが、それはむりです。でも、ご安心を。ガウバウなんて、ぼくの魔法にかかったら、ちよちよいのちよいですから。それよ

りも……」

マリエルはそういって、急にしんけんな顔をして考えはじめます。「まっすぐいくか？ 上の道からいくか？ なやみどころだな。時間的には、まっすぐいった方が早いけど、ガウバウはこっちの方が多い。上の道からいくと、ガウバウはすくないけど、よけいな時間がかかる。時間ときより、ガウバウの数に、ぼくの魔法の使用数を、すべてあわせて計算すると……、今のじょうけんからいって、どのルートでいくのが、いちばんわりにあっているのか……？ ええっと、アルキアのほうそくによって、二をかけて、けっかに風と気おんのデータを加え……」

さすが、べんきょうの先生の家の子。なにごともしろんな計算ずくめで行動をきめるのが、しゅうかんになっっているみたいですね。どうやらマリエルにとっては、ガウバウのこわさなんてものはまったく問題ではなくて、どうすればいちばんこうりつのいい行動が取れるか？ ということの方が重要みたいでした。じつにマリエルらしいですね（でも、すいません。後半はなんの計算なんだか？ わたしにはぜんぜんわからないんですけど……。アルキアのほうそくって、なに？）。

「とにかく、さきに進もうよ。ぼくもう、おなかすいちやった。」ライアンが、しんぼうでできずにいいました。勉強ぎらいのライアンにとっては、マリエルのいっていることは、ちんぷんかんぷん！ はつきりいって、さっさとさきに進んで、リズのおうちで早くごはんが食べたかったです。みんなはばんごはんも食べるひまもないまま、出発しなくてはなりませんでしたから（ごはんというより、ライアンの場合はお菓子が食べたかったのですが。でもライアンはもうすでに、お城からここへくるまでのメルの上で、エリル・シャンディーンやきを八こも食べていましたけど……。そしてたづなを取るライアンにそれを食べさせてあげていたのは、もちろんロビーでした）。

「もう、計算が終わるよ。よし、まずは、まっすぐいきましよう。それからがけをのぼっていけば、いちばん、時間とめんどうがすくなくですむ。それでいいですか？」マリエルがロビーにたずねました。

「オツケーオツケー！ それでいいよ、もー。いいよね？ ロビー。」すかさずライアンが、ロビーの前にごいとからだを乗り出して、かわりにこたえます。そしてロビーも、「う、うん。」と小さくこたえました（とりあえず、ライアンがみんなのことをまとめて、マリエルがけつだんをくだすという、ノランベつどう隊のやくわりぶんたんは守られているみたいですね。ちよつと、ごういんな感じですが……）。

「よし。では、われわれは、ここから歩いていきます。ルーリックさん、アランギルさん、ありがとうございました。」

マリエルがそういって、頭をぺこりと下げました。え？ ルーリックさんにアランギルさんって、だれ？ と思われた方もいるでしょうが、これは、おともをしてくれたふたりの兵士さんたちの名まえだったのです（じつはこのふたり、前にもとうじょうしていて、ロビーたちがアルマーク王のぎよくぎにむかうときに、長い空中ろうかをいっしょにつきそって歩いてくれました。わたしがふたりの名まえを、ちよつとしようかいしていましたよ。またまたのごとうじょうだったというわけなのです。こんかいは名まえを出していませんでしたので、今までわからなかったわけですが……）。

「くれぐれも、お気をつけて。旅のせいこうをおいのりしております。」

ルーリックとアランギルのふたりの兵士たちは、そういってロビーたちに敬礼をし、それぞれが馬を一頭ずつひきつれて、お城へともどつていきました。ライアンの友だち、メルとも、これでしばらくはおわかれです。今までほんとうに、おつかれさまでした！ いろんなことがあったよね！

さて、おともの兵士さんたちが馬たちをつれて帰ってしまつて。今このさみしい山道にいるのは、ロビーとライアン、マリエルの、たった三人ぼっちになりました。ここからは、歩きの旅になるのです。マリエルのいうことには、道はこのまままっすぐ、山のてっぺんまでつづいているということでしたが、その道は、だんがいぜつべきの道。

そしてガウバウだらけ。とちゅうでがけをのぼっていった方が、リズのところまでは早くいけるのだということでした。でも、がけをのぼっていくつて、口でいうのはかんたんでしたが、じっさいには、かなりたいへんなような気がします。がけに道はありません。文字通り、すでで岩かべを伝いながら、よじのぼっていくしかないのです（まさにロッククライミングです）。マリエルはいつたい、どう考えているのでしょうか？

でもそこは、ゆうしゅうなる小さなまじゅつし、マリエルくんのことです。なにか、うまい手があるのでしょうか。かれがどんな手を使うのか？ みなさんもそれまで、お楽しみに！（まさかほんとうに、すででのぼっていくわけじゃないでしょうか）

ちなみに、時間のせつやくのためには、ノランも使っていてマリエルも使うことのできた、うさぎあしのじゅつを使った方が、もちろんはやく歩けましたが、この魔法は、おくがいの、さきを見通すことのできるよくひらかれた場所でなければ、使うのはやめておいた方がいい魔法でした。それはなぜか？ といいますと、この魔法は、はやく歩けることは歩けましたが、そのはんめん、急にとまったり、こまわりをきかせた動きを取ることができなくなってしまうという、魔法だったのです。そしてこのさきは、危険なガウバウたちもいる、だんがいぜつべきの道。そんなところを早足でびゅんびゅん進んでいたりすれば、どんなけつまつを生むか？ おわかりですよ。ガウバウが出てきたとしても、思うように動くこともできないでしょうし、その前に、がけから落つこちてもしまいかねません！ ですからマリエルは、あらゆるこうりつを考えた上でも、ふつうに歩いていくことにしました。）

道は、あつというまにけわしくなりました。今までは、たいらなただの山道にすぎませんでした。すこし歩いていくと、急に目の前に、おそろしいだんがいぜつべきがあらわれたのです。のぞきこんで見ると、顔に下からの風が吹きあたります。はるか下は、いちめんの森でした。

道はがけのふちによりそうようにして、ほそぼそと、たよりなくつ

づいております。シープロンドを出発してからすぐに通った、あのオーリンたちが住んでいたというむかしの山道。この場所は、あの山道にそっくりでした（ちなみに、このあたりいったいは大むかしに銀をほり出した、こう山のあとでした。そのためむかしの道のなごりが、今も残っていたのです。今ではもう銀もとれなくなり、かわりにおそろしいガウバウたちがすみついてだれも近よらなくなってしまっていました。そういうところも、おっかない巨人やグブリハツグなんていう生きものたちがすみつくようになってしまった、あのオーリンの山道と、よくにていますよね）。

でも、あのとときの山道とちがっているところがあります。いいことと悪いこと、それぞれがひとつずつありました。

いいことは、あのとときのような強い風が吹いていないということ。あのとときはほんとうに、がけから落っこちてしまふんじゃないか？ というくらい強い風が吹いていて、みんなを弱らせたものでした（ライアンの場合は、じまんのかみがくしゃくしゃになってしまふことの方が、いやみたくでしたけど）。そして悪いことは……、この場所がほんとうに、ガウバウたちの巣になっていたということ！ まだすがたをあらわしてはいませんが、ロビーとライアンには、それがいやというほど知れたのです。だってさつきから、あつちやこつちで、ガウバウたちのおそろしいほえ声が、ずつとなりひびいていましたもの！

「がうるるる……。うううるるる……」

「ぐがああああ……！」

ひ、ひええ！ とにかくさつきからずつと、こんなちようしなのです。ふつうの人だったなら、とてもこんなところを歩いてなんかいられません！

「ね、ねえ、マリエルくん。ほんとうにだいじょうぶ？　なんか、すごいなき声がきこえるよ。」おっかなびっくり進むロビーが、たまらずにマリエルにたずねました（さつきからもう、ロビーの腰の剣は、まっ

青に光りっぱなしでしたから！ ガウバウというのはとてもかしこい生きもので、ただの野生の動物とはちがって、さまざま悪だくみまで考えることができるのです。なんておそろしいー！」。

「へいきですよ。そんなに、心配しないでください。このなき声は、ちよつと、うつとうしいですけど、やつらがロビーさんに飛びかかる前に、ぼくの魔法が、黒ごげにしちやいますから。」そういうマリエルはさつきから顔色ひとつ変えず、ふんふんと上きげんのまま、先頭を歩いていたので。

「こわがりだなあ、ロビーは。ほら、きゆうせいしゆなんですよ？ しっかりしなよ。それに、ガウバウだって、おおかみなんだし、おんなじ仲間じゃない。」ライアンもいちばんうしろを歩きながら、よゆうの顔をしてロビーのことをせつつきました（たしかにガウバウは、おおかみににいましたけど……）。

「べ、べつに、仲間なんかじゃないよー！」ロビーがライアンにいいましたが、ライアンは「ほら、早く早く。」とロビーのおしりをぺちぺちたたいて、さきをうながすばかりでした（うゝん、マリエルといいライアンといい、こんなときちびっ子というものは、ほんとうに強いですね……）。

とそんなとき、急に……。

「ああ、すみません。ちよつと、走ってください。」マリエルがいました。

「え？　え？　」ロビーがあたふたして、あたりを見まわすと……。

「がうがががああー！」

で、出たー！　ガウバウです！

頭の上からおそろしいほえ声が入ってきて、見上げてみれば、体長七フィートはあろうかという大きなおおかみのようなけものたちが、今まさに、がけの上からみんなのもとへとむかって、かけてくるところでした！（この生きものは、切り立ったがけでもなんのその！　びゅんびゅん走ってやってくるのです！）

「うわわわー！」ロビーがひめいを上げて走り出しました。たかがおおかみの一ぴきや二ひき。物語の主人公がそんなにかんたんに逃げてちゃだめじゃんか、って思われた方は、考えをあらためることと思えますよ。一ぴきや二ひきじゃありません。そんなきようぼうなけものたちが、ぱつと見ただけでも、二十ぴき近くも！ いっせいにがけの上からこつちへとむかって、目を血走らせながら走ってきたのです！ほんとに、ひええー！

「マリエルく〜ん！ これ、どうするの〜！」ロビーが走りながら、マリエルにさげびました。ですがマリエルはあいかわらず、すずしい顔をしたままです。マリエルはロビーをさきにかせると、立ちどまって戦おうとしているライアンの方をちらりと見てから、ロビーにいいました。

「ああ、すいません。ぼくのでんげきが、ロビーさんにまであたっちゃうかもしれないでしたので、ひなんしてもらいました。もういいですよ。」

でんげき？ マリエルはそういうと、手にしたつえをふりかざしました。

「ライスタ、そこにいると、あぶないよ。」

「え？」

そしてライアンがこたえるのより早く、マリエルはダンスのようなかるやかなステップをきざまながら、さけんだのです。

「マリエルの、まじかるブラスト！」（ステップー。）

「りんがる、れんがる、ふろー！」（ステップ二〜きめポーズ。）

ぱりぱりぱりぱり、ぱりーん！

いっしゆん、あたりがまっ白に光りかがやきました！ マリエルのその魔法の言葉と同時に、持っているつえのさきから、まばゆいばかりのいなずまが飛び出したのです！

そして……。

「きやいん！ きやいん！ きやいん！」

そのいなずまが、ガウバウたちのむれをちよくげき！ もうガウバウたちは、たまったものではありません！ 三びきのガウバウたちが黒こげになって、がけの下へとまつさかさま！ 残りのガウバウたちも、いなずまをじゆうぶんにあびせられて、びりびり！ よろける足で、あっちやこっちへ、やっとのことで逃げていきました。

これにはロビーも、さすがにライアンまでもが、ぽかーん！ 口をあけたまま、かたまつて動けなくなつてしまいました。

「まつたく、口ほどにもありませんね。ロビーさん、おかげはありませんか？ ライスタ、ころんでないだろうね？」

マリエルがといかけましたが、ふたりともまだ、へんじができるようなじようたいではありません。しばらくして、さいごのガウバウの一ぴきのがけの上へと逃げていくと、ようやく口をひらくことができました。

「す、すごい……。すごいすごい！ すごいよ、マリエルくん！」ロビーがこうふんして、マリエルの手を取っていいました。

「や、やるね……。マリー。」ライアンも、ちよつとくやしそうでしたけど、すなおにマリエルの力のすごさをみとめました(ちなみに、ライアンは自分もかつこよく、風の精霊のたつまきを作つてガウバウたちをやつつけてやろうと思つていたので。でもたつまきを作り出すその前に、マリエルが全部かたづけてしまいました)。

「いえ、それほどでも。」マリエルはひかえめにいいましたが、こういうときマリエルは、すなおにうれしがつていたので。

「だいぶ、手かげんしてやりましたが、ガウバウていどの相手なら、これでじゆうぶんでしよう。それより、早くさきに進まない。ガウバウはいちどやつつけても、また、もつとたくさんのおそつてきますからね。」

そういうとマリエルは、またすすしい顔をして、すたすたと歩きはじめました(あれでまだ、手かげんしていたですつて？ ほんとうにちびっ子というのは、すごい力をひめているものです。まあ、マリエ

ルの場合は、とくべつなちびっ子なのですが……。

ところで、ちよつと説明をつけ加えますと、このいなずまのじゅつは、つえを相手にふりかざして魔法の言葉をとなえれば、使うことができる魔法でした。ですからマリエルがやっていた、魔法をかけるときのダンスのようなかろやかなステップ、これはまったく、必要なかったのです。ではなぜ、そんなふりつけをつけ加えたのかというと……、もう、いうまでもないですよ。それはもちろん、その方が自分がかわいく見えるからでした！。

みんなはそれからしばらく、くねくねとつづくがけの道を進んでいきました。星空は、いつのまにかあらわれはじめた雲に、すっかりおおいかくされてしまっていました。そのため道は暗く、しかもこんながけの道です。足をふみはずしたら、下の森までまっさかさま！とても危険になりました。そしてこんなときにもまた、マリエルの魔法が、そのいりよくをはっきしたのです。

あかり花のじゅつ。この魔法を使うと、みんなの進む道の前とうしろ、それぞれ十ヤードくらいさきまでに、白くかがやくきれいなお花がいちれつにさいて、そのお花がその光で、進む者たちの足もとを明るくてらしてくれるのです（この魔法のお花はみんながいどうすると、それにあわせて、しゅん！と消えたり、また、ぽん！ときいたりするので）。まさに今の仲間たちにはうつつつけの、すてきな魔法でした（ランプをとすよりもずっと明るく、しかもこれなら両手が使えました）。

でもあかりをとすことには、不安なところもありました。それはやっぱり、ガウバウです。さきほどの戦いのあとから、しばらくはガウバウのほえ声がぴたりとやんでいましたが、今また、そのほえ声がかきこえはじめていました。しかもさいしよのときよりも、ずっと大きく、たくさん。マリエルの言葉の通り、ガウバウというけものは、いちどやられても、またふたたび、もつとたくさんの方でおそいかかってくるのです（ほんとうにやっかいな相手です。でも……、ガウバウよりもつとおつかないちびっ子たちがふたりもいる、このノランプ

つどう隊には、あんまりおそいかからない方がいいような気がします
が……。ここからの道のりは、なおいつその注意が必要となつて
くることでしょう（ロビーにとっては）。

道は白いお花のあかりのおかげで、ずいぶんはかどりました。です
がここに来て、ようすが変わってきたことがあります。道が前よりも
はつきりと、せまくなってきました。かべに背中を張りつけなければ
進めないようなところさえ、出てきたのです。

「そろそろ、上にのぼった方がいいですね。ここからなら、リズのと
ころまでは、すぐそこですから。」先頭をゆくマリエルがみんなにいい
ました。馬をおりてからさいしよにマリエルがいった通り、「がけの
上のぼる」というそのことは、もちろんみんなもしようちしていま
した。でも……。

ロビーとライアンのふたりは、そのがけを見上げました。がけは
まっすぐに切り立っていて、ほんとうに、かべそのものといった感じ
でした。がけの上までは、ゆうに百五十フィート以上はあるでしょ
う。いくらなんでも、ここをのぼっていくというのは、そうとうに骨
がおれます。そのうえもし落ちたとしたら、まず助かりそうもありま
せん（身がるなライオンならすいすいのぼっていけそうな気がします
が、からだの大きなロビーには、危険が大きすぎるでしょう）。ここか
らのぼっていくことなんて、やつぱりむりなんじゃないでしょうか？
「のぼるっていっても、ここはむりだよ。むこうの方がゆるやかだ
し、あっちにした方がいいんじゃない？」

そういつてライアンがゆびさしたさきには、ごつごつとした岩はだ
のがけがありました。そこまではけっこうきよりもありましたし、が
けの道もいちだんとせまくなっていました。あちらの方が見るから
にのぼりやすそうだったのです。この場所からのぼっていくよりは、
よっぽどましでしょう（安全にはかえられませんものね）。

ですがライアンもロビーも（わたしも）、ひとつだけなことを忘れ
ていました。マリエルは、まじゅつしなんです。そのかれが「ここか
らのぼりましょう」というのですから……。そう、またもやここで、魔
法がとうじょうするというわけでした。さあ、こんどはいつたい、ど

んな魔法なのでしょうか？ わくわく。

「へいきだよ、ライスタ。のぼりやすきなんて、まったくかんけいがないから。」

「え？」 マリエルの言葉にきよんとするロビーとライアンのことをしりぬに、マリエルは両手のひらをおへその前にかざして、ふたたび魔法の言葉をとなえはじめました。

「ふろーと、ふろーた、るー！」

マリエルのその言葉と同時に……、ふいーん！ みんなの前に、かすかな音を立ててふわふわと浮かぶ、とうめいな魔法のえんばんがみつ、あらわれたのです！

「さあ、乗ってください。だいじょうぶ、落っこちませんから。」

こ、これは！ エリル・シャンティーンで乗った、あのエレベーターのえんばん、あれにそっくりです！

これは、ふわふわえんばんのじゅつ（そのまんまですが）。この魔法を使うと、上に乗ってのぼりおりすることのできる、べんりな魔法のえんばんを作り出すことができます。またしても、今の仲間たちには、うってつけですね！ 魔法って、ほんとうにべんり！

「さあ、いいですか？」

マリエルが、（こわごわえんばんに乗っている）ロビーと（ほんとうに落ちないのか？ その上でぴよんぴよんとびはねてたしかめている）ライアンのふたりにいいました。

「では、手すりにつかまってください。」

手すり？ ロビーがそう思ったとき……、ふいーん！ えんばんのふちから、えんばんを半分かこむようなかたちで、とうめいな魔法の手すりがあらわれたのです！ へえ、これはいいですね！ これなら、えんばんに乗るのになれていないロビーでも、安心です！（エリル・シャンティーンのエんばんエレベーターにも、手すりをつけてほしかった！）

「らい。」

マリエルの言葉と同時に、えんばんが、ふいーん！ 音を立ててのぼっていきました！（「らい」というのは魔法の言葉で、「上にのぼれ」

というような意味です。魔法を使うときにはふつうの言葉とはちがう、とくべつな言葉を使わなければなりませんでした。マリエルが魔法を使うときにも、そのへんてこな言葉を使っていますよね。ちなみに、おりるときには「リー」といいました。）これは、気分そうかいです。ふつうだったら、えつちらおつちら。くろうしてのぼつていかなければならないようながけでも、これならすいすい！ あつというまに百五十フィート以上もあるがけをのぼりきり、その上の道まで、みんなはたどりついてしまいました！（ほんとうにべんりなえんぼんですよね。でもこのえんぼんにも、けつてんはありました。まずこのえんぼんは、上下だつたら三百フィートくらいまでのきよりをいどうすることができましたが、横へのいどうは、せいぜい五フィートくらいまでしか動かせなかつたのです。ですからななめにのぼつているがけでは、このえんぼんは使えません。こんかいのように、まつすぐに切り立ったがけだからこそ、このえんぼんエレベーターが使えたというわけでした。

そのほかにも、「いちどえんぼんからおりてしまうと、そのえんぼんは消えてしまう」とか、「時間が五分たつたら消えてしまう」とか、いろいろなけつてんがありましたが、マリエルはそれらのけつてんもすべてりかいした上で、この魔法を使いこなしていました。たぶんほかのじょうけんの場合だつたら、そのじょうけんにぴつたりあう魔法を、マリエルは使つたことでしょう。マリエルはやつぱり、すばらしくゆうしゅうなまじゆつしだつたのです。ちよつと、こなまいきなどころはありましたけど。）

がけの上は、広い道になっていました。大きな岩がごろごろところがつております。たくさんの岩山がここからまだ上へとつづいていました。マリエルのいうことには、リズの住んでいるところはその岩山の中にひとつだけぼつんとつき出た、小さな岩の広場の上なのだということでした。

ガウバウのほえ声は、していませんでした。がけの下ではずいぶんときこえていましたが、どうやらガウバウたちのいないところに、みんなはのぼつてくることができましたようです。

「リズの家は、こっちです。もう、すぐそこですよ。」

マリエルの言葉に、ロビーはほっと胸をなでおろしました。やっと、リズのところにいけるのです。どうやらぶじに、たどりつくことができそうだ。ロビーはそう思いました。

ロビーはやる気持ちをおさえながら、急ぎ足でマリエルのあとにつづきました。横にいるライアンが手を頭のうしろにくみながら、「それにしてもさ、なにも、こんなところに住まなくなたっていいじゃないえ。」とぶーぶーもんくをいいはじめます。

リズのところへは、もうすぐです。

でも……、みんなはこのまま、すんなりとゴールまでいくことはできませんでした（やっぱり……）。

「どうやら、れんちゆうもほんきみたいですよ。」

「えっ。」とつぜんのマリエルのその言葉に、安心してたロビーも、のんきになっていたライアンも、きよんととしていいました。

「やっぱりあれだけじゃ、ものたりなかったみたいですね。」

ま、まさか……！

そのまさか！ マリエルの言葉に、おそろおそろ道のさきをながめたロビーとライアンが、見たものは……！

「え、ええーっ！」

「ぐーがががああー！　ぐるがががああー！　ぐががががああー！」

で、出たー！　ガウバウガウバウ、またガウバウ！　それはまわり中をうめつくす、おそろしいガウバウたちの大集団だったのです！（がけの上ではガウバウのほえ声がきこえませんでしたので、もうだいたいぶかかと思っていました）が、それは相手をゆだんさせておびきよせようという、ガウバウたちの作戦だったのです！　なんと頭のいいけものたちなのでしょう！　しかもガウバウたちはみずからのそ

んざいを相手にさとりられないために、わざと心の中をまっ白にして、かんぜんにはけいをたつことまでできました！ ガウバウたちがロビーのとくべつな力のことを知っていたわけではないでしょうが、このためロビーも、かれらのその悪たくみに気がつくことができなかったのです。ほんとうにおそろしいけものたちです！)

がけの上を見ればガウバウ、ふりかえってみればガウバウ、あーもう、書いててうつつとうしいくらいにガウバウです！ ノランベつどう隊は、今やすっかり、このガウバウたちにかこまれてしまっていました！ さあ、どうする、ノランベつどう隊！

「ここは、ぼくにもかつやくさせてもらおうよ、マリーー！」

ライアンが飛び出しました！ さっきは出番がくる前にマリエルに全部いいところを持っていかれてしまいましたので、そのおかえしをしようというのです。

「待って、ライスタ。相手が多すぎる。ふたりで協力していこう。」
いわれて、ライアンがふみとどまりました。

「ぼくが前をやる。ライスタはうしろだ。背中あわせでいくぞ。」
マリエルがそういって、ライアンの前に進み出ます。

「のぞむところじゃない！」ライアンが「ふふっ。」と笑って、マリエルのうしろにつきました。背中と背中をぴったりあわせて、前とうしろ、両方からこうげきしようというのです(ふたりばらばらにこうげきするより、この方がすきもなく、敵をいっぺんにこうげきできるというわけでした。さすがマリエルです)。

「ああ、ロビーさん。申しわけないですが、こんかいもロビーさんの出番はありませんよ。」マリエルがつえをかまえていいました。

「ロビー。ちよつとそこで、おとなしく待っててよねー！」ライアンが両手を前にかざして、精霊の力を集めながらつづけました(その前にライアンは、すばやくかばんの中から火を起こすための小ばこを取り出して、油のびんの口に火をつけ、それを地面に投げつけていました。ライアンの前には今、小さなほのおのはしらが立ちのぼっていたのです。こ、これってつまり……?)。

「う、うんー！」ロビーは腰の剣をぬいて、すこしはなれたところに

立って、身がまえます（もうかくす必要がありませんでしたので、ガウバウたちのかぎりない悪意に反応して、剣はまっ青に光っていました）。ロビーはいざとなったらこの剣で戦うつもりでしたが、はたして、この剣の出番はあるのでしょうか？（主人公なのに、出番がないというのはちよつとさみしい気もしますが、ロビーは、戦いがせんもんの主人公というわけではないのです。読者のみなさんも、ロビーの力はほんらい戦いにむけられるようなものではないということは、もうわかってますよね。ここはいつしよに、ふたりのちびっ子たちの戦いを見守ることにしましょう。まあ、ライアンもほんとうは、戦いがせんもんというわけではないはずですが……）

「うしろは、まかせてはいじょうぶなんだろうね？　ライスタ。」マリエルが、つえをふりかざしていいました。

「いうまでもないことだよ。ぼくのほんき、見せてあげるよ！」ライアンが、「ふふん！」と鼻をならしてこたえました。

どっちも自信まんまん。そしてへらさず口。おそらくこのアークランドでも、こんなにも強いちびっ子たちというのも、ほかにいないことでしょう。そのちびっ子たちが、ふたりで協力！　ともにほんきを出して、戦おうとしていたのです。なんてごうかなシチュエーション！　こんな場面は、めったに見られるようなものではありません。読者のみなさん。みなさんは今まさに、そんなきちようなたいけんをしようとしているのです！

それは、いつしゅんのあいだのできごとでした！

「マリエルの、アドバンスド・まじかるブレイク！　ぴんがる、ペンがる……」（ステップーく二。）

「精霊たちよ！　われのといかけにこたえたまえ！　ラ、イ、アーン……」

ばりばりばりばり……！　す、すごいエネルギー！

「くろー！」(きめポーズ。)

「ハリケーン！」

ぴかっ！ ぐろぐろぐろぐろ！ がっしやあーん！

びゅびゅびゅうううー！ どどどどおーん！

……………。

……………。

……。

それから、しばらくして……。

「ぐほっ、ぐほっー！」

あたりに立ちこめるまっ白なけむりに、ロビーはたまらず、せきこんでしまいました。岩のくずれるぱらぱらという音が、そこら中にひびいております。いったいなにが起こったのでしょうか？ それすらもロビーには、よくわかりませんでした。

やがてそのけむりの中に、ふたりの人影があらわれました。ふたりとも手を前にかざして、しゃんと立ちつくしていたのです。それはもちろん、われらがライアンとマリエルの、そのふたりのちびっ子たちでした！

「ライアン！ マリエルくん！」

ロビーが思わず、さけびました。

「だいじょうぶっ！」

そのロビーのといかけに、ライアンとマリエルのふたりは「ふう。」と息をついて、そしてしばらくたってからようやくこたえました。

「だいじょうぶって、なんのこと？ やだなあ、ロビー。ぼくを、だれだと思ってるの？」ライアンがあいかわらずのいい方で、自信たっぷりにそういいます。

「すみません、ロビーさん。ちょっとぼくも、ほんきを出してしまいました。はんせいしなくては。」マリエルがぺこりと頭を下げて、れいぎ正しくいいました。

そしてロビーは、しだいに晴れてゆくその白いけむりのむこうに、おどろきの光景を見たのです。

さつきまで、まわりにたくさんあったはずの岩たち。それらがすべて、こなごなにくだけて、あたりにばらばらにちらばってしまいました。がけの岩かべもがらがらとくずれ、あちこちにやけどげたあとがついております。そしてさつきといちばん変わったこと。それはあれほどたくさんいたガウバウたちが、もはや一ぴき残らず、いなくなっているということでした！

ガウバウたちがどうなったのか？ それはもう、おわかりですよ。かれらはこのふたりのちびっ子たちのほんきのパワーの前に、白はたこうさん！ 文字通りしつぽをまいて、「きやいんきやいん！」と一ぴき残らず逃げ出していったのです！（全部で百ぴき以上はいたはずですが、それらが全部逃げ出したのです！ すごい！

このときマリエルが使った魔法は、上位いなずまのじゅつ。その名もサンダー・ドラグーン！ いなずまでできたりゆうが、敵をなぎはらうのです。これはいなずまのじゅつをあやつるマリエルの、とっておきの大魔法でした。

そしてライアンが使ったのは風の精霊のたつまきでしたが、その大きさもいりよくも、今までわたしたちが見てきたものよりも、だんちがいのしろものでした。ロザムディアのまちの門を吹き飛ばした、あのあつとう的なパワー。あのときのパワーよりも、さらにその上をいつていたのです。つまりライアンは、ふたつの精霊の力をあわせるという、シープロンドでかたくきんしされているそのわざを、ここでも使ってしまったというわけでした。風と火、そしておまけに土の精霊の力まで、みんなまとめてたたきつけたのです。しかもこんかいは、手かげんする必要ありませんでしたので、全力で！ まさに、ほんきの力！ ライアンはまだまだ、こんなおそろしい力をひめていたんです。うくん、なんておそろしい……。

ちなみに、ライアンはマリエルに負けじと、このひつさつわざに名

まえをつけました。その名もライアン・ハリケーン！ まさしくその名まえの通り。おそろしいわざです。)

すべてをりかいしたロビーは、もうぽかーん！ あいた口もふさがりません。もう、すごいとかなんとか、なにもいうことすらできませんでした。

「あ、ああ、そうなんだ。」ロビーはそういって、「は、は。」とひきつつて笑いました。

「け、けががなくて、なによりだね。」ロビーはもう、それしかいうことができませんでした。

「それにしても、ライスタ、きみも、けっこうやるね。見なおしたよ。」マリエルがライアンに、そう声をかけました。

「マリーこそ、やるじゃない。ぼくと同じくらい強いって、みとめるよ。まあ、でも、リア先生にくらべたら、まだまだかな。」ライアンもマリエルにそういって、かえしてみせました(いい方はすなおじゃありませんでしたが、ライアンがこれほどほかの人の強さをみとめるというのは、めつたにないことです。それほど、マリエルの力をみとめていました)。

そして、まだその手に(光の消えた)剣をにぎりしめたままで立ちつくすロビーのことをよそに、ふたりのちびっ子たちは、おたがいの右手を頭上にかかげて、ぱちん！ ハイタッチをしてけんとうをたたえあいました。

「よっしー」

そよりと吹くつめたい風が、ほほをくすぐっていきました。じこくは、シルフのこくげん。午後の九時をまわったくらいでした。

すこしばかり、雲がふえてきました。その雲の切れまに、星がきらきらとかがやいております。その星の光は、きぼうの光のように思えました。これからはじまる、おそろしい戦い。このアークランドの運命をきめる、さけることのできない戦いが、この星の光のもとではじまろうとしていたのです。

「すこしくらい、休まれてはどうだ？　からだが持たんぞ。」

うしろから、声がしました。見ると、うす茶色の衣服を着た若い女の人がひとり、こちらへとむかってやってくる場所でした。長く美しい、こがね色のかみ。あんず色の、いんしよ的なひとみ。それはベーカーランドの白の騎兵師団の隊長、ライラ・アシュロイでした（かみをほどき、よろいも着ていませんでしたので、だいぶいんしよがちがつて見えました。今のかっこうのかのじよを見たかぎりでは、ほんとうに、ふつうの女の子にしか見えません。ちよつと、目つきはするどいですが）。

「お心づかい、かたじけない。もう、もどります。」

そういつてペこりと頭を下げたのは、白の騎兵師団のもうひとりの隊長、ベルグエルムでした。そう、ここはベーカーランドのふたつのとりのうちのひとつ、ベゼロインのとりで。その見晴らし台の上だったのです。

ライラはそのまま、ベルグエルムの横に立って、かなたの地を見つめました。いだいなる、ティーンデインの流れ。その流れのどちゆうとちゆうに、ベーカーランドのくにの塔やたてものが、見て取れます。大河はやがて、かなたのやみの中へと消えています。そのさきには、もうひとつのとりで、リュインのとりでがあるのです。

「リュインの者たちが、どうしているのか？　気がかりではあるな。」

ライラがいました。

「はい。」

ベルグエルムがこたえます。

ライラには、ベルグエルムの心の中はすべてお見通しのようにでした。リュインの大勢の者たち。ハミールのおとうと、レイミール。リストール・グラントしきかん。かれらが今、どうしているのか？　ここにいる者たちには、なにも知るすべはなかったのです（このベゼロインのとりでからも、ひそかにリュインとりにていさつ隊をむかわせましたが、リュインとりの守りはかたく、とりの中のようすや、

とりでの者たちがどうなったのか？　ということまでは、なにも知る
ことができなかったのです。

自分たちのことを敵の目から遠ざけるため、南への道を進んでいっ
た、ハミールとキエリフ、レシリアにルースアン。かれらのことも気
がかりでした。

そしてなにより。さいごの旅へと出かけた、ロビーのこと。ベルグ
エルムの心の中は、今さまざまな思いで、いっぱいだったのです。

「ベルグエルムどの。」ライラがつづけました。「そなたの歩んでき
た道は、つらく、重いものだったな。だが、そなたがすべて、かかえ
こまなくてもよいのだぞ。」

「え……」

思いがけないライラの言葉。ベルグエルムはすこしおどろいて、ラ
イラの方を見ました。

ライラはそんなベルグエルムのひとみを見て、おだやかにほほ笑み
ながらいいました。

「しきかんとて、人だ。ひとりですべて、かいけつできるというもの
ではない。そなたは、がんばりすぎる。ときには、弱音をはいてもい
いではないか。」

「ライラどの……」

ベルグエルムが、ふるえる声でいいました。

祖国レドンホールのめつぼう……。やみにとらわれたムンドベル
ク王……。かれらレドンホールのはい色ウルファたちは、このベ
ーカランドにのがれてからも、そのおそろしすぎるじじつにずっと立
ちむかってきたのです。とくにベルグエルムは、そのいちばん先頭に
立って、ほかのウルファの仲間たちのことをはげましていかなければ
なりません。そして、白の騎兵師団の隊長という、重いせきに
ん。しきかんが、兵士の前で弱音をはくことなどできません。でもほ
んとうは、ベルグエルムの心は、今にも張りさけそうなほどにつら
かったのです。

それでも。ベルグエルムはおしつぶされてしまいそうなそのおそ
ろしい運命の中で、弱音をはくことなく、りんと立ちつづけてきまし

た。そうもとめられてきました。

心のおく底にあふれた、つらい思い。重なりつづけた思い。それらの思いを、ベルグエルムはずっと、胸の中にとじこめつづけてきました。わたしが弱音をはいてなどいられない。かれらをみちびいてゆかなくては。かれらをささえ、はげましてゆかなくては。ベルグエルムはつねに、自分にいいきかせてきたのです。それらの思いがあつたからこそ、友のフェリアルにも、ロビーにも、ライアンにも、胸のおく底にしまいこんだ、その心の弱い部分を、見せるわけにはいきませんでした。

「そなたには、たくさんの仲間がいる。」ふたたび、ライラがつづけます。「仲間とは、ともにささえあい、はげましあうものだ。自分の弱さをさらけ出し、仲間を助けをもとめることも、また、たいせつなことなのではないか？」

「ライラどの……」ベルグエルムはライラのひとみを見すえながら、こたえました。

「かたじけない……」

ベルグエルムはそういって、ライラに深々と頭を下げました。ずっと胸のおくにしまいこんでいた思いが、どんどこみあげてくるかのようにでした。

ほんとうの強さとは、みずからの弱さを知り、それをみとめることなのです。すなおな心で、仲間と助けあうことなのです。

おそろしい、黒の軍勢とのさいごの戦い。

その戦いのはじまる、その前に。ベルグエルムの心は晴れ渡りました。

「仲間のために、われらのできることをやろう。それが、われらのつとめ。もどってきた者たちのことを、胸を張って出むかえられるようにな。」ライラが、ベルグエルムのうでに手をおいて、いいました。

「はい。」ベルグエルムはライラのその手を取って、力強くそれにとえしました。その胸に、もうなにも、まよいなどはありませんでした。

ロビーどの、わたしは、わたしのつとめを、せいっぱい果たします。どうか、ごぶじで……。

ライアン、マリエル。ロビーどののことを、よろしくたのむぞ。

ベルグエルムは空をあおぎ、はなれた地にいる仲間たちに、そう思いを飛ばしました。

「さあ、今は、休まれよ。敵は、いつやってくるとも、知れぬぞ。」
そしてベルグエルムとライラのふたりは、ふたたび、とりでの中へともどっていきました。

20、黒の軍勢きたる

魔法……。なんて心のわくわくするひびきなのでしょう。おとぎのくにの人たちではないふつうの人たちの住む世界では、いつの世も、魔法は遠いあこがれのそんざいでした。魔法のつえをぱつとふりかざせば、目の前にあらわれる、たくさんのすばらしいものたち。ゆげを立てるごちそう。大きな大きな、クリームたっぷりのケーキ。キャンディーにチョコレート。ぬいぐるみだつて、おもちゃだつて、魔法で出せないものはありません(たぶん)。さらに、むかつてくる敵に、「えいー」。魔法の言葉をとなえると、つえのさきから、ごごお！ほのおやいなずまが飛び出して、みんなやつつけてしまう。そんな、まさに夢のような力、それが魔法の力だったのです。

ですが魔法とは、すばらしい力を持っているのと同時に、じつはなんともおそろしい力をも、その内がわにひめているものでした……。はるかなむかし、この世界に人々が暮らしはじめるその前から、魔法はすでにそんざいしていました。そのじだい、それらの魔法を使っていたのは、生きものの力をこえた、しんぴ的なそんざい。今のアーランドの人たちから、神さまとか、女神さまなどとよばれている、いだいなる者たちでした。そして、やがてこの世界に人々が暮らしはじめるようになると、かれらいだいなる者たち(神さまたち)は、このすばらしき力、「魔法」を、人々にさずけたのです。魔法の力をもって、世界がへいわになることを願いました。

しかし人々には、魔法の力を正しく使いこなすことは、できなかつたのです……。

魔法はたしかに、すばらしい力です。正しく使えば、こんなにべんりですてきな力はありません。ですが、魔法の持つもうひとつの力。その力をおさえこむことは、魔法をおぼえたばかりのとうじのアーケランドの人々には、まだむりなことでした。そしてそれこそが、魔法の持つ、その内がわにひめられた、おそろしい力にほかならなかつたのです。

光があれば、やみがある……。それらは、ふたつでひとつ。魔法の持つおそろしい力とは、まさに、そのやみの力でした！魔法の持つやみの部分。人々はその力のおそろしさに、気がつきませんでした。魔法のやみをかるくあつかい、そしてそのけっか、人々はその魔法のやみの中から、たいへんなわざわいを生み出してしまったのです。それは、魔物とよばれる、おそろしい力を持ったかいぶつたちでした。魔法のやみから生まれた、魔物たち……。かれらはどんどん力をたくわえ、そのおそろしいやみの力で、世界を乗っ取ろうとしました。しかし人々はけっして、かれらにくつつすることはなかったのです。

光の魔法。人々は魔法のやみをおさえられなかったそのきょうくんをもとに、魔法のもうひとつの力、光の力を高めていきました。それこそが、魔法のやみ、魔物たちにたいこうする、ただひとつのしゅだんだつたのです。そしていよいよ、人々の光の魔法と、魔物たちのやみの魔法、そのふたつの力が、大げきとつすることになりました（この戦いは「光とやみの魔法大戦」という名で語りつがれ、もはや伝説のものとなつています）。

もしこのとき、人々がやぶれていたのなら。今のアーケランドは、今とはまったくちがう世界になっていたことでしょう。やみにおおわれた、おそろしい世界になっていたはずですが。

ですが、そんなことは、だんじてゆるしません！人々は、この大げきとつの戦いに、勝つたのです！

魔物たち、そしてやみの魔法は、人々をみちびいたけんじやたちの力によって、残らずふうじこめられました。こうして、世界はすくわれたのです。すくわれたはずでした。ですが……。

それから、ずっとずっとのちの世……（それでも今から千年近くもむかしのことですが）。おそろしいわざわいは、ふたたび、この世界に放たれてしまったのです。

じゃあくな力を持ったひとりの男が、かつてけんじやたちが魔物たちをふうじこめた黒いすいしょうの中から、そのわざわいの力をとき

放ってしまいました！ 男の名は、ルドナ・ラクタル。ルドナは、か
いほうした魔物たちをしたがえて、たくさんのくにぐにをうばいまし
た。ですがどんなときにも、悪が長つづきするためしなどはなかった
のです。それはなぜか？ そんなときには、かならず、悪をほろぼす
せいぎの味方があらわれるからでした！（だってあらわれなかつた
ら、世界はずっと悪の世界のままですものね。）

ひとりのほうろうのルルム種族の冒険家。その冒険家の若者が、黒
いすいしょうの力のなぞをつきとめ、その力を持って、ルドナをたお
しました。そして魔物たちや、やみの魔法、それらもすべて、黒いす
いしょうとともに、こなごなにうちくだかれることになったのです！
やった！ ようやくこれで、いつけんらくちやくですわね！（とこ
ろで、ほうろうのルルムときいて、みなさんはぴんときたことかと思
います。そう、はぐくみの森の地下いせきの中で夜のかいぶつにとらわ
れていた、赤毛のルルムの冒険家、シェイディー・リリアン。かれ
もまた、ほうろうのルルムとよばれておりました。じつはじつは、大
むかしにルドナをたおし、黒いすいしょうをうちくだいたそのせいぎ
の味方こそ、ほかでもない、かれだったのです……。といたいといこ
ろでしたけど、どう考えてもねんれいがありませんよね。シェイ
ディーがじつは、千年も生きている、スーパーおじいちゃんとかいう
のであれば話はべつですけど……。ほんとうはかれは、ルドナをたお
したせいぎの味方、ロランド・リリアンのしそんでした。へえ！
すごい！ そしてシェイディーもまた、冒険家。ロランドのその血
を、しっかりと受けついでいたのです。）

ところがところが。これでもまだ、すべてが終わったというわけ
はありませんでした（うーん、しつこい）。

うちくだかれた黒いすいしょう。それとともにふうじられたはず
の、やみの魔法。その力がかんぜんに消え去ってしまう前に、ほんの
わずかだけ、その力を手にしてしまったものがありました。こんどはだ
れ？ また、じゃあくな男？ それとも、魔女かなにかでしょうか？

いいえ、ちがいました。それはなんとも、いがいなものだったので
す。

夕方五時、黒ユピユピのこくげん。黒ユピユピというふわふわした
生きものが自分のすあなにもどるのが、夕方の五時ころだったので、
この名まえがついたわけですが、なぜ今、そんな話をしたのかという
と……、じつはこの黒ユピユピという生きものこそが、そのおそろし
いやみの魔法の力を手にいれてしまった、ちようほんにんだったから
でした！

黒いすいしようがうちくだかれた、そのとき。その場所にたまた
ま、一ぴきの黒ユピユピがいたのです。そして黒いすいしようからわ
ずかにこぼれ出たやみの魔法のエネルギーを、その黒ユピユピが食べ
てしまいました！（この生きものはしぜんの中のさまざまなエネル
ギーを食べて、えいようにしてしまうのです。）

ほんらいならば、空気の中にすぐに消えてしまうはずだった、やみ
の魔法のエネルギー。それがこうして、黒ユピユピのからだの中にと
どまってしまいました。そして悪いことに、それはいつまでも消える
ことなく、ユピユピのその子どもやしそんにいたるまで、えんえんと
受けつがれていつてしまったのです（やみのエネルギーそのものは、
ユピユピのからだに危害を加えるようなものではありません。
ちよつと、ほかのユピユピより目つきが悪くなって、かわいくな
くなってしまいますけど）。

そしてあるとき。

ついにそのやみの魔法の力のそんざいを、見つけてしまった者があ
らわれました。

その者の名は、アーザス・レンルー。

そう、そのかれこそが。今このアークランド世界のへいわをおびや
かしたつづけている、おそるべきやみの魔法使い、アーザスだったので
す……！

やみの魔法の力を手にいれた、アーザス。そのおそろしきは、みなさんもすでにごぞんじの通りです。ほんらいならば、はるかなむかしにとつくに失われていたはずの、おそろしい力。その力を手にしたおそろしい魔法使いに、人々は、ロビーは、どう立ちむかうのでしょうか？

すべての運命は、こくいつこくと、人々のもとに近づいてきています。

そして、ロビーの運命は……？

おそろしいやみの力が、ロビーにせまろうとしています。

ふいいん！ ふおん！

みんなが地面におり立つと、魔法のえんばんエレベーターが小さな音を立てて、消え去りました。

「やーっとなつたよ、まったく。」地面に立つなり、ライアンがさっそくもんくをいいます。そう、みんなはついに、リズの住んでいるそのおうちがある小高い岩山の上まで、やってきたところでした（この岩山もまっすぐながけの上にありますので、ここでもやつぱり、マリエルのえんばんエレベーターがやくに立ったというわけでした。

ところで、こんながけの上へ、いったいリズはどうやってのぼっているのでしょうか？こたえはたんじゆん。リズはこんながけのひとつやふたつ、なんのその。しゅたつしゅたつとジャンプをくりかえして、ささつとのぼっていつてしまうのです。うくん、さすがはシルフィア種族。精霊のパワーって、すごいですね）。

そこはたいらな岩の地面で、はしからはしまでが二十ヤードほどしかない、まるい広場でした。植物はほとんど生えていなくて、わずかに、ぐるぐるヒースのしげみがいくつかと、岩のさけ目にがんばって生えている、いつぽんのよれよれの木があるだけです（きつとどこからか、たねが飛んできたのでしょうか。こんなところに生えているなんて、えらい木ですね）。そしてその広場のおくに、ほとんどくずれかかった石づくりの家がいつけん、たっていました。どうやらこれが、めざすリズの住んでいるという、おうちのようです（家というより、ほ

とんどものおきといった感じでした。それもセイレン大橋の下のカピバラ老人の小屋と同じくらい、ぼろぼろな感じでした。ちよつと、カピバラ老人には失礼ですが……。

ちなみに、この家はむかし銀をほるためにここではたらいいた人たちが、きゆうけいを取るために使っていたものでした。リズはうちすてられていたこの家を、自分の家としてさいりようしていたのです。しかもほとんど、リフォームしないままで！ だからこんなにぼろぼろなんです。

みんなはその家にむかつて歩いていきましたが、ひとつ、おかしいことに気がつきました。それは家にまったく、あかりや火の気がないということでした。こんなきせつの夜ですもの、だんろに火がはいっていないくては、寒くてたまらないはずです。な、なんだかとも、いやなよかんが……。

「ねえ、マリエルくん。かくにんなんだけど、ぼくたちがくるってこと、リズさんは、ちゃんと知ってるってことで、よかつたんだよね？」ロビーがマリエルにたずねました（もちろんロビーも、リズにきちんとれんらくがつけてあるということについては、マリエルからちゃんと説明を受けていたのです）。

「はい。もちろん、ぼくたちがリズのところへいくということとは、きのこのうちにも、前もって魔法の手紙を送っておきましたし、リズほんにんがきちんとその手紙を受け取ったということも、魔法でかくにんしています。それに、さきほどロビーさんたちがやってくるすこし前にも、もういちど、かくにんの手紙を送っておきましたし、それもきちんとリズが受け取ったということも、かくにんしています。リズには、ちゃんと、自分の家でぼくたちのことを待っているようにと、手紙の中で、しっかりと、しじを出しておきましたから。」マリエルがこたえます（そのマリエルの計算されつくしたけいかくのことについては、すでにみなさんにもお伝えしましたよね。あの頭の痛くなるような、こまかいけいかくのことです。しかもマリエルは、ねんにはねんをいれて、ロビーたちのくるその前に、こんどはかくにんの手紙まで送っていました。まったくぬかりがありません。

ところで、マリエルの言葉にもあるように、リズのもとに送ったこの手紙は、マリエルの魔法による魔法の手紙でした。ちようちよおたよりのじゆつ。これが、マリエルの使ったその魔法です。この魔法を手紙のはいったふうとうにかけると、そのふうとうがひらひらと、ちようのようにまい上がって、あてさきの住所まで飛んでいきました。この手紙は魔法で守られておりましたので、雨風や、たいていのしようがい加わっても、なんなくあてさきまでとどけることができましたのです。そのうえじつさいには、ちようというよりも、でんれいの鳥のごとく、すばやくあてさきまで飛んでいくことができました。

そしてこの手紙を送りさきの相手ほんにんが受け取ると、ちやんとマリエルのところに、それが伝わるようになっていました。ですからマリエルは、リズほんにんが手紙をしつかりと受け取ったということを知ることができていたのです。まったくぬかりがありませんね。

また、この魔法で送った手紙は、とどける相手がるすだった場合でも、そのことをマリエルのところにしらせるようになっていました。この手紙はゆうびん受けの中にはいったあと、大きなメロディーをかなでて、「魔法の手紙がきましたよ」ということを相手にしらせるというものでしたが、しばらくたってもほんにんの受け取りがない場合には、相手がるすなのだとはんだんして、そのことをマリエルにしらせるようになっていたのです。もしリズがるすだったなら、またべつの方法で、全力でリズのいばしよをさぐることになっていたでしょうけど……。

ちなみに、エリル・シャンデーインのゆうびんかもめでも、とどけさきにサインをもらって、きちんととどいたかどうか？　かくにんすることができましたが、ゆうびんかもめがとどけられるのは、安全な場所にかぎられました。リズの住んでいるこのあたりは、地上のガウバウだけでなく、空にもおそろしいかいぶつたちが住んでいて、かもめがゆうびんをとどけることができなかつたのです。そのかいぶつは大きなたばさを持った、とかげにいたギルディというかいぶつで、ワットのデイルバグよりはましでしたが、それでもおそろしいかいぶつであることにちがいはありませんでした。ゆうびんかもめなんか

がのんきに飛んでいたら、たちまちおそわれてしまうことでしょう。ですからマリエルは、もつともしんらいのおける自分の魔法を使って、リズに手紙をとどけたというわけだったのです。

ですが……。

口ではロビーに「心配ない」といったようすをよそおってはいましたが、あかりのともっていない、そのまっくらな家を見て、じつはマリエルも、ここにきて、とつてもいやなよかんがしてきていました……。自分の計算の、なにかがまちがってきているのか？と（そのれいせいな顔にも、あせが！）。

「なんかこれ、まずいパターンじゃない？」ライアンも同じく、いやなよかんがしてきたようです。

「ね、寝てるんだよ、きつと。げんかんをノックすれば、起きてくれると思うよ。」ロビーがあわてて、マリエルとライアンにいいました。でもやっぱり、ライアンのいう通り、なんだかまずい感じですよ。

そしてそのまずい感じは、げんかんの前にまっさきにたどりついたマリエルの反応によつて、はつきりとしたもの変わってしまった……。

「ああっ！　これ、ぼくの出した手紙！」

マリエルがさげびました。そしてマリエルのいう通り、げんかんのわきのゆうびん受けの上に、マリエルの送った手紙のふうとうがひとつ、「あけられもせずに」、そのままおいてあったのです……。がーん！

「読んでないね。」ライアンがいました。

「よ、読もうとしてたけど、そのまますぐ眠くなって、手紙をおいたまま、中にはいって寝ちゃったのかも……。」ロビーが素晴らしいです。ですが……。

ふつうに考えたら、ほんにんがまだ家の中にいるのであれば、ちやんと受け取った手紙をこんなふうにとおきっぱなししておくことなんて、あるはずありません（いくら眠かったとしても）。あと

で読むにしても、とにかく家の中には、しまっておくでしょう。ということは……？

リズが今、この家の中にいるというかのうせいは、きわめてひどいということでした……。手紙をおいたまま、どこかへ出かけていったと考えて、まずまちがいないでしょう。ですからこれは、まずいいパートナーなのです（マリエルもそのことに、すぐに気がついたというわけでした）。

ところで、ゆうびん受けの上にあったこの手紙は、マリエルがさきほど、ロビーたちがエリル・シャンディーンにくるすこし前に送った、そのかくにんのための手紙の方でした。ベルグエルの送ったゆうびんかもめの手紙によって、ロビーたちがあと一時間ほどでもどるということを知り、急ぎマリエルは、リズにこのかくにんの手紙を送ったというわけなのです。この手紙はたしかに、リズは受け取りました。それは魔法でも、かくにんできたことでしたから。ですがマリエルは、リズのそのいいかげんなせいかくに、ここですっかりやられてしまったのです。

リズは受け取ったこの手紙を、「受け取った」というだけで、「あけて読んで」はしませんでした！　じつは魔法でかくにんできるのは、手紙を受け取ったということだけなのであって、それをあけて読んだかどうか？　ということまでは、知ることはできなかったのです（この魔法の手紙はとてもむずかしい魔法で、相手さきに手紙をとどけるだけでも、たいへんな魔法の力を使用したのです。そして相手がその手紙を手にする、まじゆつしのところにそれをしらせたうえで、すべての魔法の力は消えてしまいました。ですから、相手がそのあとでその手紙を読んだかどうか？　というところまでは、さすがに知ることはできなかつたのです。やはり魔法とは、すべてばんのうではありませんでしたから）。

ですが、ふつう人から手紙を受け取ったのなら、あけて読みますよね？（ダイレクトメールじゃあるまいし。）ましてやそれが、エリル・シャンディーンから送られた、きんきゆうの魔法の手紙であるのなら、なおさらです。そんな、いたってふつうのことが、リズには通じ

なかったというわけでした……。これではさすがのマリエルでも、よそくができなくてどうせんでしよう。な、なんていいかげんな人なんだ、リズって……)。

「リズのやつ！ ぼくの魔法の手紙は、いつもだいじなようじなんだからって、いつてあるのに！ まったく、なんていいかげんなやつなんだ！」マリエルはもう、かんかんです(きちんとしてたりろんで計算されつくした行動を取るマリエルでしたから、その気持ちもたしかにわかりますね)。

「と、とにかくさ。家の中に、はいつてみようよ。ほんとに寝てるのかもしれないし。」ロビーが、ぶんぶん怒っているマリエルをなだめて、いいました(そういうロビーでしたが、「ほんとに寝てるだけ、なんて、まずないだろうなあ」と心の中で思っていました)。

「まあ、なんとかなるよ。」ライアンも、マリエルの肩をたたいていました。

とん、とん、とん！

げんかんのとびらをノックしてみますが、やっぱりおうとうがありません。ためしにとびらをおしてみると……。あきます！ かぎもかげずに、なんて不用心なのでしょう！（といっても、こんなところにくるどろぼうもないでしょうけど。ガウバウやギルデイくらいのものでしよう。っていうか、どろぼうよりもそっちの方が、ぜんぜんこわいんですけど……)。

家の中は、まっくらでした。マリエルがつえをかざすと、そのつえのさきが、ぱあつと光って、家の中をてらします(これはそのまま、あかりのじゆつ。きほん的な魔法のひとつです)。

家の中は、さいていげんの家具がそろっているだけでした。おくにだんろがひとつあって、その横にだいどころがあります。テーブルにいます、そしてベッドがひとつ。ベッドには茶色いもうふが、しわくちやのまま乗っていました。そして……。ロビーのはかないきたいもむなく、そこにはやつぱり、リズはいなかったのです……。 (そして

かれらは、家にはいつてすぐに、げんかんのわきでしようげきのものをふたたび目にしてしまいました。そこには、マリエルがきのう送った「一通目の手紙」が、「あけられもせず」、そのままおいてあったのです……。がーん！

これはつまり、リズが手紙を受け取ったけれど、げんかんのわきにそのままほったらかしにしておいたということであらわすものでした。つまりリズには、「マリエルたちがここにやってくるということ」と、そして「マリエルたちにシルフィアである自分の力が必要なのだ」ということ、そのどちらも、伝わってはいなかったのです！ もういちど、がーん！

そして……。それを知ったマリエルは、ここにきて、ようやく、リズのことについてはつきりと学ぶことができました。

リズには、きんきゆうの手紙は出してはいけない！。

家の中にも、ひよつとしてトイレ？　と思つて家のまわりもさがしましたが、どこにもリズはいませんでした。せっかくはるぼる、おそろしいガウバウたちと戦つてまで、やってきたのだというのに！　いったいリズは、どこにいつてしまったのでしょうか？（ほんともう！）

「申しわけありません、ロビーさん……。これは、かんぜんに、ぼくのミスです。リズのいいかげんさを、すべて計算にいれていませんでした……。」「マリエルはそういつて、頭をぺこぺこ下げて、ロビーにあやまりました。

「そんな。マリエルくん、きみのせいじゃないよ。」ロビーがあわてとりつくろいます（わたしもほんとうに、マリエルにどうじょうじょうしてしまいます。せっかく、あんなにも計算されつくしたけいかくを用意して、それにもとづいた行動を取つておりましたのに……。こんなにもあつさりど、それをだいなしにされてしまいましたから……）。

「それよりさ、リズさんがどこにいつたのか？　そつちをなんとかしないとね。」ライアンがいました。いないものはしょうがないものごとを前むきに考える、ライアンらしい言葉でした。

「ぼくが、さつき二通目の手紙を送ったときには、リズはまだ、ここ

にいたわけです。ですから、それから計算しても、いくらシルフィアの足であるとしても、歩いて数時間くらいでは、そんなに遠くまでは出かけられないはず。となると、だいたい、けんとうがついてくる。」マリエルがあごをなでながら、素晴らしいです。こちらはなんとマリエルらしい、りろんにもとづいた言葉でした（ちなみに、精霊の種族であるシルフィアなら、岩場も荒地地もなんのその。しゅたつしゅたつとはねるようにすばやく進んでいくことができました。マリエルはそのことも、ちゃんと計算にいられたというわけなのです）。

「心あたりがあるの？」ロビーがたずねます。

「はい。」マリエルがこたえました。

「リズがよく出かける場所が、ひとつあります。ぼくもいったことがあります、曲を作るのに、気持ちがおちつくとか。たぶん、そこだと思いますが、もつとはつきりと、ぼくの魔法で、リズのいる場所をせいかくにしらべてみましょう。」

へえ、魔法でそんなことまでできるんですか！ さすがマリエル。たよりになるなあ（こんかいのこんなトラブルなんて、マリエルならすぐに取りもどしてしまおうでしょうね）。

「みるみるこんぱすのじゅつを使います。この魔法には、さがす人物のにおいのする、小さめの品物が必要なんですが、なにか、いいものはないかな？ すいませんが、ロビーさんとライスタも、ちよつと、さがしてもらえますか？ タオルとか、ハンカチとか、シャツとかがあれば……」

思いもかけず、さがしものはじまってしまいました。このみるみるこんぱすのじゅつという魔法は、魔法のわんちゃんやんが飛び出して、その鼻でさがす人物のにおいをかぎつけて、なんマイルもさきまでいばしよをさぐることできたのです。そのために、さがす人物のにおいのする品物が、必要だったというわけでした（品物をかた手に全部しつかりと乗せる必要がありましたので、小さめの品物でなければなりませんでした。すぐに見つかるもうふでは、大きすぎて手に全部乗らないから、だめだったのです）。

ところで……、こんなにべんりな魔法があるのなら、それではじめ

から、リズのいばしよをかくにんしておけばよかったんじゃない？
と思われる方もいるかと思いますが、じつはマリエルはその通り、この魔法でリズのいばしよを、はじめにきちんとかくにんしていました。そしてリズがたしかに自分の家にいるということをしめしたと、それから魔法の手紙を、リズのところへと送ったというわけだったのです。この二段がまえなら、ふつうは、まちがいの起こりようもないでしょう。

そして数時間前、二通目の手紙を送ったときにも、マリエルはこの魔法でリズがちゃんと自分の家にいるということを、ふたたびかくにんしていました。ですからマリエルも安心して、リズのところへとむかうことにしたのです。ですが……。

まさかその数時間のあいだに、リズがかってに、どこかへ出かけていってしまうとは！（しかもそもそも、自分が送った魔法の手紙すら読んでいないとは！）さすがのマリエルでも、とてもよそくのできないことでした。

こんかいのこのできごとは、まったくもって、マリエルのよそうをはるかにこえてしまっていたできごとだったのです。まさかマリエルも、このみるみるこんぱすのじゆつをここでふたたび使って、リズのいばしよをもういちどかくにんすることになろうなどは、思ってもいませんでした。かわいそうなマリエルくん……。

「それにしても……」家の中をさがしはじめたマリエルでしたが……。

「なんてきたないんだ、まったく！ よく、こんなところに住んでいられるな。」

マリエルのいう通り、まだ説明していませんでしたが、家の中はかなりのちらかりようだったのです。テーブルにはチーズやハムの食べかけとか、お菓子のつつみとか、食器などがそのままでしたし、床にも、本やがくふや、がつきを手いれする道具などが、あちこちにちらばっていました（これじゃ、手いれをする道具に手いれが必要ですね。でも、いくらちらかっているとはいえ、カルモトの家ほどではありませんでしたが。あれは、ちらかりすぎですから）。

その中でも、マリエルがあきれてしまったものがひとつ、ありました。それは、剣です。剣じゆつしなんやくだったリズなわけですが、その自分の剣を、床の上にほつたらかしてあつたのです！ それも、ほこりをかぶって！（しかもこの剣は、剣じゆつしなんやくになつたそのおいわいにアルマーク王からおくられた、とてもりっぱな剣でした。剣を作る名人、ロゼツテイ・ガルブレイドの作つた、とてもきちょうでねだんの張る剣だったので。剣を学ぶ者ならば、だれでもよだれが出るほどにほしがる、名品でした。それをこんなところに、ほつたらかしてしておくなんて！ うくん、さすがリズ、といったら、ほめ言葉になつていないような気もしますが、やっぱりすごい人です。）

そんな中、ロビーはベッドのまわりをさがしていましたが、そこでもんでもないものを見つけてしまいました。それは……。

ベッドの下に、リズの服などがおしこめられていました（これはベツに、とんでもないものじゃありません）。これならリズさんのおいがするから、ちょうどいいかな、と思つて、ロビーがそれをひっぱり出すと……、その服のあいだから、小さなまるまった、ぬののようなものがひとつ出てきたのです。なんだろう？　と思つて、ロビーがそれを広げてみると……。

「ええーっ！」

「ど、どうしたの？　ロビー。」「どうしたんですか？」

ロビーのさけび声に、ふたりのちびっ子たちもびつくりして、ロビーにたずねました。

「い、いや、ごめん。なんでもないよ。ちよつと、とかげがいたものだから、びつくりしちゃつて……」あわててロビーが、手に持っているものをうしろにかくしながら、いいわけします。

「えっ、とかげがいるの？　やだなあ、ぼく、そういうの、きらいなんだから。」ライアンがそういつて、まただいどころのあたりをさがしはじめました。マリエルも、テーブルのまわりのごみをさがさどど

かしながら、さがしものにもどります。どうやら、ごまかせたようです。

ロビーは「ふう。」と息をついて、うしろをむいて、もういちど手にしたものをこっそりとかくにんしてみました。やっぱり、まちがいありません。

それは……、若い女の人間の、下着だったのです！（ほんとに、ええーっ！）

リズはこの家に、ひとりで暮らしています。ベッドもひとつしかありませんし、ほかに女の人がいるようなけいもありません。ひろつてあずかかってる？ たまたま女の人の友だちがお茶を飲みに来て、おいていった？ それらもくるしい説です。なにより、自分の男物の服やズボンなどといっしょに、まとめておいてありましたから。

ということは……、これは、リズのこじんな持ちものなのだということで……、つ、つまりそれって……、どういうこと？（しゅ、しゅみ？ いやっ、なんでもありません！）

「ま、まさか……、いや、でも……、ど、どうしよ……」

ロビーはすっかり、あたふたしてしまいました。それもそのはずです。伝説とまでいわれた、失われしシルフィア種族。精霊王のトンネルをあげられる、大いなる力を持っているという、そのりっぱな人物の家から、まさかこんなもの（女の人の下着）が飛び出すとは……、夢にも思っていないませんでしたもの！

とりあえず、マリエルくんにはだまっておこう……。ロビーのけつろんでした。マリエルはリズと親しいあいだがらのようでしたから、こんな、リズの知られざるひみつを知らせるわけにはいきません（リズのめいよのためにも）。ロビーは思わず、その下着をベッドのマットの下におしこんで、かくしました。

「いいものがあったよ。」ライアンがいました。

「ほら、これ、リズさんの使ってるバスタオルでしょ？ 使ってるから、まだ、あらってないみたいだし、これなら、においも残ってるん

じゃない?」

「うん、それならいいね。」マリエルがタオルを受け取って、それを左手の手のひらの上に乗せました。そして右手を、それにかざして……。

「みるみるこんぱす。さーてく、さーてた、くー。」

魔法の言葉をとなえると、「きゃん!」タオルの上に、まっ白な毛なみの魔法の子犬が、なき声とともに、ぴよこんと飛び出したのです! なんてかわいい! そして、「くんくんくん!」その子犬がタオルのにおいを、くんくんかぎはじめました。かわいい!

すると。その子犬がとつぜんすつくと立ち上がって、「あっちにいるよ。ここから八マイル。」東の方をゆびさしながら、なんともかわいらしい子どもの声で、しゃべってしらせたのです!

「ふええ……。」と感心しているロビーとライアンのことをしりめに、マリエルはやっぱりといった顔をして、あごをなでながらいいました。

「思った通りです。リズは今、ラググリーンたちの里にいますね。」

「ラググリーン?」ロビーとライアンが、そろってたずねます。

「ラググリーンは、ここからさらに東の山の上に住んでいる、ねこの種族の者たちです。アツプルキントとよばれるかれらの里から、ほとんどとに出ることもないので、知っている人もすくないのですが。リズはかれらと仲がよくて、ちよくちよく、かれらの里に、あそびにいつているんですよ。」

アツプルキントのラググリーン。マリエルのいう通り、その名まえを知っている者は、このアークランドでもほとんどいないことでしょう(ロビーとライアンも知らなかったのです)。ラググリーンたちはすらりとほそいしなやかなからだを持っていて、とつてもはやく走る事ができましたし、また、とくいのジャンプ力は、かえるの種族のフログルたちと同じくらいすごいものでした(さすが、ねこの種族です)。動くものと、おひさまと、おひるねが大好き。そして、どうがんばっても「な、ぬ、の」の発音ができずに、「にゃ、にゅ、によ」となってしまうのです(さすが、ねこの種族です)。

ですがラググリーンたちのことを説明するうえで、それらのことよりもなによりも、もつともだいじなことがひとつありました。それは……、かれらのその背中に、大きな羽がついているということだったのです！

「空飛ぶ」ねこの種族。それがラググリーンたちでした！

いったいどうして、かれらが羽を持っているのか？ それはだれにもわからないことでした。ラググリーンたちにさえわからなかったのです（もつとも、知ろうともしていないようでしたが）。ラググリーンたちは、こまかいことは気にしません（けっして、こまかいことじやないような気もしますが……）。気がついたときには、もう羽がついていたのです。

ただいえることは、かれらがこの羽を受けいれ、楽しんで使っているということでした。ふわふわ飛んだり、追いかけてつこをしたり。かれらは日々のせいかつを、ただのんびりと、おだやかにすごしていたのです。そのおだやかなラググリーンたちの住んでいる、らくえんのよきな場所、それがアツプルキントとよばれる、かれらの里でした。そしてリズは今、そこにいるということです。

でも……、これからすぐにそこへいくというのは、やはりとてもむりなことでした。そのいちばんのりゆうは、みんなのからだのじょうたいのこと。マリエルはともかく、ロビーとライアンが今日いちにち、どんな旅をしてきたのか？ 思いかえしてみてください。ベーカールンドへむかうむかしの街道のとちゅうで野宿をといてからというもの、ずっと走り通し。やみの精霊の谷をぬけ、シヨートカットにせいこうしましたが、それからすぐに、ベーカールンドでアルマーク王に会って、重大なじじつをたくさんきいて、そしてそのあと、おふろにもはいれず、ごはんを食べるひまもなく、すぐにこのリズの家へとむかって出発したのです（前の日もこれと同じくらい、たいへんないちにちでした。それが二日もつづいたわけです）。しかも、おそろしいガウバウたちとも戦いました。いくらふたりとも、げんきな若者であるとはいえ、これにくたくたにならないはずありません。時間がないよりもたいせつな旅でしたが、むりをしすぎてからだをこわ

してしまつては、なんにもなりませんもの。

こうして、ここにふたたび、たいへんないちにちが終わったのです（ロビーがかなしみの森のほらあなを出発してからというもの、ほんとうに、いちにちいちにちが長く感じられますね）。みんなはこのまま、リズの家にとまらせてもらうことにしました（もともとマリエルは、今日すぐに精霊王のトンネルまでいくなつてことは、むりだとわかつておりましたので、さいしよからリズの家にとまらせてもらうよついででした。さいしよにむかうよついでだったトンネルにいくためには、まずけわしい山道を歩いていかななくてはならなかつたため、これ以上進むのは体力的にもむりだと、マリエルははんだんしていたのです。

そして道のりがへんこうされ、アップルキントへとむかうことになつたわけですが、その道のりもまた、今すぐむかうのには、体力的にも安全のうえからでも、むりがあるとマリエルははんだんしました。そのため、やはりさいしよのよついで通り、リズの家はこのままとまることにしたというわけなのです（もつとも、よついでとちがうのは、家の主人がいらないということでした……）。

ちなみに、マリエルは、リズがアップルキントに行くときには、なんにちもそこにゆつくりたいざいするということを、知つておりましたし、そのしゆうかんを急に変わるようなことは、リズのいいかげんさをじっくりねんいりに考えにいれたうえでも、ないだろうとはんだんしました（または、なにかとくべつなりゆうでもあつて、アップルキントをすぐに出発してしまうようなことも、かくりつ計算からいつてないだろうとはんだんしました）。そのため、リズがこのあとすぐに、またどこかほかのところへいつてしまふのではないかと、という心配は、考えにいれなくてよいとはんだんしたのです。それにマリエルは、あしたの朝になつたらもういちど、みるみるこんぱすのじゆつを使つて、リズのいばしよをかくにんするつもりでした。そしてさきにいつてしまひますが、マリエルはじつさいによく朝、リズがきちんとアップルキントにいるということをしつかりたしかめたのです。ですからあとはそのまま、大急ぎで、アップルキントまでいけばいい

わけでした。とりあえずは、よかった。

ごおお！

マリエルがほのおのじゅつを使って、だんろに火を起こします。そのあとライアンが、火の精霊の力をかりて、その火をあつというまに大きなものに変えてくれました。

部屋があたたまり、(ねんがんの)食事がすむと、ロビーとライアンはたちまち眠くなってしまいました。そしてリズのベッドはあつというまにライアンに取られてしまいましたので、ロビーとマリエルは、それぞれ床の上にもうふをしいて、寝ることにしたのです(マリエルだけは、その前にリズの家のおふろをかりてはいり、かみもぼつちりシャンプーしていましたが。ロビーとライアンはとにかく眠くて、おふろにはいる気にもなれなかつたのです。カーテンの影から「のぞくなよ。」とマリエルが顔だけを出して行って、ライアンが「だれが！」とどなりました。

ちなみに、ライアンとロビーはそのままの服そうでしたが、マリエルはパジャマじゃないと寝られないらしく、自分のかばんから、ぴしっ！ とのりのきいた新しいパジャマを取り出しましたが、そのかばんの中を見てびっくり！ きれいにおりたたまれた、服やズボンや、くつした、下着などが、びっしりつめられていたのです(まるで、ひとつきまるまる、海外旅行にでもいくときみたいー)。けっぺきなマリエルは、いちにち二回は服を取りかえないと気持ちが悪いらしく、旅のときにはいつも、かばんにいったいどの着がえを持っていきました。「なにそれ！ 服、多すぎだよ！」ライアンがいいましたが、「ライスタのかばんこそ！ お菓子しかはいつてないじゃんか！」マリエルがいつてかえしました。

横になったロビーとライアンは、すぐに、すーすー(ロビー)、ぐーがー(ライアン)と寝息を立てて、眠りに落ちてしまいました。マリエルはしばらく、「ひみつにつき」とだめいのついたにつきちようを取り出して、なにやらいっしょうけんめい書きこんでいました(ちよつと読んでみたいですね)、やがて横になり、今日のこと、あし

たのこと、いろいろ考えごとをしているうちに、こちらも、くーくーと、眠りに落ちていったのです（そして家のまわりには、ふうせんふくろうのじゅつという魔法で出した見張りのふくろうたちが、寝ずの番をしていたのです。このふうせんでできたふくろうたちは、危険を感じると、ぱん！ 大きな音を立てて、われてしらせてくれました。これなら安心ですね。前の日のときには、寝ずの番をしてくれているはずだったフログルたちが、朝起きたら、そろってぐーぐー、寝ておりましたから……）。

あしたはまた、たいへんないちにちがはじまるのです。いろいろと不安なことは多いですが、仲間たちは、今はただ、あしたにそなえて眠りました。

そしてその夜……。おそれていたことが、とうとう起こったのです。

風が吹きはじめました。じごくは、夜きのこのこくげん。ま夜中の三時ごろです（これは、夜きのことよばれる足のある大きなきのこが、森をうろうろと歩きまわるじごくでした。こ、こわい……。）。ほんらいならば、だれもがベッドにもぐって夢を見ている、そんなじごく。おそろしい悪夢のようなできごととは、今まさに、ほんとうのこととしてやってきました。

遠く、ティーンティーンの流れのむこう。その山のふもとのあたりに、ちらちらと光るものがあらわれはじめました。そしてそれと同時に、さつきまでまつ黒なやみしかなかったその場所が、ぼんやりゆらゆらとゆれ動きはじめたのです。そのゆらめきは、やがてはつきりしたものとなりました。やみが、動いていたのです！ それも、たくさん！

見張りの兵士たちにとって、そのしよたいを知ることとはかんたんなことでした。できればこの目で見ることはしたくはなかった、その動くものしよたい。できれば起こってほしくはなかった、このおそろしいげんじつ……。

やみの中に動くもの。それはまさしく、ワットの黒の軍勢、その悪の軍勢の者たちのすがたにほかならなかつたのです（そしてちらちらと光るもの、それは黒の軍勢の兵士たちの持っている、たいまつのおのあかりでした）。

ここは、ベゼロインのとりで。

ついにこのベゼロインのとりでへとむかって、黒の軍勢の本軍がせめこんできました！（しかも、こんなにも早く！）

かん！　かん！　かん！　かん！

「敵がきたぞー！　敵がきたぞー！」

とりでの中に、見張りの兵士たちのさげぶ声と、敵のしゅうらいをしらせるかねの音がひびき渡りました。それらはすぐに、休んでいる仲間たちのもとへと伝わります。まっさきに飛び起きたのは、われらが白の騎兵師団のベルグエルムとフェリアル、そしてライラでした。ベルグエルムはすぐに剣をにぎりしめると、そのままとりでの見晴らし台へとつづくかいだんを、かけのぼっていきました。

黒の軍勢がおそるべき早さでこちらへとむかってくる、そのようすが見えました。その数は、ざっと見ついても、数千！　まだだいぶ遠いですが、すぐにここまでやってくることでしょう。

「きたようだな。」

そういつてうしろからやってきたのは、ライラでした。となりに、エリル・シャンディーンの子ゆうていまじゅつし長、ルクエール・フォートもいつしよです（マリエルがいの三人の子ゆうていまじゅつしたちも、この戦いのためにベゼロインにはいつていたのです）。ちよつとおくれて、すぐにフェリアルと、残るふたりのまじゅつしたち、マレイン・クレイネルとロクヒュー・テオストライクのふたりもやってきました。

「おうおう、これまたずいぶんと、集まりよつたわい。」せまりくる軍勢をながめながら、ルクエールがいました。

「あの三人の魔女たちも、いつしよでしょう。こんどこそ、かりをか

えしてやらなければなりません。」ルクエールのとなりによつてきたマレインが、めがねをくいつとなおしながらつづけました（三人の魔女たちって?）。

「女だからと、ようしやはしない。このこぶしのいちげきを、がつんとくらわしてやる!」ロクヒューがこぶしをぐぐつとにぎりしめながら、怒りもあらわにいい放ちます（いや、こぶしじゃなくて、魔法の力をぶつけてほしいのですが……）。

「こちらも、じゅんびはとどのつている。かえりうちにしてくれよう。ルクエールどの、よろしくたのむ。」ライラがルクエールにいいました。

「うむ、心得た。」

ライラの言葉を受けて、ルクエールがそういつて、ふたりの若いまじゆつしたちのことは見ます。ふたりのまじゆつしたちは、だまつてうなずいて、それにこたえました。

そしてルクエールをまん中に、すこしはなれた左にマレイン、右にロクヒューが立ちました。いったいなにがはじまるというのでしょうか?

ルクエールが魔法の言葉をとなえはじめ、右手を空にかざしました。マレインとロクヒューも、それにつづきます。そして……。

ぶおおおーん!

三人のまじゆつしたちの手のひらから、青白く光る魔法のエネルギーが飛び出しました! そしてそれはどんどんと広がっていつて、あつというまに、このベゼロインとりで全体をつつみこんでしまったのです!

つまりこれは、魔法のバリアーでした! 今やとりでは、青白く光るこのとうめいな魔法のバリアーで、すっかりおおわれていたのです! す、すごい!（いぜんライアンも、すがたを見えにくくするため、ロビーたちみんなを水のバリアーでおおいかくしたことがありましたが、こんかいはそれとは、くらべものになりませんでした。レシリア先生とルースアンが協力して作った、あのまぼろしのバリアーでさえ、同じくたちうちできないことでしょう。なにしろ、なん百人も

の者たちのいるとりでそのものを、つつみこんでしまいましたから！
力のあるまじゅつしが三人がかりでかかったら、こんなにもすごい
ことができるんですね！ いや、おどろきです！)

ですがこんなにすごいバリアーであつても、ワットの黒の軍勢が相
手では、ほとんどやくには立たないということでした(ええっ？ そ
うなんですか？)。もちろんふつうの相手ならば、魔法のバリアーを
そうかんたんにうち破るなんてことは、できません。ですが黒の軍勢
のその中には、ふつうの相手ではない、とてもとくべつな相手がま
ざつていたのです。それこそが、さきほどマレインがいつていた、三
人の魔女たちのことにほかなりませんでした。

きゆうていまじゅつし。それはベーカーランドだけにそんざいす
るものなのでしょうか？ いいえ、ちがいました。ベーカーランドに
きゆうていまじゅつしたちがいるように、またワットにも、きゆうて
いまじゅつしたちがいたのです。ワットのきゆうていまじゅつした
ち、それが、ネルヴァ、アルーナ、エカリンという、若き三人の魔女
たちでした。

この三人の魔女たちは、ほんとうの姉妹ではありませんでしたが、
人々からは「魔女っこ三姉妹」という名でおそれられていました(名
まえだけでは、あまりおそろしくありませんが)。十八さいの長女、ネ
ルヴァ・ミスナディア。十六さいの次女、アルーナ・キツカバーク。そ
してまだ十二さいばかりのちびっこ魔女、三女のエカリン・スフルフ。
ともにじやあくなる魔法の力をひめた、おそるべき魔女たちだったの
です。

大きないくさでは、まずまじゅつしたちが、さいしよにその力を
はつきするというのがならわしでした。そのさいしよの魔法の力、そ
れが魔法のバリアーだったのです。

このバリアーが張られているときには、ふつうの兵士たちではぜん
ぜん歯が立ちません。大きな石をぶつけてもだめですし、剣やおの
切りさこうとしても、むだなことです。ですから大きないくさのとき
には、それぞれの軍は、かならず、うでのいいいまじゅつしをつれてい
きました。そしてせめこむがわのまじゅつしが、さいしよにやらなけ

ればならないしごと。それが、この魔法のバリアーをはかいするといふことだったのです。

ワットの黒の軍勢が相手では、この魔法のバリアーもほとんどやくには立たないといったりゆうが、これでおわかりでしょう。だってバリアーを張つても、力あるまじゆつしである三人の魔女たちに、すぐにこわされちゃうんですもの（ところで……。リュインのとりでが落とされたときには、ベーカーランドのきゆうていまじゆつしたちは、その戦いには加わっていませんでした。リュインのとりでは敵のしゆうらいにそなえるそのじゆんびをおこなっているさなかに、まったくつぜんに、ふいうちのかたちで敵のこうげきを受けたのです。なにしろリュインがこうげきされたのは、ベーカーランドにワットの使者がやってきた、そのわずか数日ごのことでしたから（バリアーを張つて敵を追いかえすために、いくさのじゆんびに追われる三人のきゆうていまじゆつしたちを、つねにリュインとりでひとつにつめさせておくわけにもいかなかったのです）。

ふつうこれだけ大きな軍勢の兵をととのえ、いくさのじゆんびをおこなうためには、すくなく見つもつても十日はかかるはずです（しかもいくさのルールによれば、ワットは戦いのじゆんびがすっかりとのつてからリュインをこうげきした方が、のちの戦いにむけてとてもゆうりとなりました。それらのルールについては、これからじゆんを追つて説明されていきます）。ですからベーカーランドの者たちも、まだリュインがこうげきされることは、ないとはんだんしていません。ですが……。

そこにはまたも、あのおそろしい悪の大魔法使い、アーザスの影がひそんでいたのです。

じつは、リュインをふいうちでこうげきして落とすようにしじしたのは、ほかでもありません、アーザスでした。それは、アーザスがさいごの大いくさの場においてもちいてくるという、そのまがまがしき力のためでした。じつはその力は、さいごのさいごの大いくさの場において、いちどかぎりのみ、使用かのうなものだったのです。そしてその力は、もはやアーザスほどの大魔法使いであっても、おさえつけ

ておけるようなものではありませんでした。そのためにアーザスは、いちはやくりユインの地をうばい取り、その地の中をワットの軍勢がじんそくに進めるようにする必要があったのです。いくさを早くはじめて、そのまがまがしきやみの力をおさえつけておけるうちに、さいごの戦いをはじめることができるよう……（その力がどんなものなのか？ ということについては、のちほどあきらかとなるでしょう）。

ところで、ワットの者たちがこんなにも早くリュインをこうげきすることができた、そのりゆうも、ここで説明してしましましょう。それはリュインこうげきのしきをとった、しきかんガランドーの、すぐれた作戦によるものでした。ガランドーは夜のやみにまぎれて、空からデイルバグのせいえい部隊を送りこみ、そしてリュインに戦いを申しこむと、リュインの者たちに兵をととのえる時間も与えないうちに、わずかな時間のあいだにとりでを落としたのです。つまり黒の軍勢の本軍がいくさのじゅんびをととのえる、それよりはるか前に、ガランドーはふいうちでリュインをおそいました。ですからこんなにも早く、リュインをこうげきすることができたというわけだったので

す。

地上からやってくる敵の軍勢ならば、近づいてくることもかくにんできるでしょうが、敵が空からとつぜんにやってきましたから、もとよりリュインの者たちに、戦いにそなえる時間などはありませんでした。リュインの兵は、二百。それに対して、デイルバグの部隊は二百五十でした。これは数で相手をあつとうするワットにしては、まったくもつてすくない数です。ですがガランドーは、あくまでも早さをゆうせんさせました。リュインをふいうちで落とすためには、この数でじゆうぶんと考えたのです。そしてそのおもわくの通り。ふいをうたれたリュインのとりでは、取りかこまれたデイルバグ隊の者たちによって、なすすべもなくやぶれ去りました。まさか敵がデイルバグの部隊だけをひきいて、こんなにも早くきしゆうこうげきをしてこようとは、思ってもいないことでしたから。しらせを受けたベゼロインの兵士たちが早馬でかけつけたときには、リュインはもう、敵の手に落

ちてしまっていたあとだったのです（じつは、ほとんどまともに戦いがおこなわれることもなく、リュインの者たちはこうふくを強いられたのです。リュインの者たちは、そのすべてが敵にむかいあっていたというわけではなく、多くの者が、とりでの中やそとでのさぎように追われていました。そんなところをこうげきされましたから、かれらには、やはり、まともに敵にむかいあうこともできなかつたのです）。

（さて、話がずいぶんそれてしまいました。まじゅつしの話にもどります。）

この魔法のバリアーのほかにも、いくさにおいてまじゅつしたちとというのは、とても重要な意味を持つそんざいでした。もちろん、たくさん兵士たちのことを思いのままに動かして、さらなる大きな力を生み出すためには、ゆうしゆうなるしきかんたちがいなくてはお話になりません。ですがまじゅつしというのは、しきかんともまたちがう、重要なやくわりを持っていました。それは魔法の力だけではない、頭を使ったしごと。つまり、「戦いの作戦を考える」というやくわりだったのです。

いくさにおいて作戦は、戦いに加わる兵士たちの人数と同じくらい、だいじなものでした。いくさの勝ち負けは、まじゅつしたちのうでとずのうにかかっているといっても、大げさではなかつたのです（もちろんしきかんたちも戦いの作戦は考えますが、せんもんのまじゅつしたちがいるんですもの、かれらと協力した方が、よりよい作戦が生まれるというものです）。

ベーカーランドのきゆうていまじゅつしたち。それはもんくなく、うでもずのうも、さい強クラスのまじゅつしたちでした（こんかいはるすにしていますでしたが、いつもだつたらこれに加えて、マリエルがいるんですもの、さい強です！）。ですがこんかいは、そのさい強クラスのみまじゅつしたちでさえ骨のおれる、おそるべき魔女たちが相手なのです。けっして、ゆだんはできません。相手が、どんなしゆだんをもちいて、どんな悪だくみをはたらいてくるのか？ わからないのですから（さきほどマレインが「魔女たちにかりをかえす」といっています）

したが、これはいぜんの戦いの中で、魔女たちの思いもかけないひきょうな作戦に、すっかりやられてしまったことがあったからでした。ですからマレインやロクヒューは、そのかりをかえすという思いが、強かったのです。

ちなみに、いぜん魔女たちが使ったそのひきょうな作戦というのは、自分の軍の兵士たちのかぶとの上と、たての前に、とつてもかわいらしい、魔法でできたうさぎやねこちゃんたちをよび出すというものでした。なんてひきょうな！ これではまともに、こうげきできるはずありません！ もちろんこんかいは同じ手をくわれないように、「かわいい動物たちをみんなまとめて、一時的に魔法の本の中にとじこめてしまう」というわざをあみ出してきましたが、なにしろ相手は、ずるがしこい魔女たち。こんかいも、前よりもっとひきょうなわざを、使ってくるにちがいありません。

魔法のバリアーにつつまれた、ベゼロインのとりで。その見晴らし台の上は、はしからはしまで、ずらり！ よろいかぶとに身をつつみ、剣ややりを持った兵士たちで、いっぱいになっていました（全部で七百二十名おりました）。みな、となりの者たちとぴったり肩をよせあい、ひとこともしゃべらず、立ちつくしていたのです。そしてそのまゝ中で、ベルグエルム、フェリアル、ライラの三人のしきかんたち、そして、ルクエール、マレイン、ロクヒューの三人のまじゆつしたちが、せまりくる者たちのことを静かに待ち受けていました。

となりの仲間の息をのむ音までも、伝わってくるかのようでした。ま夜中の張りつめた空気が、ぴしり！ ほほやゆびのさきをうちつけてきます。そしてそれから、どれほどの時間がたったのでしょうか……？

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ……！ だん！

さきほどからずっととなりひびいていた、黒の軍勢の足音。それがとまりました。

とりでから六十ヤードほどはなれたところ。かれらはその場所に、

ずらりといちれつになって、ならんでとまったのです。

ひゆううう……。

あたりは、しーんと、ぶきみなほどに静まりかえっています。風がとりでの石のあいだを通りぬけていく音が、おそろしいほど大きなものに感じられました。

やがてそのせいじやくを破ったのは、黒の軍勢の方でした。まつ黒なよろいかぶとに身をつつんだ、ワツトの兵士たち。その兵士たちのあいだから、若く美しい、三人の少女たちが進み出たのです。少女たちはひらひらとした美しいドレスに身をつつんでいて、よろいもかぶとも身につけていませんでした。武器もなにも持っておりません。そうです、この少女たちこそが、ワツトの三人のきゆうていまじゆつしたち。ネルヴァ、アルーナ、エカリンの、魔法の三姉妹にほかなりませんでした！

三人の魔法たちはしばらくだまったまま、こちらを見上げていました。そして、とつぜん！

ばしゆう！ ほぼーん！

ひとりの少女がなにもいわず、ほのおのかたまりを飛ばしてきました！ おそろしいほどのいりよくです！ ですがそのおそろしいほのおも、ベーカーランドのまじゆつしたちの作り上げた魔法のバリアーにあたつて、ちりぢりになってくだけてしまいました（もしこのバリアーを張っていないかったとしたら、かくじつに十人の仲間たちがまつ黒こげになっていたことでしょう！ 考えただけでもおそろしいことです）。

「ぶれいなあいさつだな、ネルヴァー！」

とりでの上から、ルクエールがさげびました。そう、ほのおのかたまりを飛ばしてきたのは、三姉妹の中でもいちばんおそろしい力を持った長女、ネルヴァ・ミスナディアだったのです。

「おひさしぶりね、ルクエールさん。このていどのほのおじや、あなたには、ぜんぜん、ききめがないみたい。やつぱり、このバリアーの方から、なんとかしなくちゃいけないよね。」

ネルヴァの言葉に、三人の中でいちばん背の高い、とりにいる次女アルーナが、こくこくとうなずきながら、「……バリアー、やつつけるです……!」とつぶやきました（どうやら次女のアルーナは、ずいぶんとおとなしいというか……、おっとりしたせいかくのようです）。

「おまえたちの思い通りにはさせせん！ かえりうちにしてやる！」とりでの上から、ロクヒューがつづけてさげびました。ロクヒューはこの三姉妹にかりをかえす、そのきかいをずっと待ちのぞんでいたのです。

「こつわーい！ おじさんつて、やあねー！」そういつてちやかしたのは、三女のエカリンでした。エカリンは「くすくす。」と笑いながら、「やーいやーい！」とロクヒューのことをからかいます。相手をからかって怒らせるのが、楽しいといった感じです（うくん、どうやらこのエカリンという子は、か・な・り、しようわるなせいかくのようです。ライアンよりも）。

「な……!」 だれが、おじさんだ！」ロクヒューはもう、怒りばくはつです！（ロクヒューはまだ二十五さいでしたので、気持ちもわかりますが……）思わずエカリンにむかって……。

「魔しようだん、ストライカー！」（魔しようだんとはつまり、「手のひらから出る魔法のたま」といった意味なのです。）

ロクヒューのつき出した手のひらから、こぶしのかたちをした、きらめく魔法のエネルギーが飛び出しました！（魔法のバリアーの中にいる者からは、そとにいる相手にむかって魔法をうちこむことができただです。よくできてますね！ ちよつとずるいですけど。）ですが……!」

ばしん！

次女のアルーナがエカリンの前に出て、ロクヒューの魔法をはじき飛ばしてしまいました！

ひゆううう、どどくん！

はじき飛ばされた魔法のこぶしは、ずっとむこうの地面に落ちて、ばくはつします（ロクヒューの魔法も、これまたすごいパワーです！）。

「あつぶなうい。ありがとー、アルーナ。」エカリンがアルーナに、おれいをいいました。ですけどもちろん、アルーナに助けてもらわなくても、あのくらしいの魔法なら、エカリンはなんなくかわしてしまうことができましたが。

「……どう、いたしましてです……！」アルーナは手をびしっ！と顔の横に立てて、エカリンの言葉にこたえました（やっぱりずいぶん、変わった子ですね……）。

「ねえねえ、ところでー、今日は、あの子はいないのー？ あの子、ちっちゃい子ー。」ロクヒューの魔法などまるでなんでもなかったというように、エカリンが手をひたいにかざして、きよろきよろととりでの上をながめ渡しながら、そういいます。どうやら「あの子」とは、マリエルのことをいっているようです。もちろんマリエルも、この三姉妹と戦ったことがありました。

「ざんねんだなー。あの子、かわいかったし、また、会いたかったんだけどなー。それに、ちよつと、好みのタイプ、か・も。」マリエルがいないということがわかったエカリンが、ざんねんそうにいいました。

「よけいなおしゃべりは、やめになさい、エカリン。そろそろいくわよ。」エカリンのおしゃべりを、ネルヴァがたしなめます。

「はーい。」エカリンが、気のないへんじでこたえました。

「……りようかいです……！」アルーナもまた、手をびしっ！と顔の横に立てていいました。

これからなにがはじまるのか？ それはもう、とりでの上の仲間たちにはわかっていました。敵のまじゅつがおこなう、さいしよのごと。そう、魔女たちはこれから、このとりでに張られた魔法のバリアーを、こわしてくるのです（バリアーを張って、それがこわされる。

それはもう、大きないくさでのきまりごとみたいになっていましたから。こわされるのを防ごうとしても、けつきよくじやまされてこわされてしまうのです。それじゃバリアーなんて、はじめから意味がないんじゃない……、と思われるかもしれませんが、これもまた、いくさでのきまりごとになっていましたので……。

ネルヴァ、アルーナ、エカリンが、そろって横にならびました。そして右手をつき上げ、魔法の言葉をふたことみこと。すると……。

ばりん！ ばり、ばり、ばりりん！

とりでをつつんでいた魔法のバリアーが、まるでうすいこおりのまくをくだいたかのように、ばりばりと音を立ててくずれちってしまいました！（ああ、やつぱりこわされちゃいました。）

魔女たちと仲間たちのあいだには、もうなにもさえぎるものはありません。このままいつきに、魔女たちがさきほどのようなおそろしい魔法をうちこんできたら……、とりでの上の仲間たちは、とてもぶじではいられないでしょう。ですが……。

「とりあえず、わたしたちの出番は、これでおしまいね。あとは兵士さんたちに、がんばってもらいましょう。」ネルヴァがそういって、くるとむきをかえ、もときた方へとむかつてもどりはじめました。えっ？

「……また、会いましょうです……！」アルーナが手をびしっ！と顔の横に立てて、とりでの上のまじゆつしたちにいいました。

「じゃ、まったねー！ 楽しかったよー！」エカリンが手をひらひらとふって、にこにこしながらおわかれのあいさつをおくってきました。って、ちよ、ちよつと！

そして三人の魔女たちは、そのまま黒の軍勢の兵士たちのあいだを通って、やみのむこうに消えていってしまったのです（とちゆうエカリンは、兵士たちの腰をびしゃびしゃたたいては「がんばってねー」といっておりましたし、アルーナは右や左の兵士たちにむかつて、ひつきりなしに手を顔の横にびしっ！と立てながら、「……よろしくで

す……！」といつておりました。兵士たちはちよつと、とまどつていましたが……)。

ひゆううう……。

風の音だけが、あたりになりひびいていました。

魔女たちは、帰ってしまったのです！ ほんとうに、これで終わりました！ えええーっ！

わたしはてつきり、これからおそろしい魔法のぶつかりあいが起こるものだとばかり、思っていたんです(そう思われてた方も多いはずです)。ですがですが！ いがいやいがい！ あれほどやる気まんまんみたいにふるまっていた魔女たちが、魔法のバリアーをこわしただけで、あつさりひき下がってしまいました！これはどういうことなのか？ ぜったいルクエールさんたちに、ちゃんと説明してもらわないと！

魔女たちがあつさりひき下がってしまったわけ。じつはここにもまた、いくさのならわしというものがありました。そしてそれこそが、魔女たちが帰ってしまった、そのすべてのりゆうだったのです。大きないくさには、さまざまならわし(つまり、きまりごと、ルールです)というものがありました。そのひとつが、「まじゆつしどうしでの戦いをきんずる」というものだったのです。

まじゆつしというものはどのくにとつても、大きなざいさんです。くにをゆたかにさせるためには、なくてはならないそんざいでした(それはかれらの魔法によってささえられたエリル・シャンデーアのすばらしいまちなみを見れば、わかると思います)。そしてそれほどに力を持ったまじゆつしというものは、めつたなことでは得ることができません。ですからこのくににだって、自分のくにの宝物であるまじゆつしたちを、失いたくはないのです。それがまじゆつしどうしでの戦いのきんしという、ルールを生み出しました。

きゆうていまじゆつしたるかれらが、どれほどの力を持っているの

か？ 読者のみなさんには、もうおわかりいただけたかと思います。そのかれらが持てる力を戦いでぶつけあつたら、どんなことになるのか？ いうまでもないですね。ですからこのルールは、ぜったいに必要ふかけつなものでした。おそろしいワットの黒の軍勢でさえ、自分たちのくにおびやかすようなまねはしたくはありませんでしたから、このルールをしつかり守るのです。

そしてそれにもなう、二番目のルール。「まじゅつしはいくさにおいて、戦いのための魔法を使つてはならない」。

ちよつときいただけでは、え？ なにそれ？ といった感じですが……、これはつまり、まじゅつしはいくさにおいて、「戦う」魔法ではなくて、「助ける」魔法しか使つてはならないということであらわしたものでした（魔法のバリアーの場合は中にいる者を助けるための魔法なので、使つてもいいのです。ネルヴァやロクヒューが、いかくのためのこうげき魔法を飛ばしあつたのは、ほんとうはルールいはんでした）。

これはざいさんであるまじゅつしを守るという部分を、さらに大きくしたものでした。じつはまじゅつしどうしだけでなく、兵士とまじゅつしどうしも、いくさにおいて、おたがいにまるつきり戦つてはならなかつたのです。そのため、まじゅつしが戦いのための魔法を使うことも、きんしされていました（ようするに相手がだれであろうと、まじゅつしはいくさにおいては、戦うことができないということでした）。これは、「戦つて、もしまじゅつしがけがでもしたら、たいへんだから」というのが、そのいちばんのりゆうだったのです。それほどにまじゅつしというものは、だいにだいにあつかわれていました（なんだかちよつと、うらやましいくらいです。あ、でも、だからといって、ふつうの兵士さんたちがだいににされていないというわけでは、もちろんありませんよ。兵士さんたちひとりひとりの力が、くのをささえているんですから）。

ひきような手を使うという魔女たちでしたが、それでもいくさでのだいにルールを破つたうえ、自分たちの首を自分たちでしめるようなまねをするほど、ばかではありません。ですから魔女たちは、こう

してみずからは戦うことなく、あとの戦いを兵士たちにまかせてひき下がったというわけでした（これ以上、助ける魔法もとくに必要なさそうでしたので）。

そして、いくさにおいての、そのいちばんのルールがありました。このルールは、いくさにおけるまじゆつしのあつかい方をきめたそれらのルールよりも、もっともつと重いものでした。このアーケランドの世界に生きる者ならば、ぜったいに守るべきルールとして、すべての者に知らしめられているルールでした。

そのルール。「すばらしい」ルールとは……。

「殺してはならない」。

こんなにもすばらしいルールがあるでしょうか！ 大きないくさでは、なん百なん千という兵士たちがぶつかりあうのです。もちろん、手はぬきません。勝つために、ほんきで戦いあうのです。ですが、考えてほしいのです。いくさに「勝つ」というのは、どんなことなのでしょう？ 相手をたくさん、殺すことでしょうか？ いいえ、ちがうはずです。戦いに勝った者は、負けた者をしはいして、いうことをきかせることができます。そして負けた者から、土地だとか、人だとか、ほしいものを手にいれることができます。ふつうに考えられている、いくさに勝つというのは、そういうことです。でも考えてみてください。それらのものを得るために、人を殺すことがほんとうに必要なのでしょうか？

相手の兵士をたくさん殺せば、相手の力を弱めて、いうことをきかせることができます。それはわかります。ですが、力を力ではいしたところで、自分がもつと大きくなれるでしょうか？

いくさに勝って、相手からさまざまなものをつばう。うばうなんてことは、よくないことにきまっています。ですからうばうためのいくさなんてものは、そもそもがやってはいけないことなのです。でもそのように考えない者たちによって、いくさはたびたびひき起こされてしまうのです。たとえば、ワットの黒の王、アルファズレドでした。

アルファブレドの考え方は、「しよせん、人というものは力でおさえこまないかぎり、よくぼうのままに、好きかってなことをする生きもの。世界をへいわにまとめ上げるには、力を持つしかない。力をもって、しはいし、おさえこむしかない」というものでした。その考えがまちがっているのかどうか？ きっぱりいうことは、たぶんだれにもできないと思います。人はみな、それぞれ考え方がちがうのですから。でもそのために、いくさはなくならないのです。

いくさはよくないことにきまっています。ですからいちばんいいのは、戦つてうばつたり、おさえこんだりなんてことはせずに、それぞれのくにが、おたがいのよいところを分けあつて、それぞれにたりないものをおぎないあつて、みんながゆたかになることなのではないでしょうか？ いえ、ほんとうなら、それがいちばんいいのです。でも、それができない。人というのは、そういうものなのです。かなしいことですが。

それでも、このアークランドのいくさのルール。それはすばらしいものだど、きつぱりいえることでしょう。いくさが、うばつたりしいしたりするためのものであつたとしても、人を殺しあうものではないということ、みんながかりかいし、なつとくしていたのです。ですから相手を殺す力の大きい、弓矢は使いません。大きな石も、かべをこわすことにしか使いません。ワットの黒の軍勢の者たちでさえ、それにしたがうのです（わたしたちの世界では、どうしてこのルールが作れないのでしょうか？ ワットの黒の軍勢でさえもが、このルールを守っているというのに（もつとも、ワットにとっては自分たちのりえきになるから、それにしたがっているところが大きかったようですが。自分のくにをささえたいせつな兵士たちのことを戦いで失うということ、ワットにとつても、したくはありませんでしたから。もし殺しあいのためのいくさをすれば、なん百なん千という兵士たちが、いのちを落としてしまうのです）。

ところで……、このいのちのルールのことに話がおよんだところで、みなさんにぜひお伝えしておきたいことがあります。それはカピバラのくにに起こつた、あのひげきにまつわること。あのときカピバ

ラのくにおそったのはワットの者たちでしたが、たくさんの兵士たちはともかくとして、その上でしきをとつていたあの六人の黒騎士たちは、いうまでもなく、とびっきりの悪とうたちです。しっせいさんや、ぎかんさんたち、多くのカピバルたちがかれらの手によって殺されました。カピバルの若者のいのちをうばったのも、その中のひとりです。カピバラのくにおそってしはいるのがもくてきでしたから、カピバルたちのいのちをいたずらにうばったということは、ゆるしがたいはんざいでした！　とうぜんかれらは、ばつを受けなくてはなりません。

あのととき、ほかの五人の黒騎士たちのことをひきいていたのは、黒騎士隊の隊長のルドグール・エニラという男でした。このルドグールという男は、しっせいさんやカピバラ老人にぶれないな口をきいていた、あのいちばんの悪とうです。カピバラのくにおそったあと、ルドグールはその力を買われて、ディルバグの黒騎士隊のいくつかをまかされるまでになりました。ルドグールはますます力を持って、たくさんのひどいことをくりかえしていったのです。

ですが、そんなものが長つづきするはずもありません。していいはずもありません。

ルドグールはカピバラのくにおそったさいに、多くのカピバルたちのいのちをうばったということをおそったさいに、多くのカピバルたちに知らせました。のちのちになって、それがアルファズレド王の怒りにふれたのです。

ルドグールたちのゆるしがたい悪ぎようを知ったアルファズレドは、ルドグールの部下の五人の黒騎士たちのことを、すべてぎいんとしてさばきました。かれらは今、ろうやの中にいます。おそろしいアルファズレドにも、心はあるのです（かれらのめいれいを守っていただけの兵士たちは、ばつを受けませんでした、これはいたしかたのないことです）。

では、とうのルドグールほんにんは、どうさばかれたのでしょうか？　ルドグールもまた、ろうやの中なのでしょうか？

いえ、ルドグールがワットのろうやにはいることは、とうとうあり

ませんでした。なぜならアルファズレドがルドグールの部下たちのことをさばいたときには、ルドグールはすでに、この世界にはいなかったのですから。

セイレン大橋の上で、ロビーたち旅の仲間たちにおそいかかった、あのデイルバグの黒騎士たち。じつはあの黒騎士たちの隊長こそが、ルドグールだったのです！（なんとというぐうぜん！）ですからルドグールのさいごを、みなさんはもう知っているのです。ルドグールはロビーのせいぎの剣の前にたおれ、セイレンの流れの中に消えていきました。ルドグールは、ここではないべつの世界の住人として、これからずっと、おのれのつみをくいあらためる日々を送りつづけていくのです）。

（では、いくさのルールにもどります。）

もちろんこのルールを守るためには、さまざまなかよくそくごとが必要でした。殺してはいけないとなると、いくさでは相手をせんとうふのうにすることがもくてきとなります。けがをして戦えなくなったり、かんぜんのうち負かされたりした者は、戦いのその場からしりぞかなければなりません。ですがけががなおれば、かれらはまた、つぎのいくさの場にもどることができたのです。

これでは大人数の兵士たちを持っているくの方が、いくさにおいて、毎回あつとう的にゆうりになってしまうことでしょう。兵士たちがいくらうちたおされたとしても、けががなおれば、つぎのいくさでは、またもとの大人数にもどることができるのですから（けがのなおるひまもないれんぞくしたいくさであれば、人数も変わってきませんが、そんなれんぞくしたいくさなどというものは、ほとんど起こり得なかつたのです。こんかいの、このワットとベーカーランドの、さいごの大いくさのような戦いでないかぎり。また、のちにも説明されますが、戦いで負かした相手のくにの兵士たちを、ほりよにとるというしゅだんもありました（レドンホールの黒ウルフアたちも、これによつてほりよにされました）。ですがそれは、けんりとしてはみとめられていましたが、ほとんどのくにでは、人としてのりんり的な問題

として、おこなっていませんでした。ゆいいつそれをおこなっていたのは、ワットの黒の軍勢だけでした。

ですからそれを防ぐために、「いちどのいくさには、相手の三ばいの人数までの兵士たちしか使ってはならない」というルールが定められていました（それでも兵力のすくなくにとつては、とてもきびしいルールですが）。

そのほかにも、「兵力が二百五十人にみたない場合でも二百五十人としてあつかわれる」とか、「自国のとりででのいくさでは、使用できる人数は、てきせいかつりでの中に配置できる人数までにかぎられる」とか、「いくさのじゅんびは、てきせいかつじんそくにおこなわなければならず、いはんした場合は兵力がてきせい数そろっているものとしてあつかわれる」とか、「十四日以内での同じ相手国とのれんぞくしたいいくさの場合、前回の戦いで負けたがわのくにの兵力には、そのくにが前回の戦いで使用した兵力の四十七・五パーセントぶんが加わっているものとしてあつかわれる」とか、このいくさのルールを成り立たせるために、いろいろと、むずかしくて、ふくぎつで、頭の痛くなるような重要なルールが定められていましたが、まあそれはややこしくなりすぎてしまいますので、わきにおいておきましょう（ほんとうに頭が痛くなりますから……）。今は、相手の三ばいまでの人数しか使うことができないという、そのルールに話をしぼります。

もしこの（相手の三ばいまでの人数しか使えないという）ルールを（めいはくに）破った場合、たいへんに重いばつが与えられます。すべのくにの取りきめとして、そうきめられていたのです。ルールを破ったくには、ばつのあいだ、よそのくからさいていげんの食べものや水やくすりなどをのぞき、人や、ぶっしなど、いっさいのものをはこびいれることができなくなりました。いくらワットのような強国でも、これはたいへんな痛手となります。取りひきによるお金も、いっさいはいってきません。ワットはみずからのりえきを追いもどめるくに。りえきをいっぺんに失ってしまうようなことを、進んでするはずありません。このばつの取りきめがあるからこそ、ワットもいくさのルールを、そうかんたんに破ることはできませんでした（そ

れこそ、すべてのくにかんぜんにかたでござえこまなにかぎり、このルールを破ることなどはできなかつたのです。それでも、大人数の兵を持つワット（つまり、つねに相手の三ばいもの兵力を持つて戦うことのできるワット）がおそろしく強いということに、変わりはありませんでした（が）。

さて、いくさの取りきめのことについては、このくらいにしておきましょう（ちよつと説明が長くなりすぎてしまいました）。とにかくそのいくさの取りきめのために、三人の魔女たちはひき下がったのです。そしてここから、ほんとうの戦いがはじまろうとしているわけですが……。

三人の魔女たち。ずるがしこく、ひきようで、おそろしい力の持ちぬしだというその三人の魔女たちが、このままバリアーをこわしたただけで、このいくさになんの手みやげも残していかないなどというわけはありませんでした……。

「みなもの者！ ふるい立て！」ベルグエルムがさけびました。

「剣をかかげよ！ 敵をむかえうて！」ライラが剣を空に高くかかげて、さけびました。

「おおおー！」

ふたりのしきかたたちの声にこたえて、仲間たちは人間の者もはい色ウルファの者も、みな、いきようようと声を上げ、ふるい立ちました。負けるわけにはいかない！ たとえどんなに兵力の差があろうとも、なんとしても、このベゼロインとりでだけは守りぬくのだ！ みんなの心はひとつでした。すべての者の心が、がっちりとしたはがねのようなかたいけつそくで、かためられていたのです。しかし……。

おそろべき魔女たちの、おそろしいおきみやげ……。

いよいよかっせんがはじまろうとしていた、まさにそのとき。黒の軍勢の兵士たちが、思いもよらない行動を取りました。そのいちばん前で、黒いよろいかぶとに身をつつんでいたワットの兵士たち。まっさきにとりでにむかつてとつげきしてくるものと思われていたその兵士たちが、とっせん、ぎざあっ！ とわきにどいて、道をあけたのです。そしてそのかれらのうしろから、前に進み出てきたのは……。

背の高い、からだのがっちりとした、身長六フィートはあろうかという者たちでした。かれらはずぎつぎと前に進み出て、ワットの兵士たちとかんぜんにいれかわってしまいました。その数は、およそ八百。ですが数なんて、そんなことはまったくかんけいがありませんでした。手には剣だけをいっぽん、にぎりしめております。よろいは着ていません。たてもかぶとも身につけておりません。かわりにすっぽりと頭をつつむ、ぬののずきんをかぶっていました。それはこれからはげしい戦いをおこなおうといういくさの場には、あまりにもふつりあいなかつこうでした。ですがそのおかしなかつこうが、つぎのしゅんかん、心の底からおそろしいかつこうへとさま変わりすることになるうとは、ベルグエルムも、フェリアルも、ライラも、みんな、そうぞうだにしていなかつたのです。

その者たちが、するりと、かぶっていたずきんをぬぎました。それを見た者たちは、そのあまりのしろうげきに、言葉を失ってしまいました。とくに、ベルグエルムとフェリアル、はい色ウルファの者たちへのしろうげきは、はかりしれないものでした。心がぐしやぐしやおしつぶされてしまいそうな、おそろしいしろうげきでした。

「な……、なんてことを……」ライラが、ふりしぼるようにいいました。

ベルグエルムは歯をぎりり！ とかみしめて、こぶしをにぎりしめるばかりでした。怒りでなにも、いうこともできなかつたのです。

「おのれーっ！ ワットめーっ！」フェリアルが両手をふり上げながら、さげびました。これ以上はないという怒りが、フェリアルのからだ中を、にえたぎるようがんなのようにしはいしてしまつたのです。

ずきんをぬいだその下にあつたのは、見なれた者たちの顔でした。なつかしい、いとおしき者たちのその顔でした。かつて、ともに戦い、ともに泣き、笑い、ともに暮らした、仲間たちのすがたでした。

そこに立っていたのは、アーザスの手によってムンドベルク王とともに黒のやみの中へとつれ去られていった、レドンホルの黒のウルファたちだったのです……！

「う、うわあああーっ！」

つぎつぎに起こる、はい色ウルファの仲間たちの、くつうとくるしみにもがく、そのさげび声……。

こんなことが、あつてよいのでしょうか？　こんなことが、ゆるさ
れていいのでしょうか？

かつての仲間たちが黒のやみにとらわれて、なにもいうこともできず、なにも考えることもできず、ただただいっぽんの剣だけを持って、今この戦いの場で、自分たちの目の前に立っていたのです。

「さて、ベーカーに逃げこんだおおかみさんたち。かつてのお仲間さんたちを相手に、どう戦うのかしら……？」

ずつとうしろの方からとりの方を見つめていたネルヴァが、そう
いって、静かにほくそ笑みました。そう、このおそろしい悪魔のよう
な作戦を考えたのは、まさしくこの、ネルヴァ・ミスナディアだった
のです。

「ネルヴァってば、ほーんと、えげつない。わたしより、せいかく
わつるいよねー。」エカリンがうでを頭のうしろにくみながら、にこに
こしていました。

「……これが、作戦です……！　わたしたちの、つとめです……！」
アルーナが、エカリンの頭にげんこつをこちん！　あてて素晴らしいま
す（「いだっ！」と頭をおさえるエカリン）。

ネルヴァはそして、「ふふっ。」と楽しそうに笑いました。

「さあ、ベーカーさんのお手なみ、はいけんといきましょう。」

「黒鳥をはこべー！」

こんらんする、ベーカーランドの勇士たち。そんなかれらのことをしりぬに、黒の軍勢の中から、隊ごとの分隊長たちがさげびました。そしてその言葉とともに、前に進み出てきたのは……。

その下に大きなしゃりんがたくさんついた、木でつくられた、ものすごく大きなしろものでした。全体はまっ黒な「にかわ」があつくぬられ、黒光りしております。両わきには大きなたてが、まるで鳥のつばさのように、たくさんならべてつけられています。ぱつと見ただけでは、これがいったいなんなのか？ わかりません。どうやらこれが、黒鳥とよばれているものようですが、いったいこれは？

「広げろー！」

めいれいの声とともに、その大きな物体がおどろくべきへんかを見せました。木でつくられたたくさんの部品たちが、めいれいの言葉に反応して、ぎゅががががん！ 大きな木や、小さな木。長い木や、みじかい木。ねじにボルトに、ぬのに鉄。それらのものが、ぶわわつと空中でからまりあい、くみあわさって、あつというまに、巨大なかいだんへと変わったのです！

この光景は……！ みなさんはいぜんに、どこかで見たおぼえがありませんか？ そう、これはセイレン大橋の下、カピバラ老人の小屋で見た、あの鉄の馬がくみあわさっていくその光景に、そっくりでした！ それもそのはず。この黒鳥とよばれる巨大なかいだんには、ワットがせめほろぼした、カピバラのくにのぎじゅつが使われていたのです！（とうぜん、協力して作り上げたというわけではありません。カピバラのくにからつれ帰った者たちに、むりやりつくらせたのです！

ちなみに、黒鳥というのは、このかいだんの見た目が首の長い白鳥のように見えたから、そう名づけられました。色が黒いので、白鳥ではなく黒鳥というわけだったのです。）

なぞの物体は、今や高さが七十フィートはあろうかという、巨大な

かいだんへとすがたを変えました。つまりこのかいだんを使つてとりにの上に乗りこみ、こうげきしようというわけなのです。これはとりにでせめるいくさでは、必要ふかけつな道具でした（しかもこのかいだんの高さは、せめこむさきの高さにあわせて、自由に変えることができました。それに使わないときにはばらばらにしておけますから、場所も取らず、はこぶのもらくちん。カピバルのぎじゅつというのは、こんなところでも、すばらしくやくに立ってくれたのです。かなしいことは、それが敵の手に渡つてしまつていふということでした）。

黒い白鳥がせまつてきました。その上に、大勢の黒ウルファの兵士たちのことを乗せて……。

「やむを得まい。」ルクエールがベルグエルムの横に立つて、いいました。「今は、感じようにはいさされてはならぬ。われらには、戦ういがないのだ。」

ベルグエルムがこぶしをぎりぎりにとぎりしめて、それにこたえま

す。

「しようにしております。アークランドのため、われらは、戦わねばなりません。たとえば、それが、かつての友でも……」

「隊長……！ わたしは……！」フェリアルが、なみだをぼろぼろこぼしながらいいました。ですがベルグエルムは、フェリアルの手を取つて、いったのです。

「わたしもつらい。だが、ルクエールどののいう通りだ。フェリアル、ともに、戦おう。強い心を持って。ロビーどののためにも。だいじょうぶだ、すべてが、うまくいく。ロビーどのと、そして仲間たちと、またふたたび、笑つて会えるように、アークランドのために、祖国のために、戦おう。」

「隊長……」

フェリアルは、ごしごしと、そででなみだをふきました。そしてまつ赤にはらした目で、もういちど、せまりくるかつての友人たちの

ことを見たのです。くちびるをぐつとかみしめて、フェリアルは自分の剣をにぎりしめました。

「かれらのためにも、わたしは、この剣に力をこめて戦います。」
フェリアルは、かくこの言葉でした。ベルグエルムはフェリアルの手において、そしてただだまって、静かにうなずいてみせました。

「みなの方！ まどわされてはならぬ！ かれらは、あやつられて
いるだけにすぎん！ 今は、戦うとき！ かれらをすくうために、かれらのために、戦うのだ！」

ベルグエルムが、とりでの上にいるはい色ウルファの仲間たちにむかって、さげびました。とまどい、おびえ、こんらんしていたはい色ウルファの勇士たち。かれらはベルグエルムのそのひとことと、はつとわれにかえったのです。

「かれらのために！」

ふたたび、仲間たちに力がもどりました。

「戦おう！」

ですが、かつての仲間たちが戦う相手。そのじじつに、いぜん変わりはありませんでした。どうしたって、とまどいが生まれてしまうのはさげられません。それにひきかえ、相手はなにも考えることもできず、よこしまなる力にその身をまかせ、心も持たずにおそいかかってくるのです。これは、たいへんなハンディとなりました（黒ウルファの兵士たちにかけられていたのは、アーザスによるたぶらかしのじゆつでした。アーザスはレドンホールをほろぼしたあとで、ほりよとした黒ウルファの者たちにこの魔法をかけ、自分のいうことをすなおにきくだけのあやつり兵士たちに変えてしまったのです。たぶらかしのじゆつはこうげきの魔法にほかなりませんが、この魔法はこんかいのいくさのはじまるずっと前に使われたのであって、こんかいのいくさの中で使われたというわけではありませんでした。ですからワツトは、今このいくさのときにこうげきの魔法を使っていないので、いくさのルールいとはならないというのです。こうげきの魔法の力が使われたのは、黒ウルファたちをあやつり兵士のじょうたいに変

えるための、そのいつしゅんのあいだだけのことなのであって、もうその魔法の力は、終わっているのだと。

つまり、今相手をこうげきしているのは黒ウルファ自身なのであって、魔法そのものでこうげきしているというわけではない。だからルールいはんではない。というのがワットのいいぶんでした。

でもやっぱり、そんないいぶんはなつとくがいきませんよね！魔法が使われていなければ、黒ウルファたちも、相手をこうげきすることもないわけなのですから。

でもワットは、この自分かつてないぶんを通してしまっていたのです。それがワットという相手でした。ルールのすきをつけて、自分たちにつごうのいいように、ねじまげる。じつにひきような相手です！。

そしてもうひとつ、魔女たちの取ったひきようなしゅだん。それは黒ウルファの者たちに、なんの防具もつけさせていないということでした。これでは戦いにおいて不利なんじゃ？　って思われるかもしれませんが、ほんきでこうげきできるでしょうか？　しかも相手は、かつての仲間。防具をつけていたのなら、まだ手の出しようもあったでしょうが、相手はだかどうぜんでは、思いもよらない大けがをさせてしまいかもしれないのです。それこそへたをすれば、いのちまでうばってしまいかねません。かつての仲間たちに、どうしてそんなことができのでしょうか？　つまりそれこそが、魔女たちのねらいだったので。これはほんとうに、悪魔のような作戦でした。

ごごおん！　ごごおん！　ががーん！

ついに黒鳥が、とりでの前までとうちやくしました。あちらでもこちらでも、黒い鳥の首がとりでのかべにあたって、大きな音をひびかせます。そしてそれと同時に、その首の上からたくさん黒ウルファの兵士たちが、とりでの上の仲間たちめがけて、いっせいにおどりこんできました！　かれらの目には、かつての仲間たちのすがたはう

つっていません。ただ、目の前にいる相手をうち負かすこと。それだけのりゆうが、かれらのことを動かしていたのです。

「友のために！ 祖国のために！」

とりでの上のはい色ウルファの仲間たちは、みなそうさけんで、せまりくるかつての仲間たちのことをむかえうちました。

「家族のために！ めいゆう国、レドンホールのために！」

ベーカーランドの勇士たちも、みなそうさけんで、友であるレドンホールの黒のウルファの者たちと、つぎつぎに剣をまじえていきました。

とりでの上は、たちまち、はげしい戦いの場となりました。さけぶ声、剣と剣のぶつかりあう音、よろいやたてやからだ、ぶつかりあう音。うち負かされた者の、くるしそうなうめき声、たおれる音……。どれを取っても、願ってききたいと思うものは、ひとつもありませんでした。

「剣をねらって、たたき落とせ！」ライラが、ひとりで七人もの黒ウルファの兵士たちのことを相手に戦いながら、さげびました。「それがむりなら、足をねらえ！ 相手の動きをとめるのだ！」

ライラの剣さばきは、まさに神わざでした。ひゅっ……。その足がいつしゅん、動いたかと思うと……。かららーん！ からーん！ 相手の持っていた剣が、あつというまにちゆうにまい、地面に落ちるのです！ 目にもとまらぬとは、まさにこのこと！ ライラの強さのひみつは、むだのない動きからくり出される、むだのない力。これが相手に、いちぶのむだもなく伝わり、そのけつか……。相手は頭で考えるよりもさきに、負けていました。これではだれも、かなわないはずです！ つ、強い……！

ベルグエルム、そしてフェリアルもまた、先頭に立って黒ウルファのかれらと戦いました。自分たちが進んで戦っているすがたを見せることによつて、はい色ウルファの者たちをはじめ、「仲間と戦わなくてはならない」という強いとまどいを持った仲間たちの心にも、力を与えることができるのです。そしてこのふたりの戦いぶりについては、みなさんにはいうまでもないでしょう。

ルクエール、マレイン、ロクヒュー、三人のまじゆつしたちもその場に加わり、仲間たちのサポートにてっしていました。味方を守る魔法なら、いくさでも使っているのですから。魔法のかべで、相手をシャットアウト！ しんろをぼうがいしたり、味方の持っているたてを、はがねのようにかたくしたり。およそ守るために考えつくような魔法をかたつぱしから使って、仲間たちの身を守りました（もちろん相手の剣を落としたり、動けなくさせたりするような魔法も使えましたが、それらは「こうげき」の魔法になってしまいますので、使うことはできませんでした。しかも、たとえ味方を守る魔法であつても、こじんなバリアーを張ってしまうとか、すがたを見えなくするか、敵のこうげきをちよくせつに防ぐような魔法も、使ってはならなかつたのです。うくん、いろいろと、もどかしい！）。

ですが、いくらベーカーランドの兵士たちがひやくせんれんまのつわものたちであるとはいえ、やはり防具をつけない黒ウルフアたちの、そのすて身ともいえるこうげきには、仲間たちも手をやきました。レドンホルの黒ウルフアたちも、またすばらしき力を持った、強い兵士たち。そうかんたんのうち負かすことなどはできません。たくさんのベーカーランドの仲間たちが、剣で切られてけがをしました。それでも、戦えないほどの大きなけがをした者は、ごくわずかでした。みな、友のため、たいせつな者たちのため、力をふりしぼって、勇気をふりしぼって、けんめいに戦つたのです。

そしてついに……。

けつちやくです！ 黒のウルフアの兵士たちは、剣を落とされ、足を切られて、いのちからがら、黒鳥の上へとむかつてたいきやくしていききました！ ばんざい！

黒鳥がずるずると、もどつていきます。多くの黒ウルフアの兵士たちが、手あてのために、うしろに下げられていきました（戦いに負けた者は、そのいくさが終わるまで、もう戦いにさんかすることはできません。それが、いくさでのルールでした。でも、待つて黒ウル

ファの仲間たち！ いつか必ず、助けにいくからね！。

さあ、魔女たちの作戦は、これでしつぱいです！ わがベーカールンドの勇士たち、ひやくせんれんまのかれらにかかれれば、魔女たちのきたない作戦などに、くつすることなどはないのです！

「おおおおーっ！」

仲間たちのよろこびの聲がこだましました。みな、剣をかかげ、ほこらしげに胸を張ります。ですが、戦いは、まだまだこれから。残りのおそろしいほどの数のワットの兵士たちが、これから、いつせいに、せめこんでくるのですから。戦いの、そのかくこの差を見せるべきときは、今でした。しかし……。

ひゅううう……。

風が、とりでのあいだを通りぬけていきます。さきほどの戦いのあとから、ずっと、いくさの場は静まりかえっていました。

「なぜ、せめこんでこないのだ？」ライラがふしぎそうに、黒の軍勢の者たちのようすをながめていました。

「われらにおそれをなしたのでしょう。このいくさ、われらの勝ちです！」フェリアルが、ほこらしげにそうつぶやきました。

ですが、ほんとうにそうなのでしょうか？

と、そのとき……！

「ち、ちがう……、ようすがおかしい！ みんなを見ろ！」

ベルグエルの言葉に、フェリアルもライラも、あわてて仲間たちのことを見まわします。

「こ、これは……！」

そこで、かれらが見たもの……、それは、からだをねじまげ、くつうにもがきくるしむ、たくさんの仲間たちのすがたでした！ こ、これは、いったい！

とりでの上の勇士たち。さっきまで黒ウルファの兵士たちとゆう

かんに戦っていた、そのかれらが、とつぜん声を上げてくるしみ出していました。みな、胸をおさえ、その場にたおれこんでしまえます。ですが中には、なんともない者もいました。しかしその数は、数えるほどしかおりません。

「ま、まさか……！」ベルグエルムがなにかをさとったかのように、いいました。ベルグエルムの頭の中に、おそろしい考えが、やみのようにわき起こっていきました。

「かれらの剣！」

かれらの剣……、それは、せめこんできた黒ウルファたちの持っていた、その剣のことでした。それは、ただのふつうの剣にすぎませんでした。ですがその剣によるこうげきは、ふつうのこうげきではなかったのです。

アーズの持つ、やみの魔法のエネルギー。アーズにあやつられている黒ウルファたちは、アーズから、そのおそろしいやみのエネルギーさえをも吹きこまれていました！ これは魔女たちよりも、さらにおそろしく、さらにひきようで、さらに悪魔のような作戦でした。それは、アーズの考えた作戦だったのです！ そしてそれをこのいくさの場に持ちこみ、じつさいに手をくだしていたのが、あの三人の魔女たちでした。魔女たちはさいしよから、こうなることを見こしていたのです。

おそろしい魔女たちの、第二の作戦でした。

やみのエネルギーを吹きこまれた、黒ウルファの者たち。じつはかれらは、みずからのそのおそろしいやみのエネルギーを、手にした剣のやいばに吹きこんで戦っていました！ そしてやみのエネルギーをこめた剣に切られた者は、やみにとらわれてしまうのです！ すなわち、アーズにあやつられている黒ウルファの者たち、かれらと同じようになってしまいました！ アーズは、魔女たちは、ワットは、なんてひどいことをするのでしょうか！（なんともなかった者たちは、黒ウルファたちから剣で切られていない者たちでした。ライラ、ベル

グエルムはもちろん、フェリアルもすぐごうでの剣のうでの持ちぬしでしたから、相手に切られてはいなかったのです。だから、ぶじでした。ちよつと、かすつたくらいでも、このやみのエネルギーはからだの中にはいりこんでしまうのです。

そしてこのやみの魔法のエネルギーについても、ワットはいくさのルールいはんではないといい張るつもりでした。このエネルギーはこのいくさのはじまるずっと前から黒ウルファたちのからだの中に吹きこまれていたものであって、それはもともと、黒ウルファたちの中にそなわっていた、のうりよくのようなものだ。つまり黒ウルファたちは、ただ自分自身のそののうりよくを使って戦っているだけなのだから、このいくさにおいて、まじゆつしが魔法を使っているわけではない。だから、ルールいはんではないと。

こんないぶんは、やはりとてもなつとくのできるものではありません。しかしワットは、こんなでたらめないいぶんを、ふたたび通してしまつつもりでした。それはベルグエルムたち三人のしきかたちにも、わかつていたことだったのです。

「じょうきようをかくにんせよ！ 戦える者は、どれだけだー」ライラがさげびました。ですが、かえつてきたこたえは、まさしくぜつぼう的なものであつたのです……。

「ぶ、ぶじな者は、三十名たらず……。せんとうふのう……。その数、ざつと、六百名はくだりません……」

兵士のこたえに、ライラはがくぜんとしました。ベルグエルムにも、フェリアルにも、とても信じられないげんじつでした。わずか三十人……。兵力がいつきに、これだけの数になつてしまつたのです……。そして、そのしゅんかん。いくさのルールがきまりました。「戦えない者が多数となつたとき、そのいくさは負けとなる」。いくさの勝ち負けをきめるためのルールです（せいかくには、もとの兵力の二十ぶんの一にまで人数がへつたときに、負けとなります）。そしてこれらのその三十人という残りの人数は、いくさの負けとなるためのじょうけんを、みたしているものでした。ベーカーランドは、やぶれ

たのです……。

からーん！ 剣が落ちる音です。

「そんな……、こんなことが……」

フェリアルが、その手に持っている剣を落として、いいました。信じられないげんじつでした。ですがこれが、げんじつでした。

ベルグエルムはひとみをとじ、その場に立ちつくしたままでした。なにも言葉が、ありませんでした。

「たいきやくだ……」

すべてをりかいしたライラが、ふりしぼるようにいいました。その目はきつく、かくごのひとみでした。

「そういん、たいきやく。ふしようした者たちをはこべ。ワットの軍に、とくしを送れ。このいくさ、われらの負けだ。」

ライラはそれだけいうと、ベルグエルム、フェリアルの方を見ることもできず、ひとり、とりでのおくへと歩き去っていきました。

「たいきやくー！ たいきやくー！」残った仲間たちのさけぶ声が、むなしくひびき渡ります。

「ベゼロインは、落ちたー！」

ベルグエルムはいつまでもその場に立ちつくしたまま、動きませんでした。

フェリアルはいつまでもなみだがとまらず、声を上げて泣きつづけていました。

ワットの軍にこうふくのとくしが送られたのは、それからすぐのことでした。

21、アツプルキントのラググリーン

「いよいよ、動きよったか。」

はるか見下ろすさきにそびえる、ひとつのとりで。茶色の石をつみ上げてつくられたその大きなとりでのことを見つめながら、ひとりの老人がつぶやきました。

そのとりでのかべには、たくさんの大きなたいまつがかかげられていました。じこくは夜。空には雲の切れまに、星がきらめいておりまです。たいまつのはのおが、とりでとそのまわりの地面を、ゆらゆらとてらしていました。そのあかりで、はじめてわかったこと。それはとりでのかべが、あちこちくずれているということでした。さらに見れば、入り口の門も半分こわれていて、おうきゆうしよちとして、大きな板がなんまいもうちつけられてなおしてありました。かべには、やけこげたあとがいくつもついております。とりでのまわりの地面は、ふみ荒らされ、赤茶けた土がむざんにもむき出しになっていました。

これらすべてのことが、物語っていること。それはひとつでした。このとりでで、ごくさいきん、戦いがおこなわれたということなのです。ということとは、ここは……？

いえ、このとりでは、ベゼロインとりではありません。ベゼロインのとりでは、エリル・シャンディーンと同じ、海の色まじった白い石でつくられていたのです。このとりでのかべは、茶色。となると、このとりでがどこだか？ みなさんにはもうおわかりかと思いません。

ごくさいきん戦いがおこなわれたばかりの、もうひとつのとりで。そう、ここはベーカーランドのそのふたつのとりでのうちのひとつ、リュインのとりででした（このリュインとりではこの近くの山でとれた、とてもじょうぶな石が使われていました。そのためエリル・シャンディーンやベゼロインとりでとは、ちがう色をしていたのです）。

じこくは、ベゼロインのとりでにワットの黒の軍勢がせめこむ、その数時間前（くわしい時間まではわかりません）。場所は、このもうひ

とつのとりのりを見下ろす、小高い山の上。今その場所に、ひとりの老人がひとつの岩の上にあぐらをかいて、すわっていました。顔は、はい色のひげでもじゃもじゃ。顔の大きさよりもひげの方が大きいくらいです（サンタさんのような顔、といたらわかりやすいかもしれません。でもサンタさんよりもつとのおひげはごわごわしていて、まるでたわしみたいないひげでした）。くりくりとした大きな目。ひげにかくれた大きな口。ずんぐりまがつた大きな鼻。その顔をひとめ見ただけで、この老人がどんな人物か？ わかつてしまいそうなくらいでした。ごうかいで、だいたんで、がんこ。そして、こわいもの知らず。いかにもそんな感じの顔をしていたのです。

でも、すいません。読者のみなさんにとっては、「しかしこの老人は、それらのいんしょうとはぜんぜんべつの、いがいなせいかくをしていて……」とつづけた方が、おもしろみがありますというものですが、ざんねんながら、わたしもそうつづけるわけにはいかないのです。だってこの老人は、まったくもって、顔そのもの！ ごうかいで、だいたんで、がんこ。そして、こわいもの知らず。そのまんまのせいかくでしたから！

「まったく、ノランのやつも、やつかいなしごとをおしつけてくれるわな。」老人がつぶやきました。

ノラン！ この老人はあの大けんじやノランの、知りあいのようなのです！ いったい、この（岩のようにがんこそうな）老人はなに者なのでしょうか？

「だーが、たまには、ええわい。ハウゼンくんにも、おんがえしせんとな。わしも、ひさしぶりに、うでがなるつてもんだわ。のう、おまえたち。」老人はそういって、「がっはっは！」とごうかいに笑いました（まったくもって、顔そのままの笑い方です。すいません）。

おまえたち？ そして、ハウゼンくん？（この名まえ、どこかできいたような……）

老人がそういうと、老人のうしろのやみの中で、ご、ごいん……！ ぎゅ、ぎゅいん……！ なんともおかしな音がなりひびきました。大きな歯ぐるまがからみあうような、岩と岩とがぶつかりあうよう

な、今までにきいたことのないふしぎな音だったのです。そしてそのやみの中で……、なにかが動いているようでした！ それも、ひとつやふたつではありません。あちらでも、こちらでも！

老人はまんぞくそうに「ふんっ！」と鼻をならすと、おもむろに、すつく！ と立ち上がりました（背はひくく、ずんぐりむつくり。まったくもって、この顔にはこのからだといった感じですが。すいません）。そしてポケットからひとつのりんごを取り出して、それにがぶり！ とかぶりつくと、（ごわごわしたひげにしたたるりんごのしるを手でぬぐい、りんごをがしがし、かんでから）老人はとりでの方をながめたまま、うしろのやみにむかっていったのです。

「さあて、おまえたち！ そろそろ、あそびに出かけるとしようかの！」

「ご、ごいーん！ きゅ、きゅいーん！」

老人の声にこたえて、やみの中でふたたび、ふしぎな音がひびき渡りました。

ベゼロインのとりでに、つぎつぎとワットの黒の軍勢の者たちがはいりこんでいきました。おそろしい魔女たちの（そしてアーザスの）考えた、ひれつきわまりないひきような作戦によって、今やこのとりでは、敵のものとなったのです（ここでひとつ、説明を加えておきます。ベゼロインでおこなわれたいくさにおいて、ベーカーランドはやぶれました。ですがそれは、「とりででのいくさにやぶれてとりでがうばわれた」ということなのであって、ベーカーランドのくにそのものがやぶれたというわけではないのです。黒の軍勢は、これからこのベゼロインとりでからエリル・シャンディーンへとむかって、さいごの進軍をしてくることでしょう。このアークランドの運命をかけたさいごの戦いは、これから始まるのです）。われらが仲間たち、ベーカーランドの仲間たちは今、黒のやみにとらわれたたくさんの仲間たちのことを、なん台もの大きな馬車に乗せて、ベゼロインとりでからたいきやくしていくところでした。ふしようした者たちは、全部で六百五十八名。二十人ずつ乗せても、ぜんぜん馬車の数がたりません。

かれらの手あてをおこなう仲間たちは、ベゼロインとりでからすこしはなれた丘のふもとまで、ふしようした者たちのことをなん回にも分けてすこしずつはこんでいきました（黒の軍勢の者たちは、ふしようした者たちであっても、ようしやなくとりでから追い出しました）。そこでエリル・シャンディーンからの助けを、待つことにしたのです。黒のやみにとらわれた者たちは、みんないしきを失って、眠ってしまっていました。ルクエールのいうことには、つぎに目がさめたと、この者たちはあのレドンホールの黒ウルファの者たちのように、自分のこともなにもかも忘れた、影のような者になってしまうだろうということでした……。六百五十八名もの、ゆうかんなる者たち、みんながそうなってしまうのです。みんな友だちでした。仲間でした。ですが今は、なにも手のうちようもなかったのです……。（かれらをもとにもどすためには、とくべつなちりようが必要とのことでした。ですがそのちりようの方法は、ベーカールランドのきゆうていまじゅつし長であるルクエール・フォートにさえ、今はわからなかったのです。この力は、やみの力。光の魔法をあやつるまじゅつしたちには、手にあまる力でした）。

手あてをおこなう仲間たちは、みな、つかれきっていて、口をひらく者もありませんでした。遠まきに見える、ベゼロインのとりで。さつきまで、自分たちがあそこで、いきようようとかつやくしていたのです。それがわずか数十分のあいだに、こんなにも、立場がぎやくてんしてしまうとは……。

うすいぬのをただしいただけの、寒空の地面の上に、そのまま横たえられているたくさんの仲間たち……。なんてかなしい光景なのでしょう……。

ひとりとはなれた場所に、ライラが立っていました。ベルグエルムとフェリアルは、ずっと、ふしようした仲間たちのそばにつきそって、ひとりひとりのその手を静かににぎりしめていました。ライラは、きつ、と口をむすんで、なにもいわず、かなたに見えるそのベゼロインとりでのことをただ見つめていました。そのひとみには、とりでの上にかかげられた、ワットのくのに黒いはたぬのの影がうつつていま

した。それだけではありません。そのはたぬののとなりには、あのおそろしいデイルバグのかいぶつがいっぴき、いたのです。そして、そのデイルバグの背に乗っていたのは……。

まつ黒なよろいを着た、敵のしきかん。この戦いのしきをとつていた、そのしきかんでした。遠くはなれた場所からでも、はつきりとわかる、そのあざやかながね色のかみ……。そう、それはまさしく、デイルバグの黒騎士隊のしきかん、そしてライラのお兄さん、ガランドー・アシユロイだったのです。

たいまつのおのほのおの中に、ガランドーのすがたがうつし出されていきました。ガランドーは、まっすぐ身動きもせず、こちらを見つめていました。そのひとみにうつっていたのは、横たわるたくさんの者たちでも、三人のきゆうていまじゆつしたちでも、ベルグエルムでもフェリアルでもありませんでした。ガランドーのそのひとみには、ただひとり、立ちつくすベーカールランドのこがね色のかみのしきかん、ライラ・アシユロイだけがうつっていたのです。

ライラも、ガランドーのしせんを感じ取っていました。目と目のあった、兄ともうと。ですがライラは、ただこぶしをにぎりしめ、なにもいわずに立ちつくしているだけでした。

かのじよのその心の中には、今どんな思いがあふれているのでしょうか？ ガランドーのその心の中には、今どんな思いがあふれているのでしょうか？

ふたりのその思いは、まじわることなく、ただただ、この夜の寒空の中へと消えていくのみでした。

「クルツポー！ クルツポー！ 起キロー！ 起キロー！」

とつぜん、家の中にかん高いさげび声がひびき渡りました。こ、この声は……？

「クルツポー！ クルツポー！ 起キロツタラ、起キロ！ 起キロツテ、イツテンダロ！ コノヤロー！」

こ、この口ぎたない言葉……。わたしもみなさんも、ひさしぶりにききましたね。そう、これははぐくみの森の入り口で野宿をしたとき

にライアンが使っていた、あのはどのクルツポールの目ざまし時計だったのです（夜のかいぶつのいせきでは、ベルグエルムとフェリアルのことをさがすのにも、大かつやくしてくれましたよね）。

「ライアン、起きて。もう、出かける時間だよ。」

そういつてライアンのからだをゆさゆさとゆさぶっているのは、ロビーでした。じこくは、羽うさぎのこくげん、朝の六時ごろです（ちなみに、ロビーはライアンを起こす前に、クルツポールの目ざまし時計のスイッチをちゃんとためておきました。そうしないと、このままクルツポールのこうげきが、ライアンにようしやなくくり出されますので……）。

「うーん……、あと、ちよつとだけ待って……。ぼく、三十びょうで、このケーキ、みんな食べちゃうから……」ライアンが、寝ぼけたままでこたえます（ライアンは今、夢の中でとく大のチョコレートケーキにまるごとかぶりつくところでした。これを三十びょうで食べられるのは、ライアンだけでしよう……）。

「まだ起きないのか、まったく。」マリエルが、じまんのさらさらのかみにねんいりにブラシをいれながら、あきれていいました。マリエルは、もうすつかり旅の身じたくをすませて、あとはもう出かけるのみとなっていたのです（ちなみに、マリエルの今日の衣しようは、白とこんのトゥトンカラーにきいろのふち取りがいんしよう的な、かわいい服とかわいいズボンでした。それに胸もとには、同じきいろのかわいいスカーフをむすんでいたのです。コーデイナーもぼつちり！でもたぶんこの服も、今日の午後には着がえているでしようか……）。

「しようがない。もう、すぐに出かけなければなりませんから、ぼくの魔法で起こしますよ。」

今日いちばんのマリエルの魔法、さつそくのごとうじようのようですよ！ さあ、どんな魔法なのでしょう？ ねむけが吹っ飛ぶ、おめめぱつちりのじゅつでしようか？ それともちよつとらんぼうに、びりびりしよつくのじゅつとかで、ごういんに起こすのしようか？（あ、このふたつの魔法はわたしがかってに考えたもので、じつさいに

はありませんよ、たぶん。

ちなみに、家のまわりに張りめぐらせていたふうせんのふくろうたちには、さいわいなことに、その出番はありませんでした。ガウバウたちにも、この小屋にいるのがとんでもなくおそろしい人たちなのだということが、よくわかったのです。

マリエルは、小さな声でなにかをささやいたあと、ライアンのそばにそっと近よっていった……。

「ふーっ！」

その耳に息を吹きかけました！ ええっ？

「うわわわっ！ な、なにになにつ？」ライアンがびっくりして、飛び起きます。どうやら、こうかてきめんだったようです。

「起きた？ ほら、もういくよ。早く、したくしなよ。」マリエルが、たしなめるようにいいました。

「はわわわわ……」ライアンは、全身の力がぬけてしまって、なんだかかゆいような、くすぐったいような、なんともいえない気持ちで、ベッドからようやく起き出しました（けいけんされた方もいるかもしれませんが、耳にふーっと思を吹きかけられると、ライアンみたいに、なんともいえない、へにやつとした、くすぐったい気分になってしまふのです。寝ぼけているときにやられたら、やっぱりびっくりして、飛び起きてしまうことでしょう。おみみふーふーのじゅつという名まえでしたが、じつはこのわざは、魔法の力がはいつていることにははいつていましたが、ちゃんとした魔法ではありません。マリエルが、かつてに作ったのです。寝ぼけている相手をびっくりさせて起こすといったこうかがありましたので、今使ったというわけでしたが……、はつきりいって、これはただの悪ふざけにすぎませんでした。ちなみに、マリエルは、これでもし起きないようなら、ライアンのほほをひっぱたいて起こすつもりでしたが。こんなことに、ちゃんと魔法の力を使いたくありませんでしたので）。

そとは、ぴーん！ とした、山のつめたい空気が張りつめていました。おひさまは、まだのぼっています。おてんきは、うすぐもり。

東の空がすこしずつ、明るくなっていくようにしているころでした。

またたいへんないちにちが、これからはじまろうとしていました。そして今日のこの日は……、ロビーたち、そしてアーケランドの人たちにとつて、ずっと忘れることのできない、大きな大きないちにちとなるのです。

「うわわっ、寒いー！ やっぱ、山の上から、寒いよー。」

起きたばかりで、ろくに身じたくもせずに出発することになったライアンが、さっそくぐちをこぼしはじめました（その口には、エリル・シャンディーンのお城で仕入れてきた、クリームネクタールフルーツというくだものの味のぼうつきキャンディーがいっぱい、くわえられていました）。

ちなみに、ライアンは着がえをぜんぜん持つてきていませんでしたので、マリエルにズボンだけをかりて、いぜんの半ズボンからそれにはきかえていたのです。やっぱりライアンも、半ズボンでは寒いということが、よくわかりましたから……。半ズボンすがたもかわいかったので、ちよつともつたいたいような気もしますけどね）。

「しばらくは、がまんして。えっと、じゃあ、まずは、この岩山からおりないといけないね。また、魔法のえんばんでおられるのかな？」

ロビーが岩山のふちをのぞきこみながら、マリエルにいいました。ですがマリエルは、あごをなでながら、ただ「うーん……」とうなづいているばかりだったのです。どうしたの？

「そのことなんです……、今日はもう、とにかく、のんびりしているわけにはいかないんです。すこしでも、時間をだいじにしないと。ですから、ちよつと、らんぼうな手を使わないといけません。」

「ら、らんぼうな手？」ロビーがおっかなびつくり、たずねます。な、なんかわたしも、いやーなよかんがするんですけど……。

「あそこ、岩山がありますよねっ。」

マリエルが、むこうにそびえているそのとがった岩山のことをゆびさしながら、いいました。

「まず、あそこのでっぺんまでいきます。それからまた、そのむこうの岩山のでっぺんまでいきます。見えますか？ それをくりかえし

ていけば、下から歩いていくより、ずっと早くいきますから。これは、さいごのしゅだんでしたが、時間がないのでしかたありません。」

えっ、と……？ 下の道を歩かずに、岩山のとっぺんから、岩山のとっぺんへ？ たしかに、そんなことができるのなら、地道に歩いていくよりもずっと早くいけるでしょうが、いくらマリエルがゆうしゆうなまじゆつしだといっても、ほんとうにそんなことができるのでしょうか？ まさか、しゅんかんいどうでワープしていく！ というわけでもないでしょうし……。

「あそここの岩山つつたつて、ずいぶん遠いよ？ 空飛ぶ魔法のじゆつ、とか？ そんらの、きいたことらいけど。」ライアンがマリエルにいいました。

「それも、それがれきたら、楽しいだろうね。」ライアンがつづけて、ロビーにそういいいます。

「うん。空が飛べたらいいね。いぜん、フログルさんたちのボートでは、ひどい目にあつたから。」ロビーがこたえました。

フログルたちの、ケロケロボート！ ぴよっころん！ と大ジャンプして、道なき道をいつぺんに進めたのはよかつたのですが、そのけっか、ロビーたちがひどい目(ひどい乗りものよい)にあつたのは、みなさんもよくおぼえていますよね。でもまさか、あんなひどい目(ひどいジャンプよい)には、もうあわないでしょう。

「ぼくはもう、あんなのにどとごめんだよ！ あれに乗るくらいなら、ぜったい歩いてくー！」ライアンもひどいけんをよみがえらせて、ぶるる！ とふるえながらいいました。

さて、いったいマリエルは、どんな魔法を使うというのでしょうか？ でもまあ、今までもマリエルの魔法はすぐくやくに立ってくれたものばかりでしたから、みんなもそんなに深く考えずに、ここはマリエルにまかせたというわけだったので。

「じゃあ、すいませんが、ロビーさん。これで、ぼくと、からだをむすんでおいてください。ねんのためです。ライスタも、しっかりむすんでおいてよ。」

そういつてマリエルがふたりに手渡したのは、いっぽんのじょうぶ

なロープでした。こ、これで、からだをむすぶ？　なんだかやつぱり、ものすごくいやなよかんが……。

でも、ここはほかに、しようがありません。ロビーとライアンのふたりは、いわれるままに、そのロープを自分の腰にむすび、そしてそのはしを、マリエルの腰にむすびました。

「できたけど、これで、どうするの？」ライアンがたずねます。

「じえつとこーく・すくりゅーのじゅつ、っていう魔法でね。あつかうのは、かなりむずかしいんだけど、まあ、そこは、ゆうしゅうなほくだから、問題はないんだけど。」マリエルがこたえました。

「じまんはいいから！　早く教えてよ！」ライアンがせつつきます。

「あの岩山のとっぺんまで、魔法のレールをひきます。そこからあいだをあげずに、つぎの岩山のとっぺんまでレールをひきます。そのレールの上を、トロツコですべていくんです。まあ、いうのはかんたんなんですが、問題は、ちよつと、スピードがはやいってことかな。」
「は、はやいって、どのくらい？」マリエルの言葉に、ロビーが心配げにたずねました。

「いえ、落つこちたりしませんから、安心してください。せいぜい、馬で走る、ばいくらいのはやさですから。」

「ええっ！　そ、それって、すごいスピードなんじゃ……」「ロビーがいました、マリエルはもう、岩山のふちに立って、魔法の言葉をとえはじめております。

「こうなったら、かくごをきめるしかないね。」ライアンが、ロビーの腰をぽんとたたきながら、いいました。

そして……。

「まじかる・すくりゅー！　るーぱる、ろーぱる、すろー！」

マリエルのその言葉とともに……、ふおおおん！　青くかがやくとうめいな魔法のトロツコが、三人のからだのまわりを、しっかりと取りかこんだのです！　ちゃんといすもあって、前の席にマリエルが、うしろの席にロビーとライアンが、すわれるようになっていました。

へえ、これはすごい！ そう思ったのも、つかのま……。

「それじゃ、しつかりつかまっててくださいよ。あれぐる！ れでゅー！」

マリエルが魔法の言葉をさげぶと、目の前に、同じく青に光りかがやく、魔法のレールがのびていきました！ そしてみんなの乗ったトロツコは、きゅきゅきゅきゅきゅー！ うしろのしやりんを思いつきりスピンさせてから、そのレールの上を……、ひゃん！ はじめつから、全そくりよく！ ロビーの影をおいてけぼりにしていつてしまいうそうなくらいのもうスピードで、走り出したのです！（ど、どこが、馬で走るばいくらいのはやさなの！ ぜったい、もっとはやいよ、これ！）

「ぎゃあああ〜！」

ああ、やっぱり、思った通りでしたね……。こんなときに感じるいやなよかんというものは、いつでもてきちゅうしてしまうものなのです……（ちなみに、さげび声はロビーです。ライアンはひとこと、「ぎゃ。」といったきり、もう放心じようたい！ さげび声も出せませんでしたので）。

その、はやいことはやいこと！ まわりの景色があつというまに、うしろへとすっ飛んでいきます！ そしてさいしょの岩山が、もうせまってきたてしまつて……。

「あれぐるー！ れでゅー！」マリエルがさげぶと、そのつぎの岩山にむかつて、また新しいレールがぎゅいーん！ のびていきました！ そして魔法のトロツコは、ぐいん、ひゃん！ スピードをまったく落とすことなく、つぎの岩山へとむかつてむきを変えて、さらにつき進んでいったのです！

「ぎゃ……、あー……、あああー！ あー……、……」

もしあなたが、さいしょの岩山のそのてっぺんに立っていたとした

ら、ロビーのひめいはこのようにきこえたことでしょう。まず遠くからひめいがきこえはじめて、あつというまに目の前をつうか、そしていっしゅんのうちに、ひめいも去っていくのです。うくん、かわいそうなロビー……（エリル・シャンディーンのエスカレーターやエレベーターに乗った場面からでもおわかりのように、ロビーはこういう乗りものが大のがてだったのです。しかもつぎつぎと越えていく岩山の高さは、みんな同じじゃありませんでしたから、ぐいーん！急にのぼったり、こんどは、がくん！ 急こうかしたり……。まさにコークスクリュー！ またひとつ、ロビーのいやな思いでがふえてしまいましたね……）。

それからなん回、マリエルの「あれぐる！ れでゅー！」がつづいたのでしょうか？（つまりいくつの岩山を越えたのでしょうか？ ということです。）

「さあ、つきましたよ。ここからなら、アップルキントまでは、そんなにかかりませんから。」

マリエルがそういって、（ようやく）魔法のトロッコを消しました。ですけどロビーとライアンの耳には、そのマリエルの声も、ほとんどどいてはいなかったのです。ふたりはそのまま、ず……、ず……、……、いすにすわったしせいのまま、くずれていって、ペしやん！ 地面にへたりこんでしまいました。

「ど、どうしたんですか？ ふたりとも。」マリエルがびっくりした顔をして、ロビーとライアンのことを見ました。どうやら、魔法を使うことがあたりまえになっているマリエルにとっては、このていどのはやさで空中をかけぬけていくなんてことは、ぜんぜんなんでもないことのようにだったのです。ですけどロビーとライアンにとっては、そうはいきませんよね。なにしろ、もし落っこちたなら、ならくの底へまっさかささま！ そんな空中を魔法のトロッコで、もうスピードで、のぼったりおいたり、かけぬけさせられましたから！ これにはさすがのライアンでさえも、しんぞうばくばく！ ロビーにいたっては、さげびすぎでのどをからして、やっとたどりついた地面の上で、ばたんきゅー！ そのまま白目をむいて、ちがう世界へとはいりこんでいっ

てしまいました……（いえ、まだ生きていますから、ご安心を。かうじてですが……）。

「ちよつと、はやかったですか？　だいじょうぶだと思っただすけど、すいません。ライスタ、だいじょうぶ？」マリエルがいいましたが、ライアンが、やつとひとこと、こうこたえるのでせいっぱいでした。

「あのね、マリー……、つきからは、もつといろいろ、説明してからにしてね……」

とにかくこうして、マリエルのたのもしい(?)魔法のおかげで、ノランベつどう隊のみんなはラグリーンたちの里のあるそのすぐ近くの山道にまで、たどりつくことができたのです。マリエルのいうことには、ここから一マイルもいかない場所に、ラグリーンたちの里、アツプルキントがあるということでした。リズの家からアツプルキントまでは、八マイルだといっていましたから、つまりみんなはあのトロツコで、空中を七マイルも走ったのです！　すばらしいショートカットにはちがいありませんでしたが、かわいそうなロビーとライアン……（ところで、こんなにすごい、じえつとこーく・すくりゅーのじゅつでしたが、やはり魔法でしたから、よいところだけではなかったのです（はやすぎてスピードのちようせつがきかないというのも、もちろん問題のひとつでしたが……）。この魔法は、四ぶんの一マイルまでの魔法のレールしか出せませんでした。ですからこんかいのように長いきよりをいちどにかけぬけようと思つたら、四ぶんの一マイルごとに魔法をかけなおして、新しいレールをつぎたさなくてはならなかったのです。そのためマリエルは、なんどもなんども魔法をかけなおして、ここまでたどりついたというわけでした。なんと、二十八回もレールをつぎたしたのです。

そしてこの魔法は、まさにコークスクリユーのように、「空中」を駆けぬけていかなければならない魔法だったということ。レールのはじまりと終わり、それぞれ十フィートまでは、かたい地面の上（こんかいは岩山のでつぺんでしたが）にふれてもよかったのですが、レール

ルの「とちゅう」は、まわり二十フィート内の空間になにか物体があったりすると、そのレールは力を失って消えてしまいました。ですから地面の上には、レールをひくことができなかつたのです。

そのほか、「レールのかたちはほとんどまっすぐでなければならず、五フィート以上はねじまげられない」とか、「さいていでも四回（一マイル）以上はレールをつなげつづけられるところでない」と、使うことができない」とか、「いちど使ってしまったら、二十四時間たたないとふたたび使えるようにならない」とか、いろいろ。

この魔法はべんりな魔法であるのと同時に、とてもふべんな魔法でもありました。この魔法をうまく使いこなすことができたのは、この場所が高く切り立った岩山がいくつもつき出た、けわしい山道だったからこそなのです。マリエルは、まわりのじょうけん、魔法のじょうけん、そういうところをこんかいもよくはあくして、この魔法を使いました。こんな魔法をいつも使うことができたのなら、旅もぜんぜん、らくに進めましたけど、やっぱりそういうぐあいにはいかなかったのです。魔法を使うというのも、けっこうたいへんなんですね。

なにはともあれ。仲間たちはすぐに、ラグリーンの里まで進まなくてはなりません（その前に、ロビーを生きかえらせなくてはいけませんね。いちおうマリエルもせきにんを感じて、もりもりふあいのじゅつという魔法を、ロビーに三回もかけてあげたのです。この魔法をかけると、げんきが出るとのことでしたが……、今のロビーには、あんまりききめがないようでした……。かけないよりは、ましですけれど）。みんなは、マリエルは、すたすた、ライアンは、ふらふら、ロビーはそのライアンにささえられたうえで、とぼとぼ……、アツプルキントへとつづくさいこの山道へとむかって、その歩みをふみしめていききました（残り一マイルは、こーくすくりゅーの魔法では進むことのできないところでした。このあたりは小さな岩山がたくさんならんでいたため、魔法のレールを出すとその岩山にレールのとちゅうのまわりの空間がふれてしまって、レールが消えてしまうのです。ですからマリエルは、こーくすくりゅーの魔法でいけるぎりぎりのこの場所で、魔法をといたというわけでした。

そしてここからの道のりは、岩ばかりの切り立ったがけの道がつつきました。そのためきよりは一マイルでも、みんなはこの道のりに、けっこう時間をくってしまつたのです。時間にして、五十分くらいでしようか？　そしてこの道のりがあつたからこそ、マリエルはきの中のうちにさきへ進むのをやめておいて、リズの家にとまることにしたというわけでした。いくらここにくるまでの道のりをこーくすくりゅうの魔法でかせげるとしても、そのあとのこの道のりを進むのは、ロビーたちには体力的にもむりがあるし、危険であるとはんだんしたのです（しかもこの場所には夜になると、ウィルオーウイスプとよばれる、魔法をまつたく受けつけない、こわーいひとだまおぼけがあらわれるのです。ですからマリエルは、それをふまえた上でも、この場所を夜に進むのはやめておきました）。

そしてさきにここまでこーくすくりゅうの魔法できておいて、ここで野宿をするというのも、やはりやめておきました。それはこのあたりの岩山には、(さきほど説明したひとだまおぼけもふくめ)やはり空を飛ぶギルデイや、そのほかの危険な生きものたちなどが、たくさんいたからだつたのです。こんなところで野宿をするのは、いくら魔法の力の守りを使ったとしても危険であると、マリエルははんだんしたというわけでした。もつとも、こーくすくりゅうの魔法でここまでやつてくるのにかかる時間は、わずかに十分ほどでしたけどね。それならばやつぱり、リズのおうちでゆっくり休んだ方がいいでしょう。

ちなみに、南東のトンネルにむかうための道のりは、こーくすくりゅうの魔法を使えるじょうけんの場所がほとんどなかったため、ちゅういちばんこうりつのいいところでの魔法を使ったとしても、トンネルまでいくためには、かなりの時間がかかってしまうという道のりだつたのです。こんかいのアップルキントまでの道のりの中で、いきなりマリエルがこーくすくりゅうの魔法を使ったのは、そこがぐうぜん、いちばんこの魔法を使うのに、こうりつがよかつたからでした。この魔法で七マイルものきよりをかせげたのも、この道のりがこーくすくりゅうの魔法を使うのに、それだけできてきたからこそだつたのです。以上、こまかい説明、終わり。

そしてみんなは、その危険な岩の道をぬけ、つづくさいごの道にまでたどりついたのです。

東の空に、おひさまがのぼってくるころでした。あたりはだいぶ、明るくなつてきております。そのやわらかな朝の光につつまれて、あたりの岩山は、ほわほわとしたやわらかなぬのがかけられているかのように、おだやかに、やさしく、かがやいていました。

この場所はガウバウたちのいたがけの道や、危険な生きものたちのすみかであつたさきほどまでの岩の道とは、あきらかにちがつていました。岩の色は、あたたかなきいろ。そしてその岩に、たくさんの植物が生いしげっていたのです（ちようどシープロンドへとつづく山道にも、にた感じでした。これはアップルキントがとてすてきな場所であるということ、物語っていたのです。すてきな場所に近づいていくと、だんだんと、あたりのようすもすてきになっていく。わかりやすくいいですね）。岩かべのみどりの葉のあいだにさく、きいろや赤や白の、かわいらしい小さなお花たち。ですが、ふらふらの口ビーとライアンには、まだまだそんなことを気にかけているようもありません。さきほどの岩の道から、かれらはいっぽいっぽ、ふみしめるように、うつむきながら、マリエルのあとをくつついていくのでせいっぱいでした（さぞかし、長い道のりだったことでしょうね……）。

そしてついに……。

目の前が急に、ぱあつとひらけました。みんなはようやく、めざすラグリーンたちの里、アップルキントへとやってきたのです！（やーっとなつたよ、まったく。ライアンのかわりにいつておきますね。）

そこはまさに、らくえんのようなところでした。もうひと目で、それがわかるのです。冬も近いこのきせつだというのに、地面はいちめん、青々としたしばふにおおわれていました。同じく、あざやかな葉っぱをしげらせた、いきいきとした木々たち。その木々にはオレングジのような木の実や、ほそ長いさやえんどう豆のような木の実が、あ

ふれるほどみのつていたのです（じっさいあふれて、地面にたくさんこぼれ落ちていました）。地面にはたくさん「大きさが一フィートほどの、白くてふわふわした、まるいわた毛のようなもの」が、あつちへころころ、こつちへふわふわと、動きまわっていました。これはその通り、毛玉草という草のわた毛で、このわた毛の中にこの草のたねがはいっていて、それをわた毛ごと風に乗せて、遠くまではこべるようになっていたのです（たんぽぽのわた毛ににていますね）。

このようなしばふのらくえんが、それぞれちよつとした広場となつてあちこちにあつて、それらがまるで空中に浮かぶひとつひとつの島のように、上にも下にも、見渡すかぎり広がっていました（じっさい、いくつかの島は地面からはなれて、ぷかぷかと空中をただよっていました！ エリル・シャンデーインのまちの空に浮かぶ島は、魔法で浮かんでいるわけでしたが、こんどはいったい、どういうしくみになっているのでしょうか？

あとでしらべたところによりますと、じつはこの島は、島全体が、ふわふわ草という草がからみあつてできているのだということとで、この草が島そのものを、ちゆうに浮かべているのだということでした。ふしぎな草があるものですね！。そしてこの里全体は、背のひくいたくさんの岩山にすつかりかこまれていて、それらの岩山が、この場所をまつたくもつてかくれ里とよぶのにふさわしい場所へと、変えていたのです（岩山にまわりをぐるりとかこまれた谷の中に、しばふのだんだんばだけが広がっていると、ころをそうぞうしてもらえれば、この里のイメージに近いと思います）。その光景には、ふらふらのロビーとライアンもすつかり感心して、そこでふたりは、ようやくきちんと目がさめたくらいでした。

と、そこにとつぜん……。

びゅうっ！

頭の上に、なにかがふつてきたような、風を切る音がひびきました。ロビーとライアンが、なにかと思つて見上げると……。

「いらあーっ！ 逃げるにやあーっ！」

見上げた場所ではなく、地面の方から、子どものような声がきこえました（これはつまり、声のぬしが空からジャンプしておりてきて、ロビーとライアンが上をむいたそのわずかなあいだに、もうすでに地面へとおり立っていたということなのです。それほど、この声のぬしはすばやいのです）。こ、この「にや」という言葉づかいは！

ロビーとライアンが、あわててこんどは、しせんを下におろすと……。しばふのさきに、大きさが二フィートほどのすばやく逃げるきいろいボールがひとつと、そしてそれを追っかけている、つばさの生えたねこの種族の者がひとり、いるのが目に飛びこんできたのです。それはまさしく、このかくれ里に住む、知る人もすくない空飛ぶねこの種族、ラグリーンの者にほかなりませんでした。

そのラグリーンはきいろいボールを追っかけて、あつというまに、むこうの島にまですつ飛んでいってしまった（ちなみに、このボールはその通り、「毛玉草きいろバージョン」とよばれている草で、ふつうの白い毛玉よりばいほども大きいのです。そしてこのきいろい毛玉は、まるで自分の意志を持っているかのように、どんどん逃げるのです。うくん、ふしぎです）。ロビーとライアンが、ぽかーんとして、そのラグリーンが消えていった方をながめていると……。

びゅうっ！

また、さつきの風を切る音です！ そして、ふたりがその方をむくよりもさきに……。

「あれえー？ ひよっとしてー、お客さんかにやー？」

ふたりのうしろから、とつぜん声がしました！ びっくりしてふりむくと、今さつきむこうの島のかなたに消えていったはずのそのラグ

リーン種族の者が、かれらの目の前に立っていたのです！ な、なんてすばやいでしょ！

そのラグリーンは、身長四フィートほど。ラググリーンの中では小さい方です。それもそのはず。このラググリーンはまだ、八さいくらいの子どもでした。ちなみに、男の子です。とつてもかわいらしい、あいきょうのある顔。くりくりとした、ぱっちりのおめめ。ふわふわくりん！ とくせのついた、茶色のかみの毛（いわゆる、ねこっ毛というやつです。ねこの種族ですから）。頭の上にぴよこんと乗っている、大きなふたつのねこ耳。くねくねと動く、長いしっぽ。どれを取っても、ねこそのもの！（ねこの種族ですから。）そしてラグリーンのさいだいのとくちようである、その背中の大きな羽。ややこがね色のまじった白い羽がふたつ、きれいにおりたたまれて、その背中を美しくかざっていました。

「あれえー？ お兄ちゃん、リスレファンニヤおねえちゃんによ、お友だちだねえー？」ラグリーンの男の子がいました（「によ」は「の」のことです）。どうやらマリエルのことを見て、そういつているようです。

「リスレファンナおねえちゃん？」マリエルが思わず、たずねました（「ニヤ」は「ナ」となるわけです）。

「そんな人に、知りあいはいないよ？ だれかと、まちがえてない？」

マリエルがいましたが、ラグリーンの男の子はゆびを口にくわえて、首をかしげていました。

「あれえー？ ふしぎふしぎ。おかしいにやあー。まあ、いつかあー。」

男の子はそういうと、とつぜんぺこりと頭を下げ、三人のお客さんたちにいいました。

「ぼくは、リユキアっていうによ。お兄ちゃんたち、里長さんに、ごようっ。」

さとちよう、つまりこの里をおさめている、いちばんえらい人のことです。村でいえば、村長さんといったところですね。

「うん、ぼくは、マリエル。こちらは、ロビーさん。そして、こっちがライスタ。」マリエルがみんなのことをしようかいします。

「ライスタって、しようかいしないでよ！　ぼくは、ライアンだってば！」ライアンがぶんぶん怒っていいました。

「あれえー？　マリエルさんって、やつぱり、前にきた人だねえー。じゃあ、やつぱり、おねえちゃんによお友だちじゃにゃーい。」リュキアという男の子が、マリエルにそういいました。でもやつぱり、マリエルにはぜんぜん、心あたりがありません。

「そのおねえちゃんってのが、だれだか？　ぼくにはわからないな。あとで、しようかいしてくれる？　前に会った人なのかもしれない。名まえをおぼえていなかったのかな？　ぼくの頭なら、忘れるはずがないんだけど。」マリエルがさりげなく、じまんをいれます（うしろでライアンが、「んべっ！」と舌を出していましたが）。

「まあいいや。とにかく今は、里長さんに会いたいんだけど。あんないしてくれるかな？」

マリエルのその言葉に、リュキアはにっこり笑っていいました。

「いいよー。こっち！」

それからみんなはリュキアにあんないされて、里長さんの家がある、その大きな木のある広場までやってきました（ところで、この里はラググリーンむけに作られておりましたから、みんなはひとつの広場からつぎの広場までいくのに、けっこうくろうしました。なにしろそれぞれは、みんなひとつづつが島のようになっていましたから、つぎの広場にいくためには、よいしょよいしょ！　わきにつくられたお客さん用のかいだんを、のぼったりおりたりしていかなければならなかったのです。ラググリーンたちなら、ぴょーん！　とジャンプしたり、羽でふわふわ飛んだりして、かんたんにいどうできましたが、ロビーたちは、そうはいきませんでしたから。

ですからみんなは、さいしよはちゃんと、かいだんを使っただけでいいましたが、そのうち、めんどろになつて……、いえ、時間のせつやくのために、ふたたびマリエルの魔法をたよることにしました。

ふわふわえんばんのじゅつ、それと「ふわふわえんばんのじゅつ・ななめバージョン」などを使って、みんなは島から島へ。里長さんの家のあるこの広場まで、たどりついたというわけだったのです。うん、やつぱりまじゅつしがいると、らくだなあ。っていうか、ふわふわえんばんのじゅつって、ななめバージョンがあっただんですね……。そして里長さんの家は、その大きな木の上につくられていたのです（いわゆるツリーハウスというやつです。その大きいものでした）。カルモトの家のある、あのとんでもないほどの大きさのルイズの木とくらべたら小さいですが、それはあの木と、くらべたら話。この里長さんの家がある木も、ふええ……、と見上げてしまいうくらい、大きくてりっぱな木でした。

その木が生えているところは、この広場のまん中でした（この里のまん中でもありました）。そして広場のそれいがいのところは、いちめんのはたけになっていたのです。うえられていたのは、なんともふしぎな作物でした。まるで、巨大なねこじやらし！ 地面から生えたくきの上に、人の背たけほどもある、みどり色のふさふさしたねこじやらしみたいなかたまりが、のびていたのです。その名も、おつきいじやらし！ これは食べるのではなく、その実をほしてかんそうさせたものをください、おふとんやクツションの中にいれたり、そのまま火をもやすねんりようにしたりして、使うのです（にぎりこぶしくらいの大きさの実ひとつで、だいたい四時間くらいもえているのだそうです）。また、ラグリーンたちは食べませんでした、この実をこなにしたものをねってパンのようにしたものは、かれらのかつている鳥ややぎたちの、大好物でした（そしてその鳥のお肉や、やぎのミルクやチーズが、ラグリーンたちの大好物だったのです）。いろいろと、やくに立つ植物なんですね。

ですがこの場所にきたロビーとライアンは、それらのことよりもなによりも、まずまっさきにおどろきの光景をまのあたりにしました。大きな木が立っているということや、巨大なねこじやらしみたいな作物がうえられているなんてことは、それにくらべたら、ぜんぜんたいした問題ではなかったのです。では、そのおどろきの光景とは……？

(びつくりするものをいちばんさいごに説明するという、わたしがよくやるパターンですね。すいません。)

里長さんの家がある、その大きな木。その木のまわり。葉っぱやえだのまわり。その空中に、たくさんの生きたお魚さんたちが、むれをなしておよいでいました！ ええっ！ いったい、どうなってるの？

空中を、生きた魚がおよいでいる。こんな見た目ことありません！（エリル・シャンディーンのお城のホールで、魚のかたちをしたたちが、こくが空中を魔法でただよっているのは、見たことがありませんが、こっちは生きた、ほんものの魚だったのです！）じつはこれこそ、アツプルキント名物、空中お魚ばたけ！ なんとこの木のまわりでは、まるで水の中にいるかのように、魚たちが自由におよぎまわることができました。魚たちは、ふつうの魚たちでした。そしてこの木も、大きいということのをのぞけば、いたってふつうの木だったのです。では、なぜ？

ひみつは、この木の根もとの地面にあり。この木の根もとは、まわりをぐるりとさくでかこわれていましたが、そのさくの中の地面にしきつめられている土は、水の女神のせいなるみずうみの底から取った、魔法の土でした。この土の上では、たとえそこが地面の上であったとしても、魚たちは女神の力によって、水の中と同じように、空中で暮らすことができたのです！ なんとも、しんぴ的な力ですね！

そして魚たちが、こんなにたくさんここにいてるわけ。それはすぐにわかりますよね。ラグリーンたちは、ねこの種族。そしてねこの大好物はといえば？ そう、お魚です！ここは里長さんの家でもあり、そして同時に、ラグリーンたちの大好物の食べもの、お魚を育てている、いわば「ようしよく場」だったというわけでした。

これでこの里が、ラグリーンたちのらくえんとよばれているりゆうが、おわかりいただけだと思います。おひさまさんさんの光の下に、逃げまわるわた毛ボール。ねこじやらし。そしてお魚さんたちがいっぱい。みんな、ねこの大好物ばかりじゃありませんか！ ねこの種族のラグリーンたちにとって、まさにここは、らくえんそのものだったのです（大好きなものにかこまれたせいかつ。いや、うらやま

しいかぎりです)。

さて、おどろくのはこのくらいにしておいて……、そろそろ里長さんのおうちにおじやますることにしましょう(ちなみに、おどろいているのはロビーとライアンの、ふたりだけでした。マリエルはいぜんここにへきて、この空飛ぶ魚たちのことも見たことがありましたので、「あいかわらず、すてきな景色だね。」とリュキアと話していただけだったのです)。

ふいいん!

ふたたび、マリエルのえんばんエレベーターです(さすがにこれだけ使ってしまうと、もう、しんせん味がうすれちゃいましたね)。みんなはエレベーターに乗って、里長さんの家のそのげんかんの前まで、のぼってきました(ちなみに、里長さんの家はエレベーターを三回のぼったところになりましたが、一回のぼったところと二回のぼったところにも、同じような木のおうちがたっていました。ですからロビーとライアンは、それらのおうちが里長さんの家なのだと思って、二回ともそこにはいろうとしましたが、一けん目のきれいな家は、魚たちのせわをしているかんり人さんふうのおうちで、二けん目のかざりけのない家は、里長さんの家のそうこでした。まぎらわしい!)

「くんくん。里長さんち、今日によ朝ごはんは、お魚フライだあ。おいしーだにやー。」リュキアが鼻をくんくんかいで、思わずよだれをたらしながら、いいました(それはいいから、早くあんないしてね)。

と、そのとき……。

「おや? リュキアくんじゃありませんか。なにか用ですか? おおや? その人たちは?」

里長さんの家の入り口から、かわでできたチョッキを着た、三人の人たちが出てきたのです。その人たちのことを見て、ロビーもライアンも、またびつくり! どうぜん、ラグリーンの里長さんの家でしたから、そこにいる人たちもみんな、ラグリーンなんだとばかり思っていました(が、なんとその人たちは、ねこではなくて、ねずみ! ねずみの種族の人たちでした! どういうこと?)

あとでマリエルからきいた話なのですが、このねずみの種族の人た

ちはラットニアという種族の人たちで、ラットニアはここからさらに山のおくに分けいった、かくれ里に、ひっそりと住んでいる種族なのだということでした。ですからラグリーンたちと同じく、アークランドの人たちでこのラットニアたちのことを知っている者は、ごくわずかだったのです。そのねずみの種族の人たちが、なぜ、ねこの種族のラグリーンの、里長さんの家にいるのかということ……、それは、むかしむかしのあるできごとが、きっかけなのだとということでした。

むかしラグリーンとラットニアは、けんかばかりしていた、仲の悪い種族たちだったのです。そのりゆうは、今でははつきりしていないということでした。なんでも、ラットニアの王さまがかつていたペットのねずみを、ラグリーンの王さまがかつていたペットのねこが、食べてしまったとかなんとか……。これがしんじつかどうかはわかりませんが、とにかくそうだったわけで、このふたつの種族たちは、いつもあらそってばかりいたのです。

そこにとうじょうしたのが、とあるひとりの、シルフィア種族の者！　どんな方法を使ったのかはわかりませんが、とにかくラグリーンたちとラットニアたちは、そのおかげで、もとの通りの仲のよい種族たちにもどることができました。

それからおたがいの種族の者たちは、それぞれの仲をこのさきもずっと、深めていこうと考えるようになりました（すばらしいことです）。そのひとつとして、おたがいの里から相手の里へ、友好のための大使を送ることにしたのです。それぞれの里のよいところを、おたがいにもべんきょうしい、分けあつていこうというのがそのもくてきでした。そして今、里長さんの家から出てきたこのねずみの種族のラットニアの者たちこそが、そのラットニアの里ロムルンガルドからの、大使たちだったというわけなのです（以上、説明終わり。では、つづきを）。

「あによねえー、お客さんだよ。マリエルさんに、ロビーイさんに、ライスターさん。」ラットニアたちの言葉に、リュキアがこたえました（「ほら、ライスタっておぼえちゃったじゃんか！　マリーのせいだよ！」ライアンがマリエルに、ぶんぶん怒っていました。ついでに、ロ

ビーのこともロビーイとなってしまうたようですね。」

「おお、これはこれは。」ラットニアのひとり、うやうやしくおじぎをしてそれにこたえます。どうやらこの人たちは、とてもしんし的な、れいぎ正しいりっぱな人たちのようです。ちょうどベーカールランドの白の騎兵師団の、騎士たちのような感じでした（はじめてロビーのほらあなにやってきたときのベルグエルムとフェリアルも、こんな感じでしたよね）。

ラットニアたちが、じこしょうかいをおこないます。

「われわれは、ラットニアの里、ロムルンガルドからの大使であります。わたしは、だいひょうをつとめます、リーリングル・リマシリングルスタールと申す者。いづ、お見知りおきを。」

「わたしは、ランクランドール・ラルールツトール。よろしく。」

「同じく、プリンクポイント・パルピンプルラツクルです。よくおいでくださいました。」

え、つと……、リーリン、グルさんと、ランランドーさん。パルピンプルプル……、ああ！ ぜんぜんおぼえられません！ なんでこんな、舌をかみそうな名まえばかりなの？

（名まえのことは、とりあえずおいておいて……）かれらのあいさつに、マリエルが同じくれいぎ正しくおじぎをして、こたえてかえしました（ちなみに、マリエルもかれらに会うのはこれがはじめてでした。いぜんここへきたときには、いずれもラットニアの大使たちは、くへ帰っていたときだったのです。大使たちはいちねんの半分ずつを、おたがいの里でそれぞれすごしました。それに大使たちも十数人はおりましたので、いつも同じ人がいるとはかぎらなかつたのです。よりによって、こんなにふくぎつな名まえの人たちばかりがきてしまうとは！）。

「ぼくは、マリエル・フィアンリー。エリル・シヤンティーンからの使いです。こちらにいらっしやるロビーさんに、道をしめすことが、ぼくのつとめなのです。ここに、リズ・クリスマイティンという男がきているでしょうか？ そのことで、ぜひ、里長さんのお力をおかりしたいのですが。」

その言葉をきくと、ラットニアたちは急におたがいの顔を見あわせて、なにやらもごもごと話しはじめました。「知らないみたいだぞ。」とか、「われらから伝えていいものか。」とか。いったい、なんのことなのでしょう？

しばらくして、ラットニアたちはマリエルの方をむいてこたえました。

「そうでしたか。リズ……、さんでしたら、今、たきのみずうみに出かけているはずです。どなたか、ラグリーンの方に、あんないをお願いしましょう。」

と、そのとき……。

家の中から、ひとりのラグリーンの男の人が出てきました。ねんれいは、四十だいのなかばくらいでしょうか？（ちようどアルマーク王と同じくらいでした。）身長は、ロビーよりもちよつとひくいくらい。からだはとてもほそく、すらつとしていましたが、がっちりとしきしまっていて、力強い感じがします。長いねこつ毛をうしろでひとつにたばねていて、それを前に持つてきて、胸の上にたらしっていました。すべてを見通すかのような、するどい目。まるでけんじやのようなたずまい。ひとめでこのラグリーンの男の人が、すばらしい力を持つたゆうしゆうなるしどうしゃであるということが、知れました。そしてこの人物こそが、ロビーのさいごの旅において、なにものにもかえがたい、とても重要なやくわりを果たす人物となるのです。

「おお……！　ほんとうに……、ほんとうに、こによときがやってきた……！」その人はロビーのことを見るなり、ふるえる声でそういいました（こんなにりっぱな感じの人でも、やっぱりラグリーンのしゃべり方です。かれらのしゃべり方は、読者のみなさんには、ちよつときき取りづらいかもしれませんが、わたしもありのままに伝えていきたいと思しますので、どうぞごかんべんを）。

「こによアークランドによ、しれんによとき……。精霊王さまによ、よきにやさった通りだ。」

精霊王さまですって？　これはなんだか、ただごとじやない気がしますー！

「ラフェルドロード里長、おひさしぶりです。」マリエルがぺこりとおじぎをして、あいさつしました。なるほど、この人が里長さんだったんですね。思っていたよりもずっと若いので、ちよつといがいでしたが（もつとおとしよりなのかと、かっつてにそうぞうしていましたが。はぐくみの森のランドン・ホップ村長や、フログルのわが家トーディアの、モラニス・レンブランド長老。どちらもだいぶ、おとしよりでしたから）。

「精霊王さまの、よきとは？ いったい、なんのことなのですか？」マリエルが、ラフェルドロード里長にたずねます。まあ、とうぜんのしつもんです。

「うむ。」ラフェルドロード里長が、しつぽをからだの前にまわして、そのさきを手でなでながらこたえました（これが里長さんのくせのようでした）。

「今から五年ほど前によことだ。こによアップルキントに、ふしぎにや客人がおとずれた。そによ者は、精霊王さまによ、使いだという。そして、そによ者がいっしょにつれてきた、十さいによウルファによ少年。それこそが、きみなによだ、ロビーベルク。わたしはきみを、はるかにや北によ地へとはこぶように、たによまれたによだよ。」

な、なんと！ このアップルキントの里長、ラフェルドロードこそが、アークランドの北の地の森へとロビーのことをはこんだ、そのちようほんにんだったのです！ なんとという、運命のめぐりあわせなのでしょう！（そのときのことを、ここですこし説明しておきます。ロビーはそのとき、イーフリープでのきおくを消され、北の地の森の入り口にはこばれるまでのあいだ、ずっと眠ったままでした。ですからロビーは、自分がどうやってその地までやってきたのか？ わからなかったのです。ロビーはこのラグリーンの里長ラフェルドロードの背中に乗せられ、そのつばさの力をもって、空から北の地の森まではこばれていきました。

目がさめたとき。ロビーはひとりぼっちでした。ロビーはそのまま、さそわれるように、目の前の森の中へと進んでいったのです。そしてさいごに、ロビーがたどりついたのは……、そう、かなしみの森

とよばれる、さびしげな森の中の、うちすてられたほらあなでした。ラフェルドロードがつづけます。

「そして、精霊王さまによ使いは、わたしにこういった。『こによウルファによ少年は、によちに、たいへんにや運命によ中へとふみこんでいくことにやる。ラフェルドロードよ。わが、とによぎみ、精霊王さまは、よきにやされた。こによ少年は、こによさき、ふたたび、そにやたによ前にあらわれることとにやるだろう。そして、そによときこそ、こによアークランドによ、しれんによとき。さいごによ運命によときを、むかえるときにやによだ』と。」

ラフェルドロードの言葉に、マリエルは静かにうなずいてみせました。

「そによ……、いえ、その通りです、里長さん。このアークランドは今、運命のときをむかえています。まさに、いつこくをあらそうのです。」

ロビーもライアンも、しんこくな顔をして、マリエルの言葉にこたえます。

「そにやたたちによ、旅によもくてきは、よくわかった。」ラフェルドロードはすべてをりかいしたかのように、そのひとみをとじていいました。

「わたしは、精霊王さまより、すべてをたくされている。わたしは、わたしによ運命に、したがうによみだ。」

そしてラフェルドロード里長は、ゆつくりとそのひとみをひらいて、ロビーにいったのです。

「ロビーベルク。わたしは、もういちど、こによつばさをもつて、きみによ手とにやり、足とにやろう。きみは精霊王さまによところへいき、さいごによ運命によ力を手にする。そによあときみは、さいごによしれんによ中へと、旅立たねばにやらにやい。それはもう、わかつているにや?」

ロビーは静かに、ラフェルドロードの言葉にこたえました。

「ラグリーンをだいひようして、ロビーベルクよ。きみに、敬意によ心をあらわす。わたしはきみを、ほごりに思う。ラグリーンは、持て

るかぎりによ力をもつて、そこにやたたちに協力するだろう。「ラフェルドロードが静かにいいました。

「あなた方の旅に、心からの敬意をひようします。われらラットニアも、すべての力をもつて、アー克蘭ドのためにつくしましょう。」三人のラットニアたちも、ラフェルドロードにつづいて、ロビーたちにあつい敬礼をおくりました(かれらラットニアたちは、こののち、南からのやばんな勢力が黒の軍勢に加勢するのを防ぐために、その南の守りのかなめとして、かつやくすることになるのです。そのかつやくの場面は、ざんねんながらこの物語の中では語られません、かれらのはたらきは、ほんとうに大きなものでした)。

「まずは、リズ・クリスメイディンだったにや。」ラフェルドロードがいいました。「かによ……、いや、かれは今、たきによみずうみにいる。朝によ日光よくに、出かけているところだ。使いによ者に、あんにやいをさせよう。」

「それにやら、ぼくがいくよー。」リュキアが、あいだにわつてはいました。「ぼくにやら、よく、みずうみまで、あそびにいくもんー。」リュキアがそういうと、急にラフェルドロードがリュキアのことを手まねきして、それからふたりで、なにやら話しはじめました。「あによことは、しゃべつてはにやらんぞ。」とか、「われらによ、おんじんによ意志だ。」とか。いったいさつきから、なんのことだといのでしよう? それに対してリュキアの方も、「ええー、にやんでー。」とはじめはしづっていました、やがて「わかった、へいきだつてばー。」としようちしたみたいでした。

「こによリュキア・リストネルが、そこにやたたちをあんにやいする。たきによみずうみは、こによ岩山によ、おくだ。」

ラフェルドロードがそういつて、うしろにそびえる岩山のことをゆびさしました。たきのみずうみというのは、その通り、たきのあるみずうみのことでした(すでになん回か名まえが出ていましたので、みなさんもちよつと、気になっていたことでしょうが)。なんでもみずうみのまん中にひとつの島があつて、その島にある山から、いつまでもかれることのないたきが流れ落ちていくということです。ここから

そう遠くないということでしたので、仲間たちはさっそく、ラグリーンの男の子リュキアのおんないで、リズのいるというそのみずうみへとむかうことにしました。

「あ、そによ前にー」急にリュキアがいました。「里長さん、ごほうびに、今、魚によフライちよーだい！」

やれやれ……。ラフェルドロードはあきれたように、おくのだいどころからあげたての魚のフライを三びき持ってきて（自分の口にも、一びきくわえてきたようですが……）、リュキアにあげました。

「さいごによ旅によ、道によりによことについては、おによすとあきらかとにやろう。」さいごにラフェルドロードが、旅立ってゆくロビーたちにいいました。「すべては、精霊王さまがみちびいてくださるはずだ。心配せずに、イーフリープへとむかわれるがよい。」（ノランもいっております通り、怒りの山脈へとむかうさいこの道のりのことについては、旅の者たちにとっては、すべて精霊王のみちびきにたくされていたわけでした。マリエルでさえも、ノランからその道のりのことについては、きかされてはいなかったのです。精霊王のもとへゆけば、それはおのずと、あきらかになるだろうと。）

その言葉に、ロビーは深くかんしゃして、ただ心のこもったみじかい言葉を、おくつてかえすばかりだったのです。

「ありがとうございます。ほんとうに、ありがとうございます。」

みずうみまでは、たいしたきよりではありませんでした。岩山のあいだにつづくほそい道を、いちれつになって進んでいくと……。目の前に、なんとも気持ちのよい、すんだ水をたたえた大きなみずうみがあらわれたのです。

「ここだよー」リュキアが、うれしそうにいました。

そこはまさに、らくえんとよぶのにふさわしいところでした。アツプルキントはねこの種族のラグリーンたちにとって、まさにらくえんでしたが、ここはラグリーンたちでなくたって、だれもが、らくえんだとみとめるはずです。みずうみから渡る、ここちのよい風。ささ

あー、とたなびく、美しく静かな水の音。そしてみずうみのほとりにさきみだれる、たくさんの花々。鳥の声……。ほんとうに、こんな場所がそうとしたって、なかなか見つかるというものではありません。まさに、しぜんの宝物。この場所はそんな言葉がぴったりとあう、しぜんからのすばらしいおくり物でした。

ロビーとライアンはもちろんでしたが、マリエルも、この場所にきたことはありませんでした。マリエルがアップルキントにきたのは、じつは二回だけでしたので、このみずうみにくるきかいがまだなかったのです。

そんなマリエルが、あたりをきよろきよろと見渡して、リズのことをさがしていると……。

「あつ、あそこー。およいでたみたいだねえ。今、みずうみから、上がってきたよ。」リュキアがみずうみの右の方をゆびさしながら、いいました（こんなきせつにおよいでのの！ とびつくりされるかもしれませんが、このみずうみの水は、じつはとってもあたたかいのです。さらにそもそも、この場所自体があたたかいのです。このみずうみのまわりは、精霊の力がとても強いのです。風の精霊はこのあたりの空気を、植物や動物にやさしいあたたかなものにたもってくれておりましたし、水の精霊は同じく、このみずうみの水を、魚や水の生きものたちにやさしいあたたかなものに変えてくれました。ですから、ふつうならまったくもって寒中水えい！ というようなこのきせつでも、ここちよくおよぐことができました。そしてリズもまた、精霊の種族。リズはもともと、およぐのが好きだったので、精霊の力のあふれるこのみずうみでおよぐのは、とっても気分がいいのです）。

ですがそれがこのあと、みんなにとってなんとも思いもかけないじたいをまねくことになるうとは、このときだれもが、よそうすらししていなかったのです。

「あれえー？ ああーっ！ まいったにやあー。」

リュキアがとつぜんそういって、両手で目をおおいました。どうやら、みずうみから上がってきたリズのことを見たから、そういって目

をおおったようです。いったいどうしたの？ みんながそのリズの方を見てみると……。

「あぁーっ！」

ロビーもライアンも、びつくりしてさげんできませんでした。ですが、だれよりもびつくりしてしまったのは、リズのことをよく知っている、マリエルだったのです。

「え……？ ええええーっ！」

なんともマリエルらしからぬ、びつくりぎょうてんの声！ それもそのはずでした。マリエルが見たもの、それは今までマリエルがいた、リズに対する見かたを、まったくもってくつがえすものでしたから。

みずうみから上がったきた、青いかみの若者。すらりと美しいそのからだには、まったくなんにも身につけられていませんでした。つまり、まっぴだかだったのです。でもそれだけでは、みんながこんなにおどろくことはありません。水着に着がえるのがめんどろ、はだかでおよぐ。いかげんなリズならやりかねません。みんながおどろいたのは、そんなことではありませんでした。

「あぁーっ！ マ、マリエルじゃんか！ なんでここに！」

リズがマリエルのさけび声に気がついて、こちらをむきました。あわてて、地面からひろい上げたタオルで、からだをかくします。ですがもう、おそいのでした。マリエルもロビーもライアンも、みんなが、リズのかくされたひみつに気がついてしまいましたから。

リズ・クリスメイティン。シルフィア種族の青年で、エリル・シャインディーンのもと剣じゆつしなんやく。精霊王のトンネルをあけることのできる、ゆいいつの男……。ですがノランのその説明は、まちがっていました。ゆいいつの男……。ちがったのです！ なんとなんと、リズは男ではありませんでした。女だったのです！（つまり男の人と女の人のひとめでわかるちがいを、みんなは見えてしまいました。胸……。もありましたが、それよりもっと、はつきりとわかる方を……。あんまりはつきりいうとまずいので、このへんにおきましよう。いわなくても、おわかりですよ？）

「なんで、じゃないよ！ ぼくの手紙も読みもしないで！ それに、これってどういうこと！ お、女だったの？ ぼくを、だましてたのか！」

マリエルが、怒りとおどろきと、もうなんともいえないふくぎつな気持ちをも、全部まとめてリズにぶつけました。その気持ちもわかりますよね。ずっと男だと思っていた友だちが、じつは女だったなんて、こんなにおどろくこともありませんもの。そしてさきほどからラフェルドロード里長やラットニアの大使たちがひそひそと話していたことも、これでわかったのです。リズは自分が女であるということ、ラグリンたちには伝えていました。ですがノランやマリエルや、お城の人たちには、まだ話していません。女だということとがばれると、いろいろとめんどうなことが起きそうだと、というのがそのりゆうでした（すでに自分がシルフィアだともらしてしまったことで、けっこうめんどうなことになっちゃってましたからね。それに男だと思われていた方が気らくだから、だまっておこう、というりゆうも大きかったのです）。

ですからリズは、マリエルといっしょにアップルキントにきたとき、ラグリンたちには「マリエルには自分が女だということをないしょにしてくれ」とお願いしていました（そのお願いは、ラグリンたちからラットニアたちにも伝えられました）。そしてリズは、シルフィア種族の者。シルフィアに大きなおんがあるラグリンたち（とラットニアたち）は、リズのそのお願いを、かたく守ってきたというわけなのです（ですけどリユキアはまだ小さくて、そのことにあまり頭がまわっていませんでした。ですからはじめ、やってきたマリエルのことを見て、思わず「おねえちゃんのお友だち」といつてしまったのです）。

そしてもうひとつ。リズというのは男の人の名まえで、じつはこれは、リズが自分で考えてつけた名まえでした。リズのほんとうの名まえは、リスレファンナといました。リスレファンナは、女の人の名まえ。ですからリズは、男の名まえであるリズという名まえを、ふだんは名のついていたというわけなのです（でもリユキアはリスレファン

ナという名まえの方しか知りませんでしたから、「リスレフアンニヤおねえちゃん」とよんでいたというわけでした。以上、説明終わり！）。

さて、なぞがとけたところで、リズのいいわけをどうぞ。

「い、いやさ、いつかは、いおうと思ってたんだよ。ついつい、それがのびちやって、いづらくなっちゃってさ。ほんと、だますつもりはなかったんだよ、うん。」

ですがマリエルは、ぜんぜんなつくしませぬ。

「そんないいわけが、通ると思ってんの！ ぼくだけじゃなく、おししようさままでだまして！ いいかげんにも、ほどつてもものがあるんだから！」

「いや、べつに、ノランのじいさんにまでいわなくてもいいじゃん。それにほら、べつに、女か？ なんてきかれなかったし、問題ないだろう？」

リズのあきれたいいわけに、マリエルはもうかんかんです！

「問題あるよ！ それに、おししようさまにむかって、じいさんとはなんだ！ もう、怒ったぞー！」

マリエルの持っているつえのさきから、ばちばち！ ときいろいろ火花が！（ライアンもいぜん、同じ目にあいましたよね。）さあたいへん！ いったいリズは、どうなっちゃうんでしょうか？

「ちよ、ちよつと待ってー！ マリエルくんー！」

やつぱりここで、ロビーのとうじょうですね。こまったときの、ロビーのみ！

「べ、べつに、今のぼくたちにとっては、リズさんが、男か女か？ なんてことは、そんなに重要なことじゃないんだし……、リズさんも、悪気があったのことでじゃなかったみたいなんだから、もう、ゆるしてあげて。」ロビーがリズとマリエルのあいだにはいつて、マリエルのことをせつとくしました。

「そ、それに……」ロビーはそこまでいつて、急に顔をまっ赤にそめ

てしまいます。

「あ、あの、はじめまして、リズさん。ぼくは、ロビーです。それで、あの、できれば……、服を着てほしいんですけど……」

そうでした！ さつきからずっと、リズははだかんぼうのままなのです！ しかもいいわけをしているあいだに、タオルがめくられて、ちらちら……。ロビーはすっかり、はずかしくなってしまうたというわけでした。

これにはマリエルも「むむむ……！」とうなつて、ロビーの言葉にしたがうしかありません。よかった、とりあえずロビーのおかげで、この場はなんとかおちつきそうですね。ふう、やれやれ。

さて、リズもすっかり服を着て、これでいつけんらくちやく！ とはまだいきそうにありませんが、とにかくひとだんらくです（ところで、リズが着がえているあいだ、みんなはもちろんうしろをむいていました）。

服を着たリズは、ほんとうに男の人みたいでした。その美しい青いかみは、男の人みたいにみじかく切ってありましたし、服もズボンもブーツも、みんな男の人のものだったのです（これではみんな、リズのことを男だと思つてうたがわないのも、むりはありません。でも顔だけを見れば、とつても美しい顔立ちをしておりますし、女の人だといわれれば、みんなそうだと思うことでしょう）。

でもあらためていわれなければわからないというのも、またじじつでした。リズの顔は、男とも女ともどちらともつかない、そのあいだのような顔立ちをしていたのです。美人であることに、まちがいはありませんでしたが（。ですがひとつだけ、男の人の衣服ではつごうの悪いものがありました。それが、下着だったのです。いくら男のかけこうをしているリズでも、下着ばかりは女の人のものを身につけざるを得ませんでした。そう、リズの家にあった、ロビーの見つけたあの下着。そのしよたいは、じつはそういうことだったのです（ロビーもわたしも、思わずとんでもないまちがったそうぞうをしてしまいました。……、じじつがわかって、よかったよかった！）。

「だいたい、なんでそんなかつこうしてるんだよ。ほんとうは、女のくせして！」マリエルがまだ、ふに落ちないといった顔をして、むくれていました。「女だったら女らしく、ちゃんとしたかつこうができないの！」

みなさんもごぞんじの通り、マリエルは自分が女の子だとまちがわれるのが、いちばんきらいです。ですからマリエルは、「女は女らしく」「男は男らしく」という、強いポリシーを持っていました（そのわりには、自分も女の子みたいにかわいい服を着ているような気が……）。

「これは、おれのスタイルなの！ だって、ひらひらのドレスなんか着てたら、動きづらいじゃんか。こつちの方が、らくでいいだろ。」リズが、はんろんします。リズにはリズの、ポリシーがあるようですね。「その、おれっていうのも、やめるべきだよ。その言葉使いに、そんなかつこうじゃ、だれだつてだまされちゃうじゃんか。む、胸だつて、ぺったんこなんだから。」マリエルがさらにいいかえました。なるほど、まことに失礼ながら、マリエルのいう通り。リズの胸は、あんまりないというか……、その……、たしかに、ぺったんこだったのです（ご、ごめんなさい！）。

「ぺったんこつていうな！ これでも、すこしは、あるんだから！ 見ろ！」そういつてリズは、服をべろつ！ とめくつて、胸を見せようとしてましたが……。

「わわわーっ！ ちょっと！ 見せなくていいよ！」マリエルもロビーもライアンも、顔をまっ赤にそめて、大あわてでとめました（ふう、よかつた。まったく、なんておそろしい）。

さあ、「リズは女の子」問題については、そろそろけつちやくをつけてもらつて……、ほんらいの旅のもくてき、精霊王のトンネルをあけるといふ、その問題の方に取つかつてもらわなくてはいけませんね（あいかわらず、話がすんなりと進まないことが多いです）。

みんなはここで、おたがいのことや旅のもくてきのことなどをぜんぜんリズに伝えていないということに、ようやく気がつきました。

だってはじめから、とんでもないことばかりつづいてしまいましたもの、頭の中がパニックになってしまったとしても、むりはありません（はじめの出会いがまるはだから、しかも男かと思ったら女で……、なんて、もうめっちゃくちやでしたから）。とにかくみんなは、こうしてここに、（さんざんくろうしつつも）めざすリズ・クリスメイデインという人物のもとにたどりつき、そしてその重大な旅の内ようのことを、リズに伝えることができたのです（ちなみに、リズの名まえはほんとうはリスレファンナ・クリスメイデインなわけですが、ほんにんもリズとよんでもらいたがっておりましたので、これからも今まで通り、リズとよぶことにします。読者のみなさんも、その方がまぎらわしくなくていいですものね）。

「なるほどね。」

旅のことについての話をきかされたリズが、うでをくみながらこたえました。

「よくわかったよ。じゃあおれは、あの精霊王のトンネルを、あければいいってことだろ。かんたんじゃんか。」じつにリズらしい、あつけらかなとしたこたえです。

「かんたんなことじゃないよー」マリエルが怒っていいました。「ぼくたちには、もう、ぜんぜん時間がないんだから！ さいごの戦いは、もう、すぐそこなんだぞ！ 今日、はじまるかもしれないんだ！」

これには、今までのんきにしていたリズも、さすがにたいどをあらためます。

「だいたい、ぼくの手紙を読まないで、ほつたらかしておくのが悪いんだよ！ はじめから家にいてくれれば、こんなに遠まわりしないでますんだんだから。」マリエルがつづけました。マリエルのいう通り、リズがきちんとマリエルの手紙を読んでさえいれば、今ごろは、いたってじゅんちように、精霊王のトンネルにむかってその歩を進めていられたはずなのです。

「あ、あとで読もうと思ってたんだよ。忘れちゃってさ。で、でもさ、いくら、黒の軍勢っていったって、ベーカーランドには、ふたつのとりでがあるじゃないか。そんなにかんたんに、せめこんでこられ

ないよ。」リズがいいました。ですがこのリズの言葉が、ますますマリエルのことを怒らせてしまったのです。

「ふたつのとりでだって！ そんなことまで知らないのか！ リュインのとりでは、もう、黒の軍勢の手に落ちてしまったんだぞ！ エリル・シャンデーインの守りは、今や、ベゼロインのとりで、ひとつだけなんだから！」

そう、リズはまだ、リュインのとりでが落ちたということを知りませんでした。そのことはもうとくに、エリル・シャンデーインからのでいきびんで、リズにはしらされているはずでしたのに。

つまりリズのいいかげんさが、ここでも出てしまったというわけなのです。リズはエリル・シャンデーインからのその手紙を、まだ読んでいませんでした！ あとで読もうと思つて部屋のすみに放つておいたのを、すっかり忘れて、いまだにそのままというわけだったので（ロビーたちがリズの家でさがしものをしているときにも、この手紙は発見されませんでした。なにしろ、たくさんの本や物の下に、すっかりうもれてしまつていましたから）。

そして、読者のみなさんはもう知つていることですが、残るひとつのベゼロインのとりで。そのとりでも今やもう、黒の軍勢の手に落ちてしまつていました……。とりでが落ちたのは、今日の夜明け前。旅の中にあるマリエルたちがまだそのことを知らなかったのは、とうぜんのことだったのです（魔法のわざをくしすればマリエルたちにそのことを伝えることもできるでしょうが、マリエルもこの旅は、そうおうのかくごを持つてのぞんでいる旅でしたから、そんなにひんぱんにお城とれんらくを取りあうなどということは、考えにいれてはいなかったのです。このさいこのときにあつては、たとえどんなことが起ころうとも、自分は自分の力のおよぶかぎり、さいぜんをつくすだけでしたから）。

ちなみに、マリエルの使つていたちようちよおたよりのじゆつですが、この魔法はあらかじめさだめておいた、動かないとくつていの地点にしか、手紙をとどけることができませんでした（リズの家の場合、ポストの中が、その地点にされていました）。しかもそのきよりも、エ

リル・シャンディーンからリズの家までなどの、ひかく的近くのちい
きまでだけにかぎられていたのです。ですからこのアークランド世
界では、くにとくになどの遠くはなれたところとれんらくを取るため
には、みなさんもごぞんじの、でんれいの鳥が使われることがいっば
んの的でした。

もつとも、アーザスが使っていてノランも使うことのできた、あの
動物のからだを通して話しをするというわぎなら、遠くの場所ともれ
んらくを取りあうことがかろうでしたが、これはほんとうに、この
アークランドではアーザスのほかには大けんじやノランくらいにし
か使うことのできない、むずかしい魔法でした。それにノランも、つ
ねにどこかの地をいそがしく動きまわっておりましたから、この魔法
を使つてアルマーク王やマリエルをふくめ、ほかの者たちとれんらく
を取りあうなどということも、していなかったのです。ノランはほん
とうに、もつとも必要なときにもつとも必要なことだけをおこなうと
いう、とてもとくべつな人物でした。

マリエルの言葉をきいて、リズの顔つきが急に変わりました。いま
でに見たことのないような、おどろきと怒りと不安がிரりみだれてい
るかのような、そんな表じようになつたのです。リュインとりでが落
ちた。それをきけば、だれだつておどろくはずです。ですがリズの表
じようは、とてもそれだけではないあらわせないような、ふくぎつな
ものでした。なにがリズの中に、起こつたというのでしょうか？

「リュインが、落ちただつて……！」リズがゆびさきをふるわせなが
ら、いいました。

「まさか、そんな。うそだろ？」

リズはそういつてマリエルのことを見ましたが、マリエルはきびし
い顔をして、だまつて首を横にふるばかりでした。リズはロビーとラ
イアンの方も見ましたが、かれらもまた、ざんねんそうな顔をして、そ
れにこたえるばかりだつたのです。

「そんな……。それじゃ、リストールは？　リストールはどうなつ
た？　ぶじなのか？」

リストール、それはノランが口にしていた、リュインのしきかんの

ことでした。リストール・グラント。ノランの言葉によれば、かれのそんざいはこのさいごの戦いにおいて、とても大きな意味を持つことになるだろうとのことでした。そのリストール・グラントの名まえが、今ここで、リズの口から飛び出したのです。リズとリストール。なにかとくべつなものでもあるのでしょうか？

「わからない。リュインの兵士たちも、みんなだ。」マリエルが、しんこくな顔をしてこたえます。

「助け出そうにも、かんたんなことじゃない。敵の手に落ちたリュインの地から、ほりよたちを助け出すことは、とてもむずかしいことだからな。ノランおししようさまも、そのことをあんじていたよ。」(マリエルの言葉の通り、敵の目に見張られたリュインの地からほりよたちのことを助け出すということは、かんたんなことではありませんでした。まずは、いくさでのルールです。いくさにやぶれて自国のとりでをうばわれたくには、そこから十四日以内のあいだは、ふたびそのとりでを取りもどすためのいくさを相手国にしかけることはできない、というルールがきめられていました(このルールは、とりでを勝ち取ったくには、そのとりでをさいていげんりようすることのできるけんりを与えるためのものでした)。このルールがあつたため、リュインが落とされたとき、すぐさま兵をあげてとりでを取りもどしにむかうというようなことも、ベーカーランドにはできなかったのです(ちなみに、とりでをうばわれてから十四日以内でも、そのきかんの内にはほかの場所での相手国とのいくさに勝つことができれば、もういちどそのとりでを取りもどすためのいくさを相手国にしかけることができるといふルールもありました。ですがワットとのつづきいくさは、もはやゼロインでの戦いのみでしたから、やはりベーカーランドの者たちには、すぐさまリュインを取りもどしにむかうようなことは、できなかつたのです)。

すくない人数で敵の目をくぐりぬけて、リュインとりでにひそかにふみこんでいくなどということも、とてもむりでした。シープロンのわざをくしすれば、敵に見つからないように、リュインの地を通りぬけるくらいのことではできるかもしれませんが、こんどはそれとは、わ

けがちがうのです。敵のしゅうけつする、そのただ中に、ふみこんでいこうというのですから。

とらわれの者たちのことを助け出すことは、ベーカーランドの者たちにとつては、今はとてもむりなことでした。リュインからベゼロインの地へと、敵の軍勢がすっかり進軍してしまつたあとでなら、リュインとりでのけいびも多少うすくはなります。そのときに、敵の目のうすくなつたとりでのほんたいがわにまわることができれば、ほりよたちを助け出すこともできるかもしれません。ですがそれでも、それはとてもむずかしいことでした。けいびがうすくなるだろうとはいえ、やはり、多くの敵の目の光るそのただ中に、ふみこんでいこうというのですから（しかも敵の目は、とりでだけではなく、その地のすべてにいき渡つているのです）。そんな、大それたことのできる者たちが、いるでしょうか？）

マリエルの言葉に、リズはしばらくだまつたままでした。両のこぶしをぎゅつとにぎつたまま、身動きひとつしませんでした。

そしてようやく。リズはとつぜん、こんなことをいつたのです。

「リストール・グラント……、リステロント・グラント……、これは、おれの兄さんだ。」

ええっ！　なんと、またしてもいがないなじじつが出てきました！

リストール・グラントしきかんは、じつはリズのお兄さんで、ほんとうの名まえはリステロント・グラントというそうなのです。グラントは、リズのお父さんのみようじ。そしてリズの名のついているクリスメイティンというのは、お母さんのみようじでした。リズとリストールは、自分たちがきょうだいであるということまわりにかくしておくために、べつべつの名まえを名のつていたのです（ではなぜ、わざわざかくしておかなければならなかつたのか？　それはもちろん、ひとつのりゆうのためでした。かれらがシルフィアだからです。シルフィアだということが知れると、いろいろとめんどうなことになるといふことを、かれらの種族の者たちは、よく知っておりましたから。

でも兄のリステロントのその思いは、リズが口をすべらせたことに

よって、はかなくも消えてしまったというわけでした。それでもリズときようだいであるということがわかれば、リストールもまた、シルフィアだということが知られてしまいますから、ふたりがきようだいであるということは、みんなにはそのまま、ひみつのままにしておいたというわけなのです。

失われし精霊の種族、シルフィア。ふだんはシルフィアであるということも、きようだいであるということもかくしながら、暮らしつつ生きてきた、リズとリストール。その兄のリストールの身が、敵の手に落ち、ぶじであるのかどうかすらわかりませんでした……。リズにとって、こんなにもつらいことはないでしょう（同じく、おとうとのレイミールが敵の手に渡ってしまったハミール・ナシユガーも、どんなにつらい思いでいるのでしょうか……。いくらリズがいいかげんなせいにかくだとはいっても、こんなじじつをきかされては、れいせいでいられるはずありませんでした。

「そ、そうだったのか……」マリエルが、うつむいていました。これではさすがにマリエルも、リズのことをこれ以上、悪くいうこともできません。ふたりはすっかり、気を落としてしまいました。

ですが……。

こんなときのために、この子がいるのです。いつだって、どんなときだって、明るく前むきに考える。その気持ちがいみんなのことを助け、大きな力と、勇気と、きぼうを与えてくれる。

それは、そう、われらのライアン・スタッカートくんでした。

「ノランさんが、いったたよね。リストールさんのことは、まかせておけて。」

ライアンが、ふいにそういいました。マリエルもリズも、「えっ?」
といて、ライアンの方を見ます。

「ノランさんって、たよりにならない人なの?」

ライアンがマリエルに、わざとそうしつもんしました。

「ばかなことをいわないでよ! おししようさまは、この世界でい

ちばんたよりになる、いだいなるけんじやなんだから！」

マリエルがむきになつてこたえます。でもそれは、ライアンの思うつぼでした。

「ねえ、リズさん。リストールさんって、たいしたことないしきかなの？」

ライアンの言葉に、こんどはリズの方が、むっとしてこたえました。「あいつは、ゆうしゆうだよ！ おれがいうのもなんだけど、どんなことだって、あいつなら乗り越えられるんだ。」

そして、ふたりのその思い通りのこたえに、ライアンは「ふふっ。」と笑つていったのです。

「なら、だいじょうぶじゃない？ 世界いちのけんじやが、力をつくしてくれてるんでしょ？ その前に、どんなことでも乗り越えられるゆうしゆうなしきかなら、自分でなんとかしちやうかもね。心配いらないんじゃないかな？」

リズもマリエルも、すっかりあきれてしまいました。ですけど今のふたりにとつて、こんなにも助けられる、気持ちのらくになれる言葉もなかったのです。リズの心に重くのしかかっていた、なまりのような思い。リズはその思いが、ライアンの言葉によって、どんどん晴れ渡つていくのを感じました。

同じく、考えに考えぬいて、いつでもさいこうのけつろんをもとめようとするマリエル。ですけどいくら考えたところで、どうにもならないことだって、世の中にはそんざいするのです。ときには、気らくすぎるように考えたつていいということもあります。それもまた、ものごとにはさいこうのけつろんを与えてくれる、ひとつのしゅだんとなり得るのですから。マリエルはライアンに、教えられてしまいました。

「ふふっ。おまえ、なかなかいうじゃんか。」リズが、ライアンの方にぐいっとにぎりこぶしをつき出して、いいました（これはリズが気に入った相手に対しておこなう、敬意のポーズでした）。

「ライスタには、かなわないや。」マリエルもリズにつづけて、あき

れ顔でそういいました（ですけど心の中では、マリエルはライアンに深くかんしゃしていたのです）。

「おーっしー！ ノランのじいさん、よろしくたのむぜ！ あにきの運命、じいさんにあずけたからな！」リズがそういって、こぶしを高くつき上げました（どこにいるのか？ わかりませんでした、これはノランに対しての敬意のポーズなのです）。

「じいさんっていうな！ まあ、でも、これで、ぼくたちの道はかたまったな。」マリエルがそういって、みんなのことを見渡しました。

そしてマリエル、リズ、ライアンの三人は、おたがいの顔を見あつて、それぞれにこぶしを空につき上げながら、声高くさげんだのです。

「今すぐ出発するぞ！ 精霊王のトンネルに！」

こうして、このノランべつどう隊に新しい仲間が加わりました。失われしシルフィア種族の青年、リズ・クリスメイティン。かれ……、じゃなかった、かのじよは、いったいどんな力をひめているのでしょうか？（精霊王のトンネルをあげられる、というのは、もうわかっています）

さすが、ライアンだな。

そんなかれらのやりとりのことを見て。ひとりロビーは、心の中でそう思いました。

でも……、ぼくは、さいごまでライアンといっしょにいくわけには、いかないんだ……。

マリエルと肩をくんでにこにこ笑っているライアンのことを見ながら、ロビーはふくざつな思いになりました。きたるべく、さいごの戦い……。それは自分ひとりでいどまなければならぬのだということに、ロビーはもう、気がついていたので。お父さんを助けること。そして、アーザスとのたいけつ……。それらはただ、ロビーひとりだけにゆるされた、さいごの運命の道でしたから。

物語は、これからいよいよ、そのさいごのクライマックスの中へと
流れこんでいくのです。

22、それぞれのむかうさき

ここはこのアークランドのどこかの、とある岩だらけの、ものさびしい荒れ野の中。今その荒れ野の中を、たくさんの方たちが、まっすぐになれつをなしてぞろぞろと進んでいるところでした。その数は、すくなくとも二百人以上。じこくはもうすぐ、ま夜中にさしかかろうかというころでしょうか？ こんな時間に、こんなところをこんな大人数で進んでいるなんて、まったくもつてふつうじゃありません。かれらはいったい、なに者なのでしょう？

れつのまわりには、黒いたいまつを持った者たちがいて、進む者たちのことを見張っていました。たいまつを持ったその者たちは、兵士たちでした。みな黒いよろいかぶとに身をつつんでいて、腰にはきみの悪い黒いさやにおさまった剣が、さしてあります。長いやりを持つた者もいました。このやりもまた、黒いすみでまっ黒にぬられた、うすきみの悪いやりでした。

この兵士たちが、どこの兵士たちなのか？ 読者のみなさんになら、これ以上説明しなくてもおわかりだと思います。れつの先頭には、同じく黒いよろいを着た兵士たちが、そのさきに黒いはたぬのをつけた長いぼうを、かかけていました。そのはたぬのにそめられたしるしは、まさしくワットののはたじるし。いうまでもなく、この兵士たちは、ワットの者たちだったのです。

ですが、待つてください。れつのまわりで、たいまつや、やりや、はたぬのを持つている者たちは、たしかにワットの者たちでした。しかしこの場所には今、そんなワットの兵士たちなんかよりも、はるかにたくさんの方、べつの方たちがいたのです。その者たちは、ざっと見てもつても、二百人ほど。つまりこの場にいる者たちの大半の部分でした。

そのかれらがいたのは、このれつのまん中の部分でした（つまり、このれつの大半の部分ということでした）。そしてよくよく見てみれば……、なんてこと！ その人たちは、みなそれぞれの手足に「かせ」をつけられ、ロープでつながれた、とらわれの人たちだったのです！

つまり、かれらのまわりをいつしよになつて歩いているワットの兵士たちは、かれらとらわれの者たちの、見張り番だったというわけでした。ワットの兵士たちは、これからこのとらわれの者たちのことを、どこか東の地へとつれていこうとしていたのです。では、このとらわれの者たちとは、いったいどういう人たちなのでしょうか？

全部で二百人ほどにもおよぶ、とらわれの者たち。たいへんな人数です。かれらはみな、おそろいのわたのはいたりつばな衣服を着ていて、みんな、おそろいの白いマントをはおっていました（これは寒さをしのぐためのとくべつなマントで、あたたかい動物の毛が使われていました）。そしてそのマントにぬいつけられた、ひとつのもんしよう。それが、この人たちがなに者なのか？ という、そのなぞのこたえを、はつきりとゆうべんに物語っていたのです。

そのもんしようは、ベーカーランドのもんしよう。そう、この大勢のとらわれの者たちは、ベーカーランドの人たちでした！ つまりこの者たちは、ワットにうばわれたリュインとりでのことを守っていた、その兵士たちだったのです！（第十八章のさいご）。レシリアたち、とらわれの仲間たちと同じこめられていたリュインとりでのろうやの前で、しきかんのガランドーがいつていた言葉をおぼえていますでしょうか？ 部下の兵士たちから、黒の軍勢の本軍がとうちやくしたとの、しらせを受けたときのことです。リュインのほりよたちを、東のちゅうとん地へはこべ。そう、ここにいるワットの兵士たちは、そのガランドーのめいれいを受けて、今リュインの二百名のほりよたちのことを、東のワットのちゅうとん地まで送りとどけているところでした！（このちゅうとん地というのは、軍隊がしばらくのあいだ、かりとどまっている場所のことをいいます。とらわれの兵士たちは、とりあえずそこにはこばれて、それからあらためて、ワットのくにまで送られるというわけでした。

ちなみに、かれらがむかっていた東のちゅうとん地というのは、レクタイルという名まえでよばれていて、ひとつの小さなまちのようになつていたので。食べもの屋さんや、おしばい小屋や、しやてき場までありました。なんだか、楽しそうな気もしないでもないですけ

ど。)

この者たちが、リュインとりでの兵士たち。ということとは……？

リズの知られざるじつのお兄さん、リュインとりでのしきかんのリストール・グラント。そして白の騎兵師団のウルファの騎士、ハミール・ナシユガーのおとうと、小さなレイミールも、このれつの中にあるのでしょうか！

どこだ？ どこだ？ れつを、はしからじゅんに見渡してみると……。

いました！ レイミールです！

ああ、かわいそうなレイミール！ かれはれつのうしろの方で、となりの兵士とロープでつながれたじょうたいで、足をひきひき、うなだれて歩いていました。だいぶつかれているようすでしたが、どうやら、けがはしていないようです。

よかった！ とりあえず、レイミールはぶじでした！ このことをいっこくも早く、兄のハミールに伝えてあげたいものです！

でも、そのハミールもまた、リュインとりでにとらわれの身……。きょうだいそろってとらわれの身だなんて、なんてひどい話なのでしよう！

でも今は、仲間たちにかれらをすくうしゅだんはないのです……。かれらのために、自分たちの今、できることをやるしかありませんでした。かなしいことですが、今はさきに、進まなくては。

さて、レイミールはからだ小さかったので、大きな人たちばっかりの中から、わりあいかんたんに見つけることができました。ですが、リストールは？ リストールはどこにいるのでしょうか？

リズのお兄さん、リストール（ほんとうの名まえはリストレントですが）。かれはリュインのしきかんでしたから、この中にいるとしたら、れつのいちばん前か、いちばんうしろにいるのだと思います。ですがリストールのことをさがすのに、もつと手っ取り早い方法があり

ました。それは、そのかみの色。リストールのかみは、きれいな青がみだつたのです。これはいもうとのリズと、おそろいでした。つまりこれは、シルフィア種族とくゆうのかみの色だったのです（この青いかみの色について、リストールはみんなには、「大むかしの風のたみの血がはいっているからだ」と説明していました（リズの場合は説明なんてせずに、「なんで青いのか？ よくわからん。」といていただけでしたが……）。ほんらいふつうの人間の者であれば、このおとぎのくにアークランドにも、青いかみの者はほとんどいなかったのです。まれに精霊の力を強く受けいれるからだのために、青いかみを持つ者もいることはいるそうですが、それはほんとうに、とくべつな者。しかも、こんなにあざやかな青がみになるということは、まずありません。リストールは自分がシルフィアであるということをかしくし通しておくために、風のみなんていう、でたらめの種族を作り上げて説明していました（ひよつとしたら、ほんとうにそんな種族の者たちがいるのかもしれませんが。このアークランド世界は、まだまだなぞだらけなのですから）。

ですからわたしは、その青いかみのことを目じるしに、リストールのことをさがすことができました。しかしいくらさがしても、そんな青いかみの者は見あたりません。リストールだけ、どこかほかの場所へつれていかれたのでしょうか？ しきかんですから、それも考えられます（それともまさか、かみの毛に絵の具をぬって、ほかの色にそめてしまったというわけではありませんよね？）。

いない、いない！ あきらめかけていた、そのとき……。

おや？ れつのいちばん前。ワットの兵士たちにまぎれて、ひとりだけ、マントのフードをかぶっている人物がいます。まさか！

やっぱり！ フードの影から、ちらちらのぞく、青いかみ！ いました！ リストールです！

しきかんであるリストールは、れつのいちばん前で、ワットの兵士たちといっしょにされて歩かされていました。これではいくられつの中をさがしても、見つからないはずです。見張りのワットの兵士たちの中にいましたから。しかもその青いかみを、フードでかくしてし

まっていますましたもの、わからないはずでした（もう！　ちゃんとかみを出しててよ！）。

とにかくこれで、リストールもレイミールも、このれつの中にいるということがわかりました。ですが、だからといって、とてもよろこんでなどいられるものではありません。ほかの大勢の仲間たちのこともふくめて、けがなどはしていないようでしたが、みんなほんとうに、つかれきっているようでした。かれらには、あたたかい食事と寝床が必要です。早く、助け出してあげたい！　ですがわたしには、どうすることもできません……。

去ってゆく、とらわれの者たち……。それを今は、ただ見守ることしかできませんでした。ああ、自分のむりよくさが、はら立たしいくらいです！

と、まさにそのときのこと……！

わたしのこの思いが、こんなにも早く、天にとどくことになろうとは！

かれらが暗くさみしい森の中にさしかかって、しばらくたったころのことでした。とつぜん、だれもがよそうすらしなかった、おどろきのできごとが起こったのです！

「うわわーっ！　な、なんだー！」

ワットの兵士たちの、さげび声！　その声に、今まで下をむいてとぼとぼと歩いているだけだったわれらがとらわれの仲間たちも、びつくりして、あたりを見まわしました。すると！

まわりのうっそうとした森の木々のあいだから、ご、ごいーん！　ぎゅ、ぎゅいーん！　こ、このききおぼえのあるおかしな音は！　そう、いぜんリユインとりでのそばにいた、あのなぞの老人のうしろから、きこえた音ではありませんか！　そしてその音のしようたいと、ワットの兵士たちの上げたさげび声の意味は、すぐにあきらかとなつ

たのです。

木々のあいだから、なん体もの、岩でできた巨大な人がたの兵士たちがあらわれました！ きこえていたおかしな音は、この岩の兵士たちが動くときに、手足のかんせつから出ていた音だったのです！

もうワットの兵士たちは、びつくりぎょうてんなんてものじゃありません。なにしろ、相手が悪すぎでした！ 目の前にあらわれたのは、身長が三十フィートはあろうかという、とんでもないほどの大きさの、岩の兵士たちでしたから！ からだは、ぶあつい岩のよろいで守られていて、頭にも、がんじょうそうな岩のかぶとをかぶつています（といっても、この兵士たちはもともとみんな、岩でできておりましたので、よろいやかぶとはただのかざりでしたが。そんなものがなくたって、じゅうぶんかたいのです）。そして、「この相手にはかなわない」とかんねんさせる、けつてい的なものが、その岩の兵士たちの手にはにぎられていました。

岩の兵士たちの手には、これまた岩でつくられた、巨大ないっぽんの剣がにぎりしめられていたのです！ こんな剣でおそわれたなら、ひとたまりもありません。そしてそんな岩の兵士たちが、すくなく見ても十五体ほども！ いっせいに森の中から、目の前にあらわれてきました！

もう、けつかは火を見るよりあきらかでした。なにしろワットの兵士たちは、ほりよを送りとどけるといふことをその大きなにんむとしておりましたので、大がかりな戦いをおこなうことなんて、はじめから考えにいれていなかったのです。やみにまぎれて、すくない人数でほりよたちのことを取りかえしにくるかもしれない者たちのことは、もちろんけいかいしてはいましたが、こんなに巨大な岩の兵士たちがぞろぞろとうじょうしてくるなんて、まったくもって、そうていがいでしたもの！

ですからかれらの人数は、必要以上に多くはありませんでした。ぐたい的には三十二名で、このにんむについていたのです（これはほりよたちを取りもどしにひそかな人数の者たちがやってきたとしても、それに対応できる、さいていげんの人数でした）。この人数の人間

の兵士たちが、身長三十フィートはあろうかという巨大な岩の兵士たち十五体ほどと、まともに戦えなんていうことが、そもそもむりなことでした。

ワットの兵士たちは、ぎゅ、ぎゅいーん！「うわわわー！」つぎつぎに、岩の兵士たちのそのゆびさきに、ちよこんとつまみ上げられていきます！さらに、「ひええー」と逃げようとする者たちにむかつて、ばしゅっ！岩の兵士たちのその手のさきから、岩のついた大きなあみが飛び出して、兵士たちはみな、そのあみからめとられて身動きが取れなくなっていました。

気がついてみればものの数十びようほどで、すべてが終わりよう！三十二名もいたワットの兵士たちは、ぜんいんあみでひとつにまとめ上げられて、ごちやませのじようたいのまま、あつというまに山とつまれてしまったのです！（それにしても、なんて手ぎわのいいこと！）

さてさて、これにはとらわれのわれらがリュインの兵士たちも、みなびつくりするやら顔を見あわせるやらで、大いそがしです（とうぜんの反応ですよ）。あまりにとつぜんのことで、なにが起こったのか？まだわかっていない者さえいました。

そんなかれらの前に、一体の岩の兵士が歩みよります。

そしてそのとき、またしても、みんなのどぎもをぬいたおどろきのできごとが！

その岩の兵士の頭が、とつぜん、ぱかっ！とひらきました！そしてそこから、ひよっこりとあらわれたのは……。

「がーはっはっはっは！ たわいもないわい！」

あの岩のようになんこそうな、なぞの老人ではありませんか！（岩の中から、岩のような老人！なんてびつたりはまってるんでしよう！）なんとこの岩の兵士たちは、人が中に乗りこんで、そうじゆうすることのできる、いわば巨大ロボットのような兵士たちだったので！なんてすてきな！わたしも乗ってみたい！あ、おほん、それはともかく……、どうやらこの老人は、わたしたちの仲間のようにでした。とらわれの者たちは、きよとーんとしながらも、とりあえずその

点では、ほっとしていたのです。

「おまえさん方、なんぎだったの。わしは、岩のけんじや、リブレストだ。ノランにいわれて、おまえさん方を助けにきたぞい。」

なんと！ 岩のけんじやですって！

そうです！ この岩のようになんこそうな、おひげもじやもじやの老人は、アークランドに住む三人の名高いけんじやたちのうちのひとり、岩のリブレストでした！（三けんじやのうちのひとりには、もうすでに会いましたよね。木のけんじや、カルモトです。さて、では、残るひとりは？ 前にもいいましたが、そのうちとうじようしますので、お楽しみに。

ちなみに、ノランはこれらの三けんじやたちとはまたべつの、世界さいこうのけんじやとよばれている人物でした。）

さあ、これはたいへんなことになってきました！ 岩のけんじや、じきじきのお越しなので。なにしろけんじやという者たちは、めったなことでは、人前にそのすがたをあらわさないのです（大けんじやノランも、やつぱりそんな感じでしたよね。すぐにどこかへいつちやうんですもの）。とくに岩のリブレストといったら、だれも知らない、どこか山おくのどうくつに住んでいて、そこからいっぽもそとに出てこないといわれているほどの、腰の重い人物でした。ですからなおさら、おどろきだったのです（それにしても、ノランもにくいことをしてくれるじゃありませんか！ ほんとうにこまったときには、やつぱりこうして、助けてくれるのです。さすがは大物ですね！）。

さて、そんな岩のけんじやのことを前にして、リュインの兵士たちは、かんしやするやら、おそれいるやら、このチャンスにサインをもらいたいけれど紙とペンがなくてくやしがるやら、いろんな反応に大いそがしでした。ですけどここは、すみやかにつぎの行動にうつらなければなりません。せっかく助かったんです。自分たちのできる、さいこうのしごとを、これからしてやろうじやありませんか！（ところで……、つかまえたワットの兵士たちは、このあとリブレストさんがみんな、自身の魔法で作出したひとつの岩のドームの中にとじこめ

てしまいました(このままワットの兵士たちのことを逃がしてしまえば、のちのちいろいろとめんどうなことになると思ったからでした)。この魔法のドームは岩や地面の上にかぎり、いちにちにひとつだけ作り出せるというもので、なん十人も者たちのことを、魔法のききめがつづく二十四時間のあいだだけ、その中にとじこめておくことができたのです(もつとも、三十二名もの者たちをその中にいれたら、けっこうぎゅうぎゅうでしたけど……)。

リブレストはとらわれの者たちが東のレクタイルにはこぼれるということをよそうしておりましたし、ワットの兵士たちから(きびしく)きき出してかくにんを取ることもできていました。そしてレクタイルまでは、歩いていけば、まるいちにちくらいかかる道のりだったのです。ですからリブレストは、そのことも考えにいれたうえで、この岩のドームにワットの者たちのことをとじこめて、その二十四時間のあいだ、ほかのワットの者たちに気づかれることなく行動できるようにしました。

もつとも、岩のドームにとじこめなくても、つかまえた者たちのことを木にぐるぐるにしばりつけでもしておけば、いちにち以上でも時間がかせげたかもしれませんが、いくらワットの者たちとはいえそこまですたらかわいそうだと、リブレストも思ったのです。それにそんなことをしなくても、二十四時間も時間がかせげればじゅうぶんだと、リブレストも思っていましたから(そしてここでひとつ、説明をつけ加えておきます。いぜんにもお伝えしましたように、このアークランドでは遠くはなれた場所とれんらくを取りあうためには、でんれいの鳥が使われることがいっぱいでしたが、それにはじょうけんもひとつありました。このでんれいの鳥は、あらかじめくんれんして教えこんだ場所にしか、飛ぶことができなかったのです(「とくていの人物のいる場所」というのもむりでした。あくまでも、ある一点の地点だけにしか送れなかったのです)。ですから、ゆうずうをきかせているんなところへ鳥を送りこむというようなことは、できませんでした。

そしてでんれいの鳥をくんれんするためには長い時間が必要にな

りましたので、ワットの者たちが、うばい取ったりリュインのとりでへと送ることのできる鳥を持つことができているというこども、リブレストはしようちしていたのです（あらかじめ、でんれいの鳥を敵のいる地のそのただ中に飛ぶようにくんれんしておくことなんて、いくらワットの者たちといえども、むりでしたから。そしてもちろん、これはベゼロインとりでも同じです）。ですからリブレストは、つかまえたこのワットの兵士たちがリュインの仲間たちのもとへとかけこまないかぎり、リュインのワットの者たちも、ほりよたちはまだ東のレクマイルにむかってじゅんちように進んでいると思うだろうというこどもをふまえたうえで、かれらを岩のドームにとじこめました）。

ちなみに、この岩のドームの中には水場やトイレなどもばっちり作りつけられていて、二十四時間ぶんのしよくりようや飲みものなども、ちゃんとじゅんびされていました。それに加えて、とじこめられた者たちが二十四時間のあいだにたいくつしないようにと、魔法のチェスばんやボードゲーム、カードゲームなども、たくさん用意されていたのです。まあ、心配りのいいこと！

「けんじや、リブレストどの。」

ひとしきりのおれいの言葉がすむと、兵士のうちのひとりが、リブレストに近づいてきていいました。頭にかぶったフードを取ると、美しい、さらりとしたきぬのような青いかみが、あらわになります。そう、それは青いかみを持つ、失われしシルフィア種族の者のひとり、リストール・グラントでした（ちなみに、みんなの手足につけられている「かせ」は、ワットの兵士たちの持つていたかぎによってすっかり取りのぞかれておりますので、ご安心を）。

「わたくしは、リュインのしきかん、リストール・グラントと申します。けんじやどのに助けていただけると、これほどこうえいなことはございません。心より、おれい申し上げます。」

リストールはそういって、リブレストに深々と頭を下げました。まわりの兵士たちも、みなリストールにならいます。

リストール・グラント。ねんれいは、二十二、三。リズより三つほども上でしょうか？ しきかんとしては、とても若いねんれいです

(でもライラの方が、もっと若いですけど。お伝えしておりますように、アーケランドではその人のうりよくを見るときに、ねんれいなど気にしないのです。マリエルがいい例ですよ)。すらりとした長身。手足はとてもほそいですが、きんにくががっしりとしまつていて、力強く見えます。マントの下には、青いラインのはいつたしんじゆ色のきぬの衣服を身につけていて、それが青いかみとよくはえて、全体にとてもしんぴ的なふんいきをかもし出していました。

そしてなにより。うくん、あきれられるくらいの美男子です！ だまつて立っていたのなら、女の人なら、みんなすいこまれていつてしまいうそうなくらいでした(男の人でも?)。まるで、どこかのくにの王子さま!(ライアンもシープロンドの王子さまとして、とても気品のある顔立ちをしていましたが、いかんせん、ライアンの場合は、そのおこないが上品とはいえない部分が多くて……)シルフィアという種族は、もともとみんな美人ぞろいでしたが、リストールはその中でも、ぐんをぬいていたのです(いもうとのリズも、やっぱり、だまつていれば美人なんです。でもいかんせん、リズの場合は、そのおこないが上品とはいえない部分が多くて……)。

「おお、おまえさんがリストールか。」リブレストがこたえました(もじやもじやおひげのリブレストと、すらりと美しいリストール。うくん、まるで正はんたいです……。リブレストさん、ごめんなさい!)。「おまえさんのことを、助け出してほしいと、わしはノランにいわれてな。シルフィアなんだってな? シルフィアがまだ残っていたとは、わしもおどろきじゃわい。」

これをきいて、その場にいるほかのリユインの兵士たちは、びつくりぎょうてんです。「シルフィアですって!」「リストールしきかんが!」「たしかに、このかみは青すぎる!」みんな口ぐちにさげびはじめました(みんなリストールがシルフィアだということは知りませんでしたから、それもとうぜんでした)。

リブレストさん、うっかり口どめされていたのを忘れて、しゃべつてしまいました。じつはノランはリブレストに、「リストールというシルフィア種族の者が、リユインの兵士たちとともに、とらわれの身

となつてしまつてなあ。みんなといつしよに、助け出してやつてくれんか。」とたのんでいたのです。そのあと、「そうそう、やつがシルフィアだということは、まだ、みんなには、だまつていてくれ。いずれ、ときがきてから、話したいでな。」といつてもいましたが、リブレストはそれを、すっかり忘れていたというわけでした（やつぱりリブレストさんも、けんじやなんですね。うつかりなところは、けんじやにきょうつうのようです。いちばんうつかりなのは、やつぱりカルモトでしようけど……）。

それはそうと。ノランはリストールがシルフィアなのだということに、もう気づいていたんですね。さすがはノランです）。

リブレストはみんなのさわぎを見て、ようやく口をすべらせてしまったということに気がつきました（もう手おくれですけど）。ですがリブレストは、「すぎたことはしかたない」というタイプでしたので、そんなことはまつたく気にもかけずに、「がっはっはー！」と大きな声で笑い飛ばすばかりだったのです（いや、すこしは気にしてほしいのですが……）。

「そーいや、いうなど、いわれとつたわ。まあ、こまかいことは、どうでもいいわい。」（いや、あんまりこまかくはないのですが……）

さあ、こまつたのはリストールです。みんなのさわぎを、おさめませんと。

「みんな、どうか、さわがないでほしい。」リストールはみんなのことを手でせいして、いいました。

「すまない。だますつもりは、なかつたのだ。シルフィアには、とかく、いわくがつきまとう。西の大陸には、この力を悪用しようとする者が、数多くいる。みんなのことは、しんらいしている。だが、うわさは、どこで伝わるものか？ よそくがつかない。みんなに、とんだめいわくがかかるかもしれない。そのためわたしは、シルフィアであるということ、を、だまつていた。ゆるしてくれ。」リストールはそういつて、みんなに深々と頭を下げました。

「ゆるすもなにもー」これに対して、兵士たちはみんなおたがいの顔を見あつて、それぞれの思いをたしかめあつたのです。

「シルフィアだろうがなんだろうが、リストールしきかんは、われらのリストールしきかんです！ われらいちどう、心より、しきかんのことを、したい、そんけいしております！ どうか、頭を上げてください！」

すばらしい仲間たちでした。しきかんと兵士たちの心が、みんなひとつに、まとまっていたのです。おたがいが、おたがいのことを、したい、そんけいしあっている。人と人のかんけいとは、こうありたいものです。

「ありがとう、みんな。」リストールは仲間たちに心からかんしゃして、もういちど頭を下げました。ふう、よかった。これで、シルフィアのけんは、いっけんらくちやくです（まったく、リブレストさんたら！）。

「リブレストどの。」リストールが、こんどはリブレストにむきなおつていいました（ここからは、だいぶまじめな、むずかしい話になります）。

「リュインにせめこんできたのは、たくさんのデイルバグに乗った黒騎士たちでした。かれらは空から、夜のやみにまぎれ、とつぜんにあらわれたのです。われらのていこうもむなしく、ふいをうたれたリュインのとりでは、なすすべもないままに、敵の手によってうばわれてしまいました……」

おそろしいたいけんが仲間たちの中によみがえり、仲間たちはみな、かなしみにうなだれました。

リストールがつづけます。

「リュインの者たちは、みな、ろうの中にとらわれの身となりました。そして、あるとき、じゃあくなる黒騎士たちが、わたしのもとへとやってきたのです。かれらは、北からやってくるある者たちのことを、とらえようとしていました。そのくわだてに、わたしの身をりようしたのです。それは、ひきような、とてもひきような悪だくみでした。」

おそろしい黒騎士たちの、よこしまなる悪だくみ……。それは、北

からやってくるふとどき者たち、つまりわれらが仲間たちのことを、リストールの身をおとりに使って、おびき出そうというものでした！

セイレン大橋の上で、デイルバグのていさつ隊の一隊をロビーたちにたおされてからというもの、ワットの黒騎士たちは、しつように、そのふとどき者たちのゆくえのことを追っていたのです（ふとどきなのは、どっちでしょうか！ ロビーたちにとつては、とんでもないことばっかりです）。

そして、「そのふとどき者たちのことを、ぜったいにとらえよ！」とめいれいしたのは、ほかでもありません。ワットの王、アルファズレドほんにんでした。アルファズレドは、ワットにたてつく者は、どんな相手だろうとゆるすわけにはいかなかったのです。それをまげれば、みずからのしんねんを、まげてしまうことになるからでした。

ふとどき者たちの中にシープロンの者がいるということがわかったことで、アルファズレドのけっしんは、ますます強いものとなりました。シープロンたちのくにシープロンドは、かつての仲間、メリアンのくに。アルファズレドは、自分のもとからはなれていったかつての仲間たちに、自分の考えの正しさをしめす必要があったのです。力こそ、せいぎ。力こそが、この世界にしんのまとまりをもたらし……。だからこそアルファズレドは、シープロンドをどうしても、せめ落とすつもりでした。

しかしシープロンドは、兵を持たない中立のくに。やたらにこうげきするわけにはいきません。そんなことをすれば、ワットはこのアーランドの世界の中で、くにとしてみとめられなくなってしまうから。

そんな中で、シープロンのふとどき者のそんざいは、ワットにとって、願ってもないざいりようとなりました。これでシープロンドに、ワットへのはんぎやくのつみを着せることができるのです。それがシープロンドをこうげきする、りゆうとなるのです。それこそが、アルファズレドのねらいでした。

同じく仲間だったムンドベルクのくに、レドンホールは、すでに落ちました。アルマークのベーカーランドも、これから落とそうとして

います。アルファズレドのやろうとしていることは、かつての仲間たちに対する、見せつけでした。自分の考えこそが、せいぎなのだ。アルファズレドはかつての仲間たちに、そのことを思い知らせようとしていたのです。

ロビーたちはメリアン王のていあんにしたがって、西のひみつの道からバーカーランドへとむかいました。ですが黒騎士たちは、ロビーたちが西の地を進んでいったという、そのことを知りません。では黒騎士たちが追っていた、そのふとどき者たちとは？

そうです、それはロビーたちの身がわりとなつて南の街道を進んでいった、レシリア、ルースアン、ハミール、キエリフの、四人の仲間たちにほかなりませんでした。

読者のみなさんは、かれらがどうなつてしまったのか？ すでに知っています。かれらはリュインとりでのろうごくに、つながれてしまったのです。なぜそうなつてしまったのか？ つまりそのこたえこそが、リュインをせめた黒騎士たちのおこなつた、そのひきような作戦にほかなりませんでした。

黒騎士たちはリストールの身をしばり上げ、デイルバグの足にしぼりつけました！ そして空高くから、かくれているレシリアたち、われらが仲間たちに対して、大声でさげんだのです。

「リュインのしきかんはずかつた！ ただちに、出頭せよ！ 出てこなければ、しきかんの身のほしようはないぞ！」

なんてひきような！ レシリアたちがつかまってしまったわけが、これでようやくわかりました。かれらほどの者たちが、そうかんたんにつかまるはずがありません。そこには黒騎士たちの、こんなにもひきような作戦がありました。そしてレシリアたちにこの申し出をこぼむことなどは、できるはずもなかったのです……（もしこの申し出をこぼんで、かくれたままでしたら……？ 黒騎士たちはリストールの身に、ほんとうにおそろしい害を与えたことでしよう。ワットはみずからの力を見せつけて、相手をふるえ上がらせて、いうことをきかせるというやり方を好むくに。その見せしめのためであるのなら、かれらはそのしゅだんをえらばないのです。たとえば、レドン

ホールの黒のウルファたちでした。やみにとらわれてしまったかれらのすがたは、たくさんのくにぐにのたくさんの人々に、文字通りのきょうふを与えていました。ワットはこんどは、そのまがまがしき力を、リストールの身にまでおよぼしかねないのです。そうやってしまったのなら、たとえそのあとリストールのことを助け出すことができたとしても、もはやかれは、やみにとらわれて、なにごとにもなすこともできなくなってしまおうことでしょう。

りゆうはのちに語られることになりましたが、このアー克兰ドをほろびの道からすくい出すためには、それはなんとしてでもさけておかなければならないことでした。ですからレシリアたち、われらが仲間たちは、なおいっそうのこと、みずからの身をぎせいにしてまでも、リストールのことをすくわんがために、ワットにその身をささげたのです。自分たちがつかまれば、すくなくともリストールの身に、ワットの注意がこれ以上、そそがれることもなくなります。かれの身に、必要以上のおそろしい危害が加えられることも、なくなるはずでした。なんという、いたましい話なのでしょう！ つづく、きぼうを信じて、レシリアたち四人の仲間たちは、そこまでのかくごを持って、ワットにその身を投じたのです。

「ぐむむむむ……！　なんてことじやい！」リストールの話をきいて、リブレストはその岩のような両のこぶしをぎりぎりにとぎりしめながら、いいました。「ワットのがきんちよどもめ！　好きほうだなことをやりよって！」

リブレストの怒りは、どんどん大きくなっていきます。

「リブレストどの。」リストールがつづけました。「そのふとどき者というのは、ほかでもありません。ベーカーランドの若き騎士、ハミール・ナシユガーと、キエリフ・アートハーグの両名。そして、めいゆう国シープロンドの、けいあいすべき友、レシリア・クレツシエンドに、ルースアン・トーンヘオン。そのかれらなのです。」

いつのまにか、リストールのそばに小さなレイミールがやってきていました。レイミールは兄のハミールの名まえをきいて、しよんぼりとうなだれております。レイミールはリストールから、兄のハミール

がとらわれの身になってしまったということを、すでにきかされてい
ました。

「ふとどき者などというのは、もちろん、ぬれぎぬです。」リストー
ルがさらにつづけけます。「それはすべて、ワットのさくりやく。そし
て、リブレストどの。黒騎士たちは、かれらをほりよとして、つれて
いってしまいました。かれらはディルバグに乗せられ、北のシープロ
ンドへとつれられていったのです。おそろしいさくりやく。われら
がめいゆう国、シープロンドをせめ落とす、そのくわだてのざいりよ
うとするために……」

仲間たちは、シープロンドへ！ ワットの者たちは、シープロンド
をせめ落とすそのおそろしいさくりやくのために、とらわれの者たち
の身をりようしようとしていたのです！ なんということでしょう
！ そんなことは、いつくも早く、とめなければなりません！（ワッ
トの者たちが、シープロンドにせめこんでくる。シープロンドのかい
ぎの席で心配されたことが、今ほんとうに、起ころうとしていました
！ そしてそのくわだての中で、ワットの者たちがどんな方法をもつ
て、とらわれの者たちの身をりようしようとしているのか？ それは
まだわかりませんが、どうせワットのことです。ひきようきわまりな
いことを、考えているにちがいありません！）

「リブレストどの。わたしは、かれらのことを、よく知っています。」
リストールがいました。「かれらはわたしをすくうために、わざわ
ざ、このリュインの地にまでやってきたのです。おそらく、かれら四
人のやくわりは、きゆうせいしゆどのを敵の目から遠ざけるとい
うものだったでしょう。南の街道をくだってきたのなら、そのやくわり
は、もうじゆうぶんに果たしたはず。あとは山道にそって、敵の目を
かわしつつ、安全なベゼロインの地へとその身をのがれさせること
を、考えればよかったです。しかしかれらは、もうひとつのやく
わりを果たすため、あえて、このリュインとりのすぐそばの地にま
で、やってきたのです。こんな敵の地のさなかに、大きな危険をおか
してまで……」

リストールのいう通りでした。レシリアたち四人の仲間たちは、口

ビーたちのために敵の目をひきつけるといふそのやくわりのほかに、もうひとつのひみつのもくてきをも、持っていたのです。それは……。

とらわれのしきかん、リストール・グラントを助け出すというものでした！

それはほんとうに、ごくひのもくてきでした。出発のまぎわに、メリアン王から、レシリアとルースアンだけに伝えられたのです（ですから、ごめんなさい。読者のみなさんも知らなかったわけなのです）。メリアン王は、リストールがシルフィアだということ、そしてリストールだけが持つあるとくべつなやくわりのことについて、よく知っていました。リストールを助け出すことが、このアークランドの運命において、とても大きな意味を持つことになるということもです（それらがなんなのか？　そしてメリアン王がなぜそれらのことを知っていたのか？　ということについては、このあとの物語の中で語られます。のちのちのお楽しみに）。それらのじょうほうは、きわめて重大で、せんさいなものでした。ですからメリアン王は、そのことを今は、レシリアとルースアンだけに伝えたというわけだったので（ハミールとキエリフには、ちよつとかわいそうでしたけどね）。

ちなみに、リストールのことを助け出すようにとレシリアたちに伝えたメリアン王でしたが、もちろんメリアン王は、「大けんじやノランが岩のけんじやリブレストに、リストールのことを助け出すようにたのんだ」などということは知りません。ノランがこのアークランドにやってきたのは、ほんとうにとつぜん、旅の者たちがシープロンドを出発した、そのあとのことでしたから。エリル・シャンディーンのアルマーク王ですら、ノランがやってくるなどということはわからなかったのです（お伝えしました通り、ノランはほんとうに、なんのれんらくもなくとつぜんやってくるのです）。

ですからメリアン王は、とらわれの身となったりリストールのことを助け出せるのは、今このとき、自分だけであるのだということを知りか

いしていました。リュインとりでのふいをついて、とりでのほんたいがわからそこにふみこんでいくようなまねができるのは、ベーカーランドとはんたいがわの地にいる者たちで、しかも敵の目をのがれることのできるすべを持っている、レシリアたちくらいであるということ、メリアン王はよくしようちしていたのです。

じっさいには、ノランにたのまれたリブレストがそのやくめをひきつぐこととなりましたが、もしリブレストが動いていなかったのなら、ほんとうにリストールのことを助け出せるかのうせいを持ちあわせていたのは、メリアン王にいらいされた、レシリアたち四人の者たちだけにほかなりませんでした。メリアン王は、このようなことをすべて考えにいれたうえで、レシリアたちに、この重要なにんむをたくしたのです。

「リブレストどの。」ふたたびリストールが、重い表じようをしてリブレストにいいました。「わたしを助けるようにと、ノランドのがいわれた、そのわけは、もうごぞんじのことと思います。わたしには、大いなるやくわりがある。わたしは、そのやくめを果たそうとしていた矢さきに、ふこうにも、とらわれの身となつてしまいました。ですが、今、あなたにこうして、助けていただきたい。わたしは、今すぐにも、タドウーリ連山にむかわなければなりません。」

タドウーリ連山？ それはシープロンドのくによりもさらなる高きにそびえる、せいなる山々の名まえのはずでした（かなしみの森の小川を渡るときには、ライアンが、その山のせいなるわき水の力を使いましたよね）。リストールの持つという大いなるやくわりということ、そのタドウーリ連山とに、いったいどんなかんけいがあるというのでしょうか？（ちなみに、リストールの果たすべきそのやくわりというものは、さいごの戦いのはじまる、このときにおいて、おこなわなければならぬものでした。ですからそれは、あらかじめ、果たしておけるようなことではなかったのです。そのりゆうについては、のちほど、そのときがきたらお伝えしたいと思います。）

リストールがつづけます。

「もちろんわれらは、うばわれたリュインとりでを、ふたたび取りも

どさなくてはなりません。ですが、今のわたしには、その前に、いちばんに、気がかりなことがあるのです。それは……、黒騎士たちにつれていかれた、とらわれの者たち。わたしはかれらを、助けてやりたい！　かれらは、わたしのせいで、とらわれの身となりました。こんどはわたしが、かれらを助けてやる番です。かれらは、今朝の早くに、デイルバグの背に乗せられて、シープロンドへとむかいました。今からでは、とてもまにあわないとは、わたしも思います。ですが、万にひとつでも、かれらをすくえるかのうせいがあるのならば、わたしは、そのぞみに、かけたいのです。黒騎士たちのわなにかかろうとしているシープロンドを、われらのこの手で、すくえるかのうせいがあるのならば、わたしは、そのぞみに、かけたいのです。その思いをつなぐことができるのは、われらのみ。そして今、このときでしかないのです。どうかわれらに、お力をお貸し与えください！　お願いです！

「お願いしますー！」「リブレストどの！」「力を貸してください！」
リストールの言葉に、兵士たちもみな口ぐちにさげんで、リブレストにお願いしました。リストールの思いは、また、兵士たちにも、しっかりと伝わっていたのです。

そのあつい思いを前にして、リブレストは大きな口をいっぱいにしはばって、「ぐむむむむ……！」とうなりました。そして……。

「ああつたりまえじゃーいー！」

天もわれんばかりの、すさまじい大声！　思わず兵士たちは、みなたまらずに耳を両手でおさえ、中にはそのまま、ペたんど地面にしりもちをついてしまった者さえいました（なにしろまわりの木々の葉っぱがその大声でびりびりとふるえたくらいでしたから、とんでもない大声だったのです）。

「力を貸せだど？　そんなもん、いうまでもないことだわー！」リブレストが、そのまま大声を張り上げてつづけます。

「このリブレストに、まかせておけーい！　デイルバグだかなん

だか知らんが、そんなもん、ものの数時間で追いついてみせてくれるわ！ ワットのがきんちよどもの悪だくみなんぞ、こつぱみじんうちくだいてくれる！ お前たち！ こうしちやおられんぞ！ 今すぐわしに、ついてこい！ つかまったそいつらも、シープロンドも、みんなまとめて、さつきと助けにいくぞい！」

これをきいた兵士たちの、よろこびようつたらありませんでした。みんなこぶしを天につき上げて、「おおおーっ！」といっせいに、心からの声を上げたのです。

けんじやリブレスト。なんとも男気にあふれる、たよれる人物じゃありませんか！ わたしもすっかり、その心意気にほれこんでしまいました（はじめはわたしも、「なんだか、もじやもじやおひげの、変な人だなあ……」などと思っていました……。リブレストさん、ごめんなさい。

ところで……、リブレストはかんたんについているようですが、これはとんでもない、「むりなんだい」なことでした。なにしろデイルバグたちがリュインを出発したのは、今日の朝。今から十六時間ほども前のことでしたから（これはリストールが、ろうやのまどからかくにんできたことでした。時計を取り上げられていましたので、せいじかくな時間まではわかりませんでした）。そのデイルバグたちに今から出発して追いつこうというのですから、なみたいていのことではないと、すぐにわかりますよね。

リュインからシープロンドまでは、空を飛べるデイルバグでいけば、必要ふかけつな休そくの時間をふくめても、まるいちにちくらいあればついてしまいます。ですからデイルバグたちがシープロンドにたどりつくまでには、あと八時間とかからないはずでした（ひよつとしたら、もつと早く、六時間くらいかもしれません）。そんなにみじかい時間の中で、ここからそのデイルバグたちに追いつこうなんてことは、まったくもって、ふかのうに近いことでした。リストールもそれをよく知っておりましたから、「万にひとつのかのうせい」といったのです。

ですがリブレストに、そんなことがわからないはずありません。

なにしろ、けんじやなのですから。リブレストにはなにか、ひきくがあるようでしたが……、さてさて、いったいリブレストは、こんなにみじかい時間の中で、どうやって、デイルバグたちに追いつこうというのでしょうか？ それはこのあと、おどろきのてんかいの中であきらかにされますよ。こうごきたい！」。

「マグマばくはつ！ わしも二百年ぶりに、心の底からもえてきたわい！」

リブレストがそのおひげをぴーん！ とさか立てて、全身から白い湯気をふしゅー！ と吹き出しながら、さげびました（どういうからなののでしょうか……？）。

こうして、リストールとレイミールをふくむ、リュインの二百名にもおよぶ白き力の者たち（せいにかくには二百三名でした）は、このたのもしい岩のけんじやリブレストと、その岩の兵士たちとともに、この夜のやみの中をふみ出していったのです。すべての者の心は、ただひとつでした。悪をくじいて、せいぎを守る！ かれらの心は、まさしくマグマのように、ふつふつともえ上がっていたのです。

待っててね、みんな！ そして、たのみましたよ、リブレストさん！（ところで、さつきいうのを忘れていましたが、二百年ぶりって、いったい今、おとしはいくつなの？ リブレストさん……）

（さて、物語はもうすこし、このリブレストたちの場面がつづきます。ロビーたちの旅の物語のつづきは、もうちよつとあとで……）

うつそうとした森の中。時間は、ま夜中。そこに、とてもたくさんの人たちが集まっていました。その数全部で、二百四名！ そしてそれがいにも、とんでもなく大きな岩の兵士たちが、全部で十七人！（こちらは、人というわけではありませんでしたが。ちなみに、かれらのそばに作られている岩のドームの中にも、三十二名のワットの者たちがいましたけど。）

そう、いうまでもなく、かれらは岩のけんじやリブレストにひきいられた、白き力の者たち。せいぎの者たちでした。かれらは黒騎士た

ちにつれ去られたとらわれの仲間たちのことを、助け出さんがため、そしてひきよなわなにかけられようとしているシープロンドのことを、悪の手から守らんがため、今そのけついに、もえているところだったのです。

さいごの旅へとむかう、ロビー、ライアン、マリエル、リズの四人の者たちは、大けんじやノランのみちびきによる、ノランベつどう隊なわけでしたが、こちらは岩のけんじやリブレストにひきいられた、いわばリブレストベつどう隊といったところでしょう。これからそのリブレストベつどう隊の冒険が、はじまろうとしているところでした（そして……、ここでひとつ、重要な説明を加えておきます。リズレストにリストールのことを助けるようにいらしたのは、ノランでしたが、ノランはリブレストに、「リストールを助けたあと、そのままかれひとりを北のタドウーリ連山まで送りどけ、あとは残りの兵力を使って、なんとかリユインとりでを取りもどしてもらいたい」とたのんでいたのです。つまりベゼロインとりでのことを助けてやってほしいというしじは、ノランはしてはいませんでした。これはとても、ざんこなことかもしれませんが、いくさのルールとして、兵力のすくない方のくに対しては、とりででの戦いにもちいることのできるてきせい人数というものが、さだめられていたのです。もはやベゼロインとりでは、このルールにあてはまるてきせい人数、七百二十名が、すべて配置されていました（そしてこの人員をとちゆうでほかの者たちといれかえるようなことも、ルールとしてできませんでした）。ですからかれらリブレストベつどう隊の者たちが、このままベゼロインとりでにかけつけたとしても、仲間たちのことをこれ以上助けることはできなかつたのです。それはリブレストベつどう隊のかれらにも、よくわかつていたことでした。くやしいことですが。

さらに、これもとてもつらく、ざんこなことでしたが、ノランはもはや、ベーカーランドの者たちがこのままベゼロインとりでを守りきることは、むずかしいだろうと考えていました。ただでさえ、あつとう的な数の敵を相手にしなければならぬというのに（リユインでのはいぼくのペナルティが加わり、ベゼロインの戦いでは、白き勢力

の者たちは、自分たちの兵力の三、四ばいもの敵を相手に戦っていたのです！)、しかもこんかいは、あのおそろしい魔女の三姉妹たちも、それに加わるのです。こんどはどんなにおそろしくて、ひきょうな手を使ってくることか……(いくらバーカーランドのきゆうていまじゅうしたちがそのたいさくを考えてきたとしても、相手はいくさのルールのすきをたくみについて、さらにその上をいってしまふのです)。

ですからノランは、運命のけつちやくのときは、そのさきにつづく、さいごの大いくさでつけられるのだと見こしていました(これはノランにとつても、とてもつらいことでしたが、ノランは感じようにはいされることなく、つねにれいせいにものごとを考えて動きました)。そのためその大いくさにかけて、ノランはリストールのことをちやくじつに北のタドウーリ連山まで送りどけ、リユインとりでを取りもどしてほしいとたのんだのです。さいごの大いくさはじまつてしまったのなら、そのあとで、リブレストにはまた動いてもらうつもりでした。

そしてリブレストはノランのしじの通り、リストールを北の地へと送りどけることになりましたが、それはこの通り、ノランのさいしょのしじとはだいぶことなるものとなりました。つまりリブレストはリストールを送りどけることに加え、まずはとらわれの者たちとシープロンドのことをすくうべく、みずからの持つ岩の兵士たちの「全軍」をもってしゅつげきしていったのです(これもまたのちに説明されることになりましたが、そのくににしよぞくしていない兵力(そこからの兵力)であれば、いくさにおいていっぽうの軍に新たな兵力が加わったとしても、加わったあとのごうけい人数が相手と同じ数までであれば、相手は兵士をついかすることができないというルールがあったのです(加わったあとのごうけい人数が相手の数をこえる場合、相手はそれと同数までの兵士をついかできるというルールがあります)。リブレストひきいるリユインの兵士たちは、シープロンドのしよぞくではないそこから兵力でしたから、このルールにあてはまりました(ただしさきほどもお伝えしました通り、すでにさいだい的人员が配置されているベゼロインとりでに対しては、たとえそこから

の勢力であっても、それ以上の兵力のつかはできませんでした)。そのためリブレストも、(相手の兵力をこえない)いちばん強力な手助けをすることのできる全軍をもって、シープロンドにむかったのです(もつとも、感じのように流されて全軍でしゅつげきしていった、というところもだいぶ大きかったのですが……)。

そのほか、「そのくくにしよぞくしない勢力がいくさに加わった場合、その勢力はこんご、そのくにの新たなしよぞくとしてあつかわれる」とか、「いくさの場に、そのくににしよぞくする兵力が新たに加わった場合、相手はその数にあわせた三ばいまでの兵力を使うことができる」とかいふルールもありましたが、もはやここまでくると、ややこしすぎてよくわかりませんね……)。

そしてリブレストは、ノランのはんだんのことを考えにいたうえでも、リユインとりでを取りもどすのは、シープロンドへむかうにんむをゆうせんさせたそのあとでも、じゅうぶんだとはんだんしていました(魔法の岩のドームのこうかがきれる前に、じゅうぶんもどつてこられるとも思っていました)。リストールをはじめ、リユインの者たちは、こういったことをすべてきかされて、それをじゅうぶんしようちのうえで、リブレストのしきにしがっていたのです)。

(やつと説明が終わりました。話のつづきにもどりましょう。)

さて、ついにかれらはその大いなるもくてきのための道のりを歩み出したわけですが、じっさいにはかれらは、みずからの足で進んでいったというわけではありませんでした。それつてどういうこと? そのこたえは、けんじやリブレストのひきいる、岩の兵士たちにあつたのです。

出発にあたり、リブレストは岩の兵士たちにむかつて、さつと手をふりかざしました。岩の兵士たちはそれにこたえて、ぎゆ、ぎゆいーん! と音を立てて、ひぎをまげて地面にかがみこみます。

「さあ、さつさといくぞ! おまえたち、こいつらに乗りこめい! この岩の兵士たちなら、シープロンドまでの道のりも、なんのそのだわ!」

リブレストがそういうと……、なんと！ 岩の兵士たちのおなかの部分が、ごごいーん！ とひらいて、そこに人が七、八人ほども乗りこめそうな、空間ができたじゃありませんか！ そこはこの岩の兵士たちにもつをはこぶための、しゅうのうスペースでした。ですがこんなかいのように、人をはこぶためにも、じゅうぶんに使えたのです。うーん、まったくもって、すごいロボット……、いえ、兵士たちです（そしてこれこそが、リブレストのひさくでした。リブレストはこの岩の兵士たちの足でもって、シープロンドまでむかおうとしていたのです。でもほんとうに、そんなにはやく走れるのでしょうか？ ものの数時間で追いついてみせてくれるわ！ などといっておりましたけど……）。

でもいっぱいにつめても、そこに乗れるのは岩の兵士二体につき、十人がやつとでした。リュインの者たちは、全部で二百三名おりましたから、ちよつと計算きをたたいてみますと……。岩の兵士たちは全部で十七体いましたから、乗れるのは十人ずつの、百七十人。となると、残り三十三人のリュインの兵士たちがあまつてしまうのです。かれらはどうしましょうか？

なんのなんの。こんどは岩の兵士たちの頭が、ぱかっ！ そうでした、頭のそうじゅう席にも、人が乗れたのです。ここにそれぞれ、ふたりずつ乗りこめば……、ほら！ リブレストのひとりをあわせれば、ちようどぴったり、三十四人ぶん！ なんとという、ぐうぜんぴつたりな数字なのでしょう！（これはほんとうにぐうぜんでした。もし乗れない人がいたら、岩の兵士たちの背中にひもでくりつけて、おんぶしていこうと思っていました。）

「ぜんいん乗ったなー」リブレストがさげびました。なんとその声は、すべての岩の兵士たちのそうじゅう席と、おなかのかくのうの中からきこえてきたのです。じつはこの岩の兵士たちは、それぞれが糸のない魔法の糸電話みたいなものでつながっていて、おたがいに話しをすることができました！ まったくもって、すごいロボットです！ いえ、兵士……、もう、ロボットでいいですよね！ こんなロボット、わたしもぜひ一体、自分用にほしい！（いちおうねんのためにいっ

ておきますが、これはわたしがかってにロボットとよんでいるだけなのであって、もちろんほんもののロボットというわけではありませんよ。みなさんはちゃんと、岩の兵士とよんであげて……、みんなもロボットとよぼう！」

「そうじゅうは、からだでおぼえろ！ さあ、わしに、ついてこい！
全力で飛ばすぞ！」

リブレストがそういうと、岩のロボットたちは……。

ごいんごいん！ ごいんごいん！ ごいーん！

ぎゅいんぎゅいん！ むいんぎゅいん！ むいんぎゅいん！

いさましい音を立てながら、地面をいきおいよく走り出しました！（しかもその目からはきいろい光が飛び出して、道をてらしていたのです！）

は、はやいはやい！ 馬でかけるのとはわけがちがうくらい、はやいのです！（マリエルのじえつとこーく・すくりゅーとまではいきませんでした。）そしておどろくべきなのは、その乗りごこちのよさ！
こんないきおいよく走ったら、がたがたゆれて乗りものよいしてしまうんじゃないかと思っていました。そこはやっぱり、けんじやさんのつくったロボットです。どんなにはやく走っても、そうじゅう席とおなかのかくのうこの中は、ほとんどゆれずにあんていしていました（よかった、これならみんなも、ロビーみたいな目にあわなくすすみますね！ 乗りものよいばかりするはめになっちゃってしまっているロビーには、申しわけないのですが……）。

ちなみに、そうじゅう席にはレバーがふたつと、足でふむペダルがふたつあって、それらを使って、これらのロボットたちをそうじゅうしました。右のレバーが、前とうしろに進むためのもの。左のレバーが、左右にまがるためのもの。右のペダルは、走るはやさのちようせつ。左のペダルが、ブレーキです。ちようど、自動車のそうじゅうみたいなものでした。そしてはじめはちよつととまどっていました。リユインの兵士さんたちもすぐにそのそうじゅうになれて、なんとか

リブレストについていくことができていました。

ところで、先頭をゆくリブレストの隊長きのそうじゅう席には、リブレストとレイミールのふたりが乗っていたのです。レイミールは「ぜひ先頭に立っていきたい」とお願いして、リブレストといっしょに乗せてもらいました。ロボットに乗ったレイミールのうれしそうなことといったら！目をきらきらかがやかせて、リブレストに教わりながら、自分でもちよつとそうじゅうさせてもらったりもしていたのです。やっぱりレイミールも、男の子。ロボット大好きでした。ライアンがこのことをきいたら、きつと「ぼくも乗りたいーい！」とじだんだをふんでくやしがることでしょうね。

もうひとつ。「これは、なんのボタン？」レイミールがそういって、そうじゅうレバーの下の方についていたボタンをおしてしまいました。が……、そのとたん、しゅごごごごー！岩のロボットのうでから、岩でできたミサイルがはっしや！まっすぐさきの丘にめいちゅうして、どごーん！地面に大きなあながあいてしまいました！

「ごらごら。たまをむだにしては、いかんぞい。」リブレストがそういって「がっはっは！」と笑いましたが、レイミールは、ぽかーん。口をあけたまま、しばらく動くこともできなかつたのです。す、すごい……。

そしてみんなは、リブレストに助けられた森の中から、いちろ、北へ。シープロンドへとつづく街道めざして、岩場も荒地地もなんのその。がしんがしん！といさましい音を立てながら、つき進んでいったのです（なにしろこのロボットたちは、たいていのしょうがい物なんて、まったく問題にしません。あるときなんて、目の前に大きな岩があつて、まだそうじゅうになれていない兵士さんたちが、「あぶない！ぶつかる！」そこにつっこんでいってしまいました。つぎのしゅんかん、ばごーん！大岩はこなごなになつてちらばつてしまいました！ぶつかったロボットは、なんともありません。まったくもつて、タフなロボットです！）。

「丘を越えるぞー！」

リブレストの声が、それぞれのロボットたちの中にひびき渡りまし

た。十七体のロボットたちは、がしん がしん！ と走って、丘を乗り越えていきます。丘を越えたさきは、草木もまばらな、見渡すかぎりの平原になっていました。左の方には、いだいなる切り分け山脈のまっ黒なシルエットが、ゆうゆうとつらなっております。そしてその山のふもとには、南北にのびる南の街道がありました。ここは、ベルグエルム、フェリアル、ハミール、キエリフの四人の騎士たちが、ロビーのことをむかえにいくときに、シープロンドへとむかって進んでいった道です。こんどはその道を、岩のロボットたちに乗ったせいぎの者たちが、こちらもシープロンドへとむかって、歩を進めていこうとしているわけでした。

「街道に出れば、こっちのもんじやい。かく、パイロットたちにつぐ！ 頭の上に、五つのレバーがあるな？ 見えるか？」

リブレストの声にしたがって、頭の上を見てみると……、なるほど、それぞれ色のちがう、五つのレバーがついていました。

「きいろいレバーをひくんだ。シープロンドまでは、それで飛ばしていくぞい！」

いわれるままに、パイロットたちは、きいろいレバーをがくんとひき下げます。すると……。

「うわわわっ！」

ロボットのからだだが、ぐぐいーん！ がごん！ がごん！ じゃきーん！ みるみるうちに、かたちを変えていくじゃありませんか！ そして……。

なんと！ さつきまで兵士のすがたをしていたロボットたちが、まるで地面の上を走る、船のようなすがたへと変わりました！ へ、へんけいするんですか！ すごいすごい！（ところで……、残る四つのレバーも、やっぱり気になりますよね。このロボットにはまだまだ、おどろきのきのうがそなわっていたのです。ですがとても全部はしようかいしきれませんから、それはまた、べつのきかいに……。水の中にもぐったりもできましたけど……）

「こっからさきは、自動そうじゅうにはいるぞい！ ぎひようせつてい！ 四七六二、八七二三！ もくてき地は、シープロンドじやい

！」

陸を走る船のすがたにへんけいしたロボットたちは、ぐいん！ぐいん！ 船の底にならんだたくさんのしゃりん（このしゃりんはゴムのようなそぎいでできていたのです）をきしませながら、たいらな街道の上を、さつきよりも数ばいははいんじやないか？ というくらいのはやさで、すっ飛ばしていききました！

はいなんてものじゃありません、はやすぎです！（これならマリエルのじえつとこーく・すくりゆうよりも、ぜったいにはやいでしよう！）

追っかける相手は、デイルバグに乗ったワットの黒騎士たち。黒騎士たちの乗るデイルバグは空を飛んでいましたから、まっすぐもくてき地までいけるため、とてもはよいのです（ですけど、れんぞくして飛ぶためには、ひんぱんに休そくが必要でした。ですから、こちらとしては助かるのです。そのぶん、追いつく時間がかせげますから）。ですがこちらだって、負けてはいられません。この「陸走しゃりん船モード」のロボットたちならば、空を飛ぶデイルバグたちよりも、なおはやいもうスピードで、陸の上を走っていくことができました！（まさに風ののごとくです！ さすがはリブレストさん！

しかもこのロボットたちは、馬やデイルバグたちとちがって、休む必要がありませんでした。これならほんとうに、ものの数時間でシープロンドまでたどりつけてしまえそうです！ なんともすごい！

ちなみに、今までにとうじょうした乗りものや生きものたちの中で、いちばんはよいのはなにかというと……、それは、いがいやいがい、しらせをはこぶ、でんれいの鳥だったのです（すこし前の説明のところでもとうじょうしましたが、またまたのごとうじょうです）。かれらは重要なじょうほうをいち早く伝えるために、とてもはやく飛ぶことができるようにくんれんされていました。なんと、馬で二、三日かかるような道のりでも、せいぜい三、四時間もあれば飛んでいってしまうのです！ はやい！

ところで、シープロンドまでむかえるようにくんれんされたでんれいの鳥が、今手もとにいてくれたのなら、すぐにシープロンドに危険

をしらせるメッセージを送れましたけど、とらわれの身であつたかれらが、そんなでんれいの鳥を持つているはずありませんでした（もちろん、そんな鳥をワットの兵士たちが持つているわけありませんでした。ワットの兵士たちが持つているのは、自国の仲間たちにいる場所のみに飛ぶようにくんれんされた、鳥ばかりだったので）。そしてさすがのけんじやリブレストでも、それにかわるほどのはやさでメッセージを送れるわざを使うことは、できませんでした。リブレストのせんもんは、岩のロボットをはじめとする、さまざまな岩の工作物をつくること。いくらけんじやでも、まったくばんのうというわけではなかつたのです。）

夜の街道を、十七そうの岩の船がつき進んでいきます。めぎすはひとつ、シープロンド！ とらわれの仲間たちのことを、シープロンドのことを、悪の手からすくわんがために。

「ゆけ、ゆけ！ あらしく吹くとも〜！」

リブレストが上ぎげんで、いさましいマーチを口ずさみました。

「いっけ、いっけえ〜！ おそれることなく〜！」

レイミールのげんきな声が、リブレストの歌につづいて、ロボットたちの中にひびき渡りました。

そして時間は、ロビーたちのところにもどります。

「ありがとう。せわになったね。」

マリエルが、ここまであんないしてくれたりユキアに、出発前のおれの言葉を伝えているところでした。みんながいるのは、たきのみずうみの、そのほとり。ロビーたちノランベつどう隊の四人は、これから、精霊王の待つおとぎのくに、イーフリープへと、旅立とうとしているところだったので（ちなみに、マリエルはいよいよイーフリープへとふみこむにあたって、もう服を着がえていました。いわゆる、勝負服というやつです。こんかいの服は……、まさしく、まじゅつし！ ひらひらとしたレースのついた白いビロードのシャツに、ガーターベルトとコルセットのついた、黒いきぬのズボン。うらがえ

んじ色の、黒いあつ手のケープをはおっていて、ケープの前は、大きな赤い宝石でとめられていました。そしてなによりとくちょう的なのは、その大きな黒いとんがりぼうし！ 手にしたつえとあわせて、ここまでそろえれば、もうどこから見てもまじゆつしです。マリエルは精霊王のくにイーフリープに敬意をあらわして、まじゆつしとしての、せいそうのかつこうをしていくことにしたというわけでした（ライアンは、「なんか、ぼくの服とデザインかぶってるじゃん！」とぶーぶーいっていましたが）。

ところでマリエルは、このみずうみのほとりで服を着がえてしまうことにしましたが、もちろん着がえてあるあいだ、みんなにはうしろをむいているようにいっていたのです。「のぞくなよ。」とマリエルがいつて、ライアンが「だれが！」とどなりまりました）。

「ぼくたちは、これから、精霊王さまのところへいく。ラフェルドロード里長に伝えてくれ。われらは、白き勢力の仲間。きたるべきときは、すぐそこまできている。今こそ、おたがいに、力を分かちあい、助けあうときだと。」マリエルがリュキアにいました。

「うん、わかったよ。」リュキアがこつくりうなずいて、こたえます（ほんとうにわかったのかどうかは、だいぶあやしいですが……）。

「ああ、それから、」マリエルがそういつて、なにやら魔法の言葉をとなえると……、ほわん！ マリエルの手のひらの上に、フットボールくらいの大きさの、もも色をしたわた毛のボールがひとつ、あらわれました（これは「まじかる・おぶじえくと」というもので、いちど出してしまえば、あとはずっと、こわれるまでそのまま消えずに残るのです。すぐに消える魔法とくらべると、だいぶむずかしい魔法でしたので、マリエルほどのまじゆつしでも、ボールいっこやロープいっほんくらいを出すので、やつとでした（もつとも、ほんきを出せば馬車の一台くらい、マリエルなら出せましたが、そのあと二日は、ぐつたりになつてしまうことでしょう）。

「これは、ぼくからのプレゼントだよ。らんにくぐ・ふあずぼーる。レベル一から十まで、逃げるはやさをちようせつできる。レベル十のこいつをつかまえられたら、たいしたものだね。」

魔法のボールを受け取ったリュキアは、大よろこびでした。そしてさつそく、いきなりレベルのダイヤルを十にあわせると……、ひゅんっ！ 目にもとまらないくらいのはやさで、ボールが逃げ出したのです！

「待てえーっ！」ひゅんっ！ リュキアはそれに負けないくらいのはやさで、あつというまにみんなの前からいなくなってしまうした。

「ちゃんと里長さんに、でんごんが伝わるのかなあ……」リュキアの消えていったさきの丘をながめながら、ライアンがつぶやきました。

「さあ、それじゃ、いくぞ。」

リズがそういって、みずうみの水の方へとむかって、すたすたと歩いていきました。え？ みんなが思うまもなく、リズはさつさと、水ぎわに近づいていきます。

「ちよっ、いったいどこへ……」マリエルがいいかけましたが、つぎのしゅんかん……。

「ええーっ！」

みんなはびっくりして、さけんでしまいました。

なんとリズは、水の中にはいるのかと思いきや、そのままみずうみの水の上を、ちゃぽちゃぽ。へいきな顔をして、歩いていくではありませんか！

「え？ なに？」リズが水の上に立って、こちらをふりかえりながらそういいます。

「あ、これ？」そしてリズは、自分の足もとをゆびさしていいました。なんと、精霊の種族シルフィアであるリズは、水の上をしずまずに歩くことができました！ もちろん、ふつうに水の中にはいることもできましたが、ちよつと集中するだけで、こんなこともできてしまうのです。リズにとってはあまりにもあたりまえのことでしたので、なんの説明もなく、ふつうに歩いていったというわけでしたが、みんなやわたしたちにとっては、しやうげき的ですよね！

「シルフィアだもん、あたりまえじゃんか。それよりさ、早くしなよ。マリエルなら、おれの助けがなくなつて、魔法でついでこられる

だろ？」

そのリズの言葉に、マリエルは「ふん！」と鼻をならして、こたえます。

「とうぜんだよー。じゃ、なくて、いったいどこへいくのか？ ってこと！ 精霊王のところへいくんでしょ？ 精霊王のトンネルは、むこうの山の、さきじゃないか！」

マリエルがそういって、むこうに見えている山のことをゆびさしました。そこはマリエルがノランからきいていた、アツプルキントにちばん近い、精霊王のトンネルがある場所だったのです（マリエルはほかにも、このアークランドにあるすべてのトンネルの場所をおぼえていました。その中から、いちばん近いトンネルをえらんだのです）。とうぜんマリエルは、これから大急ぎで、そこへむかうつもりでした。「あーんなどこ、遠すぎていけないよ。」リズが手をふって、マリエルの意見をはねのけました。とうぜんマリエルは、むっとしてしまいます。

「じゃ、どこへいこうつてのさ。あそこが、いちばん近いんだぞ。」マリエルがいいかえします。ですがリズは、へっちゃらな顔をしたままで、いいました。

「アツプルキントのそとのトンネルにいく必要なんて、ぜんぜんないじゃん。だって、おれたちの目の前に、トンネルはあるんだから。」
「な、なに？」思いがけないリズの言葉に、マリエルがびっくりしていいました。目の前に、トンネルがあるですって？ それはわたしも、はつ耳です！

「なーんだ、マリエル、知らなかったのか？ そーいや、ノランのじいさんにも、まだいってなかったな。あの島のたきのところにも、トンネルがあるんだよ。」

なんと！ このみずうみのまん中にある、たきの島。その島の中にも、精霊王のトンネルがあるといいました！ 自分たちが「精霊王のトンネルをあけてください」とたのみにきた相手にはじめて会ったところに、その精霊王のトンネルがあるなんて！ なんて、どんぴしゃりなんでしょ！

ということとは……、わざわざアップルキントまでリズのことをさがしにきて、とんだ時間のロスになってしまったと思っていたわけですが、そうではなかったわけです。もくてきの人物ともくてきの場所が、じつはもうすでに、そろっていたというわけでした。なんてすばらしい！ てまがはぶけて、よかったよかった！（リズのしつたいも、これでちよう消しですね。）

「ちよ、そんなこと、きいてないぞ！　なんでそれを、早くいわないんだよ！」マリエルが、ぶんぶん怒っていいかえしました。

「だって、きかれなかったからさ。」リズが、あいかわらずあつけらんとしたままで、そういいいます。

「そ、そりゃ、きいてはいないけどー！」

マリエルは頭の中がすつかり、こんがらがってしまいました。きかれてないから、こたえない。それは正しいような気もするけど……、でもこの場合、きかれる前に教えるのが正しいはずなのであって……、リズのいいかげんさに二をかけて、三でわって……、ああ！　わけがわかりません！　リズと話しをしていると、いつもこんな感じになってしまうのです。マリエルはこぶしをふたつふり上げて、「あー、もうー！」とさげびました（まったくもって、マリエルにどうしようしてしまいます……）。

「んなこと、どーでもいいからさ。」リズが、うでをふつていいました。「さき、いっちゃんよう？　トンネル、あけてほしいんだろ？」

リズはそういうと、ちやぽちやぽ、水の上を歩いていってしまいます。

「な……！　ま、待てたら、まだ、話は終わってないぞ！」マリエルがいましたが、リズはぜんぜん、知らんぷりでした。

「まあ、ここは、りくつぬきでいったらいいじゃん。」ライアンがそういうって、マリエルの肩を、ぽんとたたきます。マリエルは、すつかり力がぬけてしまって、「はあ……」と深いため息をひとつついて、あきらめました。

「マリエルの、まじかる・さぽーと。すいみん、るーきん、りろるー

！」

　マリエルが魔法の言葉をとなえると……、ふおんふおん！　マリエルと、マリエルのそばにいるロビーとライアン、三人のからだは、ふわふわとした光に つつまれました。これは、みずすましのじゅつ。この魔法を使うと、その通り、水の上をちやぽちやぽ歩くことができたのです（いぜんかなしみの森で水の精霊の小川を渡ったことがありました。あときは精霊が道をあけてくれたので、川を渡ることができたのです。こんどは、きよりも深さも小川とはぜんぜんちがう、みずうみが相手でしたから、精霊にたのんで渡らせてもらおうとしても、そうかんたんにはいきません。がんばって水の精霊にお願いすれば、みずうみの上を渡る方法もないわけでもないでしょうが、ライアンもやっぱりここは、すなおにマリエルの魔法にたよることにしました。およいでいくのも、めんどろですしね。それに、たいせつなお菓子がぬれちゃったら、たいへんですから。

　「なんか、さいきんぼく、戦いいがいの出番、くない？」ライアンがロビーに、ぶーぶーいいました。まあ、マリエルがいるので、そこはしかたありませんね。がまんしてね、ライアン。

　「ぼくのからだに、しっかりつかまって、ゆっくり歩いてください。だいじょうぶです。落としませんから。いきますよー。」

　マリエルはそういいましたが、じつはこの魔法は、地味ーなわりにはとってもむずかしい魔法で、ちよつとでも気をぬくと、たちまち水の中に、どぼん！　落っこちてしまうのです。ですからマリエルほどのまじゆつしでも、この魔法を使っているときには、おしやべりするこどさえできないくらいに集中が必要でした（「マリエルの、まじかる・うおーたー！　すらいだー！」なんていう魔法で、水の上をびゅいーん！　とすべっていけたら、そうかいですけどね。さすがにマリエルも、なんでもかんでもできるといわけではありませんでしたから（そもそもそんな魔法は、ありませんでしたし……）。マリエルはまた、自分の使える魔法の中で、いちばんこうりつのいい魔法をえらんで、このみずすましのじゅつを使うことにしたので（ちよつと地味でしたけど）。

ちなみに、ライアンは水の上にいるときに、マリエルのうしろから「わっ！」なんて、ちよつとやってみようかと思いましたが、水の中に落ちるのはいやなので、やっぱりやめておきました。

ちよぽん、ちよぽん。みんなは、いつぽずついつぽずつ、しんちように、水の上を歩いていきました。なんだかふわふわして、変な感じですよ。まるでマシユマロでできた床の上を、ころばないように気をつけながら、よちよち歩いているみたいです。ずっとさきの方を見ると、リズがうでを頭のうしろにくみながら、よゆうしゃくしゃく、立っていました。みんながくるのがおそいので、水の上に立ちどまって、待っていたのです。わざとかた足で立ってみせたり、えっちらおっちら歩いてくるみんなの、まねをしてみせたりして、こつちをからかっています。な、なんか、はら立つ！（でもマリエルは集中を切らさないように、がんばってむしりました。）

そして、ようやくのことで……。

「とうちやくー！」ライアンがそういって、マリエルにつかまっていた手をはなして、いちばんに島にとうちやくしました（でもさきにリズが待っていて、「おそいなあ、さき、いっちやおうかと思つたよ。」とからかってきたので、マリエルとライアンが、そろっていいました。「うるさいー」）。

たきの島は、とても美しいところでした。みずうみのまわりも、まさにらくえんといった美しさでしたが、この島はそれらの美しさを、みんな集めたといった感じだったのです。ま新しいみどりにあふれた、げんそう的な木々。色とりどりのくだものや、花々。あざやかな羽の色をした鳥たちが、あちこちでささやいております。きいろやオレンジ色をした大きな花たちが、くるくるとまわりながら、空中を飛びまわっていました（この花はあるていど大きく育つと、つぎの成長の場所をもとめて、みずから飛びまわって旅をするのです。なんともふしぎな花です（ここにリュキアがいたら、花たちを追いかけて、いっしょに飛んでいってしまうことでしょうね））。

地面には、白い毛なみを持つたりすのような動物たちが、走りまわっていました。そのりすたちのまん中には、水の色をした大きなき

のこがいつぽん、生えております。でもよく見ると、そのきのこには小さな足があつて、その足でよちよちと歩いていました！（このきのことりすたちは、じつは友だちで、きのこの背中には葉っぱでできたふくろがひとつ、下げられていました。りすたちはそのふくろにたくさん木の実をためこんで、きのこといっしょに、いどうして暮らしていたのです。きのこを食べる動物なんかきたら、りすたちがいっしょうけんめい追っぱらいましたし、大きな鳥が近づいてきたときなどには、きのこがけむりをびゅー！と吹き出して、相手を追っぱらいました。なんともおかしな友じょうですね。）

「すてきなところだね。」ロビーがいました。

「うん、まあ、シープロランドほどじゃないけどね。」ライオンがいつものちようしで、こたえました。

「すごいエネルギーです。」マリエルがつづけます。「こんなところがあつたなんて、うかつでした。ここは、このアークランドの、すべでのよい力が集まるところみたいです。」

マリエルがそういって、ためにちよつとだけ、魔法の言葉をつぶやいてみると……。

ぼわんっ！

ちよつとしか力を使っていないのに、とんでもない魔法のエネルギーです！ つえのさきから、ものすごい力のいなずまが、ばちばちばち！ はじけんばかりにあふれ出しました（あわててマリエルは、その魔法を消しました）。

「へええ、すごいね。」

ライオンがそういって、同じようになにかをつぶやいて、精霊たちに語りかけてみます。すると……。

ぼぼぼ！ しゅばばばあーん！

まわりの空気や地面が、まるでたつまきにでも飲みこまれたかのよ

うに、ぐるぐるとうずをまいてはじけ飛んでしまいました！ な、なんておそろしい……（もうすこしで、ロビーまでその中にまきこんでしまうところでしたが……）。

マリエルのいう通り、ここは魔法や精霊の力が、とんでもなく大きくはたらく場所でした。もしここで、マリエルとライアンのあのほんきのあわせわざが、さくれつしたとしたら……、考えただけでもおそろしい！ たぶんこの島ごと、みんななくなってしまいそうです……。

「この島は、精霊王がつくったんだよ。」リズがさらりと、とんでもないことをいいました！ 精霊王がつくったですって！

「むかし、精霊王が、このみずうみにあそびにきてき。まん中に、島をつくったんだってよ。なかなか、いきなことをするね。」

いき、ですか……。リズの意見はともかくとして、なるほど、どうりでこの島は、とんでもないエネルギーにみちているはずですよ。

「精霊王のつくった島に、精霊王のトンネルか。どうりで、精霊たちがさわぐはずだよ。」ライアンがそういって、手のひらを空中にかざしました。するとその手の上に、すぐに、風や水の精霊たちのすがたが、ふわふわと見えはじめたのです！（ずいぶんとひさしぶりに、かれらにお目にかかれたような気がしますね。やみの精霊さんたちになら、ついこのあいだ、会えましたか……）

精霊のすがたがかんたんには見られなくなってから、だいぶねん月がたちましたが、ここはそんなことには、おかまいなしの場所でした（むかしのアーケランドがこんな感じだったのです）。まさにここは、「よい力」の集まる、精霊たちのらくえん。このアーケランドでもゆびおりの、とくべつな場所だったのです（そして精霊の力は、魔法の力でもあるのです。魔法を使うときはさまざまなしぜんのエネルギーが必要でしたが、そのエネルギーとはすなわち、精霊の力によって生まれるものでした。ですからマリエルの魔法の力も、それによって、大きく高められたというわけだったのです）。

ちなみに、マリエルは強くなった力でほんのちよつと、さつきリズにからかわれたしかえしに、リズのかみの毛をもじやもじやにするい

たずら魔法をかけてやろうかと思いましたが、やっぱりむだな魔法の力を使うのはやめておきました。

と思っていると……、すでにライアンが、リズの頭のとっぺんの毛を風の精霊にぐしぐしひっばらせて、いやがらせをしています……。マリエルはライアンと同じようなことを考えていた自分にはずかしくなって、思わず顔を赤くして、「こほん。」とせきばらいをしてごまかしました。まったく、かわいい子たちです(こと)。

島は、そんなに大きなものではありませんでした。ですからそこらちよつと進んだだけで、もうさきの方から、たしかな水の音がきこえはじめてきたのです。それはこの島のまん中にあるという、たきの水の落ちる音でした。

みんなはきれいな水の流れる小川にそって、歩いていきました。それはなんとも、ここちのいいせせらぎでした。小川のまわりには、たくさんの水の精霊たちが見て取れます。みんな、すいすい飛びまわったり、ぴよんぴよん水の上をはねたり。水のつぶをボールがわりにして、それを取りあつてあそんでいる精霊たちまでいました(ちゃんとしたルールがきまつているのでしょうか？ しんぱんのような精霊までいました。なんともめずらしい光景です)。

この小川の水は、島のまん中のたきから流れていました。ですからこの小川をのぼっていけば、たきのところまでいけるのです。

水の音が、だんだん大きくなってきました。たきは、すぐそのようです。そして、さいごのまがりかどをまがったところで……。

「あれ？ どうくつ？」

ライアンが、目の前のいがいな光景におどろいて、いいました。てつきりそこに、どうどうとしたたきのすがたがあるものだとばかり、思っておりましたから。ライアンのいう通り、流れる水は、岩山にぽっかりあいたどうくつの中へと、つづいていたのです。そしてどうこうというたきの水の音は、そのどうくつの中からひびいてきていました。

「この中だよ。足もと、じやり道だから、気をつけな。」

リズがそういって、すすいどうくつの中へとはいってしまいました。あわててみんなも、リズのあとを追いかけています。

どうくつの中は、気持ちのいい空気にあふれていました。息をすうつとすいこむと、さわやかなミントのようなかおりの空気と、こまかい水のつぶが、いっしょに鼻のおくをくすぐっていくのです。足もとにはすいししょうのようにかがやくきれいなじやりが、しきつめられていました。そしてみんながその上をざくざくと歩いていくと、そのじやりがきらきらと光って、どうくつのかべを美しくてらし上げていくのです。

どうくつのかべもまた、すき通ったすいししょうのような石できていました。光にてらされたそのかべの石が、こんどはべつの色の光でそれにこたえて、それがまた、べつの石にも伝わって……。それはまるで、七色の光のイリュージョンの、ショーのよう。みんながいるのは、まさにその、とくとう席。ショーステージのどまん中だったので、す。

ロビーもライアンも、マリエルさえも、みんな思わずぼーつとなつて、目の前の光景に見いつてしまいました。気がつけば、たくさんの精霊たちが、あたりにまたたくげんそう的な光の中を、(まるでショーステージの上のダンサーたちのように)すすいとまいおどつていたのです。こんなにすてきなショーを見せられてしまったのは、だれでも心をうばわれてしまうのは、とうぜんのことでした。

「みちくさ食ってないでさ、早くいくよ。」

とつぜん、夢の世界のそこから、リズの声がきこえました。みんながはつとわれにかえると、リズが手をぱたぱたとふってあたりの精霊たちのことをはらいのけながら(精霊たちに対して、なんてばちあたりな!)、どうくつのおくへといつてしまうところでした。こんなにすてきな光景が目の前に広がっているというのに、まったくリズときたら! (でもリズにとっては、この夢のような光景もまた、ふだんから見なれている、ごくあたりまえのこの一部分にすぎなかつたので

す。こんなにも素晴らしいものが、あたりまえなことになっている。よく考えてみれば、それはすてきなことなのかもしれない。たしかにリズみたいに、感動はうすくなってしまうかもしれませんが、美しいものがごくあたりまえに、美しいままにそんざいしている。こんなにしあわせなことは、ほかにないはず。このアーケランドでも、わたしたちの世界でも。」

「ちよつとー！ 待ってよー！」

「ごらー！ さきにいくなー！」

みんなはそういつて、さきをゆくシルフィアのあとを追いかけました。

「な……、なんてすごい……！」

思わずロビーが、ため息まじりにそれだけつぶやきました。ほかの言葉が、ぜんぜん出てこなかったのです。それはエリル・シャンティーンの空中ろうか、道のさきにそびえる女神リーナロッドのぞうを見たときらしいの、大きな感動でした。

どうくつの、そのいちばんおく深く。じやりの道は、深い池のほとりへとつながっていました。その池のむこう。岩かべから、どうどうと青いしんじゆのつぶのような水のしぶきをあげて、そのたきが流れ落ちていたのです。

その美しさ……。

すべてをつつみこむ、そんざい感……、やさしさ……。

七色の光につつまれた、まるでまぼろしのようなたき。たきのまわりには、この場所ではもうあたりまえのように見ることのできている、たきさんの精霊たちが、たきのせいなる力にさそわれて飛びまわっていました。しかしここには、それいがいのほかの力があります。ロビーはそこに、たしかに、女神のそんざいを感じ取ったのです。心なしか、腰におびたせいなる剣が、ふわりとかるくなったかのように感じました。ものすごい力が、剣からあふれ出してくるようです。女神の力、精霊の力、そのすべてが、この剣に集まってきているかのようにでした。それはなんと、ふしぎな感かくでした。

「これが、精霊王のトンネルがある、たきだよ。」リズが、あいかわらずのちようしで、たんたんとうそいいいます。「このたきにむかって、力を使うんだ。すぐ、ひらくからさ。ちよつと、そのネックレス、貸してみな。」

「ちよーつと、待ったー!」

リズの言葉に、とつぜんライアンがわりこみました。なにごとでしようか？ リズがきよとーんとした顔をして、ライアンの方を見ます。

「やっぱりここは、このぼくにやらせてよ。こんなに精霊の力にあふれた場所も、ちよつとほかにないからね。ここならばくでも、精霊王のトンネルくらい、ちよちよいのちよいだよ。」ライアンはそういつて「ふふん!」と鼻をならし、よゆうしやくしやくといったふうにおどけたポーズを取つてみせました。

「さあ、シープロンドいちの精霊使い、ライアン・スタッカートくん
の力、見せてあげましょう! ノランさんは、むりつていったけど、
ふつふつふ、はたして、そうかな?」

どうやらライアンは、ノランから「精霊王のトンネルをあけるのは、
おぬしにはむり」といわれたことが、ずつとひつかかっていたような
のです。そしてライアンは、はじめから「見てろー、ぼくのすごいと
こ、思い知らせてやるんだから!」とひそかに思っていて、精霊王の
トンネルもリズにたよらず、自分であけてやろうと思っていました
(やっぱりそんなこと考えてたんですね。ライアンらしい)、じつさい
にこの場所にきてみて、その精霊の力のあまりの強さに、「ここならば
くにも、ぜつたいにできる!」と自信を持ちました。こうなつたら、ラ
イアンが行動しないはずがありませんよね。というわけで、ここでリ
ズをさしおいての、ごとうじようというわけだったのです。でもほん
とうに、だいじようぶなの?

「おししよさまから、いわれたでしょ。ライスタには、むりだつて
ば。」マリエルがあきれ顔でいいましたが、すでにライアンは、やる気
まんまんでした。

ライアンはロビーから精霊王のネックレスを受け取ると(というよ

り、自分からむしり取りましたが……)、りんとして、みずべのふちに立ちました。マリエルは「ふう……」とため息をついて、うしろにひっこんでおります(好きなようにやらせてやろう、ということですよ)。リズもうでをくんで、やれやれといった感じで見守っていました。そしてロビーも、「ライアンならできそう」という強いきたいを持って、同じくうしろから見守っていたのです。

なにかわたしも、ロビーと同じく、ライアンにならできそうな気がしてきました(マリエルとリズは、きたいしてないみたいですけど)。これほど精霊の力にあふれた場所であるとはいえ、精霊王のトンネルをあけることができれば、もんくなしにたいした精霊使いです。伝説のシルフィア種族の者たちとも、肩をならべることができるとはすか。さあ、ここはみなさんも、ライアンのことをおうえんしてあげようじゃありませんか。がんばれー！

ライアンは精霊王の青いネクレスをにぎりしめ、そしてささやきはじめました。

「せいなる場につどいし、ぜんなる精霊たちよ。われとともに、大いなるみらいへのとびらをひらかん。」

ライアンがそういうと、あたりの空気がばあーっ！ とぎわめきはじめました。見ると、ここにもそこにもあそこにも、風や水の精霊たちが、この場をうめつくさんばかりに、あふれかえっていたのです！ とくに、たきのまわり、そしてライアンのまわりは、まさに精霊だらけ！ まるで精霊の海の中に、ライアンがひとりで浮かんでいるかのようにした(かなしみの森の小川でも、ライアンのすがたが見えなくなるくらいに精霊が集まりましたが、こんどはライアンどころか、まわりの景色やたきのすがたさえも、みんな見えなくらいでした！)。なんともすごい！ こんなにたくさんの精霊の力が集まれば、ふかのうも、かのうになるかもしれませぬ。これなら、いけるかも！ ライアンのすがたは、集まった精霊たちにかこまれて、まったく見えなくなりました。そしてささやきの言葉が終わって、さいごのひとこと！

「いざゆかん！ とびらのさきへ！」

「スピリチュアル・アストラル・ホーリーゲート！」
なんというすさまじい力！ さし出した青いネックレスにすべての精霊たちの力がひとつのかたまりとなって集まり、それがたきの前の空間へとむかって、いつきにはじき出されたのです！

ぎゅぎゅぎゅぎゅい〜！

青いネックレスからあふれるおそろしいまでの精霊の力が、そのまたきの前に、精霊王のトンネルのすがたをうつし出していきましました！ すごい、やった！ ついに精霊王のトンネルが、ひらかれるのです！

「いつけえ〜！」

ど〜ど〜ど〜くん！

ライアンがさいごの力をふりしぼって、トンネルの入り口に精霊たちの力をぶつけました！

「だからさあ、むりだっていったじゃん。」

リズが、(どうくつのすみつこのかべぎわで、ひぎをかかえてすわりこんでしょげかえている) ライアンにいいました。

「まあ、トンネルが出せたんだから、すごいことだよ。ぼくも、みとめるからさ。」マリエルがライアンの肩をぽんとたたきながら、つぶやきました。

けっかは、まあ、その……、そういうことでした……。

やっぱり精霊王のトンネルが相手では、ふつうの精霊たちでは、いくらたばになってもかなわなかったのです。でもそれは、風や水の精霊たちが悪いわけでも、ライアンのうでが悪いわけでもありませんでした。ライアン(と精霊たち)は持てるかぎりの、さいこうの力をはつ

きしました。でもそれだけでは、だめなんですね。やつぱりノランの
いう通り、かたくとぎされることになってしまった精霊王のトンネル
をあけることができるのは、もとからそれくらいの強力な力を持って
いる精霊たちでなくちゃ、だめみたいだったのです。いくら精霊使い
が、強力であつたとしても（たとえば……、今の精霊王のトンネルを
あけるために必要な力を、「二百万精霊パワー」としましょう。そして
精霊王のネックレスの持つ力を、「百万精霊パワー」とします。シル
フィアであるリズは、もともと百万精霊パワーほどの力を持っており
ましたので、リズが精霊王のネックレスを使えば、ごうけい二百万精
霊パワーとなり、このトンネルをあけることができました。やみの精
霊たちの場合は、ひとりひとりが「五十万精霊パワー」といったとこ
ろでしょうか？　ですからやみの精霊たちがふたりで協力すれば、
ネックレスを使って、なんとかこのトンネルをあけることがかのような
わけなのです（もっとも、協力できればの話ですけど）。

ところが、風や水、火や土といった精霊たちは、いわばいっぱんの、
ふつうの精霊たちでした。かれらのようなふつうの精霊たちは、この
ような精霊の力があふれかえっている場所であっても、どんなに力を
あわせたとしても、ごうけいでせいぜい二、三十万精霊パワーほどの
力までしか出せなかつたのです。それ以上の数の精霊たちが集まっ
たとしても、ほんらいの力が弱いため、大きくなりすぎた力がちつて
しまつて、それらの力をひとつにまとめることはできませんでした。
ですからライアンが精霊王のネックレスまで使つて、いくらがんばつ
てかれらの力を集めたとしても、さいこうでも精霊たちの力とあわせ
て、「百三十万精霊パワー」ほどをかせぎ出すのが、やつとだったの
です。

それではこんかいのように、トンネルのすがたをうつし出すくらい
のことまでで、せいっぱいでした。それを知っていたからこそ、ノ
ランは「むり」といったんですね。ライアンはそれを知らなかつた
というわけでしたが、それにしても、あんなにがんばつたというのに、は
じめから「あけられない」ときまつてたなんて、うくん、なんだか、気
のどくなライアン……）。

ですが、(いくらライアンのせいではないとはいえ)ライアンは落ちこんだまま、動けません。ロビーがいくらがんばっても、だめでした。ライアンは、よゆうぶって見せていましたが、じつは、ほんきのほんき、自分の持てるさいこうの力を出しきったのです。それでだめでしたから、その落ちこみ方も、さいこうちよう！ まあ、その気持ちもわかりますけどね……(うくん、どうしたもののやら)。

「しようがないなあ。」

見かねたマリエルが、「ふう。」とため息をついて、なにかをささやきはじめました。どうやらまたも、なにかの魔法のようです。

「ちよつと、気が乗らないけど、しかたありませんね。」

マリエルがそういって、ライアンに魔法のじゆつをかけました。ほわわん！ ライアンのからだが、きいろい光につつまれます。いったいなんの魔法なのでしょう？ と思っていると……。

「やつほ〜！」

ええっ！ ライアンがとつぜん、大声でさけんでとび上がりました！ な、なにごと？

「精霊が、なんだつてのさ〜！ ぼくは、ライアン・スタツカートだぞ〜！ シープロンドの王子さまなんだぞ〜！ かわいいんだぞ〜！ きやははははは〜！」

ちよ、ちよつとライアン、いったいどうしたの？

「じいしき・かじようのじゆつです。自分のいいところを大げさにじかくさせて、自信たつぷりにさせる魔法なんです、今のライスタをげんきにさせるには、これしかないと思ひまして。」

マリエルが、(口をあめぐりとあけてかたまっている)ロビーに説明しました。

「でも、ちよつと、ききすぎちやつたみたいですね……」

マリエルのいう通り、ライアンはもともと自分に自信たっぷりでしたから、それが魔法でますます強くなってしまうって、そのけっか、こんなハイテンションなライアンになってしまったというわけなのです……。うーん、これなら、もとの方がよかったかも……。

「こ、これ、どうするの？」ライアンのあまりの変わりように、ロビーが心配になってマリエルにたずねました。

「この魔法は、しばらくは消せないんです。五分くらいでおさまるかと思いますが……。すいません。」マリエルがすまなそうに、ロビーにいいました。

ロビーは、自分のまわりではしやぎまわっている（そのうえ自分ですごくからんでくる）ライアンに、またしてもなにもすることができず、その場に立ちつくして、ライアンのことをただただ、見守るほかありませんでした……。

「ほらほら、見て見て！ ロビーちゃん！ このポーズ、かわいいでしょ〜！ ほら〜、こ〜んなサービスもしちゃう！ ちやちやっちや、ちや〜ん！ こ〜んなどこまで見せちゃうよ！ きやははははは！」

「あらよ、つと。ほら、あいたぜ。」

ネックレスを持ったリズが、たきの水しぶきにむかつて力をこめると……。

ぶおおくん！

すごい！ さっきライアンがあんなにもがんばってあげようとした精霊王のトンネルが、あつというまに、目の前にその口をひらいたのです！（魔法が切れて「正気」にもどったライアンが、それを見てまたしても、がーん！ リズがあんまりかんとんにトンネルをあけてしまいましたので、ショックでまた、落ちこんでしまいました。あ、でも、もう魔法はいいですからね、マリエルくん！）

「さすがは、精霊王のネックレスだな。とんでもないパワーを持つてるぞ、こいつ。」リズが、手にしたネックレスをしげしげとながめながら、いいました。さすがのリズでも、自分の力だけでは、さらにか

たくとぎされてしまった今のじょうたいの精霊王のトンネルをあけることなんて、とてもむりなことでしたから。このネックレスの力が、トンネルのとびらをとぎしていたその力を弱めてくれたからこそ、こんなにもかんたん(?)に、トンネルの入り口をあけることができたのです(ちなみに、いぜんのじょうたいのトンネルであれば、精霊王のネックレスがなくても、リズならばあけることができました。いぜんのトンネルなら、今のじょうたいのトンネルをあけるための半分のみ、百万精霊パワーほどもあれば、ひらくことができましたのです。ですがリズは、トンネルをためしにあげてみたことはありませんが、「べつに用がないからいいや。」といって、中にはいりませんでした！
なんてもつたいない！

それからリズは、イーフリープに行くことはありませんでした。「だって、めんどうだし。」というのが、そのりゆうです。それに、家で曲を書いている方が、楽しいみたいでしたから。うくん、さすがはリズ)。

でもみんなには、そんなネックレスのことよりもなによりも、今いちばんきょうみをひかれてやまないものがありました。それはもちろん、目の前にひらかれた、この精霊王のトンネルです！

「すごい……！ さすがのぼくでも、はじめてのけいけんです。じつさいに、イーフリープへつづくトンネルが、ひらいているなんて……！」マリエルが、目の前にひらいたぼんやりとかがやくふしぎなとびらのことを前にして、いいました。

「ほら、すごいよ、ライアン。ほら、見て。」ロビーがそういって、また落ちこんでしまったライアンのことをひっぱってきて、自分の前に立たせました。

精霊王のトンネル……。ただの伝説と思われていた精霊王が、じつさいに住んでいるという、物語の中だけにそんざいするはずのくに、イーフリープ……。そのおとぎのくにへとつづくふしぎのトンネルが、今自分たちの目の前に、こうしてひらいていたのです。このアークランドの中のいったいどれほどの人が、こんなけいけんをすることができるのでしょうか？ こんなけいけんは、とくべつな、ほんとう

にとくべつな者だけが、一生にいちどできるかできないか？ というほどの、きちょうなものでした。今まさに仲間たちは、(そして読者のみなさんも、これを書いているわたしもふくめて)そんなとくべつなたいけんをしようとしていたのです。精霊王のもとへ！

「精霊王……。 精霊王！ はわわわ……。 どーしよー！」

われにかえったライアンが、急にそわそわははじめました。むりもありません。精霊になれ親しんできた、シープロンドの者たち。その中でもライアンは、王子さまとして、小さいころからつねに精霊とかかわつてすごしてきました。そんなライアンでさえ、精霊王なんてものは、夢のまた夢、とくべつの中のとくべつ。その伝説の精霊王に、今これから、自分が会おうとしていましたから。

メリアン王でさえ、精霊王に会ったことはありません。ルエルしきようさまだつて、レシリア先生だつてそうです。おそらくシープロンでは、はじめてでしょう。そのはじめてが、自分なのです！ 強がっていたライアンですが、じっさいに精霊王に会うというこのときとなつては、さすがにしりごみして、そわそわしてしまうのも、むりもないことでした。

そんなライアンのことを見て、ロビーがいったのです。

「これはきつと、精霊王さまからの、しようたいじょうだよ。」

「えっ？」

ロビーの言葉に、ライアンがおどろいていました。

「精霊王は、なんでも知っている。ライアンのことも、もちろん知っている。ライアンが、シープロンドいちの精霊使いだつてことも。だから精霊王は、ライアンをここに、まねいてくれたんだ。」ロビーがつけました。

「きつと精霊王は、ライアンがくるのを、楽しみに待ってる。だからライアンは、それにこたえてあげなくちゃね。ライアンは、すごいんだから。ぼくじゃ、精霊王を相手にするなんて、むりだよ。ライアンじゃなきゃ。だから精霊王は、ライアンのことを、しようたいしてくれたんだ。」

ライアンはしばらく、きよとんとしたままでした。

ロビーの言葉は、おせじでも、ごきげん取りでもありません。ライアンはロビーのことを、いわれるまでもなく、よく知っております。それこそ、なんでも知ってる精霊王みたいです。ですからライアンには、ロビーの心がよくわかりました。ロビーはほんとうに、心の底から、自分にきたいしているのです。精霊王の相手がつとまるのは、ライアンしかいない。ロビーはそう、自分にきたいしているのです。

さて、ライアンの反応は？

ライアンはうつむいて、だまつたままでした（あれ？ てつきり、「まーかせてよー」といって、自信まんまんにいばりちらすとばかり思っておりますのに。どうしたのでしょうか？）。

「……ふ……、ふ、ふ……」ライアンが下をむいたまま、ぼそぼそといいました。ど、どうしたのでしょうか？ だいじょうぶ？

心配したロビーが、どうしたの？ といおうとした、そのしゅんかん……。

「こーの、ライアン・スタツカートさまに、まかせておけーい！」

ライアンが、こぶしをふたつ、天高くつき上げながらさげびました！（よかった！ やっぱりライアンは、こうじゃなくっちゃ！ 思った通りの反応で、わたしも安心です！）

「そのほう！ よを、だれだと心得ておる！ おそれ多くも、シープレンドいちの精霊使いにして、王子。ライアン・スタツカートなるぞ！」ライアンは胸をのけぞらせて、いばりちらしながら、ロビーにゆびをぴしっ！ とつきつけていました（でも背がちっちゃかったので、あんまりえらそうには見えませんでした……）。

「やれやれ。やっぱり、精霊王と肩をならべられるほどのじつりよく者は、ぼくしかいないんだから、しかたないのか……。ぼくくらいになると、みんなが放っておかないんだから、まったくこまっちゃう。」

いいぞいいぞ、そのちょうし！ もう百パーセント、ライアンですね！

「よかった、げんきになったんだね。やっぱりライアンは、げんきなすがたが、いちばんいいな。」ロビーがほっと胸をなでおろして、心から安心していいました。

たまにはへこんでしまうこともあるけれど、やっぱりライアンは、どこまでもライアンです。おちょうし者のライアンです。じいしきかじょうなライアンです。なまいきで、負けずぎらいで、へらず口のライアンです。お菓子が大好きなライアンです。かわいいと、自分でみとめているライアンです。

みんなが大好きなライアンです。

ライアンは、これでいいですよね！

ライアンがまた、いつものちょうしで、マリエルやリズにからみはじめました。マリエルとは、またわーわーきやーきやー、やりはじめしております。そんなライアンのことを見て、ロビーは笑いがとまりませんでした。マリエルは、「ちょうしのいいやつだ。」とあきれしております。リズも、「おかしなやつだな、おまえは。」と思わず笑ってしまいました。

「さあ、いくぞー！ なにをぐずぐずしてるんだー！」ライアンがうでをさつとふって、兵士たちにしじを送るしきかんのようなしぐさをしながら、みんなにいいました。

「ライスタがかってにわーわーさわいでたから、さきに進めなかつたんでしょー！」マリエルがぶんぶんいいましたが、これはもう、いつものやりとりでした。

「よし、いくぜ、ついてきな。」リズがそういって、池の上をちやぼちやぼと歩いていきましたが……。

「ちよつと待った！ ぼくが先頭！」ライアンがそうさげんで、とめました（やつぱり。そういうと思いました）。

またマリエルがみずすましのじゅつを使って、みんなは池の上を、たきの前のトンネルまで歩いていきます。そしてトンネルの前までたどりつくと、ライアンがいちばんにその中に飛びこみました（やっぱり。そうすると思いました）。ロビー、マリエルとつづいて、待っていたリズムも、やれやれといった感じで、トンネルの中にはいます（トンネルの中は、ほんとうにふしぎな空間でした。まわりのかべは、かたいようで、やわらかいようで、しかもぐねぐねと動いていたのです。その色も、赤いようで、青いようで、白いようで……、まったくらえどころがないといった感じでした。そしてはるかなむこうに、明るい光の出口がひとつ、見えていたのです）。

ついにみんなは、精霊王の待つイーフリープへとはいりこむのです。そこで仲間たちは、どんなたいけんをして、なにを得るのでしょうか？ ノランはいいました。「そこでおぬしは、さいごのしれんを受けなければならん……」

つづく道のさきには、いったいなにが、自分のことを待ち受けているというのでしょうか？ ロビーはもういちどけついをかため、両手をぐつとにぎりしめました。

いよいよだ……。

ロビーは心の中で、そうつぶやきました。

「らーいあーん、すたっかーあとー……」

目の前には、うでをふって歩きながら歌っている、げんきなライアのすがたがありました。

23、精霊王のふしぎのくに

おとぎのくに……、それはわたしたちの住む世界とは、時間も場所も、しぜんのなり立ちさえもことなる、ふしぎにあふれる世界なのです（今さらいうまでもないでしょうけど）。そのおとぎのくにの中のひとつを、みなさんはこれまでに（二十二章に渡って）たいけんしてきました。それはもう、いうまでもありませんよね。そう、このロビーの冒険の物語のぶたいである、アークランドです。

このアークランド世界は、まぎれもなくおとぎの世界でした。ですがこのアークランド世界においてさえも、なお、おとぎのくにというものはそんざいするのです（前にもいいましたけど）。

そのひとつが、精霊たちのくに。精霊たちの住むくには、おとぎのくにアークランドの中においても、まったくもっておとぎずれることすらむずかしい、未知なる世界でした。そういう世界は、ほかにもあります。いちばんよく話に出るのが、死者たちのくに。あの世とか、この世とか、いいですよ。らくえんのような世界もあれば、おぼけがいっぱい住んでいる、ちよつとこわい世界まであります（フェリアルは、ぜつたいにいきたくないでしょうけど）。

ほかにも、悪魔たちが住んでいる、魔界などとよばれている世界（みんなぜつたいにいきたくないでしょうけど）や、精霊よりもつとしんぴ的な、エーテルという、すがたを持たない生きもの（生きものによべるかどうかはわかりませんが）たちが住んでいる世界など、わたしたちの目には見えないだけで、この世界のそばには、じつはたくさんの世界が、そんざいしていました。

ですが、そんなおとぎずれることすらむずかしい未知なる世界とはいえ、精霊たちの世界は、ほかのたくさんの世界の中でも、もつとも身近な世界であるといえることでしょう（それでも、「ちよつと、精霊のくにまであそびにいってくるね!」「夕ごはんまでには帰ってくるのよ。」などといった親子の会話が聞こえることなどありえないくらいに、近くて遠い世界でしたけど）。精霊の力というものは、わたしたちの住む世界のほとんどすべてのものごとに、かんけいしていましたから

（水の精霊がいなければ、水がなくなってしまう。風の精霊がいなければ、息をすることすらできません。わたしたちが生きていくうえで、精霊の力は、ぜったいに必要ふかけつなものでしたのです）。

しかし、こんかいわれらが仲間たちがむかうのは、そんな精霊たちのくにも中でも、とくべつの中のとくべつ、伝説の中の伝説。もういうまでもありませんよね。精霊王の住む、ふしぎのくになのです。

イーフリープとよばれるそのくには、ただのお話だと思われる。ただのお話にすぎないと、今でも思っています。それはイーフリープが、この世界とはまったくまじわることなく、遠く遠く、あまりにも遠くかけはなれていたためでした。

どんなに力のあるまじゆつしでも、どんなにゆうしゆうな精霊使いでも（ライアンでも）、自分の力だけではイーフリープに出かけていくことなどは、できません。イーフリープとこのアークランド世界をつなぐ道は、精霊王のトンネルとよばれるとくべつな道がいいには、まったくありませんでした（このトンネルのそんざいは、ノランなど、ごく一部の者たちのみが知っているだけでした）。そしてそのトンネルはかたくとぎさされていて、ごくかぎられたとくべつな力もちいなかぎり、その入り口をひらくことなどはできなかつたのです（精霊王からおくられたネックレスを使ったり、リズのようにとんでもないほどの精霊パワーを持っている者が、その力をぶつけたりしないかぎりは。ですからどんなにすごいまじゆつしや精霊使いなどであっても、自分の力だけでは、このトンネルをあけることなどはできなかつたのです）。

宝玉の力が弱まったことで、このアークランドの力のバランスはくずれてしまいました。それは精霊王のトンネルも同じでした。むやみにトンネルをあけてしまえば、くずれた力のバランスが、イーフリープ世界の中にまで広がってしまうかもしれないのです。そのためトンネルは、イーフリープ世界の中の精霊エネルギーによって、さらにさらにかたくとぎされてしまいました（そのかたさは、およそ二ばいになりました。いぜんだったら精霊王のネックレスさえあれば、

ふつうの人でもすぐに、トンネルをひらくことができましたけど、今ではそれに加えて、リズほどの精霊パワーの持ちぬしが必要になってしまったというわけでした。かれらの世界とわたしたちの世界とは、かんぜんに切りはなされたのです。今までだって、このトンネルをあけることなどは、（それこそとくべつな力でももちいなかぎり）ほとんどむりなことでしたが、これでけつてい的になりました。このトンネルをあけることなんて、ふかのうです。大けんじゃノランにだって、むりなことでした。イーフリープはこうして、人知れず、伝説の中に消えていったのです……。ふつうだったら。

ですが今、ふつうではないことがはじまろうとしていました。

精霊王は、なんでも知っていますのです。あけることのできないトンネルを、ロビーたち、われらが仲間たちになら、あけることができるということも。

ロビーの持つ、青いネックレスの力。そしてロビーのことを助ける、仲間たちの力。それらがひとつとなれば、かれらはあけることのできないトンネルをあけて、自分のところまでやってくる。精霊王はすべて見通していました。

そして今、仲間たちはそのあけられるはずのないトンネルを自分たちの力であけて、精霊王の住むふしぎのくに、伝説のイーフリープ世界へと、ふみこもうとしているところだったのです。

トンネルの出口が、近づいてきました。

イーフリープへ、さあ、ふみ出しましょう。

「きたか……」

白くかがやく石でできたバルコニーに、ひとりの人物が立っていました。その人物は目の前に広がる美しい景色をながめながら、静かな表じょうをしてそうつぶやきました。

そしてそのうしろの白い部屋の中から、今もうひとりの人物がやってきました。その人物は小さなバルコニーへとゆつくりと歩みを進め、さきにいた人物のとなりにも、ならんで立ちます。

「えんろはるばる、くくろうさまなことでございますな。」

あとからやってきた人物がいました。その声は、かなりのおとしよりの声でした。白い美しいガウンをまとって、肩からは、大きな水色のたすきをかけております。その手には、金色の糸であんだ美しいかんむりをひとつ、持っていました。このかっこうは……？

そう、この人物は、シープロンドのしきようさま。ルエル・フェルマートしきようさまだったのです。ということは何？ そのとなり、バルコニーに立っている人物は……、その通り、メリアン・スタツカート王でした（ひよつとして精霊王？）。と思つた方もいたかもしれませぬね。とつぜん場面が変わりましたから。精霊王は、もうちよつとあとで……）。

「ふっ。」ルエルしきようさまの言葉に、メリアン王が小さく笑いしました。「そうだな。かれらの思い通りには、ならんよ。」

かれらが見つめるさき。さしこみはじめた朝日にてらされた、シープロンドの美しい景色のそのむこう。みどりの平原のむこうから今、黒くうごめく雲のようなものが見えはじめてきました。それはゆつくりと動いていて、こちらへとむかつてくるところだったのです。まさか、これって……！

そうです、シープロンドのお城のバルコニーから見おろした、そのさき。そこからやってくるその黒い雲のようなものは、すべて、黒のよろいかぶとに身をつつんだ、ワットの兵士たちでした！ その数は、およそ八百。ついにワットの軍勢が、このシープロンドへとせめこんできたのです！（ワットの黒の軍勢は、今そのほとんどが、エリル・シャンデーインでの戦いにむけてしゅうけつしていました。ですからこのシープロンドにせめこんできたのは、北の地の守りについては、ごくわずかな兵士たちだけだったのです。それでも、これだけの数の兵士たちが集まりました。この八百人という数字は、シープロンドにとって、きょういのはずでした。なにしろシープロンドは、軍

を持たないへいわなくに。ごえいのための衛士たちが、わずかに二百人ほどいるだけでしたから。さあ、シープロンドは、メリアン王は、このきょういに、いったいどう立ちむかおうというのでしょうか?)

今からすこし前のこと……。

このシープロンドのくにの門に、人間の男せいが三人やってきました。その者たちは黒い毛がわの服を着ていて、そのうちのふたりは、腰に大きな気味の悪い剣をさしていました。からだつきもがっちりとかくましい、ふたりです。これはもう、あきらかにようじんぼうでした。武器を持たない残りのひとりのことを守るために、ごえいとしてついていたのです。では、その残りのひとりとは?

あとのひとりは、うでにエメラルド色の花のマークのはいった白いリボンをつけていました。このリボンに、みなさんは見おぼえがありますよね。そう、このリボンは、使者のあかし。そしていうまでもなく、この者たちはワットの者たちでした。つまりワットの使者たちが、シープロンドへとやってきたのです! こうふくか? 戦いか? そのこたえをもとめて。

「これは、アークランドの正式ながいこうである。」ワットの使者たちが、いちまいの紙切れを見せながら、門の衛士たちにいました(が)いこうとは、取りきめをおこなうために、よそのくにの人たちと話しあうことです)。

「しよくんらシープロンドは、わがワットに対し、ゆるされざるつみをはたらいた。そのつみに対し、わがワットは、ここに、シープロンドへ、正式なつぐないをもとめるものである。こうふくか? いくさか? 好きな方をえらぶよう、メリアン王に取りついでいただきましたい。」

「その必要はないぞ。」

声の方を見ると、まさに今、そのメリアン王がふたりのシープロンのそつきんたちをつれて、衛士たちのむこうからこちらへとやってくるどころでした。使者たちがやってきたということは、すでにメリアン王のもとへ、あのれんらくラツパによってしらされていたのです。

「わざわざのぐそくろう、たいへんぐくろうさまです。どうでしょう？ あちらのあずまやで、ゆつくり、ハーブティーでもいかががですか？ おいしいクッキーもありますよ。ああ、バターケーキの方がよろしかったですか？」メリアン王がおちつきはらったようすで、使者たちにいいました。

「そうそう、じつは、新しい人形げきができたんですよ。これがまた、けっさくで。どうですか？ みなさんで、楽しもうじゃありませんか。きみ、すぐに、人形げき屋をよんでくれ。」メリアン王がつづけて使者たちにいつて、それからこんどは、衛士のひとりにもわかつていいました。

「のんきなことを、いつている場合ではないー」このたいどに、ワツトの使者たちはすつかりおかんむりです。「しよくんらは、はんぎやくのつみをはたらいたのだ！ そのつみは、重いぞ！ アルファズレド王のとくしやなど、考えないことだ！ さあ、こうふくか？ 戦いか？ こたえてもらおう！」（とくしやというのは、とくべつなゆるしということですよ。）

ですがメリアン王は、またしてもすずしい顔をしていいました。

「はて？ はんぎやくのつみとは、どういうことですか？ さつぱり身におぼえがありませんが。そなたは、なにか知っているか？ ルーベルアン。」

いわれて、となりのルーベルアンがこたえます。

「さあ、なんのことやら、わたしにもわかりませんが。フォルテール、きみはどうかな？」こんどはルーベルアンが、となりのフォルテールにいいました。

「はんぎやくつて、なんでしたっけ？ おいしいの？ なにしろこ

こは、あらそいななどは、むえんの地。そんな言葉の意味すら、おぼえておりませんね。」

「く……、この……」

使者たちはこぶしをにぎりしめて、かんかんです！ ですけど、使者がぼうりよくをふるつてはいけません。メリアン王たちも、それがわかつていて、からかっていたのです（ほんとうなら使者をからかう

なんて、してはいけませんでしたが、相手はワットの使者たちですもの、すこしくらいかまいませんよね？ わたしもちよつと、楽しんでしまっているんですけど。ぷぷー！)

と、そのとき。道のむこうからゆつくりとした足取りで、ひとりの老人がやってきました。その人は、ほかでもありません。ルエルしきようさまだったのです。

「これこれ、みなさま。神さまの前において、いいあらそいなどはいけませんぞ。」ルエルしきようさまが、メリアン王たちにむかつていいました。

「王さま。お客さまをからかつては、いけませんな。これは、とんだごぶれいを。ルエルしきようさまがそういって、ワットの使者たちに頭を下げました。

「おお、ようやく、話のわかる者がやってきたか。」使者たちは、しきようさまのたいどに、すっかりきげんをなおしたようでした。「まったく、このくにの王は、なんとという王だ。これでは、話にならない。」

いわれたメリアン王は、しゅーん……、とちぢこまってしまいます。ルーベルアンとフォルテールも、王さまとならんでひっこんでしまいました。ここは、ルエルしきようさまにおまかせしましょうか。

「そなたは、しきようのようだな。では、じようしきもわきまえておろう。しよくんらには、ワットへのはんぎやくのつみがかけられておる。こうふくに応じなければ、ワットは武力によって、このシープロンドをせめ落とすだろう。われらとしても、そんなまねはしたくはない。さあ、早く、心をきめるのだ。ワットに、こうふくせよ。悪いようにはせんぞ。」

使者たちはそういって、ルエルしきようさまの言葉を待ちました(メリアン王にいつても、むだだとわかりましたから。しきようさまなら、王さまと同じくらいいのけんりがあるのです)。

ルエルしきようさまはしばらくだまっていたあと、「ほっほっほ。とおだやかに笑います。そして……。

「りゆうがわかりませぬな。」

「な、なに？」思わぬしきようさまの言葉に、使者たちはおどろいていました。

「あなた方がわれらにさしずする、そのりゆうがわかりませぬ。はんぎやくですと？それは、だれのきじゆんによるものでしょう？この世のすべては、神さまのおぼしめしによるもの。われらは神さまのご意志にしたがって、われらの道を進むのみでございます。あなた方の道ではございません。あなた方のさしずは受けません。」

ルエルしきようさまはおだやかにほほ笑んでいました。そこにはかたいたい、シープロンとしてのほこりといげんがみちあふれていました。

うくん、どうにも、やくしやがちがいます。これではさすがのワットの使者たちも、どうすることもできませんでした。

「く、ぐむむむむ……！」使者たちは歯をぎりぎりとかみしめて、くやしかりました。

「おのれ！ おぼえておけよ！」使者たちはそういつて、そそくさと身をひるがえします。

「これでシープロンドは、われらの敵だ！ ただちに、せめ落としてくれる！ あとで泣きついてきても、もうおそいぞ！」

使者たちはそうはきすてるようにさげんで、馬たちに乗って去っていききました（いかにも、悪やくといった感じですね）。

「べろろべろろべろ！」メリアン王が、去っていく使者たちにむかつてべろを出してやりました。ルーベルアンとフォルテール、衛士たちまでもが、そろってそれにつづけて、べろを出したり、おしりをぺんぺん！ 「やーいやーいー」とからかいます（ルエルしきようさまに、「これこれ、まったく。」とあきれられてしまいました）。

いやはや、さすがは、メリアン王とシープロンドの者たちです。こんなワットのおどしになど、まったく応じません（ライアンのくにですものね）。でも、心配なのはワットです。これでワットは、このままほんとうに、このシープロンドにせめこんでくることでしょう。シー

プロンドは軍を持たない、へいわなくに。ろくな武器もありません（衛士たちの持つているのは、ほんらいかざりのためのやりなのであって、戦うためのものではないのです）。ワットののおそろしい軍勢にせめてこられたら、ひとたまりもないはずでした。いったいかれらは、ほんとうに、どうするのでしょうか？

しかし……、その点についてはご安心を。このシープロンドには、まだまだ、みなさんの知らないひみつがかくされていたのです。そしてそれこそが、たとえば大軍勢でせめてこられてもびくともしない、シープロンドのくにの強さにつながっていました。それはもうちょっとあとの、お楽しみ。このさきの物語の中で語るとしましう。

そしてふたたび、時間は今へ。

まさに今、このシープロンドへ、ほんとうにワットの軍勢がせめこんできたところでした！（さきほどの、シープロンドのお城のバルコニーでの、メリアン王とルエルしきようさまの会話。その会話へのいきさつは、こういうわけからでした。）

「くにのみなさまには、タドウーリのほよう地へと、出かけていただいております。ねんのため、でございますが。」ルエルしきようさまがいました。

「すぐに、帰ってくるだろうよ。」メリアン王がこたえます。「ワットのみなさんは、すぐに、お帰りになるからな。ワットもこれで、すこしはおとなしくなるだろう。」

それからしばらく、ふたりはだまって、かなたの平原を見つめていました。

とつぜん、ルエルしきようさまが「ほっほっほ。」と笑って、いいました。

「王さまも、ごりっぱになられましたな。あの冒険の旅から、もう、三十年でございますか。」

「そうだな。」メリアン王が、「ふふっ。」と笑ってかえします。「今ではわたしのむすこが、同じことをしている。親子とは、よくになるものだ。」

そういつて、メリアン王は手にしたブローチのことを見つめました。そのブローチはライアンに持たせたブローチと対になっている、あの星がたのブローチでした。ライアンの身に危険があれば、光ってしらせるというやつです。メリアン王はライアンが出発してからというものはだみはなさずこのブローチを持っていて、それこそ一分とあけずにながめていました（寝ているときは、さすがにむりでしたけど。ちなみに、今ブローチはぜんぜん光っていません。ライアンがげんきだからです）。

「ライアンさまは、ひとまわりもふたまわりも大きくなって、もどられましょう。」ルエルしきようさまがいました。「そうやって、人はみな、成長をしてゆくのです。このさきも、そのまたさきも、ずっと、変わることもなく……」

そうして、メリアン王とルエルしきようさまは、このバルコニーをあとにしたのです。

「さて。ちよつと、あそんでくるとしよう。」

白いうかをひとり進みながら、メリアン王はむかしのことを考えていました。旅のこと。かつての仲間たちのこと。

「アルファちゃん……」メリアン王がつぶやきました。

「また、むかしみたいに、みんななかよくできたらいいのにね……」

メリアンの目には、うっすらと、なみだがあふれていました。

「いくぞっ！ それっ！」

ライアンがいきおいよく、トンネルのそとに飛び出しました！

ついにみんなは、精霊王のトンネルの、その出口へとたどりついたのです。そしてやっぱり、ライアンがいちばんに飛び出しました（出口のそとは光っているだけで、なんにも見えませんでした。ですからみんなは、意をけつして、そとに飛び出したのです）。

ついに、イーフリープへ！

ロビー、マリエル、リズも、ライアンにつづいてトンネルから飛び出します。さて、そこはいつたい、どんな世界なのでしょう？ さぞ

かし、あつちもこつちも、精霊にみちあふれているに、ちがいないでしょうね。

ですが……。

「うわわっ!」「うわわっ!」「おーつと!」

さきに出たライオンに、つづいて出たロビーが、どしん! それからマリエルが、ロビーの背中に自分の頭を、ごっつん! さいごにリズが、みんなにつまずいて、すってんころりん! どしーん!

「いたたた……!」「な、なんです……!」「なんだよ、もうー!」

みんなそれぞれ、腰をさすったり、頭をおさえたり。いったい、なにごとが起こったというのでしょうか? そのこたえは、みんなが飛び出した、そのさきの場所にありました。

おちつきを取りもどして、あらためてまわりを見まわしてみると……、そこは小さな、部屋の中。大人が四人はいつたらいっぱいになつてしまうほどの、小さな小さな部屋の中だったのです。なるほど、こんなに小さな部屋に四人がいきおいよく飛び出したら、おたがいにごちーん! ぶつかりあつてしまうのもとうぜんのことでした(いくらそのうちの半分が、ちびっ子でも)。

でも待つてください。ここはほんとうに、「部屋」なのでしようか? トンネルはみんなが飛び出すのと同時に、消えてしまいました(帰りはまた、ほかの出口を見つけなければなりませんね)。立ち上がった見てみると、床やかべやてんじょうは木でできていて、床の両はしには、同じく木でできた、赤いつるつるとしたペンキがぬられたベンチがつくりつけられております。ベンチはそれぞれむかいあうようにつくられていて、それぞれの席にふたりずつ、すわることができるようになっていました。ひとつのかべには小さなとびらがついていて、鉄のとつてをひねると、とびらがあくようになっていたみたいです。

ですがそんなことよりも、いちばんに気をひくものがありました。それはこの場所をかこむまわりの四つのかべの、腰の高さより上の部

分が、ガラスまどになっているということでした。つまり、ちょうどこの木のベンチにすわったときに、そのまどから、そとの景色をながめることができるようになっていたというわけだったのです（あれ？　こんな場所って、たしかどこかで見えたことがあるような……）。

そしてこの場所がどこなのか？　そのこたえが、そのガラスまどのそとにあったのです。

ここは……、はるかな空の上でした！　ええっ！

まわりはずうっと、海が広がっています。時間は、おひるごろでしようか？　いいおてんきでしたが、おひさまのすがたはどこにも見えませんでした。すいへいせんのかなたには、まっ白な雲がかかっています。

いったい、今いるここって、どんなところ？　そしてみんながガラスまどに張りついて、あたりのようすをじっくりながめたときに、またそのこたえが出たのです。

「な、なんだー？　これー！」

ライアンが思わず、さけびました。

まわりはみんな海でしたが、下を見たとき、みんなは自分たちが今どんな場所にいるのか？　わかったのです。ここは海に浮かぶ、どこかの島でした。そしてそれは、ただの島ではなかったのです。そのあちこちに、色とりどりのまんまるなやねがならんでいて、もつとよく見てみると、くるくるとまわる木の馬の乗りものや、すいすいと走るしやりのついた乗りものなどが、その地面には動いていました。そしてマリエルの出したじえつとこーく・すくりゅうの魔法のレールと同じようなレールが、あちこちに張りめぐらされていて、その上を同じくトロツコが、びゅんびゅんかけめぐっていたのです！　たくさんの風船が、あちこちにふわふわと飛んでおります。どこからか、楽しい音楽がきこえてきました。

こ、これってまさしく……。

そう、ゆうえんちです！

そしてみんながいるのは、その「大かんらんしゃ」のゴンドラの中でした！ ええーっ！ イーフリープって、ゆうえんちだったの！

みんなは見えたこともないそのふしぎな光景を、ガラスまどにぺったりと張りつきながら、くいているようにながめ渡しました。それもそのはず。みなさんの世界だったら、ゆうえんちなんて今さらめずらしいものでもないかもしれませんが、かれらはおとぎのくに、アー克兰ドの住人たち。こんな（あからさまな）ゆうえんちなんてものは、まだアー克兰ドのどこにも、そんざいしていませんでしたから（カピバラ老人の鉄の馬や、フログルたちのケロケロボート、けんじやリブレストの岩のロボットたちなどを、みんな集めたら、ゆうえんちができるかもしれないけど。カルモトの木のモーターボートと、もちろん、マリエルのこーくすくりゆうーもいっしょに）。

ですから自分たちが今乗っているのが、かんらんしゃというものだなんて、みんなはまったくわかっていませんでした。あちこち見まわしてみても、ようやく、自分たちが乗っているのと同じ小さな部屋が輪をえがくようにほかにもいくつもあって（自分たちのいる部屋もふくめて、全部で十六もありました）、それらがゆっくりかいてんしているということなどが、わかったのです（そしておちついてみると、乗りものががてなロビーは、やっぱりベンチにしがみついて、「ひええ……！」とこわがりはじめてしまいました。なにしろ、空の上ですもの）。

そしてみんながひとつ、気がついたことがあります。それはほかの小さな部屋にも、下の島にも、人や生きもののすがたがまったく見あたらないということでした（レールの上を走りまわっているトロツコにも、だれも乗っていませんでした）。小鳥の一羽や、虫の一ぴきさえ、飛んでいなかったのです。きこえてくる楽しい音楽とはうらはらに、みんなはなんだか、不安な気持ちになってきました。小さな部屋のとびらのすきまから、風がひゅーひゅー、はいりこむ音がひびいてきます。きしきしと、部屋のまわる音が、小さくきこえてきました。

「下に、つくみたい。」

ライアンが、せまってくる地面のことをのぞきこみながら、いいました。

「かっつてにおりて、いいのかな?」

「早くおりよう。」ライアンの言葉に、すかさずロビーがこたえます（ロビーはこんなおっかない乗りものから、早くおりたかったのです）。

「とびらは、自分であけるみたいだね。よっ、と。」

ライアンがそういってとびらをあげましたが、かんらんしゃというものは、下についたからといって、そこでとまってくれるというわけではありません（乗ったことのある人なら、わかりますよね）。ですからまだおっかながっているロビーは、ライアンやマリエルにうでをひっぱられて、ようやく地面におり立つことができました。

「ふえー、すごいな。」

まつさきにおりていたリズが、かんらんしゃをかこんでいる鉄のさくの上に立って、あたりをきよろきよろとながめ渡しながら、感心していました（ロビーのせわをしておりましたので、ライアンはリズに、さきを越されてしまったのです。それより……、そんなところに立ったら、あぶないですつてば、リズさん!）。

「ここにあるもの、これ、みんな、精霊のエネルギーだけでできてるぜ。このさくだって、ほら、鉄みたいだけど、鉄じゃない。」

リズがそういって、くつのさきつぽで、さくをこつこつとけりました。そして、なるほど、それはただの鉄ではなくて、こまかい火花のような精霊エネルギーが、ばあっ!とあたりに飛びちって消えていきました。

「なんだか、イーフリープのひみつがわかってきた……」マリエルが、こうふんしたようすであたりをかんさつしながら、いいました。「ここは、われわれの世界とは、あきらかにちがう。ぶっしつをかたち作っている、そのしくみすら、ちがうんです。イリアドルハのほうそくが、ぜんぜんつうようしない。これじゃ、ほんとうに、ただのお話

だといわれるはずです。」

だれもが知らない、自分の持っているりろんがまったくつうようしない、お話の中だけのふしぎのくに……。マリエルはまだ知れぬ世界をまのあたりにして、胸の高まりがおさえられませんでした。未知なるもの……。新しいりろん……。それらを発見することは、けんじやをめざまじゆつしたる者の、さいこうのしごとのひとつでしたから（ところで、イリアドルハのほうそくってなに？）。

「ここどこかに、精霊王が……。ライアンも胸を高ならせて、あたりをきよろきよろとながめ渡しながら、いいました。精霊使いならだれでもあこがれる、伝説の精霊王。その精霊王に、今自分が、もつとも近づいていたのです（でもちよつと、「ひよつとしたら、名物のお菓子屋さんがあるかも……。）」とさがしていたそうですが……）。

「ほんとうに、ここにぼくが……。」ロビーがつぶやきました。
「……まったくなんにも、おぼえていない……」

ノランのいうことには、ロビーは十さいになるまで、このイーフレープで暮らしていたというのです。ですがノランやアルマーク王の説明の通り、ロビーにはまったく、なんのきおくも残されてはいませんでした（っていうか、ロビーってゆうえんちで暮らしてたんでしょうか？ だからこわい乗りものに乗れすぎて、それがトラウマになつて、乗りものがにがてになつたのかも……。とまあ、それはわたしの、かつてなそうぞうなのですが）。

「とにかく、「リズがいいました。「あちこち、まわってみようぜ。このあたりには、精霊王がいるようなパワーは、感じられないしな。まわってれば、そのうち会えるだろ。」

「それにしても、精霊のひとりもないのは、どうしてだろ？」すたすと歩き出しながら、ライアンがいました。「みんな、おひるごはんの時間なのかな？ あ、精霊だから、ごはんは食べないか。」（そのうしろでは、リズがうでを頭のうしろにくみながら、「ぜんいん、はらいたで、トイレにはいつてるのかもな。」といていました……）

そうしてみんなが、このゆうえんちの中へと歩み出していった、そ

のときのこと……。

「おひさしぶりですね、ロビーベルク。」

とつぜん、うしろから声がありました！ みんながびつくりしてふりかえると……、そこに、みどりのきぬの服を着て、かがやくこがね色の長いかみをした、男とも女ともつかない、すらりとした美しい人がひとり、立っていたのです！ ええっ！

いったいどこから……！ だつてさつきまで、そこには自分たちがいない、だれもいなかったはずでしたから（おばけでもないみたいですし）。ということとは……？

そう、もちろんこの人は、ただの人ではありませんでした。このイーフリープの住人、精霊の種族の者だったのです（ちなみに、せいべつはわたしたちの世界でいえば、男ということになりました）。

「待っていましたよ。」その人が、ゆつくりとこちらに歩みよりながら、いいました。「とのぎみも、あなたに会えることを、心待ちにしておいでです。大きくなられましたね。」

その人は、おだやかにほほ笑んでいました。そしてもちろんこれは、ロビーにいつていたのです。

「リーファイ……」

ロビーが肩をふるふるとふるわせて、つぶやきました。え！ ロビー！ この人のことを、知っているんですか！ だって、きおくはみんな、消えているはずじゃ……？

「リーファイ！ リーファイ！」ロビーが急に、さげびました。ロビーの中で、なにかがはじけたような、そんな感じでした。

「会いたかった！ ずっと、会いたかった！ ぼくは、ひとりぼっちで……、ずっとひとりで……、うわああん！」

ロビーはそういって、そのリーファイという人にだきつきました。大きななみだを、ぽろぽろこぼして……。ロビーはまるで、母親とはぐれていた子どものように、わんわん泣いて、そのリーファイのうでの中に飛びこんだのです。

「つらかったのですね。」リーファイがロビーをだきかかえながら、静かにいいました。「ほんとうに、あなたはよくやりました。よく、がんばりました。」

仲間たちにはまだ、なにがなんだか？ よくわかりませんでした。ただライアンは、ロビーを取られてしまったみたいで、なんだかちよつと、いい気持ちはしませんでしたが。リーファイに、やきもちをやいてしまったのです。そんな中で、ただただロビーだけが、胸の中にふうじこめられていた強い思いをいつきにばくはつさせて、大声で泣きつづけていました。

「はじめまして、みなさん。」

そういつて、リーファイとよばれたその精霊の種族の人は、みんなに静かでていねいなおじぎをしました。

「わたしは、リフィルタルエ。精霊王のとのぎみにつかえております。みなさんを心より、かんげいいいたします。よく、いらつしやいましたね。」

精霊王につかえている、こがね色の長いかみの、すらりとした美しい人……。みなさんはこの人物に、見おぼえがあるはずです。いぜん、わたしがひと足さきに精霊王の森のことをしようかいしたときに（ちなみに、十五章のはじめです）、その森の中で出会った人物。そう、あのときの人物こそが、このリフィルタルエ、リーファイとよばれる人物でした。

リーファイ。それはこのイーフリープで精霊王につかえている、イーフリープでの（精霊王いがいの）ゆいいつの住人でした（え？ ゆいいつなの？ とおどろかれるかもしれないませんが、このイーフリープという世界は、もともと精霊のエネルギーだけでできている世界。アーランドのように、精霊たちがそのすがたをじつさいにあらわしたりしているというようなわけでは、じつはありませんでした。さぞかし、すごい精霊たちがうようよいるんだろうな、と思われていた方は、ごめんなさい。ちよつと、きたいはずれだったかもしれないね。でもここはやつぱり、伝説のイーフリープ。精霊のすがたはなくても、

ちやんときたいには、おこたえでできるはずですよ。そしてこのリーフイは、イーフリープで暮らしはじめた小さなロビーの、その育ての親だったのです。

ロビーは五さいのときから、このイーフリープですごしてきました。まだ小さかったロビー。わけもわからず親のもとからはなれ、とつぜん、こんなところへとつれてこられたのです。もちろんそのときのロビーに、ここがイーフリープというつくべつな場所だなんていうことが、わかるはずありません。わけもわからない場所に、とつぜん放りこまれた、小さなロビー。そんな不安な気持ちにあふれていたロビーのことを、あたたかくつつみこんだのが、リーフイでした。

リーフイはロビーに、あらゆることを教えました。ベンキよう、うんどう、げいじゆつ、食べられる植物の見分け方から、肉や魚の料理のしかたまで……（もちろんこれらは、このイーフリープにはそんざいしませんでしたから、リーフイが精霊エネルギーを使って作り出したのです）。

ちなみに、このイーフリープでは精霊エネルギーをからだに取り入れることで、それがごはんのかわりになりました。じつさいにはリーフイが、アー克蘭ドと同じようなごはんのかたちにして、ロビーに食べさせていましたけど。いつの日か、ロビーがアー克蘭ドへと帰るときがくる。リーフイには、そのことがわかっていたので。ですからリーフイは、そのときのために、ロビーにさまざまなことを教えこみました。

リーフイは小さなロビーにとって、ただひとりの家族でした（イーフリープにいたロビーでさえ、精霊王のすがたを見たことはありませんでしたから）。いっしょに、泣き、笑い、怒り、かなしみ……。その思いは、きおくをなくしたはずのロビーの心のおく底に、ずっと消えることなく、残っていたままだったのです。今ロビーはここで、そのずっとずっと会いたかった心の底の家族に、ふたたびめぐり会えました。そのしゅんかん、ロビーの心の中に消えていたはずのきおくが、いつきによみがえったのです。リーフイ、リーフイ……。そしてロビーは、そのあふれる思いを、リーフイにぶつけました。

「精霊王に、つかえているんですか!」リーフィの言葉に、マリエルがおどろいてそういいいます。

「では、ぼくたちのことは、もう、いうまでもないはずですよ。精霊王のところまで、あんないしてただけですか?」

「そう。精霊王からとくべつな力をさずかるようにと、ノランさんにいわれたんです。」ライアンがマリエルにつづけて、いいました。「あ、ぼくは、ロビーのせわやくの、ライアンです。ロビーの、せわやくのー。あと、いちばんの友だちのー。」

ライアンはまだ、リーフィにやきもちをやいたまんまでした。それで、すこしおちついてきたロビーのことをリーフィからささっと取りかえすと、いじの悪い感じで、リーフィにいったのです(まったく……)。

ですがリーフィは、「マリエルにいわれるまでもない」といった感じでした(ライアンのいじわるには反応しませんでした)。ロビーたちがやってくるといふことは、はじめからわかっていましたから。ですからリーフィは、おだやかにほほ笑んだまま、仲間たちに行ったのです。

「精霊王は、あなたたちのすぐそばにいらっしやいます。」

「えっ!」その言葉に、みんなはおどろいて、どこどこ? とあたりを見まわしました。ですけどどこにも、精霊王のすがたはありません(まさか、あそこに飛んでくるくまのかたちの風船が、精霊王じゃないですよ?)。

そんなおどろいているみんなのを見て、リーフィがいいました。

「精霊王は、このイーフリープ世界、そのものなのです。」

もういちど、ええっ! ここが全部、精霊王ってこと? それっていったい?(じゃ、じゃあ、あの風船も精霊王ってことで、まちがってなかったんですか? じょうだんでいったのに。)

「精霊王は、ありとあらゆるもので、そのすがたをあらわされるのです。きまつたかたちというものは、ありません。あなたたちの見ている世界、すべてが、精霊王なのです。」リーフィが静かにいいました。

つまりこのイーフリープ世界のすべてが精霊王のすがたなのであって、このゆうえんちも、精霊王そのものだというのでした。きまつたかたちはないということなので、こんかいはたまたま、ゆうえんちのすがたになったというだけで、森や、町だつたかもしれないということなのです（これで、このふしぎなゆうえんちのなぞもとけたというわけですが、それにしても、よりによつて、なんでゆうえんち？ ライアンのお子さまっぷりにあわせたいでしょうか？ そっだけは、いまだになぞのままでした）。

リーファイが説明をつづけます。

「ですが、言葉をおかわすためには、精霊王はひとつの生きもののかたち、そのすがたを変えられます。どのような生きものかは、わかりません。人かもしれないし、一羽のちようかもしれません。そのすがたの精霊王に会うために、あなたたちはここで、いくつかのしれんを乗り越えるのです。」

「しれん？」

とつぜんのことに、みんなは思わずききかえしてしまいました（それが精霊王のしれんのことなのでしょうか？）。

「あなたたちは、ここで、ほんとうのあなたたちのすがたをあらわさなければなりません。」リーファイがいました。「そとからの力は、ここではやくに立ちません。マリエルさん、あなたの魔法も、ここでは力をはつきしません。ライアンさん、あなたもここでは、精霊の力をかりることはできません。すべて、あなたたちほんらいの力のみで、このしれんを乗り越えるのです。それが、精霊王に会うための、かぎとなるのです。」

リーファイの言葉に、みんなはとまどいをかくせませんでした。かりものの力やわざは、ここでは使えないというのです。魔法もそとからのエネルギーが大きいかかわりますから、使えません（魔法を使うためには、その場にあるさまざまなエネルギーが必要となるのです。そのそとからのエネルギーを使うことができないというのであれば、また魔法も、使うことはできませんでした）。精霊のくになのに、精霊の力さえもかりられないということでした。そしてロビーの場合は、せ

いなる剣アストラル・ブレードの力も、どうやら使えないようなのです（それはロビーほんらいの力ではなく、剣の力ですから。ただの剣としてなら、使えるでしょうけど）。

それがほんとうなら、さあたいへん。それでみんなは、いったいどんなしれんに立ちむかわなければならぬというのでしょうか？（マリエルやライアンのちびっ子たちなら、力が出せなくても、ふつうに強そうな氣もしますが……）

「ロビーベルク。」リーファイが、（ライアンのものになっている）ロビーにいいました。「あなたの力は、ここで、たしかなものとなるでしょう。もう、わたしの力は、必要ないはずです。アークランドのみらいは、あなたにかかっているのです。そして、あなたのお父さんの運命も。」

リーファイの言葉に、ロビーはしやんとしせいを正しました（ロビーにだきついていたライアンが、あわててわきに飛びのきます。それでもロビーの服のはしっこだけは、つかんでいました）。そしてリーファイにまっすぐむきあうと、なみだのあふれた目をごしごしとふいて、しっかりと力をこめて、いったのです。

「リーファイ。ぼくは、リーファイのおかげで、大きくなれたよ。ほんとうにありがとう。」ロビーはそういって、リーファイに深々と頭を下げました。

「そして、今のぼくは、ぼくをささえしてくれるたくさんの人たちのおかげで、ここに立っている。かんしゃしても、しきれないくらい。ぼくは、いくよ。ぼくの運命の中に。これからの道は、ぼくと、みんなで、作り上げていくんだ。」

ロビーの言葉に、リーファイはおだやかにほほ笑みました。

「ああ。わたしのやくめは、これで終わりました。」リーファイが静かにいいました。

「ロビーベルク、わたしは、あなたといっしょにすごせて、ほんとうに楽しかった。うれしかった。もう、あなたはだいじょうぶです。あなたのみらいは、アークランドにあるのです。わたしはこのイーフリースから、あなたを見守っていますよ。わたしはあなたを、ほこり

に思います。ありがとう、そして、さようなら、いとしいロビーベルク……」

「リーファイ！」

ロビーがさげんだときには、もうリーファイのすがたはありませんでした。ロビーはぐつと、あふれるなみだをこらえようとしました。ですがだめでした。ぽろぽろ、ぽろぽろ……。つきからつきへと、とどまることなく、なみだがあふれてきました。

「ぼくがいるから！ 泣かないで、ロビー！」その場にくずれこむロビーに、ライアンがいました。ライアンは、さっきまでリーファイにやきもちをやいていた自分が、はずかしくなりました。ロビーの気持ち、痛いほどわかりました。ライアンは自分も小さいころ、お母さんをなくしています。今のロビーも、きつとそんな気持ちなんだ。ライアンの目にも、しぜんとなみだがあふれてきました。マリエルも、リズも、みんな、ライアンと同じ気持ちでした。そして……。

ロビーがこのあと、リーファイに会うことは、にどとなかったのです。

「さあ、いこうよ。」

リズが、ロビーにいました。ロビーはまだ、かんぜんには気持ちがおさまっていませんでしたが、ここで立ちどまっているわけにはいきません。自分をささえてくれる、みんなのためにも、リーファイのためにも。

見ててね、リーファイ……。ロビーは心の中で、かたくちかいました。ぼくは、ぼく自身を取りもどす。おおかみの姓のことも、お父さんのことも、ぼくの運命のことも、きつとみんな、なしとげて見せるから……。

そしてロビーは、リズとマリエルにむかってやさしくうなずくと、自分のことをとなりで心配げに見つめるライアンに、笑顔を見せて、いいました。

「ありがとう、ライアン。」

「さーて、どれから乗ろうか？」ライアンがいろんな乗りものをきょうみ深げにながめまわしながら、いいました（ロビーがげんきになったので、ライアンもげんきなのです）。

リーファイが去ってしまったあと。みんなはこれからどこへゆけばいいのか？ 考えることになりました（リーファイはぐたい的な道のりのことについては、なにも話してはくれませんでしたから。それは自分たちで、考えなければならぬことのようなのです）。とにかく、（話しのできるすがたの）精霊王に会って道をしめしてもらわないことには、どうすることもできません（トンネルももう消えてしまっていましたから、帰ることもできませんし）。ですがそのためには、リーファイのいったように、いくつかのしれんを乗り越える必要があるといいました。そのしれんとは、いったいなんなのか？

みんなにはけんとうもつきませんでした（どう見たって、あたりの景色はしれんとはほど遠いほどの、楽しげなものでしたし）。ですからここはひとまず、ライアンみたいに、このゆうえんちにある乗りものやたてものをひとつひとつしらべていくのがいい、なさそうだったのです（でもライアンの場合は、ちよつと、もくてきがないようにな気もしますが……）。

「ふーん、木のお馬さんか。」ライアンが、くるくるとまわっているきれいな木の馬たちのことを見て、いいました（これはいわゆる、メリーゴーラウンドでした）。「かわいい王子さまのぼくには、ぴったりだろうけど、ちよつと子どもっぽいなあ。」（じゅうぶん子どもっぽいライアンには、よくあっているような気もしますが……）

「すいすい白鳥ボートに……、へえー、自分で走る、ゴウカアトーだつて。こつちは、動物さんたちとあそぼう、ふれあい広場。って、なんにもいないじゃん。」

ぶつぶついつているそんなライアンのことを先頭に、みんなはゆうえんちの中を、あれこれ見てまわります。でもとくにしれんとよべるようなものは、なんにも見あたりませんでした（頭の上を走りまわっているすごいスピードのコークスクリューに乗れというのなら、口

ビーにとつてはしれんになるかもしれませんが……。

「あそこに、サーカスのテントがあるぞ。」リズが、道のむこうのテントのことをゆびさしながら、いいました。「中に、くまとかラパルーとかがいて、戦えっていうのかも。それなら、しれんかもな。」（ラパルーというのはヒョウと牛をあわせたような、もうじゆうのことでした。ちなみに、このアークランドにも、サーカスはあつたのです。大きなまちには、ていき的にサーカスの一団がやってきていました。）

「そんなたんじゅんなわけないでしょ。まあ、とにかく、いつてみましょう。」マリエルがいいいました。

「こんにちはー。大人ニまいに、子どもニまい、くださいい。」ライアンがテントの入り口のカーテンをあげながら、いいました（このアークランドでも、やっぱりサーカスをみるためには、チケットを買わなければなりませんでしたから）。

「子どもニまいってのは、ぼくもはいってるんじゃないだろうな？」マリエルがライアンにつつかかります。

「がらーんどうだな。」中をのぞきこんだリズが、がっかりしたようすでいいました。リズのいう通り、テントの中には、たま乗りのたまひとつ、ころがつていなかったのです。

「やっぱり、ここでもないみたいだ。ほかへいこうぜ。」と、そのとき……。

ういいん、ぎつこん！ ういいん、がつこん！

な、なにになに？

とつぜん、テントのまん中あたりから、おかしな物音がきこえ出しました。みんながびつくりして見てみると……、どこからあらわれたのか？ そこにさきほどもではなにもいなかったのに、なにやら人のようなすがたが、あらわれていたのです！

そしてよく見ると、それは人ではありませんでした。全身も色をした、うさぎ……、いえ、うさぎのすがたをした人形です。それは人

と同じくらいの大さきの、ブリキでできた、(ぎこぎここと動く) 一体のうさぎの人形でした！(まるで小さなブリキのおもちやを、そのまま大きくしたかのようでした。)

そのうさぎのブリキ人形は、胸の前に両手で、小さな黒板をかかげていました。その黒板には白いチョークで、なにか書いてあるようです。みんなはおっかなびっくり近づいて、その文字を読んでみました。そこには……。

「しれんの間」

ええっ？　ここが、しれんの間？　サーカステントに、うさぎの人形。なんともしれんとは、につかわしくないような気もしますけど……。でもまあ、もともとこの場所が、しれんとはかけはなれたゆうえんちなのですから、もうなんでもいいでしょう。

「へえー、おもしろいじゃんか。」リズが、「ふふっ。」と楽しそうに笑っていいました。「なにが出るのか？　どつからでもかかつてき나요。」

リズがそういったしゆんかん、テントの左右にひかれたカーテンが、ささーつとひらきました。そして……、左からは、大きなくま！　右からはラパルー！　それぞれ一頭ずつが、中にはいつてきたのです！

これって、さつきリズがいった通りじゃないですか！　まさかほんとうに出てくるとは！　なんてたんじゆんな……、じゃなくて、相手はけっこうな強さのもうじゆうたちなのです。これはほんとうに、しれんでした。ふつうの人なら、ひええー！　といちもくさんに、逃げ出してしまふところでしょう。ですけどこちらは、ひやくせんれんまのつわものたち。くまやラパルーの一頭や二頭、なんてことはないはずです(ちなみに、このもうじゆうたちはサーカスらしく、頭にピエロのさんかくぼうしをかぶっていて、顔には赤やもも色やきいろで、ハートや星のもようなどがペイントしてありました。といつても、こわさはぜんぜん、変わりませんでしたけど……)。

「ここは、ぼくにまかせてもらいましょう。」マリエルが進み出て、魔法のつえをふりかざしました。つえのさきのもも色のすいしように、ぴしっ！ と相手につきつけて……。

「ぼわんと、ぶいん、ふおーむー」

これは、ねむりのじゅつ。その通り、相手を眠らせるじゅつです。たくさん相手にききづらいのですが、相手が動物の一頭や二頭であるのなら、こうかはばつぐんでした。

「これで、戦う必要もないですね……、つて、あ、あれー！」

「がおるー！」「ごごあー！」

マリエルの魔法もなんのその！ 二ひきのもうじゅうたちはぜんぜんへいきで、こちらへとむかつてきたのです！（たしかにマリエルは、魔法の力をひき出したつもりでしたが！）

「きいてないじゃん！ しっかりしてよね、マリー。よーし、それじゃ、やつぱり、ここはぼくが！」ライアンがマリエルのことをおしのけて、前に出ました。

「風の力を、われに！ ライアン……、ウインズ・ブレイズ！」

ライアンがそうさげぶと、おそろしいほどのいりよくの風の剣たちが、もうじゅうたちに、ががーっ！ とおそいかか……、りません！ それどころか、なんにも起こりませんでした！ どういうこと？

「さつき、リーファイがいつてたやつかも……」ロビーがふたりのちびっ子たちにいいました。「ここでは、魔法も、精霊の力も、使えないつて。やつぱり、ほんとうだったんだ。」

「ほんとに、そうくるー？ じょうだんだと思つてたのにー！」ライアンが思わず、そういいます。ライアンはさつきのリーファイの話も、半分信じておりませんでしたから。精霊のくになのに精霊の力がかりられないいつて、そんなわけないじゃん。でもまあ、ぼくなら、たとえ精霊の力が半分になったとしたつて、ぜんぜんよゆうだけどね。ライアンはそう、たかをくくつていました（そのため、ほんとうに精霊の力がかりられないのかどうか？ あらかじめためしてみることも

していませんでした。ライアンらしいですね。

そしてマリエルは？　というと、これは「げんじつしゅぎ」の子でしたから、ほんとうに魔法が使えないのかどうか？　自分でじっさいにためしてみても、けっかを自分の目で見てみたいと思いましたが（マリエルらしいですね）。それでねんのため、（どのルートでこのゆうえんちの中をしらばまわったら、いちばんこうりつがいいのか？　たくさんの計算をおこなったあとで）ためしに魔法を使ってみて、ほんとうに使えないのかどうか？　たしかめてみようと思いました。（マリエルの長い計算にしぶれを切らした）リズとライアンが（「もうー、さきいつちやうよ！」と）さっさとさきにいつてしまったので、あわててマリエルは、かれらのことを追いかけたのです。ですけどマリエルは、自分の力の強さをよく知っておりましたから、「まあ、ぼくなら、たとえ魔法の力が半分になっても、問題はないんだから、わざわざためすまでもないかな」と、そのあとはたかをくくってしまったというわけでした（このように、計算ずくで動いているわりには、ちよつと自信かじょうなところがあつて、それでへまをしてしまうというところは、なんともマリエルらしいですね。

ちなみに、すこし説明を加えますと……、魔法というものは、「ちよつとねんじれば、いつしゅんですぐに使える」というわけではないのです。マリエルほどのまじゆつしであつても、魔法を使うときは、どんなにかんたんな魔法であつても、まず「魔法を使うためのせいしんじょうたい」に自分のからだを持っていつて、それから「魔法の言葉」をとえなければなりません。ですからすぐに魔法が使えるかどうか？　ぱつとためすというようなことは、できなかつたのです。ですからマリエルも、今まであえてためすというようなこともなく、このしれんの間までやってきてしまったというわけでした。でもまあ、いつしゅんでは使えないとはいつても、せいぜい五びようもあれば、魔法が使えるかどうか？　じゅうぶんためせましたけどね。たかをくくってしまったことが、わざわいしてしまったというわけなのです。

ところで、マリエルはさきほど、もうじゅうたちに対して眠りの魔

法を使ったわけですが、それはマリエルが「使った気になっていた」というだけのことで、じつさいにはなんの魔法の力もはたらいていませんでした。マリエルはあまりにもあたりまえに魔法の力を使っておりましたので、自分のからだに「魔法を使うためのせいしんじょうたい」になつたかどうか？　なんていうことは、いちいち気にするまでもないことだったので。ですからマリエルも、じつさいに魔法の言葉をと覚えてみるまで、魔法の力がはたらいていないということに気がつきませんでした。以上、説明終わり！。

さあ、ほんとうにたいへん。ふたりのさい強なちびっ子たちが、ほんとうにその力をはつきできないのです！　ノランベつどう隊、あやうし！　ですが……。

ノランベつどう隊は、このふたりのちびっ子たちだけではないのです。さて、このあたりで、いよいよ、この人にもかつやくしてもらおうとしましょう。それは……、そう、リズのことでした(すみません、ロビーのかつやくは、もうすこしあとで……)。

「やれやれ、ここは、おれの出番みたいだな。」

リズが「ふう。」と息をついて、前に進み出しました。でも待つてください。いくらリズがシルフィアで、強力な精霊パワーが使えるといっても、それはあくまでも精霊の力。ライアンのときみたいに、また精霊の力は、ふうじられてしまうのではないのでしょうか？

いいえ、リズはライアンのように、「そこからかりた精霊の力」を使うのではありません。リズは、リズの中にひめられている、「自分の精霊の力」だけで戦うのです(ここがシルフィアのすごいところなのです。シルフィアの精霊パワーは、そのからだの中にもともとそなわっているものなのであって、そのためその力は、かりものではない、自分自身の力として使うことができました。なんだかちよつと、ずるいような気もしますが……、やつぱりすごい)。リーフィも、いつてましたよね。ここではすべて、あなたたちほんらいの力のみで、しれんを乗り越えるのです。リズの力は、まさにその、「自分ほんらいの力」でした！

さてさて、リズはいつたい、どんな精霊パワーでもって、どんな戦

いのわぎをくり出そうというのでしょうか？（まさか、精霊パーンチ！とかいつて、すででなぐるとか？ 精霊のたつまきでこうげき！というのも、ライアンとかぶってしまいますから、おもしろくありませんし。いや、べつに、かぶるとかおもしろいとかの問題じゃ、ないんですけど……）

でも（もう一回）待つてください。いくら強力な精霊の力をそのからだの中にひめているのだとしても、リズの武器は、ほんらい剣であるはずです。もと剣じゆつしなんやくですもの。ですからここはやっぱり、剣を使った方がいいんじゃないでしょうか？ と思いましたが……、ここでわたしは、だいじなことをひとつ忘れていました。今のリズは、自分の剣を持っていないのです！（リズの剣は今、リズの家の上の床の上に、ほこりをかぶってこまがっていましたから。ロビーたちもその剣をわぎわぎ、持ってこなかったのです。重いですから……）ロビーの剣をかりるといふ手もありましたが、「ここは、おれの出番みたいだな。」といってまで、さつそうと剣も持たずに前に進み出たというのに、またうしろにもどつて、「やっぱりロビー、その剣貸して。」などというのも、なんだかかっこ悪いですし……（いや、べつにかっこ悪いとかの問題じゃ、ないんですけど……）。

ですからやっぱり、リズにはなにかほかの考えがあるみたいでした（まさかほんとうに、自分が剣を持っていないということに、気づいてないわけじゃないでしょうから）。じゃあやっぱりここは、精霊パワーで戦うんですね、って思いましたが……、じつはリズの武器は、それだけではなかったのです（なんどもすいません）。

リズには（剣と精霊パワーのほかにも）もうひとつ、強力な武器がありました。それは今のリズが、「すべてをささげる！」といってまです、のめりこんでいるもの。「世界の人のためだけに、自分のできるいちばんふさわしいことをしたい」といつて、剣をすててまで、その身をささげている、あるものだったのです。

それは……？

音楽！

そう、リズは音楽にすべてをささげるために、人里はなれたぶつそ

うな山の中に住みはじめたのです。自分には剣よりももっと、人々のやくに立てることがあるんじゃないか？ リズにとって、それが音楽でした。

自分の作った曲で、世界中のたくさんの人たちのことをげんきにし、勇気づけ、助けることができる。こんなにすばらしいことはない。リズはそう思っ、音楽にうちこみはじめたのです。もちろん、剣のわざをみがいて、それで人々のことを助け、はげますことも、またそれを見ききした世界中のたくさんの人たちの心を動かし、勇気づけることができるでしょう。人々のことをすくう道には、さまざまなものがあるのです。その中でリズは、音楽が自分にいちばん、むいていると思いましたが（いいかげんなようにいて、あんがいしっかり考えているんですね！ リズのことを、だいぶ見なおしてしまいました。よし、わたしも本を通してみんなをげんきづけられるように、がんばるぞ！みんな、げんきになってー！）。

「青がみのぎんゆう剣士」。いつしかリズにつけられた、通り名です（青がみとは、青いかみの毛という意味です。リストールも青がみでしたよね）。音楽をかなでながら物語を語ってきかせる、ぎんゆうしん。リズの場合は、それに剣が加わるのです。それで、ぎんゆう剣士。なんともリズにぴったりの、いえ、リズだけにあてはまる、とくべつなよび名じゃありませんか。

リーフィのいった、「自分ほんらいの力のみで、しれんに立ちむかわなければならぬ」という言葉。ここでいう「ほんらいの力」とは、自分自身のみの力。自分ひとりで出すことのできる力のことなのです。精霊使いのわざや、まじゆつしの魔法の力は、そこからのたくさん助けによってなり立っていますから、自分自身だけの力というわけではありません（精霊のわざはそのまま精霊の力をそこからかりるわけですし、魔法はその場にあるしぜんのエネルギーをかりるわけなのです。ですから自分自身だけの力というわけではありませんでした。ちよつと、ややこしいですけど）。それに対してリズの音楽の力は、まぎれもなく、そこからの精霊の力でも魔法の力でもない、リズ・クリスメイデインの力でした。そしてどうやらリズは、この音楽の力で

もって、戦いのぞもうとしているようなのです。でも音楽の力で戦うっていわれても、なんだかぴんときませんけど……、いったいそれでどうやって、戦おうというのでしょうか？（そもそも音楽って、戦うためのものじゃないし……）

「いくぜ、イー・マイナー・セブン！」

リズがさけぶと……。

なんと、リズの左手から、青白く光りかがやく光の剣があらわれました！（ちよつと！ そんなことができるんだったら、はじめからいってよ！）これはリズ自身の精霊エネルギーを、剣のかたちに変えたものでした（シルフィアって、こんなことまでできちゃうんですか！）。いわばこの光の剣は、リズのからだの一部だったのです！

そしてよく見ると、その剣はちよつとおかしなかたちをしていました。剣みたいでしたが、そのやいばの上に、なん本ものほそい「げん」が張ってあったのです（全部で六本あるようでした）。これは……、がっきじゃありませんか！ つまりこれは、がっきの剣。もつとはつきりいえば、みなさんの世界でいうところの、ギターの剣だったのです！ うーん、なんだか、すごいような、すごくないような……。やっぱりすごいかな。

ファンタジーの世界ですから、それはほんとうはギターではなくて、リュートという、ギターみたいながっきでしたが、それでもこれはただのリュートではありません。いかなれば、エレキギターならぬ、エレキリュート！ リズの音楽パワーがそのリュートの中にぎゅいんぎゅいんひびいて、それをひくリズの手によって、こせいで力強い音色が、そこからくり出されるといわけでした。そしてその音色の力強さこそが、そのまま戦いのエネルギーとなって、リズのこの光の剣の強さとなっていたのです（音楽の力で戦うって、そういうことなんです！ ようするに、このがっきの剣から出る音楽の音色の力を、戦いのエネルギーに変えて、敵をこうげきするというこのよ

うなのです。これは、強いはずです！ なにしろシルフィアの精霊パ

ワーと、剣じゅつしなんやくの剣のわざと、音楽家としての音楽の力が、すべてこのいっぽんの剣にしゅうけつしていましたから！。

でゆるり、でゆるり、でゆるり、でゆるり、でゆるりーん！
ぴらり、ぴらり、ぴら、ぴらり、ぴらり、ぴらり、ぴら、ぴらりーん！

リズのギターソロ！（リユートソロ？）うくん、かっこいい！って、ききほれてる場合じゃありません。二ひきのもうじゅうたちが、目の前にせまってきていましたから！（そうでした！もうじゅうのことなんて、すっかり忘れてしまっていましたね！だいたい説明が長くなってしまいましたから……。本を書くのって、たいへん！）

「エネルギーはもう、じゅうぶんだ。待たせたな！」
リズがえんそうをやめて、リユートの剣をかまえました！（どうやらエネルギーをためるために、ソロをひいていたみたいです。このように力強い音色をこの剣にためていくことで、この剣はどんどん強くなっていくそうです。やっぱりずいぶんと、変わった剣です。ちよつと、めんどくさい？）

「とき放てー！ ミンストレル・シュリルサウンド！」

ぶいんぶいん！　ぶいんぶいん！　どつ（おくん）

リズの剣から、大きな、かまのようなエネルギーがふたつ！　くまどラパルーにむかって飛び出していった……。大ばくはつ！（なぜ、ばくはつするんでしょうか……。？）サーカステントの中は、土ぼこりと白いけむりで、いっばいになってしまいました（いつものパターンです）。

ごほんごほん！

しばらくたってから、ようやくけむりがひくと……。

そこにはくまとラパルーのすがたはなく、かわりに地面に落ちていたのは……。小さなかわいい、くまのぬいぐるみと、ラパルーのぬいぐるみ！　そう、じつはこれこそが、もうじゅうたちのしよたいで

した！（さすがは、なんでもありのイーフリープですね。）

「かわいそうだから手かげんしてやったのに、人形だったのかよ。これなら、ほんきでぶっ飛ばしてやればよかったな。」リズが、やれやれといった感じでいきました。こ、これで、手かげんしてたですって？ リズもふたりのちびっ子たちに負けなくらいの、おそろしい強さです！（音楽パワー、おそろべし！）

さて、これでぶじに、（ぬいぐるみの）もうじゅうたちをやっつけたわけです。精霊王に会うためのしれんは、これで終わったのでしょうか？

いえいえ、どうやらそんなわけには、まだいかないようですよ。

テントのむこうのかべにまで吹っ飛ばされてしまったブリキのうさぎが（そういえば、うさぎもいましたね。リズのパワーで、いっしょに吹っ飛ばしてしまっただけです。ごめんね）、ぎっこんがっこんと音を立てて、またこちらに歩いてきました（よかった、こわれてなかつたみたいですね）。そしてうさぎは胸の前に持っている黒板をみんなにむけて、それをくるりとうらがえしたのです。そこには……。

「ラウンド・ツアー」

やっぱりきました、ラウンド・ツアー！ わたしもこれだけでは、終わらないと思っていました！ さあ、こんどはどんなもうじゅうが出るんでしょうか？ やっぱりサーカスだから、ライオン？ それとも、トラでしょうか？

みんなが、こんどはなんだ？ と思っていると、テントの中のすべてのカーテンが、さーつとひらいていって……。

がちゃんがちゃん、がちゃんがちゃん！

あつちからも、こつちからも！ ブリキでできたうさぎのたいぐん

が、その手に（長さが二フィートほどもある）ふとくて大きなにんじんをいっぽん、にぎりしめて、こつちにむかつてきたのです！ その数はどう見ても、百体以上！ ひ、ひええー！

「ちよ、ちよっと！… こんなの、きいてないよ！」ライアンが身がまえて、思わずさげびました。

「やつらみんな、目がほんきだぞ！」マリエルも手にしたつえをかまえて、ライアンにつづきます。

もも色や、赤いのや、青やきいろ。さまざまな色をしたブリキのうさぎたちが、マリエルのいう通り、目を血走らせて（ブリキですから、ほんとうはペンキでそのように、えがかれているだけでしたが）、上からもうしろからもおそいかかってきました！ しかもみんな、手にしたにんじんのかたちをしたこんぼうを、ぶんぶんふりまわして！（こ、これはこわい！ 夢に出そうです！）

今やまわりは、うさぎだらけ！ かんぜんにかこまれてしまいました（しかもこのうさぎたちは、びつくりするほどすばやいのです！）。出口もすでに、うさぎでうめつくされています。もうこうなったら、やるしかない！

「相手にとつて、ふそくはないぜ！」リズがさげびました。「こんどは、ほんきのサウンドをきかせてやる！」

「ぼくだつて、こんなうさぎの、百ぴきや二百ぴき！」ライアンがつづけていいました（精霊の力が使えないんですから、あんまりむりしない方が……）。

「しかたありません。ふりかかる火の粉は、はらわねば！」マリエルもさらにつづきます（魔法の力が使えないんですから、あんまりむりしない方が……）。

「ぼ、ぼくも、この剣で戦うよー！」ロビーも、腰の剣アストラル・ブレードをぬいて、うさぎたちにむかいました。魔法や精霊の力が使えないふたりのことは、ぼくが守ってあげなくちゃ！（リズの方は、自分の助けがなくてもだいじょうぶそうでしたから。ちなみに、前にもちよつといいましたが、剣の力もここでははつきされませんので、今はせいなる剣も、ただの剣として使うしかないのです。）

せんとうかいし！

もうつぎからつぎへと、にんじんが飛びかっけてきます！（見た目はかわいいのですが、その力のおそろしいこと！ にんじん、おそろるべし！）リズはかたっぱしから、そのリユートの剣で敵を切りふせていきましたが、なにしろ数が多すぎました。さっきみたいに、ひっさつわざのパワーをためているひまが、ぜんぜんありません。ですからリズは、「めんどうだ！ まとめて相手になつてやる！ 早びき、リフ・ウインズ！」目にもとまらないほどの早わざでリユートをひいて、小さなエネルギーをつぎつぎと飛ばし、うさぎたちをぼんぼん吹き飛ばしていきました（いろいろとべんりですね、音楽つて。ほんらいの使い方じゃないでしょうけど……）。

そしてロビーだって、負けてはいられません。せいなる剣をにぎりしめ、にがてながらも、せまりくるうさぎたちにえいえいと切りつけていったのです（それを見ていたリズに、「ロビー！ もつと腰を落とせ！」とか、「足を使えるようにしろ！」とか、いろいろいわれてしまいました。さすが、もと剣じゆつしなんやく。やっぱり剣のことにかんしては、口をはさまずにはいられないようですね。でもリズさんも、そんなよゆうはないんじゃない……）。

しかしうさぎたちは、まだまだおそいかかっけてきます（あとからも、つかであらわれたのです。ずるい！）。ロビーはリズの背中を守つて戦っていました……、しかくになつていた上空から、一体のうさぎがロビーめがけて、ぶーん！ にんじんをふりおろしました！ あぶない！

そのとき！

ひゅっ……、ががん！

なにかが目の前を横切ったかと思うと、大きな音とともに、ロビーの頭の上をいたうさぎの人形が、ばらばらにこわれて地面に落ちてき

ました！ な、なにが起きたの？

ロビーの目の前に、そのなにかが、上からしゅたつとおり立ってきました。そこに立っていたのは……。

「マリエルくん！」

ロビーがびっくりしていました。そう、そこには、つえをかまえて「ふう。」と息をついている、マリエルのすがたがあつたのです！

これは、いい！ 魔法を使えないマリエルは、ライアンといっしょに、うさぎから逃げまわっているものとばかり思っておりましたの！

「あぶなかつたですね、ロビーさん。上にも気をつけてください。」
マリエルがれいせいな顔をして、せまりくるうさぎたちにびしつとつえをかざしながら、いいました。

「いい忘れましたが、ぼくのぼうじゅつは、ノランおししようさまじきでんです。安心してください。魔法が使えなくても、ぼくは強いんですよ。」

「あ、そ、そうなの？」マリエルの言葉に、ロビーがめんくらつてこたえます。

「それは、心強いね……」

せまりくるうさぎたちを、つえで、がん！ がん！ なぎたおしていくマリエルのことを見て、ロビーは安心しつつも、「やっぱりマリエルくんって、いろいろすごい……」とひとり思いました。

「ちょっと、ロビー…… ぼくだって！ 見てよ！」

ライアンの声がして、ロビーが、えっ？ と見てみると……。

「とりやー！ せい！」

ライアンが、せまりくるうさぎたちのにんじんをうでではぽつとふりはらい、そのいきおいをりようして、ぶーん！ うさぎたちをつぎつぎと、テントのいちばんむこうはしにまで、かるがると投げ飛ばしていたのです！（そしてかべにげきとつしたうさぎの人形たちは、またしてもばらばらになって、こわれてしまいました。つ、強い……）

「いちおうぼく、ごしんじゅつなら、なんでも使えるから。まかせてよね。せやー！ひっさつ、うらひつじ投げー！」

つぎつぎとうさぎの人形たちをばらばらにはかいしていく、ちびっ子たち。ああ、まったく、このふたりのことは心配するまでもありませんでしたね……。

「ふん。あまく見たようだな。」うさぎたちに、マリエルがいました。

「そのていどの動きで、ぼくに勝てるつもり？」ライアンが「ふふん！」と鼻をならして、マリエルにつづけました。

そして……。

「かわいいからって……」

ふたりのちびっ子たちはそろってさういうと、つえやゆびをうさぎたちにびしっ！ とつきつけて、ポーズをきめていました。

「なめないでよね！」

「やれやれ。ずいぶん多かつたな。」

「ふう、ふう。」と息をととのえながら、リズがいました。さすがのリズでも、これだけの数を相手にするのは、たいへんだったようです（うさぎたちのうちの七わりくらいは、リズがやつつけましたから）。

「あとかたづけが、たいへんだね。ま、いいけど。」ライアンが、もはやほんこつになったうさぎ人形の部品の山をつつつきながら、つづけました。

「それより、これで、しれんは終わりなのかな？」ロビーがそういいます。そう、この戦いは、あくまでも、精霊王に会うために必要だというしれん。もしこのしれんが力をしようめいするためのものであるのだとしたら、もうじゅうぶん強さはつきしましたし、これで精霊王も、会ってくれるんじゃないでしょうか？

こんどは、どうなるんだ？ みんながあたりを見まわしているところ……。

ほんこつのうさぎ人形の山の中から、がらがらと音がして、はじめ

にあらわれたあのもも色のうさぎが一体、立ち上がったのです（立ち上がったといっても、半分部品の山にうもれて、かたむいたままでしたが……）。そしておなじみ。あの黒板の文字は……。

「おくにお進みください。おくにお進みください。」

やれやれ！　ようやく、このテントから出られるようですね！　そして黒板には文字といっしょに、白い矢じるしも書いてありました（その矢じるしはテントのてんじょうをむいていました。それはただ、うさぎがまがって立っているからでした）。どうやら、テントのおくのつうろをさししめしているようです。

みんなが用心して、そのつうろを進んでいくと……。

つうろは、テントの出口につながっていました。明るい光がぱあつとふりそそぎます。そこに出ると、そこには古ーいぼろぼろのやかたがいつけん、たっていました。かべにはつたがからんでいて、いかにもおぼけが出そうといった感じのたてものです。やかたのまわりにはたくさんのお墓がならんでいて、このやかたをよりいっそう、ぶきみなものに見せていました。

ですが……、かんじんのまわりの景色が、ゆうえんちです！　お空もまっ青！　飛びかう風船、楽しいな音楽。ですからこのおやしきも、そのせいでちっともこわく見えませんでした。

そしてよく見ると、お墓の石も、たてものも、ほんものの石でできているのではなかったのです。にせものの石で古く見えるようになってきた、見た目だけのつくりものでした！　つまり、このたてものは？

ゆうえんちには、これまたよくあるしろもの。

そう、おぼけやしきです！

「ここへはいれ、ってことか？」　リズが、おぼけやしきの前に立っていたひとつのかんばんをさししめしながら、みんなにいいました。そ

のかんばんにも、さっきのうさぎの黒板と同じように、「こちらにお進みください。こちらにお進みください。」という言葉が書いてあったのです。

「おぼけやしきか。」ライオンがいました。「なかに、なーがいるんだらうね？フェリーがいたら、もっとおもしろくなるんだけだなー。」

ライオンはそういって、「うふふ。」と悪い笑い方をします（たぶんフェリアルのことをからかう、新しいアイデアでも思いついたのでしょう。なにを考えているんだか……）。

ちなみに、このアークランドにもやつぱり、おぼけやしきというものはありました。夏のおまつりのときなんかには、たびたびあらわれたのです。こわさですすしくする。どこの世界でもにたようなことが考えられているんですね）。

「まあ、なにがきたって、ぼくたちの敵ではなさそうですね。」マリエルが、つえをかまえていいました。「今までのデータから考えれば、ここも、ぼくたちが力をあわせれば、問題はないでしょう。」（いかにもマリエルらしい。）

「じゃあ、さっさといこーぜ。」リズがあっけらかんとしたいい方でそういって、すたすたとたてももの入り口にむかって歩いていってしまいました。

「み、みんな、おぼけとかだいじょうぶなの？」ロビーがあわててみんなのあとを追いかけながら、素晴らしいです。「おぼけには、今まで、ろくな目にあわされてこなかったよ？」

ロビーのいう通り、おたまじやくしのかいぶつや、たましいをうばう影のおぼけ（かれらはほんとうは、おぼけとはちがいましたが、まあ、にたようなものですから）。おぼけには今まで、ろくな目にあわされていませんでしたから、ロビーの心配はもつともでした。

でもこのノランベつどう隊にかぎっては、おぼけなんて、さっきのうさぎとたいして変わらないようなものでした。ライオンは、（かわいいわりには）きもがすわっていますし、「おぼけが出たら、びんにつめて持って帰ろうつと。」などといっております。リズは、「べつに、な

んでも同じだろ」といった感じですし……。マリエルにいたっては、「おぼけなんてものは、われわれがかつてにそうよんでいるだけなのであって、じつたいは、ただのせいしんエネルギーにすぎません。せいしんエネルギーに意志がやどったとしても、なんのふしぎもありませんよ。」といつものちようしでした（いかにもマリエルらしい）。

「へいきへいき。早くいくよ、ロビー。おてて、つないでつてあげよっか?」ライオンがにこにこ笑って、そういいます。ロビーはそんなライオンにひっぱられながら、「うくん……」とうなるばかりでした。

「おじやましませーす。おぼけさん、いませんか?」ライオンがまっさきに入り口の門をくぐってから、いいました。

「こんどは、がいこつでも出てきて、黒板を持つてるのかもな。」リズがあたりをきよるきよるとながめやりながら、つづけました。

ですが、あたりはしーんと静まりかえっていて、なんの物音もしません（どうやら中には、だれもないようでした。すくなくとも、生きている者は）。

門をくぐると、そこは小さなげんかんホールになっていて、左右に暗いろうかがそれぞれいっぽんずつ、のびていました。かべにはろうそくがいつぽんかかつていて、あたりをぼんやりとてらしております。さて、どうしましょうか?（右に進む? 左に進む? それともここで、アイテムを使う?）

「やつぱり、チケットがないとだめなのかな? 大人二まいに、子ども二まい、おねがいしまーす。」ライオンがいました（このアークランドでも、やつぱりおぼけやしきにはいるためには、チケットを買わなければなりませんでしたから）。

「子ども二まいってのは、ぼくもはいつてるんじやないだろうな?」すかさずマリエルが、つつかかります（さつきと同じですね……）。

すると、びつくりすることが。かべにかかっていたろうそくのほのおが、とつぜん、ぼぼぼ……、と小さな音を立てて動き、それが矢じるしのかたちに変わったのです!（なかなか、こったしかけですね!）

「こつちだつてよ。」リズが矢じるしのむいた方(左のろうかでした)をゆびさしながら、いいました。「危険はなさそうだし、いつてみようぜ。」

「こら、そんなにかんたんにしんようするのは、あぶないぞ。」マリエルがいました。リズとライアンは、もうすたすたと、ろうかを歩いていってしまいます(なんだか、こんなパターンばかりですね)。しかたなく、マリエルとロビーも、そのあとを追っかけていきました(ちなみに、はんたいがわの右のろうかのさきはどうなっているのか? という、そのさきはいきどまりになっていました。ほんらいこつちというおぼけやしきにはかかりの人がいて、お客さんのことをあんなにするものなのです。この場合では、「おやおや、おぼけのほのおが、みなさんのことを、左のろうかにあんないしていますよー……」なんて、説明するところでしょう。そのため、あんないする必要のない右のろうかのさきは、作られていませんでした。お金もかかりますしね)。

そしてみんなが、暗いろうかをしばらく進んでいくと……。

「あれ? いきどまりか?」リズが急に立ちどまって、いいました。そこはまるい広間になっていて、かべにはどこにも、とびちらしいものはありません。

「あれー、おかしいなー。」ライアンが、かべをぺたぺたさわってしらべていると……。

「うわっー!」

手がするりとかべをつきぬけて、ライアンはそのまま、かべのむこうにばたーん! たおれこんでしまいました!

「いててて……。なんだよ、もうー!」

どうやらこのかべは、まぼろしのかべのようでした(こつちもほんらいは、かかりの人がお客さんをかべのむこうまであんないするところなのです)。おぼけやしきでおぼけのかべをすりぬける、「おぼけたいけん」といったところでしょうか?(なかなか、こつちしかけですね)。

「やれやれ、ちよつと考えれば、すぐにわかることじゃないか。」マリエルがあきれたようすで、ライアンにいいました。「ここに書いて

あるよ。『ここは、おぼけのかべ。目に見えるものばかりがしんじつではない』。まったく、子どもだましのトリックだね。」

マリエルのいう通り、ライアンのたおれこんだそのかべの上に、古びた（ように見せてある）木のプレートがひとつついていて、そう書いてあったのです。すたすたとかべをぬけてくるマリエルに、ライオンがぶんぶんいいいました。

「それ、さきについてよー。」

かべをぬけたさきは、またしても暗いろうかになっていました。あちこちにかんおけが立ってかけてあって、いかにも中から、ミイラ男でも飛び出してきそうなぶんいきです。が……。

なーんにも出ません。

ライオンがいくつか、かんおけのふたを（「せりやー！」と）あけてのぞきこんでみましたが、中はみんな、からっぽでした（ここもやっぱり、ほんらいはおぼけやくの人がこのかんおけの中にはいつてお客さんをおどかすといったぐあいでしたが、さきほどから、このおぼけやしきの中にはだーれもいませんでしたから、このかんおけもやっぱり、からっぽだったのです。ちよつとぎんねん？）。

「つまんないなあ。さつきから、なんにも出ないじゃん。やる気あるの？」ライオンがぶーぶー、もんくをいいました（やる気といわれても……）。

「なんにも出ない方がいいよ。それより、しれんって、いったいなんなんだろう？」「ロビーがあたりのようすをきよろきよろ見まわしながら、つづけました。

「こんどは、おぼけが五百ぴき、とかか？ めんどくさいぞ、そんなの。」「リズが「ふう。」とため息をついて、そういいいます。

「どうやらここが、もくてきの場所のようですね。」「とつぜん、マリエルがいました。みんなが「えっ？」と違って、見てみると……。ろうかのさきに、入り口のとびらのない、四かくい小さな部屋がひとつあって、その入り口のアーチの上に、さがしていた言葉が書いてあったのです。

「さいごのしれんの間」

「やっとなついたか。」リズが「ふふん。」と鼻をならして、いいました。どうやら、気あいはじゅうぶんのようです。

「さいごだって。これでようやく、精霊王に会えるみたい。」ライアンがわくわくしていました。

「でも、おかしなことが書いてあるよ。」

ロビーがそういつてゆびさした方を、見てみると……、部屋の中にひとつだけあったとびらの上に、またしても古びた（ように見せてある）木のプレートがひとつついていて、そこには、こんなことが書いてあったのです。

「きょうふの部屋。ひとりずつはいること。」

きょうふの部屋？　なんだかこわそうな部屋です（しかも木のプレートの間がわには、けらけら笑う、がいこつのかざりがひとつずつ、つけられています）。いよいよ中に、おそろしいおぼけでも待ちかまえていて、おそいかかってくるだけでもいうのでしょいか？

部屋のすみには木のつくえがひとつあって、つくえの上には紙が山づみになっていました。その紙には、まるい金色のわっかが大きくひとつえがかかれています、そのわっかの上に書いてあった言葉は……。

「勇者のあかしのスタンプ」

さらに、つくえに取りつけられた、ひとつの金色のきんぞくのプレートには、こんな言葉が。

「きょうふの部屋の中に、スタンプ台があります。きょうふの部屋では、あなたは、おのれのきょうふにうち勝たなければなりません。きょうふにうち勝って、スタンプをおしましょう。スタンプをおせたら、すてきなプレゼントがもらえるぞー！」

つまり、そういうことみたいですね。この紙を持って、ひとりずつきょうふの部屋にはいる。そこでスタンプをおして、ここにもどつてこられたら、かかりのおねえさん（たぶんおねえさんなような気がします）にそれを渡して、プレゼントをもらって、このおぼけやしきもクリアー！ ということらしいのでした。うくん、やつぱり、しれんというよりは、ゆうえんちのアトラクションといった感じですね（もともとゆうえんちのアトラクションなのですから、とうぜんですが）。でも忘れてしまいそうですが、ここはただのゆうえんちではないのです。精霊王のふしぎのくに、イーフリープなのですから。そんなにかんたんに、いくのでしょうか……？

「あはは、笑っちゃうね。」ライアンが、思わず笑っていいました。「これが、さいごのしれん？ これこそ、子どもだましじやない。」ライアンはそういって、つくえの上から紙をいちまい、ぱつとつかみます。

「こんなの、さっさとやつちやおうよ。ひとりずつらしいから、ぼくがいちばんにいくよ。」

「ふんふん。」と胸を張って、ライアンがまつさきにとびらにむかいました（やつぱり。ライアンがいちばんにいくと思いました）。

「ほ、ほんとにだいじょうぶ？」ロビーが心配してたずねます。

「なにが出るか？ わからないんだぞ。ここは、みんなでいった方がいい。」マリエルがれいせいにぶんせきして、いいました。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ！ ぼくをだれだと思ってるの？ 二十びょうでもどつてくるよ。」

そういってライアンは、さっさととびらをあけて中にはいつていってしまいました（どきょうがいいというか、なんというか……）。とびらがぼたん！ とききおいよくしまります（これは自動的にしまるしかけのようでした）。

そしてそれから、すこしたって……。

「みぎやー！」

とつぜん！ とびらの中からライアンのひめいが！ しかも、今までにきいたこともないようなひめいです！（みぎやー！ なんて、ふつうのライアンがいうはずありません！）

「どうしたー！」

みんながとびらにかけよります！ ですが……。

とびらがひらきません！

「おいっ！ どうなってるんだ！」リズがとびらをばんばんたたいて、ののしりました。

「ぼくの魔法が使えれば！ こんなとびらなんか、かんたんにあけられるのに！」マリエルがこぶしをにぎりしめて、くやしそうにいいました。

「ライアーン！」ロビーはなんども、ライアンの名まえをよびつづけます。

そしてなすすべもないまま、それからしばらく時間がすぎて……。

ぎいい……、とびらがひらきました！ そして中から……、よろよろになったライアンが出てきたのです！

よかった！ どうやら、けがはしていないようです。しかしかなり、すいじやくした感じでした。いったい、なにがあつたのでしょうか？

「ライアーン！ だいじょうぶ？」ロビーがかけよって、たおれこむライアンのことを受けとめました。ライアンは目もうつろで、放心じょうたいです。

「なにがあつたのー！」

ロビーのといかけに、ライアンはようやく、小さな声でこたえました。

「あはは……、へいきへいき……。なんでもないよ……」

ライアンはそういって、にぎりしめていた紙をロビーに見せます。

「ほら、スタンプ、おしたよ……。みんなも早く、中には、はいりなよ。ぜんぜん、たいしたこと、ないから。だいじょうぶ、危険は、ない、よ

……」

ライアンはそこまでいうと、目をとじて、がくつと力を失ってしまいました。

「ライアンーン！」ロビーがゆさゆさと、ライアンのからだをゆさぶります。ま、まさか！

「いたた……、生きてるってば。」ライアンが目を開けて、いいました（びつくりさせないでよ、もう！）。

「それより、早く、スタンプ、おしてきちやいなよ。これが、しれんみたいだし。みんなおせたら、起こしてよ、ね……」

「寝たな。」

すーすー寝息を立てはじめるライアンのことを見て、リズがいいました。

「いったい、中に、なにがあるってんだ？」

「でも、どうやら、危険なものではないみたいですね。」マリエルがこたえます。「こんなに弱りきっているところを見ると、なにか、せいしん的なこうげきを受けたのかもしれない。それが、きょうふということなのかも。」

「よし、ここは、ぼくがたしかめてきます。」マリエルがそういって、つくえの上から紙を取りました。

「どうやら、ここにはいれるのは、いちどにひとりだけらしい。どのみちみんな、はいるんだったら、ぼくがさきに中をたしかめてきた方が、こうりつがいいでしょうね。」

マリエルらしいりくつでしたが、ほんとうにだいじょうぶなんでしょうか？

「ぼくは、自分の感じようをれいせいにぶんせきすることができません。きょうふなんて、ぼくには通じませんよ。だいじょうぶです。」

マリエルはそういって、とびらにむかいました（「感じようをれいせいにぶんせき」というわりには、よく怒っているような気が……）。とにかくここは、マリエルにまかせるほかはないようです。

「マリエルくん、気をつけてー！」ロビーの言葉に、マリエルはにこやかにうなずいて、とびらの中へとはいっていききました。

そしてそれから、すごしたって……。

「ぴぎゃー！」

とつぜん！ とびらの中からマリエルのひめいが！ しかも、今までにきいたこともないようなひめいです！（みぎゃー！ なんて、あのマリエルがいうとは信じられません！）

「どうしたー！」

みんながとびらにかけよりますが、やっぱりとびらは、ぴくりともしませんでした。まったくもって、さつきとおんなじです！

そしてなすすべもないまま、それからしばらく時間が過ぎて……。

ぎいい……、とびらがひらきました！ そして中から……、よろよろになったマリエルが出てきたのです！

よかった！ どうやら、けがはしていないようです。しかしかなり、すいじやくした感じでした（まったくもって、ライアンとおんなじでした）。そしてライアンとは、ちがうところが。それはマリエルの服やズボンが、よれよれになっているというところでした。しかも服のボタンが、ところどころ、はずれていたのです（いったいこれは？）。

「マリエルくんー！」ロビーがさげびました。ライアンをかかえているので、かわりにリズが、マリエルのもとにかけよります。

「おい、だいじょうぶか？」リズが、たおれこむマリエルのことを受けとめながら、いいました。マリエルは目もうつろで、放心じようたいです（まったくもって、ライアンとおんなじです）。

「なにがあつた？」

リズのといかけに、マリエルはようやく、小さな声でこたえました。

「ふ、ふふ……、へいきですよー、ぼくは、へいきですよー、なんてことありません……」

「ぜんぜんだめじゃんか、おまえ。」リズがいました（リズのいう

通り、どうやらだめっぽいですね……。そしてマリエルのその手には、ライアンと同じように、スタンプのおされた紙がにぎりしめられていたのです。

しかし、あのマリエルまでもが、こんなことになるなんて！
まったくもって、このきょうふの部屋、あなどれません！

でもじゅんちようとはいえませんでした。これでふたりが、このきょうふの部屋のしれんをとっぱしたわけです。残りは、リズとロビーのふたり。やっぱりここは、かれらも、このしれんをさけて通るというわけにはいかないようでした。

「よし、つぎは、おれがいつてやる。」リズが「ふん！」と鼻をならして、いいました。「おれは、こいつらのようにはいかないぜ。」

「リズさん、気をつけて！」

ロビーのせりふがはいつて、これで三人目。

そしてとびらがばたん！ としまつて、しばらくしたところ……。

「待て！ 待て！ やめろ！ うわああー！」

とびらの中から、リズのさけび声が！ またです！ もう、なにがなんだかわかりません！

そしてまた、しばらくたつて……。

ぎいい……。とびらがひらきました！ そしてそこから出てきたのは……。全身ぐっしよりにぬれた、リズのすがただったのです！ ど、どうしたの！

リズは、「ぜい、ぜい……。」と息をついて、びちゃっびちゃつと、いっぽいっぽ、こちらへと歩いてきました。そして手にしたスタンプのおされた紙を、ぐしゃー！ つとにぎりしめると……。

「ロビー……。敵は……。手ごわいぞ……。」

ばたーん！ そのまま、その場にたおれこんでしまったのです！

「リズさんー！」ロビーがいましたが、リズはすでに、しゃべることすらできないほどに、ぐったりしてしまっていました（ちなみに、リズのからだをぬらしていたのは、水ではありませんでした。なにか、

くだもののしるみたいなのです。まったくもって、わけがわかりません)。

リズまでも……。これはほんとうに、よそがいのことです。ですがここで、逃げるわけにはいきません(たおれていった、仲間たちのためにも……。つて、まだ生きてますけど)。ロビーは三人の仲間たちのことを部屋の床にそつと寝かせると、意をけつして、自分もスタンプの紙を持って、きょうふの部屋のとびらのとつてに、手をかけました。

ぎいい……。ばたん！

とびらがまりました。

そこは、うす暗い部屋でした。かなり広いようです。

なにもいません。なんの物音もしません。

目をこらして見てみると、部屋のおくに木のつくえがひとつあって、そこにスタンプ台がひとつ、おかれてあるのがわかりました。あのスタンプをおせば、しれんはおしまいです。ですが……。

そうかんたんにはいかないということは、すでに三人の仲間たちが教えてくれました。身をもって。

おそろおそろ、スタンプに近づきます。

そして、部屋のまん中にさしかかったころ……。

なにかが暗がりの中で動きました！ ロビーがはつと見てみると、そこにさつきまではなかった、おかしなものがあらわれていたのです！

それはみどり色と茶色の、人の背たけほどの、おかしな物体でした。しかも気がつけば、あつちにもこつちにも！ いったいこれは？

ですがそれらのなぞの物体(生きもの?)のしよたいが、なんなのか？ ロビーにはすぐにわかつたのです。なぜなら……。

それは、ロビーのいちばんきれいなものだからでした！

ピーマン！ ピーマン！ ピーマン！

たまねぎ！ たまねぎ！ たまねぎ！

そう、それらのみどり色と茶色の物体とは、まさしく、ピーマンとたまねぎのことだったのです！ しかもそれらにはみんな、大きな口と、大きなひとつ目がついていました。まさに、ピーマンおばけに、たまねぎおばけ！ そんなおばけたちが、あつちにもこつちにも、うじやうじやいたのです！

「いぎやー！」

ロビーがさげびました！ ピーマンとたまねぎだけはだめです！
だめなんです！ ロビーは小さいころ、このピーマンとたまねぎのおかげで、死にそうな目にあいましたから！

ウルファであるロビーは、生のやさいが食べられません（食べられないことありませんが、おなかをこわします）。ですがあるとき、ロビーがローストビーフのサンドイッチだと思つてかぶりついたものが……、生のピーマンと生のたまねぎスライスの、サンドイッチだったのです！ それも、中身山もりの！ のどにつまつて、はき出そうにもはき出せず、生のピーマンとたまねぎの、つんつんとしたにおいが、頭のおくまでしみ渡つて……、そのときにロビーがさげんだ声か、「いぎやー！」もう、じたばたするしかありませんでした。やっこのことでミルクを流しこんでおちついたころには、もう、ぐったり。それからというもの、ロビーはなにをおいても、ピーマンとたまねぎだけはだめになつてしまったのです。

そのときのきようふが、ロビーにようしやなくおそいかかつてきました！ そんなロビーに、おばけたちがつきつきとふりかかつてきます。あのつんつんとしたしげきのあるにおいを、ふりまきながら。これはきつい！

あつというまに、ロビーのからだはピーマンとたまねぎの山の中に飲みこまれていってしまいました（黒いしっぽと耳だけが、その中から飛び出していました）。それでもロビーはさいごの力をふりしぼつ

て、スタンプ台まではつていきます。がんばれ！ ロビーー！

ようやくのことでスタンプ台までたどりついたときには、もうロビーの頭の中は、まっ白でした。そしてロビーは自分でもわけがわからないまま、なににも考えることもできずに、手にした紙に（ほんのうのままに）そのスタンプをおしたのです。

ベタンツ！

すると……。

部屋をうめつくしていたピーマンとたまねぎのおぼけたたちが、さーっ！ まるで波がひくかのように消えていきました！ やった！ そしてあとには、もとのなにもいない、なんの物音もしない、広い部屋だけが残ったのです。

ロビーは、きょうふに勝ったのです！ でもロビーの頭の中には、そんなことはまったく、はいつてはきませんでした。なににも考えることもできません。あいかわらず、からだにはピーマンとたまねぎのおいが、しみこんでおりましたから（おぼけたたちが消えたのに、このあいだだけはそのままでした。いっしょに消えてくれればよかったのに！）。

ロビーはそのまま、よろける足でなんとかとびらまでたどりつくど、この（いまましい）きょうふの部屋からぬけ出しました。そして、横たわっている三人の仲間たちのとなり、そのまま、ぼったん！ たおれこんでしまったのです。

「もう、だめ……」

四人が目をさましたのは、それからなん時間もたってからのことでした。

24、ほんとうの強さ

美しい朝の光が、この土地のすみずみにまでふりそそいでいました。じこくは、羽うさぎのこくげん。朝の六時ごろです。夜のあいだにたまったたくさんの水のしずくが、みずみずしいみどりの葉の上で、宝石のようにきらめいていました。おだやかな空、小鳥のさえざり。さきほこる花々、みのるくだもの。すべてのものが、この土地のへいわさをよくあらわしていました。

ですがいつたいたれが、ここにこんな光景があらわれることを、よそくできたでしょうか？ 白く美しいししょうのようなれんができずかれた、かがやけるみやこ。そのみやこにかかる、四つの白いネックレスのような、じょうへき。そのじょうへきのいちばんそとがわ。このみやこに通じる門の、そのさきのみどりの平原に、今まつ黒なおそろしい影たちが、ひしめいていたのです。それは……、そう、おそろしい黒の軍勢、ワットの者たちでした。

ここは、美しき白のみやこ、シープロンド。

そのかがやけるみやこに、今黒の魔の手がせまろうとしています。

「いつでもよろしいですよ、王さま。」

白いネックレスの、そのいちばんそとがわ。つまりみやこのいちばんそとがわの、そのじょうへきの上。今そこに、ワットの軍勢にむかひあうかたちで、たくさんのシープロンの者たちが集まっています。王さまに声をかけたのは、りっぱなししゅうのされたきぬの衣服に身をつつんだ、ひとりの身分の高そうなシープロンです。それは王さまのそっきんのひとり、われらが仲間、ルースアンのおとうともある、ルーベルアン・トーンヘオンでした。

「そうだな。」

こちらはメリアン王。メリアン王は、その手に、しきをとるためのみじかいつえを持ってあります。りっぱなちょうこくのなされた、白い宝石でできたつえです。これは代々シープロンドの王宮に伝わるもので、とくべつな力を持っているとされる、魔法の品物でした(売っ

たら、たいへんなねだんがつくことでしよう。売りませんけど。

メリアン王ははるかな平原を見つめたまま、しばらくもの思いにふけていましたが、やがて手にしたつえをぱつと前にふると、そっきんの者たちにはいいました。

「よし、使者を送れ。これがさいごのチャンスだと、いつてやるといい。たぶん、むだだろうがな。」

「むだでしょうがね。」そういつてルーベルアンが、衛士たちに（王さまからのつかのそのメッセージのこともふくめて）あいずを送りました（このあいずは、手ばたしんごうのようなもので、遠くにいる相手にもメッセージを送ることができました）。それと同時にシープロンドの門がひらき、そこから、馬に乗った使者たち（これはフォルテールとホロウノースのふたりがつとめました）が飛び出します。そしてワットののがわからは、いぜんにやってきたあの黒い毛がわを着た三人の使者たちが、ふたたびやってきました（話しあいには、きたいできそうもありませんね）。

おたがいの使者たちが、顔を見あわせます。フォルテールとホロウノースは、さほうにのつとつて、馬からおりておじぎをしました。ワットの使者たちは、ぶれいにも、馬に乗ったまま話しをはじめました。

「話しあいのよちはないはずだ。わへいの道を破つたのは、そちらなのだからな。」ワットの使者たちがいいました。わへいですって？
よくいいます！　こうふくか？　いくさか？　なんて、きめつけておきながら！　フォルテールとホロウノースは、心の中で、んべー！と舌を出してやりましたが、さすがにこの場は（じつさいにそんなまねをするようなことは）ひかえました。

「われらは、われらの道を歩むのみ。それは、なんら変わりありません。あとは、あなた方の心、ひとつでございます。これがさいごのチャンスだと、心得ていただきますよう。」フォルテールがいました（王さまにいえといわれたつかのメッセージのことも、しつかりいいましたね）。

これをきいて、ワットの使者たちはあきれたように、手をふつてい

いました。

「まったく話にならない。それではこれにて、いくさのはじまりとしよう。われら、アルファズレド王あずかり、ロートタリスのマダン・レクグワース隊がお相手つかまつる。そちらの兵力は？」

「われら、メリアン・スタツカート王しき下。シープロン衛士、二百です。いくさのおきてにかたくしたかうことを、おちかいいたします。」ホロウノースがこたえます。

「心得た。われらもむろん、おきては守らせていただく。よりぬきの兵士、七百五十にてお相手しよう。では！」

そういつてワットの使者たちは、隊の中へともどつていきました。やっぱりさいごの話しあいなどというものは、きたいできませんでしたね。ですがいぜんにも説明いたしました通り、たとえワットの軍勢といえども、いくさのおきてはきちんと守ってもらえるようです（「三ばいの兵士たちまでしか使えない」というルールがありましたよね。そして「兵力が二百五十人にみたない場合でも、二百五十人としてあつかわれる」というルールもありました。ですからワットの軍は、こんかい集まった八百五十人ほどの兵士たちのうち、（二百五十人の三ばいの）七百五十人の兵士たちだけが、戦いにさんかするというわけだったので。

ちなみに、ワットの軍勢がやつてきたのは、ここから南東に進んだ地にあるちゅうとんちからでした。そこは「西のちゅうとんち」とよばれるロートタリスという場所で、北の地のけいびにあたる兵士たちがいるところだったので。ベーカーランドにせめこむために、ワットの兵士たちは今そのほとんどが南の地へとうつっていましたから、シープロンドをせめ落とすにあたって、この北の守りのロートタリスの兵士たちが使われたというわけでした。いうなれば、「い残り組」といった感じですね。だからといって、べつに、弱いというわけではありませんでした（が）。

ですがやはり、相手はつねに三ばい（またはそれ以上）の勢力でせめこんでくる、ワットの黒の軍勢。これに対して、シープロンドの衛士たちは、ろくに武器も持っておりません（かぎりのやりは持っている

ましたが、これでまともに戦うことなんて、はじめからむりでした。すぐにぼつきり、おれてしまいますから。ワットの軍勢も、そのことはよくわかっていました。ですがかれらは、いっさいようしやなどしません。相手がどんなに弱くても、つねに全力でむかってくるのです。メリアン王をはじめ、シープロンの者たちも、そんなことは百もしようちのはずでした。ではいったい、メリアン王やほかのシープロンたちのよゆうは、ほんとうにどこからくるのでしょうか？

ワットの軍勢が動き出しました。そのあちこちで、ぶきみなつのぶえの音色が吹きならされていきます。ワットのもんしようがそめぬかれたまっ黒なはたが、ゆらゆらとゆれていました。黒の軍勢の足音、よろいのなる音、たてがこすれる音、剣がゆれる音……。それらはまったくもって、この美しい空の下にはふつりあいな、悪夢のようなしるものたちでした。

ついに、シープロンドの戦いはじまったのです。

「やっぱり、むだでしたね。」せまりくる軍勢のことを見つめて、ルーベルアンがメリアン王にいいました。

「むだだったな。」メリアン王が「ふう。」と息をついて、それにこたえました。「さいごのチャンスだと、いつてあげたのに。」

「しかたない。では、せいなる山のお力を、おかりするでしょう。」メリアン王はそういつて、手にした白いつえをさつとふり上げました。そしてそれをあいずに、白いじょうへきの上にいる衛士たちが、つぎつぎと、なにかのはこをそうさしはじめたのです。それらのはこは、じょうへきの上につくられたまるいやねのついたいくつかの小さな塔の下の、白い石の台の上に、それぞれひとつずつ乗せられています。はこの大きさは、はばが二フィートほどで、高さは一フィートほど。すみきつたとうめいなすいしようでつくられた、美しいはこでした。

これはいったい、なにをするものなのでしょう？ 衛士たちが、そのはこの上にえがかれたたくさんのもように手をかざしたり、なに

かのスイッチのようなものをおしたりしていきます。そしてさいごに、はこのまん中にはめこまれていた、とうめいなドームに手をかざすと……。

ぶいいいくん！ ばあああつ！

はこが、にぶい音を立てて動き出しました！ そしてそれと同時に、とうめいなドームが青くまぶしい光を放ちはじめたのです！

同じことが、あつちでもこつちでも起こっているようでした。それらはこは、四つあるネックレスのじょうへきの、そのそれぞれに、なにかずつおかれていたのです。

はこから出る青い光が、あつというまに、白いじょうへき全体をつつみこんでいきました！ そしてそのちよくご。おどろくべきことが起こったのです。

じょうへきをつつみこんでいたその青い光が、しゅごごごごー！うずをまくような大きな音とともに、じょうへきのちゅうおうへとどんでん集まっていきました！ そして、その光の中から飛び出したのは……。

「ごがああああー！」

で、出たー！ まつ青なからだを持った、巨大なりゆうです！ それは、水の精霊の力を持った強力なりゆう、ウォーター・エレメンタルドラゴンというりゆうでした。どっひゃー！ こんなものが飛び出てくるなんて！

そして白いネックレスのじょうへきは、四つ。つまり……。

「ぐがああああー！」「ぐるぐるぐるー！」「がががるるー！」

そういうことです！ 四つのじょうへきそれぞれから、エレメンタルドラゴン！ つまり全部で四体の巨大なりゆうたちが、飛び出してきたというわけでした！（このじょうへきにつくられたたくさんのすいしようのはこは、それぞれが精霊たちにちよつとしたあいずを送るための、そうちでした。そのあいずにこたえて、強力な精霊たちが飛び出し、このくにを守るのです。いくなれば、この白いネックレスのじょうへきは、「敵をけちらすこうげききのうつき」の、精霊のバリアー。シープロンドはこんなに強力な四重にも渡る精霊のバリアーによって、かたく守られていたというわけでした！ これになつとく。これではだれも、かなわなはずです！）

「え……？ ええつ？ えええーっ！」

おどろいたのは、ワットの兵士たち！ おどろいたなんてものじゃありません。それもそのはずですよ。シープロンドは軍を持たない、おとなしくに。ワットの兵士たちはこんな戦いなんて、ほとんど「かたちだけ」みたいなものだと思っていたのです。たくさんの兵士たちで、ちよつとおどかしてやれば、すぐに音を上げてこうさんしてくるだろうと。それがどうでしょう。いきなり巨大なエレメンタルドラゴンが、四体！ うなりを上げて、こちらへとむかつてきましたから！

「ぎゃああー！」「うわああー！」「やばい！ やばい！ ひええー！」

ワットの兵士たちはもう、大こんらん！ あつちへこつちへ逃げまどいます！ ですが、むかつてくるりゆうたちは、ようしやしません。

「（おおおー）」

りゆうの口から、水のほのおが飛び出します！（ふつうりゆうといふものは、その口からほのおの息を吹き出すことでゆうめいですが、

このウォーター・エレメンタルドラゴンは水の精霊のりゆうでしたから、水でできたきりのような息を吹き出しました。ですからまさに、水のほのおといった表げんが、ぴったりだったのです。(そしてその水のほのおは、逃げまどうワットの兵士たちを、いちもうだじん！ ぎざぎざあー！ みんなまとめて、あらい流してしまいました！)

ぎざぎざあー！ ずざぎざぎー！ ばっ、しゃあーん！

あたりはもう、水びたし！ かわいそうなワットの兵士たちは、剣もたてもかぶとも、みんな流されて、まさにぬれねずみです！(中にはよろいまで流されて、シャツだけになってしまった兵士までいました。こうなったらもう、兵士だかなんだかもわかりませんね。)

そして、つぎのこうげきが！

とつぜん、水びたしの地面が、ぐぐぐぐ！ と持ち上がって……。

アッパー・パンチ！ どつごくん！

「ぎゃあああー！」

地面の下から巨大なげんこつが飛び出して、ぬれねずみになったワットの兵士たちを、ようしやなく下からパンチしました！ こ、これはきつい！

かわいそうなワットの兵士たちは、二十フィートほども飛ばされて、地面にできた水たまりの中に、ぼっしやーん！ 水びたしのうえに、どろまみれ！ もう、ふんだりけったりです！

これは土の精霊でした。いっばんにはノームとよばれることもあります。ここで出てきたのは、そのこぶしだけ(それも、とく大きゆうの！)。ノームとはほんとうは、小さな人のすがたをしているのです。でも人のかたちでなくても、そのこぶしだけでじゆうぶんでした。なにしろそこらじゆうから、この(とく大きゆうの)土のこぶしが飛び出してきましたから！

パンチ！ ノーム・パンチ！ フック！ ジャブ！ ブロー！

ワットの兵士たちは両手を上げて逃げまどい、たたかれ、飛ばされ、ころんで、ばつちやーん！ つぎつぎに水たまりの中へとたおれこんでいきます。もう、黒いよろいを着ていなくても、どろでまっ黒！

なんとおそろしい。メリアン王やそっきんの者たちが、ワットの軍勢の武力に対してもへいぜんとしていたわけが、これではつきりわかりましたね。「わがくには、神さまによって守られております。」これは第六章の、ロビーたちの出発についてのかいぎの場で、ルエルしきようさまがいつていた言葉です。その言葉の意味も、これではつきりとわかりました。シープロンドは、神さま、精霊の力によって、かたく守られていたのです。どんなに強い軍隊だって、シープロンドにはかなわないのです。ワットの兵士たちはこんかいの戦いで、そのことをいやというほど思い知らされました（そのかいぎの場面で、ワットの兵士たちにきいた話をわたしからみなさんにお伝えしたことがあります）が、そのとき兵士たちは、こういつていましたよね。「シープロンド？ やめてくれ！ もう、あそこだけは、こりごりだ！」あの言葉はつまり、こういうわけからだったのです。かれらもまた、りゆうの息に流されて、土のこぶしにパンチされまくった者たちでしたから……。

ところで……、精霊のりゆうやこぶしがあばれまくっているわけですが、これって「戦いのための魔法を使ってはならない」というくさのおきてに、いはんしてるんじゃないの？ と思われた方もいるかもしれませんね。精霊の力と魔法は、にたようなものですから。ですがこれは、いはんとはなりません。戦いの魔法とは、あくまでも、みずから魔法の力を生み出して、その魔法の力で相手をこうげきするというもの。シープロンたちは、魔法で精霊たちを生み出したというわけではありません。シープロンたちは、精霊たちにちよつと、あいずを送っただけなのです。そして精霊たちは、みずからの意志でかつてにあらわれて、そして魔法の力ではない、みずからの持つほんらいの力によって、かってに相手をこうげきしているだけでし

た。ですから精霊たちが、こうげきの魔法を使っているというわけでもありません。魔法ではなく、自分ののうりよくで、相手をこうげきしているだけなのですから。

ちなみに、「そこからの勢力がいくきに加わった場合、その勢力はこんご、そのくにのしよぞくとしてあつかわれる」というルールがありました。精霊たちはこのルールにすら、あてはまりませんでした。勢力というのは、兵としてのかたちとして、はつきりととどまることのできる者たちのことをいいました。ですがかれら精霊たちは、ぜんぜん、はつきりとした兵のかたちなどといったものには、とどまることなどできません（すぐにどこかへ、ふいつと消えてしまいますから）。ですからこの精霊たちは、こんごも、シープロンドのしよぞくとしてあつかわれることはないのです（あの巨大なウォーター・エレメンタルドラゴンでさえも！）。シープロンたちは、こういったことをすべてしようちのうえで、精霊たちにあいずを送りました。うくん、さすがは、したたかなシープロンたちですね。悪ぢえ（？）にかけては、ワット以上かもしれない……）。

「ええい！ なにをしているのだ！ こらー！ 逃げるな！ 戦わんか、ばかもん！」

兵士たちの隊のうしろで、ひとりの大きな男せいがさげんでいました。この人物はこの軍勢をしきしているしきかん、マダン・レクグワースという人物でした。ティガニアという、とてもめずらしい種族の人物で、トラの種族の者なのです（ティガニアはこのアークランドには、数えるほどしかおりません。西の大陸ガランタの、そのまたいちばん西のはしに住んでいる種族でしたから。なんでこんなところまでやってきたのかは、わかりませんが）。

「むりです！ りゆうが！ うわあー！」

ぎざぎざー！ しきかんにどなられた兵士のうちのひとりが、また水のほのおに流されていってしまいました。ほかの兵士たちもつぎつぎと、ノームパンチでぶっ飛ばされていきます。

「おのれー、シープロンどもめ！ こしやくなまねを！」マダンは両のこぶしをにぎって、ぎりぎりと齒をくいしばりました（どうやら、か

なり怒りっぽい人のようですね。自分のじょうしじやなくてよかったです。

「いったん、しゃていがいにひけ！　こうなれば、あの切りふだを出す！　使うまでもないと思っていたが、やむを得ん！　やつらを前に出すのだ！」

マダンがさげびました。そしてその言葉にあわせて、隊のうしろから、まつ黒な四頭の馬たちがあらわれたのです（しゃていがいにひけというのは、精霊のりゆうと土のこぶしの手のとどかないところで、下がれという意味なのです。この精霊たちは、じつはみずからの力のみなものであるネックレスのじょうへきから、遠くはなれることができませんでした。じょうへきにかこまれたシープロンドのみやこの中ならば、自由にいききすることができましたが、こんかいのように、じょうへきのそとにいる敵に対しては、いちばん遠くても百ヤードほどまでしか、手を出すことができなかったのです。それに気づいていたマダンが、ここで精霊たちにじやまされないうしろまで、下がれとめいれいしたわけでした。おそろしい悪だくみをこれからおこなう、そのために……）。

その馬たちの上に乗っていたのは……。

レシリア！　ルースアン！

ハミール！　キエリフ！

ああ、なんてこと！　おそれていたことが、ついに！　ついにかれらが、その身をワットにりようされてしまうときがやってきたのです！

シープロンドを、おそろしいわなにはめるために……。

ワットがかくし持っていた、切りふだ。それが、かれら四人のほりよたちでした。ワットはこのほりよたちを、いちばんりえきが生み出せるときに、いちばんひきような方法で使おうと考えていたので

す。それが、今でした。

「あの者たちの身は、シープロンドを落とすさいに、りようできましよう。」これはリュインとりでワットの黒騎士たちが、とらわれのリストールの前で、しきかんのガランドーにいった言葉でした。あの者たちというのは、もちろん、とらわれのレシリアたち、四人の仲間たちのことにほかならなかったのです。

「シープロンドなど、かんたんに落とすことができるでしょうが、そなえに越したことはありません。万いちのことがあれば、やつらの身をれんちゆうにつきつけて、やみの力にでもそめてやりましょう。助けてほしくばこうふくせよと、シープロンドにせまることができません。いかにくせものメリアン王とて、こんどばかりは、ようきゆうをのむでしような。」

なんとというひどいことを考えつくのでしょうか！　そしてこれこそが、ワットの者たちの考えた、おそろしいわなでした。

レドンホールの黒ウルファたちのことをおそった、おそろしいやみの力。こんどはレシリアたち、とらわれの者たちのことをも、同じ目にあわせようというのです。自分たちのだいじな仲間たちが、目の前でそんな目にあわされようとしていたのなら……、いくらかたいかくごの心を持ったシープロンたちであっても、ワットのようきゆうに、くつしないわけにはいかないでしょう（もし、ようきゆうに応じなければ、ワットはほりよたちのことを、ほんとうにやみに落としこんでしまうでしょう。そして……、やみに落としこまれた者は、自身のその身に、たいへんなふたんを与えられることになるのです。こううんにも、レドンホールの黒ウルファたち、そしてベゼロインの戦いでたおれた者たちにおいては、まだそのやみの力にたえることができていきましたが、ここで新たにやみに落としこまれた者たちが、そのやみの力にいつまでもたえられるというほししようも、どこにもありませんでした。それこそ運が悪ければ、その場でそのいのちまでをも、ただちに落としてしまいかねないのです！（そしてこのやみの力を取りのぞくための方法は、ざんねんながら、光の魔法をあやつるわれらが白き者たちには、見つけることができいていませんでした。）

メリアン王をはじめ、シープロンドの者たちは、かたいかくごの心を持っています。ひとときの心のまよいのために、くにを危機にさらすようなことは、してはならないとこころえていたのです。しかし、いくらそれがくにのためであったとしても……、目の前の仲間たちのことを、みずからの手で、みすみすそんな目にあわせてしまうようなことは、メリアン王にもとてもできることはありませんでした。このおそろしいわなのことをきかされたリストールの気持ちは、どれほどのものだったのでしょうか。ですからリストールは、その前に、これらのことをなんとしても助けたいと思ったのです。

もし、万がいちシープロンドが勝ちそうなことになったとしても、このほりよたちさえいれば、やつらも手が出せなくなる。四人のほりよたちは、いわば戦いに勝つための、ほけんでした（ところで、いぜんにもすこし説明しましたが、ここでやつぱり、このほりよというもののあつかいについて、もうすこしくわしく説明しておかなければなりません（ぜんぜん、おもしろくもないじょうほうですが）。

いくさで勝ちをおさめたくには、相手のくにの兵士たちの中から、ひとつのくにであわせて千人までを、いくさでのほりよとして自分のくにつれていくことができました。そしてこれも、いぜんにお伝えしたことがあります。ほりよをつれていくことは、いくさに勝つたくにのけんりとしてはみとめられていることでしたが、じつさいにほりよたちをつれていくようなまねをすることは、このアークランドではひとつのくにをのぞいて、ほとんどありませんでした。

そのくには？　そう、ワットです。ワットは戦いで得たほりよたちを、自分たちのくにのろうどう力として使い、くにのはつてんのためによりようしていました。

ほりよたちは、いご、法の名のもとにワットのくにのぎいさんとしてあつかわれ、こんごのいくさにワットがやぶれでもしないかぎり、ずっと敵の手の中ではたらかされたり、ときにはいくさの手助けをさせられたりしてしまうことになるのです。

（ちなみに、ほりよを取ることは例外がひとつありました。「本軍をしきするしきかんは、ほりよにすることができない」というきまり

があつたのです。本軍とは、くにのいちばん大きな部隊のこと。ベーカーランドでいえば、エリル・シャンディーンの兵士たちと白の騎兵師団のことをしきする、ベルグエルム、フェリアル、ライラの三人が、本軍のしきかんにあたりました。ですからベゼロインが落ちたとき、かれらはほりよになることはなく、ベーカーランドへともどされたのです（このルールは、たとえ本軍をひきいた戦いでなくても、本軍のしきかんであれば、てきようされました。ちなみに、リュインのしきかんであるリストールの場合は、本軍のしきかんでありませんでしたから、このルールにはあてはまりませんでした。ですからワットは、リストールの身をようしやなく、とらえたのです）。

しきかんでない兵士たちなら、ほりよに取ることはできません。ですがベゼロインで戦った兵士たちは、そのほとんどが、やみのつるぎの力のぎせいになりました。ですからワットは、かれらをほりよに取らなかったのです。取ろうと思えばほりよに取ることもできましたが、あえてワットは取りませんでした。あつとう的なまでにたたきのめされた兵士たちを敵のもとへ送りかえすことによつて、力の差を見せつけ、きようふさせることが、そのねらいでした。）

レドンホールの場合は、黒ウルファの兵士たち八百人ほどが、すべてほりよとしてワットにつれていかれました。そこでかれらは、アーザのおそろしいくらみにより、やみの力をおびたやみの兵士として使われることになってしまったのです……。これは、「ちよつとやみの力こめちやうから、あとは、おもしろおかしく使つてよ。」という、アーザのなんともひどすぎる気まぐれによるものでした。まったくアーザには、人の心などというものはないので！

ですがそれでも、ほりよたちのあつかいについてきだめられた取りきめのことを、ワットは「破つてはいない」といいました。その取りきめとは、「ほりよたちの身をいたずらにきざつけることは、かたくきんずる」というものでした。やみの力にそめることは、べつにほりよたちのことをきざつていているわけでもないし、けがもさせていないというのが、ワットのいいぶんです。こんないいぶんは、まったくなくともくができませんが、それでもワットは、やはりこのいいぶんを通し

てしまっていました。

そしてワットの、そのいちばんひきょうなところ。それはこのほりよたちのことを、いくさの勝ち負けのためにりようしているところでした。大きないくさでは取りきめとしておこなうことができませんが、両軍あわせて千人以下とさだめられている小さないくさの場合では、じょうけんをしめすことによる、こうふくかんこくというものが、しばしばおこなわれます。これは、なにかをしてやるかわりに相手にこうふくをせまるというもので、ほんらいならば、おたがいのりえきになることをおたがいに考えて、いくさをするまでもなく、あらそいをかいけつするというもくてきのためのものですが、ひきょうなワットは、「ほりよたちの身のあつかいをよくしてほしいのなら、いうことをきけ」ということを、そのこうふくのためのじょうけんとして使っていました。

たしかに、じょうけんの内ようのことはおたがいで話しあつてきめることでしたから、正式な取りきめとしてはさだめられていません。ですがこんなじょうけんは、まったくもつて相手の弱みにつけこむものであり、ひきょうそのものです！　そしてそのひきょうそのものやり方を、ワットはこんかいの戦いでもまた、おこなおうとしています。

もつともワットの場合は、あつとう的なまでの兵力の差を相手に見せつけるといふやり方を好みましたから、じょうけんをしめしてこうふくをせまるのは、とくべつな場合にかぎられていました。「兵士たちをそろえるのがめんどう」だとか、「武力よりもせいしん的に相手を痛めつけてやった方が、こうかの」だとか、そんな場合です。

こんかいの場合では、武力でかなわなかったので、やむを得ず、ということになるわけですが、それでもワットが、いぜんゆうりなじょうけんの上に立っているということに、変わりはありません。ワットはそのゆうりなじょうけんをさいだいげんにいかして、今までのやりくちよりもはるかにひきょうな方法でもつて、シープロンドにこうふくをせまろうとしていました。とらわれの者たちのことを、悪しきやみにそめてしまおうというのです！

こんなことは、ぜったいにやめさせなければ！ でも、いったいどうすれば……？ やはりこのまま、おとなしくワットにこうふくする方がいい、ないのでしょいか？。

「ほりよたちを進ませろ！」マダンが兵士たちにめいれいしました。

きたない！ なんてきたない！

四人の仲間たちはそれぞれ一頭ずつの馬に乗せられていました。しかも、両手をうしろ手にしばられて！ かれらの両わきには同じく黒い馬に乗った、黒いほのおを上げたおそろしい剣を持った騎士たちがふたり、ぴつたりついて、その剣のさきをとらわれの者たちの方にむけていました。この剣こそが、アーザスのそのおそろしいやみの力のこめられた剣だったので（ベゼロインの戦いで黒ウルファたちの持っていた剣よりも、はるかにおそろしいげな感じでした。これは、やみの力がそれだけ大きいからなのです）。この剣で切られた者は、黒ウルファの仲間たちやベゼロインの戦いでたおれた仲間たちのように、やみにとらわれてしまいました。ひきようなワットは、そのなんともおそろしい光景のことを、シープロンの者たちの目の前につきつけてやろうというのです。

これを見る！ ははは、どうだ！ これで、手も足も出まい！ いくらには、アルファズレドへいかじきじきのごめいれいにより、とらえられた者たちだ。おまえたちも、よく知っていることだろう。このふとどき者たちのしよばつのことについては、へいかはわれらに、いちにんされた。どうしようと、それは、われらの自由だ。やみの力にそめてやろうともな。だが、おまえたちがおとなしくこうふくするかどうか、考えてやってやらんでもないぞ。われらにも、なさはある。さあ、どうする！

というのが、マダンのせりふ……、のはずでしたが……。

「ほりよというのは、いったい、だれのことかの？」

とつぜん、うしろから声がしました！

「え？ あ、あれ？」マダンがそういって、ほりよたちの方を見ていると……。

そこには馬しかいません。

だれも乗っていないのです！

そんなばかな！ さっきまで、そこにいたのに！ わけもわからず、マダンがうしろをふりむくと……。

「うわあああー！」ば、ばけものー！」

口ぐちに上がる、部下たちのさげび声！ そこには身長三十フィートはあろうかというほどの、おそろしい巨大な岩の兵士たちが、立ちはだかつていました！ それも、なん体も！

「な、なんだあー！」マダンがどぎもをぬかれてさげびました。

こ、この兵士たちは！ みなさんには、もういうまでもありませんよね。

岩のけんじやリブレストの、岩の兵士……、いえ、ロボットたち！ かれらがついに、このシープロンドまでたどりついたのです！

やったー！（それにしても……、まさにぎりぎり！ あやういところでした！ リブレストさんは「すぐに追いついてみせるわ！」みたいなことをいっておりましたが、じっさいには道の悪いところなどもあつて、けっこう時間をくってしまったのです。それでも、とんでもなく早くこのシープロンドまでたどりついたことには、まちがいありませんでしたが。なにしろ、馬で二日はかかる道のりを、六時間半でやってきましたから！ はやい！）

岩のロボットたちは、みな大きな岩の剣をかまえております。戦いのじゅんびは、ばんたんのようでした。そして、そのいちばん前に立ちふさがっているロボットの、その肩の上には……。

レシリア！ ルースアン！
ハミール！ キエリフ！

ロープをとかれ、自由の身になった四人の仲間たちが、まさにけいせいぎやくてん！マダンのことを、ぎろり！ にらみつけていたのです！

いうまでもなく、かれらは馬の背から、(リブレストのあやつる岩のロボットのゆびにちよこんとつまみ上げられて)ロボットのその肩の上まではこばれました(ついでに、かれらのわきにいた騎士たちは、ロボットのゆびにぺちん！ とはじかれて、ノックアウト！ 二本のやみの力の剣も、ともにぽつきりおれてしまいました。やったー！)。そしてリブレストのいった通り、もうかれらは、ほりよなんかじゃありません。今ふたたびこのしゅんかんから、ワットの悪に立ちむかう、自由のヒーロー、ヒロインとなったのです！

「こーの、がきんちよども。すこーしばかり、いたずらがすぎたようだのお。」

ロボットの頭から、ひよっこり。顔を出したリブレストが、にやりとふきつな笑みを浮かべながらいいました。これから、とつてもこわーいことがはじまりそうな感じですよ。それは、そう、おしおきターイム！

「悪いがきんちよには、きつーいおしおきが必要だわい。レイミール、やったれい！」

「イエス・サー！ キャプテン！」

ロボットの中から、レイミールの高いかわいい声が出て……。

「せいぎの剣を、受けてみよ！ ジャステイス・ブレードランチャー！」

ぎゅ、ぎゅいいん！ 岩のロボット兵士が、その巨大な岩の剣をぶりかざしました！

そして、ぶおおん！ ふりおろされた剣のやいばのさきから、オレ

て、魔法の力が使われているというわけではなかったのです！（いつてみれば、花火みたいなものです。その花火みたいな力が、剣のさきから出るように作られていました。よくできた「工作物」ですね！）ですからみんなもえんりよなく、この工作物の力をぶっぱなしたというわけでした。うーん、なんか、すごい！。

「ぐむむむむむ……！」

マダンは歯をぎりぎりとかいしばって、くやしがりました。目の前には、巨大な岩のロボットたちがずらり。うしろには四体のエレメンタルドラゴンたちと、たくさんの土のこぶしたちが、よらばうたんと待ちかまえております（しかも土のこぶしたちは、人さしゆびをいっぽん、ちよいちよいと動かして、「カモーン！」といったふうはこちらのことをちようはつしていました）。どう見ても、自分たちの負けでした。ですが、このマダン・レクグワースという男、根っからの負けずぎらい。そしてあきらめの悪さにかけては、人いちばいだったので。

「おのれ！ このマダンを、見くびるなよ！」

マダンはそういって、腰にさしていた二本の剣……、ではありません、おのを、しゃきん！ 両手にかまえました！ このティガニア種族のしきかんは、種族だけではなく、その戦い方までなんともめずらしいものだったのです。両手に、おの。二刀流ならぬ、二おの流？ まあ、よび名はいいとして、とにかくその大きなからだとあいまって、すごいはくりよくでした。

でも……、やっぱり相手が、悪すぎですよ。いくらティガニアがはくりよくたつぷりでも、相手はさらにはくりよくたつぷりの、岩のロボット兵士たちでしたから。背だけが五ばいほどもちがうのです。それでも、マダンの気あいはじゅうぶんでした。全身から、オーラのような力があふれかえっております！ そしてマダンは、両手に持ったおのをぎゅぎゅっ！ とにぎりしめると、すさまじいはやさで、リブレストの乗る岩のロボットにむかってとっしんしていきました！ すごい！

「受けてみよ！ デュアルアクス・デストロイヤー！」

「おい、おまえたち。おまえたちもいつしよに、吹っ飛ばされてみるかの？」

リブレストが、その場にいる兵士たちにいいました。それからしばらくして……。

ひゅううう……、ばっしやくん！

巨大なロボット兵士のこぶしに吹っ飛ばされたマダンが、どろの水たまりの中に落っこちた音でした……。あーあ、だから、いわんこつちやない……。かわいいそうなマダン・レクグワースは、「うくん……」口からあわを吹いて、そのままどろの中で、おねんねです。

「ひえええ〜！」「た、助けてくれ〜！」「こんなところにいられるか〜！」

これで、ほんとうにきまり。しきかんのマダンまで失ったワットの軍は、そうくずれ。剣もやりもみんな放り出して、いのちからがら、どろだらけのぬかるみ道を走ったりころんだり、逃げ帰っていきました（ちなみに、マダンは六人の兵士たちにかつぎ上げられて、はこばれていきました）。

やったね、やった！ シープロンドの大しようです！ じょうへきの上から戦いのようすを見守っていたシープロンの衛士たちは、やりをかかげて大よろこび！ 口ぐちに精霊の力をたたえ、メリアン王をたたえ、そしてこのすばらしきくに、シープロンドのことをたたえました（あの巨大な岩の兵士たちは、いったいなに？ とも思っていました）。

「メリアン王、ばんぎーい！」

「シープロンドに、えいこうー！」

「やーいやーい！ おとといきやがれ！ ざまーみろー！」
さいごだけちよつと、品がありませんでしたが……。

「兄さんー！」

リブレストの乗る隊長きのロボットの中から、小さな見ならい兵士、レイミールが飛び出しました(さきほどはみごとなロボットさばきで、ワットの兵士たちのことをやっつけましたよね。もう、いちにんまえといつていいほどの、すばらしいはたらきぶりでした)。そのあまりにもとつぜんのできごとには、ハミールはもう、びっくり！ さつきからびっくりすることばかりで、もうなれっこになってしまっそうでしたが、これにはほんとうにびっくりでした。リユインのとりでで、その身のゆくえすらわからなくなってしまっていた、おとうとのレイミール。その小さなレイミールが、とつぜんにあらわれた岩のロボット兵士軍団の中から、またもとつぜんにあらわれましたから！

「レイミール！ おお……！」

ハミールの胸の中は、もうありとあらゆる感じようでいっぱいでした。新たに生まれた、たくさんのおどろき。いぜんからあった、不安やおそれ。ずっとずっと胸の中をうめつくしていた、レイミールへの思い……。それらがすべてごちやませになつて、この若きウルファの騎士の心の中を、うめつくしてしまったのです。

ですが今、それらの思いの中から残すべきものは、ただひとつ。ハミールはすぐに、自分の心の中でのよけいな部分をみんなくしゃくしゃにまとめて、ぽい！ ごみばこにたたきこむと、いちばんだいじな思っただけをひとつ、ここにさらけ出しました。それは、そう、レイミールへの深い思いでした。

「レイミール！ 心配したぞー！ ぶじだったか！ よかった！ ほんとうによかった！ どれほどおまえのことを、心配したか！」

ハミールは岩のロボット兵士のその広く大きい肩の上で、ついに、おとうとのレイミールとさいかいを果たしたのです。

「ほんとうに……、ほんとうに……、うわああ！」

ハミールはレイミールの名まえをなんどもよんで、なみだを流して、その小さなからだのことをうでの中にだきしめました。もうにとど、会えないのではないか……？ そんな考えさえ、かれの心の中からまったく消えていたというわけではありませんでした。さいあくのことすら、その頭の中にはよぎってさえいました。

レイミールのことをだきしめる、ハミール・ナシユガー。かれはこのとき、騎士でも、兵士でも、勇者でもありませんでした。ただただ、家族のことを思う、ひとりの人であったのです。

「よがっだなあ……。ほんとうに、よがっだなあ……。」キエリフが、そんな友のすがたを見て、となりのルースアンとだきあいながらよろこびをあらわにしていました。

「レシリア、ルースアン、よくぞもどった。くろうをかけてしまったな。ハミールどのも、キエリフどのも、ぶじでなによりだ。」

すべてをさつしたメリアン王が、仲間たちの手を取って、心よりの言葉をおくりました。

「たいへんなにんむの旅に送り出してしまったことを、申しわけなく思う。どうか、ゆるしてほしい。」

かれらを危険なおとりとしての道に送り出したのは、ほかでもない、メリアン王でした。ですからメリアン王は、大きなせきにんを感じるのと同時に、かれらの身のことを、たいへんに心配していたのです(かれらをおとりの旅に送り出すことは、メリアン王にとつても、もちろんとてもつらいせんたくでした)。

ふたたびもどってきた、かれら。たいへんな目にあい、こんな旅になつてしまったということは、だれにとつてもあきらかでした。ほんらいならば、かれらはおとりとしてのつとめを果たしたあと、自分たちもベーカールランドで、ふたたびロビーたちと落ちあうよていだったのです。それがこうして、このシープロンドまで、とらわれの者としてのかたちでもどつてきましたから。

そのりゆうは、メリアン王にはおおむねわかっていました。そして今、そのりゆうのもととなった人物がひとり、かれらといっしょに目の前にやってきていたのです。

「リステロント、いや、今は、リストールという名であったな。」メリアン王がいました。そう、レシリアたち、自由の身となったわれらが仲間たちは、かれらが助け出すはずだったリュインのしきかん、リストール・グラントとともにやってきていたのです。

「リュインのことは、痛ましいことであった。ざんねんでならない。」メリアン王が、しずんだ顔をしていました。「だが、そなたも、リュインの者たちも、こうしてぶじに、わたしの前にいる。それだけは、まことによるこばしいかぎりだ。よくぞ、ぶじにまいられた。そして心より、そなたたちにかんしゃの気持ちをおくりたい。」

そしてメリアン王はそこまでいうと、急にかれらのうしろにしせんをやって、その場で深く頭を下げたのです。そこには……。

「ご、ごごいーん！　ぎゅ、ぎゅいーん！」

たくさんの、岩のロボット兵士たち！　そしてそのロボット兵士たちの前には、そう、アークランドの名高い三けんじやたちのうちのひとりと、岩のリブレストが立っていました。

「けんじやリブレストどの。お会いできてこうえいにございます。」メリアン王がうやうやしく、リブレストにいました。相手はとてつもない力を持ったけんじやのひとり。このアークランドでも、もつともそんなけいすべき相手なのです。ですが……。

「よいよい！　かたくるしいあいさつは、ぬきだわい。」リブレストは手をぱつとふって、メリアン王に頭を上げさせました。

「おまえさんは、メリアンだな？　王になったんだっただのう。あの、ひよっこ王子さまも、りっぱになったもんだわ。」

リブレストはそういって「がっはっは！」とごうかいに笑い、メリアン王のもとへとつかつかやってきて、王さまの頭をがしがしとなでまわします（まるつきり子どもあつかいです。なん百さいだか？　わからないほどのリブレストから見たら、みんな子どもみたいなものでしたから）。どうやら三十年前の冒険の旅のことを、リブレストもよ

く知っていたみたいですね。

「この戦いは、さいごのきよくめんをむかえておるぞ。」
笑っていたリブレストが、とつぜんまじめくさった顔になっていました。その表じようは、かたくこわばり、こわいくらいでした。

「ここにいる、リストール・グラント。この者が、この戦いにおいての、大きなかぎをにぎっておる。おまえさんには、いうまでもないだろうがな。」リブレストが、うしろにひかえるリストールのことをしめしながら、メリアン王にそういいます。

ノランも同じことをいつていました。「さいごの戦いでは、かれのそんざいが、大きな意味を持つこととなろう。」いったいリストールには、どんなひみつがあるのでしょうか？（そしていぜんにもお伝えしました通り、そのひみつを、メリアン王も知っているようなのです。さあ、早く教えてください、王さま！）

「ことは、いつこくをあらそうでしょう。」メリアン王がいました。「リストール。今こそ、人も、精霊も、植物も、そのかきねを越えて、力をあわせなければならぬときだ。これは、そなたの運命ともいえるであろうな。もういちど、このアークランドに、花の騎士たちの力をよみがえらせなければならぬ。それができるのは、もはや、そなたしかおらぬ。」

メリアン王の言葉に、リストールはだまつてうなずきます。花の騎士たちとは、いったい？

「わたしはすぐに、タドウーリ連山へとむかいます。」リストールがいました。「もとより、わたしは、この地をおとずれるつもりでした。このアークランドは、めつぼうのときをむかえております。わたしのつとめは、まさに今。かれらのゆるしをこい、その力をあおぐときます。」

リストールはそういつて、その場にいる者たちにいちれいをするど、そのままひとり、歩き出していきました。

かれの運命の場所、タドウーリ連山へとむかつて……。

「待つて！ だれも、いつしよにいかなくていいの？」レイミールが、去っていくリストールのすがたを見ながらいいました。ですがメリアン王もリブレストも、仲間たちも、動こうとはしません。ハミールはレイミールの方を取り、静かにいいました。

「だれも、かれの助けとなることはできない。われわれではな。こは、かれの力にかけろしかないのだ。」

ハミールはとられの身となっていたあいだに、レシリアからすべてのことをきかされていたのです。リストールのかこ、そして、その運命のことを……。

リストール。リステロント・グランテルド。かれは失われし大いなる精霊の種族、シルフィアの青年です（ここまでは、みなさんもよく知っています）。大むかし、このアークランドにもふつうに暮らしていたはずの、シルフィア。かれらがいなくなったりゆうは、いぜんにもお話ししたことがあります。人がふえ、アークランドの力のバランスがくずれたことが、そのいちばんのりゆうでした。

シルフィアをはじめ、たくさんの種族の者たちが消えていった、アークランド……。そして今からおよそ百年のむかし、このアークランドにおいて、もつとも大きな力を持った種族の者たちが、失われていったのです。かれらの名は、ネクタリア。大いなる植物の種族の者たちでした。

ネクタリアはこのアークランドの大地そのものといっているほどの、大きなそんざいでした。人のすがたをしておりますが、その力は植物の力です。きれいな水と美しい光によって力を生み出し、そのちえとわざは、このアークランドの大いなるいしずえとなつていました（大むかし、さいしよのカピバルたちに数々のわざを伝えたのも、もともとはネクタリアたちだといわれています）。かれらがいなかったのなら、このアークランドもこれほどゆたかではいらなかったことでしょう。ネクタリアたちの力は精霊たちの力と同じくらいに、このアークランドにおいてとても重要なものだったのです。

そのネクタリアの力のけつしようともいふべきそんざい、それが「花の騎士団」でした。花の騎士団はこの世界のすべての種族の者た

ちとともに、ささえあい、ともに協力しあって、このアークランドを
はんえいへとみちびいていったのです。

ですがその花の騎士団も、ほとんど力をましていく人間たちのこ
とを、しだいにおさえることができなくなっていきました（ほかの多
くの種族の者たちではなく、ここでは人間だけのことをさしていま
す）。多くの森が切りひらかれ、はたけが広がりました。たくさん
動物たちがかいならされ、ぼくじょうが作られました。これらはすべ
て、人間であるかれらが生きていくために、必要なものです。ですが
ネクタリアたちにとっては、とてもがまんにならないことでした。か
れらネクタリアたちは、しぜんそのものでしたから。しぜんを切りひ
らき、しぜんに反する生き方しかえらべない人間たちのことを、ぎも
んに思うようになったのです（もちろん、人間いがいのほかの種族の
者たちでも、生きるためにはすくなからず同じようなことはしていま
す。ですが人間は、ほかの種族の者たちとくらべても、しぜんをはか
いすることのとても多い種族でした。ですからネクタリアたちは、人
間たちのことを注意して見るようになったのです）。

そしてついに。

ネクタリアたちは花の騎士団とともに、そのすがたをこのアークラ
ンドからかんぜんに消していつてしまいました。

かれらがどこへいったのか？ 知る者はいません。

ただひとりのをのぞいては……。

そう、それがリストールだったのです。じつはリストールはそのむ
かし、ネクタリアたちの花の騎士団に、騎士として加わっていました
！（これはたいへんにめいよなことでした。）

花の騎士団がこのアークランドを去るときめたとき、リストールに
はかれらとともにゆく道もえらべました。ですがリストールは、残つ
たのです。ほんとうにこのアークランドに、みらいがないのかどうか
？ 人間たちへのぞみがないのかどうか？ それらを自分の目でた
しかめるためでした（それに、今までずっと暮らしてきたくにですも

の、リストールにはどうしても、このアー克蘭ドを見ずてるようなことなどはできませんでした。かれの家族やいもうとのリズだって、ずっと、ひっそりとですが、このアー克蘭ドで暮らしてきましたから。

こうしてリストールは、花の騎士団と、そしてネクタリアたちと、たもとを分けました。そしてリストールは、その身を新しい仲間たちのもとにおくことにきめたのです。それが人間たちのみやこ、ベーカーランドの白き者たちのもとでした（そしてそのとき、ずっと剣に親しんでいたもうとのリズが、リストールといっしょについてくることになりました。「せっつかくだから、この剣のうでまえを、どっかできよくに立てられないかなあ。」というのが、リズののぞみでした）。それからリストールは、兵士たちのしきかんとして、（リズはその剣のうでまえを買われて、剣じゆつしなんやくとして）ベーカーランドでの日々を送ることになったのです。そして今、（リズとリストールの）その運命は動きはじめました。

かつて自分も加わっていた、花の騎士団。このアー克蘭ドのことを見かぎり、去っていった、その花の騎士団に、もういちどアー克蘭ドの力となってくれるように、お願いしに行くこと。それこそがリストールにかせられた、リストールにしかできない、大いなるやくわりだったのです（ノランやリブレストのいつていた「リストールの持つ大きな意味」というのは、このことをさしていました）。

そしてリストールがなぜ、今このタイミングでネクタリアたちのところへむかったのか？ いぜんにもふれましたそのりゆうのことに ついて、ここでお伝えしておきましょう。それはリストールが、だれよりもネクタリアたちのことについて、よく知っていたからでした。リストールは、ネクタリアたちへのお願いは、さいごのさいご、このアー克蘭ドがめつぼうの危機にある、まさにこのときにおいてしかできないということ、知っていたのです。ネクタリアたちは、かつてこのアー克蘭ドのことを見かぎり、去っていきました。そのかれらに、「このアー克蘭ドがいつか危機になった場合は、助けてほし

い」なんていう、虫のよすぎるお願いを、あらかじめしておくなんてことができるはずもないと、リストールはよく知っていたのです。

ネクタリアたちは、とてもプライドが高く、高貴な者たちでした。そんなかれらに、あらかじめそんなお願いなどをしたとしても、かれらを怒らせることになるだけであると、リストールは知っていたのです。「われらの助けがほしいというのなら、なぜそのときにこないのだ？ これでは、われらの力を、戦いのほけんとしてりようしているようなものではないか。」

ですからリストールは、今このさいごのときにおいて、(リュインのしきかんとして、リュインでのいくさのじゅんびをすっかりとのえ終えたうえで)ネクタリアたちのもとへとむかおうとしていたのです。かれらに通じるものは、ただひとつ。一点のくもりもない、まっすぐな心。心からの敬意。ただそれであるということ、かれは知っていましたから)。

「リストテロントは、このアークランドのみらいにかけたのだ。」メリアン王が、去っていくリストールの方を見つめながら、いいました。「花の騎士団に、その思いがとどくことを、願おう。」

花の騎士団が去っていった土地。それこそが、シープロンドの聖地とたたえられている、タドウーリ連山でした(ですからリストールは、「タドウーリ連山に行く」といいました)。そのためもあって、リストールはたびたび、このシープロンドの地をおとずれていたのです。そしてそれが、メリアン王たちがリストールのことやその大いなるやぐわりのことについて、よく知っていたりゆうでした。リストールはメリアン王をはじめとするシープロンの者たちに、みずからのそのやぐわりのことについて、話していたのです。リストールとシープロンたちは、ともに、とても深い友じょうをむすんでおりましたから(もちろんベーカーランドの仲間たちとも深い友じょうをむすんでおりましたが、このせんさいな問題を伝える相手としては、やはり、精霊のことにもネクタリアたちのことにもくわしい、シープロンの者たちがふさわしかったのです)。

「かれならきつと、うまくやれる……」

遠い山道に消えてゆくリストールのすがたをさいごに見送りながら、レシリアが静かにつぶやきました。それは、このアーケランドのすべての人たちにむけての、メッセージのようでもありました。

「さあてー！　ぐずぐずなんぞ、しておられんぞ！　取ってかえして、ワットたたきをはじめにやらん！」

リブレストが隊長きのロボットに乗りこみながら、仲間たちにさけびました。たくさんの大きなつとめを、果たし終えたかれら（とらわれの者たちのことをすくい出し、シープロンドのことを守り、そしてリストールのこととぶじに送り出したのです）。ですがかれらのしごととは、まだまだ終わってなどはいませんでした。かれらのつきなる戦いは、これからすぐにはじまるのです（ちなみに、かれらはシープロンドのえん軍としてかけつけたわけですので、かれらはこんご、シープロンドのしよぞくの勢力というあつかいになるのです）。

ですけど、このシープロンドでこんご、いくさがおこなわれることなんて、ありそうにないでしょうけどね。ゆいいつ、このシープロンドをおそうりゆうのあったワットでさえ、シープロンドのおそろしさは、いやというほど知ったでしょうから……。

それと、とくに説明していませんでしたが、かれらは岩のロボットたちのそうじゆうに必要な三十四名をのぞいては、すべていつぱんの兵士として、剣を持って戦いの場に加わっていたのです（かれらの持つ剣は出発の前にリブレストが岩をけずって、みんなあつというまに作り上げてくれました。さすが、岩のけんじゃです）。ですけど……、ほかの勢力（精霊たちと岩のロボットたち）が強力すぎて、かれらのかつやくの場面がほとんどありませんでしたね……。ですけどそれは、けっこうな場面でしょう。かれらはもちろん、シープロンドにこんな強力なえん軍（精霊たち）がいるとは、思いもありませんでしたから。シープロンドのこの精霊のバリアーのことについては、ほんとうにシープロンドの者たちがいには、（ベーカーランドの者たちでさえ）だれも知らない、ごくひ中のごくひのことだったのです）。

ベーカーランドとワットの、さいごの戦い。その戦いにおいて、今

のかれらにできる、いや、かれらにしかできない、とくべつなしごと
がありました。それは……。

「ワットのれんちゆうがもどらんうちに、リュインとりでをうばい
かえす！ そのまま、ベゼロインまでとつげきじゃいー」

「おおおー！」

そうです、かれらにしかできない、とくべつなしごと。それはまさ
に、ベーカーランドのふたつのとりでを取りもどすという、その大い
なるつとめでした！（とき、ここにきて。かれらはおそろしいじじつ
を知ることになりました。それはリストールがタドウーリ連山へと
出発する前、ベーカーランドからシープロンドへとどいた、一羽の
でんれいのたかがもたらしたものでした。そのじじつとは……、ベゼ
ロインとりでが敵の手に渡ったということ。このおそろしいじじつ
をきいて、仲間たちの心のどうようは、やはりかくせませんでした。
おそれていたことがついに、げんじつのもとなってしまうたので
す。ベゼロインが落ちた。それは黒の軍勢の者たちがエリル・シャン
デーインのすぐそばにまで、しゅうけつすることができるようになっ
たということの意味していました。もはやエリル・シャンデーインへ
とつづくさいごの守りが、失われたのです。

しかしわれらが仲間たちが立ちどまることは、けっしてありません
でした。リブレストの言葉に、仲間たちの心はなおいつそうのこと、
そしていつきに、もえ上がったのです！)

まずは、リュイン。ワットの黒の軍勢はみな、ベゼロインへとしん
げきしていきました。リュインのとりでは、今「手うす」なはずです。
まさかこんなところに、思わぬふく兵がいようとは、思ってもいない
ことでしょう。まさに今、今がリュインとりでをふたたびせいぎの手
に取りもどす、大きなチャンスだったのです（ここでひとつ、さいご
のいくさのことについて、そしてこのリブレストたちの行動のこと
について、お伝えしておきましょう。軍を持つすべてのくには、「本
軍」と、それがいの隊というものがさだめられていて、この本軍は、
そのくにおいてのもっとも重要でいちばん強力な軍勢のことをい
うのです（さきほど、ほりよたちのことについての説明のところでも、

この本軍についてふれました)。

この本軍をもちいたいくさにおいてやぶれば、そこが自分のくにでなくても、みずからのくにがやぶれたのと同じあつかいになるのです。ですから本軍は、ここいちばんという、さいごの戦いのおきにおいてのみ使用されるものでした(シープロンドの場合はもともと軍を持っておりませんでしたので、衛士たち二百名が、そのまま本軍というあつかいにされました)。そしてワットは、ベーカーランドとのこのさいごの大いくさにおいて、もちろん本軍をひきいてきたのです。それはぜつたいに負けるわけにはいかないという、ワットの強い意志でもありました。

ですがもし本軍がやぶれたとしても、そのくに自体がやぶれたことにはならない、例外がひとつあったのです。それが、とりでのそんざいでした。相手国からうばい取ったとりでをひとつでも持っているのであれば、もし本軍がやぶれたとしても、持っているとりでをすべて相手国にかえすことによって、くに自体がやぶれたというあつかいではなくすることができのです(その場合、とりでを相手にかえすことによって、本国にひき下がるだけですむのです)。

ですからワットがベーカーランドとのさいごの大いくさにやぶれたとき、リユインとベゼロインとりでのどちらかいつほうでもワットの手にあったのなら、ワットはすべての力を失うまでにはいかずに、本国にひき下がるだけですみました。それを防ぐためにも、リブレストたち白き勢力の者たちは、それらふたつのとりでを取りもどすべく、けつたいにもえていたのです)。

「リブレストどの。ちょっと、お待ちを。」

いざ出発、というときになって、とつぜんリブレストの下の方から声がしました。見ると、それはメリアン王でした。どうやらおともたちの目をぬすんで、ひとりでこっそり、近づいてきたようなのです。いったい、なんででしょう?。

メリアン王がつづけます。

「ノランどのに、いろいろ話をきかれてきたとか。それで、その、ラ

イチャ……、いえ、わたしのむすこ、ライアン王子のことは、なにかきいていないでしょうか？」

やっぱり、そういうことでしたか……。アルマーク王にでんれいの手紙を送った、メリアン王。ライアンのことをよろしく。けっして、危険なところへとむかわせないこと。そういいましたが、それからかえってきたでんれいの手紙には、そのことについてのへんじが書いてありませんでした(アルマーク王からのへんじの手紙には、「ライアン王子をふくむきゆうせいしゆどのたちが、ぶじにこのエリル・シャンディーンへとたどりついた」ということと、「レシリアたち、南の地にむかった者たちについては、いまだたどりついていない」ということ、ふたつのことしか書いてありませんでした)。ブローチが光っていないので、ぶじであるということはわかっていましたが、今ライアンがどこにいるのか？ それすらもメリアン王には、よくわからなかったのです。ちゃんと、エリル・シャンディーンにとどまっているのでしょうか？(でもメリアン王には、うすうす、そうじゃないとわかっていました。アルマーク王がライアンのことをちゃんとひきとめておけるなどは、はじめから思っていますませんでしたから。いちおう、手紙のさいごに、おどしの言葉はそえておきましたけど。)

「おお、わしも、くわしくはきいておらんのだがの。」リブレストが、もじやもじやのおひげを手でととのえながら、いいました。「きゆうせいしゆっちゆう、ウルフアのもんがいるんだそうな。そいつが、おとものもんといっしょに、イーフリープへむかうのだということだ。今は、そのまつさいちゆうだろう。おまえさんのむすこが、エリル・シャンディーンでそのきゆうせいしゆっちゆうやつといっしょだったとは、きいておるが、イーフリープまで、だれがおともについていたのか？ そこまではわしもきいとらん。ノランもすぐに、べつのしごとで走ってしまったからの。」

それをきいて、メリアン王は「イーフリープ！ ああ……。そうですか……。」とだけいって、がっくりと肩の力を落としてしまいました。そしてとぼとぼと、もときた道をひきかえしていったのです。リブレストは首をひねっていました。気を取りなおして、ふたたび口ボツ

ト兵士の中に乗りこんでいきました。

「ふーむ、ノランか。」そうじゅう席に乗りこんだリブレストが、もくてき地までへのしんろをせっていしながらつぶやきました。

「ノランも、ハウゼンくんも、うまくやつてくれるといいんだけど。」
(またハウゼンくんという名まえです。前にもいっていましたがよね。この人は、だれでしたっけ?)

「なんですか?」リブレストの言葉に、となりの席にすわっていたレイミールが、レバーをひきながらたずねます(隊長きのふくそうじゅうしは、またレイミールがつとめました。もう、かなりのうでまえですものね)。

「なあに、よそは、よそ。うちは、うちだわ。しつかりつとめを果たさんとな。レイミール、陸走しやりん船モードに、切りかえ用意! 出発するぞー!」

「イエス・サーー!」

こうして、十七体の岩のロボット兵士たちは、ふたたびもときた道をリユインとりでへとむかって、大ばく走! 陸を走る十七そのの船となつて、かけぬけていきました。

「ちよつと! セマすぎないか? これ!」いちばんさいごの船のかくのうごにぎゆうぎゆうにつめこまれたハミールとキエリフが、おしいへしい、いいました。

「がまんしてください。背中にしぼられていくより、ましです。」まわりの兵士たちがそういつて、新たに加わったふたりの仲間たちのことを、なんとかなだめました(ただでさえ、人でいっぱいでしたのに。兵士さんたちもたいへんですね……)。

「どうかしたのですか?」王さま。

岩のロボット兵士たちのことを見送りながら、ルースアンがいきました(ルースアンとレシリアは、花の騎士団のふっかつにかけて、このシープロンドに残りました。うまくネクタリアたちが力を貸してくれたのならば、いっしょに戦いの地へとおもむくつもりだったので

す。いっぽうハミールとキエリフ、レイミールは、やはりいてもたってもいられず、リブレストといっしょにすぐに飛び出していったというわけでした。

「いや……、なんでもない……。ちよつと、頭痛がしてな……」メリアン王がそういつて、頭をかかえながらひっこんでいきます。メリアン王の頭痛のりゆう、それは読者のみなさんにならおわかりでしょう。

「ぜったいこれ、イーフリープまで、ライちゃんもついてったな……」

アルマーク王からのへんじがないということは、つまりそういうことでした……。

波の音がきこえていました。おだやかなようき、気持ちのいいそよ風。

ロビーは静かに目をひらきました。それからしばらく、ぱちぱちぱち、まばたきをくりかえして、まわりの明るさに目をならします。

「えっ？」

ロビーは、がぼっ！ と身を起こしました。いったいここは？

たしか、ゆうえんちのおぼけやしきで、たいへんな目にあつて、その床にたおれこんで、気を失つてしまつたはず……。そこまではおぼえていました。ですが今、ロビーがいるところは、あきらかにその場所とはちがうところだったので（つまりうす暗いおぼけやしきの中ではなかつたということ）。

あたりはこちよいそよ風の渡る、しばふでした。波の音が、ゆるやかなリズムで、こだまとなつてきこえてきます（どこからきこえてくるのでしょうか）。すぐにロビーは、自分のとなりにライアンが寝ているということに気がつきました。よかつた、とりあえず、ライアンはぶじのようです（ふつうにぐーぐー寝ていましたから。よだれまであらして……。ケーキの夢でも見てるんでしょう）。

「ロビーさん、気がつきましたか。」

声がした方をふつと見ると、それはマリエルでした。しばふのむこうから、こちらへとやってきたのです。

「マリエルくん、ここは……？」「ロビーがまだ半分からだを寝かしたまま、マリエルにたずねました（なんだか足に、力がいりませんでした。これはたぶん、ピーマンとたまねぎのせいでしょう）。まわりを見渡してみても、しばふがすこしむこうのさきで消えているだけで、なんにもなかったのです。」

「わかりません。ぼくもさつき、気がついたばかりです。ざつとしらべましたが、どうやらここは、海のまん中の、だんがいぜつべきの島みたいです。まわりにも、なんにも見えません。」

「だんがいぜつべき……！」

マリエルの言葉に、ロビーはおどろいてようやく立ち上がることができると、そのままよろける足で、しばふのふちまでいってみました。

「気をつけてください。あぶないですよ。」

その言葉にしたがって、しんちように下をのぞきこんでみます。すると……。

ひええ……！！

まさにそこは、だんがいぜつべき！ 下までかるく、三百フィートはありそうでした！ そしてそのはるか下で、岩かべにうちつけられた波が、ぎぎあー！ しぶきの音を立てていたのです（波の音がしていたのは、こういうわけからなんですな）。その高さに、ロビーは思わずうしろに飛びのいて、しばふにぺたん！ としりもちをついてしまいました。

「どーする、これ？」

はんたいがわから、リズがやってきました。リズもマリエルのつぎ、同じくらいのときに起きて、今はんたいがわのがけをしらべてきたところだったのです（ちなみに、リズの服はからからにかわいていました。たしかきょうふの部屋から、びしょびしょになって出てきたはずでしたけど。いいおてんきだから、かわいたのでしょうか？）。

「ほんとうになんにもない、しばふだけの島だぞ、ここ。どうやった

ら出られるんだ？」

マリエルやリズのいう通り、ここははしからはしまでが三十ヤードほどしかない、ほんとうに小さななんにもない島でした。そのうえ、まわりをだんがいぜつべきにかこまれていましたので、出るにも出られません。すでにマリエルがためしてみましたが、やっぱり魔法も、使えないということでした。や、やばいんじゃない？ これって。

「ろんりに考えてみても、」マリエルがあごをなでながら、いつものちようしでいいました。「ここはまだ、イーフリープの中と見て、まちがいないでしょう。ライスタの精霊の力も、あてにはできません。そうすると、いったい、なにからはじめればいいのか……」

「とりあえず、こいつ起こそうぜ。」リズがそういつて、ライアンの肩をゆさゆさとゆさぶりました。「こら、ライアン。起きろって。」

それでもライアンは、なかなか起きません。「しょうがないやつだ。」マリエルがまた、おみみふーふーのじゅつ(魔力なしバージョン)でも使ってやろうかと、考えはじめたとき……。

「みぎやー！　　ななふしー！　　いやー！」

とつぜん、ライアンがさげび声を上げて飛び起きました！　な、なにごと？

「ど、どした？」リズはびっくりして、うしろにぺたん！　としりもちをついてしまいました。マリエルもロビーも同じくびっくりして、どきどき！　なりひびく胸をおさえます。

「あ、あれ……？　　なにもいない……。あ、ロビー。マリーも。リズ、なにやってるの？　そこで。」ライアンがあたりのようすをきよろきよろとながめ渡しながら、きよとーんとした顔をしていいました。

「なにやってるの？　　じゃないよ！　　いきなり、びっくりするじやんか。なんだよ、ななふしー！　　って！」リズがしりもちをついたまま、こぶしをふり上げてぶんぶんいいいます。

その言葉をきくと、ライアンはからだをぞわわーっ！　とふるわせて、顔を青くしてしまいました。どうやらまた、なにかを思い出した

ようすです。

「いい、いないよね！　ななふし、いないよね！　だめだよ！　だめだよ！」ライアンがそういって、からだ中をばたばたと手のひらでたたいて、そこになにかついていないか？　たしかめはじめました。どうやら、ななふしというそれが、からだにくつついていないかどうか？　しらべているみたいです。

「ななふしって、あのななふし？　木のえだみたいなの、へんな虫だろ？」リズがいました。

みなさんは、ななふしというこんちゆうを知っていますでしょうか？　手足のかんせつがいっぱいあるように見える、おかしなかたちをした虫のことです。リズのいうように木のえだみたいなのすがたをしていて、えだにばけているものや、葉っぱみたいなのすがたをしているものもいます。ななふしはみなさんの世界と同じく、このアークランドにも、同じようなすがたの虫として暮らしていました。

そしてこのななふし。ふつうの人なら、「べつに、ただの虫だろ」って思うだけかもしれませんが、ライアンにとってはまったくそうではありませんでした。なにしろライアンは、大の虫ぎらい！（ここまでの旅の中でも、ちよいちよいそんなことをいつていましたよね。）しかもこのななふしという虫は、ライアンの中でもいちばんの、だめだめな虫だったのです。

「そんなのいないよ。だいじょうぶだから、安心して。どうしたの？　ライアン。」ロビーが、あわてふためくライアンのことを心配していました。ちよつといつもと、ようすがちがいましたから。

ライアンはなにもいないということがわかったと、「ふううー。」と深いため息をついて、それからようやく話しをすることができました。

「よ、よかったー……。ちよつと、やな夢見ちゃったもんだからさ……。ただの夢だよ。だいじょうぶ……。」

さて、このあたりでお待ちかね。このライアンのおかしな行動のこともふくめて、読者のみなさんにおひろめしておかなければならないことがあります。それは……。あのきょうふの部屋の中で、なにが起

こつたのか？　というごと！　ロビーはいちばんのきょうふ、ピーマンとたまねぎにさんざんな目にあわされてしまいました。が、やつぱりライアン、マリエル、リズの三人も、ロビーと同じく、自分のいちばんだめなきょうふのものにおそわれてしまっていました。それがいったいなんなのか？　知りたいですよ？　（べつにいい？）

ライアンのいちばんのきょうふ。それはもうおわりの通り、このななふしという虫でした。きょうふの部屋にふみこんで、しばらくしたころ。ライアンは自分の肩になにかがついているということに、気がついたので。「ん？」ライアンが、肩に目をやってみると……。

「みぎやー！」

大きな、ななふしが一ぴき、肩にくっついていました！　自分の目と鼻のさきに、ななふし！　もうライアンは、大パニック！　そしてぎやーぎやー走りまわっているうちに……、足にも一ぴき！　うでも一ぴき！　つきからつきへと、ななふしたちがあらわれたのです！

もう頭の中は、まっ白！　言葉も出せません。口からあわを吹いてたおれるすんぜんに、ライアンはスタンプ台までたどりついて、まっ白な頭のままで、スタンプをポン！　すると、あたりや自分のからだの上にいたななふしたちは、みんな消えていってしまいました。ライアンはさいごの力をふりしぼって、そのままよろける足で、ふらふらと部屋の出口までたどりついたというわけだったのです……（シンブルなだけに、いちばんきついパターンでした）。

こんどはマリエルの番。マリエルは自信たっぷりで、きょうふの部屋の中へとはいっていききました。そしてすぐにスタンプ台を見つけて、「張りあいもないですね。ふん。」鼻をならして、そこに近づこうとしたとき……。

「スタンプがほしいの？　ぼうや。」

とつぜん、なにやら、なまめかしい声！　マリエルがふりかえるど、そこには……、おほん、なんというか、色っぽいというか、お子さまむけではないというか……、そんな、おはだがむき出しの、うすーい服を着たおねえさんがひとり、立っていたのです。そのおねえさんが、マリエルの方にゆつくりと歩いてきて……。

「かわいいぼうやね。おねえさんが、あそんで、あ・げ・る。」

「ぴぎゃー！」

マリエルの頭が、ぼん！　けむりを上げて、かんぜんにショートしてしまいました！そしていつのまにか、右からも左からも、同じようなすがたをしたおねえさんたちがやってきて、マリエルのことをすっかり取りかこんでしまったのです。

マリエルのいちばんにがてなもの。それはこんな感じのおねえさんでした（なんとというか、そんな感じのおねえさんでした）。じつはマリエルは、若いじよせいが大のがてだったのです。ふれることはおろか、近づくことさえほとんどできません。リズの場合はもともと男だと思ってせっせしておりましたので、それがじつは女だとわかってからも、あんがくだいじようぶでしたが、こんなふうにもとから「色っぽさ、ぼくはつ」といった感じのおねえさんは、かんぜんにアウトでした。べんきようやりくつで通した頭の中が、かんぜんにショートしてしまうのです。

そんなマリエルのことをよそに、もうおねえさんたちは、やりたいほうだい！　「うふふふふ。」マリエルのことを、なでたり、もんだり、つまんだり……（ひねったり、ひっぱったり、こすったり……）、くちやくちやにしてみました（マリエルの服がぐしやぐしやだったのは、このためです。だれですか？　うらやましいなんていつている人は）。

そして、どのくらいの時間がたったのでしょうか？（じっさいには、ほんのちよつとの時間でしたが。）マリエルはかんぜんにぼろぼろになつて、きようふの部屋の床にたおれていました。おねえさんたちは「ふふふ、またあそびましようね、ぼうや。」といって、消えてしまっていました。マリエルの耳には、それもとどいていなかったのです。やがていしきを取りもどしたマリエルは（いしきを取りもどすまでの時間も、じっさいにはほんのちよつとの時間だけでしたが）、まっ白な頭で、「はは……、ははは……。」かんぜんにこわれてしまいながらも、スタンプをポン！　出口へとむかったというわけでした……（気のどくなマリエルくん……）。

さいごにリズ。スタンプレ台にむかったリズは、ふいにぴちやぴちやという水のしたたるような音をきいて、ふりかえりました。そこにあられていたものは……。

パイナップル！ 人の背たけくらいもある手足の生えた大きなパイナップルが、二十体ほど！ そのからだからパイナップルジュースをしたたらせながら、リズに飛びかかってきたのです！

「待て！ 待て！ やめろ！ うわああー！」

リュートの剣を出すひまもなく、リズのからだはもうパイナップルだらけ。百パーセントのパイナップルジュースで、びしょびしょです（リズがびしょびしょだったのはこのためでした）。じつはこれこそが、リズのもっともだめなものでした。パイナップルジュースです。パイナップルジュースの、あのあまみをふくんだすっぱさ。ふつうの人にとってはジュースとしてもおいしいものですが、リズにとってはもうじごくでした。思い出しただけで、口がまがってしまいそうなほどだったのです。リズは小さいころから、パイナップルだけはだめでした。りゆうは自分でもわかりません。はだにあわないとでもいいでしょうか？ パイナップルジュースがはだ（とくに口）にふれると、かぶれてかゆくなってしまうのです。それに、そのにおいもだめでした。

まったく、このきょうふの部屋というやつは、いじが悪い！ その人にとっていちばんだめなものを、ようしやなくなたたきつけてくるんですから！

こうして四人の仲間たちは、みんなそれぞれに、いちばんだめなものをもらってしまったというわけなのです。これが、あのきょうふの部屋の中で起こったことでした。ライアンはそのきょうふを今ふたたび、夢に見てしまったというわけだったのです。リズに肩をゆさぶられて、肩にとまっていたななふしのことを、思い出してしまったというわけでした（もしあなたがこのきょうふの部屋にはいったとしたら、なにが出てくるでしょうか？ わたしの場合……、ぶるる！

考えただけでもおそろしい！

ところで、このきょうふの部屋の中からもらってきたきょうふのもの名ごりは、しばらくはそのまま残ってしまいました。ライアンやマリエルの場合は、ななふしとおねえさんでしたから、部屋のそとまでついてこなかったからいいのですが、ロビーのピーマンとたまねぎのにおいと、リズのパイナップルジュースについては、しばらくは消えずに残ってしまったというわけなのです。そして今ようやく、このきょうふのものたちの名ごりは消えました。リズの服がかわいていたのは、そのためだったのです。ロビーのからだからも、ピーマンとたまねぎのにおいは消えていました。でもまだロビーは、力を出せずにいるようですが。

こう考えてみると、なんだかりズが、いちばんかわいそうでしたね。においだけならまだしも、いちばんきらいなもので、しばらくからだがびちよびちよでしたから……。

ちなみに、マリエルの服がぐしゃぐしゃなのはもちろんそのままでしたから、マリエルは目がさめたとき、あわてて服をととのえて、かみもきれいにブラシをかけたのです。みんなが起きないうちにすませてしまおうと、だいぶあわてたことでしょうね。

さて、きょうふの部屋の物語については、このあたりで切り上げて……、ほんらいのお話の方をさきに進めましょう。

みんなはあらためて、自分たちのおかれているじょうきょうのことを考えました。しかしどう考えても、いったいなにをすればよいのか？ 思いつきません（ここでいつまでも、そよ風に吹かれておひるねしているわけにもいきませんし）。まわりを海にかこまれた、だんがいぜつペきの島。まさにぜつぼう的なじょうきょうです。魔法も使えませんし、精霊の力もかりられません。船が助けにでもこないかぎり、ここからだっしゅつすることはふかのうでしょう。

ふつうだったら。

そう、ここはふつうの場所ではない、イーフリープ。ずっと変わら

ず、このままということはありません。

「あれ……？ あっ！ あれあれ！」とつぜん、ライアンがさげびました。

「どうしたの？」「なに？」「なんだ？」みんながたずねます。

ライアンはしばふのむこうをゆびさして、いいました。

「ねこー！ ねこねこー！ ねこちゃんがいますよー！」

びつくりしてみんなが見てみると、なんと、たしかにむこうのしばふの上に一ぴきの青いねこがいて、気持ちよさそうに寝そべって、しっぽをペロペロとなめて毛づくろいをしているところだったのです！

「どこからきたんだ？ さつきは、なんにもいなかったぞ！」マリエルが、信じられないといったふうに身を乗り出していいました。

「いや、もう、そんなことはいってもしょうがない。ここは、今までの世界とはちがうんだ。なんでもありつてやつだな。」リズが、「ふう。」とため息をついて、マリエルにつづけました。

「あのねこちゃんが、なにか助けてくれるのかもしれない。とにかく、近づいてみようよ。」

そしてそのロビーの言葉にさんせいして、みんなはその青いねこのそばまで、そうつと近づいていくことにしたのです（いきなり近づいたら、逃げてしまうかもしれませんでしたから）。

「ちっちっち。ほーら、こわくないよー。おもしろいよー。」ライアンがキャンディーをいっぽん取り出して、地面にはいつくばり、それをねこにむかつてふりふりながらいいました。ですがねこは、知らんぷい。そっぽをむいたまま、「くああ。」と大きなあくびまでしていたのです。

「ちよー…このぼくが、ここまでやってるのに！ このねこめー！」ライアンはとたんに、ぶんぶんいい出しました（どつちがあそばれるのか？ わかりませんね）。

「ねえ、リーファイがいったよね。精霊王は話しをするとき、生きもののがたになるって。まさか、あのねこが……！」

ロビーがそういったとたん……。

その青いねこが、すつく！　とうしろ足二本で立ち上がったのです！　そして……。

「待っていたぞ。」

そのねこが、口をひらいてしゃべりました！

それはなんとも、ふしぎな声でした。そうです、ロビーのいう通り、やっぱりこのねこ、いえ、この人こそが、伝説の精霊王その人にほかなりませんでした！（ゆうえんちのつぎは、だんがいぜつべきの島に、青いねこ！　まったくこのイーフリープという世界は、よそくのつかないことばかりです。）

「よくきたね。わたしの家にきなさい。お茶でも出そう。」

青いねこ、精霊王はとつぜんそういうと、くるりとむきを変えて、うしろの方に歩き出しました。でもわたしの家って、そこにはしばふしかありませんけど……。

そう思ったとたん！

今までしばふしかなかったその場所に、いつからあったのか？　木と白い土のかべでできた、いつけんの小さなかわいらしいおうちがたっていたのです！　ほんとうにとつぜんでした。ですけどそのおうち、まるでなん年も前からそこにあったかのように、あたりまえのように、そこにあったのです。

みんなは言葉も出せません。あまりにもとつぜんのことでしたので、まだ心のじゅんぴというやつがうまくできていなかったのです。ですけど、そんなことをいつている場合ではありませんでした。目の前に、あの伝説の精霊王がいるのです！　だれもがけいけんすることのできない、とくべつな伝説の中に、みんなは今いました。

「いこう……」リズがなんとか、（かたまってしまっている）みんなのことをみちびいていました。マリエルも、ロビーも、ライアン（まだキャンディーを持って地面にはいつくばったままでしたが）も、ぎ

くしゃくとした足どりで歩き出します（立って歩き出してからは、いちばん張りきっていたはずのライアンが、いちばんきんちようしていました。きんちようのあまり、手と足がいつしよでしたし）。

ねこの精霊王が家の入り口までたどりついて、とびらのわきに作られていた「ねこせんよう」の小さなあなから、中にするりとはいりこんでいきました。つづいてリズが、木のとびらのとつてに手をかけて、そうつとそとがわにひらきます。

家の中は、まるでいなかのおばあちゃんのおうちのようでした。床にはあついおりもののカーペットがしいてあって、その上に、六つのいすをそなえたがんじようそうな木のテーブルがひとつ、乗っております。テーブルにはきれいなテーブルクロスがかけられ、そのうしろの石づくりのだんろでは、火があかあかともえています。しつそなつくりの、それでいてあたたかみのある家具が、ならんでいました。しよつきだなには、お花のもようのティーカップやお皿が、きれいにならんでおります。本だなには、みんなが知っているどうわの本が、たくさんならんでいました。

「席につきなさい。」

どこからか、精霊王の声がしました。部屋の中に見とれているうちに、みんなはねこの精霊王がどこにいつてしまったのか？ わからなくなってしまうていたのです。その声は上からしたようでもあり、地面の下からきこえたようでもありました。

みんながはつと気がつくつと、いつのまにかテーブルのいすのひとつの上に、青いねこがちよこんと乗っていました（頭がテーブルの上に出るように、そのいすにはクッションが三つ重ねられています）。いわれるままに、みんなもそれぞれの席に腰をおろします（ふしぎなこと、みんなははじめから、「自分の席はここ」とわかっていたのです）。

「つかれたろう。飲みなさい。」

声がしたかと思うと、そのつぎのしゅんかん……。

ええっ？ とつぜん自分の目の前に、あたたかい飲みものがそそがれたカップがひとつ、おかれていました。いつからそこにあつたのか？ まったくわかりません。テーブルの上はずつと見ていたはずでしたのに、カップがあらわれたしゅんかんがわからなかったのです。というより、あらわれたとかいうような話ではありませんでした。まるで席につく前から、そのカップはもともとそこにあつたかのよう、みんなにはそう思われたのです（さきほどから、ふしぎな感じがつづきます）。

カップの中には、みんながそれぞれいちばん好きな飲みものがはいつていました。リズは、ストレートティーにお砂糖ちよつと。ロビーはあまめのミルクティーに、シナモンパウダーを浮かべて。マリエルはココア（べんきようにはつきものですね）。そしてライアンのカップには、あま〜いあま〜いミルクセーキが、（しかもとく大のカップに）たつぷりそそがれていたのです。

その飲みものの、なんともいえないふしぎなみりよく……。みんなは声も出せず、いただきますのひとこともいえずに、思わずひとくち、その飲みものを口にしてしまいました。そしてびっくり。

「う、うまいー！」

そのあまりのおいしさに、みんなはごくごくと飲んで、あつというまにカップはからになってしまいました（まるでカルモトの家でお茶をごちそうになったときみたいですね）。そのはずでしたのに……。

ふと見ると、今飲みほしてからになってしまったはずのカップに、またもと通り、もとのあたたかい飲みものがそそがれていたのです！ しかもそれは、飲んだあとに新しくそそがれたというようなものではなくて、まるつきり飲む前のじょうたいにもどっているという感じでした。カップに口をつけたあとすらも残っていないのです（でもおなかにはしつかり、あたたかい飲みものがつめこまれていました。ですからたしかに、飲んだのです。まったくもってふしぎなことです）。みんながふしぎがっていると、またしてもびっくり。テーブルの上

に、いつからそこにならべられていたのか？　たくさんのお菓子が、お皿にもりつけられてならんでいました！　クッキーにチョコレート、マカロンにシフォンケーキ、シロップのかかったフルーツに、ねじれたキャンディー、砂糖だま。そしてライアンの前には……、ちょうとく大きいゆうの、クリームたっぷり三だん重ねのデコレーションケーキ！

みんなはまたしても言葉を失ったまま、いただきますのひとこともいえずに、思わずひとくち、お菓子を口にはこんでしまいました。そしてまたびっくり。

「う、うまいー！」

そのあまりのおいしさに、みんなはつきからつきへと、むちゅうでお菓手に手をのぼしてしまいます（ふだんはぜったいにそんなことをしないようなマリエルまでもが、おぎようぎ悪く、両手で手づかみでお菓子をばくばく食べてしまいました。それほどおいしかったのです）。あつというまにお皿はからになっていき、ケーキはみるみる小さくなっていきました。

そして、みんながおなかいっぱいになったころ……。

「どごやら、げんきがもどつたようだな。」

どこからか精霊王の声がありました。みんなは、はつとわれにかえります。見ると、テーブルの上にはなにも乗っておりません。もうじゅうぶんに食べて、飲んだからでした（とくにライアンは、もう大まんどく。しあわせいっぱいといった顔で、へにやつといすにもたれかかっていたのです）。

ところで、この飲みものや食べものはいうまでもなく、精霊王のとくべつな品物でした。口にした者をたちまち、げんきまんたんにくくれるのです。みんなはよほどつかれていたのか？　ごくごくばくばく、飲んで食べてしまいましたね。ほんとうは、ただのひとくちでもことたりしましたが）。

「そ、そうだ。こんなこと、してる場合じゃない。精霊王にお話を

……」(いっぱいになったおなかを両手でかかえながら「ふう。」と息をついていた) マリエルがいました(そしてその自分のすがたをきやつかん的に見たマリエルは、たちまちはずかしくなって、しゃきつとしせいを正しました。「これじゃ、ライスタといっしよだ……」)。

「ほら、ライスタ。精霊王さまだぞ。まかせろって、いつてたじやないか。」マリエルが、横にいるライアンの服をちよいちよいとひっぱりながら、小さな声でいいました。あこがれの精霊王、その相手がつままるのは、精霊使いのたつじんである自分しかない! とライアンは息まいていたのです。

ですが……。

「な、なにー!」マリエルの、おどろきのひとこと!

寝ています! ライアンはおなかがいっぱいになって、そのままいすの背にもたれて、むにやむにや……、気持ちよさそうに寝てしまっていました。ラ、ライアーン!

ですけど、ライアンをあんまりせめるわけにもいきませんでした。みんながおなかにつめこんだお菓子や飲みものは、精霊王の言葉の通り、げんきをまんたんにしてくれるものでしたが、同時に、つかれたからだをともしラククサさせる力もあつたのです。つまりあんまり食べたり飲んだりしすぎると、からだがほかほかあたたかくなつて、すごく眠くなつてしまいました。

といつても、いくらがつがつごくごく、食べたり飲んだりしていたとはいつても、みんなはそこまで眠くはなっていなかったのです。ですがライアンの場合は、なにしろ三だん重ねのデコレーションケーキを、まるごと全部食べましたから! それは眠くなりますよね……(しかもミルクセーキも、とく大のカップですくなくとも五はいは飲んでいたので。やっぱりライアンは、けっこうせめてもいいかも……)。

あこがれの精霊王。夢にまで見た伝説のイーフリープでの、運命的

な出会い。そのいちばんかんじんなシーンで……、ここぞというその大いちばんのところ……。

かわいいそうに。ライアン、たいじょうです。

「あーあ、起きないぞ、こいつ。」リズが、ライアンのからだをゆさゆさゆすったり、ほほをぺちんとひっぱたいてみたりしながら、いいました（ためにマリエルが、耳に「ふー！」息を吹きかけてみましたが、やっぱり起きません。だめみたいですね。もう、そつとしておきましょう……）。

「な、なんてやつだ。あとでしつこく、くすぐってやるからな！」マリエルがぶんぶん怒っていました（く、くすぐるの？）。

「と、とにかく、精霊王さまにお話をきかないと。」いちばん右の席にすわっていたロビーが、左のみんな（ライアンいがい）にいいました。「マリエルくん、お願い。」（ライアンがいないので、こんなときにはまず、さほうやれいぎのことをいちばんよく知っているマリエルにお願いするのがいちばんいいだろうと、ロビーは思ったのです。）

「わ、わかりました。」マリエルが、ややきんちようぎみに、「こほん。」とせきばらいをしてからこたえます（いくらマリエルでも、相手は伝説の精霊王。きんちようしてがちがちなってしまうのも、むりはありません。たとえ、すがたがねこでも）。

「わたしたちは……」マリエルが、いいかけたとき……。

「いわずともよい。」

精霊王の声がひびきました。そうです、精霊王はなんでも知っています。今さら自分たちのことやここにきたもくてきのことなどは、話すまでもありませんでした（きあいをいれていたマリエルは、ちよつとひょうしぬけしてしまいました）。

するとそのとき、またしてもふしぎなことが。

さつきまで目の前のいすにちよこんと乗っていたはずのねこ（精霊

王)が、いなくなっていました。ずっとねこ(精霊王)からは、目は
はなさずにいたはずなのに。

「あ、あれ？」みんな(ライアンいがい)があたりを、きよろきよろさ
がしていると……。

「こによ方が、話しやすいよね。」

「えっ？」さつきまでねこ(精霊王)がすわっていたいすの方から、
とつぜん声がしました。しかもさつきまでのような、なぞめいたふし
ぎな声ではありません。そのうえ、どこからきこえてくるのか？ わ
からないような感じでもありません。はつきりと、目の前のいすのと
ころから声がしたのです。

みんな(ライアンいがい)がそろって、そちらに目をやると……。目
の前のいすに、青いかみの、青と白のデザインのかわいい服を着た、見
た目もかわいい八さいくらいの男の子がひとり、すわっていました！
ええっ！

みんな(ライアンいがい)……。この場面にかぎり、これから「みん
な」とある場合は、ライアンいがいの三人ということでお願ひします)
は、またしてもびつくり！ でももうそろそろ、なんでもありのこの
イーフリープのびつくりにも、なれてしまわないといけませんね。

「ねこだと、動くによはらくにやんだけど、話しづらくて。やっぱ
り、こつちによ方がいいね。」

男の子はそういつて、おしりから生えた長いしっぽをテーブルの上
まで持ってきて、ふりふりと動かししました。そう、このとくちょうの
ある話し方からおわかりの通り、この男の子は、ねこの種族、ラグ
リンのすがたをしていたのです。長いしっぽのほかにも、頭の上には
大きなねこの耳がふたつ、ぴよこんと乗っていました(でもラグ
リンとはちがうところが。それは背中の中が羽がついていないとい
うところです。いすにすわるのにじやまだから、消したんでしようか？
べつにどうでもいいですけど……)。

「え、え？ せ、精霊王さまですか？」マリエルが、ねこの男の子に

たずねます。なんだか、あまりにもくだけたといえますか、それっぽくない感じでしたので……（なんかもつとこう、おごそかでりっぱなふんいきがあふれているものだとばかり、そうぞうしておりましたから。これじゃリュキアと、たいして変わりません……）。

「そうだよ。」男の子（精霊王）があっけらかんとした感じで、こたえました。どうやらほんとうに、この男の子が精霊王でまちがいないようです（まあ精霊王はどんなすがたにもなれるということでしたから、こんかいはたまたま、このすがただったということなのでしょう。お子さまふたりのらしい客たちに、あわせたのでしょうか？）。

「あんまり話しをしたこともやいから、しゃべるだけで、つかれちゃうんだよね。人によすがたにやら、人としやべるによもらくだから、こによすがたでがまんしてね。」精霊王がいました。

「あ、はい。それはもう……」みんなは「どうぞ精霊王さまのお好きのように」といった感じでいいましたが、しようじき、「なんでラグリン……？」と心の中で思いました。

「それはそうと……」精霊王がつづけけます。「みんなやは、にやにしてきたによ？」

ええっ？ さつき、「いわずともよい。」っていいませんでし
たっけ？

「ごめんごめん。じょうだんだよ。」精霊王はそういつて、「きやはは！」と笑いました（うくん、まるつきり、ラグリンの子どもになっていきます……）。

「大きくにやったね、ロビーベルク。会えてうれしいよ。」精霊王が
とつぜん、ロビーにいました。

「わたしは、きみの成長を見守ることしかできなかった。なにもできずにいたことを、すまないと思っている。だが、それはきみ自身の運命なのだから、わたしには、どうすることもできなかったのだ。そしてきみは、ここにもどってきた。それは、新たな力を得るためだろう？」

「え……、あ……、は、はい。」ロビーが思わず、こたえます。とつ
ぜんすることに、頭がこんらんしてしまったのです。それに今さつきま

で精霊王は、ラグリーンの男の子の話し方をしておりましたのに、とつぜんこんなおごそかなしやべり方になったので、それもびつくりしてしまいました(つていうか、ふつうにしゃべることもできるんですね……。できればこのあとも、ふつうにしゃべってもらいたいのですが……)。

ノランにいわれ、そこでどんな運命が待ち受けているとも知れず、この伝説のイーフリープまでやってきたロビー。そこは、かつて自分が住んでいたことがあるという、とくべつな場所でした。そのとくべつなイーフリープで、今ロビーは、さいごの運命の力を手にいれようとしていたのです。

新たなる力。女神の力持つせいなる剣、アストラル・ブレードの、その大いなる力をひき出すためのしかく……。悪の魔法使いアーザスとのさいごのけつちやくのときにむけて、それは必要なものだといいました。いったいそれは……。？ ロビーはこのイーフリープで、どんな力を手にいれるのでしょうか？

「ロビーベルク。きみは、その力をすでに得ている。」

ええっ？ 精霊王のいがいな言葉に、リズもマリエルも、思わずロビーの方にむきなおってしまいました。ロビーもとうぜん、おどろきをかくすことができません。

「でも、ぼくは、なにもしていません。」ロビーがいました。ですが精霊王は、静かな表じようをしていったのです(子どもすがたをしておりましたが、やっぱり目の前にいるのは、伝説の精霊王なのです。そのいげんと底にひめた力の大きさは、はかりしれないものでした)。

「その力を持つための、ししつ。きみはこのイーフリープで、もうじゆうぶんにそれをしようめいした。人を思う心。人をしんらいする心。きみはその心をもつて、自分のほんらいのすがたをさらけ出し、こんなんやきようふにうち勝った。それはなによりも、きみ自身の強さ、じゆんすいさを、あらわすものだ。きみがこのイーフリープで乗り越えた、あのしれんこそが、世界をすくうさいごの力を得るための、かぎだったのだよ。」

なんと！ あのおかしなしれんの数々は、そういうことだったんですね。人のことを思いやる心を持って、せまりくるこんなやきよふに、自分自身のほんらいのすがたでもってうち勝ってみせること。それがさいごの力、つまり剣の大いなる力をひき出すために、必要なものだったというのです（それならそうと、はじめからいつてよ！ といいたいところですが、いったらやっぱり、しれんにならないですものね）。

あもしれんの数々は、剣のそのしんの力をひき出すための方法を、ロビーに学ばせるためのものでした。女神のつるぎ、アストラル・ブレードは、「いつわりのない自分ほんらいのすがた」をさらけ出し、「こんなんやきよふを乗り越える強い心」を持って、「人を思いやるそのじゆんすいな思い」をあらわにしたときに、そのしんの力がかいほうされるようになっていたのです（かなりとくべつなじょうけんです）。これらのとくべつな三つのじょうけんのことを、あもしれんの数々はロビーに伝えていたというわけでした（これらの三つのじょうけんについては、剣のしんの力をかいほうするためのじょうけんとして、はじめからそのようにさだめられていたことでした。そしてこのことがさだめられたのは、はるかなむかし、この剣がレドンホールの石の中にふうじられたときのことだったのです。これはそのむかし、とあるひとりの人物の強い願いによって、きめられたことでした。そしてその人は、あるとてもかなしいできごとのすえに、この剣を石の中にふうじることになりましたが、その人の願いを受けて、剣の力をかいほうするためのこの三つのじょうけんのことを剣に与えたのは、ほかでもありません。はるかなむかしにこの剣のことを人々に与えた、女神ライブラ自身にほかなりませんでした。

剣はこうして、そのしんの力がかいほうされるときを待ちつづけました。いつの日か、さいごのときにあたって、この剣の力の意味をりかいた、「自分の意志をついでくれる者」が、この剣のことを手にするそのときを……。

そしてついに今日、ロビーがここに、その思いをついだのです。はるかなむかしの、そのとあるひとりの人物の、あつく強い、その思い

を……。

この人物がなに者なのか？ それはこの物語のさいごの方で、わたしはみなさんにお伝えしたいと思っています。そしてなぜその人物は、剣の力をかいほうするための三つのじょうけんのことを、この剣に与えるように女神にお願いすることになったのか？ その物語、とてもかなしいひげきの物語のことについても、わたしはいつかかならず、みなさんにも語りたいたいと思っています。このロビーの物語につながる、とてもとてもかなしい、その物語のことを……。

（しれんの内ようについて）ぐたい的にこまかく見ていきますと……。

イーフリープでは、魔法も精霊の力も使えませんでした。それは剣の力をかいほうするためのじょうけんのひとつ、「自分ほんらいのすがたをさらけ出さねばならない」ということを教えていたのです（そこからの力が取りいれられないということは、すなわち自分自身の、まつさらなほんらいのすがたということになるのです）。

サーカステントの中のしれんでは、ロビーは仲間とともに力をあわせて戦い、かれらのために力をつくそうとがんばりました（魔法や精霊の力を使えないふたりのちびっ子たちのことも、ロビーは「ぼくが守ってあげなくちゃ！」と助けようとしていましたよね）。あのしれんでは、ロビーは「だれかのために力をつくしたいという、思いやりの心をあらわすことが必要だ」ということを教えられました。

それから、さいごはわかりやすいですね。きょうふの部屋のしれんでは、そのまま、「こんなんやきようふにうち勝つ、強い心を持たなくてはならない」ということを、ロビーは教えられたのです。

もつとも、教えらえたといっても、いわれなかつたらせんせん、あのしれんにそんな意味があったなんてことは、だれにもわかりませんでしたけど……。わかるはずもないですよ。でもこれらのしれんを乗り越えたことよって、ロビーは知らず知らずのうちに、剣の力をかいほうするその三つのじょうけんのことをりかいし、それを剣の力をひき出すための、自分の新たな力として得ていたのです（さす

がは精霊王の用意してくれたしれんです。かなりへんてこなしれん
だったことは、ひていできませんが……)。

そしてロビーの得たこの力こそが、ノランのいつていた、「アーザス
のことをうち破るために必要な、さいごの力」というものにほかなり
ませんでした。ロビーは剣のしんの力をかいほうする力、アーザスの
やみをうち破り、このアーランドをすくう、そのきゆうせいしゆた
るさいごの力を、こうしてさずかったのです(主人公レベル、さらに
アップ! といったところでしょう。もつとも、はつきりとたしかな
力を受け取ったという感じではありませんでしたので、ロビーもやつ
ぱり、まだこんわくぎみだったのです(ファイナルビーム! とかい
うひっさつわざでもおぼえたというのなら、はつきりしてるんですけ
どね……)。ですがロビーがこのイーフリープで得た力というもの
は、やはり必要ふかけつな、重要なものでした。

今まででも、ロビーは敵をおそれることなく、だれかのためにつく
そうとしてこの剣の力を使ったことがありました。ですがそれは、ま
だ剣の力を、ばくぜんとつかんだままの力だったのです。ロビーがこ
のイーフリープで得た力は、いうならば、剣の力をひとつにまとめ、そ
のさきにひめた、そのさいごの力をひき出すというものでした。この
力を得るためには、ふつうならなんかげつも(あるいは、なんねんも)
そのためのしゆぎようをつむ必要のあるものでした。ロビーがこの
イーフリープで受けたしれんは、そんなしゆぎようをいつきにひとま
とめにして、ロビーに学ばせるほどのものだったのです(さすがは精
霊王のしれんです)。

ちなみに、ノランはこの剣を使いこなすために長いしゆぎようが必
要になるというそのことも、知っていました。そのこともありました
から、ノランはその必要ふかけつなとくべつなしゆぎよう、しれんの
ことを、精霊王にたくしたというわけなのです)。でもいくらそんな
にすごいしれんだとはいっても、いわれなければ、ぜんぜん、あのし
れんにそんな力があつたなんてことは、わかるはずもないですけどね
……)。

そんなロビーに、精霊王がまた、静かにつづけました。

「ロビーベルク、よくききなさい。きみがこのイーフリープを去ってから、世界は大きく変わってしまったのだ。悪しき勢力はますます強大となり、人々の心に、うたがいの気持ちが生まれた。おたがいをそんなちようすることを忘れた者、敬意をはらうことを忘れた者の、なんと多いことか。かつてのネクタリアたちのように、アークランド世界を見すてようという者は多い。」

「人は、人が生きるうえで、もつともだいじなもの、人としてのほこりを失いつつある。このままではほんとうに、アークランド世界はほろびるだろう。アーザスは、そこに生まれた人の弱き心をりようし、悪しき力をたくわえている。きみの手にした力は、その悪しき力をうち破る力。人の弱き心をくじき、アークランド世界をほんらいの正しき道へと、みちびくための力だ。それこそが、きみのもとめていた、さいごの力。悪に守られたアーザスのやみをうち破り、世界をしんにすくうために、必要な力なのだ。」

マリエルも、リズも、ロビーと同じく、精霊王の話をくいているようにきいていました。精霊王の話はともむずかしい話でしたが、とてもだいじな話なのだということは、だれにとつてもわかりました（ロビーのきゆうせいしゆとしてのやくわり、心がまえのことを話すのと同時に、この世界そのもの、人のそんざいそのものの意味のことをも、精霊王は話していたのです。こんなにだいじな話はほかにありません）。

精霊王がつづけます。

「ロビーベルク、きみは、ほんとうの強さを持っている。ほんとうの強さとは、こぶしの強さではない。人をねじふせる力でも、したがわせる力でもない。どこまでも人を思いやる、じゆんすいな心。それが、人のほんとうの強さ、ほんらいあるべき強さを生み出してくれるのだ。かなしみの森で、ただひとりすごしてきた日々が、人のことを思いやる、きみのそのじゆんすいな心を、いつそう強きものへと変えた。宝玉の力、そして人としての心。世界をすくえるのは、ロビーベルク、それらの力をあわせ持つ、きみしかいない。」

精霊王のいう通り、力で相手をねじふせたとしても、それはけつして勝ったということにはなりません。相手の弱みにつけこんだり、みずからの立場をりようして、人をおさえこみ、したがわせる。そんなことは、正しき者のやるべきことではありません。そんなことは、けつして強いことではありません。なさないことです。精霊王はこのイーフリープから、そんなことをいやというほど見てきました（そしてノランにもわかっていたのです。アーザスの悪をうち破るために、さいごに必要なもの。世界をすくうために、さいごに必要なもの。それはこぶしの強さでも、剣をふるうわざでもない。人のことを思いやる、ロビーのそのじゆんすいな心、それにほかならないのだということを）。

宝玉の力、人としての心、それらの力をあわせ持つ、きゆうせいしゆたるロビー。精霊王はそんなロビーに、さいごにこう伝えました。

「さいごに、その剣に力を与えてくれるものがある。それは、剣の力の意味をりかいたきみならば、おのずと得ることができらるだろう。」
精霊王はそういつて、いすからびよこんとおり立ちます。

「ロビーベルク。わたしがしてやれることは、もうない。きみはもう、必要なすべてのものを持っている。あとはきみの力で、きみのさいごの運命の中へとむかうのだ。さいごの旅のことについては、ラグリンたちに、道あんないをたのんでおいた。かれらに助けをこうとよい。」

そして精霊王は、びよこびよことした足取りで部屋のおくのとびらの前までいき、とつてに手をかけました。

「会えて、うれしかったよ、ロビーベルク、マリエル、リズ。ずっと寝てたね、ライアン。また会おう。いつの日か。」

精霊王はそういつて、とびらのむこうへ消えていきました。

ちちちち……、ぱたぱたぱた！

とつぜん、小鳥たちが目の前を飛び去っていきました。あまりにもとつぜんのごとに、ロビーたちみんなには、しばらく、なにが起こったのかもわかりませんでした。ですが、しだいに頭の中がはつきりし

てくると、みんなは自分たちの身になにが起こったのか？　りかいすることができたのです。かれらはまたも、どこかべつの場所に立っていました（ここでもライアンは、まだ地面でぐーぐー寝ていました）が。

「ん、んんは……？」

あたりをきよろきよろながめ渡してみても、みんなはここがどこなのか？　わかりました。目の前には、美しい水めんをたたえた、おだやかなみずうみ。白い砂がそのまわりをかこんでいて、あたりには色とりどりの花々がさきほこっております。みずうみのまん中には、あざやかなみどりにおおわれたしんぴ的な島がひとつ、浮かんでいました。

そう、ここは、たきのみずうみです！　みんなは、そのみずべに立っていました。つまりイーフリープへとむかうその出発の場所に、みんなはふたたびもどってきたのです！

ひゅんっ！

とつぜん、目の前をすごいはやさで、もも色のふわふわしたボールがいつこ、飛び去っていきました！　そしてそれにつづいて……。

「待てえー！」

そのボールに負けなくらいのはやさで、だれかがすっ飛んできたのです！　それがだれだか？　みなさんにはもうわかりですよ。そう、それはあのラグリンの男の子、リュキアでした。リュキアは今、マリエルからもらったボールを追っかけて、お空を飛びまわっていたところだったのです。

「リュキア！」マリエルが大声でさげびました。さげんだときには、リュキアはもうかなりむこうの方にまでいってしまっていました。ききききーっ！　マリエルのよぶ声に気がついて、（空中で）うしろ足で急ブレーキ！　すぐにみんなのところへともどってきたのです。

「あれえー？ お兄ちゃんたち、たきによ島に、ごようじじやなかつたによ？」リユキアが、首をかき上げていいました。

「ようじがすんで、今もどつてきたところだよ。」マリエルが、それにこたえて素晴らしいです。

ですがリユキアは、「あはは。」と笑っていました。

「うそだあー。だって、今さっき、あによボール、もらつたばかりだよ？ まだ、二十びようもたつていにやいじやにやーい。」

ええっ？ これは、どういうことなのでしょう？

リユキアは、うそをいうような子じやありません。とつてもすなおなのです（それはすぐにわかりますよね）。マリエルにはそれがわかつておりましたから、あぐをなでながら、「うーん……。」とうなつて考えこみました。

「どうやらぼくたちは、もとの場所にもどつてきたただけではなく、時間も、もとの時間にまでもどつてきたようですね。」

なんと！ でもそれなら、リユキアのいつていることもなつとくがいきます。そして、マリエルのいう通りでした。みんなはイーフリープへとむかうそのちよくぜん、みずうみのほとりでリユキアとわかれた、そのちよくこの時間にまでもどつてきたのです！ すごい！（きようふの部屋の前でなん時間も寝てしまっていましたから、助かりました。おくれた時間も、取りもどせましたから。そのうえ、リユキアとわかれたあと、みんなはみずうみの上を歩いていたり、精霊王のトンネルの前でひともんちやくあったりしていたわけですが、これらの時間もすべて、取りもどすことができましたのです。

もしあなたがみずうみのほとりに立っていて、かれらの去つていくところを見守っていたのだとしたら。かれらがみずうみの上を歩いていったそのすぐあとに、かれらのすがたがまるでまぼろしのように消えていって、気づいたときには、イーフリープからもどつてきたかれらが自分のすぐそばに立っていたというような、ふしぎなたいけんをすることでしょう。リユキアのいう通り、みんなはほんとうに二十びようほどこで、この場所にふたたびもどつてきました（これが、やみの精霊の谷とイーフリープとのちがいです。やみの精霊の谷でも、や

はり同じように時間がすぎませんでした。でもやみの谷の場合は、その中ですごした時間だけがすぎませんでした。イーフリープではこのように、その入り口の近くからそこにむかうまでの道のりにかかった時間までをも、なかつたことにしてしまふのです。さすが精霊王のくに、イーフリープ。ちよつとほかと、かくがちがうといった感じですね。

「じゃあ、てつとり早くすませちゃおうぜ。」リズが、アップルキントの里の方をしめしながら、いいました。「かれらが、道あんないをしてくれるんだろ？ 怒りの山脈だっけ？」

ロビーのさいごの旅、怒りの山脈への道のり。精霊王はラグリオンたちが、その道あんないをしてくれるというのです。今思えば、さいしょにラフェルドロード里長に会ったときにも、ラフェルドロードはそんな感じのことをいっていました。かれはあのとすすでに、精霊王から自分のそのやくわりのことについて、きかされていたのです。

「イーフリープ……。ふしぎなところだった。」マリエルが、いまだに自分がそこにいたのだということが信じられないといった感じで、いいました（まだ頭がすこし、ぼうつとしています）。

「イーフリープでぼくらが得たものは、はかりしれません。それは、この世界のしくみ、そのものといつていくくらいのもです。ほんとうに、きちょうなたいけんだった。」（マリエルらしい言葉でしたが、リズはそのうしろで、「そんなに、なにかもらったっけ？」とロビーにいながら、頭をひねっていました。なんともリズらしい。）

「ロビーさん。いよいよ、さいごの旅になります。」マリエルがつづけて、まじめな顔をしてロビーにいました。

「あらためて、ともにゆけることをうれしく思います。ロビーさんが思い通りの力をはつきできるよう、力をつくします。」

「う、うん……。」ロビーは小さく、うなずきます。ですがロビーには、いえませんでした。さいごの旅は、自分ひとりだけでいなくなっちゃならない。マリエルくんとも、リズさんとも、ライアンとも、もうすぐおわかれになっちゃうんだということ……。

「では、いきましよう。リュキア、ボールを追っかけるのはあとにし

て、里長さんのところまで、もういちどつれてつてくれるかな？」
マリエルの言葉に、もつとボールであそびたかったリュキアは、さ
いしょ「ええーっ。」としぶりましたが、すぐに「しようがないなあ。」
といって、みんなのあんないをもういちどひき受けてくれました。
「ボールなら、よべばいつでももどつてくるよ。なんなら、もういつ
こあげようか？」マリエルがそういつて、ボールを出そうと、手のひ
らをかざしたとたん……。

ぼわわわわんっ！

「うわっー」思わずマリエルがびっくりして、うしろにのけぞってし
まいました！

なんと！ みんなの目の前に大きさが二十フィートはあろうかと
いうくらいのも、巨大な魔法のボールがひとつ、あらわれたのです！
ええっ！

「な、なんだこれー！」マリエルが、そのままぺたん！ としりもち
をつきながら、そのボールを見上げて、信じられないといったふう
にいました。「ぼくは、ふつうのボールを出そうとしただけだぞ！」

「イーフリープのせいかな。」リズが、自分も、ぶおん！ リュート
の剣を出してみてもういいいます。その剣はイーフリープで使ったと
きよりも、さらに力強く、しゅうしゅうと湯気まで立てていました！
「今なら、岩でもかんとんに切れそうだぞ。なんか、強くなったつて
いうより、力のコントロールができなくなつてみたいだ。でも、ま、
ほつときやいいんじゃない？ そのうち、もとにもどるだろ。」リズが
あつげらんとして、つづけます。

「むせきにんなこというなよー」マリエルがまたぶんぶんいいいまし
たが、自分ではどうすることもできません。ここはリズのいう通り、
もとのように力を使えるようになるまで、自分のからだをすこしずつ
ならしていくがいなさそうでした（うまく使えばもつと強力なパ
ワーも出せそうですけど、まあ、やめておきましょう。今でもじゆう
ぶん強いですから！）。

「とにかく、里までもどりましょう。」さいごに、マリエルがいました。

「ここは、しゅやくのロビーさんが先頭です。さあ、ロビーさん、いきましよう！ リズ、たのんだよ。」マリエルはそういつて、ロビーの背中をおして、リュキアのあとについていきました。

「つまり、おれがこいつ、背おつていくのね……」

リズが、やれやれといった感じで、「ふう。」と深いため息をつきます。リズの足もとには、よだれをたらして気持ちよさそうにむにやむにやと眠っている、ライアンのすがたがありました。

さいごの道のりははじまろうとしています。

25、背中に乗ってもういちど

「こんなでつかい戦い、ひさしぶりだぜ。ひやはははー！」

目の前に広がる、果てしない平原。そのはるか地へいのさきを見下ろしながら、今ひとりの人間の少年がいました。

平原のまん中には、ゆたかな水をたたえた大いなる大河が、ゆうゆうと流れています。その少年が立っていたのは、海の色まじった白い石できずかれた、巨大なとりで。その白いかべの上につき出た、物見の塔の上でした。

「あそびではない……。これは、けいやく……。われのつとめを、果たすのみ……」

少年のうしろに、少年よりもはるかに大きく、全身を黒と金色のよろいかぶとでがちりとかためたおそろしい感じの男がひとり、立っていました（少年とくらべたら、まるでくまとうさぎでした）。いえ、男といいましたが、はたしてこの者に、ほんとうにせいべつがあるのでしょうか？ なぜなら、その者の顔は……。ひええ！ あのやみの精霊にそっくりな、まっ黒な影のような顔！ そしてその影の中にぽっかりと、赤いふたつの目がかがやいているだけだったのです！（なんとというおそろしきでしょう！）その影の者が、すがたかたちと同じくらいおそろしげな、うなるような声で、少年の言葉にそうこたえました。

「あいかわらず、おもしろくないやつだね、おまえは。」ふたたび少年が、自分のうしろに立っているその影の者にいいました。「見ろよ！ この、戦いの大ぶたいを！ もう百年も、たいくつな日々になんざりしてたところだからな。おれさまの力を、ぞんぶんに見せつけてやるよ。ひやはははー！」（ひや、百年？ いったいこの少年は、なに者なのでしょう？ 見た目は、ごくふつうの、「せいかくの悪そうな」少年でしたが……）

みなさんのごそうぞうの通り。ここはベーカーランドのそのふたつのとりのうちのひとつ。エリル・シャンディーンと同じ海の色まじった白い石できずかれた、ベゼロインのとりでした。おそろし

い魔女たちのさくりやくにより、なすすべもなく悪の手に落ちることとなった、巨大なとりで。ベゼロインとりでは今や、きたるべくこのさいごの戦いにおいての、ワットの黒の軍勢のほんきよちとなつてしまつていたのです……。

その黒の軍勢のほんきよちとなつた、ベゼロインとりで。そのとりでの上のいちばん高いところにじんどつてゐるからには、この少年と影の者は、黒の軍勢の中でも、さうとうにくらいの高い者たちにちがいありません。そしておどろくなかれ。じつはこの者たちは、わたしたちの思つている以上の、とんでもなくおそろしい者たちだつたのです。

やみのけんじやガノン。それがこの少年のしようたいでした。人間の種族の者で、身長はライアンと同じくらい。小がらで、きやしやなからだ。夜のやみのように黒い、肩までのびたつややかなかみ。そでない黒いチョッキと、同じくそでない白いシャツを着ていて（そでないため、二のうでがむき出しになっていました）、手にはさきつぽにむらさき色の石のはまつた、鉄のつえを持っています（マリエルのつえにっていました）。そしてその話し方からおわかりの通り、負けん気が強く、おれさまなせいかく（ワットの魔女つこ三姉妹の三女、エカリンの、「男の子ばん」といったところでしょうか？）と、いうことは、かなり悪いせいかくです。見た目は十三さいくらいに見えましたが、さきほどのかれのせりふからもおわかりの通り、そのほんとうのねんれいはなぞにつつまれていました。

これらのことは、ただの見た目でした。なにしろ、けんじやとよばれているほどのじつりよく者です。よほどの力がなければ、けんじやなどとはよばれません（それがよいけんじやでも、悪いけんじやでも）。そしてその通り、このやみのけんじやガノンは、このアー克蘭ドのれきしの中において、たくさんのくにぐにが生まれるそのいぜんむかしから、数々の悪名をとどろかしている人物でした（それはもう、とびつきりのわるがき……、いえ、悪者でした）。

そのおそろしき伝説のガノンが、黒の軍勢に加わつていたのです！ りゆうはどうあれ、それはこのアーランドのぜんなる者たちに

とって、おそるべききょういであることにほかなりませんでした。

そしてガノンのうしろに立つ、影の者。黒と金色のよろいかぶとに身をつつんだ、暗黒の騎士。そのしようにたいを知ったら、気の弱い者ならば、あまりのおそろしさに腰をぬかしてしまいかもしれません。このおそろしい影の者の名は、ギルハッド。ほかでもありません、このギルハッドは、やみの中の悪魔たちのことをひきい戦う、魔界のくにの王だったのです！（いわゆる、魔王というやつです！ ひええー）なぜそれほどのきょうふの者が、こんなところに……！ 悪いじょうだんだというのなら、怒らないからそうだといってほしいくらいです。しかしこれは、げんじつでした。そしてすべては、やみのけんじやガノン、かれのそんざいによるものだったのです。

ガノンの力のみなもと、それは文字通り、やみの力、魔の力でした（アーザスが手にいれた力も、このやみの力でした）。ガノンは長年に渡るおそるべきけんきゆうによって、ついに悪魔たちをもしたがえる、そのおそろしきすべを身につけたのです。

魔の取りひき。ガノンはその取りひきによって、人間のげんかいはるかにこえたそんざいとなりました。そのためとしを取ることもなく、ねんれいは十三さいのままだとまっていたのです（これで、なぞのひとつはとけました）。そしてガノンのよび出した、きゆうきよくの魔。それこそが、この魔界の王ギルハッドでした。

ふつうだったら、魔界の王がひとりの人間になど、したがうはずがありません。へたをすれば、いのちさえも、あつというまにうばわれてしまいかねないので。それほどこの取りひきはむずかしく、危険なわざでした。ですがガノンは、おそるべき力を持ったけんじや。ふつうなどという言葉は、かれには通じないのです。魔界の王すらもしたがわせるほどの、じつりよく、それがこのやみのけんじや、ガノンでした（ガノンのおそろしさを、伝えることができたでしょうか？）。

魔のけいやくによって、悪魔の王すらもしたがえる、やみのけんじや。そして、魔そのものの、魔界の王ギルハッド。このふたりの者が加わった、黒の軍勢……。さいごの戦いがひとすじなわではいかなということ、だれの目においてもあきらかでした。われらがベル

グエルム、フェリアル、ライラ、そしてぜんなる白き勢力の者たち、かれらはいつたい、このおそろしきげんじつに、どう立ちむかえばよいのでしょうか……？

「見ろよ。おまえの部下たちも、やっと、ごとうちやくだぜ。」

ガノンが塔の上から、とりでのうしろに広がる大平原をさしながら、ギルハッドにいました。部下たちですって？ 魔王の部下たちって、それはまさか……。

「ずいぶんと、待たせてくれたぜ。でも、ま、あいっらだったら、それでも上できか。けいやくのぶんは、きつちりとはたらいてもらうかな。おまえもだぜ、ギルハッド。ひやははは！」ガノンはそういつて、高らかに笑いました。

白のとりで、ベゼロイン。そのはいごの大平原に今、おそろしい光景が広がっていました。草も土も、まるで見えないのです。空気すらもなくなってしまうんじゃないか？

それほどにうめつくされた、黒い影……。そう、この大平原をうめつくしている、黒い影、それらはすべて、黒のよろいかぶとに身をつつんだ、おそろしき黒の軍勢の者たちでした……。

そのいっかくをしめる、魔の兵士たち。それはギルハッドの部下たち。ガノンが魔界からよびよせた、悪魔の兵士たちでした。かれらはガノンのいう通り、まさに今、魔界のとびらを通って、この大平原の地へとあらわれてきたところだったので！ 人間の兵士たちも、悪魔の兵士たちも、かいぶつの兵士たちも、みなひとつとなって、じんどつていました。かれらのもくてきは、ただひとつ。ベーカールランドをほろぼすこと。そのためだけに、つき進んでくるのです。

「いつたい、ベーカーのやつらが、どこまで持つかな？ すこしは、楽しませてくれよ。」

ガノンのぶきみな笑い声が、ふたたび、この暗い空の下にひびいていきました。

「あれえー？ みんなや、どこいつたによかにやあ？」

ラグリーンの里にもどつたりユキアが、あたりをきよろきよるとな

がめ渡しながら、首をかしげていました。

「おかしいですね。人っ子供ひとりいない。いったい、どこへいったのか。」マリエルもあたりを見まわしながら、ふしぎがります（人っ子供というより、ねこっ子供といった感じですけど）。

ふたりのいう通り、もどつてきたラグリーンの里には、さいしよにここへきたときのようなラグリーンのすがたが、まったく見あたらなくなっていました。そのへんのしばふでひる寝をしている者や、空をぶかぶか、ただよっている者もおりません（とくに説明していませんでしたが、そういうラグリーンたちはみんながここにきたとき、ふつうにいたのです。説明を忘れたわけじゃありませんよ、うん）。みんなそろって、大ひなたぼっこ大会にでも出かけたのでしょうか？いえ、今にかぎっては、そんなことはありませんでした（いつもだったら、あり得るかもしれませんが）。かれらはきたるべくさいごのときにくれて、かれらなりに、その運命をむかえいれるじゅんびをしていたところだったのです。

「やっぱり、もどられましたね。」

ふいに、上の方から声がしました。見ると、だんだんばたけのようなたくさんの小さな広場のそのひとつから、今、かわのチョッキを着たふたりのねずみの種族の者たちが、こちらへとおりてくる場所だったのです。かれらは、そう、ラグリーンたちのめい友である、ラツトニアの者たちでした。

「ラフェルドラードどのより、でんごんをうけたまわっております。『われらは、ラグリーンの聖地、ヒアキムいせきにて待つ。さいごの旅立ちのときは、今だ』と。かれらは、あなた方が去っていくのと同時に、かれらの聖地である岩山のいせきへとむかわれました。ラフェルドラードどののは、あなた方がすぐにもどられるということを知っていたのです。」

そう、ラフェルドラードは精霊王から、すべてをきかされていたのです。かつてのウルファの少年、ロビーベルク。かれがふたたび、自

分のもとをおとずれるとき。そのときこそが、もういちど、かれのことをみちびくべきとき。このアークランドのみらいを分ける、運命のときなのだ。そしてその運命に敬意を払い、すべてを受け入れるため、かれらはかれらの聖地であるヒアキムのいせきという場所にまで、出かけました。その場所は、ラグリーンたちのそのつばさにせいなる力を与えるとされている、とくべつな場所でした。さいごの運命のときにあたって、ラフェルドロードをはじめとするラグリーンの者たちは、その聖地で、ロビーたちのことを待ち受けているというのです。

「ヒアキムいせきですか。」マリエルがいました。「ぼくの頭のじしよをひもとくと……、『ヒアキムいせき。大いなるつばさの種族、ギルフィンたちがぎざいた、みやこのあと。ギルフィンたちが去ってからだいぶひさしいが、いまだにこのいせきには、数々のふしぎな力が眠っている」とされる。なぞ多きねこの種族、同じくつばさ持つラグリーンたちは、ギルフィンたちのまつえいとされる種族であり、かれらはこのいせきを聖地とあがめて、重要なぎようじやまつりごとをとりおこなうとされる。』なるほど、たしかにラグリーンたちにとって、とても重要な場所のようですね。ぼくらの旅立ちを見送るのには、ふさわしい場所です。」

すごい！ マリエルの頭の中には、魔法のじしよがまるまるいつさつはいつているんですね！ さすがは、べんきよの先生のうちの子。ライアンにはまねができません！（でも「お菓子大ひゃっか」とかいふ本なら、まるまるいつさつはいりそうですけど。）

「よけいなりくつなんて、どうでもいいからさ。」リズがいました。「早く、そのヒアキムいせきってどこ、いこうぜ。こいつ、すっげえ重いんだよ。」

そうでした、リズはさつきからずつと、「ケーキをたらふく食べておなかぼんぼんになっているライアン」と、「ライアンのお菓子がぼんぼんにつまったかぼん」を、背おっていたのです。さつきともくてきの場所までついてしまいたいという気持ちも、わかりますね（ごくろうさまです）。

「ヒアキムいせきにやら、すぐそこだよ。」リュキアが、里のむこうの岩山のことをゆびさしながら、いいました。「ひゅんっ！　って飛んでいたら、たつたによ十びょうでついちゃう。近い近い。」(いや、きみはそうかもしれないけど、みんなはひゅんっ！　って飛べないから……)

「じゃあ、道あんないをお願いね、リュキアくん。それじゃ、ぼくたちは、そこにむかいます。ありがとうございます。ええっど……」ロビーがリュキアにあんないをお願いしてから、でんごんを伝えてくれたラットニアのふたりにおれいをいおうとしましたが……、名まえが出てきません。みんな、舌をかみそうな名まえばかりでしたので、ロビーはかれらの名まえを、ぜんぜんおぼえられていなかったのです(ロビーはとうより、ライアンとリズ、それとリュキアも、かれらの名まえをぜんぜんおぼえていませんでしたけど。マリエルはおぼえていたみたいですが。さすがです。ちなみに、わたしもいまだにかれらの名まえは、ひき出しの中のメモを見ないと思いいせません……)。「ラン克蘭ドール・ラルールツールです。ロビーさん、どうぞ、お気をつけて。」ラン克蘭ドールがいました。そうそう、そういう名まえでしたね。

「ありがとうございます、ラン克蘭ドールさん。」ロビーがかしこまって、こたえます(親しみをこめて、みょうじはしよりやくしていいました。親しみをこめてですよ)。

「プリンクポイント・パル。ピンプルラツクルです。アー克蘭ドの命運は、あなたにかかっているのです。心より、旅のせいこうをおいのりいたしております。」プリンクポイントが敬礼をし、深くおじぎをしながらいいました。ラン克蘭ドールも、それにつづきます。

「ありがとうございます、プリンクポイントさん。」ロビーはほり高きウルファの敬礼を、このほり高きラットニアの勇士たちにささげました(ちなみに、かれらのリーダーであるリーリングル・リマシリングルスは、ラグリーンたちといっしょに、ヒアキムのいせきまでおもむいていました。里に残っていたこのふたりのラットニアたちは、ロビーたちにでんごんを伝えるという、そのめいよあるおるすばんをひ

き受けていたのです)。

「どーこーがー、近いんだよー!」

リズがその背にライアンをかつぎながら(ロープでしっかり、からだにしばりつけてありました)、岩かべにしがみつき、ひいひいいてきけびました。

リュキアのいう通り、たしかにヒアキムのいせきはすぐそこでした。ですけどそれは、やっぱりラグリンたちにとっての話。ひゅんっ! って飛んでいけない仲間たちにとっては、ヒアキムのいせきは、けわしい岩の道を越え、切り立ったがけをのぼっていくいがいたどりつけないという、とんでもなくやっかいな道のりのさきにあるいせきだったのです!

「もんくいわないの! これも、ロビーさんのためだろ。」マリエルが同じく、ひいはあいいながら、岩山をよじのぼっていきます(ところでマリエルは、がけをのぼる前にまた新しい服に着がえていました。こんどはかわいいのに加えて……、動きやすい服。がけのぼりにてきたうんどう着(ジャージ)に、着がえていたのです。胸に大きく、「フィアンリー」の名まえいり。こんな服まで持ってきていたんですね。なんとも用意がいい。ちなみに、色は上下赤です)。

「だ、だいじょうぶ? ふたりとも。ライアンなら、ぼくが背おつていくから、むりしないで。」ロビーがいました。マリエルは「ロビーさんには、むだな体力を使わせるわけにはいきません。」といって、ききいれてくれませんでした。

おわかりの通り、みんなは今、まっすぐ上へとつづいている切り立ったがけを、よいしょよいしょとのぼっているところでした。高さは八十フィートほど。ですがこのくらいのがけなら、このノランベつどう隊にとつては、どうつてことないはずだと思うのですが、なぜかれらは、こんなにもくろうしているのでしょうか?

じつはそこにはまた、みんなの思いもよらないこんなんが、かわわっていたからなのです。

まず第一に、この場所の岩のすべてが、「魔法をはじき飛ばす」とい

うとんでもないせいしつを持った岩だったということ！ マリエルはさつそく、ふわふわえんばんのじゅつを使って上までのぼろうとしましたが、（ちなみに、イーフリープ帰りでしたから、まだ力をコントロールするのにだいぶくろうしたのです。でもそこは、持ち前のゆうしゆうさでなんとかしました。っていうか、なんとかできちやうものなんですわ……。さすがマリエル）えんばんを出したしゆんかんに、ぶおんっ！ 魔法のえんばんは岩山にはじき飛ばされて、はるかむこうの空に吹っ飛んでいって、きらりん！ お星さまになってしまいました。

「な！ なにおーう！ それなら！」 こんどは岩山をのぼりやすくするため、仲間たちのからだを羽のようにかるくする、ふわふわはねはねのじゅつという魔法を使いましたが、魔法をかけたしゆんかん、ぶおんっ！ みんなのからだの中から、今かけた魔法のエネルギーがみんな岩山にはじき飛ばされて、はるかむこうの空に吹っ飛んでいって、きらりん！ お星さま二ごうになってしまったのです。

そういったわけで……。みんなは自力でロッククライミングしていくほか、なくなってしまったというわけでした。それでもほんらいシルフィアであるリズなら、魔法がなくても、こんな岩山くらいはすいすいのぼっていけるはずでしたが、なにしろ重いライアンを背おっておりましたから、さすがにむりだったのです。そのうえこの岩山には、上にロープをひっかけられるようなところも、なにもありませんでした（せめて上に、しっかりとした木のいっぽんでも立っていてくれたらよかったです）。さきへのぼって上からひっぱり上げるのも、ひっぱる人がぼろぼろとした地面に足を取られてすべり落ちる危険が大きかったので、やめました（この岩場や地面はとももろく、たとえくさびをうちこんだとしても、それがすぐにはずれてしまいません。いちどリズが上にくさびをうちこんで、そこにロープをたらしめてみましたが、そのロープをのぼろうとしたとたん、ずぽっ！ くさびが岩からはずれてしまったのです。ですが手足を使ってゆっくりしんちように大きな足がかりをえらんでのぼっていけば、たとえライアンを背おっていたとしても、のぼれないことはありませんでした。

ですからみんなはしかたなく、からだひとつで、この岩山をのぼっていくことにしたのです。それでもねんのため、みんなはおたがいのからだをロープでしばって、つないでいしましたが。魔法も山のぼりの道具も使えないとなると、こんなくらいのことしかできませんでしたから。

ちなみに、みんなのものもつはあらかじめリズがさききのぼって、上においてきてくれました。なにしろ、「ライアンのお菓子がばんばんにつまったかばん」や、「マリエルの服がいっぱいにつまったかばん」など、にもつが多かったですから……。小さなリュキアでは、みんなをはこんでいくのもむりですし、しかもリュキアは、「さきに、里長さんとこいつてるねー。早くきてねー。」といって、ひとりで飛んでいってしまったのです……。せめてにもつくらいは、上にはこんでいってもらいたかったのですが……。まさに、だめだめづくし！

そしてふたつ目のこんな。それはこの場所の空気が、すごーくうすいということでした。ですから、ふつうだったらこんなていどのロッククライミングならへつちやらなりズでさえ、ライアンを背おつて、息を切らして、ひいはあいつていたというわけなのです。

「こいつ、起きたら、まず、ひっぱたいてやるからな、おれ。」リズが岩山をのぼりながら、胸にわき起こるもえたぎるけついをあらわにしました。

それから、十分ご……。

「ほら、ついたぞっ！」リズががけのてっぺんを乗り越えて、たいらな地面にライアンのからだをどさっ！と放り出して、いいました。「おれはもう、こいつ背おうのだけは、かんべんだぞ。こんなにちっこいのに、なんでこんなに、重いんだよ、まったく！」

リズがそういって、地面に手足を放り出して寝っころがります（よっぽどつかれたんでしょね。おつかれさまです）。そしてそのあと、マリエルとロビーもようやくのこと、てっぺんまでたどりつくことができました。

やれやれ。とんだところであつていへんな目にあつてしまいましたが、

とにかくみんなはこうして、ラグーンたちの聖地、ヒアキムいせきのある山のとつぺんにまで、たどりついたのです。

そこは強い風の吹きすさぶ、さみしい岩場でした。あちらにもこちらにも、大きくて荒々しい岩がごろごろしています。植物はほとんど生えていません。そしてあたりの岩山をよく見てみると、なるほどたしかに、この場所が大むかしのまちのいせきだということがわかりました。

そのほとんどはくずれ落ちてしまっていて、たてものはほとんど、がれきの山になっていました。ですがいくらか、りつばなはしらの数々や、あずまやのやねなどが残っております。そしていせきを進むみんなの前に、とつぜんそれはあらわれました。

大きな岩山の影からあらわれたのは、それぞれがなんとも巨大な、つばさを持ったライオンのような生きものの、ふたつの石ぞうだったのです！ なんとという大きさ！ そしてなんとという、みごとなちようこくなのでしよう！ まるで今にも動き出して、飛びかかってきそうなるふんいきです。高さはともに、見上げるほど。七十フィートほどもあるでしょうか？ それらの巨大な石のぞうが、まるでそのさきのべつ世界へとつづく門のように、ふたつならんで、ででーん！ とそびえたっていました。

「ふええ……、すごい！」ロビーが見上げて、思わずいいました。それはまるで、エリル・シャンティーンのぎよくぎで見た女神リーナロッドのぞうのような、みごとさだったので（見た目の力強さでは、目の前のこのライオンのようなぞうの方が上かもしれせん）。

「ギルフィンたちの神、ティアとギルムのぞうですね。」マリエルが同じく、見上げながらいいました。「いい伝えによれば、かれらは風そのものをあやつり、風とともに、この地におり立ったといわれています。ぼくの頭のじしよをひもとくと……」

「ひもとかなくていいよ。べつに、きょうみないし。」リズがやれやれといった感じだからだ中をマツサージしながら、いいました（リズの「にもつ」は今、ロビーが背おっていました。マリエルじゃ、ライ

アンを背おっていくのはむりですから。マリエルはロビーにむだな体力を使わせたくありませんでしたが、さすがに今のリズムでは、いうことをきかせられそうもありませんでしたので。

そのとき……。その二体の石ぞうのむこう、そこは石だたみの広場になっていましたが、その広場から五、六人ほどの者たちが、こちらへとやってきたのです。それはこの場所のげんぎいのあるじたち、つばさ持つねこの種族、ラグリーンたちでした。

「もどつてきたにや。さいごによ力を、手にいれたか。」

ききおぼえのある、力強い声。それはラグリーンの里アツプルキントの長、ラフェルドロードでした。りっぱな服そうをした身分の高そうなラグリーンたちや、ラットニアの使者たちのリーダー、リーリングル・リマシリングルスタールもいっしょです。はしっこにはおなじみのリュキアがいて、となりにいる大人のラグリーンのしっぽにいたずらをしていました(じつとしているのはむりのようですね。「こら、やめんか。」年長さんのラグリーンに怒られておりましたが)。

「は、はい。その、たぶん……」ロビーがこたえました。が、ロビーにはまだ自信がありませんでした(まだあれからじつさいに剣を使ったわけではありませんでしたので、ほんとうにそんな力を自分が得たのかどうか? はつきりしないからでした)。

「心配はいらにやい。精霊王を信じるによだ。」ラフェルドロードがこたえます。たしかにその通りでした。精霊王のいったことでもあります、それは信じていいのです。

「ラフェルドロード里長、ぼくたちには、さいごの旅をむかえるじゆんぴができています。」マリエルがみんなの前に進み出て、さほうにのっとったおじぎをしながらいきました(服そうはジャージのままでしたが……)。「精霊王は、おっしゃいました。あなた方、ほこり高きラグリーンの者たちに、助けをこえと。さいごの旅の道のりは、あなた方の、そのつばさにかかっているのですね?」

マリエルのいう通りでした。「ラグリーンの者たちに、道あんないをたのんでおいた。」あの精霊王の言葉は、そういうことだったのです。ロビーのさいごの旅、アーザスの待つ怒りの山脈へのさいごの道

のりは、このラググリーンたちのほこり高きつばさによってひらかれました。かつてロビーが、かれらのその背中のつばさによって、運命の地にまではこぼれていったように……（うしろの方では、リズが「ようするに、ラググリーンの背中に乗っかって、飛んでけつてことだろ？なにをもつたいぶつたいいい方してるんだか。」とぶつぶついつていきましたが。ま、まあ、その通りなんですけど……）。

「かつて、きみをはこんだときも、ここからだつた。」ラフェルドロードが静かな声でいきました。「わがつばさは、ギルフィンによ力。いにしえよりによ、そによ力をもつて、ロビーベルクよ。わたしは、今、ふたたび、そにやたによつばさとにやろう。さあ、まいられよ。」ラフェルドロードがそういつて、ロビーのことを手まねきします。

いよいよ、このときがやつてきたのです。
ですが、そのとき……。

「むにやむにや……、まかせて……。せいなるタドウーリの名において、精霊王さまに、心よりの敬意をひようします……。」

ロビーの背中から、急に声が。そう、それはライアンでした。さいごの、ときここにきて、ようやくライアンが目をさましたのです（だいぶ寝ぼけているようですが……）。

「やつと起きたか！　まず、おれからやらせろ！」リズがそういつて、ライアンのほほをぺっちーん！（あいをこめて）ひっぱたきました。「さんざん、くろうかけさせやがつて！」

「ふえ？　なになに？」ライアンがわけもわからず、びっくりしてそういつています。

「つぎはほくです。こいつ！　なんで寝てるんだよ！」マリエルがそういつて、ライアンのわきばらを、こしよこしよ、こしよこしよ！（ねんいりにくすぐりました）ほんとうにくすぐるんですね……）。

「わひやひやひや！　なにすんのさ、マリー！　やめ……、わひやひやひや！　そこだめー！」

なんだかわけがわかりませんが……、とにかくライアンが目を見ましたのです。ですがそれによって、みんなはこれから、とつてもたいへんな目にあうはめになってしまいました。

「あーあ。どうすんだ？ あれ。」リズがうしろの方を親ゆびでゆびさしながら、マリエルとロビーのふたりにいいました。

「まさか、あそこまで泣くなんて……。計算がいです。」マリエルが口をほかんとあけて、どうしたものかとおつぶやきました。

みんなのしせんのさき。その地面の上には……。

「なーんーでー、起こしてぐれながったのさー！ びえええーん！ びわわあーん！ びわわあー！ びわわあー！ びえええーん！」

大泣きしながら地面をころげまわる、ライアンのすがたが……。

あこがれの精霊王。アークランドのすべての精霊使いのだいひょうとして、そしてシープロンではじめて、自分が精霊王とのえっけんをつとめることになるはずだったので。それがまさか、精霊王とひとことも言葉をかわすこともなく、眠りこんでしまうなんて！ なんとというふかく！ とうぜんライアンのそのあふれんばかりの感じようは、起こしてくれなかったみんなに対して、ばくはつしてしまつたというわけでした……。

「お、起こそうとしたんだよ。でも、ぜんぜん起きないんだもの。きつと、精霊王さまのくれたケーキ、食べすぎたんだよ。あんなに食べちゃうから……。」ロビーがなんとかとりつくろおうと、ころげまわるライアンのことをせつとくしようとしてましたが……、ロビーの言葉も、あんまりききめがないみたいですね。どうやらこのまま、しばらく放はなつておくしかなさそうです（マリエルの魔法も、岩山にはじき飛ばされて使えませんし……）。やれやれ……。

「びええーん！ ーロビーの、びわわあー！」

岩山から吹きおろされる風が、ほほにあたつて通りすぎていきました。アツプルキントの里からほど近い、岩山の上のいせき。里ではあんなにいいおてんきでしたのに、このいせきの空は、どんよりとあつ

い雲におおわれていたのです（ひみつめいた場所というのは、たいはいこんな空をしているものです）。そのいせきのもつともしんせいな場所。石のはしらが立ちならぶその広場のまん中に、今ロビーと仲間たちは立っていました（ライアンだけは、いまだにむこうの地面の上で、ひぎをかかえてぐずりこんでいましたけど）。

「いだいにやるせせん、ギルフィンによ力を、わがつばさに！」
ラフェルドロードが空にかた手をかざし、まるでじゅもんのよう
言葉をとなえました。すると……。

とつぜん、ラフェルドロードのその背中のつばさが、まばゆいばかりのこがね色の光につつまれたのです！　そして、つぎのしゅんかん。

ぶおんっ！　ばさっ！　ばさっ！

そのこがね色のつばさが、なんばいもの大きさにまでふくれ上がった、はばたきました！　そしてつばさだけではありませんでした。ラフェルドロードのからだだが、さきほど見たギルフィンの神さまたちの石ぞうのような、力強くたくましいすがたへと変わったのです！（これが、せいなるいせきにやどったギルフィンの力！　すごい！）

風の力をあやつつたとされる、かつての種族、ギルフィン。今この石の広場は、そのギルフィンたちの残した大いなる力にあふれています。風がぐるぐると、広場のまわりをまわりはじめます。そしてその風はやがて、広場のまん中に立つラフェルドロードのもとに集まり、そのこがね色のつばさの中へとすいこまれていきました（ちなみに……、このギルフィンの力はこの場所ではか得ることができないのはもちろんのこと、いちにちにいちどだけ、それもせいぜい数時間ていどしか使うことのできない、とてもとくべつなものでした。そして怒りの山脈までの道のりは、そのギルフィンの力でたどりつくことのできる、ほぼぎりぎりの道のりだったのです。ですからギルフィンの力を使うために、ラフェルドロードのことをエリル・シャンディーンなどのほかの場所によびよせておくというようなことも、できません

でした。怒りの山脈への出発は、ほんとうに今このとき、この場所からでなければならなかったのです。

「さいごによ、旅立ちによときだ。」ラフェルドロードがこがね色のつばさをはばたかせ、ロビーにいいました。「そこにやたはここから、ただひとりで、怒りによ山脈へとむかわにやければにやらにやい。それは、わかつているにや?。」

ラフェルドロードの言葉、それはロビーが思っていた通りのものでした。ノランはなにもいいませんでした。ですがロビーには、だれにいわれることがなくともわかつていたのです。あるいはロビーの腰の剣が、そう教えたのかもしれない。運命のけっちやくをつけるため、さいごの戦いの場にむかうことができるのは、アーザスにたいこうすることのできる力を持った、自分だけなのだ……（たとえアーザスとちよくせつに戦うことがなくても、そこへたどりつくまでにはどうしても、アーザスのそのよこしまなる力の前にそのすがたをさらけ出さなくてはならないのです。それがアーザスの力にたいこうすることのできない者であったなら……。そう、みんなといっしょにいけば、かれらをいたずらにきずつけてしまうだけでした。だからこそロビーは、ただひとりだけで、さいごの道のりの中にむかおうとしていたのです……）。

「はい……」

ロビーが静かにこたえました。すでに心は、かたまっていました。ですが……。

仲間たちはそうではありません。マリエルもリズも、きゆうせいしゆであるロビーのことを助けみちびくそのやくわりは、旅のさいごのさいごのときまで、つづくものだとばかり思っていましたから（とくにマリエルにとつてこの旅は、ししようであるノランからいつかわされた、はじめての大しごとでした。ノランのきたいにこたえ、さいごまでりつぱにそのやくめを果たしてやろうと、はりきっていたのです）。

「おまえ……、なにいつてんだよ。」リズがロビーに近づいて、いいました。

「まさか、ひとりでなんて、むちゃです。」マリエルも、ロビーの前にまわっていいました。

しかしマリエルとリズのふたりは、そこではつきりと、りかいしたのです。かくごをきめ、自分の運命のことをきとった、ロビーの目。その目はきゆうせいしゆとしての力強さとほこり、そして不安とかなしみ、それらのものであふれていました。

ロビーとともにいくことは、もうできないのだと……。

リズもマリエルも、それ以上なにもいうことはできませんでした。すでにロビーの運命は、自分たちのおよぶことのできない、手のとどかないところにまでいってしまっていたのです(たとえむりやりついていったとしても、もう自分たちではそこでロビーのために、なにか力になってやれるようなことはないのです。むしろ、ロビーの足手まといになってしまっただけでした。マリエルもリズも、そのことをここで、りかいしたのです)。

「ありがとう、マリエルくん。ありがとう、リズさん。」ロビーが、仲間たちにやさしいひとみをむけていいました。「ぼくのつとめを、果たしてきます。だいじょうぶ、心配しないで。きつと、うまくやるから。」

リズもマリエルも、うつむいたままなにもいえませんでした。胸にあついものがこみ上げてくるのが、感じられました。マリエルの目には、なみだがあふれていました。くちびるをぎゅつとかんで、手にしたつえをぎゅつとにぎりしめて……。

「もどってこいよ。」

リズが、ふりしぼるようにそういいました。ロビーは静かにうなずいて、このすばらしき友、青がみのぎんゆう剣士リズの手を、がっしりとにぎってあくしゆをしました。そして。

「ありがとう、マリエルくん。きみがいてくれて、ほんとうに助けられたよ。心から。」

ロビーはそういって、うつむいていたマリエルのことを、ぎゅつと

だきしめました。

と、そのとき……。

ロビーは自分のうしろに、小さな影が見えるのに気がつきました。ロビーにはそれがなんだか？　すぐにわかりました。もう、なんべんもなんべんも、見てきた影。小さなすがたに、力いっぱいのげんきと明るさと前むきさをつめこんだ、いちばんの友。その友の影だったのです。

「ライアン……」

ロビーがそういつて、ゆつくりとふりかえりました。そしてそこには、ロビーの思った通り、ライアンのその小さなすがたがあったのです。

とうとう、このときがきた……。

ロビーはそう思いました。この旅をはじめたときから、おそらくはかなしみの森の自分の家のほらあなを出発したときから、ロビーにはなんとなくわかっていたので。自分の運命の中へとふみこんでいくとき、そのときがきたら、ぼくはただひとりで、さきへ進まなくちゃいけないのだらうと……。

ライアンは泣きはらしてまつ赤な目をして、しばらくだまつたまま立っていました。両手のこぶしをぎゅつとにぎって、口を、きつ、と、ま一文字にむすんで。

「ライアン……」

ロビーがふたたび、ライアンの名まえをよびました。そして、ようやく……。

「なに、かつてにきめてんのさ……」

ライアンがぼそつと、こわいくらいの顔をしていました。

「ライアン、きいて。」ロビーがいいかけましたが……。

「ロビーの、ばかあー！　ぼくがいなくちゃ、なんにもできないくせにー！」

ライアンが、その思いをぼくはつきせました。ずっとせわがやけて、ぼくがめんどろを見てあげなくちゃ、どんな危険な目にあうか？ わかったもんじやないロビー。ぼくがついてあげなくちゃ、なんにもできないロビー。ロビーをほんとうに助けられるのは、ぼくだけなのに。ロビーのことなら、ぼくがいちばんよくわかってるのに！

「ぼかー！」ライアンはそういって、ロビーのからだを両手でぽかぽかたたきました。

「うわあーん！」大声を上げて、ライアンは今まででいちばん、泣きました。

ほんとうは、ライアンにもわかっていたのです。エリル・シャンデインにたどりついて、アルマーク王やノランからたくさんのしんじつをきかされたときあたりから、ロビーの運命が、もう自分の手にはおよばないところにまで、いつてしまっているのだと。ですがライアンは、それからずっと、そのことを深く考えないようにしていました。きつと、ぼくが助けてあげられる。なにか、いい手があるよ。ライアンはさいごまで、ロビーにくつついていく方法を考えていたのです。

ほんとうならライアンのやくわりは、ロビーをアルマーク王のもとへとどけたところで、終わっていたはずなのです。ですがライアンは、(アルマーク王をおどして)ついてきました。さきのぼしにしてきていた、ロビーとのわかれ。それがとうとう、やってきてしまったのです。

ライアンは、それを受けいれたくありませんでした。でも、受けいれなくてはならないのです。しかしライアンには、自分の気持ちをおさえることなんてできませんでした。ですからどうしようもないこの気持ちを、ただただロビーに、まるで子どものようにぶつけるしかなかったのです。ライアンの気持ち……、それは、痛いほどのものでした。

「ひとりでいくなんて、だめー！ だめだめー！ いっちゃやだー！」

ロビーにくい下がりがりつづけるライアンに、マリエルとリズが近づい

て、その肩をつかみました。

「おい、いいかげんにしろよ。」リズが、ききわけろといわんばかりに、きつくいいました。

「きいたろ。もう、ぼくたちじや、ロビーさんを助けることは……」
マリエルが、そういいかけたとき……。

「そんなの、わかってるもん……」ライアンが小さくいいました。

「ぼくがいちばん、よくわかってるもん……」

ライアンはそういって、その場へたりこんでしまいました。からだ中のすべての力が、ぬけてしまったかのようにでした。

「おまえ……」

「ライスタ……」

リズもマリエルも、そのときになってはじめて、ライアンのほんとうの気持ちを知ったのです。ライアンは胸が張りさけそうなくらいに、つらいのです。でも、どうすることもできない。それがわかってるから、よけいにつらいのです。だからこそ子どものように、だだをこねることしかできなかったのだと……。

「ライアン……」ロビーがしゃがみこんで、ライアンのことをだきしめました。強くだきしめました。

「ライアン、きみに出会えて、ほんとうにうれしかった。しあわせだった。ずっとひとりぼっちだったぼくに、きみは、勇気と力を与えてくれたね。きみは、ぼくにとって、光そのものだ。」

ロビーはそういって、ライアンのほほにそっとキスをしました。ロビーの目には、なみだがあふれていました。

「きみは、ぼくのいちばんの友だちだよ。それは、いつまでも変わらない。」

ライアンはようやくよくなって、ロビーのことを見ました。ロビーはやさしい顔をして、自分のことを見つけていました。なにも変わっていません。なにか変わるなんてことは、すこしも思えませんでした。

「帰ってこないと、しょうちしないから……」ライアンが鼻をすすつとすすって、目をごしごしとこすりながら、いいました。「ぼくを怒らせたら、こわいんだからね。」

「あはは。」ロビーはそこでようやく、声を上げて笑いました。「そんなの、知ってるよ。だって、帰ってこなかったら、ぼく、ライアンに殺されちゃうもの。」

ライアンはちよつとだけ笑って、いいました。

「よく、わかってるじゃない。とっておきの大わざだって、まだ残ってるんだからね。」

ふたりはそのまま、まるでそこだけ時間の流れがとまってしまったかのように、いつまでもいつまでもだきあっていました。

こがね色のつばさが、空高くまい上がっていきます。

その背にロビー、ひとりを乗せて。

そのつばさからおうごんの光のつぶが、きらきらとこな雪のようにまいちっていきました。そして空に浮かんだそのこがね色の光は、小さく遠く、あとにはなまり色の空ばかりが、広がるのみとなったのです。

「いっちゃったな……」

リズが「ふう。」と小さく息をついて、いいました。マリエルはずっと、空を見上げたままでした。

ライアンはなんともいいようのない、ふくぎつな表じようを浮かべていました。ロビーのことを信じてる。でも、ぼくがいなくて、ほんとうにだいじょうぶなんだろうか？ もしも、このまま……。

ライアンの胸が、ぎゅんぎゅんと音を立てて、しめつけられていきました。

「げんき出せよ。あいつなら、やれるさ。」

そんなライアンの肩をぽん！ とたたいて、リズがいいました。ライアンはうつむいたまま、小さくうなずきます。

「ロビーって、たいしたやつだよ。おまえもいぜん、おれにそういつたろ？ おれのあにきのこと。あにきがたいしたことないやつなのか？ って、なまいきな口をききやがったよな。」リズが遠くの山をながめながら、つぶやきました。

「あいつなら、だいじょうぶ。たいしたやつなんだからさ。」

たきのみずうみのほとりで、ライアンにはげまされたリズ。こんどはリズが、ライアンにそのおかえしをしてあげる番なのです。ライアンはリズの方をむいてにこりと笑うと、小さな声でいいました。「ありがとう、リズ。」

ふと見ると、ライアンのすぐそばにマリエルが立っていました。そしてマリエルはライアンの手をだまっさにぎると、はつきりとしたいい方でいったのです。

「ぼくたちは、ノランベつどう隊の仲間だ。でも、ライスタ、きみは、ただの仲間じゃない。」マリエルはそういって、ライアンの手を自分の胸におきました。「まじゅつしのほこりにかけて。きみは、ぼくの、そんけいすべき友だちだよ。」

「えっ……」ライアンは思わず、顔を赤らめてしまいました。あのマリエルが急にこんなことをいい出すなんて、思ってもいませんでしたから。

「きみは、ほんとうのやさしさ、強さを持っている。それこそが、ノランおししようさまが、いつもぼくにいつていることだ。きみとロビーさんのことを見て、その意味が今、はつきりわかったよ。人のあるべきほんらいのすがたを、きみは教えてくれたんだ。心から、きみをほこりに思う。」

マリエルの言葉に、ライアンはすっかりはずかしくなっていました。ですがマリエルは、ほんきでいつていたのです。マリエルの、いがないいちめんを見たようでした。

「や、やめてよマリー。そんなの、はじめからわかってることじゃない。」ライアンが、なにを今さらといったようにいいました。「ぼくははじめから、強くて、かわいくて、りっぱなんだよ。」

ライアンの言葉に、マリエルは急におかしくなっていました。やっぱりライスタは、ライスタのままだ。こうじゃなくちゃ。そしてマリエルとライアンは、ふたりで「ふふふ。」と笑いあいました。はじめはけんかばかりしていた、マリエルとライアン。こうしてかれらは、ここに、とわの友じょうをちかいあつたのです。

「おい、かつてにもり上がるなよ。」リズが、ふたりのあいだにわつてはいつていいました。

「おれは？ おれも、そんなけいすべき友だちだろ？ マリエル。」
マリエルは、はあ？ といった顔をして、リズのことを見ました。
でもすぐ、「ふふっ。」と笑っていったのです。

「まあ、いちおう、リズのことともみとめてあげるよ。」

「なんだよ、いちおうって！」

そして仲間たちは、おたがいの顔を見あつて笑いました。

「ぼくたちも、ここでぐずぐずしているわけにはいかないぞ。」マリエルがまじめな顔をして、仲間たちにいいました。「ロビーさんのために、ぼくたちにも、なにかできることがあるはずだ。」

さいごの旅へとむかったロビー。ですがロビーは、ひとりではありません。たくさんの心のささえ、仲間たちの思いとともに、旅立ったのです。はなれていても、ロビーと仲間たちの心はひとつでした。ベルグエルムの心も、フェリアル的心も、みんなロビーといっしょだったのです。そしていちばんたいせつな、あなたの心も。

そのとき、その場に残ったたくさんのラグリーンたち（とラツトニアのリーリングル）の中から、なん人かのラグリーンたちがみんなのもとへとやってきました。

「ラフェルドロード里長より、もうひとつによでんごんを受けたまわっております。」りっぱな服そうをした身分の高そうなラグリーンのひとりが、みんなにいいました（同じような服そうをしたラグリーンたちが、全部で三人おりました。かれらはこのヒアキムいせきをかんにしている、しさいさまたちでした。このいせきはかれらラグリーンたちの、いのりの場でもあったのです）。

「これは、精霊王よりいつかわされたもによです。ロビーベルクどによよ助けとにやれる道が、ひとつだけあると。さいごによ道によりをゆける者は、ロビーベルクどによよみ。されど、ロビーベルクどによよ助け、すくうためによ、もうひとつによそによ道を進めるによは、かれによ仲間によ、あにやた方だけだということですよ。」

これをきいて、マリエル、リズ、そしてライアンの三人は、急に目の前がぱあつ！と光りかがやいたかのような思いになりました。とくにライアンは、なおさらだったのです。

「ロビーを助ける道！ それこそぼくに、うってつけじゃない！」
マリエルもリズも、きょうみしんしんでラグリーンのしさいさまたちにくい下がりました。

「どんな道です！」
「早く、教えてくれ！」

そして仲間たちは、しさいさまたちからおどろくべきことをきいたのです。

「そんなものが……！ ほんとうにあるとは！」マリエルが目まをくしていいました。

「へええ、おもしろい。そいつを見つければいいんだな？」リズが、やったろうじやんとといった感じで、「ふふっ。」と笑みを浮かべながらつぶやきました。

そしてライアンは……？

「いたたた……！ ちよ、ちよつと、待つて待つて！ にやー！ 痛いー！」

見ると、うしろの方でライアンが、ラグリーンのしさいさまのひとりに馬なりになって、またがっているところだったのです！ ひめいを上げていたのは、そのしさいさまでした！（な、なんてばちあたりな……）

「早く早く！ 早く飛んでよ！ さつさと、それを見つけないといけないんだから！」ライアンがそういつて、またがっているしさいさまのことをせつつきました。しさいさまは地面をばんぱんたたきながら、ひめいのようにいいました。

「まだ、飛べにやいんだつてば！ ギルフィンによ力をつばさにこ

めにやいと、重くて人は、はこべにやいんだから！ やーめーてー！」
マリエルもリズムも、やれやれといった感じで頭をかかえます。まわりのラグリーンたちも、リーリングルも、口をぼかんとあけてなにもいうことができませんでした。

「いぎ、しゅっぱっつー！」

ライアンが大声で、出発のあいずです（やっぱり出発のあいずはライアンでした）。

「セイレン大橋まで、大人一まいと、子ども二まい！ ラグリーンとつきゆうびんでーす！」

「子ども二まいってのは、ぼくもはいつてるんじゃないだろうな？」
（どこかできいたやりとりをしてから）こうして仲間たちは、ラグリーンたちの背に乗って空高く出発しました（三人のラグリーンたちの背中に、それぞれひとりずつ乗っていきました）。ロビーの旅立ちのあと、とつぜんに新たな旅の道のに出発することとなった、かれら。大いなるギルフィンの力持つラグリーンたちのつばさにはこぼれて、かれらはいつたい、どこへむかうというのでしょうか？ 話しのようすでは、なにかすごいものを見つけにいくみたいですが、それはいつたいなんなのでしょう？ そして、セイレン大橋ですって？
旅のはじめにワットのおそろしい黒騎士たちにおそわれてしまった、あの美しいちようこくの橋。その橋にこれから、いつたいどんなようじがあるというのでしょうか？

たくさんのなぞがまだまだ残されたままですが、それはどうぞこの物語のさいごのさいごのところまで、取っておいてください。きつとあなたは、そこで、どえらいものをもくげきすることになりますから……。

高く高く、あの空のむこうへ……。

こがね色のつばさがロビーを乗せて、このアークランドの空の上をかけぬけていきました。あらわれては消えてゆく、丘や森や、小川の流れ……。空気が、ごうごうという大きな音の流れとなって、すぎ

去っていきます。それは自分がまるで、風そのものになったかのように
でした（ギルフィンたちが風の力をあやつるといわれているりゆう
も、よくわかるような気がします）。空を切りさき、前へ前へ。かれら
は文字通り、このアーケランドの風となつて、おどろくべきほどの
やさで、この空の上をすべるように進んでいったのです（ところで、ロ
ビーはふしぎと、この空の旅にきょうふを感じませんでした。ふつう
だったら、こんなに高い空の上をこんなはやさでかけぬけていつた
ら、「ぎゃー！」つてなつてしまはずでしたのに。むかしに乗ったこ
とがあるから、なにかとくべつな力でもはたらいていたのでしょうか
？ これは著者のわたしにもロビー自身にも、説明のできないこと
だったのです）。

つばさのはばたきは、さらに強く。雲のそばにまでのぼつてきてい
ました。もくてきの地までは、できるだけ高く、雲にまぎれていつた
方がよかったです。よけいな敵の目から、ロビーのことを守るため
でした。

この空の旅でいちばんこわかったのは、あのデイルバグたちでし
た。デイルバグに乗った黒騎士たちが、どこを飛びまわっているもの
か？ わかったものではありませんでしたから。ですがこのとき、そ
の心配はもうなかつたのです。なぜならデイルバグの黒騎士たちは
みんな、さいごの大けつせんへとむけて、ベーカーランドへと出かけ
ていたからでした。

それはほんとうならば、ぜんぜんよろこべるようなことではありま
せん。ですが今、ここでかれらに出会つてしまうことは、いちばんさ
げなければならぬことでしたから、その点では、つごうがよかつた
といえるでしょう。しかし用心に越したことはありません。こがね
色のつばさは人目を遠ざけ、なるべく目立たないように、それでいて
いちばんの近道を、かくじつにつき進んでいきました（ただ飛んでい
くというだけではなかつたのです。ラフェルドロードはつねに安全
かつ早くいける道をえらびながら、飛んでいました。これは空の旅の
ことを知りつくしているラフェルドロードだからこそ、できること
だったのです）。

景色はつぎからつぎへと、あつというまに変わっていきます。だれも知らない、魔法のエネルギーにみちたひみつのまちのそばを通りすぎていったかと思えば、いつのじだいのものなのか？ 銀色に光りかがやくなぞめいた塔が林のように立ちならんでいる、しんぴの丘の上を飛ぶこともありました。またあるときなどは、ロビーも思わずびつくりして、口をあめぐり！ とほうもなく大きなまらい岩が空に浮かんでいて、その岩の表めんは大むかしの都市が、張りつくようにきずかれていたのです！（ラフェルドラードにきいても、あんなのは見たこともないということでした。そしてそのなぞの浮かぶ都市は、ゆつくりと空をただよっていて、つぎはどこにあらわれるのか？ わからなかったのです。ロビーが見たのは、まったくのぐうぜんでした。うん、おいしい！ 場所さえわかれば、ぜひたんけんしに乗り出してみたいものです。）

まったくこのアークランドは、まだまだなぞだらけの場所ばかりでした。ロビーは空の上から見て、はじめてそれらのことを知ったのです。かなしみの森のとしよかんのどの本にだって、それらのふしぎなもののことについては、ただのひとことも書いてありませんでしたから。

世界はまだまだ広いのです（わかっているだけでも、西の巨大な大陸ガランタが、どーん！ とそびえているのですから。この世界のすべてをたんけんしつくせる冒険家なんて、きつとどこにもいないことでしょう。赤毛のほうろうのルルム、シェイデー・リルリアンにだってむりなことです）。ロビーを乗せたこがね色のつばさは、そんな広い広いふしぎの世界の上を、ただひとつのもくてき地へとむかつて飛んでいきました。

今ほどのあたりでしょうか？ アップルキントを出発してから、もう一時間か、あるいは二時間ほどもたっているように感じられました。ロビーはなんだか、雲の切れまからおひさまのすがたを見ました。おひさまはまだまだ高く、これからさらにのぼっていつております。ということは、まだおひる前。イーフリープですごした時間がそ

との世界ではまったく流れていなかったからこそ、ロビーたちはこんなにも早く、この場所を通りすぎる事ができていました。

それでもロビーには、流れる時間がとてもどこかしく思えました。もう黒の軍勢は、エリル・シャンディーンへのこうげきをはじめているのかもしれない。ベーカーランドの人たち……。ベルグエルムさん、フェリアルさん、ライラさん……。そして南への道を進んでいた、ハミールさん、キエリフさん、レシリアさん、ルースアンさん……。かれらは今、どこでどのようなにすごしているのでしょうか？

この場所にいるロビーには、それを知るすべはありません。ですがかれらは、ゆるぎなき力を持ったえいゆうたち。ロビーがもつともしんらいしている仲間たちなのです。かれらのことを信じよう。ぼくは、ぼくのできることを、せいっぱいやるだけだ。ロビーはこのギルフィンのこがね色のつばさの上で、ロープをにぎりしめるその手に力をこめました（ラフェルドラードのからだには、その背に乗る者が落っこちないようにするためのそうびがつけられていました。ロビーは自分のからだをそこにむすびつけ、そしてそこにつけられているたづなのようなロープを、しっかりとにぎっていたのです）。

風はますますごうごうと、そのいきおいをまして流れていききました。

こがね色に光りかがやく、しんぴ的な植物たち……。その場所に立つ木々は、まるでおうごんでできているかのような、ふしぎなこがね色のかがやきを放っていました。のびるえだも、葉もつるも、すべてがあわくほんのりとした、美しいかがやきにみたされていたのです。左右にならんだ木々は、まるでそのさきの世界へとつながる、門のようでした。その門のあいだには、古い古い道がいつぽん通っております（この道はこのアークランドが生まれるいぜんから、この場所にあります！ 気の遠くなるような大むかしです）。そして道の上には、やがて木々のえだがあつくおおい重なつていき、道はそのまま、こがね色に光りかがやくおうごんのトンネルへと変わっていききました。そのこがね色のトンネルの中を、ひとり歩いてゆく者がいました。

すらりとほそく、それでいてたくましいからだつき。白と青の美しい衣服。そしてなによりいちばんいんしょう的だったのは、そのさらさらと美しい、青いかみでした。

この青がみを見れば、みなさんにはかれがだれだか？　すぐにわかると思えます。そう、かれはリュインのしきかんにしてリズのお兄さん、失われしシルフィア種族の青年、リストール・グラントでした。リストールは今、シープロンドのくにのそのまた上の山、せいなるタドゥーリ連山のそのひみつの地の中へと、分けいつているところだったのです。

かつてアークランドをはんえいへとみちびいてくれた、植物の種族ネクタリア。それから百年あまり。かれらも花の騎士団も、このアークランドからすがたを消していききました。かれらが消えていった土地、それこそが、このタドゥーリ連山のせいなる土地の中だったのです。そしてこのこがね色に光りかがやく木々の門のあるところを知っている者は、今やこのアークランドには、ただひとりしかいませんでした。それが、リストールだったのです。

リストールは花の騎士団を去るとき、この門の場所、そしてそのひらき方を、ぜつたいに口にしないというやくそくをしていました。もししやべれば、ネクタリアたちはこの門をえいえんにとぎし、そしてにどと、この世界へはもどつてこないことでしょう。リストールはまさに、アークランドとネクタリアたちのことをつなぐ、きぼうのかけ橋そのものだったのです。

だれも知る者のない大むかしのひみつの道を、ひとりゆくリストール。その胸に、かたいかたいこころぎしをひめて、かれは進んでいききました。

今のかれには、いつもとちがうところがひとつありました。それは……、なんにも持っていないということ。リュインのしきかんであるかれは、剣のうでまえもたいしたものでした。いもうとのリズとはなれども戦って（れんしゅうとしてです。けんかじゃありませんよ）、おたがいにいっぽもひけを取らないほどのよきライバルになっていたのです（これは兄ともうとだからこそといったところでした。ふつ

うだったら、剣じゆつしなんやくをつとめるほどのうでまえの리즈には、いかにしきかんであるリストールといえども、よいにはたちうちできるものではありません。だって리즈は、あのライラとも肩をならべるほどの、剣のたつじんでしたから。ほんとうの家族であればこそ、リストールは리즈の剣のたちすじを読んで、ごかくに戦うことができます。まありズは今、音楽の道にうつってしまいたけど……。ですがかれの腰には今、剣はさしてありませんでした。かばんもポーチも、なにも身につけておりません。リストールはほんとうに、まったくの手ぶらのままで、ここにやってきたのです。

しかしいくらせいなる地といっても、思いもよらない危険がとつぜんふつてこないともかぎりません。武器のひとつくらいは、持つていくのがふつうでした。ですが……。

リストールはこのほうもんがとてとくべつなものであるということ、よくりかいしていたのです。失われしネクタリアたち。かれらをこの世界にひきもどすことができるかどうか？ それはひとえに、自分のこの両の肩にかかっていたから。

リストールはその強いかくごをあらわすために、武器もなにも持たずにここへやってきました。それはネクタリアたちへの、思いのあらわれからのことでもありました。かれらと会うのに、武器や道具はなにもいらなかったのです。必要なのは、自身のその強い心のみ。かれらにはただひたすらに心をひらき、そして心をひらいてもらうほか、ありませんでしたから(ちなみに、リストールも리즈と同じように、シルフィアの力によって自分の精霊エネルギーを剣のかたちに変えて、敵をこうげきするというようなこともできましたが、リストールはそんなことをふだんからおこなっているというわけではありませんでした、できればそんな力は使いたくなくとも思っていたのです。リストールは自分が持つ剣は、あくまでも、ベーカーランドのほかの仲間たちと同じく、ふつうの剣であるべきだと思っていました。ですからリストールがこの地に剣もなにも持たずにやってきたのは、やはりネクタリアたちに対しての、しようじきな心のあらわれにほかならなかったのです)。

そのとき……。

ひゅんっ！ ぼぼんっ！

とつぜん、リストールの足もとの地面になにかが飛んできて、それがみどり色のがやく光の波となって、ばくはつしました！（ば、ばくだん？）

ですがリストールのからだには、なんのけがありませんでした。見ると、リストールの立っているそのほんのちよつとさきの地面に、いっぼんの矢がささっていたのです（その矢の頭にはこがね色の羽が取りつけられていて、それがほわほわと光っていました）。そしてリストールの、その足もとは……。

植物のつるです！ 飛んできた矢からはじけた光がリストールの足にふりそそぎ、それがほんものの植物のつるとなって、リストールの足にからみついています！ そしてさらにおどろくべきことが。

リストールの足にからみついたその植物のつるは、ぐんぐんとのびていって、そのままリストールのからだをすつかりしぼりつけてしまったのです！ これではまったく、身動きが取れません。いったいこれは……？

「ふたたびきみに会うことになろうとは、思いもしませんでしたよ。」

とつぜん、頭の上から声がひびきました！（それはふわふわとした、とらえどころのない声でした。）リストールがしせんを上にもかけてみると……、こがね色のがやくえだの上で、ほそくて美しい、人間のようすがたをした男の人が四人、こちらのことを見下ろしていたのです。しかもそのうちの三人は、こちらへとむけて弓をかまえたままでした！（さきほどの矢は、かれらが放ったものでした。）

かれらはみな、美しいデザインのみどり色のよろいを着ていました。ですがよろいといっても、そんなにごちごちとしたものではありません。

ません。その表めんはとてもなめらかで、たくさん葉っぱや花があらわれていました。そしてこのよろいは手足を動かすのにさまざまになることもなく、そのうえとてもかるいのです（じっさいこのよろいには、ほんものの木や葉っぱがざいりようとして使われています。でもおどろくほどがんじようで、騎士たちが着こむぶあついいよと同じくらい、かたいのです）。

そしてかれらはみな、これまた美しいデザインの弓を持っています。こがね色の羽のついた矢のはいったケースを、背中につけておられます。腰には小さな剣も見えましたが、これはあんまり使っていないようでした（弓を使うことばかりのようでしたから）。

かれらのかっこうからわかること。つまりかれらは、この土地のことを守る兵士たちでした。しかし兵士といっても、よろいかぶどにがっちり身をかためた兵士たちではなく、このように、さつそうとした身のこなしで森の中や木々の上をゆきかかって、えものをねらう。かれらは、いっぴんにはレンジャーとよばれている、森のかりゆうどたちだったのです。その中のひとりが今、木のえだの上から、リストールにむかって声をかけたというわけでした。

「ひさしぶりだね、クライユルト。変わりがなくてうれしいよ。」

兵士の言葉にこたえて、リストールがとてもおちついたようすです。ういいました。からだ中を植物のつるでしばられているというのに、ぜんぜん気にもしていないようすです。それにリストールは、かれらのことをよく知っているようでした。ということは……？

「なにをしに、もどってきたんです？　もういちど、花の騎士団にもどりたいんですか？　ざんねんながら、それはできない。きみも知っているはずだ。騎士団は、いちどぬけた者を、ふたたびむかえ入れることはしない。」

クライユルトとよばれたその人は、そういって、リストールのことをじっと見つめました（こんどはふつうの声でした。さきほどはまだ、かれらのすがたはいわば精霊のようなそんざいだだったのであって、はつきりとした言葉でしゃべれなかったのです。ですからふわふわとした、とらえどころのない声でした）。見た目のねんれいは、リス

ツールと同じくらい。みどり色がかったこがね色のかみ、深いエメラルド色のひとみ。そしてみなさんのごそうごそうの通り、このクライユルトという人物をふくむかれら四人の者たちは、みなネクターア種族の者たちだったのです！

かれらのすがたかたちは、ふつうの人間とあんまり変わりませんでした（みなリストールと同じくらいのとしの青年たちでした）。ですがひとつだけ、かれらがネクターアだとすぐにわかることがありました。かれらの頭の横には、いちりんか、あるいはいくつかの、美しい花がさいっていたのです！ これは人それぞれでちがう花がさいっていて、クライユルトの場合では、大きな白いゆりの花がいちりんさいっていました（ちなみに、この花は取れても、しばらくするとまたさくそうです。ですけどむりに取ろうとすると、わきばらをくすぐられていくのかのように、とてもくすぐったいのだということでした。ネクターアでないとはよくわかりませんが……）。

クライユルトはとても美しい人でしたが、その目はつめたく、リストールのことを見すえたままでした。

「わかっている。わたしがきたのは、そのことではないよ。」リストールがおちついたようすのまま、クライユルトにいいました（ほんとうなら手のひらをクライユルトにむけてなだめたいところでしたが、しばらくしているのでできませんでした）。

「クライユルト。わたしはアークランドに残って、いろいろなものを見たよ。」リストールがつづけます。

「人々はたしかに、しぜんにさからっているかもしれない。だが、かれらには、われわれが知らない、いいところだってたくさんある。アークランドには、きぼうがあるんだ。そのアークランドが今、めつぼうの危機にある。わたしは、アークランドを助けたい。わたしはそのために、ここへやってきた。」

クライユルトとかれの三人の仲間たちは、みなリストールのことをじっと見つめていました。それはまるで、リストールの心の中を読み取ろうとしているかのようでした。かれらはこのかつての仲間に対して、まだうたがいの心をすてきつてはいないようでした。

「きみたちの力を、ぜひ貸してほしい。もういちど、アークランドのために力を貸してほしいんだ。わたしを、セハリアさまのところへ連れて行ってほしい。かならず、セハリアさまの心を動かしてみせる。」
リストールがかたいけついのもと、かつての仲間たちにいいました。それでもクライユルトたちはまだ、リストールに対してのけいかいをとこうとはしません。

ですが……。

やがてかれらも、その表じょうをゆるめたのです。リストールの心には、一点のくもりもありませんでしたから。

「われらには、きみをむかえいれるぎむはない。」クライユルトが、つめたくいい放ちました。

「われらはきみを、すぐに追いかえさなければならぬ。だが、きみのその心にこたえないのは、われらネクタリアの、はじだ。ネクタリアはなによりも、めいよを重んじる。そしてきみのその心にも、われらは敬意をはらう。」

クライユルトはそのまま、しばらくのあいだだまっています。そしてそれからようやくやくのことで、こうつげたのです。

「リストール、かつての友よ。きみに、なにができるのか？ やつてみるといい。きみの力を、ためしてみるといい。セハリアさまのところへ、きみをつれていこう。そこからさきは、きみだけの力で、道を切りひらくのだ。われらはだれも、きみを助けることはできない。」

ひみつの場所の、そのいちばんひみつの場所へ……。

ここはタドウーリ連山のおくの、そのまたおく。シープロンドの者たちすらだれも知らない、しんぴの場所でした。立ちならぶ木々はおうごんのかがやきを放ち、草のいっぽんいっぽんにいたるまでが、すいしょうのかがやきを放っております。さきほこる花々は、まさにこの世にふたつとない宝石のよう。これらのものがしぜんのまま、あるがままに、この大むかしの広場の地面をうめつくしていました。

銀色にかがやく小さなとんぼのような生きものたちが、すすいと空中を飛びかっついていきます。そしてそのあとにつづいて……。

今この広場につづくいっぽんの古い石だたみの道を、なんんかの人たちがこちらへとむかつて歩いてきました。やってきた者たちは、五人。そのうちの四人は、みな同じようなみどり色のよろいを着ております。手には長くて美しい、弓を持っていました。そしてその四人の者たちが、まん中にいる五人目の人物のことを、取りかこんでいたのです。

いうまでもなく、五人目の人物、それはリストール・グラントでした。そしてかれのことをかこんでいるのは、かつてのリストールの友、クライユルトをはじめとするネクタリアの者たちだったのです（ところで、ネクタリアであるかれらは、見た目はみな人間の青年のようでしたが、ほんとうのねんれいはまったくわかりませんでした。ネクタリアは、ぜんぜんとしを取らないのです。そしてシルフィア種族のリストールも、ほんとうのねんれいはだれにもわかりませんでした。たしか花の騎士団がアークランドを去っていったのは、百年もむかしのことだそうですが……。つてことは、リストールもすくなくとも、百さい以上ということに……。うくん、あんまりそのことについては、考えないようにしましょう。あと、リズムもそのときリストールといっしょにいたわけですから、百さい以上ということに……)。

広場にはたくさんの石のちようこくが、あちこちどころがつていました。それらはみな、こけむして植物のつるがまきつき、小さなたくさんの花々がさいっております。よく見るとそれらのちようこくは、やりを持った兵士たちだったり、本を広げた学者のすがただったり。そしてそれらのちようこくは、すべて、ふしぎなかがやき方をするみどり色がかつた石でつくられていました。この石は、どこかで見たことがあります。そう、セイレン大橋やその橋の上の石のちようこくと、同じ石のようでした。この広場にあるちようこくも、あの橋の上のちようこくをつくった者たちと、同じ者たちがつくったものなのではないか？ ですがそれも、今となってはしらべようもありませんでした。これらのちようこくは、もうなん千年という、遠い遠いむかしにつくられたものでしたから。

その広場のそのいちばんおく、そこには同じく気の遠くなるような

大むかしにつくられた、ひとつのさいだんのあとがありました。もうすっかり植物がしげり、そのすきまからわずかに、みどり色の石ぐみが見えているばかりです。そしてそのさいだんのわきに、なんんかのネクタリアの者たちが立っていて、こちらのことをじつと見つめていました（頭の横に花がさいていましたから、すぐにネクタリアだとわかりました）。

その中のひとり、その人はほかのだれよりもまばゆい、光を放っていました（じつさいに光っているわけではありません。光りかやいているかのようすばらしい人物ということです）。もう見ただけで、この人がネクタリアの中でもとてとくべつなそんざいであるのだということが、すぐにわかったのです。その人は、女の人でした。背が高く、すらりとしていて、長く美しいおうごんのかみ。その大きなすいこまれるようなこはく色のひとみは、静かな夕暮れのみずうみの、水めんのよう。白地にもも色で植物のもようがデザインされた、みごとなよろいを着ていて、腰には同じく、白ともも色でデザインされたさやにおさまった、大きな剣をさしております。そして頭の横には、ネクタリアであることをあらわす花。この人の場合は白ともも色のまじった、美しいいらんの花がさいていました（それも、たくさん）。

リストールたちの一行がこの広場にやってくると、まわりからどよめきの声が上がりました。見ると、さきほどまでは気がつきませんでした。この広場のまわりをいちめん取りかこむように、たくさんネクタリアの者たちが集まっていたのです（かれらは自分たちのけいを消す、たつじんたちでした。とつぜんあらわれたり消えたりするのは、かれらのとくいわざだったのです。まるでモーグだったころのロザムンディアの、ゆうれいさんたちみたいに……）。かれらはリストールのことを見て、とてもおどろきました。このせいなるネクタリアの地にそとからの者がやってくるなんて、今までいちどたりとて、なかったことでしたから。

そんな中、先頭をゆくクライユルトが白いよろいの女の人に近づき、うやうやしくおじぎをしていました。

「もと、花の騎士、リステロント・グランテルドにございます。セハ

リアさまに、かきゅうの用あつて、まいつたと申しております。」(かきゅうの用というのは、ひじょうにさしせまつた、だいじな急ぎのようじのことをいいます。)

クライユルトがそういうと、リストールのことをかこんでいた兵士たちが、左右にすつとしりぞきました。

兵士たちの中からすがたをあらわした、リストール(ちなみに、かれらのもとはリストールはほんとうの名まえ、リステロントという名まえを名のっていました。リストールという名は、かれがペーカーランドにうつってから名のりはじめた名まえだったのです。でもややこしくなってしまうので、ここでもそのまま、リストールという名でよばせてもらいますね)。リストールはセハリアというこのネクタリアたちの長にむかつて、深々と頭を下げました。そう、クライユルトのたいどころもわかる通り、セハリアはかれらネクタリアたちのすべてをおさめる、いだいなる花の騎士団の長だったのです！) とうりで、ただごとならないふんいきを持っているはずでした(ネクタリアたちは、みずからのくにを持ちません。そのかわりに、かれらは花の騎士団をけつせいして、かれら種族たちのことをまとめ上げていました。セハリアはその花の騎士団の長。つまりそれはネクタリアの中でも、いちばんえらいということなのです。くの中でいえば王さまか女王さまと同じくらい、えらいのです。おまけに、このはくりよくたつぷりのそんざい感！)。クライユルトやリストールがちこまつてしまうのも、わかりますよね。ちよつとライラに、にてるかも)。

セハリアはリストールのことを、じつと見つめていました。こうごうしいまでの美しさ、まばゆさ。このセハリアという人に見つめられたのなら、どんな人物だって、そのみりよくのとりこになつてしまうことでしょう(すいません。わたしもそのうちのひとりです)。じつさいセハリアの目にはふしぎな力があつて、見つめた者のその心のおく底を、読み取ることができました。ですからかのじよの前では、どんなかくしごともゆるされないので。それはリストールも、じゅうぶんにわかつていたことでした(もとよりリストールは、うそをいう

つもりなどは、みじんもありませんでした(が)。

「クライユルト。」

セハリアがとつぜん、クライユルトのことをよびました。その声はいげんにみちていましたが、ほかのネクタリアの者たちと同じく、つめたい声でした。

「そなたのつとめは、なんであったか？　いかなる者も、その世界より、このしんせいなるネクタリアの地に、ふみいれさせてはならぬ。知らぬはずではあるまいな？」

これをきいて、クライユルトは「ははっ。」ときようしゆくして、身をちぢこませてしまいます。どうやらこのセハリアという人は、いげんたつぷりなのに加えて、か・な・り、こわい人のようですね(やっぱりライラににていますね)。

「そ、それはじゆうぶんに、しようちしております。ですが……」

「よい。」クライユルトがさいごまでいうまでもなく、セハリアが口をはさみました。「そなたは、その者と仲がよかったようだな。ともになんども戦い、ネクタリアの地を守ったあいだから。気持ちがわからぬでもない。」

セハリアの言葉に、クライユルトはもういちど、「ははっ。」とちぢこまりました。

セハリアのいう通り、クライユルトはかつてリストールのいちばんの友として、たくさんの冒険をともにしてきたのです。だからこそクライユルトは、ネクタリアのおきてを破ってまで、リストールのことをこの地にまねきいれました。そっけないつめたいたいどを取っていたクライユルトでしたが、その心の中では、かつての友にふたたび会えたことを、とてもうれしく思っていたのです。そしてリストールも、そのことはよくわかっていました(ほんとうの友だちというものは、口に出さずとも、心で通じあえるものなのです)。

「だが、おきてはおきて。そのほうには、追って、ばつを与える。心するがよい。」セハリアの言葉に、クライユルトは深々とおじぎをして、わきに下がっていききました。

そのあいだも、リストールはずっと身動きもしないまま、セハリアに頭を下げつづけていました。ここではむやみに口をひらいてはいけないということを、かれはよく知っていたのです。セハリアはその心を見通す目で、リストールのことをじつと見つめつづけていました。

あたりには、なんともいえないぴりぴりとしたきんちようが走っておりま。

そしてようやく、セハリアが口をひらきました。

「頭を上げよ、リステロント。」

セハリアがそういうと、リストールは、すつと頭を上げ、しせいを正しました。そのひとみは、じつとセハリアの目を見つめております。どんなかくしごともない。わたしのすべての気持ちをくみ取ってほしい。リストールのかたいけついのあらわれでした。

「騎士のくらいを投げうってまで、えらんだ道。そなたはそこで、なにを見、なにを得たのか？ 今こそ、そのしんかをどうべきとき。申してみよ。」

セハリアのするどいまなぎしが、つきささらんまでにリストールにむけられました。ネクタリアのすべて、花の騎士団のすべてをつかさどる、セハリア。リストールがむきあっているのは、セハリアというひとりの人物だけではありません。今まさにリストールは、ネクタリアというひとつの種族そのもの、相手にしていたのです。それはあまりにも大きく、そしてあまりにも力強い相手でした。

リストールの思いが、ためされるときです。

「わたしは、」リストールが、静かに口をひらきました。

「わたしは、アークランドにきぼうを見ました。かの地には、みらいがあるのです。かがやける、みらいが。そのみらいが今、失われようとしています。」

リストールの言葉に、まわりのネクタリアたちはひそひそと、となりの者たちとなにかを話しはじめました。しかしリストールは変わることなく、力をこめて話をつづけます。

「アークランドでは、多くの者たちが、まちがった道を進んでいきます。しぜんをないがしろにし、おのれのよくぼうのために動いております。ですが同じく、多くの者たちが、まちがいを正し、みらいを切りひらこうともしているのです。みらいは、人が切りひらくもの。きまったみらいなどというものはありません。

「かれらを見かぎり、見すてることは、たやすい。ですがそれは、あまりにも早まった考えです。かれらから、みらいを切りひらく、そのおこないをうばってはなりません。それは、すべての種族の者たちとて、同じこと。すべての種族の者たちが、みらいを切りひらく、ほしいけんりを持っていくはずですよ。

「そしてそれぞれの種族は、そのために、力を貸しあっていくべきです。ひとつの種族のみがすぐれていたり、おとつていたりするなどということは、ありません。われらはみな、びようどうにこの世界に暮らす、みらいを持つ、ひとつの仲間であるはずなのですから。」

リストールの、たましいのこもった言葉たち。いつのまにか、ひそひそと話しをしていた者たちも口をとぎし、リストールの言葉にすっかりその心をかたむけていました。

リストールは、そしてもういちどセハリアに、いえ、すべてのネクタリアの者たちに頭を下げ、地面にひざまずいていいました。

「どうか、かれらがみらいを切りひらく、そのための力をお貸し与えください。かれらは今、そこからのおそろしい力によって、めつぼうの危機にさらされております。それは、かれらの運命をはずれているものです。かれらには、どうすることもできない力です。かれらにもういちど、みらいをお与えください。それができるのは、あなた方において、ほかにないのです。どうか、お願いします。」

リストールは頭を下げたまま、ただただお願いしました。リストールにできることは、もうそれだけでした。いうべきことは、みんないったのです。すべての心を、出しきったのです。これでだめなら、

もうリストールには、どうすることもできませんでした。

どれほどの時間がたったのでしょうか？

長い長いねん月を生きてきたリストールにとっても、それは気が遠くなるほどのときに感じられました。自分のまわりには、もうだれもいないかのように感じられました。このまま頭を上げたら、自分のまわりには、やみばかりが広がっているのではないか？そんなふうに見えるか？感じられたのです。

アークランドを見かぎり、去っていったネクタリアたち。かれらはリストールの心に、どうこたえるのでしょうか？ リストールの言葉は、かれらの心にどうひびいたのでしょうか？

すべては、ネクタリアのたみのすべてをまとめ上げる、セハリアの心ひとつでした。

「そなたは、」

セハリアの声がひびきました。もうネクタリアたちはみんな、光のむこうへ去って行ってしまったのではないか？ そんな思いすら生まれていた中で、セハリアの声は、まさにきぼうの光でした。

しかし……。

「ずいぶんと、口がたつしやになったものだな。それも、アークランドで得たものか？」

その言葉をきいたリストールは、思わず顔を上げてしまいました。セハリアが自分のことを、じつと見つめております。その表じようは、変わらずつめたいままでした。

だめだった……。リストールはそう思いました。セハリアさまを怒らせてしまった。ちようしに乗って、しゃべりすぎてしまった……。リストールはそう思いました。

「そなたのいったことは、なにもまちがってはおらぬ。そしてそなたの心は、すべてわたしの心にとどいた。それはみとめてやろう。」セハリアが、表じようを変えることなく、感じようをこめることもなく、つづけました。

「そなたの心には、一点のくもりもない。すべて、まごこのことを申しておる。それもみとめよう。」

「だが、」セハリアはそこで、急にくるりとうしろにむきなおりました。その目のさきは、遠くみらいを見すえているかのようでした。

「そなたの申したこと、それはすべて、そなたひとりがそう感じておるだけだ。きぼうだと？　すべての者に、ひとしいけんりだと？　知ったふうなことを。ひとつの種の運命など、だれにもきめられぬ。ほろびの運命がさしせまっているのなら、あまんじて、それを受けられるのみ。だれに、その運命を変えることができようか？　そんなものは、ただのげんそうにすぎぬ。夢まぼろしの、はかなききたいにすぎぬわ。」

遠い遠いむかしから、この世界に生きてきたセハリア。かのじよはわたしたちがそうぞうすることもできないくらいに、たくさんのことを見てきたのです。たくさん種族の者たちが、かのじよと出会い、そしてわかれていきました。かのじよにもどうすることもできない、ほろびの運命の中に消えていった者たちのことも、セハリアは数えきれないほど見てきたのです。

セハリアの言葉は、かるがるしいものではありませんでした。セハリアはけっして、ほかの者たちのことを、つめたく見放したいわけではなかったのです。ですが、ただすくいたいという気持ちだけで手をさしのべるだけでは、どうにもならないこともあるのだということを、セハリアはだれよりもよく知っていました。めつぼうの危機にある世界。その世界にそこの世界の者たちが、あんに手をさしのべてよいものか？　おのれのむりよくさからくるぜつぼうを、ふたたび胸の中にあふれかえらせることになるだけではないのか？　セハリアは今ふたたび、そのまよいの中に立たされていたのです。それはリストールの心のその大きさを、はるかにこえている思いでした。

「なにが正しく、なにがまちがっているのか？　それはおそらく、だれにもわかるまい。」セハリアが、だれにいうともなくそういいました。もしかしたら、自分の胸の中に、もういちどといかけていたのかもしれない。セハリアは古い古い石だたみの上を、こつこつと歩い

ていきました。

「リステロントよ、そなたの申したことは、くうきよなげんそうにすぎぬ。だが、ときにげんそうとは、げんじつの世界以上にしんじつを語るものだ。」セハリアはそういって、その両のひとみをとじました。そしてセハリアは、そのまま静かに、こういったのです。

「そなたのげんそうに、乗ってみるべきなのか……」

これをきいて、リストールは思わず身を起こしていいました。

「そ、それでは……!」

そして、リストールはそこで、セハリアからのさいごの言葉をさずかったのです。それはリストールがはじめにのぞんでいたものとは、ちがうものでした。ですがその言葉こそが、ほろびのときをむかえようとしているアークランドのことをすくう、まさしくきぼうの光となったのです。

セハリアがふたたび、そのひとみをひらきました。そのすがたはさらにこうごうしく、さらなるしんぴの光にみちあふれているかのように感じられました。

「かんちがいをするな。わたしは、そなたの口車に乗せられたのではない。ただ、アークランドというひとつの世界のかちを、この目でみずから、もういちど見さだめたいと思っただけだ。すべてのネクタリアたちをすべる、花の騎士団騎士長、セハリア・シリルロウの、この両の目でな。」

セハリアはそういって、ほんのわずかですが、口もとをゆるめました(つまり笑ったということです。セハリアが笑うなんてことはめつたにあることではありませんでしたから、ネクタリアの者たちはみな、とてもおどろいたものでした)。

や、やった……! ついにやったのです!

セハリアの心は、ネクタリアの心。リストールはついに、ネクタリアの協力を得たのです!

セハリアがその力強き右うでをさつと横にふり、いげんにみちあふれた声で、配下のネクタリアの者たちにめいじました。

「ただちに、したくをせよ！ われらはこれより、アークランドにしんげきする！ リステロント、部隊のしきは、そなたにまかせてよいのであろうな？ わたしをがっかりさせるでないぞ。」

リストールはただただかんしゃの心をもって、このいだいなるネクタリアの長に、敬意の気持ちをあらわすばかりでした。

「ありがとうございます！ ……ありがとうございます……」

ゆうきゆうのえいちをほこる、花の騎士団。ネクタリアのそのたのもしきせいえいの者たちが、今百年のさいげつを越えて、ふたたびアークランドの地へおもむこうとしています。かれらの力は、これからむかえるさいごの運命のうずの中に、どのようにひびき渡り、そしてまじりあつていくのでしょうか？

それぞれの道が今、ひとつにあわさろうとしています。

26、なまり色の空の下

暗くふきつな雲が、頭上にあつくたれこめていました。ほんらいならばおひさまの光がさんさんとふりそそぐ、まひるも近い時間だというのに、あたりはまるで、夜のとほりがおりたかのように、うす暗かつたのです。ときおり、かちやかちやと、剣やよろいの立てる小さな音がきこえてきました。ですがそれがいは、みな声を立てる者もなく、すべてがしーんと静まりかえっていたのです。

その静けさの中、ふいに地面のむこうから、なにかのひびく音がきこえてきました。それはもうなんべんもきいて、おなじみになってしまった音。地面を小さくゆらしてかける、大きな生きものの音。そう、それは、馬のかける音でした。広い平原のかなたから今、二頭の騎馬たちと、そしてそれぞれの背にまたがった、ふたりの人物がやってきたのです。

近くまでやってくる、かれらが白いよろいかぶとに身をつつんだ、兵士たちであるということがわかりました。白いきぬのマントをはおっていて、そしてそのマントには、われらがきぼうのしるしがぬいこまれていたのです。それはベーカーランドの白きもんしよう。そう、かれらはわれらがベーカーランドの、ゆうかんなる兵士たちでした。

兵士たちは騎馬たちの背からおり立つと、急いでその場にひざまずき、手みじかにほうこくを伝えました。

「敵軍、すでにベゼロインへのじん、ととのえ終えております！ もはや進軍は、時間の問題かと！」

兵士たちのそのさきには、ほうこくを受けたかれらのしきかんたちが立っていました。エメラルド色のもようのはいった白いよろいに身をつつんだ、美しいこがね色のかみの少女。そしてベーカーランドのきぼうのもんしようのはいった騎士のくさりかたびらに身をつつんだ、はい色のかみの者たち。そうです、かれらはわれらがえいゆうたち。剣のたつじん、ライラ・アシユロイ。しんのリーダーたるベルグエルム・メルサル。そのベルグエルムのたのもしき仲間でありい

ばんの友でもある、フェリアル・ムーブランド。かれら三人のしきか
んたちでした（ベルグエルム、ライラ、そしてフェリアルファンのみ
なさん、お待たせいたしました。さいきん、かれらの出番がすくない
？ このあとしつかり、かつやくしてもらいますから）。

「そうか。」

ライラがあなたを見すえながら、きびしい目をしていました。そ
のさきには、かすみのかかった大地のむこうに、かつての自由のとり
で、ベゼロインとりでがあるのです（そのとりでは今や敵のものとな
り、そして黒の軍勢は今、そのとりでにじんどつているところだつた
のです。ふたりの兵士たちはそのベゼロインとりでのようすを、てい
さつにいつていました）。

「とくしに伝えよ。ベーカーランドは、われら白の勇士、千二百でむ
かえうつと。」

「はっー！」

ライラの言葉に、ほうこくにきた兵士たちはふたたび騎馬たちに乗
りこんで、仲間たちのもとへとかけていきました（今は戦いの前。い
くさのはじまりにはそれぞれの軍の使者たち、とくしたちが、おたが
いの兵力をたしかめあって、それからそれに見あつた兵士の数で、戦
いははじめられるのです。ふつうの戦いであれば、おたがいの兵の数
をたしかめあえばそれでよかつたのですが、相手がワツトの場合はべ
つでした。黒の軍勢の兵の数が、こちらの兵力の三ばいにみたない
いうことは、ほとんどあり得なかつたからです。黒の軍勢は相手の兵
の数にあわせて、その三ばいの「とくにゆうしゆうなる兵士たち」を
えらんで、戦いはじめるのがつねでした。数だけでも多いのに、し
かもそれらがすべてうでききざろいときていましたから、ワツトの黒
の軍勢が強いのもうなずけるわけなのです。

そしてもうひとつ……、われらが白き勢力にとつて、とても不利と
なるいくさのルールがありました。それはいぜん、ベゼロインとりで
での戦いおのときに、わたしがすこしだけお伝えしたもののなのですが、
もういちどくわしくお伝えしておきましょう。

それは、「同じ相手国との十四日以内でのれんぞくしたいくさの場

合、前回の戦いで負けたがわのくにの兵力には、そのくにが前回の戦いで使用した兵力の四十七・五パーセントぶんが加わっているものとしてあつかわれる」というものでした（かなりややこしい文章ですが……）。これはつまり、こんかいのベーカーランドの兵力の千二百に、さきのベゼロインの戦いでもちいた七百二十名の兵力の四十七・五パーセントぶんの兵力（三百四十二名）を、加えてあつかわなければならないということになるのです（はすうは切りすてます）。つまり、じつさいの人数は千二百ですが、このペナルティの数字を加えたぶんの（千五百四十二名の）兵力があるものとして、ベーカーランドはいくさをはじめなければなりません。これにより相手国のワットは、その三ばいまでの兵力を、このいくさにもちいることができるのです（つまり計算すると、ワットは千五百四十二名の三ばい、四千六百二十六名までの兵力を、このいくさにもちいることができました。おそろしい数字です！）。これはくるしい戦いをいられている白き勢力にとつて、ほんとうにきびしいルールでした。

「えん軍は、のぞめませんでしたね……」ライラのとなり立っているフェリアルが、ライラにいました。「ノランどのは、まかせておけとおっしゃいましたが、ほんとうに、この兵力でたちうちできるのでしょうか？」

「やるしかないのだ。」ライラが前を見すえたまま、フェリアルの言葉にこたえました。「今は、そんなことをいっている場合ではない。与えられたじょうきようで、さいだいげんの力をひき出すことが、われら、しきかんのつとめであろう？」

「そ、それはそうですが……」

フェリアルはそういって、うしろをふりかえりました。草原のむこう、そこにはよく見なれた、エリル・シャンデーインのまちとお城がそびえています。かれらがいるのは、まちからしばらく進んだ、小高い丘の上でした。この丘のすそのにそって、白の勇士たち、ベーカーランドの兵士たちと白の騎兵師団の騎士たちが、黒の軍勢のことをむかえうつべく、じんを張っているところだったのです。

ですがフェリアルの心配の通り、その数はあつとう的にすくないも

のでした。このくにを守りきれるかどうか？ それはだれにも、いいきれることではなかったのです（兵士たちの数は千二百人。そのうちエリル・シャンディーンの兵士たちが四百、白の騎兵師団の騎士たちが三百五十、残りの四百五十は戦いのときにだけ集められる、ベーカーランドの者たちでした（この四百五十名の者たちはふだんはそれぞれのみちや村でほかのしごとをしていて、ていき的にエリル・シャンディーンをおとずれて、お城のしごとをしたり、戦いのくんれんを受けたりしていたのです。こんなかいの戦いにあたって、それらすべての者たちが、兵士として集められました）。

「ライラどののいう通りだ。」ベルグエルムが、フェリアルにいいました。「きみの気持ちは、よくわかる。だが、今は、目の前の戦いに集中するときだ。」

ベルグエルムには、フェリアルの気持ちはよくわかっていました。なぜならベルグエルムもまた、フェリアルと同じ気持ちだったからです。フェリアルが目をむけていたさき、それはエリル・シャンディーンのみちやお城ばかりではありませんでした。かれが思いをむけていたのは、その場所にいる仲間たち。ベゼロインの戦いで、おそろしき魔女たち（そしてその影にひそむアーザス）のさくりやくによって、やみにとらわれてしまった、その仲間たちにあったのです。

「かれらなら、きつと助かる。」ベルグエルムがフェリアルの肩に手をおいて、つづけけます。「この戦いが終わったら、ワットの者たちに、かれらをもとにもどすよう、きつくめいじてやろう。魔女たちへのおおきも、しつかり果たしてやらなければな。」

ベルグエルムはそういって、ほほ笑みました。そのじょうだんまじりの言葉は、友のフェリアルの心を、とてもやわらげてくれました。おたがいにいちばんつらいときにこそ、はげましあい、助けあうことができる。それがほんとうの友だちというものなのです。

「ありがとうございます。」フェリアルが、にこりと笑ってこたえめました。「そうですよね。」

「もうにどと、あんなまねはさせぬ。」ベルグエルムとフェリアルのやりとりを見て、ライラが横からいいました。

「われら、白き勢力の底力、今こそ思いしらせてくれよう。」

そういつて、ライラは静かに、隊のもとへと歩き去っていききました（ここをひとつ、重要な説明を加えておきます。かれら、このさいごの戦いへのぞむベルグエルムたち、そして白き勇士たちは、リストールがネクタリアたちのえん軍を取りつけるというその大いなるしめいのために動いているのだということを、知りません。それはほんとうにさいごの大きなかけであつて、うまくいくほしようななども、やはりどこにもないことだったので。そのためノランはリストールに、この大いなるしめい、かけのことは、仲間たちにも話すべきではないだろうと伝えていました（そしてこれはかくにんの取れたことではありませんが、ノランはアルマーク王にも、そのように伝えていたようでした）。もちろん、大きなのぞみが残されているということを仲間たちが前もって知っておけば、かれらの大きなはげみとなり、勇気ともなったことでしょう。ですがもしリストールが、ネクタリアたちの説得にしっぱいしたら……。ノランはこれらすべてのことを考えにいれたうえで、仲間たちには、このえん軍のかのうせいのこととはふせておきました。

そのことについて、じつはノランの中にも、大きなまよいがありました。さいごの戦いでは、えん軍の助けがふかけつなものとなる。えん軍のきぼうすらないじょうきようの中で、ベルグエルムたち、白き勇士たちのことを、このままつらくきびしい戦いの場に放り出してしまつてよいものか？ しかしノランは、やはり大けんじやという立場の点からいつても、かくじつにいえるようなことではないことをかるがるしく口にしてしまつていいような、そんな人物ではなかったのです（これはノランにとつても、とてもつらいことでした）。そのため、さいごの戦いへのぞむベルグエルムたちにとつては、これまたとてもつらく、ざんこくなことかもしれませんでした。ノランはかれらには、くわしくはなにも伝えることなく、みずからのつとめの中に走つていきました）。

「かのじよも、仲間たちのことを気にかけているのだ。」ベルグエルムが、去つていくライラのうしろすがたを見ながらいいました。「仲

間たちのことは、今は、城の者たちにまかせよう。今は、前に進むべきときだ。」

「はい。」フェリアルがこたえます。

「この戦いでは、ガランドーも、敵のしきをとるだろう。おそらく、デイルバグ隊のな。」ベルグエルムがライラの背中を見つめながら、小さくつぶやきました。「われらは、かれと、あいまみえるかもしれない。それを、ライラどのもわかっている。ふくぎつな気持ちだろう。だが、かのじよはそのことを、すこしもおもてに出さない。りっぱなきかんだな。われらも、かのじよの心にこたえなければ。さあ、ゆくぞ。」

そしてベルグエルムとフェリアルは、おたがいそれぞれのしきする隊の中へと、進んでいったのです。空はますます暗く、ほほにわたるつめたい風は、なにかのふきつな前ぶれであるかのようでした。

むらさき色をしたぶきみなかみなりが、ごろごろと黒い空の上を走っていきました。はい色をしたこうもりのような生きものたちが、ばさばさと、あたりの岩から岩へと飛びかっけていきます。

なんとというさみしいところなのでしょう。そしておそろしげなところなのでしょう。地面には、かれ木ばかりがぽつんぽつんとさみしげに立ち、がいこつのようなもようを背中に持った大きなかぶと虫のような生きものたちが、がじがじとその木のかわをかじっています。まっ黒なインクのような水をたたえた池があちこちにあって、その水めんには、ぼこぼここと大きなあぶくが立ちのぼっております。その池のほとりには、同じくまっ黒なやぎのような動物たちや、黒い木のみきのようなからだを持った人のかたちをした生きものたちが集まってきたいて、ごくごくとその水を飲んでいました。

ここはいつたいてどこなのか？ こんな場所は、このアークランドで今までみなさんが見てきた、どんなところにもあてはまりません。やみの精霊の谷にすこしにいましたが、いくらやみの精霊とはいえ、それでもあそこは精霊たちの住む地です。精霊のエネルギーが、（それがやみの精霊のエネルギーであっても）あの土地にはあふれていま

した。ですがこの場所には、精霊のエネルギーなんてものは、すこしも感じられません。なにかじやあくな力によって、精霊のエネルギーも、そのほかのよいエネルギーも、みんなすいつくされてしまったかのようにでした。ここはそんな、ふきつなところ。あとには、からっぽのむりよく感、そればかりが残されている、なんとも寒々しいところだったのです。ほんとうにここは、アーケランドなのでしょうか？

今その黒い空のかなたから、小さな光があらわれました。それはこのぶきみな空のやみを切りさく、すくいのような光でした。点のような小さな光はだんだんと大きくなり、やがてそれは、こがね色のつぶのような光となります。そしてついに、その光のかたちのはつきりと目に見て取れるものになりました。

むらさきのいなびかりにてらされて、そのこがね色の光のしようたいがあらわになりました。それはしんぴ的なおうごんのかげやきにつつまれた、大いなるつばさの光だったのです。

ばさっ！　ばさっ！

力強いつばさのはばたき。そしてそのおうごんのつばさの背には……、われらがきゆうせいしゅ、この物語の主人公、そう、ロビーが乗っていました。ついにロビーが、ラフェルドロードのその背中に乗って、このおそろしい土地の空へとやってきたのです。つまりここは……？

そう、みなさんのごそうごうの通り、このなんとも寒々しいふきつな黒の土地は、まぎれもなく、悪にそまったやみの魔法使いアーザスの住む、怒りの山脈でした！

「見えたぞ。」

ラフェルドロードが、その背に乗ったロビーにいました。

「あれが、魔法使いによ城へとつづく、けっかいだ。」

けっかい？　いぜん、モーグだったころのロザムンディアのまちは、魔女のアルミラのかけたのろいのけっかいが張られていました。その中にはいる者をこばみ、あるいは出る者をこばむ。そんなおそろ

しいのろいのけっかいが、ここにも張られているというのです。しかしここに張られているのは、アルミラがかけたのろいのけっかいよりも、はるかに強力で、はるかにおそろしいものでした。それもそのはず。このけっかいを張りめぐらせたのは、ほかでもありません。やみの魔法使いアーザス、ほんにんでしたから！

「わたしは、たびたび、ここによ場所までやってきた。アーザスにようすをさぐるためににや。」ラフェルドロードが前を見すえたまま、ロビーにいました。「だが、空からでは、あによけっかいを越えることはできにやい。アーザスによ城へとゆくためには、地上から、歩いて、けっかいを越えてゆかねばにやらにやいによだ。」

「アーザスの、けっかい……」

ロビーはおうごんのつばさごしに、かなたの空に広がるそのおそろしげな光景を目にしました。それはまさしく、悪夢の中の世界そのものでした。まっ黒な空の中に、むらさきと赤のもやもやとしたけむりのようなものが、うごめいていたのです。それはほんとうに、生きているかのようにでした。ぐにぐにとそのかたちをたえず変えていて、その中に馬の頭やへびの頭のようなものがあらわれては、また、もとのけむりへともどっていくのです。あるときなどは、大きな人のようなかたちとなって、その巨大なこぶしをあたりになんのもくてきもなく、ふりおろしていました。そしてそのあとには、ただむらさき色のぶきみなかみなりのエネルギーだけが、ごろごろとまきちらかされていくのです。

ロビーははじめて、アーザスのそんざいをじかに感じ取りました。今まで、ベルグエルムや、フェリアルや、エリル・シャンデーインの人々から、その話だけをきかされてきたロビー。ロビーはここにきてようやく、自分のじっさいのはだで、アーザスのそのおそろしき、力を、感じ取ることとなったのです。

アーザスは、たしかにここにいる……。

ロビーには、それがはつきりと感じられました。腰の剣が、ずしり

と、その重みをましたかのように感じられました。

「けっかいのさきは、どうなっているんですか？」

ロビーがラフェルドロードにたずねます。アーザスの待つ、怒りの山脈。そこはロビーにとつて、まったくもって未知なる世界でした。すこしでもやくに立ちそうなことは、知っておく方がいいに越したことはありません。ですがロビーのその思いは、ほとんどかなえられなかったのです。

「わからにやい。けっかいによさきによ世界は、アーザスによやみによ魔法によつて、大きく変えられてしまっているからだ。かつてこによさきは、三十年前によ、あによ大いにやる冒険によぶたいであった。アークランドをおそつた赤りゆうが、こによさきによ山で、さいごをむかえることとなつたによだ。それいらい、こによ山に分けいた者はいにやい。アーザスいがいはにや。」ラフェルドロードが、ロビーのしつもんによこたえていいました。

「アーザスはここに、みずからによ城をきずいた。わたしはいぜん、けっかいによすきまから、ほんによすこしだけ、そによ城を見ることのできたことがある。それはにやんともいよいよによにやい、おそろしい城だつた。アーザスは、そこに住んでいるといわれているが、それがほんとうによことにやによかどうかはわからにやい。こによさきは、きみは、自分によ目と足で、道を乗り越えてゆかにやければにやらにやいだらう。」

ラフェルドロードの言葉に、ロビーはしばらくだまつたままでした。敵の待つ、さいごの地。そこはかつての、大いなる戦いの場所。そして今は、よこしまなる魔法でゆがめられてしまつた、のろわれたる土地であつたのです。ですがロビーは、おじけづいたりなどはしませんでした。そこがどんなところであらうとも、どんなものが待ち受けていようとも、ロビーは進まなければならぬのです。ロビーはひとりではありません。仲間たちの思いと、つねにいっしよなのですから。おそろしいアーザスののろいのけっかいのことを前にしても、ロビーの心はかたくかたく、変わることはありませんでした。

「けっかいの入り口まで、どうかお願いします。そのさきは、ぼくひ

とりでいきます。」

ロビーはけつい心の心を持って、ラフェルドロードにいました。ラフェルドロードはなにもいわず、ただそのおうごんのつばさに力をこめて、その思いにこたえました。その背に乗った勇者に、さいだいの敬意をこめて……。

それから、こがね色のつばさは、こののろわれたる土地の中へとり立ったのです。そこはさきほど説明しました通り、ぶきみな生きものたちのうごめく、寒々しい土地でした。じつさいこの場所におり立った者は、ラフェルドロードをのぞいては、このアークランドでは数えるほどしかいないことでしょう。その中の四人は、みなさんもよく知っているあの四人です。今はそれぞれがひとつのくにの王さまとなっている、かつての王子たち。そう、それはノランとともに赤りゆうたいじの冒険へと出かけた、アルマーク、メリアン、ムンドベルク、そしてアルファズレドの、四人の者たちでした。そして今、ムンドベルクの子、ロビーベルク、ロビーが、こののろわれたる土地の地面をふみしめていたのです。みずからの、その大いなる運命にしたがって……。

吹きぬける風は、このきせつにはそぐわないあつい風でした。わずかにちりちりと、砂やはいのつぶがほほにあたつていきます。なにかのこげたようなにおいが、あたり中に立ちこめていました。地面や岩かべはなにもかもまっ黒で、それはまるで、やみがそのまま、砂や石に変わってしまったかのようでした（これらのものはすべて、かつてこの場所でおこなわれたりゆうとのげきせんによって、生まれたものだといえます。りゆうの怒りのエネルギーが荒れくるい、この土地のすべてのものをやきつくし、やみとはいばかりにしてしまったのだということでした。そのりゆうがたいじされてから、もう三十年あまり。それでもいまだに、その怒りのエネルギーはおさまることなく、この土地をむしばみつづけていたのです）。

「あそいだ。」

さきに立つラフェルドロードが、前の方をゆびさしながらいいまし

た。そこはごつごつとした黒い岩のせり出した、暗い暗い場所でした。地上にまつ黒なあながあいていて、うっかりそこに落ちてしまったとしたら、その者はなん日もなん日も落ちつづけていつて、その果てにこの場所にたどりつくことになるのではないか？　そこはそんなおそろしいそうぞうすら頭の中に浮かんでできてしまうかのような、きぼうとはまったくむえんの、おそろしげな場所だったのです。

「あによトンネルが、アーザスによ城によ、ふもとによ地へとつづいている。だが、トンネルによさきによそによ地が、今、どうにやっているによか？　それはわたしにもわからにやい。」

黒い岩がやねのようにせり出した、その場所のまん中。そこにまるで、すべての光をすいこんでしまうかのような黒いトンネルが、ぽっかりと口をあけていました。やみの精霊の谷でも、はぐくみの森の地下いせきでも、ロビーはこんなにおそろしげな気持ちにはなりませんでした。あのトンネルのくらやみの中に、百体ものおそろしげなかいぶつたちが待ちかまえているのではないか？　中にはいったとたん、すべてのいのちのエネルギーが、そのやみの中にすいつくされてしまふのではないか？　そんなふうにさえロビーには思えました。

ですがロビーは、ここを通過していかなければならないのです。

「おそろしく、アーザスはきみがここにきたことに、気づいているだろう。」ラフェルドロードがいきました。「こによトンネルは、力持つ者しか通ることはできにやい。わたしはいぜん、こによトンネルによ中にはいったことがある。だが、わたしはそこで、にやんともいいようによにやい、おそろしい力にひきさかれそうにやつたによだ。にやん百という白い手が、わたしによからだにまきついて、わたしによことをひきさこうとした。わたしは、いによちからがら、どうにか逃げ出すことができたが、こによトンネルを通ることは、にやみによ者では、むりだということを知った。」

「こによトンネルには、アーザスによよいがかけられているによだ。光によ力にやくして、こによトンネルをにゆけることはできにやい。だが、きみにやら、それができるだろう。たとえアーザスによ目が、こによしゆんかんにも、きみにむけられているとしても

にや。」

ロビーは静かにうなずきました。さいごのための、さいしよのいっぽをふみ出すときです。ロビーはその手をラフェルドラードにさし出すと、やさしくほほ笑んでいました。

「ありがとうございます。ラフェルドラードさん。いつてきます。」

ロビーはそういつてラフェルドラードとかたいあくしゅをかわし、ぺこりとおじぎをすると、その暗い暗いトンネルの入り口へとむかったのです。

「あ、それと、」トンネルの入り口で、ロビーが急にふりかえりました。「もどったら、ライアンに伝えてください。おいしいお菓子があつたら、きつと、持って帰るからと。」

そしてロビーは、そのやみの中に消えていきました。

ロビーの腰の剣が、青白い光を放ちはじめます。このトンネルが、あまりにも暗かったからでした。ロビーがそう思わずとも、しぜんと剣が光って、あたりをともしてくれたのです（はぐくみの森の地下いせき、いらいですね）。

ロビーは青く光る剣をぬいて、そのつかをぎゅつとにぎりしめました。なにかここにきて急に、ロビーはこの剣が前にもまして、自分の意志を持っているかのように感じられました。剣と言葉をかわすことはできません。ですがたしかに、感じたのです。わたしの力を使いなさい。もうじき、すべてが終わります。けつちやくのときは、すぐそこなのですと（これもイーフリープでロビーが得ることになった、新たなる力のためなのでしょうか？）。

「けつちやくのとき……」ロビーは思わず、そう口にしていました。アーザスとの、さいごの戦い。ですがロビーには、もうひとつ、とてもとてみたいせつなやくめが残されていました。父であるムンドベルクを、やみからすくうこと。それがロビーの背おった、そしてロビーにしかできない、さいごのつとめだったのです。

待っていてください、お父さん。

ロビーはやみのトンネルのそのさき、一点を見つめながら、心の中でいいました。

ぼくがかならず、助け出すからね。

せいなる剣のせいなる光をもつてしても、さきを見通すことのできない、暗い暗いトンネル。そのおそろしいやみのトンネルの中にあっても、ロビーのその目は、くらやみのむこうに、かがやく光をたしかに見すえていたのです。

トンネルの道は、とちゆうでなんどもまがりくねっていました。そしてそこはあつくはいまじりの風が吹きつけておりましたのに、このトンネルの中は、ひんやりと、いえ、背すじがこおりついてしまいそうなくらいにつめたく、そのうえぶきみだったのです（おぼけ？ と思ったしゆんかん、背すじがぞぞーつと寒くなったことはありませんか？ このトンネルの中は、いつもそんな感じのつめたさなのです）。

白い手か……。ロビーはラフェルドロードの言葉を思い出し、トンネルのかべやてんじように剣の光をあてながら、進んでいきました。この剣なら、切つてやつつけられるかな？

しばらく進むと、トンネルはすこし広くなっているところにつながっていました。石のはしらがあちこちに立っていて、それらがずつと上のてんじようにまで、つながっております。剣の光にびつくりして、きいきいいいながら、まっ黒い影が飛び去つていきました。はつきりとしたすがたは見えませんでした。たぶんこうもりみたいなものだろうと、ロビーは思いました（じっさいはこの生きものは、このアーランドとはべつの世界から飛んできた、シヤグフエイという生きものでした。この生きものはむささびににいていましたが、やみからやみへ、しゆんかんいどうして消え去ることができたのです。ただし光のあたるところでは、しゆんかんいどうはできません。ですから剣の光にびつくりしたこの生きものは、自分のつばさで、大あわてで逃

げていったというわけでした。

石のはしらの立ちならぶ広間が、そこからずうとつづいていました。のぼったり、おりたり。それぞれのはしらからは黒い水がしたたり落ちていて、地面に黒い水たまりをつくってあります。そしてなんどか、それらの水が小さな流れとなって、ちよろちよろと道を横切っていました（それらの流れの水の上には黒いぷるぷるとしたボールがいくつも浮かんでいて、それらがちよこまかと水の上を動きまわっていました。これらはこのトンネルの中に集まったしぜんのエネルギーがアーザスのろいとくつついて生まれた、へんてこな生きものたちだったのです。うかつにつつついたりすると、ぼちゅん！ ぼくはつして、つつついた者の顔をまっ黒けによごしてしまいました。ただそれだけなのですが……）。

そして（そんなへんてこな生きものたちのむれを、なんとか通りすぎていったあと）、どれほどの道のりを歩いてきたのでしょうか？ ロビーはふいに、立ちどまりました。ロビーには、すぐにわかったのです。

いる……。

ロビーは剣をかまえて、あたりをけいかいしました。目にはまだ、ぜんぜんなんにも見えません。ですけどロビーにははつきりと、それがわかりました。ラフェルドロードのいつていた、白のおぼけのような手。それがこの広間のあたりいちめんから、飛び出してくる。ロビーにはそう感じられたのです。

そして……。

ロビーの感じた通り、つぎのしゅんかんには、ロビーはそれこそなん百というおぼけのような白い手たちに、すっかりかこまれていました！

いったいどこからあらわれたのか？ あたりをじつと見張つていたにもかかわらず、まったくわかりませんでした。気がついたらもう、白い手たちは、かべやてんじょうや、地面やはしらから、どんどん飛び出してきていたのです。

ベルグエルムだったら、「ロビーどの、ここは、わたしが！」といっ

て、剣で切りこんでいくことでしよう。ライアンだったら、「こんなの、ぼくがまとめて吹き飛ばしてあげる!」といって、(危険きわまりない)ひっさつわざを使い始めることでしよう。そしてフェリアルだったら、「ギャー! おぼけー!」ときけんで、腰をぬかしてしまうはずです(「おぼけかんけい」ですから、こればかりはしかたありませんね)。

ですが……、ロビーはひとりなのです。心はひとりではありません。勇気はひとつではありません。ですがロビーはもう、ただこのいつぽんの剣だけをにぎりしめて、自分の手と足で、目の前の敵に立ちむかっていかなければなりませんでした。ひとりでの冒険というのは、そういうものなのです。

ロビーはあらためて、今までの道のりのことを思いかえしていました。ほんとうなら、ぼくははじめから、たったひとりで、危険な旅の中へとふみこんでいくはずだったんだ。思いもかけず、たくさんのすばらしい仲間たちに出会えて、助けてもらえた。たくさんのおぼけを、見つけることができた。ほんとうにぼくは、しあわせだったんだ。

ロビーは、剣をぎゅつとにぎりしめました。

みんなの思いに、ぼくはこたえなくちゃいけない。

白い手たちは、にゆるにゆるとのびて、そしてふわふわとただよっております。それらはまるで、海の中にゆらめく海草のむれのようにです。ですがこの手は、そんなになまやさしいものではないのです。ラフェルドロードはもうちよつとで、この手にしめ殺されてしまうところでしたから。ロビーは全力をもって、この手とけつちやくをつけないければなりませんでした。

ですが……。

ロビーが剣をかまえたたたん。おどろくべきことが起こったのです。

白い手たちがざぎーっ！ と海の波のような音を立てたかと思うと、いつせいに、もときたやみの中へとひっこんでいってしまった！ それはいつしゅんのあいだのできごとでした。トンネルはふたたび、もとの静けさの中へとつつまれていったのです！

てんじょうから落ちてきた水てきが、ぽちやんと地面の水たまりの上に落ちて、波を広げました。白い手たちは、あとかたもなく消えてしまったのです。

いったい、どういうことだろう？ ロビーがそう思ったとたん。またしても新しいできごとが起こりました。

トンネルのくらやみのむこうから、ぼちやぼちやという音がきこえてきました。それはゆっくりと、こちらへ近づいてくるみたいです。しばらくたって、ロビーにはそれが、足音なのだということがわかりました。ですけど足音にしては、なにかが変でした。どこか、ぎこちない感じがするのです。まっすぐだったり、まがつていたり。強かったり、弱かったり。そんなおかしな足音でした。まさか、またおぼけ？ ロビーはそう思いましたが、すぐにそうではないということがわかりました。その足音を立てていた者が、やみの中からそのすがたをあらわしたからです。トンネルのくらやみのむこうから、やってきたのは……。

小さな十二さいくらいのねんれいの、ひとりの女の子でした！ これはいがい。どうしてこんなところに、こんな女の子がいるのでしょうか？

その子はとてもかわいらしい子で、白いレースのシャツに赤いひらひらとしたドレスを着ていて、同じく赤い、ひらひらとしたスカートをはいていました。足もとには、きいろい子ども用の長ぐつをはいております。胸には大きな白いリボンがひとつついていて、そのまん中は、かがやく大きなひとつのきいろい石でとめられていました（この

石は服のボタンにも使われていました)。かみの毛と両のひとみは、きらきらとしたこはく色。かみを両がわでかわいくツインテールにむすんでいて、頭にはひらひらとした、白いかみかざりがつけられております。そして肩には、黒いうさぎのぬいぐるみがひとつ、ちよこんとすわっていました。

見た目は人間の女の子のようでした。ですがそうではないということがはつきりとわかる、あるものがあつたのです。それはなんとも、おどろくべきものでした。

この子は、人ではなかつたのです(じゃあおばけ？　そうでもないのです)。つまり生きものではありませんでした(じゃあやつぱりおばけ？　ちがいますってば)。

この子は「人形」だつたのです！　手足のかんせつには人形であることをしめす、つなぎ目がはいつていました！

はだは人そっくりでしたが、よく見るとかたそうな木でつくられていて、その上からていねいに絵の具がぬられているということがわかりました(絵の具といっても、水でこすつても落ちないくらいしっかりとっていました)。顔も、いわれるまではわからないくらい、人そっくりに作られていました。そしてよく見れば、そのこはく色のひとみは、それもそのはず、こはくそのものがはめこまれていたのです。いったいこの人形の子は、なに者なのでしょう？(なに者というか、人形ですけど。)ですけどそれは、よく考えたらわかることでした。こは怒りの山脈、アーザスのねじろなのですから。こんなところに、こんな魔法で動く、人形の子がいるとなれば……。

そう、この人形の女の子は、まぎれもありません。アーザスにつかえ、そしてアーザスからこの場所に送られてきた、使者だつたのです！(見た目はぜんぜん、かわいい女の子でした。ですけどこの子はまさしく、アーザスのやみの魔法、のろいの力によって動いていたのです。まあでも、頭がかぼちゃだからだがたまねぎの人形よりは、ぜんぜんましですけど。)

その子は手足をぎこぎこ動かしながら、ぼちやぼちやと長ぐつ音をひびかせて、ゆつくりとロビーの方へ歩いてきました。その歩き方はやっぱり、人形でした。いっぽいっぽ、からだのバランスを取りながら、ふみしめるように歩いてきたのです（足音がへんてこだったのは、このためです）。そして……。

「ロビーさまですね。」

人形の子が首をかしげて、にこりと笑っていいました！（やっぱりしゃべるんですね！）おどろいたことに、その子は人形であるのにもかかわらず、ほんとうの人のように目や口が動いて、表じようを変えることができるようなのです（ふくわじゆつの人形みたいに、かたかた動くのではありません。ほんとうに生きもののように、なめらかに動くのです。さすがはアーザスです。悪いとはいっても、大魔法使いであることにちがいはありませんでした）。

「お待ちしておりました。わたしは、アーザスさまのめし使い、ソシーと申します。」ソシーと名のつた人形の女の子は、そういって、ペこりとおじぎをしました。

「ここでロビーさまのことをおむかえするよう、いいつかわされてきました。番犬のおててが、そそをいたしまして、たいへん失礼いたしました。」

番犬のおてて？ それって、さっきの白い手のことでしょうか？（番犬なの？）

「ロビーさまには手出しをしないようにと、めいじておりましたのに。わたしが、ひっこむようにめいれいたしましたので、ご安心を。おしおきに、こんばんは、ごはんぬきにしますから。」

「え、えっと……、そんなのは、いいですから……」「ロビーは思わず、あたふたと手をふってこたえてしまいました（ごはんぬきって、いったいあの手が、なにを食べるんでしょうか？ なぞです）。

「それより、えっと、アーザス……、さん、の、めしつかいさんなんですか？ ぼくに、その、どんなごようじなんでしょうか？」（思いもかけずかわいらしい子が出てきたので、ロビーもすっかり、こんらんしています。）

ロビーのといかけに、ソシーはもういちどぺこりと頭を下げて、いました。

「ロビーさまのことを、アーザスさまのもとへと、おつれするようにとのめいれいにございます。ロビーさまいがい、このトンネルを通すことのないようにと。ですが、おひとりでこられましたので、よろしかったですね。もし、お仲間がごいつしよでしたら、その方たちには、おひきとりいただきますよう、わたしの方からせつとくしなければいけないところでしたので。」

ソシーはにっこり笑っていましたが、そのゆびのさきからするどいやいばが飛び出てきたのを見て、ロビーは思わず背すじがぞつとしまっていました。やっぱりこの子は、アーザスの手下なのです。悪意がないとはいえ、やみの者たちの仲間であることに、ちがいはありませんでした（「おひきとりいただくようにせつとく」というのは、つまりこのやいばのつめをもって、力づくで追いかえすということを意味していたのです）。

「では、ロビーさま、まいりませうか。こちらでございます。お足もとに、お気をつけくださいませ。」

そしてロビーはソシーにいわれるまま、おそろおそろでしたが、かのじよのあとについていくことにしました。ロビーはラフェルドラードの言葉を思いかえしていました。アーザスの目が、このしゅんかんにも、きみにむけられているとしても……。あの言葉はまさしく、その通りだったのです。悪の魔法使い、アーザス。その者はどこまでも強力で、おそろしいそんざいでした。だれであろうと、いつまでもその目からのがれつづけるなどということは、できるはずもなかったのです。こがね色のつばさに乗って、ロビーがこの地にやってくるということ。そしてひとりこのトンネルを通過して、自分のもとへとやってくるということ。それらをすべて、アーザスは見通していました。

のぞむところだ。ロビーは心の中で、強くない放ちました。ぼくのかくごを、思い知ることになるぞ。

ロビーはソシーの肩ごしに、遠く、まだ見ぬアーザスのすがたを思い浮かべていました。

「あの……、ソシー、さん？ まだなんでしょうか……？」

ロビーがしびれをきらして、前をゆく人形のソシーにたずねました。あれから、どのくらいの時間がたったのでしょうか？ 白い手（番犬のおてて）の出た広間から、このソシーにあんないされて、もうすくなくとも一時間以上も、この暗いトンネルの中を進んでいるようなのです。トンネルの中はあちこちに分かれ道があつて、たしかにあんないがなければ、すぐ道にまよつてしまいそうな感じでした。ですがそれでも、どうにもおかしな感じがしたのです。こんなに長く、このトンネルがつづいているはずがありません。トンネルのそと、空の上から見た感じでも、山をぬけてそのさきまでは、たいしたきよりではありませんでした。のろいのけっかいのせいで、ロビーにはそのさきの地上がどうなっているのか？ そこまではわかりませんでした、ラフェルドラードの話からしても、アーザスのいるという城までは、そんなに遠くはないはずなのです（もつともアーザスの城がいつまでもそこにあるというほしうは、どこにもありませんでしたが。アーザスは、大魔法使い。自分の城を動かして、ほかの場所にどうさせしてしまうことなど、たやすくできたのです）。

「もうじきですよ。もうじき、すべてがよくなりますから。わたしにすべて、おまかせください。」

ソシーがロビーの方をふりむいて、いいました。

「あつ、ロビーさま、そこは危険です。あと二ヤード、右を歩いてくださいませ。ちょうど、ぱつくんじゆうが飛び出してくるところですから。」

ぱつくんじゆう？ いわれるままに、ロビーが右に二ヤード、よけて歩いていくと……。

「ぱくんっ！ がちがちがちー！」

ひええ……！ ロビーがそのまま歩いていこうとしていた、まさにその場所の地面から、とんでもなく大きな口が、ばくんっ！ 飛び出して、その歯をがちがちとかみならしていました！ あ、あぶなかつた！ こんなのかみつかれたら、ひとたまりもありません。ふたたび地面の中にひっこんでいくかいぶつ（ぱつくんじゅう）のことを見ながら、ロビーはどきどきとなる胸をおさえました。

「ですから、わたしにおまかせくださいと申しております。」そんなロビーのことを見て、ソシーがつづけました。「ご心配にはおよびません。あなたさまに危害を加えるつもりなど、ございませんから。ロビーさまのおいのちをいただこうと思えば、いつでもいただけるのですよ。でも、そんなことをしたら、アーザスさまにしかられてしまいますから。」

こ、こわい……。やっぱりこの子は、アーザスの手下。こおりのようにつめたい心を持った、おそろしい相手なのです（まるで人形のようにつめたさです。人形ですけど）。

しかし「わたしにまかせるように」といったソシーの言葉は、もつともなものでした。このトンネルは、危険だらけ。ロビーひとりで進んでいけば、いつまたあんなおそろしいかいぶつに、おそれないともかぎりません（しかもこれらのかいぶつたちは、悪意を持つてはいませんでした。おなかへったからとか、なわばりに近づいたからとかいうりゆうで、こうげきしてくるのです。ですから人の悪意に反応するロビーの剣、アストラル・ブレードも、かれらにはききめがありませんでした）。くやしいことですが、このトンネルはソシーのあんなに無くしては、ぶじに通りぬけることは、いくら光の力を持つロビーであってもむりなようでした。ここはおとなしく、ソシーにしがうほかはなさそうだったのです（それにソシーほんにんも、とんでもなく強そうですし）。

ですが……。

これは、まぎれもありません。ソシーの、いえ、アーザスのわなだったのです。

アーザスが今、いちばんほしかったもの。それはロビーの持つ剣、アストラル・ブレードではありませんでした（もちろんそれも、とっても必要でしたが）。それは、時間だったのです。

もうじき、すべてがよくなりますから。ソシーの言葉です。この言葉はまさに、そのことをあらわしていました。もうじきエリル・シャーンデーインの大平原で、白き勢力と黒の軍勢、そのさいごの戦いがはじまろうとしていたのです。その戦いの果てに、アーザスがのぞんでいたこと。それはただひとつ、エリル・シャーンデーインの王城にそなる青き宝玉のことを、その手の中におさめるということでした（戦いに負けたくには、相手ののぞむ土地や物などをひき渡さなければなりません。ワットはもちろん、ベーカーランドの青き宝玉のことをひき渡すようによろしくするつもりでした。青き宝玉の女神の光のかがやきは、悪しきやみをうちはらいます。ですからやみの力を持つアーザスは、いくらその光の力が弱まっているとはいえ、青き宝玉のそばに近よることができませんでした。そのためアーザスはワットの者にめいれいして、宝玉の力をすぐに、自分の魔法の力でもって、取りこんでしまうつもりだったのです。部下であるワットの者にちよくせつ青き宝玉に手をふれさせることができれば、その者を通して、宝玉の力を自身の持つ赤いキューブの中に取りこんでしまうことが、アーザスにはかのうでしたから。おもてむきは、青き宝玉の力をうばい、その力をもしのご赤いキューブの力をもって、ワットにさらなるはんえいをもたらすというやくそくのもとで……）。

アーザスはその戦いのけっちやくがつくまでのあいだ、ロビーを自分のもとへとたどりつかせないようにと、ソシーにめいれいしていたのです。むだな遠まわりをしてロビーのことをつれまわし、さきに青き宝玉のこともその手の中におさめてしてしまうまでの時間を、かせぐために……（そしてそのあとでゆつくり、ロビーの持つ剣を手に入れるつもりでした。かんぜんとなった赤いキューブの力によって青き宝玉のことをなきものにしてしまう前に、さきに宝玉の力を取りこんでしまうことができれば、剣の力を待たずとも、そのぶんアーザ

スは、自身の持つキューブの力をさらに強力なものにすることができたのです。アーザスはその力を、ロビーに見せつけてやろうとしました。そうなればロビーから剣をうばい取り、キューブの力をかんぜんなものにするなどということは、さらにかんたんなことになるのです。

もちろん今のままでもロビーをやつつけることなんて、アーザスはたやすいことだと思っていました。ですがアーザスは、自身のそのさらなる力を見せつけることに加え、青き宝玉の力を、そしてこのアーランドそのもののものでその手の中におさめたというじじつまでも、ロビーにつきつけて、ロビーの心にかんぜんなるぜつぼうをうえつけてやろうと考えたのです。ロビーのその心を、ぐしやぐしやにおしつぶしてやろうとしました。なんとというひどいやつなのでしよう！ アーザスはそのために時間をほつし、ソシーにめいれいして、ロビーをこうしてつれまわさせていたのです。ロビーのことをよりいつそういたぶって、楽しむ、そのためだけに……。

時間がなによりもたいせつなのだということとは、ロビーももちろんしようちしていました（いつさいこの戦いがはじまって、アーザスのそのよこしまなるさいこのやみの力が、みんなのもとにふりかからないともしれないのですから）。こんなところで、むだな時間をついやすわけにはいきません。ですが……。

もはやロビーには、どうすることもできませんでした。ひとりでききに進もうにも、こんなにいりくんだところにはいりこんでしまっは、もう道もわかりません（ソシーはわざとロビーのことを、このトンネルのいちばんふくぎつで、しかもいちばん危険な場所へと、さいこんでいました）。危険なかいぶつたちから、のがれるすべもないのです。それにアーザスの手下であるこのソシーという子をなんとかしないことには、はじめからそれもむりでした。ロビーはまんまと、アーザスにしてやられてしまったのです。

「あの丘の、むこうへ、バスケットを持って。」ソシーの上きげんな歌声が、暗いトンネルのかべにこだまして、どこまでもひびいて

いきました(歌まで！よくできたお人形です。あまりじょうずとはいえませんでした……。)

そのとき……！

ロビーのからだに、ふしぎなことが起こりました。まるで深い深い海の底にまで、自分のからだがしみこんでいくかのような、ふしぎな感かく。

あたりはまっくらでした。そしてそこから、ひとつの光が生まれて……。

ロビー、ついに、さいごのときがきました。

その光の中から、いげんにみちた、ふしぎな声がひびいてきたのです！(女の人の声のようでした。)

だれ？くらやみの中で、ロビーはその光にむかってさげびました。

あなたはだれ？

ロビー、さあ、立ち上がるのです。道は、あなたの前にひらけています。進みなさい、ロビー。

そして光はまた、もとのくらやみの中へと消えていったのです。

「待ってー」

ロビーがさげぶと、目の前にはただ、もとの暗いトンネルばかりが広がっていました。すべては、いっしゆんのあいだのできごとでした。道のすこし前には、ソシーのすがたもあります。いったい今は、なんだったのでしょうか？ 夢か、まぼろしか。

「どうかされましたか？」ソシーがきよとんとした顔をして、ロビーのことを見ていました。「待てとおっしゃるのなら、なん時間でも

お待ちいたしますが。」

そのとき、ロビーは手にした剣のことで見ておどろきました。剣から今までに見たこともないような、うねかえったうずのような力があふれていたのです！

そして……。

ばああーっ！

剣からまっ白い光があふれ出して、トンネルの中をまばゆく白く、てらし上げました！

「きやー！」ソシーがその白い光にてらされて、ひめいを上げます。

「こわい、こわい！ やめて！ その光、やめてえー！」

ソシーは手で顔をおおって、ちぢこまってしまいました。なにがなんだか？ わかりませんでした。とにかくこれは、大きなチャンスです。このまま、アーザスのところまで！ もうアーザスのわななかに、足どめされている場合ではありません！

「アーザスのところまで、ぼくをつれていくんだ。」ロビーが、白い光につつまれた剣をソシーにつきつけながら、いいました。

「もうぼくは、まどわされぬ。きみのおどしは、もうきかないぞ。」

「わかりました！ わかりましたから！」ソシーが顔をおおいながら、泣く泣くこたえます。「その光を、消してください！ 絵の具がとけてしまいます！」

それをきいて、ロビーは剣を半分、腰のさやにしまいました（自分でもどうやればこの光を消せるのか？ わかりませんでしたから）。これで光は半分ですが、あいかわらずトンネルの中は、まひるのよう

に明るいのです。

「きみがなにもしなければ、ぼくもなにもしない。」ロビーがおちついた声で、つぶやきました。「まっすぐ、アーザスのところまでつれていくんだ。よけいなことを考えたら、こうだぞ。」

そういつてロビーは、腰の剣をちよつとだけ長くひきぬきます。白い光がさらにはげしく、トンネルとソシーのことをてらし上げまし

た。

「なにもしません！　いうことをききますから！　アーザさまのところへ、おつれます！　だから、ゆるしてえー！」

ちよつとかわいそうになってきましたね。ほんとうはロビーだつて、こんな、相手をおどかすようなまねは、したくはなかつたのです（それはみなさんも、よくおわかりですよ）。これ以上ひどい目にあわせるのも、ロビーのキャラクターじゃありませんし、もうかんべんしてあげましょう（ロビーはせいぎの主人公なので。ライアンだったら、ようしやなさそうですけど……）。

ロビーは剣を半分以上、さやにしまいました。そしていつでも剣をぬけるぞといったそぶりを見せながら、大急ぎで、ソシーにいったのです。

「さあ、早くあんないして！　時間がないんだから！」

空にはえんえんと、あつい雲がつづいていました。きおんは朝よりももつと、ひくくなつているみたいです。今にもひと雨、きそうなふんいきでした。つめたい風がひとすじ、ひゆううと、まるでむれからはぐれたいっぴきのけものように通りすぎていきました。

じこくはもうすぐ、みつばちのこくげん。おひるちようどをむかえようとしていました。みつばちのこくげんというのに、あたりはだいぶ、ものさびしげです。ほんらいならば、おひさまがいちばん高くのぼる時間でした。しかしそのおひさまも、あつくれたれこめた雲のむこうにかくれ、そのかがやきはずんぜん感じられなかつたのです。

そしてこの日、この時間。それはこのアーランドのれきしに残る、大きな大きなときとなりました。なぜなら……。

ぶおおおーっ！　ぶおおおーっ！

あたりいちめんに、ぶきみなひくいっつのぶえの音がこだましました。

そしてその音につづいて……。

「おおおー!」「ごがあー!」「ぐおおお……!」

そのつのぶえの音をもかき消す、たくさんのたくさんの、おそろしいおたけび!

さらには……。

がち! がち! がち! がち!

うちつける、はがねのこだま! それはまるで、ぜつぼうの海によせる波のように、この平原のすみずみにまでぶきみに広がっていきました。

もう、おわかりでしょう。これらのもの、それはすべて、ワツトの黒の軍勢の者たちの立てる、おそろしいいくさの音たちだったので(がちがちという音は、かれらがその手に持ったおそろしげな武器を、同じくおそろしげなたてやよろいにぶつけて立てている、その音でした。むかいあういくさの相手を、いかくし、きようふさせるために)。ここはエリル・シャンティーンのまちの前まで広がる、大平原。大河ティーンティーンの大いなる流れのすそに広がった、静かなる平原でした。その静かなる平原のむこうから今、剣とたてとよろいかぶとに身をかためた黒の軍勢の者たちが、はしからはしまで、悪夢のような黒いかべとなって、おしよせてきたのです。

みつばちのこくげん、それが戦いのはじまりでした。おたがいの軍が使者と使者とをかわしあい、このじこくに戦いをはじめよう、取りきめられたのです。ベーカーランドの兵は戦える者をみんな集めても、ようやく千二百。いっぽうの黒の軍勢は、いうまでもなく、この戦いでもちいることのできるそのさいだいの人数でした(せいにかくには、いぜんにもお伝えしました通り、四千六百二十六名でした。ほんとうにきつちり、数が守られていければの話ですが)。しかも黒の軍勢のかれらは、ただの兵士たちではなかったのです。かれらはみな、戦いのエキスパート。せいえいぞろい。ひとりで五人ぶんもはたら

けるほどの、つわものたちばかりでした。

さらに、それだけではありませんでした。かれらがみな「人」であったのなら、まだわれらが白き者たちの戦う勇氣も、ちぢこまったりはしないことでしょう。ですが黒の軍勢は、人だけではなかったのです。

たくさんの、かいぶつの兵士たち。巨大なくまのようなかいぶつや、目玉だけのかいぶつ。へびやかげのようなかいぶつ。そしてここに書くこともためらわれるような、なんともぶきみな生きものたち……。それらが同じくらいおそろしいかいぶつのしきかんのもとに集められ、隊をなしていたのです。

そして……。もつともおそろしき者たち。それはみなさんももうごぞんじの通り、やみのけんじやガノンによびよせられた、魔界の王ギルハッド、そしてそのもとにつどった悪魔の兵士たち、そのかれらでした。かれらが金色にふち取られた黒いよろいかぶとに身をつつみ、そのかぶとのあいだからまっ赤な目をのぞかせながら、こうしんしてくるのです。その手にとんでもないほどに大きな、もえるサーベルをいっばん、にぎりしめて……。

のろわれたる土地からよびよせられた、おそろしいかいぶつたち。そして魔界の王ギルハッドそのものにひきいられた、悪魔の軍勢の者たち……。こんなにおそろしい相手が、今までにいたでしょうか？

今までベーカーランドの勇者たちも、ワットの軍勢とはなんども戦って、たくさんの勝ちをおさめてきました。しかしこれほどおそろしい戦いが、今までにあったでしょうか？

なみの者であれば、そのおそろしいすがたを見ただけで、腰をぬかすか、剣を投げすてて、逃げ去ってしまうにちがいありません。それがふつうなのです。ですがそんなことが、できるはずありません。そしてわれらが白き勇者たちが、そんなことをするはずありません。おそろしきは、かれらも感じていました。ですがかれらが、にぎった剣をはなすとき……。それは敵のなさけようしやのないこうげきの前に、もはや戦うこともできないほどの、深いきずを負ったときだけなのです。この戦いは、そういう戦いでした。いくさのおきて

は、たしかにそんざいします。ですがそのおきてにしたがつていてもなお、いのちを落とす者があらわれてもぜんぜんおかしくない、そういう戦いでした。今までにない、このアーケランドの運命をきめる、だいじなだいじな戦いでした。

エリル・シャンディーンの戦いがはじまったのです。

ばばばー！　ばばばー！

平原に、美しくもいさましいラツパの音色がひびき渡りました。これは、ベーカーランドの白き勢力の者たちのラツパです。

「勇者たちよ！　ふるい立てー！」ライラの力強い言葉が、その音色のあとにつづきました。

「勇気とわざを、見せるは今ぞー！」

いのちをもあずけることのできる、すばらしいしきかんの言葉。それは白き勇者たちの心をふるい立たせ、カづけ、はげしました。すばらしいエネルギーとなつて、戦う者たちの心にしみ渡つていききました。ただそこにいるというだけで、すべての者たちの心はひとつにまとまり、かれらにいつも以上の力をひき出させることができる。それがしきかんというものなのです。そしてライラは（ちよつぴりこわいところもありましたが）そのすべての面において、もんくなしにすばらしいしきかんでした。

「おおおーっー！」

丘の上に、白き勇者たちのいさましい声がひびき渡ります。かれらは白の騎兵師団の人間隊の騎士たち、そしてライラのもとにいさましい剣のくんれんを受けた、せいえいの者たちでした。

「ほこりを胸に！　今こそ、われらがあかし、立てるときー！」

そのむこうで声を張り上げたのは、われらがベルグエルムでした。ベルグエルムもまた、白の騎兵師団の隊長。ウルファの隊をまとめ上げる、すばらしきしきかんなのです（今まで冒険のぶたいばかりでかれのかつやくを見てきたみなさんにとっては、しきかんとしてのベルグエルムのすがたに、ちよつととまどいを感じるかもしれませぬ。

ですがほんとうのかれは、いくさの場において、このように兵士たちのことをまとめてみなをしようりへとみちびく、しきかんであるのです。でもわたしもふくめて多くの方が、こう思っているはずです。ベルグエルムには、冒険の旅の方がにあっていと。いつか、そんなに遠くないことでしょう。ベルグエルムがいくさの場でみんなをひきいていなくてもすむときが、やってくるはずです。そう、いくさのない、へいわな世の中が。

「きずついた友のため！ われらがほこりのため！ 戦うときだ！」

「おおおーっ！」

ベルグエルムの言葉に、かれのもとにつどった勇者たちはみな、剣をかかげてふるい立ちました。

「副長ーっ！」べつの隊の中から、だれかがさけびました。

「フェリアル副長からも、お言葉をひとつー！」

それはベルグエルムの隊の、ちよつとむこう。もうひとつの隊をひきいる、われらがフェリアルにむけての言葉でした。その言葉をきいて、隊のみんなは思わず笑みまでもらして、フェリアルのことをはやし立てはじめます。

「ああ、うむ。」フェリアルはそういつて、「こほん。」とせきばらいをしてから、いげんにみちたいい方をしようとかんばつて（フェリアルにとっては、それはなかなかむずかしいことのようにでしたから）言葉をつづけました。

「きみたちは、すばらしい勇士たちだ！」フェリアルがこぶしをふり上げて、さけびました。

「ともに戦えることを、ほこりに思う！ みんな助けあつて、がんばろう！ 勝つてふたたび、この手にえいこうをつかむのだ！ みんなのために！ 祖国のために！」

すなおで、そしてちよつと古くさい、フェリアルの言葉。フェリアルはまだまだ、力やけいけんからいったら、隊長に上がるのにはふじゅうぶんかもしれませぬ。ですがそれでも、みんなの心をつかみ、

ひきつけるすばらしいみりよくが、フェリアルにはあったのです（それはみなさんも、よくごぞんじですよ）。

「おおおーっ！」

そしてみんなも、そんなフェリアルの言葉にしつかりとこたえました。

「だいじょうぶですよ、副長！」ひとりの若い騎士がさげびました。「おぼけはみんな、わたしたちでやっつけますから！」

隊の中から、大きな笑い声が生まれます。みんなフェリアルの「弱点」については、もう知りつくしておりましたから。

「副長には、とびきり強そうなかいぶつをおまかせします！」

また、笑い声。このフェリアルの隊はライラやベルグエルムの隊とはちがつて、だいぶくだけたふんいきでした。みんなフェリアルのよき仲間たちであり、よき友人たちでした。立場こそフェリアルは白の騎兵師団の副長としてしきかんのやくめを負っておりましたが、そこからはなれば、ほかの兵士たちと同じ、みんなともに剣を学び、わざをきたえあつた、仲間たちだったので（とうぜんベルグエルムやライラからも、きびしいくんれんを受けてきたのです）。フェリアルはそのにくめない、それでいてやる時はやる、そんなキャラクターによつて、みんなからとてもあいされていました（ちよつとどじで、目がはなせないというのも、フェリアルの人気のりゆうのひとつでした）。このさいこの戦いにおいても、それは同じでした。みんなはそんなフェリアルのもとにつどい、ともに戦い、そしてともに助けあうのです。

「進軍！・進軍！」

ぱぱぱぱー！　ぱぱぱぱー！

高らかなラツパの音がなりひびき、いくさの場におたけびがこだましました。黒の軍勢とあいまみえるときが、ついにやってきたのです。平原のむこうからとどく、おそろしい地ひびき……。どんよりと

かげる空の下、そのかすみのかかったふきつな空の下から今、まつ黒な影たちがその地ひびきとともに、すこしずつ、大きく、広がっていききました。

「はじまってしまったな……」

エリル・シャンディーンの王城の、ぎよくぎの間。そのバルコニー。アルマーク王がかなたの平原を見つめながら、つぶやきました。

「すべては、運命のなすままです。」アルマーク王のとなりには、エリル・シャンディーンのきゆううていまじゆつし長、ルクエール・フォートが立っていました。ルクエールは遠く空のむこうをながめやり、重々しいふんいきで、アルマーク王にいったのです。

「きゆうせいしゆどのがせいこうすれば、われらは勝ちへの道をおさめます。ですが、しつぱいすれば……」

「ほろびの道……。たんじゆんな話であるな。」アルマーク王がしせんをバルコニーの手すりにおろし、その手すりをこぶしでかるくたたきながら、こたえました。「光とやみ。そのどちらが正しいのか？ それはだれにもわからないことなのかもしれぬ。」

アルマーク王の心をおおっていたもの。それはアルファズレドのことでした。いつか、このときがやってくる……。三十年前のあの冒険のさいごのときから、それはわかっていたことでした。りゆうの力を手にし、しはいの道をえらんだアルファズレド……。かれのえらんだその道も、またアルファズレドにとっては、せいぎだったのです。

「デルンエルム、せわをかけるな。」アルマーク王がうしろをふりかえり、そこに立っていたデルンエルムにいました。「わたしに万いちのことがあれば、あとのことをたのむぞ。」

「めっそうもないことにごぎいます。」デルンエルムがふりしぼるように、そういいました。「そのようなことは、たとえ万がいちであつても、あつてはなりません。」

「そうありたいものだな。」アルマーク王はそういつて静かに笑みを浮かべ、デルンエルムの手から、ひとふりの王のつるぎを受け取ります。せい剣、ロスフォルド。ベーカーランドの王家に代々伝わる剣

で、しよだいの王イエヒユリーが女神リーナロッドの力をそのやいばにさずかったとされる、名剣でした。

アルマーク王は剣のつかをぬいて、そのやいばをすこしだけひき出しました。せい剣は銀の光を放ち、こな雪のような光のつぶをあたりにちらせています。ひとめでそれが、すばらしい力をひめたしんぴの剣であるということがわかりました。この剣はぜんなる心あふれる者の手にあつたとき、そのさいだいの力をはつきするのです。まさにアルマーク王にはぴったりの、光の剣でした。

「このつるぎを手にするのも、ひさしぶりだ。」アルマーク王は剣をふたたびさやにおさめると、そういつて、なんともふくぎつな表じょうを浮かべました。かつてアルマーク王はこの剣とともに、さまざまな冒険の数々をこなしてきたのです。それにはもちろん、あの赤りゆうたいじの旅のこともふくまれていました。アルマーク王はこの剣をもって、あのおそろしき赤りゆう、スラインドガルと戦ったのです。アルマーク王は今ふたたびこの剣を手にして、そのときのたくさんの、つらい旅のできごとのことを思い起こしていました（そのいちばんさいごのできごとは、友であるアルファズレドとの、わかれでした）。

「わがつばさの友人は、きげんをなおしてくれたか？」アルマーク王が、ふいにいいました。つばさの友人？ そのとき。

ばさっ！ ばさっ！

バルコニーのそとから、鳥のはばたくような音がきこえてきました。いえ、ただの鳥にしては、はばたきの音が大きすぎます。じゃあ、ただの鳥じゃない鳥でしょうか？ それもちがいました。

「ひひーん！ ひん！ ぶるるるー！」

これは、馬の声！ とういうことは……。

「やれやれ、まだ、きげんななめのようなだな。」

アルマーク王がにが笑いを浮かべながら、まどのそとのその「友人」に対していいました。

バルコニーの下から飛んできたのは、一頭の、つばさを持ったまっ白な馬のすがたをした、なんともふしぎでなんとも美しい生きものでした。この生きもののことを知っている方も、多いことでしょう。そう、ペガサスです！ 見た目は馬にそっくりですが、その背中にはとても大きく、そして美しいつばさが生えていました。そして今、バルコニーの下からやってきたこのペガサスには、ほかのペガサスとはちがう点がひとつありました。それはその頭の上に、いっぽんのつのが生えているということです。これはユニコーンとよばれる生きもののつのでした。ふつうペガサスにはつのがなく、ユニコーンにはつばさがないのです。ですから、つのとつばさ、その両方を持っているこのペガサス（それともユニコーン？ とりあえずペガサスということにしておきます。ややこしいですから）は、とてもめずらしいのです（ペガサス自体、はじめからとてもめずらしいのですが）。

「ほかの馬と同じにんじんをあげてしまって、悪かった。だいじょうぶ。おまえは、ほかの馬とはちがう。とくべつだよ。今さら、いうまでもないだろう？」

アルマーク王がそういつて友のことをなだめましたが、ペガサスはそつぽをむいて、きげんをそこねたままです（どうやらかなり、プライドの高い相手のようです。ほかの馬と同じにんじんを与えられて、かなりきげんをそこねてしまったようでした。うくん、あつかいにくい）。

「わかったわかった。こんど、フィルカーから、また新しい魔法のにんじんをしいれるから。」

これをきいて、ペガサスはちよつと（というそぶりでしたが、じつはかなり）、きょうみをひいたようでした（ペガサスはとても頭がよく、人の言葉をりかいできるのです。自分で話すことはできませんが）。フィルカーというのは西の大陸ガラントのそのまた北にある島で、そこでは魔法の馬たちが、たくさんかわれていたのです。そこで作られている魔法のにんじんは、すべてのにんじんの中でも、さいこ

うきゆう！　いつぽんがなんシリルもするという、とんでもないねだんのにんじんでした（このにんじんいつぽんぶんと同じお金で、やきたてパンなら五百こは買えることでしょう。なんてぜいたくなー！）。

ペガサスはようやくきげんをなおしたようで、そのままバルコニーの上へとおり立ちました。つばさを下げて、その背に乗り手をむかえ入れるかっこうです（やれやれ）。

ちなみに、このペガサスはお伝えしましたようにとてもプライドが高く、人のいうことなんてぜんぜんきかなかったのです。ゆいいつ、このペガサスの友じょうを勝ち取ってその背に乗ることをゆるされていたのは、アルマーク王ただひとりだけでした（ペガサス自体も、一頭しかおりませんでした）。ですからほかの者たちだけでこのペガサスに乗って旅をするというようなことも、まったくむりだったのです（アルマーク王が乗っていれば、さすがにこのペガサスも、ほかの者をそのうしろに乗せるくらいのことにはしてくれましたが）。

アルマーク王がひとりでのこのペガサスに乗ってロビーのことをむかえにいたり、ロビーのさいごの旅のともをしたりというようなことも、いろいろな危険や問題が多かったため、できませんでした。いちばんの問題は、やはり安全せいの問題です。いくらペガサスで空を飛んでいたとしても、おそろしいデイルバグに乗った黒騎士たちに見つかってしまうということは、大いにあり得ましたから。ですからアルマーク王も、ロビーの安全や旅のせいこうのかのうせいを上げるために、地上から危険をかいひして進んでいくことのできるベルグエルムたちやマリエルに、ロビーのことをみちびくそのだいじなやくめをたくしました。

そして怒りの山脈へのそのさいごの道のりのことについては、アルマーク王はノランからも説明を受けていた精霊王に、そのすべてをたたくしたのです）。

「みやこの守りは、たのむぞ、ルクエール。」アルマーク王がそういつて、ペガサスの背に乗りこみました。その腰には、せい剣ロスフォルドが。

そう、アルマーク王はさいごのけつちやくをつける、そのために、ア

ルフアズレドと戦うけつしんをしたのです。アルマーク王は今、かれみずからのその新しい運命の中へと、ふみこんでいこうとしていました（アルマーク王は今、たしかに感じ取っていました。ルフアズレドがさいごのけつちやくをつけるために、このさいごの戦いのおきにおいて、自分のところへむかつてきていると。ですからアルマーク王は、それにこたえるため、みずからルフアズレドのところへむかおうとしていたのです）。

ところで、このアークランドでは国王みずからがいくさの場におもむくということは、ほとんどおこなわれていませんでした。おもむくこともできましたが、まじゆつしたちやしきかんたちによって、とめられることがほとんどだったのです。やはり王の身というものは、配下の者たちにとって、自分たちのほこりのしようちようたる、だいじなものでしたから（そして兵士たちもきちんと、そのことをわかっていました。たとえ戦いの場にじっさいに王さま自身がいなくても、かれらはそのうしろにひかえる王さまのそんざいをはだで感じ、そのたのもしき心のささえを得ていたのです）。ですが今、さいごの戦いへのぞむアルマーク王のことをとめることなどは、配下の者たちにも、だれにもできることはありませんでした）。

「ご安心ください、王さま。」ルクエールが手を胸におき、この勇者たる王にさいだいの敬意をしめしながら、いいました。「わがでしのロクヒューとマレインが、すでに守りをかためております。いくさの飛び火を、けつしてみやこにはいれさせませぬ。」（いくさのおきて、その中には「戦いの場ではないところに行くさのひがいをもたらしてはならない」というものがありました（王城の場合はじっさいの戦いがそこでおこなわれていなかったとしても、戦いの場の中に加わりまです。やはり城というものは、いくさのかなめでしたから。ですがそれにとなりあうみやこなどの場合は、戦いの場としてはみとめられていませんでした）。ですがこんかいのようなくべつないくさでは、そのひがいがまちの中にまでおよんでしまうということは、じゆうぶんに考えられることだったのです。それを防ぐため、みやこの守りのために残った三人のきゆうていまじゆつしたち、ルクエール、ロク

ヒュー、マレインの三人は、エリル・シャンディーンのみやかに、魔法による守りのバリアーを張りめぐらせていました（いぜん、ベゼロインとりででの戦いのおきにもかれらは魔法のバリアーを張っていましたが、こんかいはまちそのものをおおうのですから、大きさがぜんぜんちがいます。ですがこのまちは、ただのまちではありませんでした。そう、このまちにはかの大けんじや、ノランの魔法があちこちにかけていたのです。

そのひとつが、まちの空をただよう巨大な浮かぶ島たち。はじめエリル・シャンディーンのまちを見たときにも、それはおどろきでしたよね。これらの島はまちの美しさをえんしゅつし、まちを水のひがわから守っているのと同時に、このまちをそこからの危険から守るというやくめをも果たしていました。

これらの島のまん中には魔法のエネルギーを大きくさせる力があつて、まじゅつしがそこにバリアーの魔法をかけると、バリアーはこれらの島からどんどんと広がっていつて、あたりをすっかりおおいつくしてしまうのです。つまりすくない人数のまじゅつしでも、いくつかの島さえあれば、まち全体をバリアーですっかりおおってしまうことができました。さすがはノランの魔法、すばらしいですね。まったくむだがありません（）。

「心強いな。」アルマーク王がペガサスのたづなをたしかめながら、静かにほほ笑んでこたえます。

「では、たのむぞ。」

そしてその背に勇者たる王を乗せたペガサスは、お城のバルコニーからさらに高く、このなまり色の空の中へと消えていったのです。

ぽつぽつと小さな雨つぶが、その雲のあいだから落ちはじめてきたときのことでした。

27、人の心

「ひゃああー！ こんな雨、ふるなんてきいてないよ！ だれか、ふるっていったか？」

頭のとっぺんからくつのさきまで、ずぶぬれ。今ひとりの若者が、このどうくつの中へと飛びこんできたところでした。その若者は、人間の若者でした。せいべつは男で、としは十六さいほど。やせていて、きやしやなからだつき。晴れた空の色をしたフードのついた、まっ白なきぬの服を着ていて、青いえりのまわりには小さな白いお星さまのかたちをしたボタンが、たくさんぬいつけられていました（これはただのかざり用のボタンでした）。大きな青いスカーフで、胸もとがかざられております。たけのみじかい青いズボンをはいていて、くつは同じく青。肩からは青と白のしましまでデザインされた小さなかばんをひとつ下げていて、きらきらとかがやく金色のボタンが、そのかばんをかわいくかざっていました。

これほど青と白のデザインのものばかりに身をつつんでいましたが、その若者はそれとは対しよう的な、とてもいんしょう的なかみの色をしていました。肩までのびたそのかみの色は、もえるような赤。青いリボンのついたまっ白なぼうしをかぶっておりますので、よけいにそのかみは、きわ立って赤く見えます。そしてそのひとみの色は、きらめくすいししょうのようなむらさき色。あれ……？ これっでだれかに、にているような……？

「こんな、人っ子ひとりいない山の中のとんきのことなんて、だれが気にするんだよ！」

赤いかみのそのかれのあとから、もうひとり。同じくらいのおねんれの男の若者がどうくつの中に飛びこんできて、いいました。こちらはさいしよのかれにくらべると、背も高く、からだつきもがっしりとしています。うすいみどり色をした鉄のよろいを着ていて、腰には大きな剣がいつぽん、さしてありました。背中には茶色い大きなリュックをひとつ、しよつております。かみの毛は、まっすぐのびた黒いかみ（雨でびしよびしよだから、まっすぐになっっているのかもしれない）

んが)。そしてそのうでは、みどりの木をデザインしたもんしようのはいった、わんしょうをひとつ、はめていました。

あとからはいつてきたこの若者、かれにはあるとくちようがありました。それはひとめでわかるとくちようです。頭の上にぴよこんとつき出た、ふたつの耳。おしりからぴよこんと飛び出した、大きなしっぽ。そう、かれは動物の種族の者。それもおおかみの種族、ウルファの若者でした。ですけどウルファの者で、かみの毛が黒。ということは……、この若者はロビーと同じく、黒のウルファだったのです！ これはびつくり！ 黒のウルファは今やそのすべてが、ワツトの黒の軍勢によつて、とらえられるか、自由をうばわれるかしているはずでしたのに。いったいこの若者は、なに者？

「まったく、おまえといっしょにいると、いつもやつかいごとにもまきこまれるな。だいたい、こつちの山が近道だつていったのは、おまえだろうが。」

ウルファの若者が両手をひざにおいて、ぜいぜいいいながらもんくをいいました。どうやらここにくるまでのあいだにも、かなりたいへんな目にあつてきたようです。それも、赤いかみのあいぼうのせい

で。
「まあまあ、そんなに怒らないでよ、テルくん。しばらく休めば、ぼくの魔法もふつかつするからさ。あはは。」そのあいぼうのかれが、へらへら笑いながらこたえました。どうやらこつちのかれは、かなりのんきというか、あつけらかんとか、らくてん的とか……、あまりストレスをためこまないタイプのようです（なんかうらやましい）。

と、それよりも、魔法？ このかれは、まじゆつしのようなのですね。どうりでからだつきもきやしやで、武器も見あたらなはずです（かれらの武器は、手のひらからどーん！ と出てきますから。マリエルやライアンみたいに。あ、ライアンはほんとうは、まじゆつしじやないんですけど……）。

「このー、もとはといえは、かんじんなときにおまえが魔法を使えなかつたから、こんな目にあつてるんだろ！ おれがいなかつたら、

今ごろおまえは、あの世いきだつたんだぞ！」

テルくんとよばれたウルファの若者が、赤いかみのまじゆつしにいました。つまりそれは、こういうことなのです。ここにくる前、ふたりはとある悪い人たちに、取りかこまれてしまいました。その悪い人たちの本部をたいてやつつけるのがこのふたりのもくてきでしたが、いぎけつせん！ というところになって……、ぼふん！ 「あ、これ、べつの魔法のじゅもん書持つてきちゃった。五時間たたなきや、魔法、使えないや。ごめーん。」 「な、なにー！」

というわけで、ふたりはいのちからがら、ここまで逃げてきたというわけだったので……（わかりやすいてんかいですね。そしてまじゆつしのかれの言葉の通り、まじゆつしは使おうとしている魔法とはべつのまちがったじゅもん書やつえを使ってしまうと、魔法のエネルギーが、ぼふん！ 全部吹っ飛んでいってしまったって、五時間ほどたたないと、魔法がまったく使えなくなってしまうのです。こわいですね。マリエルだったら、ぜつたいにこんなしっばいはしないでしょうけど。カルモトだったらやりそうかな？）。

「わかってるって。ぼくだって、ぼくなりにもじめにやってるんだから。それより、早く、服、かわかそうよ。ぼく、かぜひいちやう。」
そういつて赤いかみの若きまじゆつしは、「くちやん！」と小さくしやみを飛ばしました。

それからふたりはしばらく、この安全な（たぶんですけど）どうくつの中で、ひと休みすることにしたのです。これからふたりは急いで、仲間たちのもとへと帰らなければなりません。作戦がみごとにしっばいしたということ伝えるのは、気が重かったのですが……。

「あーあ、ぼくにもっと、強い魔法の力があつたらなー。」 たき火の前で足をぶらぶらさせながら、赤毛のまじゆつしくんがいました。「テルくんの剣にたよらなくなつて、どっかくん！ ぼくがぎやくに、テルくんのこと、守ってあげられるのに。」

「あのなあ、おれはもう、子どもじゃないんだぞ。それに、いつもいつてるだろ。おれのこと、テルくんつてよぶなよ。テルベルつて名

まえが、ちゃんとあるんだから。」テルベルと名のつたウルファの若者（テルくん）が、赤毛のかれにいつてかえします。

「えーっ、テルくんは、テルくんじゃなーい。テルベルウー、なんて、いいづらいよ。」

「テルベルウーじゃない！ テルベル！」さらにかえってきた言葉にテルベルがまたもんくをいいましたが、あいぼうの方はまるつきり、相手にしておりません（なんか、ふしぎなコンビですね。でもなぜか、気があっているような感じですよ）。

「いいじゃん、テルくん。だからぼくのこと、アーちゃん、つてよんでいいよって、いつてるでしょ。」

「だーから、子どもじゃないんだからな！ もう、おれたちはりっぱな、ウエステイン王団の一員なんだぞ。まったくおまえは、いつまでたつてもあいかわらずだな、アーザス。」

え？ アーザスですって？ それって、あのアーザス？ 悪の大魔法使いのアーザス？

「わーかつてる、つて、いつてるじゃない。見ててよ、ぼくは今に、エプロルドさんにだつて負けない、強いまじゅつしになってみせるからさ。そのために、ぼくはもつともつと、力がほしい。あーあ、どっかに、力が落つこちてないかなー。ぼくが、やくに立ててあげるのに。」

アーザスがそういつて、あたりをきよろきよろとながめ渡ししました。

「らしくして強くなれたら、せわはないつて。力は、自分できずき上げるもんだぞ。」そういつてテルベルは、わきにおいていた自分の剣を取り、そのつかをぎゅつとにぎりしめます。

「見てろよ。おれはもつともつと強くなつて、王団の隊長になつてやる。それでいつの日か、自分の王国をきずくんだ。強い強い、ウルファの王国をな。」

「そしたら、ぼくのこと、きゅうていまじゅつしに使つてよ。」アーザスが、につこり笑っていました。「それまでには、ぼくもけんじやよりも強い、大まじゅつしになつてるからさ。」

「おまえが、きゆうていまじゅつし？」テルベルはそれをきいて、思わず吹き出してしまいます。

「おまえが、それだけの力をつけられたら、の話だけだな。まあ、夢見るだけは、自由だけど。」

「ちよ、笑わないでよ！ きめた！ ぜったい力をつけて、テルくんのこと見かえしてやるんだから！ よーし、見ててよ。ぼくのほんとうの強さを、思い知らせてあげるんだからね！」

「まあ、がんばれよ。」アーザスの強がりにも、テルベルは「あはは。」と笑っていいました。

はるかむかしのことでした。ウルファの王国、レドンホールができる前のお話です。これからこのふたりが、それぞれのそのふくぎつな運命の中へとまきこまれていくことになるのですが、それはまた、べつのぶたい、べつのじだいでのお話……。

そして時間は、ロビーのこの冒険の物語の中へとうつっていくのです。

「ひるむな！ じんけいをととのえろ！ 守りのすきをつけ！」

あたりにこだまする、戦いの音、音、音。そのあらしのような戦いのただ中で、隊のしきをつとめるしきかんたちのさけび声がとどろいていました。

エリル・シャンデーインの戦いがはじまっていたのです。ふり出した雨はさあさあと、白くほそい糸のように戦いの場をおおっています。よろいやたてや、剣のさきから、たまったしずくがぽたぽたと落ちていきます。ですがかれらには、そんなものを気にとめているようなどありませんでした。目の前に立ちはだかっているのは、おそろしいワットの黒の軍勢。黒いよろいの兵士たち、そして見るもおそろしい、かいぶつの兵士たちでしたから（その軍勢の中に、とらわれのわれらが仲間たち、黒のウルファの者たちがいなかったということは、まださいわいなことでした。ですがそれも、よろこんでいいことなのかどうかはわかりません。なぜかれらは、すがたをあらわさない

のでしょう？ それはかんたん。かれらがもはや、兵士として戦うことができなくなっていたからなのです。

黒のウルファの者たちはみな、ベゼロインの戦いのあと、さらに深いやみの中へと落ちこんでいってしまいました。これはやみにとらわれたかれらをあやつって、むりに戦わせたことがげんいんでした。やみにとらわれた者をむりに戦わせることは、その者のからだに、たいへんなふたんとを与えることになるのです。れんぞくしていくさに送り出したりなどすれば、かれらのからだはもうにどと、使いものにならなくなってしまうことでしょう。それはワットにとっても、大きなそんしつです。

ですがワットにとって、このいくさに黒ウルファの者たちが使えないなどということは、大きな問題ではありませんでした。なぜなら……、かれらよりもっと敵の力をそぎ落とし、きようふをうえつけることのできる、おそろしい兵士たちがたくさんいましたから。それはつまり、たくさんのかいぶつの兵士たち、そして魔王ギルハツドのひきいる、悪魔の兵士たちのことなのです。

なかでも、このかいぶつの兵士たち。かれらはまさに戦いのために生まれてきたかのような、おそろしい兵士たちでした。いぜんにもしようかいしております、巨大な目玉だけのかいぶつや、くまやへびや、とかげのようなかいぶつたちが、ここぞとばかりにたくさん。そしてそれがいいにも、とつぜん消えたかと思うと、つぎのしゅんかんには白き勇士たちのそのまった中にあらわれて、やみのたつまきをまきちらし、そしてふたたび、はなれた場所にあられる、そんな、影のような生きもの。さいしよはふつうの大きさですが、こうげきを受けるたびに大きくふくらんでいく（そしてますます強くなつていく）、いのししのような生きもの。そしてごぞんじ、色とりどりのさまざまな巨人のかいぶつたちも、黒の軍勢にはたくさん加わっていたのです（この巨人族の者たちは三日ぶんの食べものをあげて「ぞんぶんにあばれさせてやるぞ。」とやくそくしてやりさえすれば、かんたんに悪の軍勢に味方するのです）。

かいぶつの兵士たちと、ワットの人間の兵士たち。かれらはじつに

たくみに、そしてずるがしこく、われらが白き勢力の勇士たちのことを追いつめていきました。大きな口を持った目玉のかいぶつたちについていえば、このかいぶつたちはまずそのたくさんの小さな手のさきから、ぼひゅーん！ ビームを出して、白き勢力の仲間たちのことをふらふらにしています（かいぶつたちの持っているこれらのさまざまなのうりよくは、これらのかいぶつたちが生まれつき持っている自分ののうりよくでしたので、魔法ではありません。ですからいくさの場で使っても、おきてのいはんとはならなかったのです。黒の軍勢の者たちはそういうところをよくしようちのうえで、かれらかいぶつ**の**兵士たちのことを仲間に加えていました。じつにずるい）。そこに、影にかくれていたワツトの兵士たちが、剣をかまえてとつげき！
うち負かしてしまうというぐあいでした。はじめは安全なところにおいて、相手が弱つたところを痛めつける。じつにワツトらしい、ひきような戦い方です！（しかも痛めつけたあとは、ふたたび、かいぶつたちの影に急いで逃げていくのです。）

もちろんわれらが白き勇士たちも、かいぶつたちなどに負けない、じつにすばらしい戦いぶりをくり広げていました。しきかんのベルグエルムやフェリアル、ライラと同じくらいにはいかないまでも、かれらはみな、すばらしく強い（そしてとてもこせいな）戦いのわざを持っていたのです。敵の剣がまさに今、よろいの上にふりおろされて、ばきーん！ そのまま、こうげきを受けたその者は大けがを負って、地面にばたん！ 剣をふりおろした敵はまさにその光景を見えていました。ですのに……。

「おい、どこを見てるんだ？ おれはこつちだぜ。」

「な、なにー！」

ワツトの兵士がびっくりぎょうてん、うしろをふりむくと……、ばちーん！ 剣のつかで、したたかにいちげき！ 目の前には、お星さまがたくさん！ 白目をむいてノックアウトです。いつのまにうしろにまわりこんだのでしょうか？ すごいー！

ですが、たぜいにぶぜい。たしかに白き勇士たちの中には、つわものたちがそろっています。しかしお伝えしました通り、かれらのうちの多くは、戦いにそれほどなれていない、ふだんはふつうのせいかつを送っているりんじの兵士たち。しだいしだいに黒の軍勢との力の差が広がっていくことは、目に見えていました。そのとき。

「デイルバグだ！」

だれかがさけびました。その場にいる者のみんなが、空を見上げます。

ああ、ついにかれらがやってきたのです。あのおそろしい、デイルバグのかいぶつたち！ そしてその背にまたがる、きようふの騎士たち！

「うわああー！」

遠くの方で、仲間たちのさけび声が上がりました。目の前の敵と剣をまじえながら、みんながそちらを見ると……、ああ、なんてこと！ 今ふたりの兵士たちが、デイルバグのそのするどい両手のかぎづめにつかみ上げられて、空へとはこぼれていってしまったのです！ そして、なんてひどいことを！ デイルバグに乗ったその黒騎士は、高い丘の上、三十フィートほど上空から、その兵士たちのことを地面に放り投げました！ 地面にげきとつしたかれらは、「うう……」とうなって動けなくなりました。もうかれらは、戦うことはできないでしょう……。

「きゆうえんを！ きゆうえんを！」

ひめいにもたさけび声が、あたりにこだましました。

「だめだ！ 守りきれない！ うわああーっ！」

なんとという戦いでしよう。なんとという光景でしよう。

まだ戦いはじまってから、二十分ほどしかたっていません。ですが地面には、あちこちに、うち負かされて、くるしみ動けなくなっている者たちが、あふれていました。

「ここです。ここが、出口です。」

ついにやってきた、その光。もうなん時間も、黒いかべにかこまれた暗いトンネルの中を歩いてきたような気がします（じっさいにはこのトンネルにはいつてからここまで、二時間くらいかかったでしょうか？ 半分以上の時間は、ソシーのせいでもかかりましたが）。出口の光は、とても明るく思えました。ですがそれは、暗いトンネルの中に長い時間いたからの話。トンネルのそとはひるまでもなお暗い、赤むらさき色の暗雲のあつくたれこめる、ぶきみな土地が広がっているばかりだったのです。

ロビーは剣をかざして、トンネルのそとのようすをおそろおそろたしかめてみました（剣の光でソシーがまた、「ひええ……！」と顔をおおってうずくまってしまいました）。ほそいさげ目のたくさんある、赤茶けた地面が広がっております。たいらなところは、すこしばかりしかありません。でこぼこした地面には、同じくでこぼこした岩が、あちこちどころがっていました。まわりは高いものからひくいものまで、たくさん

の岩かべにすつかりかこまれております。中にはとてもしぜんにできたものとは思えないほどの、おかしなかたちをした岩やかべまでありました（おそらくりゆうの怒りのエネルギーやゆがんだ魔法の力によって、かたちが変わってしまったのでしょうか）。さらには、地面に動くものを見つけてよく見てみると、それはまっ黒なねばねばとしたものがぐにぐに動いて、手のようなものをあちこちにのぼしているという、気味の悪いしろものでした（これはトンネルの中の川に浮かんでいたボールと同じ、しぜんのエネルギーとのろいの力があわさつ

てかたちとなったもので、これをつついたりすると、ばちゅーん！
ばくはつして、つつついた者の全身をまつ黒けによごしてしまいました。
ただそれだけなのですが……。

トンネルにはいる前、この土地にやってきたときに感じた、砂やは
いまじりのあつい風。その風はますます強く、この場所に吹き荒れて
いました。とつぜん、えものにつかみかかるりゆうのつめのように、
きようぼうなとつぷうがおそいかかってくることさえありました。
それは岩をもくだき、ばらばらの小石の山にして、空高くうばい去っ
ていくのです。あたりにぶきみにひびき渡る、ふつふつというマグマ
のにえるような音。そしてたえまない、火とこげつきのにおい。

この場所はまさしく、りゆうの怒りののろいのかかった、怒りの山
脈、そのまつただ中でした。

「この道をまつすぐいって、橋を越えれば、アーザさまのお城へと
たどりつきます。で、でも、お城の中は、わたしにもごあんないでき
ません。お城の中は、いつも、部屋やろうかの場所が変わってしまう
からです。正しい道がわかるのは、アーザさまがいおりません。」
ソシーが、目をおおっているゆびのすきまからおそるおそるロビーの
方を見ながら、いいました（もう剣はさやにしまっておりましたけ
ど）。ゆびのむこうから、ロビーがまつすぐ自分のことを見つめてお
ります。やっぱりまだ、うたがわれているのでしょうか？

「う、うそじやありません！　ほんとうです！　わたしでも、アーザ
さまのいらつしやるお部屋へは、いったことがないんです！」

ソシーはけんめいになっていいましたが、ロビーはもう、この人形
の女の子のことをうたがったりなどはいまいませんでした。ロビー
にはふしぎと、ソシーがうそをいっていないということがすつかりわ
かったのです（相手がたとえ、人形であっても）。これも、このふしぎ
な光を放つ剣の、新しい力なのでしょうが？

「わかってるよ。よく、あんないしてくれたね。」ロビーがやさしい
顔で、ソシーのことを見ながらいいました。「きみはもう、帰るところ

にもどっていいよ。ここからさきは、ぼくひとりでも、だいじょうぶだから。ありがとう。」

ロビーのやさしい笑顔。ソシーは今まで、だれかにこんな笑顔をむけられたことなんてありませんでした（アーザスにもです）。ソシーのやくめは、アーザスに害をなす敵を、あざむき追いはらうこと。今までソシーはアーザスのそばで、たくさんのつわものたちのことをわなにかけて、その（いつもはしまつてある）するどいつめでおどかし、追っばらつてきたのです。そのたびにソシーにむけられるのは、きょうふとにくしみのまじった、つめたいひとみ。今までソシーは、それをなんとも思つてはいませんでした。それがあたりまえでしたから。ですけどこのロビーという少年は、ちがったのです。ソシーはいつものように、ロビーのことをだまし、わなにかけました。必要ならばいつでもいのちだつてうばえるんだぞとまでいって、おどかしました（これはたんなるおどしでしたが、いつもこうかはばつぐんでした）。ですけどロビーは、ちがったのです。そんな自分にやさしいほほ笑みを送つて、あんないしてくれたことへのおれいまでいってくれました。こんなことはソシーにとって、はじめてのたいけんでした。

わたしは、あなたのことをわなにかけて、だまそうとしていたというのに……。

ソシーは思わず、胸がきゅんとなつてしまいました（お人形ですけど）。

なんでそんなにやさしいの？

ソシーは今まで、こんな気持ちになつたことなどはありませんでした。胸のおくにこみ上げてくる、あついおもい……。ま、まさか、ロビーに、恋？

「どうかしたの？」「まごまごしているソシーに、ロビーがいいました。

「い、いえ、なんでも！」ソシーが両手をぶんぶんふつて、それこたえました。

「あ、あの、わたし、アーザスさまのお城までは、ロビーさまのこと、ちゃんとごあんないします！」ソシーがつづけけます。「だ、だから、もうちよつと、おそばにいさせてください！」

「えっ？」ロビーは思わずたずねてしまいましたが、ソシーは顔を真っ赤にして（お人形ですのに）、目をそらしてしまいました。

そんなソシーにロビーはちよつときよんとしながらも（ロビーにはそういうことは、まだよくわかりませんでしたから）、やがてかのじよに手をさしのべて、いいました（ソシーがトンネルのすみっこにありましたので、手をさしのべたのです）。

「ありがとう。じゃあ、お城の入り口までお願いね。だいじょうぶ、剣は、ちゃんとしまっておくから。さつきはごめん。ほくも、つい、むちゆうで。」

さし出されたロビーの手をおそろおそろにぎって、ソシーはますます顔を赤くしてしまいました。そして顔からぼふん！ 湯気を立てて、いっばいいいっばいのじょうたいになって、ロビーにいったのです。「は、はははい！ せいっばい、つとめめさせて、いたただきますす！」

ロビーは首をかしげて、ふしぎがるばかりでした。

ぎゅ、ぎゅいいーん……。

うす暗い空のもと、暗い影を落とすひっそりとした木々のあいだから、同じくらいひっそりと、おかしな音がなり出しました。そしてつぎのしゅんかん。

「うてえー！」

ごおん！

ひゅるるる……。

どつごおおくん！

めいちゆう！ え？ なんのことか？ ですって？

「ごほん！ ごほん！ な、なんだあ〜！」

まっ白なけむりの中から今、ごほごほいいいながら、黒いよろいを着た兵士たちがたまらずに飛び出してきました。たいくつで大きなあくびをしたり、うつらうつらしていたところに、どかん！ とこのいちげきです。なにがなんだか？ わけもわからないまま、手にしたやりも放り出して、かれらはとりでの入り口のそとまで走って逃げてきました。

かれらのいでたち、それを見れば、かれらがなに者か？ ということがすぐにわかりました。かれらは今ではすっかりおなじみ、そう、黒いよろいがたの、ワットの（いっぱんの）兵士たちだったのです。

「全兵！ とつげ〜き〜！」

その声のあとに、さらなる追いうちが！

ぎゅいんぎゅいん、ぎゅいんぎゅいん！ ごいんごいん、ごいんごいん！

ご、この音は！

「ぎやああ〜！ なんかきた〜！」

ふいをうたれたワットの兵士たちは、もうなすすべもありません。地面にはいつくばって、あっちへすってん！ こっちへころりん！ けんめいに逃げまどうばかりでした（そしてそのほとんどは、あつというまに、飛んできた岩のあみからめ取られて動けなくなってしまいました）。

なにがとつげきしてきたのか？ みなさんにはもう、おわかりですよね。

ここはリュインのとりで。そして今、ワットにうばわれたそのとりでを取りもどすべく、十七体の岩のロボットたちに乗った白き勇士たちが、とつげきしていったのです！（はじめの「どつごおおくん！」はこのロボットのうでからはっしやされた、岩のミサイルでした。いぜんレイミールがまちがってはっしやさせてしまった、あれです。ちなみに、こんかいのこのミサイルをはっしやさせたのも、またレイミールでした。こんどはちゃんと、敵のどまん中にめいちゅう！ すばらしいうでまえです。それにしても、このミサイル、おそろしいりよく。こわいですね。

ところで……、かれらはまた、このリュインの地にとんでもないほどの早さでたどりつくことができました。シープロンドでリストールのことを見送つてからここまで、かれらは岩のロボットたちの「陸走しやりん船モード」でつつ走つてきたわけですが、かかった時間は六時間十分！ シープロンドへむかうときも六時間半というきょういのスピードでたどりつくことができましたのですが、それよりもさらに二十分も早く、この地に帰つてきたのです。これはいきとちがつて、よけいな森や岩場を通つていなくてすんだためでした。かれらはこのさいごの戦いの場に、文字通り「とつてかえして」きたのです。）

そのけっかは？ もういうまでもありませんよね。なにしろワットの兵士たちは、今そのほとんどが、さいごの大きな戦いであるエリル・シャンデーインの戦いへとむかつていましたから。そのためこのリュインのとりでには、敵のしゅうらいにそなえたさいていげんの人数、六十人ほどしか、兵士たちが残つていなかったのです。そしてそのかれらも、まさかほんとうにこのとりでをおそつてくるような敵がいようとは思つてもいませんでしたから、かんぜんにゆだんしてしました（かれらのしきかんたちもみな、エリル・シャンデーインの戦いの場にいついて、るすでしたから。先生がるすにしていたら、せいとたちはのんびりしちやいますよね。それと同じなのです）。

「せいぎの怒り、思い知れ！ ロック・デーブズィング・ジャスティス・ブロー！」

逃げまどう兵士たちへの、ようしやない岩のパンチこうげき！

「ぎゃああ〜！」ワットの兵士たちは下の地面ごと飛ばされて、ひゅううう……、べっちゅん！　とりでの見晴らし台の上にまで、大の字に吹っ飛ばされてしまいます（それでもちやんと計算して、大げがをしないでいどには手かげんしてあげていました）。

それからロボットたちは、とりでのかべをよじのぼっていつて……、「なんだなんだ？」と見晴らし台に飛び出してきた兵士たちにむかって、さらなる追いうち！

「せいぎの剣を、受けてみよ！」パイロットのかけ声がかかり、一体のロボットが見晴らし台の上に、どん！　飛びうつつて剣をかまえました！

「ロック・デイスハートニング・ジャステイス・トルクブレード！」
(長い！)

巨大な岩の剣が、ぶううん！　たつまきのようにあたりをなぎはらいます！

「ぎゃああ〜！」ワットの兵士たちはそのたつまきにあおられて、まるで葉っぱのように飛ばされてしまいました（さつきからワットのみなさんには、「ぎゃああ〜！」ばかりでかわいそうですが……）。

気がついてみれば……、ものの三分ほどで、すべてが終わりよう！　リュインのとりでに残っていた六十名ほどのワットの兵士たちは、ぜんいん武器も投げすて、両手を上げて、白はたこうさん！　みんなまとめて岩のロープでひとくくりにされて、とらえられてしまいました。ばんざーい！（やはりよきせぬめんどうが生まれることをさけるために、リブレストたちはワットの兵士たちを、みんな残らずつかまえてしまうことにしたのです。リュインとりでのつくりのことであれば、こちらにはとてもたのしい仲間たちがいて、とりでのどこに入り口があるのか？　ということもすべて分かっていましたから、そこをみんなふさいでしまうことで、ワットの兵士たちのことをみんな、とりでの中に追いこんでしまうことができました。そのため仲間たちは、ずいぶんとあっけなく、ワットの者たちのすべてをとらえてしまうことができたのです。そしてもちろん、つかまえたワットの者たちには、リュインのろうやの中にはいつてもらうことにしました。

ワットのみなさんには気のどくですが、まあ、しばらくそこで、頭をひやしていてくださいね。）

そして。

ぶしゅうう……。。

一体のロボットの、頭のとっぺんがひらいて……。。

「がーっはっはっは！ たわいもないわいー！」

ごぞんじ、リブレストさん！ おつかれさまです！

「リュインのねずみみたいじも、これで終りようだわ。」

「おおーっ！」

しきかんにつづいて、あたりのロボットのパイロットたちも、つぎつぎと（ロボットの頭の上から）あらわれました。

「けんじやリブレスト、ばんぎーいー！」「ベーカーランドに、えいこーう！」「われらは、むてきだ！」

「リュインをわれらの手に、取りもどしたぞー！」

よろこびにわきかえる、白き勇士たち。ほんとうにほんのすこし前まで、かれらはここで、ほこり高き日々を送っていたのです。それがとつぜんにおそわれ、とらわれの身となり、たいへんなくろうのもと、今こうしてふたたびこのとりでを取りもどしましたから、そのよろこびもとうぜんのことでした（さいごはずいぶん、あっけなかったですが……。でもそれは、かれらが強すぎるからなのです。こんな巨大な岩のロボットたちなんて、ほんとうはほとんど、はんそくわざですものね。

ちなみに、こんかいのように、くにとくにとの正式なくさではな
い戦いがとりででおこなわれる場合、そのための取りきめもしっかり
とさだめられていたのです。やはりとりでというものは、文字通りそ
のくにとつてのかなめとなる、ひじょうに重要なものでしたから。
そのためとりでの戦いについても、いろいろな場面に応じて、こま
かく重要なルールがもうけられていました。

まずは、「いくさいがいの場合において、とりでを四十人以上の者た

ちでこうげきすることはできない」というルール。つまり四十人以上の者たちでとりでをこうげきしようと思ったら、それはくにとくにとの正式なくさあつかいにしなければならぬということなのです。四十人以上の者たちを使つてかつてにとりでをこうげきして、それで戦いに勝つたとしても、とりでを使用するけんりはみとめられず、相手にそのとりでをかえさなければなりませんでした。

こんかいの戦いの場面でも、じつはリブレストたちはこのルールをしっかりと守つて戦いをおこなつていました。かれらがとりでにせめこんだのは、十七体の岩のロボット兵士たちに乗つた、三十四名の者たちのみ(岩のロボット兵士たちはただの「工作物」でしたので、兵士としての人数に数えられませんでした。ちよつとずるいですが……)。リブレストたちはこの人数をしっかりとワットの兵士たちにしめしたうえで、戦いをはじめていたので(いちばんはじめにぶつぱなした岩のミサイルについては、かんぜんにふいうちでしたか……)。

そしていくさではないとりででの戦いであれば、まじゆつしと兵士たちは、ともに戦いをおこなつてもよいときだめらていましたが、やはりとりでをせめるがわのまじゆつしについては、魔法で相手をこうげきすることがきんじられていたのです(とりでを守るがわのまじゆつしの場合は、とくべつな取りきめとして、魔法で相手をこうげきすることがみとめられていました。これはいわゆる、「ふりかかる火の粉ははらわねば」というやつです)。ですからリブレストも、魔法ではない岩の「工作物」のロボットたち(と岩の「工作物」のミサイル)を使つて、とりでをこうげきしました。

ちなみに、相手の人数が四十名みまんであるか? ということや、こうげきの魔法が使われていないか? ということについては、とりでにそなえつけておくことがきむづけられているきようつうの魔法センサーによつて、しっかりとかくにんされました。いはんがかくにんされると、このセンサーによつてそれが本国へと伝わり、すべて明らかとなつてしまうのです。しっかりとしたシステムができていますね!)。

しかしかれらには、つかのまのよろこびにさえよいしれている時間
もありませんでした。リュインとりでを取りもどしたことは、そのさ
きにあるもつと大きなしめいへの、さいしょのいっぽにすぎなかった
のです。敵の待つもうひとつの、そしてさいごのとりで、ベゼロイン
のだっかん。それこそがベーカーランドをしようりへとみちびくた
めの、そしてこのアークランドを悪の手から取りもどすための、かれ
らの大いなるしめいでした。

「もう、いくさははじまってしまっているのでしょうか？」見晴らし
台の上から、下にいるリブレストへ心配げに声をかけたのは、われら
がゆうかんなる仲間のひとり、ハミール・ナシュガーでした。「この大
きなとりでにさえ、ワットの兵はほとんどいませんでした。となる
と、敵軍は今、ひとつにしゅうけつしているはずですよ。」(ちなみに、ほ
かでもありません。さつき見晴らし台の上で、剣で敵をなぎはらう大
わざをくり出してワットの兵士たちのことを吹っ飛ばしていたのは、
このハミールだったのです。すばらしいいちげきでした。わざの名
まえは、かれが考えたんでしょうか……?)

「エリル・シャンドーインが、心配でなりません。」リブレストのと
なりのロボットの上から、こんどはハミールのめい友、キエリフ・ア
ートハーグがいました。「仲間たちは、きつと、くせんをしいられてい
るはず。われらの助けが必要です。」(ちなみに、ほかでもありません。
さつきとりでの前で、強力なパンチのひっさつわざをくり出してワッ
トの兵士たちのことを吹っ飛ばしていたのは、このキエリフだったの
です。すばらしいいちげきでした。わざの名まえは、かれが考えたん
ででしょうか……?)

「うむ。もろもろ、その通りだわい。」リブレストが「ふん！」と鼻
をならして、こわいくらいの顔をしていいました。

「だから、わたしたちのやくわりは、ひとつだわ。わかるな？」

そのリブレストの言葉に、岩のロボットたちの上から飛び出していた
仲間たちは、そろって口もとをゆるませます。

「ベゼロインを、われらの手に！」ハミール、そしてキエリフが、そ
ろってさげびました。そして、それにつづいて……。

「おおおーっ！」

仲間たちのみんなが、こぶしを天高くつき上げてさげんだのです！

「そういうこったー！」リブレストがにやりと笑みを浮かべて、みんなの気持ちにこたえました。

「ぐずぐずしては、おられんぞー！ われらのしんげき、とまらず！

さあ、いくぞい！ おつぎは、ベゼロインじゃい！」

リブレストさん、さいこう！ なんといいカリスマせいなのでしよう！ もうなんというか、オーラがちがいます（顔はこわいですけど）。リブレストはけんじゃであり、戦士であり、そしてもんくなしに、さいこうクラスのしきかんでもありました。みんなの力をなんばいにもひき出し、勇気を高める。このすばらしきしきかんのそんないは、白き仲間たちの心を大いにはげまし、すばらしいだんけつの力をもつて、かれらの思いをひとつにまとめ上げたのです（ずっと山おくにひっこんでるだなんて、ほんとうにもつたいない！）。

「からっぽにしてはおけんからな。」リブレストがそういって、なにやらじやらじやらと、上着のポケットからなにかを取り出しました。

リブレストが取り出したのは、小さなミルク色の、まんまるの石でした。それも、たくさん。

「るすは、こいつらにまかせておくとしよう。こいつらになら、みんなまかせてだいじょうぶだわい。」リブレストはそういって、まんまるのそれらの石を、とりでの入り口にむかってばらばらとばらまきます。すると！

地面に落ちたそれらの石が、見る見るうちに、身長三フィートほどのちっちゃな岩の兵士たちへとすがたを変えました！ まさにみんなが今乗っている岩のロボットたちの、ミニチュアばん。それをまるつこく、デザインしなおしたような感じですよ（なんかかわいい）。手にはこれまたちっちゃいながらも、ちゃんと岩の剣がにぎられていました。

「せいれーっ！」リブレストの言葉に、岩のちびっ子兵士たちがぴよこぴよこ歩きながら集まって、横に二れつになって、びしっ！ きれ

いにならびます。その数は、みんなのロボットたちのばいの、三十四体！（ちなみに、ミルク色の石いつこから、一体のミニチュア兵士があらわれます。つまり、ポケットに三十四この石がはいっていたわけです。かなりの量ですね……）

「るすばんは、おまえたちにまかせるぞ。このとりでを守りぬけ。」
リブレストがそういうと、ちびつ子兵士たちはみな手をちやかちやかと動かして、それにこたえました（たぶん、「りようかい、ボスー」というへんじをしているんだと思います）。

「さあて、乗ったな！」それから、リブレストがロボットに乗りこみ、かくパイロットたちにいいました。「今いちど、陸走しやりん船モード！」

ロボットたちが、ぐいいん！ ふたたび、岩の船のかたちへとすがたを変えていきます。

「ぎひようせつてい！ 一三九五、七二〇九！」

もう休むひまありません。そして休む気もありません！ わき立つせいぎの心をもやしたわれらが勇士たち。かれらを乗せた十七体の岩のロボットたちは、こうしてつきなるもくてき地、ベゼロインへとむかつて、新たなしんげきをかいししていったのです。

もうだれにもとめられない！

リブレストべつどう隊、出動！

「いよいよですね、キャプテン。」

リブレストのとなりで、副そうじゅうしのレイミールがいました（リブレストのことをキャプテンとよぶのが、すっかりはまってしまったみたいですね）。

「いよいよ、あれが見られるんだ。楽しみだなあ、うふふ。」

「（うらうら、あそびにいくわけじゃないぞい。）」にこにこしているレイミールに、リブレストがこたえました。「だーが、わしもちよつぴり、胸がおどるわい。」

そうじゅうかんをにぎる手に力をこめて、リブレストがさいごにい

いました。

「お待ちかね。こいつのほんとうのパワーで、れんちゆうに大あわを吹かせてやろうかの。」

このロボットの、ほんとうのパワー？ それはいったい……？

ぽつぽつとふり出した雨。そのうす暗い空のもと、たくさんの水けむりを上げながらかれらは進んでいきました。いっちょよくせんに、さいごのもくてき地へとむかって。

もうもうとわき上がる水じょうき。はるかなならくの底へとつつく岩のさけ目から、ぶしゅー！ 大きな音を立てて、まっ白なあついで湯気が立ちのぼっていきます。

あたりの岩や地面は、もえるような赤一色にそまっています（そしてあちらこちらの場所では、ほんとうにほのおが上がってもえていたのです）。地面に落ちている小石をふみしめるたびに、ぱきっ！ というかわいた音を立てて、小石はこなごなにくだけてしまいます。ときどき、赤い道は流れるようがんのかたまった、まっ黒な川にぶつかることがあります。おそろおそろ足を乗せてみますと、その表めんはすっかりかたまっていて、その上を歩くことができました（ですがまだじんわりとあついのです。あんまりじつとしていたら、やけどしてしまうことでしょう）。

まさに、じごくのような場所。そう、ここは怒りの山脈。アーザスの城へとつづく、りゅうの怒りにおおわれた、もえるように赤い岩と火の土地だったのです。

ロビーと人形の女の子ソシーは、今そのじごくのような赤い道を、アーザスの城へとむかって進んでいるところでした。思いもかけず、ともに道をゆくこととなったロビーとソシー。ソシーはアーザスの手下です。それは変わりありません。ですがロビーは、このおそろしい道をゆくのに、たとえそれが敵のがわの者であろうとも（そしてお人形であろうとも）、ともにゆく者がいてくれることをうれしく思いました。この場所にきたら、だれだってそう思うはずです。どんなにゆうかな者であろうとも、心がくじけてしまいそうになるほどの、

のろわれた場所……。ロビーは、もえるけついを胸にひめています。待ち受ける運命へのかくごなんて、とつくのむかしにできております。ですがそれでも……。この場所のいっぽいっぽをふみしめるたびに、自分の気持ちがおしつぶされていくということが、ロビーにはわかりました。

この場所は、そんな場所でした。りゅうの怒り、そしてアースののろい……。そんなおそろしいエネルギーたちがいりまじって、まるであらしのように吹き荒れている、そんな場所なのです。だれだつて、こんなところにひとりでいたいはずありませんでした。

「もうじきですよ、ロビーさま。」ソシーがロビーのうでを取っていいました。「あとすこしで、アースさまのお城が見えてきます。」

ソシーは上きげんで、ロビーにぴったりくっついていました。さきほどまではすっかり赤くなってどきまぎしてしまっていましたでしたが、だいにロビーのそばにいられることが、うれしくてしかたなくなってきたのです。自分にできることなら、なんでもしてあげたい。ソシーはすっかり、ロビーにむちゆうでした（やつぱり恋なのでしょう。ロビーはなんだか、くすぐったい気分でしたが）。

そして、そのせまい岩かべのあいだをくぐりぬけると……。

「きた……。ついにここまで……」

目の前に広がる光景を目にして、ロビーは思わずそうもろしました。

そこに広がっていたのは、おどろきの光景でした。そしてなんと、おそろしい光景でした。

赤い道は大きなひとつの岩山をぐるりと取りかこむように、つづいていました。そこから右にむかって、道がいつぽんえだ分かれしております。そのはるかさきは、切り立った岩かべにぽっかりと口をあけている、黒いどうくつの中へと消えていました。どうくつのはるかな上には、まっ黒なけむりにおおわれた、山のいただきが見えかくれしております。その山こそが、怒りの山脈のそのてっぺんでした。そし

てその山の岩かべに口をあけたそのどうくつこそ、ほかでもありません。三十年前、ノランにみちびかれたアルマーク、アルファズレド、ムンドベルク、メリアンの四人の若き王子たちが、おそろしい赤りゆうとのさいごのけっせんへとぞんだ、そのぶたいだったのです。

ですが今、ロビーの冒険において重要なのは、そちらの道ではありませんでした。ロビーの目をくぎづけにしたもの。それが今まさに、ロビーの目の前にあったのです。

そう、アーザスの城でした。

なんとというおそろしい城なのでしょう！ 赤い道は、岩山の上にきずかれているその城のまわりをかこむ、だんがいぜつべきのふちにそつてのびていました。だんがいは目もくらむような深さ、そして大きいです。落ちたらまず、助かりません。その底がないかのようなまっ黒なあなの上に、巨大な石づくりの橋がいつぽん、かけられています。その橋が、がけのむこうにそびえるアーザスの城へとつづく、ゆいいつの道になっていたのです。

ですが、そんなだんがいぜつべきや石の橋よりもなによりも、いちばんおそろしいのは、やはり目の前のアーザスの城、そのものでした。こんなものが、この世にそんざいするのでしょうか？ そしてそんざいしていいのでしょうか？

城……、たしかにそれは、アーザスの住む城でした。ですがその城は、みなさんが思いえがくどんなお城にもあてはまらないことでしょう。どんな悪夢にだって、あらわれないことでしょう。

もはやこれを、城とよんでいいのでしょうか？

そのたてもの、城は、赤くぐにぐにとぶきみに動きまわり、まがつたりのびたりしていました。その表めんには、たくさんの目や口や手がついていました。どろどろとした赤やもも色やオレンジ色のゼリーのようものが、そのいちめんをはいずりまわっていました。目をかたどったもようのはいった数えきれないほどたくさんのとびらやまどや塔が、その中からとつぜんあらわれては、またぐにぐにとし

たかたまりの中へと消えていきます。あちらでもこちらでも、大きなあわがぷくーつとふくれ上がっては、ぼぶん！ というにぶい音を立てて、はじめていききました。意味を持たないうめき声のような音が、あたりいちめんひびいていました。

アーザスは、なんとというものを作り上げたのでしょうか。

この城は、生きていたのです！（みなさんはこの城のことを、すでに目にしています。ですがそのときは、この城の一部分しか見ることはできませんでした。第十六章のはじめ、アーザスが花にかこまれたテラスの中で、本を読んでいる場面がありました。あのときみなさんは、このおそろしい城の一部分を見たのです。読みかえしてみるのもいいですが、あんまりいい気持ちにはなれないでしょう。）

「なかなか、すてきなお城でしょう？」 ソシーがにこにこして、ロビーにいいました。「アーザスさまが、人のたましいを生きたバリアーに変えて、この城を守らせているんです。うかつに近づいたら、ぱくん、と食べられてしまいますよ。あ、でも、ロビーさまはへいきです。アーザスさまが、ロビーさまには手を出さないように、めいれいしてありますから。」

ソシーはむじやきにいいましたが、ロビーはなんとも、やるせない気持ちになりました。この城のことをひとめ見たロビーには、すぐに、ソシーのいった言葉の意味がわかりかきました。ソシーのいう生きたバリアーとは、このアーザスの城のひょうめんをおおっている、その気味の悪いゼリーののような物体のことをさしていました。そう、このゼリーはまさに、人の生きたましいそのものでできていたのです！ この城のまわりには、こんなかわいそうなたましいたちが、生きたバリアーとして、それこそなん百なん千と使われていました。いったいアーザスは、人のいのちをなんだと思っているのでしょうか！ ロビーの手が、わなわなとふるえました。

「こんなことを、ゆるしてはいけないんだ。」ロビーがそういつて、きつ、と口びるをかみしめました。ですがソシーには、ロビーの気持ちが変わりません。ソシーはアーザスによって作られました。ですからアーザスにとってあたりまえのことは、ソシーにとってもまた、

あたりまえだったのです。

人のたましいの力を悪用したエネルギー。やみのエネルギー、のろいのエネルギー。それらのものは、みんなぜったいに手を出してはいけない、まちがった力です（魔女のアルミラも、まちがった力に手をそめました）。ですがアーザスにとっては、そうではありませんでした。すばらしい力、あふれるほどの力。力をもとめるアーザスにとって、力のしゅるいなどはどうでもいいことでした。それがどんなきんだん力であろうとも、強い力さえ得られれば、それでよかったです。

ソシーもまた、アーザスと同じ考えをうえつけられていました。それがどんなしゅるいの力であろうとも、強い力が得られるのであれば、それを使うことはあたりまえのことだと思っていたのです。ですからソシーにとっては、人の生きたたましいをバリアーにりようするなんてことは、あたりまえのことなのであって、なにも悪いことだなどとは思っていませんでした。かのじよにとっては、このおそろしい城も、すばらしい力にあふれた「すてきなお城」だったのです。

ですがロビーは、ソシーのことを悪く思ったりなどはしませんでした。ロビーには、すぐにわかったのです。ソシーの心はアーザスの悪い心によって、もともと悪く作られてしまっているんだと。そもそもの悪は、アーザスただひとりなのです。アーザスとのけつちやくをつけ、ソシーからアーザスのやみの力を取りのぞいてしまえば、ソシーもきつと、正しい心になるんだ。人の心を取りもどすんだと。

「ソシー。」ロビーがいきました。「この世界には、ほんとうにたくさん、すてきなものがある。きみの知らないすてきなものが、山ほどあるんだ。」

「ぼくもまだ、ほんのすこしのことしか見ていない。でも、それでも、とてもとてもたいせつなことを、たくさん学ぶことができた。人を思いやる心、それは、そのとつてもたいせつなものうちの、ひとつだよ。」

ロビーはそういって、ソシーの手を取りました。

「きみは、やさしい。だからきみには、ぼくのぶんまで、もつとたく

さんの世界を見てほしい。みんな終わったら、ソシー、きみは、その世界に出るんだ。ぼくはたぶん、もう、ここから出られないと思う。いっしょにいけたらよかったんだけど……。きみはきつと、その世界で、たいせつなものをたくさん見つけることができるはずだよ。」

え……？ ソシーはとまどいの表じようを見せました。ソシーにはロビーのいつていることが、よくわからなかったのです。今までソシーは、このアーザスの土地からひとりはなれたことなどは、いちどもありませんでした。アーザスのおともとして、「悪い人たち」のことをこらしめにいったことならあります。ですがそのときでも、ソシーはアーザスのそばにずっとついていて、その世界のことをじっくり見てみようだなんてことは、ぜんぜん考えてもいないことでした。ですからソシーは、その世界のことなんて、ぜんぜん知らなかったのです。知りたいと思ったことすらありませんでした。ソシーにとっては、ただアーザスのそんざいだけが、すべてでしたから。

ソシーにとっては、この場所がふるさとなのです。生みの親のアーザスさまのことをさしおいて、この世界からひとりはなれるだなんてことは、ソシーにはまったく考えられないことでした。そこになにかたいせつなものがあるなんてことは、考えたこともありませんでした。

そして、ロビーのいった言葉です。

ぼくはたぶん、もう、ここから出られない。

ロビーはずっと前から、そう感じていたのです（ライアンとわかれることになるだろうと感じていた、そのときから）。アークランドをすくうため、アーザスのことをうち破るために、ぼくはそれとひきかえに、いのちを落とすことになるだろう。ロビーはそう感じていたのです。

それはもちろん、はつきりとだんげんできるようなものではありません。ですがロビーの心からは、どうしても、その思いが消えることはありませんでした。ぼくは、アーザスと運命をともにすることにな

る。それが自分の運命なら、それで世界をすくうことができるのなら、ぼくはウルファのほこりを持って、それを受けいれよう。ロビーはその思いを、かくごを、胸にひめつけながら、ここまでやってきたのです。でもライアンには、とてもこんなことはいえないな。そう思いつづけながら……。

ロビーのその思いは、ソシーのその作りものの心にも、たしかに伝わりました（人の心ではない、お人形の心にもです）。ソシーはただ、ロビーといっしょにいたいとだけ思っていました。ですがロビーの思いを前にして、しだいにソシーの心には、おそろしいげんじつがつきつけられていったのです。

アーザスさまは、ロビーさまのことを、なき者にしようとしている……？

ソシーはアーザスに、こういわれていました。ここにやってくるロビーというウルファの少年のことをあざむいて、時間をかせいでおいで。その気になれば、いつでもいのちだつてうばえるんだぞと、おどかしてやればいい。それはただのじょうだんだとばかり思っていました。ロビーというその相手のことを、ちよつとおどかしてやるための、ただのじょうだんだと。でもアーザスさまは、ほんきで……。

「そんな……」ソシーのからだか、かたかたとふるえました。

「いや……。いやです、ロビーさまー！　ずっといっしょにいてくださいー！」

ソシーがロビーに飛びつきました。ロビーの両うでをゆさゆさとゆすって、ひっしにくい下がります。ですがロビーの目を見たとき、ソシーにはこれは、自分にはどうすることもできないことなのだと、はつきりとわかりました。

「ぼくの、運命なんだよ。」ロビーが、おだやかな顔をしていました。「ぼくは、自分のしめいをやりとげる。そして、ぼくのちかいのことも、きつと果たしてみせる。」

ロビーのうでをつかむソシーの手の力が、弱まっていきました。は

じめて、人を好きになったソシー。はじめて、人の心にふれることのできたソシー。なんとという運命なのでしょう。その相手はもうじき、自分の手のとどかないところへと行ってしまおうといていたのです……。

「ふええ……」

ソシーは、ひつくひつくと泣きました。こはくのはまったその作りもののひとみからは、なみだをこぼすことはできません。もしソシーに、なみだを流すことができたのなら。きっとそのひとみからは、大つぶのなみだがぼろぼろあふれ出ていたことでしょう。ソシーはたくさん泣きました。人の心を持って、たくさん泣きました。

ロビーはそんなソシーのことを、やさしくだきしめてあげました。

「あの橋を、渡ればいいんだね。」ロビーが、ゆく手に待ち受けるいっぽんの石の橋をさして、いいました。

赤い道のさきには、にぶいはい色の石でできたぶきみな橋がいつぽん、かかっています。はば三十フィートほど。城の入り口まで長さ百ヤードほどもある、巨大な橋でした。

橋の両わきには、らんかんがつくられていました。そしてそのらんかんの上に、ぶきみなものが乗っていたのです。およそ七ヤードごとに左右ひとつずつ、おそろしい悪魔のような生きものちようぞうが乗っていました（じっさいには乗っているのではなくて、らんかんと同じ石からほり出されていきました）。みなさんの世界でも、古いお城や教会などのやねの近くで、にたような石のぞうを見ることができません。それはガーゴイルとよばれる、悪魔などのすがたをかたどった石ぞうで、雨を流す「雨どい」のやくめを持っているほか、魔よけのこゝろがあるともされているものでした。

ですがこの橋のらんかんに乗っている石のぞうは、魔よけなんでものではぜつたいにありませんでした。むしろ、わざわいをもたらすためにつくられていたのです！ つまりこれは、この橋にかけられたわなでした。かんげいできない者がこの橋を渡って、わが家にやってこようとしたら……、ぼん！ 石ぞうの目や口から、おそろしいいりよ

くのろいのエネルギーが飛び出して、おそいかかるのです。

ほんとうなら、ロビーがこの橋をぶじに渡るなど、できようもなかったことでしょう。ですがロビーには、わかったのです。アーザスは、ぼくのことをむかえいれている……。ロビーはこの橋を渡ってもだいたいようぶなのだということを、はつきりと感じ取っていました（はじめは時間をかせぐようにソシーにめいれいしていたアーザスですが、ソシーがそのつとめにしっぱいしたということは、アーザスにはすぐにわかりました。アーザスには、ロビーとソシーのいるところがわかるのです。ですからかれらがトンネルをぬけて自分の城の入り口のところまでやってきたということも、アーザスにはすでにわかっています。それが意味することは？　そう、つまりソシーが、時間かせぎのつとめにしっぱいしたということなのです。こうなつてはもうアーザスも、時間をかせぐことはできません。それならばよていをへんこうして、もうロビーのことをむかえいれてしまおう。もはや楽しみは、早い方がいい。それがアーザスの考えでした）。

「わたし、アーザスさまのことを、せつとくしてみせます。」うつむいていたソシーが、急にロビーにいいました。

「ロビーさまのことをひどい目にあわせないように、せつとくしてみせます。アーザスさまは、ロビーさまの持つ、なにかをほしがっていました。くわしくはきけませんでしたが。だから、それを渡せば、ロビーさまのいのちまでは、うばったりしないはずです。」

ソシーがいましたが、ロビーにはわかっていたのです。アーザスは、そんなにあまい相手ではないということ。

「だから、アーザスさまのところまで、いっしょにいかせてください！　道はわからないけど……。きつと、おやくに立ってみせますから！」

そんなソシーの言葉に、ロビーがやさしくいいました。

「ありがとう、ソシー。その気持ちだけで、じゅうぶんだよ。でも、ぼくは、ひとりでいかなくちや。きみは、安全なところにかくれているんだ。すべてが終わったら、ここから逃げ出すんだよ。」

ソシーはいてもたってもいられませんでした。なんとかしなけれ

ば、ロビーさまは、ほんとうに殺されてしまう！」

「いきましようー！」ソシーはロビーの手を取って、ひっぱりました。たまらずロビーも、ソシーといっしょに橋のそばまで近づいていきます。

「この橋なら、安全です。アーズさまは、ロビーさまのことをこらげきしないように、この橋にめいれいしてあります。ですから、ロビーさまならだいじょうぶ。それにもちろん、わたしもだいじょうぶです。わたしは、このお城の住人ですから。」

「ちよ……、待って、ソシー！」ロビーがいましたが、ソシーはロビーの手をぐいぐいひっぱって、いうことをききません。そのうちソシーはロビーからはなれて、ひとりでかつてに橋の上までいってしまいました。これでは、いっしょにいかないわけにはいきません。しかたない、安全なところまでだったら、いっしょに……。ロビーがそう思ったときでした。

「ロビーさま、早くいきま……」ソシーの言葉が、そこでとぎれました。にぶい、なにかの音がひびいたような気がしました。

「え？」

ソシーの声。そして……。

「ソシー！」

ロビーのさげび声。

はじめ、ソシーにはなにが起こったのか？ まったくわかりませんでした。しかししだいにソシーは、おそろしいじじつを知ることになったのです。

足が……、ない……。

くずれていく、自分のからだ。ソシーのからだは、下半分がかんぜんには切りはなされてしまっていました。おなかのあたりが、ぼろぼろにくだけていました。

おそろしい、悪魔のわな……。

かんげいできない者がこの橋を渡って、わが家にやってこようとしたら……。

そう、アーザスはソシーのことを、かんげいできない、その相手にえらんだのです……。ロビーに協力している、じやま者。もはやソシーはアーザスにとって、それだけのそんざいになっていました。そ、そんな……。だってソシーは、アーザスが作ったはずなのに……。

「ソシーー！」

ロビーがもういちどさげんで、ソシーにかけよりました。ソシーは目を見ひらいて、きょうふの表じょうを浮かべております。信じられない。まさか。ソシーの心は、ぜつぼうにみたされていました。

アーザスさまにうらぎられた……。

「ソシーー！」ロビーがソシーのからだをだき起こしました。すこしはなれたところには、ソシーの人形の足がふたつ、ころがつていました。

「ロ、ロビーさま……。わたし……」ソシーはそれ以上なにもいえず、ただきょうふのあまり、口をぱくぱくさせるばかりでした。

ロビーの中に、怒りがわき起こりました。今まででいちばんの、ゆるせない怒りでした。

「そんな……。ソシーは、自分の味方なのに……」ロビーはそういつて、橋のむこうを見上げました。そこにはあのおそろしい、生きたたましいにおおわれた城がそびえていたのです。アーザスの待つ、城が。

「アーザスー！」

ロビーは怒りのあまり、あらんかぎりの声でさげびました。

「ぼくはぜったい、おまえをゆるさないぞー！」

しかしロビーのさげび声は、ただむなしく、こののろわれた山の中に消えていくばかりでした。

「せいぎのたて持て！ 女神リーナロッドの名のもとに！」

おそろしいいくさの音たちがみちる中、それをかき消さんばかりの大声がその場にひびき渡りました。横いちれつにきれいならんだ、騎馬、騎馬、騎馬。その数ざつと、三百五十！ それぞれの騎馬たちの上には、白いよろいかぶとに身をつつみ、美しいマントをひるがえした、せいぎの騎士たちが乗っていたのです。そのマントにも、よろいの胸の部分にも、ひとつのもんしようがきざみこまれていました。それはもちろん、われらが白き王国、ペーカーランドの白きもんしようだったのです。

「われら、アルマーク王あずかり、白の騎兵師団！」

「おおおーっ！」

いさましいかけ声とともに、白き騎馬たちがいつせいにかけて出していきました。そう、かれらは、われらがきぼう。このアークランドをやみからすくうべく立ち上がった、白き勢力の、そのちゆうしん的そんざい。ペーカーランドの白の騎兵師団だったのです。

ついに！ 白の騎兵師団がそのさいだいげんの力をもって、さいだいの敵とあいまみえるときがやってきました！ かれらのさいだいの敵、それはただひとつ。かれらにあだなす黒の軍勢、よこしまなるやみの力によってこのアークランドをはめつへ追いやろうとたくらむ、まがまがしき悪によってみちびかれた、黒の軍勢なのです。

おそろしいデイルバグたちのとうじょうにより、白き勢力の者たちは、見るまにそのいきおいを失いつつありました。もつともゆうかなる者たちでさえ、デイルバグとその背に乗った黒騎士たちのことを前にしては、くせんをしいられたのです（ベルグエルムとフェリアルがかれらと戦ったときのことを思い起こしてみれば、それはよくわかります。デイルバグに乗った黒騎士たちは、剣のうでまえもさることながら、相手の弱みにつけこむというじつにずるがしこい戦い方をす

るのです)。

そんな中、まさにきぼうの光といえるそんざいこそが、われらが白の騎兵師団でした。かれらはしばらく、戦いの流れを読み取っていました。へたに動かず、けっしてあせらず。いちばん必要なときに、いちばん必要な力を、仲間たちのもとへと送りこむ。それが、すぐれたしきかんたちにひきいられたかれら白の騎兵師団の、もつともたいせつなやくわりだったのです。

そして今、かれらはそのもつとも必要な力を、もつとも必要としている仲間たちのもとへと、そそぎこむときをむかえていました。

デイルバグたちは白き勢力のたくさんの部隊に、かいめつ的なひがいを与えました。しかしまだ、白き勢力の守りのかなめは、くずれてはおりません。戦いのほんすじ。白き勢力のじんけいのかなめといえる、ちゆうおうの守り。そこをくずされては、この戦いはこちらの負けです。そしてまさに今、敵は、まわりをかこむたくさんの勇士たちの守りをくずし、そのちゆうおうの守りを切りくずさんとして、もうこうげきをかけてきたところでした。

白の騎兵師団、まいる！ われらがベルグエルム、フェリアル、ライラの三人のしきかんたちにひきいられた白の騎兵師団のせいえいたちが、ついに剣をかまえて、つぎつぎと敵のただ中へとつげきしていきます！

「白きつるぎ、いぎまいらん！」ベルグエルムがまっさきに、敵のまんな中へと切りこんでいきました。

「せいぎのやいばは、くじけず！」フェリアルがすばらしいひらめきとともに、敵のふところ深くもぐりこんでいきました。

「アークランドのために！」

強い！ 強い！ 強い！ かれらは、騎兵。馬に乗って戦う騎士たちです。馬に乗らなくなつて強いということは、ベルグエルムやフェリアル、ライラの戦いぶりを見たことがあるみなさんであれば、すぐにわかることですが、そのかれらが馬に乗って戦うなら、これはもう

さい強なのです。もうじゆうのすがたをしたかいぶつの敵が、「がおお！」おそろしいつめをふりかざしておそいかかろうものなら……、ざしゅん！ かいぶつのつめは根もとからばっさり切り取られてしまつて、使いものにならなくなつてしまいます。長いやりをかまえたへびのようなかいぶつの兵士が、「きしやー！」ひとつきにしてやろうと、こちらへまっすぐにむかつてくるものなら……、ひゅひゅひゅんっ！ たちまちやりはこま切れにされて、地面にぼろぼろちらばつてしまいました。

白の騎兵師団、かれらの戦いぶりは、まさにむてきと思われるほどのものでした。敵にかこまれピンチにおちいつている味方たちのもとにさつそうとあらわれては、まわりの敵たちをばったばった！ やつつけてしまうのです。戦いのただ中にいるわれらが仲間たちにとつて、これほど心強く、はげみとなるものもありませんでした。

しかし、それでも……。

どんなに強い騎士たちでも、どんなにたくみなじんけいで、どんなにたくみなせんじゅつをもちいたとしても、黒の軍勢のいきおいは、その上をいつていたのです。それはまさに、数と力のぼうりよくでした。

ゆつくりと、すこしずつ、白の騎兵師団の勇士たちのいきおいも、敵のもうこうげきの前におされ気味になつていきました。ふるう剣のひらめきは、すこしずつ、ちよつとずつ、にぶつていきました。かける馬のはやさは、いっぽ、またいっぽと、おくれていきました。どんなにすばらしい力も、どんなにきたえ上げられたわざも、えいえんにつづくということはないのです。

「敵が多すぎます！ とつばされるー！」

ひとふりで三人の敵をうちたおすほどのうでまえを持つ、白の騎兵師団のせいえいたち。そのかれらのうでをもつてしても、黒の軍勢のそのまがましいまでの悪のいきおいには、あつとうされるばかりでした。

「持ちこたえろ！ じんけいをいじするのだー！」

かれらの先頭に立って剣をふるう、いちばんのつわもの、ライラ・

アシユロイ。かのじよのさげびもむなしく、白の騎兵師団のじんけいは、しだいにくずれつつありました。

そして、もっともおそろべき相手があらわれたのです。

ああ、なんとというおそろしさなのでしょう！ くせんをしいられて
いるわれらが仲間たちにとって、それはまさに、悪夢そのものでした。

右手の戦場では、敵のじんをくずそうとしてまわりこんでいた仲間
たちが、空からのデイルバグたちのこうげきによって、ばらばらにな
ぎはらわれていました。

左手の戦場では、かいぶつの吹き出したどくの息によって、多くの
仲間たちがせきこみ、地面にうちたおされて、動けなくなっていました。

ですがそれらのどんな光景よりも、目の前にせまりくるその光景
は、おそろしいものだったのです。

魔王ギルハッドがやってきました。

ほのおのたてがみを持ったしつ黒の騎馬にまたがり、その手に黒い
ほのおを吹き出す巨大な剣をいっぽん、にぎりしめて……。

「う、うとうう……！」

なみの者であれば、さげび声を上げて逃げ出してしまうほどの、
きょうふ。われらが白の騎兵師団の騎士たちは、あらゆるきょうふに
うちかつくんれんを受けていました。痛みやくつうやぜつぼうにた
える、強い心を持ちあわせていました。

ですがそんなかれらであってさえも、せまりくるこのきょうふのそ
んざいにむかつては、言葉を失い、ひやあせをたらし、がくがくとふ
るえる足をおさえるのでせいっぱいになってしまったのです。

「隊れつをくめ！ 守りをじゆうし！ とつばされるな！」

ライラのかげ声がひびきます。ですがその場にいる白き勇士たち
の頭の中には、そんなライラという言葉ですら、まんぞくにはいつてはき

ませんでした。

「うう……、おのれ！」ひとりの騎士がわれも忘れて、ギルハッドにとっしんしました！ これはライラのしじにはない、めいれいいはんの行動です！ ですがこのあつとう的なきようふを前にして、だれにかれを、せめることができましょう。頭で考えることもできず、ただただきようふにおし流されて、かれは動いてしまったのです。

「やめろー！ もどれー！」

ライラの声は、もはやかれにはとどきませんでした。そして……。

がしん！ ごおおお！

ギルハッドの剣がふりはられました！ そして、ああ、なんということでしょう！ 黒いほのおのうずがあたりをつつみこみ、ごう音とともに、大地と、そしてとっしんしていった騎士と騎馬のことを、やきこがしたのです。騎士はそのまま気を失い、騎馬から落ちて、こげた地面にうつぶせにたおれふしました。

おそろしいいちげきをまのあたりにした仲間たちは、なおいつそう、おそれ、たじろぎ、剣を持つその手をきようふにふるわせました。ゆいいつ、かろうじてれいせいさをいまだかかずいられたのは、かれらのしきかんであるライラ、ただひとりばかりであったのです（今魔王ギルハッドにむかいあっているのは、ただライラの部隊ひとつだけでした。ベルグエルムもフェリアルも、それぞれのいくさの場で、数えきれないほどのたくさんの敵たちと、はげしくいさましい戦いをくり広げていたのです）。

魔王ギルハッドが、ゆつくりとこちらへ歩みを進めてきます。その金色にふち取られた影のように黒いかぶとのすきまから、赤い目をぎらつかせた、ギルハッドのすがおが見て取れました。なんとというおそろしい生きものなのでしょう！ 人ともつかず、けものともつかず、たくさんの小さな手のようなものが、顔のまわりでうねうねと動いているのが見えました。しゅーしゅーという湯気のような音が、よろいのすきまからぶきみにもれ出していました。こんな生きものが、この

世にそんざいしていいのでしょうか？

「白の騎兵師団……、しきかんどのお見受けする……」ギルハッドがひくくうなるような声で、ライラにむかっていいました。

「われは、ギルハッド……。ガノンとのけいやくによりまいった……」

その言葉に、ライラは、きつ、と齒をくいしばり、手にした美しい剣をギルハッドにつきつけます。

「わたしは、白の騎兵師団、人間隊長、ライラ・アシユロイ！ このさきへは、いっぽも進ませぬ！ そなたは、そなたのくにへと帰るがいい！」

剣をかまえるライラ。ギルハッドはなにもいわず、黒いほのおを吹き出す剣を高々とかまえました。そして、それをあいずに……、まわりからとつぜん！ おそるべき者たちがつぎつぎとあらわれたのです！

それはギルハッドのひきいる、魔界の軍勢の兵士たちでした！ この兵士たちはあるじのギルハッドのそばになら、遠くはなれた場所からでも、（そこがべつの世界でないかぎり）いっしゅんにしてあらわれることができたのです。今や白の騎兵師団、ライラ隊の者たちは、魔王ギルハッドのひきいる悪魔の軍勢に、すっかり取りかこまれてしまっていました。

「あきらめろ……。おまえでは、われには勝てぬ……」

ギルハッドのそのけものような赤い目が、ぶきみにきらめきます。

「ぬかせ！ ばけもの！」

ライラがギルハッドにとっしんしました！ このアークランドでさい強といわれる剣の使い手、ライラ・アシユロイ。そのライラがついに、魔王ギルハッドと剣をまじえるのです！

なんとというすさまじい、剣のあらし！ ライラの剣はいつさいのむだがなく、つねにてきかくに敵の守りのすきをつけて、その剣をたたき落とすのです。しかし、こんかいばかりは……。

きん！ きん！ がしん！ がしん！

つぎつぎとひらめき、ふり下ろされる、ふたつの剣。相手がなみのつわものであるのなら、もうとつくに、勝負はついていることでしょう。ライラのあつとう的なしょうりに終わるはずです。しかし、こんかいばかりは！

ひらめくたびに黒いほのおのうずをまき起こす、魔王のつるぎ。ライラはそのほのおのあいまをぬってじつにたくみに騎馬をあやつり、敵の目のとどかない位置から、でんこうせつかのいちげきをくり出していきました。ですが、なんてこと。ライラの剣はことごとく、ギルハッドのその黒きやいばの前に、はじきかえされてしまったのです。

なんとという強さ！ しかもギルハッドはライラの剣を受けとめるたびに、そのけものじみたじやあくな口もとをゆるませて、ぶきみな笑みを浮かべました。そう、ギルハッドはまだまだ、ほんきを出してはいないのです！

「あれは……！ ギルハッド！」

ちゅうおうの守り、その左手からベルグエルムがさげびました。ベルグエルムはちゅうおうの守りの左にあいた守りのあなをついてきた、たくさんの敵たちのことをくいとめるために、わずかな数の騎士たちをひきいてふんとうをつづけていたのです。

「ライラどのだ！」

ちゅうおうの守り、その右手からフェリアルがさげびました。右の守りは、ほとんどくずれかかっています。フェリアルのひきいる白の騎兵師団の騎士たちが身を張ってふみとどまっていることによつて、かろうじて、その守りは持ちこたえられていたのです。

ベルグエルムもフェリアルも、目の前の戦いで手いっぱいでした。とても、ライラを助けに行くことなどはできません。ですがそれは、はじめからわかっていたことでした。この戦いは、とくべつ。おたがいに助けあいたくとも、とても、そんなよゆうすらないだろう。そのことはかれらにも、よくわかっていたのです。

「ライラどの——！」

ベルグエルムもフェリアルも、ライラの身にさいだいの危険がせまっているということは、すぐにわかりました。ですがかれらには、もはやどうすることもできなかったのです。手をのばせばとどきそうなところにいる友さえも、助けてやることができない。この戦いは、そんな戦いでした。かれらにできることは、ライラの身をあんじて、ただその名をよぶことだけだったのです。

こきゆうをととのえる、ライラ。そしてふたたび、人わざとは思えないほどの、もうこうげき！ ですがギルハッドはまたかるがると、それらのこうげきのすべてをかわし、受け流してしまいました。

しだいに、ライラのからだにもつかれが見えはじめてきました。これほどのこうげきをくり出しても、敵はそれを、ものともしないのです。ライラはけっしんしました。

これしかない……！

ライラは剣をまつすぐ前にむけて、かまえました。こうげきを一点に集中！ こんしんの力とわざをもって、このいちげきにすべてをかけるのです。

これはいわば、すて身ともいえるこうげき。ライラのとっておきの大わざでした。自分のぼうぎよをすべてぎせいにして、敵にさいだいのいちげきをたたきこむのです。しかしそれがかわされたとき……、そのだいしょうは、はかりしれないものでした。自分のからだをまつたくのむぼうびのまま、敵の前にさらけ出してしまおうのです。

ライラはふつうならばぜったいに、このわざを使おうとはしません。しかしこのおそるべき魔界の王に対しては、もはやこれいがい、手だてはないのです。

「わが、たましいの剣！ 受けてみよー！」

ライラが、ギルハッドにとつげきします！ ギルハッドは剣をまつ

すぐにかまえ、ライラにむきあいました。そして、つぎのしゅんかん！

がきーん！ ごおおおー！

あたりはまっ黒なほのおにおいつくされました！ そのちゅうしんにいるライラとギルハツドのすがたは、まったく見えません。はたして、勝負のけっかは……！

やがて、黒いほのおがしゅうしゅうというぶきみな音とともに、消え去っていききました。あたりには、火のもえるいやなおいが立ちこめています。

まわりをかこむ仲間たちは、その勝負のけつまつをかたずを飲んで見守っていました。いったい、どっちが……？

「う、うわあぁー！」

白の騎兵師団の、せいえいなる騎士たち。その騎士たちのぜつぼうのさけびが、あたりにひびき渡りました……。

黒いほのおの消えた、そのさき。まっ黒にやけたその地面のまん中に、ライラがたおれていたのです……。手にした剣のやいばは、こなごなにくだちっていました。白いよろいはやけこげ、きぬのマントはぼろぼろにやけ落ちていました。そしてそのライラのことを騎上から見下ろす、むきずのギルハツドのすがたも……。

「ライラさまー！」「そんな！」「うそだー！」

おそろしいげんじつをまのあたりにして、騎士たちの動ようはかくせませんでした。このアーランドでいちばんの剣の使い手、ライラ・アシユロイが、こんなにもあつとう的なまではいぼくしたのです……。こんな相手に、どうやって立ちむかえというのでしょう？

「うう、う……」

そのとき！ ライラがくるしそうなうめき声を上げました。よかった！ まだ息があります！ いくさでは、相手のいのちをうばっ

てはなりません。ですがやむを得ず、はげしい戦いの中でいのちを落とす者がいることも、またじじつでした。しかしライラは、生きています！

「ライラさまー！」「ライラさまー！」

騎士たちが、ライラにかけようとしています。ですが……。

「待て……！」

ライラがそういって、もはやつかのみとなった剣を地面につき立てて、その身をよろよろと起こしました。なんとというせいしん力なのでしょう！ これほどぼろぼろになりながらも、なお、ライラは立ち上がるのです！

「まだ、勝負はついておらぬ……！」

立ち上がり、つかだけの剣をかまえる、ライラ。

「部下たちには……、ゆびいつぽんとて、ふれさせはせぬぞー！」

しかしもうだれの目からも、ライラはいぼくはめいはいくでした。

「もう、じゆうぶんです！ ライラさまー！」

「ほんとうに死んでしまいます！」

騎士たちの、ひつうなさけび。そしてそのむこうから、むじひな赤い目を光らせながら、魔王ギルハッドがおそろしいうなりを上げていました。

「みとめてやろう……、おまえは、ほんものの戦士だ……！」

ギルハッドはそういって、黒の騎馬から音もなく地面におり立ちました。その手に黒き魔界の剣を持ち、ゆつくりと、ライラのもとへ歩みよつていきます。

「わが、さいだいの敬意をもって……、おまえに、戦士としての、めいよあるさいごを与えてやろう……。かくごするがいい……！」

そんな！ もう勝負は、ついているのに！ これはおきて破りです！

ギルハッドの剣が、ライラの前につきつけられます。ライラにはもはや、あらがう力も残されてはいませんでした。

「ギルハッド……！」

ギルハッドの剣がふりかざされる、まさにそのとき……！

ばさっ！ ばさっ！

とつぜん！ 頭の上から大きなたばさのはばたく音がきこえ出しました！ 騎士たちはいっせいに、空を見上げます。そこで、かれらの目にしたものは……！

「デイ、デイルバグ！」

上空から今、ひとつの黒い影が、この場にまいおりてきました。それはまさしく、ワットのおそろしき黒のかいぶつ、デイルバグだったのです！

なんとということ！ ギルハッドだけでも歯が立たないのに、デイルバグまで！ もはや、ゆうもうかかなくなるベーカーランドの白の騎兵師団とて、この戦いの場を切りぬけることなどはふかのうでした。ふかのうに思われました。

しかし！

「うおおおー！」

デイルバグに乗った、ひとりの黒騎士。その黒騎士がいつちよくせんに、ギルハッドにむかってとっしんしていったのです！ これはいったい！ どういうことなのでしょう！

がががん！ はがねのぶつかりあう、すさまじいまでの音！ そして、ごおおお！ それにつづく、黒いほのおのうずまく、すさまじいまでのうなり声！

ぎゃあ！ ぎゃあ！ ほのおにやかれるデイルバグの、おそろしいなき声。そして、それにつづいて……。

「ぐおおおお……！」

こ、これは！ 魔王ギルハッドが胸をおさえて、くるしみにその身をよじらせているではありませんか！ ギルハッドのよろいかぶとのあいだからは、まっ黒なけむりが、しゅうしゅうと音を立てて吹き出していました。

ギルハツドの胸には、いつぽんのおうごんのつるぎがささっていました。どこかで見おぼえのある、この剣は……！

これは、ガランドーの剣です！ まっ黒なよろいかぶとにはふつりあいな、みごとなこがね色の剣。これはガランドーがいつも腰にさしていた、あのこがね色の剣にまちがいありません！ ということは！

「お、おまえはー！」

おどろきに飲みこまれていた騎士たちが、ようやく、とっしんしてきた者のすがたを見てさげびました。

「ガランドーー！」

そう、デイルバグに乗った、ワツトのしきかん。ベーカーランドのうらぎり者。ガランドー・アシュロイが、今かれらの目の前に立っていました。しかし……。

ガランドーのからだはギルハツドの魔界のほのおによって、ぼろぼろにやきこがされてしまっていました。よろいはぼろぼろにくずれ、かぶとはまつぶたつにわれて地面に落ちていました。

それでもなおガランドーは、よろめきながら、いつぽいっぽ、ライラのもとへと歩みよっていったのです。

「ライラ……」ガランドーが、ライラにそうつぶやいたとたん……。

ばたん！

「ガランドー……！」

地面にたおれこむガランドーに、ライラがよりそいました。ほのおだけではありません。ガランドーのからだは、魔王ギルハツドのからだからあふれ出した魔界のじやあくなるエネルギーによって、ずたずたにひきさかれてしまっていたのです。もはやいしきをたもつていくことすら、おぼつかないじょうたいでした（そしてガランドーのこんしんのいちげきをその身に受けたギルハツドも、大きなダメージを負っていました。そのからだにひめた魔界のエネルギーをすべて出しきってしまったギルハツドは、もはや、この世界にとどまっていることすらできなくなっていたのです。ギルハツドはみずからの暗黒のほのおに身をこがされながら、魔界へと送りかえされていきました。しばらく、おそらく数年ほどは、もとの力を取りもどすこともで

きないでしょう。

ギルハツドの部下の悪魔の兵士たちにも、同じことが起きていました。王のギルハツドがたおされた今、かれらもまた、みずからの力をこの世界にとどめておくことができなくなっていたのです。かれらの消えたあとには、ただ黒いよろいかぶとと、巨大な剣のみが残されているばかりでした。

「ガランドー……、なぜ……！」「ライラがガランドーのからだをだきかかえながら、うつたえかけました。その目からはぼろぼろと、大きなみだのつぶがあふれていました。

「こうするほか、なかったのだ……。おまえを守るために……。ゆるしてくれ、ライラ……」

ガランドーの目からも、いもうとと同じ、同じ思いのこもったなみだがあふれかえっていました。

多くの言葉をかわさなくとも、ライラにはわかったのです。ガランドーは、なにかのがれることのできないりゆうのために、ワットにむかったのだと。それがいもうとである自分をすくうためであったのだということを、ライラはのちに、知ることになるのです。

ですが今は、これだけでじゅうぶんでした。ライラのうでにあるガランドーは、むかしのガランドーそのままでした。兄の、家族であるガランドー、そのままでした。

「兄さん……」

失いかけてゆく、ガランドーのいしき。ライラはいつまでも、兄のそのからだを、ぎゅっとだきしめつづけていました。

28、戦いのゆくえ

「もうそろそろ、けっちやくがつきそうね。」

あついこうちゃのはいったティーカップをゆうがに口もとにはこびながら、今いすにすわったひとりの若い女の人が、静かにほほ笑んでいました。その前にはひとつのティーテーブルがおかれていて、きれいなレースのテーブルクロスがかかっております。そしてその上には色とりどりのくだもの乗ったお皿に、クリームたっぷりのマフィンの乗ったお皿、そしてクッキーにマカロンなど、たくさんのお菓子が乗ったお皿などが、ならんでいました（さらに頭の上には魔法のパラソルがかかっていて、雨も防いでくれたのです）。

「あれだけ強いみんながいるんだもん、あつたりまえだけどねー。」

むこうから、赤毛の長いかみをたばねた小さな女の子がひとり、ここにこしながらやってきました。その手にはまた、新しいお皿を持っております。そしてその上には……。

「どーせ、ひまだし。ほら、これー。アルーナが作ったんだよ。あの子、こーいうのじょうずよね。」

アルーナ？ この名まえは！ あのおそろしくてずるがしこいワットの魔女っこ三姉妹のうちの、ひとりの名まえではありませんか！ ということは、ほかのふたりは？

そう、お皿を持った小さな子は、三姉妹の三女エカリン・スフルフ。そしてゆうがにお茶を飲んでいる黒いかみの美しい女の人は、この三姉妹の中でもいちばんおそろしい力を持った、長女のネルヴァ・ミスナディアだったのです。

エカリンのさし出したお皿の上には、こんがりきつね色にあがったお菓子が乗っていました。そのほかに、白いクレープにつつまれた、きれいな色をしたお菓子も乗っております。あれ？ でもこれ、ほんとうにお菓子でしょうか？ テーブルの上に乗っているものからそうぞうして、ふつうにこれもまた、お菓子だと思ってしまうましたが……。

「……アルーナとくせい、かにはるまきです……!」

は、はるまき? (なんではるまき?)

「……アルーナ風、生はるまきもあるです……!」(ま、またはるまき……)

ティーテーブルのむこうに作られたとくせつのちようり場から、さなかきんとエプロンすがたのアルーナがすたすたやってきて、顔の横で手をびしっ! と立てていました(おなじみのポーズです。あいかわらずのふしぎっ子ですね。ちなみに、かけているもも色のエプロンには、ひよことにわとりと目玉やきの絵がデザインされていました。すごいくみあわせです……)。

ところで、アルーナだけまだ、かみの毛の色を伝えていませんでしたね。かのじよのかみはやや茶色がかった、美しいこがね色でした)。ここはどこでしょう? このお茶会はそとでひらかれていました。空は雨もよう。ぽつぽつと小雨が落ちはじめています。きおんはぐつと下がってきていました。上着なしでは寒くてたまらないでしょう(そのためかのじよたちは自分のからだのまわりに魔法を張っていて、そこをかいてきなおんどにたもっていました。これは、どこでもかいてきのじゅつ。このじゅつをかけると、あつさ寒さから身を守ることできたのです。むずかしい魔法で、ふつうは五分もたせるのがやつとです。マリエルでも、せいぜい十分でした。ですが魔女たちはなんのくろうもなしに、なん時間でもこの魔法をもたせることができたのです。これはつまり、かのじよたちの使っているおそろしい悪魔のエネルギーの、そのじゃあくなる力のためでした)。足もとは海の色まじった、白い石だたみ。まわりは同じ石でできたひくいかべで、ぐるりとかこわれております。そしてそのかべの横には……、やりを持った黒いよろいかぶとに身をつつんだ、ワットの兵士たちが数人、見張りに立っていました。

ここは、ベゼロイン。かのじよたちがいるのは、そのいちばん上。かなたのリユインの地、そしてエリル・シャンディーンへとつづくその道を見下ろす、見晴らし台の上だったのです。

かのじよたちは、エリル・シャンディーンの戦いにはさんかしてい

ませんでした。いくさのおきてとして、まじゆつしは戦ってはいけないことになっていましたから。助ける魔法なら使ってもいいのですが、このおそろしい黒の軍勢に、助けがいるでしょうか？ かのじよたちはそういうわけでこのベゼロインに残り、もてあました時間をお茶会をひらきながら、つぶしていたというわけでした（みんながひつしに戦っているというのに！）

ちなみに、このベゼロインとりでに残っているようにかのじよたちにしじしたのは、ワットの黒の軍勢のおえら方たちでした。もはやさいごの戦いがはじまってしまったため、このベゼロインとりでの守りのことなどは、ワットもほとんど重要に考えていなかったのです。もしこのとりでがうばわれたとしたって、どのみちこのままワットがベーカールランドに勝ってしまえば、ベーカールランドもそのだいしようとして、このとりでをふたたびワットに明け渡さなければなりませんでしたから（それに、今さらこのとりでをおそう者なんているはずもないだろうと、ワットも思っていたのです）。そのためワットはひとりでも多くの兵をさいごの戦いにかり出し、このベゼロインとりでの守りは、必要さいていげんの兵士と魔女の三姉妹さえおいておけば、じゆうぶんであると考えていました（それは、これはいくさのこまかい取りきめのひとつとしてきめられていることでしたが、いくさにさんかする兵は、たとえひかえの兵であつても、その戦いの場にしゆうけつしていなければならぬというルールがありました。このルールもありましたから、ワットはそのほとんどの兵力を、いくさにさんかさせるためにしゆうけつさせていたのです。もつとも、こんなルールがなくなつて、ワットはいくさの場に全兵力をしゆうけつさせていたでしょうけど）。ワットはもはやかんぜんに、さいごの大いくさに全力をかたむけていたのです）。

「それにしてもさー。」エカリンが手をひたいにかざして、あたりをきよろきよろとながめ渡しながらいいました。「まだ、こないのかなー？ おそいよねー。さっさと、やっちゃえばいいのに。」

「手がかかるのよ。」ネルヴァがそういつて、またお茶をすすります。「あれだけの相手ですもの、王さまも、したくがたいへんなんでしょ

う。」

「早く、きてくんないかなー。そしたらすぐ、わたしたちもおうちに帰れるのに。」エカリンがそういって、「うふふ。」と笑いました。「まあ、でも、ベーカーのみんなには、さいなんだけどねー。」

「これでかれらも、自分たちの立場を知るんじゃないかしら?」ネルヴァがいました。「どちらが上に立つべきなのか? かれらにじつくりと、わからせてあげないとね。」

そういって「ふふつ。」とほほ笑むネルヴァに、エカリンがくすくす笑っていました。

「ネルヴァって、ほーんと、せいかくわつるくらい。」

そのとき、エカリンの頭にごちん! とげんこつがひとつ。

「……はるまき、さめるです……! 早く、食べるです……!」

「いたたた……! わかってるわよ、もうー。いつたいなー。」エカリンが、頭をおさえていいいました。

「わたしのことは、いいですから……、どうか、さきへいつて下さい……。」

だきかかえる手の中からきこえる、とぎれそうな声……。

ここは、怒りの山脈。アーザスの城の、その前。そこにかけて、いつぽんのぶきみな石の橋の上。今その橋の上を、ロビーがかけていました。その両の手に、ソシーのからだをしっかりとだきかかえながら……（ソシーの二本の足は、背中のかばんにしまってありました）。

アーザスのゆるせないうらぎりにより、ソシーのからだはほろぼろになってしまっていました。悪魔のわなからはつしやされたおそろべき悪のエネルギーは、ソシーのおなかをつらぬき、そのからだを半分にしてしまったのです。ソシーがもし、人形でなかったのなら……、考えるだけでもおそろしいことでした。しかしたとえ人形の中からだであったとしても、悪魔のわながソシーに与えたダメージは、そうぞう以上におそろしいものであったのです。

「きみをおいてはいけない。きみを助けるには、これしかないんだ。アーザスに、きみをなおさせる。どんなことをしてでも、きみを助け

るからね。」ロビーは強いけついの心をもって、いいました。

ロビーは急いでいました。急ぐ必要がありました。なぜなら……、ソシーのからだからは、ソシーのことを動かしているいのちの魔法のエネルギーが、どんどんとれ出していたからなのです！　ロビーはたしかに、感じ取っていました。女神のせいなるつるぎの力が、ロビーにそれを教えたのかもしれない。このままいのちのエネルギーがみんなソシーからもれ出してしまえば、たとえそのあとどんな魔法を使っても、アーザスほどの強力なまじゆつしであったとしても、もうソシーのことをもとにもどすことはできなくなるのだと……。

今からトンネルをひきかえしたとしても、とてもまにあいません。このままでは、いのちのともしびの力がみんなもれて、ソシーはただの人形にもどってしまおう！　そんなことはさせない。ソシーはようやく、人の心に気づいて、これからほんとうの世界をはじめるときなんだ。ぜったいに、ソシーのことを守ってみせる！

「ロビーさま……、ごめんなさい……、ごめんなさい……」

ソシーは消えゆくような声でそういって、ひとみをとじました。なみだをこぼせない、ソシーのそのひとみ……。ですがロビーはたしかに、そこになみだのつぶを見たように思いました。

ソシーを助ける方法は、ただひとつ。そう、そのいのちのエネルギーがかんぜんにもれ出してしまう前に、アーザスにめいれいして、ソシーのことをなおさせるのです。それがソシーをすくうことのできる、ただひとつの方法なのです。のぞみはともうすいものではない。アーザスがそんなことを、ききいれるはずありません。ですが、やるしかないのです。ソシーを助けるためには、それしかないのです。ロビーにはそのことが、すぐにわかりました。

けついを胸に、ロビーは走りしました。このおそろしい橋の上を、あらんかぎりのはやさでもって。

悪魔のわなは、たしかにロビーのことをおそったりはしませんでした。しかしそこを通すソシーにちよつとでもすきを与えれば、またわたなの力が、ソシーのことをおそうかもしれないのです。ロビーはたえ

ずけいかいし、わなに気をくばりつつげながら、自分の身をたてにしてソシーのことを守りつづけました。

そしてついに、ロビーはこの橋を渡りきったのです。

なんとというところなのでしょう。橋を渡りきったところは、広場になっていました。地面は、はい色の砂をぎつちりとかためたよう。空気が重く、あついようなつめたいような、そんなぶきみな感じをおびております。大きな石のはしらがたくさんならんでいて、ロビーはそのはしらのひとつにさっとかけよって、身をかくしました（どこかにまだ、わながあるかもしれませんでしたから）。

ここまではまだ、ふつうのものでした（それでもじゆうぶんにおそろしいふんいきを持っていましたが）。

しかしここには、もうひとめでふつうではないとわかる、おそろしいものがあつたのです。

それは、アーザスの城への入り口でした。

巨大な、はい色の砂をかためてつくった石の門が、はしらのむこうにどんとそびえています。門の高さは、五十フィートはゆうにあるでしょう（ロザムンディアのまちの南門にも負けないくらいの巨大さです）。その門は、ぴつちりととじていました。とじているように思われました。門がひらいているのか？ とじているのか？ なぜはつきりとわからないのでしょうか？ それは……。

その門全体を、ぶくぶくとあわ立ちうごめく、ゼリーのようなかたまりがおおいつくしていたからなのです！ それは遠くから見た、あの城をおおいつくしていた生きているバリアーの、一部でした。近くで見るそのバリアーの、なんとおそろしいことか！ たくさんの目や口や手が、そのゼリーのかたまりのようなバリアーの中に浮かび上がっては、消えていきました。目はぱちぱちとまばたきをくりかえし、きよろきよろとこちらのことを見つめてきます。口はなにかうわごとのような言葉をつぶやき、声にならないひめいを上げていました。たくさんのおばけのような手はなにかをつかもうとして空中に

むなしくのびていき、またひっこんでいきました。

こんなものが巨大な門のまわりにまわりつき、この門をほとんど見えなくしてしまっていたのです（ですから、あいているのか？とじているのか？よくわからなかったのです）。いったいこんな門を、どうやってくぐりぬけたらいいのでしょうか？（たとえばかぎがあつたとしても、かぎあなすら見えないのですから。）

ですが、このすべてのものをこばむかのようなおそろしい門ですら、ロビーはぶじにくぐりぬけることができました。なぜなら……。

がごん！　ぎ、ぎ、ぎ、ぎ……。

ロビーがはしらの影から門のことをかんさつしていた、まさにそのとき。きょうふの門は自分から、その口をひらいていったのです！

それは門の大きさから見れば、ほんのすこしのすきまができただけにすぎませんでした。しかしそれでも、人が通るのには、じゅうぶんすぎるほどの広さだったのです。

「アーザス……」ロビーは静かにつぶやきました。そう、この門をあけたのは、まさしくアーザスほんにだったのです。橋のわなをロビーにむけなかったのと同じ、アーザスはこの門をひらいて、ロビーのことを自分のもとにまねきいれていました。

もはやアーザスとの運命のけっちやくのときは、目の前……。ロビーは意をけっして、はしらの影から門の入り口へと走りました。門がひらいたときに地面に落ちてちらばった生きているバリアーのかけらが、ぐにぐにと動いて、ロビーの足にしがみつこうとしてきます。ロビーはひよいとそのかけらをよけて、入り口の中に飛びこみました。

門の中は、まっくらでした。そしてロビーが中にはいったとたん、その巨大な門は、ふたたび、ききぎぎという大きな音とともに、とぎさされたのです。

がごん！

ロビーとソシーは、まったくのくらやみの中にいました。ですが、

つぎのしゅんかん。

ぼ、ぼぼ、ぼ……。

石のかべにつくられていたいくつかの明かり受けの上に、青白いほのおが、ひとりでにともっていったのです！ それはなんとも、ぶきみなほのおでした。よく見ればそのほのおの中に、くるしそうにうめく、人の顔のようなものが浮かんでいたのです。ああ、なんということでしょう。このほのおもまた、生きていたのです！ アーザスは城のバリアーに使ったのと同じ、人からうばったたましいのエネルギーでもって、このほのおをともしていました。しかも、ただの明かりを得るために！（なんてひどいことをするのでしよう。こんなことはいつこくも早く、やめさせなければ！）

ロビーはソシーのことをだきかかえ、生きたほのおにてらされたそのはい色の石の道を、ゆつくりと歩いていきました。かかえるソシーのからだから、すこしずつ、ですがかくじつに、いのちのエネルギーがもれ出しているのが感じられました。急がなければなりません。ソシーはずつと目をとじ、荒い息使いをしたままでした。もはやしゃべることさえも、こんななじようたいでした。

ロビーはからだ中のあらゆる感かくを使って、このさいごの道のりの中を進んでいきました。道はぜんぜん、わかりません。ソシーのいった通り、城の中はたくさんのだろうかやとびらで、あふれています。これはほんとうに、めいろです。ですがロビーには、ふしぎとアーザスのいるところまでの道すじがわかるような気がしました。アーザスがロビーのことを、みちびいているのでしょうか？ それともせいなる剣の、そのふしぎな力のためなのでしょうか？ はつきりとはわかりません。しかしそれはもはやロビーにとって、重要なことではありませんでした。今はいつこくも早く、アーザスのところへたどりつくこと。それだけがすべてだったのです。

待っている、アーザス……。ロビーは心の中で、かたくちかいました。

ぼくがかならず、つぐないをさせてみせる。

消えかかってゆく、ソシーの作りもののいのち……。人形であると

はいえ、ロビーのうでの中にあるソシーにやどっていたのは、たしかにひとつのいのちでした。守るべき、いのちでした。

ロビーはこの暗いめいろの中を、ソシーとふたり、かくじつにアーザスのもとへとむかつて歩みを進めていきました。

戦いのゆくえは、もはやだれの目にもあきらかになっていました。おそろしき魔界の王ギルハッドとその悪魔の兵士たちのことをうちたおした、白き勢力の者たち。ですがそれでも、よこしまなる黒の軍勢のいきおいは、いぜんとしてとどまるところを知らなかつたのです。あちこちでさいごのていこうをつづける、白き勇士たち。ですがその勇士たちの剣も、いっぽん、またいっぽんとおられ、はじかれ、地面に落ちていきました。よろいはひびわれ、たてはわれていきました。白き勢力のそのさいごのかなめ、ちゅうおうの守りは、もはやほうかいすんぜんでした。その中でいまだあきらめることなく勇気の剣をふるいつづけていたのは、われらが仲間たち、白の騎兵師団の長ベルグエルムと、副長のフェリアル部隊、ばかりとなっていたのです。

あれから。

うちたおされ、もはや剣を取ることでもできなくなった、ライラとガランドー。ふたりはそのまま、ともにいしきを失い、戦いの場にたおれてしまいました。仲間たちはふたりをかかえ、急ぎ、手あてのために、エリル・シャンデーのまちまで送りました。まちの人たちがおどろいたのは、いうまでもありません。あのさい強の剣のうでの持ちぬしであるライラ・アシユロイが、こんなにもぼろぼろになって、もどってきましたから。この戦いは、だめかもしれない……。人々の心に、そんな暗い影のような気持ちが生まれはじめていきました。遠く雨にけむる、戦いの地。おそろしい戦いの音ばかりが、そこからはひびいてきます。そのようすは、ここからは見て取ることはできません。ですが人々の心には、そこにおそろしい悪夢のような光景ばかりが、思えがかれていきました。

そして人々の心に与えられた、もうひとつのおどろき。それはガラ

ンドーのことです。ベーカーランドをうらぎり、ワットに加わった、ガランドー・アシュロイ。かれのことはここエリル・シャンディーン
のまちの人たちにも、とうぜん伝わっていました。そしてたびたび広
がる、黒いうわさ。ガランドーがデルバグのかいぶつたちをあやつ
り、たくさんのくにやまちをおそっているということ。あのおそろし
き悪のげんきよう、魔法使いアーザスとも、しんみつにつながって
いるのだということ……。

その今ではワットのおそろしいしきかんになり下がってしまったて
いるのだというガランドー・アシュロイが、今こうして、白の騎兵師
団の長であり、かれのじつのもうとでもあるライラといっしょに、
ぼろぼろになってはこぼれてきたのです。しかもワットの者ではな
く、今や、ベーカーランドの者として……。

のちに人々は、ガランドーについてのすべてのしんじつを知ること
になるのです。すべては、いもうとのライラのためであったのだとい
うことを……。

ライラはこの戦いののち、ベーカーランドのしんのえいゆうとし
て、長くたたえられることになりました。もともと高かったライラの
人気は、そうしてますます、高いものとなったのです（なにしろ強く
て美しくてかっこいいのですから、人気も出るはずです。かなりこわ
い、というところまでふくめて。

そしてこのとき……、ライラにかけられていたアーザスののろいの
力は、もはや消え失せていました。すべてが終わり、そののろいのも
ととなった力が、失われたためです。

ですがベーカーランドの人たちがガランドーのことを受けいれる
ためには、すくなからずの時間が必要となりました。しかしそれは、
いたしかたのないことでした。アーザスにおどされたのことはい
え、ガランドーは、あまりに多くのつみをおかしてきたのです。その
中には、このエリル・シャンディーンのまちの人たちにも、ちよくせ
つにかかわることまでもがふくまれていました。つまりまちの人た
ちの家族や多くの友人たちのことをも、ガランドーはきずつけてきた
のです。

すべてが終わったのち、ガランドーはひとり旅立ちました。それはみずからのおかした、たくさんのあやまちのためでした。ガランドーは、立ちもどりつつあるアークランドを、みずからの手で、みずからの方法で、すくつていきたいと考えたのです。それがこの自分に与えられた、しめいなのだと。

ライラとガランドー。ふたりのきょうだいの物語は、こうして、つぎのじだいのもとへとひきつがれていきました。人々の、心から、心へ。いつまでも、とわに……。

そして時間は、今このときへ。

いさましい戦いをつづける、ベルグエルムとフェリアル。そしてこれらのひきいる、白き勇士たち。ですがそれもはや、さいごのきよくめんをむかえていました。

「戦えない者が多数となったとき、そのいくさは負けとなる。」

そのいくさのルール。もはや白き勢力の者たちがそのルールにあてはまる数にまで戦える者の数をへらしていつているということは、あきらかでした（つまりもつとこまかくいうと、もとの人数の二十ぶんの一人の人数にまでせまっているということ。それほどに、これらの人数はへっていました）。そしてかろうじてそのさいごの人数をたもっていたのが、われらがベルグエルムとフェリアルの、白の騎兵師団の一部隊ばかりだったのです（しきかんのライラを失ったライラ隊の騎士たちは、ベルグエルムとフェリアルの隊にふたつに分かれて加わっていました）。かれらがやぶれば……、そのときこそ、この戦いはベーカーランドのはいぼくに終わるのです。ベルグエルムもフェリアルも、そのことはもうわかっていました。ですからかれらはなおのこと、力をふりしぼって、そのさいごのふんとうをつづけていたのです。負けるわけにはいかない！ その剣のいちげきは、強き心の力によるいちげきでした。戦いつづけ、からだはもうぼろぼろ、ふらふらになつていました。ですがかれらの心の力は、いつこうに、お

とろえるということにはなかったのです。その剣には、たくさんの仲間たちの思いがこもっていました。アー克兰ドの人々の思いがこもっていました。ここでたおれるわけにはいかないのです。かれらの剣は、この場に残った、このアー克兰ドのさいごのせいぎの剣でした。その剣がおれるとき、このアー克兰ドのせいぎはおれるのです。黒のやみがおとずれるのです。

「きぼうをすてるな！ きぼうはつねに、われらとともにある！」
ベルグエルムがせまりくる敵をうちたおしながら、仲間たちへとさげびました。それはこの物語のはじめ、ロビーのほらあなの中で、フェリアルのいった言葉でした。その言葉が今、こんなにも重く仲間たちの心にひびき渡るといふことなどを、だれがそうぞうしたことでしょうか？

「仲間を信じるんだ！ 戦っているのは、われらだけではない！
すべての仲間だ！」

フェリアルが、れっせいになっている仲間たちのもとへと飛びこんで、敵の剣をはじき落としてからさげびました。それはいつも、ベルグエルムがフェリアルにいつている言葉でした。仲間を信じる、その強き思い。それはいつでも、さいだいのピンチのときにおいて、助けをもたらし、こんなんを乗り越えさせてくれる、大いなる力となるのです。フェリアルはその思いをつねに胸に、そのせいぎの剣をふるいつづけてきました。

敵をおしとどめ、さいごの守りをかためる、ベルグエルムとフェリアル。かれら、白の騎兵師団。ですが、戦いのゆくえはときここにきて、だれもがよそうだにしなかった、さいだいの悪夢をむかえることとなったのです……。

「な、なんだ……？ あれは……？」

ふいに、あたりが暗い影につつまれました。もともと暗かったものが、なお暗く。

黒の軍勢……。ワットはきたるべくこのさいごの大いくさにむけ

て、持てるかぎりの力を集め、あらゆるしゅだんをもちいて、さいだいの軍勢をきずき上げてきました。ワットの兵士たちの中でもせいえいの者たちは、もちろんのこと。あのおそろしい、ディルバグたちに乗った黒騎士たち。遠くのろわれた土地からよびよせた、おそろしいかいぶつの兵士たち。そしてさらには、この世界とはちがう世界、悪魔たちの住む魔界からさえも、かれらはそのまがまがしき悪の力を、よびよせたのです（そのおそろしい軍勢、魔王ギルハッドと配下の悪魔の兵士たちの軍勢によるきょういは、もはや消し去られました。ガランドーとライラの、ふたりのえいゆうたちの手によつて……）。

相手はわずかに、千二百（じっさいには、千五百四十二人のあつかいでした）。しかもそのうちの三ぶんの一ほどは、ふだんは兵士ではない、りんじの兵士たち。ですがワットがようしやすることなどは、ありませんでした。ワットもベーカールランドと同じく、この戦いにすべてをかけてきたのです。たとえひきょうでひれつであるといわれようとも、ワットにとつて、この戦いに勝つことこそがすべてでした。そのためにかなるしゅだんをもちいることになろうとも、ワットがためらうことなどは、なかつたのです。

こうしてワットは、そうぞうをはるかにこえるほどの力をかき集めました。その兵の数、なんと六千。そしてその中からベーカールランドの兵力にあわせ、この戦いにもちいることのできるよりすぐりの兵士たちすべてを、えらび出したのです（残りの兵士たちはよびとして、戦いの場のうしろにひかえています）。しかしそれでもなお、ワットがこれとどまるということはありませんでした。

どんなことがあっても、どんな手を使つても、勝たねばならない。そのため、さいごのとどめとなる、さいだいの力を手にいれたい。そしてワットのその願いは、かなえられたのです。魔王ギルハッドさえも上まわるほどの、さいだいの悪夢として……。

「くる……！　なにかがくる！」

ベーカーランドの白き勇士たち。そのしゅんかん、かれらは身の毛もよだつほどのきようふを感じ取りました。かみがぴりぴりとさか立ち、はだにぞくぞくとさむけが走りました。剣をにぎるその手に、じつとりとひやあせがにじんできます。馬たちは得体の知れないきようふにむきあつたあまり、なき声を上げ、ぶるぶるとそのからだをよじりつづけました。

風が変わりました。ほそい雨は変わらず、さあさあとふりつづけています。ですがあきらかに、さきほどまでとは空気がちがうのです。この寒空の下でもはつきりとわかる、ねつき。火のもえる、なにかのこげたにおい……。

そのとき、かれらははつきりとそれを目にしました。耳にしました。空のあなたからこちらへとむかつて、なにかがやってきたのです！ とほうもなく大きな、きようふそのものが……！

ばっさ！ ばっさ！ ばっさ！

空の上からひびき渡る、暗く重々しい巨大な音。それが巨大なつばさのはばたきの音であるということがわかったとき、勇士たちの心はまるで巨大なかぎづめでわしづかみにされてしまったかのように、ぐしゃぐしゃになってしまいました。どんなにゆうかんで、どんなに強い心を持っている者たちでさえも、こんなとほうもないきようふを前にしては、もうなすすべもありませんでした。

だめだ……。

かなわない……。

剣を持つかれらの手から、しだいに力がぬけていきました。かれらの頭をしいしているものは、もうぜつぼう、それがいになにもありませんでした。

「う、うわあああーっ！」

空の上からふってくる、巨大なほのおのかたまり！ それはよう

しやなく、白き勇士たちの中へと吹きつけられました！ 逃げまどうたくさんの仲間たち。馬はひどいやけどを負い、地面にたおれました。よろいはこげ、たてはもえ、剣はしゃくねつのほのおを受けて、あつい鉄のかたまりとなって地面に落ちました。

それはベーカーランドのそのさいごのきぼうをもうちくдукため、ワットのおそろしい、さいごの切りふだだったのです。

「とどまるな！ さんかいしろー！」

とつさに、ベルグエルムがみなにさげびました。もはやベルグエルムでさえも、この相手に勝つためのしゅだんはなにも思いつきませんでした。ただただ仲間のぎせいをすくなくするため、ばらばらになつて逃げることしか、できそうもないとさつたのです。

「うしろへまわれ！ ようどうじんけい！ ねらいをつけさせるな！」

フェリアルがさげびました。ですがフェリアルもまた、ベルグエルムと同じでした。もはや、なすすべもない……。フェリアルの頭の中は、そんな思いでみたされていました。せめてこれ以上、仲間たちがきずつくことだけは、さげなくては……。

かれらの前にあらわれたもの。

それは、りゅうだったのです。

りゅう（英語ではドラゴン）。みなさんもよく知っていることと思います（りゅうについてはこれまでのお話の中でも、たびたびその名がどうじようしてきました。ロビーたち旅の仲間たちが、カルモトのことをさがして、西の街道の山道を進んでいったときなどです）。それはたくさんの物語の中にあられわれ、たくさんの人々のことをふるえ上がらせてきた、おそろしいかいぶつでした。巨大なつばさとしつぽを持ち、その口からおそろしいほのおを吹きつける、さいだいにしてさいあくのかいぶつ……。そのりゅうが今、さいごのきぼうにすがるベーカーランドの白き勇士たちの前に、立ちはだかつたのです（場合によつては、よいりゅうというものも、お話の中にはどうじようする

こともあります。たとえば、シープロンドのウォーター・エレメンタルドラゴン。げんみつにいうとかれらは精霊であって、ほんものりゅうというわけではありませんでしたが、それでもかれらは、よいりゅうということになるでしょう。ですがみなさんには、はつきりとお伝えしておかなければなりません。今ここでどうしようしたりゅうは、りゅうの中でもとびきりにおそろしくて、とびきりに悪いやつだったのです。ざんねんなかぎりです)。しかも悪いことに、そのりゅうはりゅうの中でも、いちばんの大きさでした(子どもりゅうなら、まだ馬くらいの大きさです。しかし、としをへて力をましたりゅうともなれば、その大きさはまるで小山そのものといったくらい大ききになりました)。

ワットの手にいれた、さいだいににして、さい強の切りふだ。それこそが、この「もも色りゅう」でした。おそろしい力を持った赤りゅうと白りゅうを、親に持つりゅう。その両方のおそろしさを、かねそなえたりゅう。それが、このもも色りゅうだったのです(もも色のりゅうなんて、見た目はちよつとかわいい気もしますが、その中身を知れば、とてもそんなことをいってはいられないでしょう)。

ワットはいったいどのようなにして、このりゅうを手にいれ、そして手なずけたのでしょうか？ ふつうりゅうという生きものは氣しやうが荒く、とても手がつけられるようなしろものではないのです。ましてやそれを手なずけて味方にするなんてことは、いくらワットといえども、ひとすじなわではないかはずでした。

しかしそれをかのようにするものが、ワットにはあったのです。

大魔法使い、アーザスのそんざいでした。

そう、このりゅうはアーザスによって、ワットにおくられたものだったのです！ そしてこのりゅうの力こそが……、ベーカーランドにやってきた使者が口にした、「アーザスがこのさいこの戦いにおいてもちいてくるという、そのいちばんのまがまがしきやみの力」、そのものでした。光の力にすがる、白き勇士たち、きぼうのたみたちの、そ

のさいごのきぼうをもうちくたくための……。

そして、とほうもなく大きな力をおびた、りゅうのそんぎい。それこそが、アーザスが怒りの山脈にとどまっている、そのいちばんのりゅうだったのです。

怒りの山脈。かつてノランにみちびかれた四人の若き王子たちが、そこに分けいり、アーケランドを荒らす赤りゅうをたいじしました。しかしそのときのかれらには、知るよしもなかったのです。赤りゅうスラインドガルが、みずからのしそんを残していたということ……。そうです、その赤りゅうのしそんこそが、今日の前にあらわれた、このもも色りゅうでした！

もも色りゅうは怒りの山脈のそのかくされたどうくつの中で、静かにときを待つていました。いつの日かじゅうぶんに力をたくわえ、親である赤りゅうを殺された、胸にもえ立つ大いなるふくしゅうのことを果たす、そのときを。

しかし赤りゅうをたいじした四人の中には、ワットのアルファズレドもふくまれているはずです。それならなせもも色りゅうは、ワットに味方しているのでしょうか？

それもすべて、よこしまなる魔法使い、アーザスのさくりやくでした。

アーザスはいいました。「きみのお父さんのことをほろぼしたのは、ベーカールランドのアルマークというやつだよ。かれは、悪いやつでね。悪い魔法を使って、きみのお父さんの力をうばい取り、動けなくしてしまったんだ。それから、助けをこうきみのお父さんのことを、ひきようにも、剣でつらぬいたんだよ。こんな悪いやつを、きみは、このままにしておけるかい？」

たしかに赤りゅうにさいごのいちげきを加えてたおしたのは、アルマークでした（それはたんなる、ぐうぜんでしたが）。しかしアーザスのいったことは、まったくのでたらめです。もも色りゅうにベーカールランドへのふくしゅうをさせようとするための、さくりやくでした。

ほんとうならば、こんなうそにりゅうがだまされるなんてことは、

まずありません。りゅうというのはとても頭のいい生きもので、相手が自分をだまそうとしていることなんて、かんたんに見破つてしまうのです。しかしこんかいは、相手がちがいました。あのアーザスなのですから。

アーザスは自分の言葉の中に、たくみに、たぶらかしのじゅつの力をおりませっていました。相手の感じようを高め、怒りにかられてわれも忘れてしまうように、しむけたのです。父である赤りゅうを殺されたも色りゅうは、アーザスのそのじゅつに、まんまとひつかかつてしまいました。ふくしゅうの心がめらめらともえ、そしてその怒りは、アルマーク王のいるベーカーランドへとむけられたのです。

こうしてもも色りゅうは、悪の魔法使いアーザスのもとで、ふくしゅうのときを待つこととなりました。そのふくしゅうのときこそが、まさしく今、このベーカーランドとのさいごの戦いのときだったのです(「まだ、こないのかなー? おそいよねー」。「手がかかるのよ。あれだけの相手ですもの」。「この章のはじめ、ベゼロインとりでの上で、魔女のエカリンとネルヴァが話していた言葉です。あれはまさしく、このりゅうのことをいっていました」)。

ドルーヴ。この名まえをみなさんはいぜん、きいたことがあるはずです。第十六章のはじめ、アーザスが花のテラスの中で、ムンドベルクと話しをしていたときのことです。ムンドベルクはいいました。「もはやこれ以上、ドルーヴのやつめを、おさえつけておくことはできません……」そう、その名まえ、ドルーヴのしょうたいこそが、このもも色りゅうだったのです! アーザスはこのりゅうを手もとにおくため、そしてみずからも赤りゅうの残したおそろしいほどの怒りのエネルギーをりようするために、りゅうのすみかである怒りの山脈に自分の城をきぎ上げました(どんな力でもりようするアーザスにとってこの怒りのエネルギーはとてもみりよく的なものでしたから、その点からいっても、つごうがよかったです。そして……、ムンドベルクのいう通り、もはやアーザスほどの大魔法使いであっても、そのおそろしいほどの怒りのエネルギーをたくわえたもも色りゅうのことを、おさえつけておくことはできなくなっていました。その

ためアーザスは、いつくも早くこのりゆうの力をさいごの戦いにもちいるために、リユインをふいうちでおそわせたのです。こうしてついに、そのよこしまなるけいかくはじつこうにうつされました。

ところで……、このもも色りゆうドルーヴはさいごのけっせんへとむけてワットにおくられました。そのときりゆうは、セイレン河の上流のはるかな上空を飛んでいきました。それはまさに、ロビーたち旅の者たちが、セイレン大橋の下のカピバラ老人の小屋で一夜を明かしていたときのことだったのです。第四章のいちばんさいご、眠りにつくロビーの横で、ロビーの剣が青く光り出したことがありました。あの光こそ、このもも色りゆうのとてつもないほどの悪意に反応して光った、その光だったのです！ 遠くはなれていても、なお、その悪意に剣が反応する。このりゆうのおそろしさは、ほんとうにはかりしれないものでした。)

さいごの戦いをつづける、白き勇士たち。その勇士たちにむかって、りゆうはようしやなく、その怒りのほのおの息を吹きつけていきました。ちりぢりになって逃げまどう、われらが勇士たち。もはやこれらの守りは、かんぜんにくずれ去ってしまっていました。じんをくむ、それぞれどころではもうありませんでした。ただただ、このおそろしいもも色りゆうのその悪夢のようなこうげきから身をかわすことだけで、せいっぱいになっていたのです。たとえばベルグエルムでも、フェリアルでも。

あと数十。それだけの兵がたおれば、このいくさはベーカーランドの負けです。このアー克蘭ドの運命をきめるさいだいの大いくさは、まもなくけつちやくのときをむかえようとしていました。ベーカーランドの、しんのはいぼくというかたちによって……。

ときはまもなく、子ぎつねのこくげん、午後の一時ころになろうとしていました。戦いのかいしから、およそ一時間。ただそのわずか一時間のあいだに、このアー克蘭ドの運命がきまってしまうとしたのです。こんなにおそろしい一時間が、いまだかつてあったでしょうか？ こんなにおそろしい悪夢が、いまだかつてあったでしょう

うか？ 目の前につきつけられているのは、ぜつぼうと、きようぶ。そのぜつぼうときようぶは、たおれてゆく仲間たちと、そしてもも色のかいぶつというさいあくのかたちによって、かれらの前にあらわれています。

「りゅうの背に、だれかがいるぞ！」

りゅうの飛びかうその下を、馬でかいくぐり、かけつづけながら、だれかがさげびました。そしてよく見てみれば、その通り、このもも色りゅうのつばさの、つけねのあたり。そこにひとつの、まっ黒な人影が見えたのです。その人物は全身まっ黒なよろいに身をかためて、同じくまっ黒なかみを風になびかせていました（かぶとはかぶつておりません）。身長六フィートはあろうかという、大きなからだ。そしてえものをねらうたかのように、するどいまなざし。首もとになにかきらりと、黒い光が光ったように見えました。

その人物はりゅうの首につけられた、たづなをにぎっていました。そう、さながら馬にまたがる騎士のように、この人物はこのもも色りゅうに乗っていたのです。

りゅうが、地面のすぐ近くにまでせまってきます！　そしてそのまま、ひとりの騎士の乗る騎馬にむかつて！

「うわあああー！」

りゅうの、おそろしいきばのならんだ巨大な口。その口がその騎士を、馬もろともとらえました！　くつうにあえぐ、白き勇士。そしてりゅうはその勇士を馬といっしょに、近くの地面の上に、べっ、とはき出したのです。地面にたたきつけられる、われらが仲間。またひとり、ベーカーランドの白き勇士が戦いの場から失われました……。

「アルファズレドだ！」

りゅうのしゅうげきをすんでのところかわした、騎士のひとりがさげびました。りゅうの口にとらえられるその仲間の横で、かれはりゅうのつばさの起こすとつぶうに流されながらも、それを見たのです。そう、りゅうの背に乗っていたのは、ワットの黒の王。かつてア

ルマーク王たちとともに赤りゆうたいじの旅へと出かけた、あのアルファズレド・セルギアティス・ルーイエ、その人でした。

白き勇士たちのあいだに、しようげきが走りました。今まで、ワツトとの数多くのいくさをこなしてきた、かれら。ですがいちどだつて、アルファズレドほんにんがいくさの場にみずからあらわれたことなどは、なかったのです。

この戦いにかける、アルファズレドの思い。それはたんなるくにとくにとの戦いというだけでは、ありませんでした。アルファズレドにとって、いくさそのものは、たいしたもくてきではなかったのです。アルファズレドの、そのしんのもくてき。それはただひとつ、長年に渡るアルマークとのいんねんの、さいごのけつちやくをつけることでした。

かつて、肩をならべて数々のこんなんを乗り越え、ともに戦ってきた、ふたりのえいゆうたち。ときにはげましあい、ときにささえあいながら、かれらはいつも同じ道を歩みつづけてきました。よき友として、よきライバルとして。

アルファズレドが、赤りゆうの持つ黒のメダルのことを手にいれるまでは……。

黒のメダルはアルファズレドがほんらい持っていた人としてのがんぼうを、目ざめさせたのです。それまでもアルファズレドの心の中には、しはいへの願いというものがそんざいしていました。くるしい旅の中で、たくさんのくるしむ人たちのことを見てきたことよつて生まれた、しはいへの願い……。自分にもつと力があれば、かれらを見ちびき、まとめ上げ、助けることができるのだ。アルファズレドのその思いは、アルマークによつてなんとなくなくとどめられてきました。そんなものは、まちがった考えだ。人々のことを助けるのに、力など必要ではないと。しかしアルファズレドのその思いは、かくじつに、かれの心の中を大きくしめていったのです。そこにあらわれた、りゆうの力のメダル。アルファズレドのまよいは、それを手に

したときに消えました。

もはや、ためらうことなし。今こそ、みずからのつとめを果たすとき。

アルファズレドはその思いを胸に、力のかぎりをつくしてきました。すべては、このアークランドをすくうため。人々の心を、くるしみからとき放つために……。それが、アルファズレドのせいぎだったのです。

そしてついに、アルファズレドはさいごの戦いの場へと進んでいきました。それはアルマークとの、さいごのけっせん。さけることのできない、運命の戦いでした。

「アルマーク……」

おそろしいもも色りゆうの背に乗って、アルファズレドは静かにいました。

「おれとお前の、どちらが正しかったのか？　さいごのけっちやくのときだ……」

アルファズレドを乗せたりゆうは、そしてふたたび、空高くまい上がっていきました。

「もどってきたぞ。」

木々のあいだに身をひそめる、大きなからだ。そのからだのあいだから、今美しい白のマントに身をつつんだなんんかの人たちがあらわれて、もどってきたその人物のことをむかえられました。

「どうだった？」その中のひとり、りっぱな衣服に身をつつみ、その下に美しい銀のくさりかたびらを着こんだたくましい青年が、もどってきた小がらなからだの少年にいました。

「とりでの中は、ほとんどからっぽだよ。みんな、戦いの場に出はらっているみたい。残っているのは、見張りと、それに……」小がらなからだの少年が、そこで言葉をにぎしめます。

「どうした？」りっぱな身なりの青年が、たずねました。

「とりでの上に、なにかいるみたい。よく見えなかったけど、なにか、ふしぎな力がはたらいているのがわかった。魔法かもしれない。」

少年の言葉に、その場にいる者みんなが顔を見あわせて、考えこみました。

「魔法、か。」

そのとき、かれらのうしろに立っているその大きなからだのなにかの中から、ひとりの人物があらわれて、かれらにいったのです。

「そいつはおそらく、ワットの魔女どもだな。」

もじやもじやのおひげ、岩のようにがんこそうな顔立ち、ずんぐりとしたからだ。もういうまでもありませんね。そう、この人物は、岩のけんじやリブレスト。そして話しをしていたのは、われらが白き仲間たち。ウルファの騎士ハミールとキエリフ、そしてレイミールをふくむ、リユインの白き勇士たちでした（そしてもちろん、大きなからだというのは、かれらの乗る岩のロボットたちでした）。

岩のロボットたちに乗ったかれらリブレストべつどう隊は、ついにここ、ベゼロインとりでのその前までやってきたのです。そして今、その小さなからだをいかしてレイミールが、とりでのようすをさぐりにいつてきたところでした（レイミールはこういうことがとくいだつたのです。かくれんぼでは、だれにも見つかったことはありませんでした）。

「あの悪名高き、三姉妹！」ハミールが思わずさげびます（となりのキエリフに「しーっ！」としかられてしまいました。ここは敵地の目の前でしたから。なんだかいぜんにも、同じようなことがあった気がしますが……）。「われらはなんと、あいつらにくるしめられてきたことか。」

「ベゼロインのかんらくにも、やつらがからんでいるにちがいありません。」キエリフが、リブレストにいいました（かれらはこのとき、まだベゼロインが落ちたそのくわしいいきさつのことまでは知りませんでした。それはシープロンドにとどいた手紙にも、あえて書かれていなかったので。シープロンドの人たちの感じようをよけいにしげきするべきではないという、心づかいからのことでした。そしてその心づかいが今、われらが仲間たちには、助けとなっていたのです。おそろしい魔女たちのさくりやくによって、仲間のウルファたちが悪

魔のような作戦にりようされたということを知れば、かれらはこのとき、われも忘れて、とりでの上にいる魔女たちのもとへとむかつていってしまったことでしょう……」。

「おそろく、そうだろうな。」リブレストがそのもじやもじやのおひげを手でいじりながら、むずかしい顔をしてこたえます。「だが……」

「やつらの悪行も、これまで。」リブレストのかわりに、キエリフがいました。「われらの力、ぞんぶんに見せつけてくれましょう。」

そしてそのキエリフの言葉に、リブレストもハミールも仲間たちも、みんなにやりと笑みを浮かべ、そのこぶしを胸にあてて、ここにさいごのちかいを立てることとなったのです。

「いざ、まいらん！ ベゼロインをわれらの手に！」

「おおーっ！」（もちろん小さな声でさげびました。）

「おまえたち！ いよいよ、さいごの大いちばんだぞい！」

リブレストの声が、岩のロボットたちの中にひびき渡りました。

「作戦名、ビッグワンス！ みな、ぬかりないな？」

リブレストの声にこたえて、みんなは岩のロボットたちの手をぎゅいんと上げて、こたえます（ビッグワンス？ いったいどういう作戦なのでしょう？）。

「では、いくぞ！ もくひょう、ベゼロイン上部！ 魔女どものいる見晴らし台じゃい！」

ついに、岩のロボットたちがしゅつげきしました！ かれらのさいしゅうもくてき地、ベゼロイン。ワットのきゆうていまじゅつしたる三人の強力な魔女たち、そのおそろしい敵たちのもとにむかつて。しかし……。

あ、あれ？ ちよつと待つてください。

ロボットの数が……、いち、にい、さん……。

全部で五体しかないじゃありませんか！

さきほど木々の影で話しをしていたときには、ちゃんと十七体の口

ロボットたちがせいぞろいしておりましたのに。ですが今、しゅつげきしていったロボットたちの数は、どう見ても五体しかいなかったのです。

「かれらに、すべてをまかせよう。」今ひとりの兵士がロボットの頭の上から顔を出して、去っていくロボットたちに乗りこんだ仲間たちのことを、見送っていました。「われらの思いを、果たしてくれよ。」

これはどういうことなのでしょう？ ベゼロインへとしゅつげきしていったのは、たった五体のロボットたちのみ。そして残りの十二体のロボットたちは、中にいる兵士たちとともに、そのままこの場に残っていたのです！

ベゼロインのだったかんは、かれらの大きなもくひようであったはず。それにはやはり、そのための大きな戦力となるこのロボットたちは、十七体すべてをもちいるべきでした。にもかかわらず、今そのロボットたちのうちのほとんどが、この場に残っていたのです。しかもさらに、おどろくべきことが。

たった五体でしゅつげきしていった岩のロボットたちでしたが、そこに乗っていたのは、ロボット一体につき、なんと一名！ つまり全部でたった五人の者たちだけが、ベゼロインへとむかってしゅつげきしていったということでした！

さあさあ、これはいったいどういうことなのか？ リブレストさんは、いったいなにをたくらんでいるのでしょうか？ そして作戦名、ビッグワズ。そのなぞの作戦のしようたいとは？

すべてはこのあと、あきらかになるのです。

「なにかしら……」

ベゼロインとりでの、その見晴らし台の上。お茶会のテーブルの席で、今長女のネルヴァが、ふいに口をひらきました。

「あぐ、あぐ。らーにー？ れるば？」エカリンが口の中をはるまきでいっぱいにしながら、たずねます（これはもちろん、アルーナとくせいのはるまきでした。ちなみに、「なーにー？ ネルヴァ？」といいましたが）。

「なにか、胸さわぎがするわ。いやな感じ……」ネルヴァがその顔つきを、きつ、と正して、あたりのようすに気をくばりはじめました。

「えー？ ベつにー、なんにも感じないけどー？」エカリンはそういって、つぎのはるまきにまた、ばくり（よく食べますね……）。

「ちよつと、あなた。」ネルヴァが、見張りに立っている兵士のひとりのことをよばわります。「戦いのようすは、どうなっている？ なにか、動きがあつたのかしら？」

いわれて、兵士はあわててしせいを正すと、かしこまっついていました。

「はっ！ もはやわが方のしゅうりは、かくじつなものとなつております。さきほど、アルファズレドへいか、おんみずからが、ドルーヴに乗って戦地へむかわれましたとのこと。ベーカーランドの息の根は、これでかんぜんに、とまるものと思われます。」

「なんだー、もう、ドルーヴちゃん、いっちゃったんだー。」兵士の言葉をきいて、エカリンがぎんねんそうにいいました。「その前にわたしが、がんばつてねー、つて、頭なでなでしてあげよーと思つたのにー。」（そういってまた、はるまきにばかり。よく食べますね……）

ちなみに、このベゼロインとりでから戦いの地までは、きよりは近いのですが、このあたりはまわりを高い岩山にかこまれているうえに、道がまがつていたため、ここからちよくせつ戦いの地をかくにんすることはできなかつたのです。もも色りゆうドルーヴのすがたなら、戦いの地にむかう前にはるかな岩山の上に見ることもできたでしょうが、魔女たちはお茶会の方に気を取られておりましたので、エカリンもりゆうのすがたをかくにんすることができませんでした。はるまきを食べるのにいそがしかったですから……）

「気のせいかしらね……」ネルヴァがふつとけいかいをといて、つづけます（魔女のけいかいというのはおそろしいもので、どんなにたくみに近づこうとしても、けいかいしている魔女にはすぐにさとられてしまうのです。まるですべてのほうこうに、目がついているかのよう）。

「もうじきわたしたちも、ここをひき上げることになるわ。その前

に、わたしもなにか、食べようかしら。あら、おいしそうね、アルーナ。」

ネルヴァのそのしせんさきから、今両手にひとつずつ大きなお皿を持ったアルーナが、こちらへとやってくるところでした。そして、そのお皿に山もりにもりつけられていたのは……。

「……お待たせです……！ アルーナとくせい、チャーシューはるまきです……！」

ま、またはるまき……。

「……アルーナのさいしんさく、ふわふわチーズはるまきもあるです……！」（たしかにおいしそうですけど……）

「またはるまき……？ もう、あきちゃったよー。」エカリンが思わず、ぶーぶーいいました。（さつきからもうエカリンは、はるまきを三十本以上も食べていましたから）。

それをきいたアルーナは、お皿をエカリンの前において、ごちん！ げんこつをひとつ。

「……食べる子は、育つです……！ 育ちざかりの子は、食べるです……！」

「いったーっ！ それをいうなら、寝る子は育つでしょー！」エカリンが頭をおさえて、もんくをいいます。

「おあがりなさい、エカリン。」ネルヴァが、あつあつのはるまきに、ぱくり、かぶりついていいました。「アルーナちゃんのはるまきは、えいようまんてんなのよ。」

「わかったわよー、もうー！」

エカリンはそういつて、しぶしぶ、またはるまきの山に取りかかりました（もんくをいいながらも、エカリンはいちどに二本ずつも、ばくついて食べましたが……）。

ところで、アルーナのこのはるまきには、ほんとうに魔法のえいようがまんてんにつまっています。魔女にとって、それはいちばんのえいようだったのです。これを食べればどんな魔法を使っても、つかれることがありませんでした。でもはるまきばかりじゃ……。せめて、ほかにもあつたらよかつたのに……）。

そのときのこと。

かのじよたちの耳に、とんでもないほどの大声がとどいてきたのです。

「たのもーう！ 岩のけんじやリブレスト、まかりとおる！」

とりでのかべがびりびりゆれるほどの、大声！（じっさいテーブルの上に乗っていたカップやお皿が、かたかたゆれて四インチもはしにずれたほどです。はるまきが落っこちなくてよかった。）

「な、なににー！」エカリンが思わず、「ひええーっ。」と飛び上がった（まわりの兵士さんたちもみんな思わずしりもちをついて、びっくりぎょうてんです）。

魔女たちが、とりでのかべに近づいてみると……。

とりでの前に、巨大な岩のロボットたちが五体、横いちれつにびしっ！ とせいれつして、ならんでいました！ そしてそのまん中の一体、そのロボットの頭の上から今、もじやもじやおひげの老人、岩のけんじやリブレストが、こちらをじろり！ にらみをきかせながら見上げていたのです。

「あれは……！」ネルヴァの顔が、おどろきの表じようにつつまれました。

「岩のけんじや……。ほんとうに、かれがやってきたの……？」

ネルヴァはもちろん、リブレストのことはよく知っていました。山おくの岩のどうくつにこもっていて、めつたなことでは人前にそのすがたをあらわすこともない、伝説的なまでのすごうでのけんじや。まさかほんとうに、そのリブレストがやってくるなんて。

「な、なによあれー！」立ちならぶ五体の岩のロボットたちのことを前にして、エカリンがさげびました。「ぜんぜんかわいくなーい！」（そ、そっちですか……）

ついに顔をあわせることとなった、リブレストと魔女たち。いっほうは、このアーランドで三本のゆびにはいるほどの、けんじや（ノ

ランをいれれば四本ですが)。いっぽうは、悪名高き悪のちえにたけた、三人の魔女たち……。このおたがいがぶつかりあったとしたら、それこそそれきしに残るくらいの大げきとつになるだろうことは、だれの目にもあきらかなことでした。

「おまえさんが、ネルヴァ・ミスナディアだな。」リブレストが、ネルヴァのことを見すえていい放ちます。「悪名は、ききおよんでおるぞ。ずいぶんと、はでにあばれてくれておるらしいのう。」

リブレストの言葉に、はじめは顔をくもらせていたネルヴァでしたが、しだいにもとのよゆうを持ったほほ笑みの表じようを浮かべて、いいました。

「おほめにあずかり、こうえいですわ、けんじやさま。けんじやさまこそ、なんのごようじかしら？ わたしは、ごじようたいしたおぼえはありませんけど？」

ネルヴァとくいの、ひにくたつぷりの言葉（となりではエカリンが「そうよそうよ！」と手をふり上げ、そのとなりではアルーナが首をこくこくうなずきつづけていました）。

「おまえさんに用がなくても、こつちにはあつての。」リブレストが口もとをゆるませながら、つづけけます。「ずいぶんと、おまえさんたちにうらみを持つている者たちがいてな。わしはそいつらに、力を貸してやらねばならん。いつてる意味はわかるだろう？」

その言葉に、ネルヴァは「ふふ。」と笑つてこたえました。

「らんぼうなしゆだんに出ようつてわけね。でも、いいのかしら？ けんじやさまがそんなことをなされて。わたしたちは、おたがいに、力を持つ者。それなりのかくごは必要になるわよ。」

それをきいて、となりのエカリンもぶんぶん怒つて口を出します。「そうよ！ わたしたちがほんきになったら、あんたなんて、かるくぶつ飛ばしちやうんだから！」

「……口が悪いです……！ 相手はけんじやさまです……！」アルーナがそういって、ごちん！ げんこつをひとつ（「いだっ！」と頭をかかえるエカリン）。

「けんじやさま。悪いですけど、うちのいもうこのいう通りよ。い

くらけんじやリブレストでも、げんえきの魔女三人の力に、かなうのかしら？」ネルヴァはそういって、その右手を目の高さにかざしてみせました。その手はとたんに、ぶきみな青白いほのおにつつまれます。おそろしいほどの力がそこにやどっているのだということは、すぐにわかりました。

「そうよそうよ！　ネルヴァ怒らせたら、こっわいよー！　あんたなんて、ばらばらに吹き飛ばしちゃうんだから！」エカリンが「んべつ！」と舌を出して、口を出します。

「……口が悪いです……！　にどもいわせるなです……！」アルーナがそういって、ごちん！　げんこつをひとつ（「いだっ！」と頭をかかえるエカリン。なん回目でしょうか……？）。

さて、いぜんにもお伝えしました通り、いくさではまじゆつしのことをこうげきしたり、まじゆつしどうしで戦ったりすることはきんじられていきます。しかしそれはあくまでも、「いくさ」でのルール。こんなかいのように、いくさいがいの戦いの場面であれば、かれらのことをこうげきしたり、まじゆつしどうしがおたがいに戦ったりしてもいいのです（ですがこれもすでにお伝えしておりますように、たとえいくさのあつかいではないとはいえ、それがとりででおこなわれる戦いの場合では、やはりいくつかの取りきめがあります。その中のひとつが、「とりでを守るがわのまじゆつしであれば、こうげきの魔法を使つて相手をしりぞけてもかまわない」というものでした（ふりかかる火の粉ははらわねばという、あのルールです）。ですから今、ワツトの魔女の三姉妹たちは、リブレストたちのことを魔法で追いはらつてもいいわけです。いっぽうリブレストの方は、「「工作物」ではこうげきできるもの（）やはり取りきめとして、魔法でこうげきすることはできませんでした。

それならばと、読者のみなさんの中には、このように考えた方もいるかもしれませんが。この戦いをいくさということにしてしまえば、魔女たちもいくさのルールにしたがって、魔法でこうげきすることはできなくなるんじゃないの？　そうすれば、あとは残りの兵士さんたちをやつつければ、こつちの勝ちになるじゃんかって。たしかにその通

り。ですけどそれは、いくさあつかいにするのができればの話。いくさとはそのくくにしよぞくする正式なけんりを持った使者が、そのいくさをおこなってもいいという国王のサインのなされた正式なしよるいをしめさなければ、せんげんすることはできないのです。ですからやみくもに「これはいくさだ！」とさけんだとしても、それはいくさとしてみとめられませんでした。いくさとは、あくまでもくにとくにとでおこなわれる、とくべつなもの。だれもがむやみやたらにいくさがおこなえるようでは、こまるのです。そんなことをしたら、あちこちで、戦いがはじまってしまいかねませんもの！

さらにそもそも今は、そのいくさ自体をおこなうことができなかったのです。「同じ相手国とのいくさを、同時にふくすうの場所でおこなうことはできない」。それがそのりゆうでした。つまりげんざいベーカールランドとワットは、エリル・シヤンディーンでのさいごのいくさのまつさいちゆうなのです。ですからこのとりでの戦いをいくさとしてあつかうことは、はじめからできませんでした（また、「いくさはさいていでもどちらかいつぼうのじっさいの兵力が四十人以上でなければ、はじめることができない」というルールもありました。ですからこんなにすくない人数では、やっぱりいくさは、はじめることができなかつたのです。ベゼロインとりでにいるワットの兵士たちは、四十人もいませんでしたから）。

しかし、おそろしい魔法の力を持った三人の魔女たちが相手。そんなことは、リブレストは百もしょうちのうえでした。そしてそのことをよく知っていたからこそ、リブレストはたつた五体のロボットたちで、たつた五人の人数で、ここまでやってきたのです。

さあ、それではいよいよ、リブレストのそのなぞの作戦がじつこうにうつされるときでした。

「なあに、わしもこれでなかなか、悪ぢえがはたらく方のお。」リブレストが、にやりと笑っていました。「まっこうから立ちむかうことだけが戦いではないと、よく心得ておるのだよ。」

「わしのもくてきは、このとりでを取りもどし、おまえさんたちにはすみやかに出ていってもらうことだ。それができれば、なにもおまえさんたちと、ほんきでやりあおうとは思わんでな。」
リブレストの言葉の意味とは？　そしてそのとき、リブレストは四人の仲間たちにむかって、さげんだのです。

「いくぞー！　きゆうきよくがったいー！」

きゆ、きゆうきよくがったい？　そしてリブレストが、そうさげぶのと同時に！

ぎゆいいいん！　がしん！　がし、がしーん！

五体のロボットたちがまたそのすがたをへんけいさせていき……、おたがいのからだをそれぞれひとつの場所へと、よせ集めていききました！　こ、これは、もしや！

がしん！　一体のロボットが、巨大な右足になりました！

がしん！　もう一体のロボットが、巨大な左足になりました！

がしん！　つづくロボットが、巨大な右手（巨大な岩の剣つき）になりました！

がしん！　さいごのロボットが、巨大な左手（巨大な岩のたてつき）になりました！

それらがみんな、リブレストの乗るほんたいにくみあわさって……。

がっしーん！

とんでもなく大きな、一体の岩のロボットがかんせいしたのです！
これぞきゆうきよく！　五身がったい！（すてきすぎるー！）

今や、とりでの見晴らし台にまでその頭がとどくかというくらい
の巨大なロボットが、魔女たちの前に立ちふさがりました！ もちろ
ん、さすがの魔女たちでさえも、びっくりぎょうてんしたのはいうま
でもありません。

「な、なによそれー！ そんなのありー！」エカリンが思わず、「ひ
ええ……！」とアルーナのうしろにかくれながら、そういいます（ちよ
うどロボットの目が、エカリンのことをじろりとにらむ場所にありま
したから）。

これこそリブレストとレイミールがいぜん話していた、「このロ
ボットのほんとうの力」でした。レイミールが楽しみにしていたの
も、わかりますよね。レイミールはロボット大好き、男の子。しかも
こんな巨大なロボットを自分でそうじゅうできるなんて、まさに夢の
ようなことでしたから（そしてがったいしたことによって、このロ
ボットはいぜんよりもはるかにました力とのうりよくを、はつきする
ことができるようになりました。リブレストはもともと、ここいちば
んというさいごのときにあたって、このきゆうきよくロボの力を使お
うと考えていたのです（シープロンドの戦いの場面では、まっさきに
とらわれの者たちのもとへとかけつけていったため、がったいしてい
るひまもありませんでした。そして戦いのじょうきようを見きわめ
たうえからでも、がったいするまでもないと、リブレストははんだん
したのです。戦いの兵力にかんしては、強力なえん軍が、すでにとう
じょうしているようでしたから）。

そしてリュインのとりでをせめるさいにあたっては、やはりがっ
たいするまでもないとわかっていました。いくさの場から遠くはなれ
たとりでにワットの強力な者たちがいるとも、思っています（それ
から（もしいたら、がったいしていたかもしれませんが））。

それから、さいごに残るベゼロイン。このとりでを取りもどすこと
は、かれらのさいごの大しごとといえました。ですからリブレスト
は、レイミールにだいぶせがまれていることでもありませんが、ベゼロ
インとりでにせめこむときにあたっては、はじめから、このきゆう
きよくロボの力を使ってやろうと考えていたのです（そして今、とり

でにワットの魔女たちがいるということがわかったことで、リブレ
トのそのけっしんはさらにかたまっていたというわけでした。この
きゆうきよくロボットの力で、魔女たちをやっつけてやろうというの
です！」。

ちなみに、レイミールはしつかりと、このロボットのそうじゆう席
にすわっていました。そしてがったいたため、そのそうじゆう席の
場所はいぜんとはちがって、腰のあたりにふたりのパイロットたち、
胸の部分に三人のパイロットたちがすわるようになっていたのです。
胸のそうじゆう席のまん中にリブレスト、むかつて右にレイミール、
左にハミール、腰のそうじゆう席の右にキエリフ、左にはリュインの
兵士のひとり、若きバーン・ルーフオニツクがすわっていました。は
つとうじようバーンは、からだは小がらでしたが、はんしゃんけい
にとてもすぐれていて、このロボットのそうじゆうにはうつつけ
だったので。とつぜんリブレストに名まえをよばれてパイロット
ににんめいされましたので、ちよつとびっくりしてしまいました。
そしてもちろん、われらがウルフアの仲間たちのうでまえにかんして
は、いうまでもありません。

「こっちの兵は、この一体のみじやい！」ロボットの口から、リブレ
ストの声がひびきました（そうじゆう者の声が口から出るようになって
いたので）。「おまえさんたちが、おとなしくこうさんしないのな
ら、しょうがないの。この岩の兵士の力で、おまえさんたちを追っば
らわにやならん。」

「そんなこと、できると思ってるのー！」エカリンがアルーナの影か
ら、こぶしをつき上げていました。「いったでしよー！ あんたな
んかじゃ、わたしたちには勝てないんだからー！」（そのわりには、ア
ルーナの影にかくれちゃってるみたいですが……）

「下がってなさい、エカリン、アルーナ。」ネルヴァが前に進み出ま
す。「ちよつと、おいたがすぎるようね。」

そういうネルヴァの顔を見えますと……、ぞくぞくぞくっ！ な
んともおそろしい、魔女の顔！ どうやらリブレストは、ネルヴァの
ことをほんきで怒らせてしまったようです。ど、どうするんですか？

リブレストさん！ わたしは知らないですよ！

「じごくのけいやくのもとより……、とき放て！」ネルヴァがひと声ささやいた、つぎのしゅんかん！

ぶごごごおおお！ どごごごおおくん！

山のように巨大な青白いほのおのかたまりが、巨大ロボットをちよくげき！ 大ばくはつ！ あたりは一マイルさきまでとどくかというほどの、おそろしいエネルギーのうずにつつまこまれてしまいました！

ロボットのすがたは、おそろしいじごくのごうかにつつまれて、まったく見えません。これでは、ひとたまりもありませんでした。ロボットはこなごなにくだけちつて、ばらばら。大やけどを負った五人の仲間たちが、息もたえだえ、地面にたおれふしているはずです……。かれらが相手にしているのは、それほどに強力な、悪魔ほどにもおそろしい魔女たちでした（こんな相手が三人も！ どうやって勝てというのでしょうか？）。

ほのおが晴れていきます。見たくないものが、そこにあるはずでした。しかし……。

え？ ええっー！

なんと！ ロボットには、きずひとつないではありませんか！ あれほどのばくはつのはつちよくげきを受けたというのに！ これはいったい！

「さすがは、アークランドいちばんの魔女だわい。」

ロボットの口から、リブレストの声がひびき渡りました。

「まさか、これほどの力だとは思わなかったぞ。」

ぎゅいん！ じゃきん！

巨大な岩の剣をつきつけて、ポーズをきめる巨大ロボット。それに対して魔女たちは……。

「ええーっ！　ど、どういうことー！」エカリンは信じられないと
いったようすで、目をまるくしてしまいました。となりではアルーナ
が、両手を両のほほにあてて、口をあんどぐり。

しかしいちばんおどろいたのは、やはりネルヴァほんにんです。な
にしる全力とはいかないまでも、かなりのパワーをこめて、ひっさつ
のいちげきを放ったはずでしたから。このていどの大きさの、岩の兵
士の一体や二体、かんたんにばらばらにできてしまうはずでした（な
にしる丘を半分吹っ飛ばすくらいはいりよくがありましたから）。そ
れなのに、どうして？

「そういうことね……」ネルヴァがこわい顔をしたまま、目の前の口
ボットのことをじっと見つめていました。「やられたわ。」

そういうこと？　　いったい、どういうこと？

「さすが、ものわかりがいいの。そういうことだ。」リブレストがこ
たえます。

このロボットがぶじだったわけ。それはこのロボットの持つ、その
きゆうきよく的な力のためでした。この巨大ロボットは全部で五体
のロボットたちががったいしてできたわけですが、それがその力のひ
みつだったのです。五体のロボットたちには、それぞれとくべつなエ
ネルギーがくみこまれていました。つまり五つの精霊のエネルギー、
火、水、風、土、それと、やみの精霊の力、それらの力が使われてい
たのです（これらの力のことについては、いぜんロザムディアのま
ちの門をふっ飛ばしたときに、ライアンがちよつと説明していました
よね。よくわかりませんでしたけど……）。

魔法の力というものは、これらの精霊の力をりようすることによつ
て生み出される力。いいかえれば、これらの精霊の力がないところで
は、魔法はなんの力もはつきりきませんでした。このロボットにそな
わった、きゆうきよくの力。それはかんたんにいえば、「このロボット
のまわりを魔法の力のおよばないところにしてしまう」というもの
だったのです。

このロボットのまわりでは、五つの精霊の力がおたがいに輪をえが
いて、おたがいの力をうち消しあっていました。つまりそれは、魔法

をうち消すバリアーのようなものだったのです。ここに魔法がふれると、その魔法は五つの輪のあいだをぐるぐるまわって、そのあいだに、みんな消えてなくなってしまうというわけでした（まあ、しくみについてはむずかしいので、べつにおぼえる必要はありませんけど。わたしもききましたが、よくわかりませんでしたから……。ようするに、魔法がきかないロボットということなのです。

ちなみに、このきゆうきよくロボにそなわる力は、やはりこのほかにもさまざまなものがありました。魔法がきかないというのは、あくまでも、このロボットの持つそのきゆうきよく的な力のうちのひとつにすぎなかったのです。ですがとても全部はしようかいしきれませんから、それはまたべつのきかいに……。マグマの中にもぐったりもできましたけど……。

そんなしくみのことについて、ネルヴァはすぐにかいしたというわけだったのです（さすがは長女です。

ところで、この岩のきゆうきよくロボでなくても、「魔法をきかなくさせるぼうぎよの魔法」というものもありましたが、その魔法のこうかにはひとつ、けつてんがありました。それは「そのぼうぎよの魔法のこうかをさらにうち消してしまう魔法」というものがあって、その魔法を使われれば、ぼうぎよの魔法のこうかですら失われてしまうのです（ちよつとややこしいですけど）。そしてもちろん、三人の魔女たちにも、魔法のぼうぎよの力をうち消してしまうというその魔法のことを、使うことができました。ですからぼうぎよの魔法を使って魔女たちにそなえたうえで相手をこうげきしようとしたとしても、すぐに魔女たちにそのぼうぎよの魔法を消されてしまつて、かえりうちになってしまうのです。

そのためこの方法は、ぼうぎよの魔法をうち消すことのできるまじゆつしが相手では、いっばんにはむだな戦りやくとして、使われることはありませんでした。ですがリブレストのこの岩のきゆうきよくロボにそなわったのうりよくであれば、それができたのです。このきゆうきよくロボの力は魔法のものではなく、五つの精霊エネルギーをもちいた、リブレストのたくみな「工作」のわざによって生み出さ

れているものでした。ですから魔女たちには、このロボットにそなわった、魔法をきかなくさせるという「工作」のわざによるその力を、魔法でうち消してしまうというようなこともできなかったのです（これが魔法によって生み出されている力であれば、魔女たちにはかんとんに、その力をうち消してしまうことができませんでした）。そのため、ふつうなら魔女たちに対して取ることでできないような、この戦りやぐが使えました。ネルヴァはこういったこともすぐりにりかいしておりましたので、それをふまえたうえでも、「やられたわ。」といったのです。さすがは長女です。

「おまえさんたちの魔法は、この岩のきゆうきよく兵にはきかん。そしてわしらの兵は、このきゆうきよく兵、一体のみ。これがどういうことか？ もうわかったらうな。」

これこそリブレストがたった五体のロボットたちだけで、たった五人の者たちだけで、この場にやってきたりゆうでした。ベゼロインに魔女の三姉妹たちがじん取っているということがわかったとき、リブレストはすぐに、この作戦を思いついたのです（あのビッグワズという作戦です。これは「力の強い一体ずつの兵士たち」というほどの意味の言葉でしたが、なるほど、いわれてみればたしかにその通り）。魔法のきかないこのロボット一体だけなら、魔女たちは手が出せません。へたにほかの者たちをひきつれていけば、その者たちに、魔女の魔の手がのびてしまうかもしれませんでした。ですからリブレストは、そうじゆうに必要なさいていげんの人数だけをひきつれて、この場にやってきたというわけだったのです（そしてリブレストは、このきゆうきよくロボがじっさいにがったいするところを、目の前で魔女たちに見せつけてやろうと思っていました。その方が、インパクトがありましたから。悪名高い魔女たちをへこませてやるのには、こうか的だと思ったのです。が、がたいする前に魔法でこうげきされるかもしれないという点については、リブレストは「さすがの魔女たちでも、けんじやたる自分との会話のとちゆうで、いきなりこうげきしてくるようなことはないだろう」と思っており、心配していませんでした。じっさいにこうげきされそうになったとしたら、大あわて

でがったいする必要がありましたけど……。

ちなみに、このきゆうきよくロボットの力はリブレストがその中に乗っていないければ、ひき出すことができませんでした。ですから「きゆうきよくロボをなん体も」というわけには、いかなかったのです。せいぞろいしたら、さぞかし大はくりよくでしょうけど。ざんねん）。

「ず、ずつるーい！ そんなの、ルールいはんじゃない！」エカリンがぶーぶーもんくをいいましたが、もはやかのじよたちには、どうすることもできませんでした。かのじよたちが魔法も使わずに、こんなにビッグなロボットと戦って、勝てるわけありませんでしたから（いくらおそろしい魔女たちとはいえ、魔法でこうげきできなければ、そのこうげきの力にかんしては、ふつうの女の子と変わらないのです。マリエルみたいにつえでがんがん、相手をぶちのめすわざを持っているというのなら、話はべつですけど……（それに、かのじよたちがルールについて、もんくをいえるはずもないですよ。今までざんざん、人の道のルールをむしした、悪さばかりしてきましたから！）。

ちなみに、ぼうぎよの魔法なら使って身を守ることでもできましたが、身を守っているだけでは、勝てるわけありませんよね。それにロボットが魔女たちのそばに近よれば、ぼうぎよの魔法ですら消えてしまうのですから、おんなじことなのです）。

「むこうの方が、いちまい、うわてだったみたいね。」

ネルヴァが両手を上げて、目をとじ、ふたたび静かな笑みを浮かべながらいいました。

「いいわ、こうさんしましょう。」

「ええーっ！ そんなー！」エカリンが思わずさげびます。「このとりで、あげちやうの？ 怒られちやうよ。」

しかしそんなエカリンですら、もう勝負のけっかはわかっていました。見張りの兵士さんたちがいくらがんばったとしても、この巨大ロボットは、たおせそうもありませんでしたから（たとえあとからなにか手立てをこうじようと思っていたとしても、今はどうしたって、こ

のとりでを明け渡すほかはなかったのです。ここで意地を張っても、あつというまにこの岩のきゆうきよくロボットのゆびにぺちん！とはじかれて、それでおしまいでしたから。

そして……、リブレストはこのとりでをワットの者たちがこのあとすぐにふたたび取りもどしてしまふようなことは、むりであるのだということを、よくこころえていました。お伝えしました通り、エリル・シャンディーンのいくさのさいちゆうでは、このとりででまたべつのいくさをおこなうことはできません（エリル・シャンディーンのいくさの「一部」としてこのとりでで戦いをおこなうことはかのうでしたが、もしそれでこのとりでを守っている者たちをいっぽうの軍が大勢で追いはらったとしても、それは本戦の戦いの一部としてあつかわれるだけで、それでとりでを持つけんりをうばうということはできなかったのです）。いくさではなく、四十人を下まわる人数でとりでにせめこむのであれば、とりでを持つけんりをうばうこともできましたが、四十人くらいの人数であれば、リズレストはわけなく、このロボットの「素のパワー」でぶつ飛ばすことができるかわかっておりましたから。このようなわけで、リブレストは自信まんまん、このとりでにせめこんでいったというわけなのです。

「さすがは、長女だわい。ものわかりがいいの。」リブレストが、にやりと笑っていいました。「なーに、おまえさんたちのことを、どうこうしようなどというつもりは、わしには、さらさらない。もとより、きゆうていまじゆつしたるおまえさんたちの身がらを、こうそくしたりすることなども、できんしな。すぐに立ち去ってくれば、それでいいわい。」（リブレストのいう通り、すべてのくのに取りきめとして、きゆうていまじゆつしのことをとらえたり、ほりよに取ったりすることなどは、やはりきんしされてきました。それはいくさにおいても、それがいいの戦いの場面においても、同じだったのです。）

「かんしゃしますわ、けんじやさま。」ネルヴァがきゆうていまじゆつしのりゆうぎでおごそかに頭を下げて、いいました。「このとりでは、おかえしします。ですけど……」

ネルヴァがまた目をして、「ふふ。」と笑ってからつづけました。

「今さらこのとりでを取りかえしたところで、けっかは、変わらないんじゃないのかしら？ 戦いのようすを、ごぞんじなくって？ わが方のしよりは、もくぜんですよ？ どのみち、このとりでも、なにもかも、ふたたびワットのものになるんですから。」

ネルヴァがよゆうを見せつつけているわけ、それはやはり、そういうことでした。さいごの戦いがワットのしやうりに終われば、すべての力を失うベーカーランドは、そのすべてをワットにささげなければならぬのです。まちなも、とりでも、青き宝玉すらも……。戦いがワットのしやうりまちがいなしというこのときにあたって、かれらがこのとりでにこだわる必要などは、もはやありませんでした。ですが……。

これをきいて、さすかのリブレストもその表じようをくもらせました（ロボットの中にいるので、そこからは見えませんでしたけど）。ベーカーランドがやぶれば、このとりでもふたたび、ワットのものとなる。もちろんけんじやリブレストが、そんなことを知らないわけがありません。ではなぜリブレストもまた、ネルヴァと同じく、大きなよゆうを見せているのでしょうか？

それは、かんたんなこと。

リブレストはベーカーランドが負けるなどとは、みじんも思っていないからです！

「ワットの、しやうりだと？」リブレストがそういつて、「ふん！」と鼻をならしました。

「さすかの魔女さんも、さきを見通す力までは、持つておらなんだよ。うだの。悪のしやうりなんぞ、あり得んわ！ がきんちよどもが、いくら集まったところで、がきんちよは、がきんちよ。ちえを持つたけんじんには、かなわんというこった。さあ、そうそうに、立ち去れい！ わしの怒りが、ばくはつする前にな！」

リブレストが怒りしんとう、いい放ちました。ぴりぴりと、空気がゆれるほどのオーラ。いくらこうげきの魔法を使わないとしても、リ

ブレストがほんきで怒ったら、それこそ大地はひびき、山はゆれ、どんなことになってしまふのか？ そうどうもつきません。これにはさすがの魔女たちも、おそれをいだかずにはいられませんでした（リユインをふくむこれらのとりでは、ベーカーランドの、文字通り、かなめでした。へいわを守るための、大いなるたてでした。これらのとりであることで、敵のしんにゆうを防ぎ、悪に目を光らせつつ、人々の暮らしを守りつつけることができていたのです。まさにこれらのとりでは、このアーランドのぜんなる人々にとっての、きぼうでした。これらのとりでもどすということは、きぼうを取りもどすこと。いくさのならわしなどにはもはやかんけいなく、これらのとりでもどすことは、ベーカーランドの白き者たちのたましいを取りもどすことほどの、大きなしめいであつたのです。そしてリブレストは、かれらのその思いを、よくしようちしていました。ですからなおさらのこと、怒つたのです）。

だれもなにもいわず、しばらくの時間がすぎていきます。そして……。

「いきましよう、アルーナ、エカリン。」ネルヴァがそういつて、静かに歩き出しました。

「かつてにさせておけばいいわ。」

「ちよ、待ってよ、ネルヴァー！」あわてて、エカリンがあとを追いかけます。

「……は、はるまき、持っていくです……！」アルーナがあたふたと、はるまきをもりつけたお皿を持って、あとにくつついていきました（そしてとりでの兵士さんたちも、しきかんたちがいなくなつてしまつては、たまつたものではありません。魔女たちのあとを、「ひええ！」とあわてて、追いかけていきました）。

こうして、ベゼロインはここに、白き勇士たちのもとにもどされたのです。ですがそのとき、エリル・シャンデーインの平原では、さいごの戦いの、そのさいごのけつちやくがなされようとしているところ

でした。戦いのゆくえは魔女のネルヴァのいう通り、だれの目から見てもあきらかでした。ベーカーランドのはいぼく、それがこの場においてくつがえされるなどということは、どうしたって、考えられるようなものではありませんでした。

運命は、どのように動くのか？

そして、せいぎのゆくえは？

おそろしいほのおを吹きつけるもも色のりゆうが、エリル・シャン
デインの王城へとむかつて飛び去っていききました。

さいごのけっちやくのときがやってきたのです。

29、けつちやくのとき

ちちちつ、ちちちち……。

あざやかながね色をした小鳥が二羽、美しいなき声を上げながら、頭の上を飛び去っていきました。空は雲ひとつない、かいせいです。春のおひさまは、さんさんとてりかがやいていました。吹きぬけてゆく、ここちのいいそよ風。それに乗ってはこぼれてくる、草のにおり。みどりのしばふのそのところどころには、白やきいろやも色の、小さな花々がさきほこっていました。しばふのむこうに広がるのは、いただきに雪をいだいた、ゆうだいな山々。そのすそのに広がる美しい大地の上には、すんだ水をたたえたきれいなみずうみを、あちこちに見て取ることができます。流れ落ちる、いくつかのゆうがなたきのすがたも見られました。

まことにここは、へいわそのもの。いちにちじゆうなにもせず、ただこのしばふに寝ころんでいられたのなら、どんなにしあわせな気分にあひたれることでしょうか。

今そのしばふの上に、ふたりの子どもたちがならんで寝そべっていました。手足を大の字に広げて、ここちいいおひさまの光を、からだいっぱいにあびていたのです。ひとりは白く美しい、とてもりっぱなきぬの衣服に身をつつんでいました。かみは白に近い、しんじゆ色の金の羽のかみかざりをつけていて、その肩にはりっぱなもんしようのはいった、さんかくのかたちをしたかざりものがつけられております。もうひとりは黒くなめらかなビロードの衣服に身をつつんでいて、やはりその肩には、もんしようのはいったかざりがひとつつづられていました。かみは黒。腰のベルトには宝石のかざられた、小さな短剣がいつぱん取りつけられております。

ふたりとも、ひとめでどこかのくにのりっぱな身分の子どもたちであるということがわかりました。そしてその通り、かれらはとあるふたつの王国の、王子さまたちだったので（肩についているもんしようは、それぞれの王国のものでした）。身なりだけでなく、そのと

のった顔立ちも、かれらの中身をよくあらわしていました。ですがかれらのねんれいはまだかなり若く、ふたりとも八さいか九さい、そのくらいであるかのようでした。

「気持ちのいいところだね。」しんじゆ色のかみの男の子が、うっとりとした顔をしていました。

「おれの、ひみつの場所なんだ。」黒いかみの男の子が、ひとみをとじたままこたえました。

「だれにもいうなよ？ おまえだけだからな。」黒いかみの男の子は、そういつて「ふふ。」と笑みを浮かべます。「おれは、見こみのあるやつにしか、しんせつにしてやらないんだ。」

黒かみの男の子がつづけました。

「城のれんちゆうも、くだらないやつらばっかりでさ。自分のりえきばっかり考えてる。おれは、れんちゆうから見たら、ただのかざりみたいなもんさ。」

黒かみの子は、そういつて「ふん！」と鼻をならします。

「そんな。アルちゃんはりっぱだよ。」しんじゆ色のかみの子が横をむいて、黒かみの子にいました。「ぼくも早く、アルちゃんみたいにりっぱになりたい。」

いわれて、黒かみの子が「ふふ。」と笑ってこたえます。

「おまえは、じゆうぶんによくやつてるよ。おれなんかよりも、はるかにうまくな。おまえには、城のせいかがあつてる。おれにはむいていないんだ。」そういつて、アルちゃんとよばれた黒かみの男の子は、からだを「うくん……！」とのばして、大きなあくびをしました。

「あーあ、早く、大きくなりてえな。そしたらおれは、冒険の旅に出るんだ。悪いやつらをばったんばったん！ 残らずやつつけてやる。」黒かみの子がそういつて、両手を動かして、剣で敵をやっつけるしぐさしてみせます。「おれは、いつか、このアークランドをひとつにまとめ上げてみせる。そして、みんなが笑って暮らせる、へいわな世の中を作るんだ。」

「アルちゃんなら、きつとできるよ。」しんじゆ色のかみの子が、にっこり笑っていました。「ぼくも、大きくなったら、アルちゃんといっ

しよに冒険の旅に出たいな。剣はまだ、にがてだけど、きつと強くなつて、アルちゃんのことを助けられるようにするから。」

「よし、やくそくだぞ。」黒かみの子がそういって、しんじゅがみの子の手を取って、その手を大きくふりました（これは、ゆびきりげんまんみたいなものでした）。「早く、強くなれよ。おれたちがそろつたらむてきだつてこと、みんなにわからせてやろうぜ。」

「やくそく。」しんじゅがみの子がそういって、またにっこり笑います。

「ぼくたちは、ずっと友だちだよ、アルちゃん。」しんじゅがみの子がいいました。「ベーカーランドも、ワットも。」

ベーカーランド……。ワット……。

そして、しんじゅがみと黒かみの、ふたりの王子さまたち……。

もうおわかりでしょう。このふたりの子どもたちは、おさなきころの、アルマークと、アルファズレド、まさしくそのかれらだったのです。

「あたりまえさ。」小さなアルファズレドが、「ふふつ。」と笑つてアルマークにいました。「おれのとよりは、いつでも、おまえのためにあけといてやる。おれたちは、ふたりでひとりみたいなものだからな。ベーカーランドとワットも、いつまでも友だちだ。」

アルファズレドはそういって、アルマークの手をにぎります。

「いいから、おれのごとは、アルファつてよべよ。アルちゃんつて、がらじゃないぜ。それに、おまえだつて、アルちゃんだろ？ アルマーク。」

「うん、まあ、そうなんだけどね。」小さなアルマークが、そういつて笑いました。「じゃあ、アルファちゃんにしようか？」

「それじゃ、こないだきた、あいつみたいだろ。あの、シープロンの、メリアンとかいうやつ。いきなりおれのこと、アルファーちゃん！とかいって、だきついてきやがつて。おかしなやつだな、あいつ

は。」

それをきいて、アルマークは思わず「あはは。」と笑ってしまいます（ベーカーランドとシープロンドはむかしからのつきあいでしたから、アルマークはメリアンのことも、このころからよく知っていました。だいぶ変わった子だな、とアルマークもずつと思っていたのです）。

「アルファでいいよ。その方が、おれも気らくだからさ。」アルファズレドがいました。

「わかった。」アルマークがこたえます。

「アルファ。」

おひさまの光のふりそそぐ、空の下。

ふたりはいつまでも、そのしばふに寝そべって、あつい夢を語りあっていました。

ぐわー！　ぐわー！

つめたい小雨のふりしきる、なまり色の空の下。そのまっ黒なつばさをはばたかせて、今大きな二羽のからすが、いちもくさんに雲のむこうに飛び去っていきました。それはかなたからせまりくる、なにかおそろしいエネルギーからのがれるためでした。風に乗って、この空気が伝わって、ぴりぴりとふるえるような、なにかのもえるような、きなくさいエネルギーの波がここまでとどいてくるのです。

そしてその力のみなものは、すぐにあきらかになりました。あつくたれこめる、その雲のむこう。そこから今、なにかとてつもなく巨大なきようふのものが、こちらへとむかってやってくるところだったのです。

雲のあいだから飛び出してきた、その巨大なからだ。おそろしいかぎづめを持った、ふたつの手。とげのならんだ、大きなしっぽ。全身はあつくかたいうろこで、すっかりおおわれております。そしてその背中からは、おそろしいほどのエネルギーを放つ巨大なふたつのつば

さが、ばつさばつさ！ はばたいて、その巨大なからだをちゆうに浮かせていました。

なによりもおそろしいのは、その顔でした。ぎらりと光る、金色のひとみ。頭にふたつ、鼻の上にひとつ、大きなつのが生えております。鼻からはもくもくと、白いけむりが吹き出ていました。そしてその巨大な口。そのあいだからは、いっぽんいっぽんが人の背たけほどもあろうかというおそろしいきばが、ならんで生えていたのです。

この生きものは、伝説に名高いりゆうでした。からだの色は、くすんだもも色。そうです、このりゆうはエリル・シャンディーンの戦いにおいて、ベーカーランドの白き勇士たちのことをふるえ上がらせた、そのもも色りゆうでした。かつてアーケランドを荒らした、赤りゆう。その赤りゆうの子であるこのもも色りゆうは、今まっしぐらに、エリル・シャンディーンの王城へとむかって飛んでいるところだったのです。その下では、いまだ白き勇士たちが、けんめいの戦いをくり広げているところでした。しかし戦いのけつまつは、もはやあきらかだったのです。このもも色りゆうが、これ以上手をくたさずとも……。

もも色りゆうドルーヴは、まさに今、自身のそのふくしゅうのちかいを果たさんとしていているところでした。まっしぐらに、エリル・シャンディーンへ。そしてそこにいるふくしゅうの相手、アルマークのもとへと。

その背に同じく、アルマークとのさいごのけつちやくをつけんとしている、アルファズレドのことを乗せて……（このもも色りゆうのこゝとを手にいれたアーザスにとって、いくさの勝ち負けにこのりゆうの力がちよくせつにかかわらなくても、それはたいした問題ではなかったのです。アーザスのもくてきは、ただひとつ。さいごの戦いにおいて、ベーカーランドの者たちに、ただひたすらのぜつぼうを与えること……。そしてそれはもはや、果たされてきました。ですからこのりゆうのことをまかされていたアルファズレドは、もはやいくさの勝ち負けなどにはかんけいなく、さいごのおのれの運命のために、この

りゆうとともに、アルマークのもとへとむかったのです。そしてアルファズレドがそうするだろうということは、このりゆうのことをアルファズレドにたくしたアーザスにも、よそくできていました。

雨にくもった空のむこうに、エリル・シャンディーンの白き王城が見えてきました。その前には、ちゆうに浮かぶたくさんの魔法の小島をそなえた、まちなみが広がっております。その小島から広がる魔法のバリアーが、エリル・シャンディーンのまちをすっかりおおいっくして守っていました。これはいぜんにも説明しました、ノランの魔法の力によるものです。そしてその魔法の力を大きくさせてじっさいにまちを守っていたのは、ベーカークランドの若ききゆうていまじゆうとしたちである、マレイン・クレイネルとロクヒュー・テオストライクの、両名でした。エリル・シャンディーンのまちなみは、もっか、このふたりのまじゆうつしたちの手によって、守られていたのです（この守りの魔法をずっとたもちづけるのには、ノランの魔法の力に加え、かれらほどの魔法の使い手の力が必要だったのです）。そしてきゆうていまじゆうつし長であるルクエル・フォートは、アルマーク王じきじきのいらいにより、エリル・シャンディーンの王城の守りをおおせつかつていました（まことにこの三名のきゆうていまじゆうつしたちの力がなかったなら、人々はとても、この場にとどまっていることなどはできないでしょう。かれらはまさに、このエリル・シャンディーンの守りがたな、そのものだったのです）。

もも色りゆうが、エリル・シャンディーンのまちなみに近づいてきました。しかしりゆうは、とてもかしい生きものです。まちが魔法のバリアーによって守られているなどということは、いわれるまでもなくわかつていたことでした（そしてこのまちにいくさのひがいをもたらしてはならないというルールのことも、もちろん知っていました）。ドルーヴのもくてきは、このまちではないのです。ただひとつ、アルマークのいる王城、それだけでした（たとえ王城が強力なバリアーによって守られていたとしても、ドルーヴはおかまいなしに、そこにつっこんでいくつもりでした。まさに力わざで、魔法の守りを

とつぱしようにともくろんでいたのです。ドルーヴほどのおそろしいりゆうならば、できないことはありませんでした。

それでも色りゆうドルーヴがその怒りにもえて、もえさかるほのおの息をいつでも敵に吹きつけてやれるという、まさにそのとき……。

「アルファア！」

とつぜんにさげられた、アルファズレドの名まえ！ ですが、ここははるかな空の上。いったいどこから、その声はきこえたのでしょうか？

ばさっ！ ばさっ！

つばさのはばたきとともに、その声はりゆうの頭の上からひびいてきたのです！ そしてりゆうの背に乗るアルファズレドが、その目を高く空にむけると……。

今そのしせんのみさきから、白いつばさを持った白い馬に乗ったひとりの人物が、こちらへとむかつてまっすぐにおりてくるところでした！ 白いよろいに身をつつみ、その手にきらめくいっぽんのつるぎを持った、ひとりの人物。そのかみは、かがやくようなしんじゆ色……。そう、この人物は、まぎれありません。ユニコーンのつの持つペガサスに乗った、ベーカーランドの白き王、アルマーク・クリステイア・ベーカー、その人だったのです！（アルマークはアルファズレドとのさいごのけっせんにのぞむため、ひとりペガサスの背に乗って飛び立ちました。ワットの王城、アルファズレドのもとにむかうつもりだったのです。しかしその道のりは、思いもかけず大きなへんこうをとまなうことになりました。道のとちゆう、アルマークはふきつな影を目にしました。それはまさしく、きょうふそのものでした。アルマークはかなたの空を飛びゆく、もも色のりゆうのすがたを見たのです。そしてアルマークはそのりゆうの背に、運命の相手のすがたを見まし

た。そう、アルファズレドです。アルマークは大きく空をまがり、りゅうの背に乗るアルファズレドのことを追いました。そしてついに、アルマークはそのアルファズレドのもとへと、たどりついたのです。）

「アルマーク……」アルファズレドがちゅうを見上げてそうつぶやき、腰におびた剣をぬき放ちました。黒いオーラを放つ、まっ黒なやいばを持った、おそろしきつるぎ。これは力をもとめるアルファズレドがついにいきついた、きゆうきよくの力を持つやみの魔法の剣でした。その名も、ガルヴァード。この剣で切られた者はそのからだからいのちの力をすい取られ、そして剣を持つ者は、ぎやくにその力をましていくのです。それと同時に、剣のやいばもさらに、その力をましていきました。力が、力を生む。おそろしい剣です。

とつげしてくる、アルマークのペガサス！　そして……。

がききーん！

ぶつかりあう、剣と剣！　白きつるぎ、せい剣ロスフォルドの光のエネルギーと、黒のつるぎ、よこしまなる力持つガルヴァードのやみのエネルギーとが、ともにはじけ、空中でばちばちとエネルギーの花をちらしていきました。

ふたたび、体勢をととのえるアルマーク。アルファズレドもりゅうのその巨大なからだをあやつって、アルマークにむかいます。

もういちどむきあつた、ふたりのえいゆうたち。そして……。

がききーん！

ふたたびぶつかりあう、二本のつるぎ！　剣のエネルギーはこの暗くにこったなまり色の空の中をも、かがやく光とやみにそめ上げました。

「アルマーク！」アルファズレドがさけびました。「おれとおまえと、どちらが正しかったのか？　今こそ、そのこたえを出すときだ！」

アルファズレドを乗せたりゆうが、アルマークにむかっていきます。そしてアルマークもふたたび、まっこうからりゆうに立ちむかつていきました。

「アルファー！ おまえに、わたしはたおせん！ いつわりの力にすがった、今のおまえにはな！」

がきいーん！

うちかわされ、はげしくはじける、剣のエネルギー。もえさかるほのおのように吹き出したそのふたつのエネルギーは、そのままおたがいにとりぎりぎりとおしあい、ぶつかりあい、ふたりのえいゆうたちのからだをまるでからみあう二ひきのへびたちのように、取りかこんでいきます。

やいばをまじえたまま、かれらはおたがい、いつぽもひきませんでした。剣をにぎる手に、さらに力がこめられていきます。目の前には、かつての友のすがたがありました。おたがいに、えいえんの友じょうをちかいあつたはずのふたり。それが今では、かわすやいばのさきになら、その顔をたしかめあうことができないのです。なんという運命なのでしょう。なんとかなしみなのではないでしょうか！

アルファズレドの口もとが、わずかにゆるみました。

「なかなか、うでを上げたな、アルマーク。いつも、おれのあとをついてくる、ひよつ子だったくせに。」

アルマークもその口もとをゆるませ、それにこたえます。

「おまえのとなりの席を、勝ち取ったわたしだぞ。努力をおこつたのなら、おまえに申しわけが立たないからな。わたしも、成長しているんだ。」

ぎやりん！

剣がふたたびはじかれました。アルマークの乗るペガサスが、はすみで空中によろよろと投げ出されます。そしてそこに！

ぐおおおおー！

もも色りゆうの、おそろしいほのおの息！ そのほのおはペガサス

のつばさをかすめ、すんでのところで、アルマークのからだをはずしていきました。まともにくらったら、ペガサスもアルマークも、そのままその身をやきこがされて、まつさかさま。勝負はいつしゅんのうちについてしまったことでしょう。まことに、おそろしい相手です。アルマークはこきゆうをととのえ、今いちどアルファズレドにむかいあいました。

「アルファ、きみは、わたしのもくひようだった。そんなけいしてもいい。」アルマークが剣をかまえて、アルファズレドにいいました。

「だが、今のおまえはちがう。今のおまえの力は、おまえ自身の力ではない。いつわりの力だ。今のおまえは、わたしのあこがれたおまえではない。わたしがもういちど、おまえに、むかしの心を思い出させてやる。ともに夢を語りあった、あのころの心をな！」

アルマークがとつげきました！　しかし……！

もも色りゆうドルーヴは、そのときすでに、つぎのこうげきへのわなをしかけていたのです。さきほどのほのおは、アルマークのことをこうげきにゆうりな位置へとみちびくための、さそいでした。アルマークがアルファズレドにむかっていく、まさにそのとき。その目のとどかないところから、もも色りゆうのそのおそろしいこうげきが、アルマークのことをとらえたのです。

びゅっ！　空を切る、なにかの音。そして、そのいっしゅんののち……。

「ぐはっ……！」

アルマークの口からもれる、くるしみの声……。

アルマークはそのまま、ペガサスとともに落ちていきました。アルマークのからだから、ぼろぼろと、くだけた白いよろいのはへんがこぼれ落ちていきます。

アルマークをおそったもの、それはりゆうのそのしっぽでした。りゆうのその長いしっぽは、アルマークの目のとどかないしかくから、ふいについて、ペガサスのからだだとアルマークのわきばらをうち

すえたのです。いくらよろいに身をつつんでいるとはいえ、このいちげきはまさに勝負をきめる、そのいちげきとなり得るものでした。

ですが……。

われらがベーカーランドの白き王は、まさしくえいゆうでした。りゆうのいちげきをまともはその身に受けながらも、アルマークはふたたび、落ちていく空中で体勢を取りもどし、その場にふみとどまったのです！

エルダー・エリル・アーマー。アルマークが身につけていた、せいなるよろいの名まえでした。このとくべつな力を持つ魔法のよろいかなければ、アルマークはひとたまりもなく、からだをうたれ、骨をくだかれ、小雨のふりしきるこの空の中を、まっさかさまに地上へとむかつて落ちていってしまっただけでしよう。そしてそのさきに待ち受けているものは……、ただひとつの、悪夢のようなけっかであつたはずです。

アルマークはふたたびその手にせい剣をにぎりしめ、頭上のりゆうに立ちむかいました。しかし、せいなるよろいのおかげでおそろしいりゆうのこうげきをなんとかいとめることができたものの、アルマークの受けたダメージは、そうとうなものでした。うちすえられたわきばらからは、血がにじみ、なんとも痛々しそうです。そして、せいなるよろいエルダー・エリル・アーマーは、ぼろぼろにくだけちり、もはやよろいとしての力はほとんど残っていませんでした。つぎにまたりゆうのこうげきを受ければ、そのときこそ、助かることはできないでしょう。

さらに、アルマークの乗るゆうしゆうなるペガサス。かれもまた、りゆうのしつぽのいちげきをその身にあびて、かなりのダメージを受けていました。もはやかれも、今までのようには、そのつばさをかすることはできないはず。しかしこのペガサスは、まことにえいゆうをその背に乘せるのに、ふさわしい生きものでした。乗り手のアルマークがえいゆうなら、このペガサスもまた、痛みやきようふにたえることのできる、まことのえいゆうだったのです（ちよつとせいかくは悪いですけど）。このペガサスは、クリーブという名まえをつけら

れていました。そしてそれはそのもの、「力持つえいゆう」という意味の言葉だったのです（ですから気がるに、馬などというあつかいをし
てはいけません。へたなことをすれば、そのうしろ足で、キツクされ
てしまいますから）。

クリーブの背に乗るアルマーク。その目はまっすぐに、りゆうへ、
そしてその背に乗るアルファズレドのもとへとむけられていました。
もも色りゆうのそのおそろしい金色のまなざしが、アルマークのこ
をぎろりとにらみつけております。このもも色りゆうドルーヴも、ま
た悪のえいゆうとよべるものでした。いっしゅんたりとも、ゆだんは
できません。アルマークはりゆうのその口に、つめに、足に、そして
しっほに、ゆだんなくしんけいを集中させました。

アルファズレドが、その黒のつるぎをアルマークにつきつけまし
た。その目はまっすぐ、アルマークのことを見つめております。アル
ファズレドの顔からは、さきほどまでの笑みはもはや消えていまし
た。おそろしいまでのまなざし。すきのまったくないその動き。目
の前にいるのは、おそろしい黒の軍勢をひきいてアークランドのその
すべてをしいしようともくろむ、ワットの黒の王、アルファズレド・
セルギアティス・ルーイエ、まさしくその人だったのです。

アルファズレドを乗せたりゆうが、アルマークにとっしんしました
！ アーザスによつてたぶらかされた、怒りのりゆう。今こそ、親で
ある赤りゆうをたおされた、そのうらみを晴らすときなのです。この
りゆうはまさしく、怒りのエネルギーのかたまり、そのものでした。
もも色りゆうドルーヴは、今までなん十年と、暗いどうくつの中
でひっそりとふくしゆうのときを待ちつづけていたのです。その怒り
のエネルギーがばくはつした今……、ドルーヴはまさしくふくしゆう
のおにとなって、そのほんらいの力をなんばいにもふくれ上がらせて
いました。ただひとつ、アルマークのことをうちたおす、そのためだ
けに。

「これで終わりだ、アルマークー」アルファズレドがさげびました。
「これが、おれのせいぎー！ おまえは、せめて、おれのこの手でほう
むってやるー！」

剣をかまえてとつげきしてくる、アルファズレド！ アルマークは身じろぎひとつせず、そのすべてを受けいれようと待ちかまえました。りゅうのつばさのはばたきは、ねつきをおびたすさまじい風とあって、アルマークの全身をおそいました。しかしアルマークは、まっすぐ前を見すえたまま動じません。りゅうの口から、ほのおが吹きつけられます！ ですがアルマークは、すでにそれを見切っています。つばさを下げるクリーブ。ほのおはその上を通り、アルマークのかみをすこしだけこがして、うしろの空に消え去っていきます。それからすぐに、怒れるりゅうのその両手のつめが、アルマークのことをひきさかんとおそいかかりました。しかしアルマークはまたしても、そのつめをひらりとかわし、りゅうのうでのその中を、かいくぐっていったのです。そして……。

アルマークは、もも色りゅうのその頭の上へと、ペガサスのつばさをはばたかせました！

「うおおおー！」

アルマークがさけび声とともに、その身ひとつでアルファズレドに飛びかかります！アルマークのねらいは、はじめからひとつでした。おそろしいりゅうのそのこうげきをかわすための、いちばんのしゅだん。それはりゅうのこうげきのとどかないところに、その身をおくということなのです。それはまさしく、アルファズレドのいるところ。りゅうのその背中の上にほかなりませんでした。

そう、アルマークはクリーブの背から、アルファズレドのいるりゅうの背のそのもとへと、ただひとり飛びうつったのです！

クリーブがひとり、空高くはなれていきます。しかしもも色りゅうドルーヴの心は、ただひとつ、アルマークのみにむけられていました。ドルーヴはつばさを動かして、その背に乗ったアルマークのことをふりはらおうとしましたが、だめでした。アルマークとアルファズレド

のふたりがいる場所は、まさにりゅうのしかく。こうげきの手のとどかないところだったのです。ドルーヴは齒をぎりぎりとならして、いきり立つばかりでした（へたなことをすれば、味方のアルファズレドまでまきぞいにしてしまいますから。それはアーザスからも、かたくとがめられていたことだったのです。そしていくら怒りにかられたドルーヴとて、そこまではありませんでした）。

りゅうの背の上で、ふたたびあいまみえるふたり。そしてふたたびうちかわされる、剣と剣。それはおたがいに、いっぽもひき下がることのできない戦いでした。たとえこの身がほろびようとも、かれらはおたがいに、それぞれのけつちやくをつけなければならなかったのです。ひとりは、かつての心を相手に取りもどさせるため。そしてもうひとりは、自分のえらんだ道が正しかったというじじつを、相手につきつけるために……。

「もどつてきたぞ！」アルマークが、かわす剣のやいばのあいだから、そのむこうにいるかつての友にいました。「このねばり強さは、きみから教わったものだ。三十年前の、あの冒険の旅の中でな！」アルファズレドが、するどいまなぎしのままこたえます。

「ひよっ子に、このおれがこえられるとも思っているのか！ おれは、力にすべてをささげた！ 今のおまえなど、もはや、おれの敵ではない！」

上空に吹き荒れる風は、すさまじいほどのものでした。それに加え、りゅうのからだから吹き出されるおそろしいまでのエネルギーが、びりびりと、ふたりのからだにうちつけられていくのです。足もととは、りゅうの背の、そのうろこの上。まさしくここは、このふたりのえいゆうたちの運命をきめるにふさわしい、さいごのけつせんのぶたいでした。

「あのときー」アルマークがふたたび、さげびました。「なんとしても、きみをとめるべきだった！ すべては、わたしのせきにんだ！ だからわたしは、今、この身のすべてをささげてでも、きみのことをとめてみせる！」

アルファズレドが悪の道に進んだ、そのさいだいのきつかけ。それ

はかれの首にかかる、ひとつのりゅうの力のメダルだったのです。アルマークはアルファズレドがそのメダルを取ることを、とめることができませんでした。そのことはずっと、アルマークの心をしめつけづけていたのです。

「ほざけー。おまえに、なにができる！　ぬるま湯につかりきった、ふぬけたおまえに！」

アルファズレドがそうさげんで、手にしたつるぎガルヴァードのやいばに力をこめました。とたんに、黒のやいばからしつ黒のエネルギーがわき起こり、アルマークにおそいかかります！　そしてアルマークもまた、せい剣ロスフォルドのやいばに、あらんかぎりの力をこめました。その光の力が、悪のやいばの力にあらがっていきます。

ぎりぎりときしむ、ふたつのやいば。強力な魔法の力を持つ二本のつるぎから、まるでいなずまのように、魔法のエネルギーが吹き出していきます。まことに、全身ぜんれい。その戦いは、白と黒。ぜんと悪。それぞれのえいゆうたちのその力の大きさをしようちようするかのような、すさまじい力と力のぶつかりあいでした。

光とやみ。うちかわされる二本のつるぎ。しかし……、黒のえいゆうのそのおそろしいまでの黒の力は、もうひとりの白きえいゆうの力を、大きく上まわっていたのです。

「ぐわあああつー！」

アルマークのそのいつしゅんのすきについて、悪のやいばガルヴァードから放たれた黒のいかずちが、せい剣ロスフォルドの守りを破り、アルマークのからだをうちすえました！　アルマークはそのまま吹き飛ばされ、りゅうの背の上にたおれこみます。すかさず、もも色りゅうドルーヴがその背を大きくかたむけ、アルマークのことをふり落とそうとしました。ドルーヴの背の上をすべっていく、アルマーク。あぶない！　落ちる！　そしてアルマークのからだがりゅうの背の上からはるかな地上へとむかって落ちていこうかという、そのとき。アルマークはりゅうのそのうろこのいちまいに手をかけて、なん

とかそのふちにふみとどまったのです。しかしもう、勝負のゆくえはあきらかでした。まさに、ぜったいぜつめい。アルマークのつるぎ、せい剣ロスフォルドは、りゅうの背の上からはるかな地上へとむかつて、落ちていつてしまいましたから……。

「むだだ。」アルファズレドがガルヴァードのやいばを、りゅうの背のふちにしがみつくとアルマークにつきつけて、いいました。

「しよせん、おまえのいうことなど、夢物語にすぎない。この世界は、力こそがせいぎ。弱き者は、力ある者にしたがうのみだ。」

アルファズレドがその黒のやいばをかまえながら、ゆつくりと、アルマークのもとに近づいていきます。もはやアルマークには、なにもなすすべは残されてはいませんでした。

「さらばだ、友よ。」

アルファズレドの剣が、アルマークの上にふりおろされようとしていました。

「ここだ……、アーザスは、ここに……」

暗きめいろの果て、ロビーとソシーはその門の前にたどりつきました。

めいろの中には、生きもののけはいはまったく感じられませんでした。あるのはただ、くるしみにあえぐたましいたちの、声にならないひめいだけだったのです。

めいろの中は、しんと静まりかえっていました。ロビーの歩くくつの音だけが、ただかつんかつんとひびいていきました。てんじょうは高く、そのさきはやみにつつまれていて、まったく見えません。いったいどこまでこのてんじょうがつづいているのか？ ぜんぜんけんとうもつきませんでした。

めいろの中にはたくさんの黒い川が流れていて、その上には黒い石でできたぶきみな橋がかけられていました。黒い流れははるかな下

にあつて、橋はその流れから、百フィートほども上にかけられていたのです。橋には悪魔のようなすがたをした生きものの石ぞうが、たくさんならんでいました。それはソシーのことをおそったあのおそるべきわなの石ぞうに、そっくりでした。ロビーは意をけっして、ソシーのことをかばいながらそれらの橋の上を走りぬけてきましたが、それらの石ぞうには、なんのわなもしかけられてはいませんでした（あるいはしかけられていたのかもしれませんが、アーザスがそれをとめていたのかもしれませんが）。

数えきれないほどたくさんのかいだんが、めいろのあちこちにつくられていました（のぼつてみたらただかべがあっただけということも、なんどかありました）。ロビーはそれらのかいだんを同じく数えきれないほどのぼつたりおりたりしていききましたが、かいだんをのぼつたはずなのに、たどりついたところはさつき見えていた下の階の広間、というようなこともなん回もありました。ですからいったい、自分のいるところはどれほどの高さのところなのか？ それすらもぜんぜんわからなかつたのです。まことにこのめいろは、ちつじよやじようしきとはまつたくかけはなれた、でたらめきわまりない悪の道でした。

ロビーは自分の感かくにみちびかれるまま、このめいろの道を進んでいきました。もしこれがロビーでなかつたとしたら、このめいろにふみこんだ者はあつというまに道にまよつてしまつて、アーザスのそのやみの魔法の力に取りこまれ、えいえんに、このおそろしいやみの中をさまよいつづけることになるでしょう（あるいはその前に力つき、たましいのほのおとして、アーザスにその力をすいつくされてしまうことでしょうか）。そして、どれほどの時間がたったのでしょうか？ ロビーはついに、その巨大な門のその前へとたどりついたのです。

それはこれまでに見てきたものの、そのどれよりもおそろしい門でした。高さは三十フィートほど。血のように赤いぶきみな石でできていて、そのあちこちに、ゆがんだ目や口や手をかたどつたちようこ

くがなされていきました。それはこのアーザスの城のことをつつんでいた、あの生きているバリアーにそっくりでした。門の上にはおそろしいすがたをした生きものの石ぞうが二体、むかいあうかたちで取りつけられております。そしてその二体の石ぞうが、手にいだいていたもの。それは今までだれも見たことのないかのような、ぶきみながやきを放つひとつの石でした。かたいのか？ やわらかいのか？ それすらもはつきりしません。さっきまでのかたちが、つぎのしゅんかんには、ちがっているかのような、そんなきみようないんしょうを受ける石でした。そしてその石には、このアークランドにあるどんな本にものっていないと思われる、おそろしい悪のもんしょうがきざみこまれていたのです。たくさんの星を重ねたような、まるででたらめなかたち。そしてそのまん中に、もえる目をかたどった宝石がひとつ、はめこまれていました。その目が、門の下に立つロビーのことを、ぎろりとにらみつけていたのです(このもんしょうはアーザスに力を与えている、そのやみの世界のもんしょうでした。まともな者が、うかつに手を出すべきちしきではありません)。

ロビーは門のとびらに、そつとその手をかけました。ぐ、ぐ、ぐ……。門と同じ赤い石でできた重いとびらが、ゆっくりと、その内がわに動いていきます。ロビーは門の中をのぞきこみました。中はまっくらです。なにも見えません。しかしロビーは、たしかに感じました。

アーザスは、このおくにいる……。

ロビーは腰の剣をぬきました。剣のやいばは、今は静かなかがやきにもどっていました。まるで、きたるべくさいこの戦いがわかつていて、それに心静かにそなえているかのように……。剣の光が、うでの中にあるソシーの顔を静かにてらしました。ソシーはずっと、荒い息使いをしたまま、目をあけることはありません。深いやみの底の中で、ソシーは今、せまりくるその悪の力に、ずっとあらいつづけているかのようにでした。

剣のかすかな光にてらされた道を、ロビーは進んでいきました。この道はあきらかに、今までの道とはちがいました。空気があつくべたつについて、じつとりとしていたのです。まるですぐそばに、あつきよがんのかたまりがあるみたい。そしてしゅーしゅーという、吹き上がる湯気のような、なにかの生きもののこきゆうのような、おそろしげな音。その音がこの道のあたりいちめんから、なりひびいていました。

息をすうたびに、ロビーは顔をしかめました。胸がやけつくようです。とても、まともな生きもののすうような空気ではありません。ロビーはなるべく空気をたくさんすいこまないように、静かな足取りで、この道を進んでいきました。

道はすこしさきで、ゆるやかなのぼりかいだんにつづいていました。ロビーはしんちように、そのかいだんをふみしめていきます。のぼったさきは、長いらうかになっていました。ろうかの床はつるつるとした、なめらかな黒い石でおおわれています。同じくなめらかな黒い石でできた両がわのかべには、まるいすべすべしたガラスのような石が、同じかんかくでたくさんならんでうめこまれていました。そしてロビーが、そのろうかに足をふみいれたとたん。

ふいいん。そのまるい石たちが、つぎつぎに赤い光を放っていったのです。それはロビーの進むその足取りにあわせて、道をてらしていききました。そしてしばらくいった、そのさき。ロビーはそこに、なにかとてつもないほどの力をひめた、あるもののそんざいを感じ取ったのです。

アーザスでしょうか？ いえ、ちがいました。人ではなく、それよりもつと、おそろしげなもの。それはまるで、この世界のきようふそのものが、そこにあるかのような……、そんななんともいいよのな、ぶきみな力でした。

しかしロビーはそのそんざいに、いぜんにも感じたような、ふしぎななつかしきをもおぼえたのです。それは女神リーナロッドよりさずけられた、すべてをつかさどる大いなる力。そう、青き宝玉です。エリル・シャンティーンの王城のてっぺん、あの場所で見えたあの宝玉

のその力を、ロビーはふしぎにも今ふたたび、ここで感じ取りました。青き宝玉の力を持つ、もうひとつの力。それがなんだか？ 読者のみなさんにはおわかりのことでしょう。

そう、それはまさしく、アーザスの作り上げたもうひとつの宝玉。赤いキューブにほかならなかつたのです。

アーザスの、赤いキューブ……。

ロビーは心の中でそうつぶやくと、剣をかまえて進みました。そのさきに待ち受けるものが、なんであるのか？ ロビーにはもうわかっていました。ロビーの旅の、そのさいごのもくてき地。アーザスの赤いキューブのあるその場所へと、ロビーはついにやってきたのです。

赤い光にてらされたそのろうかは、やがてひとつの広間につづいていました。そこははしからはしまでが三十ヤードほどもあるうかという、大きな広間でした。てんじようは高く、まるいドームのかたちをしております。かべにはさきほどのろうかにならんでいたものと同じ、赤くかがやくつるつるとした石が、たくさんならんでうめこまれています。それらの石のかがやきが、この広間をぼんやりとらしていたのです。

ですがこの広間にはいったしゅんかん、ロビーの目にまっさきに飛びこんできたのは、ただひとつのものだけでした。それはこの広間のまん中、その空中に浮かぶ、ひとつの大きな四かく形の石だったのです。

血のように赤い、ぶきみにかがやく巨大な石……。そう、まさしくこれこそが、アーザスの作ったそのよこしまなる赤いキューブ、そのものでした（いぜんにもお伝えしたことがありましたが、みなさんはこの赤いキューブのことを、すでに見ているのです。それは第七章のはじめ、アーザスとムンドベルクのふたりが赤い石の浮かぶ暗い広間で、話しをしていた場面です。あの広間こそが、まさにこの場所でした）。

「これが……」

ロビーが思わず、つぶやきました。エリル・シャンティーンの王城で、青き宝玉の前にはじめて立ったとき。ロビーはその中に、とてつ

もないほどの力を感じ取りました。そして同時に、なつかしさも。ロビーは今、あのとときとまったく同じ感じを受けていました。

そのとき……。

ロビーは、はっと、なにかべつのはいを感じ取りました。ロビーがあわてて、うしろをふりかえってみると……。

いつからそこにいたのでしょうか？ 長く赤いかみを背中までたらし、黒いガウンをまとったひとり的人物が、そこに立っていたのです。ほっそりとした、きゃしゃなからだ。うす手の赤いセーターを着ていて、その腰には、黒いかぎりのついたベルトがたれ下がっていました。ととのった顔立ち、そして、つり上がったむらさき色のひとみ……。

ついにアーザスが、ロビーのその目の前にあらわれたのです。

「待っていたよ。」

アーザスがその口もとに笑みを浮かべながら、静かにいいました。

「よく、きてくれたね、ロビーくん。」

アーザスはそういって、よゆうしゃくしゃく、とことこと広間のむこうの方に歩いていきました。

ロビーはアーザスにそのせいなる剣をつきつけて、いい放ちます。

「おまえをゆるすことはできない！ おまえは、たくさんのものをうばい、たくさんの人たちのことをきずつけ、そして、くるしめてきた！ そのつぐないをするときだ！」

ロビーのつるぎアストラル・ブレードが、青白い光を放ちました。ロビーの思いと、そしてアーザスのそのあふれんばかりの悪意に対して、反応していたのです。

「ソシーのことを、なおすんだ！ ぼくのお父さんをかえせ！」

ロビーは歯をくいしばってアーザスにむきあいましたが、アーザスは横をむいたまま、まったく取りあうそぶりを見せません。赤いキューブに近づいて、その表めんをゆびでつつん、つつついています。

「アーザス！」ロビーが剣をつきつけて、さげびました。するとアー

ザスは、ようやく今ロビーのことに気がついたといわんばかりのよう
すで、いったのです。

「ああ、ごめん。ええと、なんだっけ？ その人形のこと？ ムンド
ベルクさんのことだった？」

ロビーは怒りにかられてこたえました。

「その、両方だ！ おまえはみんなからうばったものを、かえさなけ
ればいけないんだ！」

するとアーザスは、「ふう。」と大きなため息をついて、かえします。
「よくばりだね、きみは。ロビーくん。ぼくが、なにをうばったつて
？ そんなのいちいち、おぼえていないなあ。」

「ふざけるなー」ロビーがさらにつめよりました。「この子を見ろ！
おまえがやったんだ！ おまえのせいで、ソシーは今、死にかけて
いるんだぞ！」

するとアーザスは、ロビーの手の中にあるソシーのことをちらつと
見て、いったのです。

「そんなこわれた人形、わざわざ持ってきたの？ おかしな人だね、
きみは。ぼくはただ、いらぬから、すてただけなのに。」

なんとというひどい言葉なのでしょう。今までずっと、ソシーはアー
ザスのためにはたらいてきたのです。アーザスのめいれいで、たくさ
んのひどいことまでソシーはやってきました。アーザスがほめてく
れること、それはソシーにとって、なによりもうれしいことでした。
ただそれだけが、ソシーの生きがだったのです。それなのに……。

「ゆるせない……。早く……。早くソシーをなおすんだ！ 今すぐ
に！」ロビーがいいました。あまりの怒りに、ロビーの手はわなわな
とふるえていました。

「いいよ。なおしてあげても。」アーザスが、けろつとした顔であつ
さりといい放ちます。「その人形がほしいのなら、ロビーくんにあげ
るよ。でも、そのかわり、ぼくもほしいものがあるんだ。」

アーザスの顔が、よこしまなる笑みにつつまれました。その顔は、
じやあくそのもの。さきほどまでとはあきらかに、なにかがちがうよ
うでした。

「きみの持つてる、その剣。それはもともと、ぼくのものでね。ぼくが見つけたものなんだよ。きみのごせんぞが、ぼくから、その剣をうばったんだ。」

アーザスの手から、黒いけむりのようなエネルギーがわき起こります。なにかの魔法が、はたらいているようでした。

「だから、ぼくに、かえしてくれない？ かえしてくれたら、その人形のこと、なおしてあげる。」

アーザスが「うふふ。」と笑って、ロビーにいました。しかしその笑顔が、まさにおそるべき作りものの笑顔であるということは、ロビーにはすぐにわかったのです。アーザスは、ぼくのことをだまそうとしている。そして、そんな手にかかるようなロビーではありませんでした。

アーザスは、とくいのたぶらかしのじゆつをロビーにかけたのです。今までアーザスはこのじゆつを使ってたくさんの人たちのことをたぶらかし、自分のつごうのいいようにあやつってきました。その中には、強い心を持ったいだいなえいゆうたちも、たくさんふくまれています。アーザスの力は、そんなえいゆうたちの心をもねじまげ、あやつってしまうのです。その中でも、いちばんのえいゆう。それはレドンホルの力強きウルファの王（そしてロビーのお父さん）、ムンドベルク・アルエンス・ラインハットでした。ムンドベルクもまた、影となったその半分のからだを、アーザスのこのじゆつによってあやつられていたのです。もはやみずからの意志を持たない、あやつり人形のようなそんざいとよびなつて……。

ロビーの持つ剣が、そのかがやきを強めました。そしてその剣は、ロビーの心の中にちよくせつ、こうささやきかけているかのようでした。だまされてはいけません。アーザスは、やくそくを守るつもりなど、はじめからないのです。

ここにくる前、ソシーに出会ったあのトンネルの中できいた、ふしぎな声。その剣の声を、ロビーは今、ここでもきいたのです。それはロビーのことを守る、せいなる声。まさしく守りの女神の、その声のごとくでした。

ロビーは剣を強くにぎりしめて、いいました。

「ぼくをあやつることは、できないぞ。おまえに、剣は渡さない。この剣は、このアークランドの、みらいを守る剣だ。おまえのような悪の手になど、渡すものか！」

アーズの顔から、笑みが消えました。その顔は、とてもおそろしいものでした。今までの作りもののアーズのすがたが消えて、ほんとうの悪のすがたが、そこにあらわれたかのようにでした。

そして……。

「いいよ、それでも。」

とつぜん、ロビーの耳のそのすぐうしろから、アーズのその声がきこえてきました！ ロビーはすぐさまうしろにむきなおって、剣をかまえます！ しかしそこには、だれもおりません。ロビーは、はつとして、もういちど前をむきました。すると、さつきまでアーズがいた場所にも、もはや魔法使いのすがたはなくなっていました。ロビーはあたりを、きよろきよろと見渡します。しかしアーズのすがたは、どこにもありませんでした。

「くれないのなら、うばえばいいだけのことだから。」

ふたたび、アーズの声がひびきます。ロビーはその声をした方をむいて、さつと身がまえました。赤いキューブの影に、アーズのすがたがあらわれていました。その顔にははじめのときと同じく、よゆうのある笑みもどっていました。

「せっかくだから、かれに、そのしごとをまかせることにするよ。ぼくは、うんどうがにがてで、戦いにはむいていないんだ。きみのごせんぞにも、よく、しかられていたよ。『おれのおにもつにならないように、ちよつとは、からだもきたえろよ』、ってね。ふふ、なつかしいなあ。」

そのとき。広間に通じるそのろうかのむこうから、その人がやってきたのです。

こつ、こつ、こつ……。くつ音をひびかせながら、その人物がゆつくりとこちらへ近づいてきました。あらわれたその人物……。全身をまっ黒なよろいにつつんでいて、手には黒いけむりにおおわれた、大きな剣をいっぽんにぎりしめております。おしりから生えた、大きな黒いしっぽ。黒かみの頭の上には、同じく黒い、大きな耳がふたつ飛び出していました。

もはや、いうまでもないでしょう。ロビーの前にあらわれたのは、やみにとらわれ、アーザスにとらわれてしまっている、ロビーのお父さん、ムンドベルクだったのです。

その目はまっすぐに、ロビーのことを見つめていました。しかしその目に、感じようを持った人らしいところなどは、みじんも感じられませんでした。ロビーにそのせいなる力をたくすため、このアークランドを悪の手から守るために、ムンドベルクはその身のすべてを、ぎせいにささげたのです。そして今、そのからだはアーザスによって、むじようにもあやつられてしまっていました。

「お父さんー！」

ロビーがさげびました。

「お父さん、ぼくです！ ロビー……。ロビーベルクです！」

ついに出会えた、自分の家族……。それが、こんなひげきの出会いになるうとは、なんとかなしみの運命なのでしょう。かわいそうなロビー。ですがロビーに、そのひげきをかなしんでいるようなどはありませんでした。ロビーはこれから、あらんかぎりの力と心、そのすべてをふりしぼって、やみにとらわれた父のことをすくい出さなければならぬのです。おそらくは、剣と剣でもって……。それができるのは、ただひとり、ロビーだけでした。

ロビーのよびかけにも、ムンドベルクはまったく反応を見せませんでした。うつろな表じようをしたまま、ただ目だけをまっすぐに、こちらへむけていたのです。もはやムンドベルクの耳には、だれのよび

かけもとどいてはいませんでした。それがわが子である、ロビーのよびかけであつても……。ムンドベルクに話しかけ、めいれいをくだすことができるのは、もはやアーザスただひとりだけだったのです。

「お父さんー」ロビーがもういちど、ムンドベルクによびかけました。ですがそれがむだだということは、もはやロビーにもあきらかでした。ロビーはただ口びるをかみしめて、剣をぎりぎりのにぎりしめることしかできませんでした。どうすることもできないくやしき、やるせなさが、ロビーの心の中をうめつくしていました。

「むだだよ。」赤いキューブのむこうから、アーザスがいました。「その人は、もう、自分がだれかもわかっていないんだから。でも、きみにここへきてもらうためには、その人が必要だったんだ。そのために、わざわざレドンホールをほろぼしてまで、きてもらったんだから。そのためだけにね。」

アーザスはそういつて、「くっくっく。」という、あのきみの悪い笑い方をしてみせました。

「あ、でも、かれの作ったハンバーグは、なかなかおいしかったよ。けっこう、やくには立つてくれたかな。おふろそうじとかもね。」

なんというひどいやつなんでしょう。アーザスはその通り、「ロビーのことをおびき出す」、そのためだけに、ムンドベルクのことをその手もとにおいていたのです。すべてはロビーの持つ女神の剣、アストラル・ブレード、それを手にいれるために……。 (そしてほんとうにアーザスは、この剣を手にいれるためだけに、レドンホールをほろぼしたのです。なんてひどい)。

ふういんされたやみの世界の中で、ふたたび力を取りもどし、この世界にもどってきたアーザス。かれがまっさきにむかったさき、それがアストラル・ブレードのもどでした(そのようすのことについては、いぜんムンドベルクとデルンエルムの会話の中で語られました)。そしてまだ力がたりなくて、剣を取りもどすことができないと知ったアーザスは、それからアークランドのありとあらゆる場所で、その悪のかぎりをつくすこととなったのです。力、力、力。アーザスがもつめたのは、ただひたすらに、力でした。アークランドでいちばん強い

軍を持つ、ワット。アーザスがかれらと手をくんだのも、いわばどう
ぜんのことだったのです（自分のつごうのいいようにかれらのことを
あやつって、その力をりようするために）。

そしてアーザスの言葉の通り、剣をほしがるアーザスが必要とした
ものこそが、レドンホルの王ムンドベルクでした。アーザスは、い
ずれムンドベルクが剣をどこか安全なところへかくすだろうという
ことも、よちしていました。それがムンドベルクのむすこであり、同
じく剣の力を使うことのできるロビーベルクという少年のところだ
ろうということ、アーザスがよそくすることは、たやすいことだっ
たのです。アーザスはロビーのこと、そして剣のゆくえを、持てるか
ぎりの力をもつてさがそうとしましたが、だめでした。さがしものを
するためのどんな魔法を使っても、それらはすべて、はねかえされて
しまったのです。アーザスは思いました。剣は今、強力ななにかの力
によって、守られているにちがいない。そしてロビーベルクもまた、
同じところにいるはずだ。そのよそうはあたっていました。剣もロ
ビーも、アーザスの魔法をはねかえしてしまう精霊王の力を持った
森、かなしみの森の中で、ひそかに守られ、ふたたび世にあらわれる
そのときを待っていたのです（それらのことは、これまでの物語の中
でみんな語られましたね）。

しかしアーザスは、ぜんぜんあわてませんでした。今までなん十
年、なん百年と、待ちつづけてきたアーザスです。今さらすこしくら
い待つことになったからといって、そんなものはアーザスにとって、
どうということではありませんでした。

こちらからわざわざさがしまわらなくても、ムンドベルクのことを
手もとにおいておけば、そのむすこであるロビーベルクといっしょ
に、剣はかならず自分のもとにやってくる。そしてまさに今、アーザ
スのそのよそうは、げんじつのもとなったのです。まことに、アー
ザスのおそろしき、ずるがしこきは、わたしたちのそうぞうをはるか
にこえるほどのものでした（ちなみに、アーザスはやってくるロビー
によって赤いキューブがはいされるかもしれないなんていう心配
は、まったくしていませんでした。みじくくなおおかみなどに、自分

のものである剣を使いこなせるわけがないと、アーザスは思っていたのです。それにアーザスがかんたんに、キューブに近づくことをゆるすわけありませんでした。じつさいこのキューブには、剣の力をはじきかえす、ぼうぎよのバリアーが張ってあったのです。このバリアーをくぐりぬけてキューブをこうげきすることは、よいいなことではありません。それは赤いキューブのことを見たロビーにも、ちよっかん的にわかったことでした。ですからはかいするべきキューブのことを目の前にした、ときここにきて、ロビーはこう、さどつていたのです。このキューブをはかいするためには、この剣の力で、ちよくせつアーザスのことをたおさなければならぬと……。

ロビーのもとに、父であるムンドベルクが、ゆつくりとその歩みを進めてきました。その手には、黒いけむりにおおわれた、よこしまなる剣がにぎられております。これはもともと、ムンドベルクの持つ自身の剣、エルフィールドとよばれる剣でした。この剣は、持ちぬしの心の強さを力に変えて敵をうつことのできる、名剣だったのです（じつさい三十年前の冒険では、ムンドベルクの方がアルマークより、剣のうでまえば上でした。そしてアルファズレドはそのムンドベルクよりも、さらに剣のうでまえば上をいつていたのです。ちなみに、メリアンは剣を持って戦ったことなんて、いちどもありません。かれの力は武器ではなく、精霊の力によるものでしたから）。

しかし今ではその名剣も、アーザスのよこしまなるやみの力によって、けがれた悪意のあるやいばへと変えられてしまっていました。もはやこの剣は、けむりのようなやみのエネルギーにおおわれた、暗黒のつるぎへと変わってしまっていたのです（そしてこの剣で切られた者は……、ベゼロインで戦ったあのウルファの仲間たちのように、やみにとらわれてしまうのです）。

「ムンドベルクさん。」

アーザスが、にこやかな顔をしていました。

「その子の持つてる、その剣。ぼくは、それがほしいんだ。ぼくのところに、持ってきてよ。その子は、やつつけちやつてかまわないから。」

「……はい、アーザスさま……」アーザスの言葉に、ムンドベルクがはじめて口をひらきました。その声は、心を持たない、つめたいくくりもののような声でした。

そのとき。ロビーのうでの中で、ソシーがひとこと、つぶやいたのです。

「ロビーさま……」

荒い息使いをしながら、ふりしぼるような声でつぶやかれた、自分の名まえ……。ソシーの声は、ほんとうに、心を持った人の言葉そのものでした。

人形であるはずなのに、人と同じ心を持ったソシー。そして人であるはずなのに、つめたく心を持たないそんざいとなってしまったムンドベルク……。ロビーはソシーのことを、ぎゅつとだきしめました。そしてロビーはソシーのことを、戦いできずつくことがないように、この広間の安全なすみの床に、そつと寝かせたのです。ロビーはソシーの上に、自分のあたたかいマントをかぶせてあげました。

「待っててね、ソシー。」ロビーはしやがみこんで、ソシーの手を取っていいました。「すぐに、もどってくるよ。」

そしてロビーは、その手に女神のつるぎアストラル・ブレードをにぎりしめ、みずからのそのさいごの運命の中へとむかって、ふみ出していったのです。

ぶきみにかがやく、赤いキューブのその前。今まさにそこで、父子の、ひげきの運命の戦いがはじまろうとしていました。いっぽうの手には、光りかがやくせいなる剣。いっぽうの手には、黒いエネルギーにおおわれた、よこしまなるつるぎ……。

ロビーがその手ににぎられたせいなる剣を、ゆっくりとかまえました。

「お父さん。今、ぼくが、あなたを助けます。」

ロビーはそういって、腰をひくく落としました（これはここにくる前のこと、イーフリープで、リズに教えてもらったことでした。しれんの間で、ブリキのうさぎのたいぐんと戦ったときのことです）。

しかしロビーの目の前にいるその相手は、そんなロビーのことを、はるかに上まわる力を持っていたのです。

ムンドベルクがいつしゅん、その身をひるがえしたかと思うと……。

ぶうんっ！ 黒きやいばがすさまじいはやさで、ロビーにおそいかかりました！ ロビーには剣でむかえうつ、そのひまありませんでした。なんとかそのやいばをかわしましたが、そのはずみでロビーはからだのバランスをくずし、そのまま床の上にばたん！ あおむけにころがってしまったのです。

あわてて、大急ぎで立ち上がるロビー。ロビーはもういちど、自身のその剣をかまえました。相手は剣をかまえたまま、身動きひとつしません。たおれたロビーにそのままとどめをさそうと思えば、できたはずでした。ロビーのひたいには、あせがにじんできました。

ですがロビーは、立ちどまることはしませんでした。どんなに力のある相手であろうとも、どんなに戦いたくない相手であろうとも、今は剣をかまえて、むかつていかなければならないときなのです。

ロビーは大きく息をついて、気持ちをおちつかせました。まよっている場合などではありませんでした。わずかでもすきを見せれば、ここどこそ、ロビーは助からないでしょう。ロビーは手にしたそのせいなる剣に、すべての感かくを集中させました。お願いします。ぼくに力を与えてください。ロビーはしぜんと、剣にそうよびかけていました。

ふたたび、ムンドベルクの剣がふりおろされます！ しかしロビーはこんどはしっかりと、そのやいばを受けとめました。気持ちをおちつかせたぶん、相手の動きがほんやりとですが、わかるようになったのです（これは剣が相手のやみのエネルギーのを感じ取って、その動きをロビーに伝えているためでした）。

きん！ きん！ がきん！

広間の中にひびき渡る、剣と剣のぶつかりあう音。黒きやいばがロビーの剣にぶつかるたびに、そこからじゃあくなるやみのエネルギー

が吹き出して、ロビーのことをつつみこもうとしてきます。しかしロビーがそのせいなる剣をふるうたびに、その悪しきやみの力はまるでけむりをちらしたかのように、空気の中にただ立ち消えてゆくばかりでした（これはせいなる剣にこめられた、光の力によるものでした。女神の光の力は、悪しきやみをうちはらうのです）。

しだいに、ロビーの剣はムンドベルクのことをおすようになっていきました。剣のうでからいったら、ムンドベルクの方がロビーよりも、はるかに力は上です。しかしやみにとらわれている今のムンドベルクにとって、ロビーの持つこの光の剣のやいばのかがやきは、みずからのその動きをにぶらせるのにじゅうぶんなものでした。

ムンドベルクがじりじりと、あとずさりをしていきます。その顔にはあきらかに、くつうの表じようがあらわれていました。もともとはみずからがだいに守り受けついできた、せいなる剣。その剣の力を前にして、ムンドベルクのそのやみにつつまれた心の中に、なにかが生まれはじめているかのようでした。

ロビーはそのすきを見のがしませんでした。剣のあつかいになれていないロビーでしたが、それでも持てるかぎりの力とわざをつくして、ムンドベルクのことを追い立てていったのです。

勝てる……！　そしてロビーがそう思って、ふるう剣のやいばにさらなる力をこめようとした、そのとき。思いもよらないべつの力が、ロビーのその思いをうちくたくこととなりました。

ばりばりばりばり！

とつぜんひびき渡った、大きな音！　そしてつぎのしゅんかん。

ロビーが見たものは、ムンドベルクのその赤いなすまをまとった、黒のやいばの影だったのです。

「うわああああっー！」

剣から放たれた赤いなすまが、ロビーのことをうちすえ、そのか

らだをつつみこみました！ そのいりよくは、おそろしいほどのものでした。ロビーはそのまま、広間のかべまで、いつきに吹き飛ばされてしまったのです。

「がはっー」

広間のかべに、背中をしたたかにうちつけるロビー。ロビーはそのまま、そこから床まで、十五フィートほど落ちていきました。

地面にはいつくばって、ごほごほとせきこむロビー。その口からは、血がにじみ出ております。そしてロビーのからだからは、赤いなずまのエネルギーが、まだぱちぱちと音を立てて、ぶきみな赤いけむりを上げていました。

アーザスの赤いキューブ……。ロビーのことをうちすえたムンドベルクの剣にやどった赤いなずまは、その赤いキューブから飛び出した、よこしまなるいなずまでした。そしてそのいなずまを生み出したのは、いうまでもありません。アーザスです。アーザスはキューブから生み出したいなずまをムンドベルクの剣にやどらせて、その剣で、ロビーのことをおそわせました。なんてひどいことを！

「やっつけたかな？」

アーザスが赤いキューブの影から、こつこつとくつ音を立てながら出てきました（自分はキューブの影で、ふたりのたいけつをずっとけんぶつしていたのです。アーザスはそうしようと思えば、いつでもロビーのことをおそうこともできました。もちろん、さきほどのいなずまをロビーにちよくせつぶつけて、おそうこともできたのです。ですがアーザスは、ロビーのじつの父であるムンドベルクにおそわせてロビーをやっつけた方が、なんばいも楽しいと思いました。ほんとうにひどい）。

「だめだなあ、もっと、楽しませてくれないと。思わずぼくが、力を貸しちゃったじゃんか。」アーザスはそういつてムンドベルクの背中をぼんとたたき、「ふふふ。」と笑います。

「……申しわけありません……」ムンドベルクがつぶやきました。その目は、じっと、たおれたロビーのを見つめていました。

「まあいいや。これで、じゃま者はいなくなっただけだからね。」アーザス

がそういって、ふたたびこつこつと歩き出します。そのさきにあつたのは……。

アーザスはひよいとからだをかがめて、地面からあるものをひろい上げました。それは、いうまでもありません。ロビーの手からはじけ飛んだ、せいなるつるぎ、アストラル・ブレードにほかならなかつたのです。

剣を手にするアーザス。その顔は、しんにじゃあくなものになわつていました。ああ、ついにおそれていたことが。剣がアーザスの手に渡つてしまつたのです！

「ふ、ふふ、ふふふ……」アーザスがひときわ、ぶきみな笑い声を上げました。その目はただまっすぐに、剣のやいばにむけられております。

「あつはつはつは！ ついに手にいれた！ ぼくの剣！ ぼくの剣だ！」

アーザスはそういって、剣を高々とかがげました。とたんに、アーザスのからだからおそろしい赤いほのおがわき起こつて、剣のことをつつみこみます。そして剣から吹き出したさらなるエネルギーが、こんどはアーザスのそのからだのことを、つつみこんでいきました（この剣がアーザスによって見つけられたというのは、まさしくほんとうのことでした。はるかなむかし、アークランドの東のくに、ウエステインというくにに、この剣はもうひとりの女神ライブラの手によつてもたらされ、そして長く失われていたのちに、アーザスによつてふたび見い出されたのです。アーザスはこの剣に、あらゆる力のかのうせいを見ました。そしてアーザスはこの剣とともに力をまわしていき、やがてこの剣のために、その身をほろぼすこととなつたのです。そのせいなる剣が今ふたたび、アーザスに新たなる力を与えようとしていました）。

アーザスがその剣を、ぶん！ とひとふりします。すると、なんとこの力なのでしょう。剣のやいばから赤いエネルギーが、びゅん！ 飛び出して、そのエネルギーが広間のかべを、まるで紙のように切りさいてしまいました！ ずずずん……。切られたかべがこなごなに

なつてくずれ落ち、床にがれきの山を生み出します（ソシーのいるところとはべつのところでしたので、よかったです）。

「きみに、この剣をあやつるなんてことが、そもそもむりなことだったんだよ。」アーザスがじゃあくな笑みを浮かべながら、たおれているロビーにむかっていたいました。「この剣は、ぼくが持っているのが、いちばんふさわしいんだ。」

「う、うう……」「ロビーがふりしぼるように、声を上げます。「か、かえせ……。それは、おまえが持っているは、いけないものなんだ……！」

しかしアーザスはそのようなロビーのことを、鼻で笑うばかりでした。「ふふふ。でも、まあ、きみにはおれいをいわなくちゃね。この剣を、ぼくにとどけてくれたんだから。ありがとう、ロビーくん。」アーザスはそういつて首をかしげ、にこつと笑ってみせました。

「ムンドベルクさん。」アーザスが、立ちつくすムンドベルクにむかっていいました。「もういいよ。じゃあ、あとかたづけは、お願いね。それが終わったら、好きなどころにいつていいから。今までどうも、ごくろうさま。」

剣を手にいれたアーザスにとって、もはやロビーもムンドベルクも「いらぬもの」でした。アーザスにとって、かれらはほんとうに、ただのゲームのこまにすぎなかつたのです。ゲームが終わつていらなくなつたら、ぽい。まるでごみばこにまるめた紙くずをすてるかのよう、アーザスは今、かれらのことを放り出そうとしていました。

今までなんととなくおこなつてきた、アーザスのその心のないおこない。

しかしそれこそが、アーザスのその弱さだったので。

アーザスは人の気持ちなど、まったく気にかけていません。かけらも思いやりの心を持つとうなどは思つていませんでした（もともと持つていないかのように）。

ほんとうの強さ、それはロビーがイーフリープで、精霊王から教え

られたことです。人の持つ、ほんらいあるべきすがた。そしてそこから生まれる、ほんらいあるべき力。それはアーザスとは、まったく対しよう的な力でした。それは、人を思いやる心、人をいつくしむ心。そして今、その心こそが、さいごのこの運命のときにおいて、ロビーに大いなる力を与えることとなったのです。

「……どうしたの？」ふいにアーザスが立ちどまって、ムンドベルクの方をふりかえりました。「もういいよ、って、いったはずだけど？」
もういいよ、とは、もうロビーのことをしまつていいよ、という意味でした。そしてそのやくめ、あとかたづけのことを、アーザスはムンドベルクにやらせようとしたのです。

しかし。

ムンドベルクは剣をにぎりしめ、立ちつくしたまま動こうともしません。今までムンドベルクは、アーザスのどんなめいれいにもしたがってきました（それこそ、ごはんのしたくから、おふろそうじまで）。ですがはじめてムンドベルクは、アーザスのめいれいをききいれなかったのです。その目をじつとロビーにむけたまま、ムンドベルクは身動きひとつしませんでした。

「なにをやっている。」アーザスが、いらついた声を上げました。こんなことは、はじめてでしたから。人が自分の思い通りに動かないこと、それがいちばんアーザスにとって、はらの立つことだったのです。アーザスが、ムンドベルクのそばにつかつかとやってきました。その顔は、怒りにつつまれていました。

「ぼくに、にど、同じことをいわせるな！ あいつをかたづけろ！ めいれいだ！」アーザスがおそろしい怒りとともに、ムンドベルクにめいれいしました。ですがそれでも、ムンドベルクは動こうとはしなかつたのです。

ムンドベルクの中に生まれはじめていた、なにか。それはまさしく、わが子であるロビーに対する、思いでした。影のそんざいととなり、アーザスのやみの力にはいされていてもなお、ムンドベルクのその心のおく底に眠るロビーへの思いは、かんぜんには立ち消えてはいな

かったのです。

ロビーはよろよろと、そのからだを起こしました。そして自分のことを見つめるその相手、まごうことなき父であるムンドベルクにむかって、さげんだのです。

「お父さん……！ やみの力と、戦ってください！ 自分を取りもどして！」

「……う、うう……！」ムンドベルクの顔が、くつうにゆがみました。歯をくいしばり、身をよじらせながら、ひっしに自分の中のやみの力にあらがっていたのです。ロビーの声は、たしかに、ムンドベルクのその心にとどいていました。

「お父さん！」ふたたびよばれる、ロビーの声。それはムンドベルクのそのかたいやみのからをこじあける、すくいの声でした。しかし、そのとき。

「おまえはもう、いらない。」

アーザスがそういつて、ムンドベルクのことをゆびさしました。すると……！

ばりばりばりばり！ そのゆびさきから赤いなずまが走って、ムンドベルクのことをつつみこんだのです！

「ぐああああ！」

くるしみにあえぐ、ムンドベルク……。アーザスの怒りは、すさまじいほどのものでした。それはなみの者であればいつしゆんのうちにそのいのちを失ってもおかしくないほどの、力でした。しかしムンドベルクもまた、よいにはくらべる者のないほどの、まごとのえいゆう。かつてアルマーク、アルファズレド、メリアンらとともに、このアー克蘭ドをすくう冒険の旅に出た、そのひとりだったのです。

ムンドベルクは自身のそのさいごの力までふりしぼって、赤いなずまにあらがいました。そして！

「うおおお！」

ムンドベルクは、アーザスにつかみかかったのです！ こんなことは、アーザスはまったくよそうすらしていませんでした。アーザスのからだはまるで小さな子どものように、ひよいと持ち上げられたので

す！

「な、なにをする！ やめろ！」アーズがさげびます。そしてつぎのしゅんかん！

ばりばりばりばり！ びしゃーん！

「うわあああつー！」

アーズのひめいがごだましました！ ムンドベルクはアーズのからだを、赤いキューブのそのおそろしいまでのエネルギーの中に、たたきつけたのです！ いくらアーズとはいえ、生身のからだでのこのキューブのエネルギーにふれては、ひとたまりもありませんでした（赤いキューブに張られたバリアーは剣の力をはねかえすものでしたが、生身のからだをはねかえすようなものではありませんでした。まさかアーズも、自分がそこに飛びこむことになるなんて、まったく思ってもいませんでしたから）。

そしてそれと同時にもうひとり、ムンドベルクもまた、赤いキューブのそのじやあくなるエネルギーのちよくげきを受けて、みずからの身をやきこがされてしまったのです……。すべては、かくごのうえのことでした。ムンドベルクはわが身をぎせいにして、アーズのことをうちたおそうとしたのです。それはわが子であるロビーのことを、助けるためでもありました。

床にたおれた、アーズとムンドベルク。ムンドベルクは荒い息使いをして、もはや身動きひとつ取れないじょうたいでした。そしてアーズは……？ アーズはついに、うちたおされたのでしょうか？

しかし待っていたのは、まさに悪夢のような光景だったので。

床にたおれたアーズ。アーズは、はあはあと荒い息をついて、しばらくその場にたおれふしていました。しかしそれも、わずかばかりのあいだのこと。つぎのしゅんかん、アーズのからだに、おそるべきいへんが起こったのです。

アーザスのからだからまっ黒なエネルギーがあふれ、アーザスのこ
とをつつみこんでいきました！ そのエネルギーはアーザスのまわ
りをおおいつくして、そのからだをすっかり、見えなくしてしまっ
たのです。そして、そのやみが晴れたとき。ロビーはそこに、なんとも
おそろしいすがたを見ました。

それは、やみそのものでした。今やアーザスのからだは、そのじや
あくなるやみの力と、かんぜんにひとつとなってしまうたのです！
その目はまさに、悪魔のよう。ととのった顔立ちは見るもおそろし
い、魔物のような顔に変わってしまっていました。その赤いかみは
じやあくな力によってさか立ち、波のように動いていました。なん十
年も、なん百年も、やみの世界の中にとらわれてきたアーザス。その
あいだにアーザスのすがたは、こんなにもおそろしいものへと変わっ
てしまっていたのです。ふだんのアーザスはアーザスが自分の魔力
によって、むかしのすがたをうつしたものでした。アーザスのほん
とうのすがた、それこそが今日の前にあらわれた、このおそろしい魔物
のようなすがただったのです。赤いキューブの力にうたれ、みずから
の身にかけていた魔法の力をたもつことができなくなってしまっ
たために、アーザスはこのしんのすがたをあらわしました。

「よ、よくも……、よくも！」アーザスがおそろしい声を張り上げて、
さげびました。「ぼくをこんな、みにくいすがたにさせたな！ ゆる
さない！」

アーザスはそういって、たおれているムンドベルクのことを、きつ
！ とにらみつけました。そして……。

「みんな、おまえが悪いんだ！」アーザスがそういって、身動きので
きないムンドベルクのことを、そのやみにつつまれたけもののような
足でけりつけたのです！

「よけいなまねをしてくれる！ よくもぼくに、こんなことを！」
アーザスが怒りにかられて、ムンドベルクのことをけりつづけま
す。

「や、やめろ！」ロビーがたえかねてさげびました。しかし、やみと
一体になったアーザスの力は、いぜんにもまして、おそるべきものと

なっていたのです。アーザスの手から、やみの力を持った黒いいなずまが飛び出して、ロビーのことをおそいました。

「うわあっー！」いなずまにうたれるロビー。ロビーにはもはや、なすすべもありませんでした。

「みんな、やつつけてやる！ だれも、ぼくのじやまができないように！ ぼくのことをばかにしたやつらに、ぼくのはんとうの力を、見せつけてやるんだ！」

アーザスがそういって、その手にロビーの剣、アストラル・ブレイドをかまえました。その剣はアーザスのそのしんのやみの力が加わって、なおいつそうのこと、強力なものとなっていました。

女神の力持つ剣をにぎりしめた、アーザス。いったいどうやって、こんなおそろしい相手に立ちむかえばいいというのでしょうか？

アーザスはもはや、人ではないのです。やみの力につつまれた、おそるべきかいぶつになっていました。

「もう、終わりだよ。」

アーザスがおそろしい顔をして、いいました。その目はひたすらにつめたく、ロビーのことを見下ろしていました。

「さいごはこの剣で、ぼくがちよくせつ、やつつけてあげる。」

アーザスが、ひたひたと、そのやみの両足をひきずってロビーのもとに近づいていきました。

そして、まさにそのとき……！

ほんっ！

なにかが、はじける音がしたのです。それは、とても小さなものでした。ですがその力もたらしたけっかは、つぎのはるかに大きな力へとむかって、つながっていったのです。しかしそれは同時に、ひとつのざんこくなじじつをも、生み出すこととなりました。

広間のはしからひとすじのエネルギーが、アーザスにむけて放たれたのです。それはあざやかなオレンジの色をした、かがやくいのちのエネルギーのいかずちでした。ですがそんなエネルギーが、いったい

どこから……？

からーん！

そのエネルギーのいかずちは、剣を持つアーザスのその右手をつらぬきました。はずみで剣は空中にまい上がり、そのまま広間の床に落ちて音を立て、その上をすべっていくます。とつぜん、思いもよらないこうげきを受けたアーザス。アーザスはさいしょ、なにが起こったのか？ わかりませんでした。しかしつぎのしゅんかんには、アーザスはそのすべてをりかいしたのです。おそろしい怒りの感じようが、アーザスの心の中にあらしの雲のようにわき起こっていくました。

「おまえ……」

アーザスがエネルギーの放たれたその場所に、怒りのまなざしをむけました。そこに横たわっていたのは……。

「ソシー！」ロビーがよろよろと起き上がって、さげびました。そう、アーザスにむかってそのさいごのいのちのエネルギーを放ったのは、まさしく消えゆくいのちのともしびにつつまれた、ソシーだったのです。

「アーザス、さま……」ときれそうな声で、ソシーがけんめいにアーザスにいいました。

「もう、やめてください……。こんなことは、やめて……。ロビーさまを助けて……」

ソシーのそのかた方の目のあつた場所には、黒くぼっかりとしたあながあいていました。ソシーはここから、その持てるかぎりのいのちのエネルギーを放って、ロビーのことを助けようとしたのです。ロビーさまの足手まといにばかり、なつてはいられない。わたしにできることをしなくては……。ソシーはたとえ自分のいのちとひきかえにしてでも、アーザスに心をいれかえさせ、ロビーのことを助けたいと思いました。

なんとというひげきなのでしょう。ソシーの中に残った、消えゆくいのちのエネルギー。そのエネルギーをソシーは全部、使いきったのです。アーザスのために、ロビーのために。それが意味することは、ただひとつでした。

ソシーは静かに、もうひとつのその目をとじました。そして……。ソシーのそのこはくでできた作りもののひとみが、ふたたびひらくことはなかったのです。

「ソシーー」ロビーがさげびました。ロビーはすべてをりかいしました。ソシーがそのさいごのいのちをもやして、自分のことを助けてくれたのだということ……。。

「そんな……。そんな！」ロビーの目に、大きなみだのつぶがあふれ出しました。しかし、ソシーのそのいのちのかぎりをつくした思いも、アーザスの心にはとどくことはなかったのです。

「よくも……。よくも、こんなことを！ この、できそこないめ！」

アーザスの手から、黒いいなずまが飛び出しました！ そしてそのいなずまは……。なんてことを！ひとみをとじたソシーのそのからだを、ようしやなくうちすえたのです！もうソシーは、なにもできないのに！そのさいごのいのちまで、使い果たしたというのに！もはやソシーはひめいを上げることもなく、黒いかずちのほのおに、ただこがされていくばかりでした。

「おまえは、ぼくが作ってやったんだ！ そのおんを、忘れやがって！」

アーザスが、怒りのこもった言葉をソシーにあびせました。アーザスはまったく、れいせいなじようたいではありませんでした。怒りにわれも忘れて、ソシーのことをのしりつづけていました。

そのとき！

ぶおおん！ ばああーっ！

とつぜん！この広間全体を、目もくらむほどの光がつつみこんだのです！怒りにわれを忘れていたアーザスは、とつぜんの光にひめいを上げて、その目を両手でおおいました。いったい、なにごとが起こったのでしょうか？

広間をてらす、まばゆいばかりの青白い光。そしてこの光は、みなさんがいぜんセイレン大橋の上で見たあのときの光と、まったく同じものだったのです。そう、デイルバグに乗った黒騎士のことをつらぬいた、あのせいなる光と……。

光はやがて、ゆつくりとおさまっていききました。そしてその静かなかがやきの中、せいなる光にその全身をつつまれて、ロビーが立っていたのです。その手に、女神のつるぎ、アストラル・ブレードのことをにぎりしめて……。

「ゆるせない……」ロビーが小さく、つぶやきました。その目はまっすぐに、アーザスにむけられていました。

「おまえだけは、ゆるせない！ おまえはぼくが、この手でたおす！」

ロビーがゆつくりと、アーザスに近づいていきます。にぎりしめたその剣からは、とてつもないほどの力があふれ出ていました。

「だまれ！ 死にぞこないの、負け犬め！」アーザスがさげびました。その手からはまっ黒なやみのエネルギーが、おそろしいうずをまいて吹き出していました。

「もういちど、その剣をうばいかえしてやる！」

アーザスの手から、黒いいなずまが飛び出します！ そのいなずまはこれまでにはないほどの、いちばんのおそろしい力をひめたやみの力のいなずまでした。

ですが！

ばりばりばりばり！ ばしゅうう！

黒のいなずまはロビーのその剣のやいばにぶつかり、そしてそのまま、まるで水がじょうはつするみたいに、空気の中に消えていってしまっただのです！

「そんなー」アーザスの顔に、おどろきの表じようが走りまわりました。「どうして！ その剣は、ぼくの剣だぞ！ ぼくの力をはねかえすなんてことが！」

アーザスがそういつて、もういちど、こんどはやみのエネルギーの矢を作り出して、ロビーに雨あられのようにあびせかけました。

しかし！ ぼしゅう！ しゅう！ しゅう！ その矢はことごとく、ロビーの剣の前に消えていつてしまったのです。

「そ、そんな……、うそだ……」

アーザスの顔が、ぜつぼうの色につつまれました。今までぜつたい的なまでの力を追いもとめ、その力をもって、すべてをしいしてきたアーザス。そのアーザスの力を、かつて自分の力であったはずの剣が、受けいれずにはねかえしていたのです。

「キューブ……！ ぼくにはまだ、キューブがあるんだ！」

アーザスがそういつて赤いキューブのもとにかけより、その力をあやつつて、ロビーのことをおそおうとしました。しかし、またしても。

ふいいん！ しゅううう！ キューブの力は、アーザスのそのよびかけにも、こたえようとはしなかったのです。キューブからあふれるそのじやあくなるエネルギーは、ただうずをまいて、ロビーの持つその剣の力の中にすいこまれてゆくばかりでした。

今や剣はかんぜんに、ロビーのその大いなる力とひとつになつていました。ロビーはアストラル・ブレードの力をひき出すそのアークランドをすくうきゆうせいしゆたる力を、ここにかんぜんに目ざめさせたのです。みんなのたくさんの、思いとともに。ソシーのとうとき、思いとともに……（剣のしんの力と、ひとつとなつたロビー。そのため剣は、ロビーの持つせいなる力いがいの悪しき者の力などにこたえることなく、アーザスのそのやみの力をはねかえしたのです。そして剣の持つせいなる宝玉の力は、そのしんの力がかいほうされたときここにいたつて、おそろしいほどの力をひめた赤いキューブの力をも、かんぜんにふうじこめることとなりました。そのためアーザスが自分で作った赤いキューブさえも、アーザスのよびかけにこたえることはなかったのです）。

ムンドベルク、そしてソシー。ふたりの思いが、さいごに、ロビーの持つそのしんの力を目ざめさせました。そして……、このロビーのことを思う気持ち、人からたいせつに思われるその心こそが、イーフリープで精霊王が去りぎわにいつていた、「剣に力を与えるための、そのさいごの力」だったのです（この力はアーザスとのさいごのけつちやくのぶたいである、このときこの場所において、かいほうされなければならぬものでした。人からたいせつに思われる心。自分のことをささえ、助けたいと思ってくれる心。それらはロビーはすでに、これまでの冒険の中でもさずかかってきました。ロビーのことをささえる、たくさんの人たち。そして、リズ、マリエル、ベルグエルム、フェリアル、ライアン、そのかれらの思いです。ですが剣のそのしんの力をひき出すためには、さいごのこのときにおいて、そのことをりかいする必要があります。そのことをロビーに教え、さいごの力としてさずけてくれたのが、ムンドベルクとソシーの、ふたりの思いだったのです）。

だれかのために力をつくしたいという、ロビーの強き思いと、ロビーのために力をつくしたいという、みんなの強き思い。その思いが、ともにあわさったとき。女神のつるぎアストラルブレードは、そのさいごの力をはつきすることになりました。それは自分のことしか考えていないアーザスには、ぜったいに得ることのできない力でした（ソシーからの思いも、アーザスにはとどいておりませんでしたから）。

もはや同じく剣の力を持つアーザスにさえも、みんなの思いによつてつまれたこの剣の力を、とめることなどはできませんでした。アーザスに、かけていたもの。それはだれかのことを思いやる、心でした。自分のことを思いやってくれる、たいせつな人たちからの心でした。

そして。

いちばん信じていた、自分の剣。自分の作った赤いキューブ。だれ

よりもいちばん信じていたはずの、それらの力。

アーザスは、信じていたその「力」にまでも、見放されたのです。アーザスのそのさいごのよりどころが、失われたしゅんかんでした。

今やアーザスは、ただひとりでした。かれのことをささえ、助けてくれる者は、もうだれも残ってはいませんでした。しいていうはずのムンドベルクも、なんでもいうことをきくはずのソシーも、いちばんしんらいしていた、力にさえも……。

そして人はただひとりになったとき、もはやなにをなすこともできないのです。アーザスのその弱さが、かんぜんにかたちとなってあらわれたときでした。

「アーザス……」

ロビーがアーザスに近づいていきます。その目はかたく、けついにみちたものでした。

「これが、おまえの弱さなんだ。人は、ひとりでは、なにもできない。みんながいてくれるから、たいせつな人たちがいてくれるから、人は、なんばいも、なん十ばいも強くなれる。」

ロビーがアストラル・ブレードをふりかざしました！

「みんなの思いを、あわせることができる。それこそが、人の、ほんとうの強さなんだ！」

「や、やめろ！ やめろ！ うわあああ！」

ぶおん！ ばしゅううう！

アーザスのそのやみのからだだが、アストラル・ブレードによってまっぴたつに切りさかれました！ その悪しきやみのからだのあいだから、ものすごいいきおいで、やみのエネルギーが飛び出していきます。それは今までなん百年とためこんできた、アーザスの悪の力の

みなもとでした。そして、それと同時に……。

びきっ！　びきー！　びききっ！

広間のまん中にあつた、赤いキューブ。その石の表めん、いくつものひびが走っていきました。そしてつぎのしゅんかん！

ばりーん！

アーザスの作り上げたよこしまなる赤いキューブは、かんぜんになごなになつて、地面に落ちていったのです！　そしてそれはあつというまに、しゅうしゅうと赤いけむりを上げて、空気の中に消えていってしまいました。

アーザスのその悪しきやみの力が失われたことで、赤いキューブもまた、そのよこしまなるやみの力を失つたのです。アーランドをおびやかすアーザスのやみの力のきょういは、こうしてここに、かんぜんに消え去りました。

アーザスのからだから、どんどんとやみのエネルギーが吹き出していきました。そしてそのさいごの残りまで、すつかり出しきつたとき。そこにはただ、ひとりの人間がたおれているばかりだったので。その顔からは、もうすつかり、やみのけはいは消えていました。それはむかしむかしにウイステインというくにに住んでいた、ひとりのあどけない少年のすがたでした。

悪の大魔法使いアーザスは、むかしのままの、アーザス・レンルーにもどつたのです。きゆうていまじゆつしにあこがれる、夢多き見ならいまじゆつしだった、そのころに……。

消えてゆく、そのいしきの中。アーザスはむかしのきおくを取りもどしてしました。今までのアーザスはただただやみの力にしはいきれ、みずからの心をねじまげられてしまっていた、かわいそうなそんざいであつただけなのです。アーザスはすぐに、自分の身に起こつた

ことをりかいました。長い長い悪夢から、ようやく目ざめたような思いでした（アストラル・ブレードによって切りさかれたのは、アーザスのその悪しきやみの部分だけでした。その中に眠っていたアーザスほんらいのからだは、きずつくことなく、ここにかいほうされたのです）。

ほんとうの自分を取りもどしたアーザス。その胸の中には今、ひとりの友のすがたが思い起こされていました。それはかつてアーザスとともに多くの夢を追いかけていた、たいせつなたいせつなその人のすがたでした。

テルベル・ラインハット。かれは剣のしゅぎようにはげむ、ひとりの夢見るウルファアの少年でした。そしてこのテルベルこそが、のちにレドンホールというくにをきずき上げることになるのです。テルベル・ラインハットは、げんぎいのレドンホールの王、ムンドベルク・アルエンス・ラインハットの、そのごせんぞでした（つまりロビーのごせんぞでもありました。そして……、いぜん女神のつるぎアストラル・ブレードのことをレドンホールの石の中にふうじることとなった人物のことについて、わたしがみなさんにお伝えしたことがありましたが、その人物こそほかでもありません。このテルベルだったのです。アーザスの持っていた剣をかなしみのうちにふうじることとなった、テルベル・ラインハット。かれのその深い心のうちがわは、遠いアーザスのむかしの物語の中において、ともに語られることになるでしょう）。

つめたい石の床の上、アーザスの心の中には今、さまざまな思いがあふれかえっていました。もはやもどることもできない、遠い遠いむかしの思いで……。たいせつな友は、もう、この世にはいないのですから……。

「ごめんね、テルくん……」

遠き、友へ。思いをつぶやくアーザスの目には、大きななみだのつ

ぶがあふれていました。

30、つづくみらいへ

はるかなむかし、みどりの草のたなびく美しい土地がありました。そこにはわたしたちの見たこともない木々がしげり、ふしぎな実がえだいっぱいにみのり、きおんは一年を通しておだやかで、夏があつすぎること、冬が寒すぎることありませんでした。

大地は気まえよく、さくもつのみのりをさずけてくれました。西のはまに広がる海は、魚や貝や海藻などを、必要なだけ人々に与えてくれました。

まことにこの土地は、人々の考えるりそうきょう、そのままでした。すぎることもなく、たりないこともない。ささやかなそののぞみを、なに不自由なく住人たちに与えてくれる場所。それを人は、りそうきょうとよぶのです。

生きものたちはさそわれるがままに、この土地に集まり、暮らしはじめました。たくさん人間たち、そして動物の種族の者たち、さらには精霊やもつとふしぎな生きものたちまでもが、この土地にひかれてやってきたのです。たくさんのがおこされ、まちが生まれました。たくさん新しいぶんかやわがが、生み出されていきました。そしてれきしが、きずかれていきました。

それにもなつて、さいがいやわがわいもすくなからず起こりました。ですがそんなことが起こるたびに、人々はともに力をあわせ、それらのこんなんを乗り越えてきたのです。

長いねん月をへて、たくさん住人たちがあらわれるようになって、その土地の美しさはいぜん変わらないままでした。空気はすがすがしいままでした。水はきよらかなままでした。海も山も、むかしと変わらず、いだいなるそのしぜんのままのすがたをほこりつづけていたのです。

そしてじだいはうつり、今このとき。

その土地に、新たなきょうきょういがおそいかかりました。

ですが人々はふたたび、このこんなんを乗り越えてゆくのでしょ

う。そしてこの美しいしぜんのままの世界を、守りぬいてゆくでしょう。

みずからのきずいてきたれきしに、新たないちページをきぎんでゆくのでしよう。

そこに住む者たちによって手が加えられ、新しいものが作り出され、さらにゆたかになっていく。世界とは、そういうものなのです。人が作っていくものなのです。どんなわざわいやこんなんがおとずれようとも、それは新たなれきしとなって、人々の心に伝えられていくことでしょう。そしてその心はまた、のちの世の人々にひきつがれ、つぎのこんなんに対しての大いなる力となるのです。

そして今、新たなこんなんが、人々のその目の前につきつけられていました。せまりくる、黒の力。それに立ちむかってゆく、人々の物語。それがこの物語なのです。

この土地の名まえは、アークランド。この物語は、そのアークランドの人々の新たなれきしのいちページをつづる、戦いの物語なのです。アークランドの物語なのです。

そしてそのアークランドに住む、ひとりのおおかみの少年、ロビーの物語なのです。

それぞれの物語は今、さいごのけつまつるときをむかえようとしているところでした。

白と黒、ふたつの王国の戦いに、ついにまくがおろされるときがやってきました。ともにいだいなる力を持った、ふたりのえいゆうたち。かれらの戦いは、このアークランドをかけた戦いでした。おたがいの生き方、ほこり、せいぎをかけた戦いでした。エリル・シャンディーンの戦いの場の、はるかな上空。そこにかれらのすがたはありました。おそろしいもも色りゆうの、その背中の上。今かれらはそこで、このアークランドのみらいをきめる、さいごのけつせんをくり広

げていたのです。そしてその戦いはもはや、けっちやくのときをむかえようとしていました。白きえいゆうの、はいぼくというかたちによって……。

しかし、アークランドのみらいはそのしゅんかん、大きく変わっていくこととなるのです。アルファズレドがりゆうの背にしがみつくアルマークに、そのさいごの剣をふりおろそうかという、まさにそのとき。運命の女神の力は、そのさいごのさいごで、白き勢力のせいぎにほほ笑みかけました。

アーザスのそのよこしまなるやみの力のきょういが消え去ったとき、同時にこのアークランドに、かつてのかがやきを取りもどされたのです。そのかがやきとは……。

ふおおおんっ！ ばあああーっ！

あたりをつつみこむ、青と白の、目もくらむほどの光、光、光！

それはまったくとつぜんにおとずれました。今やエリル・シヤンデインの王城は、そのすみずみまで、その光の中に飲みこまれてしまっていました。広がるまちなみ、家々のやね、通り、水、空に浮く小島、すべてが、その青白い光の中につつみこまれていきました。

まちの人々はさいしょ、あまりにもとつぜんのことに、わけもわからず、みな手をかざして空を見上げるばかりでした。しかし人々がその光のしようにたいに気がつくまでには、長い時間はかからなかったのです。すぐに人々の心に、かつてのきぼうが生まれはじめていきました。その光はまさしく、このアークランドのきぼうの光、そのものだったのです。

みなはとなりの者と手を取りあい、ぴよんぴよんとはねながら、からだ中でそのよろこびの心をあらわにしていました。そして、人々が口ぐちにさげんだ言葉。それはみな、つぎのようなひとつの言葉ばかりだったのです。

「宝玉だ！　宝玉だ！　青き宝玉の光が、よみがえった！」

まさしくその言葉の通り、その目もくらむような光は、エリル・シャ
ンディーンの王城、そのてっぺんから放たれていたのです！　そこに
あつたもの、それはまさしく、このアークランドのきぼうの力、青き
宝玉にほかなりませんでした。

ロビーの戦いによって取りもどされた、力のバランス。アーザスの
赤いキューブがはいされた今、青き宝玉はついに、そのほんらいの
力を取りもどすことになったのです。おさえこまれていたその力を、
いつきにはき出すようなかたちとなって。

宝玉のかがやきははじけんばかりのエネルギーの波となって、この
土地のすみずみまでをてらし上げていきました。空も、山も、みずう
みも、河も。まさに今、レドンホールのその古きいい伝えの言葉の通
り、このアークランドに光がもどったのです！

そして宝玉の光がよみがえった今、ひとつの力強いエネルギーが、
同時にそこから飛び出しました。それはロビーの持つ剣から生まれ
た、あの青白い光のいかずちのエネルギー、そのものでした。ロビー
の、みんなを助けたいと願う強い思い。その思いにこたえて、剣から
生み出された光の力が、まさに今、エリル・シャンディーンとその青
き宝玉の中から飛び出したのです。

エリル・シャンディーンにせまりくる、そのさいだいの敵をうちほ
ろぼさんがために。

「この光は……っ！」

とつぜんその身にふりそがれた、まばゆい光。アルファズレド
はふり上げたつるぎを持つ手をとめて、かなたの空を見やりました。
そこにはベーカーランドのみやこ、エリル・シャンディーンの本城が
ありました。そしてそのてっぺんから、この光はふりそそいでいたの
です。

「青き宝玉……」

つぎのしゅんかん、アルファズレドはすべてをりかいしました。宝

玉の守り、その守りを持つベーカーランドには、いかに強力な軍勢を持つアルファズレドとて、今までよいにはせめこむことはできませんでした。なにがなんでも、どんなぎせいはらってでも、ベーカーランドをうちほろぼさねばならない。アルファズレドはそうして、悪の魔法使いアーザスと手をむすんだのです。アーザスはワットのために、ベーカーランドの青き宝玉の力を弱めることをやくそくしました。それが赤いキューブというかたちとなって、あらわれることとなったのです（しかしアーザスのほんとうのもくてきは、このアークランドをほろぼし、自分ひとりの手の中だけにおさめてしまうことでした。ワットのためというのは、あくまでも、おもてむきのことだったのです）。

アルファズレドにとつて、もはやアーザスのしんのねらいなどは、どうでもいいことでした。アーザスがそのじやあくなもくてきのためにワットのくにの力をりようしようとしているということも、アルファズレドにはすくなくわかっていました。ですがアルファズレドはあえて、アーザスのそのさそいに乗ったのです。すべてはベーカーランドを、アルマークのことをうちたおす、そのひとつのために……。

アーザスの力によって弱められた、青き宝玉の力。その力が今ふたびもとにもどされたのだということ、アルファズレドはこのときりかいしました。赤いキューブがはいされたということ、そしてアーザスがもはや、うちたおされたのだということも。

しかしそれでもなお、アルファズレドの心はゆれることはありませんでした。このままおのれの運命にまくをおろすことになろうとも、さいごにそのけつちやくを、この手でつけなければならぬ。それはまさに、今このときだけなのだ。

アルファズレドが、剣をにぎったその手にふたたび力をこめました。しかし、まさにそのしゅんかん！

「ごおおおおお！ ぼほんっ！」

すさまじいまでの、エネルギーの波動！ その力はまさに、はるか
エリル・シャンティーンのいただきにある青き宝玉から、まつしぐら
に、この場所へとむけて放たれたのです！

「ぐ……！　ぐわあああ！」

アルファズレドのさけび声が、この場にひびきました。なにが起
こったのか？　アルファズレドにはりかいすることができませんで
した。とつぜん、あたりをつつむ青白い光が急にその大きさをました
かと思うと、足もとのりゆうの背が、大きくかたむいたのです。りゆ
うの背の上をすべり落ちてゆく、アルファズレド。もはやこの場にそ
のからだをとどめておくことは、ふかのうでした。

もも色りゆうドルーヴは、青き宝玉から放たれたすさまじいまでの
光のエネルギーに、その身をたらぬかれたのです！　ドルーヴはひと
声、おそろしいだんまつまのさけび声を上げて、そのままはるかな地
上へとむかって落ちていきました。かつてこのアークランドのへい
わをおびやかした、赤りゆう。その赤りゆうの子、ドルーヴは、ここ
に女神の青き宝玉の力の前に、うちほろぼされたのです。宝玉の力
は、すべてのアークランドのぜんなる人々の力。ドルーヴは人々の、
そのぜんなる力の前にやぶれ去りました。

しかしその背に乗ったふたりのえいゆうたちの運命は、いまだけつ
ちやくをむかえていないままでした。りゆうの背になんとかしがい
ついていたアルマークは、ああ、なんてこと！　ふりはらわれ、その
ままこの空の中へと放り出されていってしまいました……。そして
アルファズレドもまた、同じ運命をむかえることとなったのです。

アルファズレドのからだはりゆうの背中からふり落とされ、そのま
ままつさかさまに、はるかな地上へとむかって落ちていきました。も
はや、どうすることもできませんでした。落ちてゆくその中、アル
ファズレドの頭の中には、かつてのたくさんの思いでたちがよみが

えっっていました。小さかったあのころ、ともにひみつの草原の上で、夢を語りあつたふたり。ともに冒険の旅に出て、ともに同じ道を歩んできたはずのふたり。いつからなのでしょう？ そのふたりの思いが、おたがいに、べつべつのところへとむかっていつてしまったのは……。

おれは、まちがっていたのか……？

うすれてゆくいしきの中、アルファズレドは静かに思いました。しかしもう、どうすることもできなかつたのです。あとほんのすこしののちには、自分のいのちは、この世界から消え去ってしまうのですから。アルマークのいる、この世界から……。

アルマーク……。アルファズレドはさいごに、思いました。

これが、おれたちの運命なのかもしれんな……。

アルファズレドはそうして、みずからのそのさいごの運命の中に、その身をゆだねたのです。

「さらばだ……。アルマーク……」

アルファズレドは消えゆくような声で、そうささやいていました。

そのとき……。

ばさっ……！ ばさっ！ ばさっ！

かなたから、つばさのはばたく音がきこえてきました！ これは……！ この音は……！

そう、それはまさしく、アルマークの乗るあのユニコーンのつとつペガサス、クリーブのつばさのはばたきの音だったのです！

「アルファア！」

その背からひびき渡る、ひとりの人物の声。それはまさしく、アルマークのものでした！　そうです、アルマークのその身がりゆうの背から投げ出された、そのあと。かなたの空からその主人のもとへと、かけつけた者がありました。それこそが、このクリーブだったのです！　アルマークはとっさに、そのクリーブのからだにしがみつきました。そしてその背になんとかまたがることができると、そのまままっしぐらに、アルファズレドのもとへとむかっていったのです。

友を助ける。そのひとつのために……。

「アルファアー！　つかまれ！」

アルマークの声が、ふたたびこの空の中にひびき渡りました。のぼすうでのさきには、落ちてゆくアルファズレドのそのすがたがありました。アルファズレドはその声にひかれて、ゆつくりとそのひとみをひらきます。アルファズレドはそこに、アルマークのまぼろしを見ているのだと思いました。さいごのさいごで、かつての友のすがたを、そこに見たのだと。

しかしそれがまぼろしではないとわかったとき、アルファズレドは目を見ひらいて、アルマークのそのすがたをくいいるように見つめたのです。なぜ……、なぜアルマークが、おれを……。

「アルファアー！」

アルマークのその手のさきが、アルファズレドのその手にふれました。アルファズレドはゆつくりと、自分のその手をアルマークにさしむけます。なぜなのでしょうか？　アルファズレドは自分でも、わかりませんでした。しかしこのとき、アルファズレドはただ自分の心のみちびかれるがままに、友のその手を取ったのです。

がしっ！

アルマークは空中で、アルファズレドのその手をしっかりとにぎりしめました。そしてそのままクリーブのからだをアルファズレドによせると、かれのからだをしっかりとだきかかえて、ペガサスのその

背の上へとはごびいれたのです。

ペガサスの背の上で、ふたたびあいまみえるふたり。アルファズレドは、はあはあと荒い息をついて、そのまま下をむいていました。しばらくは、なにもいうことができませんでした。

そしてそれから、ときがすぎて。

「なんのつもりだ？ アルマーク……」アルファズレドが下をむいたまま、うしろにいるアルマークにいいました。

「おれは、おまえを殺そうとした。すべてののけつちやくをつけるつもりだった。それなのに……、なぜ、おまえはおれを助ける……？」その言葉に、アルマークは静かにほほ笑むと、友のその背にむかっ
ていいました。

「なぜかな？ ただ、わたしには、きみを見ずてることはできなかった。きみが、わたしの友人だからかな？ 友を見ずてることが、ぎんねんながら、わたしにはできないんだ。」

アルマークがアルファズレドのそのうでに、自分の手を重ねます。「わたしは、強くなつただろう？ きみに負けるわけにはいかないんだ。わたしはずっと、きみに追いつこうとしてきた。だから、これからも、きみの背中を追わせてくれるとうれしい。きみはいつまでも、わたしのもくひようなんだ。」

アルファズレドが、ふるえる声でいいました。

「おれは……、おれは……」

しかしアルマークはアルファズレドの手を取って、やさしくいったのです。

「むかしのわたしたちに、もどろう、アルファ。ともにきそいあい、はげましあい、強く大きくなっていけばいいんだ。ベーカーランドも、ワットも。」

アルファズレドは、なにもいえませんでした。その目には、たくさんのなみだがあふれかえっていました。

そのとき……。

ばりん！

アルファズレドの首にかかるあのりゅうの力のメダルが、音を立てただけになりました！ ぱらぱらと、そのかけらが空にちってゆきまです。それは青き宝玉の、そのせいなる力のためでした。女神の宝玉がほんとうの力を取りもどしたとき、宝玉のそばによった悪しき力のそんざいは、すべてその力を失うのです。宝玉の力はさいごのときここにきて、アルファズレドの持つその悪しきメダルの力を失わせました。アルファズレドの心が、その悪のじゅばくからとき放たれたしゅんかんでした。

つばさを持った白馬が今、エリル・シャンディーンの王城へ、青き宝玉のもとへと飛び立ってゆくところでした。その背にむかしのままの心をいだいた、ふたりのえいゆうたちのことを乗せて。

アルファズレドのそのなみだのつぶが、すぎてゆくこの空の中へと消えていきました。

すまない……、アルマーク……。

思いはアルマークの心に、たしかにとどいていました。

青き宝玉の光は、戦いの場のそのすみずみまでをもてらし上げていました。そしてもちろん、われらが白き勢力の者たち、ベルグエルムも、フェリアルも、その光の意味するところをすぐにかいたのです。それはまさしく、このアークランドのきぼうをつなぐ、光そのものでした。

ぜつぼう的なまでの戦いをくり広げていた、ふたり。そして白き勇士たち。

あれから……。

もも色りゅうドルーヴのしゅうげきにより、白き勇士たちはかいつ的なまでのひがいを受けていました。弱りきっていたところへ、さ

らなる追いうちを受けたのです。それからすぐに、アルファズレドを乗せたドルーヴはエリル・シャンディーンの本城へとむかつて飛び去っていきましたが、仲間たちはもはや、その力のげんかいはるかにかえたいようたひになつてしまつていました。

ドルーヴのそのおそろしいほのおの息によつて、仲間たちの乗る馬はみなたおれ、きずつき、ちりぢりになつてしまつていました。そして白き勇士たち自身も地面へと投げ出され、もはやその手に武器を取ることもすた、ままならないじようたひになつてしまつていたのです。そこへせまりくる、黒の軍勢の者たち……。仲間たちの目の前にあるものは、もうぜつぼう、それだけでした。

「こうふくしろ。いのちまでは取らぬ。」

騎馬に乗つた黒の軍勢のしきかんのひとりだが、ベルグエルムたち白き勇士たちの前に進み出て、その手に持つた剣をかれらにつきつけていました。白き勇士たちはみなすつかり、敵に取りかこまれてしまつていました。馬はもう、一頭も残つてはおりません。ベルグエルムのはい色の騎馬も、フェリアルルのゆうしゆうなる騎馬も、ドルーヴのほのおの前に追いちらされてしまつていたのです。かれらの手には、ただいっぽん、ぼろぼろになつた剣がにぎられているだけでした。

ベルグエルムにもフェリアルにも、もうこのじようきようをくつがえすしゆだんはなにも思いつくことはできませんでした(すでにかれらの人数は、いくさの勝ち負けをきめるための人数である「全体の人数の二十ぶんの一」を下まわる、そのぎりぎりのところまでへつていました。このままきせきが起ころないかぎり、かれらがその人数を下まわつてしまうことは、もはやあきらかだつたのです)。かれらにできることは、ふたつにひとつ。こうふくするか？ それともさいごまで戦つて、その運命をむかえいれるか？

ベルグエルムもフェリアルも、みなその手に持つた剣をぎりぎりにとぎりしめました。その手には、血がにじんでいました。剣をふるいにふるつたがために、その手のかわは破れ、もうぼろぼろになつてし

まっていたのです。それでもかれらは、剣をふるいつづけていました。

黒の軍勢の者たちが、せまってきました。さいごのけつだんをしなくてはなりません。ベルグエルムもフェリアルも、みなそのひとみをとじました。そしてふたたび目をひらいたとき、かれらの心はなおかたく、ひとつにきまっていたのです。

われらは、仲間を信じる！　そして運命を信じる！

ロビーどののために！　アー克蘭ドのために！

「うおおおおー！」

ベルグエルムもフェリアルも、みなさいごの剣をかまえて、目の前の敵たちに立ちむかっていきました！　そのあまりのいきおいには、さすがの黒の軍勢の者たちも、おそれをいだかずにはいられません。いったいしゅんのうちに、黒の軍勢の兵士たちがつぎつぎとうちたおされていきます。それはまさに、白き勇士たち、かれらのさいごのせいぎの力、そのものでした。

しかし……、その力が長くつづくということは、あり得なかったのです。たおしてもたおしても、つぎつぎにあらわれる、新たな敵の軍勢。その戦いは、はじめからぜつぼう的でした。それははじめから、わかっていたことでした。しかしかれらは、あきらめることなどはできなかつたのです。かれらがこうふくしたそのしゅんかん、ペーカーランドのはいぼくがけつていしてしまうのですから。そのあとにたとえどんなきせきが起ころうと、そのけつていがくつがえされるといふことは、ないのです。

ここで負ければ、すべてが終わる……。かれらの思いは、ただひとつでした。それだけは、なんとしてもさけなければならぬ。どんなじょうきようであろうとも、たとえ目の前の光景に、のぞみがまったくなかつたとしても、われらはきぼうを信じてつき進むのみ。

あきらめるわけにはいかない！

仲間を、きぼうを信じるんだ！ その強き思いが、かれらのことをただつき動かしていました。

そしてそんな、まさにそのときのこと……。かれらのその思いは、ついに天にとどいたのです。青き宝玉の、そのきぼうの光とともに……。

「なんだ！ これはいったい、どういうことだ！」黒の軍勢のしきか
んが、あわてふためいて、あたりを見渡しながらいいました。戦いの
場は、いつてん、青白い光によつて、すっかりつみこまれてしまっ
たのです！ 黒の軍勢の者たちはみなひめいを上げて、逃げまどうば
かりでした。なにしろ宝玉の光は、かれらの身につけているよろい
やかぶとやたてを、あつくやきこがし、その黒きつるぎをやきこがしま
したから。

戦いの場は大こんらんとなりました。目の前にせまりきていた黒
の軍勢の者たちは、そのまましきかんとちのしきも失って、防具をぬ
ぎすて、武器を放り投げて、ちりぢりになって、戦いの場のこうほう
へとひき下がっていったのです。

仲間を信じるみんなの思いにより、ぎりぎりのところでつながつ
た、ひとつのきぼう。そのきぼうをばねにして、かれらはここから、つ
づくさらなるきぼうへとむかつてつき進んでいきました。つづくか
がやき、きぼうを信じて。

そして……。

かれらのその思いは、まさに、つづくさらなるきぼうへとつながつ
ていったのです。運命がいちどきぼうへのかいだんをのぼりはじめ
たのなら、どんなときにだって、そのきぼうの光はさらなる光をもた
らしてくれました。

光が光を、きぼうがきぼうを。

ひゅん！ ひゅん！ ひゅん！ ひゅん！

とつぜん、戦いの場に大きな風の音がなりひびきました！ りゅうのつばさの音でも、デイルバグのつばさの音でもありません。それは今までにだれもきいたこともないような、ふしぎな風の音でした。

そしてその場にいる者たちは、みなそれを見たのです。

それはかなたの空からやってくる、巨大な空飛ぶ船たちでした！

これはいったい！ ベルグエルムもフェリアルも、みなとても信じられないといったようすで空を見上げていました。今やこの戦いの場の空には、数えきれないほどたくさん、巨大な羽を持った船たちがせいぞろいしていたのです！（その羽がぱたぱたと動いて、この船たちのことを進ませていたのです。そしてさきほどのひゅんひゅんという風の音は、この羽が立っている音でした。）それらの船たちにはみな、同じもんしようがえがかれていました。それはみどり色をした、木と葉つばをあしらった、ゆうがなもんしようだったのです。

「あのもんしようは……！」 ベルグエルムがおどろきの表じようを浮かべて、いいました。かれはそのもんしようのことを、よく知っていました。たびたび本の中にあらわれる、そのもんしよう。それは今は遠いかなたへとすがたを消してしまったという、あるひとつのいなる種族の者たちの、もんしようだったのです。その種族とは……？

「ネクタリア！ ネクタリアだ！」

そうです！ このもんしようは、はるかむかしにこのアーランドを去っていった、その伝説的なまでの植物の種族、ネクタリアたちのもんしようでした！

「ネクタリアの者たちが、このアーランドへともどつてきた！」

みなは剣をかかげて、いつせいによるこびの声を上げました。そしてそんなかれらの頭の上から、今かれらの味方たるネクタリアの者たちの、きぼうの船たちがまいおりてきたのです。それは白くなめらかな木でつくられた、なんとも美しい船たちでした。船のまわりは、かがやくこがね色のしんちゅうでかざられております。それらはすべて、植物をあしらったデザインになっていました。そしてまるで船そのものがいっぽんの巨大な木であるかのように、葉やくきや花や根が、そのまわりを取りまいていたのです（そしてじつさいそれらのものは、ほんものの生きた植物でした。まさにこれらの船たちは、生きていたのです）。

そしてこれらの船たちの、そのいちばんのとくちよう。それは船の上に取りつけられている、大きな白くてまるいふしぎな物体でした。それらはいっそうの船につき四つか五つついていて、ふわふわと風になびいていたのです。そしてよく見ればそのひとつひとつが、小さなわた毛の集まりであるということがわかりました。

これは……！ みなさんもたぶん、この物体のことはもうなんども見たことがあるはずです。それは春の野原にさきほこる、小さなきいろい花のわた毛でした。そう、それは……、たんぽぽです！ これらの船の上に取りつけられているもの、それは巨大な、たんぽぽのわた毛でした！（いったいどこに、こんなものがさいているのでしょうか？）そしてその巨大なわた毛が風を受けて、これらの大きな船たちのことを、ちゆうに浮かべていたのです（そして船に取りつけられているいくつかの羽によって、これらの船たちのことを進ませていました）。ほんとうにすごい。

「どうやら、まにあつたようだ。」

今その中のいっそうの船の上から、青いかみをしたひとりの青年が顔を出していました。かれのことは、もういうまでもないでしょう。そう、それはまさしく、青いかみを持つ美しきシルフィア種族の青年（そしてリズのお兄さん）、リストール・グラントだったので！

ついにリストールが、みずからのときふせたネクタリアの軍勢をひきいて、この地へやってきました！　ほんとうに、あやういところでした。あともうすこしくるのがおそかったなら、このアーランドのれきしは、大きく変わってしまったはずです。リストールのそんざいが、大きな意味を持つということ。そして時間によりもたいせつなのだということ。ノランのいつていたそれらの言葉は、まさしく正しい言葉だったのです。

（それでもし宝玉のかがやきのもどらないうちに、かれらがこの戦いの地へやってきていたのであれば……、かれらの力は空に浮かぶ巨大なひとつのじゃあくなる力によってふうじこめられ、ばらばらに追いはらわれてしまっていたことでしょう。その空に浮かぶじゃあくなひとつの力とは？　そう、ドルーヴです。宝玉の光がもどっていないければ、アルファズレドはアルマークのことをうちたおし、そして新たな敵であるネクタリアたちのわた毛の船の軍勢にむかって、そのおそろしい力をぞんぶんにはつきしていたはずでした。いかにネクタリアの大軍勢とて、巨大な悪であるドルーヴにまっこうから立ちむかって勝つことは、とてもむりなことだったのです。空飛ぶ船たちは、いこうもむなしく、その上のネクタリアの者たちともどもほのおにやかれ、かじをこわされ、なすすべもなくうちたおされてしまいましたことでしょう。もも色りゆうドルーヴのそんざいとは、それほどに、だれもがよそうすらできないほどのおそろしいものでした（これがネクタリアでなくとも、ほかの勢力であっても、けっかは同じことでしょう。たとえ数千、一万の大軍勢であろうとも、このもも色りゆうのじゃあくなる力は、かれらのことをかんとんになぎはらえてしまえました）。

ロビーが宝玉の力を取りもどしてくれたからこそ、ベルグエルムやフェリアルたちがきぼうを信じてさいごまで戦ってくれたからこそ、ネクタリア、かれらの力もまた、ここにすばらしききぼうの力となつて、光りかがやくこととなったのです。ネクタリアの者たち、そしてリストールや、リストールのことをささえてくれたたくさんの者たち。かれらのそんざいはここにまさに、ロビーやベルグエルムやフェ

リアルやみんなの思いにつづく、きぼうの光となりました。それはまさしく、みんなの思いのけっしよう、人の持つほんとうの強さでした。）

リストールのそばには、三人の者たちが立っていました。そのうちのふたりは、シープロンドからリストールとともにこのわた毛船に乗ってやってきた、レシリアとルースアンでした。かれらはこのさいごのときにあたって、わずかでも力になれることがないかと、船に乗せてもらったのです（かれらがいなかったのなら、リストールの身にワットのおそろしい魔の手がのびていたかもしれませぬ。そうなっていたら、このネクタリアの軍勢も、ここにやってくることはなかったはずです。かれらの力はまた、まことにこのアーケランドをすくう、大きな力となりました）。

そしてもうひとり。リストールの横にはみどり色がかったこがね色のかみを持つ、リストールと同じくらいのおねれいの青年が立っていました。その頭の横には、大きな白いゆりの花がいちりんさいております。つまりかれは、ネクタリアの者でした。かれの名まえは、クライユルト・エルクライト。そう、リストールの、そのいちばんの友でした。

「われら、ネクタリア、花の騎士団、七千！ われらはここに、ベーカーランドのえん軍として加勢する！」

クライユルトの声が大ききなこだまとなって、黒の軍勢の者たちの上にふりそそぎます（たくさん植物のパイプの中を通って、その声なんばいにも大きくなつたのです）。これをきいた黒の軍勢の者たちは、ますますあわてふためきました。

「えん軍だつて？」「きいてないぞ！」「まさか、そんな！」

えん軍、七千！ なんとというたのもしい力なのでしょう！ 花の騎士団の力はまさしく、大いなるきぼうの力だったのです。それを知っていたからこそ、ノランはかれらに、リストールに、大きなぞみをかけました。

えん軍、それはいくさの場においての、新たなる力をあらわすものでした。戦いのその中で（そのくんにしよぞくしていない）新たに戦える者たちが加わったのなら、それはえん軍として、そのくにの兵力の中に加わることができのです。そして……、ワットがかき集めたそうぜい六千の兵たちをすべて加えたとしても、今やベーカールランドの白き勢力の力は、それを上まわっていました。

（いぜんにもお伝えしたことがありましたが、このえん軍についてのルールとして、「そのくににしよぞくしていないそこから兵力であれば、いくさにおいていつぼうの軍に新たな兵力が加わったとしても、加わったあとのごうけい人数が相手と同じ数までであれば、相手は兵士をついかすることができない」というルールがありました。さらに、「加わったあとのごうけい人数が相手の数をこえる場合、相手はそれと同数までの兵士をついかできる」というルールも。ですからこんかい、七千のえん軍を加えたベーカールランドは、さいしよの兵力の千五百四十二とあわせてごうけい八千五百四十二もの兵力となりますから、ワットは自身のそうぜい六千におよぶ軍勢をこえるぶんについては、新たな兵力をついかすることがかのうなわけです。ですけど……、そんな兵力はもうワットにも、どこにも持ちあわせてはいませんでした。ワットはこんかいの戦いにむけて、かのうなかぎりの兵力をかき集めたのです。それで六千の軍勢なのですから、ネクタリアの七千の軍勢が、いかに強大な勢力であるのか？ おわかりでしょう。）

「えん軍！ えん軍！」

白き勇士たちのあいだに、大きなかけ声がわき起こりました。それは黒の軍勢の者たちに、自分たちの新たな兵力のことを伝えるためのものでした。

「われら、白き勢力、八千五百四十二！ げんぎい、七千と、そして八十六名！」（いくさの勝ち負けがきまる人数は、はじめの兵の人数の二十ぶんの一。この人数まで兵がへったときにその軍勢は負けとなるわけですが、もしえん軍がこなかったのなら、白き勢力のものと兵力、千五百四十二の二十ぶんの一である七十七人（はすうは切りすて

ます)にたつしたときに、負けがきまってしまったのです。そしてえん軍がくる前の残りの人数は、ベルグエルムとフェリアル部隊の、わずかに八十六人のみでした！ほんとうに紙ひとえのところ、運命は分かれたのです。)

そして、仲間たちのそのかけ声の中……。

「ぜんかん！ かまえー！」

頭上のたんぽぽのわた毛船たちのあいだから、大きな声がひびき渡りました！その声はまさしく、このネクタリアたちのきずき上げたいだいなる花の騎士団の長、セハリア・シリルロウの声でした。いつそのわた毛船の上、そのまん中にそびえたつ、しれい塔。今そのしれい塔の上にもも色でふち取られた白く美しいよろいに身をつつんだ、セハリアが立っていたのです。風になびく、おうごんのかみ。そのかみの横には、白ともも色のまじった、たくさん美しいいらんの花がさきほこっていました。そして、りんとしたそのまなざし。その手には、自身のもも色のやいばのつるぎがいつぱん、しっかりとにぎられております。そして今セハリアは、そのつるぎをふりかざして、配下のネクタリアの者たちにむかって、しどう者たる者のカリスマあふれる声で、戦いのめいれいをくだしているところでした(なんてさまになっているんでしょう！かっこよすぎます！)。

「うてー！」

セハリアが、そのもも色のつるぎをふりおろしたしゅんかん。

しゅごごごお！ ぼんっ！ ぼん、ぼぼんっ！

わた毛船たちの横にあいたたくさんまるといあなから、大きな黒いものが、ぼぼんっ！いつせいに飛び出して、そしてそれはまるで雨のように、黒の軍勢のそのまうえへとうちこまれていきました！それはみなさんの世界のむかしの軍かんなどに取りつけられている、た

いほうのたまのようでした。しかしそちらは、鉄のかたまり。もちろんわれらがネクタリアたちが、そんなぶっそうで「ゆうがでない」ものを、使うはずがありません。では、かれらの船からふりそがれたものとは？

「うわああっ！ な、なんだー？」

黒の軍勢の兵士たちが、口々にさげび声を上げました！ そのからだには、たくさんの植物のつるがまきついております！ そんなものが、いったいどこから？ こたえはひとつでした。ネクタリアのわた毛船からは、大きな黒くてまるい、植物のたねがふりそがれたのです！ そしてそのたねからたくさんの植物のつるがのびていって、あたりの敵の兵士たちに、つぎつぎとまきついていきました（あまりののびの早さに、さいしよにつかまった兵士などは、はるか二十フィートほども空にのび上がってしまってしまったほどでした！）。

「われら、ネクタリアのほまれ！ 今こそ、その剣に乗せて、悪をうちはらうときぞ！ リステロント！」

セハリアの力を持った美しい声が、いくさの場にひびき渡りました。そしてその声にあわせて、わた毛船の上から、その両手にゆうがなデザインの手を二本かまえたネクタリアの美しい兵士たちが、つぎつぎとそのすがたをあらわしていったのです（レシリアとルースアンのすがたも、その中にありました）。

「みな、つづけ！ かつての友じょうのために！ ぜんなる世界のために！」

花の騎士団のしきかん、リストールの声がひびき渡りました（リストールは騎士団のしきかんとして、この戦いをまかされていました。そしてセハリアは、その騎士団のいちばん上に立って戦いのようすを見きわめる、そうだいしようということになるのです）。そしてその声とともに。

「おおおーっ！」

ネクタリアたちの数えきれないほどたくさんのおたけびが、いちめ

んに広がっていきました。それからかれらは、なんともネクタリアらしい、じつにゆうがな方法をもちいて、戦いの場のそのただ中において立ったのです。

「ずぎざぎざあーっ！　かれらのからだがあっというまに、たくさん

のいちまいいちまいの葉っぱのすがたへと変わっていききました！　それはまるで、木の葉のふぶきのようでした。あちらでもこちらでも、今やこの戦いの場の空は、みどりやきいろ、赤やオレンジといった色とりどりの葉っぱで、うめつくされてしまったのです！　そしてそれから。

その葉っぱのふぶきは黒の軍勢の中へと吹きこんでいくと……、そこでふたたびより集まって、もとのネクタリアの兵士たちのすがたへともどっていきました！

もう黒の軍勢の者たちは、人間たちもかいぶつの兵士たちも、わけへだてなく大パニックでした。とっぜん葉っぱのもうふぶきが吹きつけてきたと思ったら、目の前に剣を両手にかまえた敵の兵士たちが、数えきれないほどたくさんあらわれていましたから！

「ずぎああー！　ざぎざあーっ！」

ネクタリアの兵士たちがそのからだを葉っぱに変えて、流れるように敵のあいだを通りすぎていきます。そして、かれらが通りすぎたあとには……。

「うわっ！」「なにーっ！」「ぐおおー！」

黒の軍勢の者たちの、数々のさげび声！　かれらの手には剣のかわりに、大きないちりんの花がにぎられていました！　そしてよろいもたてもかぶとも、たくさん植物の根が張りめぐらされていて、ひびだらけ。もはや使いものにならなくなってしまっていたのです（ネクタリアたちの戦い方は、相手をいたずらにきずつけるようなものではありません。あつというまに敵の力をうばい去って、戦えなくしてしまう。それがネクタリアたちの「ゆうがな」戦い方でした。うーん、かっこいい！

そしてレシリアとルースアンのふたりも、すばらしいかつやくぶりで戦いの力に加わっていました。風に乗ってさっそうといくさの場

にあらわれ、手にした同じく二本の剣で、敵をばったばったとうち破っていったのです。かれらは剣も使えるんですね！ 強い！

それからもちろん、リストールとかれのいちばんの友クライユルトのふたりも、ともにおたがいの背中を守りあいながら戦いの場に加わっていました。

「むかしを思い出しますね、リステロント！」

クライユルトの言葉に、思わず笑みを浮かべるリストール。かれらのすがたは、まさにむかしのままのふたり、そのものでした。その友じょうは、はなれているあいだにも、ずっと変わらず、つづいていたままだったのです。

ベルグエルムもフェリアルも仲間たちも、みな夢を見ているような気分でした。かれらのきぼうはまさに、ぜつぼうのふちからよみがえったのです。ベルグエルムもフェリアルも、仲間たちに、アークランドの女神に、ネクタリアの者たちに、そして世界をすくう光をもたらしてくれたロビーに、心からのかんしゃの気持ちをおくりました。そして。

その心は、さらなるきぼうの力へとつづいていくことになるのです。

ぼうーっ！ ぼうーっ！

ふいに、どこからかひくい物音がひびいてきました。それはどこかできたことのあるような、そんななじみのある音でした。いったい、この音のしようたいは？

「あ、あれは……！」それを目にした仲間のひとりが、おどろきの声を上げました。それは、いくさの場のむこう。母なる大河ティーンティーンのかなたからやってくる、たくさんの大きな影たちだったのです。

「まさか……！ うそだろ……！」

みなはとても信じられないといったようすで、わが目をうたがうばかりでした。しかし夢やまぼろしではありません。それはたしかに、

そこにあらわれたのです。

「ポート・ベルメル船団！ ガランタのポート・ベルメル船団が、アークランドにやってきた！」

その言葉の通り！ まさしくそれは、西の大陸、こんごう大陸とよばれるガランタの、そのいちばんのみなとまち。ポート・ベルメルというまちからつかわされた、ぜんなる力の大部隊でした！

その大部隊はポート・ベルメル船団とよばれる、船の一団でした。西のガランタにおいても、かれらの船団の戦力にかなう者は、ほとんどおりません。そのポート・ベルメル船団が、なんと、西の海をはるばる乗り越えて、大河ティーンティーンをさかのぼり、このいくさの場へとかけつけてきたのです。なんとというすくいの船たちなのでしよう！ それにしても、いったいだれが、かれらのことをよびよせたのでしょうか？（そしてさきほどのぼうーっ！ という音は、この船たちの出す、むてきの音だったのです。むてきというのはまわりの人たちに船のそんざいをしらせるための、ふえのようなやくわりを持つ音のことです。みなとなんかに行ったときに、耳にすることができずはらずです。）

「ベーカーランドの人たちよ！ おそくなつてすまん！」

とつぜん、かれらの船のその先頭のいつせきから、ひとりの男の人がひよっこり顔を出して、ベルグエルムたちのいる方にむかつてさけびました。赤やきいろやもも色のいりまじった、どはでなかみの毛。サーカスのピエロが着ているような、色とりどりの水玉や星などのもようがはいった、どはでないでたち。こ、このかつこうは……！ まさか！

そう、こんなにもしゆみの悪い……、いえ、どはでなかつこうをしている人が、ほかにいるはずありません！ ポート・ベルメル船団のそのすくいの船の上からあらわれたのは、まぎれもなく、あの木の

けんじや、カルモトにほかならなかったのです！（おひさしぶりです！ それにしても、どうして！）

「カルモトどの！ カルモトどのではありませんか！」

大こんらんのいくさ場の中、ベルグエルムもフェリアルもびつくりぎょうてんして、やってきたその船のもとへとかけよって、あらんかぎりの声でさげびました（船の先頭までは、まだ三十ヤード以上もはなれておりましたから）。

「おお！ ベルグエルムくん、フェリアルくんか！ なんといいみじかい名まえだ！ 忘れようにも忘れられんぞ！」カルモトがさけんでかえします。

「きみたちには、たいへんにせわになった。ほんとうに、かんしやをしても、しきれないくらいだ。わたしに、アルミラとむきあう、そのきっかけを与えてくれたのだから。心かられいをいう。ありがとう！」

カルモトはそういって、頭を地面すれすれまで下げて、ペこり！とおじぎをしました（それと同時に、からだのどこかでぼきっ！という木のおれる音がしましたが……）。

「今こそ、そのおんをおかえしするとき。アーランドのために、わたしも力をつくすぞ。あとは、わたしたちにまかせておけ。」

そうなのです、カルモトはアルミラとけっちやくをつけるためのそのきっかけを与えてくれたロビーたちにおんがえしをするために、西の大陸ガラントのポート・ベルメル船団をひきつれて、ここにえん軍として加勢してくれたというわけでした！（ポート・ベルメル船団の者たちとはカルモトは親しくつきあっていて、かれらはカルモトのいうことなら、たいていのことはきいてくれたのです。まさか遠くアーランドまでしゅつげきしていくことになるうとは、かれらも思っていなかったでしょうけど。）

ベーカーランドへとむかう西の道で、ぐうぜんに出会うことになった木のけんじやカルモト。ロザムンディアのまちの人々（とフェリアル）のことを助けたいというロビーのそのけつだんが、カルモトとみ

んなのことをひきあわせ、カルモトとのこの大きな友じょうを生むことになったのです。そしてその友じょうが今、まさにこのさいごの大いさの場において、これほどまでに大きな力をもたらすことになりました。

(ところで、ノランはさいしょ、とらわれのリユインの者たちのことを助けるそのしごとを、カルモトにお願いしようとしていたのです。カルモトはいぜん、ベーカーランドからほど近い、切り分け山脈のいちばん南のはしの山の中に、塔をたてて住んでおりましたから。ですがそこに送ったノランの魔法の手紙は、「あてさきふめい」でもどつてきてしまいました。カルモトはノランに伝えていたその前の住所から、かつてにひっこしてしまっていたのです！　そしてひっこしたさきをノランに伝えるのを、「うっかり」忘れていました。

そのひっこしたさきがどこだか？　みなさんはもうごぞんじですよ。ね。そう、あのうちすてられた西の土地に立つ、いっぽんの巨大な木、ルイーザの木のところ。まさかノランも、カルモトがそんなところにひっこんでいるだなんて、思ってもいませんでしたから。そのためノランはカルモトをすぐに見つけることができず、見つける時間もなく、リユインのことはかわりに、(すこしはなれた地に住んでいる)リブレストをお願いしたというわけでした。

リブレストがいつてましたよね？「ノランのやつも、やつかいなしごとをおしつけてくれるわな。」って。あの言葉は、こういうわけからだったのです。そして、つづくリブレストの言葉。「たまには、いいわい。ハウゼンくんにも、おんがえしせんとな。」あの言葉はつまり、カルモトにおんを感じているリブレストが、カルモトのかわりをつとめることで、そのおんをかえそうとしていたからの言葉でした(どんなおんがあるのかは、わかりませんが……)。ハウゼンくんというのは、カルモトのみようじだったのです。どうりで、どこかできいたことがあると思ったはずでした。はじめてカルモトに出会ったときに、カルモトが自分の名まえを名のっていました。そのときわたしたちは、ハウゼンというみようじを耳にしていたのです(名まえの方は長すぎて、今でもさっぱりきおくにあります……)。

そしてもうひとつ。カルモトがガラランタにおもむいたそのもくつきは、今やすっかり果たされていました。つまりカルモトのいもうとであるアルミラは、カルモトにつれられて、ヴァナントの魔法かんごくの中につながれることになったのです。今アルミラはそこで、おのれのつみをつぐなう日々を送っています。カルモトのいうことには「ほんの百年ほど」で、そのつみはあらい流されることになるだろうということでした。いつの日か、ふたたび、きょうだいが手を取りあえる日がくるといいですね！ カルモトさん。）

「見たところ、おお！ ネクターリアの者たちも、加勢にかけつけてくれたか！ かれらとは、じつにひさしぶりだ！ もう、二百年になるか？ それはそうと、わたしの方も、力強い助っ人をつれてきた。ポート・ベルメルの、ポメラニンの者たちだ。かれらの力も、そうとうなものだぞ。」

ポメラニン？ それはいったい？

すると、カルモトのその声にあわせて、そのきれいなそうしよくなされたまるっこい船から、たくさん小さな人影が飛び出してきたのです。

「おまかせください！ 小は、大をかねる！ われら、ポメラニン、しのびの者たち！」

それはなんともちっちゃくて、かわいらしい、動物の種族の者たちでした。くりくりとした、つぶらなひとみ。まるっこい顔。きいろや茶色のかみをうしろや上でたばねていて、身長はせいぜい、四フィートもないくらいです。かれらはみな、きいろと黒のツートンカラーの、おそろいのユニフォームを着ていました（よろいではありませんせん）。同じデザインの半ズボンすがたで、ひじやひざごうには、かわでできたパットをつけております。そして半ズボンのおしりからは、小さなかわいらしいしっぽが、ぴよこんと飛び出していました。

ポメラニン、その名まえをきけば、かれらがなんの動物の種族なのか？ おわかりでしょう。そう、かれらは犬の種族。それもその名の通り、ポメラニアンの種族の者たちだったのです（どうりで見た目もかわいらしいはずです。カルモトとなぜ仲がいいのかは、ふめいです

が……)。

「われら、ポート・ベルメル船団、二千！ ベーカーランドのえん軍として、加勢いたします！」

そしてその言葉につづいて……！

「いっけえー！」

船の中からいつせいにポメラニンの大部隊が飛び出して、かれらはそのまま、黒の軍勢のそのまっただ中へとつつこんでいきました！

ごろごろ！　　ごろごろ！　　ごろごろ！　　ごろごろ！

これは！　なんとという変わった動きなのでしょう。かれらはそのまるっこいちっちゃなからだをまんまるにまるめて、そのまま地面の上をごろごろごろごろ！　すごいはやさでころがっていったのです！（なるほど、ひじやひぎこぞうにパットがついているのも、なっとくです。地面でこすれないようにするためでした。それによろいを着ていないりゆうも、これでわかりましたね。よろいを着ていちゃ、重くてごろごろ、ころがれませんもの。）

そしてかれらは黒の軍勢の者たちのそのもとへととうちやくすると……、そのまま、どつちーん！　体あたり！（まるでボールがいきおいよくぶつかったみたいに。）「ぐわっ！」黒の軍勢の者たちはそのまま四ヤードほども吹き飛ばされて、地面にたおれふします。そして、そこにすかさず。

「そーれっ！　やっちまえー！」

たおれた兵士たちのひとりひとりに、それぞれ五人ずつほども！（大きなかいぶつの兵士たちに対しては、その三ばいほどの人数で）ポメラニンのしのびの者たちがわらわらとまとわりついて、その手に持ったこんぼうやら鉄のぼうやらで、たこなぐり！　敵の兵士たちはたまらず、ノックアウト。あわを吹いて、「うーん……！」のびてしまいました（かわいいすがたのわりには、なんてえげつない戦い方なのでしょう……。かれらにかなう者はほとんどいないというのも、うなずける気がします……。ゆうがなネクタリアたちは、えらいちがい

です。ね。

今やポート・ベルメル船団の二千人のポメラニンたちの力が加わり、戦いの場にうでをふるうわれらが白き勢力の兵の数は、九千人以上！　なんとというたのもしい数なのでしよう！（じっさいの兵力はごうけい九千のえん軍を加えた、一万五百四十二というあつかいになります。が。

ちなみに、もちろん黒の軍勢の者たちのうち、はじめは戦いに加わっていなかったひかえの兵士たちも、いうまでもなく、もうとつくにこの戦いの場に加わっていました。まさかかれらも、自分たちがじっさいに戦いの場に加わるなどとは、思ってもいなかったでしょう。ね。）

ネクタリアたちや、ポメラニンたち。そしてわれらが白き勇士たち。かれらはみないちがんとなって、敵の波をつぎつぎにうち破つていきました。そのせいぎのいきおいには、黒の軍勢のおそろしいかいぶつの兵士たちでさえ、おじけづき、武器を放りすてて、逃げ出していくほどだったのです。しかしわれらが白き勢力の者たちは、もはやようしやなどはしませんでした。ぜんなる力は、さらなるぜんなる力を生む。きせきの力は、このうえなお、とどまるところを知らなかったのです。

ひゅうううう……。ひゅひゅひゅううう……。

空の上からひびいてきた、とつぜんの物音。そして、つぎのしゅんかん。

ぼーん！　ぼぼん！　ぼぼぼーん！

つぎつぎとまき起こる、ぼくはつの音！　いったいなにごとでしよう！

見ると、今このいくさの場の空いちめんをなにかの青白いたくさんの物体が、じゅうおうむじんに飛びまわっていました。もつとよく見

ると、それらはポメラニンたちと同じくらいの大きさの、動物の種族の者たちのようでした（すくなくともそのように見えました）。そしてそのなぞの者たちが空の上からつきつきに、白い、なにかまるでふわふわしたものを、下の敵たちにむかって落としつけていたので、それがさきほどのひゆうううという物音を立てて、地面にぶつかって、ぼぼん！ 大ばくはつを起こしていたというわけでした。いったいこれは？

「ぐわっ！」「な、なんだこれは？」「う、動けない……！」

ばくはつして飛びちったその白いものをその身にあびた敵の兵士たちは、みなそういつて、身をよじらせました。見れば、さきほどの白くてまるかったものが、ねばねばとした水あめみたいなじょうたいになって、敵のからだにまとわりついていたので！そして動けば動くほど、それは糸のようなものにかたちを変えて、敵のからだをぐるぐるとしぼりつけていきました（今ではすっかりあたりいちめん、この糸で手足をしばられて動けなくなった敵の兵士たちのすがたがありました。かれらはもう、なすすべもありません。まさに「手も足も出ない」じょうたいでした）。

そしてそれから……。

きいいーん……！ きいいいーん！

またしても空を切りさいてむかってくる、なにかの物音。そしてよく見てみれば、その音は空の上を飛びまわっていたあの青白い色をしたなぞの者たちが、その身を急ごうかさせて、つきつきといくさの場にとつげきしていく音だったのです！

かれらのすがた、それはなんともめずらしいものでした。白くすき通った、かがやくようなはだ。白と青でデザインされたそでのないベストのような服を着ていて、えりもとをむすぶひものさきからは、白くてまるいぼんぼんがふたつ、かざられております。おそろいの青い

半ズボンには、雲とつばさをあしらった、なにかのもんしようのようなワツペンがひとつ、くつついていました。そして手には、かれらのすがたと同じく、なんともめずらしいデザインの、青いハンマーのような武器をひとつ、かかえていたのです。

かれらは男とも女ともつかない、なんとも美しくてかわいらしい顔立ちをしていました。しかもみんなおんなじ、まだ八さいくらいの子どものように見えたのです。そしてそのいちばんのとくちょう。かれらのかみはリズヤリストールと同じく、すき通るようなかがやく青色をしていました。そしてその青がみの上からは、腰までとどくかというくらい、大きなふたつの青い色をした、うさぎの耳がたれ下がっていたのです。そしてかれらはその耳をぱたぱた動かして、空を飛んでいました！（ですがそれはただほんとうにぱたぱたと動かしているだけで、じつさいにこの耳によってからだをちゆうに浮かべているのだとはとても思えません。かれらが空を飛べるのには、なにかほかのりゆうがありそうです。）

さらに、かれらのおしりからは、ぴよこん！ まるくてかわいいうさぎのしっぽが飛び出していました（それもかみの毛と同じく、青でした）。つまりかれらは、空飛ぶうさぎの種族ということになるのです。ですけどこのアークランドにこんな空飛ぶうさぎの種族の者たちがいるなんてことは、今までだれもきいたこともありませんでした（ふつうのうさぎの種族ラビニンたちや、空飛ぶねこの種族の者たちならいましたけど）。

この世界にはまだまだ、みんなの知らない種族の者たちもたしかにそんざいしています。ですが今、目の前にあらわれたこのふしぎな種族の者たちは、その中でも飛びぬけて変わった者たちでした。いったいかれらは、なに者？ どういうりゆうがあつて、かれらはこの場にかけてくれたのでしょうか？（味方であることには、まちがいなさそうです。）

そのなぞの青うさぎの者たちは、そのまま糸にからめとられて動けなくなっている敵のただ中へと、つつこんでいきました。そして……。

がっこーん！

手にした大きな青いハンマーのような武器で、かれらは敵の兵士たちのことを、もんどどうむよう、なぐりつけたのです！（もう動けないのに！）

かれらはなぐりつけた敵の近くに、ふわん！ おり立つと、そのまますたすたとその敵のそばまで歩いていきました。そして相手のすぐ目の前に立つと、そのままむごんで、じいつ、その敵のを見つめはじめたのです（しかも顔色ひとつ変えない、む表じようのままです）。

「な、なんだ！ おまえは！」動けない敵の兵士が、そういったとたん。

がこん！

ふたたび青うさぎの者が、手にしたハンマーでその敵をいちげき！（もう動けないのに。）

「ぐわっ！」

敵の兵士はたまらずぶっ飛ばされて、地面にたおれふします。そしてその青うさぎの者は、たおれた敵のその頭のすぐ横ですたすたと歩いていくと、そのまま、ちょこん。しゃがみこんで、目の前から相手の顔を、じいつ、またしてもむ表じようのまま見つめはじめました（いったいなんなのでしようか……？）。

「や、やめろ！ なんなんだ、おまえは！」そして敵の兵士が、ふたたびそういったとたん。

がこん！

たおれている相手に、またしてもハンマーがさくれつ！（三回目です。なんだかちよつと、かわいそうな気もしてきましたね……）もう敵の兵士は、かんぜんにノックアウトです（動けない相手をようしやなくぶちのめす。かわいいすがたと顔をしているわりには、なんてえげつない戦い方なのでしよう……。そのえげつなさは、ポメラニンたち以上かもしれない……）。

そして敵の兵士が、つぎのようにいったときのことでした。

「わ、わかった……！ おれの負けだ！ もう、かんべんしてくれ

……！」

その言葉をきくと、青うさぎの者は、にこっ！ まんめんの笑顔を見せると、ふたたび耳をばたばた動かして、空の上へと消えていったのです（うくん、ほんとうに、なんだったのでしょうか？ なんだかちよつと、こわい……。」「た、助かった……。」「たおれた敵の兵士がそういって、頭を地面の上に、ぼふっ！ もたれかけさせてしまったのはいうまでもありません）。

そしてそのとき……。

「アークランドの者たちよ！ わたしもびりよくながら、力を貸すぞ！」

空の上から、よくひびくたくましい声がひびき渡りました！ みんながそちらの方を見てみますと、ひゆううう！ どこからともなくいちじんのたつまきがあらわれて、そのたつまきは見るまにぐるぐると、白いへびのようなすじとなつてからみあい、まわりはじめていききました。そしてそのたつまきの中からあらわれたのは……。

なんともふしぎ！ たくさんの白いすじがより集まって、人のすがたをかたち作っていったかと思うと……。つぎのしゅんかんにはそこに、まっ白な服を着たひとりの老人が立っていたのです！（これはなにかの魔法でしょうか？）そしてさきほどの声は、この老人がさげんだ言葉のようでした。

その老人は、ほんとうに白づくめでした。人間のおじいさんのようなすがたで、長くてさらさらしたまっ白なかみを、みつあみにしてうしろでひとつにむすんでおります（おじいさんだからかみが白いのか？ それとももともとなのか？ わかりませんが。ちなみに、かみのさきはまっ白なりボンでとめられていました）。ひよろりとした背かっこうで、その（色白の）顔はやせこけておりましたが、長くてりっぱな白いおひげのおかげで、じつにどうどうとして見えました。全身には足のさきまでとどくほどの、白いガウンをまといっております（とうぜん、はいているくつも白ですし、腰にまいているベルトも白でし

た)。そしてその（色白の）手には、長さが六フィート近くもありそうな、白くて長いつえをにぎっていました（このつえは木のように見えましたが、なにからできているのか？ ぜんぜんわかりませんでした）。

こんなかつこうでしたから、その場にいるみんなはひとめ見ただけで、すぐにわかったのです。この人はなにかしらの魔法を使う、まじゆつしであるのにちがいないと。そしてじっさい、その通りでした（そのまんまですいません。まあこんなときには、ひねりを加えてもしょうがありませんし）。

「ずいぶんとおそくなってしまったが、どうやらまにあつたようだな。かれらがほんとうに、よくやってくれたようだわい。」

とつぜん、その白づくめのおじいさんのとなりにもうひとりのおじいさんがあらわれて、いいました。こちらはたつまきではなくて、ひゆうう……、というすこしの風が吹いたかと思ったら、つぎのしゅんかんには、もうそこにあらわれていたのです。いったい、このおじいちゃんたちはなに者？（ぜつたいにただ者ではないでしょうけど。）しかし白づくめの老人の方は、みなさんはじめて見る顔でしたが、もうひとりの老人の方、それは読者のみなさんにとっても、とてもなじみのあるなつかしい顔でした。

全身うすよごれて、すりきれた衣服。茶色のくたびれたマント。肩からは大きなかわでできたかばんをひとつ、かけていて、足もとにはぺたんこのくつをはいております。そして手には、そのさきに白いすいしようのはまった、長い木のつえを持っていて……。

だれだかもう、おわかりですよね。

そう、そこにあらわれたこの老人は、まさしく世界さいこうのけんじやとうたわれる、ノラン・エルセルファス・クーシー、その人でした！

ついにノランが、この戦いの場にやってきたのです！ ノランはほんとうに、よく動いてくれました。まず、このいくさのまさきにきぼうの力となった、ネクタリアたちのえん軍。かれらを動かすために、リ

ストールをふくむリユインの者たちのことをすくい出すようにと岩のけんじやリブレストにはたらきかけてくれたのは、ノランだったのです（そしてそのノランの声にこたえて、リブレストとたくさんの仲間たちがすばらしいかつやくをしてくれたのは、みなさんもごぞんじの通りです。さらに、リストールのことを守るためにそのいのちを張ってまでつくしてくれた、レシリア、ルースアン、ハミールに、キエリフ、かれらもほんとうにすばらしいはたらきをしてくれました）。

そして新たなえん軍。木のけんじやカルモトによびかけて、木の軍勢の者たちをこの場にかけてつけさせようとしてくれたのも、ノランでした（ですが、それはしつぱい。さきにお伝えしました通り、カルモトの大きなうっかりにより、ノランはカルモトとれんらくを取ることでできずに、あてにしていたえん軍をよびよせることができませんでした。でもそのかわりに、ロビーたちがその大きなやくめを果たしてくれることとなったのです。さいしよのよていだった木の軍勢の者たちではなくて、それよりもっと、大きな勢力。ガラಂತアのポート・ベルメル船団という、強力なえん軍となったわけですが。

ちなみに、この「木の軍勢の者たち」というのは、カルモトの作り上げた木の兵士たちのことではありません。木の兵士たちはただの木からカルモトの魔法により作り上げたものですので、こうげきの魔法を使つてはならないという、いくさのルールにはんしてしまうのです（魔法で兵士を作つてそれでこうげきすることは、こうげきの魔法を使つていることになるのです）。そのかわりノランはカルモトに、はるかなむかしにさかえたという木の王国に眠る、八百名ほどにもおよぶ木の軍勢の者たちのことを、えん軍としてつれてきてほしいとたのむつもりでした。この木の軍勢の者たちは、切り分け山脈のおく深く、だれも知る者すらいないうちすてられた土地に、ひっそりと眠りつづけている者たちでした。この木の軍勢の者たちは、いちど目ざめさせると三日ほどでそのかつどうを終え、もとの山の中にみずから帰っていつてしまいます。そしてふたたび、百年の眠りについでてしまいました（よく眠りますね！）。その木の軍勢の助けをかりることができるのは、木のけんじやである、カルモトだけだったとい

うわけなのです)。

ノランはただ、かれらのことをせつついたただけかもしれません。しかし人の力というものは、みんなの力なのです(それが人のほんとうの強さなのだ、ロビーもいつていましたね)。ノランの力は、みんなのことを動かす力。そしてみんなの力はまた、ノランのことを動かす力となるのです(ノランがほんとうに力あるけんじやといわれているのには、そういうりゆうがありました。たくさんの人を、かりることができる。こんなにもたのしいことはありません。ノランには、そのいだいなる力があるのです)。

そしてノランはここにきて、さいごにもうひとつのえん軍をよびよせてくれました。

わたしはいぜんから、みなさんにお伝えしていました。このアーケランドにはノランがいにも、三人の力強いけんじやたちがいると。ひとりには木のけんじや、カルモト。もうひとりは岩のけんじや、リブレスト。そして……、ここまできたら、もうおわかりでしょう。ノランのつれてきた、えん軍。それはまさに、三人目のそのさいごのけんじやのもとにつどいし、けんじやの力のえん軍だったのです！

お待たせいたしました。ついに、そのすがたがあきらかに！

さいごのけんじやの名まえは、ランスロイ。空のけんじやとよばれている、力強い白のけんじやでした。そしてそのランスロイこそが、今ノランとともにこのいくさの場にあらわれた、さきほどの白づくめのおじいさんだったのです！(思えば、とうじょうのしかたもやっばりすごかったですよね！)

空のけんじやランスロイ、それは木のけんじやカルモトや岩のけんじやリブレストよりも、さらに伝説的なまでのそんざいでした。みんながその名まえを知っていましたが、じつさいにそのすがたを見たという者は、ほとんどといていくらいにいなかったのです(全身白

ずくめの衣服を着ているといううわさがありましたので、白のけんじやともよばれていたのです。そしてそのうわさはほんとうでしたね）。

それもそのはず、ランスロイはみんなの目のとどくようなところには、まったくいませんでしたから。つまり巨大な木の中の家や山おくのどうくつなど、どこかにかくれ住んでいるのなら、まだ見つからないこともありませんか（かなりのくろうは必要でしょうけど）。しかしランスロイは、そんなところにさえもいなかったのです。それはつまり、足で歩いては見つけることができないということでした。すくなくとも、つばさを持っていたり、空を飛ぶ魔法が使えたりしなくては。

そう、ランスロイは空の上に住んでいたのです！ それも一年中あつくたれこめた、まっ白な雲の中に。これではいくらさがそうとしたり、見つかるはずありません。ランスロイは人の世界から遠くはなれたその空の上で、長い長いけんきゆうせいかつを送っていました（まさに雲の上の人ですね）。

そのランスロイのえん軍、じつはそれこそが、さきほどからこの空の上をばたばた耳で飛びまわっている（そして動けなくなった敵をぶちのめしまわっている）、あの青いうさぎの者たちだったのです。

あのうさぎの者たちは、じつははつきりとした生きものたちではありませんでした。見た目はうさぎの種族の者のようでしたが、ほんとうは雲と風のエネルギーで作られている、いわば精霊のようなそんざいだったのです（ですから空を飛べるのも、なっとくでした。かれらは精霊のようなしんぴ的なエネルギーによつて、空を飛んでいたのです。やっぱり耳で飛んでいたわけじゃなかったんですね）。ランスロイは空の上高くに飛びまわっていたかれらのことを見つけ、かれらと意志のそつうをはかることにせいでうさぎになりました。そう、かれらはランスロイが作った魔法的な生きものというわけではなくて、もともとこのアー克蘭ドの空の上に住んでいた者たちだったのです（そしてかれらはランスロイがかれらのことを見つけたそのときから、もともとうさぎのすがたをしていたのです。まったくもって、じつになぞの者

たちです)。かれらは言葉を話すことはありませんでしたが、ランスロイは魔法の力をもって、かれらと会話をすることができました。そしていつしかランスロイのまわりには、数えきれないほどの青うさぎの者たちが、集まるようになったのです(すっかりなつかれてしまいましたね)。

かれらは(かれらの言葉でいいあらわすのなら)レビラビという者たちで、はるかなむかしから、このアークランドの空の上に住んでいるのだということでした。かれらは食べることも眠ることもできません。雲と風のエネルギーをその身に受けて、暮らしていくことができたのです。そしてかれらは自分たちのすがたを、好きなように変えることができるのだということでした。ちがうデザインの服にしてみたり、ちがうかみがたにしてみたり(ずいぶんとべんりですね。そしてあのハンマーのような武器も、じつはかれらがそのからだの一部のかたちを変えて、作り出したものだったのです)。ふだんは空飛ぶうさぎのすがたをしておりましたが、それをいつまでつづけるのかはわからないそうでした(かれらはだれかひとりが気まぐれでそのすがたを変える、みんないつせいに同じすがたに変わっていくのです。ちよつと前までは、空をおよぎまわるイルカのすがただったということですが、それもまたおもしろいですね。そしてしばらくたつてそのすがたにあきる(?)と、またもとのうさぎのすがたにもどるのだそうでした。きほんはうさぎというところは、変わらないみたいです)。そのレビラビという者たちが、今ランスロイ(とノラン)のよびかけにこたえて、このいくさの場にかけてくれました。そしてレビラビたちはぼんやりとして深く考えていないようにも見えますが、この世界をあいすることにかけては、だれよりも強い思いを持っていたのです。かれらのもくてきはただひとつ、このアークランド世界のへいわを守ること。ランスロイはレビラビたちに、ひとつだけいつてきかせました。「必要以上に戦ってはならんぞ。相手がこうさんすれば、それでよいのだからな。」そしてレビラビたちは、その「いつけ」をじつにすなおに守ったのです。つまり……、相手がこうさんするまですずつとなぐりつづける必要があるのだと思って、その通

りに行動しました！（ようするに相手がこうさんするまでのあいだの戦いが「必要な戦い」なのだ、レビラビたちは受け取りました。じつにすなおというか、なんとというか……）あのなんともおかしな（そしてあげつなくてちよつとこわい）戦い方は、そういうわけからだっただです（そして、なるほど、相手が「おれの負けだ」といったとたん、につこり笑って、戦うのをやめましたよね。あれもランスロイのそのいいつけを、しっかり守っていたというわけです。ほんとうにすなおです。

ちなみに、はじめに敵に投げつけていたあの白くてふわふわしたまるいものは、自身の持つ雲のエネルギーを切り取った、ばくだんのよなものでした。レビラビたちはこの雲のエネルギーを使って、敵をこうげきすることもできたのです。これはレビラビたちの持つ自分ほんらいのうりよくでしたので、いくさで使うことができました。おそろしいハンマーのこうげきよりは、こっちの方がましですね。

「われら、ランスロイ空軍、千八百！ およばずながら、ベーカーランドのえん軍として、加勢つかまつる！」

ランスロイのたくましい声がひび渡りました（ひよろりとしたからだのわりには、いい声です。ちなみに、レビラビたちのズボンについている雲とつばさのもんしよは、ランスロイの使っている空のもんしよでした。ランスロイがレビラビたちに「われらの軍のあかしとして、このもんしよをつけるといい。」という、レビラビのひとりがさつそく自分のからだのデザインを作り変えて、そのもんしよと同じデザインのワツペンを、ズボンの上に作り上げたのです。そしてひとりそれぞれを作ったら、みんなが自分のズボンに、おんなじワツペンを作っていきました）。

さあ、これでいよいよ、戦いの場につどいしわれらが白き勢力の兵の数は、一人をこえたのです！（ついに一人の大家をとつばです！）ワツトの黒の軍勢がいかに兵士たちをかき集めたとはいえ、いかにおそろしい力を持ったかいつの兵士たちをそろえたとはいえ、このぜんなる力の前には、とうていおよぶものではありませんでした。ときここにきて、戦いの場に立ちつくす黒の軍勢のかれらが思い知っ

たこと。それはただひとつ、「かなわない」、それだけだったのです。

黒の軍勢の者たちは、今やその数を三ぶんの一以下にまでへらしていました（もとが六千人でしたから、つまり二千人を下まわっているということでした）。ですがわれらが白き勢力、よりつどつたぜんなる力の者たちは、なお力強く、その悪しきやみの軍勢に立ちむかつていったのです。

数の力を失った、ワットの黒の軍勢。そうなったかれらほど、もろいものはありませんでした。もともと黒の軍勢というのは、あつとう的なまでの数の差、武力の差によって、相手を痛めつけるという者たちなのです。それができなくなった今、かれらはまとまりの取れない、ただのごちやごちやとした集まりの者たちにすぎなくなっています（かれらはきちんとしたいくさのくんれんなども、ほとんど受けていませんでしたから）。ですからかれらはしきかんたちのいうこともきかず、ひええ！ われさきにと、いくさの場のうしろへ逃げつけていったのです。

ベゼロインまでもどるんだ！　そこでもういちど、体勢をととのえてやればいい！

黒の軍勢の者たちは、みなそう思っていました。しかしかれらはそこで、またしても、つづくぜんなる力のはんげきを思い知ることになったのです。

「ベゼロインだ！」

追っ手からのがれ、ベゼロインまでたどりついた、黒の軍勢の者たち。かれらがそういつて、ほっと胸をなでおろした、まさにそのときのこと。かれらはそこで、思わぬものを目にしました。

「な、なんだ……？　あれは？」

黒の軍勢の者たちが目にしたものの、それはとりでの上をうめつくさんばかりにじん取っている、敵の兵士たちのすがただったのです！　そして見たこともないようななにか巨大な岩のようなかいぶつたち

が、そのあいだに立ちつくしていました！（もはやいうまでもありませんよね。これらの者たちはもちろん、けんじやリブレストのひきいるリュインの二百名の勇士たちと、岩のロボットたちなのです！）

「ど、どういうことだ！ ベゼロインは今、魔女の三姉妹たちが守っているはずだぞ！ 敵の手に渡るなんてことが！」

黒の軍勢の者たちはみなどても信じられないといった顔をして、ただただあわてふためくばかりでした。そしてそんなかれらのことをむかえうつかたちで、ベゼロインの上のわれらが仲間たちがさげんなのです。

「われら、せいぎのため！ アークランドの白き勢力！」

その言葉につづいて、かれらのうしろからあらわれたのは……。

な、なんと！ これは！

それは目をうたがってしまいそうなくらいの、なんともおどろくべき光景でした。そこからあらわれたのは……、たくさんのウルファの者たち！ しかもただのウルファではありません。黒いかみ、黒いしっぽ……。

そう、あらわれたのはワットにとらえられ、やみにとらわれてしまっていたはずの、レドンホールの黒のウルファの者たちだったのです！

さあ、たいへんなことになってきました。今やベゼロインとりの上は、リュインの人間の兵士たちとはい色ウルファの兵士たち、そしてレドンホールの黒のウルファの兵士たちによって、すっかりうめつくされていたのです！（黒のウルファの人数は、全部で八百人ほどいました！）それにしても、いったいどうして、とらわれの黒ウルファの者たちがここにいますのでしょうか？

「どつやら、あてがはずれたようだのお。」

一体の岩のロボットの頭の上からそういったのは、もちろんリブレ

ストでした。あわてふためいている黒の軍勢の者たちに対して、そう
いったのです(ちなみに、あの五身がったいのきゆうきよくロボは、今
ではもとの五体のロボットたちにもどっていたのです。ここでの戦
いではロボットの数がすべてそろっている方が、つごうがいいからで
した。ちよつともつたいたいような気もしますけど、もう魔法のこう
げきを受けることもありませんからね)。

「われら、岩のリブレストひきいる、べつどう隊、二百四名！」リブ
レストが、見下ろす敵たちにむかつていい放ちました(岩のロボット
たちについてはいわゆる「工作物」あつかいになりますので、兵の数
には加えられませんでした。でもじつさい、おそろしい兵力ですけど
ね……)。

「そして、われら、レドンホールの黒のウルファ、八百二十七名！
義により、ベーカーランドの白き勢力にすけだちいたす！」

そういって、かれらはその手に持った大きな剣をかまえ……、いえ、
ちがいました。かれらがかまえたのは、剣ではなかったのです。かれ
らが持っていたのは……。

なんともおかしなかたちをした、岩でできた「つつ」のようなもの
でした。長さは四フィートくらい。つつのさきっぽにはなにか口
ケットみたいなかたちをしたものがひとつ、取りつけられておりま
す。手にぎる部分はどうたいから下にのびていて、それをにぎった
うえで、全体を肩にかつぐようなかたちでかまえました(なんだかど
こかで見たような気が……)。

「もくひょう、よーし！ ねらえい！」

じゃきん！ じゃきじゃき、じゃきーん！

リブレストのかけ声にあわせ、黒のウルファもリユインの者たち
も、さらには、ぎゅいん！ ぐいん！ 岩のロボットたちまでも
が、いつせいに、そのつつのようなものやロボットのうでを、黒の軍
勢の者たちにむけてかまえました！ それから……。

うのうされていたのです。カバーをばかっ！ とあけると、その中にはなん百という岩の武器がかくされていました。いろいろひみつがあるんですね！）。

「がっはっはっは！ 逃げろ逃げろ、がきんちよどもが！ このリブレストと仲間たちがいるかぎり、このとりでは、いっぽも近づけませんぞい！」リブレストが、ごうかいに笑いながらいました。

今や黒の軍勢には、うしろに下がって力をととのえるための、そのささえとなる場所すらもまったく残されてはいなかったのです。それはほんとうに、リブレストとその仲間たちのおかげでした。その仲間たちに新たに加わった、黒のウルファの者たち。それではこのあたりで、かれらがどのようなにしてこのリブレストべつどう隊に加わったのか？ そのわけをご説明することにしましょう。

魔女の三姉妹のことをしりぞけ、ベゼロインとりでをうばいかえすことにせいこうした、われらが仲間たち。それからリブレストをふくむ五人の者たちが、うしろにひかえている仲間たちのことをとりでによびよせようと、むかえにいったときのこと。かれらはそこで、思わぬものを目にしたのです。それは南の山の方からあらわれた、たくさんの黒いすがたの者たちでした。ワットの者たちか！ とつきにかかれらは身がまえました、すぐにそうではないということが知れました。頭の上につき出た、ふたつの耳。おしりから生えた、大きなしっぽ。そして、その黒い毛の色……。そうです、その者たちこそが、かれらレドンホールの黒のウルファの者たちでした！ でもやみにとらわれているのかれらが、どうやって自由の身になれたのでしょうか？ そのこたえはひとつ、青き宝玉の力でした。

ときここにきて、おさえつけられていた光の力をいつきにはき出すかたちとなった青き宝玉は、黒ウルファのかれらの中にふきこまれていたそのおそろしいやみの力ですら、うち消したのです。その強大な力は、たとえエリル・シャンディーンの王城からなんマイルとはなれていたとしても、ひびき渡りました（さすがにワットやレドンホール、怒りの山脈の中までには、その力とはどきませんでした）。そして、

ベゼロインとりでからほど近い、南東の山がく地。そこに、ワットの
かりのちゆうとん地があつたのです。そこはいくさに必要な品物や
兵士たちのことを一時的に集めておくための場所で、ベゼロインにせ
めいるさいに、ワットの者たちが使つていたところでした。黒のウル
ファの者たちは、まさにその場所にいたのです。ベゼロインをせめ落
としたあと、ワットの者たちはもはや戦いには使いものにならなく
なつた黒ウルファたちのことを、この場所におしこめるようにしてお
いておきました。それも、とりでをせめるときに使つてもう用済みと
なつた、たくさんの黒鳥や、こわれた武器などといっしよに。そう、黒
のウルファの者たちは、まるつきりがらくたのようなあつかいを受け
て、ここにおしこめられていたのです（なんとというひどいあつかいな
のでしよう！ 今までさんざん、いいように使つておいて！）。
そして宝玉の光がひらめいた、そのしゅんかん。

「……な、なんだ？ こころはどこだ？」

青き宝玉のそのせいなる光の力を受けて、黒ウルファの者たちのこ
とをおおっていたやみは、消え去りました。そしてかれらはたちま
ち、ほんらいの自分を取りもどしたのです。

「どうしてわれらは、こんなところにいる！」

見張りのワットの兵士たちがかけつけたときには、もうかれらはお
しこめられていたそのたてものどびらをぶち破つて、そとに飛び出
していくところでした。そして、あわれ見張りの兵士たちは、黒ウル
ファたちのせいぎと怒りのてっけんを受けて、ノックアウト！ 黒ウ
ルフアたちはそのままちゆうとん地の中をあばれにあばれ、そして今
までのことのすべて、さらには西のエリル・シヤンデーインの地でさ
いごの大けっせんがおこなわれているということなどを知ると（それ
らはもちろん、つかまえた敵の兵士たちからきき出したのです。こぶ
しでもつて）、いてもたつてもいられず、武器をうばつて、西の地へと

むかってしんげきしていったというわけでした。その黒ウルフアの者たちが、われらがリブレストベつどう隊の者たちに出会ったというわけなのです。

そしてもうひとつ、忘れてはならない仲間たちのそんざいがありません。それは……、そう、ベゼロインでの戦いで黒ウルフアたちの持っていたやみの剣で切られ、やみの力にとらわれてしまった、白き勇士たちのことでした。かれらは今、エリル・シャンディーンの王城でふたたびもとの自分を取りもどす、そのときを待っていたのです。そしてまさに今、そのときをむかえることになりました。

「かれらが、かいほうされた！ やみの力は、はらわれた！ 宝玉のおかげだ！」

かれらのせわをしていたお城の者たちは、みな口ぐちにさげびました。青き宝玉はベゼロインでの戦いでたおれたかれらたくさん仲間たちのことをも、また、その悪しきやみのじゅばくからとき放ったのです。正気を取りもどしたかれらは、もちろん、もういてもたってもいられません。ワットの黒の軍勢に対する怒りが、めらめらとあふれかえってきました。

「われらも戦うぞ！ ワットのおうぼうを、ゆるしてはおけぬ！」
「おおーっ！」

そうしてかれらはいくさのしたくもそこそこに、剣をひつつかむと、それぞれの騎馬たちにまたがって、いくさの場にむかって飛び出していったのです。兵力、六百五十八。さらなるせいぎの力のとうじょうでした。

そして、ちようどそんなときのこと……。

みなさんは、あとひとり、敵の大物が残っているということをおぼえていますでしょうか？ それは魔界の王ギルハッドとその手下の

軍勢のことを、この戦いの地によびよせたちようほんにん。そう、やみのけんじやガノンです（そういえば、いましたね！ すっかり忘れて……、いや、ええと、とにかく、かれがまだ残っていたのです）。ガノンもまた、おそろしい力を持ったまじゆつしでした。ですがまじゆつしは戦ってはならないという、いくさのルールがあります。ですからガノンは自分でよびよせた悪魔の軍勢の者たちに戦いをまかせ、自分は大高い丘の上にじんどって、戦いのようすをじつと見守っていたというわけでした（見守つてというより、高見のけんぶつといった感じでしたけど。取りまきのふたりの美女たちにうちわでぱたぱたあおがせて、自分はパラソルのかかったいすにふんぞりかえり、ジュースを飲んでいたので。そのすがたはまったくの、わがままなおぼっちゃんといった感じでした。いかにもガノンらしい）。

「お、おい……、いったい、どうなってるんだ！」

白き勢力のえん軍たちがどんどんとあらわれて、戦いのようすがすっかり変わってしまったと、ガノンはいすから飛び上がってあわてふためきました。ギルハッドがやぶれたときも、「あのやろう、あつさり負けやがった！ 使えないやつだな、まったく！」とどくづいていただけでしたが、ときここにきて、ガノンはほんとうにあわてていたのです。

まさか、ワットの黒の軍勢が負けるなんてことが……。そんなことになったら、おれのハーレムはいかくなるんだ！ 話がちがうぞ！（やつぱりガノンは、ワットとそんなやくそくをしていたんですね、まったく……。え？ ハーレムってなに？ ですって？ よい子のみんなは知らなくていいです！）

「おのれー！ こうなったら、おれさまの魔法で、じきじきに、ベーカーランドのれんちゆうをやっつけてやる！」

これはルールいはんです！ まじゆつしは、いくさで戦つてはいけないのですから！ でもガノンはもう、やけっぱちでした。どうしても、自分の（ハーレムの）やくそくをワットに守らせる。そのためにはルールいはんだらうがなんだらうが、そんなものはおかまいなしだったのです（ほんとうにひきょうなやつです！）。

「見てろよー！ おれさまのこのさい強のつえで、ベーカーランドのれんちゆうを、ぎったんぎったんの、ぼったんぼったんの、けちよんけちよんにして……」
そのとき。

ぼふん！

「……えっ」

ガノンの持つそのつえのさきつぽから、黒いけむりが上がりました。そしてつえはそのまま、ぷすぷすというかわいた音を立てるだけの、ただのがらくたになってしまったのです！

「な、なにー！ ちよつと！ これ、どうなつてんの！ いなずまよ、出る！ で、出ないよー！ そんなあー！」

宝玉の力はガノンのそのやみの力をも、はらいのけたのです。つえはもう、使いものになりませんでした。そしてガノンほんにんもたよりにきつていたそのやみの力を失い、もはやただのひとりの、わがままなおぼっちゃんになってしまったのです（ガノンの魔法はすべて、やみの力によるものでした。ですからやみの力を失った今、ガノンはまったく、魔法を使うことができなくなっていました。しかもうばい取られたやみの力は、同時に、ガノンのまじゆつしとしてのそのもともとのししつの部分すらうばい去ってしまいました。もはやガノンがこんご、魔法を使うことはもうむりでしょう。いくら魔法のべんきようをしたとしても、魔法を使うためのそのもともとの根っこの部分まで失われてしまっているのなら、どうにもなりませんでしたから。

ちなみに、ほんとうのガノンはもうなん百さいというねんれいで、魔法の力によって今の少年のすがたをうつつしていましたが、ガノンは魔法のくすりによってそのすがたをたもっていました。そしてそのくすりのききめはやみの力にかんけいなく、なん百年とずっとつづくものでしたので、ガノンのすがたはそのまま、変わることはなかったのです。ふこう中のさいわいというやつでしょうか？。

このようなわけで、ガノンはそのから、このアークランドのためにせつせとその身をつくしてはたらくことになりました。もうだれも、かれのわがままをきいてくれる者はいないのですから。これですこしは、いいせいかくになつてくれるといいいんですけどね。

「ぜつたい、リベンジしてやるー！」大きな豆ぶくろをかついだガノンが、空にむかつてさげびました。

「ごらー！ さつさとはごばんか！ 新入り！」

「はいっ！」

新しいせいかつ（にもつはごびのアルバイト）、がんばつてくださ
い、ガノンくん！（友だち作れよ！）

（さいごの敵もかたづいて、これですべてがいつけんらくちやく。）
こうして、このアークランドの運命をかけたさいごの戦いは、終わりのときをむかえたのです。

そのけつまつは……？

ベーカーランドひきいる、白き勢力の大しようり！ 黒の軍勢の者
たちはみな剣をすてて、かぶとをぬいで、口ぐちにさげびました。

「負けだ負けだ！ もう、ゆるしてくれー！」

いくさの場にはじめから、ずっと立ちつづけている者たち。ベルグ
エルムもフェリアルも、ぼろぼろになった剣をずっとにぎりしめなが
ら、今なおこの場に立ちつづけていました。そしてかれらの心の中は
……、もはや言葉でいいあらわすことなんて、とてもできっこないで
しょう。

いまだかつてなかったほどの、さいあくのぜつぼう。そのぜつぼう
のふちから、かれらはもどつてきたのです。のぞみを信じつづけた、
かれらの心、そしてたくさんの、アークランドのきぼうのたみたちの
力によって……。

「た、隊長……」フェリアルがなみだをぽろぽろこぼして、ベルグエ

ルムにいいました。しかしベルグエルムはそんなフェリアルルの肩にそつと手をおいて、やさしくほほ笑んでいうばかりだったのです。

「なにもいうな。よくやった。われらはほんとうに、よくやったのだ。今はただ、すべての仲間たちにかんしゃしよう。」

ベルグエルムとフェリアルは、そういつてかたくださいあいました。それ以上のことは、もう必要ありませんでした。

勇者たちの戦いは、こうしてここに、まくをおろしたのです。

ほんとうに、長い長い道のりでした。ここまでみんなといっしょに旅をつづけてきてくれた読者のみなさんに、わたしは心から、おれいをいいたいと思います。

ついにわたしは、この物語のさいごの場面を書くときをむかえたのです。この物語を書くにあたって、わたしはさまざまな場所をめぐり、さまざまな人たちに出会ってきました。時間にして、まるまる三年のさいげつ。その中のひとつひとつの出会いが、わたしに大きな力と、勇気を与えてくれたのです。それらのたくさんの出会いがなかったのなら、わたしは今こうして、ペンをとっていることはなかったでしょう。この物語は、みなさんの物語。みんなの力をあわせることによって生まれた、みんなの物語なのです（主人公がロビーであることに、ちがいはないんですけどね）。

さいごにあたって、みなさんにこうしておわかれのあいさつをのべるきかいを与えてくださったことを、かんしゃいたします。ほんとうにありがとうございます。このごあいさつは、この物語のげんこうをすつかり書き終えたあとに、つけたしたものです。やはり、ともに多くの時間をすごしてくださったみなさんに、ひとことおれいをいつておきたかったものですから。

ですがもう、わたしはいかなくてはなりません。わたしの住む世界へのとびらが、じきにしまってしまいますから。

さいごのさいごに、わたしの名まえをみなさんにお伝えしておきた

いと思います。わたしの名まえは、ゼルダ・エルリツチ。みなさんの住む世界とは、べつの時間、べつの世界に住んでいる、きろく物語作家です。このアーランドでのけいけんは、わたしにとって、ほんとうに意義の深いものとなりました。わたしはぜひまた、この世界にもどってきたいと思っています。

では、みなさん。いつまでもおげんきで。またいつの日か、お会いできるといいですね！

「父さん！ ソシー！」

今やがらがらとくずれ落ちてゆく、アーザスの城……。そのただ中、かつてアーザスのよこしまなる赤いキューブのあつたぶきみな大広間の中で、ロビーはさげびました。

アーザスがうちたおされてからというもの、アーザスのやみの魔法の力によってたもたれていたこの城のかべやはしらなどが、つぎつぎとくずれ落ちていったのです。てんじょうから、くずれた石のはへんがばらばらとこぼれ落ちてきました。その中でロビーは、たおれている自分のじつのお父さん、ムンドベルクにむかって、かけよっていったのです（これはムンドベルクがいちばん、ロビーに近い場所にいたからでした。ソシーの方が近ければ、ロビーはまず、ソシーのもとへむかったでしょう）。

ムンドベルクの手を取り、そのからだをだき起こすロビー。ムンドベルクは赤いキューブのエネルギーにうたれて、もはや息もたえだえのじょうたいでした。

「父さん！」

ロビーがもういちど、父のことをよびました。そしてムンドベルクは荒い息をしながら、ようやくのことで、ロビーのそのよびかけにこたえたのです。

「ロ、ロビー……」

ムンドベルクはゆっくりとそのひとみをひらいて、わが子であるロビーのこを見つめました。ついに、運命によって分けられていた親

子が、ひとつのところにもどったのです。ムンドベルクのことをしはいしていたアーザスのやみの力は、もはや消え去っていました。アーザスがやぶれたときに、いっしょにその力も消えていったのです。しかしムンドベルクのからだをむしぼんでいたものは、それだけではありませんでした。ロビーに剣をたくすため、ムンドベルクはみずから、影の世界の者となってしまいましたから。

(この影の世界というのは、アーザスのふういんされていたやみの世界とほとんど同じものでした。アーザスから剣を守るため、ふつかつしたアーザスが剣を取り出すことのできないように、この剣はこの影の世界の中へとふういんされたのです。いかにアーザスとて、ふつかつしたばかりで力の弱いじょうたいでは剣のふういんを破ることはできませんでしたし、かといってムンドベルクのように影の世界の者になってしまえば、まだ力の弱いアーザスはそのまま影の力に食いつくされ、もとの自分にもどることもできず、いずれはムンドベルクがそうなったように、ぬげがらのようなじょうたいになってしまうことでしょう。アーザスはそのことをよく知っておりだったので、ふういんされていた剣の前にさいしよにあらわれたとき、デルンエルムに「もう一回、やみの世界にもどるのも、ぜったいいやだしね。」といったのです。これは影の世界の者となって剣を取り出そうとすれば、自分もふたたび、ふういんされていたやみの世界と同じような世界にひきもどされてしまうということを、知っていたからの言葉でした。ちなみに、アーザスは「やみの世界」といいましたが、アーザスにとつてはやみの世界も影の世界も、どちらも同じようなものでしたから。) その影の力はアーザスがやぶれた今なお、ムンドベルクのからだを深くむしぼんでいました。みずからの意志をようやく取りもどしたというのに、ようやくわが子にさいかいすることができたというのに、もはやムンドベルクのからだはその影の力の前に、今にもかき消えそうな、はかないそんざいとなくなってしまっていたのです。じつにぎんこくなことですが、これはムンドベルクがロビーの思いを受けて、ふたたびみずからの意志を影のしはいの中から、よび起こすことができたからのことでした。ぬげがらのようなじょうたいになっていた

からだにふたたび意志をよびもどしたことによって、こんどは肉体を持ったからだそのものが、そのからだから分かれてかき消えていった影のすがたに、取ってかわってしまったのです……。しかもその影のすがたさえも、今ものすごい早さで、やみの中に消えてしまおうとしていました。影の者となったからだにもういちど自分の意志をよびもどすということは、それほどに、その肉体にふたんをかけることだったのです。

そのからだはほんとうに影のように、あたりの景色の中にとけこんでしまっていました。かかえるロビーの手には、もはや、あたたかいぬくもりは感じられませんでした。

「父さん……」

ロビーはふるえる両手で、父のことをしつかりとかかえています。しかしその父のからだは、もう空気のように、かるいものになっってしまったのです。そのからだですがすぐにでも消えてしまいそうだとこのこと、あかしでした。

「ロビー、大きくなったな……」ムンドベルクがそういって、静かにほほ笑みました。その目はロビーのことを、しつかりと見すえておられます。しかしムンドベルクの目には、もうほとんどロビーのすがたはうつってはいませんでした。さいごのときがやってきたのです。

「ぼくのことを、守ってくれたんですね……。ありがとう……」ロビーはそういって、父のその手をぎゅつとにぎりしめました。ロビーの目からはほろほろと、なみだがこぼれ落ちていました。

「ロビー……」ムンドベルクがその手をよろよろと起こして、ロビーの肩におきました。「ほんとうに、すまなかった……。おまえのことを、ひとりぼっちにしまって……」

しかしロビーは、首を大きく横にふって、いったのです。

「そんなことは、いいんです。ぼくのそばには、いっただって、たいせつな人たちがいるんだっていうことに、もう気づけたんだから。父さん、あなたがいつも、ぼくのことを、見守ってくれていたのだということも。」

ムンドベルクはひとみをとじて、あふれるなみだをこらえようとし

ました。しかしそれは、かないませんでした。ムンドベルクのそのひとみから、大つぶのなみだがぼろぼろとこぼれ落ちていきました。

「ロビー……、いや、ロビーベルクよ……」ムンドベルクがもういちどひとみをひらいて、いいました。「おまえはもう、ほこり高き、いちにんまえの、レドンホールのウルファだ……」

「ここにおまえに、わが代々のラインハットの姓をさずける……。ロビーベルク・アルエンス・ラインハットよ……。おまえは、われらがほこり高き、レドンホールのため。そしておまえは、これからのレドンホールのことをなう、みちびき手となるのだ……」

ここに、ロビーのちかいは果たされたのです。ロビーベルク・アルエンス・ラインハット。それがロビーの、ほんとうの名まえでした。

そしてロビーが受けついだものは、それだけではなかったのです。ロビーはレドンホールの新しいみちびき手として、これからのくのにみらいを作っていくなくてはならないのですから（なにせロビーは、王子さま、レドンホールのしどう者なのですから）。

しかしそれはロビーにとって、とてもほこり高く、めいよなことでした。ロビーは今、いちばんだいいじなものをすでに手にしていたのです。それは仲間、たいせつな人たち、そして、人と人とのつながり、そこから生まれる力。その力があるかぎり、ロビーはもうだいじょうぶです。レドンホールのみらいもだいじょうぶです。アーザスによってほろぼされた？ そんなもの、けちらしてやればいいんです！ こわされたらもういちど、つくりなおせばいいんです！ たくさんの人たちの新しい力を得て、前よりももっと、すばらしいくにに。

みらいとは、そうやって作り上げられていくものなのですから……。

ロビーはしぜんと、ウルファの敬礼のしぐさを取っていました。ムンドベルクの目には、もはやそのすがたもほとんどうつてはいませ

んでしたが、ムンドベルクにはそれで、じゆうぶんでした。みらいへとつなぐ、そのきぼうを、光そのものを、さいごのこのときに得ることができましたから。

「レドゥンホールのみらいを、たのむぞ……」

そして、ムンドベルクがそういって、そのひとみをとじていったときのこと……。

ふおおおん！ ばあーっ！

とつぜん、ロビーの横におかれていた剣が、強く光り出しました！その光は今までのような、青と白の光ではありませんでした。なんともあたたかく、やわらかな、こがね色の光だったのです。その光はこの広間全体を、つつみこんでいきました。そしてロビーはそこで、なんともおどろきの光景を目にしたのです。

剣から飛び出したそのこがね色の光が、たおれているムンドベルク、そしてソシーのことを、つつみこみはじめたではありませんか！ロビーはびっくりして、うでの中の父のことを見ました。こがね色の光はほんのりとしたねつを、ムンドベルクのからだにやどらせております。そしてさらに、おどろきのできごとが。

さきほどまで空気のようにかるく、今にも消えてしまいそうなくらいに弱々しかったムンドベルクのからだに、はつきりとした力もどっていきました！（これはまさにきせきでした。影の世界の者となり、影のそんざいとなった者が、もとにもどったことなんて、今までのれきしの中でただのいちどだつてなかつたことなのです。影の世界の者となるということは、やみの力にとらわれるということよりも、もつともつと重いことでした。それは今までの自分がまるつきりべつものになってしまふということと、同じことだったので。その影の世界の者となったムンドベルクのからだは、今かくじつにもとのすがたを取りもどそうとしていましたから、これはもうきせきというほかありません。それが今げんじつに、目の前で起こっていました！）

ムンドベルクのからだに、もとの通りのしっかりとした重さもどっていきます。その顔からはつめたい影の世界の色は消え、かわりにほんらいの人としての、あたたかなはだかもどっていきました。ロビーはもう、びっくりするばかりでした。そして広間のむこうでは、同じことがソシーのからだにも起こっていたのです。そしてそちらのできごとの方が、ロビーにとってはもっと、おどろきのできごとでした。

アーザスのわなにより、半分のからだとなってしまったソシー。そのソシーのからだだががね色の光につつまれて、どんどんと、もとの人のかたちへともどっていったのです！ しかも、ただ人のかたちになったのではありません。なんとなんと、ソシーは人形ではなく、いのちあるからだを持った「人」そのものにすがたを変えていきました！ええーっ！

今やそこにたおれているのは、ほんとうにひとりの少女でした。かみも顔もお洋服も、すべてもとのソシーのまんまです。ただひとつ今までとちがうところは、ソシーがほんとうに、生きた人のからだになっっているというところでした。

そのとき……！

「ロビーベルク。あなたはほんとうに、よくやってくれました。」

ロビーの頭の中に、いぜんソシーと出会ったトンネルの中でもきいた、あのふしぎな声が、ふたたびきこえてきたのです！ それはなんともあたたかい、すき通るような美しい声でした。

とつぜんすることに、ロビーはきよろきよろとあたりを見まわしました。しかしこの場には、そんな声のもととなるようなものは、どこにもありません。この声はほんとうに、ロビーの頭の中だけにひびいていたのです。

「あなたはだれ？ どこにいるんですか？」ロビーが声に出してたずねました。ですがなぞの声はそのまま静かに、ロビーの頭の中にひびいてくるばかりだったのです。

「わたしは、ライブラ。このアークランド世界の女神です。」

ライブラ！　なんと、この声のぬしはこのアークランドの守り手たるふたりの女神たち、リーナロッドとライブラのうちの、そのライブラそのものでした！（今ロビーはこの世界の女神さまと、ちよくせつ話しをしていました！　なんてすごいことなのでしょう！）

「ほんとうにとくべつな力のもとに、わたしは今、あなたと話しをしています。ですが、この声があなたにとどくことは、もうこれできいことになるでしょう。わたしたちの力が、このアークランド世界にちよくせつとどくことは、ないのです。この世界は、あなたたちのもの。われらがその手をじかに貸すことは、もうできないのですから。」

女神の力、それは宝玉や剣といったすばらしき魔法の品々の中に、たしかにそんざいしているものでした。ですがライブラの言葉の通り、女神がちよくせつこの世界に手をほどこすことは、ふかのうだったのです。女神のその手は、この世界がつくられてさいしよの住人たちの手に渡されたときに、すでにこの世界のもとをはなれていました。世界をつくつていくのはその世界に住む住人たちなのであって、女神ではないのです。それが、すべての世界のおきてでした。今女神ライブラが自身の住むそのとくべつな世界からロビーに話しかけることができているのは、ライブラのいう通り、ほんとうにとくべつな力によるものだったのです。その力とは、剣とロビーのつながり、そのものとよべるものでした。そのロビーのきゆうせいしゆたるとくべつな力が、今ライブラとちよくせつ、意志のそつうをはかることにかのうにしていたのです。

（そしていぜんトンネルの中できいたあのふしぎな声も、まさしくこの女神ライブラのものだったのです。イーフリープで剣の力の意味を学び、新たなる力を身につけたことによって、ロビーは女神ライブラとのきよりをちぢめ、そのけっか、女神の声をじかにきくことが

できるようになっていました。そして剣はそのとき、その新たなる力によってアーザスの悪しきわなをうちはらうべく、ロビーの思いにこたえて、せいなる光を放って、ロビーのことを助けたのです。」

「あなたの思いが、この剣にやどるさいごの力をひき出しました。それは、いのちのエネルギー、そのものです。そのエネルギーが、あなたのたいせつな者たちのことをすくいました。かれらをすくったのは、ロビーベルク、あなた自身なのです。」

「いのちの力……」ロビーはそういつて、うでの中のムンドベルクのことを見ました。ムンドベルクのからだからは、たしかに、新しいいのちの力があふれかえっていました。

「ロビーベルク。」さいごに、ライブラの聲がひびきます。

「わたしは、あなたに、心からかんしゃしています。あなたのような者がいれば、この世界はだいじょうぶでしょう。アークランドを、よろしくたのみましたよ。ありがとう、ロビーベルク……」

そういうと、ライブラの聲は消えていきました。それはほんとうに、わずかばかりの時間でしかありませんでした。

そしてそれつきり、ロビーの頭の中に女神の聲がひびくことは、どこどなかったのです。

広間はふたたび、もとのうす暗い明るさの中にもどっていきました。剣からはもう、なんの光も出ていませんでした。そして目の前につきつけられている、ほかの大きな問題がひとつ。てんじょうの岩が、がらがらと音を立てて、大きなかたまりとなって、広間のあちこちにくずれ落ちてきていたのです！ もうこの城は、だめでしょう。早くここから、だっしゅつしないと！ とても危険なじょうたいでした。

「父さん、早く、ここから逃げましょう！」

ロビーがムンドベルクのことをゆさぶって、いいました。ですがムンドベルクはまだ、とても歩けるようなじょうたいではなかったのです。いくらもとのからだを取りもどし、やみのじゅばくからとき放たれたとはいえ、長い長い悪のえいきようは、ムンドベルクのからだを、まだかんぜんにはいやしきれてはいませんでした（なん時間も寝ていたあとに、とつぜん「今すぐ起きて、ダンスをしましょう！」といわれたって、そんなにつごうよくからだが動いてくれるはずありませんよね？　ちよつとたとえは悪いのですが、ムンドベルクのからだは今、まさにそんな感じでした）。

ロビーはムンドベルクのからだを肩にかつぎ上げ、そのままよろよろと歩いていきました。むかつたさきは、もちろんソシーのところです。ソシーはひとみをとじて、くーくー眠っていました。ロビーはあらためて、おどろきました。ソシーのからだはほんとうに、人そのものになっていたのです（人間と違っていいものかどうか？　まだわかりませんでしたので、とりあえず、人とよんでおくことにします。見た目はまったく、人間でしたが。耳はふつうの人間の耳でしたし、しっぽがついているわけでもありませんでしたから）。

その顔はほんとうに、かわいらしい少女の顔でした（その寝顔に、ロビーはちよつと、どきつとしてしまったものです）。あのいのちのエネルギーを放ったかた方の目も、今ではちゃんと、もとにもどっております（ちなみに、ロビーの持ってきたソシーの二本の人形の足は、今でもそのまま、ロビーのかばんの中にはいつていました。新しいソシーのからだを作り上げたのは、剣のいのちのエネルギー、そのものだったのです。あとでこの人形の足は、ソシーにちゃんと、かえしてあげましょう。たぶん、「いらない」っていかと思えますけど）。

ところで……、わたしはみなさんにここでひとつ、あやまらなくてはなりません。ソシーがそのいのちのエネルギーのさいごまでを使ってロビーのことを助けてくれたとき、わたしは、「ソシーのそのこはくでできた作りもののひとみが、ふたたびひらくことはなかったのです。」といいました。ふつうにきけば、これはソシーが死んでしまっ

たということ、あらわしているものと思うことでしょう。ですがじつは、そうではなかったのです。それは文字通り、「作りもののひとみがふたたびひらくことはなかった」という意味でした。この「作りもののひとみ」という部分。これはつまり、「人形としてのひとみ」ということなのです。ですから人形ではなくなった今のソシーの目は、もはや作りもののひとみではないわけでした。いわば、「人としての、新しいひとみ」でしょう。この新しいひとみの方は、このさきちゃんと、ひらくのです。つまりソシーは、ちゃんと生きているということでした！ そんなの、いんちきじゃん！ つていわれてもしかたありませんが、読者のみなさんをだますようなことをしてしまって、ほんとうに申しわけありませんでした。でもソシーが死んでしまったというより、こつちの方が、ずっといいけつまつですよ！ ですからほんと、ゆるしてください！。

「ソシー。」ロビーが声をかけてソシーのからだをゆさぶりましたが、やつぱりだめでした。ソシーは深く眠りこんでしまっていて、とても起きてくれそうもなかったのです。今までのたくさんの悪の力のえいきようが、ソシーのことを深い眠りにさそっていました。たいへんな目にたくさんあつてきましたから、しばらくのあいだは、このまま静かに寝かせておいてあげましょう……。

といたいところでしたが、やつぱり、今のこのじょうきようです。早くここから、だつしゅつしなくてはなりません！ ロビーは三人の人たちのことをかかえてここからだつしゅつするなんてことは、とてもできそうもないと思いました（だって、あのめいろですもの！ あそこを帰っていくことを考えたら、だれだって気がめいってしまうはずです）。せめてどこかに、そとに出られる近道でもあったらいいんですけど……。ロビーはあたりをきよろきよろ見渡してほかの出口をさがしましたが、やつぱりだめでした。道はこの広間にはいつてきたあの入り口がいい、どこにも見あたらなかったのです。

あれ？ でもその前に、ちよつと待つてください。ロビーは今、「三人の人たちのことをかかえてここからだつしゅつするなんてことは、できそうもない」と思っていたわけですが、「三人」かかえるとは？

そう、この広間にはムンドベルクとソシー、かれらのほかにも、もうひとりの人物がたおれていました。それは……、そう、アーザスです。

ロビーはアーザスがもとのすがたを取りもどしたとき、すでにかれを助けることを考えていました。あんなにたいへんな戦いをくり広げたあとだというのに、ロビーはなんてやさしい子なのでしょう。もとのすがたを取りもどし、床にたおれている、アーザスのことを見たとき。ロビーはアーザスがただ、やみの力にしはいされていただけの、かわいそうなそんざいであっただけなのだということをりかいたのです。かれもまた、自分の父と同じじょうたいだったのだと。ですからロビーは、アーザスのことも助けなければと思いました。きつとこのさき、アーザスにも、新しいみらいが待っているのだと。

ロビーは、たおれているアーザスに近づきました。アーザスはひとみをとじたまま、動きません。ソシーと同じく、アーザスもまた、深い眠りの中にあるようでした。

ロビーは、まよいませんでした。まよっていてもしかたありません。やらなくてはならないのです。ムンドベルクを左の肩にかかえ、自分のかばんを前にかけて、その上にソシーのからだをおいて、ひもでくりつけました。そしてこんどはアーザスのことを、そのかた方のうでですっかりとひっぱっていったのです（ちよつと地面をずるずるひきずることになってしまいました、それはかんべんしてください。ほかのふたりを落つことさなないようにするだけでも、せいっぱいでしたから）。

とにかく、この広間からそとに出ないと……。ロビーはそう思つて、広間の出口によるよると歩いていきました。ロビーのまわりに、くずれてきたてんじょうが、どしん！ ががん！ つぎつぎと落ちていきます。いつそれが、自分の頭の上にふりそそがないとも知れませんが。ロビーはできるかぎりのはやさでもって、広間の出口にむかいました。

そしてついに、広間の出口にたどりついた、そのとき。

ロビーはそこで、いまだかつてないほどの、おそろしいものを見たのです。

「そ、そんな……」

ロビーは、がくぜんとなりました。全身の力が、ぬけていくようでした。

ロビーの見たもの、それはてんじょうから落ちてきたたくさんのがれきによって、そのすべてをうめつくされてしまった、かつてのろうかのすがただったのです……。

ロビーは三人のことを床において、ひつしでそのがれきを取りのぞこうとしました。しかしそれは、むなしいばかりの努力でした。ひとつのがれきを取りのけても、そこに新しいがれきがまたがらと、音を立ててくずれ落ちてくるのです。これではいつまでたっても、このがれきをみんな取りのぞくなんてことは、とてもふかのうでした。

こんなひどいことがあるでしょうか？　こんなにざんこくなことがあるでしょうか？　やつのことでさいだいの敵をうちたおし、父とのさいかいを果たし、ちかいを果たし、そしてたいせつな人たちのことまで助けることができたというのに、ここから出ることができないなんて！　もうじきに、この大広間もがれきでうめつくされてしまおうでしょう。そうなれば……、もはや残されたロビーたちが、助かることはないのです。

ロビーはその場に、ぺったりとすわりこんでしまいました。三人の者たちはみな、ずつと気を失ったまま眠りこんでおります（今ではムンドベルクもまた、深い眠りの中に落ちてしまっていたのです）。自分も気を失っていたのなら、せめてこのざんこくなさいごを、見ることもなかつたらうに。ロビーはちよつと、そう思っていました。

ロビーは腰につけていたアストラル・ブレードを手に取りました。もういちどこの剣が、助けをもたらしてくれるんじゃないか？　そのロビーのきたいは、はかないものでした。剣はもはや、なんのかがやきも放つてはおりません。そのさいごのエネルギーまで、使い果たし

てしまったからでした。ふたりのとうとき、いのちをすくうために……（そしてこの剣がもとの力を取りもどすまでには、長い長い時間がかかったのです。それはもう、なん年もあとになってからのことでした）。

ロビーは、かんねんしました。もうなにもすることもできませんでした。思えば自分は、ふたたびもとの世界へもどることなんて、できないものと思っていました。みんなには、そしてライアンには、ほんとうに申しわけないと思っていました。でも世界をすくうためにぼくのいのちが必要なのだというのなら、それはしかたのないことだと、ロビーは思っていたのです。

ですが今は、そうではありませんでした。世界をすくうきゆうせいしゆとしてのつとめを、果たし終えたロビー。自分はまだ、生きてこの場に立っていたのです。ロビーは自身のそのおそろしい運命を乗り越えたのだということを、感じていました。そして……、ソシーのそんざいです。ムンドベルクのそんざいです。ぼくのこの身ひとつなら、いくらでもぎせいにささげてもいい。ここへくる前、ロビーはそう思っていました。しかし今は、ソシーがいるのです。ムンドベルクがいるのです。そのうえ、思いもかけずもとの人間にもどることになった、アーザスもおりました。

かれらのいのちは、ぼくがきめていいことじゃないんだ。

ロビーはそのことに気づきました。それはまさしく、守るべきいちだったのです。このさき、新たにどんな危険が待ちかまえていようと、ロビーは全身ぜんれいをつくして、かれらのことを守らなくてはなりません。そのためにはまた、自分のことも守らなくてはならないのです。自分がここでたおれてしまったら、いったいだれが、かれらのことをすくうのでしょうか？

しかし今となつては、もうすべてが手おくれでした。くずれ落ちてゆくがれきのそのただ中で、ロビーはもう、それを見つめることしかできませんでした。

ロビーの頭の中には今、さまざまな思いがめぐっていました。今ま

での旅のこと、かなしみの森での日々のこと。ベルグエルムさん、フェリアルさん、マリエルくん、リズさん、たくさんの仲間たちのこと。そして、その中でも、いちばんの思い。それはロビーのいちばんの友だち、ライアンへの思いでした。どんなときでもげんきいっぱい、みんなのことを心からはげましてくれた、ライアン。わがままで、おちようし者で、お菓子が大好きで、すごくこわいところもあつて……。

やっぱりぼくは、ライアンのところに帰りたい……。

もういちど、いっしょに笑ったり、怒ったり、泣いたりしたい……。

「ごめんね、ライアン……」

くずれ落ちてゆくがれきの中で、ロビーは静かに、そうつぶやきました。

そんな思いからなのでしょうか？ ふいにロビーはそれがれきの落ちる音の中に、人の声をきいたような気がしました。それも、ただの人ではありません。それはロビーが今、いちばんききたいと思っていた人の声……。そう、ライアンの声だったのです。

まさか、そんなわけがあるはずもない。ロビーはこのさいごのときに、まぼろしの声をきいたのだと思いました。ライアンのことを思うあまり、まぼろしの声がきこえてしまったのだと。

しかし……。

つぎのしゅんかん、ロビーは、はっと心をふるわせて、立ち上がりました。まぼろしなんかではありません。ロビーはまたしても、ここにライアンの声をきいたのです！

「……ロビー……！」

まちがいありません！ ライアンです！ がれきの落ちるその音にまじって、たしかに自分のことをよぶ、ライアンの声がひびいてきたのです！ ロビーはもう、われも忘れて、むちゆうになってライアンのことをよびました。

「ライアーン！ ライアーン！ どこにいるのー！」

そしてそのあと。このかつてないほどのぜつぼうをうち破るすくいぬしが、まさにロビーの、その目の前にあらわれることになりました。それも、ただあらわれたというのではありません。それはだれもがそうすらできないほどの、とんでもないしゅだんでもって、とつぜんはこの場にまいおりてきたのです。

とつぜん！

どつごおおおーん！ がらがらがら！ がつしやーん！

な、な、なにごと！ あたりはあつというまに、まっ白いけむりにつつまれてしまいました。その中から、しゅううーっ！ というおかしな音と、そしてがらがらというがれきのこぼれ落ちる音だけが、ひびいてくるのです。そしてほどなくして、そのけむりが晴れてみると……。

なんとなんと！ そこには今までだれも見たこともないような巨大な鉄のかたまりが、でーん！ とあらわれていました！ その鉄のかたまりが、てんじょうのまるいドームをつき破って、この広間の床の上につつこんでいたのです。これはいったい！

その鉄のかたまりは、なにかの乗りもののように見えました。そしてじつさい、乗りものだったのです。四かくくてほそ長いかたちをしていて、なんのきんぞくでできているのか？ よくわからない、すいしようにのようにつやつやとした青と黒のかがやきを放っていました。

その乗りものの下の部分には、たくさんのしやりんがついていました。それらのしやりんが、くるくると空まわりをしております（あんまりいきおいあまつてつつこんできましたので、しやりんが空まわりしてしまっていたのです）。そしてしゅううーっ！ という音のしよ

うたいは、その乗りものの頭の上についているえんとつや、しやりんのまわりから吹き出る、まっ白なじょうきでした。

乗りものの横にはとびらがいくつかついていて、たくさんのまどがあつて……、つて、あれ？　これってどこかで、見たような……。もしかして……！

そう、まさにみなさんの目の前にあらわれたこの乗りもののしょうたいは、みなさんの世界でもおなじみの、あの乗りものでした。それは……。

きかんしゃです！

き、きかんしゃが！　どうしてこんなところに！（そしてどうしてつつこんできたのでしょうか！）

あまりのできごとにも、ロビーは腰をぬかして、ただただ目をまるくしてしまふばかりでした。そして、そんなロビーの前に、とつぜん。

「ロビーー！」

きかんしゃのうんでん席にあたるところのとびらが、ばんっ！　いきおいよくひらかれて、そしてそこから……。

「ラ、ライアンー！」

ロビーがさげびました。なんとという、おどろきと、うれしさと、ありがたさなのでしょう！　そのきかんしゃの中からあらわれたのは、その通り、ロビーのいちばんの友だちの、ライアン・スタツカートだったのです！（まぼろしなんかじゃありません。ほんものですよ！）

そしてそこからあらわれたのは、ライアンだけではありませんでした。

「まったく！　なんてめちやくちやなことをするんだよ！　れっしやがこわれちやつたら、どうするつもりなの！」

もんくをぶーぶーいいながら、出てきたのは……、ベーカールンドの若ききゆうていまじゅっし、マリエル・フィアンリー！　そして……。

「やれやれ。まあ、でも、ずいぶん早くついたから、いいじゃんか。

それに、まさに、どんぴしゃの場所だったみたいだしな。ようロビー。げんきか？」

このあっけらかんとしたもののいい方、まさしくそれは、失われしシルフィアの種族の青年、リズ・クリスメイディンだったのです！

今やここに、なつかしのノランベつどう隊がせいぞろいです！でもこれはいつたい、どういうことなのでしょう？

思えばかれらは、ロビーが怒りの山脈へとむかうその場面で、ロビーとおわかれしました。そしてそのあと、ラグリーンの里長ラフェルドロードからのでんごんで、かれらはあるべつのにんむをいい渡されたのです（そしてそれはもともと、精霊王からのでんごんだったみたいです）。なんだかあるものをどこかに見つけにいくとか、「セイレン大橋へ、しゅつぱうつ！」とか、そんなことをいつていましたよね。あれから、かれらのそのにんむのことについては、物語の中ではひとこともふれられていません。読者のみなさんの中には、そのことをちよつときみしく（ふまんに？）思っていた方もいたのではないのでしょうか？ とくにライアン、マリエル、リズ、かれらのファンの方々は（その中でもとくに、「ライアンがぜんぜん出てこないー！」と思っていた方は多かったかもしれませんが）。

じつはわたしはあえて、かれらのそのにんむのことについてはふれなかったのです。だってふれちゃったら、このさいこの場面をお伝えする楽しみがなくなっちゃありませんか！ あ、いえ、わたしのことはともかく……、読者のみなさんにとつても、その方がよかったです。ひみつがかんたんにはれてしまったら、おもしろくありませんものね。今ライアンたちが乗ってきたこの巨大なきかんしゃのこと、そしてかれらがそれに乗ってロビーのことをきゆうしゅつにむかうというそれらのことについては、さいごのさいごのこの場面までの、いちばんのひみつだったのです（ロビーにしらせていなかったのは、今思えば、かわいそうだったかもしれませんが……。で、でも、すくいぬしが思いもかけずにあらわれた方が、もっとうれしいはずですから！

ところで、ライアンたちがそのにんむに旅立つ場面のさいごで、わたしはみなさんに、こうお伝えしていました。「きつとあなたは、ここで、どえらいものをもくげきすることになりますから……」。そう、あの言葉はまさに、このことだったのです。空を飛んでつつこんできた、きかんしゃ。じゅうぶんにどえらいものだと思いますが、どうでしょう？ すくなくともロビーにとっては、どえらいものだったようです。

「みんな！ いったい、どうして！」

ロビーがむちゅうで、仲間たち（とくにライアン）のもとにかけよつて、たずねます。そんなロビーに、ライアンが「えへへ。」と胸を張つて、まんぞくそうにいいました。

「ほんとうにロビーは、ぼくがいなくちやだめなんだから。ぼくが助けにこなかつたら、今ごろロビーは、がれきでぺっちゃんこになつてたかもだよ。かんしゃしてよね。」

ライアンがそういういしましたが、ロビーはちよつとだけ、つつこんできたきかんしゃのことを見ました。そしてちよつとだけ、こう思つたのです。もしこれがぼくの上につつこんできたのなら、ぼくはもつと、ぺっちゃんこになつてたと思うんだけど……。

（ですが、ご安心を。このきかんしゃには人のそんざいを感じ取ることのできる、レーダーのようなものがついていたのです。ですからこのきかんしゃは、人のいない広間のまん中をめがけてつつこんできました。いくらライアンでも、そのくらいのこととはちやんと考えていたのです。でも、いくらそうだったとしても……、やつぱりいきなりつつこんでいくのは、あぶなすぎですよ……。

そしてロビーのことを見つけることができたのも、このレーダーのおかげでした。ですからみんなは、ロビーのいるこの広間めがけてつつこんでいくことができたのです。もつとも、このレーダーは人のそんざいを感じ取るというだけでしたので、それがほんとうにロビーであるのかどうかは、じっさいにたしかめてみるまではわかりませんでした。まあでも、こんなところにいる人なんて、そうはいまいませんでしたから。

ちなみに、ロビーはムンドベルク、ソシー、アーザスの三人といっしよに、同じところにおりましたので、リーダーにはひとつの大きな光としてうつっていました。ですからやってきたライアンたちには、そこになん人の人たちがいるのか？ ということまではわからなかったのです。さすがにこのリーダーも、そこまではほんのうではありませんでしたから。」

まあ、それはいいとして。さあ、ライアン、マリエル、リズ、これはいったいどういうことなのか？ 教えてください！

「あのあとね、ぼくたちは、みんなそろって、ある場所にむかったんだよ。」ライアンがいました。あのあとというのは、つまりロビーがラフェルドロードの背に乗って、怒りの山脈にむかったあとのことです。

「ロビーさんを助けることのできるものが、そこにあるということでした。それこそが、このカピバルのわざのしゅうたいせい、魔法れっしやだったんです。」マリエルが、うしろにそびえているきかんしや（魔法れっしやというのが正しい名まえのようです）のことをしめしながら、いいました。

「ちよー！ ぼくがいおうとしてたのに！」ライアンがマリエルの頭をぐいっとおし下げて、その上に自分のからだを乗せながら、つづけます（ほんとうになかよしになったものです）。

「とにかく！ この魔法れっしやっていうのが、セイレンのみずべの山おくに、かくしてあったんだって。これを使えば、空をびゅーっ！ って飛んでいって、ロビーのことを助けにむかえるっていうんだよ。だからぼくたちは、ラグリーンたちの背に乗って、まずはセイレン大橋にむかったんだ。れっしやを動かすためには、この人の助けがいるっていうから。」

そういつてライアンは、れっしやのとびらの方をさししめしました。そしてそこから、よっこらせ、とあらわれたのは……。

「そういうことじゃな！ まったく、びっくりしたぞい。いきなりげんかんととびらをぶち破って、空飛ぶねこの者たちが、つつこんできたんじゃからな。」

あなたは……！ カピバラ老人！ セイレン大橋の下のあの小さな小屋に住んでいた、カピバラ老人じゃありませんか！

そう、マリエルの言葉にもありました通り、この魔法れっしやはカピバルのくにも中でも、ひでん中のひでん。まさに「もんがいふしゅつ」の、さいごうのわざだったのです。そしてそのわざをあつかつてれっしやのことを動かすためには、やはりカピバルのさいごうのわざが必要でした。そのさいごうのわざを持っている者こそが、ほかでもありません。かつてのカピバラのくにも重要人物、カピバルたちのたましいともよべるすいしようのことを持っている、あのカピバラ老人だったのです（あの出会いが、まさかここまで大きなものになるうとは！ やっぱりこれも、運命だったのかもしれないね）。

ちなみに、ライアンはカピバラ老人の家をたずねたそのときにも、やっぱりこんかいと同じようなことをしたみたいですね。つまりラグリーンたちの背中に乗ったまま、いきおいあまって、どっかくん！ 入り口のとびらをぶち破って、中につっこんでいつてしまったのです……。カピバラ老人にけががなくてよかったです……）。

そしてこの魔法れっしやこそが、アーザスの城の中からロビーのことを助け出すことのできる、ゆいいつのしゅだんでした。アーザスがたおされれば、その城のことをつっんでいるバリアーは消え失せ、さらに城そのものも、もとのかたちをとどめることができなくなつて、くずれ落ちる。その中からロビーのことをつれ出せるのは、この魔法れっしやだけだったのです。精霊王はそのことを、よくわかつていました。ですからライアンたちロビーの仲間たちに、この魔法れっしやに乗つてロビーのことを助けにいくようにと、伝えたのです。

（たとえラグリーンたちでも、アーザスの城のその中にもまでははいりこめません。へたをすれば、城のほうかいとともにラグリーンたちまでまきこまれて、そのいのちを失つてしまうことでしょう。くずれ落ちていく城の中につっこんでいくことのできる、強力な魔法の乗りもの。それこそが、このカピバルのわざによつてつくられた、魔法れっしやだったのです。なにしろあのいきおいで地面につっこんでも、れっしやにはきずびとつついていませんでしたから、どんなにが

んじょうか？　よくわかりでしょう。

ところで……、読者のみなさんの中には、こう思った方もいるかもしれないですね。こんなにべんりなものがあるのなら、はじめからこの魔法れっしやに乗って、アーザスの城へとむかったらよかつたじやんかつて。ですがそれは、むりだったのです。ごぞんじの通り、アーザスの城のまわりには、アーザスののろいのけっかいが張られていたから。あのけっかいを越えてゆくのは、いかにこの魔法れっしやといえども、ふかのうでした。それにもしけっかいをとつばできたとしても、アーザスが自分の城の中に、このれっしやのしんにゆうをゆるすわけありません。こういったわけで、この魔法れっしやはアーザスがたおされ、のろいのけっかいも消え去ったあとで、「ロビーのことを助ける」というそのために使われることになったのです。さすがにこれで旅をするというわけにも、いきませんでしたし。大きすぎて、目立ちすぎでしたから。そんなことをすればワットの者たちに、「わたしたちは、ここですよ」と教えているようなものなのです（それにこのれっしやのねんりようも、そんなに長持ちするというものでもありませんでしたし。）

「ま、そういうこと。そんでおれたちは、ここにきたってわけ。」リズがあいかわらずのちようしで、あつげらんといいました。

「ちよー！　かつてに話を、まとめないでよ！　終わつちやうじやんか！」ライアンがリズのことをおしのけて、またしても前に乗り出してつづけました。

「長く、くるしい旅だったよ……。まあ、ぼくだから、なしとげられたんだけど。ロビーのことを助けるために、なんどもなんども、つらいこんなんを乗り越えてきたんだ……。ほんとうにたいへんだつた。」

ライアンがそういって、「うんうん。」とひとりでうなずいてみせます。ですが。

「なにいつてんの。ずっとラグリーンの背中に、乗ってただけでしょー！」マリエルがいいました。

「ちよー！　ばらさないでよー！　せつかくロビーに、うんとかんしや

してもらおうと思ってたのに！」

ライアンがそういって、マリエルとまたわーわーはじめます。ですがこれは、いつものことですから（ほんとうになかよしになったものです）。

そのとき。

「ありがとう、ライアン。ほんとうに、きみがいてくれてよかった……」

ロビーがそっとライアンに歩みよって、そのからだをぎゅっとだきしめました。とつぜんのことに、ライアンはとたんに顔を赤らめて、はずかしくなってしまう。

そして。

ここにきてライアンは、ようやく、そのほんとうの心のうちをロビーにうちあけました。

「ロビー、ほんとはね……」ライアンが、小さな声でいいました。「ほく、ロビーのこと、心配でたまらなかつたんだよ……。アーザスつてやつに、やられちゃうかもって……。だから、だから……」

「わあああー」

ライアンはもう、声を上げて泣いてしまいました。そうです、ライアンはじょうだんっぽく、勝ち気なふうをよそおってはおりましたが、ほんとうはロビーのことが、心配で心配でたまりませんでした。まにあわないんじゃないか？　ロビーが死んじゃうんじゃないか？　ライアンの心の中は、ずっと、それらの思いではちきれんばかりだったのです。ロビーが今、そのやさしきでライアンのことをつつみこんだとき。ライアンのおさえつけられていたそのほんとうの思いが、せきを切って、おもてに出てきてしまいました。

「だいじょうぶだよ。きみが、助けてくれたもの。」ロビーはそういって、泣きじやくるライアンのことをさらにやさしくだきしめました。「いったでしょ？　きみは、いつだって、ほくのきぼうなんだって。」

ふたりはしばらくのあいだ、ずっとだきあっていました。マリエルもリズも、そんなふたりのことを、ずっと見守っていました。

「やっぱり、このふたりにはかなわないや。」マリエルはそういって、鼻をずつとすすりました。

さあ、だつしゆつです！　いくら魔法れつしやがあるとはいえ、いつまでもこんな危険な場所にいるわけにはいきません（ちなみに、みんなの今までのやりとりはすべて、てんじようのがれきの落ちてこない（ひかく的安全な）れつしやの影でおこなっていましたので、ご安心を。そしてもちろんムンドベルクたちのからだも、がれきの落ちてこない、（まだ）安全な広間のすみに寝かされていました）。

「さあみんな、乗った乗った！　こんなところは、早く、おさらばせんと！」カピバラ老人がそういって、魔法れつしやのうんてん席に乗りこみました（うんてん席のあるいちばん前の車両のうしろには、ふたつの客車がかっついていました。そこには全部で五十人ほどの人たちが、乗れるようになっていたのです。もつとも、ぎゅうぎゅうにつめれば、百人以上は乗れましたけど）。

「みんな、手を貸して。お父さんたちを乗せないと。」ロビーが、みんなにむかっていいました。

「この方が、レドンホールのムンドベルクへいかなんですね……。」マリエルが、ムンドベルクのすがたを見てつぶやきます。「影の者となったムンドベルクへいかが、こうしてぶじに、もとのすがたにもどることができたなんて。ほんとうにきせきです。よかった。ほんとうによかった。」

ムンドベルクのことはずでにロビーが、みんなにかいつまんで説明をしていました（ほんとうに、急いでかいつまんでだけでしたけど）。女神の剣の力によって、ムンドベルクが助かったということ。そして女神ライブラのこと。ですがその身が助かったとはいえ、ムンドベルクがふたたびもとの力を取りもどすためには、まだ時間がかかりそうだといいことも。おそらく、しばらくはこのまま、ぐつたりと寝こんだままでしょう。

「うわっ！　これ、アーザスってやつじゃない？」

そういったのはライアンでした。ムンドベルクの横に寝かされていたアーザスのことを見て、そういったのです。たしかに、ライアンがおどろいたのもむりはありません。ロビーはこのアーザスのことをうち破るために、いのちがけでここまでやってきましたから。

「うん。でも、ここにいるのは、もうおそろしい悪者のアーザスじゃない。かれは、むかしのかれに、もどったんだよ。かれも、やみにとらわれていただけに、すぎなかつたんだ。だから、かれのことも助けなきゃ。」

ロビーの言葉に、みんなはさいしょ、「うくん……」とうなっているばかりでしたが、やがてロビーの顔を見て、にっこり笑ってみせました。

「まったく、ロビーにはかなわないや。ほんと、お人よしなんだから。」ライアンがいました(ライアンはそういって、リズの方をふりかえります。リズは、「はいはい。おれがはごぶんだろ？　わかっていますよ。」とぶつぶついいながら、アーザスのことをその背にかつぎ上げました。ムンドベルクやアーザスのことはごぶのには、からだの小さなライアンやマリエルのちびっ子たちでは、たいへんでしたから)。

(アーザスとムンドベルクのことを、リズとロビーでさきにれっしやにはごびいれてしまってから)そしてさいごに、ソシーです。ソシーのこともちよつとだけ、ロビーはみんなに説明していました、やっぱりみんな、この女の子がもともと人形だったなんていうことが、とても信じられないといったようすでした(だってどこからどう見ても、ふつうの女の子でしたから。ロビーでさえ、いまだに信じられないくらいだったのです)。

「早く、げんきになってくれるといいんだけど。」そういって、ロビーがソシーのことをだき上げました(やっぱり安全のことも考えて、ふたりのちびっ子たちにはこんでもらうのはやめておきました)。からだの小さなソシーは、ロビーひとりでもかんとんに持ち上げられたのです(ですからちよつと、おひめさまだっこみたいなかたちになりま

したが)。そして、そんなときのこと。

「……う、ん……、ロビーさま……」

ソシーが寝ごとの、ロビーのことをよびました。そしてソシーは眠ったまま、ロビーのそのからだにぎゅっとだきついたのです（これはただ、寝ぼけてのことでしたが）。

ロビーはとたんに、まっ赤になってしまいました。今までは人形でしたからまだよかったのですが、こんどはソシーは、生身のからだなのです。ロビーは女の子にだきつかれるなんてことは、もちろんはじめてのことでした（人形のときのソシーのことはべつとして）。ですからロビーは顔から湯気を出して、はずかしがってしまったのです。

これを見たライアンは……。

「ちよーど、どういうこと！ なんなの、それ！ ぼくがないあいだに、なにしてたの、ロビー！」

ライアンはすっかり、ソシーにやきもちをやいてしまいました。ま、まあ、気持ちはわからないでもないですけど……。

「な、なについて、べつに、なんにも！ ソ、ソシーはほんとうに、アーザスの手下だった子で……」

ロビーがひっしになってべんかいました。ライアンはぐいぐいつめよって、ききいれません。

「ぼくというものがあらー！ うわきしてたの！ ゆるさないよー！」ライアンはそういって、逃げるロビーのからだをぼかぼかたたきながら、そのあとを追いかけます。マリエルもリズもカピバラ老人も、あつけにとられて、口をぽかん。「あいつら、このままおいてつちやおうか？」リズがいいましたが、マリエルもまた、「そうした方がいいかもね……」といて、うでをくむばかりでした。うくん……。

こうして、ロビーたちを乗せたこの魔法れっしやは、アーザスの城のその中から出発していったのです（まずはバックで、どつかくん！ てんじょうのかべをなぎたおしながら、そとに飛び出していきますが。でももういくらこわしたとしても、だれももんくはいいませんよね。この城はもはやこのさき、だれも住むことはないのですから）。そとから見ても、アーザスの城はもうぼろぼろにくずれ落ちていまし

た。城をつつんでいたあの生きているバリアーも、もはやかたちを持たない赤い水の流れとなって、はるかな谷底へとむかつて流れ落ちていたのです。そのバリアーから、そして城の中からも、きいろいかがやきを持った光のようなものがつきつきにあらわれては、空に立ちのぼっていききました。これらはアーザスによってうばわれていた、人々のたましいのエネルギーだったのです。たましいたちがもとの場所にもどることは、もはやないでしょう。ですがこのたましいたちは、つづくみらいのいのちの中へと、生まれ変わってゆくのです。それがせめてもの、すくいでした。

さまざまなものが変わってしまった、アークランド。ですがそれらもやがて、新しく生まれ変わってゆくことでしょう。

きつと、もとのアークランドよりも、もつともつと、美しく、かがやかしいものへと……。

アークランドの運命をきめる大いなきが終わり、まず大きく変わったことは、やはりワットでした。ワットの持っていた「ほかのくにといくさをするのできるけんり」は、とうぶんのあいだ失われることになりました（これは軍を持つくにあれば、どこでも持っているけんりでした。ですがこのアークランドではワットいがい、このけんりをみずから進んで使おうとするくになどは、どこにもなかったのです）。これは心を取りもどしたアルファズレドみずからが、くにのつぐないのひとつとして、そのようにきめたことでした。とうぜん、ワットの多くの高官たちからのもうはんたいがありました。アルファズレドはこのけつていを、おしきつたのです（それがアルファズレドのアークランドに対する、せめてものつぐないの心でした）。

そしてワットは今までにしんりやくしてきたたくさんのくにぐにや人々に対して、これからなん年もの時間をかけて、つぐなっていくことになりました。ワットのくにのたくわえは、あつというまになくなつていきました。そしてその軍勢も。ワットの軍勢はそのほとん

どが、お金でやとわれた「よう兵」とよばれる兵士たちでした。かれらにお金がはらえなくなったワットは、そのため、くにの持つほとんどの兵力を失ったのです。残ったのはワットのお城にもとつかえていた、わずかな数の兵士たちばかり。そしてその中には、あの魔女つこ三姉妹のすがたもありました。

ベゼロインとりでを取りかえされたことは、かのじよたちの大きなせきになん問題になりました。とりでを取りかえされたときにエカリンのいつていた通り、やっぱりだいぶ、「怒られた」のです。そのためもあつて、この魔女の三姉妹はそのごの長きに渡つて、ワットのつぐないのそのさいせんたんに立つて、たくさんのしごとをこなしていかなければならなくなりました。それこそ、しよるいのせいりから、ぎつ用の山まで。

「なんでわたしたちが、こんなことまでしなくちやならないのよー！」たくさんのしよるいの山にかこまれて、そのしよりをおこないながら思わずもんくをいつたのは、エカリンでした。もうさつきからエカリンは、なん時間も、このしよるいの山のせいりに追われっぱなしだったのです。ですがそこに……。

ごちん！ げんこつがひとつ。それはやっぱり……。

「……これ、しごとです……！ もんくいうなです……！」しよるいの山をかかえたアルーナが、そういつてエカリンの頭をたたいていききました。

「いったー！ もう、いや！ ネルヴァから、上の人にいつてよー！ ネルヴァだったら、いうときいてくれるでしょ！」エカリンが、すこしはなれたつくえにむかっているネルヴァにいいました。ネルヴァもまた、たくさんのくにぐにに對してのしはらいのふり分け方をきめる、その計算に追われているところだったのです。ですがエカリンの言葉に、ネルヴァはほほ笑んだまま、こううばかりでした。

「アルーナちゃんのいう通りよ。これも、わたしたちのたいせつなしごと。やばんなことをしているよりは、ずっとましじやない。わたしたちは、これでいいのよ。」

ネルヴァの、いがいな言葉。もつとずつとおそろしいことを、考え

ているような人だとばかり思っていましたけど（それこそライアンみたいな）。ネルヴァの人らしい、いがないちめんを見たような気がします。

「……わたしたちは、これでいいです……。みんなにごめんなさいしたら、好きなことをすればいいです……。それまでちゃんと、はたらくです……。わたしたちは、めぐまれてるです……。しあわせなんです……。エカリン……」

アルーナがいました。そしてまた、通りすがりに、ごちん……。ではなくて、こんどはアルーナは、エカリンの頭をやさしくなでてあげたのです（ひよつとして、はじめてかも）。

アルーナにそんなことをいわれては、エカリンももう、なにもいえませんでした。

「わ、わかったわよー、もうー。」エカリンはそういって、また（まだだいぶ、しぶしぶのままでしたが）しよるいの山に取りかかりました。

ワットの魔女の三姉妹。かのじよたちが晴れてそのつみをつぐなって自由の身になれたのは、それからだいぶたってからのことです。うわさでは、かのじよたちはワットにわかれをつけて、遠い遠いくにへと旅立っていったということでした。かのじよたちは今そこで、新たなる日々を送っているということです。

旅立つ前。

「みんなー！ まったねー！」エカリンが笑顔で、ふりかえっていいました。

そして、アルファズレド。かれはそれからしばらくお城にとじこもり、今までのおのれの生き方を見つめなおす日々を送っていました。そしてそんなかれのもとになんども足をはこんだのは、アルマークだったのです。今ではアルマークはベーカーランドからの正式なお客さまとして、ワットをおとずれることができました。アルマークのそんごいは、アルファズレドの大きなすくいでした。かつて、ともに手を取りあつたふたり。むかしのままというわけには今でもい

きませんでした。それでもこのふたりのえいゆうたちは、かつての友じようを取りもどしていたのです。ワットもベーカーランドも、これだいたいじようぶでしょう。このふたりがいるかぎり、そしてその思いが、つぎの世代へと受けつがれてゆくかぎりは……。

それから、ソシーとアーザスのそのこのことです。ベーカーランドについたロビーたちは、そこでノランたち、けんじやのみなさんといっしょになりました（ノランとカルモト、リブレスト、ランスロイの、ごうかメンバーです！ この四人をいっしょに見られるなんてことは、このさきにどとないでしょう）。まずはみんな、おたがいのこととたたえあいます。ロビーは四人のけんじやたちそれぞれみんなから、あくしゆをもとめられました。「ほんとうに、よくやってくれた。」口ぐちにおくられるけんじやたちからの言葉に、ロビーはすっかり、きようしゆくしてしまったものです（ライアンが横から、「ねえ、ぼくは？ ぼくは？」としつこく聞いていましたが）。

「この者は、わたしがあずかろう。」そういったのは、ノランでした。ノランはいまだ深い眠りの中にあるアーザスのことを見て、いったのです。

「この者は、もはや、このアーケランドのそとにその身をおいた方がいいだろう。このアーケランドには、かれにとって、思いが多すぎる。ここにいても、かれ自身、つらくなるだけだろうからな。」

そのわきに静かに立っていたのは、ソシーでした。ソシーはすでにその眠りからさめて、アーザスのそばに、ずっとつきつきりだったのです（目がさめて、自分が人のからだになっただけだということを知ったときの、ソシーのおどろきようつたらありませんでした。まあ、とうぜんでしょうけど）。

「きみは、どうするのだ？」ノランがソシーにたずねました。「ここに、残るかね？ それとも、わたしといっしょにいくか？」

ソシーはずっと、うつむいていました。そしてそれから顔を上げて、ロビーのことを、じっと見つめたのです。ソシーの心の中は今、大きなまよいであふれていました。それはノランのいった通り、アーザ

スについていくか？ それともロビーとともに残るか？ ということだったのです。

「わたしは……」ソシーがロビーのことを見つめながら、いいました。

「わたし……、わたし……」

そんなソシーに、ロビーがやさしく語りかけます。

「きみは、自分の思った通りの道をえらばいいんだよ。きみにとって、なにがいちばん、たいせつなことなのか？ 心にすなおにきいてみればいいんだ。」

ロビーの言葉に、ソシーはまたうつむいてしまいました。ロビーははじめて、ほんとうに好きになった相手。ですがアースもまた、ソシーにとって、とてもたいせつなそんざいだったのです。

そしてソシーは、けつだんしました。ソシーはしっかりと顔を上げて、ロビーのことを見ました。

「ロビーさま……、わたし、アースさまのおそばを、はなれるわけにはいきません。」

ソシーの言葉に、ロビーはやさしくうなずきます。

ソシーがつづけました。

「アースさまは、わたしのことを作ってくれた、たいせつな人。その人が、これから、新しい道をふみ出そうとしているんです。わたしはそれを、助けてあげなくちゃいけないんです。今のアースさまには、わたしが必要なんです。」

ロビーはソシーのもとに歩みよって、その手をやさしくにぎってあげました（ちよつと、ライアンのしせんが心配でしたけど……。でもライアンも、こういう場面ではしかたがないと、りかいしてくれているみたいです）。

「かれのことを、しっかりと守ってあげてね。そして、いつでも好きなきみに、もどってきて。ぼくは、いつでも、きみのことを待ってるから。」

ロビーの、やさしい言葉。そしてその言葉に……、ソシーはこんどこそ、そのやわらかなこはく色のひとみに、ほんもののなみだのつぶ

をあふれかえらせたのです。

「ありがとうございます……、ロビーさま……。わたし、きつと……」

ロビーはそんなソシーのことを、そつとだきしめてあげました（それを見ていたライアンは、しばらくだまっていたましたが、五びょうくらいたって、「はいはい、そのへんでいいんじゃないかな。」といって、ロビーのことをぐいっとうしろにひっぱってしまいました。せつかく、感動的な場面でしたのに……。やきもちやきにも、こまったものです。まるで、メリアン王みたい）。

アーザスとソシーは、こうしてノランとともに旅立ちました。アーザスの目がさめたのは、それからなん日もあつてからのことです。アーザスはソシーのことを作ったということを、ほとんどおぼえていませんでした。やみからかいほうされた今となっては、アーザスはやみにとらわれていたそのあいだのことを、ほとんど忘れてしまっていたのです。ですがソシーにとって、アーザスが自分のことを作つたたいせつな人なのだということに、変わりはありませんでした。思いではこれから、作っていけばいいんです。ふたりの新しいみらいは、ここからはじまってゆくのですから……。

アーザスとソシーの物語は、ここからまた、はじまるのです。

ノランが旅立ち、そして三人のけんじやたちもまた、それぞれの世界の中へともどっていきました。カルモトは今でも、あの巨大なルイズの木に住んでいて、学問とけんきゆうの日々を送っているのです（こんどはちゃんと、ノランにも住所を教えおきましたので、ご安心を）。

ちなみに、カルモトのつれてきたポメラニンたちは、みんなにせいでいに見送られ、かれらのふるさとポート・ベルメルまで帰っていました。その口にみんな、大きなソーセージやハムを、くわえながら。かれらにその「おいしい」をするために、ベーカールランドのお城のお肉はみんななくなってしまうましたが、まあそれは、しかたのないこと（です）。リブレストもまた、岩のロボットたちをひきつれて、「なかなか

か楽しかったわい！　じゃあの！」といって、自分の住む岩の世界の中へともどつていきました（レイミールはリブレストから、「きねんに」といって、あの小さな岩のミニチュア兵士たちを作るミルク色の石を十二こもりました。今レイミールはその兵士たちのことを相手に、剣のわざをみがいているという事です。早く、いちにんまへの騎士になれるといいですね！）。そしてランスロイもまた、「さらば！」と（たくましい声で）いって、あのふしぎな者たち、レビラビたちをひきつれて、空の上の、雲の中の世界へと帰っていったのです（それこそ、風のように立ち消えていきました）。

ところで、けんじやたちとともにネクタリアの者たちもまた、かれらの住むタドゥーリ連山の聖地の中へともどつていくことになりましたが、新たに変わったことがひとつ。セハリアのめいを受け、百年のさいげつを越えて、今ふたたび、かれらの中からたくさんの者たちが、このアークランドにもどつてきたのです！それはネクタリア全体の数からいえば、まだまだすこしばかりの者たちでしかありませんでしたが、これから生まれ変わろうとしているアークランドの者たちにとつて、これほど勇気づけられ、はげみとなるものもないことでしょう。またむかしのように、ネクタリアの者たちとアークランドの人たちがともに手を取りあつて暮らしてゆけることのできる世界がぎざかれるのも、そう遠いことではないはずですよ。

そして、カピバラ老人のそのごのこともお伝えしておかなければなりません。カピバラ老人はときここにいたつて、ひとつの大いなるけつだんをしました。それは……、そう、カピバラのくにのさいけんです！　今こそ、かつての美しいカピバラのくにのすがたを、取りもどすのです。みんなはその思いに、できるかぎりの協力をおしませませんでした。南の地にちらばつていたカピバルの者たちも、みんな集まつて、心をひとつにして、老人の思いにこたえました。そうして長いねん月ののちに、カピバラのくにはみごとに、さいけんを果たしたのです！

その場所はもちろん、セイレンのみずべでした。ワットのつくつた

数々のみにくいたてものはみんなこわされ、その上にカピバルのわざのすばらしいけんちく物が、つぎつぎとつくられていったのです（あのガラスのようにとうめいで美しい空中どうろも、ふっかつです！）。今ではセイレンのみずべはいぜんにもまして、美しい場所になりました（カピバラのくにはシープロンドと同めいをくんで、土地の美しさを守るかつどうをつぎつぎにおこなっていききました）。そして、あのセイレン河。よごれたへどろの河となってしまっていたあのセイレン河も、今ではすっかり、もとの美しい流れを取りもどしたのです。シープロンドの人たちにとつて、ライアンにとつて、メルにも、アーランドのぜんなる者たちみんなにとつても、こんなにもうれしいことはないでしょう（わたしも、読者のみなさんにとつても）。

カピバラ老人はその新しいカピバラのくのにの、さいしよのしつせいとなりました。そしてそのカピバラ老人のもと、数々のすばらしきわざとともに、くにはますますさかえていくこととなったのです（でもいぜんのようにわざをほかのくにぐにに売り渡すようなまねは、けっしてしませんでした。そのかわりに、かれらはそのわざをおしみなく、ほかのくにの人たちにも分け与えたのです）。

ところで……、さいごまで「カピバラ老人」のままです通すのもどうかと思いましたので、読者のみなさんにはここで、かれの名まえを伝えておきたいと思います。かれの名は、ジエーガン・ロツクウオート。このアーランドがつくられてまもないころのいだいなる冒険家メンバーたちのうちのひとり、アライン・ロツクウオートの、しそんでしたが、それはまた、べつの時間、べつの物語……）。

そしてさいごに……、ロビーのことです。

エリル・シャンディーンにもどつてきた、ロビー。そんなかれのことをいちばんに出むかえたのは、やはりかれらでした。それは……、そう、ロビーの家族ともいえる仲間たち。ベルグエルムとフェリアル、ふたりの騎士たちだったのです。

多くは語りませんでした。仲間たちはおたがいのすがたを見るなり、そのままかたく、だきあつたのです。その目には、たくさんのな

みだがあふれていました。そのなみだのひとつぶひとつぶが、今まで
のたくさんのこんなんや、かなしみ。思いでや、うれしき。それらの
ことを深くあらわしていました。

「おがえりなさい、ロビーどの……」フェリアルがさいごに、それだ
けいきました。そしてロビーはそんなフェリアルに、ベルグエルム
に、ライアンに、あらためて、言葉をひとことおくれたのです。その
ひとことに、ロビーの思いのすべてがこもっていました。

「ただいま……。みんな……」

こうして、旅の者たちはそれぞれの場所へと帰っていったのです。

ライアンは、シープロンドへ。

「また、ちよいちよいあそびにいくからね。それなりのかんげいを、よ
ろしくー。」（この「それなりのかんげい」というのは、もちろん、「お
菓子をどつさり用意しておいてね」という意味だったのです。）

ところで、エリル・シャンディーンにはライアンのことを出むかえ
ていた、とくべつなもうふたりの人物がおりました。それは、そう、レ
シリアとルースアンです。ネクタリアとともに戦っていた、かれら。
そのかれらがいち早くライアンたちのことを出むかえるために、エリ
ル・シャンディーンのもともともどっていました。

レシリアのすがたを見るなり、ライアンはわれも忘れて飛びついて
しまいました。ほんとうならかのじよたちには、もうとつくに出会え
ているはずだったのです。思いもかけず、たいへんなこんなんの中へ
とまきこまれてしまった、レシリアとルースアン。そのかれらに今、
ようやくのことでさいかいすることができましたから。ライアンも
レシリアも、なみだを流して、ただぎゅつとだきあうばかりでした。

「よがっだなあ、ほんどうに、よがっだなあ……」その横で同じく
みだを流しながら、ルースアンとハミールがだきあっていました（な
んだか前にも、こんなことがあったような気が……）。

ちなみに、ハミールとキエリフ、小さなレイミールも、レシリアた

ちとともにもどってきていました。仲間たちはすでに、かれらのすばらしいかつやくぶりをたたえ、おたがいのくろうをねぎらいあつていたのです。ほんとうにおつかれさまでした！。

ですがそんな感動的な場面に、ひとだんらくがついたあと。

レシリアはライアンに、こんなことをいったのです。

「さあ王子、かくごはできていますね？　今までのベンキようのおくれは、しつかりと取りもどしてもらいますから。シープロンドにもどったら、まずは、算数のドリル、十きつ！」

「ええーっ！　そんなあー！」ライアンがさげびました。

そしてロビーとベルグエルム、フェリアルスの三人は……。そう、かれらのもどるべきさきは、ひとつだったのです。それはかれらの祖国、レドンホールでした。

レドンホールのくには荒れ果てていて、どこから手をつけたらいいものか？　それすらもわからないほどのひどいありさまでした。ですがかれらは、そのひとつひとつのこんなんに、ひるむことなく立ちむかつていったのです。みんなの力をあわせれば、できないことなどないのです。かれらの力をあわせれば、どんなことだってなしとげられることでしょう。レドンホールのくには、こうしてそれからなん年ものさいげつをかけて、すこしずつすこしずつ、もとの美しさを取りもどしていくことになりました。

悪しきやみの世界からかいほうされたムンドベルクは、そのご正式に、王の座をロビーにゆずり渡しました。それはロビーがまだ、十九さいのときでした（のちにムンドベルクにきちんとかくにんしましたところ、ロビーがアークランドをすくうこんかいの冒険に出たとき、ロビーは十五さいだったそうです）。ほんとうならまだまだ、王になるようなねんれいではありません。ですがムンドベルクはもはや、自分のやくめは終わったのだと考えていました。あとはロビーのうしろで、そつと、かれのことを見守っていくべきなのだ。

「王さまなんて！　ぼくにはまだ、早いですよ！」ロビーがそういつ

たのは、とうぜんのことでした。なにしろ自分が王さまだなんて、どうしたって、そうぞうできるようなものではありませんでしたから。しかしそんなロビー（ロビーベルク王とよぶべきでしょうか？ なんだからしっくりきませんけど）のことをいちばんに助け、ささえてくれたのは、やはりベルグエルムとフェリアル、ふたりだったのです。

ベルグエルムは、新しいレドンホールのしっせいになりました。父であるデルンエルムから、そのやくめを受けついだのです。ベルグエルムなら、まさにうってつけでしょう（ちなみに、これはあんまり声を大にしていうべきではないのですが……、ベーカーランドの白の騎兵師団の長、ライラは、そのごなんども、レドンホールのベルグエルムのもとをおとずれたのです。そしてベルグエルムもまた、ベーカーランドのライラのもとをたびたびおとずれました。あくまでもうわさですけど、ふたりは「いいかんけい」になっているのだとか……。ほんとかどうかはわかりませんがね。ベルグエルムにきいてみても、「い、いや、それは……、ごほん！」といってごまかされるばかりでしたから。ライラには、こわくてきけませんでした……。でもほんとうにそうなら、みんなおうえんしてあげようじゃありませんか。なかなか、おにあいのふたりですしね。いろいろがんばれ！ ベルグエルム！）。

そしてフェリアルは、レドンホールのすべての兵士たちのことをたばねる「ウルファ長」になりました。もちろんフェリアルも、「ええーっ！ わ、わたしがウルファ長ですか！」とびっくりぎょうてんでしたけど。ウルファ長というのはすべてのウルファの兵士たちの中でも、いちばんえらい人のことなのです。はじめはベルグエルムやほかの人たちに助けてもらえばなしでしたが、今ではだんだんと、かたにはまってきたようでした（とにかくがんばれ！ フェリアルウルファ長！ おばけに負けないでね！）。

ロビーはこうして、たくさんの人たちの助けのもとで、新しいレドンホールのくにをになっていくことになったのです。ところで、ロビーの剣は？ あの剣はどうなったのでしょうか？ ご安心を。女神

のつるぎアストラル・ブレードは、きちんとロビーとともに、レドンホールにもどってきました。そしてその剣は、ベーカーランドの青き宝玉とともに、この新しいアークランドのみらいをささえるための、大いなる力となったのです（力を使い果たした剣がもとの力を取りもどすためには、やっぱり時間がかかりましたけど）。今ではベーカーランドとレドンホールは、おたがいに助けあって、それらの女神の力の大きいなるかごを、このアークランドにもたらしっていました。剣と宝玉、このふたつの力によって、アークランドをへいわにまとめ上げること。それこそが、アークランドのふたりの女神たちのぞんだ、りそうのすがただったのです（それまでにほんとうに、長いねん月がかかったものです。でも今は女神たちも、きつとほほ笑んでいることでしょう）。

ふたりの人物が、どこかの森の木々のあいだの小さな広場で、話しをしていました。

「ロビーベルクが、ほんとうによくやってくれましたね。」かがやくように美しいこがね色の長いかみをなびかせながら、ひとりの人物が静かにいいました。

「われらがアークランドに手をさしのべることは、これでしばらく、ないだろう。」もうひとりの人物の声が、静かにその場にひびき渡りました。

「新しいアークランドをつくっていくのは、かれらなのだ。」

そういうと、ふたりのすがたはまるでまぼろしのように、空気の中へと消えていったのです。

ひとり、ロビーの育ての親、リーフィ。そしてもうひとり、イーフリープの精霊王でした。

「ここに、このアークランドをすくいたもうた、しんの勇者をたたえる！ ロビーベルクどの、こちらへ。」

ここはエリル・シャンティーンの、そのぎよくぎの間でした。そして今、あらためてロビーをはじめとしたすべての仲間たちが、一同に

この場につどつていたのです。

声のぬしは、アルマーク王でした。そしてアルマーク王の影から、きょうしゆくそうに前にあらわれたのは……、もちろん、われらがきゆうせいしゆたる、ロビーだったのです。

今ロビーの目の前には、仲間たちをはじめ、さまざまなくにのそうそうたるメンバーがせいぞろいしていました。シープロンドの者たち、メリアン王もエレナも、きていました（ちなみに、メリアン王はライアンの手を、がっしりとにぎっていました。かつてにどこかへいってしまわないためです。ライアンはだいぶ、めいわくそうでした……）。

けんじやたちをだいひようして、カルモトがふたたびやってきてくれました。そのおともとしてきてくれたのは……、フログルのカルルとクプル！ なつかしい顔ですね。あいかわらず、げんきそうです（ちなみに、カルモトはこのエリル・シヤンディーンにくるにあたって、六人の木の音楽隊の者たちをいっしよにひきつれてきたのです。ですがかれらといっしよにお城の中にはいろいろとしたところ、「申しわけありませんが、そちらの方々は、いっしよにお通しするわけには……」とお城の兵士たちにとがめられてしまいました。カルモトは木の音楽隊に「おいわいの」たいこのマーチングをどんどんならさせながら、いっしよにお城の中にはいろいろとしたのです。やつぱりそれじゃ、おごそかなお城の中には、いれられませんよね。さすがに、うるさすぎですし。カルモトはだいぶ、ふまんそうでした（が）。

そしてロザムンディアからは、ティエリーしさいさまとミリエムです。今ではすっかり、もとのからだにもなれたようですね。気が長いところは、もうなおっているのでしょうか？（ロザムンディアのまちはすっかりそうじが終わって、もとの美しいばら色のまちなみを取りもどしていました。今では西の街道も、またもとのにぎわいを見せているそうです）。

ちなみに、ティエリーしさいさまのすがたを見るなり、ライアンが「うわっー」といってメリアン王の影にかくれてしまったのは、いうまでもありません。また「かわいいー！」といって力づくでもみくちや

にされるのだけは、かんべんでしたから。ライアンのかわいさは、四年たつてもぜんぜん変わっていませんでしたので。)

はぐくみの森からは、チップリンク・エストル。おともには村長さんのほさやくの、ティッドとロラがついてきていました(というより、チップの方がおともでした)。ふたたびチップに会えるなんて、うれしいかぎりですね。だいぶ、大きくなっているようです(はぐくみの森もまた、もとのにぎわいを取りもどしていました。森もすっかりきれいになって、ふたたび旅人たちへのもてなしがはじまっているそうです)。

マリエルもリズもリストールも、そしてラグリーンの里アップルキントから、ラフェルドロードとリュキアもきていました(リュキアの見た目は、ぜんぜん変わっていませんでしたけど)。

ちなみに、リズはこんかいの旅のことをあらわした新曲をはっぴょうしていましたが、それは今まででいちばんというほどの、大ベストセラーとなりました。エリル・シャンディーンのまちでは、いつもリズのその曲が、ミュージックベアたちによつてかなでられていたのです。それでもリズはあいかわらず、あの山おくの小屋に住んでいるみたいですけど。やっぱりあそこが、おちつくみたいです(ね)。

カピバラ老人とカピバルの者たちもきていました。そして小さなくいの王さまたちや、その家族の人たちまで、みんながこの場にやっできていたのです(ざんねんながら、アルファズレドとワットの者たちだけは、この場にはいませんでした。かれらも早く、みんなと同じ席につけることを、わたしは願っています)。

そんなあふれんばかりの人たちの前に、今王さまの座を受けついでロビーが、かちんこちんになって立っていました。そう、この集まりはロビーが王さまになったことをおいわいする、その集まりだったというわけなのです(この集まりのしゅさい者は、アルマーク王でした。ですからみんな、お客さまとしてエリル・シャンディーンに集まっていたのです)。

ロビーのあいさつに、みんなが、しーんとなつてちゅうもくします。ですがロビーはまだ、人前で話すことなんて、やっぱりなれていませ

んでした。

「あの……、ええと、その……」ロビーがいいかけましたが、やつぱりうまく言葉が出てきません。ゆうべあれだけ、スピーチの文章を考えてきましたのに！ そんなとき。

「ロビーベルク王、ばんざーい！ ほら、みんなも、たたえてたたえて！ ばんざーい！」

やつぱりロビーに助け船を出したのは、ライアンでした。

「ばんざーい！ ばんざーい！ アークランドの勇者！」

もう、ロビーの言葉も必要ありませんでした。みんなはただただ、せいじっぱいのかんしゃの心を、このレドンホルの若き王さまにむけておくれたのです。それでいいじゃありませんか。百の言葉をのべるより、こっちの方が、よっぽどすなおというものです。

ロビーのまわりはもう、たくさんの人であふれかえっていました。みんなロビーにあくしゆをもとめ、ロビーは「あわわわ……」と、もうもみくちやです。と、そこに。

「ロビーベルクどの。」

やってきたのは、アルマーク王でした。

「いや、今はもう、ロビーベルク王といわなくてはなるまいな。そなたを心から、ほこりに思う。そして、ありがとう、勇者よ。」

アルマークはそういって、ロビーの前にひざまずきました。その場にいるほかのみんなも、アルマーク王にならって、そろってロビーにひざまずきます。もちろんロビーが大あわてしてしまったことは、いうまでもありません。

「や、やめてください！ そんな！ もったいないです！」

ロビーがいました。そんなロビーの手を取って、ライアンがここにこしながらいいました。

「ま、今はこのまま、受け取っておいたらいいんじゃない？ せっかく王さまが、頭を下げてくれてるんだしさ。めったにないチャンスだよ。」

ライアンの言葉に、ロビーはなにもいえず、ただただ頭をかいて、「うーん……」とうなるばかりでした。

「さあさ、みんな、はいったはいった！」

入り口のとびらをあけて、ひとりの人物がいました。今かれはこの場にやってきたなん人も新しいお客さんたちのことをむかえるために、大いそがしだったのです。ですがかれのあんなにも、すぐにおしまいになりました。なにしろせまいところでしたから、こんなにたくさんのお客さんたちのことを、みんな中へいれるわけにはいかなかったのです。席はすぐにいっぱいになって、みんなはこんどは、そとにならない長いテーブルのもとに、じゅんばんについていきました。

いったいここは、どこでしょう？ 古びた大きな、げんかんの木のとびら。そのわきには、こうしのはまったすすけたまどがひとつ、ありました。とびらの中は、なんとも見ばえのしない、ほらあなになっていて……。

読者のみなさんには、ここがどこですか？ もうおわかりになったかと思えます。ここは、そう、かなしみの森の、ロビーのほらあなでした！ そしてさきほどから、お客さんをむかえるために大いそがしになって動きまわっているのは……、それもはや、おわかりでしょう。そう、かなしみの森の、ゆいいつのお店、「スネイルのぎっか屋および食りよう品店」のあるじである、あなぐまのスネイル・ミンドマンだったのです！

そのスネイルがさきほどからまねきいれているのは……、そうです、それはこのかなしみの森に住む、たくさんのお動物の種族の者たち。ロビーのことをはじめはこわがっていた、そのかれらでした。

スネイルはいいました。「おまえさんがもどってくる、そのときには、わしはおまえさんのことをみなにふれてまわって、おまえさんをおんげいできるようにしておくよ……」。そしてまさに今、それがほんとうのこととなったのです。

もはや、説明の必要もないでしょう。ロビーは今、ほんとうに心の底からかなえたかった、その思いを果たしました。それはこのほらあなにたくさんの友だちをよんで、パーティーをひらくということだったのです。お城での大パーティーにくらべたら、ほんとうにささやかで、小さなものかもしれませぬ。ですが今のロビーにとっては、このパーティーはほかのどんな大えんかいくらべても、もつとはなやかで、ごうかなものでした。

ロビーのまわりは、たくさんの友だちであふれかえっていました。ベルグエルムもフェリアルも、もちろんいっしょでした。マリエルもリズムも、みんな集まってくれました。そしてそのとき、入り口の木のとびらをあけて、ロビーのいちばんたいせつな人がはいつてきたのです。その手に大きなケーキのはこを、山ほどかかえて。

「おそくなつて、ごめん！ 森のおばあちゃんのやいたホワイトケーキ、いっぱいもらってきたよ！ もう。ちゃんと用意しておいてね、つて、いっつといたのに。ぼくが取りにいかなくちゃならなくなっちゃったじゃんか。」

それは、そう、ライアンでした。ライアンはそのままケーキのほこをどきつとテーブルに山づみにすると、それからロビーの方へ近づいて、そのうでを取つていったのです。

「さあみんな、集まったね！ あらためて、しようかいするから。この人が、ロビーだよ。ぼくの、いちばんの友だち！」

そのぼん、ロビーのほらあなに笑い声がたえることはありませんでした。

ロビーはここに、いちばんのしあわせを得たのです。

ロビーのこの物語は、これでおしまい。